

# ハリー・ポッターと虹の女神

セバスチャン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※8／18：炎のゴブ編、完結しました。

不死鳥の騎士団編は2020年～開始予定です。

落ちこぼれのグリフィンドール生イリス。

彼女は、かつてヴォルデモート卿に仕えた“従者”メーティスの孫だった。

※追記：R―15的な表現・残酷な描写が含まれる話の場合は、前書きに明記します。

## 目次

### 賢者の石編

File 1.	ホグワーツからの手紙	1
File 2.	イギリスへ	8
File 3.	ダイアゴン横丁（前編）	14
File 4.	ダイアゴン横丁（後編）	21
File 5.	ホグワーツ特急	30
File 6.	組分け帽子	46
File 7.	最悪の金曜日	59
File 8.	スネイプの補習授業	74
File 9.	最高のハロウィーン	85
File 10.	クイデイツチ	98
File 11.	マルフォイ家のクリスマス	111
File 12.	忠告と選択	126
File 13.	ミッドナイト・ドラゴン	140
File 14.	禁じられた森	151
File 15.	イリスとフラッフィー	164
File 16.	動き始めた思惑	177
秘密の部屋編		
Page 1.	出雲家の物語	192
Page 2.	ルシウスの姦計（前編）	195
Page 3.	ルシウスの姦計（後編）	209
Page 4.	ペトルーシユカ	227
Page 5.	君はどっちの味方？	240
Page 6.	吼えメール	252

Page 7. 『葛藤の果てに』 265

Page 8. 衝突、そして 278

Page 9. 堕ちた卵は 295

Page 10. 亡霊と空を飛び 308

Page 11. 束の間の夢を見て 325

Page 12. 奈落の底へ落とされる』 344

Page 13. リドルの試練 364

Page 14. 闇の印を 382

Page 15. 従者は主と共に 401

Page 16. 秘密の部屋へ 420

Page 17. リドルとの戦い 439

Page 18. さよなら、ドラコ 463

### アズカバンの囚人編

Act 1. 不思議な電話 489

Act 2. クルックシャンクス 501

Act 3. 漏れ鍋にて 517

Act 4. デイメンター 532

Act 5. 茶の葉の未来 558

Act 6. ロックハート 578

Act 7. 企む動物たち 602

Act 8. ダブル・トラブル 619

Act 9. 守護霊の呪文 641

Act 10. フェイト 663

Act 11. 魔法省と大人たち 683

Act 12. ホグワーツ 707

Act13.	救済の手	731
Act14.	インフェルノ	748
Act15.	変わるもの、変わらないもの	773
Act16.	ファイアボルト	806
Act17.	プリベツト通り四番地（前編）	832
Act18.	プリベツト通り四番地（後編）	855
炎のゴブレット編		
Petal1.	父の記憶	872
Petal2.	クイドイツ・ワールドカップ	903
Petal3.	取り戻した記憶の欠片	927
Petal4.	本当の敵は誰？	950
Petal5.	アラストー・ムーディ	970
Petal6.	炎のゴブレット	997
Petal7.	『例え闇に囚われても』	1020
Petal8.	愛の炎が君を守る』	1047
Petal9.	第一の課題	1068
Petal10.	秘密の部屋へII	1095
Petal11.	愛のスタンピード	1127
Petal12.	豊かな幸運の泉	1165
Petal13.	コガネムシの受難	1188
Petal14.	第二の課題	1208
Petal15.	第三の課題（前編）	1229
Petal16.	第三の課題（中編）	1248
Petal17.	第三の課題（後編）	1271
Petal18.	おかえり、ドラコ	1293

P e t a l 1 1 9 .

新たな幕開け

## 賢者の石編

### File 1. ホグワーツからの手紙

小さな島国、日本。自然豊かな山々に囲まれ、有名な観光地や特産物があるわけでもなく、一言でいえば「何にもないド田舎」と言ってもなら差支えない、とある小さな田舎町。

過疎化が急速に進んでいくその町中に、ひっそりと出雲神社は立っていた。

季節は夏、暦は7月。歴史だけは非常に古い（いつ頃建ったのかもわかっていない）その神社の境内で早朝、今年11歳になる神社の娘・出雲イリスは箒を掃き掃除をしていた。巫女の服装をしているが、容姿は限りなく西洋人に近い。白い肌に青っぽい瞳、黒檀のような髪はうなじ辺りで短く切り揃えている。

イリスが西洋人のような容姿と名前を持つ理由は、イギリス人のクォーターだからだ。

育て親のイオおばさんから聞いたところによると、母の母・つまりイリスの母方の祖母は出雲家の純粋な日本人だったが、放浪癖があり、何かと窮屈なしきたりのある実家を飛び出して世界中を旅して回るうちに母の父・つまりイリスの母方の祖父であるイギリス人と出会い、イリスの母・エルサとイオを生んだ（ブルーの瞳は父方の家系ゆずりらしい）。

エルサたちが物心つくまで祖父母はイギリスで暮らしていたが、ある日祖母とエルサたちのみが日本の実家へ帰ってきて、細々と生計を立てていた祖祖父母たちに娘たちを預けて、祖母は再び姿を消した。その後、二度と祖母を見ることはなかった、とイオおばさんは遠い目をして語った。

祖祖父母たちはエルサたちを自分の子供のようにかわいがり育てた。

イオは持ち前の人懐っこさと社交能力で、最初は異形の子だと警戒していた地元の人々とすつかり仲良くなり、神社の跡継ぎになった。

エルサは外国の学校へ留学しそのまま仕事につき、学校で知り合ったイギリス人と結婚し、イリスが生まれた。だがイリスがまだ赤ん坊の頃に、両親は交通事故で亡くなってしまった。

それからは唯一の親族であるおばのイオが女手一本でイリスを育ててきたのだ。

イオおばさんのおかげで、この田舎独特の閉鎖的な社会の中でも、イリスはいじめられたことがなかった。あまりにトロクマイペースなことをからかわれることはあつたが、皆出雲神社の子だと温かく接してくれた。

だからイリスはこの町が好きだし、人々も好きだし、この町唯一のショッピングモール兼アミューズメントパークでもあるジエスコも好きだった。

☆

さて、イリスの通う小学校は夏休みを迎えたばかりだ。これから9月まで何をして過ごそう。

うきうきした気持ちで塵取りにごみを集めていると、周囲の蝉の煩い鳴き声に交じって、ほう・ほうという大きな鳥の鳴き声と羽ばたく音が聞こえた。

何の鳥だろう。周囲を見回すと、大きな鳥が空へ飛び去っていくのが見えた。

「イリス、朝ご飯だぞ。ついでに新聞取ってきてくれ」

ぼんやりと空を眺めていると、イオが本殿横の住所の玄関から顔を出して、いつものようににっこり笑いながらイリスに伝える。イリスと同じ青い瞳を持ち、艶やかな黒髪をポニーテールにしたスレンダーな女性だ。

「はーい」

のんきに答えながら、階段下の郵便受けまで行くと、鉄製の小さな扉を開け、中身を抜き出す。新聞にガスの振込み書、ダイレクトメール・・・それに、イリス宛の手紙。しかも英語だ。イリスはまじまじと手紙を見つめた。

『日本 ○○市 ○○町 出雲神社 イリス・イズモ・ゴーント様』



なにやら分厚い、重い、黄色みがかった変わった素材の封筒に入っている。宛名はエメラルド色のインクで書かれていて、切手は貼られていない。裏返すと、紋章入りの紫色の蠟で封印がしてあった。真ん中に大きく「H」と書かれ、その周りを4匹の動物が取り囲んでいる。

「イリス・イズモ・ゴント・・・」

自分のフルネームを知っているのはおばさんだけのはずなのに、この手紙の送り主は何者なんだろう。ゆつくりと手紙を開ける。

『親愛なるゴント殿、このたびホグワーツ魔法魔術学校にめでたく入学を許可されましたこと、心よりお喜び申し上げます。教科書並びに・・・』

「おばさん！おばさん！」

息せき切って居間へ駆け込んできたイリスに、イオはびつくりして飲んでいたコーヒーを吹き出しそうになった。

「どうしたんだイリス、そんなに興奮して・・・」

「これ見て！私魔法使いになるんだよ！」

瞳をきらきら輝かせてイオにホグワーツからの手紙を見せると、イオの表情は途端に険しい表情になり、手紙をそっと取り上げて見つめたまま黙り込んだ。

「・・・こんなのでたらめだ。最近ニュースでやってる子供だましの詐欺だよ」

そう冷たく言うと、イオは手紙をためらいなく破り捨て、ゴミ箱へ放り込んだ。

「えっそうなの」

「ああそうだ」

イリスはしょんぼりと項垂れた。日頃子供向けのアニメを好んで見ていたので、きつと魔法少女になれると思いついて入っていたのだ。

信頼するおばの言葉を素直に信じ込み落ち込むイリスに、イオは明るく話しかけた。

「そんなことより、早く手を洗って朝ご飯を食べな。今日はジェスコへ映画でも見に行こう」

「ほんとっ?!ポップコーンも食べていい?」

「もちろんだとも」

途端に歓声を上げて洗面所へ駆けていくイリスを笑顔で見送ると、イオは両手で顔を包み込んで急激に溢れてくる涙と悲しみを隠した。「ああ神様!エルサー!来てしまった、とうとうホグワーツからの手紙が・・・!」

破り捨てたところで、相手は魔法使いの集団だ。彼らの言うスクイブが一人立ち向かったってどうにもならない。

・・・そうだ、わたし一人ではあの子は守れない。

『あの子はホグワーツへ行かなければならない』

脳裏にある魔法使いと交わした約束が彼の言葉と共に蘇る。

エルサやネーレウスとも、あの子を預かる時約束したじやないか。

瞳が溶けるように熱い。顔を覆った両手から涙が幾筋も流れ落ちる。

あの子がわたしの手を離れて、手の届かない世界へ行ってしまう。エルサみたいに。胸が張り裂けそうだ!

・・・だが、エルサとの約束は果たさなければならぬ。エルサがイリスのためにならないことなんか、わたしに約束させるわけがないんだ。

バタバタと洗面台からイリスが慌ただしく戻ってきた頃には、イオは泣き顔をなんとか治めて二枚目の食パンにバターを塗っていた。

☆

イオの心配通り、手紙は日を重ねるごとにその数を増やしていった。7月の中旬頃には郵便受けから入りきらなくなった手紙が地面に散らばり、ふくろうが日中神社付近で頻繁に見かけられるようになった。

ついにイオは「大事な話がある」と言って自室で夏休みの宿題をしているイリスを居間へ呼び出した。

「なあに、おばさん」

屈託のない顔でテーブルにつき、自分の顔を覗き込むイリスをそっとう見つめ返して、イオは一度目をつぶって深呼吸をした後、言葉を一

つ一つ区切るようにゆつくりと言った。

「最初にホグワーツからの手紙が届いたとき、わたしはその手紙をでたための詐欺だと言ったな。．．．あれは嘘だ。あれは本当の、魔法の世界からの招待状だよ。ホグワーツは本物の魔法使いや魔女を育てる学校なんだ。．．．イリス、お前は魔女だ」

「．．．．．え？」

今、おぼさんは何と言った？

イリスは間の抜けた返事をした口をポカンと開けたまま、閉じることを忘れた。

頭が真っ白になって、どくん、どくんと心臓が早鐘を打ち始める。私が魔女だって??ジョークを言っているのだろうか。だがおぼさんは明るく話し上手だが、人をだますような嘘はつかないし、そういうことはするなども常々イリスに言い聞かせているし、現に彼女の顔は真剣そのものだった。嘘みみたいな話だけれど、嘘を言っているとは思えない。イオはなおも言葉を続ける。

「お前の父さんも母さんも立派な魔法使いと魔女だった。お前が赤ん坊の頃に．．．『悪い魔法使い』に殺されたんだ」

イリスはどんどん鼓動が早まっていく心臓が今度は止まるかと思っただ。殺されただって?今までずっとイオから交通事故でなくなつたと聞かされていた。

「こ、殺された．．．?交通事故じゃなくて?」

イオはその言葉が来ると思った、という顔をして、申し訳なさそうに頭を下げた。

「すまない、お前にホグワーツからの手紙が来るまでは、魔法界に関する一切話さないとお前の両親と約束したんだ。．．．だから嘘をついた、本当にすまない」

いつも勝気なおぼさんが瞳に涙を浮かべて自分に対して謝る様子を見て、イリスはそれ以上何も言えなかった。というよりも、疑問が多すぎて、驚くべき事実が多すぎて、何も言えなかったのだ。真っ白になった頭の中でどうか一つの疑問をつかみ取り、イオに尋ねる。「そ、その『悪い魔法使い』は、どうして．．．お父さんたちを殺した

の?」

「自分の仲間にならなかつたからだよ」

「そんな理由で・・・人を殺すの?」

「ああ、誤解しないでくれイリス。魔法界はそんな物騒な考えのやつばかりじゃない。そいつがとんでもなく異常だっただけだ。当時の魔法界はそいつ一人のせいだで恐ろしい状態に陥った。今でもそいつに関する話題を出したり名前を言うことは禁忌とされている。多くの魔法使いや魔女がそいつに殺されたり、死ぬより酷い目にあつたと聞く。だが安心してくれ、今はそいつはいない。一人の赤ん坊がそいつを倒したんだ」

「赤ん坊が?!」

「そう、原因は定かではないが、その赤ん坊の両親を殺し、赤ん坊をも殺そうとした時、そいつは死んでその子は生き残った。今はお前と同じ年になってるはずだ」

まるでおとぎ話を聞いているみたいだ。自分のことなのに、他人事のようにも感じる。

それもそうだ、今まで事件らしい事件もなく、平和に平凡に小さな社会で暮らしてきた子供が、今までの常識をくつがえすような事実・・・魔法界だの悪い魔法使いに両親が殺されたあの間かされては、パニック状態にもなる。

目が点状態のイリスを見て、イオは咳払いを一つした。

「本物の魔法界はアニメの世界みたいに楽しいことばかりじゃない。危険なことや辛いことだつてたくさんある。それでもお前はホグワーツに行つて魔女になりたいか?」

そう言つて、イオはホグワーツからの手紙をイリスに差し出した。また疑問が一つ浮かんだ。

「・・・お父さんとお母さんは、立派な魔法使いだったの?」

そうイリスが聞くと、イオは優しく微笑んだ。

「ああ、とてもね。二人とも誰よりも勇敢で優しく賢くて、強かった。少なくともわたしはそう思つてる。二人はお前のことを誰よりも愛してた。・・・もしホグワーツから手紙が来たら、ぜひ行つてほしい

と言っていたよ。お前の人生にとって、かけがえのない友を得ることが出来るし、とても大事な出来事がたくさん起こるからって」

イリスの目に写真でしか見たことのない両親のおぼろげな顔が浮かんだ。胸がちくりと痛み、じんわりと温かくなる。かつて両親の通った学び舎に、自分も行けるのだ。

「おばさん、私、ホグワーツに行くよ」

「・・・そうかい」

そう言うと、イオは一瞬泣き笑いのような顔をして、鼻をこすった。それはおばさんが泣きそうになるのを隠す癖だとイリスは知って、胸がきゅんと痛んだ。

イオは手紙の封を開けながら、心の中の姉に語り掛ける。

エルサ、お前の子供は無事、ホグワーツに送り届けるよ。これでいいんだよな。

「・・・さあ、明日から忙しくなるぞ。それに近々、学用品を揃えに行かないとな」

「ジエスコ？」

「ジエスコじゃねえよ！イギリスさ」

## File 2. イギリスへ

「い、イギリス?」

「そうだよ。まずは学校に返事を出さないとな」

電話をかけるのかと思いきや、イオは自分の部屋へ行くと押入れから大きな古びた木の箱(側面に『開封厳禁』のシールがべたべたと貼つてある)を持ってきて居間のテーブルにドンと置いた。そして玄関外へ出て、郵便受けに止まっていたふくろうを捕まえて戻ってきた。

唐突に始まったお婆の不思議な行動に目を丸くしているイリスを置いてけぼりにして、イオは木箱の蝶番を開けると、そこから羊皮紙と羽ペン、インク壺を取り出して、慣れた手つきでイリスが入学する旨を書き付けた。くるくると羊皮紙を巻いてふくろうの嘴に加えさせ、足に括り付けられた袋に木箱から取り出した硬貨を数枚入れると、窓を開けてふくろうを空へ飛び立たせる。

「・・・えつと・・・何してるの?」

「ふくろう便だよ」

イリスの問いに、イオはいたって真面目な表情で答えた。

「ふくろう便は魔法界の電話みたいなもんだ。魔法界の連中と連絡を取りたいと思ったら、さつきみたいにくくろうに手紙を届けてもらうのさ。魔法界では電話や電子メールは使えないからね」

「へー・・・なんだか不便そう」

「いや、そうでもないさ。慣れちまえば電話よりも楽チンだよ。住所がわからない時でも宛名さえ書いときゃあとはふくろうが探してくれる」

悪戯っぽくウインクをしてみせるお婆に、聞きたいことは沢山あった。

本当にふくろうが届けてくれるの?その箱は何が入っているの?なんでイギリスなの?イギリス人は全員魔法使いなの?」

イリスは頭の中が質問で溢れすぎて、ついに黙りこくってしまった。

☆

二人揃ってパスポートを取った次の週、二人は飛行機に乗ってイギリスのロンドンまで来た。

イリスは生まれて初めての外国に、空港内を落ち着かない様子で見渡す。当然だけど、何もかもが英語だし、周りは外人ばかりだ。

ロンドンへ来るまでにわかったことは、自分の学用品を買いに行くのに、ホグワーツからハグリッドという人が来てくれるということだけだった。ハグリッドって誰？とイリスがさらに問いかけようとしたけれど、イオはイリスのための諸手続きで忙しくそれどころではなかったのだ。

「英語は大丈夫だな、イリス？」

ロンドン空港を出た瞬間、急にイオが流暢な英語で話しかける。

「うん。大丈夫だよ」

イリスは戸惑いながらも難なく英語で返した。

物心ついた時からおぼに「グローバルな感性を身に付けてほしい」という名目で英語の教育をみっちり受けていたために、イリスは11歳にしてバイリンガルだった。

人込みをかき分けながらイオは慣れた調子で地下鉄の入り口へ向かい切符を買って電車を乗り継ぎ、物珍しげに四方八方を見回しては転びそうになるイリスの手を引き、目的地までやってきた。

ちっぽけな薄汚れた酒場だ。両脇にあるレコード店と本屋がとても魅力的で輝いて見える。

「……ここは？」

『漏れ鍋』だよ。魔法界では有名なお店だ。あとイギリスではこういう酒場をパブっていうんだ、覚えときな」

「パブ？」

「入浴剤じゃねーよ、パ・ブ！」

魔法界で有名なお店がこんなにボロい小さなお店なら、有名じゃない普通のお店はどんなにボロボロなんだ？魔法界の人々はさぞかし質素で慎ましやかな暮らしをしているに違いない。いや、もしかしたら古くてボロボロのものが好きなのかも……

顎に手を当てて考え込むイリスだったが、イオに促されて恐る恐る

中に入る。

暗くてみすばらしい店内には数人の人がいたが、真ん中に立っている大男にイリスは目が釘づけになった。軽く見積もっただけでも、背丈は普通の二倍、横幅は五倍はある。毛皮のコートを着ていて、ぼうぼうとした黒い髪が頭全体を覆っている。後姿だけでも怖い。

引きつった表情で出口に向かってじりじり後退し始めたイリスとは反対に、イオはなんと・・・親しげにその男に話しかけた。

「おいハグリッド！久しぶりだな・・・十年ぶりか？」

その声で大男は振り向き、イオを見ると毛むくじやらの顔の中の黄金虫のような目がきらきらと優しくに光り、とどろくような大声を出した。（その声にイリスは危うくちびりそうになった）

「オーツ、イオ！ずいぶんと久しぶりだなあ！え?!相変わらず別嬪さんだ」

「よせやい照れるぜ。ほら、挨拶しろイリス・・・何してんだお前」

イオが振り返り、イリスが震えながら出口付近のテーブル下に避難しているのを見ると呆れ顔になった。

「オー・・・お前さんが・・・そうか、イリスか・・・」

ハグリッドはイリスを見ると、そのつぶらな瞳を潤ませ、感極まったような声で呟いた。

ドスドスと音を立ててイリスのいるテーブル下に歩み寄り、しゃがみ込んで視線を合わせ、怯えることはないにつこり優しくに微笑んで見せた。

「俺が見た時はまだ赤ん坊だったのに、大きくなった。怖がらせちゃってすまねえな。俺はルビウス・ハグリッド。ホグワーツの鍵と領地を守る番人だ」

「は、は、はじめまして、イリス・ゴーストです」

ハグリッドは巨大な手を差し出し、震えるイリスの手を握って力強く握手するついでに、イリスをテーブル下から連れ出した。そしてしみじみとイリスを見つめる。

「お前さん、本当にエルサにそっくりだ。目も・・・エルサに似とるが、ちいと違うかな。不思議な色をしとる。俺のことはハグリッドと呼



んでくれ、みんなそう呼ぶんだ。俺らもちょうど来たばかりだな。タ  
イミングがよかった。なあハリー」

そう言うと、ハグリッドは隣に立っていた男の子の肩をばしっと叩  
き、その子がこけそうになった。くしゃくしゃの黒髪に、明るい緑色  
の目、やせた男の子だ。

「はじめまして、僕ハリー。ハリー・ポッター」

緊張した様子で手を差し出す男の子に、イリスも慌てて答える。

「初めましてハリー。私、イリス・ゴント」

二人が握手を交わしている間に、ハグリッドとイオはカウンターに  
座るバーテンのじいさんに話をしに行ってしまった。

「ハグリッドから聞いたんだけど、君もホグワーツの学用品を買いに  
来たの？」

ぼんやりとその様子を見つめているイリスに、ハリーが話しかけ  
る。優しくそうな目をした男の子だ。同年代ということもあって、イリ  
スの緊張が少しほぐれた。

「うん。ハリーも？」

「そうだよ」

「そうなんだ。何歳？どこの国から来たの？」

「今日で11歳になったんだ。どこってもちろんイギリスからだよ。  
イリスは違うの？」

「うん、私は日本から来たんだ。同じ年だからお互い新入生だね。ね  
え、私の英語訛ったりしてない？大丈夫？初めて外国の人と話すか  
ら、不安になっちゃって」

「大丈夫だよ。日本って、アジアの？ずいぶん遠いところから来たん  
だね」

「さっそく友達ができてよかったな、イリス」

あれこれと二人で話をしていると、にこにここと微笑みながらこちら  
へやってくるイオの顔がやがて引きつった。

「やれ嬉しや・・・ハリー・ポッター！」

ハグリッドから聞きつけた人々が、有名人であるハリーに握手を求  
め殺到してきたからだ。

「わたしたちは先に行ってるよハグリッド」

言うが早いかイリスの手を掴み、パブを通り抜けて壁に囲まれた小さな中庭へと抜け出した。

「ハリーは有名人なの？」

もみくちやにされるハリーを呆気に取られた表情で見ながら、イリスはイオに尋ねた。

「ほら、前に話しただろ？『悪い魔法使い』を倒した、伝説の赤ん坊。ハリーがそうなんだよ」

「・・・えっ、ハリーが？」

ハリーが『悪い魔法使い』を倒した？とてもじゃないけどそんな風には見えない。

伝説の赤ん坊というのだから、もつと筋肉隆々としていて、それこそハグリッドのような外見の強そうな少年を想像していたのに。

そうこうしているうちにやっときき抜け出てきたハグリッドたちと合流し、ハグリッドはおもむろに傘を取り出した。何やらむにやむにや呟きながら傘先で壁を三回叩くと、グネグネと壁が歪み、ハグリッドでさえ通れるほどのアーチ状の穴が開いた。

「ダイアゴン横丁へようこそ」

ハリーとイリスは思わず目を合わせ、お互いに驚いていることを知って少しほっとした。

「ここから先はわたしは行けないんだ、イリス」

「えっ、なんで？」

物心ついた時から今までずっと何をすることもおぼと一緒だったイリスは、急に見捨てられたような気持ちになり、心細そうな顔でイオを見たが、イオは動じなかった。

「わたしは魔法を使えないからね。自分のけじめみたいなもんだ。漏れ鍋で待ってるよ。ハグリッドたちと行っておいで」

イオはそういうと、金色の鍵をポケットから取り出して、イリスに持たせた。

「魔法界の銀行の鍵だよ。両親がお前に残した金庫の鍵だ。必要な時が来たらハグリッドに渡しなさい。漏れ鍋に戻ってくるまで決して

なくしてはいけないぞ」

「うん……」

「イリス、これからお前はイギリスに住んで、わたしとはしばらく離れ離れになるんだ。こんなちよびつとの間の別れで泣きそうになってどうする」

イオは苦笑しながらイリスの髪をわしゃわしゃと掻き雑ぜ、努めて快活に言った。

「そうだ、必要な学用品リストにはないが、とびつきり丈夫なふくろうを二羽と、懐中時計を買っておきなさい。ふくろうはお前とわたしとの連絡に必要なだし、魔法の懐中時計は何かと便利だ。ホグワーツでも壊れないからね。いいかい、わたしは買いに来れないからな、絶対に忘れるんじゃないぞ」

「わかったー！ふくろう、懐中時計……！」

責任重大だ。泣きそうになっている場合じゃないぞ！

自分を叱咤して、鍵をズボンのポケットにしっかり入れ（ハリーが羨ましそうな目で二人のやり取りを見ていたが、イリスは気が付かず仕舞いだった）ハグリッドに促されてハリーの次にアーケードを通る。

もう一度イオの顔を見ようと振り返ったが、すでにアーチは元のレング壁に戻っていた。

### File 3. ダイアゴン横丁（前編）

アーチの向こうには、ずうっと遠くまで続く石畳の通りがあり、両脇にはさまざまなお店が並んでいた。そばの店の外に積み上げられた大鍋がキラキラと日の光を浴びて輝いている。

「ドラゴンの肝、三十グラムが十七シツクルですって。ばかばかりい……」

薬問屋の前で小太りのおばさんが首をふりふり呟いた言葉に、思わずイリスとハリーは目を見合わせ、「ドラゴンの肝だつて？」同時にしゃべった。

「さて、まずは金を取ってこんとな。グリーンゴッツへ行くぞ」とハグリッドが言った。

☆

グリーンゴッツは、小さな店が立ち並ぶ中でもひとときわ高くそびえる真っ白な建物だった。その立派な造形を見て、イリスは漏れ鍋を見た時に感じた『魔法界の人々は、古くてボロボロなものを好む』という考えを心の中で撤廃しなければならなかった。

磨き上げられたブロンズの観音開きの扉の両脇に、上品な制服を着こなした奇妙で小さな生き物が立っている。浅黒い賢そうな顔つきに、先の尖った顎鬚、そして手の指と足の先のなんと長いこと。

「さよう、あれが小鬼だ。……イリス、じろじろ見るな」

イリスがぼかんと口を開けたまま小鬼を凝視していると、ハグリッドがひそひそ声で言った。三人が進むと小鬼がお辞儀した。中の広々とした大理石のホールに入ると、そこには百人を超える小鬼が細長いカウンターの向こう側で仕事をしている。

三人はカウンターへ近づいた。ハグリッドがハリーとイリスの金庫を開けに来た旨を、ちようど手の空いたばかりと見られる小鬼に伝える。

「鍵はお持ちでいらつしやいますか」

「きつとおばさんに渡されたさっきの鍵だよ」とハリーに耳打ちされ、弾かれたようにポケットを探り、イリスは金色の鍵をカウンター

に置いた。しかし、たちまちハグリッドがハリーの鍵を探そうとして、盛大にばら撒いた犬用ビスケットの中に埋もれてしまった。

やがて見つかったハリーの鍵と、ビスケットの山からサルベージしたイリスの鍵を小鬼は長い指で（粉だらけのイリスのだけ嫌そうに）摘み、慎重に調べ上げ、「承知いたしました」と言った。

「それと、ダンブルドアからの手紙を預かって来とる」

ハグリッドが手紙を小鬼に渡して二、三会話をしている間に、イリスはハリーに小鬼に咎められないよう声量をできるだけ落として話しかけた。

「ダンブルドアって知ってるよ。手紙に書いてあった。ホグワーツの校長先生でしょ」

「うん。でも『例の物』って言ってるよ。一体何なんだろう・・・」

ハリーは小鬼のグリップフックに案内される間、ハグリッドに『例の物』について聞いたようだが、教えてもらうことはできなかったらしい。残念そうにイリスに言ったが、イリスは小鬼の口笛に導かれてこちらへ元氣よく走ってくるトロッコに意識が集中していたので、それどころではなかった。その余りのスピードに、イリスは小さい頃遊園地で絶叫系のジェットコースターに乗り、しこたま吐いたことを思い出していた。

イリスの嫌な予感は的中した。クネクネ曲がる迷路を四人を乗せたトロッコはびゅんびゅんと、冷たい空気の中を風を切って走っている。最初は幼児向けのジェットコースターみたいなものだと自分を無理やり励まして、トロッコが急なカーブを曲がるたびにハリーと一緒に歓声を上げていたイリスだったが、次第に過激さを増していくコースに空元氣はしぼんで跡形もなくなり、代わりにいつまでたってもゴールに着かないのでは？という不安に心を満たされ、顔は青ざめ吐き気がこみ上げてくるようになった。

やっとトロッコが小さな扉の前で止まった頃、イリスはハグリッドと共に通路の脇に立って、膝の震えが収まるのを待たなければならぬ羽目になった。

結局、ハリーに背中を摩られながら自分の金庫から必要なだけの金

を袋に入れ、ハリーが例の金庫を興味深げに覗き込んでいるのを吐き気をこらえながら横目で見つつ、もう一回猛烈なトロツコをやり過ごして、やっとの思いで地上に解放されたのだった。

☆

漏れ鍋で元気薬を一杯ひっかけてくる、とふらふら去って行ったハグリッドを見送って、二人は制服を買いにマダム・マルキンの洋装店へ入った。勝手がわからず二人でどきまぎしていると、愛想の良いずんぐりした体形の女性が声をかけてきて、一人ずつ順番に案内してくれた。

ハリーに続いて無事仕立てを終えたイリスが外へ出ると、無事復活したハグリッドがにこにここと微笑みながらアイスクリームをイリスに手渡した。イリスはハグリッドに元氣よく礼を言うと、二段仕立てのアイスクリームにかぶりつく(ラズベリーとナッツ入りチョコレート味だ)。アイスクリームの冷たさがトロツコ酔いで疲れ切っている体に染み渡った。

ふと隣を見ると、ハリーが仏頂面でアイスクリームをなめていることに気が付いた。

「どうしたの、ハリー。何かあった？」

ハリーははっとした表情で隣を見ると、イリスが心配そうにハリーを覗き込んでいる。

ハリーにとって、イリスは生まれて初めてできた『まともな友達』だった。ダドリーの取り巻きみたいに自分をいじめたり、遠巻きに陰口を言われることもない。気を遣ったりすることもなく、ありのままの自分を見せられるし、等身大で付き合える。その友達に心配されるのは簡単に言葉で言い表せないくらいうれしいことで、もやもやとしていた心がポツと温かくなるのを感じた。

ハリーは二人に洋装店で出会ったという男の子の話をした。

「・・・その子が言うんだ。マグルの家の子はいつさい入学させるべきじゃないって」

「マグルって何？」

「マグルっていうのは、魔法族じゃない人間のことだよ」

ハグリッドがイリスに向けて呆れ顔で何か言う前に、ハリーが少し得意げに教えてくれた。

「お前はマグルの子じゃない。イリス、お前さんもだ。ハリー、お前が何者かその子がわかっていたらなあ」

そのあとに続く会話で、イリスは『クイディッチ』という魔法界のスポーツがあることや、ホグワーツには『四つの寮』があること、そして何よりも魔法界はとにかく色々と言えないといけなことが沢山ある、ということがわかった。

☆

買った物は順調に進んだ。フローリッシュ・アンド・フロッツ書店で、ハリーのにつき敵であるダドリーを懲らしめるにはどんな呪いが一番適しているのか、呪いの本を読みふけて熱く語り合ったり（ハグリッドは二人を引きずるようにして連れ出さなければならなかった）、純金製と純銀製の鍋はどっちが使い勝手が良いのかで議論したり、ハリーとイリスはまるで兄妹のように仲良く話し、つまらないことで笑いあった。

「あとは杖だけだな・・・おお、そうだ、まだ誕生日祝いを買ってやってなかったな、ハリー」

「そんなことしなくていいのに・・・」

「え?! 今日お誕生日なの、ハリー? おめでどう!」

そういえば初めて会った時、今日で11歳になるって言ってたっけ。イリスがお祝いを言うと、ハリーはますます顔を赤らめて、「ありがとう」ともごもご口の中で呟いた。

ハグリッドは、二人を連れてイーロップふくろう百貨店へやってきた。ハリーが店中のふくろうに目を奪われている間に、イリスは彼方此方にある鳥籠の影や羽音にまぎれて、こっそりと店を抜け出す。ハリーの誕生日プレゼントを見繕うためだ。ハリーは何が好きなんだろう。迷子になる自信があったため、あまり遠くには行かないよう注意しながら歩いていると、ある店に目が留まった。古びたショーウィンドーに、さまざまな形状の時計がたくさん積み上げられている。どうやら時計店のようだ。

懐中時計を買う予定だったことを思い出し、緊張しながら店内に入る。

「やあ、お嬢さんはホグワーツかい？もしそうならマグルの時計は壊れちゃうからダメだよ、うちの魔法仕掛けの時計にしなきゃね」

イリスの落ち着かない様子から、マグルの家の子だと判断した店員が、愛想よく話しかけてきた。すすめられるままに、小振りの懐中時計を手取る。鎖も時計自体も曇りのないきれいな金色で、龍頭を押し込むと上蓋が開き、シンプルな文字盤が現れた。

「あの、これを二つください。一つは友達にプレゼントしたいんですけど」

店員は快く杖を一振りして、ハリー用の箱をカラフルなりボンと包装紙でラッピングしてくれた。

ハリーは驚くだろうか。気に入ってくれるといいな。ラッピングされた箱を満足げに眺めながら、元来た道を帰ろうとしたイリスの頭上に、突如として大きな影が差した。

☆

太陽が隠れてしまったのかと思って見上げると、イリスのすぐ目の前に上品な服装をした英国紳士が立っていた。その人はイリスよりも頭二つ分以上も背が高く、彼が日に背を向けて立っているために作り出された影が、小さなイリスを包み込んでいた。

しわ一つない上質な漆黒のマント（庶民のイリスでさえ、一目見ただけで高級品だとわかった）を着こなし、銀色の髪を頭の後ろで一つに束ねている。イリスはその様子を見て、直感的にどこかの王族か貴族か、それに準ずる身分の高い人に違いないと思った。その直感はあるが間違いではなかったが、それほどまでにこの通りを歩く他の人々と比べて、その男は威厳に満ちていた。

男の冷たい色をした瞳は、なんと驚いたように見開いて——イリスを凝視している。

「.....」

イリスは見知らぬ男が急に自分の目の前に立っていることにもびつくりしたし、おまけに自分を驚きの眼差しで見つめているのも



びつくりだった。驚きの連続で、イリスは蛇に睨まれた蛙のように動  
けず、男からも目を離せなかった。

イリスと男は、しばらくの間無言でお互いを見つめあっていた。

「こん……」

「君の名前は何という？」

沈黙に耐え切れなかったイリスがこんにちはという前に、男は静か  
な声色でイリスに話しかけた。

「イリス・ゴーストです」

次の瞬間、イリスは信じられないものを見た。いや、体験した。

その男はイリスのフルネームを聞くと、いまだ見開いたままの双眸  
から一筋の涙を流し、ほんの短い間だったがイリスを引き寄せて力  
いっぱい抱きしめたのだ。そして茫然状態のイリスを離すと、その冷  
たげな容姿からは考えられないほど優しい声で話しかける。

「驚かせてすまなかった。私の名はルシウス・マルフォイ、ホグワーツ  
の理事をしている。」

……君の父上は、私にとって得難い友だった。十年前、両親を亡  
くした後、魔法界から姿を消した君のことをずっと案じていたのだ  
よ」

「ほ……ほい……」

間拔けな返事をするイリスを気にすることもなく、ルシウスと名  
乗った男は自らの後ろにいた男の子を紹介した。父によく似た青白  
い顔に銀髪をまとめた、上品な容姿の男の子だ。

「私の息子のドラコだ。君とは同学年になる。ホグワーツで何かあれ  
ば、この子を頼りなさい」

「ドラコ・マルフォイだ。よろしく、イリス。父から君の話は聞いてい  
る。僕が色々教えてあげよう」

ドラコは強い興味を示した目でイリスを見つめながら、気取った様  
子で手を差し出した。イリスは彼がよもやハリーの言っていた洋装  
店で出会った嫌味な男の子だとは露とも知らず、また新しく魔法界の  
友達（しかもずいぶん頼もしそうだ）ができたと喜んで、快く握手  
した。その様子を満足気に眺めながら、ルシウスが言葉を続ける。

「・・・イリス、会えて本当に良かった。今年のクリスマス休暇は、私の屋敷で過ごしてはどうかね。一度君とじっくり話がしたい」

「おーい、どこ行つとつたんだ！探したぞ」

イリスが応えようとした時、不意にハグリッドの声が聞こえた。振り返ると、雑踏の中でひときわ目立つ大ききさのハグリッドが、真新しい鳥籠を持ったハリーと共に、こちらに向かってこようとしていた。

手を振り返してから改めてルシウスに返事をしようと向き直ると、もうマルフォイ親子の姿はどこにも見当たらなかった。

## File 4. ダイアゴン横丁（後編）

「あれ・・・？」

マルフォイ親子は、現れた時と同じように、唐突に消えてしまった。それこそ、魔法みたいに。イリスは慌てて四方八方を見渡したが、どこにもいない。

「どうした？ドラゴンでも見たか？」

狐につままれたような顔をしているイリスに、ハグリッドが冗談まじりに話しかけた。ふとハリーが心配そうに自分を覗き込んでいるのに気が付いて、プレゼントを両手に持ったままだったことを思い出したイリスは、慌ててカバンに突っ込んで隠した。そして二人に「何でもない。散歩してて道に迷っただけ」と嘘をついた。

ルシウスにクリスマス休暇の返事をしたかったし、ハグリッドたちにも紹介したかったけれど、幻でなければドラコとはホグワーツで会えるはずだ。その時に返事をしよう。イリスは楽観的に結論を出して、カバン越しにプレゼントの箱をポンと叩いた。

☆

三人は再びイーロップふくろう百貨店に戻った。イリスがとびきり丈夫なふくろうを二羽（なにしろ日本—イギリス間を往復するのだ）店員に選んでもらったあと、会計をしている間、ハグリッドは二人に言った。

「二人とも、あとはオリバンダーの店だけだ。・・・杖はここに限る。最高の杖をもたにやいかん」

☆

最後の買い物の店は狭くてみすぼらしかった。剥がれかかった金色の文字で店名が書いてあり、埃っぽいショーウィンドーには、色褪せた紫色のクッションに、杖が一本だけ置かれていた。

中に入るとどこか奥の方でチリンチリンと鈴が鳴った。店主が来るまでの間、ハグリッドは店内に一つだけあった椅子に腰かけ、二人は黙りこくったまま、天井近くまで整然と積み上げられた細長い箱の山を見ていた。イリスは隣で立つハリーに対して「わあ」とか「すご

いね」とか、今までと同じように気軽な感じで話しかけたかったが、店内に満ちた厳肅な雰囲気と圧倒的な静謐さは、容易に口を開くことを許してくれそうになかった。

「いらっしやいませ」

柔らかな声がかして、三人は跳び上がった。特に座っていたハグリッドは、驚いた拍子に身じろぎしたせいで危うく華奢な作りだった椅子を壊しかけ、慌ててその場から立ち上がった。

三人の目の前に、いつの間にか一人の老人が立っている。ハリーがぎこちなく挨拶したのを見て、イリスも口ごもりながらそれにならった。

「おおそうじゃ。．．そうじやとも、そうじやとも。まもなくお目にかかれると思っていましたよ。ハリー・ポッターさん、イリス・ゴントさん」

老人は、初めて会ったばかりの二人のことをもう知っていた。そして音もなく滑るように（イリスは老人の足が床から浮いてるんじゃないか、と疑ったほどだった）ハリーの前へと移動する。亡きハリーの両親が選んだ杖の話をしながら、お互いの鼻と鼻がくつつくぐらいまで近づいて、ハリーの前髪を細長い指ではらった。そこで初めてイリスは、ハリーの額に稲妻型の傷があることを知った。

「悲しいことに、この傷をつけたのも、わしの店で売った杖じゃ。．．もしあの杖が世の中に出て、何をするのかわしが知っておればのう」老人は次にイリスの前へ移動した。ハリーの時と同じように超接近されたらどうしよう、とハラハラしながら、イリスは老人の銀色に光る目を見つめ返した。

「不思議な色の目をしていなさる。ご両親の目の色を混ぜたかのようなじゃ。あなたのお父さんは黒檀の三十センチ、持ち手から杖先までまつすぐな杖を選ばれた。良質で、なによりも誇り高い杖じゃった。お母さんは柳の木でできた、振り応えのある杖を好まれたが．．．。

いや、好まれたというが、ゴントさん、実はもちろん、杖の方が持ち主の魔法使いを選ぶのじゃよ」

老人はそう言つて、やがてハグリッドに気づいて話しかけ始めた。

イリスは心底ホツとした拍子に、古びたカーペットの毛羽立ちに足を取られてこけそうになった。

☆

「さて、それでは・・・ゴントさんから、拝見しましょうか。杖腕はどちらですか？」

「杖腕・・・？」

急に飛び出した『魔法用語』にポカンとした表情を浮かべたイリスだったが、見かねたハグリッドがやって来て「利き腕のことだ」と教えてくれた。

「あの、私、右利きです！」

老人はポケットから銀色の目盛りの入った長い巻き尺を取り出して、イリスの右腕周りの寸法を測りながら、オリバンダーの杖について話を始めた。

やがて巻き尺を再びポケットにしまうと、老人は迷うことなく棚から一つの箱を取り、中から奇妙な形（取っ手以外は杖の先に至るまで、くねくねと曲がりくねっている）の杖を出して、イリスに手渡した。「（ヘンテコリンな杖・・・）」

一目見て、イリスはがっかりした。おまけに取っ手から杖先まで白いシマシマ模様があったので、まるで木で作ったウミヘビみたいだとイリスはげんなりしながら思った。

「ではゴントさん。これをお試してください。柳の木、一角獣のたてがみ、三十四センチ。忠誠心が高く、振り応えがある。手に取って、振ってごらんさい」

もつと可愛い形の杖が良かったのに。自分で選べないのかな。杖の説明を右から左へ受け流しながら、手に取った瞬間、指先がポツと温かくなった。さつきまであんなにがっかりしていた気持ちだが、嘘のようにすうつと消えていく。じつくり眺めていれば、なかなか味のある外見だし、これはこれで可愛いかもしれない、とも思えてきた。イリスは空気を切るように杖を振り下ろす。

すると、杖から青色に輝く光の玉が飛び出して、天井にぶつかり花火のように弾けて、店内をほんの短い間だけ美しく青白い輝きで満た

した。ハリーは興奮して「すごい！」と叫び、ハグリッドは拍手し、老人は「ブラボー！」と叫んだ。

「すばらしい。本当によかった。

・・・ゴントさん、実はその杖は、あなたのお母さんが使っていた杖なのじゃ」

その言葉にイリスがびつくりして杖から老人へ視線をうつすと、老人は静かな笑みを湛えて、イリスの瞳を見ていた。まるで瞳の中から、イリスの亡き母親の姿を探しているように。ハグリッドはイリスの頭の上から杖を覗き込んで、一言「本当だ」とうめいた。

「私のお母さんが・・・？」

老人は穏やかに頷いて、話を続けた。

「悲しい話じゃが・・・あなたのお母さんはある日ここへやって来て『十年後、我が子がここに来たら、母から入学祝いだ』とこの杖を渡してください』と言い、その杖を託された。魔法使いが杖を手放すというのは、自分の命を手放すも同然。わしは引き止めたが、あの子は笑って去り・・・一週間後にあなたのお父さんと共に『名前を言っただけはいけないあの人』に殺されてしまった。

それからこの杖は十年間もの間、ここであなたに出会うのを待っていたのじゃよ。もちろん、先ほども言うた通り、杖が持ち主を選ぶ。たとえば血を分けた兄弟親子の間柄だとて、同じ杖が忠誠を誓うのは実に稀なことじゃ。本当にあなたに使えるのか・・・。案じていたが、どうやら杞憂だったようじゃ」

イリスはしばらくの間、老人の瞳から目を離すことができなかった。後ろで話を聞いていたハリーとハグリッドも、イリスに何と声をかけていいかわからずに押し黙っている。どうしてお母さんは、自分の杖を私にくれたんだろう。イリスは色んな感情がごちゃ混ぜになつて、答えを探そうとすがるように杖を見つめた。杖は当然答えを教えてくれるはずもなく、代わりに店の明かりを反射して、優しくきらめいて見せた。心配することはない、わたしに任せて。その時イリスは、杖がそう言っているように聞こえた。

老人はイリスから杖を受け取り箱に戻して包装してくれた。代金

を払おうとすると「もうその杖の代金は最初にあなたのお母さんが支払った」と言つて、受け取つてくれなかった。

次はハリーの番だ。イリスの時と同じように、杖腕を聞かれ、巻き尺で寸法を測られていく。勝手に鼻の穴の間まで測られているのを見て、イリスは思わずぷつと噴出した。イリスの時とは違い、老人は柵の間を忙しく飛び回つて一つの箱を選び出し、出した杖をハリーに渡して振るよう促した。しかしハリーが振るか振らないかのうちにひたたくつては、新たな杖を渡していく。その過程で床に無造作に積み上げられていった無数の空き箱と転がる杖たちを、イリスは茫然と眺めていた。

「難しい客じやの。え？心配なさるな、必ずピッタリ合うのをお探ししますのぞな」

奇跡は間もなく起こつた。老人が手渡した杖をハリーが降つた瞬間、杖から赤と金色の光が花火のように流れ出し、光の玉が壁に反射した。イリスの時よりもずっと長い間、光の玉は店内を明るく光らせた。

イリスとハグリッドは手を取り合いながら大興奮し、老人は「ブラボー！」と叫んだ。

「すばらしい。いや、よかつた。さて、さて、さて……不思議なこともあるものよ……まったくもつて不思議な……」

老人はハリーの杖を箱に戻し、包装しながら、まだブツブツと繰り返していた。

「不思議じゃ……不思議じゃ……」

ハリーが聞くと、オリバンダー老人は泉のような静けさを湛えた瞳でハリーをじつと見た後、ハリーの杖に入っている不死鳥の尾羽根は、もう一枚『別の杖』に使われていたこと、そして『その杖』はハリーの額に消えない稲妻型の傷を残したことを告げた。

「こういうことが起こるとは、不思議なものじゃ。ゴントさんの時と同じように、杖は持ち主の魔法使いを選ぶ。そういうことじゃ……ポッターさん、あなたはきつと偉大なことをなさるに違いない……」

『名前を言つてはいけないあの人』もある意味では、偉大なことをした

わけじや・・・恐ろしいことじやったが、偉大には違いない」

思わず身震いしたハリーを見て、イリスはこの老人をあまり好きになれない気がした。まるでハリーも『名前を言っただけはいけないあの人』になるような言い方だと思った。ハリーは杖の代金を支払い、三人は店を出た。

☆

夕暮れ近くの太陽が空に低くかかっていた。三人はダイアゴン横丁を、元来た道へと歩いた。漏れ鍋に戻る前に、小さなレストランを見かけたイリスが空腹を訴えたため、そこに入って軽食を取ることになった。

「大丈夫か？なんだかずいぶん静かだが」

席に着いて料理を注文するや否や、イリスはオリバンダーの店でずっと尿意をこらえていたらしく、「トイレ行ってくる！」と叫んで、露骨に下腹部を抑えながら駆け込んでいった。そんなイリスと頼んだ料理を待つ間、ハグリッドがハリーに声をかけた。

ハリーは何と説明すればよいかわからなかった。こんなに素晴らしい誕生日は初めてだった・・・それなのに・・・ハリーは言葉を探るように、届いたばかりのフライドポテトをかじった。

「みんなが僕のことを特別だと思ってる」

しばらくの沈黙の後、ハリーはやつと口を開いた。

『漏れ鍋』のみんな、クイレル先生も、オリバンダーさんも・・・でも、僕、魔法のことは何も知らない。それなのに、どうして僕に偉大なことを期待できる？有名だっていうけれど、何が僕を有名にしたかさえ覚えていないんだよ。ヴォル・・・あ、ごめん・・・僕の両親が死んだ夜だけど、僕、何が起こったのかも覚えていない」

ハグリッドはテーブルの向こう側から身を乗り出した。モジヤモジヤのひげと眉毛の間に、優しい笑顔を浮かべて。

「ハリー、心配するな。すぐに様子がわかってくる。みんながホグワーツで一から始めるんだよ。大丈夫、ありのままにええ。そりや大変なのはわかる。お前さんは選ばれたんだ。大変なことだ。だがな、ホグワーツは楽しい。俺も楽しかった。いまも実は楽しいよ。」



・・・ところで、イリスはいつまでトイレにこもっとるんだ？」

☆

突如、店内の明かりが消えた。思わず身をすくめたハリーと、何事かとかまえたハグリッドの前に姿を現したのは・・・大きな誕生日ケーキを両手に抱えるイリスの姿だった。店内の店員や他の客にも注目されているので、淡いろうそくの炎越しでもわかるぐらい顔を真っ赤にして、「ハッピーバースデー、ハリー！」恥ずかしげに微笑んだ。

ハリーは胸がいっぱいになって、うまく言葉が出てこなかった。

「杖のお店を出た時からハリーが元気なかつたからさ、ちょうど通りがかつたレストランでケーキが売ってるのを見て、これだ！って思ったんだよ。お店の人も色々手伝ってくれたんだ。

ハグリッドにお祝いしてもらったのは知ってるんだけど、お誕生日はその日じゆうだったら何回お祝いしても良いものだって、おばさんが言ってたし、構わないよね」

照れくさいのか、ハリーと目を合わさずに一気にそう言い切ると、イリスは生クリームとイチゴがふんだんにあしらわれたケーキをテーブルに置いた。ケーキには魔法仕掛けのろうそくが十一本立っていて、虹色の炎を揺らめかせている。真ん中には『ハリー お誕生日おめでとう！』と書かれた、大きなチョコレートプレートが乗っていた。

イリスはハグリッドを促して、ハリーのためにバースデーソングを歌い始めた。終わった頃、イリスは「さ、吹き消して！」とハリーに言ったが、当のハリーは口をポカンと開け、銅像のように椅子に座ったままピクリとも動かない。しびれを切らしたイリスが何度もせつについて、ようやくハリーは大きく息を吸い込んで、魔法の炎をすべて吹き消すことができた。

気を利かせてくれた店員や客と共に拍手をしたイリスは、元通り店内に明かりが戻ると、改めてハリーにお祝いの言葉を告げ、プレゼントを渡した。

「僕、僕・・・」

ハリーはイリスになんとお礼を言ったら良いのかわからなかった。

今自分がどんなに幸せで、満たされた気分なのか伝えたかったけれど、言葉の代わりに心臓とのど元に熱いものがこみ上げて来て、視界がうるみ目の前のケーキがぼやけて見えなくなった。

急に目の前でプレゼントの箱を握りしめたまま咽び泣き始めたハリーに、イリスは戸惑った。自分が幼い頃から誕生日を迎えるたびに、おばにしてもらった当たり前のことをしただけなのに、なぜハリーが泣くのかわからなかった。

おまけに、なぜかハグリッドまで大粒の涙をひげにしたたらせながら、おんおんと声を上げて泣き始めたではないか。もうわけがわからないよ。早くハリーのケーキ（ハリーが何も知らないのを良いことに、イリスはちゃっかり自分の大好きなショートケーキにしたのだ）を食べたいイリスは、さじを投げたくなった。ハグリッドは鼻水をすすりながら二人に言った。

「す、すまねえ、こらえようとしたんだが……。実はお前さんらの父さん同士……。ああ、ジエームズとネーレウスだが……。この二人はホグワーツにいた時から、ほんとうに仲が悪くてな。喧嘩や決闘なんてしょっちゅうで、その度に俺たちが止めに入ったもんだった。

最初、ダンブルドア先生に、お前さんたちと一緒に横丁へ連れて行ってくれと頼まれた時は、どうなることかとひやひやしてたが……。こんなに仲良くなるなんて、あの二人の仲を知ってたやつらの一体誰が予想できる？俺は今、本当にうれしいよ」

そう言うと、ハグリッドは水玉模様のハンカチをポケットから取り出して、思いつきり鼻をかんだ。

ハリーはとても穏やかな気持ちだった。この光景をダドリーたちに見せつけて、散々自慢してやりたかった。あんなに羨ましいと思っていたいとこの誕生日が、今はもう霞んで見える。僕らの父さんたちが仲が悪かっただって？ハリーは涙を拭いて、ハグリッドとイリスに言った。

「僕らは絶対そんな風にならないよ。ずっと友達だ」

ケーキや料理を食べておなか一杯になった頃、ハリーはイリスからもらったプレゼントの箱を開けてみた。イリスはカバンから自分の

懐中時計を見せて、お揃いだと笑って告げる。

ハリーはさつきまでの不安で孤独な気持ちだが、うそのように溶けていくのを感じていた。

☆

漏れ鍋でハリーとハグリッド、イリスとイオは分かれることとなった。

「じゃあまたなハグリッド。ハリーくん、九月一日にキングス・クロス駅でね」

イオは気軽な感じでハグリッドに別れを良い、次いでハリーに優しく話しかけた。

「ハリー、絶対駅で待ち合わせしようね！絶対だよ！」

イリスはハリーと固く握手をしながら念押しし、ハリーは快く頷いた。

「本当に良い友達ができて良かったな、ハリー」

去っていくイリスとイオの背中を見ながら、しみじみと呟くハグリッドの言葉に、ハリーは無言で頷いた。早く九月になったらいいのに。切符を握りしめ、心の底からハリーはそう願った。

## File 5. ホグワーツ特急

八月半ば頃まで、イリスとイオは忙しく過ごした。イリスの通っていた小学校の諸手続きや、クラスのお別れ会、近所の人々への挨拶回りなどをこなすためだ。

八月の終わりには、ダイアゴン横丁で買った荷物を整理して、少し早目にイギリスへ飛び、キングス・クロス駅から少し離れた位置にある、古びたホテルの一室を借りた。

八月三十一日の夜。二人は明日のために、早めに床についた。しばらくしてイリスが興奮して寝れないと起き出してしまったので、イオは部屋に据え置かれていたティーセットで、熱いミルクティーを淹れてやった。

「魔法界のことで、わからないことはないか？まあ、わからないことだらけだとは思うけど。わたしでわかる範囲で教えるよ」

豆電球がぼんやり部屋を照らす中、寝間着姿で向かい合ってミルクティーをすすっていると、イオがイリスに尋ねた。イオの言う通り、質問だらけで『何がわからないかわからない』という状態だったが、イリスはダイアゴン横丁でハグリッドから寮の話聞いたことを思い出した。

「お父さんとお母さんのホグワーツの寮って、どこだったの？」  
「スリザリンだよ」

イリスは、高まっていた気持ちがすうっと冷えていくのを感じた。イリスが不安そうな顔をしているのを見て、イオは理由を尋ねた。イリスはスリザリンについてハグリッドがどんな風に言っていたか、話して聞かせる。

「悪の道に走った魔法使いは、みんなスリザリンなんだって。その…『例のあの人』も…。お父さんとお母さんは、どんな風に過ごしていたのかな。私もスリザリンになったら、どうしよう」

イオはしばらく腕組みをして、愛する姪の目を見た。この子は本当に何も知らないのだ、と痛感した。当然のことなのだろうが、あまりにも無知すぎる。だが、同時に良い機会だと思った。誰かがイリスに

ゆがんだ考えを吹き込む前に、客観的な知識を授けるべきだと判断し、イオは口を開いた。

「イリス、お前はあまりにも魔法界について知らなさすぎる。わたしの浅い見解だが、知っていることを話すよ。お前にはまだ理解できないかもしれないけど・・・」

そう前置きして、イオは語り始めた。

「まず、言葉を覚えよう。すべてイギリスの魔法界で使えるものだ。

魔法・・・不思議な力だな・・・は、すべて『魔法』と呼ぶ。

魔法が使える血を持つ一族を『魔法族』、魔法族の出身だが魔法が使えない者を『スクイブ』

魔法族の出身でもないし、魔法も使えない者を『マグル』

マグルの出身だが魔法が使える人間を『マグル生まれ』と呼ぶ。

魔法族もマグル生まれも、魔法が使える者はひつくるめて『魔法使い（魔女）』と呼ぶ。

最後に、魔法族が中心となった世界を『魔法界』、マグルが中心となった世界を『マグル界』と呼ぼう。

魔法界とマグル界は、コインの裏表のように互いのそばに接しているが、決して交わることはない。どうしてだと思う？」

イリスの反応を確かめながら、イオは続けた。

「魔法使いもマグルも、魔法が使えるか使えないかだけで、しよせんは同じ人間だ。

人間は、自分と違う存在を恐れ、排除しようとする生き物なんだ。はつきり言えば、魔法使いはマグルが嫌いだし、マグルは魔法使いを恐れる。だから隠れているんだよ。お前も魔法使いの一員なのだから、けっしてマグルに魔法界のことをしゃべったり、マグルの前で魔法を使ってはならない。

さて、じゃあ魔法界の連中が、全員なかよしこよしなのかと言われるれば、そうでもない。魔法界の中でも『違う存在』というのはあるんだよ。魔法の血が流れているか、そうでないか。魔法族出身・・・つまり『純血』か、そうでないか・・・。そういうことだ。

魔法界の連中は、はつきり言おう、差別をすることがある。魔法族

にとって『同じ存在』とは、『自分たちと同じ魔法族で、魔法が使える者』だ。だから、マグルやマグル生まれ、スクイブは、差別されることがあるのさ。魔法が使えない、又は魔法を使えるけど魔法族ではないからね。もちろん全部の魔法使いがそうじゃない。：：だけど、一部の連中は、『純血』を求めるあまり、魔法族がマグルと結婚することすら禁忌としたり、魔法族とマグルとの子供を差別したりするんだ。

言っておくが、お前は『純血』だよ。お前の父さんはイギリスの魔法族の出身だし、母さんもそうだ。出雲家は今でこそ廃れちゃってわたしとお前しかいないし、日本の魔法界からは距離を置いているが：：ずっとずっと昔から続く歴史ある日本の魔法族なんだよ。：：まあホグワーツから便りが来たのは、出雲家ではお前の母さんが最初だが。：：たぶんイギリスの血が入ったからだろう。

．．．もうわかったね。わたしはスクイブだ。出雲家の出身だけど、魔法が使えなかった。

イリス、大事なことはお前の心の中にある。家柄や、血や、寮は、育つていく環境を決めてしまう。でも、お前の心までは決められない。たとえスリザリンになったとしても、お前の心が揺るがなければ、闇の魔法使いになったりしないんだ。お前の両親は確かにスリザリン生だったが、自分の信念を持ち、揺るがせることなどなかった。

お前の心は、意志は、未来はお前自身のものだ。環境じゃない。お前が決めるんだよ」

イオはそういうと、すっかりぬるくなったミルクティーを一気に飲んだ。

☆

次の日、イリスは朝四時に目が覚めた。不安と緊張が高まり、とてもじゃないが二度寝なんてできない。起き出して隣のベッドを見ると、イオはまだぐっすり眠っている。サイドテーブルから水差しを取り、コップに水を注いで、窓から外の景色を眺めながら、ゆっくりと飲み干した。

ホテル内のレストランで朝食を取り、忘れ物がないかも一度荷物を確かめてから、二人は宿を出た。フロントでタクシーを呼んでもら

い（タクシーの運転手は、イリスが抱えたふくろう入りの籠を見てぎよつとしていた）、キングズ・クロス駅に向かう。だが渋滞が続き、結局駅に着いたのは十時半だった。

「やばくないか・・・出発は十一時だろ？あと三十分しかないぞ」

慌ただしくカートに荷物を放り込んで、二人はプラットホームに向かつて歩き出した。イリスはキヨロキヨロと人込みの中を見渡してみただけれど、ハリーは見当たらない。

「駅で待ち合わせようって約束したけど、どこにいるのかな？」

「そりやお前、9と4分の3番線だろ。あ、あつたあつた、9と・・・あれ、10？9と4分の3番線は？」

「9」と書いた大きな札が下がったプラットホームの隣には「10」と書いた大きな札が下がっている。そしてその間には、何もなかった。途方にくれたイリスを置いて、イオは「駅員に聞きに行ってくる」と言つてその場を去り、十分後、相当絞られたらしく疲れ果てた表情で戻つてきた。

「ハリー君、もしかして先に汽車の中で待つてるんじゃないか？」

イリスは列車到着案内板の上にある大きな時計を見上げた。時計は十時四十五分を指していた。あと十五分で発車してしまう。時計から視線を下した時、人込みの中に自分と同じようなトランクと鳥籠を押し男の子を見つけた。・・・ハリーだ。

「ハリー！ハリー！」

イオと同じように駅員にあしらわれ、パニックを一人こらえていたハリーは、雑踏の中から懐かしい声を聴いて、思わずその方向に振り向いた。

「イリス！よかった！」

二人は駅のだ真ん中で手を取り合つて喜んだ。この時、イリスとイオは9と4分の3番線の行き方はハリーがハグリッドに聞いて知つてると思つていて、ハリーはイオが知つていると思つていた。

「さあ、9と4分の3番線に行こう！」

三人とも同じことを言つて、誰もその場から動かないことを疑問に思つた。やがて誰も行き方を知らないとわかつて、三人の間に重苦し

い沈黙が流れた頃、時計はさらに進んで十時五十分を指していた。

☆

その時、三人の後ろを通り過ぎた一団があった。

「マグルで混み合ってるわね、当然だけど・・・」

マグルだつて？三人仲良く揃って振り向くと、ふつくらしたお婆さんが、揃いも揃って燃えるような赤毛の四人の男の子に話しかけている。みんなイリスやハリーと同じようなトランクを押しながら歩いている。

「おい！二人とも！尾行するぞ・・・」

イオのひそひそ声に従って、三人は赤毛ファミリーにこそそついでいった。ファミリーはプラットホームの「9」と「10」の間に立っている。先ほど自分たちが立っていた場所と同じだ。三人が食い入るように見つめていると、赤毛の男の子が一人ずつ、カートを押して、「9」と「10」の間の柵に向かって歩き始め・・・もうすぐ柵にぶつかる・・・という時に、すつと消えた。

「ちよつと聞いてくるわ」

イオは躊躇なくふつくらお婆さんのところへ行つて、人懐こい笑顔を浮かべながら愛想よく話しかけた。お婆さんは優しく微笑んだ。

「・・・まあ、そうなの。坊やお嬢さんは、ホグワーツは初めてなのね？ロンもそうなのよ」

お婆さんは最後に残った男の子を指さした。背が高くそばかすだらけで、ひよろつとした体形の男の子だ。

三人揃ってお婆さんに9と4分の3番線への行き方を教えてもらった後、ハリーが「僕が先に行く」と男気を見せた。九番と十番線に乗り込もうとする乗客たちに翻弄されながらカートを押して、ハリーは柵に向かって突き進み、あわや激突・・・すると思つたら、すつと消えた。

「次はお前だ。心配するな、わたしも後で合流するよ」

イオに耳打ちされ、お婆さんに励まされながら、イリスはカートをくるりと回して、柵と対峙した。とてもじゃないが、やわらかそうには見えない。頑丈そうな柵だ。でも、行かなければ。時計はもう少し



で十一時を指そうとしているし、さつきと行かなければあとがつかえる。もうどうにでもなれ。

「(ハリーも行ったしきつと大丈夫・・・ハリーも行ったしきつと大丈夫・・・)」

イリスはやけくそになって、乗客にぶつかりながら柵を目指して突き進んだ。柵がグングン近づいてくる・・・だめだ、柵にカートの先が当たる・・・イリスは思わず目を閉じた。・・・いや、ぶつからない。まだ走ってる。

☆

イリスが目を開けると、目の前に紅色の蒸気機関車が、乗客でごつた返すプラットフォームに停車していた。ホームの上には『ホグワーツ行特急11時発』と書いてある。振り返ると、改札口のあったところに『9と4分の3』と書いた鉄のアーチが見えた。

「おいイリス、ぼけつとしてる暇ないぞ！急げ！」

アーチから不意にイオが現れて、イリスを急かした。先頭の数両は、もう生徒でいっぱいだった。二人は少し先を歩いていたハリーと合流し、空いた席を探して、ホームを歩いた。

やっと最後尾の車両近くに空いているコンパートメントの席を見つけ、二人分の荷物を上げるとき、さつき改札口を通過していった赤毛の双子がやって来て手伝ってくれた。ハリーがそのまま双子と話し始めたのを横目で見ながら、イリスは列車から飛び降りた。列車の前で待っているイオに、お別れの挨拶をするためだ。

「ついに出発だな、イリス」

「うん」

二人の間に沈黙が流れる。イリスは何と言っているかわからなかった。「さよなら」というのも違うし、「またね」というのも違う。ちよūdい言葉が見当たらなかった。

「懐中時計を開けてごらん」

ふとイオが言って、イリスはポケットに突っ込んだ懐中時計の蓋を開けてみた。

上蓋の裏側に、イリスの両親の写真が嵌め込んである。イリスは息

をのんだ。小さい時に見たカラー写真と違って、モノクロだけだ。ど・・・なんと、生きているみたいに動いている。仲良く肩を寄せ合う二人は、イリスに向かって笑いかけ、手を振っていた。

「わたしの宝箱『開封厳禁』のシールが貼られた箱のことらしい」に、ちよūdその時計に収まるサイズの魔法の写真があつてな。．．．あ、魔法界の写真はモノクロだけど動くんだよ．．．これ豆な。

ホグワーツに行つて、お前の両親について聞かれた時に写真もないんじゃないからな。それに、．．．寂しくないだろ？」

イリスは目頭が熱くなつて、のど元が締め付けられるように痛んだ。

「うれしいけど．．．うれしいけど．．．わ、私、おぼさんの写真もほしいよ」

「そんなこと言うなバカ！」

イオは顔をくしゃくしゃにしながらいリスを強く抱きしめた。とつても温かくてこの上なく安心したけれど、イリスは急に寂しくて心細くてたまらなくなつた。おぼさんなしでホグワーツで生きていくなんて無理だ。なりふり構わず叫びたくなつた。

「どうしても辛いことがあつたら、ふくろう便で送つてこい。わたしは何としてでもホグワーツから連れて帰つてやる」

出発を告げる汽笛が鳴つた。涙を乱暴に拭いたイオが、泣きはらした顔でイリスに微笑みかけ、行つておいでと優しく背中を押した。イリスはコンパートメントの窓際に座り、窓からイオに向けて力いっぱい手を振つた。やがて汽車が滑り出した。イオもイリスに手を振り返した。イリスは、汽車がカーブを曲がつて、イオの姿が見えなくなるまでずっと窓から身を乗り出して、手を振り続けていた。

☆

ハリーは困っていた。これから始まる新しい生活に心が躍っているのに、目の前の大事な友達は、列車が動き出してからずっと、窓の外景色を眺め、沈んだ表情で物思いにふけたままなのだ。ハリーがイリスにどう話しかけようか、言葉を探していた時、コンパートメントの戸が開いた。入ってきたのは．．．ロンと呼ばれていた赤毛の

一番下の男の子だった。

「ここ空いてる？他はどこもいっぱいなんだ」

ロンはハリーとイリスをちらつと見たあと、ハリーの隣の席を指さして尋ねた。ハリーが頷いたので、ロンはおずおずと座る。まもなく戸が開いて、赤毛の双子がやってきた。

「おい、ロン。俺たち、真ん中の車両辺りまでいくぜ……リー・ジョーダンがでっかいタランチュラを持ってるんだ」

「ハリー」双子のもう一人が言った。

「自己紹介したっけ？僕たち、フレッドとジョージ・ウィーズリーだ。こいつは弟のロン。そっちのお嬢さんは？」

「イリス・ゴント」窓から視線を外さないまま、イリスは浮かない顔で答えた。

「こりや重症だ、そんなにおばさんが恋しかったのかい？鼻たれ口ニ一坊やと一緒だな」

どうやら双子はイリスとイオのやり取りを見ていたようだった。窓から双子へと視線を変えて、イリスは恥ずかしそうに顔を真っ赤にする。とぼつちりを受けたロンが「うるさい」と怒鳴ると、双子は愉快そうに笑い去って行った。

「君、ほんとにハリー・ポッターなの？」

再び三人だけになった時、おもむろにロンが聞いた。ハリーが前髪を掻き上げて稲妻の傷跡を見せると、ロンはそれを食い入るように見た。今度はハリーが質問した。

「君の家族はみんな魔法使いなの？」

ロンは二人に色んなことを教えてくれた。ウィーズリー家は古くから続く由緒正しい魔法族だということ、ロンには兄が五人もいて、みなそれぞれに優秀なので、自分が期待に沿うのは大変だということ、そして自分のものはみんな兄たちのお下がりばかりだということ……などなど。ロンは上着のポケットから太ったねずみ（ぐつすり眠っている）を引っ張り出して、これも兄のお下がりなのだと言った。やがて耳元を赤らめ、また窓の外に目を移したロンに、二人は何も恥ずかしがることはないと話しかけた。一人っ子だったイリスは、

たくさん兄弟のいるロンが羨ましいと感じていたのだ。ハリーもいろいろ自分の恵まれない境遇を話して聞かせ、イリスも自分の母親の杖を使っている（厳密にはお下がりとは言えないかもしれないが）と言うと、ロンは少し元気になったようだった。

☆

窓の外で流れる景色を見ているうちに、イリスはつい眠り込んでしまった。ガサガサという音で目を覚ますと、ハリーとロンがコンパトメント中にたくさん菓子を広げて、食べているのが見えた。

「あ、やっと起きたみたい」

寝ぼけ眼のイリスを見て、ロンが言った。

「いったいどうしたの、このお菓子の山」

「車内販売が来たんだよ」

かぼちゃパイにかぶりつきながら、ハリーが答える。

「どうして起こしてくれなかったの？」

「起こしたさ。でも君、スキヤバーズみたいにぐっすりです。ピクリとも動かなかつたぜ。昨日よく眠れなかったんじゃない？・・・まあ、僕もそうだけど」

ロンが悪びれなくそう言うと、ハリーが「僕もだ」と返したので、三人揃って嘔出した。

イリスは改めて、菓子の山を見た。聞くところによると、ハリーのポケットマネーで車内販売しているお菓子を全種類少しずつ買い占めたらしい。ジェスコの食料品店売場でも見たことのない、不思議なものばかりだ。イリスは一つ一つ手にとっては、しげしげと眺めた。バーティ・ボーンズの百味ビーンズ、ドルーブルの風船ガム、蛙チョコレート・・・などなど。

「イリス、全部食べていいよ。・・・これ何だい？」

ハリーは蛙チョコレートの包みを取り上げた。

「まさか本物のカエルじゃないよね？」

「まさか。でも、カードを見てごらん。僕、アグリッパがないんだ」

「カードって何？」

「そうか、君たち、知らないよね・・・。チョコを買うと、中にカード

が入ってるんだ。有名な魔法使いとか魔女とかの写真だよ」

イリスはハリーと肩をくっつけあって、取り出したカードを見た。半月型の眼鏡をかけ、高めの鉤鼻、銀色の長い髪とひげを蓄えた老人の顔が、二人を見つめ返している。写真の下に『アルバス・ダンブルドア』と書いてあった。

「この人がダンブルドアなんだ！」

ハリーとイリスの声がハミングした。ロンは二人がダンブルドアのことを知らないことにびっくりしていたが、そのうちハリーに許可をもらって蛙チョコの山を開封し始めた。二人は裏面の説明文を熱心に読み、カードを返すとダンブルドアの姿が消えていたので、ハリーが驚きの声を上げた。イリスは先ほど得たばかりの豆知識をハリーに教えてあげることにした。

「魔法界の写真は動くんだよ、ハリー。私もおばさんにお父さんとお母さんの写真をもらったけど、動いてたもん」

「え、君のお父さんとお母さんの写真？見せてよ」

ハリーは、魔法の写真が動くことよりもイリスの両親に興味を示したようだった。ロンも開封作業を止めてやってきたので、イリスは懐中時計の蓋を開け、二人に写真を見せた。

「君、お母さん似なんだね」写真とイリスを交互に見て、ハリーが言った。

「パパとママは何してるの？」

ロンの何気ない質問に、イリスは少しの間目を伏せ、ハリーは居心地悪そうに身じろぎした。

「私のお父さんとお母さんは、今はもういないんだ。私がまだ小さい頃に、その……『例のあの人』に……」

「ごめん、僕……」

「気にしないで。おばさんがいたから全然寂しくなんてなかったし。……それよりこれ何、百味ビーンズ？」

慌てて謝ろうとするロンを制してイリスは明るい口調で言うと、湿っぽくなってしまった雰囲気を変えようと百味ビーンズの箱を手にとった。

そのあと、三人はしばらく百味ビーンスを楽しんだ。イリスが食べたのは、わたあめ味、ほうれん草、ソーダ、梅干し、オレンジ、泥、最後においしいそうなチョコレート味だと思って食べたら・・・イリスは口直しのために、かぼちやジュースをまるまる一本開けてしまった。

☆

コンパートメントをノックして、丸顔の男の子が泣きべそをかきなから入ってきた。

「ごめんね、僕のヒキガエルを見かけなかった？」

三人が首を横に振ると、男の子は「僕から逃げてばかりいるんだ」と言って、いよいよ本格的に泣きだした。ハリーが慰めると、男の子は「ごめんね」ともう一回謝ってから、落ち込んだ様子で出て行つた。

「僕がヒキガエルなんか持つてたら、なるべく早くなくしちゃいたいけどね」

それからロンはスキヤバーズを黄色にすると行って、トランクを引つ掻き回してくれたびれた杖を取り出した。生魔法だ。イリスは急いでロンの隣に陣取つた。二人が固唾を飲んで見守る中、ロンが得意げに杖を振り上げたたん、またコンパートメントの戸が開いた。さっきの男の子が、今度は女の子を連れて現れた。

「誰かヒキガエルを見なかった？」

年の割にえらそうな話し方をする女の子だった。ゆたかな栗色の髪に、少し大きな前歯が特徴的だ。「見なかったってさっきそう言つたよ」とロンが答えたが、女の子はロンの杖の方に興味をもつたようだ。やがて女の子も魔法を見るために座り込み、ロンはたじろいだ。が、わざとらしく咳払いをしてからむにやむにや呪文を唱えた。・・・が、何も起こらない。コンパートメント内にしらけた空気が流れた。

女の子は、「その呪文、間違つてない？」という言葉を皮切りに、自分が練習のつもりで簡単な呪文を試してみたら、すべてうまくいったこと、自分は魔法族ではなくマグル生まれだということ、ホグワーツに行くのがとっても楽しみだということ、・・・おまけに教科書はすべ

て暗記していて、それでもまだ知識は足りないと思っただけで、最後にハーマイオニー・グレンジャーという自分の名前まで一気に淀みなく言い切ってみせ、ツンと澄ました様子で三人の名前を聞いた。

ただただ圧倒された三人がそれぞれ名前を言うと、ハーマイオニーは当然のようにハリーに興味を示した。

「三人とも、どの寮に入るかわかってる？ 私はグリフィンドールに入りたいわ。絶対いいみたい。．．．もうすぐ着くはずだから、三人とも着替えた方がいいわ」

男の子を連れて、ハーマイオニーは颯爽と出て行った。

「君の兄さんたちってどこの寮なの？」

ぶつくさ言いながら杖をトランクに投げ入れたロンにハリーが聞くと、ロンは「グリフィンドール」と答えて見るからに落ち込んだ。

「パパもママもそうだった。もし僕がそうじゃなかったら．．．。スリザリンなんかに入れられたら、それこそ最悪だ」

イリスは心がざわつくのを感じた。スリザリン。自分の両親が入っていた寮だ。

「イリスの両親は、どこの寮だったの？」ロンは何とはなしに聞いた。

「．．．スリザリン」

「エッ、君のパパとママ、スリザリンだったの?!」

ハリーとロンは思わず驚きの声を上げた後、イリスの両親の写真を思い出した。優しいような微笑みを浮かべた二人は、とてもじゃないが闇の魔法使いには見えなかった。『例のあの人』に殺されたとも言っていたし。もちろん、イリスだってそうは見えない。

「スリザリンも全員が闇の魔法使いになるってわけじゃないみたいだし、君のパパとママは良い人だったと思うよ。それに君、全然スリザリンって感じしないけどな。優しいさだし、ぼんやりしてるし」

ばつの悪そうな顔をしたロンが、イリスをまたも傷つけてしまったと思っただけで慌ててフォローする。ハリーも寮の話から離れようと、話題を魔法使いの卒業後というテーマに変えた。そのうち話題はクイデイツチへと代わり、いつの間にかイリスは夢中で聞き込んでいた。

すると、またコンパートメントの戸が開き、男の子が三人入ってきた。

た。イリスは真ん中の子が誰だかすぐにわかった。ダイアゴン横丁であったドラコ・マルフォイだ。ドラコはロンの影に隠れた格好になっっているイリスに気づいていないようだった。強い関心を示した目でハリーを見ている。

「このコンパートメントにハリー・ポッターがいるって、汽車の中じゃその話で持ち切りなんだけど、それじゃ、君なのか？」

ドラコは自分の両脇を固めている二人（両方がつちりした体形で、意地悪そうな笑みを浮かべている）を紹介したあと、ハリーに自分の名前を言った。ロンがくすくす笑いを誤魔化すかのように咳払いすると、ドラコがそれを見咎めた。

「僕の名前が変だとしてもいうのかい？君が誰だか聞く必要もないね。パパが言ってたよ。ウィーズリー家はみんな赤毛で、育てきれないほど子供がいるってね」

「ドラコ、そんな言い方ないよー！」

あんまりな言い方に、イリスは立ち上がって抗議した。ハリーとロンは、マルフォイをファーストネームで呼んだイリスを、ぎよつとした目つきで見た。ドラコはイリスに初めて気が付くと、眉をひそめてこう言った。

「イリス、どこにもいないと思っただらそんなところにいたのか。なぜ僕のコンパートメントに来なかつたんだい？あの時、僕は君に色々教えると言っただろう。さあ、一緒に来るんだ」

ドラコが目配せすると、クラップとゴイルがイリスに向かって一歩踏み出したが、ハリーとロンがすぐさま立ち上がって間に入る。「行かせないぞ！」ロンが威嚇したが、ドラコは動じなかった。

「どけよ、赤毛のウィーズリー。彼女はお前なんかじゃなく、僕といえるべきなんだ。」

・・・ポッター君、魔法族にも家柄の良いのと、そうでないのがある。間違っただけは付き合わないことだ。僕が教えてあげるよ」

ドラコはハリーに手を差し出して握手を求めたが、ハリーは応じず、冷たくドラコの誘いを断る文句を言い放った。

☆



ハリーたちとドラコたちは、売り言葉に買い言葉の応酬の末、今にもお互いに殴りかからんばかりに気が立っていた。

一方、蚊帳の外のイリスは、全身に汗をびっしょりかき、ハリーの後ろでおろおろとしながらパニック状態に陥っていた。おつとりとした気質の彼女にとつて、喧嘩や言い争いは世界で一番苦手で嫌いなものと言っても過言ではない。

一触即発状態のこの場をまるく治めるためにどうすればいいのか、必死に考えていると、ふと未開封の百味ビーンズの箱が目に入った。イリスの脳裏に、ハリーたちと楽しく盛り上がった記憶がよみがえる。イリスは百味ビーンズの箱を掴んで、無我夢中でハリーたちとドラコたちの間に割って入った。

「ほらほら、みんな！喧嘩しないでさ、百味ビーンズの味当て合いつこゲームでもしようよ！色んな味があつて面白いよ！」

☆

白々しい空気が流れた。誰も百味ビーンズに見向きもしなかった。ハリーに「君は後ろにいて！」と片手で押しやられ、窓際に追いやられたイリスは、窓の外に流れる穏やかな景色を眺めた。

外の世界は平和でいいなあ。イリスは思った。イリスがわずかな時間、現実逃避している間にも、ハリーたちの言い争いは激化し、ついに爆発寸前まで来てしまった。

「僕たちとやるつもりかい？」ドラコが馬鹿にしたようにせせら笑い、「いますぐ出ていかないならね」とハリーが返す。

「出ていく気分じゃないな。ここには食べ物もあるし、イリスもいる。出ていくのは君たちの方だろうか？」

不意にゴイルが恐ろしい悲鳴を上げた。・・・なんと、ぐっすり眠りこけていたはずの、ねずみのスキヤバースが指にくらいついていたのだ。ゴイルは悲鳴を上げながら、スキヤバースをぐるぐる振り回し、やがて窓に叩きつけたあと、三人とも足早に退散していった。

イリスは慌ててスキヤバースを助けに行った。両手ですくうように持ち上げたスキヤバースをロンが覗き込む。

「スキヤバース、大丈夫かなあ？ノックアウトされちゃったみたい」

「ちがう・・・驚いたなあ。また眠っちゃってるよ」

あれほど強い力で窓に叩きつけられたはずなのに、スキヤバーズは何食わぬ顔で本当に気持ちよさそうに眠っていた。三人はほっとして、床に散らばる菓子片を片付け始めた。

「君、マルフォイと友達なの？」風船ガムの包み紙を丸めながら、ハリーがイリスに聞いた。

「うん・・・」

イリスはハリーとロンに、ダイアゴン横丁で会った話をした。ルシウスと自分のお父さんが友達だったこと、そしてクリスマス休暇に誘われていたこと。

「悪いことは言わない、あの家族と付き合わない方がいいよ。僕、あの家族のことを聞いたことがある。」

『例のあの人』が消えた時、真っ先にこつち側に戻ってきた家族の一つなんだ。魔法をかけられたって言ってたらしいけど、僕のパパは信じないって言ってた。マルフォイの父親なら、闇の陣営に味方するのに特別な口実はいらなかったろうって」

ロンの忠告を聞いて、イリスは暗い気持ちになった。ドラコとも、きつとハリーやロンのように良い友達になれると思ったのに、彼はよく知りもしないロンを家柄だけで蔑み、自分の言うことを聞かないハリーを敵視した。もしルシウスが、ロンの言う通り本当に悪い魔法使いだとしたなら、彼が友達だと言っていた自分の父は、一体どんな人だったんだ？イリスは、いつの間にか、また来ていたハーマイオニーとロンが言い争っていても、上の空だった。

「着替えるから出て行ってくれないかな？」

ついに耐えかねたロンが、ハーマイオニーにしかめっ面で言い放つと、ハーマイオニーは小馬鹿にしたような声でロンに何か言い返してから、中に入って来てイリスの手を取った。

「あなた男の子みたいなの恰好してるけど、女の子でしょ？私のコンパートメントで着替えたなら？」

そう言っつて、イリスがまだうんともすんとも言わないうちに、イリスの着替えのに入った袋（すぐ着替えられるようトランクの上に出して

いた)を勝手に持ち出し、イリスの手を引いてコンパートメントから出ようとして、振り返った。

「あなたの鼻、泥がついてるわよ。・・・ここにね」

ロンのハーマイオニーに向けた怒りの目線をひしひしと背中に感じながら、イリスは窓の外を見た。ホグワーツにまだ着いてもないのに、イリスはもう日本へ・・・イオのところへ帰りたくなっていた。汽車は徐々にその速度を落とし始めていた。

## File 6. 組分け帽子

ハーマイオニーのコンパートメントには、先ほどの『ヒキガエル探しの男の子』が座っていた。男の子はイリスを見て驚いていたが、ハーマイオニーに「今からこの子が着替えるから、少し席を外してほしい」と言われると、何度も頷きながら慌てて戸を開いて出て行った。イリスはハーマイオニーから袋を受け取ると、窓際の席に腰を下ろして着替え始める。

「気を使わせちゃって、ごめんね。あの子にも後で謝つとかないと」「あら、気にする必要はないわ。私だって着替える時、ネビルに席を外してもらったもの。・・・ごめんなさい、貴方あの子の名前まだ知らなかったわよね。ネビルって言うのよ。ところで貴方のご両親ってマグル？それとも魔法使いなの？」

ハーマイオニーは戸付近の席に座るや否や、好奇心に目をきらきら輝かせ、イリスに向けて矢継ぎ早に質問を始めた。しどろもどろになりながらイリスは答えるが、その様子は友達との楽しい会話というよりは、まるで教師と授業についての質疑応答をしているようだった。やがて質問に答えるのに集中しすぎたイリスの手が完全に止まってしまったのを見ると、ハーマイオニーは呆れたようにため息を一つ零して、マントのひもをきれいに結ぶのを手伝ってくれた。

「ありがとう、ハーマー・ミ・オミー」

イリスは舌がもつれて、ハーマイオニーの名前を正しく発音することができなかった。日本育ちのイリスは、イオのスパルタ教育の賜物で日常会話には支障がないレベルの英語能力を有してはいるが、どうしても一部、慣れない又は発音しづらい名前や言葉がある。『ハーマイオニー』はその一つだった。しまった、と思って恐る恐るハーマイオニーの顔を見ると、やはり彼女はキツと厳しい表情をして突っ込んできた。

「どういたしました。でも、私の名前は、ハー・マイ・オニーよ。人の名前はちゃんと覚えないと、相手に対して失礼だわ」

「ご、ごめん・・・」

イリスは、一刻も早くハーマイオニーの元から去りたかった。無事着替え終わったことだし、ハリーとロンのところへ戻りたいが、それを言い出すとまた怒られるかもしれない。ハーマイオニーに謝った後、居心地悪そうにもじもじしていると、まもなくホグワーツに到着するという旨の車内放送が流れた。思わずお互いを見合ったハーマイオニーとイリスの顔に緊張が走る。イリスが着替え終わったと聞いて、戻ってきたネビルの顔はもつとひどかった。

☆

汽車はますます速度を落とし、やがて停車した。降り口はどこも混んでいて、イリスは他の生徒たちと押し合いへし合いしながら、暗くて小さなプラットフォームに降り立つ。外はいつの間にか夜の帳が下りていて、暖かかった列車内との温度差にイリスは思わずぶるぶると身震いし、マントをきつく体に巻き付けた。列車の窓から差し込むわずかな光と、不安そうにざわめく生徒たちのおぼろげな輪郭の他は、辺りは冷たい空気をはらんだ闇に包まれている。気づけば、ついさっきまで近くにいたはずのハーマイオニーやネビルの姿も見当たらない。イリスは震えながらじつと待った。

やがて生徒たちの方へ、ゆらゆらとオレンジ色に光るランプが近づいてきた。イリスの耳に懐かしい声が聞こえてくる。

「イツチ年生！イツチ年生はこっち！ハリー、元気か？」

ハグリッドだ。見知った人物を見つけて、イリスは不安な気持ちや和らいでいくのを感じた。ハグリッドはランプの明かり越しにでもわかるくらい、につこり笑って、先頭の列にいるハリーに話しかけていた。ハリーだ。隣にはロンもいる。イリスは今すぐにも友達の方へ行きたかったけれど、位置的に自分はどうかやら最後尾の方にいるようだし、あまり騒いでドラコたちに見つかるのも嫌だったので、大人しくすることに決めた。

☆

ハグリッドの誘導に従って、生徒たちは険しくて狭い小道を降りていく。両脇には木が鬱蒼と生い茂っており、周囲は真っ暗な上、ハグリッドが持つランプの他に明かりはない。道もぬかるんでいて危な

いので、イリスも含めみんなしやべらず、足元を注視しながら黙々と歩いた。

そのうち、みんなが歩を進める単調な音の他に、鼻をすする音が頻繁に聞こえてくるのに気付いた。それも自分のすぐ横からだ。イリスが視線を向けると、音の主は『ヒキガエル探しの男の子』だった。「大丈夫、風邪ひいた？うわつとと・・・ネビルだっけ？ハーマ・ミ・オニーから聞いたよ」

イリスは地面から男の子へ視線を向けた拍子にぬかるみに足を取られそうになり、慌てて崩れかけた体の重心を取り戻しながら、話しかけた（そしてまたハーマイオニーと言えなかった）。男の子は俯いていた顔をちらつとイリスへ向けて、自信のなさそうなか細い声で答えた。

「大丈夫だよ、少し寒かっただけ。・・・君・・・ごめん、もう一回名前聞いても良い？」

「イリス・ゴントだよ」

「僕、ネビル・ロングボトム」

それからネビルとイリスは、地面を睨みつけつつ、どちらかが転びそうになってはどちらかが助け起こしつつ、お互いの身の上話をポツポツしながら歩いた。

☆

「みんな、ホグワーツがまもなく見えるぞ」

どれくらい歩いただろうか。ハグリッドの声にずっと俯いていた顔を上げると、角を曲がったとたん、狭い道が急に開けて、大きな黒い湖のほとりに出た。

「うわあ・・・！」

イリスは思わず感嘆の声を上げた。湖の向こう岸に高い山がそびえ、その頂上に壮大な城が見えた。小ささまざまな塔が立ち並び、キラキラと輝く無数の窓が星空に浮かび上がっている。ネビルや他の生徒たちも、湖の先の城を見て次々に歓声を上げていた。

「四人ずつボートに乗って！」

ハグリッドの指示で、みんな岸边につながれた小舟を目指した。そ

の時、イリスの両肩を背後から誰かががちり掴んだ。

「捕まえたー！」

悪戯っぽい笑みを浮かべたハリーとロンだった。三人はまだ空いている小舟へ向かい、ハリーとロン、続いてイリスと、少し遅れてネビルが乗った。生徒たちが全員乗ったことを確認すると、小舟に一人乗ったハグリッドが号令をかける。すると船は、一斉に城を目指して滑り出した。

イリスはそびえたつ巨大で荘厳な城を眺めていた。せつかくハリーたちに会えて嬉しかったけれど、緊張で気持ちが高ぶり、言葉が出ない。それはハリーたちも同じようで、みんな黙って黒々とした湖面や輝く城を見ている。

向こう岸の崖に近づくと、城が頭上にのしかかってきた。

「頭、下げえー！」

ハグリッドの指示でみんな一斉に頭を下げる。小舟の集団は崖下のツタのカーテン、次いで城の真下と思われるトンネルをくぐると、地下の船着場に到着した。イリスはハリーに手を貸してもらいながら、岩と小石だらけの岸辺に降り立った。

「ホイ、お前さん。これ、おまえのヒキガエルかい？」

全員下船した後、忘れ物がないか小舟内を調べていたハグリッドが声を上げ、ネビルに発見したヒキガエルを引き渡した。ネビルは大喜びで受け取り、「よかったね」とイリスが言う嬉しそうに頷いた。

生徒たちは、再びハグリッドの先導に従って、ごつごつした岩の道を通り、湿った滑らかな草むらの城影の中にたどり着いた。いざ城の近くに来てみると、本当に大きい。イリスは今まで見たどの建物より大きいんじゃないか、と思ったくらいだった。みんなは石段を登り、巨大な檜の木の扉の前に集まった。ハグリッドは最後にもう一度生徒たちの数を確認した後、城の扉を三回叩いた。

☆

重厚そうな扉は思いのほか軽々と開き、エメラルド色のローブを来た厳格そうな黒髪の魔女が現れた。

「ご苦労様、ハグリッド。ここからは私が預かりましょう」

マクゴナガル先生は扉を大きく開けた。玄関ホールはとてつもなく広く、表面の磨きこまれた石壁が松明の炎に照らされ、天井はどこまで続くかわからないほど高い。壮大な大理石の階段が正面から玄関へと続いている。

マクゴナガル先生について生徒たちは石畳のホールを横切って行った。大勢のざわめきが聞こえる方ではなく、ホールの脇にある小さな空き部屋に向かって進む。部屋は本当に狭かったので、イリスは他の生徒たちと寄り添い合いながら立ち、不安げにマクゴナガル先生を見上げて待った。

マクゴナガル先生はまず、生徒たちにホグワーツ入学のお祝いを告げた。

「新入生の歓迎会がまもなく始まりますが、大広間の席につく前に、皆さんが入る寮を決めなくてはなりません。寮の組分けはとても大事な儀式です。ホグワーツにいる間、寮生が学校での皆さんの家族のようなものとなります。

寮は四つあります。グリフィンドール、ハッフルパフ、レイブンクロー、スリザリンです。それぞれ輝かしい歴史があつて、偉大な魔法使いが卒業しました。ホグワーツにいる間、皆さんのよい行いは自分の属する寮の得点になりますし、反対に規則に違反した場合は寮の減点になります。学年末には、最高得点の寮に大変名誉ある寮杯が与えられます。どの寮に入るにしても、皆さん一人一人が寮にとって誇りになることを望みます」

マクゴナガル先生は、準備が整うまで身なりを正して静かに待っているように言うと、身なりが整っていない一部の生徒に一瞥をくれたから、部屋を出て行った。イリスは髪の毛が跳ねていないか、服装が乱れていないか、慌てて確認した。・・・大丈夫そうだ。

「いったいどうやって寮を決めるんだろう」ハリーがロンに聞いた。「試験のようなものだと思う。すごく痛いつてフレッドが言っただけで、きつと冗談だ」

「試験・・・？どうしよう。私、教科書すら読んでないよ」

三人は蒼白な顔を見合わせた。みんな儀式が気になり過ぎてあま



り話もしなかったが、ハーマイオニーだけは、今まで覚えた全ての呪文を早口で呟いていた。

「さあ行きますよ。組分け儀式がまもなく始まります」

マクゴナガル先生が戻ってきた。心の準備が一切できていないまま、イリスは生唾を飲み込んで、みんなと一緒に進んだ。イリスはハリーの後ろを歩き、その後ろにロンが続く。部屋を出て再び玄関ホールに戻り、そこから二重扉を通って生徒たちは大広間に入った。

☆

そこは、不思議ですばらしい光景が広がっていた。無数の蠟燭が空中に浮かび、四つの長テーブルを照らしている。テーブルには在校生たちが出席し、一列になって進むイリスたちを興味深そうに見つめている。テーブルの上には、蠟燭の光を受けてキラキラ輝く金色の皿とゴブレットが等間隔に並べられていた。広間の上座にはもう一つ長テーブルがあつて、そこには教授方が座っている。マクゴナガル先生は上座のテーブルのところまでイリスたちを引率し、在校生の方に顔を向け、教授方に背を向ける格好で横一列に並ばせた。

もうだめだ。イリスは緊張の余り、頭が真っ白になっていた。喉もカラカラに乾いている。前を見れば何百人という在校生が自分たちを面白そうに見ているし、後ろからは教授方の静かな視線を感じる。これこそ小学校で習った日本のことわざ『前門の虎、後門の狼』だ……。進退窮まったイリスが、すがるように天井を見上げると、ピロードのような黒い空に星々が輝いていた。小学校の課外授業で訪れたプラネタリウムでしか見たことのない『天の川』も流れている。

「本当の空に見えるように魔法がかけられているのよ。『ホグワーツの歴史』に書いてあったわ」

イリスが思わず見とれていると、すかさずハリーの隣に立っていたハーマイオニーが教えてくれた。

☆

マクゴナガル先生が目の前に四本足のスツールを置くのに気付いて、イリスは慌てて視線を魔法の空から地上へ戻した。先生は続け

て、椅子の上に魔法使いのかぶる『とんがり帽子』を置いた。それはつぎはぎのボロボロでも汚かったけれど、一年生も在校生も教授方も、みんな帽子に注目した。一瞬、広間は水を打ったように静かになった。すると帽子が動き始めた——つばのフチの切れ目がまるで口のように開いて、帽子は朗々とした声で歌い出した。

自分は組分け帽子というもので、かぶることで生徒の適性や資質を見出し、一番適した寮へ導くことができる、帽子は歌った。そして、四つの寮の特性も説明してくれた。勇猛果敢なグリフィンドール、忍耐強いハッフルパフ、学びのレイブンクロー、狡猾なスリザリン。

歌が終わると広間にいた全員が拍手喝采した。イリスも数秒遅れたものの、力いっぱい拍手した。四つのテーブルにそれぞれお辞儀して、帽子は再び静かになった。大広間に静けさが戻ると共に、イリスは急に不安になった。確かに帽子をかぶれば良いだけの簡単な試験のようなだが、自分は勇敢でもないし、忍耐強くもないし、勉強好きでもないし、狡猾でもない。『四つのうち、どこにも思い当たる寮がない子が行く五つめの寮』はないだろうか。ロンがフレッドに小声で文句を言っているのをイリスが聞き流していると、マクゴナガル先生が長い羊皮紙の巻紙を手にして進み出た。

「ABC順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組み分けを受けてください」

「アボット・ハンナ！」

金髪のおさげの少女が転がるように前に出てきた。帽子をかぶると腰かけ、一瞬の沈黙の後、「ハッフルパフ！」と帽子が叫んだ。

右側のテーブルから歓声があがり、ハンナはハッフルパフのテーブルについた。

みんな、次々と呼ばれていっては、自分の所属することとなった寮のテーブルへ駆けていく。イリスが、自分のファミリーネームの頭文字が『G』だと思い出す間にも、組み分けの呼び出しは容赦なく進んでゆき、『G』の次が『A』だと思い出した時、

「ゴイント・イズモ・イリス！」

呼ばれてしまった。カチコチになりながら椅子に向かって進む。

もはや足の感覚がない。よろけながら、ふらふらと椅子に座る。帽子がイリスの目の上に落ちる直前に、広間中の人々が自分を見ている中、・・・スリザリンのテーブルに座る在校生の何人かが、自分を見ながら真剣な表情で何事か呟いているのを見た。

帽子の中は暗闇に閉ざされ、外のざわめきは一切聞こえない。不思議と心が落ち着いて、イリスは両手を祈るように組んでじつと待った。

「フーム」低い声がイリスの耳の中で聞こえた。

「難しい。勇敢な心を持っている。困難に耐えうる心も。良い師がいれば、あらゆる知識は君の頭に吸収されるだろう。才能もある。目的のためならば手段は択ばない、か。・・・さてさて、どの寮に入れたものかな・・・」

イリスはさすがに褒め過ぎだと思った。先ほど帽子が言った言葉は、何一つ自分に当てはまらない。てんで見間違いだ。

「・・・見間違いか、いいや、そんなことはない。私は、君が今まで知らない、君自身の秘められた資質と可能性を見ている。君は確かに、私が言った通りのものを有しているのだよ。・・・さて、私の見立てによると、君にはスリザリンが最も適しているようだ。君はスリザリンに行けば、偉大な魔女になれるだろう」

イリスは不安と失望で、心臓がぎゅつと締め付けられるように痛んだ。自分はきつと両親のように強い心で生きていくなんてできない。誰かに何かを強要されれば、絶対に流されてしまおうだろう。・・・恐怖に怯えるイリスの脳裏に、あの日のイオの顔が浮かんだ。そしてその言葉も。

『環境ではなく自分の心で決めるんだ』

イオは決してイリスにできないことを言わない。だったらこの言葉だつてそうなんじゃないか？イリスは自分に言い聞かせた。自分ができるかと思っただけだ。

それに、イオは『何か辛いことがあれば、何としてでも連れて帰ってやる』とも言ってくれたじゃないか。たとえスリザリンでも、どんな寮に入っても、一生懸命自分にできることを頑張つて、それでも無

理だったら帰ればいい。自分には帰る場所があるのだ。イリスが決意を固めていると、帽子は満足気な笑みを含んだ声で高らかに叫んだ。

「・・・フム、君が勇気をもってそう決断したならば、スリザリンよりもむしろ・・・グリフィンドール！」

帽子を取られたとたん、まばゆい外の光と歓声がイリスを包んで、思わず身が竦んだ。

「よく頑張りました。さあ、お行きなさい」

見上げると、帽子の先をつまんだマクゴナガル先生がイリスに向かって優しく微笑みかけていた。イリスは椅子から立ち上がり、グリフィンドールのテーブルに向かった。スリザリンではなかった、という事実には拍子抜けして、何も考えることができなかった。空いている椅子に腰かけたイリスに、フレッドとジョージが近づいた。

「グリフィンドールへようこそ、兄弟。君の組分け、とんでもなく時間がかかったぜ」「なんと三時間だ。おかげで僕ら、腹ペコさ」

「えっ?!」

イリスが驚いていると、怒れる監督生パーシーがやってきて、双子を窘めてくれた。

「お前たち嘘を言うな！心配しないで。組分けに五分以上かかる『組分け困難』は、そう、たまにある事なんだ。・・・まあ、五十年に一度位だと言われている位たまにだけだね。ちなみに僕も実際に遭遇したのは初めてで、冷静に見えると思うけど内心は驚いてるし興奮してる。あと君の場合は三時間じゃなくて十六分だよ」

イリスはパーシーの言葉に思わず耳を疑った。そんな珍事なのか。十六分も座りっぱなしだったなんて。どうりで自分のお尻が痛いわけだと思った。

やがてハーマイオニーもグリフィンドールに決定し、輝く笑顔をこちらへ向けながらテーブルへやってきた。

「よかったね！よろしく、ハーマイオニー」

しまった、またやってしまった！ハーマイオニーも、先ほどのチャーミングな笑顔を引つ込め、じろりとイリスを睨む。

「ハーマイオニーよ。貴方、私の名前を何回間違えるの？わざとなの？」

イリスは必死に弁解した。自分は日本生まれで、どうしても発音しにくい言葉が一部ある、つまり決してわざとではないというようなことを。ふとイリスの頭に名案が浮かんだ。もつと呼びやすい感じの愛称で呼べばいいのだ。

「ねえ、ハーミーって呼んでもいい？」

「なんですか？」

「だから、ハーミーって呼んでもいい？ついさつき私の考えたハーミミ……うう、ごめん……君の愛称なんだけど。これなら噛まずに呼びやすいし」

ハーマイオニーはしばらく呆気に取られたようにイリスのことを見つめていたが、やがてふいとそっぽを向いて早口で言った。

「……私、あんまり愛称で呼ばれるのって好きじゃないし慣れてないの。でも仕方ないわね、貴方みたいな事情があるならしょうがないわ」

「よかった。ありがとう、ハーミー。これでいっぱい君の名前を呼べるよ」

安心して屈託なく笑うイリスは、ゆたかな栗色の髪に隠れたハーマイオニーの顔が夕焼けのように真っ赤に染まっているのに気づかなかった。

☆

組分けは順調に進み、やがてハリーの番になった。みんな静まり返る中、イリスはテーブルの下で両手を組んで祈った。ハリーは帽子をかぶり、やがてグリフィンドールに決まった。

「やったあー」

イリスは思わず立ち上がって喜んだ。最高の割れるような歓声が大広間を包み込む。ハリーを獲得することのできたグリフィンドールのテーブルは、いまやお祭り騒ぎ状態だ（反対に残りの寮はお通夜状態だった）。ハリーは、パーシーと握手をした後、真っ直ぐにイリスのところへやってきた。「君と一緒にじゃなかったら、どうしようかと

思ったよ」と弱々しく笑って、隣の席に腰を下ろした。

可哀想なことに、ロンは最後から二番目だった。だが無事グリフィンドールになり、イリスはハリーと一緒に手が痛くなるくらい力強い拍手をした。ロンは安堵して体の力が抜けてしまったようで、ハリーの隣に崩れ落ちるように座った。

☆

組み分けが全員終了すると、マクゴナガル先生は巻紙をしまい、帽子と椅子を引き上げた。上座の来賓席からダンブルドア校長が立ち上がり、優しい光を湛えた瞳で新入生たちを見つめた。

「新入生のみな、おめでどう！歓迎会を始める前に、一言・三言、言わせていただきたい。では、行きますぞー！それ、わっしょい！こらしよい！どっこらしよい！以上！」

ダンブルドア校長は席に着き、みんな拍手をして歓声を上げた。イリスもきつと魔法界特有のすべらないジョークか何かなのだと思つて、とりあえず拍手をした。何か良い匂いが鼻をかすめて、視線を下に向けて、・・・驚いたことに目の前にある大皿が食べ物でいっぱいになっている。さまざまな料理がテーブルに所せましと並んでいるのを目の当たりにして、イリスは自分がとびきり空腹で、喉もカラカラだということに気づいた。ゴブレットにジュースを注いで一息に飲み干してから、いそいそと自分の皿に少しずつ料理を取り、食べ始める。

お腹が満たされると、今度は強烈な睡魔が襲ってきた。結局列車でも少ししか眠れなかったし、今までの疲れがどつと来ているのをひしひしと感じる。食事中なのにはしたくない、と思うけれど、頭がしびれるような眠気は消えてくれない。テーブルに銀色のゴーストが現れた時、新入生の間でちよつとした騒ぎになったけれど、イリスは必死に眠気と戦っていたため、怖がりな彼女にしては珍しく無反応だった。

やがてみんなお腹いっぱいになると、今度はさまざまな種類のデザートが現れた。イリスは目覚ましのため、アイスクリームを山盛りすくって皿に入れていっていると、組分け帽子の話で盛り上がっている同級

生たちがイリスにも話題を振ってきたので、アイスを掻き込みながら自分の出来事を話して聞かせる。・・・冷たいものを大量に食べた時特有の頭痛をやり過ぎしたら、少しだけ目が冴えた。同級生たちの家族の話聞きながら、ハリーお勧めの糖蜜パイをかじる。

「痛っ！」

糖蜜パイを片付けたイリスがいちごに取り掛かっていると、急にハリーが顔を覆った。

「どうしたの？」

びつくりしたイリスが問いかけると、ハリーは「なんでもない」と言って、パーシーに来賓席にいる先生について尋ね始めた。イリスも何となく来賓席の方へ視線を向ける。ハグリッドに、ダンブルドア校長、マクゴナガル先生の他は、知らない先生ばかりだ。

——その時、紫色のターバンをした先生と話していた、ねっとりとした黒髪に鉤鼻の、土気色の顔をした先生が、視線に感じたのか、会話を中断してイリスを見た。イリスがあっと思った時には、もうお互いに見つめ合っていた。やがて先生の方からゆっくりと目を逸らし、その後、彼は二度とイリスの方を見なかった。

☆

最後にデザートも消え、ダンブルドア校長が立ち上がった。諸注意の後、ホグワーツの校歌をみんなで歌い、それぞれの寮の監督生について寮へ戻ることになった。

イリスは今までの人生で最高に眠い、と確信していた。体が鉛のように重い。ポルターガイストのピーブスに熱烈な歓迎を受けながらも、パーシーに続いてみんな廊下をぞろぞろ進み、突き当りの大きな肖像画（ピンクのドレスを着た太った貴婦人が描かれており、生きているみたいに動いている）に合言葉を言うと、画が動いて大きな穴が現れた。

穴はグリフィンボールの談話室につながっていた。温かみを感じる円形の広い部屋には、ふかふかとした素材の肘掛け椅子がたくさん置いてある。

パーシーの指示で、女子は女子寮に続くドアから、男子は男子寮に

続くドアからそれぞれ入ることになった。ドアの前で、ハリーとロン、そしてイリスは別れることとなった。

「今気づいたんだけど、君、女の子だったんだね」

まじまじとイリスの制服姿を見ながら、ロンが大変失礼なことを言った。

「君も男の子だったらよかったのに」

「私もそう思うよ」

ハリーの言葉にイリスはがっかりしながら答えた。もし自分が男の子だったら、ハリーやロンと寝るときも一緒にいられたのに。二人におやすみを言ってから、女子寮に続くドアを開けようとする、ぷりぷり怒ったハーマイオニーがやってきた。

「なんてデリカシーのない言葉なの！ 気にすることないわ、イリス」

☆

部屋の中に天蓋付の立派なベッドを見つけて、イリスは一目散にダブした。ハーマイオニーは隣のベッドに座り込む。体が深海へと沈んでいくような心地よさだ。今日は本当に疲れた。一旦体を起こして、最後の力を振り絞って寝間着に着替えると、再びベッドに倒れ込む。真紅のビロードのカーテンを閉めながら、ハーマイオニーがおやすみと言ってくれた。

「おやすみ、ハーマイオニー」

イリスはそう言うと、ゆっくりまぶたを閉じ、夢の世界へ入り込んでいった。



## File 7. 最悪の金曜日

翌朝、イリスは実に爽やかな気分が目覚めた。いよいよ自分の新しい学校生活が始まるのだ。ルームメイトのハーマイオニーたちに朝の挨拶をしてから、イリスは制服に着替え、身だしなみを整えてから朝食を取りに大広間へ向かった。

イリスの舞い上がった気持ちは、大広間に繋がる扉に寄りかかるようにして不機嫌そうな表情で立っているドラコ・マルフォイを見た途端、急降下していった。

「おはよう、イリス。．．．少し話がある。来てくれ」

ドラコはどうやらイリスを待ち伏せていたようだった。早足でイリスに近づくと、その手を取って大広間とは反対方向へ歩き出す。

大広間のざわめき声が囁き声程度になる位の距離を歩いた頃、やつと彼は立ち止まり、イリスの手を離れた。そこは人気のないどこかの階段の踊り場だった。イリスは慌てて周囲を見渡すが、どうやらホグワーツ特急で会った二人組はいないようだ。人気のない場所で、初日の朝から三人掛かりでタコ殴りにされるのか、とひやひやしていたイリスは、一先ずほっと胸を撫で下ろす。一方のドラコは、イリスの首元に結ばれた真紅色のタイを見て、忌々しそうに舌打ちをした後、ため息を零した。

「話というのは、君の寮のときさ。イリス、どうして君はスリザリンを選ばなかったんだ？ 組分け帽子は君にスリザリンを勧めていたんだろう？」

イリスは驚いてドラコを見上げた。組分け帽子にスリザリンに入られそうになったという話は、昨晚一部のグリフィンボール生にか打ち明けていない筈なのに。ドラコは気取った様子で言った。

「フン。なんで分かったのか、って顔をしてるね。上級生から聞いたが、組分け困難は非常に珍しい事だそうだ。君の噂話が、グリフィンボール生からスリザリン生である僕の方にまで回ってきたのも珍しいことじゃないさ」

まるで君のことは何でもお見通しだ、と言われたようだった。どう

やら、ドラコは組分け帽子の言う通りにスリザリンを選ばなかった事を怒っているらしい。

「どうしてスリザリンを選ばないといけなかったの？」

「スリザリンは、高貴な純血の者のみが入る事を許される特別な寮だ。他の三つの寮とは格が違う。君はその資格があつたのに、それを自ら手放した。愚かとしか言いようがないね。．．まさかとは思うが、スリザリンに行きたくなかつたのか？」

．．ん？イリスは首を傾げた。頭の中に疑問が生じたからだ。

ハグリッドやロンからは、スリザリンは『闇の魔法使いを輩出する寮』と聞いたが、ドラコは『高貴な純血の者のみが入ることのできる寮』と言つた。『純血』とはつきり言う辺り、選民思想が強い寮なのだという事が窺い知れるが、両者とも嘘を言っているようには思えない。純血の魔法使いはワルになりやすいのか？そう言えばドラコの質問に答えてなかつた。

「ドラコには申し訳ないけど、私、スリザリンにはその．．（悪い話を聞いたからとは言えなかつた）行きたくなかつたんだよ。．．えつと、『例のあの人』もスリザリンだったんでしょ？だから、怖くなつちやつて。」

結果的に組分けは帽子にお任せする感じになつたけど、私はグリフィンドールで良かったと思つてる。ドラコとは別れちやつたけど。友達もいるしね」

ドラコは、馬鹿にしたように鼻を鳴らした。

「やつぱり、君は何にもわかっちゃいないんだな。それに君の友達つて、あの英雄ポッターや貧乏ウィーズリーのことだろ？あの目立ちたがりの馬鹿達にはグリフィンドールがお似合いさ。．．ハッ、今頃ポッター様は、皆の注目を浴びてさぞかし良い気分で朝食をお召しになつているだろうね」

「ハリーとロンは優しくして良いやつだよ。人のことをよく知らないのに、そんな風に悪口を言うのは良くないと思うよ」

友達を馬鹿にされたと感じて憤つたイリスがたしなめるように言ううと、ドラコは露骨に顔をしかめて壁際にいるイリスに一步詰め寄つ

た。

「悪口じゃないさ、本当のことだろ？君は僕に指図する気かい？」

イリスもイリスで負けていない。ここでドラコに力づくで丸め込まれてしまったら、ハリーやロンに申し訳が立たないと、自分を奮い立たせる。

「たとえ本当のことでも、さっきのドラコの言葉は人を傷つけようとする悪意があるよ。それにこれは指図じゃない。友達の悪いところを指摘しちゃいけないの？」

ドラコはイリスの『友達』という言葉を聞くと、一瞬狼狽したような様子を見せたが、すぐ腕組みをして見下したような目でイリスを一瞥した。

「・・・ああ、いけないね。僕の友達は、僕の言うことに従わなければならない」

「そんなの友達じゃないよ。良いことでも悪いことでも、何でも言い合えるのが友達でしょ」

イリスとドラコの意見が合わないのは当然のことだった。二人の育った環境があまりにも違いすぎるためだ。

イギリスの魔法界において、最大級の名家の一つであるマルフォイ家。その一人息子であるドラコは、庶民育ちのイリスのように、友達を自分の意志で自由に選べるわけではない。ドラコの友達は常に『家柄』で選ばれる。自分と同等、もしくは自分より上位に位置する者。そういった選ばれたごく一部の子供がドラコの友達となり、それ以下の者は、友達という名を冠した取り巻きになるか、場合によっては取り巻きになる事すら許されぬ。そうしなければ、上流階級としての誇りと尊厳が保たれぬと、両親や周りの者に教育されてきたのだ。

ドラコにとって、イリスの言うような『何でも言い合える友達』は理解することのできないものだった。ドラコの周りの友達たちは、少なからずみんな彼を通してマルフォイ家を見ていた。自分の不用意な発言や行動が、ドラコの気分を害してしまったら、自分の家族に迷惑が掛かる。必然的に友達たちは——ごく一部の上位の家柄の友達を除いては——自分の気持ちを押し込めて、ドラコの意見に従うよう

になる。大勢の人々に囲まれてはいるが、自分自身を見てはもらえない。誰に気兼ねする事無くのびのびと愛されて育ったイリスとは反対に、ドラコは孤独に育ったのだった。

イリスとドラコが『友達論』について言い争っていると、どこから聞きつけたのか、監督生パーシーが制止の声を上げながらこちらへ向かってくるのが見えた。イリスにはパーシーが天使のように見えたが、ドラコは違うようだった。苦々しげにパーシーを見ると、「まあいい、せいぜいあの連中と下らない友達ごっこをしてればいいさ」と捨て台詞を吐いて去って行った。

☆

ドラコはパーシーをやり過ぎした後、大広間に戻り、仏頂面で朝食を食べていた。クラブとゴイルが自分を心配そうに見ていたが、「かまうな」と片手を振ってあしらう。

パパはなんで、あんなやつ面倒を見るっていうんだ？ ウィンナーにフォークを力任せに突き立てながら、ドラコは父との会話を思い出していた。

八月の終わり、ドラコは急に父の書斎へ呼び出された。そして『イリス・ゴーント』という少女に関する簡素な情報（イリスは純血の魔女で、マグル界育ちのスクイブを親代わりとして育った。イリスの父はルシウスと親友だった、という二点のみ）が伝えられ、彼女と『友達』になりなさいと言われたのだった。尊敬する父に認められたくて、ドラコはイリスに友達になろうと手を差し伸べた。だが、イリスはその手を握っておきながら、他の友達のようにドラコに従う様子を一向に見せない。それでいて、他の友達のように何か含みのある瞳ではなく・・・真っ直ぐな瞳でドラコを『友達』だと言ったのけたのだ。

——生意気だぞ、イリス・ゴーント。

父がイリスを特別気にかけていたから、自分も強い興味を示し、どんな子かと期待して接してみたが——話せば話すほど腹が立つ。いくら純血でもマグル界でスクイブに育てられた彼女は、父には言えないがドラコにしてみれば取り巻きにも値しない、友達以下の存在だった。

今まで僕の友達はみんな僕に従ってきた。それなのに友達以下のお前が、僕に逆らった挙句、『友達』だと・・・？お前と僕は同等じゃない。僕の方が上、支配する立場なんだ。それを思い知らせてやる。ドラコは狙いを定めた蛇のような目で、グリフィンドールのテーブルでのんきに目玉焼きをつつくイリスを睨んだ。

☆

ドラコと喧嘩した日から、数日が経過した。そのたった数日の間に、イリスはホグワーツに冗談抜きで殺されそうになっていた。

まず、教室を探すところから命がけだった。ホグワーツは百を超えるさまざまな特性を持つ階段があり、扉も色々、頼みの綱のゴーストや肖像画の人物もしょっちゅうお出かけしているので、毎回道を聞くこともできない。扉や階段を運良くかいくぐっても、まだ悪戯好きのポルターガイスト・ピーブスや、管理人のフィルチ、彼の飼い猫ミス・ノリスが刺客として立ちはだかつてくる。

教室に着いたら着いたで、今度は授業についていくのが大変だった。小学校では多少勉強ができなくとも許してもらえたが、ホグワーツではそうはいかなかった。薬草学、変身術、呪文学、天文学、魔法史・・・もちろん全てが今まで習ったことのない内容ばかりで、おまけに英語だ。

結局、どの授業でも開始時間ギリギリ（途中で迷子になるため）で滑り込み、どの先生にも毎回一度は注意を受け、授業の内容どころか、時には英語のスペルすら間違えるイリスを見かねて、ハーマイオニーが彼女に声を掛けた。

「私、きつとホグワーツに向いてないんだよ」

闇の魔術に対する防衛術でクイレル先生に、提出したレポートの誤字脱字が多すぎますと注意を受けた後、涙ぐむイリスの手を取り、ハーマイオニーは言った。

「大丈夫よイリス。これからは私と一緒に行動しましょう。勉強も全部私が教えてあげるわ」

かくしてイリスは、ハーマイオニーと行動を共にするようになってた。ハーマイオニーは毎日の予習・復習が何より大事なのだと説き、

イリスに付きつきりで勉強を教えた。おかげでイリスは授業の内容を少しずつ理解する事ができたし、授業が始まる十分前には教室にたどり着けるようになり、授業中に注意を受ける回数も激減した。

——ただ、問題が一つあった。ハーマイオニーはロンの事を全面的に嫌っていたので、彼女がそばにいる時はハリーやロンと仲良くする事ができないのだ。必然的にイリスはハーマイオニーと勉強三昧の日々を送らねばならなくなり、元々勉強好きではない性質が祟って日を追うごとにやつれていった。

☆

初めての魔法薬学の授業を終えた後、ハーマイオニーが早目に昼食を切り上げて図書室へ自習に向かったため、久々にハリーとロン、イリスの三人は大広間で仲良く昼食を取ることができた。

「おつどろろきー。君、あいつのこと、『ハーミー』なんて呼んでるの?」  
「最近付き合いが悪いよ」と二人に突っ込まれ、イリスがハーマイオニーとの事を話すと、ロンが吐きそうな顔をして言った。

一方のハリーは、イリスを心配そうに見やった。最近のイリスは元気がない。ハーマイオニーとの勉強に根を詰め過ぎているのか、目に輝きがなく、よく見れば目の下にうつすら隈も出来ている。ハリーの心配をよそに、イリスはうつろな表情で何を食べようか、テーブル上の料理を見定めていた。——当然の事ながら、日本料理はない。

英語も勉強もホグワーツも英国料理も、全てもう、うんざりだ。イリスは急に全部投げ出したくなった。日本に帰りたい。つまるところ、ホグワーツに来て一週間も経たないうちにホームシックに罹っていたのである。イリスは散々迷ってから、ミンスパイを掴んでロンをたしなめた。

「ロン、ハーミーは良い子だよ。ハーミーがいなかったら私、きっと教室すらたどり着けてない。・・・ただ、ちよつと最近疲れたかな。勉強のし過ぎで吐きそう」

「何か気晴らしでもしたら?」

ハリーがイリスのゴブレットに紅茶を注いでやりながら、提案した。ロンが名案を思い付いたとばかりに、パチンと小気味良い音を立

てて指を鳴らす。

「そうだ、チェスは？魔法使いのチェスだよ。僕が教えてあげる」

「チェス？…二人に言っておくけど、私、これ以上、ほんのちよびつとだつて頭を使うようなことしたくない」

毅然とした態度で、恥ずかしがる事無くきっぱり言ってみせたイリスに、ハリーとロンは飲んでいた紅茶を吹き出しそうになった。

「ワーオ。君、結構すごいこと言ってるぜ…自覚ないと思うけど」  
イリスの無理難題に、二人は食事の手を止めてしばらく考え込む。やがて再びロンが思いついたようで、イリスに向かってテーブルから身を乗り出した。

「そうだ、蛙チョコのカードを集めるのなんてどうだい？あれ単純だけど結構はまるよ。君、箱を開けて、中からカードを取り出して、写真を見たり文字を読むことくらいはできるよね…？」

イリスはぼんやりと Hogwartz 特急での出来事を思い出した。ハリーと一緒にダンブルドア校長のカードを見たっけ。楽しい記憶が頭の中に広がり、疲弊したイリスの心は少し和らいだ。

「…うん。それならできそうかも」

「じゃあ決まりだ。蛙チョコ交換会もあるし、僕と一緒に行こう。もしかぶったカードがあれば、僕の手持ちと交換してあげるよ」

『蛙チョコのカード集め』という勉強以外の楽しみができて、イリスに少し笑顔が戻った。うきうきしながら生クリームをたっぷり付けたスコーンを頬張っていると、ハリーが話しかける。

「ねえ、この後、ハグリッドのところへ行かない？」

もちろん！と答えかけたイリスは、はたと思い出した。この後、自分は恒例のハーマイオニーとの勉強会があるのだ。イリスの笑顔は雪が解けるように儂く消えた。

「ごめん。行きたいのは山々なんだけど、ハーミーと魔法薬学の復習をしなきゃいけないの。ハリー、今日はスネイプ先生に意地悪されて疲れたでしょ。ハグリッドとゆっくりお話しして、気晴らししてきなよ」

疲れてるし、気晴らししなきゃいけないのは、僕じゃなくて君の方

なんじゃないか。ハリーは、喉まで出かかった言葉を飲み込んだ。

☆

次の週の木曜日は、飛行授業だった。グリフィンドールとスリザリンの合同授業なのが気にかかるが、それでもイリスは飛行学が楽しみでたまらなかった。箒で空を飛べるなんて！久々に浮足立った気持ちで、ネビルと囁り付きで聞いたハーマイオニー直伝の飛行のコツを頭の中で復唱しながら、ハーマイオニーと共に校庭へ向かう。

「楽しみだね、ハーミー！」

「ええ。でも、くれぐれも握り方を間違えちゃダメよ、イリス」

ハーマイオニーは飛行学だけは、本を読んで暗記してもどうにかなるものではないと理解しているためか、ピリピリと張り詰めた雰囲気纏わせていた。

スリザリン生はすでに到着していて、二十本の箒が地面に整然と並べられている。イリスはスリザリン生と対峙した時、此方を見ているドラコと少しの間見つめ合ってしまった。すぐにドラコの方からそつげなく目を逸らされたが、遅れてハリーたちがやって来て、イリスはハーマイオニーに見えないように小さく手を振った。

授業は順調に進み、飛行学の先生であるマダム・フーチの指示で、みんな箒の横に立ち、右手を箒の上に突き出す。

『「上げれ！」という』

「上げれ！」

イリスは他の生徒たちと同じように叫んだけれど、何度叫んでも箒はピクリとも動かなかった。同じ状況の生徒が少なからずいたため、先生がどうしても上手くいかない場合は直接手に持って宜しいと許可をくれた。イリスは古ぼけた箒を拾い上げて持つ。

次に先生は、箒の端から滑り落ちないように箒にまたがる方法をやってみせ、生徒たちの列を回って箒の握り方を直した。——イリスは幸運なことに直されなくて、ほっとした。隣を見ると、ハーマイオニーが「私の教えた通りでしょ」と言わんばかりにウインクを見せていた。

「さあ、私が箒を吹いたら、地面を強く蹴ってください。箒を吹いたら



ですよ・・・一、二の・・・」

その時、突如として悲鳴が上がった。——ネビルだ。彼だけが先生が笛を吹く前に地面を蹴ってしまい、先生の制止の声をよそに、空中へ勢いよく舞い上がって行った。・・・四メートル、六メートル・・・ネビルは真つ青な顔で声にならない悲鳴を上げながら、箒からまつさかさまに落ちて・・・何かが折れたような嫌な音を立てて、うつぶせに草むらに着地した。

「ネビル！」

死んだ、確実に死んだ！イリスはパニックになりながら、自分の箒を投げ出して、ネビルの下へ駆け寄った。・・・良かった、息をしているみたいだ。すぐ先生も追いついて、ネビルの上に屈み込み、慎重に彼を調べた後、「手首が折れてるわ」と呟いた。

「この子を医務室へ連れていきますから、その間誰も動いてはいけません。さもないと、クイディッチの『ク』を言う前にホグワーツから出て行ってもらいますよ。」

・・・さあ、行きましょう。ミス・ゴント、一緒に手伝ってください

先生と共にネビルの両肩に手を回すと、ネビルはよほど痛いのか涙でグチャグチャの顔で、それでもイリスに「ごめんね」と何度も謝った。

「大丈夫だよネビル。早く医務室へ行こう」

医務室へ向かうイリスは、その様子をドラコが不愉快そうに睨みつけているのも、その後、ドラコとハリーが巻き起こす事件も知ることはなかった。

☆

ネビルの怪我は大した事はなく、煎じた薬を飲めば半日で治るようだった。安静に、というマダム・ポンフリーの指示で、ネビルをベッドに寝かせて苦い薬を飲ませる。一旦授業に戻るため出て行った先生の代わりに、イリスが暫くの間ネビルのそばにいたことになった。「ごめんね。君、飛行学楽しみにしてたのに。僕なんかのために、迷惑かけちゃったね。・・・僕、いっつもこうなんだ。どじばっかり踏ん

で、人に迷惑かけて」

ネビルが涙ぐむと、イリスはかぶりを振って、こういった。「大丈夫だよ、飛行学はまた来週もあるし。それにそんなこと気にしないで。私の方がネビルよりひどいよ。方向音痴だし、忘れっぽいし、勉強できないし、英語の綴りだって間違えちゃうんだよ」

「いいや、僕の方こそ・・・」

二人でしばらく悲しい傷の舐め合いをしていると、やがて耐え切れなくなったのか、ネビルが吹き出した。その様子を見たイリスも堪え切れず吹き出してしまう。

「ははっ・・・なんだか僕ら、似た者同士だね」

「ホグワーツ落ちこぼれコンビ、結成しちゃおう?」

それ以来、イリスとネビルは仲良くなり、友達になった。ネビルもロン程熱心ではないが、蛙チョコのカード集めをしていたので、蛙チョコ友達としても、勉強の片手間に語り合えるようになった。

☆

「えっ?!」「まさか!」

それはネビルの付き添いを終えた後の、夕食時の事だった。何やらピリピリとした雰囲気はまだに引き摺っている様子のハーマイオニーから避難するため、ハリーの席にあるローストビーフを取りに行くという名目で、二人のところへ行ったイリスは、ハリーからあの後の話を聞いて、ロンと共に叫んだ。なんでも、ドラコが投げたネビルの思い出し玉を、間一髪で空中キャッチしたハリーは、その神業をマクゴナガル先生に見初められ、最年少のシーカーに大抜擢されたというのだ。

「来週から練習が始まるんだ。でも誰にも言うなよ。ウッドは秘密にしておきたいんだって」

その時、双子のウィーズリーがやって来て、ハリーに小声で話しかけた。

「すごいな。ウッドから聞いたよ。僕たちも選手だ・・・ピーターだ」

「今年のクイディッチ・カップはいただきだぜ」

それから、二人はリー・ジョーダンの秘密の抜け道を見に行くのだ

と言って、去り際にフレッドの方がイリスの持つ山盛りにしたローストビーフに、ちょうどテーブルに置いてあったマスタード・・・ではなく、激辛ソースを皿から溢れる位大量に振りかけ、ジョージの方がイリスの髪の毛をぐしゃぐしゃに掻き混ぜてから、良い仕事をしたとばかりにお互いにハイタッチした後、笑って去って行った。

「わ、私のローストビーフちゃんが・・・!」

イリスが、双子の悪戯で激辛ソース塗れになってしまったローストビーフを、ぼさぼさ頭を直す事も忘れて悲しそうに見つめていると、今度はドラコが現れた。いつものようにクラブとゴイルを従え、絡みつくような言い方でハリーを煽る。

「ポッター、最後の食事はさぞかし美味だろうねえ?」

「地上ではやけに元気じゃないか、マルフォイ」

「喧嘩はやめよう、二人とも・・・」

イリスは二人の間に入り込みながら、ホグワーツに入学して以来、主にハリー・ロンVSハーマイオニーordラコの場合で、数えきれない位使用した『喧嘩はやめよう』という魔法の呪文を放った。

「こいつが先に吹っかけてきたんだ!」

「博愛主義者は黙っててくれ」

いつもの通り呪文は効かず、二人にピシヤリと撥ねつけられ、やさぐれたイリスが激辛ローストビーフをやけ食いしている間に、ドラコとハリーは魔法使いの決闘をする約束を取り付けてしまった。満足そうに去って行ったドラコを見ながら、イリスがロンに尋ねる。

「魔法使いの決闘って何?あと介添人って?」

「介添人っていうのは、もしハリーが死んだら代わりに僕が戦うっていう意味さ」

ハリーとイリスの顔色が真っ青になったのを見て、慌ててロンは付け加えた。

「死ぬのは、本当の魔法使い同士の本格的な決闘の場合だけだよ。君とマルフォイだったら、せいぜい火花をぶつけあう程度だよ。あいつ、きつと君が断ると思ってたんだ」

「でも危なくない?やめた方がいいよ」

「大丈夫だよ。君も来てくれるだろ？今夜十一時に談話室だ」

「ちよつと失礼」

三人が見上げると、ハーマイオニーが眉を顰めて三人を見下ろしていた。

「聞くつもりはなかったんだけど、あなたとマルフォイの話が聞こえちゃったの。夜、校内をウロウロするのは絶対にダメ。もし捕まったらグリフィンドールが何点減点されるか考えてよ。なんて自分勝手なの」

ハリーとロンは示し合わせたように互いに顔を見合わせ、肩を竦めた。「まったく大きなお世話だよ」ハリーが呆れたように言い返し、「バイバイ」とロンがとどめを刺す。

「喧嘩はやめよう、ほんとに！」

再び不穏な空気を感じたイリスは慌てて三人の間に割って入ろうとするが、「行きましょ」とハーマイオニーに手を引かれ、寮へと強制連行されてしまった。

「イリス！君、ちよつと八方美人が過ぎるぜ！」

去り行くイリスに向けたロンの野次は、彼女の心を蝕み、嵐を巻き起こした。

☆

次の日の朝、眠りから覚めてまぶたを開けると、急にきのこの絵がドアップで視界に飛び込んできて、イリスは驚いて飛び起きた。…どうやら約束の時間まで、ベッドに寝転がりながら『薬草ときのご百科』を読み込んでいる最中、疲れから教科書を顔に伏せたまま寝込んでしまったらしかった。約束していたのに、なんてことだ。ハリーとドラコの決闘はどうなったんだろう。

朝食を取りに大広間へ行くと、ハーマイオニーとハリー・ロンの仲は、昨日よりもずっと悪化していた。何があったのか分からないが、三人共ムスツとした表情を浮かべていて、イリスを見ても挨拶もしない。たつぷりとお互いに距離を空けて、黙々と朝食を食べている。

「お、おはよう！昨日はごめん、寝過ぎしちゃって」

イリスが真っ先にハリーたちのところへ謝りに行くと、二人はまず

勝ち誇ったようにハーマイオニーを見てから、イリスに昨日何があつたか興奮した様子で話して聞かせた。

約束の時間にハリーたちが談話室を抜け出そうとすると、ハーマイオニーが二人を止めようと待ち伏せしていて、口論になりながらも寮の外へ出ると、『太った貴婦人』が外出していたためハーマイオニーは寮に戻れず、結局三人で決闘の場へと赴く事になった。途中でネビルも加わり、四人でトロフィー室へ向かうが部屋はもぬけの空だった。ドラコの罫だったのだ。四人はドラコからの密告を聞いたフィルチに見つかりそうになり、逃げているうちにピーブスにもやられそうになり、間一髪のところまで逃げ込んだのが・・・なんと禁じられた四階の廊下だった。そしてそこには、身の毛もよだつような恐ろしい怪物・・・『三頭犬』がいたというのだ。

「あの犬はきつと、仕掛け扉の下にある何かを守っているのよ」

イリスがあまりに現実離れた話に息をのんでいると、ハーマイオニーが急に横槍を入れてきて、ハリーたちは心底面白くなさそうな顔をした。イリスは、その仕掛け扉の下に『この三人が仲良くできる秘訣』が守られているなら、今すぐにも危険を顧みず奪いに行くのに、と疲れた頭でぼんやり思った。

☆

その週の金曜日は、イリスにとって忘れられない『最悪の日』になった。

魔法薬学の授業で『かんしゃく止めの薬』を作る時、イリスは不注意から教科書通りにキイロキノコをすりつぶさず、そのまま鍋に入れてしまったのだ。ペアを組んでいたハーマイオニーが気づいて止めようとしていた時には、もう遅かった。

鍋の中身は一度真っ黄色に染まってから、ボールのように膨らみ、ボン！と音を立てて鍋から飛び出し、天井にぶつかった。勢い余って床に跳ね返り、次は壁、そしてあちこちの棚のものにぶつかり破壊しながら——まるでかんしゃくを起こしたように——キーキーとヒステリックな甲高い音を上げた。生徒たちは悲鳴を上げながら、慌てて机の下に逃げ込む。かんしゃく玉は最後に天井へ激しくぶつかり、爆

発して、教室中に黄色く粘度の高い液を盛大にまき散らした。

——爆発音の余韻が消えた後、教室内に恐ろしい沈黙が訪れた。やがてそれを破ったのは、自分の教室を滅茶苦茶にされて怒りに震えるスネイプ先生だった。芝居がかった動作で拍手をしながら、机の下に逃げることも忘れ、黄色い液まみれになつて茫然と突つ立っているイリスに近づく。

「実に素晴らしい出来栄えだ、ゴーント。皆、彼女に注目したまえ。グリフィンドールに点を与えなければ。あー……これは『何』だったかな？」

「……『かんしゃく止めの薬』です」

イリスは消え入りそうな声で答えた。出来ることなら今すぐ、かんしゃく玉のように弾けて消えてしまいたいと強く願つた。スネイプ先生がイリスの事を褒めていないし、点も与えるつもりではないことはイリスを含めてみんな理解できた。あまりにも先生が激怒していたため、グリフィンドール生はもちろん、スリザリン生もイリスをからかう者はおらず静まり返り、先生の挙動に注目していた。先生はイリスの答えを聞くと、冷たく嘲笑つた。

『薬』ではない『失敗作』だ。言葉は正しく発言しなさい。……ゴーント、毎週金曜日、七時に吾輩の研究室へ来たまえ。君に罰則と補習授業を取り行ふ。勿論今晚からだ」

スネイプ先生は、次いで「事前にどうして気づかず止めなかったのか」とハーマイオニーから一点減点した。イリスは目の前が真っ暗になつた。

授業が終わつた後、カンカンに怒つたハーマイオニーがイリスを責め立てた。

「あれだけ私が説明したじゃない。どうしてキイロキノコをすりつぶしてから鍋に入れなかったの？私までとばつちりを受けたわ。おまけに罰則と補習だなんて……私、何のために自分の時間を削つてまで貴方に……本当、信じられない！」

イリスはもう限界だった。自分の張り詰めていた心が、ハーマイオニーの言葉で粉々に砕け散るのを感じた。かあつと顔が熱くなり、視

界がぼやけたと思った途端、瞳からポロポロ大粒の涙が零れ落ちる。「うるさいなあ!!どうせ私はハーミーみたいに勉強できないし、落ちこぼれだよ!もう私のことなんて放っておいてよ!」

イリスは気が付けば、感情的にハーマイオニーに怒鳴っていた。あつと思つたけれど、飛び出した言葉は止められず、ハーマイオニーの心に深く突き刺さった。ハーマイオニーは瞳に涙を浮かべて、キツとイリスを睨みつけ、冷たく言った。

「・・・あら、そう。貴方が勉強できないから見てあげてただけけど、余計なお世話だったってことね。わかつたわ。貴方には、もう勉強は教えない。」

あともうハーミーなんて呼ぶのはやめてね。もう英語の発音は慣れたでしょ?」

ハーマイオニーはふさふさした栗色の髪を揺らして、振り返る事なく去って行った。騒ぎを聞きつけたハリーとロンが、慌てて飛んできて慰めてくれたが、イリスはその場にしゃがみ込んで泣き崩れてしまった。今まで我慢してきたことが全て溢れ出してきて、悲しくて悲しくて、どれだけ泣いても止まらなかった。

## File 8. スネイクの補習授業

あれから涙も枯れ果てて大分落ち着いた頃、イリスはハリーとロンに引つ張られるようにして大広間へと連行され、夕食を取っていた。イリスの失態は、授業で同席していた生徒たちから話のネタとして瞬く間に広がり、今ではレイブンクローやハツフルパフのテーブルでも、お喋りの合間にイリスを盗み見ては「あの子よ」等と囁く声が聞こえたりしていた。

「気にするな。すぐみんな忘れるさ」

ハリーがイリスを気遣ってくれたが、イリスの心はどん底に落ちたまま、一センチたりとも浮上する事が出来なかった。何しろどん底に落ちる要素が多すぎたのだ。まず魔法薬学の授業で『ホグワーツの歴史に残るほどの大失態』（赤毛の双子が嬉しそうにそう教えてくれた。ロンは嘘っぱちだと言ってくれたが）をやらかしてしまったし、そのおかげで補習をやる羽目になった。何よりも、日頃『喧嘩はやめよう』と口うるさく言っている自分が、ハーマイオニーと喧嘩してしまったのだ。おまけに今では、泣き虫の落ちこぼれとして周りの笑い者にもなっている。ハリーの気持ちはわかるが、気にしない方が難しいと言えた。

——あと数十分で七時になる。イリスは手元に置いた懐中時計の文字盤を、泣き腫らした目で見ていた。さつきからずつと「動くなー」と念じているにも関わらず、秒針は容赦なく時を刻んでいく。不意にテーブルの向かい側から手が伸びてきて懐中時計を取り上げ、パチンと蓋を閉めた——ロンだ。

「気持ちはわかるけど、何か食べた方がいいよ。もたないぜ」

「デザートでもいいからさ。ほら、プディングはどう？」

ハリーに勧められたプディングを無理やり口に押し込むが、何も味を感じられずイリスは愕然とした。まるで泥を流し込んでいるみたいだ。イリスは本日何度目になるか分からないため息をまた零してしまった。

「あと三十分で七時だぞ。準備をしなくていいのか？ 『泣き虫』イリ



ス

にやにやと意地悪い笑みを浮かべながら、ドラコがイリスのそばへやってきた。スリザリンのテーブルの同級生たちは、その様子を見て可笑しそうに笑っている。

「上級生に聞いたよ。スネイプ先生の補習授業なんて、余程の事がなければ聞いた事すらないってさ。良かったなイリス、大好きなグリフィンドールの株を上げたじゃないか。君の先輩方もさぞかし鼻が高いだろう。」

・・・あの時、君がスリザリンを選びさえすれば、こんなことにはならなかったんだ。僕が守ってあげられたし、補習なんか受けなくてすむように勉強も教えられた」

「やめろマルフォイ！」

ハリーとロンが勢いよく立ち上がり、テーブル越しにドラコを睨みつける。ドラコはそれを見てせせら笑った。

「じゃあお前たちが、スネイプ先生に補習を取りやめるよう、お願いしてみたらどうだい？ 僕ならできる。・・・フン、スリザリン生でもない君のために、する気はさらさらないがね。」

まあ今更、何をしたって遅い。一度決まった寮は変えられないからな。せいぜい頑張るといいさ。今夜のうちにグリフィンドールの点数を空にしてしまわないよう、気を付けるんだな」

ドラコはポンポンと軽くイリスの頭を叩くと、満足気な様子でスリザリンのテーブルへ戻って行った。ハリーとロンは、ドラコのされるがままになっているイリスを心配そうに見下ろす。いつもの『喧嘩はやめて』を言う気力すらないようだ。プディングは一口分しか減っておらず、スプーンを持ったままイリスは暗い表情で黙り込んでいた。

☆

七時前、イリスはスネイプ先生の研究室に向かっていた。研究室は地下にあり、石製の階段が薄暗い地下へと続いている。地獄への入り口みたいだ、とイリスは思った。生唾を飲み込んで、恐る恐る足を踏み出す。一段一段、足元を確認しながら降りる毎に、不安と恐怖で心臓がキリキリ絞られているような痛みを感じた。階段の先には重厚

な造りの扉があり、ノックすると「入れ」と言われたので、ノブを掴んで開き、中に入る。

「し、失礼します……」

そこは、陰気な雰囲気が漂う石造りの部屋だった。四方の壁には頑丈そうな木製の棚が作り付けられており、無数の薬瓶が一糸乱れず整頓されている。部屋の中央には大きな作業机が一つあり、その傍にスネイプ先生が立っていた。

スネイプはまず、イリスに補習授業の内容を伝えた。

「今宵は『かんしゃく止めの薬』を、君が教科書を見ずに出来るまで何度でも行おう。出来るまでは寮に帰れんと思え。その上で時間の余裕があれば……まあ、あるとすればの話だが……次の授業で扱う薬の予習を行おう。また失敗をしでかして教室を破壊されては堪らんかな。」

安心したまえ。この補習授業で君が何度失敗しても、減点はしない。もしその度に減点してしまったら、グリフィンドールの点数が今晚のうちに君一人のせいで無くなってしまうだろうからな」

先生はドラコと同じ事を言うのと、にやりと笑って見せた。安心しろと言われても、イリスは全く安心できなかった。確かに減点されないという点は寮に迷惑を掛けないから安心できるが、日頃教科書を穴の空くほど見つめていても間違えう自分が、そらで出来るまで補習を続けるなんて。解放されるのは、一体いつ頃になるんだ？イリスには想像が付かなかった。

スネイプが杖を振るうと、作業机の上に鍋や道具、材料が現れた。その中にキイロキノコを見つけ、イリスの胸がぎゅつと軋む。ハーマイオニーの事を思い出してしまったからだ。あの時、自分が彼女の言う通りすりつぶして入れてさえいれば、こんな事態にはならなかったんだ。イリスは自分を責めた。

☆

そして補習授業が始まった。まずは教科書を見ながら作れと言われ、見落としがないよう細心の注意を払いながら、イリスは作業を始める。背後からスネイプが覗き込み、イリスが何か物を動かしたり材

料を刻んだりする度に、馬鹿にしたように鼻を鳴らしたり、ため息をついたりするので、イリスは生きた心地がしなかった。その内、早鐘のように刻む心臓の音が先生に聞こえるんじゃないかとひやひやして、恐怖の余り手も小刻みに震え始めた。

そんな満身創痍の状態でも作業は何とか進んでいった。イリスがキイロキノコを教科書通りにすりつぶそうと乳鉢に入れた時、スネイプが「待て」と言った。

「キイロキノコをすりつぶすな。千切りに入れてなさい」

・・・え？イリスはスネイプと教科書を交互に見た。自分の聞き間違いかと思つて慌てて教科書を確認したが、教科書には『すりつぶせ』と明記してある。もしかして、先生が他の薬と間違えているのか？先生は教科書を見ながら作れと言つたし、また手順を間違つて、かんしゃく玉の悲劇を起こしてはならないと思い、イリスは恐る恐る手を上げた。

「すみません、先生。キイロキノコはすりつぶして入れると教科書に書いてあります」

イリスの言葉にスネイプは明らかに気分を害したようだった。土気色の顔が怒りに歪み、暗い色をした瞳がイリスを腹立たしげに睨みつける。

「私は千切りに入れて入れると言つたのだ、ゴント。同じ事を二度も言わせるな。吾輩は教師の忠告も聞かず、馬鹿の一つ覚えの様に教科書通りに作れとまで指示したか？教科書の内容は概ね正しいが、間違いや訂正するべき箇所はある。碌に教科書すら読めん貴様が下らん口答えをするな、グリフィンドール3点減点」

「すつ、すみません！」

しまった、やってしまった！イリスはキイロキノコをすぐさま千切りにして鍋に入れた。鍋の中身を教科書通りの手順で掻き混ぜる時、また注意されるのではないかとびくびくしていたが、スネイプはその後薬が完成するまで、ため息以外は何も言わなかった。

やがて鍋に完成の証である黄色い湯気が上がり、イリスは火を止め、フラスコに中身を移した。部屋の明かりに透かして見ると、フラ

スコの中にたんぽぽ色のドロドロした液体が詰まっている。教科書に書いてあった正しい完成品の色だ、良かった。イリスは今までのようにハーマイオニー監修の下ではなく、初めて自分自身の手だけで薬を作れた事が単純に嬉しいと感じた。これが補習授業ではなく通常の授業でも作れたら、もっと嬉しかったが。

「できました」と言ってスネイプに手渡すと、彼はチラツと目を細めて中身を確認した後、回収するのではなく……何故か、再びフラスコをイリスに差し出した。

「飲め」

「え？」

イリスは思いもよらない言葉がスネイプの口から飛び出してきて、思わず固まった。そんな間抜けな様子を見て冷たくせせら笑いながら、スネイプは言葉が続けた。

「君が成功作だと言ったのだ。心配するな、『かんしゃく止めの薬』は毒ではない……成功していればな。飲んでみるといい」

イリスは自分の作った薬入りのフラスコをこわごわ見た。先程まで可愛らしいたんぽぽ色だと思っていたが、急に恐ろしいものに見えてきた。でも、もたもたしてたらまた難癖を付けられて減点されるかもしれない。たとえ失敗作でも、たぶん死にそうになつたらさすがに先生が助けしてくれるはずだ、きつと。イリスは自分を無茶苦茶な理論で勇気づけ、最終的にもうどうにでもなれ！とやけっぱちになつて一息に飲んだ。

薬はとても苦く不味かったが（百味ビーンズの泥味と良い勝負だった）、程なくして、不思議な事が起きた。魔法薬学の授業以降、イリスの散々に荒れ果てていた気持ち、すうつと落ち着いたように感じられたのだ。その様子を確認したスネイプが、静かにイリスに言った。「今君が作った『かんしゃく止めの薬』の効能は、『一時的に抑えきれない感情の鎮静化』だ。君のその阿呆面を見るに、ある程度の効果はあったようだな。

杖を振るう類の魔法は、その者の資質や感情に左右される。だが魔法薬の場合、その心配は無用だ。君のような杖の振り方すら覚束ない

ウスノ口でも、魔法薬は手順さえ正しく踏んで作れば、その薬の冠した名称通りの素晴らしい効果を発揮する。君が望みさえすれば、やがて訪れる死にさえ蓋をする事が出来るだろう。・・・実に興味深いとは思わんかね？」

イリスは、頭の中に一陣の風が吹き抜けるのを感じた。スネイプを仰ぎ見ると、奥底に深い知性を宿した目でイリスを見ていた。それは今まで勉強に追い込まれるばかりで、目を向けてこなかった彼女が、スネイプの言葉に心を揺り動かされ、初めて勉強に興味を持った瞬間だった。

イリスはその後、『かんしゃく止めの薬』の作り方が夢に出てうなされる位、何度も頭に叩き込まれるまでやり直した。それに時間が掛かりすぎて予習は無しになったが、やっと解放されると言う顔をしたイリスに、スネイプは嫌味つたらしい笑顔を向けて罰則を命じた。内容は、上級生の授業のための材料の下準備だ。バケツ一杯分のうねうね動く生きたミミズを素手で掴み、まな板の上でみじん切りにしてボールに入れる。臭いし気持ち悪いし、イリスは吐きそうだったが、一方でこれはどんな薬に使われる材料なんだろう、と好奇心を持った（だが余計な事を聞いてまた減点されては堪らないので、黙々と作業を続けた）。

「先生、ありがとうございます」

無事罰則も終わり、イリスが一礼をしてから足早に研究室を去ろうと扉を開けると、追いかけてきたスネイプに開きかけた扉を大きな音を立てて閉められた。びっくりして見上げると、イリスの教科書を持ったスネイプが、怒りの形相で彼女を見下ろしていた。

「教科書を忘れるな、馬鹿者！グリフィンドール1点減点だ！」

☆

イリスが寮に戻れたのは、九時を大幅に過ぎた頃だった。何とか今日中に帰る事が出来たし減点も4点しかされなかった事にほっとしながら、誰もいない談話室を通り過ぎて部屋に戻ると、丁度お喋りをしていたルームメイトのラベンダー・ブラウンとパーバティ・パチルがイリスを気遣ってくれた。ハーマイオニーはチラリとイリスを見

るなり、目を逸らした。

「大丈夫だった？ 私たち、心配して待ってたのよ」

「いじめられたりしなかった？ 罰則は何だったの？」

「ありがとう。心配かけちゃってごめんね。罰則はミミズを刻む事だったよ・・・バケツ一杯の。おかげでずいぶん肩が凝っちゃった」

イリスの言葉を聞いた途端、二人は目を回し、「女の子にバケツ一杯のミミズを刻ませるだなんて、最低だわ！」等と、興奮した様子で口々にスネイプの悪口を言い始めた。イリスは、ベッドに腰掛け図書館から借りて来たのだろう分厚い本を読んでいるハーマイオニーにおずおずと近づく。今日の事を謝りたかったのだ。

「ハーミー、今日はごめんなさい。ひどいこと言っちゃって」

「・・・貴方、私の話を聞いてなかったの？ ハーミーって呼ばないでって言つたじゃない。もう話しかけないで、読書の邪魔だわ」

ハーマイオニーはイリスを一睨みし、謝罪をピシヤリとはねつけてから、再び本に目を戻した。その様子を見ていたパーバディとラベンダーが、悪口を中断して慌ててイリスに駆け寄り、談話室へと連れ出した。

「何よあの子！ 感じ悪いったらないわー！」

「あの子変わってるのよ。イリス、あなたはちゃんと謝ったんだもの。あとは放っておけばいいわ。それよりも私たち、ずつとあなたとお話ししたいって思ってたのよ。あなたと一緒にのお部屋なのに、あの子がべったりだったから、なかなか話せなかったんだもの」

そう言つて、二人は劳いの意味を込めてイリスに紅茶を淹れてくれた。それから周囲の迷惑にならないよう声をひそめ、十時過ぎまで三人で世間話に花を咲かせた。イリスは二人の気持ちが嬉しかったし、紅茶もとても美味しく感じられたけれど、ハーマイオニーの言葉が心の底に澱のように沈んで、心から深夜のお茶会を楽しむ事が出来なかった。

☆

イリスはハーマイオニーと絶交して以降、ハリー・ロンと一緒に過ごしていた。相変わらずドラコが絡んでくるけれど、その度に二人が

庇ってくれたし、とりわけハリーが今までの分を取り返すかのよう  
にイリスを離さなかったのだ。

ハーマイオニーとの勉強尽くしの毎日から解放された事は、イリス  
の心に多少の安寧をもたらした。しかし同時に、いつも心が針で刺さ  
れたようなチクチクとした痛みも感じていた。イリスはその痛みの  
原因が何かわかっていたけれど、気にしない振りをして過ごした。

ハリーはロンとイリスに、グリーンゴッツ銀行からホグワーツへ『例  
の包み』が移されたのではないかという事（イリスはハリーに「ダイ  
アゴン横丁へ君と一緒に行った時、ハグリッドが言ってたあの金庫の  
中身の事だよ。君も見ただろ？」と三回位言われてやっと思ひ出し  
た）を話し、それほど嚴重な警備が必要なものって何だろうと、大広  
間で三人であれこれ話し合った。

「ものすごく大切な、ものすごく危険な物だな」とロン。

「その両方かも」とハリー。

「大切に危険・・・ダイアモンドでできた爆弾かな？」とイリスがとん  
ちんかんにしめた。

結局、謎の包みについては五センチくらいの長さのものだろうとい  
うことしかヒントがないので、それ以上何の推測もできなかった。

そうしているうちに、ふくろう便の時間がやってきた。たくさんの  
ふくろうが大広間を飛び交う。イリスの下にも如何にも頑丈そうな  
ガタイの良いふくろうが一羽・・・日本でイオが飼っている『ウメ』  
だ・・・やってきて、イリスの手元に手紙をぼとりと落とした。

「ありがとう、ウメ」

ウメがイリスの皿からベーコンをつついているのを見守りながら、  
イリスは手紙を開けた。差出人は勿論イオだ。イリスはホグワーツ  
に入学して以来、イオへの定期的な近況報告を欠かさなかった。ただ  
国を隔てているため、二人の間には十日以上のずれがある。イオは  
ハーマイオニーとイリスが絶交したという事実をまだ知らない。実  
際にこの手紙は、ハーマイオニーという友達ができた事と勉強が大変  
という、十日程前に書いたものに対する返事だった。

『イリスへ』

ハーマイオニーちゃんは良い子そうで、よかったな。  
何か最近、手紙も愚痴ばかりだけど、大丈夫か？

悩んでるけど友達にも言えないこととかあったら、ハグリッドにでも相談しろ。

手紙よりも会って話した方が手取り早し、あいつはわたしのダチだ。信用できる。あいつにも手紙を送つといた。

わたしの手紙よりは、早く物事が解決できるはずだ。

じゃあな、またお前からの手紙、楽しみにしてるよ。

イオよ

り』

「おばさんからの手紙、なんて書いてあったの？」

ハリーの問いかけに、イリスが手紙を見せようとした時、六羽の大コノハズクが細長い包みを加えてハリーのところへやってきた事で、イオの手紙どころではない騒ぎになった。

後の『ニンバス2000事件』である（イリスが命名した）。

☆

それから二か月が経った。毎日たっぷり宿題がある上、毎週金曜日、全ての授業の中で一番気力と体力を使う魔法薬学の授業と補習授業（主に補習でのスネイプの『忠告』を、本授業で忘れないよう反映するのに必死だった）をこなしながら、イリスは忙しく過ごしていた。ハリーはあの事件以来、ニンバス2000を片手に週三回のクイディッチの練習に勤しんでいたため、イリスは自然とロンと一緒に過ごす事が多くなった。ロンだけでなく、ネビルやパーバティ、ラベンダーも声をかけてくれたので、有難い事に一人ぼっちになる心配はなかった。

イリスは勉強の面で、意外にもハーマイオニーなしで何とかやっていけている事に、心底ほつとしていた。少しずつ基礎が解り始めてきて、嫌で堪らなかつた勉強も次第に面白いと感じ始めていたのだ。現に今日の変身術の授業でも、ハリーとロンが『ボタンをクルミに変える理論』が理解できず、頭を捻っているのを見て、イリスが羊皮紙の空きスペースに解りやすく基本理論の図解を書き、二人に教えてあげ



る事が出来た。

「すごいな君、よくわかったね」

二人に尊敬の眼差しで見つめられる事が心地よく、イリスは誇らしげに胸を張った。

「当た　り　前　だ　よ。　だ　っ　て　こ　の　図　解　は、  
ハーミーに何度も教えてもらったもの」

・・・今、自分は何と言った？イリスははっとした。頭に電流のよ  
うな衝撃が走り抜ける。

今まで授業の内容を理解し上手くやれていたのは、ハーマイオニー  
が当初落ちこぼれ真つ盛りだった自分に、仲違いするまで付きつきり  
で勉強を教えてくれたからではないか？

二人が気まずそうにイリスを見るのを気にもせず、茫然とした表情  
で変身術の教科書をパラパラとめくる。今まで無意識に見ていたせ  
いで、気が付かなかっただけだった。どのページにも、ハーマイオ  
ニーに教えてもらった授業の理解に役立つポイントや間違えやすい  
綴り等が、ある時はイリスの丸っこい文字で、またある時はハーマイ  
オニーの几帳面な文字で、事細かに書いてある。・・・それは、イリ  
スとハーマイオニーが積み重ねてきた友情ときずなの証だった。

授業が終わった後、イリスは「忘れ物をした」と言うなり一人駆け  
出して、自分の部屋に戻った。トランクから自分の全ての教科書を  
引っ張り出し、確認する。全ての教科書に・・・驚いた事に、ハーマ  
イオニーがこっそり書き足していたのか、ページの終わりに至るま  
で・・・彼女の書き込みがあった。

そしてどの教科書にも、一番最後の真つ白なページに『お疲れ様！  
よく頑張ったわね。また来年も一緒に頑張りましょう』という彼女の  
メッセージが添えられていた。

恐らく、二人で仲良く一年の勉強を終えた後、最後にイリスがその  
メッセージを見る事を密かな楽しみにして書いたのではないか？・・・  
自分があの時、あんな酷い言葉を投げつけなければ、一年の終わり頃、  
二人一緒にこのメッセージを見て、お互いの健闘を認め合い、笑い合  
う事が出来たのだ。イリスはそう思った途端、視界がぼやけて、次々

浮かんで流れる大粒の涙を教科書に零れ落とした。

イリスは自分がしでかしたことの罪深さに打ちひしがれ、涙が溢れて止まらなかった。

☆

その日の夜、イリスはルームメイトの二人が寝静まった頃、勇気を出して読書中のハーマイオニーに話しかけた。話しかけずにはいられなかった。

「あのね、ハーミ・・・ごめん、ハーマイオニー・・・あ、言えた。あの、ごめんね、あの時は・・・」

ハーマイオニーはイリスの言葉を最後まで聞かないうちに、本を投げ出して布団を頭までかぶると、横を向いた。イリスを無視、拒絶したのだ。イリスは耐え切れなくなって、自分も布団に潜り込んで、声を押し殺して泣いた。悲しくて堪らなかった。その時、ハーマイオニーの布団からも静かな泣き声がしていたけれど、悲しみで一杯のイリスは気づく事が出来なかった。

## File 9. 最高のハロウィーン

ハロウィーンの日がやって来た。朝から廊下はパンキンパイの焼ける美味しそうな匂いで満たされているし、呪文学の授業ではフリットウィック先生が『物を飛ばす練習をしよう』と言いついで、生徒たちはみんな浮き立った気持ちになった。

先生は生徒を二人ずつ組ませて、練習をさせた。組は先生の指定のため、ハリー・ロン・イリスはそれぞれバラバラになった。イリスはネビルと、ハリーはデイーン・トーマスと、．．．そして何と、ロンはハーマイオニーと組む事になった(二人共これにはカンカンだった)。イリスが授業そっちのけでハラハラと二人を見守っていると、案の定二人は呪文の唱え方について口論となった。挙句の果てに、ハーマイオニーが『ロンへのお手本』として呪文を成功させ、先生に褒められたものだから、授業終わりのロンの機嫌は最悪以外の何物でもなくなってしまう。ロンは廊下の人込みを押し分けながら、しかめっ面で吐き捨てるように言った。

「だから誰だってあいつには我慢できないっていうんだ。まったく悪夢みたいなやつさ」

イリスがロンの言葉に息を飲むのと同時に、人込みの中から誰かがハリーにぶつかり、急いで追い越して行くのが見えた。

——ハーマイオニーだ。驚いたことに、泣いている。もしかして今のを聞かれてしまったのか？イリスは、自分の心臓と指先が、氷のように冷たくなっていくのを感じた。

「今の、聞こえてみたい」とハリー。

「それがどうした？誰も友達がいなくてことはとつくに気が付いてるだろうさ」

ロンは一瞬気まずそうな顔をしたものの、口は減らない。イリスは大好きな友達のロンが、——いくらハーマイオニーが嫌いとはいえ——心無い言葉が続ける事にショックを受け、涙ながらに怒った。

「ひどいよ、ロン！ハーマイオニーが泣いてるのに、なんでまだそんなことを言えるの?!」

「どうして君が怒るのさ？あいつとはもう友達じゃなくなっただんだけ？」

ロンはまさかイリスが怒るとは思わなかったようで、びっくりしてそう言った。イリスはその言葉に打ちのめされ、何も言えなかった。ハリーは二人をおろおろしながら見ている。

——そうだ、もう自分とハーマイオニーとは友達じゃない。

異変を察知したハリーが引き止めようとするが、イリスは振り払って駆け出した。——ハグリッドの小屋を目指して。

☆

イリスはハグリッドの小屋を初めて訪れた。ハリーとロンから聞いた通り、ハグリッドの小屋は『禁じられた森』の端にあった。戸口に石弓と防寒用長靴が置いてあるのを見ながら、力を込めてノックすると、中から凄まじい勢いで戸を引っ掻く音とブーンと唸るような吠え声が数回聞こえて来た。

「退がれ、フアング、退がれ」次いで、ハグリッドの大声が聞こえた。間もなく戸が少し開いて、隙間からハグリッドの大きな髭もじやの顔が現れ、イリスを見るとにっこり笑った。

「おお、イリス！随分と久しぶりだな。え？今ちょうど、お前さんに手紙でも送ろうかと思つたところだったんだ。イオから『話を聞いてやれ』って、手紙をもらったもんでな。

・・・で、何かあったのか？」

イリスはハグリッドの飾り気のない陽だまりのような笑顔を見て、イオの笑顔を思い出し目頭が熱くなった。

「どうしようハグリッド・・・喧嘩しちゃったんだ・・・友達と・・・」  
そう言った切りボロボロ泣き出したイリスを見て、ハグリッドは狼狽する余り小屋の中のを色々蹴飛ばしながら——中に招き入れたイリスをとりあえず落ち着かせるために——片手で『フアング』と呼んだ巨大な黒いボアールハウンド犬の首輪を抑えつつ、もう一方の手のみでお茶の準備をせねばならなかった。

「落ち着いたか？」

「うん」

やがて涙も枯れ果て、イリスはハグリッドに貸してもらった水玉模様の大きなハンカチで、思いつきり鼻を噛んだ。

小屋の中は一部屋だけだった。ハムやきじ鳥が天井からぶら下がり、部屋の隅には巨大なベッドがあり、パッチワークのキルトカバーがかけられていた。部屋全体が暖かな空気で満たされており、イリスは一瞬でここが好きになった。ちなみにフアングはハグリッドが少し手を緩めた拍子に、イリスに向かって駆け出し、「泣くなよ」と言っている風に彼女の頬を大きな舌でペロペロ舐め始めた。ハグリッドは焚火にかけられたヤカンから、大きなティーポットにお湯を注ぎ入れ二人分の紅茶を作り、ロックケーキを皿に載せイリスの座るテーブルに出し、自らもゆっくりと腰かけた。

「さ、お代わりもある、どんどん食って飲め。．．．それで、どうして喧嘩なんかしたんだ？」

イリスは事の顛末を話した。ハーマイオニーと仲違いしてしまった経緯、呪文学の授業後ロンが彼女の悪口を言い、彼女がたまたまそれを聞いて泣きながら去って行ってしまった事。

「私、わがままだった。自分のことしか考えてなかった。魔法薬学の時だって、ハーマイオニーが怒って当然のことをしちやっただのに、そのことを棚に上げて彼女に八つ当たりしちゃった。

．．．最低だよ。それに今頃気づいたんだ。どんなにハーマイオニーが私のことを助けてくれたのだったかということも」

「お前さんは、ハーマイオニーと仲直りしたいのか？」

ハグリッドの問いに、イリスは何も言わず、こくんと頷いた。

「でも．．．謝ったけど、ダメだった。今じゃもう、口もきいてくれないよ」

「イリス、そこで諦めちゃなんねえ。本当に仲直りしたいんならな。喧嘩した後、反省して謝っても相手に無視されたりするのは、子供同士の喧嘩じゃ、まあ良くあることだ。．．．本当は相手も仲直りしたいと思うが、意地を張って素直になれんのか。」

肝心なのは、そこからもう一步、踏み出す勇気だ。相手が話してくれるのを辛抱強く待って、お互いに腹を割って話せば、きつと仲直り

できる」

「もしそれでも口をきいてくれなかつたら？」

膝に顎を載せたフアングを撫でながら、不安そうな表情で見上げるイリスに向け、ハグリッドは悪戯っぽくウインクして見せた。

「悪戯しちまえ。何てつたつて今日はハロウインだからな。悪戯の仕掛け方は、ウィーズリーんとこの双子にでも聞いたらええ」

ハグリッドの言葉に、イリスは思わず笑った。少し気持ちも軽くなったような気がした。

「ありがとうハグリッド。私、もう一回チャレンジしてみる」

フアングはイリスの言葉を聞いた途端、その大きな顔を上げて「その意気だ！」と言っているように、尻尾をふりふり一鳴きした。ハグリッドはイリスが帰る時、ハーマイオニーと仲直りできたら食べるようにと、山盛りのロックケーキをバスケットに入れ、紅茶入りの水筒と一緒に持たせてくれた。イリスは戸を開けた後、振り返ってハグリッドに言った。

「私一人だけの時でも、またここに来てもいい？」

「もちろんだ、いつでもいいぞ。何なら泊りに来てくれたっていい。お前さんが来てくれて、俺は本当に嬉しいよ」

ハグリッドは我が子を見るような慈愛に満ちた笑顔を浮かべ、フアングと共にイリスを送り出した。

☆

ロンの言葉に傷ついたハーマイオニーは、その後の授業も無断欠席し、大広間で行われているハロウイン・パーティーに出る事すらも忘れ、一人きりで女子トイレの個室に籠もり、泣いていた。泣いても泣いても、涙が止まらない。ルームメイトのパーバティが慰めに来てくれてたけれど、「一人にして」と追い払ってしまった。なんて素直じゃないの。ハーマイオニーは自分を呪った。本当は一人になんかなりたくないのに。

ハーマイオニーの両親は歯医者だった。いずれは自分も医師になるのだと、ハーマイオニーは物心ついた時から勉強を頑張り始めた。その内に、彼女は勉強が大好きになっていった。世界中のあらゆる知

識を取り入れていく度に自分の世界が広がっていく。それは本当に素晴らしい事だと感じたし、彼女は満ち足りていた。

だが、彼女が勉強にのめり込んでいくにつれ、彼女の友達は一人、また一人と去って行った。彼女は自分と同じように友達も勉強が好きに違いないと思つたし、勉強ができない子には、学ぶ事の素晴らしさを教えてあげようと積極的に関わりを持った。しかし、彼女より勉強ができない者からは敬遠され、彼女と同等、それよりも勉強ができる者は、彼女をライバル視した。

結局、ハーマイオニーはイギリスのスクールで、周囲の大人たちから秀才だともてはやされはするものの、クラスでは馴染めず一人ぼっちだった。だから、ホグワーツから手紙が来た時、彼女は何より喜んだのだ。『魔法界』という全く新しい世界の知識を得る事が出来るし、マグル界では上手く行かなかつたけれど、魔法界なら今度は友達も出来るかもしれない。心が躍り、両親が納得するまで彼女は一生懸命説得した。

イリスが『ハーミー』と呼んでくれた時、ハーマイオニーはときめく胸を抑える事が出来なかつた。友達が自分を愛称で呼んでくれるなんて、それこそ生まれて初めての事だったのだ。これから自分の輝かしい学校生活が始まるに違いない、ハーマイオニーは確信した。実際、イリスと過ごす日々は有意義で素晴らしいものだったし、おまけにイリスは勉強ができなかつたので、大切な友達の力になりたいとハーマイオニーは彼女に一生懸命勉強を教えた。・・・しかし、ハーマイオニーの思いは空回りし、イリスは次第に彼女から距離を置き始めた。

やっぱり、居場所なんてなかつた。どこに行っても私は一人ぼっちなんだわ。ハーマイオニーは薄暗いトイレの個室で鼻をすすりながら、イリスの事を思い出していた。自分のプライドが傷つけられカツとなつて、つい感情的に怒鳴ってしまったせいで、失ってしまった唯一の友達の事を。

イリスはその後二回も謝つて来てくれたのに、ハーマイオニーは仲直りしたいと思つてはいるものの、一向に素直になる事ができなかつ

た。一回目の時は、パーバティたちと同じようにイリスを心配して待っていたけれど、自分を差し置いてパーバティたちと仲良く話すイリスに嫉妬して、冷たい言葉を投げつけてしまった。二回目の時は、ハリーやロンと仲良く——自分と一緒にだった時よりも——楽しそうな笑顔を浮かべているイリスに腹が立ち、どうしていいかわからなくなつて、彼女の謝罪を拒絶してしまったのだ。

自業自得だわ。ハーマイオニーは自嘲するように笑った。こんな自分じゃ、友達ができる筈もない。この世の中に、自分の理解者は誰もいないのだと思つた。

その時、微かな足音が聞こえた。それは徐々にこちらへ近づいてきて、やがてハーマイオニーのいる個室の足元に、二つの影が差した。誰かが、自分の個室の前に立っている。やがてその誰かは、随分控えめなノックをしてから、おずおずと話しかけてきた。

「・・・ハーマイオニー。久しぶり、イリスだよ。今日はハロウィーンなんだって。出てきて、一緒にごちそうを食べようよ」

その声は、ハーマイオニーの冷え切つた心に、暖かな日の光の如く染み込んでいった。

☆

イリスはハグリッドの小屋を出た後、ハーマイオニーを探した。彼女の居場所は意外な事にすぐ見つかった。パーバティが教えてくれたのだ。いざ女子トイレに向かうと、ハーマイオニーがどの個室にいるのかすぐに分かった。一つだけ鍵が掛けられていて、そこからすり泣く声がしていたからだ。イリスは、なけなしの勇気を振り絞り、ノックして話しかける。絶対無視されると踏んでいたが、なんとハーマイオニーはしゃくり上げながらも返事をしてくれた。

「・・・あっちに行つてよ。一人にして。貴方も、他のみんなみたいに、思つてるんでしょ。私の事・・・悪夢みたいだつて」

ロンの顔が脳裏に浮かび、イリスは慌ててかぶりを振つた。

「そんなこと思つてないよ！ハーマイオニーは悪夢なんかじゃない、良い所ばかりだよ！賢いし、勉強もできるし・・・えつと・・・勉強もできるし、賢いし・・・！」



おい、それだけしか言えないのか！イリスが腹立ちまぎれに自分を往復ビンタしていると、ハーマイオニーは暗い声で答えた。

「・・・ね、それだけよ、しよせん私なんて。いくら勉強ができて、今まで友達なんてできなかったことなかったわ。ずっと一人だったから、人に対して言っちゃいけないこともわからなくて、思ったことは全部口にしちゃうの。それで人を傷つけちゃうのね。・・・貴方の時みたいに。私、きつと、死ぬまで誰とも理解し合えずに、一人ぼっちのままなんだわ」

「ハーマイオニーは一人ぼっちじゃないよ。私がいるよ！・・・あの時は本当に、本当に、ごめんさい。私、君と仲直りしたいから、ちゃんと話し合いたいんだ。お願いだから出てきてよ。」

ねえ、どうしてもトイレから出たくないっていうなら、ハグリッドからもらったロックケーキと紅茶があるんだ。私が今からハーマイオニーの分を放り投げるからさ、上手にキャッチして。ここで一緒にお茶しようよ」

ハーマイオニーは再びすすり泣き始めた。それはイリスの温かい言葉に対する喜びの涙だったが、イリスはまたハーマイオニーを傷つけてしまったと思って、頭を抱えなくなった。

☆

その時、イリスは妙な音が聞こえるのに気付いた。低いブアーブアーという唸り声、巨大な足を引き摺るようにして歩く音。徐々にこちらへ近づいてくる。続いて、強烈な異臭が鼻を突いた。汚れた靴下と、掃除をしたことのない公衆トイレの匂いを混ぜたような、強烈な匂いだ。・・・この匂いの犯人は、今のところ一人しか見当たらなかった。

「・・・ひとが真剣な話をしてるのに、用を足すのはどうかと思うよ、ハーマイオニー」

「失礼ね、私じゃないわ！」

異変に気付いたのは、イリスだけではなかった。重量感のある足音は勿論の事、泣き過ぎて鼻が詰まってしまったハーマイオニーにも、その凄まじい異臭は感じる事ができたのだ。突っ込みを入れなが

らも、扉を開けたハーマイオニーの目に飛び込んできたのは、女子トイレの出入口を間の抜けた表情で見つめているイリスと、出入口に立っている：・四メートルはあるかという、醜悪なトロールの姿だった。ハーマイオニーは恐怖の余り、全身の毛が逆立った。

「うわー、ホグワーツのハロウィーンの仮装って、結構本格的なんだねー」

「仮装なんかじゃないわ、本物よ！逃げなきゃ！」

トロールは二人の声が癪に障ったのか、手にした巨大な棍棒を握り、唸り声を上げながら詰め寄ってきた。ハーマイオニーが、まだ状況が飲み込めていないイリスの頭を無我夢中で抑えつけ、二人一緒にその場に伏せる。少し遅れて、トロールの棍棒が二人の頭があったところを通り過ぎ、横の洗面台を粉々に破壊した。

イリスは頭が真っ白になった。二人共、腰が抜けて立ち上がる事ができない。ハーマイオニーと手を取り合いながら、イリスは奥の壁際へと這いずって逃げた。トロールは洗面台を次々となぎ倒しながら、二人の下へにじり寄っていく。

再び棍棒が振られ、二人は咄嗟に左右に散った。二人が丸ごと入るくらい大きな穴ぼこを床に空けた後、トロールは洗面台の下に身を隠したイリスではなく、戸の破壊された個室に飛び込んだハーマイオニーの方へ視線を向けた。ハーマイオニーが殺される。イリスは頭に血が昇って、洗面台の下から弾丸のように飛び出した。

「わあああああ!!」

震えるハーマイオニーに棍棒を振り下ろそうとしたトロールに、イリスは無我夢中で飛びかかり、その頭にしがみついた。トロールがうっとうしそうに首を振ると、イリスはあつという間に吹っ飛ばされ、瓦礫だらけの床に背中から投げ出される。

「こつちだ、このポンコツ!!」

再びハーマイオニーに向かおうとしたトロールに、イリスはバスケットからロツクケーキを取り出して、次々つぶてのように投げ始めた。トロールの関心をハーマイオニーから遠ざける。この一心で、イリスはトロールに対する恐怖も、投げ出された痛みも何も感じなかつ

た。

最後にバスケットと水筒まで投げてしまうと、トロールはいよいよ怒り狂ったようにこちらを向き、突進してきた。慌てて出口へ向かって逃げ出そうとした時、イリスは滑って床に倒れてしまった。その数秒の間にトロールはイリスへの距離を詰め、下から斜めに振りかぶった拍子に個室の扉を破壊しながら、棍棒を振り上げた。

あ、死んだ。とイリスが思った途端、凄まじい衝撃が全身を襲い、通路の半ばから出口付近の壁までの距離を吹っ飛んだ。どうやら巻き込まれた扉の破片がクッションとなってくれたおかげで大きな怪我は免れたようだが、全身を壁に強く打ったため、動けない。——咳き込むイリスの視界に、トロールが容赦なく近づいてくるのが見えた。

——半狂乱になったハーマイオニーが、金切声でイリスの名前を叫びながら、こっちへ這いずって来ようとしている——でも間に合わない。ダメだ、死んでしまう……。

「こっちにひきつける！イリス、生きてるか?!」

「やーい、ウスノロー！」

その時、すぐ傍の出入口の扉を荒々しく開けて、ハリーとロンが飛び込んできた。助けに来てくれたのだ。二人はまず目の前にいるトロールとハーマイオニー、次いですぐ隣に倒れたイリスを確認して目を見開き、再びトロールを恐怖と憎しみと怒りの混じった目で睨みつけた。ロンがトロールの関心を引いている間に、ハリーがイリスに手を貸し、立ち上がるのを手伝ってくれた。

「ハーマイオニー、走れ、走るんだ！イリスと一緒に逃げろ！」

ハリーはそう叫ぶと、ロンに襲い掛かろうとするトロールの首根っこに組み付いた。ハリーの持つていた杖がトロールの鼻の穴を突き上げ、痛みに悶えるトロールはハリーを振り放そうと躍起になっている。その隙に、ロンが無我夢中で杖を振り上げ、呪文を唱えた。

「ウイン・ガーディウム・レヴィオーサー！」

突然、棍棒がトロールの手から飛び出した。——ロンの呪文が成功したのだ。棍棒は空中を高く上がり、ゆっくり一回転してから、ボクツという嫌な音を立てて持ち主の頭の上に落ちた。トロールはふ

らふら体を不安定に揺らしたかと思うと、ドサツと音を立てて、その場にうつ伏せに伸びてしまった。倒れた衝撃が部屋中を揺すぶった。

四人共、荒い呼吸を繰り返すだけで、しばらく何も喋れなかった。

「これ・・・死んだの？」やっとハーマイオニーが口火を切った。

「いや、ノックアウトされただけだと思う」

ハリーが冷静に言うと、屈み込んで、吐きそうな顔をしながらトロールの鼻から自分の杖を引っ張り出した。杖にはべっとり灰色の糊のようなものが付いている。

「ウエー、トロールの鼻くそだ」

「オエツ・・・ちよつとハリー、気持ち悪いこと言わないでよ」

「だって本当のことだろ？」

ハリーがトロールの服で杖を拭いながら、いつもの調子が戻って来たイリスと軽口を叩き合っていると（ロンは自分の杖を見ながら、ハーマイオニーはトロールに視線を釘付けにしたまま、茫然と突っ立ったままだった）、急にバタバタと忙しない足音が四人の耳に飛び込んできた。

足音は真つ直ぐこちらへ向かってきて、やがてマクゴナガル先生、スネイプ先生、クイレル先生が駆け込んで来た。クイレル先生はトロールを見た途端、弱々しい声を上げて床に座り込んでしまった。マクゴナガル先生は、蒼白な表情で唇を引き結び、ハリーとロンを見据える。スネイプ先生はすぐさまトロールを覗き込んだ後、鋭い視線でハリーを、次いでイリスを見た。クイレル先生はともかく、二人の先生が自分たちに対して怒り狂っているという事はイリスにも理解できた。

「一体全体、あなた方はどういうつもりなんですか。

・・・殺されなかったのは運がよかった。寮にいるべきあなた方がどうしてここにいるんですか？」

マクゴナガル先生の声は冷静だが怒りに満ちていた。三人共、何と説明すればよいか解らず黙りこくっていると、ハーマイオニーが語り始めた。

「マクゴナガル先生、聞いてください・・・三人共、私を探しに来たん

です」

「ミス・グレンジャー！」

ハーマイオニーはマクゴナガル先生を見据えると、臆することなく話を続けた。

「私がトロールを探しに来たんです。私……私、一人でやつつけられると思いましたが……あの、本で読んでトロールについてはいろいろなことを知っていたので」

ロンは杖を取り落とし、ハリーは口をあんどり開けた。イリスは目を見開いて酸欠状態の金魚のように口をパクパクさせていたが、ハリーに小突かれて口を閉じた。三人共、同じ事を思っていた。あの真面目一徹のハーマイオニー・グレンジャーが、先生に真つ赤な嘘をついている。

「もし三人が来てくれなかったら、私、今頃死んでいました。イリスはトロールの関心を引き付けて私から遠ざけてくれて、ハリーは杖をトロールの鼻に差し込んでくれて、ロンはトロールの棍棒でノックアウトしてくれました。三人共、誰かを呼びに行く時間がなかったんです。三人が来てくれた時は、私もう殺される寸前で……」

三人は、その通りです、という顔を装った。マクゴナガル先生は、三人をじつと見た後、ハーマイオニーに視線を戻した。

「ミス・グレンジャー、なんて愚かしいことを。たった一人で野生のトロールを捕まえようなんて、どうしてそんなことを考えたのですか？  
……あなたには失望しました。グリフィンドールから五点減点です。」

念のためミス・ゴントと医務室へ行ってから、グリフィンドール塔へ帰りなさい。生徒たちが、さつき中断したパーティの続きを寮でやっています」

うな垂れるハーマイオニーを見て、イリスは胸が一杯になって何も言えなかった。ハーマイオニーはイリスの知る限りでは、規則破りなんてしない人間だ。ましてや『一人でトロールを捕まえる』なんて馬鹿げた嘘、たとえ死んでも彼女は言いたくない筈だ。それでも彼女は、尊敬するマクゴナガル先生にどう思われるかわかっている、減

点されるリスクを冒してでも、自分たちをかばうために勇気を出して言ってくれたのだ。

イリスとハーマイオニーは先生方に一礼すると、無言のまま足早に医務室へ向かい、マダム・ポンフリーにこつてり絞られながら治療を受けた。

☆

無事医務室から解放され（イリスだけしばらく定期的に通院する事になった）、塔へ戻る途中、ふとイリスとハーマイオニーの目が合った。

二人共、ほぼ同時に顔をくしゃくしゃにさせながら、抱き締め合った。お互いに言葉はいらなかった。二人は散々、それぞれの思いの丈をぶつけるように、ただ泣きじやくり続けた。

やがて、ハーマイオニーが、イリスの耳元でしゃくり上げながら囁いた。

「あのね、貴方がもし良ければ、なんだけど・・・また私の事、『ハーミー』って呼んでほしいの」

驚いたイリスが反射的に体を離そうとしたけれど、ハーマイオニーは恥ずかしがって、イリスが自分の顔を見れないように彼女の体をより強く抱き締めた。

「・・・イリス、私と仲直りしてくれる？」

「も、勿論だよ、ハーミー!!」

イリスは涙声で叫んだ。再び二人は感極まってしまい、感動を噛みしめるように短い間泣いた後、やつとお互いの体を離して恥ずかしそうに笑い合った。

☆

談話室は人がいっぱいではガヤガヤと賑やかだった。生徒たちはみんな運ばれてきたハロウィーンのご馳走を食べている。イリスがふと視線を感じて横を向くと、ハリーとロンが扉のそばに立って待っていた。どうやらご馳走にもまだ手を付けていないらしい。

四人の間に気まずい空気が流れた。

そして、四人共、「ありがとう」と言ってから、急いで食べ物を取り

に行った。

それ以来、ハーマイオニーは三人の友人になった。トロールが期せずして、四人の仲を取り持つてくれたのだ。イリスは四人で仲良くパンプキンパイにかぶり付きながら、今日は人生初めてにして最高のハロウィーンだ、としみじみ思った。

——後日、四人一緒にハグリッドの小屋へ行き、ロツクケーキと紅茶を、対トロール戦の武器として使ってしまった事を、お茶会ついでに謝りに行ったのは、また別の話である。

## File 10. クイデイツチ

イリスは四人で行動するようになってからというもの、ルンルン気分を毎日を過ごしていた。そして今までの少食っぷりを返上するよくな勢いで、よく食べ飲んだ。四人の友情は凶らずして、イリスのホームシックを克服させたのだった。

十一月に入ると、強烈な寒波と共にクイデイツチ・シーズンも到来し、今週の土曜日は記念すべきハリーの初試合となった。その前日の金曜日、四人は休み時間、凍り付くように寒い中庭に出た。ハーマイオニーが杖を振るって魔法の青い炎を出しジャムの空き瓶に入れてくれたので、四人は瓶の周りを囲むように背中をくっつけ合い、暖を取っていた。

すると、そこへスネイプが通り掛かった。片足を引き摺っているのを見て、イリスは息をのんだ。四人はスネイプから瓶が見えないように一層身を寄せ合ったが、さも警戒しているような顔つきが不覚にも彼の目に留まってしまったらしい。スネイプは何か小言を言う口実を探しているように視線を彷徨させた後、ハリーの持っている『クイデイツチ今昔』という本に目を留めた。

「ポッター、図書館の本は校外に持ち出してはならん。よこしなさい。グリフィンボール5点減点。・・・ゴント、何をじろじろ見ている？吾輩が怪我をしようとしまいと、君の補習は今晚予定通り行うから安心したまえ」

スネイプはハリーから本を取り上げ、彼の足を凝視しているイリスに嫌味な笑顔を向けながら釘を刺すと、再び足を引き摺りながら行ってしまった。

「規則をでつちあげたんだ！」

スネイプの姿が完全に見えなくなっただけから、ハリーが忌々しように顔をしかめて言った。

「だけど、先生、足を怪我してたみたい。どうしたのかな？」

「知るもんか。でもものすごく痛いといいいよな」

イリスの心配をよそに、ロンが腹立たしげに返した。



☆

その夜、イリスはこれから談話室で宿題をするという三人と別れ、いつものように研究室へ向かった。ノックしても返事がなかったの  
で、恐る恐る扉を開けると、中には誰もいなかった。作業机の上には  
材料と道具一式が置いてあり、その隣に羊皮紙が置いてあった。それ  
にはスネイプの字で『治療のため一時間ほど遅れるので、先に作業を  
始めておくように』と書き付けてある。

イリスは自分でも不思議だと思いうちに、スネイプの怪我の具合が心  
配でたまらなくなつた。彼女は自覚こそしていないが、毎週金曜日の  
補習授業において長時間の恐怖に晒され続けた結果、マグル界でいう  
『ストックホルム症候群\*』に罹ってしまったのだ。何か力にな  
れることはないかと教科書をめくって探していると、少し先のページ  
に『怪我の痛みを和らげる薬』なるものが載っていた。材料を見ると  
——幸運なことに——今回作る薬の材料と似たり寄ったりだ。

初見の薬だ・・・イリスは生唾を飲み込んだが、意を決して作り始  
めた。呼吸を忘れるくらいに熱中して作業を滞りなく進めていき、程  
なくして奇跡が起きた。薬を——驚くべき事に一発で——無事完成  
させたのだ。教科書通りの色合いになっているのを確認し、ローブの  
ポケットを探ると予備のフラスコ（コルク栓が一部欠けてしまってい  
る）があつたので、完成品を移し入れる。

間もなく扉を勢いよく開けてスネイプがやって来たので、イリスは  
感動の余韻に浸る間もなく慌ててフラスコをローブのポケットに滑  
り込ませた。スネイプは足を怪我しているからといって、いつもより  
弱々しくなるという事は全くなかった。しかし、今日は後ろで立つ事  
はなく魔法で出した椅子に腰掛け、イリスの作業を監視していた。時  
折、痛そうに顔をしかめては足を摩っているのを見て、イリスは心を  
痛めた。

☆

補習授業を乗り越えて罰則も終わったのは、いつもより大分早めの九  
時を少し過ぎた頃だった。帰ってよいと許可をもらったため、イリス  
は一礼してから部屋を出る前にローブのポケットからフラスコを取

り出して、勇気を奮い立たせスネイプに近寄った。

「お怪我の痛みが少しでも和らぐように作りました。お大事になさってください」

スネイプは言っている事の意味が解らないという風に、黒髪の間から見える両目を見開いてイリスを凝視した。やがて我に返り、渡されたフラスコを見ながら彼は呟いた。

「これは『怪我の痛みを和らげる薬』かね?・・・君にはまだ教えていない筈だが。

君は身の程も弁えず、準備した材料を無断使用し指定した薬以外の物を勝手に作り上げてしまう程、随分と偉くなってしまったようだね」

固まるイリスを見て、スネイプは満足そうに口角を吊り上げ、絡みつくような声で続けた。

「私が君の思いやりとやりに感謝し、補習を取り止めるとでも思ったか?」

さすがは、ポッターの友人だな?彼に似て、傲慢で、思い上がった、自己顕示欲の塊だ。君の勝手な行いで、グリフィンドールは5点減点とする」

「そ、そんな!先生、すみません、私、そんなつもりじゃ・・・」

「言い訳をするな、グリフィンドールさらに3点減点。・・・もう帰りたまえ、ゴント。これ以上減点されたくなければ」

イリスは教科書を掴み、扉を開けて泣きながら去って行った。階段を駆け上がる音が完全に消えてから、スネイプは改めて渡された薬を見つめた。・・・完璧だ、非の打ち所がない。彼女はわずか数か月の間に、スネイプの指示が無くとも教科書を見ながら正確に初見の薬を作れるまでに成長したのだ。その事実を噛み締めると共に、スネイプには腑に落ちない事があつた。

何故、イリスが自分の為に薬を作ったか、という事だ。隙や弱みを見せる事を嫌い人との馴れ合いを厭うスネイプは、他者から心配されるといふ事など久しく経験していなかった。日頃彼女に嫌われこそすれ好かれるような接し方はしていないので、真っ先に悪戯かと思

イリスの目を見たが、開心術を使用するまでもなく、心から自分を案じているのがありありと解った。それが理解できなかったスネイプは動揺した挙句、イリスを拒絶した。『補習授業外の作業をする』という彼女の行動を厳しくたしなめた上、大幅な減点をし、彼女を傷つけ泣かせ、追い出してしまったのだ。その事に対して良心の呵責は全くないが、自分の心をかき乱す根源が去った事にスネイプは安堵した。そして、改めてイリスの理解不能な行動の答えを探すかのように、しばらくの間、足の痛みも忘れてフラスコの中で揺れる薬を眺めた。

☆

次の日の朝、イリスは昨日の悲劇を三人に慰めてもらった後、ハリーから職員室で起きた事を聞いた。ハリーとロンは『スネイプが三頭犬の守っているものを狙っているのだ』と結論づけたが、ハーマイオニーは『仮にも教師であるスネイプが、そんなことをする筈はない』と懐疑的だ。イリスも彼女と同じ意見だったが、四人の議論は一先ず保留となった。あと一時間でハリーの初試合が始まるからだ。

十一時には、イリスはロンやハーマイオニーたちと共に、クイディッチ競技場の観客席最上段に陣取った。そして、みんなでハリーのために作った『ポッターを大統領に』と書かれた大きな旗を協力して掲げる。

やがてグリフィンドールとスリザリンの各選手たちが、箒を持ってグラウンドに出てきて、整列し始めた。ハリーも緊張しているのか、ややぎこちない動きで列に加わっている。審判であるマダム・フーチの号令で、選手たちは全員箒に乗り、空中高く舞い上がった。

間もなくホイッスルが鳴った。試合開始だ。

試合中、イリスは夢中になって応援した。グリフィンドールの選手がナイスプレーをしたり点を入れる度に、ロンとハイタッチしたりハーマイオニーと抱き合って喜んだ。何しろ三種類もボールがあるし（その内の一つ、スニッチは高速で飛び回っているのか影も形も見当たらなかったが）、両チームの選手たちも凄まじいスピードで空中を滑走するので、実況の助けがあるとは言えども試合の流れについていくのは大変だった。

「ちよいと詰めてくれや」

そうする内に、ハグリッドが双眼鏡を首に下げ、イリスたちの傍へやって来た。三人はギュツと詰めて、ハグリッドが座れるくらいのスペースを開ける。

☆

イリスが叫びすぎて痛めた喉をかぼちやジュースで冷やしている時、スリザリンのマークス・フリント選手がスニッチを狙うハリーにぶつかって邪魔をしたので、会場内は良くも悪くも大盛り上がりとなった。

ハリーが何とか空中で体勢を持ち直したのを見て、ほっとしたのも束の間——再び彼の様子がおかしくなった。ぐらりと箒が揺れたように不安定な動きをしたかと思うと、空中をジグザグに飛んだり、箒から振り落とされそうになっている。会場内の人々が次第にハリーを指さしてざわめき出した。異変を察知したフレッドとジョージがハリーを助けようと近づくが、箒は嫌がるように彼を乗せたまま上へ上へと舞い上がっていく。

「箒、故障しちゃったのかな？」イリスが不安そうにハグリッドに聞いた。

「そんなことあない。ニンバス2000が故障なんで、ありえんことだ。．．．それこそ強力な闇の魔術でもなければ、箒にあんな悪さはできん」

ぶるぶる震えるハグリッドの声を聴くや否や、ハーマイオニーはハグリッドの双眼鏡をひったくり、ハリーの方ではなく観客席の方を注意深く見回した。

「思った通りだわ。．．．スネイプよ。見てごらんなさい。何かしてる——箒に呪いをかけてる」

ロンはハーマイオニーから双眼鏡を受け取ると覗き込み、何かを発見したらしく真っ青な顔で呻いた。．．．二人は何を見たんだ？イリスは知りたくて堪らなくなった。

「ねえ、私にも見せて！」我慢できなくなったイリスがロンにせつついた。

「僕たち、どうすりゃいいんだ？」

イリスに双眼鏡を押し付けながら、ロンが途方に暮れたようにハーマイオニーに尋ねる。ハーマイオニーは何か考えがあるのか「私に任せて」と言うなり、あつという間に観衆の中に紛れ消えてしまった。

イリスはハーマイオニーを見届けた後、はやる気持ちを抑えて双眼鏡を覗き込んだ。一心不乱にスネイプを探す。——見つけた、向かい側の観客席だ。スネイプはハリーから目を離さず、絶え間なくブツブツ呟いている。イリスはショックを受け、血の気が引いていくのを感じた。

「……？」

その時、イリスは強烈な違和感を感じた。双眼鏡で見える範囲はスネイプだけではない。彼の周りには他の先生方の様子も写し出されている。

——違和感の正体がわかった時、イリスは総毛立った。クイレル先生だ。他の先生方がみんな心配そうな表情でハリーの動向を見守っている中、クイレル先生だけは——憎しみを込めた顔つきで、瞬き一つせず、血走った目をぎらつかせながら、ハリーを睨み続けている。——『お前を殺してやる』——イリスには、その眼がそう言っているように見えた。

イリスがクイレル先生を茫然と見ていると、俄かに先生方が騒然とし始めた。皆ハリーから視線を外し、口々に何か叫びながらスネイプの足元を指さしている。イリスが慌てて双眼鏡を向けると、スネイプのローブの裾に——見覚えのある——青い炎が一瞬揺らめいてすぐ消えた。恐らくハーマイオニーが、スネイプの注意を逸らすためにやったのだろう。

「やったぞ、イリス！ハリーが戻った！」

ロンの歓声にイリスが慌てて見上げると、ハリーは再び、箒に問題なく乗れるようになっていた。イリスはそれを確認した後、向かいの観客席に双眼鏡を向ける。スネイプはいつもの仏頂面でハリーの様子を見ていたが——クイレル先生は、苦虫を噛み潰したような表情でハリーを睨み付けていた。

イリスはその後、ハーマイオニーが「作戦成功よ！」と後ろから抱き着いてくるまで、クイレル先生から目を離す事ができなかった。

☆

ハリーがあその後スニッチをキャッチし、試合は170対60でグリフィンボールの大勝利となった。だが、四人は試合後の騒ぎの渦中を外れ、ハグリッドの小屋でお茶を飲んでいた。

「呪いをかけたのは絶対スネイプ先生じゃない！真犯人は——クイレル先生だ！」

三人の『ハリーに呪いをかけ、三頭犬の守っているものを狙っている犯人は、ずばりスネイプ論』を真つ向から否定し、イリスは——葉巻代わりにシナモンスティックを口に咥えながら——びしつと三人を指さした。イギリスだけにシャーロック・ホームズ気取りだ。しかし、三人のワトソン君たちは辛辣だった。

「絶対、君の見間違いだ。クイレル先生は、そんなことできっこないよ」とハリー。

「君、やたらにスネイプを心配したりかばったりしてるけど、補習中あいつに服従の呪文でもかけられてるんじゃない？」とロン。

「ちよつとロン、冗談はよして。もし本当にイリスが服従の呪文をかけられているなら、彼女はスネイプの言う通りに行動できるんだからもうとつくに補習から解放されている筈よ。でも、クイレル先生のことは私も貴方の見間違いだと思うわ。あの人臆病だから、きっと恐怖に引き攀った表情がたまたまそういう風に見えただけよ」とハーマイオニーが一際辛辣にしめる。

ハグリッドが急にティーポットを落としたので、四人は思わず話を止めて彼の方を見た。

「なんでフラッツフィーを知ってるんだ？」

フラッツフィー？ 四人は一斉に首を傾げ、ハリーが代表してハグリッドに尋ねた。

「そう、あいつ……ハリー、さっきお前さんが言った三頭犬の名前だ。俺がダンブルドアに貸したんだ。守るため……」

「何を？」ハリーは聞き逃さなかった。目を輝かせ、身を乗り出して聞

く。

「もう、これ以上聞かんでくれ。重大秘密なんだ、これは」

ハグリッドがタジタジになって諭すが、ハリーは譲らない。

「だけど、スネイプが盗もうとしたんだよ」

「スネイプはホグワーツの教師だ、もちろんクイレルもな(そう言っ  
て生暖かい目でイリスを見やった)。そんなことするわけなからう」

「ならどうしてハリーを殺そうとしたの？」

ハグリッドの煮え切らない態度をぶち壊すように、ハーマイオニー  
が叫んだ。クイディッチでの出来事が、彼女の考えを変えさせたよう  
だ。

「ハグリッド、私呪いをかけているかどうか、一目でわかるわ。本で読  
んだもの。じーつと目を逸らさずに見続けるの。スネイプは瞬き一  
つしなかったわ。この目で見たんだから」

「私だってこの目で、クイレル先生が同じ事してるのを見たよ！」

「貴方は(君は)黙ってて！」

話の水を差されちやならないとばかりに、怖い顔をした三人に一斉  
に突っ込まれ、イリスはフアングの頭を抱え込みながら、しよげ返っ  
た。

「お前さんたちは間違つとる！俺が断言する！」

ハグリッドはイリスの話の間かなかったことにして、三人に向き  
直った。

「ハリーの箒が何であんな動きをしたか、俺にはわからん。だがスネ  
イプは生徒を殺そうとしたりはせん。みんなよく聞け。お前さんた  
ちは関係ないことに首を突っ込んだ。危険だ、あの犬のことも、犬  
が守ってる者のことも忘れるんだ。あれはダンブルドアとニコラス・  
フラメルのこと……」

「あつー！」ハリーはすかさず突っ込んだ。

「ニコラス・フラメルっていう人が関係してるんだね！」

「お前さんたち、もう帰ってくれ！」

ハグリッドは口が滑った自分に猛烈に腹を立てているようで、話の  
半ばで慌ただしく四人を追い出した。

☆

イリスは夕食後、明日までが期限の変身術の宿題を提出し忘れていた事を思い出し、職員室へ向かった後、一人、とぼとぼとした足取りで寮へと帰っていた。

「私、絶対見たのに、何で信じてくれないの？」

あれから夕食の席でも力説したが、三人共うんざりした表情を浮かべ、ろくに話を聞いてもくれなかった。——だが、それは当然の事だった。クイレル先生が臆病で神経質、おまけに飛びつきり気が弱い事はホグワーツ中の人間が知っている。そんなクイレル先生が呪いをかけたなんて事、あの三人には到底信じられる筈もなかったのだ。しかもその証人がいつもぼんやりしていて天然気味のイリスなものだから、信ぴょう性は限りなくゼロに近い。よって三人は、イリスの話に欠片も信じてはくれなかった。

イリスが浮かない足取りで進む廊下の突き当りは下りの階段で、一段目に足を乗せようとした時——不意に背後から声がした。

「わ、私は、し、信じ、ますよ。み、み、ミス・ゴースト」

——それは、他人の空似とするには余りにも特徴的で、疑う余地すらなく、そして今一番聞こえてはいけけない声だった。イリスは錆び付いたブリキ人形のようなぎこちない動きで、恐る恐る振り返った。

イリスから五メートルと離れてはいない距離に、クイレル先生が立っている。口角を吊り上げて笑みの形を作っているが、目だけは笑っていない。瞬きすらせず、食い入るようにイリスを睨み付けていた。——同じだ、イリスは思った。あの時、ハリーに呪いをかけていた時と同じ目をしている。

「あ……っ、せ、せんせ……」

イリスは誰か助けを呼ぼうとしたが、恐怖の余り、唇が震えてまともな言葉にすることすらできない。——やっぱり、クイレル先生が真犯人だったんだ!!しかも、イリスが気づいたのを知っている。今すぐ逃げ出したいが、力が抜けたように動けない。悲鳴のような細かい声を上げながら、ガクガク震える足を懸命に動かして、後ずさる。イリスはその時、後ろに階段がある事を忘れていた。



不快な浮遊感を味わいながら、イリスは空中に放り出された。踊り場に体を叩きつけられる事を想定して思わず目を閉じた瞬間、誰かにふわりと抱き留められ、壁際に押し付けられた。——一体誰にそうされているのか、見えなくとも分かった。強いニンニクの匂いがしたからだ。

「ああ、ミス・ゴント……」

クイレル先生は恍惚とした声を出し、身動きができず子犬のように震えるイリスの手を取り、その手の甲を自らの唇に押し当てた。

「目を開けて、私を見なさい」

イリスがクイレル先生の理解不能な行動に怯えて縮み上がっていると、不意に落ち着き払った声があった。嫌だ、絶対に開けない！目を開けたら今よりさらに恐ろしい事が起きそうな気がして、イリスは弱々しくかぶりを振った。

「ミス・ゴント!!目を開けて、わたしを見なさい!!」

今度は耳元で怒鳴られ、イリスは驚いてついに目を開けてしまった。その瞬間、満足気な笑みを浮かべたクイレル先生に顎を掴まれ、無理矢理目を合わせられる。互いの双眸が交錯した。

「そう、良い子だ。——開心、レジリメンズ！」

クイレル先生がイリスにその呪文を叫んだ瞬間、何かイリスの頭に侵入してくるのを感じた。それは見えない手のような形を取って、イリスの頭を内側から驚掴みにした。イリスは怖気を震い、無茶苦茶に体を振ってクイレルの拘束から逃げ出そうとするが、叶わない。それはイリスの頭の中を満たした後、首を通って、とぶんと肩から下へ沈み込み、内臓の一つ一つに入っては——その内壁をぞろりと撫でた。

自分の体の中に、他人が入り込んでいる。イリスは余りの気持ち悪さに痙攣し、嘔吐した。——やめて、やめて!!イリスは声にならない声で何度も叫ぶが、彼女の無駄な抵抗をあざ笑うかのように、それは手や足の先に至るまでイリスの体中を蹂躪した。すがるように伸ばした手すら、無情にもクイレル先生に掴まれ下ろされる。朦朧とした意識の中で、縄のような感触が無理矢理組まされた両腕に絡まり、自

分を縛り上げていくのを感じた。もう指先一本動かさせない。イリスは気が狂いそうだった。お願い、何でもするから助けて……！

☆

その瞬間、目の前のクイレル先生がふっと消えて、イリスの目に一つの映像が浮かんだ。

——イオだ。随分と若いが、そうに違いない。イリスの両親、ネーレウスとエルサもいる。イオは出雲神社の境内で小さな赤ん坊を抱き締めながら、肩を震わせて泣いている。二人はそれを悲しそうに見て、出て行った。——パチンと音がして映像が消え、すぐまた現れた。今度は、一、二歳位と思しき姿の子供がイオに抱っこされて、近所の桜を観に行っている。

……これは自分の過去の記憶なのか？イリスは思った。——でも、自分ひとりで見てるんじゃない。何かが——イリスの体の中でさつきまで彼女の体を弄んでいたそれが、イリスのすぐ傍にいる。それはイリスの心の中を無遠慮に覗き込み、ティッシュを引き出すような気軽さで彼女のあらゆる記憶を引き摺り出しては、興味深そうに眺めている。イリスはそれを成す術もなく見ているだけなのだ。記憶の映像が目まぐるしく切り替わる度に、映像の中のイリスは少しずつ成長していく。やがて、映し出されるイリスは11歳になった。——ダイアゴン横丁での出来事——列車でのイオとの別れ——組分けの儀式——トロールとの出会い——最後にクイレル先生を見て目を見開いたイリスの映像が消えて、視界は闇に包まれた。

☆

気が付くと、イリスは薄暗い地下室のような場所に立っていた。周囲を見渡すが、クイレル先生はいない。ここはどこだ？

「あの子は、渡さない」

すぐ後ろで声がして、イリスは弾かれたように振り返った。

——ネーレウスとエルサだ。生きている。イリスを凜とした表情で見つめている。

「お父さん、お母さん!!」

イリスは一目散に駆けて二人に飛びつこうとしたが——イリスの

体はまるでゴーストのように二人の体を擦り抜けてしまった。・・・  
どうして、触れないの？気づいてくれないの？両親を見上げるが、二人はイリスに気づく事すらなく——意を決した表情でイリスの背後の何かを見ていた。やがてネーレウスが杖をそちらへ向け、エルサがその手に自らの手を添えた。

二人が揃って何かを叫んだ瞬間、杖の先から黒と白の稲妻で出来た球が発生し、瞬時に膨れ上がって、轟音と共に、辺り一帯を——イリスも含めて——飲み込んだ。びりびりとした衝撃を肌で感じて、イリスは堪え切れず耳を塞ぎ、目を瞑ってしやがみ込んだ。

☆

衝撃が収まった頃、イリスが恐る恐る目を開けると——足元が変わり果てた姿の両親が倒れ伏していた。イリスは悲鳴を上げて二人にしがみ付こうとしたが、またも霧のように擦り抜けて触れる事ができない。これは何なんだ？これも自分の記憶だと言うのか？もうイリスの精神は崩壊寸前だった。

その時、後ろから——確か、両親が杖を向けていた方角から——高くしわがれた声があった。

「——お前の両親は——愚か者だった——」

イリスが振り向く前に、黒い霧が背後から彼女の体を覆った。それは肌に触れた瞬間、骨の髄まで染み込むような冷気を発し、抵抗しようとする意志を根こそぎ奪っていく。——それは言葉で表現するならば『恐怖』そのものだった。

身動きが取れないイリスの目の前で、両親の体は腐敗し——白骨化し——やがて風化して、砂になり消えた。絶望に泣き叫ぶイリスを、声は嘲笑った。黒い霧はイリスから離れると空中で収束し、黒いローブを纏った人のような形になった。——死神だ。イリスは確信した。死神は赤い目を爛々と光らせて、イリスを睨みつける。

「——イリス・ゴント——お前は俺様のものだ」

そう言っつて、イリスに手を伸ばした。

☆

「・・・あああああつ!!!」

イリスは汗びっしりになって飛び起きた。そこは医務室のベッドの上だった。どうして??クイレル先生は??両親は??黒い霧は??情報錯綜し、気が狂ったように周囲を見回すイリスを見て、マダム・ポンフリーが駆け寄って来た。

「落ち着いて、ミス・ゴント!よほど怖い夢を見たのね、大丈夫よ」  
そう言つて、イリスを優しく抱き締め、宥めるように頭を撫でてくれた。怖い夢?イリスは思い出そうとした。夢なんかじゃない、あれは——

——何だったっけ?思い出すことができない。つい数秒前まで確実に覚えていた筈なのに、記憶は両手に掬った砂のように零れ落ち、瞬く間にあやふやになり原型を留めなくなっていく。・・・必死に記憶の糸を辿つても、職員室から出た後、自分が何をしてたのか思い出せない。そもそも、何の夢を見てたんだっけ?

「思い出せない・・・」と言つたきり、茫然と黙り込んだイリスに、マダム・ポンフリーは穏やかな声で言った。

「私が教えてあげましょう。あなたは今日の夕べ、一階の階段の踊り場で倒れていたの。きつと足を滑らせて頭を打ったせいで、記憶が飛んでしまったのね(そう言つて、彼女はイリスの頭と片足に巻かれた真新しい包帯を気遣わしげに見た)。クイレル先生が偶然通り掛かった時にあなたを見つけ、ここまで運んできてくれたのよ。先生がとても心配されていたから、明日お礼を言っておきなさいね」

イリスの記憶はクイレル先生によつて改竄され、クイディツチでの騒ぎからついさつき飛び起きるまでの『クイレル先生に関する記憶』を全て忘却させられていた。しかし彼女はそれに気づく事はなく——クイレル先生に開心術を掛けられて何者かに記憶を盗み見られた事も忘れ——マダム・ポンフリーの言葉を自分の本当の記憶なのだと素直に信じ込もうとした。・・・胸に漠然とした不安を抱えたまま。

## File 11. マルフオイ家のクリスマス

イリスが階段で頭を打って気絶した上に記憶を飛ばしたという話は、誰が吹聴したのか瞬く間にホグワーツ中に広がり、『泣き虫イリスの落ちこぼれ伝説』における新たな1ページとして語り継がれる事になった。イリスはクイレル先生の手により『クイディッチの時に彼がハリーに呪いをかけた』と主張していた事すら忘れてしまっていたので、ハリーたちがスネイプを疑っているのを自信を持って否定する事はもう出来なかった。話し合いの結果、四人の間でクイレル先生の事はイリスの見間違いで、改めてスネイプが怪しい（イリスだけは本意でないが）という結論に達した。

さて、季節はもうすぐクリスマス。十二月も半ばになると、ホグワーツは深い雪に覆われ、湖は凍り付いていた。グリフィンドールの談話室や大広間には轟々と火が燃えていたが、廊下は隙間風で氷のように冷たく、身を切るような風が教室の窓をガタガタ震わせた。

生徒たちはクリスマス休暇が待ち遠しいようで、みんな例外なくそろそと浮き立った様子で残りの日数を過ごしている。イリスも一刻も早く日本に帰ってイオに会いたい一心で、寒さに耐えながら勉強を頑張っていた。休暇中は、ハリーとロンは家庭の事情でホグワーツに残り、ハーマイオニーとイリスはそれぞれの実家に帰る事になっていた。

いよいよクリスマス休暇が翌日に迫った金曜日の朝、イリスが大広間で朝食を取っていると、イリスの向かい側に座っているハリーとロンが不意に食べる手を止め、急に険しい表情になって立ち上がりかけた。何事かと思ったイリスの肩に、後ろから誰かが軽く手を置いた。振り向くと、仏頂面のドラコが立っている。

「イリス。明日の朝十時、荷物をまとめてスリザリン寮まで来てくれ」

・・・は？

イリスは訳が分からなかった。事情が全く飲み込めていないイリスの様子を見て、ドラコはいらいらした口調を隠そうともせず言った。

「おい、正気か？今年の夏に僕のパパと約束しただろう？クリスマス休暇は僕の屋敷で過ごすって」

イリスは頭を捻って捻って——思い出した。ダイアゴン横丁でルシウスに『クリスマス休暇をマルフォイ邸で過ごすとはどうか』と提案されていた事を。イリスはそれに対する返事をイオに相談してからドラコにしようと思っただけだが、連日の忙しさにかまけている内に、今日に至るまですっかり忘れてしまっていたのだ。イオにはマルフォイ親子に会ったという事すら言いそびれていた。彼女は当然イリスが休暇中は日本に帰るものと思っただけ。冷静に考えれば、お誘いの返事をし忘れていただけで約束まではしていないのだが、イリスがその事実気づく前にドラコが畳み掛けるように言った。

「言っておくが、前に確認したら君は行くと言っていたぞ。階段で頭を打った拍子にそのことまで忘れたのか？パパは君のために、屋敷に新しく部屋まで用意したんだ。」

「……まさか、僕の父の顔を潰すつもりじゃないだろうね？」

ドラコのイリスに確認したという話は、彼女の退路を断つための嘘だった。イリスも当然身に覚えはなかったが、階段の話を見ると本当に忘れてしまったのかもしれないと不安になって、何も言えなくなった。イリスが助けを求めようと三人を見ると、ハリーとロンは怒りに打ち震えた顔で「絶対に行くな！」と言わんばかりに首を横に振った。一方、ハーマイオニーはイリスを心配そうに見て「約束してたのなら仕方ないわ」と言わんばかりに肩を竦めて見せた。

「私、その、忘れてて……本当にごめんなさい。でも、あの、おばさんにクリスマス休暇は日本に帰るって言っちゃってるし……」

「フン。どうせそんなことだろうと思っただけ、僕の父が一足先に君のお宛に手紙を送ったよ。君のおば君も快諾したそうさ。もうじき君にも手紙が来るだろう」

ドラコがイリスの言葉を遮るようにして釘を刺していると、ちょうどふくろう便の時間になった。頭上を飛び交うふくろうたちの中にウメの姿が見えた——寒さでかじかむ羽根を懸命に動かしながらイ

リスの下へ飛んできて、雪に濡れた手紙を落とす。イオからの手紙は急いで書いたのか筆跡が荒々しく、インクの染みが所々にあった。

『イリスへ』

アホかお前！クリスマス마스休暇はマルフォイさん家で過ごすつて約束してたみたいだな。

そういう大事なことは、事前に必ずわたしに相談しろ。まさか忘れてたんじゃないだろうな？

クリスマスは会えなくて寂しいが、マルフォイさん家で楽しく過ごせよ。

P. S. ルシウスさんたちに、きちんとして挨拶すること。

イオより』

「・・・ほらね」

茫然とするイリスの後ろからドラコが手紙を覗き込んで、にやにや笑った。イリスは恐る恐るハリーとロンの方を見ると、二人は般若のような顔つきでイリスを睨んでいた。

☆

昼食前、四人は図書館でニコラス・フラメルについて調べていた。ハーマイオニーは調べる予定の内容と表題のリストを取り出し、イリスはリストに載っている本を探し出しては、ハーマイオニーのいる机にどんどん積み上げ、彼女が探し終わった本を元の場所へ戻す作業を繰り返した。司書であるマダム・ピンスに聞けば一番手っ取り早いのかも知れないが、四人の間では『聞かない』という暗黙の了解ができていた。スネイプの耳に入る危険を冒すわけにはいかないのだ。

結局、今日も進展なしだった。かれこれ二週間、ニコラス・フラメルについての情報を探し続けたが、授業の合間の短い時間を探すこともあつてか収穫は得られなかった。お互いの顔を見合つてため息をこぼした四人は、大広間へ昼食を取りに向かう。ハーマイオニーがハリーとロンに話しかけた。

「私が家に帰っている間も続けて探すでしょう？ 見つけたら、ふくろうで知らせてね」

「君の方は、家に帰ってフラメルについて聞いてみて。パパやママな

「聞いても安全だろう？」

「ええ、安全よ。二人とも歯医者だから」

それを聞いてロンが露骨にがっかりした表情を浮かべると、八つ当たりするようにイリスをじろつと睨んだ。

「君は聞いちやダメだぞ、忘れん坊イリス。マルフォイ家は僕らの敵なんだから」

「いいかい、絶対にダメだ。いくら君でも、これだけは忘れちゃいけないよ」とハリー。

「う、うん……」

イリスはタジタジになって頷き、ハーマイオニーがイリスを庇うように自分の元へ引き寄せながら二人をたしなめた。朝食時の事件から、ハリーとロンはイリスに冷たく当たるようになってしまったのだ。

☆

次の日の朝、イリスはまとめた荷物を持ち、ハーマイオニーに早目のお別れの挨拶——お互い別行動になるためだ——をした後、談話室にいたハリーとロンの無言の威圧感から逃げるように足早にスリザリン寮へ向かった。寮の入り口には、ドラコとクラブとゴイルがそれぞれの荷物を持って、イリスを待っていた。

「来たな。行こう」

イリスを確認したドラコが言うと、イリスを促して四人一緒に歩き始めた。お互い特に会話をするという事もなくホグワーツを出て、プラットホームから列車に乗り、適当なコンパートメントに荷物を押し込めて四人で座る。ドラコは窓際でイリスはその隣（ドラコが逃げようとするイリスの手を引つ張り込んだので、ほぼ強制的にその席になった）、向かい側にはクラブとゴイルが座った。列車が走り始めると、沈黙がコンパートメント内を包んだ。思えば、スリザリン生三人に対しグリフィンドール生のイリスは、よそ者以外の何者でもなかった。気まずい場の雰囲気但至少でも良くしようとして、イリスがドラコに話しかける。

「ドラコのおうちって、どこにあるの？」



「ウイルトシャーだ」

ドラコは窓際に視線を向けたまま、ぶつきらぼうに答えた。取り付く島もない。イリスはもう少し粘って、辛抱強く話しかけた。

「そっか。クラッブとゴイルも、クリスマスはドラコの家で過ごすの？」

「君は馬鹿か？ かわいそうなポッターじゃないんだ、二人とも帰りを待ってる家族がいる。それぞれの家に帰るのさ」

ドラコがイリスを馬鹿にしてせせら笑い、クラッブとゴイルはそれに合わせてげらげら笑った。

「そうですか・・・」

イリスはもう反抗する気力も残っていないかった。その時、コンパトメントの戸が開いて車内販売がやって来たので、イリスは心底ほつとした。四人はそれぞれお菓子を買って、食べ始める。イリスはクラッブやゴイルと良い勝負をする位大量のお菓子を買い込んで、ゆつくり時間をかけて食べ始めた。その内、三人がお喋りを始めたのをいいことに、イリスはなるべく気配を消してお菓子を食べる事に専念した。

☆

やがて列車はキングズ・クロス駅に到着した。荷物を下ろすのをクラッブとゴイルに手伝ってもらい、二人にお礼とお別れを言ってから、イリスはホームに降り立った。

生徒たちはみんな口々に「ただいま！」と叫んでは、迎えに来てくれた家族と思しき人々に嬉しそうに駆け寄って、抱き着いている。イリスは人込みの中でイオの姿を探したが、当然いるはずもなく、胸が締め付けられたように痛んだ。――代わりに、見覚えのある銀髪の男の人とその隣に立つきれいな女の人の姿を見つけた。ドラコがイリスを追い越して、一目散に駆けてその二人に飛びつき、代わる代わるハグとキスをしてもらっていた。イリスは親子の再会が落ち着いてから、おずおずと近づいた。

「お久しぶりです、ルシウスさん。初めまして、ドラコのお母さま。イリス・ゴーストです。」

今日からお世話になります・・・その、ルシウスさん、私、ご迷惑をおかけして・・・すみませんでした」

ルシウスとドラコの母はイリスに気づくと穏やかに笑って、ドラコと同じようにそれぞれハグとキスをしてくれた。

「来てくれて嬉しいよ、イリス。君に会いたいのが為に、私が少々先走ってしまったのだ。気にしないでくれ」

「イリス、会えて嬉しいわ。ドラコの母で、ナルシッサといいます。一緒に楽しいクリスマスを過ごしましょうね」

ルシウスとナルシッサは、上品な服装に身を包み、とても優しそうだった。イリスは二人の事が大好きになった。

☆

四人はダイアゴン横丁へ向かうと、とある宿の二階の一室に設置してあった『移動キー（マルフォイ家の家紋が刻まれた純銀の装飾皿だった）』を使用して、イギリスはウィルトシャーのマルフォイ邸前まで瞬間移動した。イリスは移動中のまるでジェットコースターに乗っているような強烈な遠心力と浮遊感に驚き、ルシウスとドラコがしっかりと体を掴んでいてくれなければ、危うく移動キーから手を離してばらける所だった。何とか耐え切ったイリスが恐る恐る目を開けると――辺り一面、雪化粧の施されたのどかな田園風景が広がっていた。思わず歓声を上げて見渡すと、そう遠くはない距離になだらかな丘があり、その上に立派なレンガ造りの豪邸が見えた。やがて、丘の方から馬車がやって来て、四人の前で止まった。中から不思議な容姿をした生き物――ボロボロの布きれを体に巻き付け、テニスボール位の大きさの目が目立つ。人間の子供に少し似ているが、体型は不自然な程に痩せ細っている――が出てきたので、イリスはびっくりして悲鳴を上げた。

「屋敷しもべ妖精だ。家の雑用を担当している。怯えることはない」

ルシウスはイリスに優しく教えてくれ、イリスが屋敷しもべ妖精に自己紹介をしようとするのをやんわりと手で制した。屋敷しもべ妖精は恭しく四人に一礼した後、ドラコとイリスの荷物を荷室へ運び入れ、一人ずつ手を取って馬車の中へ誘導する。馬車の中は拡張呪文が

掛けられていて、広々としていた。馬車は丘の上の屋敷へ向かい、巨大な門扉をくぐり、玄関前で止まった。

「我が屋敷へようこそ、イリス。さあ、君の部屋を案内しよう」

馬車を降りながら、ルシウスが言った。

大理石の輝く壮大な玄関ホールを通り、飴色に磨き上げられた階段を上がる。――イリスの部屋は、ドラコの隣室だった。立派な装飾の施された扉を開けると、中はグリフィンドールの談話室が丸ごと入りそうな位に広く、高級そうな調度品の数々が設置されていた。意匠の施されたテーブルの上には、高級そうな服やアクセサリ類がどっさり積んであった。

「あなたのお部屋よ。あそこの服や装飾品は、私が選んだの。あなたの気に入るといいんだけど」

ナルシツサがイリスの肩に手を乗せながら、優しく言った。

「こ、こんな立派なお部屋・・・服まで・・・私、いただけません。相応しくありません」

イリスは恐縮し、震え上がった。こんな一国の王女のような立派な部屋を使う資格なんて自分にはどう考え尽しても見当たらないのだと、つつかえながらも懸命にナルシツサに訴える。廊下で布団を敷いて寝た方がよほど気が楽だ。しかし、ナルシツサはイリスの言葉をきっぱりと否定した。

「いいえ、あなたにはその資格があるの。私も夫も、あなたのことが本当に大好きなのよ。ここをあなたのおうちと思ってくれていいわ。・・・さ、明日はあなたのクリスマスパーティーのためのドレスを買いにいかなくちゃね」

ナルシツサが去って行った後、イリスは豪華な造りの天蓋付ベッドに腰掛け、茫然と考えていた。自分にその資格があるだって？ナルシツサもルシウスも、もしかして自分を他の誰かと勘違いしているのではないだろうか。イリスが段々不安を募らせていると、荷物を片付け終えたドラコがノックをしてから部屋に入ってきた。

「どうしたイリス、いつものみつともない阿呆面が今日は飛び抜けて見えるぞ」

イリスはドラコの憎まれ口が有難かった。いつもの自分に戻れた気がして安心したのだ。ドラコをたしなめることなく、イリスは彼に問いかける。

「ねえドラコ、私、良い家柄でもないのに、どうしてルシウスさんとナルシツサさんは、こんなに良くしてくれるの？」

「それは僕が一番疑問に思っていることだ。はつきり言うが、君にマルフォイ家はふさわしくない。こんな部屋や服だつて君には不釣り合いだ。ウィーズリー家の汚らしい継ぎ接ぎだらけの家で、毛玉だらけの服を着て仲良く雑魚寝している方がお似合いさ。・・・でも、パパとママは君のことを心底気に入ってる。いいか、特にクリスマスパーティーは名家の方々も来るんだ。パパは君を客人として出席させると言ってる。くれぐれも下品なことをして僕らに恥をかかせるな」

「はい・・・」

イリスはしよげ返った声で返事をした。

☆

次の日、イリスはマルフォイ親子と共に——今度は『煙突飛行粉』という道具を使って（イリスは粉を叩きつける時、咳き込まないよう我慢するのに苦労した）——ダイアゴン横丁へ出かけた。イリスはナルシツサに連れられて、彼女が行きつけなのだという高級ブティックへ向かう。

「娘ができたみたいで嬉しいわ。あなたは可愛いし肌の色も雪みたいに白いから、何でも似合うわね」

ナルシツサは楽しそうに頬を綻ばせ、店員とあれこれ話をしながらイリスに様々なドレスを試着させた。——最終的に、イリスの瞳の色に合わせた深い藍色のドレスローブに決まった。一方で、ドラコはルシウスの鼻屑にしている紳士服店で、正装用のローブを買ったようだった。

その後、イリスはイオやハグリッド、ハリーたちのためにクリスマスプレゼントを買い、ふくろう便で飛ばす手続きをした。ハリーには新しいクイディッチの考察本、ロンには蛙チョコレートの大きな箱、

ハーマイオニーには質の良い羽ペン・・・などなど。マルフォイ家の人には直接渡そうと思い、大分奮発して、ルシウスにはマントの留め具、ナルシツサには髪飾り、ドラコにはネクタイピンを選んだ。あとこつそりと、いつも眉間にしわを寄せてイライラしているスネイプ先生に癒しを提供しようと思い、現在魔法界で癒しを求める人々の間で流行しているという観賞用のガラス玉（中に浮遊する虹色の液体が入っていて、きらきらと輝きながら液体―氷―水蒸気へと姿を変えていく）を送った。――イリスは休暇明けの補習授業でスネイプに「嫌味か？」等と散々その事をいびられ、罰則と補習時間を増やされるという結末を、その時点では知る由もなかったのである。

その夜、イリスは夕食後、ルシウスに――まるで自分の父親のように――学校生活について尋ねられた。すかさずドラコが嬉々として「イリスは落ちこぼれで、スネイプ先生の補習を受けてるんだ」と言うと、ルシウスはドラコを軽く叱った。

「確かに君は魔法薬学の授業で一度大きな失敗をしてしまったようだが、補習授業ではよくやっているようだね。――私とスネイプ先生は友人なのだが、以前彼に会った時、君のことを『実力がある』と評価していたよ」

「ほ、本当ですかっ」

イリスは跳び上がりそうな位、喜んだ。補習授業もいずれはなくなるかもしれない。イリスが期待に胸を弾ませていると、ドラコが面白くなさそうに鼻を鳴らした。ルシウスはドラコがイリスを貶そうとして諦めずに言った「スリザリンを蹴ってグリフィンドールに入った裏切り者」という言葉にも眉根を上げ、厳しい口調でたしなめてくれたので、イリスはますますルシウスに好感を持った。

その後、イリスはルシウスに自分の父――ネーレウスの写真をたくさん見せてもらった。ルシウスはネーレウスとの学生時代や卒業後の思い出話をぼつりぼつりと話した。時折何かを思い出しているのか、目に涙を浮かべて言葉を詰まらせるルシウスを見て、イリスはきつと二人は親友だったに違いないと思った。

「ルシウスさんにとって、私のお父さんはどんな人だったんですか？」

イリスが聞くと、ルシウスはイリスを見つめ返しながら少し思案した後、「少し考えさせてくれ」と言い、イリスにもう寝るよう促した。イリスは自分の部屋に入る直前、ドラコに捕獲されて彼の部屋へ連行された。そして彼に「眠くなるまで付き合え」と命令されて、魔法使いのチェスの手解きを受ける事となった。ドラコと自分の駒にあーだこーだと叱責されながら夢中でチェスをやり込むうちに、いつのまにか日付が変わっていて、二人はびっくりした。

☆

クリスマス当日、イリスが眠い目を擦りながら起き出すと、足元にプレゼントの箱や包みがうずたかく積まれているのに気付いた。こんなに沢山のプレゼントをもらったのは生まれて初めてだ。イリスが感動していると、間もなくドアがノックされて、すでに身支度を終えたドラコが入ってくる。

「メリークリスマス。今日は忙しいぞ。プレゼントを開けるのはパーティーが終わってからにしろ」

「メリークリスマス、ドラコ。わかったよ。．．あと、はい。クリスマスプレゼント」

ドラコは青白い顔を少し赤らめると、「ああ」と言うなりプレゼントをひったくるように受け取った。少し遅れてルシウスとナルシッサもやって来てクリスマススの挨拶をしてくれたので、二人にもプレゼントを渡した。

☆

パーティーの数刻前、イリスは大広間の隣にある控え室でドレスローブに着替え、大きな姿見の前に立って身だしなみを確認していた。後ろからナルシッサがやってきて、イリスの髪を触った。すると、彼女の手からイリスの頭へ美しい銀色のリボンが蛇のように巻き上げて、イリスの肩につく位まで伸びた髪をしゅるしゅると巻き上げた。驚いたイリスがわずかに頭を揺らすと、リボンは耳に心地良い位の大きさの鈴の調べを奏でた。

「私とルシウスからのクリスマスプレゼントよ、イリス。スノード

ロップ社のリボンなの。あとで説明書をあげるわね。合言葉を使うことで色んな髪型にまとめてくれるの。私も学生時代は便利だから愛用していたわ。・・・あなたのきれいな黒髪によく似合ってる」

そう言うと、ナルシツサは母親が娘にそうするように、鏡越しにイリスを優しい眼差しで見つめながら彼女の髪を梳いた。イリスは居たたまれなくなって、ナルシツサに問いかけた。

「プレゼント、ありがとうございます。その・・・ルシウスさんだけじゃなくて、どうしてナルシツサさんも・・・私に良くしてくださいるんですか？」

ナルシツサは少し悲しげに微笑んで、イリスの頭を撫でた。

「私はね、あなたのお母さんに、本当に大変な時、助けてもらったことがあるの。——ドラコは彼女のおかげで健康に生まれる事が出来たのよ。あなたのお母さんにお礼を言いたかったけれど、彼女はその前に亡くなってしまった。・・・私はその時の恩返しがしたいってずっと思ってたわ。あなたさえ良ければ、私のことをお母さんと思ってくれていいのよ」

ナルシツサはそう言うと、背後からイリスを抱きしめた。ふわりと良い匂いがして、イリスは涙もなく泣きたくなった。ナルシツサも目に涙を浮かべていたようで、二人は少し笑った後、揃って控室を出た。大広間ではルシウスと共にドラコが待っており、彼が魂を抜き取られたような顔でイリスをぼんやり見つめていたので、イリスは不安に駆られて尋ねた。

「どうかな、変？」

「・・・フン、君が変なのは元々だろ。行くぞ」

我に返ったドラコがエスコートするためにイリスに腕を突き出した。イリスはためらいながらも腕をからめる。

——マルフォイ家主催のクリスマスパーティーは、非常に豪華で素晴らしいものだった。荘厳なシャンデリアが天井から大広間全体を照らし、部屋中に散りばめられた美しい絵画や調度品、屋敷しもべ妖精が作った数々の料理が、大勢の客人たちを楽しませる。家主であるルシウスが挨拶を終えると、みなそれぞれの思惑を胸に秘め動き出し

た。イリスはルシウスたちと共にドラコとついてまわり、挨拶をしてはドレスの裾をつまんで、優雅に頭を下げ続けなければいけなかった。イリスは十分もしない内に疲れ果ててへとへとになったが、マルフォイ家の三人は表情一つ変えずびんぴんしている。——途中、見覚えのあるスリザリン生たち（クラッブとゴイルにも）に会い、格式ばった挨拶を交わした。彼らは誰もホグワーツの時のようにイリスをからかったりしなかったので、イリスは安心した。

☆

パーティーが終わったのは夜十時を回った頃で、四人は食堂室で集まり、身内だけのささやかなクリスマスパーティーが行われた。お腹がいつぱいになると、イリスとドラコはそれぞれの部屋に戻った。イリスが寝間着に着替えた後、クリスマスプレゼントの開封を始めていると、ドアがノックされ、チェスセットを抱えたドラコが入って来た。「どうしたの?」

「気が立ってな。寝れないんだ。チェスでもしないか?」  
「いいよ」

チェスをしながら、イリスはドラコを見て一人思いを馳せた。ドラコは最初こそイリスに対して意地悪だったが、日が経つにつれてその態度は軟化していき、今ではこうして仲良くチェスをするまでの仲になっっている。

「ドラコって、実家に帰ると良いやつだね。ホグワーツに行くとき意地悪になる魔法でもかかっているの?」

「フン。そういう君はどこに行っても、とろくさく忘れてっぼいな」

ドラコはやり返した後、イリスの目をじっと見た。

「何?」

「君の目は、不思議な色をしているな」

「よく言われるんだけど、そんなに不思議かな?」

ドラコはチェスの手を止めて、イリスの傍に近寄ってその目を見つめた。ぱっと見れば深い青色だが、じっくり見ると——海の底を通して太陽を見ているように——金色の光がちらついている。もつとよく見ようと接近すれば途端に光は消えて元の青色に戻り、諦めて目を



離そうとすると再びゆらゆらと煌めき出す。まるで貴重な宝石を鑑賞しているようだ、ドラコは思った。

「ドラコ、近いよ」

気が付けば、お互いの鼻と鼻がくっつく位の距離にイリスがいた。少し背筋を伸ばして距離を置こうとしながら、眉根を下げて困ったような表情でドラコを見ている。居心地悪そうに彼女が身じろぎした拍子に、耳にかけていた黒髪が一房はらりと解け、微かな花の香りがドラコの鼻をくすぐった。ドラコの脳裏に、パーティーで美しく着飾っていたイリスの姿が浮かぶ。きつとその時に付けた香水の残り香だろう。

——ドラコは何も考えずにイリスの顎に手を添え、彼女の唇にキスをした。

キスの時間は一瞬だったが、我に返ったドラコが慌てて唇と手を離すと、イリスは状況が全く飲み込めていない様子で、ぼかんとした表情を浮かべてドラコを見つめている。

「さっきのは就寝前のキスだ。もう寝ろ！」

ドラコは顔を真っ赤にして、勝負半ばで片付けられる事に口々に文句を言い続けるチェスの駒たちを慌ただしく掻き集めると、勢いよく扉を開けて出て行った。イリスは外国のキスの文化にまだ不慣れだったため、唇にされるキスの意味も余り理解しておらず、そういうものなのかと一人納得し、ベッドに入った。

☆

翌朝、イリスが身だしなみを整えてから朝食を取りに食堂室へ向かうと、ドラコとナルシツサは不在のようで、ルシウス一人だけがテーブルに着いていた。

「おはよう、イリス。二人はまだ起きていないようだ。先に食べる事にしよう」

そういうと、読んでいた日刊予言者新聞を閉じて置き、イリスにテーブルに着くよう促した。テーブルには豪華な朝食が並べられており、どれから食べようかと頭を悩ませているイリスに、ルシウスが唐突に話しかけた。

「君は『バロット』という卵料理を知っているか？」

「『バロット』ですか？」

聞いたことがない料理名だ。魔法界では定番なのだろうか。イリスが頭を捻っていると、ルシウスは納得したように頷いて、話を続けた。

『バロット』というのは、一部のアジア領域内においてマグル界や魔法界でも食べられているもので、孵化直前の卵を茹でて雛ごと食べる料理だ。……すまない、君はアジア育ちだと聞いていたから、知っているのかと思っていたよ。

君は以前、自分の父がどのような人間だったか、私に尋ねていたね。どういえば君にわかりやすく説明できるか考えていた時に、ふとそれを思い出したのだ。何故私知っているかと言うと、学生時代、学友とフリピンを旅行していた時、興味本位でそれを一度食べた事があったね。見た目は勿論いびつな雛の姿をしていて憐れみを誘ったが、その分どこか背徳的で、味も非常に美味だった。

——イリス。君の父は、まさに『バロット』だった。誰にも引けを取らない程の才能や魔力を有しているのに、それを一度も開花させる事なく殻の中に閉じ籠もったまま成長し、本来の姿になる事を拒み、殻を破る事無く未完成な姿のまま死んでしまった。……君は彼によく似ている。似ているからこそ、私は君に、そうな<sup>って欲しくはない</sup>。イリスはルシウスの言葉の意味を考えたが、よく理解が出来なかった。とにかく、勉強をがんばら<sup>って事かな</sup>。曖昧な返事をした後、ルシウスの視線から無意識に逃げるようにテーブルを見ると、精緻な造りのエッグスタンドに卵が設置してあった。果たしてこれはゆで卵なのか、生卵なのか、それとも『バロット』なのか。未知の料理に固まったイリスに気づくと、ルシウスは口元だけで微笑んで鷹揚な動作で席を立ち、イリスの背後からそつと手を伸ばした。

「——私が教<sup>えてあげよう</sup>」

耳元でそう囁くと、イリスの手を取り、スタンドの横に置かれた小さな銀製のスプーンを握らせる。エッグスタンドに空いた手を添えさせ、卵の頂点をスプーンの頭で軽く数度叩き、上品に殻を割らせた。

中身を飛び散らせる事無く優雅に殻を取り除けると、現れた半熟の中身をスプーンで掻き混ぜ、すくってイリスの口元に持って来させる。大人に食べさせられるなんて、まるで赤ちゃんみたいだ。イリスは恥ずかしがって少しためらったが、おずおずと自らの手を包み込むルシウスの手から、卵を食べた。

「美味しいかね？」

「はい」

イリスの返答を聞くと、ルシウスは猛禽類を思わせる鋭い目つきを隠そうともせず、満足気に笑った。

## File 12. 忠告と選択

楽しかったクリスマス休暇はあっという間に終わりを告げ、新学期が始まる一日前にイリスはドラコと共にホグワーツへ戻った。スリザリン寮の前でドラコにお別れを言った後、イリスは一目散にグリフィンドール塔へ向かって駆け出した。やがてたどり着いた寮の談話室で、ハリーとロン、一足先に戻っていたハーマイオニーを見つけ、イリスは心が暖かくなるのを感じた。

「ただいまー！」

イリスは三人に向け笑顔でそう言ったが、「おかえり」と返してくれたのはハーマイオニーだけだった。ハリーとロンは物も言わず、仏頂面でイリスを睨んでいる。

「今ちようど、貴方の話をしていたのよ」

ハーマイオニーが気まずい雰囲気但至少でも良くしようと、努めて明るく話しかける。ハリーたちの無言の怒りを察したイリスが、笑顔を引つ込めて三人のくつろぐソファの端っこに座るや否や、ハリーとロンは彼女の頭の天辺から足の先までを、無遠慮にじろじろ眺め回した。まるでクリスマス休暇前と後で、イリスの外見や中身に何か『間違い』がないか探しているようだった。

「そのリボン、何だい？」

やがて『間違い』——イリスの髪を飾るリボンだ——を見つけたロンが、藪から棒に聞いた。イリスが嬉しそうにドラコの両親から送られたものだと言うと、二人は露骨に顔をしかめた。

「それ、呪いがかけられてるんじゃないか？」とロン。

「外した方がいいよ」とハリー。

「呪いなんかかけるわけない、ルシウスさんもナルシツサさんもとっても良い人だよ。二人とも誤解してるよ」

イリスは慌ててかぶりを振った。マルフォイ家で過ごした日々がどんなに素晴らしいものであったか、イリスは一生懸命三人に話して聞かせた（念のため、フラメルについて聞いたり喋ったりしていない事も言っておいた）。ルシウスは決してロンの言っていたような悪い

魔法使いではない。実際、広々とした屋敷中をドラコと一緒に探検したが、闇の魔法を彷彿とさせる怪しげな代物は微塵も見当たらなかった。それどころか、ルシウスとナルシツサはイリスを本当の娘のように可愛がり、大事な客人としても、彼女が望む以上のものを豊富に与え、優雅で贅沢な生活を思う存分堪能させたのだ。つまるところイリスは休暇中、お伽噺で言う『シンデレラ』のような体験をして、夢見心地になっていたのだった。

イリスが夢中になって話せば話すほど、ハリーとロンは考えを改めるどころか、ますます不機嫌さを募らせていく。二人にとつて、大好きな友達のイリスが宿敵マルフォイの屋敷で楽しく過ごしたという事実は、到底許しがたく耐えられないものだった。一方のハーマイオニーは、何かを考え込むような真剣な表情でイリスの話を聞いていた。

「もういいよ。君、マルフォイの家でお姫様みたいにちやほやされて、良い気になってやしないか」

ついにロンがいらいらが爆発し、荒々しく声を上げて話を遮った。

「そんなにマルフォイの家が好きなら、養子にでもなれば」

ハリーもつつけんどんに続けるが、見かねたハーマイオニーが「やめなさい！」と言い放つと、二人は口をつぐんだ。そして二人の顔を交互に見て、おろおろしているイリスの手を掴み、「少しお話ししましょ」と優しく囁いた。彼女はハリーたちから離れた位置にある二人掛けのソファへイリスを連れて行き、少しためらった後こう言った。「イリス。私も……とつても言いにくいんだけど……貴方のお話を聞いてると、マルフォイ家とは少し距離を置いた方がいいと思うわ。あの二人みために、単純に焼きもちを焼いてるんじゃないのよ。

休暇中、気になつてずつと考えてたの。あの時、マルフォイは『前に貴方に確認したら、貴方は行くと言った』と言っていたわよね。

……本当に貴方は行くと言ったの？

貴方はいつも日々のどんな些細な事だつて私に話してくれるわ。でも、この話だけは——大事な話なのに、どう頑張つて思い出しても、私は聞いた覚えがないのよ。

それに、マルフォイのお父様からの手紙の事も、マルフォイが貴方に話したタイムリングや言い方も——まるで、貴方に断らせないようになっているみたいだった。

・・・イリス、貴方にはまだ難しい事かもしれないけれど、目に見える事だけが真実ではないのよ。私は大人の人と接する機会が多かったから、それがよく解る。貴方は少し無防備すぎるわ」

イリスはハーマイオニーの忠告を、素直に受け入れる事が出来なかった。それはイリスが単純で警戒心もほぼ持ち合わせていないため、自分に対して明確な厚意を示してくれたマルフォイ家の人々を警戒し否定するなど、とてもじゃないが考えられない事だったのだ。イリスは彼女の言葉に何と答えて良いか分からず、困った顔で目の前のテーブルを見た。そこには何時の間にもやらロンのポケットから逃げ出したねずみのスカバースがいて、テーブルの上のかぼちやパイを盛大に食べ散らかしていた。

☆

新学期が始まった。ハーマイオニーの説得のおかげで、ハリーとロンはイリスに普段通り接するようになった。しかしまだイリスがリボンを付けている事と、時折ドラコが友達面をして親しげにイリスに挨拶をする事が気に入らないようで、度々イリスに嫌味を言い放った（こればかりはハーマイオニーがいくら口酸っぱく説教しても治らなかった）。イリスは二人の嫌味を甘んじて受け入れる代わりに、ドラコが意地悪な事を言うたびに『友達』として物怖じせずにしたしなめ続けた。

再び十分間の休み時間中に、四人は図書館へ赴いては本をあさった。みんな殆ど諦めかけていたが、やがてハリーがクイディッチの練習に明け暮れて欠席がちになると、イリスは彼の分まで頑張ろうと自分を奮い立たせて、ニコラス・フラメルを求めて本の海を泳ぎ続けた。

ある日の昼前頃、いつも通り図書館を出て三人は寮に戻った。イリスが隣に座るハーマイオニーの肩に頭を預けながら、ハーマイオニーとロンのチェスゲームをぼんやり見守っていると、練習を終えたハリーがロンの傍に座った。

「今は話しかけないで」

ロンはハリーが隣に座るなり、チェス盤から目を離さないまま真剣な表情で言った。ハリーがそわそわと落ち着かない様子なのを見て、「何かあったの？」と気を使ってイリスが聞いた。

ハリーは三人だけに聞こえるような小さい声で『スネイプが突然クイディッチの審判をやりたいと言い出した』という不吉なニュースを伝えた。——何故スネイプが？彼がクイディッチに興味がある素振り等、他のどの一年生たちよりも、確実に長い間彼と共に過ごしている自覚のあるイリスでさえ、見た事がない。その余りにも不可解な内容に、ハーマイオニーとロンもチェスの手を止めて、すぐ反応した。

イリスはふと不安に駆られた。イリスはハリーと甲乙つけがたい位、スネイプに目を付けられている。しかし、長きに渡りスネイプの目を見続けるうちに、彼の『自分に対する目』と『ハリーに対する目』は違うのだと気づいた。最初の方は、ハリーがグリフィンボール生で、『魔法界の有名人』という何かと目立つ存在だから、単にそれが気に入らなくて彼をいじめているのだと思っていたが——どうやら理由は、それだけではないようだ、イリスは思うようになった。

——スネイプは理由こそ解らないが、ハリーを心から憎み、嫌っているのだ。それは誰が見ても明らかだったし、ハリー自身が一番自覚している事だった。箒の事件以降、ハリーはスネイプを嫌うのを通り越して、怯えるようになった。イリスが自分の方がもっと酷いと、選りすぐりのエピソードを語り彼を慰めても、彼の気持ちは治まらないようだった。やがて彼はその不安を忘れるため、クイディッチの練習に精を出すようになって、少しはマシになったようだが——まさかクイディッチにまでスネイプが入り込んでくるとは予想外だった。勿論イリスは（ハリーたちには言えないけれど）スネイプの無実を信じている。・・・だが、クイディッチは野蛮で危険なスポーツだ。ちよつとしたアクシデントが大怪我に繋がりがねない。万が一、試合中スネイプの謎の憎悪心が爆発し、それがハリーに向けられてしまったら。縁起でもない事を想像して、イリスは心臓がヒヤリとした。「試合に出ちゃだめよ」とハーマイオニー。

「病氣だつて言えば」とロン。

「他の選手に出てもらえばいいじゃん」とイリス。

「言えないよ。それにシーカーの補欠はいないんだ。僕が出ないとグリフィンボールはプレイできなくなってしまう」

四人の間に重々しい空気が流れたその時、ネビルが談話室に倒れ込んできた。彼の両足はボンドで固められたようにピツタリくっ付いており、『足縛りの呪い』を掛けられたことがすぐわかった。どこで掛けられたのかは分からないが、グリフィンボール塔までずっとウサギ飛びをしてきたに違いない。ネビルの顔は真っ赤になり、全身に汗をびっしょりかいて息を荒げていた。みんなその姿に笑い転げたが、イリスは慌ててネビルに駆け寄り、ハーマイオニーはすぐ呪いを解く呪文を唱えた。両足がぱつと離れ、ネビルはイリスに支えられながらよろよろ立ち上がった。

「どうしたの?」

ネビルをハリーとロンの傍に座らせ、背中を摩ってやりながらイリスが聞いた。

「マルフォイが・・・」

ネビルが震え声で答えた。イリスは頭を誰かに思いきり殴られたような衝撃を感じた。・・・ドラコが、何だつて?」

「図書館の外で出会ったの。誰かに呪文を試してみたかつたつて・・・」  
イリスは眩暈がした。ドラコが、ネビルに呪いをかけたのだ。それも面白半分で。ネビルのような、何も言い返せないような、気が弱く、心優しい者を選んで。

「良い友達じゃないか、え?イリス!呪いをかけてくれるなんてきー!」  
ロンが腹立ちまぎれにイリスに叫んだ。

「マクゴナガル先生のところへ行きなさいよ!マルフォイがやったつて報告するのよ!」と怒りで顔を真っ赤にしたハーマイオニーが急ぎ立てた。

しかし、ネビルは弱々しく首を横に振って、「これ以上面倒はいやだ」と呟いた。告げ口をした報復に、また嫌がらせをされる事を恐れているのだ。



「ネビル、勇気を出して。やられっぱなしじゃだめだ。マルフォイに立ち向かわなきゃ」

「僕は勇気がなくてグリフィンボールにふさわしくないなんて、言わなくてもわかってるよ。マルフォイがさっきそう言ったから」

ロンがネビルを勇気づけるように言うが、ネビルの態度は煮え切らない。それを見たハリーはローブのポケットを探り蛙チョコレートを取り出すとネビルに差し出し、彼を一生懸命励まし始めた。

「ネビル、ごめん……ごめんね……」

イリスは自分が恥ずかしかった。ドラコが元々意地悪な性格なのは知っていた。何せ、ハリーたちだけでなく、イリス自身も彼に散々からかわれ続けてきたのだから。しかし、休暇を通してイリスはドラコの意地悪な面以外のさまざまな良い面も知ってしまった。その結果、イリスは今までの考えを改め、ドラコをハリーたちと同じような『親しい友達』として見るようになった。そしてハーマイオニーと同じように、ドラコの意地悪も自分がその度に説得し続ければ、いずれは改善され、今は犬猿の仲のハリーたちとも仲良くなれるだろうと考えていた。しかし、それはイリスの見当違いだった。ドラコはドラコだった。面白半分で人に呪いをかけるなんて、常軌を逸している。優しいネビルをこんな惨い目に合わせるなんて。——友達だった自分が、どうしてそれを止められなかった？イリスが自分を恥じて泣いていると、ネビルは彼自身が一番辛い筈なのに、健気にもイリスに微笑んで見せた。

「イリス、君が呪いをかけたんじゃないのに、どうして泣くの？君は優しいんだね。……ハリー、ありがとう。僕、もう寝るよ。カードあげる。集めてるんだろう」

談話室の壁掛け時計が正午ぴったりを差し、古びた鐘の音が鳴り始める。ネビルが行ってしまってから、イリスはいよいよ本格的に泣き始めた。

「これでわかったら？マルフォイは良いやつなんかじゃない」ロンが静かに言った。

ハリーはイリスの頭を撫でながら、ネビルからもらった『アルバス・

ダンブルドア』のカードを眺めた。カードを裏返して見た瞬間、ハリーはハツとした表情で三人の顔を見た。

「見つけたぞ！フラメルを見つけた！どっかで名前を見たことがあるって言ったよね。ホグワーツに来る列車の中で見たんだ。聞いて・・・『アルバス・ダンブルドアは、パートナーであるニコラス・フラメルとの錬金術の共同開発などで有名』」

その言葉を聞いた途端、ハーマイオニーは歓声を上げてウサギのように高く飛び上がった。思わず呆気に取られた三人を見向きもせず、「ちよつと待ってて！」と言うなり女子寮への階段を駆け上がり、数分もしないうちに古めかしい巨大な本を大事そうに抱えて戻って来た。「この本で探してみようなんて考えつきもしなかったわ。ちよつと軽い読書をしようと思つて、ずいぶん前に図書館から借り出していたの」

「軽い？」聞き捨てならないとばかりに、ロンとイリスの声がハミングした。

ハーマイオニーは二人に一切構うことなく、ブツブツと独り言を言いながら物凄い勢いでページをめくり始めた。間もなくお目当てのものを発見し、込み上げる笑みを抑える事無くうっとりとした口調で読み上げる。

「これだわ！・・・『ニコラスフラメルは我々の知る限り、賢者の石の創造に成功した唯一の者』！」

三人が覗き込むと、そこにはこう書いてあった。——錬金術とは、『賢者の石』と言われる恐るべき力を持つ伝説の物質を想像することに関わる古代の学問で、現存する賢者の石は著名な錬金術師であるニコラス・フラメルが所有している。フラメル氏は昨年六六五歳の誕生日を迎え、夫人と共に静かに暮らしている——

「ねっ？あの犬はフラメルの『賢者の石』を守ってるに違いないわ。フラメルがきつとダンブルドアに保管してくれって頼んだのよ。フラメルは誰かが狙っているのを知ってたから、グリーンゴツツから石を移してほしかったんだわ」

四人はとてつもない達成感に満たされ、ホウとため息を零しながら

キラキラ輝く瞳でお互いを見合った。長い間探し続けて来た謎が、今やつと解き明かされたのだ。

「金を作る石、死なない様にする石！スネイプが狙うのも無理ないよ。誰だってほしいもの」充足感を噛みしめるように、ハリーがしみじみと言った。

☆

結局、ハリーはクイディッチの試合に出る事を決めた。三人は勿論引き止めたが、ハリーの意志は固く変わらなかった。試合当日、三人は更衣室の外でそれぞれ激励しながらハリーを見送った。スタンドにたどり着くなり、神妙な顔を浮かべて物も言わずに座る三人を、隣のネビルがぼかんとした表情で見つめている。が、三人はおかまいなしだった。ドラコの意地悪から教訓を得た三人は、密かに杖をそれぞれのローブの袖に隠し持っていた。もしスネイプが試合中、ハリーを傷つけるような素振りを見せたら、『足縛りの呪文』をかけようと準備していたのだ。

スタンドは大勢の人々でごった返していた。イリスは学校中の人々が観戦に来ているのではないか、と思った位だった。きよろきよろと物珍しげに周囲を見渡したイリスは・・・何と、来賓席にダンブルドア校長の姿を見つけた。良かった、ダンブルドアがいれば何が起こつても安心だ。イリスはほっとしたが、グラウンドに視線を落とすと、審判のスネイプは蒼白な表情で唇を引き結んでいる。どう鼻真目に見ても、クイディッチの審判になれて嬉しそうな様子ではなかった。

・・・もうじき試合が始まる。どうか何事もなく試合が終わりますように。彼女の気持ちは不安で張り裂けそうだった。それはロンもハーマイオニーも同じようで、食い入るような真剣な表情でグラウンドを注視している。

「さあ、プレイボールだ。アイタツ！」

興奮して上ずった声で叫んだロンの頭を、後ろから誰かが小突いた。イリスが驚いて振り返ると、犯人は・・・何と、ドラコだった。傍らにクラブとゴイルも従えている。

「ああ、ごめん。ウィーズリー、気が付かなかったよ。この試合、ポッターはどのくらい籌に乗っていられるかな？誰か、賭けるかい？イリス、君はどうだ？」

ドラコの憎たらしい笑顔を見た瞬間、イリスの脳裏に昨日の出来事が思い浮かび、心の中で怒りのマグマがふつと湧き出すのを感じた。緊張でとつともなく気が立っていたのもあるし、『友達』として彼の行き過ぎた行動や言動を今こそ止めるべきだと思った。イリスは、今度はネビルに絡み始めたドラコに強い視線を投げかけながら、椅子からゆっくり立ち上がった。絡まれたネビルは顔を羞恥で真っ赤に染めたが、座ったまま後ろを振り返ってマルフォイの顔をこわごわと見つめた。

「マルフォイ、ぼ、僕は、君が十人束になっても叶わないぐらい価値があるんだ」

ネビルがつつかえながらも言い返すと、ドラコはクラツブやゴイルと揃ってさも愉快そうに大笑いした。ロンも試合を気にしながらではあるが、怒りの形相でドラコたちを睥睨している。

「ロン！イリス！」突然ハーマイオニーが叫んだ。

「何？」

「ハリーが！」

イリスが慌てて目線をグラウンドへ戻すと、ハリーが突然上空から凄まじいスピードで急降下を始めたのが見えた。その素晴らしさに観衆は息をのみ、大歓声を上げた。ハリーは弾丸のように一直線に地上に向かって突っ込んでいく。——きつとスニッチを見つけたのだ！イリスは背筋がぞくぞくするほど見惚れてしまった。

「運が良いぞ！ポッターはきつと地面にお金が落ちているのを見つけたに違いない！」

ドラコの嫌味は、イリスの意識を強引にハリーから引き剥がしてしまった。——イリスはどうとう我慢できなくなった。齢11年の人生にして初めて、切れてしまったのだ。怒り狂ったロンが飛び出すより早く、イリスはスカートが翻るのも構わずドラコに抱き着くように体当たりし、勢い余って地面に組み伏せていた。それを合図としたか

のように、ロンがすかさずクラブに飛びかかり、ネビルは少しの間怯んだものの、観客席の椅子をまたいで、ドラコを助けようと動き出したゴイルに渾身のタックルを決めていた。

「謝ってよーハリーに謝れ！なんでそんなことしか言えないの?!」

イリスは怒りで顔を真っ赤にしながら、ドラコの胸倉を掴み揺さぶった。予想外のイリスの行動に一瞬茫然としたドラコだったが、すぐ我に返り、イリスの体を捉えて力任せに反転した。今度はドラコがイリスを組み伏せる。

「僕に命令するな、この泣き虫め！誰のおかげで僕の屋敷に来れたと思ってるんだ?!」

「ルシウスさんのおかげでしょー！ドラコのおかげじゃないっ！」

イリスは息を荒げながら、勢いを付けて上体を起こし、すぐ後ろにあった椅子にドラコを押し込んだ。

「私のことはいくら悪い風に言ってもいいけど、友達のこととは悪く言わないで！」

「だから悪く言ってるんじゃない。本当のことさ。何回言わせるんだ、君は馬鹿か？」

ドラコはいつものように鼻先で笑ってイリスをあしらおうとしたが、今回ばかりは彼女も引かなかった。

「だから、それが悪意があるって何回も言ってるじゃん！君の方こそ馬鹿なんじゃないの?!」

怯むことなく果敢にも声を荒げて、言い返したのだ。

「何だと?!」

プライドを傷つけられ、ドラコの青白い顔にさっと赤みが走る。ドラコとイリスはお互いに舌戦を繰り広げながら、徹底的にやり合った。

☆

クリスマス休暇が楽しかったのは、ドラコも同じ事だった。イリスはドラコにとって、マグルかぶれの『友達以下』にも関わらず、父のお気に入り故に目を掛けねばならない、楽しい学校生活に影を差す目の上のタンコブのような存在だった。しかし、いざ二人きりになつて

じっくり向かい合ってみると、ドラコのイリスに対する認識はがらりと変わった。イリスの放つ人畜無害な小動物のような雰囲気は、意外にも——上流階級の人間関係で疲弊し切ったドラコの心を癒し、和ませたのだ。それに休暇中は、イリスは借りて来た猫のように大人しく、まるでドラコが操る糸に忠実に従うマリオネットのように、何でも彼の言う通りに動き、軽口は叩くものの逆らう事は一度もなかった。実際、ドラコがイリスを衝動的に愛おしいと思ってキスしてしまっても——イリスが世間知らずだった所為もあるが——彼女は何も言わなかったのだ。

しかし、休暇が終わってホグワーツに戻ると、イリスを操っていた筈の見えない糸はぶつんと切れ、イリスはドラコの手元から離れて行った。ドラコはホグワーツでも、イリスを常に自分の傍に置き、彼女の宝石のような瞳を自分が満足いくまでずっと眺めていたかったし、時にはチェスの相手もさせたいと願うようになった。だが、イリスはドラコのそんな想いも知らず、彼が誰かに意地悪を言うたびに、『友達』として今までよりもずっとフランクな調子でたしなめるようになった。生意気にも、休暇を通してイリスは自分を『対等の友達』として認識するようになったのだ。今では彼に反抗し、喧嘩してしまう程に。

——今や、ドラコとイリスはズタボロ状態だった。制服は泥にまみれ、乱れ、あちこちにあざや擦り傷もできている。二人は息を荒げながら、お互いの行き違う思いをぶつけるように睨み合った。

☆

不意にスタンドがどつと沸いた。ハリーが新記録を達成した。試合が始まって五分以内にスニッチを捕まえ、試合を終了させたのだ。「ロン・イリス！どこ行ったの?! 試合終了よ！ハリーが勝った！私たちの勝ちよ！グリフィンドールが首位に立ったわ！」

ハーマイオニーが飛び跳ねながら叫んでいる。彼女は幸運な事に、後ろで起きている惨劇に気づいていないようだ。イリスはすぐ反応し、ドラコから目を離してハーマイオニーの方へ走って行こうとした。ドラコは何とかしてイリスを引き止めなければならぬと思っ

た。——行ってしまう。自分からその目を逸らしてしまう。それはイリスに恋心を抱くようになったドラコにとって、何よりも許せない事だった。再び、彼女の関心をこちらへ呼び戻す事の出来るとっておきの手札を、ドラコは迷わず切ってしまった。

「おい、イリス！」

不意に大きな声で名前を呼ばれて、イリスはしかめっ面で振り返った。

「何？」

「君は何故、僕のパパとママが君に対して、あんなに優しいのか知ってるか？」

ドラコはニヤニヤとこれ以上無い位、意地悪い笑みを浮かべて問いかける。言葉の真意を測りかねているイリスを見て、ドラコはスタンズの歓声に負けないような声で叫んだ。

「君を哀れんでいるからさ！マグル界でスクイブに育てられた、親なしの君をね！」

イリスは彼の言葉を理解すると同時に、絶句した。スクイブ？——それはイオのことを言っているのか？全身の血の気が、音を立てて引いていくのを感じる。

「嘘じゃない。僕はパパにそう頼まれたんだ。『哀れな物知らずの君に、魔法界の常識を教えてやれ』ってね。

クリスマス休暇は楽しかったろう？貧乏人の君には夢のような一時だった筈だ！大きな部屋に服、装飾品にパーティー・・・両親にちやほやされて、何にも知らずに嬉しそうにしている君の馬鹿面と言ったら！最高の見物だったよ！

・・・どうだい、泣き虫！泣き方も忘れちゃったのか？」

ドラコの語るルシウスの言葉は、完全なる誇張表現だった。だが、イリスはその言葉に完膚なきまでに打ちのめされた。一方のドラコはどんな形であれ、イリスが再び自分を見てくれた事に歪んだ喜びを感じていた。イリスは瞳に涙をいっぱい貯めて、ドラコの前へ早歩きで近寄った。金箔混じりのサファイアを嵌め込んだような彼女の双眸が、ドラコを憎々しげに睥睨する。

「・・・大っ嫌い!!」

そう言い捨てると、イリスは振り返りもせず、ハーマイオニーの方へ一目散に駆け出した。

「ああそうかい、僕も君が大っ嫌いだ!!」

ドラコも負けずに叫んだが、イリスに『大嫌い』と言われる事で、何故こんなに自分の心が傷つき掻き乱されるのか、全く理解できなかった。腹立ちまぎれに地面を蹴り上げると、銀色のリボンがきらきらと輝きながら土埃と共に舞い上がる。——きつとイリスが、さっきの喧嘩の時に落としたのだろう。それはまるで休暇中の二人を繋いでいた糸のように思え、ドラコは無言でそれを拾い上げた。

——どうしたら手に入れられる?ドラコは思った。どうしたらあの目を、僕だけに向けさせられる?

ふとスタンドに顔を向けると、上空からハリーが、笑顔でイリスに手を振っている。嬉しそうに手を振り返すイリスを見て、ドラコの心は嫉妬とどす黒い感情で燃え上がった。・・・英雄のハリー・ポッター。あいつのせいだ。僕がどう足掻いた所で、全部持って行ってしまおう。イリスの友人で、同じグリフィンドール生のあいつが。四六時中イリスの傍にいて、まるでフルーツをもぎ取るように気軽な感覚で、いとも簡単に横から手を伸ばして彼女を搔っ攫っていく。ドラコはクラツブとゴイルが声を掛けるまで、ハリーを親の敵を見るような目で睨み続けていた。

☆

戦いが終わった後、イリスとロンとネビルはお互いの健闘を医務室で讃え合った。

「おっどろいたなー、君。意外と根性あるんだね。見直したよ」

「でも結局、ドラコに謝ってもらえなかったよ・・・決着もつかずなかつたし・・・」

ロンが興奮してイリスの肩を盛んに叩くが、イリスは見るからに落ち込んでいた。いくら忘れっぽい彼女と言えども、先程のドラコの言葉を頭の中から消す事は当分出来そうになかった。

「僕、何だかすごく良い気分だ」



ネビルは、体中包帯だらけだったが、憑き物が取れたようにすつきりとした表情を浮かべていた。

☆

無事治療を終えたイリスとロンがお祭り騒ぎ状態の談話室に戻ると、すぐさまハリーが早足でやって来た。随分思いつめた表情をしている。ロンが高ぶる気持ちを抑え切れず、自分たちの健闘っぷりを聞かせようとする、ハリーはそれを容赦なく遮ってしまった。

「それどころじゃない。どこか誰もいない部屋を探そう。——大変な話があるんだ」

ハリーは三人を引き連れ、適当な部屋を見繕った。ピーブスがいなことを確かめてから部屋のドアをぴたりと閉め、三人に今見てきた事、聞いてきた事を話して聞かせた。

「僕らは正しかった。賢者の石だったんだ。それを手に入れるのを手伝えって、スネイプがクイレルを脅してたんだ」

ハリーは続けて、スネイプがクイレルに対し、『三頭犬フラツフィーを出し抜く方法』と『怪しげなまやかし』について、尋問していた事を告げた。もしかしたら、フラツフィー以外にも何か特別なものが石を守っていて、クイレルもその一つとして、石を守るために闇の魔術に対抗するような呪文を掛けたので、石を手に入れるためにスネイプがそれを破らなくてはいけないのかもしれない、と締めくくった。それを聞いて、イリスはいよいよ気分が暗くなった。決して認めたくはないが、ハリーが嘘を言っているようには思えない。——スネイプが石を狙う犯人なのだ。

「それじゃあ、賢者の石が安全なのは、クイレルがスネイプに対抗している間だけ、ということになるわ」ハーマイオニーが警告した。

「クイレルが相手じゃ、三日ともたないな。石はすぐなくなっちゃうよ」とロンが真剣な声で言った。

## File 13. ミッドナイト・ドラゴン

イリスは次の日の朝になってやっと、ナルシッサからもらったりボンが無くなっている事に気づいた。きつと喧嘩の時に落としてしまったのだ、と唇を噛む。授業の合間の休み時間を利用して競技場へ何度も探しに行ったが、残念な事にリボンは見つからなかった。あの時共に戦ったロンやネビルに聞いても「知らない」と答えが返って来たし、ドラコに聞くのは論外だった。——あの日以降、ドラコはイリスを無視するようになっていたからだ（ドラコに腹を立てていたイリスにとっても、それは願ってもない事だった）。

四階の廊下を通る度、四人は扉に耳をつけて、三頭犬フラツフィーの唸り声が聞こえるかどうかを確かめた。毎週金曜日に魔法薬学の補習授業のあるイリスは、三人からスネイプの偵察係を任命された。イリスが補習から解放され三人の待つ談話室に戻る度に、スネイプは今日も変わらず不機嫌だったという事を伝えると、それこそまだ『賢者の石』が無事な証拠だと三人はホッとしていた。

☆

やがて試験まで三か月を切るようになると、ハーマイオニーは自らも含めて全員分の学習予定表を作り、ノートにマークで印を付け始めた。そして予定表の通りに勉強するよう、三人に口酸っぱく勧めた。

「おいおい、ハーマイオニー。試験はまだずーっと先だよ」

「十週間先でしょ。ずーっと先じゃないわ。フラメル時間にしたらほんの一秒でしょう」

ロンが非難の言葉を向けるが、ハーマイオニーはにべもなく言い返す。

「僕たち、六百歳じゃないんだぜ」

「あのね、ロン・・・」

懐かしのロン対ハーマイオニーの戦いの幕が、今まさに切つて落とされようとしていた。すかさずイリスは膝の上に載っていたスキヤバーズを持ち上げ、片手を銃の形に見立てて指先をスキヤバーズに押

し当て、睨みあう二人の間に入り込むと、ロンに芝居がかった低い声で言い放った。

「ロン、スキヤバーズの命が惜しければ、ハーミー先生の言う通りに勉強するんだ！」

イリスは勉強が原因でハーマイオニーと喧嘩したトラウマがあるため、勉強に関しては全面的にハーマイオニーの味方だった。イリスの一発ギャグにハーマイオニーとハリーは合点が行った顔をしてクスツと笑ったけれど、純粋な魔法界育ちのロンは『銃』を知らないので、ポカンとして「何だいそれ」と言った切りだった。滑ったイリスはたちまち恥ずかしくなって、人質のスキヤバーズを解放した。

☆

復活祭の休みは山のように宿題が出た。試験も——ハーマイオニーが言うには——間近に迫っているため、イリスは久々に勉強尽くしの日々を送る事となった。ハーマイオニーと一緒に宿題を片付けながら、試験に向けてドラゴンの血の十二種類の利用法を暗唱したり、杖の振り方を練習したりした。再び、四人は図書館に通い詰めるようになったが、四人のうち、とりわけロンは早くも我慢の限界が近づいていた。

「こんなのとつても覚えきれないよ！」

とうとうロンが音をあげ、羽根ペンを乱暴に投げ出した。イリスは『魔法薬調合法』の内容を血眼で暗記していたため、余計なもの（ロンの魂の叫び）を頭に入れないように聞き流した。ロンは図書館の窓から忘れな草色に澄み渡った空を恨めし気に睨み、再び視線を机の上に戻そうとしたところで——不意に素っ頓狂な声を上げた。

「ハグリッド！ 図書館で何をしてるんだい？」

——ハグリッド？ 途端にイリスの集中力は霧散し、慌てて教科書から顔を上げる。そこには本当にハグリッドが、バツの悪そうにもじもじしながら立っていた。図書館とごわごわした素材の上着を着た大きなハグリッドは、とてもミスマッチだった。背中に何か隠しているようで、両手は不自然な程後ろに回っている。

「いや、ちーつと見てるだけ」

ハグリッドの声は明らかに何かを誤魔化すように上擦っていたので、結局ロンとイリスだけでなくハリーとハーマイオニーも顔を上げて、ハグリッドに注目する事となってしまった。

ハグリッドとの出会いは、彼にとつては不幸な事だったかもしれないが、このところ勉強三昧で辟易していたハリーとロンにとつては、幸運な事——良い気分転換だったようだ。二人とも怒涛の勢いで、ハグリッドに『賢者の石』を守っているものは他に何かあるのか、追及していく。彼らの敏腕刑事さながらの手腕に、イリスは思わず舌を巻いた。取り調べの末、一時間後小屋で落ち合う事を約束させられ、疲労困憊したハグリッドはよろよろ去って行った。

「ハグリッドったら、背中に何を隠していたのかしら」

ハーマイオニーの疑問に、ロンが素早く立ち上がり、ハグリッドがいた書棚の方へ早歩きで向かった。程なくして、ロンはどつきり本を抱えて持ってきて、テーブルの上にとんと置いた。

「ドラゴンだよ！」ロンが興奮しながらも、マダム・ピンズに咎められないような声量で叫ぶ。

「ドラゴンって本当にいたんだ！」

イリスは胸をときめかせながら、ロンの持ってきた『ドラゴンの飼い方——卵から灼熱地獄まで』という本を手を取った。そういえば、ダイアゴン横丁でハグリッドがそんな冗談を言っていたっけ。気が付くと、ハーマイオニーが「ドラゴンがいる事は、とつくの昔に授業で習ったわよね？」と言わんばかりのジト目でイリスを見ていたので、イリスは慌てて目を逸らした。

「初めてハグリッドに会った時、ずーっと前からドラゴンを飼っていたって思ってたって、そう言ってたよ」とハリー。

「でも、僕たちの世界じゃ法律違反だよ。一九七〇年のワーロック法で、ドラゴン飼育は違法になったんだ。みんな知ってる。まあ、どの道凶暴なドラゴンを手なずけるのは無理だけどね」とロンが冷静に続けた。

「・・・エッ、法律違反なの？」とイリス。

「じゃあ、ハグリッドは一体何を考えてるのかしら」最後に、ハーマイ

オニーが呟くように言った。

☆

一時間後、四人はハグリッドの小屋へ向かった。驚いた事に窓のカーテンは全て閉められており、中を覗き見る事はできない。イリスが代表して扉をノックすると、ハグリッドがほんの数センチ扉を開けて四人の顔を確認するや否や、四人を中に入れずぐ扉を閉めた。——中は窒息しそうな位、熱い。季節ももう春の半ばで随分と温かくなっているというのに、暖炉には轟々と火が燃えている。ハグリッドは四人のために熱い紅茶を淹れ、イタチサンドを勧めたが、イリス以外の三人は流れ落ちる汗を拭いながら断った。

「それでお前さん、何か聞きたいんだったな？」ハグリッドがハリーに尋ねる。

「ウン。フラッツフィー以外に、『賢者の石』を守っているのは何か、教えてもらえたらなって」とハリーは単刀直入に聞いた。

当然ハグリッドはしかめ面をして「教える事はできない」とかぶりを振ったが、選手交代したハーマイオニーが今度は優しい声音で言葉巧みにおだて始める。イリスが一つ目のイタチサンドをたいらげる間に、彼女は見事ハグリッドから情報を聞き出す事に成功した。三人は涼しい顔をしてみせるハーマイオニーに「よくやった」と目配せをした。彼女の言葉に気を良くしたハグリッドは『石を守るために誰が魔法の罫をかけたのか』得意げに語り始めた。それはいずれもホグワーツの教師達だった——ハグリッドとダンブルドア校長、スプラウト先生、フリットウィック先生、マクゴナガル先生、クイレル先生、スネイプ先生……。

「スネイプだって？」聞き捨てならないと、ハリーが声を上げる。

「ああ、そうだ。まだあのことにこだわってるのか？スネイプは石を守る方の手助けをしたんだ。盗もうとするはずはない」

イリスは二つ目のイタチサンドに手を伸ばしながら、三人とほぼ同時に目を合わせた。——みんな同じ事を考えていた。もしスネイプが石を守る側にいたならば、他の先生の守る方法についても簡単に把握できるはずだ。——恐らく、クイレル先生とフラッツフィーに関して

だけはまだ分からないのに違いない。

「ねえ、ハグリッド。ハグリッドだけがフラツファイを大人しくさせられるんだよね？誰にも教えたりはしないよね？・・・例え、先生にだって」

ハリーが心配そうに聞くと、ハグリッドは安心させるような笑みを浮かべた。

「ああ、俺とダンブルドア先生以外は誰一人として知らん」

四人はホツとした。ハリーが「それなら安心だ」と三人に呟く。

「あのさ。熱いんだけど、窓開けてもいい？」

ホツとしたついでにロンが聞くと、ハグリッドが暖炉をチラリと見ながら断った。イリスが彼の視線を追いかけると、暖炉の炎の中にヤカンがあり、その下に大きな黒い卵があった。——イリスの脳内で、図書館でハグリッドの見ていた本と卵がバチツとリンクする。

「ねえ、これってドラゴンの卵?！」

イリスが興奮して叫ぶと、ハグリッドは露骨に目を逸らし、曖昧な返事をしながら髭をいじった。そんなことはおかまいなしに、イリスはロンと一緒に火の傍に屈み込んで、卵をもつとよく見ようと目を細めた。ハグリッドは「高かっただろう」というロンの問い掛けに対して『昨日の夜、村へ出かけて酒を飲んだ後、知らない人としたトランプの賭けに勝ってもらったのだ』と誇らしげに答えた。

「だけど、もし卵が孵ったらどうするつもりなの?！」

ハーマイオニーが冷静に尋ねるが、ハグリッドはルンルン気分でドラゴンの種類とその飼い方を話すばかりだ。「この家は木の家なのよ」と彼女が念を押すように言っても、ハグリッドはどこ吹く風で暖炉に薪をくべている。・・・イリスは何となく嫌な予感がした。

☆

ある朝、ハリーのふくろうのヘドウィグが、ハリーにハグリッドからの手紙を渡した。それにはたった一行『いよいよ孵るぞ』と書いてあるのみだった。何が孵るのかはすぐ分かった。ロンは薬草学の授業をさぼって小屋に向かおうと主張したが、当然ハーマイオニーが却下して、二人は口論になった。しかし、すぐさまハリーが二人を制止

させる。——ドラコがほんの数メートル先にいたためだ。ドラコは四人とすれ違う時、イリスにだけ見えるように、彼女に向けて思わせぶりな笑みを見せた。・・・聞かれていた？イリスの嫌な予感ほさらに強まった。

結局、四人は話し合いの末、午前中の休憩時間に急いで小屋へ行つてみようという事になった。扉を開けてくれたハグリッドの顔は、興奮で炎の様に真っ赤に染まっていた。

「もうすぐ出てくるぞ」といそいそ四人を招き入れる。

黒い卵はテーブルの上に置かれ、すでに深い亀裂が入っていた。中で何かが動いている。こつん、こつんと内側から音がしている。椅子をテーブルの傍に引き寄せ、みんな息をひそめて見守った。

突然、黒板を引つ掻くような耳障りな音がして、卵がパツクリと二つに割れ、赤ちゃんドラゴンがテーブルに飛び出した。——イリスは絶句した。よくアニメや子供向けの絵本で見るような、クリクリした目の可愛らしい外見を想像していたのに、実物は皺くちやの黒い蝙蝠傘のようで全然可愛くない。赤ちゃんがくしゃみすると鼻から火花が散ったので、イリスはびっくりして椅子を蹴倒す勢いで飛びのいた。

「すばらしく美しいだろう？」ハグリッドはご満悦だ。

「う、うーん。そうだね。なんていうかその・・・前衛的な、美しさ？」

誰もドラゴンを褒めなかったのも、イリスが代表して必死に言葉を探しているのと、ハーマイオニーが冷静に突っ込んだ。

「ハグリッド。このドラゴンって、ノルウェー・リッジバック種って言うってたわよね。どれぐらいの早さで大きくなるの？」

ハグリッドが嬉々としてその質問に答えようとした途端、彼の顔から血の気が引いた。弾かれたように立ち上がり、窓際に駆け寄った。

「どうしたの？」ハリーが聞いた。

「カーテンの隙間から誰かが覗いておった。・・・子供だ・・・学校の方へ駆けていく」

四人は一斉に立ち上がり、我先に扉へ駆け寄って外を見た。——イリスの嫌な予感は大当たりしてしまった。遠目にだつてわかる。ド

ラコにドラゴンを見られてしまったのだ。

☆

次の週から、ドラコは含みのある薄笑いを浮かべて四人を見るようになった。不安になった四人は暇さえあればハグリッドの小屋に行き、ドラゴンを放してあげるよう説得したが、ハグリッドの態度は煮え切らない。それどころか、ドラゴンに『ノーバート』という名前まで付けて、完全に母親気取りだった。イリスは心配そうにドラゴンを見た。たった一週間で三倍ほどの大きさに成長している。ハリーに聞いたら、二週間もしたらノーバートは小屋ぐらいの大きさになるんだそう。イリスでも、ハグリッドがもうノーバートを育てるのは無理だということはよくわかった。イリスは意を決して口を開いた。

「ハグリッド。ノーバートが可愛いのはわかるけど、ハグリッドが大切にしていたフアングや他の動物たちはどうなるの？ノーバートに食べられたりするかもしれないんだよ？」

「ノーバートがそんなことするもんか！俺がちやあんと行ってきかせるさ」

イリスは辛抱強く言った。

「ねえ、ハグリッド。ドラゴンを飼うことは法律違反なんですよ？もしノーバートが小屋より大きくなったら、もう隠しきれない。学校にばれたら、ハグリッドは逮捕されちゃうんだよ。そうしたら、ノーバートともフアングたちや私たちとも、お別れになっちゃう。フアングをこの小屋で一人ぼっちにさせるの？私もハグリッドと会えないのは絶対に嫌だよ」

ハグリッドは黙り込んだ。ハリーは考えた末、閃いた。以前ロンから聞いた——ルーマニアでドラゴンの研究をしている——彼の兄のチャーリーに、ノーバートを預けたらいいのではないか。ハリーが提案すると、ハグリッドはイリスの顔をおずおずと見てから、断腸の思いでチャーリーにふくろう便を送ることに同意した。

☆

その次の週から、ロンはハリーの透明マントを借りて、夜遅くに談話室を抜け出し、ノーバートのエサやりを密かに手伝うことになっ



た。

「噛まれちゃったよ」

ある晩、透明マントを脱いだロンは、待っていた三人に痛そうに顔をしかめながら血だらけのハンカチに包んだ手を見せた。イリスが慌ててローブのポケットから手持ちの薬とハンカチを取り出して、ハーマイオニーと協力して応急手当てを施していると、こんこんと窓をつつく音がした。——ヘドウィグだ。ハリーは急いで招き入れ、手紙を受け取った。

「チャーリーからの手紙だ！」

みんな頭をくつつけあって、手紙を覗き込む。そこには『今週土曜日の真夜中、一番高い塔にノーバートを連れてくるように』と書き付けてあった。四人は互いに顔を見合わせ、頷いた。

☆

ロンの怪我は悪くなる一方だった。イリスたちの介抱も空しく、やがて腕は二倍くらいの大きさに膨れ上がり、傷口は気持ちの悪い緑色に変わってしまった。もうドラゴンに噛まれた事を発覚するのを恐れ、医務室に行くのを我慢できるような状態ではない。その日の授業が終わった後、三人はロンの見舞いに医務室へ飛んで行った。ロンはベッドに力なく横たわりながら、悪いニュースを三人に伝えた。

「悪い事が起きた。——マルフォイが来たんだ。あいつ、僕の本を借りたって医務室に入って来て・・・何に噛まれたか本当のことをマダム・ポンフリーに言いつけるって脅すんだ」

「土曜日の真夜中にすべて終わるわよ」

ハーマイオニーの言葉は逆効果だった。ロンは突然バネ仕掛けの人形のようにベッドに飛び起き、冷や汗を大量にかき始めた。

「どうしよう！大変だ・・・チャーリーの手紙をあの本に挟んだままだ。僕たちのしようとしていることがマルフォイにばれてしまう」

三人がそれぞれ反応するよりも早く、マダム・ポンフリーはロンを安静にさせるため、三人を追い出してしまった。

☆

「今更計画は変えられないよ」

寮への帰り道、ハリーは頑なな表情でイリスたちに告げた。イリスは頷きながら、ふと中途半端に扉の開いた空き教室に視線をやった。——そこにきらりと光るものを見つけて、無意識に足を止め、目を凝らして、息をのんだ。イリスが探していた、銀色のリボンだ。それは黒板近くの机の上に置かれ、窓から差す日光に反射して、輝いている。きつと誰かが落ちたのを見つけ、あそこに置いておいてくれたのだ。そう思ったイリスは迷わず教室へ入った。

「こんなところにあっただ・・・よかった」

近づいてみると、本当に自分のリボンだった。大事そうに掴み上げた時、ドラコに投げかけられた言葉が頭の中で響いて、胸がチクリと痛んだ。イリスは迷ってから、髪に付けずローブのポケットに入れた。——不意に後ろでドアが閉まり、鍵の掛けられる音がした。イリスが弾かれたように振り返ると、そこには「馬鹿め」とでも言わんばかりの嘲笑を浮かべたドラコが立っていた。

—— 罨だ!! イリスは気づいたが遅すぎた。ドラコは扉の前に立っているため、彼をどかさないうり自分は出られない。となれば、やる事の一つだ。イリスは咄嗟にファイティング・ポーズを取った。

「な、何だよ?あの続きでもしようってか?!

イリスの挑発をドラコは完全に無視して、ロンの本から取ったのだろう、チャーリーからの手紙をこれ見よがしにひらひらさせた。イリスは何も言えなくなった。

「今週の、土曜日の零時。お前たちはドラゴンを一番高い塔へ連れていく。・・・さあ、どの先生に言ってやろうか?選ばせてやるよ」

ドラコは気取った調子で言いながらイリスに近づき、「どうすればいいか、わかるよな?」と薄笑いを浮かべて彼女に尋ねた。

「え?どうすればいいの・・・?」

イリスは尋ねた。ハグリッドの将来がかかっているのだ。ひいては自分たちの学生生活も。ドラコは我が意を得たりとばかりに笑みを濃くすると、こう言った。

「ポッターと友達付き合いをやめろ。——あいつの金魚のフンのウィーズリーやマグル生まれの女ともだ。今後は僕と一緒に行動し

ろ。そうすると約束するなら、ドラゴンの件は誰にも言わない」

イリスは意味がわからなかった。ドラコとはもう絶交した筈なのに、何故いまさら一緒に行動しろと言われるのか理解できなかったからだ。

「何で？」

「理由なんかどうでもいいだろ！」

イリスは率直に聞いたが、ドラコは露骨に目を逸らしながら、そんな答えにならないような事を腹立たしげに叫んだので、話にならなかった。イリスは考えるまでもなかった。自分にとって、ハリーやロン、ハーマイオニーは大切な友達だ。たとえドラゴンの件をドラコが言いふらして、学校で問題になり退学になったとしても、これからするイリスの選択を三人は納得してくれる筈だ。イリスは三人と友達をやめるつもりはなかった。

「ハリーたちは大事な友達だから、そんなことできない」

きっぱり断ると、ドラコはイリスを見下したような目で一睨みし、思いもよらない言葉を言い放った。

「そうかい。君の友情は本当に素晴らしいな。・・・君の大好きなスネイプ先生によく言っておくよ」

「・・・エツ?!ちよつ、ちよ、ちよつと待つて!!なんでそこでスネイプ先生が出てくるの?!」

イリスはクイレル先生に匹敵するくらい、どもり狼狽したが、ドラコはそれには答えず異様に爽やかな笑顔を浮かべると、鍵を開けてドアを開け、出て行ってしまった。

☆

土曜日がやって来た。イリスはハリーたちにドラコの件を話したが、もう今更計画を変える事等できなかった。イリスは、ハリーやハーマイオニーと比べて機転の利いた行動や機敏な動きができない事から、ひとり談話室で留守番をすることになった。

イリスは二人を待つうちに、ついうとうとと眠り込んでしまった。人の気配に気づいて目覚めると、ハリーとハーマイオニー・・・何故かネビルも、談話室に戻って来ていた。三人共、思いつめた蒼白な表

情をして、押し黙っている。

「ど、どうしたの・・・？」

イリスが問いかけると、ハーマイオニーは顔をくしゃくしゃにさせながらイリスに抱き着いて、号泣し始めた。それだけで、何か大変な事態が起きた事は十分理解できた。イリスがハーマイオニーの豊かな栗色の髪を撫でながら、もう一方の手であやすように背中を叩き、ハリーを気遣わしげに見やる。ハリーはイリスに「明日話すよ」と暗い声で言っつて、シクシク泣き始めたネビルと共に男子寮へ続く階段を駆け上がって行った。

## File 14. 禁じられた森

翌日、イリスは復活したロンと共に、ハリーとハーマイオニーから事の次第を聞いて愕然とした。ノーバートを無事逃がしたはいいが、その後ハリーとハーマイオニーは不注意からフィルチに見つかり、ドラコが二人を捕まえようとしている事を忠告するために学校中を彷徨っていたネビルと一緒に、マクゴナガル先生に一人五十点も——つまり合計百五十点も、一晩にして減点されてしまったというのだ。——二人を陥れようと同じく寮を抜け出していたドラコが二十点減点された事なんて、今となっては何の慰めにもならなかった。

噂は瞬く間にホグワーツ中に広がった。学校で最も人気があり、賞賛の的だったハリーは、一夜にして突然一番の嫌われ者になってしまった。グリフィンドール生は勿論のこと、レイブンクローやハッフルパフ生でさえ、ハリーの敵に回った。みんな大嫌いなスリザリンから寮杯を奪える事を楽しみにしていたからだ。スリザリン生だけがハリーの味方で、彼がそばを通り過ぎる度に、みな例外なく拍手し口々にお礼の言葉を送った。

イリスとロンは今まで以上にハリーの傍にいて、彼を励まし続けなければならなかった。彼は一時期クイディッチを辞めることすら考えていたようだが、ウッドに特大の雷を落とされたらしく、チームメイト達に冷遇を受けながらも浮かない顔で練習に励んでいた。苦しんでいたのはハリーだけでなく、ハーマイオニーやネビルも同じだった。しかし二人はハリー程有名ではなかったため、みんなから無視されるだけで済んだ。

☆

そうする間にも、試験の日は確実に近づいてきていた。やがて生徒たちも試験に集中するようになり、イリスたちは他の生徒と離れて夜遅くまで勉強した。複雑な薬の調合を覚えたり、魔法界の発見や小鬼の反乱の年号を覚えたり・・・四人は無言で勉強に勤しみ、頭の中に入るだけの知識を次々詰め込んだ。

ある日の午後、イリスは図書館でロンと共に、ハーマイオニー作の

天文学のテストを書いていた。するとハリーがやって来て、真剣な表情で彼自身が今見聞きした事を三人に伝えた。何でもクイレルが教室内で誰かに脅かされているように許しを乞い、すすり泣いていたという。誰にそうされていたのか、何となく三人共察しはついた。

「それじゃ、スネイプはどうとうやったんだ！クイレルが自分のかけた、石を守る魔法の解き方を教えたとすれば・・・」とロンが興奮して叫ぶ。

「でも、まだフラッツフィーがいるわ」ハーマイオニーが冷静に返すが、ロンの語りは止まらない。

「もしかしたら、スネイプはハグリッドに聞かなくてもフラッツフィーを突破する方法を、もう見つけ出しているんじゃないか？・・・何せ、こんなに本があるんだ。どっかにその方法も書いてあるに違いないよ。さあ、どうする、ハリー」

ロンは周りにある何千冊という本を見上げ、それから冒険心にキラキラ輝く瞳で、思いつめた表情をしたハリーを見る。それに警鐘を鳴らしたのは、当然の如くハーマイオニーだ。

「ダンブルドアに相談しましょう。何でも自分で動いてしまったら、今度こそ退学になってしまうわ」

「だけど、証拠は何もないんだ！」ハリーは強い口調でハーマイオニーに言った。

「クイレルは怖気づいて、僕たちを助けてはくれない。僕たちとスネイプの言う事、ダンブルドアはどっちを信じると思う？・・・僕たちがスネイプを嫌っていることは誰だって知っているし、きっと『僕たちがスネイプをクビにするために作り話をした』と思うだろう。フィルチはスネイプと仲が良いみたいだし、どんなことがあっても僕たちを助けたりしないよ。おまけに、僕たちは石のこともフラッツフィーのことも何も知らないはずなんだ。・・・これで、どうやってダンブルドアに納得いくように説明できる？」

結局、一生徒の立場ではこれ以上動けないのだ、とハリーは三人に対して伝えたいようだった。石に危機が迫っているのが解っているのに、四人にできる事は何もなかった。ロンだけは「もう少し探りを

入れてみては」と粘ったが、ハリーは「もう十分に探りを入れ過ぎて  
る」とピシヤリと言い返し、天文学の勉強に参加するために木星の星  
図を引き寄せた。

「じゃあ、今日の補習で、もしスネイプ先生がとっても優しくしたら—  
—いよいよ石を手に入れる準備が整ったって事だよね」

静かなイリスの声に、三人はハツとした表情で彼女を見た。今日は  
金曜日だった。

☆

イリスは七時前、地下の研究室へ向かった。扉を前にして、イリス  
は両手を組んで神様に祈った。——どうか、先生がいつも通り不機嫌  
でありますように。祈りを込めて扉をノックすると、「入りなさい」と  
柔らかな声がした。・・・『入りなさい』だって？イリスは思わずゾツ  
とした。中に入ると、スネイプが——驚いた事に——取ってつけたよ  
うな笑顔を浮かべて彼女を迎え入れた。——恐れていた事が起きた。  
きつとスネイプは、石を守るものの攻略法を全て掌握したに違いな  
い。イリスはそう思つて、目の前が真っ暗になった。

そうして授業が始まった。イリスは石の事で頭がいつぱいになっ  
てしまい、何度も作業手順を間違えた。しかし、スネイプはそれを咎  
める事無く「気にすることはない。きつと疲れているんだね」と優し  
くイリスの肩を叩いた。イリスはスネイプが彼女に対して笑顔を向  
けたり優しく接する度に、強烈な頭痛・吐き気・眩暈等の諸症状に襲  
われ、やがて気も狂いそうになった。もはや石の事など考える余裕も  
ない。——スネイプ先生、後生のお願いだから、いつものように嫌味  
を言い、怒り、罵ってくれ。イリスは切望した。スネイプにいびり倒  
される事が日常となつている彼女にとって、逆に優しくされる事は非  
日常の極み——もはや新手の拷問にも等しい行為だった。

やつこのことで授業を終えると、罰則に入る前にスネイプがお茶で  
もしようと言い出して（お茶をしようなんて今まで言われた事もな  
い）、「ひっ」と驚愕に息を詰まらせるイリスを無視して杖を一振りし、  
作業机の上にシンプルな茶器を二組とティーポット、それに茶菓子を  
出した。・・・イリスはこれが最期のティータイムで、自分はこれか

ら先生に殺されるのだろうか、と恐怖で碌に回らなくなった頭で考えた。

スネイプは再び杖を振って椅子を二脚出し、慣れた手つきでティーポットから紅茶をカップに注ぐと、かけて飲むようイリスに勧めた。イリスは必死に平静を保とうとしたが、手が震えすぎて両手に持つカップとソーサーが噛み合わずにカタカタ音を立てるのを止める事ができなかった。スネイプはそんなイリスを加虐心に満ちた目で見つめると、芝居がかった口調で唐突に話し始めた。

「君の所属するグリフィンドールの・・・あー、一五〇点もの減点の件だが（スネイプはここだけ一語一句区切るように言った）・・・あれは、実に嘆かわしく遺憾な事だった。元凶であるポッターは愚かにも、自分の寮生だけでなく、我が寮の実に優秀な生徒も一名、犠牲にしてしまったのだから」

イリスは思わずスネイプを仰ぎ見た。彼は相変わらず薄笑いを浮かべているが、目は深い怒りと憎しみに燃えていた。——ここにきて、イリスはようやく理解した。スネイプは機嫌が良いのではない、その真逆だ。人は時に、怒りを通り越すと笑いが込み上げて来ると言う。彼のお気に入りの生徒であるドラコ（スネイプの言う優秀な生徒なんて、彼以外に思い当たらない）も減点対象になったので、それに怒り狂っているのだ。そして彼の憤激も知らずにこのこやつて来たハリーの友人でグリフィンドール生のイリスに全ての怒りの矛先を向け、いたぶって楽しんでいる。——こんなに怒っているなら、まだ彼は、石を守る方法を全て攻略した訳ではないのかもしれない、とイリスは他人事のように思った。スネイプはイリスから目を離さず紅茶を一口飲んでから、猫撫で声で続ける。

「実はその優秀な生徒から先日、君に関する報告があつてね。何でも君はあの騒ぎがあつた後も、自寮に多大な迷惑をかけたポッターを見捨てず、支え続けていると言うではないか。・・・吾輩は実に感動した。君のその美しい友情に敬意を表し、今日の罰則は特別に免除する事にしよう。——その代わり、明日行われるポッター達の罰則に同行したまえ。君は本当に彼が好きなのだからね」



スネイプはにつこり笑った。イリスはこんな恐ろしい笑顔を生まれて初めて見たので、たまらず震え上がった。そして思った。——あいつ、チクったな、と。

☆

翌朝、大広間で朝食を取るハリー、ハーマイオニー、ネビル、イリス宛に、手紙がそれぞれ届いた。全員同じ差出人と内容で『処罰は十一時に行われるため、玄関ホールでフィルチと合流する事』と書いてある。

「ほんとに、あいつ、ぶん殴ってやりたい……」

イリスはハリーたちに自分も処罰を受ける羽目になった経緯を語ると、手紙を強く握りしめ、スリザリンのテーブルで同じ手紙を読んでいるドラコを憎々しげに睨み付けた。ロンがトーストを齧りながら話し掛ける。

「君って、本当に凶暴になったよな。最初に列車で会った時は、僕たちの喧嘩にただおろおろしてただけだったのに」

「ハリーとロンのせいだよ」

イリスは八つ当たりするようにじろりとロンを見て、痛烈に言い放った。ハリーとロンは男の子という事もあるが、何かあればすぐ喧嘩や言い争いする方向へ持っていこうとするので、その二人の間でもまれているうちにイリスも——精神的にも肉体的にも——自然と強くなっていたのだった。加えてホグワーツには（ハリーたちも含めて）何かと自己主張の強い人間が多いため、『影響を受けやすい日本人』であるイリスが、それに感化されていたという経緯もある。朱に交われれば赤くなるというやつだ。

「おい、僕たちかよー」

イリスの皮肉にロンは目を剥いて反撃し、ハリーは肩を竦めたが、イリスは素知らぬ顔でミートパイにかぶり付いていた。

☆

夜十一時、三人は談話室でロンに別れを告げ、ネビルと一緒に玄関ホールに向かった。フィルチはもう来ていた。——そしてドラコも。イリスはドラコを完全に無視した。

フィルチはみんなを怖がらせようとして、意地の悪い目つきで色々  
と恐ろしいな事を言い続けたが、日頃スネイプに鍛えられているイリ  
スにとっては『小鳥のさえずり』のようなものだった。真つ暗な校庭  
を横切つて、一行は目的地を目指してひたすら歩いた。その内、ネビ  
ルがめそめそ泣き出したので、イリスは彼を安心させるために手を繋  
いであげた。

やがて一行はハグリッドの小屋へたどり着いた。今回の罰則はハ  
グリッドやファングと一緒に行われるようだ。安心しかけたみんな  
に、フィルチは嫌らしい笑みを浮かべて罰則の内容を伝えた。

「あの木偶の坊と一緒にのんびりお茶会でもできると思つてるのかい  
？これは罰則だぞ。・・・君たちがいつらとこれから行くのは、禁  
じられた森の中だ。もし全員無傷で戻ってきたら私の見込み違いだ  
がね」

途端にネビルは低いうめき声をあげ、ドラコもその場でピタツと動  
かなくなった。

「森だつて？そんなところに夜行けないよ。・・・それこそ、色んな怪  
物とかがいるんだろう。狼男だとか」ドラコの声はいつもの冷静さを  
失っている。

「大丈夫だよ、今日は満月じゃないし」

イリスが余裕たつぷりに言い返して、恐怖に息を詰まらせるネビルの  
手をしっかりと握り直す。彼女はネビルに対する庇護欲とドラコへの  
怒りとで、脳内に大量のアドレナリンが分泌された結果、怯えるみ  
んなどは対照的に、一時的に恐怖を感じず、ある種のハイテンション  
な状態に陥っていた。

「もう時間だ。俺はもう三十分くらいも待ったぞ」

ハグリッドがフィルチを睨み付けながら、森の茂みを掻き分け、み  
んなの目の前に現れた。まだ脅し足りないという顔を浮かべたフィ  
ルチとしばらく言い争いをした後、彼は無事フィルチを追い払う事に  
成功した。フィルチは「夜明けに戻ってくるよ。こいつらの体の残つ  
てる部分を引き取りに来るさ」といかにも恐ろしい捨て台詞を残し  
て、名残惜しそうに去って行った。

☆

「よし、それじゃ、よく聞いてくれ。なんせ、俺たちが今夜やろうとしていることは危険なんだ。軽はずみな事をしちやいかん。しばらくは俺についてきてくれ」

ハグリッドが先頭に立ち、みんなを引き連れて森の外れまでやってきた。ランプを軽く掲げ、ハグリッドは暗く生い茂った木々の奥へ消えていく細い曲がりくねった獣道を指さした。森の中を覗き込むと、一陣の風がみんなの髪を逆立てた。——何か、森の中に所々、光るものが見える。

「あそこを見ろ。地面に光る銀色のものが見えるか?・・・あれはユニコーンの血だ。何者かにひどく傷つけられたユニコーンが、この森の中にいる。今週になって二回目だ。水曜日に最初の死骸を見つけた。みんなでかわいそうなやつを見つけ出すんだ」

「ユニコーンだって、ネビル!」

イリスがネビルを元気づけるように言うが、ネビルはますます顔を引き攣らせて、「うう」と一言唸った切り、再び黙り込んでしまった。「ユニコーンを襲ったやつが、先に僕たちを見つけたらどうするんだい?」ドラコが恐怖の余り上擦った声で尋ねる。

「俺やファングと一緒におれば、この森に棲む者は誰もお前たちを傷つけはせん。よし、では二組に分かれて別々の道を行こう。そこから中血だらけだ。かわいそうに」

「僕はファングと一緒にがいい」ファングの長く鋭い牙を見て、ドラコが急いで言った。

「よかろう。言つとくが、そいつは臆病じゃよ。そんじゃ、ドラコとネビル(そこで必死の形相のネビルにしがみつかれているイリスを見た)・・・と、イリスは、ファングと一緒に。ハリーとハーマイオニーは俺と一緒に別の道だ。もしユニコーンを見つけたら緑の花火を打ち上げ、困ったことがあったら赤い花火を打ち上げる。いいか?杖を出して練習しよう」

みんな一斉に杖を引き抜いて、それぞれ緑と赤の花火を打ち上げた。それを見たハグリッドは満足気に頷いて、「それじゃ、出発だ」と

言った。

☆

森は真つ暗でシーンと静まり返っていた。枝の隙間から漏れるかな月明かりが、落ち葉の上に点々と滴るユニコーンの血痕を照らし出す。それをお伽噺でヘンゼルが撒いた光る白い小石のように目印としてたどりながら、イリス、ドラコ、ネビル、フアングは黙々と歩き続けた。

——ふと何か、スルスルと黒い影のようなものが視界の端を横切ったような気がして、イリスは立ち止まった。

「どうしたの?」

気が付くと、傍らのネビルが不安そうにイリスを見ている。先程までのやたらに高揚した気分は、泡のように弾けて消えてしまった。今更になってじわじわ恐怖が込み上げてくるのを、無理やり抑え込む。ここで自分がパニックになったら、ダメだ。深呼吸をしながら必死に言い聞かせる。

「いや、何でもない……」

今度はどこからか、微かな忍び笑いが聴こえて来た。続いて、囁くような声で自分の名前を呼ばれたような気がして、イリスは総毛立った。何となく誰かに見張られているような嫌な感じがする。気のせいだ、イリスは自分に言い聞かせた。ドラコもネビルも、両方臆病で頼りにならない。フアングと私がすっかりしなくちゃ。

「ぎゃああああ!!」

その時、ネビルが不意に大きな悲鳴を上げたので、イリスは心臓が自分の口から飛び出すかと思うくらいびっくりして、跳び上がった。パニック状態のネビルはイリスを振り払うと、杖を振り上げて赤い火花を夜空に打ち出す。

「どうしたの?!」

イリスが身を守るために杖を引き抜きながら、腰を抜かしてしまったネビルに駆け寄ると、彼の後ろにいたドラコが突然腹を抱えて笑い出した。……どうやら、ふざけてネビルに後ろから掴みかかって、彼をパニックに陥らせたらしい。

「ちよつと、ふざけないで!!ネビルが心臓発作で死ぬところだったでしょ!!」

カンカンに怒ったイリスが笑い転げるドラコの背中を杖で叩くが、彼の笑いは怒り狂ったハグリッドがやってくるまで、治まらなかつた。

☆

イリスたちは、再びハリーたちと合流した。ハグリッドは大騒ぎしたファンング組に対して、怒り心頭だった。

「お前たちが馬鹿騒ぎしてくれたおかげで、もう捕まるものも捕まらんかもしれん。よし、組み分けを変えよう。・・・ハーマイオニーとネビルは、俺と来るんだ。ほれ、イリスから手を離さんか。ハリーとイリスはファンングと、この愚かもんと一緒だ」

イリスはホツとした。しつかり者のハリーと一緒になら大丈夫だ。ハグリッドはハリーにだけこっそりとドラコを見張るよう耳打ちし、ハリーはドラコを睨みながらしつかりと頷いた。

再編成したファンング組は、ハリーを先頭にして、さらに森の奥へと向かった。だんだんと森の奥深くへ入り込んでいく。・・・三十分は歩いただろうか。木々が鬱蒼と生い茂っているために、もはや道をたどるのは無理になった。一瞬進む道を見失って停滞したドラコを見て、イリスは『ネビルの仇討をするなら、今だ!』と思った。

イリスはドラコの背後にそっと近づいて、その背中を軽く押し「わっ!」と耳元で叫んだ。結果は上々だった。ドラコは情けない声を上げながら、その場に崩れ落ちてしまう程、びっくりしてくれたのだ。その様子が何だかとても可笑しくて、イリスは『騒ぐな』と言うハグリッドの注意も忘れ、涙を流しながら大笑いしてしまった。

「お前っ・・・!ふ、ふざけるな!!」とドラコが腰を抜かしたまま怒鳴る。

「ネビルの仕返しだよ!あははっ・・・赤い花火、打ち上げないの?」イリスはお腹を押さえながら、なおもからかった。

「いい加減にしてくれ!!」

そんな二人をハリーが怒りの形相で締め上げ、再び一行は道なき道

を進み始める。だんだん血の滴りも濃くなっていて、少し先の大きな木の根元には、今まで見た事のない程大量の血が飛び散っていた。……ユニコーンは近いかもしれない。三人は無言で顔を見合わせる。樹齡何千年の檜の古木の枝が絡み合う向こうに、開けた平地が見えた。

「見て……」

ハリーは腕を伸ばして、進もうとする二人を制止して呟いた。——地面に光り輝くものがあつた。三人とファングがさらに近づいてみると、まさにそれはユニコーンだつた。死んでいた。こんなに美しく、悲しいものは見た事がない。イリスは言葉もなくただ胸が締め付けられた。力なく四肢を投げ出し横たわつたユニコーンに近づいて、真珠色に輝くたてがみを労わるように撫でる。

——その時、ずるずると滑るような音がした。平地の端が揺れる。暗がりの中から、頭からフードをすっぽりかぶつた何か——まるで獲物を狙う蛇のように、地面を這つて来る。

イリスだけでなく、ハリーたちも金縛りにあつたように立ち竦み、指一本動かせない。マントを来たその影は、ユニコーンに近づき、その傷口に直に顔を埋め——血を飲み始めた。間近でそのおぞましい光景を見たイリスは恐怖で腰が抜けてしまい、その場に崩れ落ちる。

ふと影が顔を上げ、イリスを見据えた。ユニコーンの血がフードに隠れた顔から滴り落ちる。——その時、イリスは激しい既視感を覚え、強い眩暈がした。クイレルに忘却させられた筈の記憶がイリスの脳内で疼き、彼女に正体不明の警鐘を鳴らし始める。影はイリスへにじり寄り、血に塗れた手で彼女の頬に触れようとした。

刹那、どこからか矢が飛んできて、影とイリスを隔てるように、二人の間の地面へと突き刺さつた。

「逃げなさい！エルサの娘！」

どこかから朗々たる声があった。その声は、イリスに再び立ち上がるための活力を注ぎ込んだ。彼女は持てる最大限の力を振り絞つて立ち上がり、追いつめるように伸ばされた影の手を振り払って、一目散にその場から逃げ出した。——イリスは、もう、ひたすら逃げ続ける事

以外に、何も考えられなかった。少しでも足を止めれば、影がすぐそばまで追ってくるような気がして、イリスは我武者羅に走り続けた。

不意に、イリスの走っていた足場が崩れた。あつと言う間に、イリスは地盤が崩れて出来た小さな崖下へと転がり落ち、わずかな間意識を失ってしまった。

☆

「う……」

イリスは間もなく意識を取り戻した。立ち上がろうとするが、片足に強烈な痛みが走り、再びしゃがみ込んだ。――捻挫しているようだ。イリスは泣きそうな顔で、崖の上を見上げた。地上までは高度があり、登りやすそうな取っ掛かりや植物のツルもない。咄嗟に杖の存在を思い出し、ローブを探るが、どこにもない。イリスは恐怖で引き攣った声を上げた。どこかで落としてしまったようだ。――イリスの心の中を、たちまち恐怖と絶望と孤独が支配した。このまま、誰にも気づかれずに、ここで死ぬまで一人ぼっちだったら。

「助けてえ！誰かー！」

イリスはたまらなくなつて、何度も助けを求めて叫んだ。しかし、いくら耳を澄ましても、何の音も声も聞こえない。その不気味な静けさはイリスに極度のストレスを与え、彼女を一時的な過換気症候群に陥らせた。イリスはだんだん呼吸が苦しくなつていった。酸素を求めて喘ぐ程、意識は霞んで薄れていく。――やがて崖の上から何者かが滑り降りて来て、イリスに近づいた。それは先程の黒い影のように見え、イリスは呼吸を荒げながらも、必死に這いずって逃げようとした。……影はしきりに何かを叫んでいる。

「……くだ！僕だ！イリス！落ち着け!!」

それは影ではなく、ドラコだった。あの後、イリスと同じく逃げ出したドラコは、崖の付近を偶然通り掛かったおかげで、イリスを発見できたのだった。ドラコはイリスを落ち着かせ、乱れた呼吸を整えるよう言い聞かせた。イリスはあんなに大嫌いだったドラコが、今では白馬に乗った王子様に見えた。安心した拍子に涙がボロボロ零れ出て、イリスはドラコにしがみ付きながらわんわん泣いた。ドラコは一

瞬間を赤らめて狼狽したが、イリスをしつかり抱き締め、頭を撫でた。「もう大丈夫だ。僕がついてる」

冷静な口調で言うと、ドラコは自分の杖を取り出して赤い花火を打ち上げ、イリスを崖から救い出した。ハグリッドの助けが来るまで、二人はその場を動かさず静かに待った。

「ねえ、あの影はどうなったの？ ハリーとフアングは？」イリスはこわごわ聞いた。

「わからない。僕もあの後すぐ逃げたから・・・」ドラコがこわばった表情で答える。

森の中は静寂で満たされていて、まるでこの世に二人ぼっちで取り残されているような錯覚さえ覚えた。それは不思議な程、お互いの心をただまっさらに、素直にさせた。

「・・・すまない。僕の告げ口のせいで、君を傷つけて、危険な目にも遭わせてしまった。まさか、禁じられた森に行くなんて思ってもみなかったんだ」

イリスはまさかドラコが謝るとは夢にも思わず、驚いて彼を見た。ドラコはバツの悪そうな顔でイリスを見ている。

——この時、イリスの心の中である心理的効果が働いた。『吊り橋効果』だ。一連の出来事から生じた、不安や恐怖からなる心臓のドキドキを、自分の危機を救ってくれたドラコへの好意によるドキドキだと勘違いしてしまったのだ。確かな手応えを感じたドラコがさらにイリスに何か言い掛けたその時、バリバリと騒々しく木立を掻き分け、血相を変えたハグリッドたちが駆け寄って来たので、ドラコは不満そうに口を閉じた。

☆

ハグリッドの小屋で足の手当てをしてもらった後（杖もハグリッドが回収してくれていた。ユニコーンの亡骸付近に落ちていたらしい）、イリスはハリーたちと一緒に談話室に戻った。ハリーは険しい表情を浮かべて、眠り込んでいたロンを激しく揺り動かして起こす。ハリーは落ち着かない様子で、暖炉の前を行ったり来たりしながら、驚愕の事実を三人に告げた。——ユニコーンの血を啜っていたあの



影は、ヴォルデモートだと。

「……待つて。『例のあの人』は、ハリーが倒したんじゃないの？」  
「違う。ヴォルデモートは死んでいなかった。ユニコーンの血を飲みながら、森の奥で生き永らえていたんだ」

茫然と問いかけたイリスに、ハリーが熱に浮かされたようにぼんやりとした口調で答えた。一気に眠りから覚めたロンが震えながら「その名前を言うな」とたしなめても、ハリーは、彼自身を助けてくれたケンタウロスのフィレンツェやベインの話をして、最後に震えながらこう言った。

「賢者の石は『命の水』を作る……きつとスネイプはヴォルデモートのために、あの石が欲しかったんだ。」

僕はスネイプが石を盗むのをただ見てればいい。もしたら復活したヴォルデモートがやって来て、ケンタウロスの予言の通りに、僕の息の根を止めるだろう」

四人は言葉で言い表せない程の恐怖の感情に抱きすくめられ、みな一様に口を閉ざした。ハーマイオニーも勿論怖がっていたが、やがて口を開き『予言はあてにならない』等と一生懸命ハリーを慰める言葉を掛け始めた。イリスはハリーの背中を落ち着かせるように撫でながら、色んな情報が錯綜し混乱する頭の中を、必死に整理しようとしていた。

——本当にあれがヴォルデモートなら、何故自分は見た事があるような気がしたんだろう。そして何故、彼は自分に触れようとしたんだ？そして、あの時助けてくれた声の主は、一体誰だったんだ？あの声は、自分がエルサの子だという事を知っていた——

この凄惨たる事態を終結させるには、四人はただ余りにも幼すぎた。話し込んでいる内に、空は白み始めていた。四人はクタクタになりながら、ベッドに入り、それぞれの思いを胸に秘め、重い瞼を落とした。

## File 15. イリスとフラツファイ

イリスは森の事件以降、考え事が増えて眠れなくなった。ある夜ベッドの中で、森で見たヴォルデモートの事や、ハリーの言う通りスネイプが本当に彼の手下なのかという事を考え続けているうちに、完全に目が冴えてしまったので、イリスはベッドを起き出して談話室へ行った。暖炉に小さな火を起こし、その前のソファに掛けて牛乳をたっぷり入れたミルクティーを飲んでみると、男子寮へ続く階段からハリーが下りて来た。イリスは驚いて問いかけた。

「ハリー、どうしたの？こんな時間に」

「眠れないんだ。君こそどうしたんだい？」

ハリーは弱々しく微笑みながら、クリスマス休暇後から見ている悪夢が、あの事件以降、より酷くなったことをイリスに伝えた。額の傷がズキズキと疼く事も。イリスはハリーの話を真剣に聞いていた。二人は同じ黒い影——ヴォルデモートを見て恐怖を感じ、両親をヴォルデモートに殺されたという共通の経験を有していたため、妙な連帯感があった。ハリーは隣に座るとイリスを見た。ハリーにとってイリスは妹のような存在に思えた。彼女の傍にいただけで、悪夢に怯えて張り詰めた精神は不思議な程に鎮められ、落ち着いた。イリスはハリーのためにミルクティーを作り、その後は二人で紅茶を飲みながら、何を話すでもなくぼんやり暖炉の火を見ていた。

イリスがふと横を見ると、ハリーが目を閉じてぐっすり眠っていた。余りにもハリーが気持ちよさそうに眠っているので、起こして寝室に行くよう促す事は憚られた。自分のベッドから薄めの掛布団を取って来てハリーに掛ける。イリスはまた悪夢を見ていたら起こしてやろうとハリーを見守っていたが、やがて自分も睡魔が襲ってきて眠り込んでしまった。二人はそれ以降、度々談話室で眠るようになった。

☆

数日がじわじわと過ぎ、うだるような暑さの中、いよいよ試験が始まった。四人は石の事など考える余裕はなくなった。試験は筆記だ

けではなく実技もあった。フリットウィック先生の試験はパイナップルを机の端から端までタップダンスさせる事だったが、イリスのは千鳥足状態で時折テーブルからよろけて、何度も転げ落ちそうになった。マクゴナガル先生の試験は、ねずみを「嗅ぎたばこ入れ」に変身させる事だった。イリスのは装飾の施された美しい箱になったが、その数秒後には箱の両脇からピョイーとひげが飛び出してしまったので、マクゴナガル先生は複雑な表情を浮かべていた。——一番出来が良いとイリス自身が思えたのは、スネイプの「忘れ薬」の実技試験だった。その名の通り作り方をすぐ忘れてしまいそうになるのが最大の難点だが、イリスの血の滲むような努力は『忘れん坊イリス』の汚名を見事返上させてみせた。後にハーマイオニーと作り方の答え合わせをしても完璧だと称される程、素晴らしい出来栄えだったのだ。

最後の試験は魔法史だった。幽霊のピンズ先生が羽根ペンを置いて答案羊皮紙を巻きなさいと言った時にはイリスも他の生徒たちと一緒に思わず歓声を上げた。

☆

四人はさんさんと日の差す校庭に繰り出した。ハーマイオニーはいつものように試験の答え合わせをしたが、ロンが反対し、四人は湖まで降りて木陰に寝転んだ。三人は幸せいっぱいの顔を浮かべていたが、ハリーだけは思いつめた表情を浮かべていた。「ずっと傷が疼くんだ。今までも時々こういうことはあったんだけど、こんなに続くのは初めてなんだ」

ハリーは試験の事ではなく、未だに続く額の傷の痛みを悩ませていたのだった。怒りを吐き出すように言うハリーに、ハーマイオニーが優しくアドバイスする。

「医務室へ行った方がいいわ」

「僕は病気じゃない。きつと警告なんだ・・・何か危険が迫っている証拠なんだ」

「その傷って、妖怪アンテナみたいなものなの？」

イリスが勢い良く上半身を起こして尋ねるが、誰もそこに突っ込ま

ず、代わりにロンがハリーを宥める言葉をかけ始める。ハリーは頷いて聞いていたが、やがて息をのんで突然立ち上がった。顔が真っ青だ。

「どうしたの？」イリスが驚いて聞いた。

「今、気づいた事があるんだ。すぐハグリッドに会いにいかなくちゃ」言うや否や、ハリーはハグリッドの小屋を指して駆けだした。三人は慌てて彼の後を追いかける。草の茂った斜面をよじ登りながら、ハリーが言った。

「おかしいと思わないか？ハグリッドはドラゴンが欲しくてたまらなかつた。でも、いきなり見ず知らずの人間が、法律で禁止されている筈のドラゴンの卵をたまたまポケットに入れて現れるかい？話がうますぎると思わないか？どうして今まで気づかなかつたんだろう」

ハーマイオニーは合点がいったようだが、ロンとイリスはいまいち理解ができなかつた。四人はやがてハグリッドの小屋へたどり着いた。ハグリッドは家の外にいて、肘掛け椅子に腰掛け、大きなボウルを前に置いて豆のさやを剥いていた。

「よう。試験は終わったか？お茶でも飲むか？」

ハグリッドはにっこりした。ロンとイリスが「ありがとう」と言い掛けたが、ハリーが遮る。

「ううん。僕たち急いでるんだ。ハグリッド、聞きたい事があるんだけど、ノーバートを賭けで手に入れた夜の事を覚えているかい？トランプをした相手って、どんな人だった？」

「わからんよ。マントを来たままだったしな。顔も名前も知らん」

四人は絶句した。ロンとイリスはここでやっと、ハリーが何を言わんとしているか理解した。四人が驚愕の表情を浮かべているのを見て、ハグリッドは眉を訝しげに動かしながら言った。

「そんなに珍しいこつちやない。『ホッグズヘッド』なんてとこにや・・・村のパブだがな、おかしなやつがうようよしてる。もしかしたらドラゴン売人だったかもしれんしな」

「ハグリッド、その人とどんな話をしたの？ホグワーツのこと、何か話した？」

ハリーの願いは無残にも、続くハグリッドの言葉に打ち砕かれた。ハグリッドはその人物に酒をおごられ続け、気を良くしてしまったついでに、自分の職業やドラゴンを飼いたいと思っている事を話したことを言い、最後にこう言った。

「それで俺はあいつにこう言つてやったんだ。・・・フラツファイに比べたら、ドラゴンなんか楽なもんだって。なんせ音楽さえ聞かせちまえばすぐにねんねしちまうってな」

ハグリッドは突然、しまったという顔をした。しかし、時すでに遅し、四人は真つ青な顔で、口止めしようとするハグリッドを見もせず、足早に学校へ戻った。玄関ホールに着くまで、互いに一言も口を聞かなかった。――もはや一刻の猶予もなかった。最後の砦であるフラツファイが破られてしまったのだ。

「ダンブルドアのところへ行こう」ハリーが真剣な表情で言うと、三人は無言で頷いた。

しかし、校長室が見当たらない。急にホールの向こうから厳しい声が飛んできた。

「その四人、こんなところで何をしているんです？」

山のように本を抱えたマクゴナガル先生が、四人を睨み付けている。

「ダンブルドア先生にお目にかかりたいんです」

ハーマイオニーが辛うじて平静を保ちながら言うが、マクゴナガル先生は眉をひそめ、怒りを孕んだ声音で四人に尋ね返した。

「ダンブルドア先生にお目にかかる？——理由は？」

ハリーはぐつと唾を飲み込んで、ついに観念したように、慎重さをかなぐり捨てた声で言った。

「とても重要な事なんです。実は・・・先生、『賢者の石』の件なのですが・・・」

ついに言った！とイリスはハリーを尊敬の眼差しで見つめながら思った。さすがのマクゴナガル先生も、驚いてその手から大量の本が落ちたのを拾おうともせず、目を見開いてハリーを見つめている。

「どうしてそれを？」マクゴナガル先生の声に明らかに動揺が走る。

「先生、僕は知っています。誰かが石を盗もうとしています。どうし

ても今、ダンブルドア先生にお話ししなくてはならないのです」

マクゴナガル先生は驚きと疑いの混じった目でハリーに向けていたが、しばらくしてやつと口を開いた。

「ダンブルドアは明日、お帰りになります」

「明日ですって?!」

「ええ、魔法省から緊急のふくろう便が来て、つい十分程前にロンドンにとび立たれました」

「先生がいらつしやらない?この肝心な時に?」

「ダンブルドア先生は偉大な魔法使いですから、大変ご多忙でいらつしやるのです。あなた方がどうしてあの石のことを知ったのかわかりませんが、安心なさい。盤石の守りですから、誰も盗むことはできません」

「でも先生……」

「ポッター。二度と同じ事は言いません」

マクゴナガル先生はきっぱり言う、屈んで落ちた本を拾い始めた。マクゴナガル先生が声が届かないところまで行ってしまうのを待ってから、ハリーが言った。

「今夜だ。スネイプが仕掛け扉を破るなら今夜だ。きつとダンブルドア先生のこと、スネイプがニセの手紙を送ったに違いないよ」

入口の石段のところで、四人は緊急作戦会議を開いた。会議の結果、ハーマイオニーが『フリットウィック先生に試験の質問をする』という名目で職員室の外で待機し、外に出たスネイプの後をつけようということになった。そして三人は彼を待ち伏せするため、四階の廊下に向かった。

しかし、作戦は失敗した。フラッフイーのいる扉の前についた途端、またマクゴナガル先生が現れたのだ。マクゴナガル先生はすごい剣幕で三人を締め上げ、今度このあたりに近づいたら減点すると警告し、三人を追い出してしまった。三人が談話室へ戻り、椅子に座るか座らないかのうちに、スネイプをつけていた筈のハーマイオニーが入って来た。

「ハリー、ごめんなさい。スネイプが出てきて、本当にフリットウィッ

ク先生を呼んでできてしまったから、私捕まってしまったの。結局、スネイプがどこに行ったかわからないわ」

「・・・じゃあ、僕が行くしかない。そうだろう?」

三人はハリーを見つめた。蒼白な顔に緑の目が悲愴な決意に燃えていた。

「僕は今夜ここを抜け出す。石を何とか先に手に入れる」

「気は確かか!」とロンが叫んだ。

「だめよ! マクゴナガル先生に言われたでしょ。退校になっちゃうわ!」

「だから何だって言うんだ?!」ハリーが叫んだ。

「わからないのかい? もしスネイプが石を手に入れたら、ヴォルデモートが戻ってくるんだ! あいつがいた時、魔法界がどんなに酷い有様だったか、君たちも聞いてるだろう?! : 退校なんてもう問題じゃない、ホグワーツそのものがなくなってしまうんだ! でなければ、闇の魔術の学校にされてしまうだろう。もし僕が石にたどり着く前に見つかってしまったら、そう、僕は退校でダーズリー家に戻り、そこでヴォルデモートがやってくるのを待つしかない。死ぬのが少し遅くなるだけだ。——だって僕は、絶対にヴォルデモートに、闇の魔法に屈しないから!

今晚、僕は君たちが何と言おうと僕は仕掛け扉を開ける。いいかい、僕の両親はヴォルデモートに殺されたんだ」

それはハリーの本心の叫びだった。その言葉は死地へ向かう兵の長が、共に戦う兵士たちの心を命懸けで鼓舞するように、イリスの胸を強く打った。

「わかったよ、ハリー。でも、私も一緒に行く」

気が付けばイリスはハリーにそう言っていた。戸惑うハリーに、ハーマイオニーとロンが話しかける。

「馬鹿言うなよ。君だけを行かせると思うのかい? 僕も行くさ。モチのロンでね」

「優等生の私がいなくちゃ、どうやって石までたどり着くつもりなの? 私も行くわ」

ハリーは顔を俯かせながら、三人に小さく「ありがとう」と言った。彼の足元に小さな染みがぼたぼた形作られているのを、三人は見ない振りをした。

☆

夜の帳が下り、談話室にいた寮生が一人、また一人と寝室へ上がっていく。四人に誰も興味を持っていない事を、この時ばかりはみんな感謝した。最後にリー・ジョーダンが欠伸をしながら出ていくと、ハリーは一旦寝室に戻り、透明マントと木の笛（ハグリッドがクリスマスプレゼントにくれたらしい）を持ってきた。

いざ行かんとした時、四人の前に立ちふさがった障害——ネビルやピーブス、そしてミセス・ノリスだ——を乗り越えながら、四人は何とか四階へ続く廊下へたどり着いた。扉はすでに少し開いていた。——やはり、スネイプはもうフラツファイを突破していたに違いない。四人は決意を固めた表情を見合わせ、ハリーが扉を押し開ける。

扉は軋みながら開き、低いうなり声が聞こえた。イリスは初めてマント越しにフラツファイを見て、その余りの大きさに震え上がった。三つの大きな鼻が、姿の見えない四人の方向を狂ったように嗅ぎまわった。犬の足元にはハーブが置いてある。

「きつとあれはスネイプが置いたに違いない。犬は音楽がやんだとたん起きてしまうんだ。・・・さあ、始めよう」

ハリーが木の笛をローブから取り出そうとした時、小さな事故が起きた。フラツファイに見つからないよう、より一層四人が身を寄せ合っていたのも原因の一つだが、まず初めにハリーがポケットに手を突っ込んだ時、後ろのハーマイオニーに肘鉄を食らわせたような形になり、彼女がよろけた拍子に隣のロンに継り付き、体勢をくずした口ンが前にいるイリスにぶつかり、あつという間に四人はそれぞれ床に転げ落ちてしまった。——透明マントが覆い隠すものを無くし、それぞれの手を離れ、するすると地面に零れ落ちていく。

そうしてフラツファイは、不意に現れた四人の姿を発見してしまった。

「逃げろ!!」



ハリーが叫んだが、たちまちフラッツフィーの恐ろしい吠え声に掻き消された。四人は散り散りになって逃げた。フラッツフィーは繋がれた鎖の許す範囲で、本能のまま暴れ回った。その拍子に、ハーブも木の笛も粉々に踏み砕かれた。——フラッツフィーは逃げ惑う四人のうち、ロンに目を付けた。彼のローブの裾を三つの頭のうちの一つが捕え、我武者羅に暴れるロンを手元へ引き摺って行く。

「うわあああ!!」

ロンが恐怖で引き攣った声で叫んだ。——ハリーとハーマイオニーがロンに無我夢中で駆け寄ろうとしたその時、フラッツフィーが不意に動きを止めた。リン、と微かな鈴の音がする。三人が音の方向を見ると、イリスが真つ青な表情で、ポケットから取り出した銀色のリボンを振っていた。

『鈴の音、最大に』

イリスの合言葉に従って、リボンから出される鈴の音は、部屋中に響く程大きくなった。いくつもの鈴を束ねて鳴らしたかのような音は、イリスに『神楽鈴』を彷彿とさせた。イリスは、春頃に実家の神社で催される祭りでイオが舞う『巫女舞』独特のリズムで、鈴を鳴らし続けた。やがてそれを『良質な音楽』と認識したフラッツフィーは口を離し、三つの頭はそれぞれ眠そうにとろんと目を閉じ、その場に横たわって眠ってしまった。再び静寂が訪れ、四人はため息を零し、体の力を抜いた。

「ありがとう、イリス。おかげで助かったよ」ロンが言った。

フラッツフィーが眠っているうちに、四人はそつと仕掛け扉の方へ移動し、扉を引つ張り開けた。中は真つ暗だ。

「真つ暗だ……降りていく階段もないみたい。落ちていくしかないね」中を覗き込んだロンの感想を聞いて、イリスの表情に陰りが差した。

「ごめん、みんな、私はここまでもかもしれない」

「どうしてだい?……君っ、その足っ……!」

ハリーがイリスを振り返って、息をのんだ。二人も次々イリスの足元に目をやって、その痛ましさに悲鳴を上げる。——イリスの左足の

太腿から膝裏にかけて、大きな裂傷が走っていた。血が傷口から滴り、地面に小さな血だまりを作っている。・・・何故今まで気づかなかったのだろうか。三人は自分を責めた。

「さっきの時に、フラツファイにやられちゃったみたい。この足だと着地できないし、足手まといになっちゃう。私がどじでのろまなせいだ・・・ごめんなさい」

「そんなことないよ！さっきだって、君は僕を助けてくれたじゃないか！」ロンは慌ててそう言ったが、イリスは笑ってかぶりを振った。「私、ここで待ってる。入口も出口もここしかないなら、私、フラツファイと一緒に、みんなが戻ってくるのを待ってるよ」

「ダメだ、そんなの危険すぎる。もし、僕らが入れ違いになって、スネイクが先にここへ戻ってきたらどうするんだい？」

ハリーが強い口調でたしなめるが、イリスは毅然とした態度で続けた。

「ここにはもうハーブも木の笛もないもの。もしスネイク先生が戻ってきたら、私、フラツファイを起こすよ。そうしたら、一か八かの賭けだけど・・・フラツファイが先生を足止めしてくれるでしょ。」

・・・私、先生を『例のあの人』の手下になんか、悪者になんかしたくない」

三人は何も言わずに、それぞれイリスを抱きしめた。ハーマイオニーが「傷の手当てをしなくちゃ」と涙ながらに言って、ありあわせの薬と道具でイリスの傷の応急処置をした。

「イリス、いいかい。僕たちが全員降りたら、すぐ仕掛け扉を閉めるんだ。もし怪我の具合が酷くなったら、ここを出て、まっすぐふくろう小屋へ行つて、ダンブルドア宛にヘドウィグを送ってくれ。その後は医務室へ行くんのだ。僕たちの事は気にするな」

ハリーはそう言ってイリスの額にキスすると、仕掛け扉の中へ飛び込んだ。少しの沈黙の後、「大丈夫そうだ」というハリーの声が上がると、ロン、ハーマイオニーも飛び込んでいく。その後すぐに何やら騒いでいる声が聞こえたが、やがて収束し、「大丈夫だよ、扉を閉めて！」と再びハリーの大声が聴こえた。

「頑張つて！みんな！」

そう言つて、イリスは扉を閉めた。後には、眠り続けるフラツフィーとイリスだけが残された。

☆

・・・どれぐらい、時間がたっただろう。イリスには、それは何時間にも思われた。ゴールの見えないマラソンを延々走り続けているような、言いようのない不安感がイリスを包み込む。

やがて、何度も同じ作業を繰り返していたイリスは、やがてふと鈴のリズムがわからなくなつてしまった。ぴくぴくと、フラツフィーの鼻が動き始めた。——まずい！イリスは慌てて鈴を我武者羅に鳴らしたが、どうやら先程のリズムでないとお気に召さないらしく、やがて一つの頭が起き上がり、不機嫌そうにイリスを見た。

もうイリスには、こうするしか道はなかった。『巫女舞』をするのだ。幼い頃から、美しく舞い踊るイオを見続けてきたイリスは、その動きの一つ一つを克明に覚えている。手早く杖にリボンを巻き付けると、それは即席の『神楽鈴』になつた。そしてイリスは、ゆつたりとした動きで、記憶の糸を辿りながら、『巫女舞』を踊り始めた。舞う毎に足が痛むが、代わりに鈴のリズムを再び思い出す事が出来た。たちまちフラツフィーは目をとろんとさせ始める。

イリスは舞いながら、イオの教えを思い出した。『巫女舞』は、出雲神社に祀られている神様に奉納されるために行われ、舞いの途中で跳躍する事で神様をこの身に下ろし、神託を得るのだという。そして、国の、人々の安寧を祈るのだと。——それならば、とイリスは願いながら、足の痛みも忘れて跳躍した。神様、どうかハリーたちが無事に帰つてきますように。スネイプ先生が石を手に入れるのを失敗しますように、と。

——その時、イリスの体にとつともなく壮大で、偉大で、暖かなものが下りて来るような気配がした。イリスは初めての『巫女舞』で、出雲神社の神をその身に下ろす事に成功したのだ。それはイリスの願いを聞き届け、神託を与えた。彼女の魂の奥底で眠る、強大な魔力を解き放たせたのだ。イリスは神に出雲家の巫女として認められた証

に、母親エルサと同じように、出雲家特有のある力を発現させたのである。

☆

イリスは突然、自分の頭の中で、パチンと音を立てて感覚のスイッチが切り替わったような衝撃に囚われた。まるで世界の色が、空気が、音が全て変わったような、言いようのない不思議な感覚。イリスは茫然となり、いつの間にかリボンを鳴らすのを止めてしまっていた。当然のようにフラツフィーの三つの首がそれぞれゆっくりと頭を上げ、イリスを認め、ぐるぐると唸り声を上げた。

《やつと音楽を止めた。起きろ、兄弟。寝ている場合ではないぞ》  
驚いた事に、一つ目の頭が唸った声は、イリスの頭に直接響くような人間の言葉へ変換された。イリスは思わず耳を疑った。フラツフィーが喋った？

《全く、いつつも良い所で音楽が僕らを邪魔するんだ！》二つ目の頭がイリスを睨む。

《もしかして、さっきの小さな人間の群れからはぐれちゃったヤツかな？》三つ目の頭は首を傾げた。

《そんなことはどうでもいい。僕たちの仕事は侵入者の排除だ。また音楽を奏でられる前に、早いとこ、こいつを食っちゃまおう》一つ目の頭が舌なめずりした。

「ま、待って！食べないで、私は君たちの敵じゃないよ！」

のしつと大きな前足を踏ん張り、立ち上がりかけたフラツフィーは、イリスの言葉を聞いた途端、金縛りの呪文を掛けられたようにその場を動かなくなった。三つの頭がそれぞれを戸惑ったように見る。  
《お、おい・・・聞いたか？こいつ、他の人間とは違う。僕たちの言葉をしゃべったぞ！》一つ目の頭が叫んだ。

《お前、僕たちの言葉がわかるのか？》二つ目の頭がこわごわ尋ねた。

「う、うん・・・そうみたい」

どうやらイリスの言葉は、不思議なことにフラツフィーのわかるような言語に翻訳され、彼らの耳に届いているようだった。

《・・・驚いたな。僕たちの言葉のわかる人間は、初めてだ》三つ目の頭が感心したように頷いた。

「私も初めて、犬としゃべったよ。ジャンプしたら急に何だか不思議な気持ちになって、君たちの言葉がわかるようになったんだ」

イリスもフラツファイも、じーっと不思議そうにお互いを見つめた。イリスにふと思いついて、フラツファイに話しかけた。

「ねえ、フラツファイ。聞きたいことがあるんだけど・・・私たちより前に、誰か他の人が来なかった？」

《おい、フラツファイなんて呼ぶのはやめてくれ。それは、あのだでかい人間が勝手につけた名だ。僕らにはそれぞれ立派な名前があるんだ》

フラツファイは一つ目の頭が『サナトス』、二つ目の頭が『ゾーエー』、三つ目の頭が『アナスタシス』と名乗ってくれたので、イリスも自己紹介をし、改めて自分たちが敵ではない事、本当の敵は先に仕掛け扉を開けて侵入してしまったのだという事を伝えると、みんな前足を力任せに引つ掻いて、悔しがった。

《なら、僕らはお前たちに酷い事をしてしまったな。おまけにお前を引つ掻いてしまった。痛いだろう?・・・ごめん》

ゾーエーがしょんぼりと項垂れ、イリスに謝る。イリスは（実際痛い）気にすることはないと、ゾーエーに微笑んだ。

《そうだ。質問に答えてなかったな。・・・お前たちが来るより前に、人間が来たよ。そいつもすぐ音楽を鳴らしたんで、僕らはあまりよくは見れていないが》サナトスが言う。

「・・・え?!そ、それはどんな人だった?」

イリスは足を引き摺りながら、彼らの前足に思わずしがみ付き、答えを急いだ。が、思いもよらない言葉が彼らの口から放たれる。

《そいつは何せ、とびきり臭かった。鼻がもげそうだったよ》アナスタシスが舌をデロンと出した。

《それに、あのヘンテコリンな被り物。僕ら思わず笑っちゃってさ》ゾーエーがくすくす笑い出し笑いをした。

《被り物・・・ああ、思い出した。そいつはアネモネの色をした大

きな被り物を頭に付けてたよ」サナトスが優しい目をしてイリスに言った。

「大きな・・・被り物・・・？」

スネイプは被り物なんてしない。アネモネが花の名だとするならば、色は紫。紫色の被り物をするのは、イリスの知る人物では、ただ一人だけだ。

「クイレル先生・・・？」

なんていうことだ、クイレル先生が真犯人だったんだ。シャーロット・ホームズは、再び真実にたどり着いたが、もうワトソン君たちはすでに現場に向かってしまっていた。

## File 16. 動き始めた思惑

「私、今すぐみんなに知らせなきゃ！」

何としてでも、ハリーたちに知らせなければ。イリスは居ても立つても居られなくなつた。スネイプが犯人ではなかつたと喜んで居る場合ではない。みんなは犯人がクイレルだと知らないのだ。何故自分の心臓がこんなにも早鐘を打ち始めたのか、イリスは理解できなかった。足を引き摺りながらも、仕掛け扉に飛びついて引っぱり開けようとする。

《ダメだ、君は足を怪我してるんだぞ。僕らが君を乗せて行くよ》  
三匹が口々にそう言つて同じように扉に近づくが、残念な事に彼らの体は大きすぎて、頭の一つくらいしか入りそうになかつた。おまけに彼らの首にはそれぞれ頑丈な鉄製の鎖が付いていて、これはどうにも外せそうにない。イリスと三匹は途方に暮れたように扉の前で立ち尽くした。

ふと頭を扉の中に突つ込んで鼻をクンクンさせていたサナトスが、怪訝な声を出した。

《待て、何かがこつちへ来る。風を切る音がする》

サナトスが慌てて首を引っこ抜くのと、後ろにロンを乗せたハーマイオニーの箒が中から飛び出してくるのは、ほぼ同時だった。

「ハーミー、ロン！無事だったんだね！——ハリーは？」

「っ!!イリス！鈴を鳴らして！」

「フラッファイが起きてるぞ！」

二人を見上げてイリスは飛び跳ねるばかりに喜んだ後、ハリーがいない事を疑問に思った。一方の二人は起きているフラッファイを見て、口々に悲鳴を上げながらイリスに注意を促す。

《イリス、こいつらは敵じゃないんだな？》

対して三匹は二人を見て、イリスに確認した。イリスが頷くと、彼らは『敵意はない』という証としてそれぞれの顎を地面に乗せ、その場に伏せてみせた。二人はその様子を見て、お互いに目を合わせ絶句した。——あの恐ろしい怪物が、イリスの領き一つで愛玩犬のように

伏せをした。イリスは天井近くで浮かぶ二人に話しかける。

「大丈夫だよ、二人とも！フラツファイと話したの、彼らは私たちを襲わないよ」

「ちよつと待つて、『話した』つてどういうことだい？」

ロンが驚きの余り目を剥いて問いかけるが、いち早く冷静さを取り戻したハーマイオニーが「それどころではない」と制した。

「イリス、私たちちくろう小屋へ行って、ダンブルドアに連絡しなくちゃ。ハリーが・・・一人で、最後の部屋へ行ったの」

「えっ・・・？」

《おい、何て言ってるんだ？》サナトスが頭を上げてイリスに尋ねた。

イリスが話の内容を聞かせると、三匹は再び扉の前で番をすると言った。

《ここは僕らに任せて、君はこいつらと一緒に行けよ》ゾーエーが言った。

《また臭いヘンテコリンな奴が来たら、僕らが噛み砕いてやるさ》アナスタシスがウインクする。

——その時、四階の廊下の扉が開き、誰かが入って来た。思わず身構えた三人は息をのんだ。——ダンブルドア校長だ。三匹は突然の侵入者にイリスを庇うように前に立ち、唸り声を上げた。

《誰だこいつ！》ゾーエーが叫ぶ。

「待つて、この人も敵じゃない！校長先生だよ！」

《こうちようせんせい？》

イリスが慌てて三匹を止めると、彼らは聞きなれない言葉に戸惑い、イリスを困ったように見た後、また地面に伏せた。ダンブルドアはそれを驚きの眼差しで見つめたが、すぐ元の穏やかな表情に戻った。我に返った三人が息せき切つて話しかける前に、ダンブルドアは落ち着いた口調で尋ねた。

「彼はもう行ってしまったんだね」

三人が一樣に頷くと、ダンブルドアは矢のような速さで仕掛け扉を開け、中へ降りて行った。——三人の体中を言葉に言い尽くせない程



の安心感が包み込んだ。みんな同じ事を思っていた。『ダンブルドアがいれば、安心だ』と。イリスは気を抜いた拍子に、今まで極度の緊張状態にあったせいで鈍化していた足の痛みが急激に強くなっているのを感じた——大量に失血したせいで、視界がぐるぐる回り始める——やがてイリスは、気を失ってしまった。

☆

イリスは不思議な夢を見た。どこまでも続く暗闇の中で、膝を抱えて座っている。

——ふと、下の方から暖かな気配を感じた。下を見ると、ずっと遠くにあるようにも、手を伸ばせば届くほど近くにあるようにも感じる不確かな距離に、虹色の光の粒子が集結した。それは巨大な蛇の形になった。同時に、今度は銀色の光の粒子が集結し、同じように巨大な蛇の形になった。銀色の蛇は赤い目を光らせながら、イリスを通り越して上へ昇って行こうとした——が、虹色の蛇が追いかけてきて、その尾っぽに噛み付き、元の場所まで引き摺り下ろした。銀色の蛇は虹色の蛇としばらく戦った後、虹色の蛇の尾っぽに噛み付いた。

二匹の蛇は、それぞれの尾に噛み付いたまま、ぐるぐると円を回って回り続けた。イリスはその様子をずっと見ているうちに、自分の意識が浮上していくのを感じた。上へ——上へ——

☆

イリスが目を開けると、そこは医務室のベッドの上だった。最初は状況が理解できず茫然としていたが、やがて事の次第を思い出し、慌ててベッドから上半身を起こす。——ハリーは無事なのか？

「こんにちは、イリス」

急に傍から穏やかな声がして、イリスはびっくりしてベッドの脇を見た。いつの間にか、ダンブルドアがイリスのベッドの脇に腰掛け、優しい目をしてイリスを見つめていた。

「校長先生、ハリーは無事なんですか?!」

「落ち着くのじゃ、イリス。でないとなしがマダム・ポンフリーに追い出されてしまう。——安心しなさい。ハリーは君の隣のベッドですやすや眠っておる」

ダンブルドアは興奮するイリスの手に自らの手を置き、静かにそう言った。イリスが急いで隣を見ると、カーテンが引かれたベッドがあった。思わず裸足のままベッドを起き出して、カーテンをそつとめくる。——そこにはハリーが、包帯を体のそこかしこに巻いてはいるが、規則正しい寝息を立てていた。イリスは安堵の余り全身の力が抜け、大きなため息を零しながらその場にしゃがみ込んだ。ダンブルドアはその様子を、しばらく何かを見定めるような厳しい表情で見つめていたが、やがて暖かな陽だまりを思わせる優しい声で語り掛けた。「君も、ハリーも、無事で本当に良かった」

「・・・石は・・・クイレル先生はどうなつたんですか？」

振り返ってイリスが問いかけると、ダンブルドアはキラキラ光るブルーの目でイリスをじつと見て、興味深そうに言った。

「ほう、君は石を狙った犯人がクイレルだと気づいたんだね。どうしてそれを？」

イリスは少し躊躇った後、彼に事の次第を話した。巫女舞をした後、急にフラツファイアの言葉がわかるようになった事、犯人はクイレルだと教えてもらった事を。ダンブルドアは感慨深げに髭を震わせた。

「なんと実に素晴らしい。君の母上と同じ力を、君は身に付けたのじゃ。君の母上も、言葉を持たぬ者と心を通わせる事ができた」「私のお母さんも、同じ力を？」

どうしてイオはそんな大事な事を教えてくれなかったのだろう。イリスが驚いて問いかけると、ダンブルドアは静かに頷いた。

「・・・おお、そうだ、君がきちんと力を制御できるようになるまで、これを付けているとよい」

ダンブルドアはローブのポケットから古ぼけた耳当てを取り出し、イリスに渡した。

「君の耳と声には、人間以外のものと言葉を交わすための微量で繊細な魔力が宿っておる。この耳当ては、それを遮断するものじゃ。これを付けている間は、君の耳には人間の言葉のみが聴こえるじやろう。

——慣れぬうちは、君には人間の声とそうでないものの声、双方が聴

こえて混乱してしまうじやろうから、おば君に制御の仕方を学ぶまでは、必要な時以外はこれを付けているとよい。——後は、クイレルと石の事じゃが・・・」

イリスはダンブルドアから真実を聞いた。クイレルは弱ったヴォルデモートの魂をその身に宿し、森でユニコーンの血を飲んでいた。イリスが出会った影はヴォルデモートではなくクイレルだったのだ。ヴォルデモートを復活させるために彼は石を狙っていたが、手に入れる寸前にハリーに阻まれ、彼は倒された。そして、守られた石はフラメルと話し合った末、砕いてしまったと。——それは余りに現実離れた話で、イリスはどこか国の武勇伝を聞いているかのように、——クイレルが死んだと聞かされても——いまいち実感が湧かなかった。それよりも石が砕かれた事の方が衝撃だった。「フラメルは死んでしまっんですか?」

イリスが聞くと、ダンブルドアは穏やかに笑ってこう言った。「整理された心を持つ者にとっては、死は次の大いなる冒険に過ぎない」と。イリスがポカンとした表情を浮かべていると、ダンブルドアはポケットから一掴み分のレモンキャンデーをこっそり渡し、ベッドから立ち上がった。

「それではわしはもう行くとするかのう。もう彼女と約束した十分を過ぎそうじゃ(そう言つて、チラツとマダム・ポンフリーを見た)。——わしは君を信じておるよ、イリス」

事件は解決したが、イリスの心は晴れなかった。影の正体はわかったが、何故クイレルが自分に触れようとしたのか、あの強い既視感は何だったのか。疑問は残る。それに最後のダンブルドアの言葉は、イリスに正しい行動をするよう念押しをしているようだった。果たしてそれは自分の新しい力を悪用しないようにという事なのか、それとももつと別の事なのか。結局、謎は解けないまま、闇に葬られた。

☆

イリスは幸運な事に、次の日の朝には医務室を出る事ができた。談話室に入った瞬間、ハーマイオニーとロンがやって来て、イリスの無事を涙ながらに喜んだ。どうやら何度かお見舞いに行ったが、その度

にマダム・ポンフリーに面会謝絶を言い渡されていたらしい。イリスは二人にハリーの様子とダンブルドアとした話の内容を教えた。そこで改めて二人はイリスの『人間以外のものと話せる力』を信じたようだった。あの時はドタバタでイリスが突然猛獣使いの才能を開花させた位にしか思っていなかったが（実際イリスが倒れても犬は二人を襲わなかった）、ダンブルドアがそう言うならばと二人はイリスの新たな力を認めた。ロンがまじまじとイリスの耳当てを見ながら言った。

「君つて、補習にしろ、記憶喪失事件にしろ、どんだん悪い方向へ目立っていくよな」

「黙んなさい、ロン！」ハーマイオニーがデリカシーのない発言をしたロンの頭を軽く叩いた。

そうしてイリスは再び日常に戻ったが、ダンブルドアの耳当てを外す事はできなかった。最初の方こそ、ウィーズリーの双子に早速「素敵な耳当てだ！」とからかわれたりして、恥ずかしく思い外そうとしたのだが、その度に周囲の様々な生き物の声が両耳に襲い掛かり、友人と会話をまともにする事すらできないのだ。イリスは恥を忍んでつけっぱなしにする事に決めた。

ホグワーツ中は、誰が吹聴したのか『石』の事でもちきりだった。みんなハリーの事を興味深げに話している。それを横目に見ながら、イリスはロンとハーマイオニーと共にハリーのお見舞いに医務室へ向かった。三人の懇願にマダム・ポンフリーは五分だけという条件で、特別に三人を中に入れてくれた。

「ハリー！」

ハーマイオニーは今にも満身創痍のハリーを両手で抱き締めそうだったので、イリスとロンが慌てて彼女を止めた。ハリーは心底ほつとした表情を浮かべていた。

「ああ、ハリー。私たち、とつても心配していたのよ」

「学校中がこの話でもちきりだよ。イリスからちよこちよこつとは聞いたんだけどさ。本当は何があったの？」とロンが聞いた。

ハリーは三人に一部始終を話して聞かせた。クイレル、鏡、賢者の

石、そしてヴォルデモート。イリスは簡単にダンブルドアに話の内容を聞いて知っていたものの、改めてハリーの口から聞くと臨場感が違うと感じた。彼はクィレルやヴォルデモートと直接対面したのだから、当たり前だが。三人は真剣にハリーの話聞いていた。ここぞという時にハッと息をのみ、クィレルのターバンの下に何があったかを話した時は、ハーマイオニーがたまらず大きな悲鳴を上げ、イリスは全身が粟立った。

「僕ら、君に謝らなきゃ。名探偵イリス。君は誰よりも早く真犯人に気づいてたのに」ハリーが困ったように微笑んで、イリスを見た。

「もうハリーが無事だったんだから、何でもいいよ。私も詳しく覚えてないしね。それに、スネイプ先生が犯人じゃなくて、本当によかった」イリスは笑って答えた。

「もしかして、ダンブルドアは、君がクィレルを止めるよう仕向けたんだろうか。君に透明マントを贈ったりしてさ」

首を傾げながらロンが言うと、ハーマイオニーが彼に食って掛かった。

「もしも彼がそんな事をしたんだったら・・・言わせてもらおうわ、酷いじゃない！ハリーは殺されてたかもしれないのよ」

「ううん、そうじゃないさ」

ハリーがタジタジになったロンをフォローしながら、ゆっくり言葉を噛みしめるように言った。

「ダンブルドアっておかしな人なんだ。たぶん、僕にチャンスを与えたいって気持ちがあつたんだと思う。あの人は僕たちがやろうとしていた事を、ほとんど知っていたんだよ。だから僕たちを止めないで、むしろ僕たちの役に立つよう、必要なことだけを教えてくれたんじゃないのかな。僕にそのつもりがあるなら、『ヴォルデモートと対決する権利がある』ってあの人はそう考えていたような気がする」

四人は黙り込み、それぞれの頭の中で思いを馳せた。やがてロンが明るい口調で言った。

「ハリー、明日は学年末のパーティがあるから元気になって起きてこなくちゃ。得点は全部計算がすんで、もちろんスリザリンが勝つたん

だ。でも、ご馳走はあるよ」

みんな和やかな雰囲気になって笑った。深く考えるのはよそう。もう戦いは終わったのだから。やがてマダム・ポンフリーがやってきて、三人を追い出した。

☆

学年度末パーティーの当日、三人はそわそわとハリーが来るのをグリフィンボールのテーブルで待っていた。周囲の話し声が突然静まり返ったので、イリスは思わず扉を見た。——ハリーが戸口に立っていた。みんな一斉にハリーを見ながら、がやがやと興奮した様子で話し始める。ハリーは気にしないような顔をして、三人のところへ真っ直ぐにやって来てイリスの隣に座った。

間もなくダンブルドアが来賓席に現れたので、生徒たちの声はたちまち静かになった。ダンブルドアが一人一人、生徒たちの顔を慈愛に満ちた瞳で見ながら、一年の締めくくりの言葉と、各寮の点数を低い順に告げていく。最後に呼ばれたスリザリンのテーブルから、嵐のような歓声と足を踏み鳴らす音が上がった。もちろんグリフィンボールは最初に呼ばれたので、最下位という事だ。かつての大量減点事件を思い出して四人が打ちひしがれた顔をしていると、ダンブルドアが言った。

「よし、よし、スリザリン。よくやった。しかし、つい最近の出来事も勘定に入れなくてはなるまいて」

部屋全体がシーンとなった。みんな合点がいったようで、グリフィンボールのテーブルだけでなく、他の寮の生徒たちもハリーの事をチラ見ている。その不穏な様子にスリザリン寮生の笑いが少し消えたが、ダンブルドアは構う事無く言葉を続けた。

「——駆け込みの点数をいくつか与えよう。——えーと、そうそう、まず最初は、イリス・ゴント嬢」

イリスは突然フルネームを呼ばれて、心臓が止まるかと思った。——どうして私？さっきまでハリーに注がれていたみんなの視線がイリスに一点集中し、彼女は不安そうに縮こまった。

「大怪我を負いながらも、友の帰還を信じて犬を眠らせ続けた事を称

し、グリフィンドールに五十点を与える」

グリフィンドールの歓声は、魔法をかけられた天井を吹き飛ばしかねない勢いだった。イリスは喜び勇んだハリーに耳当てが外れるのも構わず、頭をぐしゃぐしゃに掻き雑ぜられた。他のグリフィンドール生も、口々にイリスを賞賛する言葉を投げかける。イリスは信じられなかった。いつも減点されてばかりだった落ちこぼれの自分が、五十点ももらえるなんて。

続いて、ダンブルドアはロンとハーマイオニーにも、健闘を称えてそれぞれ五十点ずつ与えた。ロンは双子の兄たちにハグされながらも、熟したトマトのように顔を真っ赤にし、感極まったハーマイオニーは腕に顔を埋め、嬉し泣きをしていた。たった数秒で、一五〇点も増えた。その信じられないような事実には、グリフィンドールの寮生がテーブルのあちこちで我を忘れて狂喜している。

「四番目は、ハリー・ポッター君……」

『ハリー・ポッター』という言葉に、大広間が再び水を打ったように静まり返った。石を守ったヒーローの名だ。期待に胸を弾ませ、熱を帯びた生徒たちの視線がダンブルドアに集中する。

「その完璧な精神力と、並外れた勇気を称え、グリフィンドールに六十点を与える」

もはやそれは耳をつんぎく大騒音だった。この大興奮の中でも冷静に足し算できた人がいたなら、グリフィンドールの点数がスリザリンと同点になったことがわかるだろう。イリスは当然足し算など出来る余裕はなかった。ハリーと手を取り合っただけで喜びながら、誰かが「同点だ！スリザリンと同点！」と興奮して叫んでいるのを聞いていた。

だが、ダンブルドアの快進撃はそこで止まらなかった。彼は静寂を呼び戻すために手を上げた。広間の中が少しずつ静かになっていくのを確認し、彼は口を開いた。

「勇気にも色々ある。敵に立ち向かっていくのにも大いなる勇気がいる。しかし、味方の友人に立ち向かっていくのにも同じくらい勇気が必要じゃ。そこで、わしは——ネビル・ロングボトム君に十点を与え

たい」

大広間の外に誰かいたら大爆発が起こった、と思ったかもしれない。グリフィンドールのテールから沸き上がった歓声は、それほど大きなものだった。四人は立ち上がって叫び、歓声を上げた。みんな泣きながら笑い、笑いながら泣いていた。もう無茶苦茶だった。ハリーとイリスはお互いに抱き着いて、ピヨンピヨン飛び跳ねながらグリフィンドールの勝利を祝った。ネビルは驚いて青白くなったが、みんなに抱き着かれ、見る見るうちに人に埋もれて姿が見えなくなった。レイブンクローもハツフルパフも、スリザリンがトツプの座から滑り落ちたことを祝って、喝采に加わっていた。今やスリザリンのテールは、可哀想な事に先程の浮かれた様子は微塵も見当たらず、寮生はみんな驚愕と絶望に打ちひしがれていた。

「従って、飾りつけをちよいと変えねばならんわ」

ダンブルドアが手を叩いた。次の瞬間、グリーンの垂れ幕が真紅に、銀色が金色に変わった。巨大なスリザリンの蛇が消えてグリフィンドールのそびえたつようなライオンが現れた。来賓席では、スネイプが苦み走った作り笑いでマクゴナガル先生と握手を交わしていた。イリスはハリーたちとはしゃぎあいながら、今日は間違いなく人生で最良の日だと思った。

☆

だが、人生はそうは上手くいかないものである。試験の結果が発表された。ハーマイオニーの助力のおかげでハリーもロンもいい成績だった。ハーマイオニーはもちろん学年でトツプだった。しかし……「どうして？」

イリスは驚愕した。完璧だった筈の魔法薬学の成績は、驚いた事に——学年で一番ビリ——つまり、落第すれすれだったのだ。しかし、変身学を筆頭とした他の授業の成績がそこそこ良く、それらのおかげで何とか落第を逃れたようだった。

「嘘でしょ。貴方の作り方は完璧だった筈よ。そんなことって……」  
ハーマイオニーがイリスの成績を覗き込み、息をのんだ。

「——何かご不満でもお有りかな？ ゴーント」



はつとして振り返ると、取ってつけたような微笑みを浮かべたスネイプがイリスのすぐ後ろに立ち、彼女を見下ろしていた。

「先生、イリスの作り方は完璧だった筈です！」

「口を慎め、グレンジャー。試験の出来は吾輩が決める事だ。ゴーント、残念だがご覧の通り、君の補習は来年も継続する事となった。落第を免れた事を幸運に思うがいい。……(チラツとイリスの成績を見てこれ見よがしにため息を零した)……君には失望した。来学期こそ精進したまえ」

ハーマイオニーが我慢できずにスネイプに意見するが、彼は氷のように冷たい声で手短に遣り返し、不機嫌そうにマントを翻して去って行った。

「きつとあてつけだよ！グリフィンドールが土壇場で寮杯を獲得したからだ！」

ハリーが怒りで顔を真っ赤にしながらイリスに言うが、彼女は言葉もなく落ち込むばかりだった。イリスが魔法薬学の勉強に打ち込んだのは、早く補習から解放されたいという思いが第一だが……一度で良いから、尊敬するスネイプに褒めてもらいたくて頑張っていたのもあった。きつと試験の結果は一位だと思っていた。それなのに……『君には失望した』スネイプの言葉はイリスの心を鋭いナイフのように突き刺した。

☆

イリスは次の日、ハグリッドの小屋の前に来ていた。フラッフィーにお別れを言うためだ。ハグリッドは迎えに来たギリシャの魔法使いと何やら話し込んでいた。イリスは耳当てを外しながら(外した瞬間、色んな声の洪水で頭がクラクラした)、フラッフィーに近寄る。頑丈なオリの前にフラッフィーが立っていて、イリスを見ると嬉しそうに尻尾を振った。

《イリス、来てくれたのかい？》サナトスと言う。

「うん。ハグリッドから、みんながもうギリシャに帰っちゃうって聞いて」

イリスは寂しげに言ってそれぞれの頭を撫でると、みんな気持ちよ

さそうに目を細めた。

《僕らは友達だ。何かあったら僕らを呼んでくれ。君がどこにいたって、すぐに駆けつけるよ》アナスタシスが言った。

《さよなら、イリス。また会おう》ゾーエーが言った。

そうして三匹は、付き添いの魔法使いと共に、故郷であるギリシャへ帰っていった。

☆

そして、あつという間にホグワーツを出発する日がやって来た。イリスは洋服箆笥を空にし、トランクに荷物を詰め込み、ハーマイオニーと共に談話室を出た。玄関ホールを出てハリーたちと合流し、ハグリッドが指示する船に乗って湖を渡り、そして四人はプラットフォームからホグワーツ特急に乗り込んだ。四人は一つのコンパートメントに陣取り、お菓子を食べながら談笑しているうちに、車窓の景色は徐々にマグルの世界へと近づいていく。

列車はキングズ・クロス駅の9と4分の3番線ホームに到着した。ゲートの前には長蛇の列が出来ており、四人はそれに並んだ。壁の中から一度に大勢の生徒が飛び出すとマグルがびっくりするので、数人ずつばらばらに出る必要があったためだ。

「夏休みに三人共、家に泊まりに来てよ。ふくろう便を送るからさ」  
順番を待っている間、ロンが鼻を擦りながら言った。

「ほんとっ?!行きたい!」

イリスははしゃいで歓声を上げた。四人で仲良くお泊りだなんて、とても素敵な事だと思ったからだ。

「それは嬉しいなあ。僕も何か楽しみがなくなっちゃ」とハリー。

「言っておきますけど、宿題はそれまでにしなさいよね」

何かを察知したハーマイオニーがピシヤリと言うと、ロンとイリスは示し合わせたように眉根を下げ、大きなため息を零した。

人の波に押されながら四人はゲートを通り抜け、マグルの世界へ再び足を踏み入れた。駅の中も当然大勢の人々でごった返しており、イリスは迎えに来ている筈のイオの姿を探して視線を彷徨わせる。

「イリス!」

「おばさん！」

懐かしい声が聞こえた。——イオおばさんだ。イリスは三人にお別れを言おうと、トランクを急いで引つ張りながら一目散にイオに駆け寄ろうとして——徐々にペースダウンしていった。笑顔で手を振る彼女のそばに、ルシウスとナルシツサ、ドラコがいたためだ。どうやら四人で談笑していたらしく、みんなの雰囲気は和やかだった。しかし、イリスの心境は複雑だった。

——君を哀れんでいるからさ！マグル界でスクイブに育てられた親なしの君をね！——

ドラコに投げつけられた言葉が思い起こされ、イリスは気まずそうな顔でルシウスとナルシツサを見た。ルシウスはすぐにイリスの表情を見て察し、彼女の下へ近寄った。

「イリス。どうやら休暇明けのクイディッチの試合で、ドラコが君に無礼な発言をしたようだね。私がきつく叱っておいたよ。・・・不快な思いをさせてすまなかった」

ルシウスはイリスの目線に合わせてしゃがみ込み、驚く彼女の頭を撫でながらそう告げた。ドラコも眉根を下げ、イリスに対してバツの悪そうな表情で小さく謝る。どうやら彼は父に、イリスとの喧嘩の事を報告した結果、締め上げられたらしい。イリスの心に掛かっていた分厚い雲は、途端に晴れて行った。——じゃあ、ドラコのあの発言は嘘だったんだ。本当にルシウスはそんな事を言っていなかったんだ。そう思っ、素直なイリスは一安心した。

「イリス、ルシウスさんが、夏休みにまた泊りに来ないかってさ。どうする？」

「えーっと・・・」

イリスたちとは少し離れた位置でナルシツサと世間話をしていたイオが、不意にイリスに尋ねた。イリスは申し訳なさそうにルシウスを見た後、ロンの家に泊まる約束をしたからと、言葉を選びながら丁寧に断った。ドラコはイリスに聞こえないように舌打ちした。

「・・・ほう、ウィーズリー家に？」

ルシウスはウィーズリーの名を聞くと不愉快そうに眉をひそめた

が、イリスが不審に思う前にいつもの冷静な表情を取り戻し、それなら仕方がないと少し残念そうに笑った。イオがルシウスたちに別れの挨拶をしている時、ドラコがイリスに近づいた。——イリスはドキツとした。

「リボンを貸してくれ」

あの時のドラコの発言に傷つきイリスはリボンを付ける事を躊躇っていたが、今となってはもう過去の事だ。それにこれのおかげでフラツフィーからみんなを守る事ができたし、イリスにとってはお守りのようなものだった。ドラコはイリスからリボンを受け取ると、彼女の髪に触れてリボンに合言葉を囁いた。リボンは涼しげな鈴の音を奏でながらイリスの髪をまとめ上げる。それを見て、ドラコは満足気に笑った。

「やっぱり、それを付けていた方がいい」

イリスが恥ずかしげに微笑むと、ドラコも顔を赤らめた。そんな二人の微笑ましい光景を見て、ルシウスたちが笑う。

その時、イリスが気付いていれば、これからの状況は変わったかもしれないなかった。

——『目に見える事だけが真実ではない』という親友のハーマイオニーの忠告を本当に理解できていたなら——

ルシウスが表面上は好意的な表情を浮かべながらも、会話の端々でイリスやイオに分からないよう、冷たく蔑んだような目でイオを睨んでいた事も、そしてイリスのフクロウが入っている籠に近づき、杖を出して何かの魔法をかけていたのも、注意深く観察していたなら気づけた筈だった。

そう、冷静に考えれば他にも可笑しな点は沢山あった筈だ。しかし、イリスは単純であるが故に、愚かにもそれらを察知する事ができなかった。イリスの計り知れぬところでどす黒い陰謀が渦巻き、災厄が彼女に手を伸ばそうとしていた。

☆

マルフォイ家と別れた後、イオは歩き出そうとしたが、不意に前に回ったイリスが両手を突き出して通せんぼをしたために、立ち止まっ

た。

「どうしたイリス」

「・・・抱っこ」

イオは呆れたようにため息を零すと、イリスをひよいと片手で抱き上げた。

「まったく、お前はいつまでたつても赤ちゃんみたいだな」

そう言いながらも、イオの表情は満更でもなさそうだった。イリスはイオの首筋に顔を埋めて、何も言わなかった。別に他のホグワーツ生に見られたって構わないと思った。

「だって、本当に色々あったんだよ。大変なことが・・・」

「ああ、いっぱい聞かせてくれ。時間はたっぷりあるんだ」

そうして二人は、イギリスの街並みへ消えて行った。

## 秘密の部屋編

### Page 1. 出雲家の物語

昔々、日本に「虹蛇様」という虹の神様がいました。

虹蛇様は、大きな虹色の蛇の姿をしていました。

国中の乾いた場所へ旅をして回っては、雨雲を作り雨を降らして大地を潤したり、入り江や川、湖や泉を作ったりするのが、虹蛇様のお仕事でした。

お仕事が終わった後は、空に自分の体で橋を掛けて、人々や動物の心を和ませました。

寂しがりな虹蛇様は、旅先で人々や動物とお話するのが何より好きでした。

☆

ある小さな村に、泳ぐのが大好きな女の子がいました。

女の子は、虹蛇様が来たおかげで雨が降って川の水も増えたのに、虹蛇様が止めるのも聞かず、川に飛び込んで泳ぎ始めました。

すると、どどーつと水が流れてきて、女の子を押し流してしまいました。

「助けてー！」

おぼれかけた女の子が助けを求めると、虹蛇様は空から大きな尾っぽをたらし、女の子をすくって、岸まで運んであげました。

「ありがとう」

女の子は空を見上げて、虹蛇様にお礼を言いました。

なんて可愛い子なんだろう。虹蛇様は、美しい女の子が好きになりました。

なんて優しい人なんでしょう。女の子も、優しい虹蛇様が好きになりました。

虹蛇様は人間の姿になり、女の子と結婚して、女の子の住む村で暮らすことにしました。

虹蛇様は女の子と一緒に生活が楽しすぎて、雨を降らすという自分

のお仕事を忘れてしまいました。

☆

それに怒った天の大神様は、村に豪雨を降らせました。村は全て水に押し流され、虹蛇様以外の人間や動物は、みんな死んでしまいました。

一人ぼっちになった虹蛇様は、悲しんで大粒の涙を流し、それらは大雨のように地面に降り注ぎました。

すると涙の一粒ひとつぶがキラキラ輝いて、天と地を繋ぐ虹の架け橋になりました。

虹の架け橋から、天へ運ばれた人間や動物の魂がやって来てそれぞれ体に戻り、みんな生き返りました。

神様の力を濫用した虹蛇様は、天の大神様から罰を受け、人間の姿を奪われて元の蛇の姿に戻りました。人間や動物とお話する力も奪われました。

生き返った人間や動物の中には、もちろん女の子もいました。

女の子は、寂しがりな虹蛇様を一人ぼっちにはしませんでした。愛していたからです。

☆

二人は村を出て、一緒に雨を降らせる旅を続けました。蛇神様は空の上、女の子は大地の上で。

お話しはできなくとも、二人は愛の架け橋で繋がっていたので、寂しくはありませんでした。

やがて天の大神様は、二人の健気な愛に心を打たれ、女の子に虹蛇様との子供を生むことを許しました。

子供は虹蛇様と同じように、人間以外のものと話ができ、死者の魂を呼び戻す「虹の涙」を一度だけ使う事が出来ました。

女の子は子供を連れて旅を続けましたが、やがて旅路の果てに力尽き、魂となって虹蛇様の元へいき、虹蛇様の一部になりました。

子供は旅をやめました。女の子の墓を作ると、そのそばに家を建ててそこに住み、時々やってくる虹蛇様とお話をして過ごしました。

虹蛇様が家を訪れる度に、子供の家の周囲の空は、恵みの雨が降り、

やがて晴天となつて美しい虹が掛かりました。

やがて子供の家は「人知れず雲が出てきて、そして出ていく家」と不思議がられ、「出雲家」と呼ばれるようになりました。

それが、出雲家の始まりだと言われています。



空港へ向かう途中、イオはやっとイリスがしている耳当てに気づき、訝しげな声を上げた。

「何だその耳当て？」

「あのね・・・」

イリスは得意満面の様子で、耳当てを付けるに至るまでの経緯を話した。イオは少しだけ驚いたように目を見開いたものの、後は穏やかに微笑んで、こう言った。

「そうか。お前もついに一人前か。・・・その力はな、神様がお前を助けるために与えてくれたんだよ。お前の母さんもそうだった」

「おばさんはその事を知ってたの？どうして私に教えてくれなかったの？」

「出雲家の仕来りだからね」イオはきっぱりと言った。「神様が一人前だと認めて力を授けてくれるまでは、力の事を伏せておかなければならないんだ。・・・それにしても、はるばる日本から来てくれたなんて。スクイブわたくしにも当主になる事を許してくれたし、うちの神様は優しいな。家に帰ったら、真っ先にお祈りに行くぞ」

☆

二人は無事日本へ帰り着いた。飛行機を降りた途端、独特の匂いが出て、その正体を見極めるためにイリスは無意識に鼻をクンクンさせて、はたと思いついた。——醤油だ。日本って醤油で出来てるんだ。イリスは何だか可笑しくなって、ふふつと笑った。本当に帰って来ただ、日本に。

空港から実家までの長い帰路の途中で、イリスはイオに、この一年間であった様々な出来事を話して聞かせた。手紙だけでは伝えきれなかった事が、沢山ある。イリスの話は滞りなく進んでいく。途中でイリスの好きなファーストフード店に寄り食べ物調達しつつ、車も運転しつつ、イリスの話も聞きつつ——イオは久しぶりに賑やかで忙しい時間を過ごしていた。

イリスが禁じられた森で黒い影に遭遇し、触れられる寸前で逃げ出

した話に差し掛かった時、イオがイリスを手で制した。

「それでね、ドラコがね・・・」

「——ちよい待て。禁じられた森で見たその黒い影は、何者なんだ？何でそいつはユニコーンの血を飲んでたんだ？」

話に水を差されたイリスは「順を追って話そうとしてたのに」と言わんばかりの不満そうな顔をした。イオが尋ねている事は、ハリーたちと命懸けで織り成した壮大な冒険活劇のオチだ。だがイオが早くそれを知りたいなら、仕方がない。イリスは『黒い影の正体はホグワーツの教師だったクイレルで、彼はヴォルデモートの魂をその身に取り憑かせ、衰弱した主のために血を飲んでいたのだ』と教えた。

——途端にイオの顔は真っ青になり、笑顔が消えた。その顔を見て、勘違いしたイリスが慌てて付け足す。

「大丈夫だよ。もうクイレル先生も例のあの人も、ハリーが倒してくれたから。もう終わったんだよ」

「・・・そうか。安心したよ。で、ドラコ君がどうしたって？」  
長い沈黙の後、イオは愛する姪を不安がらせないために辛うじて笑って見せ、続きを促した。イオが衝撃を受けたのは、イリスが話していたオチの部分ではなく、『黒い影——すなわちヴォルデモートがイリスに触れようとした』というおぞましい事実だった。何者かが矢を放ち守ってくれていなければ、イリスがどんな目に遭っていたか——。イオはぶるつと身を震わせた。

——ホグワーツは安全じゃないのかよ。あいつに思いっきり見つかってんじやねえか。イオは『イリスをホグワーツに行かせるよう』彼女を説得し約束させた、ホグワーツの校長であるアルバス・ダンブルドアを思い出し、怒りを孕んだ瞳で目の前の信号を睨み付けながら、静かに唇を噛みしめた。ホグワーツが思ったほど安全地帯ではないのか、それとも闇の帝王が強すぎるのか。魔法界にそれ程精通していないイオには判断しかねるが、イリスを守るためには、ホグワーツに送り届けるだけでは不十分だという事だけは痛感した。ホグワーツ内でも彼女を守るものが必要だ。イオはそう決意し、青信号に従ってアクセルを踏み込んだ。

☆

数時間後、二人は無事、実家へ帰り着いた。小さな出雲神社は相変わらず、鎮守の社である豊かな森林に囲まれて、厳かな雰囲気纏ってそこに佇んでいた。イリスはイオに促され、小さな頃からしてきたように鳥居をくぐり、手水舎で手を清め、拝殿へ赴き、一年の無事と力を与えてくれた事を神様に感謝した。

閉じていた瞼を開けると、不思議と気分がきれいさっぱり清められたような気がした。イオはまだ隣で両手を合わせて祈っていたが、やがて瞳を開けてイリスを見た。

「これでお前も晴れて、出雲家の一人前の魔女だ。さあ、本殿へ行こう」

イオは拝殿の奥の本殿へ進んだ。イリスはドキドキしながら、イオに付いていく。今まで本殿に入る事をイオに禁じられていたからだ。

本殿は拝殿よりもさらに小さくてボロボロだったが、まるで建物自体が光を帯びているように明るく、不思議な神々しさを放っていた。イオ曰く、漆や金箔で仕立てられた立派な拝殿は一般的な参拝者向けで、本殿の方が魔法族用（出雲家の人間と日本の魔法使いのみが参拝する事を許される領域。今はイオとイリス位しか参拝者はいないが）なのだという。

イオは本殿に一礼してから、門を外して扉を開けた。中は思ったよりも広々としていて、両脇に大きな棚が作り付けられ、無数の書物や道具が整頓されている。向かいの壁には立派な神棚があり、イオはそれにも一礼した。イリスにも同じようにさせると、棚から書物や道具をあれこれ取り出して、色々と説明してくれた。

「出雲家の人間が代々開発してきた魔法や、魔法を込めた道具の作り方が記してある。ここにあるものは、全部好きに使っていい。．．．ただし、決して書物だけは、他の人間に見せてはいけないよ。企業秘密ってやつだ」

イリスは興味津々だった。きらきら光る翡翠でできた勾玉や、美しい絵巻物、札、いわくありげな書物．．．などなど。イリスは、ふと『虹ノ涙ニツイテノ考察』と書かれた虫食いだらけの書物を手に取っ

た。

『虹の涙』って何?」

イオはもったいぶって咳払いをしつつ、こう言った。

「出雲家の人間は、二つの固有魔法を持っている。一つは、動物と話せる力。そしてもう一つが『虹の涙』だ。簡単に言えば、死者を蘇生させる魔法だ。だが、一度しか使えない。そして使った後は、出雲家の魔法の力は二度と使えなくなる、と言われてる」

「じゃあ、『虹の涙』を使ったら、二度と動物と話せなくなるっていうこと?」

「それどころか、ここにある魔法も、魔法の道具も、全部使えなくなる。これらは全部、出雲家の魔法の血で動かしているからね」

なんてリスキーな魔法なんだ。イリスは絶句した。死者を蘇生する魔法なんて、ホグワーツでも聞いた事がない。もしかしたら単に自分が勉強不足なだけなのかもしれないが、ハーマイオニーなら知っているだろうか。

「どうやって『虹の涙』を使うの? 私でも使えるの?」

イリスが好奇心をむき出しにして尋ねると、イオはイリスから書物を受け取り、パラパラとめくった。

「それがわからないんだよ。代々使い方は『来る時が来ればわかる』とだけ言い伝えられてきてな。詳細が一切わからん。・・・この十五代目は随分それについて研究していたようだが、最後のページになんか訳わからん事を書き残した後、当主を引退してしまったらしい」

イオは最後のページを見せた。そこには、達筆な文字で『虹ノ涙ハ愛ノ架ケ橋ト心得タリ コノ研究ハ終イ 後進ニ席ヲ譲ル』とだけ書きつけてあった。

「私が思うに、十五代目は、試行錯誤の末どうやったんだか知らないが・・・最後に『虹の涙』を使っただろうな。そして力を失って、次の代に当主の座を譲ったんだろう」

イリスはふと疑問に思った。

「お母さんは使ったのかな?」

イオは少し考えるように顔を伏せた後、イリスの瞳をじっと見た。

まるで今から言う事を彼女に本当に聞かせていいのか、考えあぐねているようだった。やがて決心がついたのか、イオは言葉を選ぶようにゆっくりと言った。

「お前を預けて立ち去る時、エルサは杖を持っていなかった。だからきつと・・・誰かに『虹の涙』を使つたんじゃないかな。その時は聞く余裕すらなかったけど、今になって考えると、わたしはそう思う」  
その時の光景を思い出しているのか、イオの瞳にはうっすら涙が浮かんでいた。イリスはイオの手に、自らの手を置いた。

「おばさんは、お母さんの事が本当に大好きだったんだね」

「ああ、大好きだった。それだけじゃない、お前のお母さんは出雲家の中でも、とりわけ力の強い魔女だったんだ。動物以外のもの——植物や物とも話ができたり、時と会話して過去や未来を見通す事ができた。・・・自慢の姉だったよ。あいつと心を通わせられないものなんて、この世にないんじゃないかと思った位だった・・・蛇以外はね」  
「へびっ。」

「ああ、言つてなかったかな。すまん。うちの神様は虹蛇様だろ。動物の蛇は、神様の現世における御姿だ。だから神様の領域を侵さないために、出雲家の人間は蛇とだけは話せないのさ」

その後、イリスはイオと共に、力の制御の仕方を練習した。それは意識するだけという簡単なものだったが、ひと月もしないうちに、イリスは耳当てなしでも意図的に人間の言葉とそうでないものの言葉を自在に聞き分けられるようになった。

「難しく考えることはない」イオは繰り返し言い聞かせた。「人とお喋りする時、そいつの声に集中してうちに、同じ位の音量で話してる周りの声があんまり聞こえなくなるだろ？そういう風にすりやいのさ。・・・ま、わたしの制御の仕方は書物の受け売りだけどね」

☆

イリスはハリーたちに『無事家に着いた。またロンの家で会おう』という旨の手紙を書き、手紙が届くまで、力の制御の練習をしたり、ホグワーツの宿題を（ちよろつと）したり、出雲家の書物を読んだりして過ごした。特にペットのフクロウのサクラやウメとお話するの

はとても楽しかった。フクロウの観点から見るホグワーツの話は新鮮だったのだ。

しかし、待てど暮らせど一向に友人たちから手紙は返ってこなかった。特にロンは、自分の家に招待すると言ってくれたはずなのに。イオに聞いたら「日本とイギリスなんだから、そりや日数はかかるだろうよ」と言ってくれたので、イリスはただじりじりと待った。

八月に差し掛かったある日の朝、いつものように郵便受けを覗いたイリスは、思わずアツと大声を上げた。——イリス宛の手紙がある。それも二通も。わくわくしながら取り出して、差出人を確認する。一つはホグワーツからの手紙だ。二年目になるので、新しく教科書を用意するようにと書いてある。もう一つは、ドラコからの手紙だった。もう一度念入りに郵便受けを覗き込むが、ロンからの手紙はまだ来ていないようだ。どうしてみんなから返事が来ないんだろう。手紙を出してから随分経っているはずなのに。イリスはがっかりしてため息を零した。

やがて気を取り直し、イリスはドラコからの手紙を開封した。イリスにとつては想い人からの手紙だ。自然と胸がときめいた。上質な蠟の封を剥がし、中を覗き見る。

「・・・あれ？」

驚いた事に、封筒には手紙が入っていなかった。その代わりに、何かが入っている。イリスは封筒を振ってそれを手のひらに落とし、手に取ってしげしげと眺めた。半月型の古めかしい金属片だ。ピンポン球程の大きさで、ずっしりと重く、表面には左を向いた女性の姿が刻まれている。——ひよつとして手紙を入れ忘れたのかな。それとも、これが魔法界ならではの、何かのメッセージなのかな。思案を巡らせながら、イリスは不思議とその金属片に視線を吸い寄せられ、離す事が出来なかった。

——それは、声なき声で、イリスに何かを囁きかけた。

突然、イリスの心が『ドラコに今すぐ会わなければならぬ』という凄まじい使命感に燃え上がった。まるで雷に打たれたように、その考えはイリスの脳内をあつという間に支配した。——そうだ、ドラコ

に会いたい！もうロンなんてどうでもいい！それは暴力的な焦燥感となつて、イリスを猛烈に責め立てた。金属片をポケットに滑り込ませると、イリスは矢も楯もたまらず居間へ駆け戻り、イオにマルフォイ家に行きたいと訴えた。

「けど、ロン君の手紙を待つて言つてたじゃないか」

「そんなのどうでもいいもん！ドラコに会いたい！」

「どうでもいいもん！つてお前……」

ドラコと離れているという事実が、もはやイリスに耐えられなかつた。心臓が強く締め付けられるように苦しい。どうしてこんな大変な事に今まで気が付かなかつたのだろう。——ドラコと別れた時、自分の体は二つに引き裂かれたに違いない。残りの半身をドラコが持つていて、彼に会えばそれが満たされるんだ。イリスはそう確信した。

「お前……そこまでドラコ君のことを……」

イオはイリスの尋常ではない勢いに圧倒されて、何も言えなかつた。どうやらわずか一年のうちに、大事な姪には早くもボーイフレンドができたらしい。その残酷な事実をイオは泣く泣く理解せざるを得なかつた。ならば、ロンに断りの手紙を入れてからイギリスへ出発しようと言つたと、イリスは返事もそこそこに慌ただしく荷物をまとめ始めた。誰もいなくなつた居間で、イオは一人ごちた。

「将来はイリス・マルフォイか……」

☆

それから二週間もしないうちに、イリスとイオ、マルフォイ家の面々は、ダイアゴン横丁で落ち合う事となつた。

「イリス。これをお前にやろう」

イギリス行きの飛行機の中で、イオはイリスの首に革ひもを掛けた。ひもの先には、きれいな翡翠で出来た勾玉が一つ付いていた。イオが作った魔除けのお守りだ。それは内側から仄かに光を放つているように輝き、ドラコ会いたさに気もそぞろになっているイリスの心を現実に引き戻した。イリスは嬉しそうに勾玉を摘み上げ、明かりに透かして眺める。

「きれい。ありがとう、おばさん」

「悪いものからお前を守ってくれるように、守護の魔法を込めた。イリス、約束してくれ。誰に何と言われようと、絶対これは外すな。お風呂の時でもだ」

「うん」

イリスがにつこりと笑って頷くと、イオは「良い子だ」と言っ  
てイリスの頭をわしゃわしゃと撫でた。

☆

そうして二人はイギリスに到着し、漏れ鍋を通過してダイアゴン横丁へ辿り着いた。イリスはドラコの顔を見た瞬間、ルシウスたちへの挨拶もそこそこに、一目散に駆けて彼をハグした。

—— やつと会えた。ドラコを抱きしめる事でこの上ない充足感と多幸福感に満たされ、イリスはその余韻に酔いしれていた。傍から見れば、遠距離恋愛中の若きカップルの感動の再会にしか見えないその光景に、イオは瞳に涙を浮かべ、ルシウスたちは困ったように笑っている。道行く人々は、二人に冷やかすような視線を投げかけた。

「お、おい、人前で恥ずかしいだろ！」

ドラコが顔を真っ赤にして狼狽するが、イリスは「だって会いたかったんだもん」と言っ  
て離れなかつたので、余計に彼はしどろもどろになる羽目になった。

その時、イリスとドラコのポケットから、それぞれ何か  
が勢いよく飛び出るような、微かな衣擦れの音がして——足元でカチンと冷たい金属音がした。

「？」

イリスが無意識にその音を追いかけて地面を見ると、そこには一枚のコインが落ちていた。二つの半月型の金属片を合わせたようなそれは、左側は右向きの男性、右側は左向きの女性の姿が描かれている。『??』

その右側の金属片に、イリスは見覚えがあった。——ドラコからの手紙に入っていたものだ。

何故それが、そんな状態になっているんだ？左側のは、一体どこか



らやって来たんだろう?——訝しむイリスは、今まで自分を支配していた『ドラコに会わなければならぬ』という強烈な思いが、たちまち跡形もなく消え去っていくのを感じていた。

・・・そうだ。イリスは思い出した。自分はロンの手紙を待っていたはずだ。でもこのコインを見たら、急にドラコに会いたくてたまらなくなつて、他の事は一切考えられなくなつていた。——いくら手紙が来なかつたとはいへ、あんなに楽しみにしていたロンの誘いを断つてまで、ドラコに会いに行くなんて。自分の行動は明らかに常軌を逸している——我に返つたイリスが、今までの自分を思い返して茫然としていると、ドラコが得意げに言った。

「ああそれか。パパが君に会えるお守りだつて言つて、左側のを僕にくれたのさ。右側のは君に送つたはずだよ。・：フン、ウィーズリーのやつを出し抜いてやつた。僕が勝つたんだ」

イリスは悪びれなく言い切つたドラコに、戦慄を覚えた。イリスをまるで賞品か何かと思つていような言い方だが、いつものようにたしなめる余裕は今の彼女になかつた。

——つまり、自分は、コインに操られていたのでは?イリスは恐ろしい考えに到達し、身を震わせた。今になつて考えれば、手紙もなしでコインだけ送つてくるなんて奇妙な話だし、お守りだろうが何だろうが人の意志を支配するものを送り付けて来るなんて異常だ。イリスが抱き着いた姿勢のまま震えているのを感じて、ドラコは心配になつて尋ねた。

「イリス、どうしたんだい?寒いのか?」

「——さあ、二人とも。感動の再会は済んだかな?そろそろ屋敷へ行く」

ドラコの問いを遮るように後ろから声を掛けたのは、薄笑いを浮かべたルシウスだつた。彼は去り際に黙つてそのコインを拾い上げ、ポケットに入れた。そしてまるで氷のように冷たい目で、ドラコの肩越しにイリスを一瞥した。イリスは本能的な恐怖を感じて、思わず目を逸らした。——イリスの心の中で、今までの優しかったルシウスの記憶にピシッと一際大きな罅が入る。

——コインの事を不審に思っているのが、ばれている。彼女の心臓が、早鐘を打ち始めた。

ホグワーツでの一年を経て、イリスは自分でも知らないうちに精神的に成長していた。人並みに警戒心を抱いたり、物事がある程度冷静に見る事ができるようになっていた。——ルシウスの前で、ドラコに手紙やコインの事を詳しく聞くのは危険だ。イリスはそう結論を出した。彼女の信じていた優しいマルフォイ家のイメージが、少しずつ歪んでいく。助けを求めようにも、唯一の助っ人・イオは、気を使つて早々に退散していた。イリスは後ろ髪を引かれるような思いで、ドラコに続いて屋敷への道を辿る他なかった。

☆

マルフォイ邸に着くと、イリスは自室へ行つて荷物を整理した後、昼食の時間までベッドに座り込み、考えを巡らせていた。マルフォイ家は良い人たちのはずだ、という思いと、友人たちの言葉が頭の中で拮抗する。イリスは頭を振って、よからぬ考えを消そうとした。『何にも知らない振りをしよう。コインだつてきつと私の考え過ぎだよ。深入りしちやいけない』イリスの内なる声が囁いた。けれど、イリスはどうしても芽生えた疑念を振り払う事が出来なかった。

イリスはコインの他にもう一つ、腑に落ちない事があった。手紙は——ホグワーツを除いては——ドラコからの分だけ届いた、という事実だ。『ウィーズリーを出し抜いた』ドラコはあの時そう言った。

イリスは屋敷を出て、広々とした庭へ出た。二度目の訪問となるマルフォイ家は、変わらず美しい。しかし、今となつてはそれすら何だか不気味に見えた。手入れされた庭を横切り、敷地内の端にある大きなふくろう小屋へ向かった。小屋の中は屋敷しもべ妖精のおかげで、沢山のフクロウが羽ばたくものの、清潔に維持されていた。イリスは出入り口近くに立つと、自分のペットであるフクロウ・サクラを呼んだ。

「ねえ、サクラ。ちょっと来て」

《なーに、イリスちゃん？またお手紙？》サクラが羽ばたいて、イリスに近い位置にある止まり木へやってきた。

「うん、おばさんに届けてほしいんだけど・・・」

《客人の彼女に行かせる必要はない。私が行く》

イリスとサクラの間を遮るようにして、一際大きなワシミミズクのイカロスが飛んでくると、威圧的な口調でイリスに言い放った。夏休み中に仕入れたサクラ情報によると、マルフォイ家のフクロウたちを束ねるリーダー的存在らしい。いくら気の弱いイリスでも、さすがにフクロウに負ける訳にはいかなかった。

「いや、サクラに届けてほしいの」

イリスが頑として譲らなかったのは、マルフォイ家のフクロウを警戒していたためだ。やがてイカロスは感情を失ったような薄色の目でイリスを睥睨し、小屋の奥へ飛び去った。サクラを出す時、他のフクロウたちがこそこそ話をしているのをイリスは聞いてしまった。聞かなきゃ良かった、と心底思った。

《愚かな娘》《どこに出したって手紙は届かないのに》《ご主人様が・・・》《しつ、あまり大きな声でさえざるな。サクラから聞いただろう。彼女は・・・》

「どうか、無事に届きますように・・・私の思い違いでありますように・・・」

イリスは手紙に祈りを込めてから、サクラに手紙を啜えさせる。サクラはくるとイリスの周りを飛んでから、大空へ羽ばたいた。イリスは屋敷の塀ギリギリまで駆けて、ずっとサクラの姿を目で追った。

サクラは飛んで、遠くへ——姿がどんどん遠くなり、見えなくなつて——

——いや、近づいてきた。サクラは手紙を啜えたまま、空中でUターンして、屋敷へ舞い戻った。イリスに目もくれないで、真っ直ぐに二階のある部屋の窓枠に止まり、半開きの窓をくちばしで器用に開けて中へ入った。

イリスは頭がジーンと痺れるような恐怖に満たされた。その部屋を、イリスは知っている。去年のクリスマスでドラコと屋敷中を探検した時、彼に「ルシウスの書斎だ」と教えてもらったのだ。「そこは絶対に入っちゃいけない」と注意を受け、イリスは忘れてうっかり入っ

てしまつてルシウスに大目玉を喰らわれないように、頭の中にしつかり叩き込んでいた。

——どうしておばさん宛の手紙を、ルシウスの書齋に届けるんだ？ サクラはやがて窓からひよっこり顔を出した。くちばしに手紙は啜えていない。やがてサクラは、ふくろう小屋へ戻つて行つた。イリスは慌ててふくろう小屋へ行つて、再びサクラを呼んだ。

「どうしてルシウスさんの書齋に手紙を届けたの？おばさん宛だつて言つたよね？」

《何を言つてるの、イリスちゃん？私はちゃんと、いずものおうちに届けたよ？》

サクラは本当に何を言われているかわからないといった様子だつた。こてん、と首を傾げてイリスを見ている。サクラは何も知らないのだ。恐らく——イリスは恐怖の余り叫び出したくなる衝動を懸命にこらえながら思つた——魔法をかけられているのでは？

☆

イリスはふと、異様な静けさを感じた。彼方此方から聞こえる羽ばたきもお喋りも、何時の間にか一切聞こえなくなつていた。辺りは不気味な静寂に包まれている。

恐る恐るサクラから視線を外した瞬間、イリスは寸でのところで悲鳴を飲み込んだ。

——マルフォイ家のフクロウがみんな、自分を見つめている。感情を抜き去つたような、冷たい目で。あの時のルシウスの目を思い出して、イリスはたまらず総毛立つた。フクロウたちは知っているんだ！イリスは心の中で叫んだ。だから、イカロスが手紙を届けるつて言つたんだ。

「な、なんでもない、サクラ。気のせいだつたみたい。ほら、私おつちよこちよいだからさ」

身の危険を感じたイリスが慌ててそう言うと、フクロウたちはみんな示し合わせたように視線をイリスから逸らし、それぞれ元通り、羽ばたいたりお喋りを始めた。——それは、動物と話ができるイリスだからこそ向けられた、マルフォイ家のフクロウたちによる無言の脅迫

だった。

《変なイリスちゃん》

そんな事を知らないサクラは、目を細めて笑った。イリスも頑張つて笑うように努めた。もし自分が変な事をしたら、サクラに危険が及ぶ可能性がある。

イリスは確信した。——サクラはきつと、手紙の運搬を妨害するよ  
うな魔法をかけられているのだ。きつとイリスが知らない間に、友人  
たちの手紙は処分されていたのだろう。これで、ドラコのあの発言も  
領ける。でも、これでは、イオに助けを求め手紙を送る事も出来な  
い。おまけに学生は魔法を使う事を禁じられている。マルフォイ家  
から逃げ出す事は不可能だ。

どうしてなんだ？イリスが混乱する思考を振り払うように頭を横  
に振ると、リボンから涼しげな音が鳴った。——去年のクリスマス  
は、こんな風じゃなかった。毎日がとても楽しくて——ルシウスもナ  
ルシツサも、イリスが大好きだと言ってくれた。それを信じたい。

でも——本当に好きなら、どうして手紙を妨害したり、呪いのコイ  
ンを送ってきたんだ？ロンの家に行くって言ってしまったから？逆  
に考えれば、そうしてまで何故自分をマルフォイ家に連れて来たかつ  
たんだ？イリスの頭に無数のクエスチョンマークが浮かんでは、い  
ずれも答えを得ることができずに消えていく。

パニックになるな、思考しろ、イリス・ゴント！イリスは自分を  
叱咤した。ここには無敵のイオおばさんも、人一倍勇敢なハリーも、  
知恵の回るロンも、機転の利く秀才ハーマイオニーもない。サクラ  
を連れて、何とかここを抜け出すか、素知らぬ振りをして九月まで乗  
り切るか、何とかして策を考えなければ。助けてくれる人はいないん  
だ。

「イリス、そんなところで何をしているの？」

冷たい声が背後から飛んできて、イリスはぎくりと肩を震わせた。  
ぎこちない動作で恐る恐る振り返ると、ナルシツサが不自然にこわ  
ばった笑顔を浮かべて、イリスを見つめている。

「えつと、あの・・・お散歩に・・・」

イリスは咄嗟の嘘が下手だった。目を泳がせながら言葉を選んで  
いると、ナルシツサは無言を言わさずイリスの手を取り、屋敷へ向  
かって歩き始めた。

「こんな天気の外に出るものじゃないわ。・・・そう、ドラコも呼んで  
お茶にしましょう。貴方はアールグレイが好きだったわね」

イリスは上空を見上げた。——空は晴れ渡っていた。咄嗟の嘘が  
下手なのは、ナルシツサも同じようだった。

イリスはナルシッサに連れられて、一階のサロンでドラコとお茶会をする事になった。ナルシッサが指をパチンと鳴らすと、いつものように屋敷しもべ妖精が現れた。「お茶の用意をするように」と彼女が命令すると、妖精は「承知致しました」と答えて姿を消し、一分もしないうちに、精緻な造りのティーセットと三段重ねのティースタンドに軽食や菓子を載せたお盆を持って、再び姿を現した。

ナルシッサはお茶会の間中、ドラコの世間話に相槌を打つ振りをしながら、イリスを探るような目でじっと見つめていたので、イリスは紅茶を飲んだ気がしなかった。お茶会が終わると、ナルシッサの指示で、二人は夕食までの時間をそれぞれの自室に戻って過ごす事になった。

「ねえ」イリスは意を決して、自室の扉を開けようとするドラコに話しかけた。自分の推測を真実に変えるため、どうしても彼に確認したい事があった。

「話が見たいんだけど。二人だけで」

「えっ？・・・あ、ああ、かまわない。僕の部屋へ行こう」

ドラコはその言葉に、何かを勘違いしたようだった。彼の青白い顔に赤みが差し、あからさまに目を逸らしながら頷くと、彼の自室にイリスを迎え入れた。二人はお互い違う思いを胸に秘め、ぎくしゃくしながら——去年のクリスマス、毎日のように魔法使いのチェスをした——窓際の二人掛けのテーブルに着いた。

「・・・それで、何だい？話って」

上品にまとめ上げた髪を撫でつけながら、ドラコは取り澄ました様子で尋ねる。一方のイリスは「今から言う話を決して口外しないでほしい」と前置きしてから、不安でぎゅっと噛みしめていた唇を舐め、真剣な表情でストレートに聞いた。

「あのね、さっきのコインの事なんだけど。あれは一体何だったの？」

二人の間に、奇妙な沈黙が流れた。やがてドラコはガツカリしたように肩を落とし、大きな落胆のため息を零した。どうやら彼の期待し

ている話ではなかったらしい。

「・・・その話か。父上は貴重な闇の魔術の道具を沢山持っているからね。あれはその一つさ。君、そういうのに興味があるのかい？よければ、我が家の秘密の部屋を見せてあげるけど・・・」

「いや、ちよつと待って。じゃあ、あのコインは呪いの道具っていうこと？」

テーブルに肘を着きながら投げやりに答えるドラコの言葉をイリスは思わず遮った。一部、聞き捨てならない単語があったためだ。『闇の魔術の道具』——やはり、ロンが言っていた通り、ルシウスは悪い魔法使いなのか？ずいと身を乗り出しながらイリスが唇を尖らせて追及すると、ドラコは慌てて取り成すように言った。

「呪いって言う程じゃない。ただ『女の片割れ』を持たせた相手が、『男の片割れ』を持ってしている相手に無性に会いたくなるっていうだけさ。二つをくっ付けてしまえばその気持ちは消えて、後遺症は何にも残らない。そう、ちよつと強力なお守りっただけだ」

「お守りだろうと何だろうと、人の気持ちを操るものを送るなんて、おかしいよ。私はロンの家で泊まる約束をしたのに、そのコインのせいでキャンセルしちゃったんだよ？」

ドラコはイリスから『ロン』の言葉を聞くと、露骨に顔をしかめて、冷たい色をした瞳に怒りを宿して言い放った。

「僕はおかしいとは思わないね。パパも僕も、君がウィーズリーの家になんか行くのを内心は許せなかった。それに、あんなお化け屋敷より僕の家で過ごした方が、君だっけきつと楽しいはずだ」

「楽しいかどうかは私が決めることだよ！」

イリスは恐怖を通り越して、怒りが込み上げてくるのを抑える事が出来なかった。ルシウスがそんな卑怯な手を使うなんて。約束を破ったイリスを、ロンたちがどう思うかなんて、ルシウスにはどうでもいい事だったのだ。馬鹿にされるにも程がある。イリスは思い切って、鎌をかける事にした。

「私がハリーたちに送った手紙や私宛の手紙を届かなくしたのもルシウスさんなんですよ？」



気まずい沈黙が二人を包み込んだ。チエックメイトだ。イリスはその静寂を肯定だと確信し、追撃した。

「ドラコも『ロンを出し抜いた』って、あの時そう言ったよね。……誤魔化したってダメ。知ってるんだよ。さつき私見たもの。おぼさん宛の手紙は、サクラがルシウスさんの書斎に届けてた。どうしてそんなことをするの?」

ドラコはイリスの怒りに燃える目を困ったように眉根を下げながらチラツと見やり、やがてもう隠し切れないと悟ったのか、呆れたようにため息をひとつ零した。

「……名推理だな、イリス。お察しの通り、君の手紙は全てパパが管理してる。君らと別れた帰り、パパが僕に言ったんだ。『この一年様子を見ていたが、彼女はまだ自分に相応しい友人とそうでない友人が解っていないようだ。君をこのまま間違った道に進ませてはならない』ってね。だからパパは君に関する手紙を、君のふくろうに一旦集めさせて、本当に相応しい者からの手紙だけ届けるようにしたし、あの赤毛の家じゃなくてこつちへ来させるようにコインを送った。……まあ手紙は選別した結果、ホグワーツと僕のコイン入りの手紙位しか残らなかったみたいだけど」

イリスは空いた口が塞がらなかった。茫然とドラコを見つめながら、彼女はわなわなと震える声を絞り出す。

「ルシウスさんは、ロンの家で過ごす事が間違っているっていうの? ハリーやロンやハーミーが私に相応しくない友達だっていうの?」

理解する事が出来なかった。クリスマス休暇の時、ルシウスは優しい目をしてイリスの友人たちの話を聞いてくれていたのに。心の中では、彼は一体どんな事を考えていたのだろう。人の表情と感情は、必ずしも同一ではないのだ。信じていた人に裏切られたショックから視界がぼやけ、涙が幾筋も零れ落ちていく。イリスが目の前ではらはらと涙を流すのを見て、ドラコは席を立ち慌てて彼女の肩に手を置いた。

「泣くなよイリス、君に泣かれるとどうしていいか分からなくなる」

もうドラコは、イリスを『泣き虫』と呼んでからかう事は考えられ

なくなってしまうたようだった。

☆

イリスは、ダイアゴン横丁へ学用品を買いに行く水曜日まで、眠れぬ日々を過ごした。唯一の慰めは、ホグワーツへ戻る九月一日までそう遠くはないという事だけだった。ルシウスとナルシッサは、あの日以来イリスに対して普段通り優しく接してくれた。しかし、イリスが屋敷の外を歩き回るのだけは頑なに許してくれなかった。サクラとも会えなくなってしまうたし、イリスは空いた時間をドラコと過ごすしかなかった。

水曜日の午前中、イリスはマルフォイ家と共に『煙突飛行粉』を使用してダイアゴン横丁へ出かけた。グリーンゴッツ銀行で必要な分だけの貨幣を下ろした後、四人は二手に別れる事となった。ルシウスとドラコは夜の闇横丁へ、ナルシッサとイリスはダイアゴン横丁に残り、四人は数時間後にフローリシュ・アンド・ブロッツ書店で落ち合う約束をした。イリスはナルシッサと共に、二人分の必要な学用品を買い足した後、日の光を反射してキラキラ輝く石畳を散歩して回った。道中でナルシッサに買ってもらったチョコレート・アイスクリームを舐めながら、イリスは四方八方を見回してハリーたちを探すが、見つからない。自由散策をしたいとダメ元で言ったはみたものの、ナルシッサは迷子になるからダメだと叱って、イリスの手を繋いで離さなかった。

数時間後、二人はフローリシュ・アンド・フロツツ書店へ向かった。そばまで来てみると、驚いた事に書店の外まで黒山の人だかりが出来ていて、みんな押し合いへし合いしながら店内へ入ろうとしていた。驚いた事に、その殆どがマダムな年齢の魔女ばかりだ。殺気立った彼女たちが織り成す凄まじい地獄絵図に、ナルシッサは思わずイリスから手を離し、不快そうに口を押えて後ずさる。イリスは目を丸くしながら、上階の窓にかかった大きな横弾幕を見上げた。

『サイン会 ギルデロイ・ロックハート』

自伝「私はマジックだ」

本日午後12:00—4:30』

「ギルデロイ・ロックハートだ!」

ホグワーツからの手紙に書いてあった、教科書の作者だ。イリスは歓声を上げた。みんな面白そうなタイトルばかりだったので、早く読みたいと思っていたのだ。きつと目の前で押しくらまんじゅうをしている魔女たちは、彼のファンに違いない。イリスがどうやって中へ入ろうか考えていると、人だかりの中から不意にニヨキニヨキニヨキツと手が三本程伸びてきて、固まるイリスの手を引っ掴み、店内へと引きずり込んだ。

「イリス!」

手の主は、イリスの親友であるハリー、ロン、ハーマイオニーだった。三人はむせ返るような人いきれの中、イリスとの再会を喜んで、輝くような笑顔を浮かべてそれぞれハグしてくれた。イリスは友人たちと会えてとても嬉しいけれど、どうして三人が怒っていないのか分からなかったので、目を白黒させながらおずおずと三人を見上げた。

「みんな久しぶり。会えてとっても嬉しいんだけど、どうしてみんな怒ってないの?」

「怒る? どうして君に怒らないといけなないんだい? 僕ら、マルフォイに拉致られた君を心配してたんだぜ」

ロンが言うにはこうだった。何通もイリスに手紙を送ったが、一向に返事は来ず、ある日マルフォイ家で過ごすという手紙だけが届いた。それ以降もロンはめげずに手紙を送り続けたが、返事はない。嫌な予感がしてロンは父・アーサーに相談した。アーサーは機転を利かせて日本にいるイオに手紙を送ると、イオは『イリス宛の手紙はドラコからの以外届いていない』と言う。ロンたちが救出したハリーもドビーなる謎の屋敷しもべ妖精に妨害され、手紙を受け取る事ができなかったというし、ハリーとイリスの手紙騒動はマルフォイ家が絡んでいるに違いないと、根っからのマルフォイ家嫌いであるウィーズリー・ファミリーは推理したのだ。ハリーもハーマイオニーもイリスの事を心配していて、その推理に同調した。

「想像はつくよ。きつとあいつらの陰謀だろ」とロン。

「私、貴方の電話番号を聞いていればよかったわ。そうすれば先回りできたのに。とつても心配したのよ」とハーマイオニー。

「マルフォイ家のやつらに意地悪されなかつたかい？」とハリー。

イリスは、ロンの話を聞いて、心に暖かな炎が灯るのを感じた。――三人は信じてくれていたのだ。ハリーにドビーの事について聞かれたけれど、イリスは屋敷しもべ妖精自体は屋敷内でよく見かけるものの、彼らの名前は知らないの、よく分からないと答えるしかなかった。人の気持ちを操るコインの事や、手紙がルシウスの手によって妨害されていた事を話して聞かせると、三人は途端に険しい表情になった。

「呪いのコインを送ってくるなんて、どうかしてるぜ！そこまでして僕んちに連れてこさせたくなかつたのかよー」ロンは目を剥いた。

「逆に考えれば、そこまでしてマルフォイ家に連れてきたかつたとも考えられるわ。でも何のために？」とハーマイオニー。

「何のためにつて？決まってるよ。マルフォイがイリスのことを気に入ってるから、無理やり連れてこさせるようにしたんだ」とハリー。「・・・違うんだよ、ハリー。ルシウスさんが・・・」

イリスがドラコから聞いたルシウスの話をしようとする声量を落とし、四人がさらに身を寄せ合つた時、人込みを掻き分けて、一人の中年男性がこちらへ向かつてきた。穏やかな雰囲気を持つその男性は細身で、くたびれた緑のローブを羽織っている。彼の頭頂部にわずかに残っている赤毛を見たイリスはピンと来た。きっとロンのお父さんだ。

「ロン！ここは酷いもんだ、早く出よう」

ロンは男性を見ると、嬉しそうにイリスに教えてくれた。

「僕のパパだよ、イリス。パパ、イリスを見つけた！」

男性は三人のそばにいるイリスを見ると、夕焼けを眺めているような――どこか懐かしむような目をしながら彼女に近づいて、人を安心させるような柔和な笑みを浮かべて見せた。

「初めまして、イリス。ロンの父のアーサー・ウィーズリーだ。君のお父さんとは良き友人であり、同僚だった。ロンから聞いたが、手紙の

事で何か——トラブルがあったようだね。私でよければ相談に乗るよ」

イリスが応えようとした時、何者かがするりと人込みを抜け、二人の間を分かっようにして、イリスに背を向けアーサーに正面を向けるような形で立った。——ルシウス・マルフォイだった。

「・・・これはこれは、アーサー・ウィーズリー」

慇懃無礼な挨拶をしながら、ルシウスは漆黒の長いマントの隙間からイリスの手を強い力で掴み、彼女をその場から逃げ出さないように固定してしまった。イリスは慌てて周囲を見渡すが、いつの間にもやう少し離れたところでドラコと三人は激しい言い争いを始めてしまっている。——どうやら、イリスに会う前にハリーがロックハートに厚待遇を受けたらしく、その事を主題として彼らはヒートアップしていた。イリスはルシウスのマント越しにアーサーを見る事しか出来なかった。

「ルシウス」アーサーは素っ気なく礼をした。どうやら子供同士だけでなく、父親同士の仲も宜しくないらしい。

「お役所は忙しいらしいですな？あれだけ何回も抜き打ち調査を・・・残業代は当然、払ってもらっているのでしょうかね」

ルシウスは、丁度近くにいた赤毛の女の子（ロンの妹っぽい、トイリスは推測した）が持つ大鍋におもむろに手を突っ込むと、豪華な装丁のロックハートの本の中から——『変身術入門』と銘打たれた、使い古しのすり切れた本を引っ張り出し、蔑むような笑みを浮かべた。「どうもそうではないらしい。なんと、役所が満足に給料も支払わないのでは・・・わざわざ魔法使いの面汚しになる必要がないですねえ？」

ルシウスはどうしてもイリスから関心を遠ざけたいようで、ハーマイオニーの両親まで巻き込み、アーサーの感情を逆撫でするような言葉を次々投げつけた。アーサーはその挑発にまんまと乗せられ、怒りで顔が深々と真っ赤になったが、イリスの事は忘れていなかった。

「マルフォイ、面汚しがどういう意味か、我々の間で意見が分かれるよくだな。こんな純粋な女の子を騙して連れ込んで、一体どういっつも

りだ。・・・君がネーレウスの友人だと？笑わせるね」

今度はルシウスが赤くなる番だった。冷たく取り澄ました表情が怒りで歪み、青白い顔色に赤みが差す。

「・・・ほう、貴様がそれを言うか？ウィーズリー」

イリスを掴んでいる手が感情が高ぶる余り震え、より力が増している。イリスは痛みに思わず悲鳴を上げそうになった。ルシウスは憎しみを込めた目で、アーサーを睨み付けた。

「彼を——汚らわしい——マグルの世界へ引き摺りこんだ、血の裏切りが！」

——先に仕掛けたのはアーサーだった。ルシウスの胸元を掴み、横の本棚に力任せに背中を叩きつける（イリスは、直前にルシウスが被害を被らないよう後方へ押し遣ってくれたので、無傷だった）。本棚からバサバサと大量の本がなだれ落ちるのも構わず、今度はルシウスがアーサーに殴りかかる。人込みは途端に大きく割れ、やり合う二人の間を無数の本がフクロウの様に飛び交う。

「やつつける、パパ！」「お客様方、どうかお止めを！」「喧嘩すんなら外でやれ！」怒号や歓声もシャワーのように降り注ぐ中、イリスは恐怖と罪悪感で震え上がっていた。分別のある筈の大人たちが本気の喧嘩をするところなど、今まで見た事がなかったのだ。——しかも彼らが喧嘩する事になった原因は、他ならぬ自分と自分の父親のことだ。

イリスが意を決して二人の間に入ろうとすると、大きな熊手のような手がイリスを止めた。

「ハグリッド！」

「お前さんじゃ、ちいと力不足だ」

ハグリッドはイリスに向けてにっこり笑って見せると、本の山を掻き分けながら——のしのしと二人の間に割って入り、それぞれの服の襟を片手で引つ掴んで、強引に引き離れた。アーサーは唇を切り、ルシウスの目には『毒きのこ百科』でぶたれた痕があった。ルシウスは目を怒りでギラギラ輝かせながら、茫然と突っ立っていたイリスの手を再び掴み、アーサーを睨み付けた。

「この子は、もう二度と彼の二の舞にはしない。これ以上彼女に関わるな、アーサー・ウィーズリー」

ドラコに目で合図をしてその場を立ち去ろうとするルシウスに、アーサーが静かに答えた。

「私も同じ気持ちだ、ルシウス。——いつか必ず、君の尻尾を掴んでやる」

イリスはルシウスに手を引かれ、何度も後ろを振り返りながら去る他なかった。人込みの中で、ウィーズリー一家も、ハリーもハーマイオニーもみんな、心配そうな目でイリスを見ていた。

☆

その後、イリスはルシウスに謝ったが、「君が謝る事は何もない」と微笑んで頭を撫でられただけだった。しかし、もやもやした気持ちと罪悪感はいリスの心中に残り、夕食の時間までイリスはドラコと一緒にベッドに寝転がり、大人しく読書をして過ごした。——アーサーもルシウスも、自分の父親と友人だったと言った。イリスは、ロックハート著『鬼婆とオツな休暇』を読みながら、考えを馳せた。アーサーは自分の父親をマグルの世界に引き込んだと——

不意に控えめなノックがされ、クイディッチの最新の考察本を読んでいたドラコが生返事をした。

「ドラコお坊ちやま、イリスお嬢様。夕食のお時間で御座います。食堂室へいらしてください」

屋敷しもべ妖精らしき甲高い声がする。ドラコは「良い所だったのに」と不満そうに本を閉じ、イリスに食堂室へ行くよう促した。

食堂室へ向かうと、ルシウスとナルシッサはもう席に着いていた。イリスは膝にナプキンを掛ける時、ルシウスの顔をチラツと見た。——もう喧嘩の痕は残っていないようだ。イリスは安心して、琥珀色に輝くスープに取り掛かった。食事は滞りなく進み、デザートがテーブルに並ぶ頃、ルシウスのそばに屋敷しもべ妖精が現れた。妖精は手紙を携えており、ルシウスは封を破って中身を見ると、険しい表情をしておもむろに立ち上がった。

「——少し急用ができた。帰りは遅くなる」

「そんな！クイデイツチの話をするって約束したじゃないか」

「お父様はお忙しいのよ、ドラコ。我儘を言っではいけません。二人とも、明日は舞台を観に行く予定なのだから、もう寝なさい」

ドラコは不満げに口を尖らせたが、ナルシツサが取り成しているうちに、ルシウスは妖精を引き連れて部屋を出て行った。イリスは自室に戻った後、思った。――家主のルシウスの不在。これは、書斎から手紙を奪還する絶好のチャンスだと。

夜十時。ドラコが寝静まっているのを扉の隙間から確認すると、イリスはひとり静かに部屋を抜け出した。小さな燭台を持って、イリスは暗い廊下を歩く。どうして自分がこんな無謀な行動ができるのか、イリスは考えて――わかった。まだ心の奥底で、『優しいルシウスを信じていたい』という想いが残っていたのだ。だから、自分の目で手紙が本当に書斎にあるかどうか見なければならぬ、という使命感が、イリスを突き動かしていた。――もし本当に手紙があつたら――イリスはその先を考えないようにした。

そしてイリスは書斎に到達した。『書斎にだけは絶対に入っちゃ駄目だ』ドラコの忠告が胸に突き刺さるが、イリスは首を横に振り、意を決してノブに手を掛けた。――そして気づいた。鍵が掛かっていたら入れないと。

「・・・」

イリスはノブを握ったまま、途方に暮れて立ち尽くした。入る事を禁じられている位なのだから、施錠もされているに決まっている。その事をすっかり忘れていた。学生は魔法が使えないので、開錠の呪文も使用できない。――ダメ元でノブを引く。

驚いた事に――鍵はなんと――開いていた。すうつと音もなく開いた扉に、イリスは思わず「えっ？」と声を上げそうになったが、慌てて抑える。出かける時に閉め忘れたのだろうか。いずれにしてもラッキーだ。改めて周囲に誰もいない事を確認してから、イリスはこっそりと入った。中は広々としていて、両隣の大きな本棚には無数の本が整頓されている。中央に大きな書斎机があり、暖炉には燃え残った火がトロトロとくすぶっていた。



ぐずぐずしている時間はない。イリスはこわごわ書斎机に近づいて、引き出しを開けようとすると、全て鍵がかかっている事がない。——何だか、自分はとんでもなく意味のない、リスクな行動をしているような気がする。イリスは罪悪感に苛まれながら、うろろと部屋中を彷徨い歩いて——ふと暖炉の方に目をやった。薪と一緒に——沢山の紙切れがくすぶっている。

イリスは近寄って、息をのんだ。——それは手紙だった。イリス宛の手紙だ。イリスは火かき棒を取ると、まだ生き残っている手紙を求めて漁り続けた。『イリスへ ロンより(その下に)『もうこれで二ダース目だけ』と走り書きしてある』『イリスへ ハーマイオニーより』『イリスへ ハリーより』・・・灰を取り除けて封を開けてみると、それらはいずれも友人たちが自分の安否を気遣う内容だった。

やっぱり、ドラコの言う通りルシウスが手紙を選別していたんだ。どうして大切な友人たちが送ってくれた自分宛の手紙が、勝手にルシウスに回収されて、暖炉で——ゴミみたいに——火種として燃やされないといけないんだ？ふつふつと込み上げる怒りは、イリスの心中の罪悪感を跡形もなく吹き飛ばした。なんでこんな仕打ちを受けなきゃならない？イリスは燃え残った手紙の束を、ぎゅうつと抱きしめた。

「何をしている、イリス？」

突然冷たい声が飛んできて、イリスは驚いて振り返り、目を疑った。——出かけていた筈のルシウスが、戸口に立って、無表情で暖炉前にしゃがみ込むイリスを見下ろしている。

「書斎には入るなど、ドラコから、君によく言い聞かせていた筈だが？」

イリスは果敢にも立ち上がり、臆する事無くルシウスを見据えた。灰だらけの手紙の束を見せる。

「これ、私宛の手紙です！全部、ドラコから聞きました。ルシウスさんが、私の友達からの手紙を妨害してるって！」

「ドラコからきちんと話を聞かなかったかね？・・・それらは全て君に相応しくない者たちからの手紙だ。そんなものは全てゴミだ、燃やし

「何が悪い?」

「ハリーやロンや、ハーマイオニーが、私に相応しくないって言うんですか!勝手に決めないで!三人は私の大切な友達です!」

ルシウスはイリスの激昂を気にも留めず、扉を後ろ手で静かに閉めると、冷たくせせら笑った。

「友達!」ルシウスは吐き捨てるように言い放ち、イリスを真正面から見据えた。

『穢れた血』の子供や、『血の裏切り』のウィーズリー家の子供を、君は友達だと言うのか!——他ならない純血主義を広めた、偉大なるサラザール・スリザリンの血を引く君が!」

☆

イリスはその言葉を理解するまでに、多くの時間を必要とした。——私が、スリザリンの血を引いている?そんなの、嘘に決まってる。

「そんなのウソだ!おばさんからそんなこと、一言も……」

「ああ、そうだろうとも。君の大好きな『役立たず』<sup>スクワイブ</sup>は、肝心な事を何一つ君に喋らない。そうするよう、ダンブルドアに命じられたからだ。あれはダンブルドアの操り人形に過ぎない」

「おばさんのことをそんな風に言わないで!」

躊躇なく『役立たず』と言い放ったルシウスに恐怖を覚え、イリスは叫んだ。身の危険を感じて火掻き棒を構えるイリスを、この状況を愉しむかのような笑みを浮かべて見やり、ルシウスは一步、彼女に詰め寄った。

「なら君は、この事も勿論知らない筈だな?『名前を言ってはいけない例のあの人』……闇の帝王も、ゴント家の一員だった。君の父方の祖母——メーティス・ゴントは、闇の帝王と従姉妹関係にあり、かつて帝王から『従者』<sup>サレヴァント</sup>と呼ばれた程の、誰よりも忠実で有能な闇の魔女だった事も。」

——イリス・ゴント。君はこの世界でただ一人の、闇の帝王の血縁者であり——最もあの方に近い存在だ。そんな君が、あの方を打倒した宿敵ハリー・ポッターを大切な友達だと?無知とは恐ろしいものだな、イリス」

イリスの手から、手紙の束が零れ落ち、木の葉のようにカーペット上に散らばった。しかしイリスは、それを拾う事も忘れ、茫然とルシウスを見つめた。——頭が真っ白になって、何も考える事が出来ない。そんなのウソだ、だって、おばさんはそんなこと言っただけだ。言い返そうとするも、言葉は喉に貼り付いて、イリスの唇だけが空しく開閉するだけだった。——だって、おばさんは、私が魔女だったって事も、動物と喋れる力があるって事も、教えてくれなかった。無意識に後ずさるイリスは、やがて書斎机が背中に当たり、逃げ道を失った。

「さあ、そろそろ種明かしをしよう、イリス。——私は死喰い人<sup>デスイーター</sup>だ。この言葉の意味は、去年授業で習った筈だね？」

君の父——ネーレウス・ゴントは、在学中から並々ならぬ闇の魔術の才能があつた。彼は名実共に誰よりも強い死喰い人になれた、筈だった。私は彼に惚れ込み、日夜説得したよ。しかし、彼がこちら側へ着く事を決断するという時に——それを危険視したダンブルドアが——彼を忌々しい誓いで縛り、自らの『従者<sup>サーヴァント</sup>』とした！彼はダンブルドアの忠実な駒として、闇祓いとして生きるしかなく——挙句、変わってしまった。——よりによって、マグル製品不正使用取締局に就き、『マグル保護法』をあの虱集りのウィーズリーと共に制定し、幸せそうに笑うようになってしまった！——私は、彼の人生を奪ったダンブルドアが許せない！それを知っていながら、素知らぬ顔でマグルの世界に引き込んだウィーズリーの事も！」

ルシウスは、込み上げる怒りの感情を爆発させ、力任せに壁を叩いた。衝突音は重々しく部屋に反響し、びりびりとイリスの背後の窓硝子が震えた。

「しかし君の両親は、闇の帝王に抗って死ぬ数日前に、危険を押しつけてこへ最期の挨拶に来てくれた。どんなにお互いの立場が違っても、私たちは親友だったのだよ、イリス。」

私は、君を我が家の養子に迎えるよう説得したが、彼は断り、君は消えた。それから十年間、諦めきれずに君を探し続けて——やっと、ダイアゴン横丁で見つけた。もう今度は決して、君を彼のようににはさ

せない。——私の手で、君を立派な死喰い人に育て上げる。これはその第一歩だ」

ルシウスは欲望に妖しく輝いた目でイリスを見据えながら、ローブのポケットから黒い革表紙の日記帳を取り出した。それは見るだけで——禍々しい気配が感じられた。

「この日記の持ち主も、きっと君との邂逅を望んでいる筈だ。——もう時間がない。ダンプルドアとウィーズリーの毒牙にかかる前に、私は君を守り、正しい道へ戻してやらなければならない。イリス、わかるね」

ルシウスはそう言うと、竦み上がるイリスの手を掴み、捻り上げて火掻き棒を取り落させると、書斎机の上に組み伏せた。イリスは恐怖の感情が臨界点に達し、助けを求めて絶叫した。

☆

ルシウスが身動きの出来ないイリスに杖を向けようとしたその時、扉がノックもなく荒々しく開かれた。——ドラコだった。彼は、二人の尋常ではない様子を見てシヨックの余り、目を見開いてその場で立ち竦んだ。

「ドラコ、助けてー！」

イリスはガタガタと震えながら、必死で彼に助けを求めた。一方のルシウスは、イリスに杖を押し当てたまま、静かな怒りを孕んだ冷たい目でドラコを見据えた。

「——私はお前に何と言った？『ここには決して入るな』と言いつた筈だが」

「ち、違うんだ、パパ。僕、イリスとチェスをしたくて……でも、イリスがいなかったら探してて……そしたら悲鳴が……」

ドラコは勿論書斎に入っただけはいけない事は承知していたが、イリスの悲鳴が聞こえて、無我夢中で扉を開けてしまったのだ、と必死に伝えようとした。——こんなに怒った父の顔は初めて見たので、内心ドラコは震え上がっていた。まさか自分の尊敬する父が、イリスの悲鳴の元凶だったなんて。やがてイリスを助けようと、迷いながらも一歩進んだドラコを睨み付け、ルシウスは恐ろしく冷淡な声音で言い放つ

た。

「・・・出て行け」

「で、でもっ、イリスが」

「出て行けと言っているのが、わからないのかっ!!」

『泣いてる』と言い掛けたドラコは、ルシウスの部屋全体を震わせるような声量の叱責に、跳び上がった。それは間近でそれを聞いたイリスも同じ事だった。ドラコにとって、父は絶対的存在だった。——そしてドラコは、父に逆らってイリスを助けるよりも——父の命令を聞く方を選んでしまった。彼はイリスを引き攣った表情で見つめながら——力なく一步、一步引いていった。ドラコが扉の敷居を跨ぐか跨がないかのうちに、ルシウスが杖を向けると、バタン!と扉を壊さん勢いで、ドラコの鼻先で扉が閉められ、鍵が掛けられた。

そして再び、部屋の中はイリスとルシウスだけが残された。——想い人は助けてくれなかった。イリスが絶望に泣き崩れ、抵抗する力を無くしたのを確認すると、ルシウスは彼女に向け『服従の呪文』を唱えた。

「インペリオ、服従せよ」

しかし、ルシウスから放たれた呪文の光線は、イリスに触れる直前で——虹色の火花と共に跳ね返された。——イリスの体を包み込むように、しゃぼん玉のように淡い虹色に輝く光の膜が覆っている。訝しむイリスは、やがて胸の辺りに確かな温もりを感じて、その源を手繰り寄せた。それは、イオにもらったお守りだった。

「お、おばさんっ・・・」

イリスがお守りを握り締めると、呼応するようにそれは光を増し、ぶるぶると震えた。ルシウスはイリスの拘束を解き、真剣な表情で何度か杖を振るって魔法を掛けようとしたが、その度に光線は跳ね返されてしまう。彼は忌々しく舌打ちした。

「——あのゴミクスめ。小賢しい真似を。イリス、それを外せ」

「いやですー!お願い、ここから出してー!」

外すわけがないと、イリスは首を振った。——外したら最後だ。イリスは扉の近くまで後退すると、涙ながらにルシウスに懇願するが――

—彼はそれには答えず、大きなため息を零しただけだった。やがて彼は不意に指を鳴らして、屋敷しもべ妖精を呼び出し、何かを耳打ちした。妖精は姿を消し——何故か、イリスのペットのフクロウであるサクラを鳥籠に入れて、再び現れた。ルシウスは妖精から鳥籠を受け取ると、異変を感じて暴れるサクラを無理やり掴み出す。イリスは訳もなくゾツとして、慌ててルシウスに近づこうとした。

「いやっ！サクラに何をやるの?!」

ルシウスは無言で、杖を振るい彼自身に守りの結界を張った。それはイリスのお守りの結界と拮抗し、二人の間に見えない壁を作り上げる。結果、イリスはルシウスとサクラに近づく事が出来なかった。その様子を確認すると、ルシウスはイリスに向け、酷薄な笑みを浮かべた。

《イリスちゃん！早く逃げて！私のことはいいから！》

本能で只ならぬ状況を悟ったサクラは、必死で羽根をばたつかせ、ルシウスの手に噛み付こうとしている。ルシウスは不快そうに顔を歪ませ——サクラを一度強く机上に叩きつけ、ぐったりとさせてからイリスに尋ねた。

「君は動物の言葉がわかるのだったな？——クルーシオ、苦しめ！」

その瞬間、ぐったりしていたサクラが全身を引き攣らせて、部屋中に響き渡るような苦痛の悲鳴を上げた。羽根の一本一本が逆立っているのを見て、イリスは気も狂わんばかりに泣き叫んだ。

「やめて!!お願い!!サクラにひどいことしないで!!」

「——なら、するべき事はわかっているな、イリス？もたもたしている、君の大事なペットがショック死するぞ」

《それを・・・外しちゃだめ、イリスちゃん・・・》

ゼイゼイと弱々しく呼吸を繰り返しながら、イリスに忠告するサクラは——二度目の磔の呪文を受けて、嘴から吐瀉物を零れさせながら、身を振った。——イリスはもう耐えられなかった。『外すな』というおぼとの約束を破り、サクラを助けるためにお守りを外してしまった。イリスを覆っていた虹色の結界は、泡のように弾けて消え去った。

「外しました！外したから、お願い！お願い・・・！」

ルシウスは自身の守りの結界を解除すると、イリスの手からお守り  
を無造作に掴み上げ、暖炉の中へ放り込んだ。さらに杖を向け、勾玉  
を粉々に破壊した。そしてイリスの頭を撫で、優しく語り掛けた。

「良い子だ、イリス。今度、私に対してこんな下らない抵抗を見せたら  
——ペットだけでは済まない。君の大好きなおば君を、君の目の前で  
刺し殺す。金輪際、私に逆うな」

イリスは恐れおののいて、しゃくり上げながら何度も頷いた。齡1  
2歳の子供の許容量を優に超えた『恐怖』を刻み込まれた結果、イリ  
スはもう正常な思考が出来なくなってしまうていた。涙でぼやける  
視界の端で、痙攣するサクラを妖精が介抱しながら鳥籠に入れ、姿を  
消すのが見えた。ルシウスは改めてイリスの手を取り、そばに引き寄  
せると、杖を彼女に向けた。

——おばさん、約束を破って、ごめんなさい—— イリスは呪文を  
掛けられる直前、イオに懺悔した。

「インペリオ、服従せよ」

その瞬間、イリスの心身を圧倒的な多幸福感が包み込んだ。——なん  
て最高の気分なんだろう！今までの恐怖の記憶等、銀河系の彼方へ消  
し飛んでしまった。こんな良い気持ちにさせてくれたルシウスが、悪  
者の訳がない。優しくイリスを抱きしめ、頭を撫でてくれるルシウス  
は、今の彼女にとっては神様のようにも思えた。

「イリス、私のいう事を聞いてくれるね？」

「はい」

イリスは素直に頷いて、ルシウスに寄りかかった。見上げる彼女の  
瞳は、輝きが失われ、明らかに正気の状態ではない。ルシウスは机上  
から黒い革表紙の日記帳を取り、イリスに見せた。

「これは、とても大切なものだ。君にあげよう。大事に使いなさい。

——だが、決してこの日記の事を他言してはならない。君はこれを私  
から受け取ったのではなく、『今日ダイアゴン横丁でたまたま落ちて  
いたのを拾った』のだ。いいね？」

「はい」

「良い子だ。では、眠りなさい」

イリスは途端に目を閉じ、深い眠りに落ちた。ルシウスはイリスの  
瞼に口付けを落とした後、彼が考えたシナリオ通りに進むように、イ  
リスの記憶の一部を忘却させ、改竄した。

☆

ドラコは、扉の前でガタガタと震えたまま、動く事が出来ずにいた。  
——その時、ノブがひとりでに動き、扉が静かに開いた。

「ドラコ、もう入って来ても良い」

穏やかな父の声がして、ドラコは恐る恐る中へ入った。部屋の中央  
には魔法で出された一人掛けのソファがあり、そこにはイリスが眠っ  
ていた。——見慣れぬ黒い革表紙の日記帳を、両手に抱いている。賢  
いドラコは、その日記帳が何かという事も、イリスがあの後どんな目  
に遭ったのかも、父に聞く事はできなかった。ただ、ドラコの心中に  
『イリスを見捨て、助ける事ができなかった』という強烈な罪悪感が渦  
巻くだけだった。複雑な表情でイリスを見つめるドラコに、ルシウス  
は、愛する息子を守るために、こう言った。

「お前に一つ忠告をしておこう。今後ホグワーツでどんな事件が起き  
ても、お前は一切関与してはならない。——わかったね」

ルシウスは微笑むと、ドラコの肩に手を置いた。その言葉を聞いて、  
ドラコは何となく状況を察してしまった。事件を起こすのは、  
きっとイリス本人なのだ。そしてそれを自分は止める事が出来な  
かったのだと。

「・・・わかりました、父上」

この状況を打開するには、ドラコは余りにも聞き分けの良い子で、  
臆病過ぎた。結局彼は、また父の言葉に従い、力なく頷くしかなかっ  
たのだ。



ドラコは両親に連れられて、鼻貞にしている歌劇場へ訪れた。いつもの貴賓席に座ると、間もなく上演開始を知らせるブザー音が響き、立派なビロードで出来た幕が上がっていく。

舞台の中央には、天井から垂らした銀の糸で四肢の先を繋がれた、少女の形をした精巧な魔法人形がぽつねんと立っている。彼女のそばには、黒いマントを着た魔法使いが一人佇んでいた。目深に被ったフード越しに垣間見えた彼の顔は、不思議な事に一貫しなかった。目を凝らす度に、陽炎のようにゆらゆらと顔の輪郭が揺らめき——若々しいハンサムな青年のようにも、長い髭を蓄えた老人のようにも見えた。

——ドラコは魔法使いから人形へと視線を戻し、息を飲んだ。最初是人形だとばかり思っていたが、よく見るとそれは——イリス本人だった。しかし——何故イリスがそのような状況に至ったかは不明だが——彼女が公の場で見世物にされているというのに、隣に座る彼の両親は表情一つ変えず、舞台を注視しているままだ。

イリスは無数の観客達の拍手を受け、傍らに立つ魔法使いを戸惑うように仰ぎ見た。——魔法使いは微動だにしない。やがて彼女は悲しそうな表情でどこちなく客席に向かって礼をし、客席前のピットでオーケストラが奏でる壮麗な音楽と歌に合わせて、煌びやかな衣装を翻しながら踊り出した。

——一時間か、二時間か。途方もなく長い時間が過ぎたような気がした。通常の劇ならば、途中で休憩を挟む筈だ。ドラコは訝しんで周囲を見渡すが、両親を含む観客達は、平然と身動き一つせずイリスの様子を眺めている。音楽と歌は、一向に止まらない。それどころか燃え盛る炎の様に、次第にその激しさを増していく。——やがて、休みなしで動き続けているイリスの体力にも、とうとう限界が訪れたようだった。遠目からでも分かるほど顔を真っ赤にして汗を幾筋も滴らせ、酸素を求めて息を荒げている。その両足は何度ももつれ、その度に体勢を崩して床へ倒れ込もうとするが——彼女が膝をつく寸前

に、魔法使いが杖を振るって、糸を操り強制的に立ち上がらせた。

間もなくイリスは、自身を操る糸に抵抗を示すようになっていった。しかし魔法使いも負けていない。彼女が四肢に力を込め、わざと動きを鈍らせる度に、糸の数を増やす。天井から何本もの糸が蛇のように襲い掛かり、彼女の体中に巻き付き縛り上げて、彼女の意志とは無関係に『彼の望む踊り』を続けさせようとする。

——舞台上の無言の攻防の末、今や、イリスは蜘蛛に囚われた蝶のように、無数の糸に絡め取られていた。糸はただ縛るだけでなく——針金のようにその硬度を増し、衣装を無残に引き裂き、彼女の体のあらゆる箇所から血を滴らせる。容赦なく締め上げられながらも、イリスは歯を食いしばって指先一本動かさない。

やがてその場を動かなくなったイリスに対し、客席からブーイングが上がり始めた。イリスは『もう踊りたくない』と言わんばかりに首を横に振るが、魔法使いは許さない。苛立たしげに彼女に近寄ると、その頬を何度も張り飛ばした。

「パパ、イリスが苦しがつてる！あいつに言って、やめさせてあげてよ！」

ドラコは堪え切れずにルシウスに懇願するが、彼は満足気な笑みを浮かべて目の前の残酷な光景を眺めているだけだ。対するナルシツサは目を背け、口元を抑え嗚咽を堪えている。両親に見切りをつけ、ドラコは席を立ち、ブーイングを物ともせず前方の客席を通り、ピットをすり抜け、舞台上上がった。血だらけのイリスに更なる暴力を加えようとする魔法使いを押しつけ、彼女を拘束する糸に手をかける。

「イリス！早く逃げよう！こんな糸、僕が切ってやる！」

そう言いながら、ドラコが糸を力任せに引き千切ろうとした。——その瞬間、何かが引き抜かれるような嫌な音がして、イリスが耳をつんざくような恐ろしい悲鳴を上げ、耐え難い苦痛に身を振らせる。——糸の先は、彼女の体に直接繋がっていたのだ。彼女の皮膚から吹き出す夥しい量の血を見て、ドラコは凍り付いた。弱々しく咳き込んだ拍子に血の塊を吐きながら、イリスは底知れぬ悲哀に満ちた瞳でドラコを見つめる。

——その双眸は、炎のような真紅に染まっていた。

「もう遅いよ、ドラコ。何もかも。どうしてあの時、助けてくれなかったの？」

☆

ドラコは息を切らして跳ね起きた。夢だった。いつもの自分の部屋だ。心臓が今にも飛び出しそうな位、大きな音を立てて波打っている。サイドテーブルから水差しを取り、グラスに注いで一息で飲み干しながら、無意識に時計へ目をやった。——あの事件を目にしてから、まだ数時間も経っていない。我に返った彼の胃の底に濁流のように流れ込み、溜まっていくのは、つい先程飲み干した水ではなく——イリスに対する強烈な罪悪感だった。

さっきの夢は、自分の罪悪感が作り出したものだったのだろうか。ドラコはベッドの上に座り込み、汗でぐっしり濡れた髪を掻き上げた。——だが、夢にしてはあまりにも臨場感があった。引き千切ろうと手をかけた糸の感触を、今でも克明に思い出せるほどに。

——お前は一切関与してはならない——どうしてあの時助けてくれなかったの？——

父の忠告と夢の中のイリスの言葉が胸の奥で拮抗し、容赦なく彼を責め立てる。ドラコにとつて、父もイリスも同じく大切な存在だ。父の命令に逆らうなど考えられない。だが、イリスを助けたい。相反する思いに、彼はベッドの上でじっとしている事ができなくなり、自室を出てイリスの部屋へ向かった。そっと扉を開け——人の気配を感じて思わず声を上げそうになり——慌てて口元を抑える。

驚くべき事に、彼女の部屋には先客がいた。——ナルシツサだ。窓から差し込む淡い月光が、ベッドですやすやと眠るイリスを照らし出している。その脇にナルシツサが腰かけ、悲愴に満ちた表情を浮かべて、涙を流しながらイリスの髪を梳き、彼女に囁きかけていた。——幸いな事に、その様子を扉の隙間から見守っているドラコには気づいていない。

「ごめんなさい。イリス。あの人は、貴方とあの子のためだと言ったけれど……命の恩人の娘に、私たちは何て惨い仕打ちを……」

それはナルシツサの懺悔だった。か細い声で紡がれる言葉は、残念ながら微かにしか聞き取れないけれど、きつとあの事を言っているのだらうとドラコは推測する。恐らく父から、事の次第を聞いたに違いない。ドラコは弱り果てた様子で、受け取られる事の無い謝罪を何度も繰り返す母から、目を逸らす事ができなかった。

「全てを思い出したら、貴方は——私たちの事をどう思うかしら？あの子は貴方を愛し始めているのに——きつと貴方は——」

イリスは、ナルシツサの底知れない悲しみを知る事もなく、のんきに寝言を呟きながら寝返りを打った。ナルシツサは弱々しく微笑むと、イリスの前髪を掻き上げ、その額に愛しげに口付けた。寝返りを打った事でわずかに乱れた彼女の布団を直し、涙を拭いながら部屋を出ようと立ち上がる。ドラコは慌てて自室に戻り、ベッドに潜り込んで布団を頭から引つ被り、寝た振りをするしかなかった。

☆

翌朝、イリスは眠い目を擦りながら起き出した。カーテンを透かして日光が差し込み、外では小鳥がさえずっている。

——何だかとても大切な事を忘れているような気がして、その感覚はすぐに消え去った。

サイドテーブルに置いた懐中時計を見て、朝食の時間まではまだ時間がある事を確認してから、イリスは身だしなみを整えた。最後に銀色のリボンで鎖骨位まで伸びた髪をポニーテールにすると、ドラコの元へ向かう。

「おはよう」

ドラコは——不思議な事に——イリスがいつものように朝の挨拶をすると、『狐につままれた』と表現するしかないような、神妙な顔をした。……何か変な事言ったかな。イリスが首を傾げていると、彼は青白い顔を恐怖で引き攣らせながら、恐る恐るこう尋ねた。

「君は……その……昨日の夜の事……覚えていないのか？」

「昨日の夜？」

ドラコが固唾を飲んで見守る中、イリスは頭を捻り、昨日の記憶の糸を辿った。——ダイアゴン横丁で一悶着あって、夕食を食べた後――

—イリスの脳内に、ほんの一瞬、雑音が混じった。夕食後の彼女の記憶がごっそり抜き取られ、書き換えられていく。イリスは捏造された記憶を思い出した。

「夕食の後、ドラコと寝るまでチェスをしたよね。うん、覚えてるよ。その事が、何かあった？」

ドラコは絶句した。昨日の夜、彼女とチェスをした覚えなんてない。彼の全身の血の気が、音を立てて引いていく。——その記憶は偽物だ、イリス。君はあの夜、僕のパパに襲われていたじゃないか。そしてきつと、その時に君の記憶も書き換えられたんだ。何も考えず彼女にその事を伝えようと息を吸い込んだところで、理性が急ブレーキを掛けた。

待てよ。彼女にそれを言つて、どうなるっていうんだ？今にも喉から飛び出しかけていた言葉が、瞬く間に体の底へ沈んでいく。イリスに包み隠さず全てを伝えたとしよう、きつと彼女は信じてくれる。だが、彼女の素直さは一級品だ。父に隠し通す事なんて彼女には無理だ、バレるのは時間の問題、そうしたら——ドラコは自分の体が凍り付いていくのを感じた——彼女は再び記憶を書き換えられ、余計な事をした自分はどんな目に遭うか分からない。

ドラコは思案を巡らせる。あの時、父は眠るイリスの様子をわざと自分に見せ、『ホグワーツで今後起こる事件には一切関与するな』と釘を刺した。一から説明されずとも、それだけの要素でドラコは大体の事を想定できる。——つまり、今後ホグワーツで何らかの事件を引き起こすのはイリスで、その手筈を整えたのは自分の父だ。きつと父は自分を『嘘の記憶』と関与させた事で、きちんと父の指示を守れるか——隠された真実を告げないでいられるか、自分を試しているのではないか。

知らない振りをするんだ。簡単だ、ただ一つ頷きさえすればいい。ドラコはイリスを見た。だが、真つ直ぐにドラコを見つめる彼女の瞳は、痛々しいまでに純粹過ぎて、彼の良心を容赦なく攻め上げる。——いや、やっぱり事実を言うべきだ。彼女を助けるんだ。ドラコは、緊張でカラカラに乾いた唇を開いた。

その時、控えめなノックが響いた。屋敷しもべ妖精の甲高い声が、二人に朝食の時間が来た事を告げる。——朝食の席には、父もいる。ドラコのなけなしの勇氣は、完膚無きまでに砕け散った。

☆

食堂室では、ルシウスとナルシツサが身支度を整え、二人を待つていた。ルシウスは愉快そうに目を細めて唇の端を少し上げ、意気消沈した様子で席に着くドラコを一瞥した。ナルシツサは少しばかりやつれた表情で、イリスを心配そうに見る。——それぞれの思惑を胸に秘め、四人は朝食を食べ始めた。

滞りなく朝食が済み、食後の紅茶がテーブルに並ぶ頃、唐突にイリスが口火を切った。

「——ルシウスさん。あの、少しお話があります」

日刊予言者新聞を広げたばかりのルシウスは、イリスの言葉に芝居がかった仕草で眉を上げ、無言で彼女に続きを促した。一方のナルシツサとドラコは『何を言い出す気なんだ』とでも言うように、怯え切った目で二人を凝視する。

イリスが聞きたかったのは、他でもない——呪いのコインと手紙の事だ。あの夜、直接ルシウスと対決した記憶のみを消し去られたイリスは、まだ彼が敵——死喰い人だという事も、自分が闇の帝王の関係者だという事も知らない。彼女の本当の記憶は、先日の夕食を終えたばかりの時点で止まっている。——だから、ルシウスに対する不信感と、彼を信じていたいという相反する思いは、未だに彼女の心中に渦巻いていた。そして、イリスなりにそれらの解決策を考えた結果、今度は、あの夜のように書齋に侵入を図るのではなく——本人に直接聞こうという結論に達したのだ。

「ドラコから、コインや手紙の事を聞きました。どうして・・・そんなことをしたんですか？」

ルシウスは思案するように顎に細い指を添え、考え込む素振りを見せ、有無を言わさぬ冷たい声音でこう言った。

「ああ、その件かね。——もっと別の事かと（そう言って、確認するようにドラコをチラツと見たので、彼は慌てて首を僅かに横に振った）。

コインを送ったのは、君があつたのマグル鼻屑のウィーズリーの家に行くのを阻止するためだ。私は昨日の騒ぎでお分かりかと思うが、あの一家とは犬猿の仲でね。——確かにあれも我らと同じ純血の魔法族には違いないが、イリス、一つ教えてやろう。純血の魔法族にも、良し悪しがある。君は誇り高き純血の魔女として、マルフオイ家わわと共わにいるべきなのだよ。

この一年、君の様子を何も言わずに見守ってきたが——君はいまだに、自分に相応しい友人とそうでない友人の区別がついていない。私が君の手紙を整理するに至ったのは、君をこれ以上間違つた道に進ませないためだ。これからは私が、魔法界の正しい知識、作法、生き方、そして友達の付き合い方を教えよう。だから、あの一家と付き合い合うのはやめなさい。あれは底辺の魔法族だ。君が穢れてしまう」

言葉の意味を暫く考え込んでから、言い返そうとするイリスを片手でやんわりと牽制し、ルシウスは一呼吸置いてから、凄まじい爆弾を落とした。

「ところで、イリス。私も、一つ君に聞きたい事がある。もう九月一日まで、三日を切つたが——宿題はやつたのかね？」

——イリスは、頭が真っ白になった。

☆

「信じられないぞ！何で今までほつたらかしにしてたんだ?!」  
「ずびばせんでじた・・・」

イリスは自室に戻り、勉強机の上でみつともなく泣きべそをかきながら、羊皮紙二巻き分もある魔法史のレポートを書き進めていた。毅然とした態度でルシウスを問い詰める等と、決意していた自分が馬鹿みみたいだ。イリスは鼻をすすりながらため息を零した。もつと大事な事があつたのに。

——ルシウスがやたらに嫌がるイリスを叱りつけて調べた結果——彼女の宿題は、魔法薬学以外、ほとんど手を付けられていなかったという、恐るべき事実が発覚した。ドラコが彼女のお目付け役となり、今日観に行く筈だった舞台も急遽キャンセルとなった。——イリスは小学校時代も、夏の宿題はギリギリまで忘れて放置するタイプ

だった。小学校時代は提出が遅れたり踏み倒したりしても多少怒られるだけで済んだが、勉強に対して厳格なホグワーツではどんな恐ろしい目に遭うか——想像に難くない。

「ロンの家に行った時、ハーミーに手伝ってもらおうと思っただけでそのまま忘れてたんでず……」

「人に頼るな！宿題は自分の力でやるものだろう！」

「ごべんだだい……」

ドラコはイリスの涙ながらの言い訳にぴしゃりと言い返した。彼はホグワーツに入学するまでは、両親の英才教育を受けていたため、きちんと計画通りに全ての宿題を済ませていた。おまけに全ての科目において彼女より上に立っている事は自覚しているので、彼女が躓けば教えてやるつもりだが——自分の宿題を写させるつもりは、さらさらなかった。——彼女のためにならないからだ。

すでに書き上げてある魔法薬学のレポートを手に取りながら、ドラコは内心ホツとしていた。一先ず、宿題に集中していれば、あの事を一時的にでも忘れられる。——父の指示も、イリスの怯えた顔も、夢の中の彼女の言葉も、考えないでいられる。ドラコはただ『現実』から逃げるため、添削目的でそのレポートを一読して——驚愕した。

素晴らしい完成度だった。文体は適度な大ききさで小奇麗に整っており、内容も簡潔に——だが詳細にまとめられており、読みやすくわかりやすい。今彼女が書いている魔法史のレポートとは比べ物にならない位、出来が良かった。本当にこれをイリスが書いたのなら、何故彼女がいまだに補習を受け続けなければならないのか——理解に苦しむほどだ。

「君、本当にこれを自分で書いたのか？……ん？あ、おいこらっ！何を讀んでるんだ！」

ドラコは感心したようにイリスを見た。——しかし次の瞬間、額に青筋を浮かばせながら彼女を叱り、彼女の手から——こっさり羊皮紙の影に隠れるように読んでいたロックハート著『雪男とゆつくり一年』を奪い取った。——イリスは勉強をしていると、誰かが付きつきりで（特にハーマイオニーが）見ない限り、集中力が途切れて可能な



限りサボろうとするタイプでもあった。

「全く！油断も隙も無い……だから落ちこぼれなんだ！ちゃんと勉強しろ！」

「うう……」

最もなお叱りを受け、イリスは恨みがましい目でドラコを睨んだ。

——その反省の色が全く見えない様子を見て、ドラコは、純血主義の彼にしては珍しく、ほんのちよっぴりだけ——彼女の勉学の友である、マグル生まれの魔女、ハーマイオニー・グレンジャーに同情した。結局、イリスは夕食が終わった後も、ドラコの厳しい監視の下、宿題をこなし続けなければならなかった。

宿題の量は思った以上に多く、最後にして最大の難関である変身術のレポートを終えた時点で、もう日付は八月三十一日——の夜——になつていた。——本当にギリギリだった。イリスとドラコは、お互いに疲れ切った顔を見合わせて、ため息を零した。

「本当にありがとう。ドラコ。おかげで助かったよ」

イリスは心から感謝の言葉を送った。宿題騒動が解決すると、イリスは安心感が芽生え、ドラコには再び葛藤が生まれた。——イリスは、いつものように飾り気のない笑顔で彼を見ている。

『全てを思い出したら、貴方は——私たちの事をどう思うかしら？あの子は貴方を愛し始めているのに——きつと貴方は——』

ふとドラコの脳裏に、あの夜母が言った言葉が思い起こされた。——そうだ、彼女は全てを忘れているから、今もこうして自分に笑顔を向けてくれる。——でも、全てを思い出したら？母の言葉の続きは、容易に想像できる。父は彼女を襲い、自分は彼女を見捨てた。その事実は覆しようがない。——ならば、彼女がそれを思い出せば——自分を拒絶するかもしれない。ドラコは何も言わずにイリスの頭を撫でて、爆発しそうな感情を胸の奥に押し込め、浮かない表情で自室へ戻った。

☆

イリスは筆記用具類を片付けながら、一人思いを馳せた。——心残り、結局あの後も、宿題をこなすのに気を取られすぎて、ルシウス

ときちんと話ができなかつた事だつた。これからどうやって、彼と接していけばいいんだろう。浮かない顔でイリスはトランクを覗き込み——教科書を確認しているうちに、見慣れない本が挟まっているのを見つけた。引き出してみると、それは古びた黒い革表紙の日記帳だつた。——もしかして、やり残した宿題——絵日記か何かか？イリスは一瞬パニックに陥りかけ、疲労で余り働かない脳をフル回転させて、やっと思い出した。

「・・・あー」

そうだ。ダイアゴン横丁を訪れた日、道端で偶然落ちていたのを見つけたのだ。使い古された感じの日記帳だし、きつと誰かが落としたのに違いないと思い、後で落とし主を探そうと一先ずカバンの中に入れておいたのだが——結局、書店のどたばたでそのまま持ち帰って来てしまったまま、今まで忘れてしまっていたらしい。

「うわー、どうしよう」

きつと本人も探しているだろう。悪い事をしてしまったと、イリスは唇を噛んだ。表紙と裏表紙をじっくり見ても——表紙の文字は消えかけてはいるが、微かに『日記』と銘打たれている事と、裏表紙にはロンドンのとある書店の名前が印刷されている事以外の情報は、何一つわからない。——不思議な事に、マルフォイ家の人々に相談する事は、イリスには憚られた。他の人に聞いてはいけないような気がしたのだ。

・・・仕方がない、中を見てみようか。迷いに迷った挙句、イリスは思った。もしかしたら、ヒントになる事が何か書いてあるかもしれない。イリスは思い切つて、表紙を開いた。

イリスの予想は当たつた。最初のページに、持ち主なのだろう——名前が書いてあつたのだ。——『T・M・リドル』——それ以降のページは、全て真っ白だつた。

「T・M・リドル」

その名前を呟いて、イリスは不思議な感覚に囚われた。初めて聞く筈なのに、何故か——ずっとずっと昔から、その名前を呼び慣れているような気がしたのだ。今は思い出せないけれど、その人は自分かも

のすぐく小さい時に——友達だったような気さえした。理由はわからないけれど、繰り返して口に出す度に、イリスはその名前に強い親近感を覚えた。イリスは首を傾げながら日記帳を一旦閉じようとして——偶然そばにあった、片付け忘れたインク壺を盛大に引つけた。

「ぎゃあああ!!」

イリスのみつともない悲鳴をあざ笑うように、インク壺は空中に舞い上がり、日記帳の上に着地し、流れ出た黒インクは両開きの真っ白なページを埋め尽くした。——しかし、驚くべき事が起こった。ページの上の大量のインクは、一瞬明るく光り——ページに吸い込まれるようにして消えてしまったのだ。

『君にあげよう。大事に使いなさい』

——誰かの声が、頭の中で響いた。——そうだ。日記帳なのに白紙なんてダメ、文字を書かなきゃ——使わなきゃ。これは私の物なんだから。イリスは操られるように、ほぼ無意識に羽根ペンを取り出した。まだ中身がわずかに残っているインク壺に羽根ペンを浸すと、リドルの名前の下に、サラサラと自分の名前を書いた。

“イリス・ゴント”

イリスの名前は一瞬紙の上で輝いたかと思うと、跡形もなく消えてしまった。——そして、そのページから、今使ったインクが滲み出てきて、イリスが書いてもいない文字が現れた。

“こんばんは、イリス・ゴント。僕はトム・マールヴォロ・リドルです。君はこの日記をどんなふうに見つけたのですか？”

心臓が止まるかと思う位、びっくりした。——これは、魔法仕掛けの日記なんだ。興奮で心臓が早鐘のように高鳴り始める。イリスは徐々に薄まっていくなリドルの文字の下に、書き付けた。

“こんばんは、リドルさん。先週、ダイアゴン横丁の道端で落ちていたのを見つけました。この日記の持ち主を探しています”

“どうかリドルと。この日記の持ち主とは、僕自身です”

イリスは首を傾げながら、消えかけた自分の文字の上に書いた。

“あなたは日記の中に住んでいるのですか？”

“はい。ですが、僕は『記憶の一部』に過ぎません。本物の僕は別にいます。今は西暦何年ですか？”

イリスが今年の年数を書くと、暫くの沈黙の後、真つ白になったページに再び文字が浮かび上がった。

“では、僕、つまりこの日記が作られたのは、今から五十年前という事になります。当時ホグワーツの学生だった僕は、『ある目的』のために自分の記憶をこの日記に保存しました”

「ご、五十年前?!」

リドルの言う『目的』の内容よりも、五十年前という事実にイリスは驚いて、素っ頓狂な声を上げた。日記の外見も、道理で古ぼけているはずだ。——イリスは推理した。きつとおじいさんになった本物のリドルが、ダイアゴン横丁を散策しているうちに、この日記を落としてしまったのだろうと。

“本物のあなたに会って、この日記帳を返したいのです。きつと探している筈ですから”

また、長い沈黙があった。イリスがただじりじりと待っていると、文字が浮かび上がる。

“これを持っていれば、いずれ本物の僕と会えるでしょう。それまでは、君が預かっていてください。できればその間、君が僕の話し相手になってくれると嬉しい”

イリスは一人頷いた。リドルがそう言うなら、自分が持っていて問題はないのだろう。イリスは不思議な位、この日記帳——リドルに對して、警戒心が湧かなかつた。むしろ、リドルが『話し相手になつてほしい』と言ってくれた事に、計り知れない親しみと喜びを感じていた。

“リドルがそういうなら”

“ありがとうございます。あと、お願いがあります。この日記の事は他の人には言わないで。僕と君だけの秘密にしましょう。他の人に知られると、悪用される危険があります”

“わかりました。じゃあ、おやすみなさい”

“おやすみ、イリス”

不思議な筆談を終えた後、イリスは日記帳を胸に大事そうに抱えて、満足気なため息を零した。——それほどまでに、この体験はイリスにとつて貴重で興奮冷めやらぬものだった。日記に宿った魔法の友達ができたなんて、ハリーたちやドラコが知ったら、何て言うだろう？でも、リドルが秘密だつて言ったから、誰にも言わないようにしなきゃ。

イリスは——ルシウスによる服従の呪文の相乗効果も合わさった結果——このほんのわずかな短時間ですでに、日記が放つ闇の魔力に囚われ始めていた。彼女にとつて、会ったばかりのリドルは親しい友達となり、日記はテイベアのように傍に置くと安らぎを得る事が出来るようなものになっていた。イリスは日記をぎゅつと抱きしめながら、眠りについた。

——ホグワーツのどこかに存在すると言われている、『秘密の部屋』。そこで何かがとぐるを巻き、永い眠りについて、主の帰還を待っている——

翌朝、イリスはマルフォイ家と共にキングズ・クロス駅へ向かった。沢山の人々でごった返す9と4分の3番線のホームで、ルシウスとナルシッサに別れを告げ、ドラコと共にホグワーツ特急に乗り込んだ。幸運な事に、一つ空いているコンパートメントがあったので、それぞれの荷物を下ろすと同時に、列車が走り始める。

イリスはドラコの向かいの席に座り、ため息を零した。結局、今朝も出発までの準備で忙しく、ルシウスと落ち着いて話す事が出来なかったからだ。しかし、イリスの心は決まっていた。ルシウスの提言する『純血の魔女としての教育』が、ハリーたちを拒絶しロンの家を侮辱する事へ繋がるなら——そんなものは御免だった。

——でも。心の中で、怯えた自分の声が囁きかける。いくら私がそう決意してたって、また呪いのコインを送られたり、手紙を妨害されたら？あの人に逆らっちゃダメ。イリスの頭の奥に根付いた服従の呪文の残滓が、彼女に警鐘を鳴らす。

「イリス、何をしてるんだ？」

「・・・え？」

不意に向かい側から咎めるような鋭い声が飛んできて、イリスは窓際に向けていた視線をドラコへと移した。どこか警戒しているような彼の目は、イリスの手元を凝視している。——何事かと思っただけで確認したイリスは、ぎよっとした。

イリスは自分でも意識しないうちに、上着のポケットに片手をつっ込み、その中に仕舞い込んでいた日記を撫でていたのだ。——日記の事は知られてはいけないんだ！慌ててポケットから手を離すが、ドラコの追撃は止まらない。

「列車が走り始めてからずっと、そうしてたぞ。——中に何が入ってるんだ？」

「・・・えっと・・・」

ドラコから目を逸らしながら必死で言い訳を探すイリスは、彼の固い表情が悲壮な覚悟を秘めているのに気が付かなかった。間もなく

コンパートメントの戸が開いて、一足先に車内販売へ行つて来たのか、腕一杯に菓子を抱え込んだクラブとゴイルがやって来た。――助かった。イリスは生まれて初めて、二人に感謝の思いを抱いた。

「ちよつと、席を外すね」

イリスはドラコに声を掛けてから席を立ち、二人に軽く挨拶をしながら、入れ違うような格好で通路へ出た。――恐る恐る振り向くが、ドラコは追いかけては来ない。良かった。イリスはまた、ポケットの中の日記をひと撫でした。

そうだ。せつかく外へ出たのだし、ハリーたちに会いに行こう。イリスがグリフィンドール生の固まった方の車両を指して歩いていると、不意に足元に投げ出された足につまづいて、イリスは見事に転倒してしまった。

「トロトロ歩いてんじゃないわよ。グリフィンドール」

蔑んだ声に頭を上げると、気の強そうな顔つきのスリザリンの女生徒が二人、にやにやと意地の悪い笑みを浮かべてイリスを見下ろしていた。――その二人に、イリスは見覚えがあつた。つんとすました様子の女の子はパンジー・パーキンソンで、その隣に立っているがっしりした体格の女の子はミリセント・ブルストロードだ。両方とも、イリスを含むグリフィンドール生を目の敵にする嫌なやつだ。イリスは、百味ビーンズの泥味に当たった時のように顔をしかめながら、げんなりした。

「何でこんな所にいるわけ？」血の裏切り”。あんたの席はあつちでしょ？」

二人は、余程イリスの事が気に入らないらしい。パンジーがグリフィンドール生が固まった車両の方を顎で差し、よろよろ立ち上がったイリスの肩を小突いた。――だから、今から行こうとしたのに！イリスはむかつ腹が立つて言い返そうと息を吸い込んだが、先程彼女の言った“ある言葉”が妙に心に引つかかった。

「血の裏切り”？」

そういえば、ダイアゴン横丁での喧嘩の時、ルシウスもアーサーに對してその言葉を使っていた。その言葉を切つ掛けとして二人は殴

り合いを始めたのだから、決して良い意味ではないだろうと推測されるが。イリスがおうむ返しに問いかけると、ミリセントがイリスの両腕を力任せに掴み、壁に押し付けながら、耳障りな笑い声を上げた。「そうだ。マグル界育ちのあんたは知らないのよね。この常識知らず！」

「あんた」純血」なんですよ？その癖に、あの出っ歯で頭でつかちのグレンジャー——」穢れた血」と仲良くしてるなんて、あんたは流れている魔法族の血を裏切ったも同然なのよ。だから」血の裏切り」って言うの。お分かり？」

パンジーが絡みつくような声で、後を続ける。イリスはカツとなった。自分の事はいくら馬鹿にされても構わないが、友達の事を馬鹿にされるのは許せない。「穢れた血」という発言の意味は解りかねるけれど、それも「血の裏切り」と同じように、相手を蔑むための言葉である事はイリスにも想定できた。ミリセントの拘束を抜け出そうとやつきになりながら、イリスはほくそ笑むパンジーを憎々しげに睨み付ける。

「私の友達を馬鹿にしないでよ！」

「——そこまでにしろよ、パーキンソン」

不意に穏やかな声がして、誰かがイリスに背を向け、パンジーらに正面を向くような形で、三人の間に割り込んで来た。——聞き覚えのない声に、痩せた体躯の男の子だ。イリスは突然の仲裁者に驚き、さっきまでの怒りのボルテージが急降下していくのを感じていた。

彼が何かをミリセントに耳打ちすると、彼女は面白くなさそうに舌打ちをしながら、イリスを解放した。パンジーは不服そうな声を出し、最後に男の子の肩越しにイリスを一睨みしてから、ミリセントと連れ立って去って行った。

——嵐は去った。イリスは全身に入れていた力を抜き、安堵のため息を零しながら、助っ人に感謝の言葉を送った。

「助けてくれてありがとう」

「別にいいよ。僕はセオドル・ノット。君と同学年のスリザリン生だ」



ノットは振り返ると、手を差し出してイリスに握手を求めた。精悍な顔立ちをしていて、その目は荒野で生きる一匹狼のように、孤独と知性を秘めている。彼は興味深げにイリスをじっと見つめたまま、暫く繋いだ手を離さなかった。

「私は」

「知ってるよ。イリス・ゴントだろ？スリザリン<sup>ほ</sup>生の中じや有名人だよ、君」

自己紹介しようとしたイリスの言葉を遮るようにして、ノットは笑いを含んだ声で告げる。・・・『有名人』。イリスは自嘲気味に笑った。彼女の中でその理由は決まっている。

「・・・落ちこぼれで泣き虫の、忘れん坊だから？」

「まあ、それもあるけど」

ノットは悲しい事に否定しなかった。見るからに落ち込んだイリスの様子が面白かったのか、吹き出しながらも彼は続けた。

「君が、あのマルフォイ家の”お気に入り”だからだよ」

イリスはびつくりして、彼を見上げた。どうしてマルフォイ家の”お気に入り”だったら、スリザリン生の注目の的になるんだ？彼女の疑問は、そのまま言葉になった。

「なんでドラコの家の”お気に入り”だったら、有名になるの？それに私、そんな——”お気に入り”なんて大げさだよ。休暇中に遊びに誘ってもらってるだけだし」

「それが”お気に入り”って言うんだよ、イリス」

ノットはまたも吹き出しそうに口元をひくつかせながら、きつぱり言い切った。

「マルフォイ家から直々にお誘いを受けて、休暇の度に屋敷で過ごす。君専用の部屋まで用意してもらって、パーティーでは客人扱い。それがどんなに光栄な事か。並大抵の家柄の子供じゃあ、どれだけ懇願したって到底無理な事を、君はいとも簡単に成し遂げているんだ。——マルフォイ家は国内では、一、二を争う”純血”の最大級の名家だからね。みんな君が『遙か昔に失われた、とんでもなく高貴な家柄の出身』なんじゃないかって噂してるよ」

イリスは慌ててかぶりを振った。マルフォイ家が途方もない大金持ちだと言う事は、屋敷を訪れる度に痛感していたが——まさか、スリザリン生の憧れの的になる位、有名な家柄だったなんて知らなかった。——それに自分に対して、そんな根も葉もない噂が立っている事も。

「私、高貴な家柄なんかじゃないよ、ノット。ルシ・ドラコのお父様と私のお父さんが昔友達だったから、親切にしてくれてるだけだよ」

「——へえ？」

ノットは片眉を上げ、意味ありげな含み笑いをした。

「君は”マルフォイ家の御曹司の友人”という自分の立場を、もう少し自覚するべきだと思うよ。——純血主義に染まらず、”血を裏切る”ような交友関係が続ける君に対して、さっきのように反感を持つ奴が出始めてきている。ただでさえ、スリザリン生と仲良くするグリフィン<sup>グ</sup>ドール生は、悪目立ちしてるんだ」

——あんだ”純血”なんでしょ？——”穢れた血”と仲良くしてるなんて——”血の裏切り”——

先程、パンジーに投げつけられた言葉が思い起こされ、イリスはノットを見上げながら、唇を噛み締めた。

「私、反感を持たれたって、かまわない。血で人を判断したりしない」「じゃあ、マルフォイとは袂を分かつ事になるな。あいつは生まれた時から、筋金入りの純血主義だ」

「ドラコは、あんな酷い事、言ったりしないよ！」

イリスが噛み付くように言うと、ノットはますます笑みを深めた。「何でそう言い切れるんだ？なあ、君らはお互いの価値観をきちんと話し合った上で、仲良くしているのか？休暇中にするくだらな世間話やチェスだけで、あいつの全てを分かつたつもりかい？——イリス、君がマルフォイに対してどんな幻想を抱いているか、知りたくもないが、一つ教えてやる。あいつは僕らの中で誰よりも、”純血”である事を誇りに思っている。君の知らない所で、あいつは君の言う”酷い事”を言っているぞ」

ノットの言葉は、イリスの痛い所をこれでもかという位、突いた。ドラコが自分の与り知らない場所で、さつきパンジーが言ったような差別的な言葉を使ってるだつて？凍り付いたような表情で黙り込んでイリスを見て、彼は尚も言葉を続ける。

「君の選択は二つしかない。——純血主義を受け入れ、晴れてマルフォイの“本当の友達”になるか、“穢れた血”と手を取り合う“血の裏切り”になり、僕らの敵になるか。・・・おっと、“両方と仲良くなる”なんて馬鹿な事を言うなよ？どちらかを手に入れるには、どちらかを捨てなきゃならないんだから」

「私は——私は、純血主義になんかならないよ、ノット」

「その言葉、僕よりもマルフォイに言つてやれよ。まあ、間違いなくあいつに嫌われるけどな。——そうしたら今みたいに、ふわふわした甘ったるいチョコレートみたいな関係じゃいられなくなるだろうね」

イリスは涙混じりの目でノットを睨むと、踵を返して、元のコンパートメントの席に戻るしかなかった。——グリフィンドールの車両へ行くには、通路を通せんぼするようにして立っているノットを何とかしなければならなかったからだ。

☆

列車は無事プラットホームに停車し、イリスは一年生とは違う上級生用のルートでホグワーツへ到達した。スリザリンのテーブル前でドラコ達と別れを告げ、グリフィンドールのテーブルへ向かっている途中、懐かしい声と共に背後から急に熱いハグをかまされた。

「イリス！会いたかったわ！」

びつくりして振り向こうとすると、良い匂いのする豊かな栗色の髪が頬に当たる——ハーマイオニーだ。

「ハーマイニー！」

イリスは心の中いっぱい幸せの風船が膨らみ、たちまち幸福な気分で満たされていくのを感じた。ハーマイオニーはイリスの知る限り、一番賢くて（実際、去年の首席だった）、優しく、笑顔がチャームニングで、長所を言えばきりが無い位の自慢の友人だ。——こんなに素敵な人を、パンジーは彼女に流れる“血”だけで蔑んだ。

「どうしたの？」

イリスが黙りこくつたまま、ハーマイオニーから離れようとしなかった。彼女は訝しげな声を上げた。

「うん。何でもない。——大好きだよ、ハーミー」

ハーマイオニーは嬉しそうに笑うと、イリスの頭を撫でた。

「私も大好きよ、イリス。さあ、早く席に座りましょう？」

二人は目を合わせて微笑みあうと、隣同士の席に座った。残りのグリフィンドール生も続々とテーブルへ到着し、ネビルやパーバティ、ラベンダーなどの友人たちとも、イリスは久々の再会を喜んだ。——だが、いつまで待っても、肝心のハリーとロンの姿が見当たらない。

「あれ？ハリーとロンは？」

イリスが辺りをキョロキョロと見回しながら尋ねると、ハーマイオニーの顔に陰りが差した。

「それが・・・わからないの。列車にもいなかったし。心配だわ」

「え？」

「きつとあの二人は、マルフォイ家に拉致られてしまったに違いない！」「今頃、手酷い拷問を受けているだろうさ」

「そんなわけないでしょー！」

何時の間に来ていたのか、フレッドとジョージが、皮肉たつぷりの笑顔を滲ませながら、イリスのそばで悪戯っぽく混ぜ返す。ハーマイオニーが窘めると、二人は「怖い怖い！」と揃って吹き出しながら、彼らの親友——リー・ジョーダンの元へ去って行った。ハーマイオニーはため息を零すと、改めてイリスに向き直り、どこか自分にも言い聞かせるような口調で言った。

「あの二人だもの、きつと大丈夫よ。それより、イリス、あの後何があったの？貴方、何か言い掛けてもいたでしょう？」

イリスはハーマイオニーに、何があったのかを話して聞かせた。ルシウスによる一連の行動の、本当の理由は——彼が毛嫌にするウィーズリー家に行かせるのを阻止するためと——イリスに『“純血”の魔法らしい生き方』をしてほしいと思っただけだ、という事を。ハーマイオニーは、合点がいった様子で頷いた。

「そういう訳だったのね。これで今までの強行も納得できたけれど・・・何とか、災難だったわね」

「ほんとはね、その事についてもっとルシウスさんと、ちゃんと話したかったんだけど・・・私が宿題をしていなかったから」

イリスは言ってしまったから、しまった!と思い、口を噤んだ。しかし、ハーマイオニーは聞き逃さなかった。ついさっきまでイリスを心配そうに見ていた目は、獲物を射るような鋭さを帯び、一言一言区切るように、彼女は問いかけた。

「待ちなさい。宿題を、何ですって?」

「ええっと・・・あのう・・・」

「貴方——まさか——宿題をやっていないかったの?」

イリスは渋々『残りの三日間で、殆どしていなかった宿題をドラコに手伝ってもらいながらやり遂げた事』を告白した。——それは、ハーマイオニーの怒髪天を衝いた。イリスはその時確かに、怒りに震える彼女の栗色の髪が、一本一本逆立ったのを見た。

「——三日間ですって!!」

その声の大きさをたるや——テーブル中のグリフィンドル生達が一瞬お喋りを中断してこちらを見るほどであった。顔から火が出る位の恥ずかしい思いをしながら、イリスは必死にハーマイオニーを宥めようとしたが、彼女の憤怒は静まらない。それもその筈だ。勤勉な彼女にとって、イリスのルーズすぎる行動は、到底許し難いものであったからだ。

「マルフォイのお父様が気が付かなかったら、どうなっていたか、貴方、わかっているの?!落第になったかもしれないのよ!!」

「あ、ほら、ハーミー!組分けの儀式が始まるっばいよ!」

ハーマイオニーよ、鎮まりたまえ——!イリスは懸命に神様に祈った。そして、その願いは確かに聞き届けられた。マクゴナガル先生が前に進み出て、組分けの儀式がもうじき始まるから、静かにするように、と生徒達に告げたのだ。——これで一先ず助かった。隣から、『まだ話は終わっちゃいないのよ』と言わんばかりの彼女の強い視線を感じるが、イリスは素知らぬ振りを決め込んだ。

☆

組分けの儀式は、いざ自分の番が終わった二年目になると、見てい  
るだけなので意外に退屈だった。去年、緊張でパニック状態に陥って  
いたイリスと同じような顔をして、一年生が一人一人、組分け帽子の  
叫んだ寮のテーブルへと駆けていく。ふと横を見ると、ハーマイオ  
ニーが頬杖を突きながら、夢見る瞳で、教職員テーブルに座るロック  
ハート先生を眺めていた。波打つブロンド、輝く碧眼のとてもハンサ  
ムな男性だ。ゴブレットを小粋に持ち、優雅に何かを飲んでい

「彼って、何て素敵なの！ねえ、イリスはもう彼の本は全部読んだ？」  
「うん、読んだよ。ハリウツドスターみたいで、確かにカッコいいよ  
ねー」

イリスは教職員テーブルの一番端に座り、ロックハートとは対照的  
に——ゴブレットを豪快に持ち、中身をグイグイ飲み干しているハグ  
リツドと視線がパチンと合って、手を振り合った。そのまま無意識に  
周囲を見渡すと、席が一人分、不自然にぽっかりと空いている事に気  
づく。

誰か一人、先生が足りない。・・・スネイプだ。イリスはハツと息  
を飲んで、思わず隣のハーマイオニーを小突いて、組分けの儀式を邪  
魔しない程度の小声で話しかける。

「ねえ、スネイプ先生がいらないよ。どうしたんだろう？」  
「本当だわ。風邪でも引いたのかしら？」

二人がこそこそ話している最中にも、儀式は順調に進んでいく。  
以前、ダイアゴン横丁で見かけたウィーズリー家の末の女の子、ジネ  
ブラ・ウィーズリーは、無事グリフィンドールに決まった。兄達と同  
じ燃えるような赤毛に、そばかすが特徴的な、健康的で可愛い女  
の子だ。

「さつき帽子がジネブラって言ってたけど、私のことはジニーって呼  
んで。あの時はちゃんと挨拶できなかったから。よろしくね」

ジニーは輝くような笑顔を浮かべて、イリスに握手を求めた。

「よろしく、ジニー。私、イリス・ゴースト」

ジニーはイリスの向かい側——ネビルの隣に腰掛けた。彼は、早く

も彼女の魅力にメロメロだ。儀式が全員完了すると、ダンブルドア校長が前に進み出て“二言、三言”話したので、イリスは他の在校生と一緒に笑ってしまった（そして、やつと去年、在校生が笑った本当の意味がわかった）。テーブルに現れたフライドポテトを自分の皿に取っていると、ネビルが興奮した様子で話しかけて来た。

「ねえ、ハリーとロン、噂が立ってるらしいよ」

「何の噂？」

「何でも、空飛ぶ車でホグワーツへ来たんだけど墜落しちゃって、退校処分になったんだって」

「馬鹿らしい！そんなのウソに決まってるわ」

ハーマイオニーが小馬鹿にしたように言い捨てると、向かいの席で黙って話を聞いていたジニーが、慌てて大広間の扉の方角を指さした。——漆黒のローブを翻し、スネイプが真つ直ぐに教職員テーブルへと歩いていく。その口元は、込み上げる笑みを懸命に堪えているようにひくついていた。やがて彼はマクゴナガル先生のそばへ行き、何事か囁いた。マクゴナガル先生は、遠目でもわかる位——顔を真つ青にして、スネイプと共に大広間を出ていく。

「・・・まさか」

四人は静まり返った。テーブルには、頬つぺたの落ちるようなデザートが所狭しと並んでいるが、手に取る気にもならない。暫くして、再びスネイプ（今や彼は、完全に悦に入ったような表情をしていた）が大広間へ戻り、今度はダンブルドア校長と連れ立って出て行った。

——最早、疑う余地はなかった。そもそも何故、ホグワーツ特急があるのに、空飛ぶ車なるもので登校しなければならなかったんだ？あれこれと四人で話し合っているうちに、ダンブルドア先生が戻って来て、いつもと変わらない穏やかな調子で、歓迎会が終わった事を手短かに告げた。

☆

四人は他の在校生と一緒に、監督生のパーシーに付いて、ボソボソ呟く肖像画や、ギーギーと軋む像を通り抜け、いくつかの狭い階段を

上がり、懐かしいグリフィンホール塔を目指して歩いた。談話室に着いた時、イリスはそわそわしながらハーマイオニーに提案した。

「ねえ、二人を探しに行かない?」

ハーマイオニーは真剣な表情で頷いた。二人は談話室を出て、うろろと人気がない校内を彷徨い歩く。——だが、ハリーとロンの姿は見当たらない。まさかとは思うが、本当に退校処分になってしまったのか? イリスは、あの二人なしの学校生活なんて、耐えられなかった。「イリス、もう遅いし、一旦談話室へ戻りましょう」

「うん・・・」

意気消沈した様子 of ハーマイオニーに促され、談話室へ戻ろうとした時——奇跡が起こった。「太った貴婦人」の肖像画の前に、探し求めていた人物を見つけたのだ。イリスは思わず叫びながら、二人にダッシュで近づき、その勢いで渾身のタックルをかました。

「ハリー! ロン! もうっ、心配したんだからねっ!!」

「うぐっ!」

「イリス?!」

二人は突然の衝撃に目を白黒させながらも、イリスを受け止められた。二人から、わしわしと大型犬のように頭を撫でられるイリスを見ながら、ハーマイオニーも嬉しそうに頬を綻ばせ、駆けて来る。

「やっと見つけた! いったいどこに行ってたの? ばかばかしい噂が流れて・・・ネビルが言ってたんだけど、あなたたちが空飛ぶ車で墜落して退校処分になったって」

「ウン、退校処分にはならなかった」

ハリーはハーマイオニーを安心させようと、努めて穏やかな声で言った。しかしそれは逆効果だったようだ。彼女はきゅつと愛らしく上がった口角を、真一文字に引き結ぶと、厳しい口調で迫及する。

「——まさか、ほんとに空を飛んでここに来たの?」

「お説教はやめてくれよ。それより、新しい合言葉は?」

ロンはこれ以上のお説教は御免だ、と言わんばかりに、イライラと言いつつ放った。イリスは、睨みあうロンとハーマイオニーの間に慌てて



入り込みながら、取り繕うように言った。

『ミミダレミツスイ』だよ。でも、ほんとに退校処分にならなくてよかった」

「全く、貴方たち三人には本当に驚かされるわ」

「・・・？イリス。君、何かやらかしたのかい？」

「ななな、何でもないよハリー！『ミミダレミツスイ』!!」

イリスは、狼狽しながら大声で合言葉を叫んだ。お説教を御免蒙りたいのは、イリスも同じ事だった。肖像画が開いた先で四人を待ち受けていたのは——驚くべき事に、溢れんばかりの拍手の嵐だった。もう夜も更けているというのに、グリフィンドールの寮生は全員まだ起きていて、傾いたテーブルの上や、ふかふかの肘掛け椅子に立ち上がった。偉業を成し遂げたハリーとロンの到着を待っていた。成す術もなく穴の中へ引き摺り込まれていく二人の様子を、残されたイリスとハーマイオニーが、呆気に取られたように見つめる。やがてイリスはハーマイオニーを促して、それぞれ穴を通って談話室へと入った。今やハリーとロンは、熱狂渦巻くいきれの中心にいた。「やるなあ！なんてご登場だ！車を飛ばして『暴れ柳』に突っ込むなんて、何年も語り草になるぜ！」

リー・ジューダンが感極まった調子で叫んだ。彼だけでなく、みんな口々に二人を賞賛している。イリスも今更になって、空飛ぶ車の話を聞きたくなってきたが——隣にいるハーマイオニーが、今まで見た事のない位のしかめっ面をしていたので、黙って様子を見守る事に決めた。二人共、表面上はバツの悪そうな顔を装っているが——唇の端っこだけは、今にも得意げに笑い出しそうにヒクヒク動いていた。二人は、ハーマイオニーと同じくしかめっ面をした監督生パーシーに捕まる前に、足早に螺旋階段へと向かう。

「おやすみ」

いまだ興奮冷めやらない様子の同級生たちに背中をバシバシ叩かれながら、ハリーとロンは、イリスとハーマイオニーに声をかけた。

「おやすみ」と返したのは、イリスだけだった。

翌朝、イリスは手早く身だしなみを整えると、いつもより早めに大広間へ向かった。グリフィンドールのテーブルには、どうやら昨晚興奮でよく眠れなかったらしく、それぞれ目の下に薄らと隈を作ったハリーとロンが、ニツコリしながら彼女を待っていてくれる。

実は昨日の夜、ハーマイオニーの手前何も言えなかったけれど、イリスが聞きたそうにしていたのを察して、ハリーが気を利かせ、ラベンドー伝手にこっそり手紙を送ってくれたのだ。『明日の早朝、一人で大広間に来て。車の話をしてあげる』と。

かくして、三人は、ハーマイオニーに見つからないように大広間で落ち合う事ができた。イリスは無事、早目の朝食を取りながら、ハリーとロンが織り成した空飛ぶ車の冒険活劇を、思う存分堪能できたのだった。二人は話し上手だった。——上空から見た地上の美しい景色、途中で壊れ始める魔法仕掛けの車、危機一髪でホグワーツに飛び込んだが、今度は暴れ柳が攻撃してきて——。イリスにとっては、去年の『賢者の石事件』に匹敵する位、刺激的で面白い話だった。うつとりと話の全貌を聴き入った後、彼女はホウとため息を零し、勇敢な戦士たちを見るような尊敬に満ちた眼差しで二人を見た。

「すつごいよ。マールしんじられないの髭——いいなあ、二人ばかり良い思いしてー。」

「良い思いなんかじゃないさ、どんなに僕らが大変だったか！」とハリー。

「そうさ。暴れ柳の、あの強烈なジャブったら！イリス、君がもしいたら、即聖マング行だったよ」とロン。

ハリーもロンも窘めるように言っては返したものの、昨日ヒーロー扱いされた余韻がまだ残っているのか、その表情は得意満面そのものだ。

「ねえ、今度でいいから、私も車に乗せてよ！ロンは運転できるんでしょ？」

キラキラと好奇心に輝く瞳でイリスに見つめられると、ロンは勿体

ぶつたように咳払いした。

「アー：載せてあげたいのは山々なんだけど、車はもうどこかへ行っちゃったからなあ」

「貴方たちもついでに、どこかへ行っちゃったら良かったんじゃないの？」

不意に痛烈な言葉のジャブがロンにぶちかまされた。三人が慌てて声のした方を向くと、イリスのすぐ傍に、依然昨日と変わらない“しかめっ面”をしたハーマイオニーが立っている。

「や、やあ、ハーマイオニー。おはよう」とハリー。

「おはよう。イリス、貴方にプレゼントがあるの」

ハーマイオニーはハリーに対し、つつけんどんに挨拶を返すと、イリスの隣にどすんと座った。どうやら彼女は、ハリーたちが到着した方法がまだ許せないらしい。彼女の全身から発する怒りのオーラをまともに受け、居心地悪そうに身じろぐイリスに、彼女はポケットから羊皮紙を一枚取り出し、手渡した。クルツと巻かれたそれを広げてみると——イリスの起床から就寝までの、一日のスケジュールが緻密に書かれていた。しかも恐ろしい事に、『13：00 復習』『19：00 宿題』等、時間毎に定められた行動の部分が、眩しい位に点滅して光るようになっていらいらい（その証拠に今は、『7：00～8：00 朝食』の欄がピカピカと光っていた）。

ハーマイオニー特製のスケジュール表を凝視しながら、凍り付くイリスの肩に手を置きながら、彼女はその耳元で囁んで含めるように言い聞かせた。

「貴方が、もう二度と、宿題をすっぱかさないように、昨日、貴方がぐつぐつりのんきに眠っている間、夜を徹して作ったのよ。——もし、貴方がこれの通りに勉強しなかったら・・・」

「合点承知の助です、ハーミー先生！」

みなまで言わず、ただ肩を掴む力を強めたハーマイオニーに底知れない恐怖を感じ、イリスは敬礼しながら叫んだ。ハーマイオニーは、ハリーたちと同じように——原因は全く異なるが——薄らと隈の出来た目を細めて満足気に微笑むと、牛乳入りオートミールの深皿を取

り寄せた。

——よし、ホグワーツ最強のドラゴン・ハーマイオニーは眠りについた。眠るドラゴンをくすぐる勿れ。イリスはスケジュール表を無くさないように、ポケットのの中の日記の表紙に挟むと、トーストを一枚取ってバターを塗り始める。

「イリス。宿題をすっぱかしたって、何の事だい？」

しかしロンは、眠るドラゴンをくすぐってしまった。察しの早いハリーがロンを慌てて小突き、イリスがトーストを取り落としたが、時すでに遅し。ハーマイオニーはオートミール取り分け用のお玉を乱暴に皿に戻すと、三人を睥睨した。

「もしかして、イリス、貴方言ってなかったの？——貴方達も、イリスのあの後には興味なしってわけ？親友があんな危険な目に遭ったっていうのに！貴方達の不良行為の話なんか、どうでもいいでしょう！」

「これから聞くつもりだったさ！君が横から茶々を入れなければね！」とロン。

「あら！茶々を入れなきや、イリスが貴方達の不良行為に巻き込まれるところだったわ！」とハーマイオニー。

「みんな、出来立てのベーコンエッグでも食べないか？」

「で、あの時の話なんだけどね！」

ハリーとイリスは、阿吽の呼吸で目を合わせ、お互いの成すべき事を把握した。ハリーはシーカーに相応しい俊敏さで、ホカホカと湯気の立つベーコンエッグの大皿を取ってくると、四人の取り皿に投げ入れ、ロンとハーマイオニーが思わず喧嘩を中断して皿を注視している間に、イリスはやや大きめの声で話し始める。——但し、列車でのパズルやノットとの諍いの話は——とりわけハーマイオニーの前ではしたくないので——いまだに自分の心の中だけに秘めている。

「出たよ、“純血主義”だ！そんなの、洗脳するため、イリスを誘拐したも同然じゃないか！」と憤りながらロンが言った。

「イリス、もうマルフォイに話しかけられても、無視をするんだ。あいつの父親は正気の沙汰じゃない」とハリー。

「私もハリーの言う通りにした方がいいと思うわ。ハグリッドも、マルフォイ家の事をよく言っていないかったし」とハーマイオニー。

しかし、イリスの心境は複雑だった。三人にまだ打ち明けていない事がもう一つある。——ドラコを好きだという事だ。イリスだって、自分を純血主義者に教育すると明言したマルフォイ家とは距離を置きたいが、ドラコと仲良く出来ないのは耐えられない。矛盾する考えに、イリスはオートミールをスプーンで掻き混ぜながら、必死に言い訳を考え、やがておずおずと三人を見上げた。

「・・・でも、呪いのコインを送ったのはルシウスさんで、ドラコじゃないもん・・・」

予想だにできなかったイリスの返答に、ロンは飲んでいた紅茶を盛大に吹き出し、ハリーは食べかけのミンスパイを取り落とし、ハーマイオニーはロックハート著『バンパイアとバツチリ船旅』を、自分のオートミールの皿に危うく漬け込みそうになった。

「君、頭が悪いにも程があるぜ！トロール並みだぞ、しんじられないねマーリンの髭！——アイタツ！（ハーマイオニーが本でロンをはたいた）何するんだよ、ハーマイオニー！」

再び口喧嘩を始めた二人を見ない事にして、ハリーはテーブルから身を乗り出し、イリスの手を握りながら、真剣な表情で幼い子供に言い聞かせるように、ゆっくりと話しかけた。

「いいかい、よく聞いてくれ。イリス。君は優しいから、『無視しろ』とか言われるのは、心苦しいかもしれないけど・・・冷静になって、よく考えてほしい。」

マルフォイは、自分の父親が、君に呪いのコインを送ったり、手紙を妨害する事に、何の疑問も思わないようなやつだ。あいつは父親の言いなりだし、良心の欠片さえ持ち合わせちゃいないよ。

今後、マルフォイが君に話しかけたら、何も言わずに僕の後ろに隠れるんだ。クリスマス休暇の時だって、僕たちがマルフォイの父親から絶対に君を守るから」

ハリーたちが自分の事を思って、掛けてくれた言葉だということ、イリスには痛い程伝わった。客観的に見れば、誰だって『ドラコ

と付き合うな』と言うだろう。しかし、イリスは——ドラコは、臆病で意地悪だけれど、本当は純粋で良い子で、意外と面倒見が良くて情が深く、魔法使いのチェスが教えるのも上手で、勉強は特に魔法薬学と変身術が得意で、クイディッチが大好きで本当はシーカーになりたいと言っていた事も——三人に言いたかった。彼は悪い所ばかりじゃない、良い所だつてある。途方もなく時間はかかるかもしれないけど、きつと三人とも仲良くなれるはずだ。だって、私とも仲良くなれたんだもの。三人は誤解しているんだ。

——君らはお互いの価値観をきちんと話し合った上で、仲良くしているのか？——

不意にノットの言葉が彗星のように降って来て、イリスの心に衝撃を喰らわせる。——そうだ、確かにノットの言う通りだ。イリスは唇を噛み締める。ドラコとは、ホグワーツ初日以来お互いの価値観について、今まで一度だって、真剣に語り合った事がない。魔法界用語に当て嵌めれば、イリスは親マグル派で、ドラコは純血主義だ。決して相容れる事の無い考えを持つ二人だからこそ、その事について無意識に語るのを避け、下らない世間話に身を投じ続けていたのかもしれないかった。

イリスは、ハリーの視線を避けて、スリザリンのテーブルにいるドラコを探した。そこで彼女は信じられないものを見て、思わず椅子を蹴倒して立ち上がりそうになった。

——ドラコの隣にパンジーがしな垂れかかり、半分に切ったソーセージをフォークに差して、あろう事か、彼の口元へ持っていき、食べさせようとしているのだ。イリスは怒りのマグマが心臓から噴き出して、瞬く間に全身を爆発的な勢いで覆っていくのを感じた。

——そんな、ずるい！私だって、そんなの、したことないのに！ドラコ、そんなやつソーセージなんか食べちゃダメ！——

イリスの願いも空しく、ドラコは苦々しい表情を浮かべながらも、パンジーのソーセージを、仕方なくといった調子で食べてしまった。その瞬間、イリスの脳内で、パンジー・パーキンソンは『ただの嫌なやつ』から『につつき恋敵』へとクラスチェンジされた。パンジーが

嬉々として、次のソーセージをフォークに差しているのを『もういい』と手で制しているドラコを睨み付けながら、イリスは心の中で彼を轟々と責めた。

——ドラコなんか大っ嫌い！ソーセージくらい、自分で食べられるでしょ！死んじやえ、バカ！——  
「イリス、どうしたんだい？」

ハリーが心配そうに、様子の可笑しいイリスに尋ねるが、彼女はそれには答えず、般若のような顔つきでトーストに噛り付いた。そこへネビルがやって来て、嬉しそうにハリーの隣に腰掛ける。

「もうすぐふくろう便の時間だ。ばあちゃんが、僕の忘れた物をいくつか送ってくれると思うよ」

彼の予言は大当たりした。突如、頭上に無数の羽ばたき音がして、百羽を超えるふくろうが押し寄せ、天井の曇り空を覆い隠した。ふくろう達は大広間を旋回して、食事とお喋りに勤しむ生徒達の傍に舞い降りては、手紙やら小包やらを落としていく。きつと彼の忘れ物なのだろう——小包の中でもひととき大きな凸凹した包みが、ネビルの頭に落ちてポヨンと撥ね返り、彼は痛みに悶絶しながらも地面に落ちる寸でのところでキャッチした。

続いて、灰色のふくろうが、ハーマイオニーの傍のミルク入りの水差しに落ち、周りのみんなにミルクと羽のしぶきを撒き散らした。その騒動に、ロンとハーマイオニーの口喧嘩も一時中断され、五人の視線はふくろうに集中する事になった。

「エロール！」

——どうやらそのふくろうは、ワイズリー家の一員であったらしい。ロンが仰天しながらも足を引っ張り、ミルクでぐっしより濡れたエロールを救出した。エロールは、見るからに息も絶え絶えの状態だった。同じくミルクで濡れた赤い封筒を、嘴からポトリと力なく落とした。

《シクシク・・・ワイズリー家に飼われたのが・・・わしの運のツキ・・・定年過ぎてもこんなボロボロになるまで働かされて・・・ガクツ》

「コードブルーー！繰り返す、コードブルーー！誰かドクター！ハグリッドを呼んでください！」

イリスが白目を剥いて力尽きた（失神した）エロールを、必死に介抱する一方で、ロンは赤い封筒を——何故かネビルも、まるで時限爆弾を見るような目つきで凝視している。

「大変だ・・・」

「大丈夫よ、まだ生きてるわ」

ハーマイオニーが、イリスの懸命な救助活動に参加しながら、ロンに言った。

「そうじゃなくて——あっち」

ロンは、無情にもエロールではなく——彼の傍に落ちている、赤い封筒の方を震える手で指差した。別に何の変哲もない封筒だ。——ロンの言葉の意図が分からず、ハリーとイリスとハーマイオニーは一樣に首を傾げた。

「その封筒がどうしたの？」代表してハリーが聞いた。

「ママが——ママったら、僕に『吼えメール』をよこしたんだ」ロンが、蚊の鳴くような声で言った。

「ロン、開けた方がいいよ」ネビルが意を決した様子で囁いた。

「開けないと、もつとひどいことになるよ。僕のばあちゃんも一度僕によこしたことがあるんだけど、ほっておいたら——（そこで、ネビルはごくりと生唾を飲み込んだ）——ひどかったんだ」

『吼えメール』って何？」ハリーとイリスの声がハミングした。

しかし、ロンは二人の疑問に答える余裕もなく、全神経をその赤い封筒——『吼えメール』に集中させていた。封筒の四隅が、不穏な煙を上げ始めていたからだ。——まるで、早く開けないともつと酷い目に遭わせるぞ、と脅しているようだった。ネビルに促され、ロンは蒼白な表情で唇を噛み締めながら、そつと手紙を開封した。ネビルはすかさず指を使って耳栓をした。

次の瞬間、イリスは封筒が爆発したかと思った。——違う、爆発じゃない。怒鳴り声だ。イリスは衝撃で目を白黒させながら、ただひたすら耐えるしかなかった。手紙から放出される声は余りに大きく、



窓硝子はビリビリ震え、天井からはパラパラ埃が落ちて来る。

「・・・車を盗み出すなんて、退校処分になっても当たり前です!!・・・車がなくなっているのを見て、わたしとお父さんがどんな思いだったか・・・」

ロンのお母さんの怒鳴り声は、窓や天井のみならず、石の壁やイリスの両耳の鼓膜にまで反響し、彼女はここにきてやっとネビルと同じように指で耳栓を試みたが、効果は余り無かった。テーブルの上の皿もスプーンも、残らずガタガタと小刻みに震えている。ロンの姿が見えないと思つて探していると、彼の真つ赤な額だけがテーブルの上にちよこんと出ていた。——椅子に縮こまって、小さくなっているらしい。今やイリスはハーマイオニーと手を取り合い、ロンママの声の暴力に、成す術もなく耐え続けるしかなかった。大広間中の生徒達が周囲を見渡し、誰が『吼えメール』をもらったのかを探しては、ロンのいる一角へと行き着いていく。

「・・・昨夜、ダンブルドアからの手紙が来て・・・おまえもハリーも、まかり間違えば死ぬところだった・・・」

ハリーは辛うじて椅子に張り付いていた。自分の名前が出て来た時、びくつと肩をこわばらせたが、必死に聞こえていない振りを貫いた。

「お父さんは役所で尋問を受けたのですよ・・・今度ちよつとでも規則を破つてごらん・・・わたしたちがお前をすぐ家に引つ張つて帰ります!!」

『吼えメール』の終焉は唐突に訪れた。ロンの手からとつくに落ちていた赤い封筒は、最後の文句を言った直後に炎となつて燃え上がり、跡形もなく灰になつて消え去つた。ハリーとロンは——まるで津波の直撃を受けた後のように——茫然と椅子に縋り付いていた。何人かが堪え切れずに笑い声を上げ、だんだんといつも通りの喧騒が戻つて来る。ハリーたちと同じく茫然自失状態となっているイリスの頭を撫でながら、ハーマイオニーが悠然と、ロンの頭のでっぺんを見下ろして言い放つた。

「イリス、貴方が怒られたんじゃないのよ。——ま、ロン。貴方が何を

予想していたかは知りませんが」

「当然の報いを受けたって言いたいんだろ？」ロンが噛み付いた。

一方のハリーは、ロンの両親への申し訳なきでいっぱいの顔をしながら、食べかけのオートミールを向こうに押しやった。ハリーは休暇中、ロンの家にお世話になっていたというから、きつと罪悪感に苛まれているに違いない。イリスは氣遣わしげにハリーを見やった。

「ハリー、今回の事は仕方がないよ。二人共、わざとやったんじゃないもの」

しかし、話はそこで一先ず中断となった。マクゴナガル先生が、グリフィンドールのテーブルを回って時間割を配り始めたからだ。見ると、最初にハツフルパフと一緒に「薬草学」の授業を受けることになった。

四人は一緒に城を出て、野菜畑を横切り、魔法の植物が植えてある温室へと向かった。——『吼えメール』は一つだけ良い事をした。ハーマイオニーがこれで二人は十分罰を受けたと納得し、元通りの仲よし四人組に戻れたのだ。

☆

温室の近くまで来ると、「薬草学」担当のスプラウト先生が——何故か、ロックハート先生と一緒に芝生を横切って、包帯を山ほど抱えたまま大股でやって来た。遠くの方に、包帯だらけの暴れ柳が見える。——泥塗れで仏頂面のスプラウト先生とは対照的に、ロックハート先生は埃一つない服装で終始笑顔だった。ハーマイオニーがキャツと黄色い悲鳴を上げた。

「みんな、今日は三号温室へ！」

ロックハート先生がこぼれるような笑顔でみんなに挨拶しようとした途端、スプラウト先生が不機嫌な声で言った。——三号温室。イリスは胸をときめかせた。一年生の時には一号温室でしか授業がなかった。きつと、もつと不思議で面白い植物が植わっているに違いない。

「楽しみだね、ハリー」

イリスは温室に入る時、後ろにいる筈のハリーを見ながら言った。

——しかし、そこには、閉じられた扉と不機嫌さを全面に押し出したスプラウト先生がいるだけだった。

「ミス・ゴント。ミスター・ポッターは、あの忌々しい金髪キーキースナップ・．．いえ、ロックハート先生が話があるとか抜かし．．．とにかく、二、三分遅れるとのことですよ」

「はい．．．」

イリスは何も言わない事に決めた。どうやら、スプラウト先生とロックハート先生はそりが合わないらしい。スプラウト先生は、温室の真ん中に架台を二つ並べ、その上に板を置いて簡易的なベンチを作った。ベンチの上に色違いの耳当てを並べ始める。ロンが耳当てとイリスを交互に見ながらニヤツと笑い、無言で小突いてきたので、イリスもむきになってやり返した。——二、三分後、ハリーが複雑極まりない表情で温室へ戻って来て、イリスの隣に立った。先生はその様子を確認してから、授業を始めた。

「今日はマンドレイクの植え替えをやります。マンドレイクの特徴が分かる人はいいますか？」

みんなが思った通り、ハーマイオニーの手が挙がった。彼女は淀みない声で、『マンドレイクは強力な回復薬になる事』、『姿形を変えられたり、呪いをかけられたりした人を元の姿に戻すのに使用される事』をすらすらと答え、グリフィンドールに十点を与えた。続いて、『マンドレイクの泣き声は聞いた者にとって命取りになる事』も答えたので、もう十点を獲得した。イリスが感動して小さな拍手を送ると、ハーマイオニーは彼女に向け、誇らしげな笑みを見せた。

「さて、ここにあるマンドレイクはまだ非常に若い」

先生は、一列に並んだマンドレイクの苗の箱を指差した。イリスは他の生徒達と一緒に、前の方へ詰めかける。——そこには、紫がかった緑色のふさふさした植物が、百個くらい列を作って並んでいた。ここから先は耳当てが必要だ、という先生の指示で、今度はみんな一斉に耳当てを——ピンクのふわふわした耳当て以外を——取ろうと揉み合った。イリスは幸運な事に、残り一つとなったまともな耳当てを掴み取ることができた。

「それでは耳当て、付け！」

号令に従い、イリスはパチンと慣れた調子で耳当てを付ける。外の音が完全に聞こえなくなった。——まあ、これが耳当ての正しい効果なのだろうけど、何だか変な感じだ、とイリスは思った。先生は残ったピンクの耳当てを付け、ローブの袖を捲り上げて、ふさふさした植物を一本しつかり掴み、ぐいと引き抜いた。

イリスは思わず悲鳴を上げてしまった。しかし、声を出した感覚はするが、当然何も聞こえない。

土の中から出てきたのは、植物の根ではなく、小さな泥んこのひどく醜い男の赤ん坊だった。ふさふさした葉っぱは、頭から——髪の毛みたいに——生えていた。肌は薄緑色で、まだらになっている。赤ん坊は、声の限りに泣き喚いている様子だった。先生は、慣れた調子でテーブルの下から大きな鉢を取り出し、マンドレイクをその中に突っ込み、葉っぱだけが見えるように、黒い湿った堆肥で赤ん坊を埋め込んだ。先生は耳当てを外すよう、生徒たちにハンドサインを送ると、自分も耳当てを外した。

「このマンドレイクはまだ苗ですから、泣き声も命取りではありません。しかし、苗でも、みなさんを間違ひなく数時間気絶させるでしょう。新学期最初の日を気を失ったままま過ごしたくはないでしょうから、耳当ては作業中しつかりと離さないように。

一つの苗床に四、五人。植え替えの鉢はここ、堆肥の袋はここにあります。——『毒触手草』に気を付ける事。菌が生えてきている最中ですから」

先生は話しながら、自身の肩の上にソロソロと伸ばしていた暗褐色の長い触手——恐らく『毒触手草』だろう——を、ピシヤリと叩いて引っ込めさせた。

☆

ハリー、イリス、ロン、ハーマイオニーのグループに、クルクルとした巻き毛が特徴的なハツフルパフ生の男の子が加わった。初めて見る子だ。

「ジャステイン・フィンチーフレツチリーです」

男の子は真つ先にハリーと握手しながら、朗らかな明るい声で自己紹介した。

「君の事は知ってますよ。もちろん。有名なハリー・ポッターだもの。それに君は、ハーマイオニー・グレンジャーでしょう。——何をやって一番の」

ハーマイオニーは、笑顔で握手に応じた。何となく嫌な予感がしたイリスが、ハリーの影に隠れて気配を消そうとしていると、ジャステインは容赦なくイリスに近づいて手を差し出した。

「君はイリス・ゴントですよね。彼女とは対照的に、何をやっても落ちこぼれの。——動物と話ができるって本当なんですか？それから、ロン・ウィーズリー。あの空飛ぶ車、君のじゃなかった？」

イリスは苦笑いで握手に応じるしかなかった。トラウマを穿り返されたロンは、ニコリともしなかった。

「隙を見て、あいつの耳当て、ずらしてやろうぜ」

ロンがイリスの耳元に囁き掛けたので、イリスも無言で頷いた。

ジャステインはお喋りな男の子だった。五人でそれぞれの鉢に、ドラゴンの糞の堆肥を詰め込んでいる最中も、彼のトークは留まる事を知らなかった。どうやら彼はロックハート先生のファンらしく、彼の英雄譚を熱心に行っていたが（ハーマイオニーだけが一生懸命聴いていた）、そのうち耳当てを付けないといけなくなったので、彼の話は中断され、五人は静寂の中で作業を続けた。

植え替えは、スプラウト先生の時、随分簡単そうに見えたが——実際には、そうはいかなかった。マンドレイクは土の中から出るのを嫌がり、一旦出してしまうと元に戻りたがらなかった。もがいたり、蹴ったり、小さな尖った拳を振り回したり、ギリギリ歯ぎしりしたりで、危ない事この上ない。困り果てたイリスは、無駄だとわかっていながらも、マンドレイクに語り掛けた。

「怖がらないで。君を傷つけようなんて思ってない。すくすく育てほしいから、土を新しくするだけだよ。すぐに元に戻してあげるから。暴れなくたっていいんだよ」

すると、不思議な事が起きた。どうやらマンドレイクは、イリスの

言葉がわかるようだった。力の限り暴れるのを止め、きよとんとした顔でイリスを見ている。イリスもきよとんとした顔でマンドレイクを見返した。果たして、自分の魔力が強くなり、動物の垣根を超えて植物とまで会話できるようになったのか——マンドレイクは動物の域に入るのか——詳細は不明だが、とにかく意志の疎通は可能だろうだ。お互いに怪我をしなくて済むと、イリスはホッと胸を撫で下ろした。

「そう、良い子だね。すぐに埋めてあげるからね」

イリスが、人形のように大人しくなったマンドレイクを再び土の中へ埋め込んでいると、スプラウト先生が目を見張りながら、その様子を見守っているのに気付いた。おもむろにトントンと肩を叩かれ振り向くと、ハリーが『僕のも頼むよ』と唇の動きだけで言いながら、まるまる太ったマンドレイクを見せる。——その後、イリスは、それぞれの持つマンドレイクに丁寧に語り掛けては大人しくさせ、他のどのグループより早く楽に植え替える事に成功したのだった。

「素晴らしい才能です、ミス・ゴント。マンドレイクをあやしたのはあなたが初めてです。グリフィンドールに十点あげましょう」

スプラウト先生が、にっこり笑ってイリスに言った。「やったわね！」とハーマイオニーに肩を叩かれ、イリスは誇らしい気持ちでいっぱいになった。

「助かったよ。君って、植物とも話ができるようになったんだね」とハリー。

「ほら見ろよ、あいつの顔！気分爽快だぜ」とロン。

ロンに促された方向を見ると、ジャステインがびっくり仰天した顔でイリスを見ていた。——どうやら、彼女が動物と話ができるという噂を信じていなかったらしい。イリスは『してやったり』と言わんばかりに、ニヤツと笑った。

「薬草学」の後は「変身術」の授業だった。何とか授業を終えた後、昼食を取るために四人は大広間へ急いだ。

「こいつめ——役立たず——コンチクショー！」

テーブルに着くや否や、痲癩を起こしたロンはカバンから自分の杖を取り出すと、机の端に叩きつけ始めた。事情を知る三人は、呆れたようにため息を零しながら、その様子を見守る。

実は、先日の車騒動の際に、彼の杖は——元々兄のお古のため状態は良くなかったのだが——ついに本格的に、というより修復不可能なまでに壊れてしまったらしい。スペロテープで応急処置を施され、見た目はどうにか杖の形状を保ってはいるが、もはやそれは『杖』というより『赤毛の双子特製の悪戯グッズ』と言っても過言ではなかった。実際、「変身学」では『コガネムシをボタンに変える』練習をしたのだが、ロンと彼の周囲の生徒たちはそれぞれどころではなかったのだ。授業中にも関わらず、杖は何の前触れもなく濃い灰色の煙を噴出させたり、とんでもない時にバチバチと騒音を鳴らしたり、火花を散らしたりするので、マクゴナガル先生は超絶なまでにご機嫌斜めだった。

「ロン、ダメだよ。壊れちゃおう」

「壊れちゃうだつて？もうとつくに壊れてるさ！」

イリスが宥めるように言うが、ロンは自分の髪色と同じくらい頬を真っ赤にしてやり返す。その余りの剣幕に、イリスはさすが引き下がらなかつた。

「家に手紙を書いて、別なのを送ってもらえば？」

主人の怒りに呼応するようにして、杖も、まるで連発花火のように派手な火花と騒音をまき散らし始めた。ハリーも心配そうに口を開く。

「ああ。そうすりゃ、また『吼えメール』が来るさ。『杖が折れたのは、おまえが悪いからでしょう！』ってね」

ロンが皮肉たつぷりに言い返しながら、花火大会を終えて満足したのか今度はシューシュー煙を上げ始める杖を、荒々しくカバンに投げ

込んだ。イリスはハリーと目が合い、苦笑いすると、彼は肩を竦めて見せた。——その時確かに、ハリーはこう言っていた。『ロンのご機嫌も、全然直らないね』と。頼みの綱のハーマイオニーは彼の機嫌を直すどころか、先程の「変身術」の授業で、見事に変身させたライラック色に輝くボタンをうつとりと眺めている。

「ねえ、彼ってこの色が好きなの。私ったら——私ったら、意識した訳じゃないのよ。まさか——ライラック色にしようだなんて！でも、無意識にそうしちゃったの。これってきつと、運命なんだわ。プレゼントしたら、彼は喜んでくれるかしら？」

「そりゃすんばらしいアイデアだぜ、ハーマイオニー！その元が虫けらだって知ったら、やつも小躍りして喜ぶんじゃないか？」

「——何ですって？」

ロンが痛烈に言い放ち、二人は今日何度目かの睨み合いを始める。最早日常茶飯事となったその光景をスルーしながら、ハリーはコーストビーフを自分と隣に座るイリスの取り皿に盛り付け、ソースを掛け始めた。

——その時、イリスの脳内に電流が走った。そうだ、今日はあの日じゃないか。嫌な空気を断ち切るようにパンと手を叩き、ロンに明るく話しかける。

「ロン、元気出して！今日の夜は、グリフィンドールの『交換会』でしょ」

『交換会』。その言葉は、ロンのご機嫌を確かに回復したようだった。その証拠に、彼は喧嘩を止め、わずかではあるが笑顔を取り戻したのだ。イリスは思わず、戦友ハリーとテーブルの下で『やったね！』と言わんばかりに互いの拳をコツンとさせたのだった。

☆

午後のクラスは（ハーマイオニーだけ）待ちに待った『闇の魔術に対する防衛術』だ。大広間を出た後、三人に続いて歩くイリスは、ふとポケットに入れたままの日記の事が気になった。——そういうえば、一昨日宿題を終えてから、リドルと話をしていない。きつと彼も寂しがつているに違いない。イリスは居てもたつても居られなくなった。



「ちよつとお手洗いに行つてくる」

「OK。僕ら、中庭に出てるから」と振り返りながらハリーが言った。  
「イリス。お手洗いの場所はわかる？ちゃんと中庭まで一人で来れる？」

「し、失敬だな！わかるよ、それくらい！」

ハーマイオニーが心配そうに尋ねるが、イリスは慌てて言い返す。  
あの宿題事件以降、ハーマイオニーは以前にも増して過保護になり――イリスの“おはようからおやすみまで”を見つめる程の熱心さで、実に細やかに世話を焼くようになってしまったのだ。ハーマイオニーがトイレまで付いてきてしまったら、リドルとお話ができなくなる。イリスは何としてもその事態だけは避けたかった。

「食べ過ぎで腹でも壊したかい？」

からかつてきたロンをチョップで軽くいなすと、イリスは急いで三人と別れた。そのまま駆け足でグリフィンドール塔へ戻り、談話室を通つて自室へ飛び込むと、机に着いた。羽根ペンにインクを浸し、日記を開いて書き始める。息を弾ませながらペンを走らせたので、所々インクが飛び散ってしまったが、気にしない事にした。

“イリスです。リドル、起きていますか？”

“やあ、イリス。僕はずつと起きていますよ。また君と話ができて嬉しいな”

イリスの文字は光つてページに吸い込まれるようにして消え、すぐさまリドルからの返事が浮かび上がってくる。彼の安否を確認できたイリスは心底ホツとして、胸を撫で下ろした。次の授業に遅れないように懐中時計を机に置いて確認できるようにしながら、続きを書き付ける。

“今、私がどこにいますか？ホグワーツです”

“敬語を使わなくていいよ、イリス。僕と君は『友達』なんだから。君はホグワーツの学生なんだね。何年生？”

リドルの『友達』という言葉は、イリスの心の奥深くに、いとも容易くすっと落ちた。――そうだ、私と彼は『友達』なんだ。

二人の筆談は順調に続いた。イリスは自分がグリフィンドールの

二年生である事から始まり、彼に問われるままに、今現在の魔法界の状況を——自分のわかる範囲ではあるが——書き綴った。リドルは驚く程に唸かった。イリスの拙い言葉足らずの説明でも、自分が日記に封印されてからの五十年間の歴史、そして大凡の現状を把握できたようだった。

“——イリス。君の説明はとても参考になったよ、ありがとう。それにしても、『生き残った男の子』ハリー・ポッターか。彼はとても興味深いな”

話が一区切りつくと、リドルは取り分けハリーに強い関心を示したようだった。ハリーの親しい友人として彼の傍にいるイリスは、リドルのその反応は至極当然の事だと思った。ハリーは魔法界の有名人だ。漏れ鍋で初めてハリーと出会った時も、誰しもが彼と握手をしたがったし、ホグワーツでも彼は——スネイプの言葉をあえて借りるなら——新たなスター扱いだ。つまり、誰だって興味を持つ。

“当時赤ん坊だったハリー・ポッターは、どうやって『彼』を倒したの？”

「うーん……」

難しい質問だ。リドルは興奮しているのか、文字が乱れている。イリスは羽根ペンを日記の上に翳したまま、どう書いていいのか考えあぐねていた。彼というのは、『例のあの人』を指しているのだろう。リドルの期待に応えたいのは山々だが、さすがに分らない事までは答えられない。イリスは正直に書き連ねた。

“わからない。ハリーもよく覚えてないって言った。それに、『彼』の話はあんまりしたくない”

“それはどうして？”

“ハリーの両親はその時に『彼』に殺されてしまったし、私の両親も……『彼』と戦って殺されてしまったらしいから。嫌なの”

長い沈黙があった。やがて浮かび上がってきたリドルの筆跡は、か細く震えていた。

“イリス。僕はとても無神経な事を聞いてしまったね。非礼を詫びるよ。どうか許してほしい”

“ 気にしないで。それよりも、さっきの説明、ほんとにわかりづらくなかった？私、自分の文章に自信がなくなつて”

“ どうしてそう思うんだい？”

イリスはため息を零し、自分が勉強が苦手で、ホグワーツで『落ちこぼれ』として有名なのだという事を書き付けた。——不意に「薬草学」でのジャステインの言葉が思い起こされる。ハッフルパフでそうなら、知性を重んずるレイブンクローには、その真逆の存在である自分はどう思われているのか——考えるだけでゾツとした。しかし、それに対するリドルの返事は、彼女の予想を大きく裏切るものだった。

“ 君が『落ちこぼれ』だって？とんでもない！君には、秘められた深い知性と才能がある”

驚く事にリドルは、イリスの『落ちこぼれ』発言を完膚無きまでに否定してみせたのだ。そして、言葉巧みにイリスをおだて上げた。イリスは恐縮して、慌てて返事を綴る。

“ 私にはそんな知性も才能もないよ。リドルは買いかぶり過ぎだよ”

“ いや、僕にはわかるんだ。イリス、僕を信じてくれるなら、この一年間で、君を必ず首席にしてみせるよ”

「しゅ、しゅせき?!」

イリスは仰天して叫んだ。そんなのは夢物語もいいところだ。

“ 心配しないで。僕は頭は良い方だよ。当時は首席だったんだ。信じられないなら、首席名簿を見てみるといい”

“ リドル、首席だったの？すごく賢いんだね”

“ 首席になるのも、監督生になるのも、実際にはそんなに難しい事じゃない。僕がそれを教えてあげるよ、イリス。君ならきつとその両方になれる”

長年周囲に『落ちこぼれ』として笑われ、何かと目立つ存在のハリー達の後ろを雛鳥のように付いて来たイリスにとって、リドルの言葉は正に青天の霹靂だった。それは確かに、彼女自身のズタボロに傷ついた自尊心を十分ケアするに足るものだったのだ。——イリスの頭の中で、首席になり、自信に満ち溢れている自分の未来の姿が浮かんだ。

もし、本当にそうになれるのなら——。思わず夢見心地になっていた彼女が再び日記に目を移すと、新たな文章が浮かんできていた。

“ さつきから僕が質問してばかりだね。君は、何か質問や相談事はない？何でも答えるよ ”

質問や相談事と聞いて、真っ先に思い浮かんだのは、ドラコの事だった。イリスは何度も書いては消しての作業を繰り返しながら、一生懸命に書き綴った。——ドラコとの出会い、彼を好きになっていった過程、“純血主義”の事——不思議な事に、リドルには何でも話せるような気がして、ハリーたちに伏せていたパンジーやノットとの諍いの事も付け加えた——そして最後に、グリフィンドールの友人たちからはドラコと付き合うのを反対されている事、ドラコが好きだからこそ、今後自分はどうかやって彼と付き合っただけならいいのかわからない、というような事も、イリスは一心に綴った。

長い時間をかけてようやく書き終わった頃には、手が痺れていた。リドルはイリスのそんなお粗末過ぎる筆談も、時には話の内容を確認するための相槌を打ちながら辛抱強く応対し、客観的な意見を返した。

“ 難しい質問だね。君たちの考え方は確かに違う。でも、価値観の違う者同士が友情を保つのは、決してできないことじゃないんだよ。

コツは、自分の価値観を人に押し付けなくて事と・・・その人の価値観を理解しようと努力する事かな。つまりは、価値観の相互理解ってことさ。イリス。君は“純血主義”について、きちんと勉強したことがあるかい？どんな主義や思想にも、それが作られる理由がある。彼らがどういった経緯でその考えを持つに至ったか、彼らの子孫に受け継がれていくのは何故なのか、その理由を知っているかい？ ”

“ ううん・・・ ”

イリスは恥じ入る思いだった。イリスは言うなれば、周りの学生たちの“純血主義”に対する意見から、おぼろげに『こんなものだろう』と理解しているだけで、それが作られるに至った歴史までは、詳しくは知らない。リドルの意見は、まるでイリスの様子を見透かしているようだった。

“もし君が周りの意見に感化されただけで”純血主義”を頭ごなしに否定しているのなら、それはとても危険な行為だし、本当に彼を理解したとは言えないんじゃないかな。

——そこで、リドル先生から君に宿題だ。“純血主義”について調べて来ること。提出期限は、また君がこの日記を開いてくれる時までにしよう”

☆

ドラコはスリザリン寮の談話室で、イライラとした様子を隠しもせず眉根を寄せながら、深いため息を零した。

その原因は、彼のライバルであるハリー・ポッターだった。ポッターは——何とも腹立たしい事に——去年以上にイリスの傍にいて、番犬のように用心深く周囲を見渡し、ドラコがイリスに僅かでも近づく素振りを見せようとするものなら、問答無用で彼女の手を引つ張り、どこか遠くへ移動してしまうのだ。そのため、ドラコはイリスに会いたいのが為に今日一日何とか粘ってはみたものの、結局彼女と目すら合わせる事が出来なかった。

——幸い、ここには父はいない。その事實は、ドラコに再びなければの勇気を奮い起こした。彼はホグワーツ特急の時、イリスに日記の事を問い質そうとした。しかし、何をポケットに入れてあるのかという事を聞くだけで、イリスは強い拒否反応を示し、脱兎の如く逃げ出してしまった。イリスは素直な子だ。ポケットに何が入ってる？と聞かれたら、迷わずポケットの中を見せてくれる子だ。その彼女があまでして露骨に避けるという事は——恐らく、あの日記が彼女を操る“鍵”なのだ、ドラコは確信した。呪いのコインを始め、闇の魔術の道具は大抵身に付ける事でその効果を発揮する。その日記の効果は不明だが、それが彼女が起こすと言われる『事件』の元凶となるのなら、彼女の間を突いてこつそりと盗み出し、どこかへ捨ててしまおうしかない。だが、現状はその機会すらないのだ。

「ドラコ、どうしたの？そんな顔しないで」

パンジーがやって来て、隣のソファに座り、親しげに話しかける。ドラコの額の青筋が、また一つ増えた。——去年から自分に対して嫌

にまとわりついてくる、とは思っていたが、今年は特にひどい。授業中だろうが休憩中だろうがおかまいなしで、まるで金魚の糞のように傍を離れないのだ。一体何が目的なのか、彼女の目を見てドラコはすぐにピンと来た。彼女は自分の事ではない、その後ろ——つまりマルフォイ家を見ているのだと。——こいつも、他の『友達』と一緒に。誰も僕の事なんか、見やしない。純粹に友達として慕ってくれるイリスと一緒に過ごす事で、ドラコは余計に——パンジーのような——マルフォイ家目当ての他の子供たちと接するのを、嫌に思い始めていた。「いい加減にしてくれないか。僕に関わらないでくれ、迷惑だ」

冷たく突っぱねると、パンジーは瞳を悲しげに潤ませながら言った。

「やっぱり、あいつの方が良いっていうの？あゝ血の裏切り」の方が

「彼女を侮辱するな！」

ドラコが思わず声を荒げると、パンジーは驚愕に息を詰まらせる。どこから嗅ぎ付けたのか、取り澄ました様子の黒人の男の子——グレース・ザビニが、人を食ったような笑みを浮かべながらやって来た。「おお、怖い怖い。御曹司様は、本日はお調子が宜しくないらしい。いや、いつも宜しくないか。あのマグル鼻根のグリフィンドールと付き合ってるんだものな。・・・おっと、彼女は『はるか昔に失われた高貴な血統』だったね、失敬。——行こうぜ、パンジー」

その目と言葉は、明らかにドラコに対する蔑みを含んでいた。スリザリン生とグリフィンドール生の友情は、イリスだけでなく、ドラコの交友関係にまで暗い影を落としていた。ドラコにとって、マルフォイ家は彼自身の自尊心に直結するものであり、彼の全てだった。——その完全無欠の家名が今、自分のたった一人の友達のために、傷つけられ、崩されようとしている。つまるところ、彼は、いくらマルフォイ家のお気に入りと言えども——“血の裏切り”のイリスと付き合いを一年間続けていた事で、周囲のスリザリン生から“反感を買ってしまった”のだ。元々幼い頃から、両親を始め周囲の人々にちやほよとされながら育ったドラコは、貴族の名を冠するに相応しい程

プライドは高いものの、精神的な強さに欠けている。そんな彼にとつて、この事実は耐え難いものだった。ドラコの生まれ持った鋼のようなプライドに、蜘蛛の巣のような亀裂が入る。

パンジーは名残惜しげにドラコを見たが、ザビニに手を引かれて、どこかへ行つてしまった。

「そんなに彼女が好きなら、あの二人に捕獲させて、無理矢理”純血主義”に染めてしまえよ」

「・・・なんだと？」

ドラコが振り向くと、何時の間にか、ノットが隣に立っていた。『あの二人』と彼が顎で指した先には、暖炉の脇で一心不乱に何かを貪り食うクラブとゴイルの姿があつた。

「どうして君が、彼女をいまだに好き放題にさせているのか、理解に苦しむね。いずれこうなるのは、利口な君なら分かつていた筈だろう」

所詮、スリザリン生とグリフィンドル生の友情は成立しないのだと、ノットは遠回しに主張したいのだと察し、ドラコは忌々しげに唇を噛んだ。——わかつてはいる、そんな事は。だから、こんなに苦労しているんじゃないか。その様子をノットは口元をきゅつと上げて微笑んで見やりながら、こう言い放つた。

「彼女が君だけを愛するよう、君の愛玩人形になるよう、魔法をかけてもらつたらどうだい？君の父上は、そういうの得意だろう？」

「——黙れ!!」

ドラコは息を荒げて立ち上がり、感情に任せてノットの胸倉を掴んだ。対するノットは、表情を崩さず、微動だにしない。その落ち着き払つた様子さえ、ドラコには憎らしくてたまらなかつた。——何様なんだ、こいつは。いくらこいつの父親が僕のパパと親密だからって、容赦はしないぞ。

しかし、ノットの言葉は、ドラコに”あの時の光景”を甦らせ、彼の服を掴む手を鈍らせた。——違う。僕は父上とは違う。彼女を傷つけたりなんかしない。ドラコはイリスとまた他愛のない話をして、たまらなくなつた。あの青い宝石のような瞳で、真つ直ぐに自分を見てほしい。

彼はノットを突き放すと、ふらふらと覚束ない足取りで自室へ戻り、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。父親の日記の事を早急に何とかしなければならぬというのに、肝心のイリスには、憎きライバルのポッターが邪魔立てして会う事が出来ず、おまけに今の自分のスリザリンの地位はお世辞にも良いとは言えない——わずか一日の間にさまざまな出来事が重なった結果、ドラコの心は、今にも爆発しそうな位不安定になっていた。

——どうして、彼女はグリフィンボールになんか入ったんだ。スリザリンに入れば、こんな事には。大嫌いなポッターにも指一本触らせなかった。僕が全て、一から教えてあげられていれば、彼女はあんな——マグル鼻屑にはならなかった。彼女が“血の裏切り”と蔑まれる事も、僕のスリザリンでの地位も——。ドラコは溢れて来る失意の涙を抑える事が出来なかった。イリス、僕はこんなに君を助けるために頑張っているのに、どうして——よりによって、ポッターの影になんか隠れているんだ。

やがて涙が乾ききった頃、ドラコは浮かない表情でベッドから起き上がり、ふと自分の机を見て、目を見開いた。——手紙がある。ベッドを起き出して手に取り見ると、それは父からのものだった。恐る恐る開けると、そこには驚くべき事が書かれていた。

何と——『最新の箒ニンバス2001を、スリザリンのクイディッチのチーム人数分、スネイプ教授宛に送った事と、ドラコをシーカーに推薦した事』が、息子の様子を心配する内容と共に書かれていたのだ。——父は自分を心配してくれているのだ。きつとダイアゴン横丁の時、箒が欲しいと強請った事を覚えてくれていたのだ。ドラコは父の事を——あんな事はあったが——やはり、愛しているし尊敬していた。

父からの愛情の籠もった手紙を握り締めながら、彼は思った。——これはチャンスだ。初めての練習の時、早目に集合するようにキャプテンのプリントと交渉して、イリスを呼び出そう。ポッターなんかよ、魔法界で生まれ育った自分の方が、きつとずっと上手くプレーできる自信がある。きつとイリスだっで見直してくれる筈だ。その時、



二人きりになれる時間と場所を作って、日記の事をどうにかしよう。——そして、パパに話すんだ。ドラコは自分に言い聞かせるように、何度も心の中で呟いた。パパは僕を愛している。言いつけを破ってもきつと許してくれる筈だ、と。

☆ ドラコは机に座り直すと、イリスに向けて手紙を書き始めた。

☆ 夜七時、イリスとロンは連れ立って、グリフィンドールの談話室の一角へやって来た。今日は、新学期が始まって第一回目の『蛙チョコレート交換会』だ。交換会は、寮毎に行われたり、大規模なものでは四つの寮合同で大広間を借りて行われたりと様々だが、今回はグリフィンドール寮生だけの小規模なものだ。とりわけグリフィンドール内では、約五百枚のカードを収集しているロンは英雄扱いだった。交換会の次期会長候補との噂もある。ロンを見つけるや否や、カードを持った寮生たちが駆け寄る中、ネビルが嬉しそうに頬を綻ばせながら、イリスに歩み寄って来た。

「やあ。見てよ、僕、ついに四つの寮の創始者を揃えちゃった！」  
「わあ、すごいじゃん！意外と揃わないのに。いいなー」

ネビルが得意満面で、五角形のカードを四枚テーブルに並べたのを見て、イリスははしゃいだ。——イリスはまだ、サラザール・スリザリン以外の三人のカードを持っていないのだ。スリザリンだけは引きが良く、何故か十枚程持っている。ストックがやたらあるロンに交換してあげるよと提案されたが、カード集めに嵌まるにつれ、やはり多少苦労しても自分の手のみで集めたいという気持ちが先行し、イリスはしばらくは援助なしで頑張る事に決めた。しかし、ネビルの自慢話を聞いて、イリスも黙ってはいられなかった。負けじとポケットを探る。

「私も、見て。レゴラスとギムリ、ついに揃えちゃった！」

イリスはカードを二枚取り出し、ネビルに見せた。容姿端麗で耳の少し尖った弓手とずんぐりむっくりした重戦士は、カード越しに互いに目を見合わせると、照れ臭そうにそっぽを向いた。ネビルは興奮して叫んだ。

「ワオ、マーリンの髭！僕、まだレゴラスがないんだ。おめでとう！」  
「ありがとう。やっぱり、この二人は並べて飾っておきたいよねー」  
「そういうの、あるよねー。トーリンとビルボとかさ」

いかに歴史上で、果ては神話上で、名を馳せた偉人たちであるといえども、子供たちの前では一枚のカードの人物に過ぎない。二人がほのぼのとした調子でカード談義に花を咲かせていると、交渉を無事済ませたロンがやって来たので、三人は菓子を摘みみながら（時に蛙チョコも開封しながら）、今度は世間話に花を咲かせ直した。

——宿題だ、イリス。“純血主義”について——

イリスはふと、リドルの言葉を思い出した。開封した途端、逃げ出そうとする蛙チョコをパクンと口の中に投げ込みながら、目の前のロンとネビルを見て考える。——そうだ、二人は純血の魔法使いだ。イリスはどうしても、意味を尋ねたい言葉があった。ホグワーツ特急で、パンジーに投げかけられた言葉だ。彼女は、口の中の蛙チョコを咀嚼し切ってから、意を決して二人に話しかけた。

「ねえ、“穢れた血”って何？」

——やはりそれは、いけない言葉だったらしい。その証拠にロンはショックの余り、イリスを茫然と見つめたまま口をあぐりりと開き、両手に溢れる程持っていたカードをばらばらと取り落した。

「君、あいつにそこまで毒されちゃったのか！」

「違うよー！ドラコが言ったんじゃないっつら！」

ネビルに至っては、恐れおののきながら「マーリンの髭！」と取り憑かれたように繰り返す始末だ。イリスは慌てて首を横に振って否定しつつ、二人に列車で起こった出来事を話して聞かせた。ロンは本日五個目の蛙チョコをペロリと平らげながら、不快そうに眉をしかめてこう言った。

「“穢れた血”っていうのは、マグルから生まれたっていう意味の——つまり両親とも魔法使いじゃない者を指す最低の汚らわしい呼び方なんだ。魔法使いの中には、例えばパーキンソンやマルフォイの一族みたいに、みんなが“純血”って呼ぶものだから、自分たちが誰よりも偉いつて思ってる連中がいるんだ。」

もちろん、そういう連中以外は、そんなこと全く関係ないって知ってるよ。ハーマイオニーのことをそんな風に罵るだなんて、ムカつくな、そいつ。あのパグ犬め！」

「まさかとは思うけど……このこと、ハーマイオニーに言っていないよね?。」

「言っていない言っていない!!」

ネビルに眉をひそめながら聞かれ、イリスは断固否定しながら、やっぱり三人に話した時、この事を伏せていたのは正解だったと心から思った。

「穢れた血」だなんて!ほんと、狂ってるよ。どうせ今時、魔法使いはほとんど混血なんだぜ。もしマグルと結婚してなかったら、僕ら今頃絶滅しちゃってるよ」

ロンはまだ腹に据えかねているのか、イライラとした口調で言い放ちながら、イリスを心配そうな目で見据えた。

「なあ、イリス、まじで君、マルフォイと付き合うのを止めた方が良いぜ」

「ドラコはそんなこと言わないよ」

イリスはドラコを庇うが、ロンは呆れ顔で彼女を見つめる。

「おいおい、あいつの父親が僕のパパのことを何て呼んだか、もう忘れちまったのかい?それに今日——君のいない間——中庭であいつ、コリンに絡まれたハリーに何て言いやがったと思う?」

——僕らグリフィンドール生はみんな、君がいまだにあいつと友達でいることを疑問に思ってるぜ」

ネビルも気づかわしげにイリスを見ている。イリスは彼女自身が思っている以上に、難しい立場にあった。

——これだけは確実に言える。マグル社会に愛着を示す魔法使いは、知性が低く、魔法力が衰れな程弱いがために、マグルの豚どもに囲まれている時しか優越感を感じる事ができないのだ。

非魔法族と交わることを願うという弱みこそ、魔法力の弱さを示す最も確実な証だ。

(十七世紀 ブルータス・マルフォイ著『戦う魔法戦士』より抜粋)

記念すべき第一回目の魔法薬学の補習授業を何とかこなした次の日。早目に夕食を終えた後、イリスは“純血主義”について調べるために三人と別れ、一人図書館へ向かった。

そして現在、恐ろしく年代物の反マグル雑誌『戦う魔法戦士』を読み、頭を抱えているのである。著者の姓が“マルフォイ”だったので、興味を惹かれて読んでみたのが運のツキだった。

今の時点で、とりあえずイリスが理解できている事といえば——“純血主義”とは、ただ『純血以外の者を蔑む』というだけではなく『マグル生まれの魔法使いや彼らを擁護する魔法使いを排除し、純血の魔法族が魔法界を支配すべきである』と考える危険な思想だという事と——取り分けマルフォイ一族は、先祖代々その思想に染まり切っている、という事位だった。

「おばさんの言う通りだ」

ドラコのご先祖様が書き上げた雑誌をそつと閉じ、イリスは唇を噛み締めた。『人間は自分と違う存在を排除しようとする生き物』なのだ。だから、マグルは魔法族を恐れて魔女狩りを執行し、魔法族はマグルを憎悪し“純血主義”を掲げるようになった。勿論全てのマグルや魔法族が、そういう互いを排除しようとするような“危険な考え”を持っている訳ではない。——しかし、イリスが思っている以上に、“純血主義”の歴史の根は深く、数日足らずで理解しようとするには、余りにも難解だった。

「やあ。ずいぶん頑張ってるんだね」

ふと頭上から明るい友人の声が出て、イリスは顔を上げた。——ハリーだ。彼自身のバイブルである『クイディッチ今昔』を抱え、イリスの向かいの席に座る。彼の真向いには、イリスが一生懸命掻き集めた“純血主義”関係の本があった。イリスがハツとなつて本を隠そうとするよりも、ハリーがその様子を怪訝に思い、イリスの本を自らの手元に引き寄せる方が圧倒的に早かった。そして、そのどれもが“純血主義”に関するものだとなると、彼の表情は見るからに不機嫌になった。

「どうしてこんな事を調べてるの？」

「えっと、その……」

ハリーに真正面から射竦められ、イリスは居心地悪そうに身じろぎしながら、今にも消え入りそうな声で言った。

「だって……」純血主義”の事を知りたかったから」

「あいつがそうだから？あいつとはもう付き合うなつて言っただらう」

ハリーは思わず声を荒げた。静粛を破られた事によるマダム・ピンズの抗議の声を物ともせず、彼は一方的にイリスの本を全て取り上げ、肩を怒らせながら返却棚へ返しに行つてしまった。その様子をこわごわ見送り、イリスは浮かぬ表情のため息を零した。

☆

ハリーは返却棚に荒々しく本を投げ入れた。その事でまたマダム・ピンズに叱られたつて、構うもんか！と思う位、彼の心は怒りの感情で満たされていたのだ。恵まれない家庭で、愛情を余り受けられずに育つたハリーにとつて、自分を兄のように慕い、不思議な事に何も言わなくても通じ合えるような——言うなれば、本当の兄妹のように——気の合うイリスの存在は、大きすぎた。そんな大切な友人が、卑怯な手を使ってマルフォイ家に誘拐されたらしいとロンから聞いた時は、本当に心配でたまらなかつた。しかも、マルフォイの父親は彼女を“純血主義”に教育しようとするような危険人物だ。それなのに——彼女はいまだにマルフォイと繋がりを持たず、彼を友達だと思ひ、ご丁寧な“純血主義”の本まで読んで彼を理解しようとしてい

る。それがハリーには、許せなかった。

彼には『会う度に人を傷つけるような事しか言わない』嫌われ者のマルフォイと一緒にいようとすゝるイリスの心情なんて、これっぽっちも理解する事ができなかった。だからハリーは、何度忠告しても聞かん坊のイリスをマルフォイの魔の手から守る為に、実力行使を取る事にした。彼女の傍で常に目を光らせ、マルフォイが彼女に近づこうとする度に、彼女の手を引いて避難し続けたのだ。——幸い、彼は現役シーカーだった。視野を全体に行き渡らせ、その中でマルフォイの姿を見つける事など、試合中にスニッチを見つけるよりも容易い事だったのだ。

☆

イリスはハリーに、半強制的にグリフィンボール塔へ連行された。談話室でチョコチップクッキーを摘みながら、ハーマイオニーとロンのチェスを消灯時間ギリギリまでハリーと観戦し、消灯と共にハーマイオニーと自室へ戻った。イリスがローブのポケットから日記を取り出そうとした時、ポケットからひらりと何かが舞い落ちてベッドの上に落ちた。——それは、二つに折りたたまれた羊皮紙片だった。イリスが広げて見ると、それにはこう記してあった。

『イリスへ

君に見せたいものがある。

明日の朝五時半に、クイディッチ競技場へ来てくれ。

返信はいらない。ドラコより』

イリスは急いで日記に挟んだハーマイオニー作のスケジュール表を取り出し、確認した。彼女のスケジュールによると、朝食の七時までは『就寝』となっている。つまり、ドラコとの約束は果たせるという事だ。——マグル界において、『ロミオとジュリエット効果』という心理現象がある。恋とは、周りから反対されればされる程、障害があればある程、逆に燃え上るものなのである。

「日記は明日書くね、リドル」

イリスは日記をいつものように抱きしめながら、ベッドに入って眠りに落ちた。

☆

明朝五時半前、イリスはクイティツチ競技場のスタンドにたどり着いた。冷たい朝の空気が顔を打ち、グラウンドの芝生にはまだ薄らと霧が残っている。彼女は実に幸運な事に、談話室でもホグワーツ内においてても、誰とも（ゴースト以外とは）すれ違わなかった。

「イリス」

『見せたいもの』って何だろう。イリスがぼんやりと考えていると、不意に後ろから声を掛けられる。イリスは振り返り——息を飲んだ。そこにはドラコが立っていた。彼は、鮮やかな緑色のスリザリン・チームのユニフォームに身を包み、真新しい箒を片手に抱えている。ピカピカに磨き上げられた柄には、『ニンバス2001』と美しい金文字が銘打たれていた。去年までは、彼はクイティツチの選手ではなかった筈だ。

「え?..え?..も、もしかして...?!」

「そうさ。僕はシーカーになったんだ!..どうだい?」

ドラコは歌うように答えると、得意げに胸を張った。——という事はつまり、とうとう彼の念願が叶ったのだ。イリスは興奮の余り、頬をバラ色に染めて、友人の晴れ姿をまじまじと見つめた。眼下に見えるグラウンドでは、同じ色のユニフォームを身に纏ったスリザリンの選手たちが、霧を掻き分けながら朝練を始めようとしている。

「なんていうかその、すつごくカッコいい」

イリスは夢見る瞳でドラコを見つめた。一方のドラコは数日振りにイリスに会えて、昨日までの鬱々とした気持ちだが、跡形もなく吹き飛んでいくのを感じていた。体は羽根のように軽くなり、その心は自信に満ち溢れていく。きっと、この後の初めての練習も、日記の事も、上手く行くに違いない——彼はそう確信した。実際、父親が与えてくれた箒のおかげで、スリザリン生達の中の自分の地位もしっかりと回復したのだ。この勢いで、彼女だって必ず守って見せる。ドラコは一人、息巻いた。彼は気取った調子でイリスに言った。

「君に一番最初に、僕のこの姿を見てほしかった」

「プリント!!」

不意にグラウンド内に凄まじい怒声が響き渡った。イリスが『一番最初つて事は、パンジーよりも先なんだ』と喜んでいる余裕もなかった。二人が何事かと思つて眼下を見ると——何故か、真つ赤なユニフォームを着たグリフィンドール・チームのキャプテン、オリバー・ウッドが、ミーティング真つ最中のスリザリン・チームのキャプテン、マーカス・フリントに食つて掛かつている所だった。しかもそれだけではない——ウッドに続いて、続々と他のグリフィンドール・チームの選手たちも、彼の元へ駆け寄つていく。——どうやら、“ダブルブッキング”をしてしまったらしい。

「ここは僕が予約したんだぞ！」  
「ウッド。それはこつちのセリフだ。君にはその証拠があるのか？こつちには、スネイプ先生が直々にサインしてくれたメモがあるんだぜ」

ウッドが怒りで唾を撒き散らしながらフリントに抗議するが、フリントは人を食つたような笑みを浮かべながら、メモをこれ見よがしに見せつける。——そこには、確かにスネイプの字で『私、スネイプ教授は、本日クイディッチ競技場にて、新人シーカーを教育する必要があるため、スリザリン・チームが練習することを許可する』と明記してあつた。

☆

この両チームの選手たちの中で、今誰よりも一番怒り狂っている人物がいるとすれば——それはウッドではなく、ドラコだと言えるだろう。彼は、せつかくのイリスとの逢瀬を邪魔された事に、計り知れぬ程の激しい怒りを感じていた。彼が苦心して作り上げた機会が、宿敵のチームのせいでぶち壊されたのだ。そんな彼の神経をさらに逆撫でするかのように、最後にハリーもやって来て——グラウンドからスタンドへと注意深く視線を巡らせ、茫然と突つ立っているイリスとドラコを見つめるや否や、遠目でも分かる位にドラコを憎々しげに睨み付けた。

——ドラコはもう我慢ならなかつた。いつもイリスとの仲を邪魔立てする憎きポッターに、今すぐ耐え難い屈辱と苦痛を味わわせなけ



れば、彼の気が治まらなかった。

「君はそこから動くな！」

荒々しくイリスに言いつけると、ドラコは踵を返し、スタンドから降りて一直線にグラウンドへ向かった。

☆

「新人シーカーだつて？どこに？」

ウッドが視線を彷徨わせながら尋ねると、スリザリン・チームの選手たちの後ろから、ドラコが姿を現した。冷たい色をした瞳に、ギラギラとした怒りと侮蔑の色を湛えて。

「ルシウス・マルフォイの子供じゃないか」

根っからの“マルフォイ家嫌い”のフレッドが嫌悪感を露わにすると、スリザリンの選手たちが顔を見合わせ、ほくそ笑む。一方のイリスは不穏な気配を察して、ドラコの命令を無視し、グラウンドへ降り立った。そこへ、後ろの方で心配そうに両チームの成り行きを見守っていたロンとハーマイオニーが小走りでやってくる。

「もう、朝からどこに行ったかと心配していたのよ！」

「あーあ、イリス。あいつと一緒にいたなんて、ハリー・パ・パは相当お冠だぜ。これが終わったら君、とうとうハリーに『リード付の首輪』でも付けられるんじゃないか？」

ロンはイリスに向けて呆れたように言い放ち、彼女の分のマーマレード・トーストを渡した。イリスは受け取った方がいいものの、食べる気には到底なれなかった。彼女がどう言ったらドラコとの仲をハリー・パ・パに許してもらえるのか、トーストを握り締めながら必死に考えている間にも、両チームの言い争いは激化していく。

「そうだ。そのルシウス・マルフォイ氏が僕ら全員に、これを下さったのさ」

フリントの言葉を合図としたかのように、スリザリンの選手全員が揃って自分の箒を突き出した。みんなドラコと同じ最新の箒——『ニンバス2001』だ。朝日を受け、小枝の一本一本に至るまでキラキラと飴色の輝きを放つ、その美しさに息を飲むグリフィンドールの選手たちを鼻で笑いながら、フリントは意地悪く言い放った。

『ニンバス2001』だ。最新も最新さ。旧型2000シリーズに対して相当水をあけるはずだし、旧型のクリーンスイープに関しては――ハハツ、2001がクリーンに圧勝だな」

フrintトはクリーンスイープ5号を握り締めているフレッドとジョージをせせら笑った。――「ざまあみろ、血の裏切り」どもめ！ドラコは実に胸のすく思いだった。汚いものでも見るかのように彼らの持つ箒を一瞥しながらニヤツと笑うドラコを、ハリーが親の敵でも見るような目で睥睨する。

☆

「イリス、僕らも行こうぜ。ここからじゃ、話がよく聞こえない」

イリスはロンに促され、ハーマイオニーと共に芝生を横切つて両チームに近づいた。やがてロンは訝しげに眉根をしかめ、険しい表情のハリーに話しかける。

「どうしたんだい？それにあいつ、何でユニフォームなんか着てるんだ？」

「実に良い質問だ、ウィーズリー。特別に答えてやろう。――それは、僕が、スリザリンの新しいシーカーだからだ」

強い優越感に打ち震えながら、ドラコはロンに悠然と言い放った。スリザリンの選手たちが持つ七本の最新の箒を見て、驚愕に口をパカツと開けたロンを見ながら、ドラコはさらに言葉を続ける。

「僕の父上が、みんなに買ってあげた箒を賞賛していたところさ。いいだろう？」

グリフィンドールのチームも、資金集めでもして新しい箒を買えばどうだい？こいつらが持つてるクリーンスイープ5号を慈善事業の競売にかければ、博物館が買いを入れるだろうよ」

スリザリン・チームは全員大爆笑だ。ドラコ自身も愉快でたまらなかつた。忌まわしいウィーズリー家の兄弟やポッターを、彼らの力では到底及ばないマルフォイ家の圧倒的な財力で貶めてやったのだ。

――群衆の上に立つ事に慣れている者は、その心地よさ故に、時にそれに溺れ、本当に大切なものを見失ってしまう事がある。再びスリザリン生たちの憧れの的に返り咲いたドラコは、仮初の幸福に酔いし

れ、——イリスが、人が変わったように尊大になった彼自身を、シヨックを受けたような表情で見ている事にも気が付かなかつた。

しかし、勇敢にもハーマイオニーは、一步前に進み出て、彼の暴走に異を唱えた。

「少なくとも、グリフィンドールの選手は誰一人としてお金で選ばれたりしていないわ。こっちは純粹に才能で選手になったのよ」

ハーマイオニーは、毅然とした態度できつぱりと言い放つ。痛いところを突かれたドラコの自慢顔が、明らかに歪んだ。そして彼はカツとなり——ついに、“言つてはいけないこと”を言つてしまった。

「誰もお前の意見なんか求めてない。生まれ損ないの“穢れた血”め」

ドラコが吐き捨てるようにそう言い返した途端、グリフィンドールの選手たちから、嵐のように非難の聲が巻き上がった。

その言葉はまるで氷で出来た魔法の矢のようにイリスの心臓に突き刺さり、彼女の心をみるみるうちに冷たく凍らせた。——イリスは、凍り付いたようにその場を動けなくなつてしまった。“穢れた血”——ロンが言つていた——『最低の汚らわしい呼び方なんだ』つて。そんな言葉を、彼はいと容易く——まるで常日頃から言い慣れているみたいに——口にしてみせた。——ノットの言葉は、本当だったんだ。

マグル界育ちのハリーと当のハーマイオニーが、ポカンとした表情を浮かべて成り行きを見守る中、フレッドとジョージは怒りに任せてドラコに飛びかかろうとしたし、それを食い止めるために、フリントが急いでドラコの前に立ちはだかつた。アリシアは「よくもそんなことを！」と金切声を上げた。そしてロンは「マルフォイ、思い知れ！」と叫び、フリントの脇の下から、報復に怯えるマルフォイの顔に向かつて杖を突きつけた。

その瞬間、バーン！という耳をつんぎくような大音量が競技場中にこだました。緑の閃光が、ロンの杖の根元から飛び出し、彼の胃の辺りに当たつた。——杖が壊れていたせいで、魔法が逆噴射したのだ。思わぬ攻撃を喰らつたロンはよろめいて、芝生の上に尻餅をついた。

その尋常ではない様子に、イリスとハーマイオニーがトーストを放り出して、慌てて彼の傍に駆け寄る。

「ロン、ロン！大丈夫?!」

ハーマイオニーが心配そうに叫ぶ。ロンはわなわなと震える唇を開いたが、声が出てこない。代わりに、彼の口からとてつもなく大きなゲップが一発と——何故か、大きなナメクジが数匹、ボタバタと彼の膝に零れ落ちた。——ロンがナメクジを吐いた！イリスは『人がナメクジを吐く』という、今までの人生で見た事のない摩訶不思議な現象に、たまらずパニックに陥った。

「ど、ど、ど、どうしよう！ロンが、ナメクジで、ロンが死んじゃう！」  
「落ち着いて、イリス！ロンは死なないわ。呪いが逆噴射しただけよ」

ハーマイオニーが必死にイリスを宥めている頃、スリザリン・チームはロンのナメクジ祭りを見て笑い転げていた。——フロントは新品の箒にすがって腹をよじって笑い、ドラコは四つん這いになり、拳で地面を叩きながら笑っていた。この人たちは一体、何が面白いんだろう。ロンがこんなに苦しんでいるっていうのに。イリスはロンの背中を摩りながら、ドラコを——まるで別の世界に住んでいる人であるかのように——遠い目で見つめた。

「ハグリッドのところへ連れていこう、一番近いし」

ハリーの言葉は、イリスの意識を再びロンへと引き戻した。後はウッドたちに任せよう。三人は力を合わせてロンを助け起こすと、ハグリッドの小屋へ向かって、彼を口々に励ましながら歩き出した。

☆

四人はやつとの思いで小屋へ辿り着いた。ハリーが代表して小屋の扉を叩くと、ハグリッドが——今までに見た事の無い位——不機嫌な顔をして出てきた。しかし彼は、客がハリーたちだと知った途端に、いつもの朗らかな笑顔に戻る。

「いつ来るんか、いつ来るんかと待ってっただぞ。さあ、入った入った！  
実はロックハート先生がまーた来たかと思ったんでな」

どうやらロックハート先生は、大体のホグワーツの先生方とそりが合わないようだった。ハリーはガチガチと震えるロンを椅子に座ら

せ、イリスはちようど扉の近くに転がっていた空のバケツを拾うと、ロンの前に置いた。ハーマイオニーはロンを一生懸命励ましながら、背中を優しく撫でてゐる。ハグリッドはロンのナメクジ問題に全く動じず、豪快に笑つて見せた。

「出てこんよりは、出した方がええ。ロン、みんな吐いっちゃまえ」とハグリッド。

「ハグリッドの言う通りよ。吐き尽くして、止まるのを待つしか手はないと思うわ。あの呪いつて、ただでさえ難しいのよ。まして杖が折れてたら・・・」とハーマイオニー。

ロンは頷いて、大人しく「吐く事」に専念し始めた。——二人の言う通り、彼が吐く度にナメクジは小さくなり、一度に吐き出されるナメクジの量や、吐く頻度も減少していった。ようやく人心地ついたハリーとハグリッドは、ロックハート先生被害者の会を開き始めた。ハーマイオニーは変わらずロンの背中を撫で続けている。不意に目の前のバケツがガンガンと叩かれ（弾みでナメクジが何匹かイリスの膝に落ちて来た）、ぼけつとしていたイリスは慌ててロンへ視線を向けた。どうやら彼がイリスの注意を引くためにバケツを蹴つたようだ。ロンは青白い顔に脂汗を滴らせつつ、イリスを心配そうに見ていた。

「君——オエップ——大丈夫、かい？——か、顔が——ウップ。真つ青だぜ」

そう言うなり、再びナメクジの波がやって来たのか、バケツの中に顔を突っ込んだロンを見て、イリスはいたたまれない気持ちになった。まるで自分が、ロンにナメクジを吐く呪いをかけたような、最低で最悪の気分になってしまったのだ。

☆

ロンが自分がナメクジを吐くに至るまでの経緯を説明すると、ハグリッドは思わず椅子を蹴倒して仁王立ちしながら大憤慨した。

「穢れた血」だど？マルフォイのせがれめ、そんなこと本当に言うたのか！」とハグリッド。

「言つたわよ。でも、どういう意味だか私は知らないわ」とハーマイオ

ニー。

「僕もだ。でも、ものすごくひどい悪口なんだと思う。だって、みんなカンカンだったもの」とハリー。

ロンは、大分小さめなサイズになったナメクジを吐きつつ、“穢れた血”という言葉がどういう意味なのかという事を二人に教えた。イリスは黙りこくったまま、《撫でてくれよ》と擦り寄って来たファングの頭を撫でながら、ハーマイオニーをおずおずと見上げた。聡明な彼女は、今まで自分の知らなかった言葉とは言え——罵られたという事実には、いつも気丈なその表情には、隠す事のできない陰りが差していた。

「ほんとに、ムカつくぜ。気にする事ないよ、ハーマイオニー。——オエツ」とロンが、ナメクジを一匹吐き出しながら言う。

「穢れているのは、あいつの方だよ。今度試合でカチ会ったら、コテンパンにしてやる」とハリーが息巻く。

「ハーマイオニー、おいで」

ハグリッドは、涙ぐむハーマイオニーを招き寄せた。

「お前さんは、ホグワーツきつての素晴らしい秀才だ。なーんも恥じることなんかねえ！お前さんは俺たちの自慢の魔女だ。その証拠に、お前さんが今まで使えない呪文は、ひとつとしてなかったぞ、え？」

ハグリッドは彼女の手を取り優しく撫でると、彼女の傷ついた心を和らげるために、陽だまりのような暖かな笑顔を浮かべた。ハーマイオニーはポロリと一粒涙を流し、誇らしげに微笑んだ。——イリスはその光景を見て、何も言えなかった。

☆

夕食を終えた後、イリスは一人でグリフィンボール塔へ向かって歩いていた。ハーマイオニーは一足先に夕食を終え、談話室で自習をしている筈だ。ハリーとロンは、例の空飛ぶ車の件の罰則のために、帰路の途中で別れた。イリスが「太った貴婦人」の肖像画の前まで来ると、思いもよらない人物がいて、彼女の思考と歩みは一旦停止した。——何とその人物とは、スリザリン生である筈のドラコ・マルフォイだったのだ。

「イリス。話があるんだ。今朝は邪魔が入って、きちんと話せなかつただろう?」

ドラコは真剣な表情でそう言うと、イリスに歩み寄り、その手を取ろうとした。しかし、イリスは一步引いて、彼から距離を取った。

「何の話? 私の友達を心ない言葉で傷つけたことよりも、大切な話なの?」

ドラコは、今朝はあんなに仲睦まじく話していたのに、何故今、イリスがこんなに素っ気なくなっているのか、理解出来なかった。一刻も早く日記の件を解決するために、彼女とどこか二人きりになれる場所に行かないと——こんな場所に長居していたら、今にまたポッターたちがどこからかやって来て、今朝の様に邪魔立てされるか分からない。ドラコはイライラとした口調を隠しもせず、イリスに言い放つ。「あんなの、何でもないだろう。ただの表現の一種で、冗談みたいなものさ。君が気を悪くしたなら、謝るけど」

「私に謝るんじゃない!! ハーミーに謝ってよ!!」

イリスは声を荒げた。——あんなの、何でもない。冗談みたいなもの——そんな事はない。その発言で確かに、ハーマイオニーは深く傷ついたのだ。イリスとドラコの間には、容易に超える事の出来ない“大きな壁”が立ちはだかっていた。その壁があるせいで、二人は同じものを見ているのに、全く異なる考え方をしてしまう。イリスはその壁を壊したかった。それさえ壊してしまえば、きつと、ドラコだって反省してくれる。ハリーたちとも分かり合える筈なんだ。

「どうして僕があんな——マグル生まれなんかに、謝らなきゃならない?」

ドラコが咎めるようにイリスに問いかける。彼も“同じ”なんだ——パンジーやノットと。イリスはその残酷な事実を辛うじて飲み込み、今にも粉々に砕け散りそうな自分の心を何とか持たせると、勇気をもってドラコを見上げた。

「私、“純血主義”について勉強したんだよ。ドラコの事を、もっと理解したくって。その時にね、分かった事があるんだ。」

一説によると、魔法使いや魔法の始まりは、魔法の血を持つ人間が、

突然生まれた事なんだって。古くから続いている“純血”の魔法族の中にも、家系図をよく調べればマグルの人はいるし、マグル生まれの人の中にも、家系図をよく調べれば魔法族の人がいるんだって。私、それを読んだ時に思ったの。“純血主義”みたいに——マグルや魔法族を区別したり、排除したりする必要なんてないよ。みんな一緒なんだよ。私もドラコもハーミーも……」

「僕をあんな“穢れた血”と一緒にするな！」

思わずドラコはゾツとして叫んだ。イリスの発言は、彼の心から信じている生き方を根底から否定し、侮辱するものに他ならなかったからだ。イリスは悲しみに打ちひしがれた目で、じつとドラコを見つめ、自嘲気味に笑った。

「じゃあ、ドラコからすれば、私もロンと同じ“血の裏切り”だね」

「君は違う！」 血の裏切り”なんかじゃない。特別な……！」

ドラコは激しくかぶりを振り、イリスの肩を掴んで訴える。子供特有の熱く迸るような想いを上手に伝えるには、ドラコはまだ若すぎたし、それを理解するにはイリスも幼すぎた。

「二緒だよ。私だけ、何が特別な？ 私とロンと、何が違うの？」

☆

ドラコが絶句していると、突然、後ろから何者かに襟首を掴まれ、彼は力任せに床へと引き倒された。

「イリスから離れろ！」

その正体は、怒りに震えるハリーだった。ロックハート先生の大量のファンレターの返事を書くために、愛用の羽根ペンを取りに談話室へ戻ろうとしたハリーは、偶然ドラコに掴み掛られている（ように見える）イリスを見つけ、矢も楯もたまらず彼に組み付いたのだった。マウントを取って今にも殴りかかろうとするハリーを、イリスが無我夢中でドラコの前に立って、ハリーを両手で押し戻そうとする事で懸命に庇おうとした。

「やめて！ドラコに乱暴しないで！」

「——君は、本当に気でも狂ったのか!!」

ハリーの怒りの矛先は、今度はイリスに向けられた。



「こいつの父親は、君を卑怯な手を使って陥れたんだぞ！こいつも父親とグルだ！今朝だつて今だつて、君を言葉巧みにおびき寄せて——どんな怪しげな事をする気か、わかったもんじやないっていうのに！」

普段は思慮深く優しいハリーの余りの剣幕に、イリスは恐怖でぶるぶると震えた。その震えが、直にドラコにも彼女の服越しに伝わってくる。

イリスの頭の中は、色んな人々の言葉や自分の揺れ動く感情が錯綜し、もう爆発寸前だった。しかしイリスはそれでも、梃子でもドラコを守るために、その場から動こうとしなかった。彼女は生理的に溢れて来る涙を懸命にこらえて、ドラコを伺うように見た。——その目には、もはや隠し切れない、彼に対する疑念や同情の感情が含まれていた。

一方のドラコは、彼女のその目にプライドをズタズタに傷つけられた。——やめろ、僕にそんな目を向けるな！僕がどんな思いで、スリザリン生の目を掻い潜り、父との言いつけを破るリスクを度外視してまで、君を助けようとしているか、知りもしない癖に——君は、この僕よりも、ポッターの言う事を信じるっていうのか！ギリギリの心境で踏ん張っているのは、イリスだけでなく彼だつて同じ事だった。ライバルに掴み掛られ、好きな女の子に庇われ、おまけに哀れみの目で見られた事で、ドラコの心の中でみじめな思いが一気に膨れ上がっていく。そして自尊心をも著しく傷つけられた彼は、ひどく感情が高ぶってしまい——結果、再び間違いを犯す事となってしまうた。

「僕に触るな、汚らわしい。」血の裏切り”め」

ドラコは冷たく言い捨てると、イリスを押しつけた。重力に従ってコロロンと床に転がる寸前のところを、ハリーが急いで抱き留める。イリスは、茫然とドラコを見た。——今や彼は、冷たい感情を失ったような灰色の目で、イリスを睥睨していた。イリスが壊そうと努力していた壁は、ドラコのプライドによって再び厚く塗り固められ、イリスを完全に拒絶してしまったのだ。イリスは彼の余りの冷酷さに、咄嗟に呼吸を忘れてしまう程の苦しさを覚えながら、問いかけた。

「そんな——私たち——」友達“じゃ、なかったの”

ドラコは立ち上がり、乱れた服装を整えながら、イリスと目も合わさずに言い切った。

「馬鹿言うなよ。僕は一度も、君を“友達”だなんて思った事はない」彼は振り返りもせず、自寮へ向かい、歩み去った。

☆

ドラコはスリザリン寮にたどり着き、生徒たちのまばらな談話室を通り抜ける。夜食中のクラブとゴイルが近づくが、無言で手を振って追いやった。ドラコは誰もいない自室のベッドの前に立ち尽くした。

——僕は一度も、君を友達だなんて思った事はない——

——その通りだ。僕は、あのクリスマス休暇の時以来、ずっと——。ドラコの胸の中に、熱い思いが込み上げて来て——それは心臓を鷲掴みにし、無茶苦茶に揺さぶった。大切なイリスを、僕はこれ以上無い位に傷つけた。もう取り返しがつかない。ドラコは苦しくて、たまらなかった。力の限り慟哭し、ベッドに倒れ込んで、失意のままに枕を何度も殴りつけた。やがて枕が破れて中に詰まった羽根が飛び散り、部屋中に雪のように舞い散っても、ドラコは暴れるのを止める事が出来なかった。

ドラコはイリスを、“友達”ではなく——”一人の女性として愛していた”。——僕は君を愛している、愛しているんだ。ドラコは、心の中で何度も何度も、誰にも届かない胸の内を叫び続けた。

☆

イリスは、ハリーと共にグリフィンドールの談話室に戻った。ハリーから事情を聴いて、心配そうに彼女を見つめるハーマイオニーに「暫く一人にしてほしい」と告げると、誰もいない自室へ向かう。——イリスは、ドラコにあれ程冷たい言葉を投げつけられたのに、憤りも悲しみも、何も感じる事が出来なかった。心が空っぽなのだ。まるで、草一本生えていない寂しい荒野に、一人きりで立ち尽くしているような気持ちだった。

——そうだ、日記を書かなきゃ。イリスはふと思いついた。ちゃん

トリドル先生の言う通り、宿題はこなしたものだ。イリスはぼんやりしたまま、机について日記を開き、羽根ペンをインク壺に浸して書き付ける。

“こんばんは、リドル。あのね．．．”

イリスは続けて“純血主義”と書こうとした時、不意に目頭が熱くなった。彼女の心の中に広がる、果てしない荒野の頭上に、突如として分厚い雲がかかる。やがて空から、止めどなく悲しみの雨が、地上へと降り注いだ。それは、ひび割れた地面を潤し、水たまりになり、やがて海になり、とうとうイリスの心から溢れ出した。イリスは声もなく、咽び泣いた。それはインクの代わりに、ページ上にいくつもいくつも零れ落ちては、光って消えていく。

——私はずっと“友達”だと思ってたよ、ドラコ。でも、君はそうじゃなかったの？——

イリスはついに日記の上に突っ伏して、深い悲しみの涙に暮れた。イリスは泣いて泣いて、泣き疲れて、やがてそのまま、束の間の眠りに落ちた。

☆

イリスは夢を見た。見上げると、美しい夕焼け空が広がっている。ふと良い花の香りが鼻をかすめ、見下ろすと、地上には——驚く事に、地平線のかなたまで、一面にリコリスの花が咲き乱れていた。周りを見ても、誰もいない。しかし、イリスが再び視線を正面に戻すと、ここには見慣れないホグワーツ生が、一人立っていた。

とてもハンサムな黒髪の青年で、明るい褐色の瞳をしている。上級生なのだろう、背は高い。しっかりと整えられたタイの色はグリーン。きつとスリザリン生だ。夢だとわかっているからか、イリスは警戒する事もなく、その青年をじつと興味深げに見つめた。

「やあ、イリス。はじめまして。いや、久しぶり、かな？」

青年は、はにかむように微笑んだ。イリスはたったそれだけで、何となく——不思議なことに——彼が誰だか、わかってしまった。

「リドル、なの？」

リドルは穏やかに一つ頷いた。

「君がひどく泣いていたから、つい心配になってね。君の力を少し借りさせてもらったんだ。ここは君の夢の中だ。ここなら、君の目を見て、声を聴き、君に触れることができる」

彼はゆっくりとイリスに近づいて、愛しげに頭を撫でた。

「さあ、僕に話してごらん？何があつたんだい？」

——イリスは、もう我慢出来なかつた。彼女は赤子のように泣きじやくりながら、彼に縋り付いた。リドルは言葉巧みにイリスを宥め透かし、彼女の弱り切った心を掌握し——彼女の一番の拠り所は“自分なのだ”という認識を、彼女の無意識下に植え付ける事に成功した。

「何も悲しむことはない。君は十分、よく頑張った」

リドルはイリスを抱き締め、ゾツとするような邪悪な笑みを浮かべた。

花の咲き乱れる夢の世界で、イリスがリドルと邂逅を果たしている頃。

現実世界でのイリスは、日記の上に突っ伏して規則正しい寝息を立てていた。部屋は静寂に満たされ、扉の外からは談話室の微かな喧騒が聴こえる。

やがて——深い眠りについてた筈のイリスの双眸が——ゆつくりと開かれた。

その目は不思議な事に、いつもの金混じりの青色ではなく——邪悪ささえ感じるような金色に輝いていた。眠りから覚めたばかりだというのに、彼女の顔には呆けた様子もない。

彼女はおもむろに日記から顔を上げると、両手を——まるで動作を確認するかのよう——開いたり閉じたりし始めた。奇妙なその動作を終えると、イリスは自分の杖を取り出した。コッソ、と杖先を頭の天辺に当て、彼女が知る筈のない『目くらまし呪文』を掛ける。

その瞬間、イリスは周囲の景色と完全に同化した。彼女は日記を無造作に掴んで、ローブのポケットに滑り込ませ、鷹揚な動作で立ち上がった。

「ハンプティダンプティー 壁に座ってたら」♪」

イリスは囁くような声音で歌を口ずさみながら、自室の扉を開け、螺旋階段を降り、談話室へたどり着いた。そこにはちらほらとまだ生徒たちがいて、眠りにつくまでの時間を思い思いに過ごしている。しかし、姿を消したイリスには誰も気づかない。イリスの小さな歌声は、生徒たちの賑やかな話し声と暖炉の火がパチパチと爆ぜる音に掻き消されていく。

「ハンプティダンプティー 勢いよく落つこちた」♪」

イリスは寮の出入口である『穴』へと向かった。穴付近に設置された肘掛け椅子に座り、読書をするハーマイオニーの横を通り——ちょうど肖像画を開け、穴から談話室へ這い入ろうとしていたフレッドとジョージの間を蛇のように擦り抜けて、イリスは難なく寮の外へ出

た。再び閉じられた肖像画「太った貴婦人」は、すぐ目の前に佇む透明化したイリスに気づかず、扇子で顔を半ば隠しながら、大きな欠伸をした。

「王様の家来や馬でも」♪」

風邪でもひいたのか、引つ切り無しに鼻水を啜りながら、見回りをするフィルチを素通りし、イリスは学校の外へと向かった。静まり返った廊下に、イリスの歌声だけが不気味に木霊する。彼女の足取りは、自室を出た時から一切の迷いが無い。

やがて彼女は校外へ出て、真つ直ぐにハグリッドの小屋——その近くにある鶏小屋へと向かった。イリスは南京錠の掛けられた扉の前で杖を振り、またも彼女がまともに成功させた事の無い『開錠の呪文』を唱えた。たちまち南京錠のロックは解除され、少し錆びた錠は音もなく地面に落ちた。キィ、と少し軋んだ音を立てて扉が開く。眠っている鶏たちを、品定めしているかのように一羽ずつ覗き込みながら、イリスは歩く。

そしてイリスは、目当ての鶏を見つけ、口元をきゅつと上げて微笑んだ。繁殖用に入れられたのか、唯一立派な「鶏冠」の付いている雄鶏の首根っこを無造作に掴み上げ、容赦なくその首を締め上げた。たちまち夢から覚めた雄鶏はくぐもった悲鳴を上げ、苦しげにもがき、羽根を飛び散らせて抵抗するが、それに比例していくようにイリスの力は強まっていく。

ついに——ボキン——と首の骨が折れる嫌な音がして——雄鶏は、だらんと全身の力を抜いた。

「ハンプティは元に戻せない」♪」

自分の手で殺したばかりの雄鶏をゴミのように投げ捨てると、彼女は踵を返して小屋を抜け出し、振り返る事無く杖を振り、扉を元通り閉じて鍵を掛けた。

「ハンプティダンプティ——壁に座ってたら

ハンプティダンプティ——勢いよく落っこちた」♪」

イリスは再び校内へ戻った。いくつもの階段を上がり、寝静まった絵の並ぶ廊下を通り抜けて——三階のある女子トイレへ向かう。床

は水浸しだが、すぐさま『防水の呪文』を掛けたイリスの足は、不思議と水を弾き、濡れる事はない。一番奥の個室では、悲しげに泣き叫ぶ女の子の声が聴こえる。

真つ暗闇の中、不気味に響き渡る泣き声を気にする事もなく、彼女は静かに手洗い台へと進んだ。やがて等間隔に並ぶ銅製の蛇口の一つへ近づき、ぴたりと止まる。その目は、蛇口の脇に描かれている――引つ搔いたような小さな蛇の姿を、じつと見つめていた。

「メーテイス。僕らはもう一度、始めるんだ」

イリスは微かにそう呟いた後、口を横に開き、シューシューと――まるで空気が漏れるような――奇妙な言葉を囁いた。その瞬間、蛇口が白い光を放ち、回転し始め――手洗い台そのものが動き出した。台が丸ごと床下へ沈み込み、見る見るうちに消え去った後に、大人一人が滑り込めるほどの太いパイプが剥き出しになった。

「さあ、<sup>サレヴァント</sup> 従者」の手によって、「秘密の部屋」は再び開かれた。老いぼれめ。“墮ちた卵”を元に戻せるのなら、やってみるがいい”

イリスは地獄へと続いていくような、果て無い闇を孕んだその穴を見て、艶然とした微笑みを見せた。

☆

ハーマイオニーは、つい今しがた何とも不思議な体験をした。それは、イリスが自室で一人泣いているために――いつ頃、部屋に入って慰めようかと思案しながら、読書をしていた時の事だった。

フレッドとジョージがどこかでまた悪戯でも仕掛け終えたのか、満足気に笑いながら穴から出て来た時、彼らの笑い声に混じって、イリスの歌声が聴こえたような気がしたのだ。ハーマイオニーは反射的に周囲を見渡したが、当然のようにイリスの姿は見えない。

――空耳かしら。彼女は自分の耳を疑った。イリスは今頃、自室にいる筈だ。冷静に考えてみれば、彼女はつい先刻前に起こったドラコとの諍いの結果、深く傷つき――とてもじゃないが、歌うような気分ではないだろう。それに、もし本当に外に出ていたとしたら、あの双子が素通りなんかしないで、必ずイリスにちよっかいを掛ける筈なのだ。ハーマイオニーは極めて理性的に結論を出すと、妄想を打ち消す

かのように軽く頭を振り、読書に戻った。

だが、数十分経つても、ハーマイオニーの胸騒ぎはいまだに治まらなかった。——少し、確認するだけよ。彼女は自分に言い聞かせると、本を閉じ、自室へと向かった。

「イリス、入るわよ」

ハーマイオニーはノックをしてから、部屋に入った。——彼女が想定していた通り、イリスはちゃんとした。勉強机の上に突っ伏して眠りこけている。ハーマイオニーは胸を撫で下ろした。やはりあれは、自分の幻聴だったのだ。

「嫌ね。聞こえる筈のない声が聞こえるなんて」

彼女の独り言は、思いのほか静寂で満たされた部屋に響いた。ハーマイオニーは、イリスの傍まで近寄ると、彼女を優しく揺り動かして起こす。もう夜も遅いし、彼女をベッドに促そうと思ったのだ。

☆

「イリス……こんなところで寝ていたら、風邪をひくわよ」

イリスはハーマイオニーに揺さぶられ、目が覚めた。さつきまで、夢の世界でリドルに優しく抱き締めながら、慰められていたので、イリスはぼうっと夢見心地だった。——今でも克明に思い出せる。むせ返るような花の匂い。リドルの腕の暖かさ。あの圧倒的な安心感。

「あれ？いまなんじ？」

まだ現実と夢の区別がつかない様子のイリスを見て、ハーマイオニーはくすくす笑い、今の時間を告げた。やがて完全に覚醒したイリスは、咄嗟に手元にある筈の日記を掴んで隠そうと、片手で周囲を探り——やがてローブのポケットの中へ行き着いた。どうやら、眠りにつく前に、無意識にポケットに入れたらしい。イリスはホッとした。

「あら。貴方だったら、どこでこんなのかくっつけてきたの？」

一方、ハーマイオニーは吹き出しながら、イリスのローブについていた小さな羽根を摘み、ゴミ箱へ捨てた。——どこで付けたんだろうと、イリスも首を傾げた。もしかして、ハグリッドの小屋を訪れた時にでも、くっ付けてきたのかもしれない。



ふと、つい先刻前に起きたドラコとの出来事が思い返されて、イリスの胸はまた狂おしい程の痛みを訴え始める。しかし、夢の中のリドルの笑顔を思い浮かべると、痛みは徐々に鎮められていった。

——忘れよう。そう、忘れるしかない。イリスは首を横に振り、ドラコとの楽しかった輝く思い出や、深く傷ついた痛みを心の奥底へ沈め込もうとした。リドルは『頑張った』って褒めてくれた。私、彼を理解しようとして、頑張ったもの。もうこれ以上、どうしようもできない。

☆

翌朝、イリスたちはいつものように、大広間で朝食を取っていた。昨日のドラコとイリスとの喧嘩の騒ぎは、四人の中で『暗黙の禁忌』となったようで、誰も話題にすらしなかった。イリスももう、ハリーパパの目をかすめてまで、スリザリンのテーブルを見ようとは思わなかった。

今朝の話のネタは、主にハリーとロンの罰則の内容だった。二人共それぞれ別行動であったらしく、ロンは、フィルチと共にトロフィー・ルームで銀磨きをし続けるというもの（しかも魔法なしだぜ！とロンはいきり立った）、ハリーはロックハート先生のファンレターの返事を書き続けるというものであったらしい。

ロンが銀磨き粉の強烈な匂いを微かに全身から発しながら、フィルチとナメクジとトロフィーとの『四つ巴の死闘』の顛末を熱く語っている間、ハリーは浮かない表情でゴブレットを弄んでいた。イリスは気になって、問いかけた。

「どうしたの、ハリー。元氣ないね」

ハリーはイリスをそつと見つめてから、その原因を話し始めた。ハリーは罰則を受けている時、部屋の壁から、微かではあるが——『不気味な声』がしたというのだ。

「君なら、その声の正体がわかるんじゃないか？動物の声が聞こえるし」

「何て言ってたの、それは？」

イリスが目玉焼きをつつきながら尋ねると、ハリーは——その時の状況を思い出しているのか——表情をこわばらせ、肩をぶるつと震わ

せると、毒を吐き出すかのように苦しげな調子でこう言った。

『来るんだ、殺してやる』とか『八つ裂きにしてやる』とか、ずっとそんな事を言ってた。骨の髄まで凍るような、冷たい声だった」

『殺してやる』だって？イリスはショックを受け、思わずフオークを取り落した。今までホグワーツ内外問わず、様々な動物と話してきたが、そんな物騒な事を言う者にはついぞ会った事がない。

「そんな物騒な事を言う動物なんて、今まで見た事ないよ」

「やっぱり、ハリー。ストレスだよ。君、あいつの胡散臭い自慢話の聞き過ぎで、幻聴でも聞こえちまつたんじやないのかい？」とロンが混ぜ返す。

「ロン。胡散臭い自慢話じゃないわ、実・体・験・よ」ハーマイオニーがムキになってピシヤリと言り返した。

イリスはごくりと生唾を飲み込んだ。誰にも聞こえない恨めしげな声。それは、毎年夏頃に決まって、イオに強請ってしてもらう『怪談話』に登場する幽霊や妖怪等と言われる存在に、酷似していたのだ。ホグワーツはとも歴史ある古い学校だ。ホグワーツならではの『七不思議』があつたって——まあ実際は、七つどころではない程、不思議な事が日々起こり続けているが——当然の事だろうと、イリスは想像した。

「ねえ、それってゴーストなんじやない？ゴーストなら、壁の中にも入れるでしょ」

「ゴーストなら、ロックハートだって聞こえたはずだ」ハリーは納得いかないようだ。

「ハリーにしか聞こえない位の、小さな声だったとしたら？それとも、ハリーに“霊感”があるとか」

イリスが食い下がると、ハーマイオニーはかぶりを振りながら、毅然と言った。

「イリス。“霊感”だなんて。貴方、まだマグルの世界のオカルトを信じているの？ゴーストになれるのは、死ぬ時に強い未練を残した魔法使いや魔女だけ、そしてそれが見えるのも、“霊感”なんかではなく“魔法力”を持った魔法使いや魔女だけよ。」

それに、ホグワーツにいるゴーストは、そんな物騒な事言わないわ。仮にそんな——人を襲うような考えを持った恐ろしいゴーストがいたとしたら、何よりダンブルドアが放っておかないと思うし」

「ゴーストでもなく、動物でもないとしたら……一体、僕は何の声を聞いたっていうんだ？」

ハリーが茫然と呟き、三人は頭を捻って考えを巡らせる。やがてハーマイオニーが口火を切った。

「じゃあ、こうしましょう。もし、またハリーがその不気味な声が聴いたら、イリスにも近くに寄って聴いてもらうのよ。イリスも聴こえたら、それは動物の声に間違いないし、もしイリスが聴こえなくて、ハリーだけに聴こえ続けているとしたら……」

言葉を最後まで言わず、ハーマイオニーは気遣わしげに、ハリーを見た。ロンが、何故かぶるぶる震え始めた自分の杖に、苦心してスペロテープを貼り直しながら、にべもなく言い切る。

「君は聖マンガ行だね、モチのロンで。ロックハートに莫大な治療費を請求してやろうぜ」

☆

十月がやってきた。校庭や城の中は、湿った冷たい空気に満たされていく。季節の変わり目ともいえるこの時期に、生徒教師問わず、風邪が流行り始めた。ホグワーツ中で、マダム・ポンフリー特製の「元氣爆発薬」が大活躍し、それを飲んだ人々は、数時間は耳から煙突のように煙を出し続けることになった。

変わったのは暦や気温だけではなく——ドラコもそうだった。イリスは時々彼と擦れ違ふ事はあるが、その時は決まって彼の方から気まずそうに目を逸らした。そして彼は、イリスがいる時はハリーたちに絡みもしなくなった。イリスは余計な争いをしないで済むと安心する反面、そんな彼の素っ気ない対応に、かえって心を痛めた。

イリスはあの夜以降、日記は一切書かず、毎晩夢の世界でリドルとの逢瀬を重ねていた。ハーマイオニーのスケジュール表の合間を縫って筆談するよりも、彼女が絶対に邪魔する事のできない夢の中で会う方が、イリスにとっても都合が良かった。イリスは眠りにつく度

に、彼女の心からぽつかりと抜け落ちたかつての友人——ドラコの穴を埋めるようにリドルを求め、彼に夢中になった。リドルはホグワーツ中の誰よりも物知りで、話し上手だったのだ。

そして彼は、やがてイリスの他愛無い世間話を聞くだけではなく、彼女に勉強も教えると明言した。

「君を首席にするって言っただろう？君は聡明な魔女だ、必ずできるよ」

リドルはイリスに囁き掛け、パチンと指を鳴らした。——その瞬間、一面のリコリスの花畑の風景は、見る見るうちにホグワーツの教室へと姿を変えた。イリスは驚いて周囲を見渡す。——ここは、ロックハート先生が使用している「闇の魔術に対する防衛術」の教室だ。イリスはいつの間にか席に着いていて、机の上には全ての授業の教科書が並べられていた。教壇にはリドルが立ち、穏やかな笑みを浮かべ、イリスを見下ろしている。

「夢の中でまで、勉強したくないよ。リドル」

イリスが捨てられた子犬のような目つきで訴えると、リドルは可笑しそうに吹き出した。

「イリス、勉強は本当はとても面白い事なんだよ。君の親友のハーマイオニーは、幸いにもその楽しさに気づいているが、君に教える事までは出来ていないようだ。」

僕は、当時ホグワーツの教師を目指していた。僕が君だけの教師として、“学ぶ喜び”を教えてあげよう」

リドルはにっこりと微笑んだ。教師を目指していただけあって、リドルの教え方はとても上手だった。イリスは毎晩——朝目覚めるまでの間、夢中になって知識を詰め込んだ。呪文学、変身術、魔法薬学——イリスの頭は乾いたスポンジになったんじゃないかと思う位、夜毎多くの知識を吸収した。

とりわけイリスが夢中になって学んだのは、「闇の魔術に対する防衛術」だった。他の授業は、担当する先生方の授業の流れに沿って行われるのに対し、「防衛術」の授業においてだけは、ロックハート先生の教科書のたとえ1ページでも使う事を、リドルが頑なに拒否した。

そして、彼独自の観点で教鞭を取ってくれたのだ。

「ホグワーツにおいて一番重要なこの授業で、こんな自信を読ませるなんて。どうやらダンブルドアは、人選を間違えたらしい」

そう嘲りを含んだ声で言い捨て、リドルはロックハート先生の教科書類をゴミ箱に投げ込むと、イリスに向き直る。

「イリス。闇の魔術は、君が思っているよりもずっと厄介な代物だ。鉱物のように複雑な構成をしていて、水のように捉えどころがなく——引力のように人を惹き付け、善人をいとも容易く奈落の底へ引き摺り落とす力を持つ。」

——毒をもって毒を制す。闇の魔術に抵抗するには、まずそれを知らなくては」

リドルは繰り返して、イリスに言い聞かせた。その頃には、イリスはリドルに心酔し始め、彼の言葉を無抵抗に受け入れるようにまでなっていた。

「——君に僕の知る闇の魔術を教えよう。君には才能がある。君は素晴らしい☒死喰い人☒になれるよ」

だからイリスは、最後にリドルが言葉の継ぎ目に微かに放った——空気の漏れるような奇妙な言葉が“何”を意味しているのか、疑問に思う事すらなかったのだ。

☆

十月は飛ぶように過ぎ、やがてハロウィーンがやって来た。ホグワーツ中にパンプキンパイの焼ける良い匂いが立ち込め、大広間はいつものように生きた蝙蝠が群れを成して飛び交い、ハグリッド特製の巨大かぼちゃはくりぬかれて、中に大人三人が十分座れる位の大きなランタンになった。浮足立つ生徒たちとは対照的に、ハリーたち四人組は浮かない表情をしていた。——ハリーが、ハロウィーン・パーティと同時に開催される、寮つきゴースト「ほとんど首無しニック」の開催する『絶命日パーティ』に行く約束してしまったからだ。

『骸骨舞踏団』だぜ！」

ダンブルドア校長がパーティの余興用に『骸骨舞踏団』なる魔法界の人気バンドを予約したとの噂を聞き、ロンが地団太を踏みながら

憤った。

「絶命日パーティなんか、行つてられないよ！」

「約束は約束でしょ」

ハーマイオニーは頑として譲らない。イリスはそんな二人の様子をぼんやりと見つめていた。朝から強烈なまでに体の怠さや寒気が続き、あまり話す気にもなれなかったのだ。

「絶命日パーティに行くつて、貴方そう言ったんだから」

「はくしゅん！」

ハリーが気まずそうに頭を掻いているのをみながら、イリスは一つくしやみをした。三人は思わず、鼻を擦るイリスを見る。

「君、もしかして——風邪？」 ロンが羨望の眼差しでイリスを見た。

ハーマイオニーが慌ててイリスの元へ近づき、彼女の額に手を当て「ひどい熱だわ」と唸った。

「ごめんなさい、イリス。貴方いつもぼうつとしてるものだから、気が付かなくて。すぐ医務室へ行きましょう」

「いやだ。——はくしゅん！絶対、わ、私も、絶命日パーティに、行く！」

イリスはふらふらになりながらも、必死に駄々をこねた。せつかくの仲良し四人組が揃ったハロウインに、自分一人だけ医務室でお留守番など耐えられない。三人に強制的に連行された医務室で、イリスはベッドに腰掛けながら元気爆発薬の入ったゴブレットを睨み付け、未練がましく言った。

「これ飲んだら、私も行つていいよね」

「馬鹿言うな。そんな死にかけて行ったら、君が絶命しちまうよ」と口元がバツサリ切り捨てた。

「ほら、飲んで」

ハリーがゴブレットを持ち、イリスに薬を飲ませる。薬はとても苦かった。顔をしかめながら、両耳から煙を上げ始めるイリスの手を取り、ハーマイオニーが悲しそうに眉根を下げながらこう言った。

「ごめんなさい。きつと私のスケジュール表の内容が過密すぎたのね。貴方、確かに成績は上がったけど、顔色の悪い日が続いていたも

の。もつとゆとりを持たせるべきだったわ」

「違うよ。は、は、はくしゅん！ハーミーのせいじゃない」

イリスは慌ててかぶりを振った。ハーマイオニーのスケジュールは模範生の生活サイクルそのもので、健康的で実に良いとリドルも賞賛していた。——きつと、夢の中でも勉強しているから、それで体が一時的に疲れてしまったのに違いはない。しかし、その事をハーマイオニーに伝えるには、まずリドルの存在を明かさなければならぬ。そんな事はイリスには出来なかった。

「そうだ！僕らもイリスの風邪が移ったってことにしてさ、絶命日パーティーなんかドタキャンしちゃおうぜ！」

「駄目よ。行くなって約束したんだから」

湿っぽい空気を打ち破るように、ロンが明るい声で提案するが、すぐさま元の調子を取り返したハーマイオニーが却下する。イリスはハリーに掛布団を掛けてもらいながら、言った。

「ハリー。楽しんできてね。おみやげ、期待してるから」

「ああ。ハロウィーンのパンプキンパイよりいいものが、絶命日パーティーにあればだけどね。おやすみ」

ハリーはイリスの額に口付けを落とすと、二人と連れ立って医務室を出て行った。

☆

イリスは、夢を見ていた。どこかの廊下を、ふらふら歩いている。意識も視界も、朦朧としていて、切れかけた蛍光灯のように明滅し、定まらない。

——ぱしゃん。急に冷たさを感じ、足元に目線を落とす。いつの間にか、廊下が水浸しになっていた。この水は、一体どこから来たんだろう。

どこからか、女の子の悲しげな泣き声が聴こえる。この声を、私は知ってる。誰かが言った。ここには入っちゃダメって——とても大好きな誰かが——。でも、それ以上、思い出せない。

——不意に意識が沈み込み、視界は闇に閉ざされる。再び、イリスが目を開けた時、強烈なペンキの匂いが鼻をついた。

イリスは壁の前に立っていた。糸で操られる人形のように、イリスの手がひとりで動き——足元にあるバケツから赤色のペンキを刷毛に塗り付けると、壁に文字を描き始める。

すぐ傍にある松明の光が、床の水溜りに反射して、視界を滲ませる。ペンキの匂いが鼻を狂わせる。そして——壁の中を、とても大きなものを引き摺るような、音がした。

——ずしん。とてもとても大きなものが、水を跳ね上げながらイリスのすぐ後ろに着地した。だというのに、イリスは不思議と怖くなかった。ただ、文字を書き続ける。

それは、シューシューと空気が漏れるような音を立て、イリスの背後で蠢き始めた。——イリスの視界の端を、大きな緑色の尾っぽが掠める。

イリスは、書き上げた文字を茫然と眺めた。松明の輝きに照らされて、文字は鈍くきらめいている。

“秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ 気を付けよ”

——どうして私は、こんなことを書いたの？——

彼女にとっては、全く意味の分からない言葉の羅列に過ぎなかった。イリスが首を傾げていると、不意に背後の大きな気配が消え去った。

——ぱしやり。代わりに、今度はとても小さな足音が聞こえて、イリスはゆっくりと振り向いた。

その正体は、灰色のやせ細った老猫 ミセス・ノリスだ。彼女はイリスを訝しげに見上げると、その鋭い目を丸くさせ、全身の毛を逆立たせながら、唸るようにこう言った。

《あなたは誰？本物の彼女はどこ？》

ミセス・ノリスは何を言っているんだろう。イリスが考えをまとめる前に、彼女の口が勝手に開き——さっきのとても大きなものが発していたのと同じ——空気が漏れるような奇妙な言葉を紡いだ。

——どしん。再び、とても大きなものが、イリスのすぐ傍に着地した。

《あの人に知らせなきゃ！》



彼女の相棒・フィルチの元へ駆けようとしたミセス・ノリスは、不意に目の前に現れたそれを見るため、足元から視線を上げようとして——甲高い断末魔の悲鳴を上げた。

ドラコはハロウィンパーティが終わった後、クラブやゴイルを引き連れて自寮への帰路を辿った。

——グリフィンドール寮の前でイリスに心無い言葉を投げつけてから、彼女とは目も合わさず、口も利かない日々が続いていた。しかし、プライドの高いドラコにとって——いくら自分が悪いとはいえ——此方から許しを乞いに行く等という行為は、とてもじゃないが考えられるものではなかった。彼にできる事といえば、廊下で擦れ違ったり、合同授業になったり、大広間で食事を摂っている時に、イリスを——彼女が気付かない短い間——盗み見る事位だった。けれども、ドラコがそうやって見るといつも彼女は——まるでドラコと絶交した事なんて気にもしていないような朗らかな態度で——ハリーたちと楽しそうに笑っていて、その度に彼は、逆に彼女に冷たく突き放されたような気持ちになり、傷つくのだった。

三人は階段を上がり、廊下へ出た。クラブとゴイルが示し合せたように、腹を摩りながら大きなゲップをするのを眉をしかめながら見ていると、不意にドラコは前で突っ立っている生徒にぶつかっただが、立ち止まっているのは、その生徒だけではなかった。前方の生徒たちは立ち止まり、壁となってドラコたちの進路を塞いでいる。彼らはみな一様に顔を青ざめさせ、騒めいている。

「邪魔だ、どけ」

不快そうに言い放つと、ドラコはクラブとゴイルに命じて、目の前の人垣を押しよせ、前方へ出て——目の前の光景を見て、息を飲んだ。

——“秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ 気を付けよ”——

廊下の隅——窓と窓の間の壁に、高さ三十センチ程の文字が塗り付けられ、松明に照らされてチラチラと鈍い輝きを放っている。『秘密の部屋』——その言葉を、ドラコは父から聞いた事があった。それは、偉大なる創設者の一人、サラザール・スリザリンが残した、“穢れた

血”を追放するための“伝説の部屋”だ。

「ねえ、あれってミセス・ノリスじゃない？」

茫然と佇むドラコの後方で、興奮した様子で騒めき続ける話し声の一つが、不意に彼の耳に飛び込んできた。ハツフルパフの女子生徒の集団が小走りでドラコの近くまでやってきて、松明の方向を指差すと、口々に悲鳴を上げる。彼も、それに従って、恐る恐る視線を下げた。——そこには、松明の腕木があり、フィルチの愛猫であるミセス・ノリスが、それに尻尾を絡ませてぶら下がっていた。彼女は凍り付いたように硬直し、目はカッと開いたままだ。

ドラコの足元を恐怖心が撫で、それは足の先から頭の天辺までじわじわと染み込んで、彼をその場から動けないよう縫い付けた。

——どんな事件が起こっても、お前は一切関与してはならない——かつての父の忠告が耳に蘇る。ドラコの頭の中で、数々の謎のピースが瞬く間に嵌まっていく。——間違いない。『秘密の部屋』を開いたのは、壁に文字を書いたのは、そして、ミセス・ノリスを襲ったのは——イリスだ。

「ぼ、僕が……」

あの時、自分のプライドなんか屈せず、イリスに本当の事を話していれば。だが、もう、何もかもが遅すぎた。“僕は再び、イリスを見捨てたんだ”。その事実にはドラコは打ちのめされ、声を出す事も出来ず、腰が抜けてその場にへたり込んでしまった。

「なんだ、なんだ？何事だ？」

間の悪い事に——生徒たちの騒ぐ声を聞きつけ、ミセス・ノリスの相棒フィルチが、肩で人込みを押し分けて、ドラコの横へ並んだ。彼は愛猫の凄惨な姿を見ると、恐怖の余り手で顔を覆い、たじたじと後ずさった。

「わたしの猫だ！わたしの猫だ！彼女に何が起こったというんだ?!」

彼はパニックになって金切声で叫び、やがてその飛び出した目は、文字の書かれた壁付近に佇むポッターを射ぬいた。

「お前だな！お前がやったんだ！」

ドラコは途端に我に返って、フィルチの視線の先を見た。——もし

や、犯人がイリスとバレたのでは——？しかし、彼の予想は違った。フィルチは、文字の書かれた壁の付近にいたポッターを睨み付けていたのだ。ポッターは、ビクツと肩を震わせて、わけがわからないと言わんばかりの表情で、フィルチの憎しみの籠もった視線を見返していた。

「わたしの猫を！殺してやる！殺して——」

「アーガス！」

ダンブルドアの鋭い声が、矢のように現場へと突き刺さった。他に数人の先生を従えていて、ポッターたちの脇を通り抜け、ミセス・ノリスを松明の腕木から外す。その様子を、ポッターたちは深刻な表情で見守っていた。——待てよ。ドラコの背中を冷汗が伝い落ちる。ポッター、ウィーズリー、グレンジャーの三人しかいないじゃないか。——イリスは——彼女は、どこへ行ったんだ？

ミセス・ノリスを抱えたダンブルドアが、ポッターたちとフィルチを連れ、ロックハートの部屋へと足早に向かう。彼らが人垣の奥へと消え去ってから、ドラコはよろよろと立ち上がり、イリスの仲の良いグリフィンボール生を探した。

「おい、ロングボトム！イリスはどこだ？」

ドラコは運良く人込みの中からロングボトムを見つけ出すと、彼の肩を掴んで決死の形相で問い詰めた。彼はドラコの鬼気迫った様子に、目を白黒させながらも、こう言った。

「イリスなら、風邪をひいて医務室で寝てるはずだよ。……あ、まさか、君、イリスをいじめるつもりじゃ……そ、そんなの、僕が許さないぞ！」

ドラコはロングボトムを突き飛ばすと、クラブとゴイルに先に寮へ戻るよう命じて、一目散に医務室へ向けて駆け出した。ロングボトムの「待て！」という叫び声は、瞬く間に聞こえなくなった。——頼む、僕の間違いであってくれ！彼女が犯人じゃありませんように！

飛ぶように階段を駆け下り、息を切らしながら医務室の扉を開ける。周囲を見渡すが、マダム・ポンフリーは、席を外しているようだった。——イリスのいるベッドはすぐにわかった。等間隔に並ぶベツ

ドのうち、一つだけカーテンが掛かっていたからだ。ドラコは恐る恐る、カーテンをめくった。

☆

ドラコの予想通り、イリスはそこにいた。彼女は、ずっと最初からそこにいたかのように、静かに寝息を立てて眠っている。——僕の勘違いだったんだ。ドラコはホッと胸を撫で下ろし、ベッドの脇に座り込んだ。壁に塗り付けられたペンキは、塗り立てたばかりのようにキラキラと輝いていた。彼女は見るからに深く眠っているし、それに——ドラコは布団の下から、彼女の足をそつと触った——暖かい。もし彼女が事件を起こしベッドに戻ったばかりなら、まだ足は冷たい筈だ。

彼女は犯人じゃなかった。久々にイリスの顔をじっくりと眺め、彼女の髪を撫でながら思った時、ふと——かすかな異臭が鼻をついた。これは、つい先程、廊下で嗅いだ事のある匂いだ。ドラコは、何も考えずに布団をめくった。

「ひっ……!!」

ドラコは大声を上げそうになり、慌てて自分の口を両手で押さえた。——彼の考えを嘲笑うかのように——イリスのローブの前に、ペンキがべつとりと付いていたのだ。黒々としたそれは、ローブから少しはみ出し、灰色のベストにも血糊のようにへばり付いている。壁に書かれていたあの文字の色と同じだ。彼は、イリスを守るために、無我夢中で杖を取り出し、ローブへと向けた。

「スコージファイ、清めよ」

イリスの服に付いたペンキは、見る見るうちに消えていった。ドラコの心臓は、今にも飛び出しそうな位、高まっている。——早く、彼女を助けなければ。その一心で、彼はイリスのローブを無我夢中で探った。今、彼女は寝ている。日記を盗み出せる筈だ。

父から聞いた話によれば、過去に一度、継承者によって『秘密の部屋』が開かれた時、“穢れた血”ではあるが、死人が出たという。ドラコはガチガチと震える歯を食いしばった。イリスを殺人者にしてたまるか。——胸ポケットには何も無い。左のポケットには、蛙チョコ

コカードとレモンキャンデーがいくつつか。そして右のポケットには——ドラコの探し求めていた——角ばった、固いものがあつた。日記だ。ドラコはポケットに深く手を突っ込むと、それを掴んだ。

だが、その瞬間、眠っている筈のイリスの手が、日記を引き抜こうとするドラコの手をガツと掴んだ。その力は万力のように強く、ドラコが反射的に手を振り解こうとしても、びくともしない。

イリスは、薄らと目を開けた。——その目は、いつもの青色ではなく、太陽を嵌め込んだかのように金色に輝いていた。思わず息を飲んだドラコを見据え、彼女はゆっくりと口を開いた。

「——父上の忠告を忘れたか？ドラコ・マルフォイ」

それは紛れもない彼女自身の声だったが、まるで噛んで含めるかのように、低く落ち着いていた。——違う。こいつは、イリスじゃない。ドラコは恐怖の余り、全身が総毛立った。だって彼女が、あの時の事を覚えている筈がないんだ。イリスはドラコの拘束を解き、彼女に凡そ似つかわしくない、冷たく甲高い嗤い声を上げた。ドラコはたまらず逃げ出した。——やはり、彼女が犯人だった。何者かが日記を介して彼女に取り憑き、彼女を操って『秘密の部屋』を開き、ミセス・ノリスを石にしたのだ。

☆

翌朝、イリスの風邪は全快した。大広間で朝食のオートミールを食べながら、イリスはハリーたちから、“絶命日パーティーからミセス・ノリス事件”に至るまでの話を聞き、ごくりと生唾を飲み込んだ。自分が風邪で半日寝込んでいる間に、そんな恐ろしい事があつたなんて。各寮のテーブルにつく生徒たちも、ミセス・ノリスが襲われた話でもちきりだった。

「貴方がいなくてよかったわ。石になったミセス・ノリスは、とつても不気味で残酷だったし。きつと貴方がそれを見ちゃったら……パニツクになってしまうもの」

ハーマイオニーがイリスの皿に、お代わりのオートミールをよそつてやりながら言う。イリスもこれには同感だった。一年の終わり頃、動物と喋れるようになってからも、ミセス・ノリスとは追いかけられ

こそすれ、話しかけた事すらなかった。しかし、それでも——何者かに襲われて、拳句に石にされてしまうなんて、彼女にとってはどれほどの恐怖だったろう。

「壁の文字、『ミセス・ゴシゴシの魔法万能落とし』でも消えないみたい。私、フィルチがこすつてるの見たわ」

未知のものに対する好奇心と恐怖で目を輝かせながら、ジニーが颯爽とやって来て、イリスの隣に座った。何故かネビルも何か言いたげにイリスの傍へとやって来て、ハリーを伺い見ながら、モゴモゴと口ごもる。イリスが「何？」と問いかける前に、ハリーが真剣な表情で口を開いた。

「イリス。でも君がもし、あの時一緒にいてくれてたらなって、僕は思うんだ。——僕、あの“不気味な声”をまた聴いて・・・それを追いかけて行ったら、壁の文字にたどり着いたからさ」

イリスは考えをまとめた。その謎の声の先に、事件現場があったのなら——それは決して、幻聴などではない。

「じゃあ、確実に“何か”がいるんだ。やっぱり、ダンブルドアに相談した方がよかつたんじゃない？」

「いや。昨日ハリーにも言ったんだけど、僕はやめた方がいいと思う。誰にも聞こえない声が聴こえるのは、魔法界でも狂気の始まりだって思われてるし」ときっぱりとロンが言った。

「壁の文字を見つけられたの？ミセス・ノリスを襲った犯人を見つける手がかりになるかもしれないじゃん」

「それが不味いのよ、イリス」ハーマイオニーがため息を吐きながら、イリスに言い聞かせた。

「ハリーは余りにも、色々なタイミングが良すぎたの。あの時、フィルチが騒いだものだから、もう——ハリーが、犯人なんじゃないかって、噂が立ち始めているのよ。これ以上、誰にも聞こえない声が聴こえるなんてヘンな事を言ったら、本当に彼が犯人にさせられちゃうわ」

☆

ミセス・ノリス事件以降、ハーマイオニーは図書館へ通い詰めに なった。三人が何を調べているのか彼女に聞いても、珍しく上の空

で、ろくすっぽ返事もしてくれない。彼女が読書に長い時間を費やすのは今に始まった事ではないが、今や、読書以外何もしていないと言っても過言ではなかった。

一方のイリスは、度々体調を崩すようになった。「元氣爆発薬」を飲めば一時的に全快するが、効果が切れると途端に風邪のような症状がぶり返してしまう。困り果ててマダム・ポンフリーに相談した結果、イリスは毎朝、朝食後にポンフリー直々に健康チェックを受ける事になった。

水曜日、昼食を食べ終えたイリスは、図書室へ向かった。ロンは、図書室の奥の方で、「魔法史」のレポートの長さを巻き尺で測っていた。ビンズ先生の宿題は「中世におけるヨーロッパ魔法使い会議」について、一メートルの長さの作文を書く事だった。イリスがロンの計測を手伝っていると、「魔法薬」の授業後、スネイプに居残りをさせられていたハリーもやって来て、彼も同様に自分の羊皮紙の長さを測り始める。

「まさか、あと二十センチも足りないなんて・・・」

ロンがぶつくさ言いながら羊皮紙を離すと、途端にそれはまたクルリと丸まってしまった。

「君は宿題やったの？」

ハリーの問い掛けに、イリスはすまし顔で自分の羊皮紙を取り出して広げ、巻き尺で長さを測ってみせた。

「一メートル三十センチ?! マーリンの髭ったらないぜ! 君、ホントにあの“落ちこぼれ”イリスかい?」

ロンが驚きの余り、目玉を向きながら言い放つ。イリスは肩を過ぎる位まで伸びた黒髪を指で払いながら、胸を張った。

イリスはリドル先生による夜の授業のおかげで、各授業の理解度がどんどん増し、ハーマイオニーに（ロンと共に）お尻を叩かれながらも嫌々こなしていた宿題も、自発的にするようになっていた。

リドルは初期の段階で、イリスの得意分野・苦手分野を把握した。取り分け「変身術」と「魔法薬学」が得意な事を見抜くと、この二つに關しては基本を復習しながらも、応用に近い事を教え始めた。それ



以外の科目に関しては、イリスが興味をそえられるよう、様々な工夫を施した。「魔法史」では、“歴史の流れ”を——実際にその場にいるかのように——目の前に映し出し、イリスが納得いくまで丁寧な解説をした。「魔法植物学」では、実際の植物を出し、それらが持つ様々な特色や効能を、イリスが楽しんで覚えられるように、面白おかしく話して聞かせた。「天文学」では、宇宙空間を作り出してイリスと共に星々の間を飛び回り、天体の位置や意味などを教えた。「呪文学」では、何かと訛りがちなイリスの発音の一つ一つをチェックし、呪文の一語一句をしつかりと教えた。そして「闇の魔術に対する防衛術」では、イリスの魔法力の操作の仕方を教えた上で、“闇の魔術”ではないが、リドルがそれを防衛する上で必要だと感じる実戦魔法を、時間をかけて一つ一つ教え込んだ。

彼の知識は、底なしだった。イリスが少しでもつまずいたり、興味を失いそうになると、『次はこれ』というように、次々とユーモアのあるアイデアを出してきた。イリスは、毎晩眠りにつくのが楽しみで仕方なかった。そして、イリスがふと気が付いたら——それぞれの授業の成績が（魔法薬学以外）、軒並み上がっていたのだ。

しかしハリーとロンは、そんな事——つまり、リドルの存在は知らない。よって彼らは、ハーマイオニーの特製スケジュール表の効果がやっと発揮され、イリスの成績が上がり始めたのだと推察した。

「ハーマイオニー先生のご教授サマサマってわけかい？あー、イリス、良い感じだ。腕はそのまま固定で頼むよ」

ロンが手早く羽根ペンを動かしていると、ハーマイオニーが、ひよいと本棚と本棚の間から顔を覗かせた。彼女は輝くばかりの笑顔で浮かべ、一冊の本を大事そうに抱えている。

「本棚に数日ずっと噛り付きで、やっと借り出せたの！『ホグワーツの歴史』よ」

イリスの隣に腰掛けると、ハーマイオニーは三人に見えるようにその本を掲げてみせた。

「私、自分の家を置いてきてしまったから、ずっと図書室で探していたの。ロックハートの本でいっぱいだったから、トランクに入りきら

なかったのよ」

「どうしてその本が欲しかったんだい？」

ハリーが尋ねると、ハーマイオニーは本をパラパラとめくり、目当てのページに至ると、みんなが見えるように広げて机の上に置いた。

「これよ。『秘密の部屋』の伝説を調べたかったの」

四人は、身を乗り出して覗き込む。そこには、こう書かれていた。

—— 一千年以上も前、最も偉大な四人の魔法使いと魔女——ゴドリック・グリフィン・ドール、ヘルガ・ハツフルパフ、ロウエナ・レイブンクロー、サラザール・スリザリンによつて、ホグワーツ城は設立された。城の場所は、マグルの詮索や当時苛烈を極めていた魔法族への迫害を遠ざけるため、マグルの目から遠く離れていた。

数年の間、創設者たちは和気藹々で、魔法力を示した若者たちを探し出しては、ホグワーツ城へ誘い、教育を施した。

しかし、やがて四人の間に意見の相違が出て来た。スリザリンだけは、魔法教育は純粋な魔法族の家系にのみ与えられるべきだという信念を持ち、マグルの親をもつ生徒は学ぶ資格がないと考え、入学させることを嫌った。その事を巡り、スリザリンとグリフィン・ドールは激しく言い争い、結果、スリザリンがホグワーツを去った。※——

「だから何なんだい？」ロンがせつついた。

「貴方、この※印が見えないの？下の欄にご注目、よ」ハーマイオニーがツンツンと指で、最後の一文の横に付けられた※印を突いた。

「了解しました、だ」ロンが拗ねて言った。

四人が視線を下にずらすと、ページの下に小さな※印が打たれ、その横に小さな文字がちまちまと並んでいた。

—— ※あくまで“伝説”だが、スリザリンは学校を去る際に『秘密の部屋』を作り、それを封印し、この学校に彼の真の継承者が訪れる時まで、何人もその部屋を開ける事ができないようにしたと言う。その継承者のみが『秘密の部屋』の封印を解き、その中の恐怖を解き放ち、それを用いてこの学校から魔法を学ぶにふさわしからざる者を追放するという——

みんなは一斉に顔を見合わせ、無言でこくりと頷いた。

「じゃあ、スリザリンの継承者がホントに現れたんだ。だから『秘密の部屋』を開けて、継承者の敵——スクイブの飼い猫の、ミセス・ノリスを襲ったんだよ。でも、”その中の恐怖”って何だろう？」ロンが首を捻った。

「怪物か何かじゃない？何にせよ、只者じゃないわ。だって、ダンブルドアでもミセス・ノリスを元の姿に戻せなかったんだもの」ハーマイオニーがこわごわと囁く。

「待って。もしかして、僕が聞いた声っていうのは……」ハリーが茫然と呟いた。

「マーリンの髭！って事は、ハリー、君こそがスリザリンの継承者かい？」

悪戯っぽく驚いて見せたロンを見て、イリスは頬を膨らませて広げていた羊皮紙をクルリと丸めた。

「ハリーがスリザリンの継承者なわけないよ。もう、これは没収ね！」  
「アッ！何するのさ。あと十センチは残ってるんだぜ！」

ロンが泣きそうな声を出すと、ハリーは思わずクスツと笑ってしまった。

「ロン。提出までに十日もあつたでしょ。——でもハリー、その声については、本当に慎重に調べた方がいいかもね」

ハーマイオニーは気づかわしげにハリーを見ながら、言った。

☆

そして土曜日がやって来た。今日はグリフィンドール対スリザリンの試合なのだ。十一時前になると、イリスはロンやハーマイオニーと一緒に、クイディッチ競技場へと向かった。いつものように更衣室前でハリーを激励すると、スタンドの一番良い席を陣取る。イリスにとつては、スリザリンのシーカーであるドラコをまともに見てしまう事になるので、実に気まずい一戦となる。

グリフィンドールの選手がグラウンドへ入場すると、スタンド中から割れるようなどよめきと歓声が巻き起こった。レイブンクローもハッフルパフも、スリザリンが負ける所を見たくて仕方がないのだ。

「ねえ、隣いいかしら」

イリスも負けじとハリーに声援を送っていると、ジニーがイリスの傍へやって来た。「いいよ」と頷きかけたイリスは、ジニーが胸に付けている大きめのピンバッジに目を留めた。——ツルンとした光沢のあるトマト色の表面には、『HP☆FC』と言う緑色の文字が踊っていた。やがてイリスの訝しげな視線に気づいたのか、ジニーは顔をパツと赤らめた。

「これ、ファンクラブの会員バッジなの。——ハリー・ポッターの」「ハリーの?!」

イリスは思わず仰天して叫んだ。ジニーによると『HP☆FC』は略称で、正式名称は『Harry Potter☆Fan Club』との事。今年入学した一年生を中心に、広まっているらしい。——確かにハリーは有名人だが、まさか本物のファンクラブまで出来ているなんて。これは、いずれ蛙チョコカードにも起用されるかもしれない。そうしたら、ロンとそのカードを眺めて爆笑しよう。イリスは密かに決意した。対するジニーはもじもじと両手を組み合わせては戻しながら、早口でまくしたてる。

「だって、彼って本当にカッコいいんだもの。勇敢だし、優しいし、有名人なのに全然気取らないし……シーカー姿も本当にステキだわ! 彼がうちに遊びに来てくれた時、私、夢なんじゃないかって何度もホッペをつねったのよ。彼のあのきれいな緑色の目、うっとりしちゃう……まるで蛙の新漬けみたい」

「か、蛙の新漬け?!」

“蛙のお漬物”みたいなものなのだろうか。どちらにしても、もつと“エメラルドみたい”とかロマンチックな表現をした方がいいのでは。イリスの渾身の突っ込みは、マダム・フーチによる試合開始の合図の笛に掻き消された。二人は途端に話を止めて、グラウンドへ視線を戻す。十四人の選手が、鉛色の空に高々と飛翔した。各チームのシーカーであるハリーとドラコは、それぞれ他の選手たちの誰よりも空高く舞い上がり、お互いに無言の睨みを利かせる。うっとりとしたハリーの様子を眺めるジニーを見て、イリスは言った。

「ジニーはハリーの事が本当に“好き”なんだね」

「ううん、〃好き〃なんじゃない……たぶん、私、〃恋〃してるの」  
Love

イリスが首を傾げると、ジニーは燃えるような豊かな赤毛を掻き上げ、イリスに向け、照れ臭そうに微笑んだ。

「うん。だって、私、彼の〃一番〃になりたいもの。彼が他の女の子と仲良くしてたら、その子に嫉妬しちゃうし、彼に私のことだけを見つめてほしかったり、二人つきりでいれたらなって、思ってるわ。あ、でも、この事は——私がファンクラブに入ってる事も絶対、誰にも言わないでね！……イリス。あなたは、恋している人は、誰かいないの？」

はにかみながらも問いかけるジニーは、——後輩の筈なのに——大人の女性に見えたような気がした。——恋している人。イリスは考えた。

「私は……」

イリスが応えようとしたその時、スタンドにいる人々がちらほらと不穏な声を上げ始めた。二人はグラウンドへ再び視線を戻す。二つあるブラッジャーのうち、一つが、スニッチを探し飛行するハリー目掛けて飛んでいく。ビーターのフレッドとジョージが何度打ち返しても、何故かそのブラッジャーは途中で向きを変え、狂ったようにハリーだけを狙うのだ。

「どういうことなんだ？ブラッジャーが特定の誰かを襲うなんて、聞いたことがないぜ」

双眼鏡を覗き込みながら、ロンが茫然と呟いた。試合の状況はすこぶる悪く——というより、双子がハリーから狂ったブラッジャーを守る事に掛かり切りになっているために——六十対零で、グリフィンドールのボロ負けだ。嫌な事は続くもので、雨も降り始めた。やがてシャワーのように降り注ぎ始めた雨に呼応するように、ジョージが空中から『タイムアウト』のサインを出し、両チームの選手たちはそれぞれのピッチへと降り立った。

イリスたちが固唾を飲んで見守る中、試合は再開された。ハリーは狂ったブラッジャーに屈しなかった。一人きりで飛びながら、鬼気迫

る表情でブラッジャーを避け、果敢にスニッチを見据え、それを捕まえようと滑空していた。

「あいつ、すごいよ！スニッチを捕まえるために、兄貴の守りを拒否したんだ」ロンが感極まった声で叫ぶ。

その負けん気の強さに、スタンド中から雨の轟音と拮抗する位の歓声が上がった。しかし、やがてそれは、蠅のようにハリーを追従するブラッジャーを警戒し、雨で視界もろくに確保できないために、迂闊に動けないドラコへのブーイングに変わった。ドラコの今までの行いを鑑みれば仕方のない事かもしれないが、イリスはギュツと心臓が押しつぶされたように痛んだ。

——最初は、イリスこそそうだと認識はしていないが、禁じられた森で助けられた時の“錯覚”から始まったかもしれない。イリスは、ジニーの言葉を思い返した。——ドラコがパンジーと仲良くしていた時、イリスは彼女に嫉妬した。久々に彼とクイディッチ競技場で会えた時、このままずっと一緒にいたいと思った。イリスは彼の冷たい色をした目が好きだった。——その時、イリスは初めて自覚した。ドラコに、“恋”<sup>Love</sup>“しているのだと。

イリスは、その時、彼に心無い言葉を投げつけられ、絶交した事すらも、一時的に忘れた。彼女はびしょ濡れになるのも構わず、スタンドの手すりに手を掛け、大声で叫んだ。

「ドラコー！がんばれーっ！」

雨音や大勢のブーイングに掻き消された筈のイリスの声援は、不思議な事に——彼にだけは届いたらしい。——ドラコは、その時、確かに頭を下げ、イリスを見た。

「あきらめちゃダメ！夢だったんでしょ！」

イリスは遙か頭上のドラコを見上げ、叫んだ。——彼はかすかに頷き、弾かれたように空中を飛び出し、ハリーの後を追った。ハリーとドラコは、それぞれ赤と緑の閃光となり、視界を遮る雨粒を弾き飛ばしながら、目の前の金のスニッチを追いかけた。その後ろを、ブラッジャーが執拗に追いかける。

二人は、時折ブラッジャーがその身をかすり、時にぶつかっても、互

いに譲る事はなかった。その迫真のデッドレースに、スタンドはいつしかドラコへのブーイングを止め、大歓声の嵐へと変わった。——グラウンドでは、チェイサーやキーパーたちが、熾烈な争いを繰り広げている。しかし、未だに状況はスリザリン優勢だ。

やがて、果てがないようなレースにも、終焉が訪れた。勝者は——ハリーだった。ハリーはスニッチを掴むと、地上へと急降下し、審判のマダム・フーチに手のスニッチを見せてから、ブラッジャーを引き連れ急上昇した。試合終了の合図の笛が鳴り、試合はグリフィンドールの逆転勝利に終わった。マダム・フーチが狂ったブラッジャーに狙いを定め、凍結呪文を成功させるのを確認してから、ハリーは意気揚々と地上へ舞い降りた。

イリスたちは、一目散にハリーの元へ駆けつけた。空中から次々にグリフィンドールの選手たちも降りてきて、ハリーに駆け寄っていく。だが、雨が酷過ぎて、口を開く事すらも出来なかったので、みんな身振り手振りで勝利した喜びを表現していた。

——イリスはふと、向こう側のピッチへ目をやった。スニッチを捕まえる事の出来なかったドラコは、チームのメンバー揃って反省会をしている様子だったが、視線に気づきイリスを見た。——彼が口を開いて何か言い掛けたところで、雨がこれ以上ない程その勢いを増し、ついに目の前が霞んで見えなくなつた。当然のように、ドラコの姿も、雨のカーテンに遮られ、見えなくなつてしまった。

☆

その夜、イリスは目を閉じても、なかなか寝付く事ができなかつた。夕方頃には雨は上がり、今は静かだ。早く夢の中に入らなければ、リドルに会う事ができないのに。そう思えば思う程、気は急いで、頭は冴えるばかりだ。——イリスは、ドラコのシーカー姿を思い出していた。もう一度、自分に笑い掛けたり、話しかけたりしてほしい。——昔みたい。でも、もう二度と、それはできない。

イリスが布団を頭からかぶって、静かに泣いていると、不意に何かの気配がした。

「イリス。目を開けてごらん」

——それは、イリスが慣れ親しんだ声だった。リドルの声だ。驚いたイリスが、ベッドからバネ仕掛け人形のように勢いよく身を起こすと——すぐ傍にリドルが立っていて、イリスに向けてにっこりと微笑んだ。

「リドル、どうして？今、夢の中なの？」

リドルは周囲を見渡しながら人差し指を口に当てて、「静かに」と囁いた。イリスは慌てて口をパチンと押える。他のルームメイトは、みんな寝ているのだ。

「今は夢の中じゃないよ。現実だ。君の力をまた少し借りて、君にしか見えない幻」として現れる事に成功したんだ」

「じゃあ、これからはいつでも会えるっていうこと？」

「そうだよ」

イリスは嬉しくなって、リドルに触れてみようとそつと手を伸ばした。しかし、彼女の手はゴーストのようにリドルの体を擦り抜けてしまう。よく見れば、彼は曇りガラスの向こうにいるかのように、輪郭がぼやけていて、薄らと彼の体を透かして向こうの景色が見えた。寂しそうな顔をするイリスの頬を半透明の手で撫で、リドルは優しく言った。

「そんな顔をしないで。君の力は、僕の指導でどんどん強くなって。近いうちに現実の世界でも、僕に触る事ができるようになるよ。……

さあ、今日は君に見せたいものがある。トロフィー・ルームへ行こう」  
イリスはギョツとしてリドルを見上げた。もう消灯時間はとつくに過ぎている。ファイルチはミセス・ノリスが襲われて以来、狂ったブラッジャー顔負けの勢いで生徒たちを摘発していると聞く。

「でも、もう消灯時間を過ぎてるし、もしファイルチに見つかったら……」  
「イリス。この前の「防衛術」の授業で、僕が君に教えたのは、一体何だったかな？」

リドルは悪戯っぽく微笑んだ。イリスはネグリジェ姿のまま、ベッドを起き出して、杖をコツンと頭に当てると、リドルに教えてもらったばかりの『目くらまし呪文』を唱えた。

誰もいない廊下を、透明になったイリスは、リドルと共にそろそろ



歩く。初めての“非行行為”だ。イリスはドキドキしながらも、不思議と怖さを感じなかった。リドルと一緒にいるだけで、何だつてできるような気分になれた。

二人は無事、トロファイ・ルームへ到達した。様々なトロファイやメダル、首席名簿などが並ぶ飾り棚の中を、リドルは歩き回り、やがてその一角を指差した。——隅にある棚の上に、「特別功労賞」の盾が一つと、「魔術優等賞」のメダルが二つ並んでいる。それらに刻まれている名前を見て、イリスは息を飲んだ。

——盾には“T・M・リドル”と“メーティス・ゴント”という二つの名前があり、メダルには二人の名前が、それぞれ刻まれている。——“ゴント”。自分のファミリーネームと同じだ。

「メーティス・ゴント。彼女は、君の父方の祖母だ」

リドルは、イリスの傍に立ち並び、静かに囁いた。イリスは茫然とリドルを見つめた。

「君が初めて日記を書いてくれた時、“もしや”と思ったよ。そして、夢で君と対した時、確信した。——君は、彼女によく似ている」

「信じられないよ。リドルと私のお祖母さんが、友達だったなんて。その、本当なの？名前違いとかじゃなくて」

リドルの目が、ふと妖しい熱を帯びた。

「イリス。僕が間違える筈がない。彼女は僕の半身だった。五十年の時を経て、僕らは偶然にも再び、出会う事が出来たんだ。——君は、確か父方の家族の事は、父親の名前以外、叔母に知らされていなかったね」

彼は含みのある言い方をした。イリスは何だか恥ずかしくなってきた。俯きながらもこくりと頷いた。

「そうだな、君がどうしても信じられないと言うなら——手っ取り早く、それを確認する手段がある。——これだ」

リドルは、トントンと指で、二人の盾やメダルの下に敷かれた緑色の絨毯を指差した。それは深く美しいエメラルド色で、蛇をモチーフとした精緻な銀系の刺繍が全体に施されている。四つの端には、銀色のたつぷりとした房飾りがあしらわれていた。

「君は箒で飛ぶのが苦手だと聞いたが、それは彼女も同じ事だった。——彼女は当時箒ではなく、絨毯で空を飛んだんだよ。この絨毯は、彼女の一族に代々伝わっていたものだ。もし、君が彼女の血縁者なら、君の命令に従う筈だ。さあ、口笛を吹いてごらん」

イリスが恐る恐る小さく口笛を吹くと、魔法の絨毯はスルンと蛇のように——盾やメダルを一切倒さずに——飾り棚から脱出し、二人の目の前で、ふわっと止まった。絨毯は、風もないのに、房飾りを揺らめかせている。

イリスは、まるで自分が物語の主人公になったような、特別な気分浸っていた。リドルに促され、彼女はおずおずと絨毯の上に乗る。何も教えられなくても、イリスは不思議とこの絨毯での飛び方が分かった。——飛べ。イリスがそう思った途端、絨毯は音もなく廊下を飛び、空いている窓から空へと飛び出した。

星々の煌めく空を、イリスは思う存分飛び回った。雲を掴める位の高さまで飛び上がり、禁じられた森の一番高い木の枝を撫で、急降下して湖の水面すれすれを飛び、まだ灯りの残るホグワーツ城を色んな角度から眺めた。湿り気のある冷たい空気が頬を打ち、イリスのすぐそばを名も知らぬ鳥が飛んでいく。——それは間違いなく、今まで箒での最高度が二メートルだったイリスにとって、初めての経験だった。

「どうだい、イリス？気分はすつきりしたかい？」すぐ隣からリドルの穏やかな声がした。

「最高だよリドル！まるで鳥になったみたい！」

イリスはこんな素晴らしい経験を見せてくれたリドルにお礼を言うために、横を向いた。——リドルは、今まで見た事の無い——悲哀に満ちた表情をして、イリスを見つめていた。

土曜日の夜遅く、ハリーは急に目が覚めた。寝ぼけ眼で枕元に置いた懐中時計を手に取ると、パチンと蓋を開け、文字盤を見る——深夜の一時だ。午前中に行われたクイディッチの試合は、ハリーがスニッチを掴んでグリフィンドールの勝利に終わり、その夜眠くなるまで談話室で祝勝会が行われた。きつとその興奮で起きてしまったに違いない。ルームメイトはみな寝静まっている。ハリーは懐中時計を枕の脇に放り、起き出して窓の景色を眺めた。ビロードのような黒い空に、銀色の星々が浮かんでいる。

——ふと、窓枠に縁どられた美しい夜空を、大きな鳥のようなものが、スツと飛び去って行った。あれは何だろう？もつとよく見ようと、窓硝子に額を押し当てて目を凝らした時、ふと背後から小さくすすり泣く声がして、ハリーは思わず飛び上がった。反射的に後ろを振り返り、ハリーはびっくりして叫んだ。

「ドビーー」

そこには、ドビーが立っていた。今年の夏休み中、ハリーをあの手この手で散々苦しめた、あの屋敷しもべ妖精のドビーだ。幸いな事に、祝勝会で余程騒ぎ疲れたのか、ロンたちはこの騒ぎに気づかず、深い眠りについたままだ。ハリーは周囲を見渡して安堵のため息を零すと、改めて目の前のドビーを見つめた。彼はテニスボールのように大きな目から大粒の涙を滴らせ、こちらを悲しげに見つめている。

「ハリー・ポッターは、学校に戻ってきてしまった」

ドビーは打ちひしがれたように呟くと、包帯だらけの両手をぎゅつと握り締めた。

「ドビーめが、ハリー・ポッターに何べんも何べんも警告したのに。ああ、なぜ、あなた様はドビーめの申し上げたことをお聞き入れにならなかったのですか？汽車に乗り遅れた時、なぜお戻りにならなかったのですか？」

ハリーの意識が急ブレーキを掛けた。“汽車に乗り遅れた時”？ドビーはあの時、その場にいなかったのに何故その事を知っているん

だ？ハリーにとって、“危険だからホグワーツに戻っては駄目！”の一点張り、その理由を教えてくださいもせず、ダーズリー家でひたすらに自分を追いつめ続けたドビーは、もはや『疫病神』以外の何者でもなかった。ハリーは警戒しながら、ゆっくりと口を開いた。

「なぜここに来たんだい？それに、どうして僕が汽車に乗り遅れた事を知ってるの？」

ドビーは、ハリーの問いに答えずに、唇を震わせた。ハリーは突然、もしやと思い当たった。——自分とロンの時だけ、柵を通り抜けられなかったなんて、可笑しいと思っていたのだ。ドビーは魔法を使え、理由は知らないが、“ハリーを守るため”ならどんな強硬な手段も取ってみせるやつだ。

「もしかして、あれは君だったの？」ハリーは冷静な口調で尋ねた。

「僕たちがあの柵を通れないようにしたのは」

「その通りでございます」

ハリーの推理は的中した。ドビーは大きな耳をパタパタとはためかせ、何度も頷いたのだ。“その通りでございます”じゃないだろう！その屈託のない様子に、ハリーは心の中から怒りのマグマが沸々と湧いて来るのを感じたが、今朝のクイディッチでのスニッチを掴んだ栄光の瞬間を思い出し、何とか気持ちを落ち着かせる。ハリーが胸に手を当てて深呼吸をしている間にも、ドビーは甲高い声で話を続ける。

「ドビーめは、隠れてハリー・ポッターを待ち構えておりました。そして汽車への入口を塞ぎました。ですから、ドビーは後で自分の手にアイロンをかけなければなりませんでした」

そう言うと、ドビーは包帯だらけの両手をハリーに見せた。

「しかし、ドビーはそんなこと気にもしませんでした。これでハリー・ポッターは安全だと思ったからでございます」

しかし、しかし……」

ドビーは声を詰まらせると、両手で顔を覆い、悲劇的な声で呻いた。

「ハリー・ポッターは、別の方法で学校へ行ってしまった！」

「君のせいで、ロンも僕も退校処分になるところだったんだぞ！」

ハリーはついにカッとなって、声を荒げてしまった。ロンが「いいぞ、ハリー。スニッチはそこだ」等と寝言を呟きながら寝返りを打つたのを見て、ハリーは、はたと思いついた。——そうだ、ロンも起こそう。しかし、彼の寝ているベッドに近づこうとした時、ドビーが鋭い悲鳴を上げた。

「いけません、ハリー・ポッター！ドビーは”あなた様だけに”警告しにまいりました」

つまり、自分以外の人間に姿を見られたら、どこかへ行ってしまうという事か。もしくは、またもや迷惑極まりない魔法の強行手段を取られるか。もし後者だった場合、親友を危険な目に遭わせる事は出来ない。ハリーの歩みは止まり、代わりに大きなため息が零れた。ドビーはホツとしたように弱々しく微笑むと、自分が着ている汚らしい枕カバーの端で、鼻をかんだ。その様子が余りにも哀れで、ハリーは思わず憐憫の眼差しでドビーを見つめた。

「ドビー。どうしてそんなものを着ているの？」

ドビーは枕カバーを摘まんで見せると、これは”隷従の証”なのだ”と悲しげに告げた。屋敷しもべ妖精は、特定の魔法使いを主人とし、主人やその家族に仕えている証として、その家にある”布”を身に付ける。そして、主人から衣服を与えられる事で、奴隷の身から解き放たれ、自由になれるのだと続けた。ドビーは再び枕カバーで鼻をかむと、出し抜けにこう言い放った。

「ハリー・ポッターは、どうしても家に帰らなければならない。次なる案をドビーめは考え、そして閃きました。……ドビーのブラッジャーでそうさせることができる」と

ハリーは心臓が大きくドクンと脈打つのを感じた。——今朝の、あの狂ったブラッジャー。何とか軽傷で済んだから良かったものの、一歩間違えれば大怪我、もつと運が悪ければ死ぬところだったかもしれない。その時の恐怖や緊張感がひしひしと全身に蘇って来て、ハリーはドビーを憎々しげに睨み付けた。

「君のブラッジャー？一体どういう意味？君が、ブラッジャーで僕を殺そうとしたの？」

「殺すわけではありません！めっそうもない！」

ドビーは驚愕の余り、ただでさえ大きな目玉をこれ以上無い位に見開いた。

「ドビーは、ただただ、ハリー・ポッターの命をお助けしたい、それだけなのでございます！ここに留まるより、大怪我をして家に送り返される方がいいのでございます！」

ハリーはドビーから視線を外さないまま、一歩彼に詰め寄った。

「ドビー。僕が、家でどんな扱いを受けているのか、君は見た筈だ。一体なぜ、君は僕をそうまでして家に送り返したいのか、話せないの？」  
「ああ、ハリー・ポッターがおわかりくださればいいのに！あなた様が、わたくし共のように、魔法界の卑しいクズのようなものにとって、どんなに大切なお方なのか、わかってくださっていただければ！」

ドビーは咽び泣いた。幾筋もの涙が、長い尖がった鼻を伝って、枕カバーに染みを作る。ドビーは時折声を詰まらせながらも、ハリーがヴォルデモート卿を打ち倒した事で、今まで害虫のように扱われていた屋敷しもべ妖精たちの暗い生活に、大きな希望の光が差したのだと訴えた。

「あなた様は、わたくし共にとりまして、希望の道標なのでございます。．．．それなのに、ホグワーツで恐ろしいことが起きようとしている。もう起こっているのかもしれない。歴史が繰り返されようとしている」のです。またしても“秘密の部屋”が開かれ．．．」  
そこでドビーはハツと恐怖で凍り付いたように動きを止め、ハリーのベッドまで小走りで近づくと、脇机にあつた空の水差しを掴み、ハリーが止めようとする前に、自分の頭を凄まじい力でぶった。

「“秘密の部屋”は本当にあるんだね、ドビー。以前にも、部屋は開かれた事があるんだね。教えてよ！」

ハリーは、ドビーの水差しを持つ手を掴み、尋ねた。「秘密の部屋”の事をドビーは知っている。彼の言う”危険”とはその部屋の事を言っているのだと、ハリーはようやく合点がいった。「スリザリンの継承者”は、ミセス・ノリスを石にして、壁に文字を書いたあの日から、一向に新たな動きを見せていない。ハリーの聞いた”不気味な

声”も、その日以降、ついぞ聞いた覚えがない。“ハリーがスリザリンの継承者か？”等という、不名誉極まりない生徒たちの噂も落ち着き始めた今頃になって、なぜ、ドビーがそうまでしてハリーを本物の“スリザリンの継承者”から守りたいのか、ハリーは理解する事が出来なかった。それに、疑問は一つだけじゃない。ハリーは再び口を開いた。

「だけど、僕はマグル出身じゃないのに、その部屋がどうして僕にとって危険だと言うの？」

「ああ、どうでもう聞かないでくださいまし。哀れなドビーにもうお尋ねにならないで」

ドビーは激しく首を横に振りながら、口ごもった。

「闇の罫がここに仕掛けられています。それが起こる時、ハリー・ポッターはここにいてはいけません。帰って、危険すぎます」

「ドビー、一体誰が部屋を開いたの？以前に開いたのは誰だったの？」  
途端にドビーの顔は、恐怖一色に染まった。彼の体も極寒の地にいるかのように、ぶるぶると大きく震え始める。その尋常ではない位に怯えた彼の様子は、ハリーに言い様のない不安感を呼び寄せた。

——もしかして、ミス・ノリス事件は序章に過ぎず——本当の事件は、これから起こるのでは？そうだとすれば——ハリーの頭にふと、ハーマイオニーの姿が浮かんだ——“マグル生まれ”の彼女の身が危ない。

「ドビーには言えません、言えないのでございます。お願いです、家に帰って」

「僕はどこにも帰らない！」ハリーは怒りに任せ、鋭く言い放った。

「僕の親友の一人は“マグル生まれ”だ。ドビー、頼むから、本当の事を教えてくれ。もし“部屋”が本当に開かれたのなら、彼女が真っ先に狙われる」

「ハリー・ポッターは、友達のために自分の命を危険にさらす！」

ドビーは水差しを取り落とし、悲劇のヒーローでも見るかのような目でハリーを見上げながら、呻いた。

「なんと気高い！なんと勇敢な！でも、ハリー・ポッターはまず自分を

助けなければ……」

ドビーは突然、ピタリと全ての動きを止めた。

「友達のために、自分の命を危険にさらす……」とドビーは先程言った自分の言葉を、茫然と繰り返す。

「そうだ。僕は友達のために、“部屋”を開いた犯人を暴きたいんだ、ドビー」

絶望に歪んだドビーの大きな口から、金属をすり合わせたような、耳障りな悲鳴が漏れた。それは徐々に——サイレンののように大きくなり、聞く者を訳もなくゾツとさせるような響きをもって、短い間、部屋中にこだました。

「ハリー・ポッターは」友達のために命をかける——ドビーは言っただけじゃなかった！ドビーは言っただけじゃなかった！」

「ドビー、静かにして！みんなが起きちゃう！」

ハリーが思わずドビーの肩を掴んで揺さぶると、ドビーは咽び泣きながら、囁くようにこう言った。

「ああ、ハリー・ポッター、なんてお可哀そうな方！」真実”をお知りになったら、あなた様はどんなにお嘆きになるでしょう！」

“真実”って何？ハリーが尋ねようとした途端、不意にパチツと音を立ててドビーの姿が掻き消え、ハリーの手は空をかいいた。

「にやにやとだい？」

先程のドビーサイレンが堪えたのか、ついにロンが起き出して、寝ぼけ眼をこすりながら、神妙な表情を浮かべるハリーを見つめていた。

☆

翌朝、大広間で朝食を取りながら、イリスはハーマイオニーと一緒にハリーから事の顛末を聞いた。あの謎の屋敷しもべ妖精ドビーが、再びハリーの目の前に現れたと言うのだ。

「決定だな」とロンは目玉焼きをペロリと一口で平らげながら、自信満々に言い放った。

「ズバリ、マルフォイが」スリザリンの継承者”だつてことさ」

トラウマを不意打ちで穿り返されたイリスは、飲んでいたかぼちゃ



ジューズを盛大に吹き出した。

「マルフォイが？ 貴方、本気で言ってるの？」ハーマイオニーは疑わし気だ。

「本気も本気、大本気さ」ロンは意気込んだ。

「そのドビーってやつは、マルフォイ家の屋敷しもべ妖精に違いないよ。」

部屋は過去にも開けられた事があるって、そいつが言ってたんだろ？ きつとルシウス・マルフォイが学生時代に部屋を開けたんだ。間違いないね。

それで、我らが親愛なるドラコに開け方を教えたよ」

「ウーン……」

ハーマイオニーは、食事の手を止めて考え込み始めた。その様子は、ロンの話の内容よりも——何か“別の事”を考えているように見えた。

「唸ってる場合じゃないぜ、ハーマイオニー！ あいつの家系を見てくれよ。あの家系は全部スリザリン出身だ。」

あいつ、いつもそれを自慢しているじゃないか。あいつらならスリザリンの末裔だっておかしくない。あいつの父親もどこからどう見ても、悪玉だよ」

うんうん、と自分の名推理に頷くロンを見て、ハリーはチラツと向かいに座るイリスを見つめた。

「ねえ、イリス。君がマルフォイ家にいた時、本当にあいつら、何か怪しげな事を言ったり、したりしてなかったかい？」

イリスはまるで渋柿を食べた時のように、露骨に顔をしかめた。——マルフォイ家の事は、もうイリスにとって“心の奥深くに封印した、輝かしくも辛く悲しい思い出”だったのだ。イリスは無表情でゆっくりと言った。

「……そうだね。呪いのコインを送られたり、手紙を妨害されたり、拉致られた他は、何も怪しげな事を言ったり、したりしてはなかったよ」

「ワーオ。君もついにブリテイッシュジョークを言えるようになった

か。ジャパニーズ卒業だな」

しかめっ面でロンと握手をするイリスを見ながら、「悪かったよ、ゴメン」とハリーが気まずそうに謝った。

「でも、僕もマルフォイが怪しいと思う。．．あいつ、壁の文字を見た時、様子が変だったんだ。」マグル生まれ“じゃないはずなのに、腰を抜かしてへたり込んでた。

おかしいと思わないかい？スリザリン崇拝者のあいつなら、逆に大手を振って自慢するはずだ。きつと犯人じゃなくても、”何かを知っている”に違いないよ」

最もなハリーの意見に、三人は黙り込んだ。

「そうね。その可能性は否定できないわ」とハーマイオニー。

「でも、どうやってあいつに聞き出す？」ハリーが聞いた。

ハーマイオニーはワッフルを切り分けていたナイフとフォークを皿に置くと、腕組みをして、真剣な表情で三人を見据えた。

「方法がない事はないわ。もちろん、難しいの。それに危険だわ。どういう方法かというとな——」

彼女は用心深く周囲を見渡しながら、声量を落とす、囁くように言った。

「——私たちが、スリザリンの談話室に入り込んで、マルフォイに正体を気づかれずに、いくつか質問する事なのよ」

「そんなことできるもんか！」ハリーとロンの声がハミングした。

イリスはハーマイオニーの言葉の意味を少し考えて、合点がいったように「あ！」と声を上げた。

「ポリジューズ薬？」

「本当に賢くなったわね、イリス。大正解よ」

ハーマイオニーは嬉しそうに顔を綻ばせると、イリスの頭を撫でた。

「それ、何？」ハリーとロンの声が再びハミングした。

「ほら、数週間前、スネイプ先生が授業で話してたでしょ」

——と、イリスは言ったものの、ハリーとロンの顔が“スネイプ”の単語を聞いた途端、苦虫を噛み潰したように歪んだのを見るや、諦

めて薬の解説のみに専念する事にした。

「ポリジューズ薬っていうのは、自分以外の誰かに変身できる薬だよ」「私たちで、スリザリンの誰かにそれぞれ変身するの。誰も私たちの正体を知らないから、マルフォイはきつと何でも話してくれるわ」

知的な好奇心で瞳を輝かせながら、ハーマイオニーは続きを話す。

「もし元に戻れなくて、僕らが永久にスリザリンの誰か四人のままだったらどうする？」ロンは眉をひそめた。

「大丈夫だよ、ロン。しばらくすると効き目は切れるの」

イリスはロンを宥めるように言いながら、浮かない表情で考えを巡らせた。——きつとドラコは、“スリザリンの継承者”ではない。イリスは信じたかった。彼は臆病だし、怪物を引き連れてミセス・ノリスを石化するなんて、そんな残酷な事を出来る訳がない。イリスは目を閉じて、自分に言い聞かせた。

——スリザリン生に変身して、ドラコに会う。これは、“真実”を解き明かすための、大切な行為なんだ。部屋の事を知っているかもしれないドラコに会うのは、“必然”なんだ。だから——だから、また会えて嬉しいなんて、思っちゃダメ。しかしイリスは、次第に高鳴っていく心臓の音を抑える事が出来なかった。

『もう、ドラコとの事は終わったんだ。スツパリ諦めなきや。だって、“友達”と思っただ事はない”って言われたでしょ？』イリスの理性が咎めるように言うと、イリスの本心がニヤニヤ笑いながら、耳元でこう囁き掛けた。『でも、クイディッチの試合では目を合わせてくれたし、貴方の言葉にも答えてくれた。それに、試合後は何か言い掛けたよ？貴方と仲直りしたいんじゃない？』

たとえ自分だと気づかれなくても、もし、もう一度、話しかけ、笑いかけてくれるのなら。——不満そうにため息を零す理性を押しつけて、イリスの本心が笑った。

「むしろ、材料を手に入れる方がとても難しいの。『最も強力な魔法薬』という本にそれが書いてあるって、スネイプがそう言ってたわ。その本、きつと図書室の『禁書』の棚にある筈だわ」

ぼんやりとするイリスを横目に、三人は深刻な表情で互いを見やつ

た。『禁書』の本を持ち出す方法はたった一つ、「先生のサイン入りの許可証を貰う事」だった。

☆

四人の心配の種であった「許可証」は、主にハリーとハーマイオニーの奮闘により、ロックハートから与えられた。「闇の魔術に対する防衛術」の授業中、ハリーがロックハートの著書に登場する「狼男」の名演技で、彼のご機嫌を上げ、就業のベルが鳴った後、ハーマイオニーが言葉巧みにロックハートにお願いしたら、彼は拍子抜けする位にあっさりと許可証にサインをしてくれたのだ。

かくして四人は、手に入れた『最も強力な魔法薬』を手に、ハーマイオニーお勧めの「嘆きのマートル」というゴーストが住む「故障中」のトイレへ向かった。——奇しくもそこは、「壁の文字」の近くに位置していた。

「でもハーミー。前、ハーミーは」ここは危ないから入っちゃダメ  
“って”

「だからこそ、よ。イリス」ハーマイオニーはにつこり笑った。

「まともな神経の人は、こんなところへなんか来ないわ。だから、私たちのプライバシーが保障されるってわけ」

「わたしのプライバシーは侵害されるけどね！」

怒りに震えるマートルの半透明の顔が、四人のすぐ目の前にあつた。——どうやら、話を盗み聞きされていたらしい。ハーマイオニーは引き攣った笑みを浮かべながら、果敢にも「こんにちは、マートル」と挨拶した。

マートルはそれには答えず、絹を引き裂くような悲鳴を上げ、天井近くまで飛び上がった。そのままの勢いで一番奥の個室へ吸い込まれるように消えると、激しい水飛沫を上げると共に、絶望的なすすり泣きが聞こえ始める。

謝りに行こうとするイリスを押しとどめ（ハーマイオニーが気まずそうな顔をしながら、「謝ったら余計にややこしい事になるわ」と言い聞かせた）、四人は適当な個室へ入り、鍵を掛けた。——マートルは悲しみに泣き喚く事のみ集中しており、彼女の縄張りに侵入した四人

に興味を示そうともしない。

「あつたわ」

「ハーマイオニーが、興奮した面持ちで“ポリジュース薬”という題のついたページを指差す。そこには他人に変身していく途中のイラストがあつた。挿絵の人の表情が苦痛に歪んでおり、ハリーの顔に明らかかな不安が映し出された。彼の不安をよそに、ハーマイオニーとイリスは“調合方法”や“材料のリスト”の欄を見て、楽しそうにお喋りをしている。

「こんな複雑な魔法薬は、初めてお目にかかるわ」

「でも、意外に材料は、普通のものが多いね。——クサカゲロウ、ヒル、満月草とニワヤナギは、生徒用の棚にあるもの」

「ウワーツ、見てよ、イリス！二角獣の角の粉末と毒ツルヘビの皮の千切り、だなんて。どこで手に入れたらいいのか、わからないわ」

「あー、たぶんそれは……先生用の保管倉庫にあるんじゃない？私、時々補習でそこに入るけど、あそこは本当に何でも揃ってるよ」

「きつとそうよね。ハア、前途多難だわ。あとは……変身したい相手の一部」

「何だつて？」

「ロンが聞き捨てならないとばかりに、鋭く聞いた。

「どういう意味？僕、クラップの足の爪なんか入ってたら、絶対飲まないからね」

「爪が嫌だったなら、髪の毛一本とかでも十分なんだよ、ロン」イリスは優しくロンに言い聞かせた。

「いや、一部の“種類”の問題じゃないよ、イリス。髪でも爪でも、あいつの体の一部を飲むのがイヤなんだ！」

「ロンの魂の叫びを聞かなかつた事にして、二人は話を続ける。ハリーは心配そうに口を開いた。

「ねえ、ハーマイオニー。どんなに色々盗まなきゃいけないか、わかってる？スネイプの個人用の倉庫に盗みに入るなんて、前途多難どころじゃない。きつと上手く行かない気がするよ」

「ハーマイオニーは本をピシッと閉め、ハリーとロンをひと睨みし

た。

「そう。二人共怖気づいて止めるって言うなら、結構よ。イリスと二人でやるから。」

私だって規則を破りたくないわ。でも、“マグル生まれ”の者を脅迫するなんて、ややこしい魔法薬を密造するより、ずーっと悪い事だと思わない?」

「君から規則を破れって言うなんて、僕あ思いもよらなかつたよ」と口ン。

「でも、作るのにどれくらいかかるんだい?」

ハリーが尋ねると、ハーマイオニーは再び本を開いた。

「そうね。満月草は満月の時に摘まなきゃならないし、クサカゲロウは二十一日間煎じる必要があるし・・・材料が全てすぐに手に入ったとしても、最短で一カ月はかかるわね」

「一カ月だって!あいつがいつ再始動するかわからないって時に、そんなにかかるのかい?」

ロンが思わず仰天して叫ぶと、ハーマイオニーのご機嫌が露骨に悪くなった。ロンは彼女のご機嫌を回復させるために、イリスに目をやった。

「そうだ。イリス。君が、ポリなんとか薬のもっと効率のいい作り方ってのをスネイプに教えてもらうってのはどうだい?今度の補習かなんかでき」

イリスは深いため息をつき、呆れたような表情でロンを見上げた。「無理に決まってるじゃん。・・・あのさあ、スネイプ先生の地雷を踏まないために、私が日々、どんなに心を砕いているか。ロンは知らないから、そんな簡単に言えるんだよ。」

・・・ほら、去年の授業を覚えてる?」

☆

それは、去年の冬頃の授業の時だった。事前に補習でいつも正しい作り方を学んでいるイリスは、その日も神経を張り詰め、万全の態勢で授業に臨んでいた。一段落ついて少し休憩をしようとした時、ふと、隣のテーブルに着いているネビルが、間違ったやり方をしている

のに気付いた。イリスが親切心から、近づいて間違っている事を教えていた時、他の生徒達の様子を見ていたスネイプがゆっくりと近づいて来た。

「君は随分と賢くなった。不出来な者のために、自ら講釈を垂れるとは」

スネイプは取ってつけたような微笑みを浮かべ、腕組みをして、凍り付いたように自身を仰ぎ見るイリスを見つめた。

「では、もう吾輩の補習授業など必要ないと、自分一人で全ての魔法薬を完璧に調合できると、そう仰りたいわけだな？」

確認するように言うスネイプに、イリスは慌てて首を横に振った。スネイプの補習授業は確かに恐怖と緊張の極みにあるが、イリスは彼の教授あればこそ、今まで苦手だった魔法薬を好きになり、ネビルの調合に助言を与える事ができるまでに成長したのだ。しかし、その事をうまく伝えるには、イリスは口下手過ぎたし、スネイプは怖すぎた。

「い、いいえ、先生。出過ぎた真似をしてすみませ・・・」

「グリフィンドール十点減点」

イリスの発言にかぶせるようにして、スネイプは不機嫌そうに冷たくそう言い放つと、マントを翻し別のテーブルへ向かった。隣でネビルが震えながら「ごめん」と何度も繰り返していた。

☆

また季節は過ぎ、今度は春頃の授業の時だった。イリスは完璧な手順で薬を作り上げ、クラス中で一番に、教卓に座るスネイプに持って行った。スネイプはフラスコを取り上げると、目を細め、じつと自身を見つめた。——会心の出来だ。きつとこれは、スネイプ先生に「よく出来た」と頭を撫でてもらえちゃったりなんかして。イリスはあらゆる想像をしながら、わくわくして彼の言葉を待った。

「ゴーント。どうやってこれを作った？」

しかし、返って来たのは如何にも不機嫌そうな声だった。イリスは狼狽した。“どうやって”と言われても、教科書通りに完璧に作った筈だ。——“教科書通り”。イリスはハツとなった。その様子を見透かしたように、スネイプは冷笑しながら言った。

「先日の吾輩の忠告を無視し、“教科書通り”にヨモギを乾煎りしたな?・・・軽薄な薬だ、中身がない。グリフィンドール五点減点」

☆

「・・・とまあ、こんな感じなわけですよ」

イリスは肩を竦めて見せた。

「狂ってるぜ。マーリンの髭!’教科書通り”に作って減点なんて!’」ロンは憤慨して息巻いた。

「僕なんか、教科書通りにすら作れた事もないのにさ!’」

「威張る事じゃないわ、ロン。・・・以前から思ってたんだけど、もう“補習”というより、“個人教授”よね。完全に”ハーマイオニー”はため息をついた。

「スネイプの本当の”お気に入り”はきつと、マルフォイじゃなくて貴方なんじゃないかしら。学期末の”忘れ薬”事件然り、よ」

「やめてくれよ、イリスがあんな変態野郎の”お気に入り”だなんて。心底ゾツとするね」ロンが毒づく。

「イリス。本当に、あいつに変な事、されてないかい?マクゴナガル先生に相談した方がいいんじゃないか?」

ハリーに真剣な表情で問われ、イリスは慌ててかぶりを振った。

「先生はそんなことしないよ。それに私、先生のこと尊敬してるし、先生のおかげで魔法薬を好きになれたんだもん。きつと学期末の試験も、何か考えがあったんだよ。」

私が言いたいのは、そんな緊迫した状態なのに、「先生、ポリジューズ薬の手っ取り早い作り方を教えてください!」なんて聞いたらどうなると思う?つてこと。ま、きつとこんな感じだね」

イリスは眉をしかめ、口角を下げ、腕組みをすると、低い声音で冷たく言い放った。

「なぜ、ポリジューズ薬などに興味を持つ?二年の魔法薬すら完璧に作れない君が?補習内容と関連のない下らぬ質問をした罰として、グリフィンドール十点減点」

その物真似が余りに似ていたので、三人は(つられてイリスも)爆笑してしまった。死への空想を邪魔され、怒り狂ったマートルが天井



から水をぶちまけるまで、四人はしばらく笑いを止める事ができなかった。

☆

その日の夜、図書室で自習を終えた後、ハーマイオニーはイリスたちの待つグリフィンドール塔へ向かって歩みを進めていた。ふと廊下の先で小さな人だけを見つければ、興味をそそられ近づくと、フレッドとジョージが露店を開いていた。二人は床の上にカーペットを広げ、商品らしき羊皮紙をいくつか並べている。やがてフレッドの方が、人垣の間からハーマイオニーを見つけ、屈託のない笑顔を浮かべた。

「ハーマイオニー嬢！ありがとよ！君のおかげでひと稼ぎできた」

「何の事？」

ハーマイオニーが尋ねると、フレッドはしたり顔で羊皮紙を一枚取り上げると、彼女に手渡した。ハーマイオニーはそれをマジマジと見て、眉をひそめた。——それは、一日単位の学生向けのスケジュール表だった。しかも、どこことなく、以前自分がイリスにあげたものと雰囲気似ている。

「二年生向けに、俺らが作ったのさ」フレッドが悪戯っぽくウインクして見せた。

「イリスに最近の成績爆上がりのお秘密を聞いたら、君のスケジュール表のおかげだ」って言うじゃないか」ジョージが笑う。

「一儲けの神託だな。あれは。ガリオンの匂いがプンプンしたね」とフレッド。

「頼み込んでイリスにスケジュール表をチラ見させてもらって、それを参考に作って・・・そして、これさ」

ジョージは、帽子いっぱいに入った硬貨の山を自慢げに見せた。

「いやー、スリザリンの怪物避けのグッズが、肝心のやつこさんが動かないもんで、鳴かず飛ばすの売り上げでな。助かったぜ。ありがとさん」

「馬鹿みたい！貴方達の金儲けに私たちを巻き込まないで。私、行くわ」

ハーマイオニーは呆れたようにため息を零し、その場を足早に立ち去った。どうやら、“落ちこぼれ”のイリスが成績を上げ始めたのは、“秀才”ハーマイオニーの教授（とスケジュール表）のおかげだと、巷で噂になっていっているらしい。

——それは違うわ。私のおかげじゃない。ハーマイオニーは、一人唇を噛み締めた。

何故なら、イリスは、彼女が教えたのとは“また違うアプローチ方法”で、めきめきと成長しているからだ。誰よりも彼女のそばで共に勉学に励んでいるハーマイオニーには、それが悔しい程、手に取るように理解できた。——まるでハーマイオニーを差し置いて、誰か別の人が、イリスに勉強を教えているようだった。しかし、気になって何度かイリスに尋ねたが、彼女は「ハーマイオニーのおかげだよ」と言うだけだった。実際、イリスはハーマイオニーのスケジュール表に従って行動し、ずっと彼女と一緒にいる。誰か他の人と会っている気配は、全くないのだ。

イリスの不審な点は、他にもある。成績が上がり始めると同時に、彼女の体調は崩れ始めた。新学期の初め頃は、何故かやたらとトイレに行きたがったが、最近はそれが無い代わりに、時々——誰もいない空間をじつと見つめ、親しい友人に出会った時の様に、ニコツと笑い掛けたりする事があった。ハーマイオニーはゾツとして「どうしたの？」と尋ねるのだが、決まって、イリスは慌てた調子で「何でもないと繰り返すばかりなのだ。

イリス。今まで、貴方は何でも私に話してくれたわ。ハーマイオニーは、心の中で大切な親友に語り掛けた。でも、今は違う。貴方は何かを隠している。

ぐるぐると、ハーマイオニーの頭の中で、無数の情報が錯綜する。最初に感じた異変は、談話室で聞いたイリスの歌声。その後、様子を見に行ったイリスのローブには、小さな鳥の羽がくっ付いていた。その翌日、偶然通り掛かったハグリッドから雄鶏が何者かによって殺された事を聞いた。——急に上がり始めた彼女の成績。彼女の一連の不審な行動。一向に、本調子に戻らない彼女の体調。

——それだけではない。ハーマイオニーは、ミセス・ノリス事件の翌日、ある情報をネビルから得たのだった。

『あの時、君たちがダンブルドアに連れられた後なんだけどね。マルフォイが、ひどく慌てた様子でイリスの居場所を聞いてきたんだ。僕、思わず、“医務室にいる”って言っちゃって。』

追いかけてようとしたんだけど、クラブとゴイルに邪魔されて、行けなかったんだ。ねえ、イリス、大丈夫だったかな？』

マルフォイは、確実に“何か”を知っている。ハーマイオニーは確信した。そして恐らく、彼の父であるルシウス・マルフォイの手によって彼女が攫われた事も、関係しているのに違いない。

ねえ、イリス。貴方は——“秘密の部屋”に関わっているの？ハーマイオニーは三人にこそ告げていないが、何としてでもポリジューズ薬を使ってマルフォイから情報を引き出すために、一人決意を固めた。

☆

それから一週間後、四人が玄関ホールを歩いていると、掲示板前がちよつとした人ばかりが出来ていた。同じ寮生であるシェーマス・フイネガンとデイン・トーマスが、興奮した様子で、四人を手招きする。

『決闘クラブ』を始めらんだって！』とシェーマス。

『今夜が第一回目だ。決闘の練習なら悪くないな。近々役に立つかも』とデイン。

ロンは興味津々で、掲示を覗き込んだ。彼に続こうとしたイリスは、いきなり後ろから手を強く引つ張られた。体勢を崩して仰向けに転びそうになりながらも、イリスは何とか踏ん張り通し、振り向いた。『あんだ、ドラコの何なのよ？』

手の主は、イリスの恋敵——パンジー・パーキンソンだった。いつもツンと冷たく澄ましている筈のその目は、今は燃えたぎる嫉妬と怒りでギラギラしている。

『私、見たんだから。あんだが、クイディッチの試合の時、彼に“色目”を使ってるの』

「色目」なんか、使ってない」

イリスは掴まれたままの手を振り払うと、憤然と言り返した。

「へーえ？」パンジーは蔑んだような笑みを浮かべた。

「じゃあ、あんたは彼の事が好きじゃないのね？私がドラコの“ガールフレンド”になってもいいってわけ？」

嫉妬したイリスが思わず睨み付けると、パンジーは心底愉快そうに笑った。

「やっぱりね！あんた、彼の事が好きなんだ！彼に嫌われてるくせに！」

「・・・ねえ、私も彼の事が好きなの。だから勝負しましょう？」彼を賭けて」

パンジーは芝居がかった調子で言うと、『決闘クラブ』の掲示を指差した。

「今夜の『決闘クラブ』で、私はあんたを決闘相手に指名するわ。これでもし、あんたが私に勝ったら、私はもう彼に手出しはしない。いくらでも不毛な片思いを続けてればいいわ。」

でも、私があんたに勝ったら・・・」

パンジーはグイとイリスの顔に自分の顔を寄せ、吐き捨てた。

「もう二度と、彼に話しかけないで！」

☆

イリスは、パンジーの姿が見えなくなるまで、彼女を睨み続けていた。パンジーの目論見など見え透いている。——『決闘クラブ』で、イリスに呪いをかけ、晒し者にするつもりなのだ。ドラコにイリスの情けない姿を見せ、彼を失望させる算段なのだろう。負けるもんか。イリスは両手を握り締めた。たとえ、彼に私の思いが通じなくたって、構わない——イリスは悲壮な決意を固めた——あんな意地悪なやつを、ドラコのガールフレンドにさせるわけにいかないんだ。

リドルの教授のおかげで、成績を順調に上げ続けたイリスは、自分に“自信”を持てるようになった。リドルは、彼女の成績だけでなく、その心身をも著しく成長させてみせたのだ。一年生の時こそ、いつも自信なさげにおどおどとしていたイリスだが、今は、その瞳は勇

気と自尊心に満ち、立ち姿は凛としている。そこにはもう、かつて“落ちこぼれ”と笑われた“泣き虫イリス”の面影は、微塵も見当たらなかった。彼女は祈るように両手を組み、秘密の友・リドルに心の中で語り掛けた。――リドル。見守ってて。

「イリス。心配する事はない。十分の事を、僕は君に教えた筈だよ」彼女の心の声に呼応するようにして、ふとリドルの優しげな声があった。イリスは周囲を見渡したけれど、彼の姿はどこにも見えなかった。

夜八時、四人は大広間へ急いだ。各寮生が座る四つの長いテーブルは取り払われ、一方の壁に沿って金色の舞台が設置されている。何千本もの蠟燭が宙を漂い、その舞台を照らしていた。天井には見慣れた魔法仕掛けの夜空が広がり、その下では、杖を持った大勢の生徒達が集まっていて、それぞれ興奮した面持ちでお喋りに興じている。

「一体、誰が教えるのかしら?」

興味深げに周囲を見渡しながら、ハーマイオニーがハリーに尋ねる。イリスが、ふと強い視線を感じて振り向くと、人垣の向こうに此方を睨むパンジーが立っていた。彼女はイリスと視線がバチツと合うや否や、底意地の悪そうな笑みを浮かべて、「逃げんじやないわよ」と唇の動きだけで囁いた。

「誰だっていいよ。『あいつ』じゃなければ・・・」

ハリーの不吉な予言は的中し、彼は露骨に顔をしかめて呻き声を上げた。ギルデロイ・ロックハートが、輝くようなスマイルで舞台上に登場したのだ。煌びやかな深紫のローブを纏った彼は、その後ろに——誰であろう——いつもの黒装束のスネイプを従えていた。ロックハートは生徒達に手を振り、「静粛に」と呼びかけた。

ロックハートは自分が主賓として『決闘クラブ』を執り行う事を告げると、スネイプを——恐れ多くも——自分の“助手”だと、戸惑う事無く紹介した。

「ねえ、ロックハート先生って、目が見えないのかな?」

好き放題な表現で“助手”を紹介するロックハートの隣に立つスネイプが、明らかに殺気立ち、その上唇もめくれ上がっているのを見て、たまらず震え上がりながら、イリスがハリーに尋ねた。ハリーも肩を竦めながら答える。

「そうなんじゃない?もし僕だったら、スネイプがあんな表情で僕を見たら、回れ右して全速力で逃げるけど」

「なあ。相討ちで、両方やられつちまえばいいと思わないか?」ロンが二人に囁いた。

ロックハートはスネイプの殺意を気にもせず、生徒達の——さまざまな意味での——期待に満ちた眼差しを一身に受けながら、「模範演技」を始めた。しかし、「模範演技」は、ほんの数秒足らずで終わってしまった。開始直後にスネイプが唱えた『武装解除呪文』によって、ロックハートは吹き飛ばされ、無様にも床に伸びてしまったからだ。彼は慌てて立ち上がり、身だしなみを整えつつも、こう言い放った。「模範演技はこれで十分！きて、ではこれから、いきなり実戦は難しいでしょうから……そうですね、モデルとなる組を選びましょう。誰か、いませんか？」

スリザリン生で固まったグループから、手が挙げた。——パンジー・パーキンソンだ。イリスも迷う事無く自分の手を挙げた。隣でハーマイオニーが驚愕の余り、口をポカンと開けていたが、イリスは見ない振りをした。スネイプが制止しようとする前に、ロックハートが快活な声で叫んだ。

「これは二人共、私の素晴らしい演技を見て、やる気満々になったかな？ よろしい、よろしい！ では、この二人に壇上へ上がってもらいましょう！」

「ちよつと待てたら、イリス！」

「君が『決闘』？ ご冗談だろ？」

ハリーとロンの驚きの声に、イリスは「マーリンの髭！」とだけ返して、黄金に輝く舞台へと上がった。「いや、こっちがマーリンの髭だよ！」というロンの突っ込みは、グリフィンドール生とスリザリン生達の怒涛の応援と野次で掻き消された。パンジーは自分の杖を弄びながら、悠然とイリスを見据える。

「相手と向き合って！ そして礼！」

ロックハートが上機嫌で号令をかける。——イリスは深呼吸をした。集中するんだ。イリスはリドルに教えられた“決闘の作法”の通りに、スツと背筋を伸ばして優雅に一礼した。その一連の動作が、流れるように上品で洗練されていたために、一部の生徒達からイリスに向けて感嘆のため息が漏れた。

「すごいや、ハーマイオニー。君、“決闘の作法”までイリスに教えて

いたの？」とハリー。

「私、あんな事、教えていないわ」

訝しげな表情で、ハーマイオニーが答える。

「スネイプのあの顔、見ろよ！」

ロンが興奮した様子で、二人に注意を促した。スネイプは黒髪の間から見える双眸を驚愕に見開き、イリスの決闘スタイルを見つめている。

「杖を構えて！」 ロックハートが声を張り上げる。

「私が三つ数えたら、最初の術を掛けて下さい。いいですか、行きますよ。一、二、・・・」

「タレントアレグラ、踊れ！」

パンジーは「三」まで待たなかった。彼女は「二」の段階で杖を振り上げ、イリスに呪いをかけた。

しかし、ハリーやロンが、ルール違反をしたパンジーに憤りの声を上げるよりも、ハーマイオニーが思わず両手で顔を覆いながら悲鳴を上げるよりも、パンジーの呪いがイリスに命中するよりも早く——イリスは、正確に呪文を唱えた。

「プロテゴ、護れ！」

イリスの前に、半透明の盾が出現し、パンジーの呪いをパチンと弾いた。思いがけないイリスのナイスディフェンスに、グリフィンドール生達のみならず、他寮の生徒達からも大歓声上がる。当のパンジーも、驚愕に口をパクパク開閉しながら、次の呪文を掛けるのも忘れてイリスを見つめている。イリスはそのチャンスを見逃さず、一歩踏み出すと『武装解除呪文』を唱えた。

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

イリスの呪文は見事に命中し、パンジーの手から杖が弾き出されると、空中をクルクル回転し、イリスの空いた方の手に収まった。

「素晴らしい、ミス・ゴント！私のお手本をよく観察していたが故の、素晴らしいお手並みでした！グリフィンドールに十点あげましょう！」

ロックハートが嬉しそうに叫ぶ。イリスは、誇らしい気持ちで胸を



一杯にしながら、奪った杖をパンジーに返しに行った。屈辱を感じて顔を真っ赤に染めたパンジーは杖を奪り取るように奪うと、イリスを涙交じりの目で悔しそうに一睨みして、舞台を駆け下りて大広間を飛び出して行った。

——勝った。イリスは舞台の下を、万感の思いで見下ろした。ドラコを意地悪なパンジーから守ったのだ。スリザリン生以外は——というよりも、イリスがドラコを見る勇気がなかったのだ、スリザリン生のグループから露骨に目を背けていたのだが——みんな、ハリー達も含め、イリスに向けて惜しみない拍手や歓声を送ってくれた。

やがてイリスは、生徒達に混じって、優しげな微笑みを浮かべて拍手を送るリドルを見た。しかし、イリスが嬉しくなって手を振ろうとした一瞬の間に、リドルの姿は跡形もなく消えていた。

☆

それから数十分もしない内に、イリスたち四人組は『決闘クラブ』を途中で抜け出し、人気のないグリフィンドール寮の談話室で、深刻な表情で互いの顔を見合っていた。

——その原因は、“イリス対パンジー”の決闘の後で行われた、次なる決闘のコンビ——“ハリー対ドラコ”の時の事だった。

凄まじい殺気を飛ばし合う二人の様子を、イリスがハラハラと見守る中、スネイプに何かを耳打ちされたドラコは、いきなり呪文で蛇を出した。蛇は、その場を治めようとしたロックハートの愚かな行いのために“挑発された”と感じて怒り狂い、やがて舞台の下で事の成り行きを見守っていたジャステイン・フィンチ・フレッチリー目掛けて滑り寄ると、彼が逃げ出そうとする前に、攻撃の構えを取った。

イリスはジャステインを助けないのは山々だったが——不思議な事に、蛇が何と言ってるのか全く理解する事が出来ない。蛇の鳴き声は、一向に、いつものような人間の言葉へと変換されないのだ。

訝しむイリスは、やがて「蛇とだけは話す事ができない」とイオに言われた事を思い出した。蛇は今にもジャステインに噛み付こうとしている。イリスが無我夢中で杖を振り上げ、『打撃呪文』を唱えようとしたその時——ハリーが操られるように前に進み出て、“蛇と同じ

声”を出した。

その途端、蛇はまるで庭の水撒き用のホースのように大人しくなり、床に平たく丸まり、従順にハリーを見上げたのだ。ハリーはジャステインに向けて、心配する事はないと言わんばかりにニッコリと笑い掛けたが、ジャステインは感謝するどころか、怒り狂って大広間を出て行ってしまった。生徒達は一瞬にして静まり返り、ハリーが不吉の象徴であるかのように遠巻きに眺めながら、不穏なヒソヒソ声で何事かを囁き始める。スネイプは、鋭く探るような目でハリーを見ていた。

☆

そうして、ロンがハリーを急いで大広間から連れ出し、今に至るわけである。

「僕は納得いかないよ。蛇と喋れる事が、どうかしたの？ここにはそんな事できる人、掃いて捨てる程いるだろうに。現にイリスだって、動物と喋れるじゃないか」

ハリーは首を傾げながら、そう言った。

「ねえ、イリス。君は、蛇とも喋れるの？」ロンがこわごわ尋ねた。

「ううん。おばさんから聞いたんだけど、うちの神様が蛇だから、同じ蛇とだけは喋れないんだって。だから、さつき力を持ってから初めて蛇を見たけど、何て言ってるか分からなかった」

イリスが首を横に振りながらそう言うと、ロンとハーマイオニーはホツとため息をついた。

「でもさ。他の動物は良くて、蛇と喋れるのだけが、どうしていけないんだい？」

ハリーの疑問に対し、イリスも素直に同意を示した。イリスは、自分と同じようにハリーが動物と喋れるという事実を知って、単純に嬉しいと感じていたのだ。しかし、会話できる対象が『蛇』だと言うだけで、どうして皆があんなに怖がったのか、それだけが理解出来なかった。ハーマイオニーは浮かない表情でハリーをチラツと見ると、静かに答えた。

「どうしてかというと、サラザール・スリザリンはパーセルマウス――

つまり、蛇と話ができる事で有名だったからよ。だから、スリザリンのシンボルが蛇でしよう？」

ハリーとイリスは、揃ってポカンと口を開けた。

「ハリー。イリスみたいに動物と話せる能力を持つてる人は、魔法界でもホントに珍しいんだよ。——でも、パーセルマウスはそれ以上だ。今度は学校中が君の事を、スリザリンの曾々々々孫かなんかだと言ひ出すだろうな」とロン。

「だけど、僕は違う」ハリーの表情は、明らかな恐怖で引き攣っていた。「それは証明しにくい事ね。スリザリンは千年ほど前に生きていたんだから、貴方だという可能性もありうるのよ」

ハーマイオニーは、深い思案を秘めた瞳で、ハリーを見つめた。

☆

一足先に自室に戻ったイリスは、一人考えを巡らせながら、眠りにつくためにネグリジエに着替えた。

「イリス。君は、ハリー・ポッターを“無実の罪”から救いたいか？」ふとリドルの声がして振り向くと、彼女のベッドにリドルが腰かけている。彼は——瞳の奥に奇妙な赤い光をちらつかせながら——真剣な表情をして、イリスを見つめていた。

「“スリザリンの継承者”は、彼ではない。僕は“秘密の部屋”の真実を知っている」

——リドルが、ホグワーツ中の誰も知らない“部屋の真実”を知っている？イリスが思わず息を飲んで彼を見上げると、リドルは自分の傍に座るよう彼女を促し、静かに言葉を続けた。

「今から五十年前、“スリザリンの継承者”が“部屋”を開き、マグル生まれを一人殺害した凄惨な事件があった。僕とメーテイスはその当時、事件の解決に尽力し、力を合わせて“部屋”を封じた。君に以前、トロフィー室で見せた「特別功労賞」の盾は、その時のものだ。

“部屋”の真実が、保身に走る愚かな教師達の手によって葬り去られぬよう、本物の僕は、当時の記憶をこの日記に託した」

イリスの脳裏に、リドルと最初に出会った日が思い浮かんだ。——あの時彼は、自身を「ある目的のために作られた」と言った。まさか、

それは——。イリスの考察を見抜いたかのように、リドルは精悍な笑みを見せた。

「そう。『秘密の部屋』の真実の開示、それこそが僕の目的であり、存在意義だ。イリス。それを知る覚悟があるのなら、君を——過去の、僕の記憶の世界へと連れて行こう」

☆

イリスはリドルに促されるまま、ローブのポケットから日記を取り出した。リドルが半透明の手を翳すと、日記の表紙がひとりでいき、ページが強風に煽られたようにパラパラとめくられ、中程で止まった。真つ白な両開きのページに、小型テレビの画面のようなものが浮かび上がる。

「さあ、イリス。覗いてごらん」

リドルが静かに促した。イリスはぐくんと生唾を飲み込み、興奮の余り震える手で日記を掴み直すと、こわごわその小さな画面に目を押し付ける。すると、体がぐーっと前のめりになり、画面が見る見るうちに大きくなり、体がベッドを離れ、ページの小窓から真つ逆さまに投げ入れられる感じがした。

——色と陰の渦巻く中へ——

イリスは両足が固い地面に触れたような気がして、震えながら立ち上がった。怖くてギュツと瞑ったままだった瞼をゆつくりと開くと、そこは——イリスの慣れ親しんだ、ホグワーツの大広間だった。空中に無数の蠟燭が浮かび、天井には魔法の夜空が映し出されている。四つのテーブルには、彼女が見た事の無い顔ぶれの生徒達が座っていて、ざわざわと興奮したような大勢の話し声がする。

「リドル？」

イリスは不安になって周囲を見渡すが、どこにもリドルの姿は見当たらない。しかも、ネグリジエ姿で佇むイリスの姿を、誰も気にも留めないのだ。

イリスはやっと冷静さを取り戻した。ここはリドルの記憶の中の、過去のホグワーツなのだ。ここでは自分はせいぜい幻みたいな存在で、記憶の中の人達には全く見えないのだ。だけど、それならそうと

リドルも教えてくれたらしいのに。どうして記憶の中に自分を一人ぼっちで放り出してしまったのか、イリスには皆目見当もつかず、彼女はただ、大広間のご真ん中で、途方に暮れて立ち尽くすだけだった。

不意に、生徒達の賑やかな喋り声が、ピタツと止んだ。大広間の扉が開く音がして、イリスは振り返り、慌てて端っこへと移動した。扉を開けたのは、長いふさふさした鳶色の髪と髭を蓄えた、背の高い魔法使いだった。どこかで彼を見た事があるような気がして、イリスはアツと声を上げた。――ダンブルドア校長先生だ。今より随分と若いけれど、過去のダンブルドアに違いない。――という事は、とイリスは教職員テーブルを見た。校長席には、見知らぬ、皺くちやで弱々しい小柄な老人が座っている。教師の顔ぶれも、見覚えの無い人達ばかりだ。

――私は、本当に“過去”に来ちゃったんだ。イリスは興奮して、高鳴る鼓動を落ち着ける事が出来なかった。

ダンブルドアは自らの背後に、一列に並ばせた生徒たちを引き連れられている。――イリスはようやく理解した。これは『組分けの儀式』だ。彼は――今と変わらない――飄々とした笑みを浮かべ、イリスの横を通り過ぎ、一年生たちを四つのテーブルの前に並べると、スツールを取り出し、その上に組分け帽子を置いた。組分け帽子が歌っている間、イリスはマジマジと一列に並んだ生徒たちを眺める。

その中の一人に、イリスは不思議と視線を吸い寄せられた。真っ黒な髪に明るい褐色の瞳、少し背の高いハンサムな男の子。彼は、リドルにとっても良く似ていた。――リドルは、五十年前は十六歳だったと言っていた。イリスは首を傾げた。もし彼が一年生の時のリドルだとするならば、この『組分けの儀式』の記憶も、“秘密の部屋”と関連があるものなのだろうか。

やがて、ダンブルドアが長い羊皮紙を持って前に進み出て、『組分けの儀式』の始まりを告げた。次々と生徒たちが呼ばれていく。

「ゴーント・メーティスー」

不意に呼ばれたその名前に、イリスは心臓が止まりそうになった。――メーティス・ゴーント。自分の祖母の名だ。彼女はリドルと同級

生だ、と聞いた。ならば、きつとこの記憶はリドルが一年生の時のもので、間違いないだろう。イリスは、興味をそそられて、祖母の姿を探した。列の中から進み出たのは、癖のない黒髪を肩の半ば位まで伸ばした、凜とした佇まいの女の子だった。不思議な事に、彼女はリドルと同じ——明るい褐色の目をしていた。

彼女は緊張した面持ちで椅子に座り、帽子をぐいと被った。帽子は短い沈黙の後、「スリザリン！」と叫んだ。スリザリンのテーブルから拍手と歓声上がる。帽子を脱いだ時に、彼女はホツとした笑みを見せ、スリザリンのテーブルへ向かった。

暫くしてリドルの名前も呼ばれた。帽子を被ったのは、やはりイリスが予想した『あの男の子』だった。彼も程なくしてスリザリン寮に決定し、テーブルへ向かう。彼は友好的な笑顔を浮かべながら、同級生達と握手を交わし——やがて、何番目か隣の席に座るメーテイスにも、手を差し出した。

二人の同じ淡い褐色の双眸が、交錯した。その時、二人はハツとしたような表情になり、暫くの間、手を繋いだまま、互いをじつと探るように見つめ続けたが——やがて、どちらからともなく、視線と手を静かに離れた。

☆

不意に全ての景色が煙のように掻き消え、イリスの視界は闇に包まれた。

「リドル、君は蛇語が使えるのかい？」

イリスがパニックの余り、声を出す事も出来ず、暗闇の中で茫然と突っ立っていると、不意に後ろから、見知らぬ男の子の声がした。

思わず振り向くと同時に、周囲の景色は、大理石に囲まれた壮大な大部屋へと変わっていた。緑色のランプが部屋を照らし、暖炉の中では火がパチパチと爆ぜ、全体的に落ち着いた雰囲気は漂っている。声のした方向には、いずれもスリザリン生である事を示す、緑色のタイを締めた生徒達が集まっていて、大きな円を作っていた。

イリスが背伸びして覗き込むと、その円の中心には、リドルがいた。彼は、得意げにテーブルの上に乗った蛇に向かって、口を横に開き、ま

るで空気が漏れるような”不思議な言葉”を喋った。すると、蛇は水撒き用のホースのように平たく丸まり、従順にリドルを見上げたかと思えば、次の瞬間には、鎌首をもたげて攻撃の構えを取った。——知らなかった。リドルもハリーと同じで、蛇語が使えるんだ。イリスは驚きの眼差しで、リドルを見つめた。

「サラザール・スリザリンと同じだ。パーセルマウスだ」

周囲のスリザリン生たちはみな、蛇を自在に操るリドルに対し、畏怖の目を向けていた。ヒソヒソと興奮と恐れで上擦った囁き声を聞くと、リドルは冷たく傲慢な笑みを見せた。まるで、人から好意や信頼を寄せられるよりも——怖がられ、畏れられる事の方が満足だ、と言わんばかりの彼の様子に、イリスは疑問を抱いて首を傾げた。イリスが大好きな優しく親しみやすい日記のリドルと、今日の前にいる過去の記憶のリドルとが、全く結びつかなかったからだ。

そんな中、一人の女生徒が、図書室で借りて来たのか、沢山の本を抱えながら談話室に入ってきた。——イリスは息を飲んだ。メーテイス・ゴントだ。彼女も興味をそそられたのか、イリスの隣に立つと、精一杯背伸びしてリドルの様子を覗き見た。そして、他のスリザリン生達と同じように、目を丸くした。

しかし彼女はその後、他のスリザリン生とは違った反応を見せた。白磁の頬をバラ色に染め、その明るい褐色の瞳を——まるで貴重な財宝を見つけた時のように——キラキラと輝かせたのだ。彼女は蛇語使いのリドルを恐れ、これ以上円の半径を縮めようとしないう生徒達の間を擦り抜けると、その中心にいるリドルに戸惑う事無く近寄った。

「ねえ、リドル。あなたは、蛇語が使えるのね」

メーテイスは、ソファに腰掛けたリドルの傍におずおずと跪くと、熱を帯びた声でそう囁いた。その時の彼女の目は、リドルに対する、純粋な憧れや賞賛に満ち溢れていた。イリスは、“その目”を見た事があった。おばのイオが“神様（御神体）を見る時の目”だ。まるで神様を目の前にした熱心な信者のような眼差しに撃ち抜かれ、リドルは思わず、蛇を操る事も忘れて彼女を見返した。

☆

再び、全ての景色が煙のように揺らいで消え、程なくして、今度はどこかの廊下になった。イリスの目の前を、随分成長して背も伸びたリドルとメーティスが仲良く肩を並べて歩いていく。イリスは小走り二人の横に並んだ。容姿端麗な二人は揃いの監督生の銀色のバッジを付け、親しい友人というよりもむしろ、お似合いのカップルにさえ見えた。

「今週のスラグ・クラブ。勿論行くだろう、メーティス？」

リドルがローブのポケットから紫色のリボンで飾られた封筒を取り出し、メーティスに見せる。『スラグ・クラブ』って何だろう。イリスは首を傾げるばかりだが、メーティスは合点がいったようであらうに頷いた。

「ええ。貴方が行くなら私も行くわ。リドル」

リドルが不意に歩みを止めたので、イリスは慌ててバックステップを踏む羽目になった。彼は露骨に眉をひそめ、彼自身が標準よりも背が高いために、頭一つ分以上も小さなメーティスを見下ろした。

「どうして君は、入学してから今までずっと、僕の事をファーストネームで呼ばないんだい？まるで他人行儀だな」

咎めるような様子の子の彼の言葉に、メーティスは堪え切れなれないといった調子で、くすくすと笑った。

「だって、"トム"だなんて！そんな平凡な名前前で、貴方の事を呼びたくないもの。貴方は、Tomよりも、Riddle——そう、Riddleの方が、余程しつくり来る呼び名だわ」

「Riddleだって？」

「ええ。貴方は、いつも私の事を親友だと言ってくれるわ。でも、一度だってその本心を見せてくれた事なんて、ないじゃない」

「心外だな。いつも僕は、君に本心を見せているっていうのに」

リドルは指でメーティスの顎をクイと持ち上げ、彼女の瞳を——まるでそれを通して彼女の心中を盗み見るかのように——無遠慮に覗き込んだ。まるで彼の所有する人形のように、粗野な扱いを受けながらも、彼女は抵抗する事もなく、されるがままにリドルを見上げ、穏やかにこう言った。



「嘘は駄目よ、リドル。私には分かるの。きっと貴方自身が、とても大きな“Riddle”なんだわ」

☆

イリスの視界は、再び、闇に閉ざされた。やがて音もなく世界が再構築された時、イリスは自分が、薄暗い空き教室にいる事に気づいた。周囲を見渡すと、窓際の席にリドルとメーティスがいた。

しかし、二人の様子がどこか可笑しい。リドルは机に両手を突いて、俯いたまま小刻みに震えている。その震えが恐怖から来ているのか、それともまた“別のもの”から来ているのか。イリスには判断し兼ねた。窓の外では、真つ赤に熟した太陽が今にも山の向こうに落ちかけていて、その最後の光が——まるで何かを警告するかのよう——唇を真一文字に引き結んだリドルの横顔を、不吉な赤色に染め上げていた。メーティスは彼の傍で、両手を祈るように組んだまま、固唾を飲んで見守っている。やがて、リドルが口を重たげに開いた。

「僕は、ずっと自分の出生が謎だった」

それはメーティスに語り掛けているようでもあり、独白のようでもあった。

「最初は、死に屈した母親が魔女である筈がないと思って、父親の名前でホグワーツ中のあらゆる書物を調べた。——だが、違った。父親の名前はどこにも存在しなかった。今度は母親について、父親の時以上に、魔法族の家系に関する古い書物を、つぶさに調べた。そうしたら……」

リドルは、皆まで言わずにメーティスを見た。その目の奥には、奇妙な赤い光がちらついている。

「メーティス。僕の母親、メローピー・ゴントは、スリザリンの末裔だった。僕は、“スリザリンの継承者”だ」

その時、イリスは、世界の時間が全て止まったと思った。彼女がそう錯覚しても何ら不思議ではない位、辺り一帯は不気味に静まり返り、三人の呼吸音すら聴こえない。

——“リドルが、スリザリンの末裔”？そんな事、彼は今まで、一言も言っていないなかったじゃないか。イリスは一時的に呼吸をする事

も忘れ、茫然とリドルを見つめた。メーティスも、イリスと同じ気持ちのようで、虚けたようにその場で立ち尽くすばかりだ。リドルはおもむろに机から手を離すと、真剣な表情で、メーティスの両肩を——彼女が怯えてビクリと肩を跳ねさせるのも構わずに——静かに、強い力で掴んだ。

「『ゴーント』」

リドルは、噛み締めるように言った。——『ゴーント』。それは、リドルとメーティス、そして彼女の孫であるイリスのファミリーネームだ。イリスの頭の中で、真実に気づき始めた何かが叫んだ。

——駄目だ！彼の言葉をこれ以上、聞いてはいけない！——

だが、イリスの好奇心は愚かにも『その続きを聞きたい』と欲してしまった。彼女は彼女自身の忠告を無視し、耳を塞ぐ事すら忘れ、二人の様子を一心に見つめる。蛇に睨まれた蛙のように震え、おずおずと見上げるメーティスを、蹂躪するかの如く凝視しながら、リドルは続けた。

「ゴーント家は——公には途絶えたとされているが——スリザリンの末裔だ。メーティス・ゴーント。まさか、君は……」

長い沈黙の後、メーティスは、わなわなと震える唇を、やっこのこととで開いた。

「そうよ、リドル。私も、貴方と同じ、スリザリンの末裔だわ」

その時、メーティスは、確かにそう言った。

「どうして、僕に、明かさなかった？」リドルの声は、明確な怒気を孕んでいた。

「ごめんなさい。リドル！」

メーティスは、途端に両手で顔を覆い、悲しげにすすり泣き始めた。「私の母は、ゴーント家の一員だったけれど——蛇語を喋れなかったで、出来損ないだったの！だから、家族からひどい虐待を受けて、命からがら逃げ出したと聞いたわ。母が亡くなるその時に出生を明かされて、『誰にもスリザリンの末裔である事は言うな』って、そう忠告されたの。私も、母と同じで蛇語が使えなかったし、ホグワーツの誰も彼も、私がそうなんじゃないかって疑いすらしなかったわ。で

も、でも、まさか、貴方が——蛇語使いだったのは知っていたけれど——ゴーント家の一員だったなんて、私、知らなかった！」

その時、リドルは——大きく口を開け、笑った。その笑みは——まるで、長い間、極限の飢餓状態にあった野獣が、やっと御馳走にありつけた時に浮かべるような——どす黒い欲望と狂気に満ちた、醜悪で恐ろしいものだった。むさぼるようにメーティスを見つめ、彼は興奮で上擦った声で、こう言った。

「僕らは、いとも同士だったのか」

メーティスは泣きじやくりながらも、弱々しく頷いた。リドルはメーティスを愛しげに抱き締め、旨そうに舌なめずりをしながら、彼女の耳元で囁いた。

「メーティス。君は、“秘密の部屋”の場所を知っているのかい？」

☆

イリスは気が付けば、どこかの女子トイレにいた。数秒もしない間に、メーティスがリドルを連れてやって来た。彼女は迷いのない足取りで手洗い台へと向かい、白く細い指先で、震えながらも——等間隔に並ぶ銅製の蛇口のうち、脇に小さな蛇が彫つてあるものを指差した。

「リドル。これが、“秘密の部屋”の入り口よ。母が亡くなる前に“ここには決して近づくな”と、私に教えてくれたの。“部屋”は、本来はもつとずっと複雑な行程を経た場所にあつたけれど、何世紀か前に排水工事が執り行われた時、私たちがここへ場所を移したらしいわ」

メーティスの指が、そつと、引つ掻いたような蛇の絵を撫でた。

「この蛇口の前で、蛇語で“開け”と言えば、開くのよ。バジリスクが、貴方を待ってる」

メーティスは感極まったように、リドルを羨望の眼差しで見つめ、一筋の涙を零した。

「私は、今まで自分を、ずっと出来損ないの生まれ損ないだと思っていた。でも、そうじゃなかった。きつと“真のスリザリンの継承者”である貴方を“部屋”へ導くために、私は生まれて来たんだわ。この命

は——人生は、決して意味のないものなんかじゃなかった。——さあ、リドル。扉を開いて」

リドルは悠然と進み出ると、蛇語で「開け」と唱えた。その途端、蛇口が眩く白い光を放ち、回転し始める。やがて手洗い台そのものが沈み込み、ぽっかりと黒い闇を孕んだ太いパイプが剥き出しになった。——“秘密の部屋”を開いた二人は、暫くの間、ものも言えずに興奮で震えていた。

☆

イリスの視界が瞬きをしたかのように一瞬、闇に閉ざされ、再び元の景色に戻った。

彼女の目の前で、リドルは苦悶の表情を浮かべながら息を荒げている。彼の足元には、一人の女生徒が倒れていた。イリスは思わず駆け寄ろうとして、息を飲んだ。

その女生徒は「嘆きのマートル」にそっくりだった。レイブンクロー生証である青いタイを締めた彼女は、カッと驚愕に目を見開いたまま、硬直している。——イリスは全身が栗立った。まさか、死んでいるのか？

不意に大きなものを引き摺るような音がして、イリスは弾かれるように振り返った。——緑色の巨大な蛇の尾っぽが、“秘密の部屋”へ続くパイプの中へと消えて行く。

「ハハハ、素晴らしい！僕は、僕は、ついに——”死を乗り越えた”！」

リドルは、目の前で、女の子が尋常ではない状態で倒れ伏していると言うのに、気にも留めないどころか、凡そ彼に似つかわしくない、冷たく甲高い笑い声を上げた。イリスはゾツとして、たまらず震え上がる。しかし、彼は随分と衰弱しているようだった。顔色は不健康な程に青白く、フラフラとよろめいて、ついには床に倒れそうになった所を、傍にいたメーティスが慌てて抱き留め、支える。

「素晴らしいわ。誰もが克服できない死を支配した。貴方は、世界一偉大な魔法使いだわ」

「メーティス。君もあれを作ればいい」

リドルは、熱に浮かされたような目でメーティスを見つめると、女

の子の傍に落ちた“黒い革表紙の日記帳”を指差した。

「そうして一人で永遠に生きよう。誰もが僕たちを恐れ、敬うようになる。二人で魔法界を、未来永劫支配し続けるんだ」

メーテイスは彼の言葉を聞くと、大きくその双眸を見開いた。しかし、イリスが見つめる中で、彼女の表情は——徐々に、驚愕から悲愴さを感じさせるものへと変わっていく。やがて彼女は——まるで何かに耐えるように——瞼を固く閉じた。暫くの沈黙の後、彼女は、ただゆっくりと首を横に振り、静かにこう言った。

「リドル。貴方は、いずれ魔法界を支配する“王”となるのでしよう？死さえも超越した貴方は、今とても特別な存在だわ。特別な存在は、ただ一人でなければ。私は、貴方が何よりも大切な。だから、貴方の覇道を邪魔したくない。スリザリンの末裔にも関わらず、蛇語を使えない私のようなものが、同じ不死の命を戴き、隣に並び立つのは滑稽だわ。貴方を汚してしまう」

メーテイスは、もう自力で立てる程の力を取り戻したリドルから手を離し、その場で恭しく跪いた。

「でも私は、貴方と同じ高みに立つ資格はないけれど——貴方の事を誰よりも理解し、その力になれる実力と自信がある。——リドル。私は、今この時をもって“王”となる貴方の“サーヴァント従者”になるわ。偉大なる貴方と同じスリザリンの血は、決して途絶えさせない。この体が朽ち果てた時、私の子供がその遺志を継ぐでしょう。貴方に一族共々、永遠の忠誠を誓います。”ニア・マジエステイ陛下 下 “」

☆

イリスはもう、まともに頭を働かせる事すら出来なかった。無意識にその場から一步引こうと後ろに踏み出した足が、サクツと柔らかな草を踏む。いつの間にか、周囲の風景は、ホグワーツ城を遠く離れ、どことも知れない谷の上へと変わっていた。谷の下には見知らぬ小さな村があり、建ち並ぶ民家の中で、一際立派な屋敷が目立っていた。「これでスリザリンの末裔は、僕らだけだ」

イリスが振り返ると、すぐ後ろに私服姿のリドルとメーテイスがいた。リドルは、掌の中で何か小さなものを転がしながら、改めてメー

テイスに向き直ると、自分の杖を取り出してこう言った。

「ずっと考えていたんだ。汚らわしいマグルの名前はもう使わない。これこそが、僕の本当の名前だ」

リドルは空中に、杖で自分の名前を書いた。

T O M M A R V O L O R I D D L E (トム・マールヴォロ・リドル)

彼が杖を一振りすると、文字は炎のように揺らめきながら、その並び方を変えた。

I A M L O R D V O L D E M O R T (俺様はヴォルデモート卿だ)

空中でゆらゆらと怪しげに光るその文字を見て、メーテイスは恍惚とした表情で囁いた。

「死の飛翔、もしくは窃盗」。とっても素敵だわ」

「そう遠くない未来、魔法界中の魔法使いや魔女がこの名前を口に出す事すら恐れ、僕に平伏すようになるだろう。メーテイス、君も付いてきてくれるね」

メーテイスは、野獣のように獰猛な笑みを浮かべるリドルのローブの端を掴まみ、愛しげにそっと口付けた。

「御意のままに。陛下」

☆

「あ……あつ……り、リドル……っ」

イリスは喘ぎながら、やっとの事でリドルの名を呼んだ。

——リドルが、ヴォルデモート卿だった。イリスやハリーの両親を殺し、魔法界で残虐の限りを尽くした。最も恐ろしい闇の魔法使い。それだけではない、イリスの祖母・メーテイスは——彼の血縁者であり、“従者”だった。彼らが“秘密の部屋”を開け、バジリスクを解放し、「嘆きのマートル」を——恐らく——殺したのだ。五十年前の事件は、二人が巻き起こした事だったのだ。余りにも残酷過ぎる真実に打ちのめされ、イリスは恐怖の余り、ガクガクと震える足を懸命に動かし、一刻も早くその場から逃げ去ろうとした。

しかし、彼女の体を、誰かが背後から強い力で抱き竦める。実に愉

快そうな声が、怯えるイリスの耳元で聞こえた。——リドルだ。

「もう遅いよ、イリス。君は、余りにも自分の魂と魔法力を、この僕に明け渡し過ぎた！今や、君の体の支配権は、君じゃなく僕にある。それよりも久々の“主”<sup>あるじ</sup>との再会を喜びたまえ、小さな“従者”<sup>サーヴァント</sup>。未来の僕の信奉者が、僕と君を再び引き合わせたのだ」

“未来のリドルの信奉者”？言葉の真意が掴めず、戸惑うばかりのイリスに向け、リドルは惚れ惚れする位に爽やかな微笑みを見せた。「そうか。君は、彼に忘れさせられていたんだね。そろそろ君も、夢から覚めるべきだ。僕が君にした事も含めて、全て思い出させてあげよう」

リドルは小柄なイリスを抱き、草むらの上に押し倒した。イリスが身の危険を感じて起き上がろうとする前に、リドルが指を鳴らすと、草の一本一本が彼女の体中に巻き付き、一切の動きを封じてしまう。「やだっ……ま、待って、リドル！そんな、信じてたのに！」

イリスは信じられなかった。いや、信じたくなかった。リドルは彼女にとって、今やかけがえのない存在——大切な親友であり、教師であり、家族だった。だが、目の前で、歪んだ欲望を剥き出しにした醜悪な笑みを見せるリドルは、もうイリスの知っている『彼』ではない。——優しいリドルは、邪悪なだけものへと変わってしまった。否、これこそが彼の本性なのだろう。リドルは、イリスが生理的に流してしまった涙を指で掬い取ると、彼女の耳元でこの上なく優しく囁いた。「イリス。もう僕は、十分過ぎる程に待った」

そしてリドルは、嫌がるイリスの額に手を押し当てると、彼女の奥底に封じられた記憶を、容赦なく暴いた。

——イリスは、突然、全身に強い電流を流されたかのように、大きく痙攣した。頭の中へ急激に情報を流し込まれたために、視界が、意識が、バチバチと音を立てて明滅する。彼女の中に、“真実”——ルシウスの手によって忘却された“あの日の記憶”や、リドルに体を操られて行った“事件の記憶”が、無理矢理押し込まれていく。それらは、捏造された“偽りの記憶”を——イリスの心の整理が付く前に——凄まじい勢いで押し流していった。

そうしてイリスは、全て思い出した。——ルシウスに襲われ、“服従の呪文”を掛けられた事——日記の主であるリドルに操られ、雄鶏を絞殺した事——壁の文字を書き、バジリスクを解き放つてミセス・ノリスを襲った事——

——駄目だ！おぞましい現実を突きつけられ、気が狂いそうになったイリスの心が、自分の身を守るために、必死に叫んだ。——これは夢だ！ここにいてはいけない！起きろ！

イリスは渾身の力を振り絞って、リドルの記憶の世界から現実世界へと帰還した。勢いよく飛び起きた拍子に、彼女はベッドから転がり落ち、全身に鈍い痛みが走る。だが、イリスはそんな痛み等、もうどうでも良かった。息を荒げながら、ぶるぶると震え始めるイリスの目の前で——彼女を嘲笑うかのように——傍に落ちた黒い革表紙の日記が、ひとりでに開き、パラパラとページがめくられ、空いた真っ白なページに金色に光る文字が浮かんだ。

“君は僕のものだ”

「ひっ、ああっ……！」

イリスはたまらず、絶望の悲鳴を上げた。——私は、何て事をしてしまったんだろう！“スリザリンの継承者”は、自分自身だったのだ。今まで忘れていたのが不思議な位、今は全てを克明に思い出せる。——ルシウスと対峙した時の、あの恐怖。ミセス・ノリスを襲った時の、彼女の断末魔。雄鶏の首の骨をへし折った時の、あの感触。——イリスは耐え切れず、その場で嘔吐した。

「イリスーどうしたの?!」

やがてイリスの異変に気づいたハーマイオニーが起き出し、悲鳴を上げてイリスに縋り付いた。彼女は杖を振ってすぐさま嘔吐物を清めると、イリスの背中を懸命に摩り始める。

「医務室へ行きましょう。やっぱり貴方、最近様子が変だわ」

我に返ったイリスは大好きな親友を見ると、途端に張り詰めていた心が緩み、蒼白な顔をくしゃくしゃに歪ませて、ハーマイオニーに矢も楯もたまらず抱き着いた。——伝えなければ。イリスは勇敢にも、そう決意していた。私が犯人だったって。賢いハーマミーなら、きつと



助けてくれるし、最善の策を考えてくれる。これ以上、犠牲者を出してはならないんだ。

「ハーミー、どうしよう・・・！わ、私、大変な事を・・・！」

イリスは喘ぎながら、ハーマイオニーの顔を見上げ――

――声もなく、凍り付いた。ハーマイオニーの背後に、何時の間にかリドルが立っている。彼は穏やかな微笑みを浮かべ、ハーマイオニーの肩にそっと手を置き、もう一方の手でイリスに向けて「静かに」と合図をした。現実世界のリドルは、イリスにしか見る事が出来ない。ハーマイオニーは当然のように彼の姿に気づかず、心配そうに絶句したままのイリスを見つめている。――イリスは表情をこわばらせ、ゆっくりと彼女から視線を逸らした。

「何でもないよ、ハーミー。ちよつと怖い夢を見ちゃったの」

「でも、貴方、さつき何か・・・」

「本当に、何でもないの！もう寝るね」

イリスは、俄然納得のいかない様子 of ハーマイオニーから逃げるように、自分のベッドに戻ると、布団を頭から被って寝た振りをした。「賢い子だ、イリス。もし君が、僕の事を彼女に打ち明けていたら、次の犠牲者は彼女になっていただろう」

リドルがイリスのベッドの傍で、悠然とそう言い放つ。イリスは恐怖の余り、涙と震えが止まらなかった。――イリスは、残酷な現実を飲み込むしかなかった。もう、どこにも逃げられない。元のように、なれないと。

翌日の朝、前夜に降り出した雪が大吹雪になり、学期最後の「葉草学」の授業は休講になった。スプラウト先生がマンドレイクに靴下をはかせ、マフラーを巻く作業をしなければならぬからだ。厄介な作業なので、誰にも任せられないらしい。

グリフィンドールの談話室の暖炉のそばで、イリスはロンとハーマイオニーの魔法のチェスを眺めて過ごしていた。しかし、彼女の顔は凡そ健康とは言い難い程に青白く、唇は真一文字に引き結ばれている。——それは当然の事だ。イリスは、昨日の出来事を親友達に告白したかった。だが、そうは問屋が卸さない。ハーマイオニーの隣に座るイリスの真向い——ロンの隣には、リドルが腰かけていて、イリスをじっと監視しているのだ。だから、イリスは何もできず、チェスの盤上で、ロンのビショップがハーマイオニーのナイトを馬から引き摺り下ろして、盤の外までズルズル引っ張っていくのを、まんじりともせず眺める事しかできなかった。

「ハリー、お願いよ」不意にハーマイオニーが口火を切った。

イリスがふと、一人掛けのソファに座るハリーに目をやると、彼はイライラとした調子で、肘掛け部分を忙しなく指先でトントン叩き続けている。彼は眼鏡の奥から、緑色に光る目でハーマイオニーを見返し、激しい口調で言った。

「やっぱり、ジャステインのあの反応はおかしいよ。僕が蛇をけしかけた、だって？どう考えたらそんな見方ができるっていうんだい？僕は、蛇から彼を守ったんだ！」

「わかったわよ。そんなに気になるんだったら、貴方からジャステインを探しに行けばいいじゃない」

ハリーはどうしても、昨日の『決闘クラブ』での出来事が腑に落ちないらしい。——彼は今や“スリザリンの継承者”どころか“その末裔”だという噂まで流れ始めているし、正義感の強い彼にとって、どうあってもその誤解は解きたいものなのだろう。イリスはぎゅうつと自分のスカートを握り締めた。ハリーは確かにスリザリンと

同じパーセルマウスだが、“部屋”を開いた犯人ではない事は、イリスが誰よりもわかっていた。

ハリーはハーマイオニーの言葉を聞くと、急いで立ち上がり、談話室の出口へ早歩きで向かった。きつとジャステインを探しに行くのだろう。——イリスは凄まじい罪悪感に押しつぶされそうになり、心身に強いストレスが掛かった結果、すうつと気が遠くなった。どこか遠くで、ロンとハーマイオニーが自分の名前を叫んでいるのが聴こえる。イリスは糸の切れた操り人形のように、ソファに崩れ落ち——彼女の視界と意識は、深い闇に包まれた。

☆

イリスが再び意識を取り戻した時、彼女は医務室のベッドに横たわっていた。——どうして目が覚めてしまったんだろう。イリスは自分を呪いたくなくなった。このまま永遠に目覚めない方が良かったのに。

「こんにちは、イリス」

不意に穏やかな声がして、イリスは横を向き——そして、驚きと嬉しきの余り、心臓が止まりそうになった。ベッドの脇には何と——ダンブルドアがいた。全てを見透かすような淡いブルーの瞳で、イリスをじっと見つめている。イリスにとつて、彼の登場はまさに“神の降臨”そのものだった。イリスは一刻も早く真実をダンブルドアに伝えようとして、乾き切った唇を開くが——気が急いで空回りするばかりで、言葉は一向に出てこない。

「最近君は、体調が著しく優れないようじゃな。君の親友たちも、わたしも、マダム・ポンフリーもみな、君を案じておるのじゃよ。……もちろん、スネイプ先生もじゃ。イリス、何か困っている事はないかね？ わしでよければ、どんな些細な事でも構わぬ、何でも言っておくれ」

ダンブルドアはイリスの手を取り、労しげに撫でた。イリスは大急ぎでキョロキョロと周囲を見渡した。リドルの姿はどこにも見当たらない。——イリスはごくりと生唾を飲み込んだ。今なら言える。ダンブルドアに言うんだ。そして、この惨劇を終わらせるんだ。イリスが意を決して、口を開いた時——

不意に自分の首根っこをグイと掴まれ、後ろへ力任せに引き摺り倒された。その余りの勢いたるや——彼女はゴムボールのように床を何度か弾んで、壁にぶち当たって、べしゃつと倒れてしまった位だった。全身を襲う痛み思わず涙が零れ、弱々しく咳き込みながら、イリスが状況を把握するため前方を見上げると——そこには、驚くべき光景が広がっていた。

先程までいたベッドに、イリス自身が——何事もなかったかのように——ベッドに寝ているのだ。自分が二人いる？イリスは思わず、自分の体を見返した。——よく見ると、自分の体はゴーストのように半透明になっていた。しかし、ベッドにいる方のイリスは、しっかりと実体がある。そして、彼女の後ろには、リドルがいて——今までに見た事の無い位、余裕のない、こわばった表情をして、ダンブルドアを睨み付け、口をパクパクと動かしていた。実体のある方のイリスは、リドルの口の動きに合わせて、『本当に大丈夫です。何でもありません』というような事を、ダンブルドアに向かって語り掛けていた。ダンブルドアは、思慮深い眼差しで、イリスの様子を見つめては、時々相槌を打っている。——イリスは全身が粟立つような恐怖に駆られた。リドルはあの時、『体の主導権は僕にある』と言っていた。彼が、自分を操っている”。

「いやっ、助けてください!!私はこちらです!!先生!!」

イリスは立ち上がり、会話を終えて席を立とうとしたダンブルドアに向かおうとした。しかし、その直前で、リドルがイリスに向けて手を鞭のように振るうと、彼女は見えない壁にぶち当たったかのような強い衝撃を受け、再び床に転げ落ちた。そうしている間に、彼女の切望も空しく、ダンブルドアは医務室を去って行ってしまった。唯一の希望は潰えた。——リドルは、恐怖と絶望に喘ぐイリスを憎々しげに睨み付ける。その双眸は、熱した石炭の様に赤々と燃えていた。彼は怒りに震える声で、こう言い放った。

「裏切り者めー君は僕を怒らせた」

リドルが手を翳すと、ベッドに寝ていた筈のイリスが、むくりと起き上がる。そのままイリスの体を操り、“目くらまし呪文”を掛けさ

せると、リドルは彼女を伴って医務室を出た。

「待って、リドル！何をやるの！私の体を返して！」

リドルは冷たくせせら笑っただけで、必死に後ろを付いていく半透明のイリスを振り返りもしなかった。リドルの操り人形と化したイリスは、“秘密の部屋”のある三階の女子トイレへ向かう。——イリスはゾツとした。“部屋”を開ける気だ。

「お願い、リドル、やめて……！」

リドルは、“部屋”の入り口である——蛇の絵が描かれた蛇口まで、彼女を連れて行くと、蛇語で☒開け☒と唱えさせた。その瞬間、蛇口が白い光を放ち、回転し始め、手洗い台そのものが動き出す。台が丸ごと床下へ沈み込み、見る見るうちに消え去った後に、大人一人が滑り込めるほどの太いパイプが剥き出しになった。やがてパイプから、緑色の恐ろしい大蛇が姿を現した——バジリスクだ。

バジリスクはリドルの命令に従い、その身をくねらせて、排水管の中へ姿を消した。リドルはイリスを操り、女子トイレを出て、いくつか階段を上がり、その先の廊下へ出た。そこは一段と暗く、嵌め込みの甘い窓ガラスの間から、激しく吹き込む氷のような隙間風が、松明の明かりを消してしまったようだった。

ふと、突き当りの長い廊下の端から、ハリーが探し求めていた人物——ジャステインーフィンチ・フレッチリーが、ひよっこり姿を現した。彼の傍らに浮かぶ「ほとんど首無しニツク」と、何かを熱心に話している。リドルは口角をきゅつと上げ、微笑んだ。二人は当然のように、姿を消したイリスには気づいていない。イリスは震え上がり、声の限りに叫んだ。

「だめえっ！ジャステインー！逃げてええええ!!」

しかし、リドルに自分の体から追い出され、か弱い精神体と化したイリスの叫びは、ジャステインには届かなかった。排水管を通り、天井の隙間から突如として現れたバジリスクが、二人を不気味な黄色い眼で射竦める。二人の表情は明らかな恐怖に歪み——イリスの見る間に、ジャステインは全身がガチガチに凍り付き、床にバタンと倒れ伏した。「ほとんど首無しニツク」は、淡い真珠色だった体の色がみる

みるうちに黒く煤け、空中に縫い止められたかのように、ピタリと動かなくなつた。

「ああ・・・」

——イリスは、腰が砕けて、その場に力なく崩れ落ちた。リドルは面白くなさそうに舌打ちをし、蛇語で何事かを命じると、バジリスクは天井から床へ、その巨体を難なく着地させた。そしてそれは——大人一人をまるごと飲み込める位、恐ろしく大きな口を開くと——動く事の出来ないジャスティンに狙いを定めた。イリスは形振り構わず、無我夢中でリドルに縋り付いた。

「お願い、リドル！もうやめて！何でもする、何でもするから！」

「リドル」？「やめて」？「リドルは冷たく嘲笑い、イリスの言葉を繰り返した。

「この期に及んで、君はまだ、僕の“友達”のつもりでいるのか？何のために、記憶を見せたと思っている」

イリスは懸命に記憶の内容を、頭の中でなぞつた。リドルが自分に対して求めているものを理解すると、イリスはガクガクと震えながらも跪いて、彼のローブの端を掴み——かつてメーティスがしていたように——口付けた。

「どうか、どうか、お願いします・・・！」  
ユア・マジエステイ 陛下 “・・・！”

今にもジャスティンを丸呑みしようとしていたバジリスクの動きが、ピタリと止まった。頭上から、リドルの厳しい声が降って来る。

「問おう。僕は君の何だ？“友達”か？“家族”か？“教師”か？」

イリスは絶望にすすり泣きながら、ゆっくりと首を横に振つた。

「いいえ、“陛下”。あなたは、わ、私の——“ご主人様”です」

リドルはその答えに満足したようだった。バジリスクは、天井から排水管へと戻ると、どこへともなく姿を消した。——しかし、石になつたジャスティンと「ほとんど首無しニック」は、変わらずそこにいる。泣き腫らした目で二人の様子を見つめるイリスに向け、リドルは冷たく言い放つた。

「僕はどうかやら、君を甘やかし過ぎたようだ。——君を再教育する。来なさい」

☆

イリスの意識が一瞬途切れ、再び、取り戻した時——彼女は、かつてリドルと数えきれない程、授業を行った「闇の魔術に対する防衛術」の教室にいた。イリスは慌てて両手を見た。今度は、ゴーストみたいに半透明ではなく、しつかりと実体がある。教壇には、同じく実体を持ったリドルが立っている。しかし、彼の瞳は今や、ルビーのように赤く、激しい怒りに燃え盛っていた。

「イリス。もう僕は、君を甘やかし、褒めそやす事などしない。今後はホグワーツに則り、点数形式で、君を厳しくも公平に評価する。点数がなくなった時点で、君への戒めとして“犠牲者”を新たに出す。——まずは、今までの君の行いを評価する事にしよう」

リドルが空中に手を翳すと、大広間の出入口付近で見かける、グリフィンドール寮の大きな砂時計が一つ、浮かび上がった。顔をくしゃくしゃにして泣き出してしまったイリスに向け、リドルは優しい微笑みを見せた。

「イリス。安心しなさい。君は良い事も沢山行っているんだよ。まず、君は、僕に魔法力と魂を存分に注ぎ込んでくれた。”従者”サーヴァントたるに相応しい、素晴らしい行いだ。——グリフィンドールに五十点あげよう」

大きな砂時計の中に、五十粒分のルビーが注ぎ込まれていく。リドルはその調子で、次々とイリスの良い行いを讃えては、加点していった。——リドルの授業をよく理解し、実力を上げた事。リドルに忠実に従った事。上級生でも難しい”目くらまし呪文”や”防護呪文”を取得出来た事。空飛ぶ絨毯を使いこなせた事……。瞬く間に、砂時計は無数の輝くルビーで満杯になった。——助かった？そう言わんばかりに、明らかに安堵の表情を浮かべたイリスを見て、リドルはこう言い放った。

「——だが君は、悪い行いも同じ分だけしてしまっている。そうだな。まず君は、“グリフィンドールに入った”。誇り高きスリザリンの末裔にも関わらず、だ。裏切り者め。グリフィンドール百点減点」

百粒分のルビーが、ごっそりと消え去っていく。砂時計の中のル

ビーは、一気に八割程まで減ってしまった。イリスは全身の血の気が引いて、心臓が芯まで凍り付いていくのを感じた。

「そ、そんな——」

「口答えをするな。グリフィンドール五点減点。——そして、君の父親は、君の記憶を盗み見るに、愚かにも……未来でヴォルデモート卿を裏切ったようだ。親の不始末は子の責任だ。さらに百点減点」

ルビーは度重なる大幅な減点が容赦なく続けられた結果、ついには底の隅つこに、ほんのちよっぴり残っているだけになってしまった。イリスの脳裏に、大好きな親友・ハーマイオニーの笑顔が浮かび、彼女の心臓は不安にキリキリ絞られ、飛び出す位に激しく鼓動を打ち始める。——しかしリドルは、これで終わらなかった。

「最後に、君はどうやら“穢れた血”のハーマイオニー・グレンジャーを親友と慕っているようだな。“血の裏切り”め、恥を知れ。グリフィンドール、五十点減点だ」

とうとう、ルビーは一粒残らず無くなってしまった。イリスは目の前が真っ暗になり、茫然と空っぽになってしまった砂時計を見つめ続けた。リドルは芝居がかった様子で片眉を上げ、「おや」と呟いた。

「ルビーが無くなってしまったね。処罰実行だ、イリス。——次の“犠牲者”は、丁度良い、君の親友の“穢れた血”ハーマイオニー・グレンジャーにしよう」

まるで、『今日の晩御飯はカレーにしよう』とでも言うような、気軽な調子でリドルは言った。イリスは恥も外聞もなく、赤子のように泣き叫びながら、薄笑いを浮かべるリドルの足元に継り付いた。

「陛下！何でもします！何でもしますから、どうか、どうか……彼女だけは傷つけないで！……わ、私を殺してください！私ならいくら酷い目に遭ったって平気です！悪いのは私です！」

ついには激しく泣きじやくり始めたイリスを優しく抱き締めると、リドルは言った。

「イリス。それでは処罰にならないだろうか？君の一番大切なものを壊すから、処罰になるんだ。——グレンジャーが、君の目の前でゆつくりとバジリスクに飲み込まれ、もがき苦しみながら消化されていく様



子を見たら、いくらトロール並みに馬鹿な君でも反省するだろう?」「ゆ、許して!どうか、お願いします!も、もう二度と、誰にも言いませんから!何でもします!ごめんなさい!ごめんなさい!」

リドルの怖気を震うような処罰を想像し、たまらず震え上がるイリスを見て、彼は食欲をそそられたかのように、ペロリと舌なめずりをした。

「イリス。君はさつき、”何でもする”と言ったな。——ならば、一度だけチャンスを与えよう」

酷くしやり上げながらも、見上げたイリスの頬を愛しげにひと撫でし、リドルは言った。

「かつてメーティスは、在学中に『動物もどき』<sup>アニメーガス</sup>を取得し、巨大な雌蛇となつて、僕の為に諜報活動を行っていた。——彼女は素晴らしい”忍びの者”だった。君も同じようになれたら、ご褒美としてグレンジャーに手は出さないと約束しよう」

『動物もどき』・・・」

「そうだ。結果発表日は——そうだな、クリスマス休暇が終わった後の日、にしよう。もしその時、君がまだ『動物もどき』になれていなかったら・・・グレンジャーは、バジリスクの一足遅いクリスマスデイナーになる」

『動物もどき』。この言葉を、イリスは「変身術」の授業で、マクゴナガル先生から聞いた事があつた。実際、マクゴナガル先生自身も『動物もどき』で、トラ猫に変身する事ができる。——この能力を持つ者は、特定の動物(本人の素質に最も相応しいもの)に、杖なしで変身する事ができる。だが、この能力を身につけるのは非常に難しいと聞いた。リドルが提示した習得までの期限は、わずか一月足らずだ。出来る訳がない、と絶望に打ちひしがれるイリスの頭の中で、優しく微笑むハーマイオニーの顔が浮かんだ。——彼女を守るためなら、何だってする。イリスの心の中で、狂気を孕んだ執念の炎が燃え盛つた。彼女は一人、唇を噛み締めた。

☆

ジャステインと「ほとんど首無しニツク」の二人が一度に襲われた

事件で、これまでのように単なるおぼろげな不安感では済まなくなり、ホグワーツ中はパニック状態となった。奇妙な事に、一番不安を煽ったのは「ほとんど首無しニック」の運命だった。ゴーストにあんなことをするなんて一体何者なのかと、寄ると触るとその話だった。クリスマスに帰宅しようと、生徒達が雪崩を打ってホグワーツ特急の予約を入れた。

「この調子じゃ、居残るのは僕たちだけになりそう」

ロンが三人に言った。今年のクリスマス休暇は、四人揃って——ポリジューズ薬作戦のために——ホグワーツに残って過ごす事になっていたのだ。

「イリス。朗報だ。マルフォイ、クラブ、ゴイルも残るんだって。肝心の息子が戻ってこないんじゃないや、君を屋敷に拉致る理由がないよ」ロロンがイリスに明るく話しかけた。

「今年のクリスマス休暇は安全って事だ。良かったね」ハリーがイリスの頭を撫でる。

その時、ルシウス・マルフォイに無理矢理組み伏せられた記憶が心中にフラッシュバックし、イリスはビクツと肩を跳ね上げた。——安全だって？とんでもない。もうイリスは、魔窟の中心に捕えられているのだ。イリスを助けてくれる者は、誰もいなかった。

ハリーは一刻も早くクリスマス休暇が来る事を心待ちにしているようだった。廊下でハリーに会うと、みんな、まるでハリーが牙を生やしたり、毒を吐き出したりするとも思っているかのように、ハリーを露骨に避けて通った。みんな、ハリーがジャステインと『決闘クラブ』でもめ事を起こした事を知っているし、しかも何とも間の悪い事に——石化したジャステインと「ほとんど首無しニック」の第一発見者がハリーだったものだから、彼こそが“スリザリンの継承者”だと信じて疑わなかったのだ。しかし、悪戯好きなフレッドとジョージにしてみれば、こんなに面白い事はないらしい。二人でわざわざハリーの前に立って廊下を行進し、芝居がかった口調で先触れした。パーシーが厳しく注意しても、二人はどこ吹く風だ。

「笑いごとじゃないぞ」

「おい、パーシー。どけよ。ハリー様は早くいかねばならぬ」とフレッド。

「そうだぜ。牙をむき出した召使とお茶をお飲みになるので、“秘密の部屋”にお急ぎなのだ」とジョージが嬉しそうに続けた。

ハリーもロンもハーマイオニーも、二人がハリーを“スリザリンの継承者”だと思っていないが故の行動だと知っていたので、いつものジョークだと軽くいなしていたが、イリスだけは違った。イリスは、自分のせいでハリーが犯人扱いされているという罪の意識に耐え切れず、いつも弱々しく泣き出してしまっていた。

「は、ハリーは犯人じゃないよ。やめてよ……！」

だが、イリスはそれ以上は、決して言えない。ハリーは慌てて、自分よりも一回り程小さなイリスを抱きしめて、「僕は気にしてないよ。大丈夫」と優しく言いつて聞かせるのだが——イリスはただ、泣きじゃくるだけだった。ロンはその様子を呆れたように眺め、ハーマイオニーは何かを思案するように静かな目で、イリスをじっと見つめているのだった。

☆

いざクリスマス休暇が始まると、イリスは、『動物もどき』について勉強をするために、図書室に足繁く通い詰めた。リドルはイリスに試験を与えた次の日から、彼女の前に——夢の中でも現実世界でも——一向に姿を見せなくなってしまった。しかし、それは逆にイリスの不安を助長させた。イリスは、医務室や自室に『体調が悪い』という理由でしょっちゅう閉じ籠もり、その時間を勉強に費やしていたので、クリスマス休暇に四人で過ごす事は殆どなくなってしまった。おまけに、四人で細々と制作していた“ポリジューズ薬作戦”にも、全く参加しなくなってしまった。

イリスは図書室で、『動物もどき』に関するあらゆる書物を読み漁った。“ハーマイオニーを救う”——ただその一心で、眠気や疲労感もかなぐり捨てられた。今までの彼女では考えられない位、集中力や知性も、ぐんぐんと増していくのが感じられた。しかし、イリスは勉強に没頭する余り、最早、まともに睡眠や食事すらも取れなくなっ

まった。『動物もどき』になるのには、どんなに魔法に長けた者でも、習得までに数年の年月がかかるという。——イリスは思った。正攻法ではダメだ。とてもじゃないが間に合わない。どんな手段を使っても、不可能を可能にするんだ。イリスはもう、善悪の区別がまともにも出来ない程に追い詰められ、衰弱していた。

イリスはその夜、“目くらまし呪文”で自らの姿を消し、図書室の『禁書』の棚に忍び込んだ。ハーマイオニーを守るためなら、どんな悪事にだって手を染めてやる覚悟だった。イリスの予想通り、『禁書』に置いてある本は、彼女に『動物もどき』になるに必要な、多くの知識を教えてくれた。彼女はスネイプの保管庫にも忍び入り、即効性があり、作り溜めする事のできる“栄養剤”や“集中強化剤”、“睡眠抑制剤”の材料をいくつか盗んだ。翌日、スネイプが気色ばんだ様子でホグワーツ中を練り歩き、“盗つ人”を探していたが、イリスは知らない振りを貫いた。——皮肉な事に、そういった忍びの行動に必要な魔法は全て、リドルが教えてくれたのだ。努力の甲斐あって、イリスは少しずつ——自分の体を動物へと変化させる事ができるようになっていた。

☆

クリスマスイブの夜、イリスは、興奮した様子のハーマイオニーに談話室の片隅に呼び出された。

「イリス。ついにポリジューズ薬の完成よ。明日の朝、煎じ薬にクサカゲロウを加えたら、いよいよ作戦決行だわ」

「そう。私は行けないから。ごめんね」

イリスは素っ気なく返事を返すと、踵を返して自室へ戻ろうとした。イリスはもう『動物もどき』の事で頭が一杯で、余裕がなかったし——ルシウスの魔の手から自分を救ってくれなかったドラコが、スリザリン生に扮した三人に真実を告げるようなリスクを冒すとは到底思えなかったのだ。しかし、その手をハーマイオニーはしっかりと掴み、離さなかった。

「ねえ、イリス。貴方、ホントに最近様子がおかしいわ。休暇が始まってから、ろくに顔を合わせていないじゃない。ハリーもロンも、とっ

ても心配しているのよ。いつも青白い顔をしてるし、今にも倒れそう  
だわ」

「体調が悪いから、しょうがないよ」

「しようがなくなんてないわ。私、マダム・ポンフリーに相談したの。  
そうしたら、貴方を聖マンゴに一度連れて行くって……」

イリスは思わず頭がカツとなり、感情的に叫んだ。

「どうしてそんな余計な事をするの?!」

ハーマイオニーは驚きの眼差しで、イリスを見つめた。イリスは彼  
女をイライラと睨み返す。今ここで、聖マンゴなんかに関連して行かれ  
たら……習得までの期限なんか、あつという間に過ぎる。つまり、ハー  
マイオニーが殺されてしまうんだ。私の気持ちも知らない癖に！イ  
リスは思わず心の中でハーマイオニーを呪い、詰め寄った。

「ハーミーって、ホントにおせっかい焼きだよね!! 私に断りもなく勝  
手に……私のお姉ちゃんにでもなったつもり?!」

「ご、ごめんなさい、イリス、でも私、貴方の事が心配で……」

「私のことが心配なら、もう私に関わらないでよ!!」

イリスは自室に駆け込むと、荒々しくドアを閉めた。——そして、  
彼女は、扉を背にして力なく座り込み、しくしくと泣き出した。こん  
な筈じゃなかった。ハーミーたちに『メリークリスマス』って言って、  
ハリーやロンから聞いた魔法のクラッカーやおもちやで遊んで、クリ  
スマスのご馳走を四人で仲良く食べて、クリスマスプレゼントを交換  
して……。イリスの心中で、決して叶う事の無い未来予想図が浮か  
んでは、キラキラ輝いて消えていく。——現実には、イリスは食事も睡  
眠もろくに取らず、三人とはほぼ絶縁状態で、一人ぼっちだった。  
ハーミーはきつと、意地悪な私を嫌うだろうな。それでいいんだ。イ  
リスは一人、寂しく笑った。闇の帝王の血縁者であり、その手下にさ  
れてしまった自分と、一体誰が仲良くしてくれるっていうんだ？

☆

その夜、イリスは、寝静まったハーマイオニーのベッドの脇に、そっ  
と立った。

「ごめんね。ハーミー」

それは、イリスの素直な謝罪だった。たちまち胸の中に熱い感情が込み上げて来て、ボロボロと大粒の涙がいくつも零れ落ちた。

「ハーミー。大好きだよ。だから、……た、助けていの。守り、たいの。う、うう……」

本当は、ハーマイオニーとずっとずっと、この先ずっと、仲良く過ごしたかった。でも、彼女の無事を考えるなら、イリスはもう、ハーマイオニーと関係を断たねばならなかった。ハリーやロンともだ。

「がんばって、『動物もどき』になるからね。……絶対、絶対、ハーミーの事、守るから」

その時、最後のお別れの言葉を囁き続けるイリスは気付かなかつた。横を向いて、静かな寝息を立てていたと思っていたハーマイオニーが——薄目を開け、同じく静かに涙を流していた事を。

☆

翌日、スリザリン寮の前で、三人のスリザリン生たちが佇んでいた。

——その正体は、ポリジューズ薬で見事変身に成功した、ハリーとロンとハーマイオニーだ。彼らはそれぞれ、ゴイル、クラップ、ミリセントに変身していた。本物のゴイルとクラップは、ハーマイオニーお手製の眠り薬入りケーキを食べ、箒用の物置で長い眠りについている。ミリセントは実家に帰っているの、ホグワーツ内で彼女と出くわす危険性はない。

「効果は六十分しか続かないわ。早くしなくちゃ」ハーマイオニーがイライラと足踏みをしながら、二人を急かした。

「そんなこと言われたって、合言葉を知らないもの」ハリーは囁く。「君、ちよつとプリプリしすぎだぜ。イリスじゃないんだからさ」ロンが混ぜっ返す。

ロンの言葉が切っ掛けとなり、三人はそれぞれ、今朝のイリスの様子を思い返して、落胆のため息を零した。ハリーが代表して、最近ろくに会話すら出来ないイリスに話しかけた途端、彼女はわざとらしいまでにゴホゴホと咳き込みながら、自室へ引っ込んでしまったのだ。

「やっぱり、ジャステインとニックが襲われた事が、相当ショックだっ

たんじやないか？だつて、あの事件からあいつ、明らかに様子が……  
言い掛けたロンの脇腹を、ハリーが慌てて小突き、顎である方向を  
差した。——三人が求めていた人物が、そこにいた。ドラコ・マル  
フォイだ。ドラコは、いつも青白い顔をより一層白くさせ、目の下には  
薄らと隈が出来ていた。思いつめた表情で、スリザリン寮の前まで  
やって来て——やつと、三人の存在に気づき、眉をひそめた。

「おまえたち、こんなところにいたのか。——ブルストロード？君、  
帰って来てたのか？」

「え、ええ。そうなの」ハーマイオニーは出せうる限りの野太い、意地  
悪そうな声を出した。

「そうか」

ドラコは特にミリセントに対して、疑問は抱かなかつたようだつた。  
た。というよりも、そんな事などどうでもいい、といったような調子  
だった。彼は湿った剥き出しの石が並ぶ壁の前で立ち止まり、「純血」  
と実にスリザリンらしい合言葉を唱えた。すると、壁に隠された石の  
扉がスルスルと開く。ドラコがフラフラとそこを通り、三人がそれに  
続いた。

スリザリンの談話室は、細長い天井の低い地下室で、壁と天井は荒  
削りの石造りだった。天井から丸い緑がかつたランプが鎖で吊るし  
てある。前方の壮大な彫刻を施した暖炉では、パチパチと火が弾け、  
その周りに、彫刻入りの椅子に座ったスリザリン生の影がわずかに見  
えた。

「おまえたちに面白いものを見せてやる。ちよつとそこで待ってい  
ろ」

「私も一緒に見たいわ」とすかさずハーマイオニーが言った。

ドラコは三人に暖炉から離れた空の椅子を勧めると、自室へ向かい  
——暫くして、日刊予言者新聞の切り抜きを持ってきた。ハリーに手  
渡したので、三人はそれぞれ額を突合せてそれを眺める。それは、『魔  
法省での尋問』と銘打たれた記事で、ロンの父親であるアーサー・  
ウィーズリー氏が、マグルの自動車に魔法をかけた廉で、五十ガリオ  
ンもの罰金を言い渡されたという内容だった。

「面白いだろう？」ドラコは弱々しく笑った。

三人はそれぞれ、苦心しながらも——特にロンは、二人が制止しなければ、危うくドラコに殴りかかるところだった——笑った振りをした。ドラコはそんな三人の反応を気にも留めず、虚ろな表情で言葉を続けた。

「こんなマグル鼻肩の下らない一族の、下らない記事が取り上げられているっていうのに、どうして日刊予言者新聞は、今回の事件を報道しないんだ？」

三人は思わず顔を見合わせた。——今回の事件とは言うまでもなく、“秘密の部屋”の事だ。ハーマイオニーは素早く頭を巡らせ、質問した。

「ねえ、今回の事件。裏で誰が糸を引いているのか、あなたに考えがあるんでしよう？」

その時、ドラコは——能面のように一切の感情を消し去った。そして彼は、ハーマイオニーと目を合わさずに、不快そうに言い放った。

「いや、ない。同じ事を何回も聞かないでくれ、ブルストロード」

「過去に“部屋”が開かれたって、本当？」ハリーが機転を利かせ、質問の内容を変える。

「ああ」ドラコは本当に嫌そうに頷いた。「だがこの話を聞かせるのは、今回で三回目だぞ、バカゴイル」

「父上から聞いた話だが、今から五十年前に、スリザリンの継承者によって“部屋”が開かれたらしい。その時、“穢れた血”が一人殺されたとされている。だから今回も——ウツ」

驚くべき事態が起こった。ドラコはおもむろに両手で口元を抑え、込み上げる吐き気を堪えようとしたのだ。ハーマイオニーはハンカチでガードした手で腫れ物に触るようにドラコの背中を撫でさすり、ハリーとロンは、互いの目を見合い、首を傾げた。——何故“純血”のドラコが、ここまで“秘密の部屋”に対して吐き気を催す程に、怯える必要性があるんだ？

「すまない」

「いいのよ」



ハーマイオニーはそう言いつつ——ドラコには見えないように——ハンカチを指先で嫌そうに摘み、ロンのローブのポケットに突っ込んで、彼のローブで自分の手を念入りに拭いた。「おい、マジでふざけんなー！」と言わんばかりの、ロンの殺意に満ちた眼差しを平然と受け止めながら、彼女は次の質問に移る。

「過去に“部屋”を開いたスリザリンの継承者は、どうなったの？」  
「ああ、誰だったにせよ……追放された。たぶん、まだアズカバンに  
いるだろう」

「アズカバンつてのは、魔法使いの牢獄さ」ロンが二人に辛うじて聞こえる声で囁いた。

「じゃあ、今回のスリザリンの継承者も……いずれは殺人者になって、アズカバン送りになるって事よね」

ハーマイオニーは、いやに挑戦的な目付きで言い放った。その声には、わずかに怒気が含まれている。ドラコの表情が明らかにこわばった。

「そ、そんなこと、僕がさせない」ドラコは蚊の鳴くような声で言い返した。

「させない」？」ハーマイオニーは容赦なく追撃する。「やっぱり貴方……」

しかし、彼女の攻撃はそこまでだった。ハリーが慌てて、元の豊かな栗色の髪に戻りつつある彼女の肩を小突いたからだ。隣に座るハリーの瞳が、徐々に緑色へと変わっていく。ロンの髪の色も、元の赤色を取り戻していく。——タイムアップだ。三人は大急ぎで立ち上がった。

「胃薬だ。さつき食ったケーキ、腐ってた」ロンが呻いた。

三人は振り向きもせず、スリザリンの談話室を端から端まで一目散に駆け抜け、石の扉に猛然と体当たりし、廊下を全力疾走した。——何卒、マルフォイが何にも気づきませんように——と三人は祈った。三人は次第にダボダボになっていくローブをたくし上げつつ、クラツブとゴイルを閉じ込めて鍵をかけた物置（中から、激しくドンドンと戸を叩くこもった音がしている）の前に靴を投げ置き、再び「嘆きの

「マートル」の住む三階の女子トイレへ戻った。

「まあ、全くの時間のムダではなかったよな」ロンがゼイゼイと息を切らしながら、トイレの扉を閉めた。

「ムダどころか——今回の件で、私、確信がいったわ」とハーマイオニー。

「確信って何のことだい？」ハリーがひび割れた鏡で、完全に元に戻った自分の顔を見ながら問いかける。

ハーマイオニーは何にも答えず、自分の着替えを持って個室に入り、鍵を閉めた。

☆

一方のイリスは、自室で一人、双眸を固く閉じ、集中していた。彼女の座るベッドには、図書室から借りて来たのだろう、無数の書物が広げられている。つい先ほど飲み干したばかりなのだろう薬瓶や、少しかじった痕のある薬草も転がっていた。

イリスは全身に魔法力を行き渡らせる。——途端に、彼女の体を金色の光が包み込み、見る見るうちに小さく小さく縮んでいく。クルミ程の大きさになると、金色の光は細かな粒子になって弾け飛び——そこには、イリスではなく、精緻な金細工と見まごうばかりの、素晴らしく美しい、丸みを帯びた小鳥がいた。長い嘴に、ルビーを嵌め込んだように煌めく、つぶらな瞳。

イリスは、ひと月足らずで見事リドルの試練を達成し、魔法界で絶滅危惧種に指定されている魔法生物『ゴールデン・スニジェット』に変身したのだった。

イリスは嬉しくなって、美しい羽の関節を自在に切り替え、部屋中をキュンキュンと高速で飛び回った。彼女にとっては、スニジェットだろうが、蛇だろうが、ナメクジだろうが、『動物もどき』になれさえすれば、何でも良かった。——これで、ハーミーをバジリスクから守る事ができる。元の人間の姿に戻ると、イリスは明るい笑い声を上げて、沢山の本が山積になったベッドの上へダイブした。

「やったよーハーミーー！これで、これで……君を守れるんだ！」

すぐ傍で、リドルが邪悪な笑みを湛え、その様子を見守っている事

も知らずに。

クリスマス休暇が終わり、新学期が始まった。医務室でマダム・ポンフリーの健康チェックを終えた後（ポンフリーは仕切りに首を傾げながら「今月中に体調が戻らなければ、本当に一度、聖マンゴに行きましょう」と念押しした）、イリスは大広間へ向かった。

一足先にテーブルに着いていた三人から「ポリジューズ薬作戦」の顛末を聞くと、イリスは人知れず眦に涙を浮かべた。やはりドラコは、ハリー達に『イリスが継承者』だという真実を告げなかったらしい。

——どうして助けてくれないの？私が犯人だってわかってる癖に。イリスの心の中に、唯一真実を知るドラコに対し、憤りと失望の気持ち湧き上がる。

——でも、これで良かったのかもしれない。彼女は指先で涙を拭いながら、自嘲気味に笑った。もし本当に彼が真実を告げていたら、勘付いたリドルにどんな酷い目に遭わされるか分からないからだ。イリスはこれ以上、誰かが傷つく所など見たくなかった。自分が我慢すれば丸く治まる。彼女は自らにそう言い聞かせ、不安と恐怖に泣き叫ぶ心を、懸命に押さえつけようと努力した。

「前回部屋が開かれた時、継承者は捕まって」アズカバン送り”になつて、今もそこにいるんだつて。だから、今回もそうなるよ。きつとダンブルドアが捕まえてくれるさ」

イリスの無言の葛藤に気づく事無く、ロンがソーセイジにケチャップをぶちまけながら、事も無げに言った。

「アズカバン”？」

イリスは二つの意味で首を傾げた。一つは「アズカバン”なる不穏な響きを持つ言葉に対して、そしてもう一つは、『前回の継承者が捕まった』と言う情報に対してだ。五十年前に部屋を開いたのは、リドルとメーティスだ。今も二人が「アズカバン”」という場所にいるなら、色々な話の筋が通らない。

「アズカバンは魔法界の刑務所だよ、イリス。極悪人が送られる、魔法

界イチ”怖いところ”さ”

ロンはイリスを怖がらせようとして、おどろおどろしい調子で言った。

「脱獄は不可能って言われてる。パパから聞いたんだけど、入れられた奴は・・・獄中死するか、気が狂った廃人になるか、どっちかららしい」

ロンのおふぎけは予想以上の効果を上げた。イリスの只でさえ青白い顔はより一層青くなり、ブルブルと震え始めたのだ。その様子を見てロンは『怖がらせ過ぎた』と思い、慌ててフォローした。

「イリス。僕の話、ちゃんと聞いてた？アズカバン送りになるのは極悪人——”スリザリンの継承者”さ。君じゃないよ」

フォローする筈のロンの言葉は、容赦なくイリスの心を抉り、突き刺した。彼は当然知らないが、イリスこそが”スリザリンの継承者”なのだ。——もしダンブルドアが真実に気づいたら、自分は捕えられ”アズカバン送り”になるのでは？イリスの頭の中で恐ろしい考えがグルグルと回り、暫く体の震えを止める事が出来なかった。

☆

その日の夜は、イリスの『動物もどき』<sup>アニメーガス</sup>の結果発表日だった。緊張した面持ちで自室のベッドに腰掛け、瞬きをした瞬間に——彼女は、夢の世界で構成された「闇の魔術に対する防衛術」の教室へと誘われていた。教壇にはリドルがいて、彼の右上には空っぽの砂時計が浮かんでいる。

「僕の試練は達成できたか？」

リドルが穏やかに問いかけると、イリスは蒼白な表情でこくりと頷いた。——失敗は許されない。イリスは瞼を固く閉じ、集中して、全身に魔法力を行き渡らせる。

魔法力は眩い金色の光となってイリスの体を包み込み、程無くして彼女は見事スニジェットに変身してみせた。イリスはリドルが差し出した掌の上にちよこんと乗ると、つぶらな瞳で彼を見上げる。リドルは口角を吊り上げ、空いている方の手の指先でクルミ程の大きさしかないイリスを愛でた。

「スニジェットか。〃 平和を愛する美しい小鳥〃。蛇ではないのは少し失望したが、君らしい。これ位の大きさならば、排水管も通り抜ける事ができるだろう。諜報活動にも適している」

イリスは悪戯に強く突かれてよろけたり、コロリと転がされる度に起き上がり、真摯な眼でリドルを見つめ続けた。言葉を持たぬものとなったイリスが、その美しい瞳を通して彼に伝えたい事はたった一つ——『ハーマイオニーを殺さないで』——それだけだ。やがて思いが通じたのか、それとも単純に弄るのに飽きたのか——リドルは哀れな小鳥への愛撫を止め、満足気な声でこう言った。

「イリス。実によくやった。元の姿へ戻れ」

イリスは空中へ舞い上がり、光の粒子を散りばめながら人間の姿へ戻った。——約束は果たした。イリスは何度も自分に言い聞かせ、勇気を奮い立たせると、リドルをおずおずと見上げながら震える唇を開いた。

「陛下……は、ハーマイオニーは……」

「ああ。僕は約束を守る。彼女には手を出さないよ」

リドルは、につこりと優しげに微笑んだ。イリスの努力は、実を結んだのだ。ハーマイオニーをバジリスクから守る事が出来た。安堵感がドツとイリスを包み込み、彼女は零れ落ちる涙を拭いながら、何度もリドルに礼を言った。リドルは上機嫌な様子で指を鳴らし、空っぽの砂時計をルビーで満たした後、イリスを片手で抱き寄せ、熱を帯びた声音で語り掛けた。

「イリス。君は僕の予想以上に、素晴らしい成長を遂げてくれた。並みの魔法使いでも習得するのに途方もない年月を費やす『動物もどき』を、君はわずか一月足らずで成し遂げた。君の知性や魔法力は僕の教授を糧として成長し続け、留まるどころを知らないようだ。今の君を、誰も〃落ちこぼれ〃とは呼ばないよ。監督生や首席になる事だって、今の君ならば容易い事だろう」

イリスは曖昧な笑みを浮かべた。——監督生や首席になる事なんて、もうどうでもよかった。前みたいに〃落ちこぼれ〃とからかわれ、笑われた時期の事が、とても懐かしく愛おしく感じる。何も知ら

ないあの頃に戻りたい。戻れるならば何を差し出したって構わない。イリスは込み上げて来る悲しみを、リドルに不審がられまいと飲み込んだ。だが、それすらも見透かしたように、彼はゾツとするような柔らかな声で、彼女に命じた。

「君にご褒美をあげよう。右腕を出しなさい」

イリスは何も考えず、素直に右腕を出した。リドルは片手で彼女の右腕を掴んで固定すると、空いた方の指先を押し当て、何かの呪文を囁いた。

——不意に、ジュウジュウと肉の焼ける嫌な音がした。

「いッ、あああああ——ッ!!」

腕に“焼き罎”を押し付けられている——そう錯覚する程の強烈な熱さと痛みがイリスに襲い掛かり、彼女はたまらず泣き叫んだ。“拷問”と呼んでも差し支えないだろうその激痛は、リドルが指を離すと同時に、徐々に消え去っていく。イリスは全身に汗をびっしりとかき、息を荒げて涙を零しながら、まだ痛みの余韻が残る右腕を恐る恐る見た。

——彼女の腕の前部を覆うように、鬮體と蛇をモチーフとした『刺青』が焼き付けられている。リドルは恍惚とした表情でそれを見つめ、そつと指先で輪郭をなぞった。

「闇の印」——僕の思想に賛同し、忠誠を誓った優秀な闇の魔法使いや魔女——“死喰い人”デスイーターに与えるものだ。他の者はみな左腕だが、君は特別だ。メーティスと同じように、右腕にしてあげた。——イリス、覚えておきなさい。“本物の僕”は近い未来、必ず復活を遂げる。その時、印の色は今よりもずっと濃くなるだろう。そして、これが黒く変色したら『召集のサイン』だ。速やかに駆けつけるように。いずれば、空に“闇の印”を打ち上げる魔法も教えてあげよう」

“闇の印”——一年生の『闇の魔術に対する防衛術』の授業の時、イリスは、恐怖で吃音が五割増しになったクイレル先生から聞いた事がある。ヴォルデモート一派の証であり、残忍な死喰い人である印。それをリドルはおぞましい事に、イリスに“ご褒美”として与えたのだ。茫然と印を見つめるばかりのイリスに訝しげな目を向け、リドル

は尋ねた。

「どうしたんだい、イリス？ 恐らく僕が知る中で、君は最年少の“死喰い人”になれたんだ。とても光栄な事だよ。——まさか、嬉しくないのか？」

最後の声は、地を這うように低く、明確な怒気を帯びていた。イリスは途端に冷水を背中に浴びせかけられたような気持ちになり、慌てて彼を仰ぎ見た。彼の目の奥に、チロチロと赤い光が燃えている。イリスの視界の端に、溢れんばかりのルビーで輝く砂時計が目に入った。——またリドルを怒らせたなら、今までの自分の努力が無に帰してしまう。

「う、嬉しいです。陛下……」

だからイリスは、涙と汗と鼻水でぐしゃぐしゃに汚れた顔で、少しでも嬉しそうに見えるよう、精一杯微笑んで見せた。

☆

イリスは夢の世界から覚醒した。ベッドから起き出し、恐る恐る自分の右腕を見る。『夢の世界での事だ』そう願っていたイリスの思いは打ち砕かれた。——“闇の印”は当たり前のように、そこに在った。そして、それはイリスに、もうリドルと出会う前の頃には決して戻れないと教え込めるかのように、残酷にきらめいた。

——どうして、こんなことに。

——どうして、私だけがこんな目に。

——何を、間違えたの？

イリスは言葉もなく、ただ咽び泣いた。

「可哀想に。とても辛いだろう」

現実世界においても、哀れなイリスに逃げ場など無かった。幻のリドルがふわりと現れて、ベッド上に蹲って泣き続けるイリスを、背後から優しく抱き締めた。彼はイリスの魂と魔法力を糧に徐々に力を増し——今や一時的ではあるが——実体を持てるまでになっていた。不意に自らの肌に触れる感覚とその声に、恐怖に怯えて息を詰まらせるイリスを、リドルは悲しげに見つめる。

「僕が怖いか？ 恐ろしくて堪らないか？」



リドルは穏やかに尋ねた。イリスは躊躇ったが、彼は優しく促した。

「罰は与えない。正直に言つてごらん」

不思議な事に、彼の声には——イリスに対する深い労りと悲しみが込められていた。イリスは震えながら、微かにこくんと頷いた。リドルは、小さなイリスを布団ごと包み込むように抱き締める。

「君が戸惑い、僕を拒絶しようとするのは当然の事だ。——イリス、君は十二年もの間、悪い夢を見させられていたんだよ」

——“悪い夢”？リドルの言葉の真意が掴めず、イリスは思わず彼を見上げた。部屋はルームメイト達の規則正しい寢息以外は、何も聴こえない。深々とした静寂が、リドルの静かな声を際立たせる。

「本来なら君は、君の父親に“従者”として然るべき教育を受け、育つ筈だった。しかし——五十年前近辺の記憶しか持たない僕には、憶測する事しかできないが——どこかで、歯車が狂ったのだらう。メーテイスが僕を裏切る筈がない。——裏切ったのは、君の父親だ」

リドルは忌々しげに言い放った。

「君は父親に裏切られたんだよ、イリス。そして、間違つた環境で育てられ、間違つた考えを教えられ、間違つた友人を持たされた」

「ま、間違い……？」

「そうだ。全てが“間違つていた”」リドルは歯噛みした。

「君が魔法界の事を伏せられ、マグル界でスクイブに育てられた事も、ダイアゴン横丁でハリー・ポッターと共に行動した事も、グリフィンドール寮に入った事も、ハリー・ポッターを始めた“純血主義”でない者達を友人とした事も。全ては、ダンブルドアによつて仕組まれた事だった」

「ダンブルドアが？どうして？」

イリスは思わずリドルに尋ねた。——ダンブルドアが自分に関与している？しかしそれを嘘だと言い切る事は、かつてルシウスと対峙した時の記憶を思い起こしたイリスには、出来なかった。——あの時、彼は確か『イオはダンブルドアの操り人形だ』と言っていたからだ。リドルは歯を食いしばり、イリスを抱き締める手の力を強めた。

「君を恐れているからだ。イリス。メーティスによく似て、彼女以上の、途方もない量の魔法力をその体に秘めている君を」

リドルの言葉は、イリスのひび割れて弱り切った心に、毒のように染み込んでいく。やがてイリスは疑念を抱いた。『君を信じている』一年生の時、ダンブルドアはイリスにそう言った。あの時の言葉は——リドルの言うように——自分を警戒しているから発されたものなのか？

「だから君に真実を伏せ、“本当の君”を押しえつけようとした。自ら用意した下らない友情や愛情を君に与え、それこそが君の幸せなのだ、彼らこそが君の大切な人なのだ、洗脳した。

——だが、断じてそうではない。“本当の君”は、ヴォルデモート卿に絶対的忠誠を誓う“従者”だ。君の幸せは常に僕と共にあり、君の大切な人も僕だけだ。今までの君は“本当の君”ではなかった。ダンブルドアに仕込まれた“偽物の君”だったんだ」

リドルは、慈愛に満ちた瞳でイリスを見つめた。——だがその奥には、彼女に対する常軌を逸した執着心が渦巻いている。

「君は、実に十二年も“間違った道”を歩まされていた。だがもう大丈夫だ。僕が少しずつ“正しい道”へ戻してやる。それまでは違和感を感じたり、辛く苦しい思いもするだろうが、我慢してほしい。きつと君は近いうち、僕に深い感謝の念を抱くようになるだろう」

☆

イリスは“闇の印”がいつ友人達にバレないかと、ヒヤヒヤして毎日を過ごしていたが、幸いな事にまだ厚着をする季節だったため、印を見咎められ、不審がられる事はなかった。

リドルは、しばしばイリスをスニジェットに変え、ホグワーツ内の様々な情報を集めるように命じた。諜報活動をするに当たって、みなに気づかれず、密かに移動する事のできる『排水管』は重宝するものだった。——リドルは取り分け、ダンブルドアを警戒し、彼に関する情報を集めるよう厳命した。

『動物もどき』の勉強をする必要がなくなったため、休暇が終わってから、イリスは再びハリー達と行動を共にするようになった。しか

し、彼女の気力や体力は——リドルに吸い上げられたり、度重なる任務で疲弊し、弱まるばかりで——結果、彼女は今まで以上に大人しくなり、それぞれ病弱なイリスを氣遣つてくれる三人の後を、影のように付いていくだけになってしまった。

ある時、リドルはイリスの定期報告を聞き終えると、彼女に新たな任務を言い付けた。

「君の仲良し三人組は、余りにも”部屋”の事を嗅ぎ回り過ぎていて。少々目障りだ。僕が上手く対処しよう。”日記をハリー・ポッターに拾わせるんだ”。三階の女子トイレへ捨てろ」

——日記をハリーに拾わせる？ハリーに危害が加えられるかもしれない！大切な友人が、自分と同じように無理矢理リドルの手下にさせられる光景が思い浮かび、イリスは矢も楯もたまらず、リドルに縋り付いた。

「陛下、どうか、ハリーを傷つけないで！私、一生懸命頑張ります。彼を手下にしないで」

リドルは可笑しそうに吹き出した。

「イリス。君は何を勘違いしているんだい？僕はハリーを傷つけたりしないよ。手下にするつもりもない。ただ、間違った情報を教え、彼らを遠ざけるだけだ」

イリスは安心して、ため息を零した。——リドルがどんな”間違った情報”を教えるのか、疑問を抱く事すらせずに。そしてイリスは、リドルの指示通りに「嘆きのマートル」の住む女子トイレへ、日記を捨てた。

☆

日記はイリスが放り投げた際、偶然「嘆きのマートル」を通過したらしい。マートルはトイレ中を水浸しにして、通りがかったハリー達の注意を引き、四人の内——凶らずもハリーが——マートルによつて押し流され、手洗い台の下に落ちていた日記を手を取った。

ロンの証言により、日記の持ち主”T・M・リドル”が五十年前に『特別功労賞』を貰った人物である事を知ると、ハリー達は当然のようにその日記に強い興味を示した。その過程でトロフィー室に赴き、ハ

リーとロンが「あ。君と同じファミリーネームの人も、一緒に表彰されてるよ」と指摘された時、イリスは「そんな人知らない」と逃げるしかなかった。

その後、リドルは首尾良く動き、ハリーに“間違った情報”を掴ませる事に成功したようだった。——リドルの提示した“間違った情報”とは、“五十年前の殺害事件を引き起こしたのは、当時学生だったハグリッドで、怪物は彼が密かに飼っていた大蜘蛛”だと言う事を、ハリーから聞いた時、イリスは全身の血の気が静かに引いていくのを感じた。

その夜、慌ててリドルに——報告もそっちのけで——ハグリッドの事を尋ねると、彼はこともなげに言った。

「この話は、事実だよ。本当は“部屋”を開き、“穢れた血”を殺したのは僕とメーティスだが——偶然、当時アクロマンチュラを飼っていた愚かなハグリッドに、“罪を被ってもらった”のさ。」

——イリス。どうして泣いているんだい？彼のおかげで、僕らは“部屋”を守る事が出来たし、巨人の血を引いた彼も——本来はアズカバン行だったが——ダンブルドアの計らいで、『禁じられた森の番人』という安定した職を得る事が出来た。全く持つてイーブンな話さ。

ハリー・ポッター達は、ハグリッドと親密なようだから、これ以上の詮索はできないだろうし——イリス。君がこれ以上へまをしなければ、新たな犠牲者は出ないだろう。つまり、ハグリッドの件が蒸し返される事はない。君の働きぶり、ハグリッドの人生が左右されるというわけだ」

リドルは残忍な笑みを浮かべ、イリスを射竦めた。——最早、イリスの肩には、彼女が支えきれない程、沢山の大切な人々の命運が掛かっていた。

☆

淡い陽光がホグワーツを照らす季節が、再び巡って来た。城の中には、わずかに明るいムードが漂い始めた。ジャステインとニックの事件以来、誰も襲われてはいない。マダム・ポンフリーによると、マンドレイクのにきびが綺麗になくなったら、二度目の植え替えが始まり

——その後、刈り取ってト口火で煮るまで、そう時間はかからないそう  
うだ。それを聞いたフィルチは明らかに嬉しそうにしていたが、イリ  
スは戦々恐々とするようになった。ミセス・ノリスは、イリスが継承  
者だという事を知っている。——バレたら、自分は間違いなく、アズ  
カバン行だ。

ある夜、リドルの指示に従い、イリスは“目くらまし呪文”を掛け  
て男子寮に忍び込んだ。——日記を回収するためだ。部屋をそろそ  
ろ歩いて日記を探していると、ふとベッドで熟睡しているハリーが視  
界の端に入った。寝相が悪いらしく、布団を蹴散らしている。イリス  
は柔らかに微笑むと、こっそり布団を直してあげようと腕を伸ばし  
た。

——“闇の印”を宿した、右腕で。

「ッ！」

まるでこの手で触ったら、ハリーを傷つけてしまうように思えて、  
イリスは弾かれたように腕を引っ込めた。先程までの和やかな気分  
が、一瞬で霧散していく。イリスは忙しく周囲を見回し、やがて彼  
の机に置いてある日記を発見した。日記の傍には、かつてイリスがハ  
リーに『誕生日プレゼント』として渡した、お揃いの金色の懐中時計  
が置いてある。

『ずっと友達だ』

ダイアゴン横丁で見た、ハリーの涙交じりの笑顔と言葉が思い浮か  
び、イリスの心の中に、熱い感情が溢れた。——大好きだ。兄のよう  
に親しみを感じられ、等身大でいれる、素朴で、でもとつても格好良  
い、自慢の親友ハリー。だが、もう彼と同じ立場で、“ずっと友達”  
でいる事はできない。気が付くと、リドルがハリーの机に腰掛け、自  
身の日記を差し出しながら、悠然と言い放った。

「君とハリーは住む世界が違うんだ。イリス。ハリー・ポッターは  
ヴォルデモート卿の敵、つまり“君の敵”だ。もう、友達じゃない」

イリスはもう反抗する気力さえ、残っていないかった。彼女は弱々し  
く頷くと日記を掴み、リドルと共に部屋を出た。——その翌日、ハ  
リーは日記が盗まれた事に気づき、方々を探したものの、見つけれ

る事は無かった。

☆

ジャステインとニツクが石にされてから、四ヶ月が過ぎようとしていた。誰が襲ったのか分からないが、その何者かは永久に引きこもってしまったと、ホグワーツ中のみんなが思っているようだった。——しかし、実際は、闇はホグワーツの奥底で、哀れな少女を一人生贄として、依然蠢き続けていた。

今日は、グリフィンボール対ハッフルパフのクイディッチの試合がある。試合の準備のため、一足早く大広間を出たハリー達を見送った後、イリスは一人、グリフィンボール塔へ続く廊下をとぼとぼと歩いていた。ふと廊下の端に何か蠢くものを見つけ、近寄って目を凝らす。

——蜘蛛だ。小さな蜘蛛の集団が、壁の小さな割れ目から、外に繋がる窓枠の隙間へと、一列になって逃げていく。みんなとても慌てているようで、口々にこう叫んでいた。

《逃げる！逃げる！あれが来る！》《逃げる！逃げる！あれが来る！》

イリスは窓の鍵を外して大きく開け、蜘蛛達がもつと逃げやすいようにしてあげた。蜘蛛達は、イリスを振り返る事無く、一目散に窓枠一杯に広がって、大移動を始める。

「君たちは、逃げる場所があって、いいな」

それは、イリスの本心からの一言だった。数えきれない程に傷つき、摩耗し、感情を失くし掛けた彼女の瞳から、熱い涙がひとつづつ零れ落ちる。——私だって、逃げたい。でも、一体どこへ？“闇の印”も焼き付けられてしまった。イリスは血が滲むのも構わず、強く唇を噛み締めた。——あの時、ルシウスは“逆らったらイオおばさんを殺す”と言った。もし全てを見捨ててリドルから逃げられたとしても——ルシウスは、イリスの叛逆を決して許さないだろう。

「私は、もうどこにも、逃げる場所なんてない」イリスは絶望に満ちた声で呟いた。

「そんな事ないわ。イリス」

思いもよらぬ返答に驚いて、イリスは弾かれるように振り返った。——そこには、一冊の本を抱えたハーマイオニーが立っていた。毅然とした表情を湛え、じっとイリスを見つめながら、彼女は続けた。

「『秘密の部屋』の怪物の正体がわかったの。『スリザリンの継承者の正体もね』」

「・・・な、何を言ってるの?」

ドクン、とイリスの心臓が波打った。——彼女は、一体何を言い出そうとしているんだ?警戒するイリスを気にする事もなく、ハーマイオニーは本をパラパラとめくり、あるページを開いて見せた。

「——その正体は、バジリスク。ひと睨みで獲物を殺す事が出来る、恐ろしい目を持った怪物よ。ハリーは『パーセルマウス』だわ。貴方は唯一、『蛇の言葉だけがわからない』。もし、ハリーの言っていた『不気味な声』の正体が蛇なのだとしたら、話の筋は通ると思っただけだ。パーセルマウスのスリザリンが選んだ怪物だし、その方がしつくり来るわ。」

だけど、どうしてミセス・ノリスもジャステインもニックも、バジリスクに襲われたのに、石になっただけで済んだのか。——考えて、分かったわ。『誰も目を直視していなかった』からよ。ミセス・ノリスの近くには水溜りがあったし、ニックはゴースト。一度死んでいるから、二度は死ねない。そしてジャステインは、ニック越しに目を見たから、無事だったんだわ。

ハリーは壁の中から声が聴こえると言った。恐らくバジリスクは、壁の中の排水管を移動していたのね。そして唯一の弱点は、雄鶏が時を告げる声。——最近、雄鶏が殺害される事件が二度あったわ」

イリスは返す言葉もなく、じりじりと後ずさった。ハーマイオニーは静かに本を閉じると、ついに壁に当たって身動きが取れなくなったイリスに、さらに一步近づいた。

「それに、一番怪しいと感じたのは、ハリーが偶然手に入れた日記よ。タイミングが良すぎるわ。『T・M・リドル』——彼は、五十年前に起きた『秘密の部屋』の事件を知っていて、ハリーに自らの記憶を見せ、その全貌を教えてくれた。当時の犯人は、ハグリッドだったと。」

怪物は、彼の飼っていた大蜘蛛だと。——私はすぐに、嘘だとわかったわ。それに」

ハーマイオニーは、中途半端に言葉を切ると、ローブのポケットからあるものを取り出し、イリスに見せた。イリスは思わず悲鳴を上げた。——それは、かつて彼女がイリスに与えた”スケジュール表”だった。

「貴方、これを日記に挟んでいたの？すぐ近くに落ちていたから、ハーリーたちが気付く前に、慌てて回収したわ」

「違う！挟んでなんかないっ！」イリスは我武者羅に叫んだ。

「偶然落としたんだよっ！」

「そうね。”偶然”よね」ハーマイオニーは穏やかに繰り返した。

「トロフィー室にあった、五十年前の「特別功労賞」のトロフィーやメダルに、”T・M・リドル”の名前と一緒に、貴方と同じ姓の”メーテイス・ゴント”という女性の名前が刻まれていた事も、貴方の言った通り”知らない人”——つまり、”偶然”って事よね」

——駄目だ。イリスの脳内で、警鐘が煩い程に鳴り響く。ハーマイオニーは”真実”にたどり着いてしまった。どうしよう、私がへまをしたせいで、ハーマイオニーが——リドルに気づかれる前に、何とかしないと——！イリスの手が咄嗟に自分の杖へ伸びた。

イリスはリドルに”忘却呪文”も学んでいた。リドルが気付く前に、彼女の記憶を消すんだ。じゃないと彼女が、口封じに殺されてしまう。そんなイリスの葛藤を知ってか知らずか、ハーマイオニーは決定的な一言を突きつけた。

「イリス。貴方が、”スリザリンの継承者”なのね？」

「ば、バカな事、言わないでよ」イリスは掠れた声で唸った。

「何の証拠があつて、そんなことを？」

ハーマイオニーは、穏やかに微笑むと、ゆっくりと首を横に振った。「貴方の誰よりも近くにいた私が、貴方の”不審な行動”に気づいていないとでも思ってた？」

「——何の騒ぎだい？」

ついに、最も恐れていた事態が起こった。不意にリドルが現れ、イ



リスに愛想よく微笑しながら問いかけたのだ。リドルは、ハーマイオニーには見る事が出来ない。イリスはハーマイオニーがこれ以上言葉を発する前に、素早く杖を引き抜いて、杖先を彼女へと向けた。

「それ以上、口を開かないで。ハーミー」

イリスは歯を食いしばり、厳しい口調で言ったが、杖を握る手の震えを止める事が出来ない。

「今から君の記憶を——」

「消すつもり？」ハーマイオニーは悠然と微笑み、杖は抜かないままだ。

「親友に杖を向けるなんて、貴方つて随分乱暴者になったのね」

リドルは微笑したまま、『親友？』と唇の動きだけで、イリスに問いかけた。

『この、“穢れた血”が？』

「は、ハーミーなんか、親友じゃないっ！」

——ハーマイオニーを親友と認めたら、彼女を殺すつもりだ。リドルの真意を理解すると、イリスは顔をくしゃくしゃに歪め、自分を心の中で滅茶苦茶に呪いながら、彼女が自分に間違いなく愛想を尽かしてくれるような言葉を選び取り、涙ながらに叩きつけた。

「この・・・このっ、“穢れた血”め!!」

イリスはその言葉を叫んだ瞬間——まるで洗剤を無理矢理、嚙下したような強い吐き気や苦しみ、喉に針が刺さったような激痛を感じ、グラリと眩暈がした。“闇の印”を焼き付けられた時よりも、もっと強い痛みだ。それは、その言葉が確実に大好きな親友を傷つけるものだ、イリスが理解していたからに他ならなかった。

だが、ハーマイオニーは、悲しげに顔を歪めたものの——何も言わなかった。そして静かにイリスに近づくと、彼女をふわっと優しく抱き締めた。

「ねえ、イリス。去年のハロウィーンを覚えている？」

思いもよらぬハーマイオニーの行動に茫然とするイリスの耳元で、彼女の静かな声がした。——勿論、イリスは覚えている。だが、どうして今、去年の話をするのか皆目見当がつかない。

「あの時、私は、暗闇の中で一人ぼっちだと思っていた。誰も私を理解してくれる人も、助けてくれる人もいない。そんな中で、一人きりで生きていくんだって」

その時の孤独な気持ちを思い出しているのか、ハーマイオニーの腕に力が籠もる。

「——でも、そうじゃなかった。貴方だけは、私がどんなにひどく拒絶しても、何度も、何度も、私を助けに来てくれた」

イリスのひび割れたポロポロの心に、親友の暖かな言葉が染み込んでいく。気が付けばイリスはハーマイオニーの背中に手を回し——ハーマイオニーの声には嗚咽が混じり始めていた。

「あ、貴方は……っ、トロールに、命懸けで、立ち向かって、くれたわ！……私を、命をかけて、暗闇から救い出してくれた。その時、私、思ったの。……もし、貴方が私と同じように、暗闇の中に一人、取り残された時……今度は、私が貴方を、きつと、この命に代えても、救い出すんだって。決して、一人ぼっちには、しないって……！」

ハーマイオニーは、涙を零し、しゃくり上げながらイリスを見つめた。イリスも咽び泣きながら、彼女を見つめ返す。——ハーマイオニーは、自分を助けようとしてくれている。あんなに酷い言葉を投げつけたのに、自分は“スリザリンの継承者”なのに——彼女はまだ、自分を親友と思ってくれているのだ。イリスの心は、大いなる歓喜に打ち震えた。

「イリス、貴方はとても優しい子だわ」ハーマイオニーは囁いた。

「そんな貴方を、こんなになるまで追いつめて、悪事に手を染めさせている者がいるっ。私は、それが許せないの……！ 勇気を出して、一緒に、ダンブルドアの所へ、行きましょう。……彼に真実を、話すの」

イリスは矢も楯もたまらず、頷いた。——そう。頷いて、しまった。

☆

「いけない子だ、イリス」

リドルが喉の奥で笑いを堪えながら、イリスの耳元で囁いた。——途端に、イリスは全身の血を一気に引き抜かれたかのような凄まじい

脱力感を感じ、その場に立っていられなくなり、くたつとハーマイオニーに身を預けてしまった。リドルが、イリスの魔法力を殆ど吸い上げたのだ。

「イリス、どうしたの?! しっかりして!」

いくら小柄だと言っても、力を抜いた同年代の女の子を支えきれる筈もなく、ハーマイオニーはイリスを抱えながら、しやがみ込んでしまった。少しでも気を抜けば、たちまち消えてしまいそうになる意識の中で、リドルが「嘆きのマートル」の住む女子トイレへ向かうのを、イリスは見た。チカチカと切れかけた蛍光灯のように、視界が明滅する。

——ガシャン。すぐ傍で大きな破壊音がしたが、驚いて跳び上がったのは、イリスだけだった。音の方向を見ると——夢の世界で何度も見た“砂時計”が砕け、中のルビーが床に零れ——その一粒一粒が燃え尽き、跡形もなく消えていく。イリスは絶望の悲鳴を上げた。——それはリドルの作った幻であり、彼を裏切ろうとしたイリスに向けられた“処罰実行”の合図だった。

「あ、ああつ、陛下、殺さ、ないで……!」イリスは掠れた声で泣き叫んだ。

「ハーミー、逃げて!」

「陛下? 誰の事なの? 馬鹿言わないで、貴方を置いて行きはしないわ」  
ハーマイオニーが鬼気迫った様子で問いかけ、イリスを守るように強く抱き締めた。

——誰か、通り掛かって! 誰でもいい! 誰か、この絶望的な状況を救って! イリスの懇願を嘲笑うかのように、廊下一体は不気味な程静まり返り、猫一匹通り掛かる気配すらない。またマートルが痼癩を起こして水を逆流させたのか、トイレの前に大きな水溜りが出来ていて、松明の光を映してその水面をキラキラと輝かせる。そこに、見覚えのある——緑色の尾っぽが、一瞬映し出された。

もう間に合わない。イリスは微かに残った魔法力の続く限り、“防護呪文”を唱え、多重防壁を張ろうと試みた。

「プロテゴ、護れ! プロテゴ、護れ! プロテゴ、護れ! プロテ……っ」

しかし、ほぼ全ての魔法力をリドルに奪われたイリスの体は、これ以上の魔法力の浪費は生命活動に差し障ると判断し、拒絶反応を示した。その結果、イリスは強く咳き込んだ拍子に血反吐を吐いて、もがき苦しむ事になった。生成された半透明のドーム状の盾は、二人を辛うじて包み込んではいるもの——今にも霞んで消えてしまいそうな程、儚く弱々しい。

「無駄だ、イリス。そんな脆弱な魔法で、バジリスクを防げるものか！」

二人の周囲で、リドルの甲高い笑い声だけが不気味に反響する。ハーマイオニーは慌てて、息も絶え絶えになってしまったイリスの背中を懸命に撫で摩った。

「イリス、もう無理しないで！バジリスクが来るのね？」

「・・・目を・・・開け、ないで・・・！」

イリスは力なくすすり泣きながら、ハーマイオニーに囁いた。——もう、彼女をバジリスクの死の魔眼から守る位しか、イリスに出来る事は残されていなかった。

一方のハーマイオニーは、一人覚悟を決めた。今、自分はここで石になるか、殺される。——もう彼女を救えるのは、あの二人しかない。彼女はイリスの親友であり、二年生イチの優等生であると同時に、“勇敢なグリフィンドール生”だった。彼女は本を手早く開いてバジリスクの部分のページを破り取ると、インクのいらぬ羽根ペンでハリーとロンに向け短いメッセージを書き、掌の中に握り込むと、一縷の望みを掛けてポケットから手鏡を取り出した。

☆

どの位、時間が経っただろう。ほんの数秒のようにも、途方もない年月が経ったようにも思えた。——イリスは、違和感を感じた。周囲はいつしか、異様な静けさに包まれている。——ハーマイオニーの声がない。イリスは、静かに彼女から体を離れた。

——ハーマイオニーは、石の様に凍り付いていた。イリスは、彼女の硝子のように固く滑らかに変質してしまった頬を撫でた。彼女の両目は、恐怖に見開き、永遠に閉じられる事はない。

「ハー……ミー……」イリスは現実を受け入れる事が出来ず、茫然と呟いた。

「君が僕を裏切ろうとしなければ、グレンジャーは襲われなかった」リドルはそつとイリスの傍へ近寄ると、その耳元で悪魔の様に囁いた。イリスは狂ったようにかぶりを振り、蚊の鳴くような弱々しい声で泣き喚いた。

「いやッ、違う、私のせいじゃ、ない……」

自分の心を守ろうと現実を拒絶し、その場から這って逃げ出そうとするイリスを、リドルは蜘蛛のように捕えて強い力で抱き締める。

「違わないよ、イリス。君のせいだ。君が僕を裏切ろうとしたからだ。君は悪い子だ。彼女が石になったのは、君のせいだ」

「や、あ……」

そしてリドルは、身動きの取れないイリスの耳元に唇を寄せ、彼女に残酷な言葉を深々と突き刺した。——彼の非情な攻撃は、イリスの素直な心を瞬く間に蝕んでいく。腕の中で、イリスが徐々に正気を失っていく様子を面白そうに眺めながら、リドルは彼女の心が粉々に砕け散るまで、何度も何度も執拗に彼女を責め苛んだ。

やがて、イリスは壊れてしまった。青い瞳に僅かに残った光が消え、ると同時に、彼女の顔から全ての感情が拭い去られていく。イリスは抵抗する力を失くし、人形のようにリドルに抱かれるままとなった。リドルは、虚空をぼんやり見つめ、彼の言葉にも反応しなくなってしまう。イリスを満足気に眺めた。

「君は、本当に素晴らしいよ、イリス。だが、これから僕は“早急にやらなければならぬ事”がある。そのためには、まだ良心の呵責に悩む“君の心”は邪魔でしかない。

——君は少し、眠っているといい。君が再び、体の主導権を取り戻した時——あの老いぼれは僕の手によってホグワーツから追い出され、君の親友・ハリー・ポッターは——バジリスクの餌食になってい

「るだろう」

グリフィンドル対ハッフルパフの試合は、突如として現れたマクゴナガル先生によつて、急遽中止となつた。観客達の野次や怒号——取り分けグリフィンドルチームのキャプテン、オリバー・ウッドの魂の叫び——にも負けず、マクゴナガル先生は紫色の巨大なメガフォンの『全生徒はすぐに各談話室へ戻るように』と厳命した。そしてハリート、人込みを押し分けて彼の近くまでやって来たロンを引き連れて、医務室へ向かつた。

「……少しショックを受けるかもしれませんが」

医務室の扉の前まで来た時、マクゴナガル先生は二人に向け、驚く程の優しい声で言つた。

「また襲われました。……ミス・ゴントを頼みます」

ハリーは五臓六腑が全てひっくり返つたような気がした。『また襲われた』『イリスを頼む』この二つの言葉から連想される事態は、たつた一つしかない。——“ハーマイオニーが襲われたのでは？”ハリーの頭はたちまち恐ろしい考えで満たされ、心臓がとんでもなく不規則なりズムで鼓動を打ち始めた。思い返せば、朝一番に「図書室に行く」と言つた切り、彼女の姿を見ていない。先生は静かに扉を開け、二人は中へ入つた。

「ハーマイオニー」ロンが呻き声を上げた。

ハリーの恐れは現実になつた。ハーマイオニーはベッドに横たえられた体勢のまま、ピクリとも動かず、ロンの呼びかけに身動きもしない。見開かれたままの瞳は、硝子玉のようだ。そしてベッドの傍では、イリスがハーマイオニーの服の端を握り締め、弱々しく泣きじやくつていた。

「三階の女子トイレの近くで発見されました。……ミス・ゴントが第一発見者です」

——何て残酷な。ハリーとロンは息を飲んだ。二人は親友だった。イリスは只でさえ、ここ最近の“物騒な事件”続きで体調を崩して情緒不安定になっているというのに——石になつた親友を見つけた時、

彼女はどんなにショックを受けただろう。ハリーとロンは思わずイリスに近寄り、慰めた。

「イリス。大丈夫だよ。マンドレイクももうすぐ刈り取れるし、すぐ元気なハーマイオニーに会えるさ」ロンが涙ながらに囁いた。

イリスは泣き腫らした目でロンを見上げ、微かにこくと頷いた。一方のハリーは、改めてハーマイオニーをじつと見つめた。——彼女は三人にとって、かけがえのない親友だった。彼女をこんな目に遭わせるなんて。ハリーの心の中で“継承者”に対する怒りと憎しみが湧き上がり、グラグラと全身の血が沸騰するような錯覚さえ覚える。「ごめんよ。ハーマイオニー」

——君の事を守れなかった。彼女は一人ぼっちで怪物に襲われた。どんなに怖かっただろう。ハリーは歯を食いしばり、熱い涙を零しながら、ハーマイオニーの冷たい手を握った。

その時、ハリーはふと違和感を感じ、思わず手を離れた。彼女の手は、ギョツと固く握り締められている。その指の間に、紙の切れ端のようなものが覗いていた。ハリーがもつとよく見ようと目を凝らした時、マクゴナガル先生が二人に話しかけた。

「二人共、これが何だか説明できないでしょうね。先程ミス・ゴーントにも聞いたのですが、分からないと。彼女の傍の床に落ちていました」

マクゴナガル先生は、ハーマイオニーの私物であろう小さな丸い手鏡を持っていた。二人は見当もつかず、首を横に振る。マクゴナガル先生はため息をつき、手鏡をハリーに持たせ、三人をグリフィンドール塔まで自ら送っていく旨を告げた。

☆

ハーマイオニーが襲われた事で、ホグワーツはいよいよ厳戒態勢となった。全校生徒は、夕方六時以降は各寮の外へ出る事を禁じられた。授業だけでなく用を足す時でさえも、先生に付き添ってもらう事が絶対条件となった。クイディッチの練習や試合、クラブ活動も無期限の延期だ。抑圧から来る不満、“継承者”への恐怖や不安を、それぞれの心の内に押し込めて、生徒達は辛うじて日常を歩み続けている。



た。

「呪文学」の授業の後、フリットウィック先生の引率に従い、みんな一列になって「薬草学」のクラスへ向かっていた。その時、イリスが急に下腹部を撫でながら、もじもじとし始めた。

「どうしたんだい？」後ろでその様子を見ていたハリーが尋ねる。

イリスは恥ずかしげに顔を赤らめ、小さな声で「トイレ」と言った。トイレに行くには先生の引率が必要だ。ハリーの後ろを歩いていたロンが、他に一緒に行きたい女生徒はいないか同級生達に確認していると、何時の間にかスネイプがすぐ傍に立っていた。

「吾輩が引率しよう。他に行きたい者は？」

女生徒達のちらほらと上がりかけた手は、スネイプを見るなりすぐに引っ込んでいった。ハリーがウツと呻いた。スネイプはフリットウィック先生に事情を話しながら、チラリと周囲を見渡し、イリス以外に誰もトイレに行きたくない（と、スネイプと一緒に行きたくないが為に、装っている）事実を確認する。

ハリーとロンは目配せをした。——数ヶ月程前から、毎週金曜日に行われるイリスの「魔法薬学」の補習授業は、彼女の状態を案じたマダム・ポンフリーの指示で『一時中止』となっていた。いくらイリスがスネイプを慕っているとは言え、今の精神的に弱り切った状態の彼女と、陰湿陰険で有名なスネイプとを、暫く振りに二人切りにしてしまうのは色々と不味い気がしたのだ。

「先生、僕もトイレに」「僕もです」

ハリーとロンは手を挙げて主張するが、スネイプは唇の端を歪めて冷たく拒絶した。

「君達も」女子トイレ」で用を足すのかね？・・・ではゴースト、来たまえ」

スネイプは、その直後にロンの吐いた小さな悪態をしつかり減点してから、戸惑うイリスの手を引っ張り、廊下を歩み去って行った。

☆

イリスは次の授業の教室へ向かうため、スネイプと共に三階の廊下を歩いていた。生徒達の自由な行動を禁止した今、廊下には二人以外

誰もいない。石になったハーマイオニーが発見された「嘆きのマートル」のトイレを通過しようとした時、スネイプはイリスの手をおもむろにグイと掴み、彼女をその中へと連れ込んだ。

突然の強行に驚き、息を飲むイリスの両肩を掴み、壁に押さえつける。獲物を捕食する蝙蝠のようにスネイプはイリスへと覆い被さり、杖を向けた。怯えるイリスの青い瞳と真剣なスネイプの黒い瞳が交錯する。

「開心、レジリメンズ」

スネイプは『開心術』を使い、イリスの中へ侵入した。その美しい瞳を通り抜け——頭の中を満たし——首から下へ降り——暖かく脈打つ心臓を撫で——そしてその奥の、イリスの心の中へと——

スネイプはあつという間にイリスの心の世界へと到達した。——そこは、深い暗闇がどこまでも続くばかりの寂しい場所だった。突然の侵入者を警戒したイリスの防衛本能が、闇の奥底で彼に牙を剥く。

しかし、歴戦の魔法使いであるスネイプの方が上手だ。『全ての記憶を差し出せ』——彼が力を込めてそう命じると、彼女の心はたちまち彼を受け入れ、彼がイリスの記憶を見るのに一番適している形へと変わっていく。

イリスの心の世界はやがて、暗闇からシンプルな廊下へと姿を変えた。床も壁も天井も一面、柔らかな乳白色で統一され、全体的に清らかな雰囲気漂っている。その中で一人仁王立ちする黒装束のスネイプは、一際目立っていた。左右の壁にはそれぞれ等間隔に、大きな円形の硝子窓がズラリと並んでいる。彼女が誕生してから現在に至るまでの様々な記憶が、その窓の中に一つ一つ封じ込められているのだ。

スネイプは廊下をゆつくりと進んでいく。

彼はイリスが生まれたばかりの記憶の窓の前で立ち止まり、中を見つめた。——ネーレウスとエルサが、小さな赤子を慈しんでいる。薄く透明な硝子一枚を隔ててすぐ近くに、かつての友人がいる。零れんばかりの笑顔を浮かべたネーレウスは、エルサの抱く赤子の柔らかな頬を突つついた。窓を開ければ、二人の楽しげな声も聴く事が出来る

だろう。だが、スネイプはそうしなかった。ネーレウスが、エルサから赤子を愛しげに抱き上げた拍子に、此方に向きそうな気がして——スネイプは静かに視線を外し、次の窓へと向かった。時には杖を振るって窓を開き、中を覗き込んで、確認する作業を繰り返す。

長い時間を掛け、全ての記憶の窓を覗き終えたスネイプは、顎に手を当て思案する。何も不審に思うものはない。彼がイリスに疑念を抱き、強引に『開心術』を使ってまで彼女の記憶を盗み見ようと決断したのは、理由があった。

それは『決闘クラブ』での“彼女の作法”だった。その流麗で上品な動作は、かつて彼が心酔した“闇の帝王”に酷似していたのだ。それを“ただの偶然だ”と片付けてしまう事は、イリスの素性を知るスネイプには出来なかった。

そう、彼は知っている。イリス・ゴントが“闇の帝王”の血縁者であり、帝王の“従者”の後継者だという事を。“スリザリンの後継者”なら、彼女がホグワーツ中で一番相応しい人間だという事を。

☆

スネイプの旧友、ルシウス・マルフォイは、ネーレウスの忘れ形見であるイリスに執心していた。彼が十年越しにイリスを見つけた時の狂喜振りを、スネイプは今でも克明に思い出す事が出来る。友人として、そして“元死喰い人”同士としてルシウスと会う度に、彼はホグワーツでのイリスの様子を聞きたがった。ルシウスはやつと手中に収める事の出来たイリスを深く愛していた。しかし同時に、スリザリンの血族者である自覚がなく、“血を裏切る”行為を平然と積み重ねる彼女に、激しい怒りと憎しみを抱いてもいた。

彼は“不誠実”と謳われるマルフォイ家の当主に相応しい男だ。狡猾で執念深く、野心に溢れ、油断ならない。また、彼は自分の手よりも、人を使って事を成す——いわゆる“黒幕”の立場を好む。

スネイプの懸念は的中した。二年の夏、イリスはマルフォイ家に連れ去られた。そして新学期が始まって間もなく“秘密の部屋”が開かれ、解き放たれた“怪物”が次々と犠牲者を喰らい始めた。

スネイプはすぐさまイリスに疑念を抱き、ダンブルドアに進言し、

秘密裏に行動を開始した。だが、イリスはまるでスネイプを挑発するかのよう——体調を崩したり、成績を急上昇させたり——日々沢山の変化を見せてくれるものの、“スリザリンの継承者”を彷彿とさせるような怪しい行動は、どんなに彼が注意深く追跡しても、一向にしでかさなかつた。

『凶器の杖が彼らの指紋だらけでも、犯行現場に彼らの姿があることは決してない』マルフォイ家はしばしば、彼らの本性をよく知る者達に、こういう言い回しをされる事がある。

今のイリスは、スネイプ達にとって『凶器の杖』そのものだった。明らかにルシウスが絡んでいると分かっているのに、決定的な証拠がないのだから、圧倒的な有権者である彼を尋問する事など出来ない。下手に噛み付けば、まともに彼とやり合う羽目になる。ダンブルドアとスネイプは苦汁を飲まされ続け、イリスは目を重ねる毎に、彼らの目の前で哀れな程に弱り果てていく。

最早一刻の猶予もないと、本来なら生徒に対する使用が禁じられている『真実薬』を飲ませようとした矢先、何者かによつて保管庫と研究室が再び荒らされ、貴重な材料や薬瓶ごと盗まれてしまった。ならば『開心術』を掛けようと決意した次の日、イリスとの唯一の接点であつた「魔法薬学」の補習授業がマダム・ポンフリーの進言により、一時取り止めとなつてしまった。

誰かがスネイプの目論見を全て事前に察知し、巧みに妨害していると思えなかつた。

さらに悪い事は続くもので、グリフィンドール二年生のハーマイオニー・グレンジャーが怪物に襲われた日から、ホグワーツは今まで以上の厳戒態勢を敷く事となつた。スネイプはついに独断の強行手段に出た。イリスと合法的に二人きりになれる方法は、もう“引率時”しかなかつたのである。

——だが、収穫は思わしくなかつた。彼は忌々しげに舌打ちをする。彼女の記憶の中では、『決闘クラブ』のあの作法は、“ロックハートに多大な影響を受けた友人・グレンジャーから教えてもらった”という事になっているし、彼女の成績がここ最近で急上昇した原因も、

“彼女の与えたスケジュール表である”という事になっている。

彼女の体調不良や精神不安の原因も、“スリザリンの継承者”が巻き起こす事件を憂いてのストレスだとされている。実際、ひと月ほど前にマダム・ポンフリーが聖マンゴの癒者を呼んで、念入りに彼女を看てもらったが、何か呪いや魔法の類を受けていた形跡は見られなかった。下された診断は“ストレスによる慢性的な体調不良と精神不安”——何も不審な点はない。そう、彼女は完璧にクリーンなのだ。疑っている者達を嘲笑うかのよう。

☆

それは当然の事だ。今や、イリスの支配者はイリス本人ではない——リドルだ。彼は、イリスを案じるスネイプの存在をとうに見抜いていた。そしてあらゆる対策を練り、実行した。

イリスの記憶もその一つだ。リドルにとって不都合な記憶は全て、眠らせた本物のイリスの心と一緒に、廊下の突き当りである壁に偽装した“一番奥の部屋”に、強力な隠蔽の魔法を何重にも掛けた上で閉じ込めていた。イリスの心の世界に単身忍び込んだ余所者のスネイプと、今や彼女の身も心も魔法力も支配し、思うままに消費できるリドルとでは、ここにおいては優位性が違い過ぎた。

——やはり、手を打つのが遅すぎたか。スネイプは唇を噛み締めた。かくなる上は、ルシウスと刺し違える覚悟で真実を問い詰めるか——だが、スネイプには果たさなければならぬ“使命”がある。

ともあれ、余り長い時間いては、彼女の弱った体に悪影響を与える恐れがある。スネイプは一先ず『開心術』を切り上げようと、意識を現実世界へ向けた。

「——セブルス」

ふと柔らかな声で名前を呼ばれ、スネイプは凍り付いたように、全ての動きを止めた。この声は間違いない——ネーレウスのものだ。自身の追憶から来た幻聴か、それともイリスの記憶の綻びか。訝るスネイプは声のした方向へ視線を向ける。そこは、廊下の突き当りである壁だった。

——ジジッ。微かにそこでノイズが走った。よく観察していなけ

れば分からない程、微々たるものだ。見極めようと一步踏み出した足が、バシヤリと水音を上げた。

驚いて足元を見ると、床一面が何時の間にか水浸しになっている。水は、天井の両隅から染み出しているようだった。滝のように流れ、壁を伝い落ち、見る見るうちに水位を上げていく。水は氷のように冷たく、足元からじわじわと、スネイプのただでさえ低い体温を引き下げていく。

ここは「嘆きのマートル」が住むトイレだ。その事実気づいたスネイプは直ちに『開心術』を解除し、イリスの心の世界から浮上した。

☆

スネイプが現実世界へ戻ると、マートルがいつものように癩癩を起こして、周囲一帯の床を水浸しにしていた。その被害をまともにも受け、意識を一時的に失ったイリスと、彼女を抱き寄せて床に座り込んだような体勢になっているスネイプの下半身は、びしょ濡れになってしまっている。恐らくこの状況が彼女の心の世界に影響を及ぼし、あのようなイメージになったのだろう。

彼はイリスに『忘却術』を掛け、先程までの記憶を“歩いている途中に、不意に眩暈がして気を失った”というものに置き換えた。彼が静かに見つめる中で、イリスの長い睫毛が微かに揺れ、ゆつくりと青い瞳が開く。彼女はスネイプを見て狼狽し、弱々しく謝った。

「先生・・・あ、す、すみません・・・私・・・」

スネイプは、じつとイリスを見つめた。腕の中で、青白い顔をこわばらせ、彼女もスネイプを見つめ返す。——先程のノイズと友人の声が気になるが、彼女の体力はもう限界だ。もう一度『開心術』を掛ける事は出来ない。スネイプは黙ってイリスを抱き上げると、トイレから出た。杖を振ってお互いの濡れた衣服を乾かすと、イリスを次の授業の教室の前へと導いた。

「早く入りなさい」

スネイプは冷たくそう言い放ち、ローブを翻し、自身の研究室目指して歩き去った。——イリスがその背中に向け、侮蔑的な笑みを投げかけている事にも気づかず。

☆

グレンジャーが“継承者”に襲われた。

ドラコはその事実を寮監であるスネイプから他のスリザリン生達と一緒に聞いた時、全身の血の気が見る見るうちに引いていくのを感じた。——グレンジャーは、イリスの親友だった。

「あの頭でつかち、いい気味だわ」

パンジーがこれ見よがしに言い放つ。スリザリンは、彼女と同じように“純血”の生徒が多い。彼らにとって今回の“継承者”が巻き起こす事件はあくまで他人事であり、恐怖心や不安感を抱いている者は余りいなかった。しかし、素知らぬ顔で彼らに迎合する“半純血”や“マグル生まれ”の生徒達は、内心では“継承者”に対して底知れない恐怖を感じていた。

その中で、誰よりも“純血”を誇っていた筈のドラコ・マルフォイが“継承者”に恐怖し、青白い顔で黙りこくっているという光景は、一部のスリザリン生の興味を引いた。ノットが薄笑いを浮かべて、ドラコに尋ねる。

「マルフォイ、何をそんなに怯える必要があるんだ？僕らは“純血”だ。それも、君のご先祖が調査した『聖28一族』に選ばれる程のね。“継承者”に襲われるのは“穢れた血”だけだ。何も不安がる事はないじゃないか」

ドラコは嫌味なノットの言葉にも反応せず、談話室の椅子に腰掛けたまま一言も喋らなかった。

——ミセス・ノリスが襲われ、ドラコが逃げ出したあの日から、今に至るまで、ドラコは誰にも真実を告げず沈黙を貫き通していた。否、そうせざるを得なかったのだ。全ての人間が、自分の命を危険に晒してまで他者を助ける事の出来る強さを持つてる訳ではない。

あの時のイリスの金色の目は、ドラコに対する明確な殺意に溢れていた。——その目は“死の恐怖”そのもの——首元に当てられた鋭い刃、額に突き付けられた銃口と同じだ。彼はそれに射竦められ、萎縮してしまっただのだ。だが、彼が迷っている間にもイリスは“継承者”としての任務を遂行し、犠牲者は次々と物言わぬ石像に成り果てて

いく。

ふと、物思いに沈むドラコの視界の端に、黒いローブが映った。葉草の微かな匂いが鼻腔をくすぐる。ドラコが緩慢な動作で視線を上げると、スリザリンの寮監であるスネイプがすぐ傍に立ち、昏い瞳で彼を見下ろしていた。

「何でしょうか、先生」

ドラコが怪訝な声で尋ねると、スネイプは一切表情を変えず、静かにこう言った。

「マルフォイ。何か、吾輩に言いたい事はないかね。どんな些細な事でも、取るに足らない悩み事でも構わない」

ドラコは言葉の意図が掴めず、乾燥した唇を舐め、スネイプを見つめたまま考え込んだ。——何故、先生が僕にそんな事を聞くんだ？僕の体調が思わしくないからか。それとも——。

——ドクン。ふとイリスの顔がドラコの脳裏に浮かび、彼の心臓が不規則に脈打ち始める。——“まさか先生は、イリスの事を言っているのか？”——先生は父上と友人だし、イリスと僕が親密な関係にある事も知っている筈だ。まさか、彼女が犯人だと勘付かれています？動揺を悟られぬよう、平静を装ってスネイプを見上げると、彼の底知れない黒い瞳がキラリと光ったような気がした。

「何を仰りたいのか、わかりません」

ドラコは掠れた声で否定するが、スネイプはやおら彼の足元にしゃがみ込むと、怯えるドラコの瞳をじっと覗き込んだ。

「君の父上の友人」としてではなく、“ホグワーツの一教師”として、もう一度君に問おう。君も、“ホグワーツの一生徒”として、私に何か伝えておくべき事はないかね」

スネイプの暗く淀んだ瞳から、何か異質なものが自分の中に入り込んでくるような気がして、身の危険を感じたドラコは思わず目を逸らした。ドラコは沈痛な声で小さく呟いた。

「何もありません」

「……そうかね。ならばいい」

その時のスネイプの声は、ドラコに対する明らかな失望に満ちてい



た。彼は此方を見ようともしないドラコを一瞥すると、談話室の扉を開いて去って行った。

☆

夏は知らぬ間に城の周りに広がり、陽気な光を振り撒いていた。空も湖も抜けるような明るいブルーに変わり、様々な花が温室で咲き乱れていた。しかし、陽気なのは外だけで——城の中は、収集が付かない程に滅茶苦茶になっていた。

禁じられた森の番人、ルビウス・ハグリッドは、五十年前の“秘密の部屋”事件を蒸し返され、今回の事件との関与性を疑われてアズカバンへ連行された。そしてホグワーツの校長、アルバス・ダンブルドアは、彼に敵意を抱くルシウス・マルフォイの姦計に嵌まり、ホグワーツを追放されてしまった。

ダンブルドアがいなくなった事で、ホグワーツ全体に恐怖感が轟めいた。誰も彼もが心配そうな、不安に満ちた顔をして過ごしていた。夏の明るい雰囲気感に感化された誰かが面白いジョークを言って、周りのみんなが笑っても、その声はたちまち廊下に甲高く響き渡ってしまったので、すぐさまみんな青白い顔を見合わせ、声を押し殺してしまうのだった。

ある日の「薬草学」の授業の帰り、スプラウト先生の先導でドラコは他のスリザリン生達と二列に並び、次の授業の教室へ繋がる廊下を歩いていた。その時、ふと視界の端に何かが見えたような気がして、ドラコはそちらへ目をやり、息を飲んだ。

イリスだ。ふらふらと覚束ない足取りで彼女は一人、スリザリン生の列と擦れ違い、廊下の角を曲がり、消えた。誰も——スプラウト先生でさえも——不自然な程に、擦れ違った筈のイリスには気づかない。生徒の単独行動は禁止されている筈なのに。

ドラコは靴紐を結び直す振りをしてその場にしゃがみ込んだ。淀みなく進み続ける列の最後尾に合流し、徐々に後退して——誰も自分を振り向かない事を確認すると、くるりと踵を返し、イリスを見つめるために駆け出した。

イリスはすぐに見つける事ができた。人気のない渡り廊下を、壁に

手を伝わせながら、まるで夢遊病者のようによろよると歩き続けている。——明らかに正気の状態ではない。

「イリスっ、何をしてるんだ！生徒の単独行動は禁じられてるだろう！」

ドラコはイリスの目の前まで駆け寄ると、彼女の両肩を掴み、揺さぶった。——彼女の目が“あの時のように”金色ではなかった事に、ドラコは心底ホツとした。だが、イリスの青い瞳はもう何も見ていなかった。彼女はわずかに首を傾げ、囁くような声で信じられないような言葉を言い放つたのだ。

「あなた、だれ？」

目的を果たしたリドルによって、再び自分の体に戻されたイリスは、もう既に正気を失いかけていた。

——ドラコは絶句した。パクパクと口を動かすが、言葉は一向に出てこない。イリスは彼のその様子を、じつと興味深げに見つめている。

『君は僕の友達じゃないか』

その場を取り繕おうとするドラコの心の声に逆らうように、もう一つの声がそつと囁いた。

『僕は彼女を見捨てた。友達なんて言えるのか？』

『僕は君を愛しているんだ！』

『僕は彼女を助けなかった。助けられたのに。それでも君を愛してるなんて言えるのか？』

『違う！僕は悪くない！』

ドラコの声がみじめに泣き叫んだ。

『父上が悪い！彼女を操る何者かが悪い！ポッター達が悪い！スネイプが悪い！ダンブルドアが悪いんだ！僕は何も悪くない！僕は巻き込まれただけなんだ！』

感情の限りに捲し立て、息を荒げる声に、静かにもう一つの声が答えた。

『・・・違う。悪いのは僕だ。僕だけが真実を知っていた。なのに、僕は行動しなかった』

ドラコの厚く塗り固められた虚栄の壁が、音を立てて崩れ落ちていく。その中に守られていたのは、年相応の小さな臆病な男の子だ。その子は死の恐怖に囚われ、罪悪感に苛まれて一人ぼっちで震えて泣いていた。ドラコの心の中で様々な思いが闘ぎ合い、それは言葉ではなく涙となつて、薄いグレーの瞳から伝い落ちていく。イリスは眉を顰め、そつと彼の頬を労しげに撫でた。

「どうして？ かなしいの？」

「イリス……ぼ、僕は……っ」

「なかないで」

イリスはドラコの涙を指で拭くと、「何も心配する事はない」とでも言うかのように柔らかに微笑んだ。そして体力が尽き果てたのか、眠るように気を失つた。

ドラコはイリスの体を掻き抱いて、慟哭した。最初に抱き締めた時よりも、彼女はずっと小さくやせ細っているように思えた。

自分が惨めでたまらなかつた。こんなにやつれ果てても、正気を失つても、イリスは優しい心を失っていない。それなのに、僕は——。やるせなく足元を見下ろしたドラコは、ふと彼女の傍の床に、あの黒い革表紙の日記帳が落ちている事に気が付いた。彼の頭は瞬間湯沸かし器のように、怒りの感情に煮え滾り、無我夢中でそれを遠くへ蹴り飛ばした。

「感心しない行為だな。ドラコ・マルフォイ」

不意に涼しげな声が、頭上からドラコに投げかけられた。驚いた彼が思わず見上げると、見慣れぬ上級生が一人、悠然と彼を見下ろしている。——ゴーストのように半透明で儚げなその体からは、有無を言わせぬ無言のプレッシャーが放たれていた。

「お前は、誰だ」

気圧されたドラコが掠れた声で詰問すると、彼は冷笑した。

「お前」とは、随分なご挨拶だ。口を慎みたまえ。君は闇の帝王の御前にいるのだぞ」

——「闇の帝王」？ ドラコの心臓が、ドクンと音を立てた。ドラコは自分の父の、秘められたもう一つの姿を知っている。父はかつ

て“闇の帝王”に忠誠を捧げた“死喰い人”だった。このゴーストのような青年が、“闇の帝王”だともいうのか？

「……陛下……」

その時、ドラコの腕の中から、か細い声が聴こえた。いつの間にか意識を取り戻していたイリスが、懸命に青年を見上げている。その瞳から、ポロリと涙が一粒零れた。

「お願いです……ドラコを、傷つけないで……」

ドラコは言葉を失い、ただイリスを見つめた。青年は呆れたように笑う。

「ああ、イリス。我が従者。全く、君は『動くものなら何だって助けたがる』性分なのか？

ドラコ・マルフォイは、我が身可愛さに、君を何度も見捨てた。君を友達とも思っていないようだ。そんな彼を、君は何故助けようとする？」

イリスは哀願するように、じつと真つ直ぐに青年を見つめた。

「たとえば彼が、私のことをそう思っていないなくても、私は……思っています。だから……」

ドラコの双眸から、熱い涙が零れ落ちた。——彼女は僕にまだ友情を抱いてくれている。対する青年の眼光は蛇のように鋭くなったが、すぐに元の穏やかな表情へ戻る。

「イリス、安心しなさい。僕は最初から彼を傷つけるつもりなどないよ。どの道、彼を逃がしたところで、この臆病者は何もできやしない。君は少し眠るんだ」

イリスは素直に涙の痕の残る瞳を閉じ、深い眠りに落ちた。イリスをしつかりと抱き締めているドラコを不快そうに睨み付け、青年はさつきとは打って変わって冷たく蔑んだような声でこう言い放った。

「君は彼女に劣情を抱いているな。主たる僕に、何の断りもなく」

それはまるで——イリスが一人の人間ではなく、自分の愛玩犬であるかのような言い方だった。そしてその愛するペットに勝手に交尾を迫った野良犬を見るような侮蔑的な視線を、青年は今、ドラコへ向けていた。

「しかも君は、僕とイリスの関係を二度も邪魔した。本来ならば、君をこの場で殺害するべきなのだろうが……まあいい。イリスと君の父親の働きに免じて、特別に許してやろう。

かといつて、このまま野放しにしておくのも面白くない。僕と取引をしないか？」

青年は、愛想良い微笑みを浮かべた。——“取引”？ドラコは思わず、全身の毛が逆立つような感覚に囚われた。

「なあに、簡単なことさ。“秘密の部屋”は、もう間もなく再び閉じられる。その時まで君は今まで通り、その臆病な口を閉ざしていたらいい。そうしたら、君に『イリスとの子を成す権限』を与えよう”

ドラコは頭が真つ白になり、茫然と青年を見つめた。青年は愉快そうに笑みを深めた。

「君は“純血”だ。彼女の伴侶となるに相応しい資格を、生まれながらにして持ち得ている。

君は彼女を愛しているだろうか？彼女と愛し合いたいだろうか？」  
次の瞬間、青年は姿を消し、不意にドラコの腕の中でイリスがその双眸を開いた。——その瞳は、邪悪な金色に染まっていた。

「君の選択は二つだ。あともう少し沈黙を貫き、イリスを名実共に自分の妻として迎えるか。——愚かにも“闇の帝王”に叛逆し、最も惨い方法で殺されるか。

賢明な行動を期待しているよ。何せ君は僕と同じ、狡猾で利口なスリザリン生だからね”

イリスは青年の口調でそう告げると、その場から立ち上がり、悠然と去って行った。

☆

ドラコは、暫くの間、動く事が出来なかった。——イリスの体の温もりを、今でも覚えている。愛らしくてたまらない単純で素直な性格。あどけなく舌足らずな高い声。少し子供っぽく甘い香り。絹のように滑らかな肌。黒檀のように美しい髪。宝石を嵌め込んだような瞳。その全てを手に入れたいなら、“闇の帝王”を名乗る青年の言う通り、あともう少し黙ったままでいればいい。屋根の外を、夕立の

雨が降り注いでいく。

『ドラコー！がんばれーっ！』

不意にイリスの掛け声が聴こえた。“あの時”——クイドイツの初試合の時、迷っていた自分に掛けてくれたものだ。ドラコが弾かれたように視線を向けると、クイドイツの観客スタンドにイリスがいた。びしょ濡れになるのも構わずに、渡り廊下の真ん中で立ち竦むドラコに向け、一生懸命声援を送っていてくれる。

『あきらめちやダメ！夢だったんでしょ！』

「イリス・・・っ」

ドラコは思わず、外に向かって手を伸ばした。だが、彼が瞬きした次の瞬間に、観客スタンドもイリスも、煙のように掻き消えていた。彼の手は空を掴み、吹き込んだ雨が容赦なくその身を叩いていく。

「死んだって構わない」

ドラコは、雨に打たれながら呟いた。——今までずっと『自分が死ぬ事』が、世界で一番怖い事だと思っていた。だが、もう違う。死よりも怖い事、自分の命を捨てても守りたいものに、ドラコはやつと気づいた。

☆

六月が始まって間もなく、深夜十二時を回った頃。“秘密の部屋”の最深部で、イリスとリドルは静かに相對していた。部屋は細長く奥へと伸びるような形で、蛇が絡み合う彫刻を施した石の柱が上へ上へとそびえ、暗闇に吸い込まれて見えない天井を支え、妖しい緑がかつた幽明の中に、黒々とした影を落としていた。純白のネグリジエに身を包んだイリスは、まるで神聖な儀式の供物のように見えた。

「イリス。時は来た」

リドルは“部屋”を司る神であるかのように厳かな動作で祭壇に腰掛け、真剣な表情でイリスへ手を伸ばした。

「僕が真に力を取り戻すには、僕の魂と君の魂とを、完全に重ね合わせる必要がある。君の魔法力が最も力を増す、満月のこの時間に。・・・さあ、始めよう」

イリスは懇願するようにリドルを仰ぎ見たが、彼の表情は揺らぎもなかった。彼女はおそおすと、差し出された手を掴む。

——重なった互いの手は、触れ合う事なく浸透していく。

「ひっ……！」

イリスが最初に感じたのは、“強烈な熱さ”だった。『リドルの魂を自分の魂に重ね合わせる事』——それは、リドルの全てをイリスがその身一つで受け入れる事に他ならなかった。リドルの魂の神髄——冷酷無比で、自分本位な性格、彼が今まで秘密裏に行ってきた凶悪で残酷な所業、愛や思いやりを知らぬが故の、限度を知らない執着心や支配欲や非道さ……そして日記の中に封じ込められた『五十年間の狂気に満ちた孤独』。それは、齡十二歳の女の子の魂に、到底受け入れ切れるものではない。解析できず、認識し切れないリドルの魂は、イリスにとって想像を絶するような痛みや熱へと変換され、彼女の魂を拷問のように責め苛んだ。

イリスは本能的に逃げようとしたが、リドルは片手を重ねただけで大きく彼女の魔法力を吸い上げ、その手を逆に引っ張り込んだ。イリスは強い脱力感に囚われ、くたつと力が抜けて、凶らずもリドルに身を寄せる格好になってしまう。

リドルの体はゆっくりとイリスに重なり、二つの影は一つになっていく。——熱い！熱い！吐く息すらも火を噴きそうだ。混濁した意識の中、イリスは懸命に不規則な呼吸を繰り返した。自分が自分で無くなっていくような感覚。溶けて——崩れて——燃え落ちて——消えていく。気が狂いそうな恐怖すら、耐え切れず何度も上げた悲鳴すら、熱の中に蕩けていく。体中に幾つも玉のような汗が浮かび、寝間着に吸い上げられ、肌の上を伝い落ちる。イリスは永遠に続くかと思われるような苦痛に身をくねらせ、リドルに訴えかけた。

「ああつ……あつ、い……！熱いよ、リドル……！」

リドルは何も答えず、泣き叫ぶイリスの顎を掴み、強引に口付けた。——ついに二人の体は一つに重なり合い、部屋にはイリス一人だけが残された。

不意にイリスの体が、内側から淡い燐光を放ち始めた。次の瞬間、

まるで彼女の体から——蛹から羽化する蝶のように——魔法力の残滓を散らしてリドルが抜け出した。彼の体は最早ゴーストのように半透明ではなく、曇りガラスのように輪郭がまだぼやけてこそいるが、ほぼしつかりとした実体を持っているように見えた。

——主君ヴォルデモート卿は、未来の従者の献身によって見事復活を遂げたのだった。完全に意識を失ったイリスの体を力強く抱き留め、リドルは恍惚とした表情で、自分の頬に残るイリスの魔法力の残滓を舐め取った。

「ああ、イリス。君の魔法力も魂も、今まで食べたどんな料理よりも美味だ。僕に想像以上の力を与えてくれる。本当に素晴らしい。」

・・・さあ、ここから始めるんだ。メーティス。君は“良いもの”を遺してくれた。再び、僕らの時代を築き上げよう」

リドルは熱に浮かされたような目で、衰弱し果て、弱々しい呼吸を繰り返すばかりのイリスを見つめた。

彼は最初からイリスなど見ていなかった。イリスを通して彼は、かつて自分に仕えたメーティスを見ていた。イリスとメーティスが『別の人間』だという事を理解せず、メーティスという枠にイリスを強引に嵌め込み、その過程でイリスがどんなに傷つきボロボロに成り果てても、リドルはそれこそが“従者”たるイリスの幸せなのだとも留めなかった。リドルは祭壇の上にイリスを横たえたと、どこへともなく姿を消した。

☆

イリスは気が付くと、三階の女子トイレに、ふわふわと浮かんでいた。目の前には、かつてのリドルとメーティスがいて、リドルの足元には「嘆きのマートル」が倒れ伏し、黒い革表紙の日記帳が落ちている。

リドルに見せられたあの記憶と同じ光景だ。しかし、あの時と違い、今回は日記の傍に『もう一人のリドル』——彼はゴーストのように半透明になっている——がいた。本物のリドルとメーティスは、霞のように儚げに浮かぶ彼の姿に気づきもしない。

——これは、本物のリドルの記憶ではなく、“日記のリドルの記憶



“なのか？イリスは首を傾げた。

イリスが見守る中で、メーテイスはその場に跪いて、彼に永遠の忠誠を誓う。

その時、イリスの胸に“強い痛み”が走った。まるで心臓を——無理矢理引き抜かれたかのような、あるいは毒ナイフで一突きにされたかのような——激しく苦しい、そしてどこか切ない痛みを。思わず胸を押さえてよろけたイリスは、もう一人のリドルが同じように胸倉を掴み、苦しげな表情を浮かべているのを見た。

——今の自分の心は、当時の“日記のリドル”と同期リンクしている？イリスは喘ぎながら周囲を見渡すけれど、本物のリドルも跪いている。メーテイスも、当然のように彼の様子には気づかない。

やがてイリスの瞳から、ボロボロと熱い涙が零れ落ちた。彼は顔を蒼白にし、わなわなと唇を震わせるだけで、この痛みをどのような言葉で表現していいか分からないようだった。

だが、イリスにはわかる。“愛されて育った”イリスには。ぐちゃぐちゃに掻き乱されたジグソーパズルを一つ一つ集め、当て嵌めていくかのようにイリスは呟いた。

“どうして共に生きてくれなかったんだ。メーテイス。僕は君を……”

“愛していたのに”。

野生化したウィーズリー氏の愛車フォード・アングリアに間一髪で助けられたハリーとロンは、主不在のハグリッドの小屋で、束の間の休息を取る事にした。ファンングは寝床のバスケットで毛布をかぶって、先程の蜘蛛達の恐怖を思い出しているのか、ブルブルと震えている。

「クモの跡をつけるだって」ロンもファンングに負けない位、寒気立っていた。

「ハグリッドを許さないぞ。僕たち、生きてるのが不思議な位だよ」「きつと、アラゴグなら自分の友達を傷つけないと思っただよ」

ハリーはハグリッドを思いやってそう言ったものの、落胆の気持ちを抑える事が出来なかった。

——話は数ヶ月前までさかのぼる。ある日、ハリーが「嘆きのマートル」の棲むトイレで手に入れた“不思議な日記”——それに封じ込められた記憶の人物・リドルは、五十年前に起きた“秘密の部屋”事件の真相をハリーに見せてくれた。それはハリーたちにとって、驚くべきものだった。“スリザリンの継承者”は当時学生だったハグリッドで、“スリザリンの怪物”は彼の飼っていた大蜘蛛・アラゴグだったのだ。

ハリーたちはハグリッドと五十年前の事件について話をしようとしたものの、彼はアズカバンへ連行されてしまう。その直前に、彼が放った“逃げる蜘蛛を追いかけろ”というメッセージに従い、二人は禁じられた森に棲むアラゴグの元へ辿り着いた。しかし、人語を解する程に賢しい彼から告げられた真実は、ハリー達の予想を大きく裏切った。

“スリザリンの継承者”はハグリッドではなく、“スリザリンの怪物”もアラゴグではなかったのだ。リドルは間違っていた。五十年前の真の“スリザリンの継承者”はどこかへ逃れ去った。結局、今回誰が“秘密の部屋”を開けたのかも、わからずじまいだ。もう他に誰も尋ねる人はいない。全てが振り出しに戻ってしまったのだ。ハ

リーは透明マントをそばに手繰り寄せながら、考えを巡らせる。

「僕たちをあんなどころに追いやつて、一体何の意味があつた？何がわかつた？」

筋金入りの“蜘蛛嫌い”であるロンは、それでも事件を解決するために勇気を出してハリーに同行してくれたが、今や彼は蜘蛛の恐怖に当てられて、完全な恐慌状態に陥ってしまった。ハリーは透明マントをロンにかけてやり、小屋を出て、腕を取って歩くように促しながら言った。

「ハグリッドが“秘密の部屋”を開けたんじゃないって事だ。彼は無実だった」

ロンはフラフラと歩きながら、不満げに鼻を鳴らした。アラゴグをこつそりホグワーツで飼育するなんて、どこが無実なもんか！と言わんばかりだ。二人は城へ戻り、忍び足でグリフィンホール寮の寝室まで辿り着いた。ロンは服も脱がずにベッドにうつ伏せに倒れ込み、嘆かわしげにため息を吐いた。

「ああ、こんな時にハーマイオニーがいてくれたらなあー！」

彼の意見はごもつともだと、布団に潜り込みながらハリーも思った。賢明な彼女がいれば、もう迷宮入りとなってしまうたこの事件だって、何か新たな解決策を見出してくれたかもしれないのに。――ハーマイオニー。ふと、ハリーの記憶の一部がくすぐられた。医務室で石化した彼女を見た時、確か手に“何か”を握っていなかったか？暗闇の中、ハリーは小さな声でロンを呼んだ。

「ロンー！」

早くも眠りにつきかけていたロンは、バネ仕掛け人形のように勢い良くベッドの上に起き上がり、怯えた目でハリーを見た。

「明日、何とかしてハーマイオニーに会いに行こう」

「ハリー。言っておくけど、彼女は石になっちゃったんだぜ？会いに行つてどうするのさ」ロンは胡乱げに言い返す。

「さつき思い出したんだ。彼女は手の中に、何かを持ってた。もしかしたら、今回の事件に関係している事かも」

ロンは暫く考え込んだ後、目を擦りながらハリーをチラッと見た。

「わかったよ。でも、どうやって医務室まで行く?」

「マクゴナガル先生に頼んで、マダム・ポンフリーを説得してもらおうだ。イリスのお見舞いもしたいし」

イリスは数日程前から著しく体調を崩し、医務室で過ごしていた。二人は目を合わせたまま静かに頷き、早々と眠りについた。

☆

二人の計画は意外な事に、とんとん拍子に上手く運んだ。マクゴナガル先生は二人の友人達を案じる気持ちに涙ながらに賛同し、マダム・ポンフリーを自ら説得してくれたのだ。彼女はしぶしぶといった調子で二人を医務室へと引き入れた。二人はお見舞い用の蛙チョコレート箱を一つずつ持ち、まずイリスのベッドを探したが、不思議な事に彼女の姿はどこにも見当たらない。

「トイレかな?」ロンが首を傾げた。

続いて二人は、ハーマイオニーのベッドへ向かった。ハリーは彼女の傍に屈み込み、その手を見つめた。——やはり、右手の拳にくしゃくしゃになった紙切れを握り締めている。ハリーはロンを見張りに立て、引つ張ったり捻ったりしながら、硬直したハーマイオニーの手から、何とか紙を取り出す事に成功した。それは、図書室のとても古い本のページが一部、乱暴にちぎり取られたものだった。ハリーは皺を伸ばすのもどかしく、ロンも屈み込んで、書かれている内容を一緒に読んだ。それには、このような記述があった。

『我らが世界を徘徊する多くの怪獣、怪物の中でも、最も珍しく、最も破壊的であるという点で、バジリスクの右に出るものはいない。：：殺しの方法は非常に珍しく、毒牙による殺傷とは別に、バジリスクのひと睨みは致命的である。その眼からの光線に捕らわれた者は即死する。蜘蛛が逃げ出すのはバジリスクが来る前触れである。なぜならバジリスクは蜘蛛の天敵だからである。バジリスクにとって致命的なものは雄鶏が時をつくる声で、唯一それからは逃げ出す』

このすぐ下に、見覚えのあるハーマイオニーの几帳面な筆跡で、一言『パイプ』と書かれていた。

その時、まるで誰かが電気スイッチをパチンとつけたように、ハ

リーの頭の中でごちやごちやに浮かぶ全ての謎が明るみになった。「ロン！」ハリーはマダム・ポンフリーに咎められないよう、声を響めて言った。

「これだ、これが答えだ。“怪物”はバジリスク——巨大な毒蛇だ！だから僕が彼方此方でその声を聴いたんだ。他の人には聴こえなかった……イリスにも。僕は蛇語がわかるからなんだ」

ロンは驚愕の余り口をポカンと開けたまま、ハリーを見つめている。ハリーは興奮冷めやらぬ様子でベッドを見回した。

「バジリスクは視線で人を殺す。でも誰も死んではない。——それは、誰も直接目を見ていないからなんだ。ミス・ノリスが石になった時、「嘆きのマートル」のトイレから水が溢れてた。きつとミス・ノリスは、水溜まりに映った姿を見たんだよ。ジャステインは「ほとんど首無しニツク」を通して見たに違いない！ニツクはまともに光線を浴びたんだらうけど、ゴーストだから二回は死ねない。ハーマイオニーはきつと、バジリスクが怪物だって気づいてたんだ。だから手鏡を持ってた。襲われた時、手鏡を通して見たんだよ」

手に持った紙切れに、ハリーはもう一度目を通した。読めば読むほど辻褄が合ってくる。——何故、もっと早くこれに気が付かなかったんだらう。そうすれば、アラゴグに会いに行くなんて危険過ぎる無駄足を踏まずに済んだのに。ハリーは悔しさに唇を噛み締めた。

『致命的なものは、雄鶏が時をつくる声』……ハグリッドの雄鶏が殺された！“秘密の部屋”が開かれたからには、“スリザリンの継承者”は城の周辺に、雄鶏がいてほしくない。『蜘蛛が逃げ出すのは、前触れ』……何もかもピッタリだ！

「だけど、バジリスクはどうやって城の中を動き回っていたんだらう？」ロンが呟いた。

『パイプ』だ」ハリーが言った。「パイプだよ、ロン。やつは配管を使ってたんだ。僕には壁の中からあの声が聴こえて……」

ハリーの言葉は、紙切れの片隅に視線が吸い寄せられた事で、尻切れトンボになってしまった。——ハーマイオニーが二人に向けたメッセージは『パイプ』だけではなかった。

紙の端つこの方に、今度は彼女らしからぬ乱れた字で——『リドルは嘘つき、イリスを救って』——こう書き殴られている。

「どうしたんだい？ハリー」

ハリーはロンの言葉に、咄嗟に答える事が出来なかった。ハーマイオニーがこのメッセージを通して二人に何を伝えたいか、理解したからだ。彼の頭は凄まじい勢いで回転し、様々な情報が錯綜しては収束して、ある一つの推測を導き出していく。

客観的に考えれば分かる事だった。——ここ最近のイリスは可笑しい事だらけだった。イリスは事件の前後辺りから、原因不明の体調不良を起こし、医務室へよく通うようになった。そして彼女は、全ての犠牲者が石化した時、いつも医務室に行っていて、ハリー達と一緒にはいなかった。

不審な点ならマルフォイもそうだ。クリスマス休暇中にスリザリオン生に変身して、彼と会話したあの時、彼は『“継承者”をアズカバン送りにさせない』と言っていた。今になってよく考えれば、それはまるで“継承者”を守るような言い方だ。——マルフォイとイリスは友人だった。

『リドルは嘘つき』——ハリーは、今までリドルがハグリッドを犯人だと勘違いして、密告したのだと思っていた。だが、ハーマイオニーの言う通り、本当にリドルが意図的に嘘を吐いているのだとしたら？茫然と立ち竦むハリーの背中を冷たい汗が伝い落ちていく。——そうだ。そもそも、日記が登場したタイムリングが良すぎるじゃないか。“秘密の部屋”の真実を追い求めるハリー達の目の前に急に現れて、そしてハリーにそれに関する記憶を見せた後、幻の様に姿を消したのだ。

『ドビーは言っではいけなかった！』あの日のドビーの金切声が、ハリーの脳裏に警鐘のように鳴り響いた。『ハリー・ポッターは友達のために命をかける！——“真実”をお知りになったら、あなた様はどんなにお嘆きになるでしょう！』

ハリーの中で全ての点が繋がり、線になり、それは“一つの真実”を描いた。彼の手から、ハラリと紙切れが落ちる。——ハーマイオ

ニー。ハリーはじつと親友の目を見つめ、心の中で語り掛けた。――君は、これを僕らに伝えたかったんだね。――その時、ハーマイオニーの凍り付いた瞳が、まるでハリーに応えるかのように、キラツと光を放ったような気がした。

「ロン」そしてハリーは勇気をもって、静かに言った。

「・・・イリスだ。イリスが、”スリザリンの継承者”だったんだ」

ロンはハリーの予想通りの反応を示した。一瞬、目を丸くした後、髪の色と同じ位に顔を赤らめて怒り出したのだ。

「何を馬鹿な事、言ってるんだよ！いくら君でも許さないぞ！イリスがハーマイオニーを襲うわけないだろう！」

「そうだ。その通りだ」

ハリーは、ロンが思わずたじろぐ程に、怒りに燃えた瞳を彼に向けた。

「イリスが自らハーマイオニーを傷つけようとする筈なんかない。・・・”誰かが、彼女に無理矢理そうさせている”としたら？」

ロン。君は、リドルの日記を僕が見つけた時、こう言ったよね。“危険な本もある”って。“人の行動を操る本もある”って。あの日記がそうだとしたら？」

「リドルの日記が？」ロンが茫然と呟いた。

「そうだ。『ボージン・アンド・バークス』で、マルフォイの父親は何かを売っていた。その後、店主は”マルフォイの屋敷には何かか隠されていて、今売った分を除いてもまだまだそれが残ってる”って言った。それがもし闇の魔術の道具で、その日記もその一つだったとしたら？ドビーが僕に、それを伝えようとしていたとしたら？」

ドビーがマルフォイ家の屋敷しもべ妖精だというのは、四人共通の意見だった。ハリーは唇を噛み締める。イリスは、夏休み中にマルフォイ家に連れ去られた。もしその時、彼女がマルフォイの父親に、その日記を持たされていたら――。

「で、でも・・・」ロンは小声で急ぎ込んで聞いた。「どうしてイリスが？」

「わからない。でも、マルフォイの父親は”闇の陣営”にいたんだよ

ね。今も彼がそうなら、イリスを自分と同じ・・・悪い魔女にさせた  
いのかも」

「じゃあ、じゃありドルは？彼はどうして嘘を吐いてたんだ？僕らの  
味方じゃなかったのか？」

それはハリーが一番疑問に思っている事だった。二人は暫く言葉  
を失ったまま、茫然と互いの顔を見つめた。

「イリスはどこにいるんだ？」

ハリーとロンが同時にそう言った時、マクゴナガル先生の声が魔法  
で拡大され、医務室内に響き渡った。

「生徒は全員、それぞれの寮にすぐ戻りなさい。教師は全員、職員室に  
大至急お集まり下さい」

その声は冷静だが、随分と緊迫した様子だった。二人は無言で目配  
せをすると、医務室を抜け出して駆け足で職員室へ向かった。心臓が  
ドクンドクンと五月蠅い程に波打っているのは、ただ全力疾走してい  
るだけではない事は、二人共よく分かっていた。

二人は息を荒げながら、まだ誰もいない職員室へ辿り着いた。広い  
壁を羽目板飾りにした部屋には、黒っぽい木の机と椅子が等間隔に並  
べられている。左側にはやぼったい造りの洋服掛けが設置されてい  
て、先生方のマントがぎっしりと詰まっている。二人はそこへ身を隠  
した。

☆

やがて職員室のドアがバタンと開いた。二人が黴臭いマントの襞  
の間から覗くと、先生方が次々と部屋に入ってくるのが見えた。皆ハ  
リー達が今まで見た事のない程、余裕のない表情をしていて、忙しな  
い様子でそれぞれの席に着く。やがて、現在不在のダンブルドアに代  
わってホグワーツを治めている、副校長のマクゴナガル先生がやって  
来た。

「とうとう起こりました」しんと静まり返った職員室で、マクゴナガル  
先生が切り出した。

「生徒が一人、〃秘密の部屋〃へ連れ去られました」

フリットウィック先生が思わず悲鳴を上げた。スプラウト先生は



両手で口を覆った。スネイプは椅子の背をぎゅつと握りしめ、「何故そんなにはつきり言えるのかな？」と聞いた。

「スリザリンの継承者」が、また伝言を書き残しました」マクゴナガル先生は蒼白な顔で答えた。

「最初に残された文字のすぐ下にです。」墮ちた卵はもう二度と、元の場所には戻らない 継承者イリス・ゴント」

先生方の押し殺した悲鳴や物音で、辺り一帯は騒然となった。茫然と佇むハリーの横で、ロンがへなへなと崩れ落ちていた。

「その伝言は、他の生徒たちは・・・」マダム・フーチが真剣な表情で尋ねた。

「まだ誰も見ていません。今は厳戒態勢を敷いていますし、定期的に校内を巡回しているのが幸いして、発覚を未然に防げました。念の為、今は壁の前に遮蔽物を置き、アーガスに警護させています」

マダム・フーチはホツと安堵のため息を零した。今度はスプラウト先生が、椅子から勢いよく立ち上がり、顔を真っ赤にしてマクゴナガル先生に詰め寄った。

「ミネルバ。あの子は心優しい子です。決して・・・」

彼女は首を強く横に振り、食いしばった歯の間から、唸るように言葉を発した。マクゴナガル先生は彼女を宥めるように、穏やかに、しかしはつきりと言った。

「わかっていますよ、ポモーナ。ここにいる全員が、わかっていますとも。ミス・ゴントは、望んでそんな所業を成す子ではありません」

ハリーとロンは胸を撫で下ろした。どうやら先生方は皆イリスを恐れているのではなく、案じているようだった。マクゴナガル先生は、悲しげに顔を俯かせながら、言葉を続けた。

「ですが、あの子の『血』は特別です。・・・あの子は、例のあの人の・・・」

——特別な血？例のあの人？二人は思わず、目線を交し合った。ハリーは身を乗り出し、マントの裾を強く握り締めた。先生方は、自分たちの知らないイリスの秘密を知っている。

「あの子は何にも知りません！」フリットウィック先生が血相を変え

て、キーキーわめいた。

「自分の血筋も何も・・・ましてや闇の魔術なんて、これっぽっちも！あの子は無実です！何かの間違いです！」

マクゴナガル先生は沈痛な面持ちで頷いた。マダム・フーチが、片手で目元を覆いながら、どきりと椅子に体を沈め込む。

「だからこそ、彼女の素性を知る良からぬ者は、そのままにはしておかないでしよう。ダンブルドアは常に仰っていた。『注意深く見守ってほしい』と。・・・それなのに、私は・・・」

「ミネルバ。感傷に浸るより先に、今なすべきことを」スネイプが鋭く切り込んだ。

その時、職員室のドアがもう一度バタンと開いた。この場に凡そ似つかわしくない、零れんばかりの笑顔を浮かべたロックハートだった。全先生方の憎しみを帯びた視線が、一斉に彼へと突き刺さる。

「大変失礼しました。ついウトウトと。何か聞き逃してしまいましたか？」

「なんと、適任者が」スネイプが一步進み出て、嫌味たっぷりに言い放った。

「まさに適任だ。ロックハート、女子学生が『秘密の部屋』に拉致された。いよいよ優秀な魔法戦士である貴方の出番が来ましたぞ」

ロックハートは先程までの威勢はどこへやら、途端に血の気を失くして、その場から後ずさり始めた。すかさずスプラウト先生が追い打ちをかける。

「その通りだわ、ギルデロイ。昨夜でしたね、確か『秘密の部屋』の入り口がどこにあるか、とつくに知っているかと仰ったのは？」

先生方は次々とロックハートに、今までの仕返しと言わんばかりの言葉の報復を与えていく。ロックハートはついに、ドアに背中を擦り付ける位まで後退し、目をキョロキョロとさせながら口ごもり始めた。そこへマクゴナガル先生が、ずいと進み出て、決定的な一言を突きつけた。

「それではギルデロイ、あなたにお任せしましょう。今夜こそ絶好のチャンスでしょう。誰にもあなたの邪魔はさせませんとも。お望み

通り、お好きなように」

ロックハートは絶望に塗れた目で先生方を見つめたが、誰一人として彼を助けようとする者はいなかった。「じゅ、準備をします」と慌しく出て行ったロックハートの背中を忌々しげに睨み付けた後、マクゴナガル先生が厳かな調子で言った。

「どうせ、あの男はここから逃げ出すでしょう。これで厄介払いができました。」

まずは生徒達の安全を確保します。各寮監の先生は、各寮の生徒たちに“生徒が一名連れ去られたため”明日一番のホグワーツ特急で生徒を帰宅させる、と仰ってください。他の先生方は、生徒が一人たりとも寮の外に残っていないか見回ってください」

先生方は無言で頷くと立ち上がり、一人、また一人と出て行った。

☆

誰もいなくなった職員室、その洋服掛けの中で、二人はまだ動く事が出来ずにいた。

「ハリー。一体、どういう事なんだろう。イリスが“例のあの人”と関係してるって」ロンが弱々しく呟いた。

「・・・わからない」

ハリーも困惑していた。——何もかもが分からない。イリスとは随分長い事一緒にいるけれど、“例のあの人”と関係があるだとか、血の事についてだとか、彼女は今まで一度だってそんな事、言っていなかった。フリットウィック先生の言葉から推測するに、恐らく彼女自身も自分の詳しい出生を知らないのだろう。

小さく身動きした拍子に、ハリーのローブのポケットの中で、軽やかな金属音が奏でられる。彼はそれを手に取り、じつと眺めた。それは、イリスが自分にくれた誕生日プレゼント——お揃いの金色の懐中時計だった。ハリーの心の中に、輝かしい思い出と共に熱い感情が込み上げる。

「わかってるのは」ハリーは押し殺した声で言葉を続けた。

「イリスが僕らの親友だってことだ」

ロンは激しく目を擦りながら、何度も頷いた。

「ロン。イリスを助けに行こう。何とかして“秘密の部屋”に行くんだ」

「モチのロンさ！アイテツ！」ロンは勢いよく立ち上がり、その拍子に洋服掛けの棒に思い切り頭を打って悶絶した。  
「でも、どうやって部屋に行くんだい？」

ハリーはロンと共に職員室を出て、先生方に見つからないよう彼方此方の物陰に身を隠しながら、必死に考えた。——何か、部屋に繋がるヒントはないか。何でもいい。今までの全ての出来事を思い出すんだ。ハリーの脳は熱を帯びる程目まぐるしく回転し、暫くの後、ふとアラゴグと交わした会話の内容が蘇った。彼の頭の天辺から爪先を、一筋の電流が駆け抜けた。

「ロン。五十年前に死んだ女の子だけど、アラゴグはトイレで見つかったって言ってた。・・・もし、その子がまだそのトイレにいるとしたら？」

「何言ってるんだよ。死んだ人間が・・・」

ロンは皆まで言わずに、口をポカンと開けてハリーを見つめた。ハリーの意図する事を理解したのだ。

「嘆きのマートル！」二人の声がハミングした。

☆

二人は先生方の目を掻い潜り、「嘆きのマートル」の棲む三階の女子トイレの近くへ辿り着いた。壁の文字の前には、魔法で作り出された巨大なパネルがそびえ立ち、何と書いているのか覗き見る事は出来なかった。その付近を血走った目で周回しているファイルチをやり過ごすのはなかなか大変だったが、二人は何とか無事にトイレの中へと滑り込む事に成功した。マートルは一番奥の小部屋のトイレの水槽に座り、死の妄想に耽っているようだった。

「あら、あんただったの。何かご用？」マートルはハリーを見るなり、お下げを弄りながら嬉しそうに問いかける。

「君が死んだ時の様子を聞きたいんだ」

ハリーは挨拶も何もかもすつ飛ばし、いきなり本題から入った。  
「自分が死んだ時」という不謹慎極まりない事を聞かれているにも関

わらず、マートルの顔は途端に誇らしげに輝いた。彼女はその半透明の頬を膨らませ、瞳を閉じてうつとりと夢見るような口調で教えてくれた。彼女が言うには、こうだった。

——当時、同級生にからかわれたマートルは、このトイレの小部屋で泣いていた。その時、女子トイレにも関わらず、女子の声と一緒に見知らぬ“男子の声”も聞こえて来た。彼は外国語のような不思議な言葉を喋っていた。文句を言おうと小部屋のドアを開けたマートルは、その瞬間に死んだ。死の直前に垣間見たのは、光る大きな黄色い目玉が二つ。それを見た途端、体全体がギュツと金縛りにあったように感じられたという——

「その目玉、どこら辺で見たの？」

ハリーが尋ねると、マートルは「あの辺り」と小部屋の前の手洗い台周辺を、漠然と指差した。二人は急いで手洗い台に近寄った。見たところ、何の変哲もない古びた外観だ。何一つとして見落としがないように、二人は隅々まで念入りに調べた。やがてハリーの目に入ったのは、ある銅製の蛇口の脇に彫られている——引っ搔いたような、小さな蛇の絵だった。試しに蛇口を捻ってみたが、水は一滴も出ない。「その蛇口、壊れっぱなしよ」マートルがご機嫌な口調で言った。

「何か言ってみろよ、ハリー。蛇語でさ」ロンが用心深く蛇口を突つきながら促す。

ハリーは狼狽して口ごもった。蛇語が話せたのは、本物の蛇と相對した時だけだったからだ。でも、今はそんな事を言ってもらえない。イリスを助け出すんだ。ハリーは深呼吸をすると、小さな彫り物の蛇を真剣に見つめ、それが本物なのだと強く思い込もうとしながら、言葉を発した。

☒開け☒

「開け」と言った筈の言葉は、奇妙なシューシューという音へ変わり、ハリーの口から飛び出した。不意に蛇口が眩い白い光を放ち、回り始める。ロンが息を飲み、一步後ずさった。手洗い台そのものが沈み込み、見る見る内に消え去った後に、太いパイプが剥き出しになった。大人一人が滑り込める程の太さだ。パイプの中は果てのない暗

闇が詰まっついていて、そこから湿った冷たい空気が流れ出し、立ち竦む二人の頬を不気味に撫でていく。

「僕はここを降りていく」

しかし、ハリーは勇敢にもそう言った。彼の心は決まっていた。行かないではいられない。秘密の部屋への入り口が見つかった以上、この先にイリスがいるのだ。彼女を助け出さなければ。

「僕も行く」ロンも言った。

「僕もだ」

ハリーとロンの背後から、冷たく気取った声がした。二人が思わず振り向くと、トイレの中程に——二人の天敵であるドラコ・マルフォイが立っていた。蒼白な顔をこわばらせ、薄いグレーの瞳は悲壮な決意に燃えている。——何故、こいつがここにいるんだ？二人にとつて、ドラコはイリスを嵌めたと思われる“マルフォイ家の人間”だ。つまり、“敵”でしかない。

三人は、ほぼ同時に杖を引き抜いた。ハリーとロンはドラコへ、ドラコは二人の中間へ向け、構える。張り詰めた空気が辺り一帯に漂う。

「なんで、君を連れて行かないやならない？」ハリーが冷たく言い放つ。

「イリスを助けるためだ」

二対一で圧倒的不利な状況であるにも関わらず、ドラコはその場から逃げ出そうともしなかった。

「イリスを助けるため？」ロンが唾を飛ばしながら叫んだ。

「お前が悪の手先のくせに！お前がイリスをそうさせたんだろう！」

「違う！」ドラコはロンを睨み付け、激昂して叫んだ。「僕じゃない！」

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

ハリーがドラコが自分から注意を外した一瞬の間隙について、「武装解除呪文」をかけた。射出された赤色の光線は見事ドラコを捉え、彼は空中を切り揉みしながら吹っ飛び、壁にぶち当たって倒れた。反対に彼の杖は、ハリーの空いた方の手に吸い寄せられるように収まった。

「そこで伸びてろよ。僕らの邪魔をしようたって、そうはいかないぞ」  
全身を強く打ち、痛みに悶絶しているドラコを睥睨し、ハリーはもう彼が戦う事が出来ないように、彼の杖をパイプの中へ投げ捨てた。そして二人はパイプの縁に手を掛け、その下へ滑り降りようとした。「待て！」ドラコが必死に立ち上がろうとしながら、絶叫した。

「僕は“真実”を知ってる！そのまま行くと、死ぬぞ！」

——“真実”だつて？二人は訝しげな目をして振り返った。ドラコは乱れた前髪を直そうともせず、二人と再び対峙した。

「イリスは望んで“継承者”になつたんじゃない」  
「そんなこと・・・」

「知ってるさ」と吐き捨てようとしたロンを、真剣な表情をしたハリーが押し留める。何かの拍子に切った唇の端を舐め、ドラコは苦虫を噛み潰したような面持ちで口を開いた。

「日記だ。日記に宿る亡霊が、彼女を操っている」

ハリーの推測が、確信に変わりつつあった。彼の全身を激しい怒りが駆け巡る。——やっぱり、こいつは全部、知っていたんだ。彼は握り締めた両手が震え出すのを、止める事が出来なかった。

「なぜ、君が、それを知ってる？」ハリーは一言一言区切るように問いかけた。

ドラコは一瞬目を伏せ、唇が白くなるまでギョツと噛み締めた。そして、全ての覚悟を決めた真っ直ぐな瞳でハリーを見つめ、こう言った。

「僕の父が。夏休みの最後の日に。イリスに、それを持たせた」

ハリーの感情が爆発した。彼は無我夢中でドラコに飛びかかり、押し倒した。ハリーは、抵抗せず成されるがままのドラコの胸倉を掴み、力任せに揺さぶった。

「君はそれを知ってたのか!!どうして今まで、黙っていたんだ!!」

「怖かったからだ!!」ドラコは恥も外聞もなく、泣き叫んだ。

「僕は何度も、助けようとした!でも・・・父が怖くて、亡霊に脅されて、怖くて・・・助ける事ができなかった!」

「臆病者め!!僕なら助けていた!!何を失ったって、イリスを助けてい

た!!」

ハリーはいつしか、喉が潰れる位の音量で叫んでいた。幸いな事に、少し前からマートルが恒例の痲癩を起こしていたため、この一連の騒ぎを外で控えているフィルチに嗅ぎ付けられる事はなかった。

ホグワーツとそれに関係する人々を心の拠り所としているハリーとは違い、ドラコにはホグワーツの他にも、自分を心から愛してくれる家族がいて、幸福で満たされた日常がある。だが、それは裏を返せば、ハリーよりもドラコの方が、“失うものが多い”という事だ。そしてそれを恐れるが故に、今までの平穩を崩すような危険な行動をなかなか取る事ができなかった。自分の身を守るために他を切り捨てるのは、生きるために必要な行為だ。

だが、ドラコはもう“愛”に気づいてしまった。愛とは、自分よりも愛する者を大事に思う事だ。イリスを想う心が、今まで彼を形成してきた自尊心やプライドを粉々に壊し、守りのなくなった彼の奥底に、ハリーの言葉が辛辣に突き刺さる。ドラコは顔をぐしゃぐしゃに歪め、押し潰されたような声で懺悔した。

「そうだ！僕は臆病者だ！・・・あの日、イリスは僕に助けを求めていたのに！」

ドラコの涙に濡れた双眸が、ハリーを射竦める。ハリーはその目から視線を外す事が出来なかった。彼を罵倒する事は簡単だ。しかし、聡いハリーは、やがて気づいてしまった。自分たちに彼を責める資格なんて、最初からなかった事を。ハリーはゆっくりとドラコから手を離し、よろよると立ち上がった。

「何でだよ、ハリー！」ロンは拳を握り締め、いきり立った。

「こいつを一発殴らなきゃ、気が済まないよ！」

「ロン。僕たちに、こいつを殴る資格なんてない」ハリーは静かに言った。

「僕らはイリスの親友だった。同じグリフィンドール生だった。こいつよりもずっと、イリスの傍にいた。・・・なのに、気づく事ができなかった。もしかしたら、イリスは僕らに、何か助けを求めるサインを送っていたかもしれない」



それは残酷な事実だった。——殴られるべきなのは、責められるべきなのは、僕らも同じだ。これでイリスの親友だったなんて、笑わせる。ロンを見つめるハリーの瞳から、悔悟の涙が零れ落ちた。ロンは唇を噛み締め、力なく俯いた。ハリーは思い出した——イリスが、彼が「継承者」ではないかと疑われていた時、ただ一人、いつも泣きながら庇ってくれていた事を。彼の心臓が、ギユウツと握りつぶされたように痛んだ。

ハリーは、声にならないイリスへの謝罪を繰り返すドラコをじっと眺めた。ハリーの怒りは、不思議な程に鎮められていった。そして彼はドラコに歩み寄り、手を差し出した。

「行こう。マルフォイ」

ドラコが信じられないといったような面持ちで、ハリーが伸ばした手を見つめている。ハリー自身も——というより、彼が一番——自分の行動に驚いていたが、今更手を引つ込める気にはなれなかった。ロンが驚きの余り、グエツと変な声を出した。ドラコは少しの間躊躇したが、何も言わずに手を掴み、起き上がった。

☆

三人は一斉にパイプの中へ滑り込んだ。パイプの中はヌメヌメしていて、何か恐ろしく大きな化け物の胃の中を滑り降りていくような感覚に囚われる。彼方此方で無数に枝分かれしているパイプが見えただけれど、自分たちが今降りているものより、太いものはなかった。パイプは曲がりくねりながら、下に向かって急勾配で続いている。何時まで続くのだろう、と三人の頭に不安がよぎり始めた頃、不意にパイプの先が平らになり、出口から勢い良く放り出された。

ドスツと音を立てて、じめじめした床にお尻から着地する。ハリーは臀部を摩りながら起き上がった。パイプの先は、石造りのトンネルだった。辺りは不気味な暗闇に包まれている。トンネルは立ち上がるのに十分な広さだった。

「学校の何キロもずーっと下の方に違くないよ」ハリーの声がトンネルの闇に反響した。

「申し訳ありませんがね」ドラコがぶつきらばうに言い放った。

「辺りを光で照らしてくれないか。僕の杖を回収したいのでね」

ハリーは杖に灯りを点し、ロンと共に（彼はしぶしぶだったが）ドラコの杖を探すのを手伝った。三人はハリーとドラコの灯す杖明かりを頼りに、暗いトンネルの先を目指して歩き出す。足を踏みしめる度に、湿った床が水音を生み、トンネルの壁全体に大きく反響した。三人は周囲を警戒しながら、互いの持っている情報を交換し合った。その中でハリーとロンが最も驚いたのは、日記のリドルが自らを“闇の帝王”と名乗っていた事だった。

「リドルが……例のあの人？だって“あの人”はリドルからすれば、ずっと未来の人だろ？」ロンが首を傾げる。

「確かに彼はそう言っていた。イリスを自分の“従者”だとも呼んでいた」

ハリーとロンは、思わず互いの顔を見合った。確かに職員室で先生方は『イリスは“例のあの人”と関係がある』という発言をしていた。

——ますますリドルが得体の知れない人物に思えてきて、二人の背中を戦慄が走る。だが、そんな人物とイリスは今、一緒にいるのだ。ハリーの脳裏に、かつてクイレルが宿したヴォルデモート卿と対決した思い出が蘇る。彼は、ハリーとイリスの両親の仇だ。ハリーは無意識の内に、自分の杖をギュッと固く握り締めていた。

その時の光景を思い出しているのか、浮かない表情を湛えたドラコは、おもむろにローブのポケットから銀色の短剣を取り出した。全体に美しい装飾が施されていて、大きさは掌に収まる位だ。

「日記は恐らく、闇の魔術の道具だ。これで破壊できるかもしれない」「なんだ、それ？」ロンが覗き込み、しげしげと眺めた。

「僕がまだ幼い頃、護身用にと母上がくれたものだ。強力な破魔の呪文が込められている。」

マルフォイ家は著名であるが故に、時として誰かの恨みを買う事もある。呪いの道具を贈られるのも、あり得ない事ではない。その時に、これはそれを破壊できると教えられた」

「ワーオ！さっすが名門・マルフォイ家！お金もたっぷり、恨みもたっぷりってね！」

ロンがすかさず、嫌味たっぷり言い放った。

「ああ。逆噴射するボ口杖を持たせてくれるような、貧困ウィーズリー家には劣るがね」

ドラコが噛み付いた。

「ぺちやくちやウィーズル、もう一度ナメクジを喰らいたいか？貧乏舌な君には、あれだって上等なおやつだろうよ」

二人はどうあっても性根が合わないらしく、ついに歩みを止め、忌々しげに睨み合った。しかし、ハリーが踏んだネズミの頭蓋骨が破壊される音に飛び上がり、二人はたちまち口論をやめた。ハリーが杖先を近づけて足元をよく見てみると、ネズミを始めとした小さな動物の骨がそこら中に散らばっている。

何番目かのカーブを曲がった先で、三人は突如、息を飲んで立ち止まった。——トンネルを塞ぐように、何か大きくて曲線を描いたものがある。じっと動かない。先頭を歩いていたハリーは後ろを振り返り、「バジリスク？」と小声で二人に尋ねた。三人は持ちうる限りの最大の警戒態勢を取り、じりじりとその物体に近づいた。

だが、杖明かりが照らし出したのは、バジリスクではなく——巨大なその抜け殻だった。毒々しい程に鮮やかな緑色の皮が、トンネルの床にとぐろを巻いて横たわっている。脱皮した蛇は、優に六メートルはあるに違いない。

「なんてこった。蜘蛛も逃げ出すわけだ」ロンが力なく呟いた。

抜け殻だけでも、今すぐ踵を返して逃げ出したい程の迫力があるのに、イリスは本物のバジリスクとも、一緒にいるのだ。三人は力を合わせて抜け殻を端っこへ押し遣り、先へ進んだ。

トンネルはくねくねと何度も曲がった。もう何個目か分からない曲がり角をやり過ぎた途端、ついに前方に固い壁が見えた。そこには、二匹の蛇が複雑に絡み合った彫刻が施してあり、蛇の目にはキラキラと美しい輝きを放つ大粒のエメラルドが嵌め込んであった。

壁には扉はない。だが、ここで何をすべきか、ハリーにはもう理解できていた。ハリーは壁の前まで進むと、確認するように二人を振り返った。ロンとドラコは強張り青ざめた表情で頷き、ハリーの両隣

に並ぶ。本来ならば、決して相容れない筈の三人は、『イリスを救う』——ただそれだけの一途な思いで、それぞれの恐怖や不安を支え合っている、一丸となっていた。

☒開け☒

ハリーは壁を守る蛇を本物と思い、再び蛇語を喋った。その途端、壁の中央に亀裂が入り、二つに裂けた。絡み合っていた蛇が分かれ、両側の壁がスルスルと滑るように開いていく。ハリーとロンが意を決した様子で部屋の中へ足を踏み出す前に、ドラコが用心深く周囲を見渡しながら、小さく「聞いてくれ」と囁いた。二人が振り向くと、ドラコは真摯な瞳で彼らを見つめていた。

「恐らく、三人一緒に行ってもやられるだけだ。上手く行くかはわからないが、僕に作戦がある」

ドラコの握る短剣が、キラリと鈍い輝きを放った。

ハリーは細長く奥へと延びる、薄明りの部屋の端に立っていた。蛇が絡み合う彫刻を施した石の柱が、上へ上へとそびえ、暗闇に吸い込まれて見えない天井を支え、妖しい緑がかつた幽明の中に、黒々とした影を落としていた。早鐘のように鳴る心臓を押さえ、ハリーは凍るような静けさに耳を澄ませる。——バジリスクは柱の影の暗い片隅に潜んでいるのだろうか。イリスはどこに居るのだろうか。

杖を構え、左右一対になつた蛇の柱の間を前進する。一步一步そつと踏み出す音が、薄暗い壁に反響した。ハリーの背後で、石の壁が静かに閉じられる音と共に、二人分の微かな足音が追いかけて来る。それだけが、彼の恐怖でくじけそうな心を支えてくれる。

最後の一对の柱のところまで来ると、部屋の天井に届く程高くそびえる石像が、壁を背に立っているのが目に入った。年老いた猿のような顔に、細長い顎鬚が、その魔法使いの流れるような石のローブの裾辺りまで伸びている。その下に灰色の巨大な足が二本、滑らかな床を踏みしめていた。そして、その前には石造りの祭壇があり、そこに寝間着姿の小さな黒髪の女の子が横たわっていた。——イリスだ。

「イリス！」

ハリーは駆け寄り、祭壇の傍に跪いて、イリスを揺さぶった。

「イリス！お願いだ、目を覚まして！」

イリスの顔は白磁のように白く、瞼は固く閉じられたままで、痛々しい涙の痕がいくつも残っている。体が氷のように冷たい。微かに呼吸を繰り返してはいるが、ハリーがいくらか強く揺さぶっても、耳元で呼びかけても、彼女はピクリとも動かなかつた。

「彼女は目を覚まさないよ」

ふと、すぐ傍から落ち着き払った声が聴こえた。ハリーが横を見ると、背の高い黒髪の青年が、隣の柱にもたれて此方を眺めている。——リドルだ。しかし、ハリーが記憶の中で見た時と違い、彼はまるで曇り硝子の向こうにいるかのように、輪郭が少し奇妙にぼやけていた。リドルはイリスの杖を弄びながら、彼女の寝顔をじつと満足気に

眺めた。

「幸せそうに眠っている。そうは思わないか？ハリー・ポッター」

どう見てもリドルの言う通り、彼女が幸せそうに眠っているとは到底思えない。ハリーはリドルがますます不気味に思えた。彼が何を考えているのか分からない。ハリーは杖を構え直し、イリスを守るように祭壇の前に立つと、リドルと対峙した。

「幸せそうに？君は可笑しなことを言うね、リドル。イリスは衰弱してる。一刻も早くここから連れ出さなきゃならないんだ」

「それは僕が決める事だ」リドルは厳かに応えた。

「イリスは君のものじゃない」

「彼女は僕のものだ。彼女が生まれる前から、それは決まっている」

それは謎めいた言葉だった。ハリーの脳裏に、職員室で盗み聞いたマクゴナガル先生の言葉が、不吉に木霊する。

——ですが、あの子の『血』は特別です。・・・あの子は、“例のあの人”の・・・——

ハリーの心臓が、嫌な音を立てて軋んだ。リドルもまた、自分達の知らない“イリスの秘密”を知っているのだろうか。スリザリンの制服に身を包んだ美しい青年の周囲を、薄気味悪いぼんやりした光が漂っている。ハリーが記憶の中で見た十六歳の時のまま、一日も日が立っていないかのように、彼はそこにいた。ハリーはゴクリと生唾を飲み込んで、恐る恐る口を開いた。

「言っている事がわからないよ、リドル。君は・・・君は、何者なんだ？」

リドルは何も言わず、笑みを深めた。それから彼は柱から身を離し、ゆっくりと歩き始めた。

「ハリー。真実はすぐ近くにあったんだよ。だが、誰も気付く事が出来なかった。——五十年前も、そして今も。思い出してごらん。「特別功労賞」の盾には、誰と誰の名前が書いてあった？」

ハリーの頭の中で、ロンの憤慨した顔と一緒に、キラキラ光る盾の姿がパツと浮かんだ。そこには、“T・M・リドル”と“メーティス・ゴント”——二人分の名前が刻まれている。だが不思議な事に、“

「メーテイス・ゴント」なる人物は、リドルの記憶の中には一切登場していなかったため、ついさつき彼に指摘されるまで、ハリーは彼女の事について深く考えた事など、一度もなかった。

「そう、それは」リドルの口調は柔らかだ。

「五十年前、“秘密の部屋”を開けた者たちの名だ」

ハリーは愕然とし、暫く二の句を告げる事が出来なかった。

「そんな・・・じゃあ、ハグリッドは・・・」

「ハリー。優等生の僕の言う事を信じるか、問題児の半巨人のを信じるか、デイペットじいさんは二つに一つだった」リドルは冷笑した。

「君は・・・わざと、ハグリッドをはめたのか？」ハリーはわなわなと震える拳を握り締めた。

「僕は、君が勘違いしていただけだと思っていたのに」

「君と同じように、ほとんどの人間は僕を信じたよ。だがたった一人、「変身術」のダンブルドアだけが、ハグリッドは無実だと考えた。あの木偶の坊を学校の森番にするよう説得したのも彼だ。学校中の教師達は、みな僕がお気に入りだったが、ダンブルドアだけは違ったようだ」

「きつとダンブルドアは、君の事をとつくにお見通しだったんだ」

「そうだな。ハグリッドが退学になってから、彼は確かに僕の事をしつこく監視するようになった」

リドルは事も無げに言った。

「在学中に“部屋”を再び開けるのは危険だと、僕は判断した。だが、偉大なるサラザール・スリザリンの崇高なるこの仕事を、闇に葬り去るつもりなどない。僕は日記を残し、十六歳の自分をその中に保存しようとした。いつか再び、その時が巡ってきたら、“部屋”を開くに相応しい者を僕が見出し、この仕事を成し遂げさせるつもりだった」

「君は結局、それを成し遂げてなんかいないじゃないか」

ハリーは勝ち誇ったように言った。

「イリスは継承者に相応しくなんてないし、誰も死んでない。猫一匹たりとも。あと数時間すればマンドレイク薬ができあがり、石にされ

「た者はみんな無事、元に戻るんだ」

「まだ言っていないかったかな？」

リドルは静かに言った。

「『穢れた血』の連中を殺す事は、僕にとってどうでもいい事だって。僕の狙いはあいつらじゃない。最初からずっと、君だったんだ。ハリ」

リドルは貪るような目付きで、ハリリーの額の傷跡を眺めた。

「どうして、僕が？」

ハリリーは狼狽し、口ごもった。

「日記をトイレで拾うまで、僕は君のことなんて知らなかった。会ったこともないのに」

「いいや。僕らはかつて、出会った筈だ。そして僕は倒れ、君は生き残った」

ハリリーの心臓が音を立てて波打ち始める。ドラコは道中、こう言っていないかったか？——リドルが自らを「闇の帝王」と名乗っていた。リドルは彼の表情を見透かしたかのように、艶然と微笑んだ。

「ようやくわかったね？ハリリー・ポッター。僕が何者なのかという事を」

リドルは杖で空中をなぞり、文字を書いた。三つの言葉が揺らめきながら淡く光る。

T O M M A R V O L O R I D D L E (トム・マールヴォロ・リドル)

彼が杖を一振りすると、文字はその並び方を変えた。

I A M L O R D V O L D E M O R T (俺様はヴォルデモート卿だ)

「この名前はホグワーツ在学中に使っていた。もちろん親しい者にしか打ち明けてはいないが。母方の血筋にサラザール・スリザリンの血が流れているこの僕が、汚らわしいマグルの父親から取った名を、いつまでも使い続けると思うかい？」

ハリリー、答えはノーだ。僕は自分の名前を自分でつけた。ある日必



ずや、魔法界の全てが口にすることを恐れる名前を。その日が来ることを僕は知っていた。僕が世界一偉大な魔法使いになるその日が！」  
ハリーは恐怖で頭が痺れたまま、リドルを見つめる事しか出来なかった。この青年がやがて大人になり、ハリーとイリスの両親を、そして他の多くの魔法使いを殺したのだ。

「そして僕はもう一つ、まだ君に言っていないなかった事がある」

リドルの視線が、ハリーの肩越しに、イリスを絡め取った。

「ハリー。君は間違っている。イリス・ゴント、彼女こそ、部屋の継承者に相応しい人間だ」

「何を……」

「“部屋”を開けたのは僕だが、僕をそこまで導いたのはメーティス・ゴントだ。彼女も、蛇語こそ喋れなかったが同じスリザリンの血族者であり、最初にして最も忠実なる“死喰い人”<sup>デスイーター</sup>だった」

“ゴント”。その言葉が何度も、ハリーの頭の中でリフレインする。リドルは身動きの取れないハリーに、残酷な真実を突きつけた。「イリス・ゴントは、その子孫。彼女は生まれながらにして、闇の帝王の“従者”となる宿命を背負っているのだ」

——ホグワーツの先生方が言いかけていた事は、この事だったんだ。ハリーの頭の中で、イリスとの楽しく幸福だった記憶の数々が、グルグルと回る。彼は無我夢中で叫んだ。

「そんな、彼女はそんなこと、一言も言っていないかった！リドル、君は嘘をついている。それに、彼女の両親はヴォルデモート卿に殺されたんだ！」

リドルは愛想良く微笑し、小さな子供に言い聞かせるように、柔らかな声音で言った。

「僕は嘘など吐いていないよ。彼女は自分の出生を知らされなかっただけだ。自分が英雄だと知らされずに育った、ハリー、君のようにね。彼女の両親は、ヴォルデモート卿を裏切ったんだ。それ故に殺された。当然の報いさ」

リドルは忌々しげに唇を歪めた。

「僕が見つけた時、彼女は正視に堪えないほど、みすばらしい有様だった。」

た。彼女を警戒したダンブルドアの手により、名誉ある“従者”の使命を伏せられ——下らない——マグルかぶれの普通の女の子として生かされていたんだ」

「ダンブルドアはイリスを恐れていたんじゃない」

ハリーは両手が痛くなるまで握り締めた。

「イリスを守っていたんだ」

「守っていた？」

リドルはせせら笑った。

「違う。ハリー・ポッター、君もご存じの通り、彼女は僕と出会うまで、ホグワーツ一の“落ちこぼれ”だった。ダンブルドアは彼女を貶めていたんだ。その証拠に、僕の教授で彼女は目覚ましい成長を遂げた。あの老いぼれやホグワーツの役立たずな教師共、“穢れた血”では、決して成しえなかった事だ。

僕だけが、“本当の彼女”を見つけ、汚名を払拭し、再び“従者”として育て上げる事ができた。——だが、その道は非常に困難を極めたよ。時の流れは状況を変える。これは良い方にも、悪い方にも言う事だ」

☆

「最初は彼女は、主たる僕の事を何も知らなかった。僕は怒りに震えたよ。だが、我慢した。十一歳の女の子の他愛のない悩み事を聞いてあげるのは、全くうんざりだったがね。

でも僕は辛抱強く返事を書いた。同情してあげたし、親切にもしてあげた。イリスは僕に夢中になった。イリスは僕を家族のように、友達のように、恋人のように慕うようになった」

リドルは声をあげて笑った。端正な容姿に似つかわしくない、冷たく甲高い笑い声だった。ハリーは全身の毛がよだつような恐怖に駆られた。

「やがてイリスは僕に完全に心を明け渡し、魂を注ぎ込み始めた。——イリスの魂、それこそが僕の欲しいものだった。彼女が心に深い傷を負ったり、強い不安や恐怖に駆られる度、魂は闇に蝕まれていく。それを喰らい、僕はどんどん強くなった。」

僕は彼女を操り、“秘密の部屋”を開け、学校の雄鶏を絞殺し、壁に脅迫の文字を書き込み、二人の“穢れた血”やスクイブの猫にバジリスクをけしかけた。

彼女は最初、自分のやっていることを全く自覚していなかった。彼女に“真実の記憶”を戻した時、彼女はなかなか面白い反応を見せてくれたよ。ハリー、君にも見せてあげたかった」

ハリーは爪が掌に喰い込む程、ギョツと拳を握り締めた。そうでもしなければ、煮え滾る怒りを抑える事など出来そうになかったのだ。

「自分の立場をようやく自覚したイリスに、僕は“従者”たるに相応しい教育を始めた。殊更矯正しなければならなかったのは、ダンブルドアが与えた“下らない友人関係”だ。だが、彼女は愚かな事に、君たちとの友情を頑なに捨てようとしなかった。どんなに難しい試練を与えても、彼女はその友情とやらを守るために、命懸けで達成した。

——どうしたものかと考えあぐねていたら、自らチャンスが飛び込んできたよ。ハリー。君たちの親友の“穢れた血”だ。彼女は、僕らの関係に首を突っ込もうとした。そして馬鹿なイリスは、それに迎合しようとした。

君に一つ、良い事を教えてあげよう。人間を本当に支配する方法は、“服従の呪文”ではない。心を一度、粉々に砕く事だ。だから僕はそうしたよ。——“穢れた血”を石に変え、イリスを責めた。あれを石にしたのは君なのだ。彼女が壊れてしまうまで、何度も、何度もね」

「があああああつ!!」

それは獣の咆哮だった。ハリーが驚いて振り向くと、ロンが隠れていた柱から飛び出し——今や、彼の顔も目も怒りで歪み、髪の毛と同じくらい真っ赤だった——両手を風車のように振り回しながら、リドルに襲い掛かろうと駆け出していた。だが、リドルが杖を軽く振ると、ロンは見えない巨大な手に叩きつけられたかのように、べしやつと床に激しく打ち付けられてしまった。

「殺してやる！お前なんか、殺してやる!!」ロンはジタバタもがきながら叫んだ。

「残念ながら、殺すのは僕の方だ。ロナウド・ウィーズリー。——やはり鼠が紛れ込んでいたか」

リドルは冷淡に言い放ち、何故かイリスの杖を忌々しげに睥睨した。ロンは床に押さえつけられたまま、涙ながらに叫んだ。

「人でなしめ！イリスとハーマイオニーは親友だったんだぞ！なんてひどい事を！」

「親友。〃 穢れた血〃 とイリスが親友だなんて。ゾツとするね。そんなふざけた事を二度と言えないように、口を縫ってしまおうか」

リドルは再び杖を振ったが、ロンは一瞬苦しそうに身を振っただけだった。ついにリドルは不満げに杖を睨んで、言い放った。

「ポンコツめ。何故僕に従わない。イリスの杖でなければ、今すぐに折ってしまいたいよ」

「それはイリスのお母さんの杖だ」ハリーは熱い思いを込め、言った。「イリスを傷つけているお前が使っているからだ。杖が嫌がっているんだ」

「ほう。それは面白い意見だ」リドルは微笑んだ。

「ならばこの杖は壊さず、事を終えた後、彼女へ返すでしょう。彼女だけに忠実なこの杖を使って、彼女にはまだまだやってもらいたい事があるからね」

☆

「お前なんかイリスは渡さないぞ！」

睨み付けるハリーを意にも介さず、リドルは唐突に、穏やかな口調で話し始めた。

「彼女の瞳はまるで宝石のようだ。星空をそのまま封じ込めたかのよう、神秘的に煌めいている。——あれは、彼女の体から溢れ出る豊富な魔法力の影響によるものだ」

リドルが杖を振ると、空中に虹色の蛇と銀色の蛇が、ふわりと煙の様に浮かび出た。

「これは、彼女の魔法力の有様を体現している。虹色が〃 出雲家〃の血、銀色が〃 スリザリン〃の血だ。相反する固有魔法を持つこの二つの血は、互いを拒絶した。そしてこうして——」

やがて二匹の蛇はそれぞれの尾っぽを噛み、グルグルとその場で回り続けた。——それはまるで、ウロボロスの輪のように見えた。

「互いを喰らい、浸食しながら、回り続けている。この争いは、どちらかが勝つまで終わらない。彼女の魔法力は膨れ上がる一方だ。そしてそれを受け入れる彼女の体質は“依代”。魔法界で“神”と呼ばれる、膨大な魔法力エネルギー体を受け入れるのに、最も適している体だ。

——わかるかい？彼女は“芸術品”なんだ。こんな素晴らしいものを、僕がみすみす手放すと思うか？」

もうハリーは我慢ならなかった。ハリーは杖を振り上げ、リドルに呪いを掛けようとした。しかし、敵の方が数枚上手だ。ハリーの手に熱い痛みが走り、彼の杖が遠くへと弾き飛ばされる。

——だが、ハリーの目的は、リドルと決闘する事ではなかった。彼の注意を一時的に、日記から逸らす事だ。ハリーの傍をロンが駆け抜け、リドルの足元に落ちている日記を後方へ蹴り飛ばす。リドルが舌打ちをして杖を振るうが、放たれた光線は直前でロンを逸れた。

「受け取れ、マルフォイ！」

柱の影からドラコが飛び出し、スライディングする日記を受け止める。彼はローブのポケットから剣を取り出し、鞘を抜いて、思い切り日記の表紙に突き立てた。

☆

——しかし、壊れたのは、日記ではなく、剣の方だった。

「そ、そんな・・・っ！」

「おい、紛い物かよ！」ロンが腹いせ紛れに叫んだ。

「そんなわけがない！どうしてだ！」

リドルが堪え切れないといった調子で、腹を抱えて笑い始める。一方の三人は、絶望に塗れた表情を突合せた。——通常の呪いの道具であれば、その剣で破壊出来ただろう。しかし、三人は知らなかった。リドルの日記は、人の魂そのものを封じ込めた非常に強力な呪いの道具——“分霊箱”だという事を。

「当然だ。僕の日記を壊すなら、もっと“特別なもの”を持ってくる

べきだったな。——裏切り者め。これで鼠は全て出揃ったか。仲良  
くバジリスクに丸呑みにされる前に、さて、ハリー。君に聞きたい事  
がある」

「何を？」

ハリーは吐き捨てるように言った。

「二回も——君の過去に、僕にとつては未来にだが——僕たちは出  
会った。そして、二回とも僕は君を殺し損ねた。君はどうやって生き  
残った？長く話せば、君たちはそれだけ長く生きていられることにな  
る」

ハリーは素早く考えを巡らし、勝つ見込みを計算した。リドルの所  
持するイリスの杖は、主への並々ならぬ忠誠心を持っているらしく、  
甚大な被害を与える事はできないようだ。——だが、彼にはバジリス  
クがいる。ドラコの作戦も失敗した。恐ろしい怪物相手にたった三  
人で、意識のないイリスを抱えながら、太刀打ちできるのだろうか。  
状況は圧倒的に不利だ。しかし、ハリーがそうこうしているうちに  
も、イリスの命はますます擦り減っていく。グズグズ迷っている暇は  
ない。彼は意を決して口を開いた。

「君が僕を襲った時、どうして君が力を失ったのか、誰にもわからな  
い。僕自身もわからない。でも、何故君が僕を殺せなかったのか、僕  
にはわかる。——母が、僕をかばって死んだからだ。母は普通の、マ  
グル生まれの母だ」

今やハリーの体は、爆発しそうな怒りを押さえつけるのに、わなわ  
なと震えていた。

「君が僕を殺すのを、母が食い止めたんだ。僕は本当の君を見たぞ。  
去年の事だ。落ちぶれた残骸だ。辛うじて生きている。君の力の成  
れの果てだ。今だって変わらない。何も知らない可哀想な女の子の  
魂に縋り付いていなければ、君はこうして立っている事すらできない  
！君は逃げ隠れしている！醜い！汚らわしい！」

リドルの顔が、醜く歪んだ。それから無理矢理、ぞつとするような  
笑顔を取り繕った。

「そうか。母親が君を救うために死んだ。なるほど。それは呪いに対

する強力な反対呪文だ。結局君自身には、特別なものは何も無いわけだ。実は何かあるのかと思っていたんだ。ハリー・ポッター、何しろ僕たちには不思議と似たところがある。君も気づいただろう。二人共混血で、孤児で、マグルに育てられた。偉大なるスリザリン様ご自身以来、ホグワーツに入学した生徒の中で、蛇語を話せるのはたった二人だけだろう。見た目もどこか似ている。

しかし、僕の手から逃れられたのは、結局幸運だったからに過ぎないのか。それだけ分かれば十分だ」

三人はリドルが今にも杖を振り上げるだろうと、身を固くした。しかし、リドルの笑ひはますます濃くなった。

「さて、ハリー。少し揉んでやろう。サラザール・スリザリンの継承者、ヴォルデモート卿の力と、有名なハリー・ポッターとその仲間たちの力とを、お手合わせ願おうじゃないか」

リドルは蒼白な表情でハリーの傍へ駆け寄ってくるロンとドラコをからかうように、チラツツと見てその場を離れた。ハリーは感覚のなくなった両足に恐怖が広がっていくのを感じながら、リドルを見つめる。リドルは一对の高い柱の間で立ち止まり、ずっと上の方に、半分暗闇に覆われているスリザリンの石像の顔を見上げた。横に大きく口を開くと、シューシューと言う空気が漏れるような奇妙な音が漏れた。ロンとドラコは一樣に恐怖で声を引き攣らせたが、ハリーだけはリドルが何を言っているのかわかった。

「バジリスクが来る。僕らを殺すつもりだ。——戦うしかない」ハリーは二人に言った。

「僕が何とかして食い止める。その隙に、二人はイリスを連れて逃げてくれ」

「食い止めるったって、どうやって……」ロンの言葉は途中で途切れた。

ロンはスリザリンの巨大な石の顔を見つめていた。今、それが動いている。恐怖に打ちのめされながら、ハリーは石像の口がだんだん広がっていき、ついに大きな黒い穴になるのを見ていた。何かが、石像の口の中で蠢いている。何かが、奥の方からズルズルと這い出してきた。

た。

「目を閉じろー！」ドラコが叫んだ。

三人は部屋の暗い壁にぶつかるまで、固く目を閉じ、後ずさった。何か巨大なものが部屋の石の床に落ち、床の振動が伝わって来た。何が起きているのか、ハリーには分かっていなかった。巨大な蛇がスリザリンの口から出てきて、とぐろを巻いているのが目に見えるような気がした。リドルの冷酷な蛇語が、ハリーの耳元に恐ろしげに纏わりつく。

☒あいつを殺せ☒

バジリスクがハリーに近づいて来る。隣にいるロンが、切羽詰まった声で“雄鶏の鳴き真似”を繰り返しているが、残念ながら、本物でなければ効果がないらしい。埃っぽい床を、ずっしりした胴体を滑らせる音が聞こえた。リドルの笑う声がする。随分と綺麗な声だ。いや、違う。ハリーは耳を聳てた。あれは——音楽だ。

音楽はだんだん大きくなった。妖しい、背筋がぞくぞくするような、この世のものとは思えない旋律だった。やがてその旋律が高まり、ハリーの胸の中で肋骨を震わせるように感じた時、彼の真上で狂ったようなシューシューという音と、何かのたうちまわって柱を叩きつけている音が聞こえた。——もう我慢できなかつた。ハリーはできるだけ薄く目を開け、何が起こっているかを見ようとした。

まず見えたのは、巨大な蛇だった。毒々しい鮮緑色の、樫の木のよう太い胴体を、高々と空中にくねらせ——その巨大な鎌首は酔ったように、柱と柱の間を縫って動き回っていた。次に見えたのは、美しい炎の塊だ。ハリーは息を飲んだ。白鳥ほどの大きさの真紅の鳥だ。クジャクの羽根の様に長い金色の尾羽を輝かせ、まばゆい金色の爪にボロボロの包みを掴んでいる。その鳥を、ハリーは不思議な事に、どこかで見たような気がした。

「不死鳥だな」

リドルが鋭い声で言い放った。憎々しげにその鳥を睨んでいる。「違う。僕じゃない」

ハリーと同じく、何時の間にか目を開いていたロンが、期待の眼差しでドラコを見つめている事に気づき、彼は気まずそうに返事した。



「フォークスだ」

ハリーは、炎を散らすその美しい姿を見つめ、茫然と呟いた。——そうに違いない。ダンブルドアのペットである、不死鳥フォークス。その本来の姿は、こんなにも美しいのか。その不思議な旋律は、三人になけなしの勇気を奮い立たせた。三人が固唾を飲んで見守る中、フォークスは蛇の鎌首の周りを飛び回り、対するバジリスクはサーベルのように長く鋭い毒牙で、狂ったように何度も空を噛んでいた。「見ろ！目が！」ドラコが息を飲んだ。

ドラコの声に反応したかのように、バジリスクは三人が目閉じる間もなく、こちらを振り向いた。——大きな黄色い球のような目は、今や、両眼共にフォークスに潰されていた。そこからおびただしい量の血が流れ、バジリスクは苦痛にのたうち回っていた。

☒違う！☒リドルが忌々し気に蛇語で叫んだ。

☒鳥にかまうな！放っておけ！小童共は後ろだ！匂いで分かるだろう、殺せ！☒

「匂いで僕らを追いかけろ気だ！」ハリーが叫んだ。

「ハリー！ここは僕らで食い止める。イリスを頼む！」ロンはポケットをゴソゴソしながら怒鳴った。

「兄貴たちが『音のしないきれいな花火』だってくれたんだけど、絶対嘘だ。こいつを使う！」

ロンはバジリスクに向け、何かの包みを放り投げた。何か不穏な気配を察知したフォークスは、その場を離れる。包みはバジリスクの鼻先に触れると同時に——爆発し、無数の火花を周囲に撒き散らした。火花の一つ一つは、それぞれ様々な趣向を凝らした花火となり、ドーム状の天井を色とりどりに染め上げる。ロケット花火は銀色の星を噴射し、緑と金色の火花のドラゴンが音を立てて飛び回る。——それは、後の『ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ』で発売される『ウィーズリーの暴れバンバン花火』の試作品であった。

「次はクソ爆弾だ！」

ロンがやけくそになって叫び、クソ爆弾をバジリスクの鼻先にぶつけた。リドルは舌打ちをし、花火に杖を向け「失神呪文」を唱えたが、

何故かそこら中の花火が大爆発し、「消失呪文」をかけるとそれぞれの花火が増えてしまった。今や十匹のドラゴンが、バジリスクの周囲に犇めいている。バジリスクは強烈な音と煙の匂いで、一時的に動く事も儘ならず、立ち竦んでいた。リドルはやがて、その元凶であるロンに杖を向けた。彼が得意とする“死の呪文”は唱える事は難しいだろうが、ロンに致命傷を負わせる程の魔法なら、確実に使用できると判断したためだ。

だが、その先を阻むように、リドルと対峙する者がいた。杖を構えたドラコだ。唇を真一文字に引き結び、恐怖と怒りを宿した瞳が、リドルを見据えている。

「僕に決闘を挑むか。自ら死に突き進むとは、実に愚かしい。君はスリザリンに向いていないな、ドラコ・マルフォイ」

リドルは冷たくせせら笑った。

☆

ロンの巻き起こした凄まじい花火パーティーは、イリスの意識を囚わずも呼び覚ました。リドルの言う通り、彼女の“血の戦い”は、休まず続けられている。その結果、彼女が再び意識を取り戻す程度の力を回復させる事が出来たのだ。イリスはゆつくりと瞳を開いた。おぼろげな意識と視界が明確になると共に、見えた現実にイリスは息を飲んだ。

周囲は幻想的な程の光と音に包み込まれていた。色鮮やかな光に照らされたバジリスクが、花火で出来たドラゴンたちと交戦している。その近くにはロンがいた。柱の傍では、リドルとドラコが杖を向け、睨み合っている。リドルが放った光線は、不意にドラコの目の前を飛んできたフォークスが、寸でのところまで飲み込んだ。ゲプリと黒い煙を嘴から吐いて、フォークスはまるでドラコを守るように、彼の肩にずしりと止まった。

「イリス！イリス！目を覚ましたんだね」

ふとすぐ近くから、暖かな声が聴こえた。イリスの大好きな声だ。

「ハリー……」

起き上がろうと身じろぎするイリスの体を抱え込み、ハリーは油断

なく周囲を見渡ししながら、優しくイリスに言った。

「みんな、リドルから君を助けに来たんだよ。一緒に帰ろう」

イリスは驚愕と喜びに打ちのめされた。様々な感情が緋交ぜになり、言葉の代わりにポロポロと熱い涙がいくつも零れ落ちて、祭壇に滴り落ちる。

——“ 貴方を置いて行きはしないわ” ——

だが、安堵しかけたイリスに向け、警鐘を鳴らすように——“ ハーマイオニーがバジリスクに襲われた時の記憶” が、鮮やかに彼女の脳裏にフラッシュバックした。——今でも克明に思い出せる。彼女の温もり、暖かな言葉、そして——凍り付いた瞳を。その強烈な罪の記憶は、冷たく頑強な檻へと変わり、イリスを固く閉じ込めた。——もう二度と、私のせいで大切な人を失いたくない。差し出された手からそつと視線を逸らし、イリスは弱々しく首を横に振った。

「……無理だよ」

「どうして？」 ハリーが戸惑うように尋ねた。

イリスの心は、リドルによって粉々に砕かれ、深い絶望の海の底に沈められていた。もうイリスに浮上する気力など残されていない。——もしこの先、リドルに勝てたとしても、私はもう“ 今までの平凡なイリス” じゃない。右腕に焼き付けられたこの印を見たら、みんなはきっと私を拒絶するだろう。——そうだ、その方が良い。イリスは暗い気持ちで、寝間着の右腕の袖を捲ってハリーに“ 闇の印” を見せた。このままでは、みんなリドルに殺されてしまう。“ 悪い魔女” である私を助ける必要なんかない。愛想を尽かして、みんな逃げてくれる方が良いんだ。——ハリーの顔を怖くて見る事が出来ず、イリスは唇を噛み締め、俯いた。頭の上で、彼が息を飲む音がした。

「わ、私、悪い魔女だったの。ハリー。この印の意味、わかるよね。もうみんなとは、一緒にいられないんだ」

ハリーは長い間、その印をじつと見つめていた。しかし、やがて穏やかな声でこう言った。

「僕と一緒にだね。イリス」

「え……？」

何を言っているんだろう。言葉の意図が掴めず、茫然とイリスがハリーを見上げると、彼はおもむろに前髪を掻き上げ、額に残る稲妻型の傷跡を見せた。ハリーは労りに満ちた笑顔で、イリスを見つめた。「僕もこれを、ヴォルデモートに付けられた」

「い、一緒じゃないよ！意味が違う！」

「一緒だよ、イリス。僕の目を見て」

ハリーはきつぱりと言い切って、イリスの両肩を掴み、彼女の瞳を真正面から見つめた。

「印や傷跡、血筋なんかで、何もかも決められてたまるもんか。自分の事はいつだって、自分が決めるんだ。君がヴォルデモートの“従者”の末裔だと分かったって、僕らの友情は変わらないよ。ハーマイオニーは石化する寸前に、これを僕らに託した。彼女も同じ思いだ」

ハリーはポケットから皺くちゃの紙切れを出し、イリスに見せた。イリスはそれを見た途端、喉に熱いものが込み上げてきて、何も言う事が出来なかった。それは、バジリスクについて書かれた本のページを破り取ったもので、端つこには“リドルは嘘つき、イリスを救って”と書かれている。——あの絶望的な状況下でも、ハーマイオニーはただイリスを救う一心で、二人に向け、命懸けのメッセージを託したのだ。

「漏れ鍋」で初めて会った時のように、二人はじつと見つめ合った。たったそれだけで、ハリーが何を伝えたいのか、イリスにはもう十分理解する事が出来た。——ハリーやロン、ハーマイオニーと過ごした日々、育んだ友情は、何物にも覆す事は出来ない。イリスは確かにスリザリンの血族者であり、ヴォルデモート卿の“従者”の末裔なのかもしれない。だが同時に、イリスはハリー達の“親友”であり、自分で自分の道を選び歩む事の出来る、一人の人間なのだ。

「イリス、君はどうしたい？君の意見が聞きたい」

ハリーは冷たくかじかんだイリスの両手をぎゅっと握り締めた。

「ヴォルデモートの部下の末裔としてじゃない。イリス。君自身が出す答えだ」

「わたし・・・」

イリスを覆っていた、冷たく鋭い檻は砕け散った。心の中に、暖かいものが流れ込んでいく。

「わたし、みんなといっしょに、いたい」

それは絞り出すような声音だった。ハリーは何も言わず、イリスを強く抱き締めた。

☆

不意に、柱の一つが破壊される、凄まじい轟音が鳴り響いた。二人が驚いて音のした方向を見ると、バジリスクがその巨体を波打たせ、狂ったようにそこら中の柱の破壊を始めている。崩れ落ちる瓦礫の中に、見覚えのある赤毛が一瞬見えたような気がした。土煙に飲まれるように、豪勢な火花たちが、急激に威力を弱め、消えていく。

続いて、祭壇に何かが叩きつけられる鈍い音が炸裂し、二人は飛び上がった。——フォークスだ。フォークスは祭壇の上に舞い上がり、ハリーの膝にポトリとボロボロの包みを乗せた。それは——組分け帽子だった。

「返せ！それは僕のっ」

「黙れ」

リドルは「武装解除呪文」で奪ったドラコの杖を振るうと、ドラコの声はたちまち聞こえなくなつた。彼を魔法で出したロープで縛り上げ、リドルは涼しい声で言った。

「ああ、これの方が随分と扱いやすい。さあ、イリス。ハリー・ポッターを僕に渡せ」

イリスは首を横に振り、ハリーは彼女を庇うように抱き締めた。

「そうか。——ならば、力づくで引き離すまでだ」

リドルの背後から、巨大な影が伸び上がり、首をもたげた。——バジリスクだ。蛇はその恐ろしく大きな口を開き、二人に襲い掛かった。イリスは死を覚悟して、目をぎゅつと瞑った。

しかし、すぐ近くで、血腥い吐息が掛かり、シューシューという大きな音が聞こえるものの、覚悟していた攻撃は一向にやってこない。イリスはそつと瞳を開き、驚愕した。

——ハリーだ。彼は何時の間にか、眩い光を放つ銀色の剣を手にし

ていて、それをバジリスクの右頬に深く突き刺していた。彼の足元には、組み分け帽子が転がっていた。

「イリス」ハリーは喘ぎながら言った。

「組み分け帽子から、剣が——」

次の瞬間、ハリーは剣ごと、バジリスクに振り払われた。遠心力ですっぽ抜けた剣と一緒に、ハリーも瓦礫だらけの床の上を、何度も跳ねながら転がっていく。バジリスクは、全身を強く打って動けないハリーに這い寄ると、その尾っぽを容赦なく叩きつけようとした。

その時、ハリーの痛みで朦朧としている視界の中を、見慣れた金色の光が掠めた。——スニッチだ。ハリーは直感的にそう思った。彼がいつも試合中、無我夢中で追いかけるスニッチが、バジリスクの周囲を飛び交い、蜂のように彼方此方突き刺して注意を逸らしている。

「イリス！ 愚か者めが！」

リドルの鋭い叱責の声と共に、呪文の光線が放たれる。それは狙い変わらず、スニッチに命中した。それは金色の光を辺りに放出しながら、床にポトリと墜落して——傷だらけのイリスへと姿を変えた。——イリスが、スニッチに変身していた？ 痛みの余り、幻覚でも見ているのだろうか。ハリーは無意識に目を瞬いた。リドルは苛立たしい様子を隠そうともせず、彼女に近寄ると、その胸倉を掴み上げる。今や、彼の双眸は、熱した石炭のように真っ赤に染まっていた。

「何故だ！ 何故……！ 君が救うのはこいつじゃない！ この僕である筈だ！」

リドルは、イリスが一向に、自らに付き従う様子を見せず——それどころか、よりによってその宿敵であるハリーを助けようと命を投げ出した事に、激しい憤りを感じているようだった。ハリーの目の前で、リドルはイリスの頬を張り飛ばした。イリスのひび割れた唇の端から、一筋の血がスツと零れていく。しかしイリスは、怯える事も臆する事も無く、リドルを見据え、静かにこう言った。

「リドル。わ、わたし……メーテイスじゃ、ないよ」

日記のリドルの記憶と同期した時、イリスは彼の“<sup>リンク</sup>知られざる苦惱

“を知った。あの時、リドルとメーティスの間には、“愛情”が芽生えかけていた。本当に望めば、二人とも同じ場所にいった筈だ。だが、そうはならなかった。二人があの後どうなったのか、イリスには見当もつかない。時の流れは全てを変える。二人の関係性にも変化が訪れたかもしれない。

けれど日記のリドルだけは、時間から切り離されて、何十年も一人ぼっちで取り残されていた。“あの時”の苦しみや絶望を抱えたまま。——リドルはどんなに辛かっただろう。自分だったら決して耐えられない。あれ程恐れていたリドルが、今、自らに対して激昂しているというのに、イリスは不思議と恐怖を感じなかった。

その時、彼女はリドルに共感し、憐れみの感情を抱いていた。それは、彼の全てを受け入れたイリスだからこそ、そして彼女が愛されて育ったからこそ、出来た事だった。イリスの瞳からポロリと暖かな涙が零れ、彼の腕に滴り落ちていく。

「私が、そばにいる。もうあなたを、一人ぼっちにしない。だから、もうこれ以上、私の大切な人を、傷つけないで」

その涙には、イリスがリドルに向けた“愛情”が含まれていた。——“愛情”。それは柔らかく暖かで、けれどしっかりとありのままの自分を受け止めてくれるもの。望めばいくらかでも注がれるもの。どんな魔法よりも人を強くさせ、成長させるもの。そして、今までそれを受けずに育ったりリドルが——彼自身こそ、そうだと自覚していないもの——本当は魂の奥底で何よりも、渴望していたものだった。

だが、彼の魂は禁術によって、歪に変性してしまった。長い間、肉体から切り離されていた“魔法の心臓”が、再び体内に戻り、暖かな血を巡らせて脈打つ事が出来ないように——魔法の魂も、もう二度と“愛情”を受け入れる事ができない。それを一度受け入れてしまえば、“分霊箱”は意味を失くし、“闇の帝王”と恐れられたヴォルデモートは永遠の命を得られず、滅びる。——彼が死の恐怖を乗り越えて愛を選ばない限り、“愛”は“死そのもの”だ。

イリスの涙から、“愛情”がリドルの魂に染み込んでいく。彼の魂の一部——まだ人間である部分が、無意識に“愛情”を求めて幼子の

様に手を伸ばす。しかし、すぐさまそれは、灼熱の業火にも等しい激痛に変換され、彼の体を拷問の様に責め苛んだ。リドルはその苦痛に耐えきれず絶叫し、イリスを床へ乱暴に投げ落とした。

「イリス……っ！」

ハリーは立ち上がろうとするが、瓦礫に足が挟まれて、動く事ができない。彼は我武者羅にもがいた。リドルは息を弾ませ、真紅に燃える双眸でイリスを睨み付ける。

「裏切り者め、僕に……僕に何をした！」

主の敵と判断したバジリスクが、やおら巨体をくねらせ、リドルが止める間もなくイリスに襲い掛かった。——もうおしまいだ。その時、絶望に塗れた瞳のイリスと、大口を開けたバジリスクの間を、何が阻んだ。

☆

「イリス、血が出ているぞ！大丈夫か！」

ドラコの鬼気迫った声が、すぐ近くで聞こえた。イリスが震えながら目を開けると——目の前に、ドラコの顔があった。彼は先程ハリーが持っていた剣を握っていて、その先は、蛇の口蓋を深く貫いていた。彼が剣を離すと同時に、バジリスクはドツと横様に床に倒れ、ひくひくと痙攣し始めた。彼が自分を守ってくれたのだ。

——“血”？イリスは自分の体を見つめた。彼の言葉通り、ぐつしよりと大量の血で濡れている。だが、体のあちこちを触っても、痛みもないし、傷口も見当たらない。自分の血ではないのだ。——イリスはゾツとして、思わずドラコを見て、息を飲んだ。彼の腹部には——蛇の牙が、深々と突き刺さっていた。そこから、夥しい量の血が吹き出し、イリスの腹部を染め上げていたのだ。血の出所は、彼だった。イリスは無我夢中でドラコにしがみ付いた。

「ど、ドラコ……！血が……！」

一方のドラコは、イリスの目線の先を見て、ホッと安堵の笑みを浮かべた。

「なんだ、僕の血か」

安心したのか、ドラコの体は弛緩し、イリスに力なくもたれかかる。



イリスは泣き叫んだ。

「いやっ！嫌だよ、お願い、死なないで！」

イリスの願いも空しく、ドラコの体はどんどん冷たくなっていく。牙を引き抜こうとしたイリスの手をドラコが掴んだ。

「駄目だ、イリス」

彼は渾身の力で自らの腹部に刺さったそれを引き抜くと、イリスの手の届かない所へ放り投げた。

「牙には・・・毒が・・・君に、触れたら・・・」

「ごめんなさい！ごめんなさい、私のせい、私のせいで！」

「イリス。謝るのは・・・僕の方だ・・・君は・・・何も・・・」

ドラコの伸ばした手を、イリスは必死に掴んだ。——もう何もかも遅すぎる事は、ドラコにはよく分かっていて。傷口からズキズキと、灼熱の痛みがゆっくり、しかし確実に広がっていた。死がすぐ傍までやって来ているというのに、彼には不思議と恐怖は無かった。ドラコの目が、急速に霞んでいく。ドラコは自分の手の感覚がなくなる前に、彼女の頬を愛しげに撫でた。

ぼんやりした暗色の世界で、青い美しい瞳が二つ、満月のように輝いていた。それは彼だけを見つめている。——イリスの目だ。なんて美しいんだ。ドラコは幸福に酔いしれ、微笑んだ。君に、ずっと言いたかった言葉がある。それを言わなければ。ドラコは粘つく口内を開き、もつれる声で最期にこう言った。

「愛してる」

その言葉を言った切り、ドラコの唇は、再び開く事は無かった。ドラコの瞼が、力なく閉じられた。彼の手から、力が抜けた。背後から足音が響き、イリスの頭上からリドルの声がした。

「当然の報いだ。イリス。君を娶りたい“純血”の者なら、いくらでもいる。彼に似た者がいいなら、ルシウス・マルフォイにもう一度、作らせればいい」

——リドルは何を言っているんだろう。

イリスは、愛する者を失い、真っ白になった頭で考えた。

——ドラコの“代わり”なんていない。いない。私は彼を愛し

ていたのに。リドルは何を言っているんだろう——

その時、イリスの心の奥底で、何かが生まれた。——それは、身を焦がす程の激しい怒り、憎しみ、激情、殺意、残酷な気持ち。今までの彼女の人生では一度も生まれた事の無い、どす黒く、身の毛もよだつような恐ろしい感情たちだ。それはマグマのように彼女の心の奥底から沸き上がり、煮え滾り、吹き上がって、噴火した。それを、イリスは明確な言葉に変換する事など出来なかった。

イリスは天井を仰いで、声の限り慟哭した。そして、それに呼応するように、ザザツとリドルの体にノイズが走った。ぐらり、と彼の体が不安定に揺れる。訝し気にイリスを見やったリドルの顔が、驚愕に歪んだ。彼女の双眸が、ルビーのように真っ赤に染まっている。——激昂した彼女の主と同じように。イリスの心から生まれた、おぞましい感情たちは、彼女の魔法力のリミッターをいとも容易く外してしまった。リドルの目の前で、彼女は恐るべき速さで成長していく。彼女の体から異常に増殖した魔法力が噴き出し、ビリビリと周囲の石像や柱、石壁を反響させる。

——怒りの余り、彼女の魔法力が暴発している——！

そう判断したリドルがイリスに手を伸ばそうとした時——彼の口から、何の前触れもなく、大量の血が零れ落ちた。いや、血ではない、それは——黒いインクだ。

「なっ……?!」

体から力が抜け、思わずよろめいたリドルの視界の端に飛び込んできたのは——体中に瓦礫の欠片をくっつけたロンが、日記を床に押さえつけ——ハリーが、バジリスクから引き抜いたあの銀色の剣で、その表紙を貫いている光景だった。小鬼製のその剣は「自身を強くするものを吸収する」という特性を持つ。それは、ドラコがバジリスクを倒した時、その毒を吸収していたのだ。リドルが提言した“特別なものを、この剣だと判断した二人の推察は、図らずもリドルを死へと導いたのである。ハリーは、リドルを睨み付けながら、もう一度深く突き立てた。

「っ?!」

リドルは声にならない悲鳴を上げ、身を振った。彼の端正な顔立ち  
は、今や見る影もなく、ゴボゴボと息をするごとに黒いインクが溢れ  
出す。——自らが消えていく!“死”は何よりも、“愛”を知らない  
彼にとって恐れるべきものだった。その恐怖に打ちのめされ、彼は死  
の間際、無意識の内に、唯一の“愛”の象徴であるメーテイスを——  
その面影を色濃く残すイリスを求め、手を伸ばそうとした。  
しかし、その手すらも、霞のようにぼやけて消えていく。リドルは  
もがき苦しみながら、やがて体を全て、彼の根源たる黒いインクに変  
え、この世から消滅した。

☆

ハリーとロンは、荒々しく日記と剣を投げ捨てると、一目散にイリ  
スとドラコの元へ駆け寄った。

「イリス……」

イリスは咽び泣きながら、命の灯が消えゆくドラコの体を抱き締め  
た。——もう、何も考えられない。彼を失うなど、イリスにとって耐  
えられない事だった。ハリーは何と声を掛けていいのか分からず、立  
ち竦み、ロンは目を激しくこすりながら、鼻を嚙った。

《案ずることはない。お嬢さん》

ふと、舌足らずな子供のようにも、年を経た老人のようにも聞こえ  
る不思議な声が、イリスのすぐ肩の上で聞こえた。ずしつとイリスの  
肩に、暖かな重みが生まれた。——フォークスだ。フォークスは頭を  
もたげ、真珠のような涙をいくつも、その艶やかな羽毛を伝わせ、ド  
ラコの傷跡に零れ落としていく。それは不思議な事に、傷口の周りを  
ぐるりと取り囲み、やがて、その傷そのものを消してしまった。

「癒しの涙だ」ハリーが茫然と呟いた。

「ダンブルドアが言ってた。不死鳥の涙には、癒しの力があるって」

三人が固唾を飲んで見守る中、ドラコの瞼が痙攣し、彼はやがて——  
意識を取り戻した。イリスの頭の中で色んな思いが鬩ぎ合い、彼女は  
赤子のように泣きじやくり始めた。強く彼を抱き締めて、気が付け  
ばイリスは、何度も何度も同じ言葉を叫んでいた。

「愛してる。愛してるの。私も、大好き！」

「・・・ああ、わかってる」

ドラコは優しく眩き、イリスの頭を抱き寄せ、頬にキスをした。  
「次は僕らの番だぜ、ハリー。アルファベット順だと次は君だな」

ようやく一息ついたロンが、二人の仲睦まじい様子を茶化して、ハリーに話しかける。しかし、当のハリーはむっとりとして黙り込んだままだった。何だか、イリスが他の男の子と仲良くしているというその事実が、どうしても許せなかったのだ。

——リドルの言う通り、彼とハリーは不思議と似通った点がある。リドルは孤児院で、ハリーは親戚の家で、それぞれ“愛情”を受けずに育てられた。リドルと同じように、ハリーもずっと“愛情”に飢えていた。彼にとって、一番最初に出会い、純粹に彼を慕い、“親友”として友情と愛情を惜しみなく注ぎ続けるイリスの存在は、彼が自覚している以上に、遥かに特別で、大きなものとなっていたのだ。気が付けば、ロンに『イリスの父親みたいだ』とからかわれてしまう位に、彼女を常に気にかけて、執着してしまう程——ハリーはイリスを愛していた。

ハリーの魂の一部が、彼に囁き掛ける。“あれは僕のものだ”と。その考えは、ハリーの魂そのものを浸食し、奥底へ深く深く根付いていく。“愛情”は人を強くする——それは、良い方向ばかりであるとは限らない。“愛”が時に人を狂わせるように——“愛情”に目覚め始めたハリーは、ただ我武者羅にそれを——その根源たるイリスを求めようとしていた。

「イリスは僕のものだ」

ハリーは声に出さずに眩いた。隣でのんびりと様子を見守るロンは気づいていない。ハリーが、かつてのリドルと同じように、イリスへ執心の眼差しを向けている事を。

——そう、彼女は僕のものなんだ。

フォークスの広い真紅の翼が闇に放つ、柔らかな金色の光に導かれ、四人はバジリスクの亡骸を乗り越え、薄暗がりに足音を響かせて、トンネルへと戻って来た。背後で石の扉が、静かに閉じられる音がした。パイプの出口のところまで引き返すと、ハリーは屈んで、上に伸びる長く暗いパイプを見上げ、考え込んだ。

「どうやって上に登るか、考えてた？」ハリーが聞いた。

《お嬢さん。通訳を頼めるかな？》

長い金色の尾羽を振りながら、フォークスがイリスに向けて、親し気に話しかけた。

☆

ハリー達はイリスの指示でそれぞれの手を繋ぎ、最後にイリスがフォークスの尾羽に掴まって、無事地上へと帰還した。

「さあ、どこに行く？」ロンが言った。

ハリーは返事をする代わりに、指で示した。——フォークスの道案内はまだ終わっていないようだ。四人は、金色の光を放って先導するフォークスに従い、人気のない静まり返った廊下を歩き続けた。——やがて、マクゴナガル先生の部屋の前に出ると、フォークスは旋回して、イリスの肩に留まった。ここが終着点なのだろう。ハリーは一歩進み出て、ノックしようと手を挙げた。けれども一旦その手を留め、振り返ってドラコを見た。

「僕は、ここであつた事を全部話そうと思う。——でも、君はどうなる？」

ハリーの意図している事を理解した二人は、ドラコを心配そうに窺い見た。——全ての黒幕がルシウスだと判明したら、彼は間違いない。アズカバン行だ。そうしたら、彼の息子であるドラコも無事では済まない。今後の生活を、父親に関する誹謗中傷の中で過ごす事になるだろう。しかし、ドラコは寄り添うイリスを優しい眼差しで見つめながら、静かに言った。

「僕はそれで構わない」

ロンはギョツとした目付きでドラコを見て、鳥肌の立った両腕をしきりに摩り始めた。イリスはその時、ドラコの瞳の奥に、何かが輝いているのを見つけ、目を凝らした。——虹だ。七色の輝きが、イリスを誘うようにキラキラと揺れている。見る見るうちにその輝きは強さを増し、彼女の視界全体に広がっていく。やがてイリスは、意識が急速に遠のいていくのを感じた——

☆

再び意識を取り戻した時、イリスは巨大な七色の輝きの中にいた。——もつと正確に言えば、七色のトンネルの中を風のような速さで飛んでいた。冷たい空気がビュンビュンと耳元で唸りを上げる。——ここは何処なんだろう？イリスは狼狽して周囲を見渡すけれど、さつきまで傍にいた筈のハリー達の姿が見当たらない。トンネルの中はイリス一人きりだ。

やがてトンネルは緩やかな放物線を描き、その先には重厚な造りの扉が見えた。イリスは不思議な事に、それを見た事があるような気がした。——このままではぶつかる！イリスはどうする事も出来ず、衝撃に備えて目をギョツと閉じた——近づくにつれ、誰かの怒鳴り声が聞こえてくる——誰の声だろう、この声も聞き覚えがある——

覚悟していた衝撃は来ず、その代わりにイリスは、冷たい床の上に放り出された。強打した全身を摩り、目を白黒させながら、よろよると起き上がる。

「情に絆されたか！ダンブルドアの犬になるなど！」

不意に大声がすぐ近くで聞こえ、イリスは思わず飛び上がった。そして目の当たりにした光景に、目を疑った。

——そこは、かつてイリスが何度も使用したマルフォイ家のサロン室だ。先程の扉は、サロン室の扉だったのだ。道理で見覚えがある筈だ。——いつの間にもマルフォイ家に？イリスが声も出せずに混乱している、目の前に立っているルシウスが激昂した様子で、立ち竦むドラコの頬を張り飛ばした。

「やめてー！」

イリスは何も考えず、ルシウスに体当たりしてドラコを助けようと

した。しかし、彼女はルシウスの体をゴーストのように擦り抜け、触れる事すら出来ない。イリスは啞然として、改めて周囲を見渡した。ドラコもルシウスも、二人の様子を怯えた表情で見守るナルシッサも、突然の侵入者であるイリスを気に留めないどころか、その存在すら気づいていないようだ。

「？」

——何が何だか分からない。イリスは一先ず現状を整理するため、三人の様子を注意深く見て、驚愕した。ドラコの背は随分と伸び、顔立ちも成長している。ルシウスやナルシッサの顔には老いの影が滲み、髪には白いものが混じり始めていた。——イリスはふと、“リドルの記憶”を見た時の事を思い出した。あの時の状況と似ている。だとしたらこれは——イリスはごくりと唾を飲み込んだ——マルフォイ家の未来の映像なのだろうか？

ドラコの足元には、見慣れない黒く煤けたゴブレットが転がっている。ルシウスはそれを蒼白な表情で睨み、食い縛った歯の間から唸り声を上げた。

「自分が何をしでかしたか、分かっているのか！」

不意にサロン室の扉が荒々しく開かれ、ルシウスは恐怖で引き攣つた声を上げた。ナルシッサが震える両手で口を覆い、へなへなと床に崩れ落ちる。

——イリスは、扉の前に立つ人物から、目を離す事が出来なかった。黒いローブに身を包んだ背はすらりと高く、肌は不気味な程に青白い。鼻は切り込みを入れたように潰れ、瞳は赤く、切り裂いたように細い。その容貌はまるで、蛇をそのまま人間にしたかのようなだった。

何より目立っているのは、その赤い瞳。それは、つい最近まで彼女が何度となく恐れ、苦しめられた魔法使いが持っていたものと同じだ。——イリスは直感で理解した。容貌こそかけ離れているけれど、間違いなく彼はリドル——未来のヴォルデモート卿なのだ。ヴォルデモートはドラコの傍に転がったゴブレットにチラリと視線を投げかけ、サロン室へ一歩踏み込んだ。

「ああ、我が君！どうかご慈悲を！どうか・・・」

ルシウスはヴォルデモートの足元に身を投げ出して、弱々しく息子の命乞いをした。

「ルシウス、俺様は失望した。裏切り者の盗つ人め。親子共々、その死をもって償うがよい」

ルシウスはヴォルデモートの放った呪文で縛り上げられ、声を出す事も出来ず、床に無様に転がった。ナルシッサが金切声を上げてドラコの前に立とうとするが、同じように縛り上げられ、崩れ落ちる。死を目前にしたドラコは、今にも倒れそうな程にガタガタと震えている。しかし彼の瞳だけは、真つ直ぐにヴォルデモートを睨み付けている。

「アバダ・ケタブラ、息絶えよ！」

そしてヴォルデモートの杖から、恐ろしい輝きを持つ緑色の閃光が、ドラコに向けて放たれた。イリスは無我夢中で駆け出し、両手を広げてドラコの前に立った。しかし、緑の光線はイリスの胸の辺りを無情に突き抜けていく。――振り返るイリスの目と、命の灯が消えゆくドラコの目が交錯した。ナルシッサが金切声で叫ぶ――ヴォルデモートが甲高い声で笑う――ルシウスの顔から全ての感情が拭い去られていく――

☆

「イリス！どうしたんだ、しつかりしろ！」

ドラコに力いっぱい揺さぶられ、イリスは現実へと戻った。どうやら気を失っていたらしい。何時の間にか床にしゃがみ込んでいたイリスを抱き竦めたドラコが、心配そうに顔を覗き込んでいる。彼の頭の上から、ハリーとロンもイリスを気遣わしげに眺めていた。

イリスは何度も目を瞬いて、ドラコをじつと見つめた。――ちゃんと息をしている。生きている。それが嬉しくてたまらなくて、イリスはドラコにギュツとしがみ付いた。

「何も不安に思う事はない。君は僕が守る」

ドラコは嬉しそうに声を弾ませ、イリスを強く抱き締めた。――夢だ。悪夢を見たのに違いない。イリスは自分にそう言い聞かせた。けれど、彼女に警鐘を鳴らすかのように、かつてのイオの言葉が、不



意に耳元で木霊する。

『お前のお母さんは出雲家の中でも、とりわけ力の強い魔女だったんだ。動物以外のもの——植物や物とも話ができたり、時と会話して過去や未来を見通す事ができた』

そうだ。今年、自分は植物——マンドレイク——とも会話が出来たじゃないか。私の力は強くなっている。もしそうなら、あれは“時と会話して見た未来”なのでは？そして、もしそうだとしたら——。イリスは残酷な真実に打ちのめされた。——近い将来、ドラコは死んでしまうんだ。“私の味方になったために”。

「大丈夫、大丈夫だよ」

暫くの沈黙の後、イリスはみんなを安心させるために、微かに微笑んで見せ、ドラコに支えられながら立ち上がった。ハリーが扉をノックし、押し開いた。

☆

暖炉の傍には、ダンブルドア先生とマクゴナガル先生が立っていた。ダンブルドアは穏やかな顔で四人を見つめ、マクゴナガル先生は胸に手を当てて深呼吸をし、落ち着こうとしていた。

「二体全体、あなた方はどうやって・・・」

ハリーはテーブルへ向かい、その上に組分け帽子とルビーの散りばめられた剣、リドルの日記の残骸を置いた。そしてハリーは、他の三人に代わって一部始終を語り始めた。——十五分も話しただろうか。先生方は魅せられたように、シーンとして聴き入った。姿なき声を聴いた事、それが水道パイプの中を通るバジリスクだとハーマイオニーがついに気づいた事、アラゴグがバジリスクの最後の犠牲者がどこで死んだか話してくれた事、そして、トイレのどこかに「秘密の部屋」の入り口があるのではないかと、ハリーが考えた事・・・。

「それで入り口を見つけられたわけですね。その間、約百の校則を粉々に破ったと言っておきましょう。でもポッター、一体全体どうやって、全員生きてその部屋を出られたというのですか？」

散々話して声が掠れて来たが、ハリーは話を続けた。フォークスがちょうど良い時に現れた事、組分け帽子がハリーに剣をくれ、ドラコ

がそれでバジリスクの息の根を止めてくれた事。しかし、ハリーはここで言葉を途切らせた。それまでは、リドルの日記の事、ドラコがどうやって一緒に戦うことになったのかという事、イリスの事に触れないようにしてきた。全てを包み隠さずに告白すれば、イリスとドラコの立場はどうなるのだろうか。リドルの日記はもう何も出来ない。壁の文字には“イリスが継承者だ”と書かれている。先生方は本当に、イリスがやったのではないと信じてくれるだろうか。それに短い間だが、ハリーはドラコに友情を抱き始めてもいた。ドラコに確認を取ったとは言え、真実を告げるには覚悟がいる。混乱した頭でハリーは考えた。

本能的に、ハリーはダンブルドアを見た。ダンブルドアは微かに微笑み、暖炉の火が、半月型の眼鏡にちらちらと映った。

「わしが一番興味があるのは」ダンブルドアは優しく言った。

「ヴォルデモート卿がどうやってイリスに魔法をかけたかということじゃな。わしの個人的な情報によれば、ヴォルデモートは現在アルバニアの森に隠れているらしいが」

——良かった。一先ず、イリスの事は大丈夫だ。素晴らしい、うねるような安心感がハリーを包み込んだ。

「例のあの人が？どうやって、彼女に魔法を？」

「この日記だったんです」

ハリーが急いで言いながら、日記を取り上げ、ダンブルドアに見せた。

「リドルは十六歳の時に、これを書きました」

ダンブルドアは長い折れ曲がった鼻の下から日記を見下ろし、焼け焦げてぶよぶよになったページを熱心に眺め回した。

「見事じゃ。確かに、彼はホグワーツ始まって以来、最高の秀才だったと言えるじゃろう」

ダンブルドアは、マクゴナガル先生に向き直った。太陽の光を反射した水面のように、いつもキラキラと輝いている瞳に、少しの陰りを宿して。

「ヴォルデモート卿が、かつてトム・リドルと呼ばれていた事を知る者

は、ほんとういない。トムは卒業後、消え、世界中を旅した。闇の魔術にどっぷりと沈み込み、魔法界で最も好ましからざる者達と交わり、危険な変身を何度も経て、ヴォルデモート卿として再び姿を現した時には、昔の面影は全くなかった。あの聡明でハンサムな男の子、かつてここで首席だった子を、ヴォルデモート卿と結び付け考える者は、ほんとういなかった」

「ですが、あの人とゴーントと、一体何の関係が？」  
「彼女は何も悪くありません。先生」

ドラコが一步進み出て、震える声で言った。

「僕の父が、イリスにそれを持たせました。そしてその日記に宿ったヴォルデモート卿の魂が、彼女を操っていたんです」

——長い長い沈黙があった。マクゴナガル先生だけでなく、イリス達も目を見張り、ドラコを見つめた。やがてダンブルドアが、感嘆の眼差しで彼を見やりながら、静かにこう言った。

「これほどまでに勇敢な者を、わしは今まで見た事がない。よくぞ勇氣を出してくれた、ドラコ」

続いてダンブルドアは、マクゴナガル先生に向け、感慨深げに話しかけた。

「のう、ミネルバ。みな無事に帰還し、ヴォルデモートも打倒された。ハグリッドも間もなく帰って来る頃合いじゃ。これは一つ、盛大に祝宴を催す必要があると思うんじやが、厨房にそのことを知らせに言ってはくれまいか？」

「わかりました」

——ハグリッドが帰って来る、良かった。イリスは目頭が熱くなるのを感じた。マクゴナガル先生はきびきびと答え、立ち竦むイリスの肩に手を置き、優しくこう言った。

「あなたが無事でよかった。イリス」

マクゴナガル先生の眦にはキラリと涙が光っていた。

☆

「みな、本当に勇敢に戦ってくれた。さあ、お座り」

先生が退室した後、ダンブルドアは暖炉のそばの椅子に腰かけ、四

人はぎこちなくそれに習った。ダンブルドアの慈愛に満ちた眼差しが、イリスに注がれる。

「イリス。過酷な試練じゃったろう。ヴォルデモートとよく戦い、耐えてくれた。君が最後まで諦めなかったからこそ、誰一人死人は出さず、ハリーたちはみな生還を果たしたのじゃ」

友人達の気遣うような目の表情、肩に優しく添えられる手が、今のイリスにとっては——暖炉の温もりよりも——とびきり暖かいものに感じられた。今までの出来事が走馬灯のように、脳内に駆け巡っていく。イリスはダンブルドアの言葉を聞き、静かに首を横に振った。「いいえ、先生。私……諦めていました。何度も怖い思いをして、大切な人たちを、たくさん傷つけて、酷いことを……」

イリスは話す途中で罪悪感に心が震え、それ以上言葉を続ける事が出来なくなつた。ミス・ノリス、ジャスティン・フィンチ・フレッチリー、ほとんど首無しニック、ハーマイオニー、ハグリッド……この事件の犠牲者達の顔が、イリスの脳裏に次々と浮かんでは消えていく。ダンブルドアは銀色の口髭を震わせ、彼女の手を両手で優しく包み込んだ。

「おお、君がそうしたのではない。断じて！」

「でも、でも、リドルはそれが正しい事なんだって、言いました！」

気が付けば、イリスは自分でも驚く位の大声で叫んでいた。やつと身の安全が保証された場所に来て、今まで堪えてきた様々な感情が爆発したのだ。見る見るうちに目が熱くなり視界がぼやけ、涙が幾筋も零れ落ちていく。イリスは酷くしゃくり上げながらも、癩癩を起こしたように思いの丈をぶちまけ続けた。

「ハリーたちも本当の友達じゃない、ダンブルドア先生に与えられたニセモノなんだって！本当の、わ、私は、あの人の“従者”なんだって！お父さんも、お母さんも裏切り者だって！おばさんに育てられた事も、グリフィンドールに入った事も全部間違いだったって！……私、私、とても怖かった！何度も逃げ出したいって思ったけど、逃げられなくて……何度も罰を受けるうちに、本当に、リドルの言う通りなんじゃないかって……本当に、全部が間違いだったんじゃない

かつて、思うようになって・・・」

イリスは俯いた拍子に、“闇の印”が視界に入って、唇をギョツと噛み締めた。——時間は巻き戻せない。この印と同じように、イリスが負った心の傷も、最初から無かった事にする事など出来ない。あの時、ハリー達が命懸けで自分を助けに来てくれなかったら、今頃どうなっていただろう。

——『全ては、ダンブルドアによって仕組まれた事だった』ふと、あの時のリドルの言葉が思い起こされ、イリスの激しい感情が怒りに変わっていく。そうだ。つまり、“ダンブルドアはイリスがメーティスの孫だと知っていたんだ”。先生が、最初から私にホグワーツに誘わなければ、こんなことにならずに済んだかもしれないのに——！イリスのやり場のない憤激は、やがてダンブルドアに向けられる事となった。

「先生は、知っていた筈です。私が、そうだって。でも、先生も、おばさんも、誰も教えてくれなかった！どうしてですか？もし知っていたなら、私、ホグワーツになんか・・・！」

『ホグワーツになんか来なかった』——そう続けるつもりだったイリスの声が、不意に止んだ。確かに彼女は今年、魔法界で筆舌に尽くしがたい程、恐ろしい思いをした。しかしそれまでに、余りにも素晴らしい体験をし過ぎ、何物にも代えがたい友人を得過ぎていた。

「きみのわしに対する怒りは最もじゃ。わしは、きみに対して、余りに多くの事を隠していたのじゃから」

ダンブルドアは、イリスの怒りごと受け入れるかのように、その小さな手を強く握り締めた。彼の手から、温もりがじんわりとイリスの心身に染み渡っていく。

「今はまだ、きみの父君の全てを話すには早い。だが、イリス、これだけは理解してほしい。彼はきみを本当に愛していた。愛するが故に、きみに出生を伏せ、代わりに“あるもの”を与えるよう、わしに頼んだのじゃ」

イリスは言葉の意図が掴めず、ダンブルドアを見上げた。明るい透明がかったブルーの目が、イリスを見つめている。

「——それは“自由”じゃ、イリス。何にも強いられる事無く、あるがままを享受する事。それがあるからこそ、きみは人を心から思いやり、自分の意志で物事を決める事が出来た。人は誰しも純粹そのもので生まれ、育てる者達の考えに染まっていく。死喰い人やそれに賛同する純血の魔法族は、諸手を挙げてきみの教育者になりたがった。ネーレウスはきみをそういったものから守るために、マグルの世界へ隠し、普通の子供として育てるように、わしに頼んだのじゃ。『いつか彼女が成長して、ホグワーツで自分の宿命と向き合わなければならなくなつた時、この十年間の経験が彼女を支え、また救ってくれるのだ』と」

イリスは何も言う事が出来なかった。ハリー達も押し黙り、二人の様子を伺っている。

「ヴォルデモートときみの祖母メーティスの間には、主従関係以上の“特別なつながり”があった。

いずれはきみも、父君と同じように、再び宿命と戦わなければならぬかもしれない。その時に一番必要となるのは、何が正しいのか、間違っているのか、判断する心なのじゃ。自分が本当に何者かを示すのは、血でも、家柄でも、持っている能力でもない。自分がどのように考え、どのような選択をするかという事なのじゃよ。きみは選択の末、自分が何者なのか、何が偽物で何が本物なのか、わかつた筈じゃ。イリス、違うかの？」

ダンブルドアの言葉は、イリスだけでなく、他の者達の心にも深く染み渡っていた。イリスは自分の周りに座る親友達を見渡した。——もしかしたら、これからもっと辛い事や苦しい事が待ち受けているのかもしれない。けれど、イリスには自分を支えてくれる友がいる。“自分は一人ぼっちではないのだ”。彼女はあれ程までに荒れ狂っていた心の嵐が静まり、代わりに青空が見えるのを感じていた。

「はい。でも、一人じゃ、できませんでした。みんなが……みんなが、助けてくれたから、私、ここに帰って来れました」

☆

みんなが和やかな雰囲気包まれかけた時、不意にドアが勢い良く

向こう側から開いた。余りに乱暴に開いたので、ドアが壁に当たって跳ね返って来た位だった。——ルシウス・マルフォイが怒りを剥き出しにして立っていた。イリスの心臓は縮み上がり、ハリーが顔を顰めて、彼女を傍に引き寄せる。ドラコが恐怖で引き攣った声を上げた。ルシウスの腕の下では、やせ細った屋敷しもべ妖精が、包帯でグルグル巻きになって縮こまっていた。

「こんばんは、ルシウス」ダンブルドアが穏やかに挨拶した。

ルシウスは挨拶を返す事無く、さっと部屋に入って来た。屋敷しもべ妖精が、その後ろからマントの裾の下に這いつくばるようにして、小走りに付いて来る。怒りにギラギラと燃え滾った目は、ダンブルドアを通り過ぎ、ハリー達四人に行き着いて、今度は動揺と驚愕の色に染まった。ドラコが居心地悪そうに身じろぎする。やがてルシウスは、何事も無かったかのように、冷たい視線を再びダンブルドアへと戻した。

「それで、お帰りになったわけだ。理事たちが停職処分にしたのに、まだ自分がホグワーツに相応しいとお考えのようですね」

「はて、さて、ルシウスよ」ダンブルドアは静かに微笑んでいる。

「今日、あなた以外の十一人の理事が、わしに連絡をくれた。まるでふくろうの土砂降りにあつたかのようにやった。ネーレウス・ゴーンの娘が連れ去られたと聞いて、理事たちがわしに、すぐ戻ってきてほしいと頼んできた。結局、この仕事に一番向いているのは、このわしだと思っただけだ。奇妙な話をみんなが聞かせてくれた。もともとわしを停職処分にしたくはなかったが、それに同意しなければ、家族を呪つてやるとあなたに脅された、と考えておる理事が何人かいるのじゃ」

ルシウスの顔はより一層蒼白になったが、その細い目はまだ怒り狂っていた。

「すると……あなたはもう襲撃をやめさせたとでも？」嘲るように言い放つ。

「ああ、やめさせた」ダンブルドアは微笑んだ。

「犯人は前回と同じ人物じゃよ。しかし、今回のヴォルデモート卿は、

他の者を使って行動した。この日記を利用してのう」

ルシウスは、見るも無残な有様となったリドルの日記を見た瞬間、一切の感情を拭い去り、能面のような顔つきへと変わった。灰色の双眼だけが静かに動き、恐怖にたじろぐイリスを絡め取る。何かを探るような視線は彼女の頭ら辺を通過して、徐々に降下し——やがて、その右腕に色濃く刻み付けられた“闇の印”に到達した。イリスはやっと視線の先に“何が”あるのかに気づいて、反射的に袖を下ろして印を隠そうとしたが、もう何もかもが遅かった。ルシウスの口の端が、今にも笑い出しそうな程に、ひくひくと震え始めていたからだ。一方の屋敷しもべ妖精は、一連の奇妙な動作を繰り返していた。大きな目で曰くありげにハリーの方をじっと見て、日記とルシウスを交互に指差し、それから拳で自分の頭をガンガンと殴りつけるのだ。

「なるほど・・・」ルシウスはやっとイリスの右腕から目を離し、言った。

「狡猾な計画じゃ」

ダンブルドアはルシウスの目を真っ直ぐに見つめ続けながら、抑揚を押さえた声で続けた。

「なぜなら、このハリーたちが」

ルシウスは鋭い視線を、ハリーとロン、最後に——自分の息子であるドラコへと突き刺した。

「日記を破壊できなければ、イリス・ゴントが全ての責めを負う事になったかもしれない。彼女が自分の意志で行動したのではないと、一体誰が証明できようか。何が起こったか、考えてみるがよい。彼女の父ネーレウス・ゴントが、愛する娘のために、その生涯をかけて築き上げた業績や信頼、ウィーズリー氏と共に制定した『マグル保護法』に、どのような影響を及ぼしたか。彼女がマグル出身の者を襲い、殺していることが明るみに出たらどうなったか。幸いなことに日記は発見され、リドルの記憶は日記から消し去られた。さもなければ、一体どういう結果になっていたか、想像もつかん・・・」

ルシウスは長い沈黙の後、静かに口を開いた。

「それは僥倖な」



イリスにとって、その言葉はまるで違った意味に聞こえた。ダンブルドアは穏やかな口調で、尚も言葉を続ける。

「ああ、それともう一つ。イリスの実家の周辺に、珍しくイギリスの観光客がいてのう。偶然観光中じやったわしの知り合いと、楽しくお茶会をしたそうじゃ。聞けば、彼らはあなたの——」

「帰るぞ、ドビー」

ルシウスはダンブルドアの言葉を遮り、鋭く言い放った。イリスは全身の血の気が引いていくのを感じた。『今度、私に対してこんな下らない抵抗を見せたら——ペットだけでは済まない。君の大好きなおば君を、君の目の前で戮り殺す』——あの時、ルシウスはイリスをそう脅し付けた。ルシウスさんは本当に、イオおばさんを——。ブルブルと震え始めたイリスの手を、こわばった表情のドラコが力強く包み込んだ。ルシウスはドアをグイとこじ開け、出ていく直前に、振り返らずに厳格な口調で言い放った。

「ドラコ、来なさい」

その発言に、四人は一斉に凍り付いた。ルシウスは去り、ドアが荒々しく閉じられる音だけが木霊する。これからドラコがルシウスにどんな仕打ちを受けるか、みんな何となく理解していた。

「マルフォイ、僕も一緒に行く」ハリーが立ち上がりながら、言った。「絶縁状、叩きつけてやれよ。僕んちの庭の隅っこ位だったら、住まわせてやってもいいぜ」ロンがそっぽを向きながら、呟いた。

「勘弁してくれ。君の家の敷地に爪先でも触れる位なら、路上でのたれ死んだ方がマシだ。虱がうつる」ドラコが嫌味たっぷりに言い放ち、立ち上がった。

イリスは矢も楯もたまらず立ち上がると、ドラコの腕に縋り付いた。胸がざわざわと騒ぐ。不安でたまらない。——もし、あれが本当なら“未来の光景”だったら？ドラコはイリスを見つめ、何も案ずる事はないと言わんばかりに微笑んで見せた。しかし、彼女はその優しい眼差しに、あの時の“命の灯が消えゆく目”が重なって見えた。強い眩暈がする。ドラコはイリスの手を離し、ドアの方へ進んでいく。

イリスは全ての決意を固め、杖を静かに引き抜いた。そしてその先

を、ドラコの背中へ向けた。

——思い出すんだ。あの時の、冷たくなっていくドラコの体を。彼を本当に失った時の喪失感、悲しみを。それをもう一度味わう位なら、私はどんな苦しみだつて受けて見せる。たとえば彼が、もう二度と私に微笑みかけてくれなくても。彼が元気に過ごしてくれるなら、生きていてくれるなら——私は、耐えられる。

「イリス？」

ハリーが怪訝そうに問いかける。ロンが息を飲んだ。異変を感じて振り返ったドラコが最後に見たのは、イリスの杖先から放たれる呪文の光線だった。

「——オブリビエイト、忘れよ」

イリスはドラコに忘却呪文を掛けた。驚愕に見開いたドラコの双眸は、光線を受けた瞬間に、自我を失っていく。——イリスは自分でも驚く程冷静に、そして速やかに行動した。ダンブルドアが杖を取り出すまでの僅か数秒の間に、彼の記憶の世界を覗き込み、「秘密の部屋」に関わる全ての記憶を忘却させ——自分と関わった全ての記憶を、限界まで薄め、希釈させたのだ。

もうドラコは、イリスを愛していた事を覚えていない。今の彼にとつて、イリスは“ただの知り合いだ”という認識しか残っていない。イリスが杖を下ろした後、ドラコは呆けたようにその場に突っ立っていた。しかし、ルシウスが再びドアの外から厳しい口調で声を掛けると、それに操られるように、彼はふらふらと部屋から去って行った。

——恐ろしい静寂が、部屋全体を包み込んでいた。誰もかれも、唇を固く引き結び、黙り込んでいた。やがてダンブルドアだけが、杖を下ろし、震える唇を開いて沈黙を破った。

「イリス、きみは」ダンブルドアが茫然とした口調で囁く。

「記憶を忘却させたのか。彼を、ルシウスから守るために」

イリスはポロリと涙を零し、何も言わずにこくりと頷いた。

☆

ルシウスは驚愕の余り、二の句を告げる事が出来ないでいた。ほん

の数秒の間に、息子の様子は明らかに変わってしまった。何度問い質しても、ドラコは何も——ここに立っていることすらどうしてだか——覚えていないと言いつ張るのだ。彼は思案を巡らせる。——唯一の証人であるドラコの記憶を、宿敵であるダンブルドアが消すとは思えない。ドラコ自身もそんな力はない。となれば、犯人は“一人しか”見当たらない。不意にドラコは首を傾げ、ルシウスに尋ねた。「父上、どうして笑っているのですか？」

ルシウスは、口元を静かに手で押さえた。犬歯を剥き出しにして笑っていた事に、指摘されるまで自分すら気が付かなかった。——彼の脳裏に、イリスの右腕に刻まれた“闇の印”が浮かぶ。ああ、彼女はこの短時間に正確に忘却術を扱えるまでに、成長したのだ。何と、何と素晴らしい——。彼の狂笑は、追いかけて来たハリーの策略に嵌まり、屋敷しもべ妖精のドビーを解放する羽目になるまで、治まらなかった。

☆

祝いの宴は夜通し続いた。大広間のテーブル中に所狭しとご馳走が並び、みんな大いに騒いで過ごしていた。イリスはグリフィンドールのテーブルに着いて、そわそわと落ち着かない様子で“待っていた”。——そう、もうすぐ復活したハーマイオニーが戻って来るのだ。一体どんな顔で、彼女を迎えたらいいんだろう。

「ハーマイオニー！」ロンが感極まって叫んだ。

イリスが思わず戸口を振り向くと、輝くばかりの笑顔を浮かべたハーマイオニーが立っている。イリスは彼女と目が合う前に、テーブルの上に素早く顔を伏せ、両腕でがっちりガードした。

「イリス？寝てる場合じゃないぜ、君の大好きなハー……モガガツ、何するんだよ、ハリー！」

ちよっかいを掛けようとしたロンが、ハリーに羽交い絞めにされ、その場を強制的に連れ去られていく。頑なに顔を上げようとしなないイリスの頭を、ふわりと優しい両手が包み込んだ。

「イリス。約束して」

とびつきり優しく大好きな声が耳元で囁かれる。イリスの目頭

が熱くなり、心臓がギュウツと震えた。——ハーマイオニーが、イリスを後ろからハグしている。

「もう二度と、私に隠し事はしないこと。どんなつまらない事も、大変な事もね」

「その約束、僕にもしてくれる？」ハリーが横から、悪戯っぽく付け加えた。

「・・・ウン」

イリスの返事は、涙で湿っていた。

☆

その夜、イリスはハリーと一緒に、談話室でソファアに沈み込み、休憩を取っていた。生徒達の大部分はまだ大広間で、宴会の続きをやっている。ロンとハーマイオニーは、大広間に夜食を取りに行くと言つて、出かけたばかりだ。

不意にパチンと大きな音がして、二人は飛び上がり、目を疑った。——そこには、屋敷しもべ妖精のドビーがいた。彼はハリーの尽力により、ルシウスから解放された筈だ。何故ここに来たのだろう。ドビーは、状況を今一つ理解できていないイリスを見た途端、ボロボロと大粒の涙を零しながらその足元に縋り付き、甲高い声で懺悔を始めた。

「ああ、ゴントお嬢様！どうかお許してください！ドビーめは、あなた様を・・・」お見捨ていたしました！ドビーめは、全てを知っていたのに！あなた様は、初めて出会ったドビーめに、自己紹介をしてくださろうとしていたような、優しい方でした！それなのに、ドビーめは・・・！（そう言つて、ドビーは激しく床に頭を打ち付け始めた）どうか、どうか、この薄情で意地汚いドビーめを、思う存分罰してください！」

イリスはハリーと一緒に、慌ててドビーの自傷行為を止めさせた。ドビーは頭をふらふら揺らしながらも、イリスを悲し気な眼差しでじっと見つめている。『罰してください』と懇願されても、ドビーのその酷く痛めつけられた体を見たイリスは、今更彼をどうにかしようという気にはなれなかった。それに、彼が彼なりに現状をどうにかしよ

うと努力してくれていた事は、ハリーから聞いていた。イリスは静かに銀色のリボンを解きながら、ドビーに尋ねた。

「ドビー。君はどんなところにも現れたり、消えたりできるの?」

「もちろんでございますー!」ドビーは激しく首を縦に何度も降った。

「そっか。じゃあ、一つだけ、私のお願いを聞いてくれる?」

☆

マルフォイ邸で、ナルシツサはサロン室で一人、浮かない表情で夜の一時を過ごしていた。——ナルシツサは本当の娘の様に、イリスを愛していた。愛する娘の平穏と無事を願うナルシツサとは対照的に、ルシウスは愛する娘の“本来の在るべき姿”に向け、邁進し続けた。二人の望む“娘の幸せ”は遠くかけ離れていた。その結果、ルシウスからイリスの近況を聞くたびに、ナルシツサはやつれ果てるばかりとなつてしまった。

「奥様」

ふと屋敷しもべ妖精に呼ばれ、ナルシツサは振り返った。——そこには、ルシウスに解雇された筈のドビーがいた。ドビーは呆気に取られるナルシツサの前で、花を一輪テーブルの上にそつと置いた。そして、ナルシツサが制止しようと声を上げるか上げないかのうちに、パチツと音を立てて消えた。ナルシツサは恐る恐る立ち上がり、テーブルへ近づく。

——それは、白いケシの花だった。彼女は息を飲み、立ち竦んだ。

——根元に、イリスにあげた銀色のリボンが結ばれていたからだ。

「イリス?」

ナルシツサは、震える声で囁きながら花に触れた。その瞬間、花弁がふるりと震え、蕾が綻び、そして——花が、イリスの声で話し始めた。

『ナルシツサさん。こんなことになつてしまつて、何を言ったらいいのか。今も、心の整理はついていません。でも、私はドラコを愛しています。これだけは、はつきりわかります。』

だから、彼を守りたいから、私との記憶をほとんど消しました。きつと彼は私のことを、もう二度と愛さないでしょう。

短い間だったけど、本当の両親のように接してくれて、とつても嬉しかった。ありがとう。さようなら』

イリスの言葉が終わると共に、ケシの花は萎れて跡形もなく消え去り、後にはリボンだけが残された。——ナルシッサはリボンを掴み、床に崩れ落ちて号泣した。イリスが、これほどまでに繊細で高度な魔法を扱えるという事が、彼女自身がもう今までの平凡な女の子ではなくなってしまうた事を物語っていたからだ。イリスのドラコに対する一途な思いは、ナルシッサの良心を強く責め立てた。

☆

そして日常が始まった。

イリスがまずしなければならなかった事は、「秘密の部屋」事件の犠牲者に対して謝意を示す事だった。イリスは真つ先にハグリッドの小屋へ向かい、ハグリッドに謝った。ハグリッドはイリスの話に辛抱強く耳を傾け、一区切りついた所で、首を傾げながらこう言った。「お前さんの話はよく分かった。けど、なんで“お前さんが”俺に謝らなきゃならねえ？」

「でも、でも」イリスは激しくしゃくり上げながら言った。

「私のせいで、ハグリッドはアズカバンに・・・」

「お前さんのせいじゃねえ」ハグリッドはキツパリ言い放った。

「あの人のせいだ。イリス、親戚とお前さんは、全く別の人間なんだ。一緒にたにしちゃならねえよ。それに、俺はとびきり頑丈だから、アズカバンに何年ぶち込まれたってヘツチャラだ」

ハグリッドは朗らかに笑い、イリスの頭を優しく撫でた。しかし、ハグリッドの両目の下には、くつきりと大きな隈が出来ている。——イリスは「ごめんなさい」を繰り返す代わりに、ハグリッドに抱き着いて、顔を埋めた。

☆

次に向かったのは、「ほとんど首無しニツク」のところだった。ニツクはイリスの話を真剣に聞いてくれた。半透明の手で首を撫で摩りながら、彼は感慨深げに言った。

「成程。それにしても、残念でなりません。何せ、貴方とマルフォイの

友情は、長年不仲が続いているグリフィンドールとスリザリンをまとめる架け橋になるのではないかと、「血みどろ男爵」と語り合っていたところでしたから」

「・・・ごめんなさい」

「いいえ、一番辛いのは貴方でしょうとも。私はご心配なく。ご覧の通り、無事、〃生き返りました〃から」

ニックの冗談に、イリスは不謹慎だとは思ったものの、思わず吹き出してしまった。ニックは首の襟を直しながら、穏やかにこう続けた。

「男爵にも、私から口添えをしておきましょう。ご安心なさい」

☆

ジャステインに真実を告げる事は、ハリーたちに断固反対され、出来なかった。

「君ってマジで律儀だよな」ロンが目を丸くして言った。

「やめておいた方がいい。騒ぎが大きくなるだけだろうし」ハリーが静かに言った。

「今はまだ、言う時じゃないと思うの。いつか言うべき時が来るまで、そっとしておいた方がいいわ」ハーマイオニーが優しくイリスの頭を撫でた。

☆

最後は、ミセス・ノリスだ。イリスは一人でファイルチの事務室に赴き、仏頂面をした管理人・ファイルチに迎え入れられた。薄汚い窓のない部屋で、低い天井に古びた石油ランプが一つ、ぶら下がっている。

《何しに来たの？》

ふと足元を見ると、ミセス・ノリスがファイルチとそっくりの仏頂面で、イリスを見上げていた。イリスは、ファイルチの机の後ろに飾られているピカピカの鎖や手錠を見ないように努力しながら、ミセス・ノリスに一部始終を語り、誠心誠意謝った。ミセス・ノリスのまんまるい瞳が限界まで見開かれ、立ち竦むイリスを映し出す。

《もしかして、貴方、私に謝りに来ただけ？》

「・・・うん」

《それだけのために、ここに？》

「う……うん」

《……あつはははは！》

ミセス・ノリスは、ころころと鈴を転がすような軽やかな声で笑い始めた。フィルチが狼狽し「お、お前……」と諫めようとするが、彼女の笑いは止まらない。

《あ、貴方だったら……フフツ、本当に変わってるわね。猫に謝りに来るだなんて、最高だわ》

ミセス・ノリスは呆気にとられた様子のイリスを見つめ、上機嫌な声で「あなた」と呼んだ。

《ねえ、ミルクを出して。横丁で良いのが入ったのよ。三人で乾杯しましょ。私たちの友情を祝って》

フィルチは渋々と言った調子で保管庫からミルクの瓶を取り出し、三つのグラスに注ぐ羽目になった。何が何だかわからない状態のイリスを加え、ミセス・ノリスとフィルチとの、三人の友情の盃は掲げられたのである。

☆

フィルチの事務室からの帰り道、イリスは廊下の先に見知った姿を見つけ、歩みを止めた。——スネイプ先生だ。彼は自身の研究室へイリスを誘った。——イリスは不思議と怖くなかった。おぼろげにしか覚えていない事もあるけれど、それでもスネイプは何度も何度も、ダンブルドアと共に、リドルに支配されたイリスを助けようとしてくれていたからだ。

部屋のテーブルには、小さなゴブレットが一つ置かれている切りだった。イリスはスネイプに促され、彼の向かい側に腰掛けた。

「まず、君の忘却術は間違いなく成功している、と言っておこう。安心したまえ」

イリスは曖昧に頷いた。喜ぶべき事なのだろう。しかし、イリスはその言葉が鋭く尖ったナイフのように、自分の心を深く傷つけていくのを感じていた。俯いたイリスを油断なく見つめながら、スネイプは言葉を続ける。



「ドラコ・マルフォイを守護する」というのが目的ならば、今回の君の判断は正しかった。しかし、あくまでそれは、君が耐えられればの話だ」

スネイプの言葉の意図が掴めず、イリスは思わず彼を仰ぎ見た。スネイプは今までにない位、真剣な表情で、イリスを見ている。

「——君は、耐えられるのか？愛する者が、目の前で自分ではない者を愛し、親し気にその名を呼び、反対に自分を冷たく拒絶する事を。」

ルシウス・マルフォイは君を、復活した帝王に対する“強力な免罪符”だと考えているようだ。彼は君を掌握するためなら、いずれは息子すらも利用するだろう。——少しでも耐えられぬという気持ちがあるのなら、今からでも遅くない。“君の記憶も消すべきだ”

イリスはスネイプの言葉に打ちのめされ、茫然となつて、暫くの間動く事が出来なかつた。スネイプはイリスの様子を気にも留めず、テーブルの上に置かれたゴブレットを押し遣つた。

「二息に飲み干せ。そうすれば、君はドラコ・マルフォイに関する記憶を忘れる事が出来る」

イリスは、随分と長い間、ゴブレットに視線を注いでいた。ランプの光を反射して揺らめく水面に、かつてドラコと過ごした素晴らしく輝かしい思い出が、煌めいては消えていく。——イリスは目を瞑つて、深呼吸した。スネイプ先生の言う通りだ。自分はこれから、胸が張り裂けるような辛い日々を送る事になるかもしれない。ドラコがもし、パンジーと付き合ってしまったら——。

やがてイリスは目を開いた。薬は、イリスを誘うように優しく揺れている。

イリスは片手をゆっくりと持ち上げ、ゴブレットを元の場所に戻した。

「これはいいりません」

「どうしてかね？」

スネイプが眉根を寄せ、尋ねる。イリスは瞳にいったい涙を湛えて、静かに、だがはつきりとこう言った。

「彼を愛しているから」。どんなに辛くとも、彼を愛した記憶を忘

れたくない。——それに、私が忘れたら、彼を守れなくなってしまう  
ます」

今度は、スネイプがイリスの言葉に打ちのめされる番だった。彼は  
大きく目を見張り、イリスをじっと見つめた。——まるでイリスの瞳  
の中から、何かを見出しているかのように。

「・・・そうだな」

暫くの沈黙の後、スネイプが出した声は、自分でも驚く程、穏やか  
なものであった。——イリスが去った後、スネイプは思案を巡らせた。  
彼女の言った事は、所詮若さ故の“きれいごと”だ。今に、彼女は自  
分の選択に苦しめられる事になるだろう。スネイプは彼女が何を  
言ったとしても、薬を飲むのを拒んだとしても、最終的には忘却術を  
掛けるつもりだった。

——だが、できなかつた。スネイプはいつしか、イリスに自分を重  
ねていた。スネイプはゴブレットを静かに見つめた後、杖を振って消  
した。

☆

時を同じくして、スリザリン寮の談話室では、ドラコがパンジー達  
とお喋りに興じていた。

「僕が「秘密の部屋」に行つてただって？馬鹿な事を言わないでくれ、  
ノット。それよりも、嬉しいニユースがある。父上がついに”ゴー  
トと友達付き合いをするな”と言ってくれたんだ。全く、父上も人が  
良すぎるよ。あんな”血の裏切り”と縁を切れて、僕は正々したね」  
「その通りよ、ドラコ」パンジーが嬉しそうに叫ぶ。

ドラコは不意に、心臓がギュウツと強く握りつぶされたような痛み  
を感じた。それと同時に、視界の端を金色の光がスツと掠めていく。  
——スニツチか？反射的に振り返るが、どこにもそれらしきものは見  
当たらない。何かの見間違いだったのだろうか。ドラコは首を傾げ  
た。

「泣いてるの？」

パンジーに心配そうに尋ねられて初めて、ドラコは“自分が泣いて  
いる事”に気づいた。——理由など分からない。けれど、胸にポツカ

リと大穴を開けられたように無性に苦しくて、息が出来なくて、ドラコは呆気にとられた寮生達が見守る中、暫く咽び泣き続ける事しか出来なかった。

☆

イリスは、スニジェットから元の姿へ戻り、スリザリン寮前の廊下をとぼとぼと歩いていった。——スネイプ先生の言う通り、ドラコは完全にイリスを愛していた事を忘れていたようだ。“これで良かったんだ”。イリスは何度も自分にそう言い聞かせながら、グリフィンドール塔への帰路を辿る。

「君のやったことは偽善だぞ、イリス」

不意に冷たい声が投げかけられ、イリスは声のした方を向き、唇を引き結んだ。——ノットが不敵な笑みを浮かべ、通路の壁に寄りかかって、イリスを見つめている。

「君はただ、自分の首を精一杯絞めているだけだ」嘲るような口調だった。

「何を言ってるの？」

「君はあの時、マルフォイ氏に従うべきだった”。そうすれば君は、今でもマルフォイと仲睦まじくくれた筈だ」

イリスは全身の血の気が引いていくのが感じられた。——何故、ノットが「秘密の部屋」に関する事実を知っているんだ？茫然と立ち竦むイリスを気にもせず、ノットは言葉を続けた。

「イリス。僕の父は”死喰い人”だ。父は、かつて君の祖母に師事していた。君の存在を知った父は、君に仕えろと僕に命じた」

「そんなの私に関係ない！」イリスは叫んだ。

「まだそんな戯言を言っているのか？」

ノットは嘲笑し、去り行くイリスの背中に、残酷な言葉を投げつけた。

「”闇の帝王”は全てをご存じだ。僕たちは、血の宿命からは逃れられない。君の選択肢は二つしかない」と、警告した筈だよ」

☆

夏学期の残りの日々は、焼けるような太陽で、朦朧としているうち

に過ぎた。ホグワーツは正常に戻ったが、いくつか小さな変化があった。「闇の魔術に対する防衛術」のクラスは、ロックハート先生の一人上の都合により、急遽キャンセルになった（ハーマイオニーは不満をブツブツ言ったが、ロンが「だけどこれに関しては、僕たち随分と実技をやったじゃないか」と慰めた）。ルシウス・マルフォイは理事を辞めさせられた。フィルチとミセス・ノリスは、グリフィンドールの“ある生徒”にだけ、露骨な依怙鼻屑をするようになった。

あまりにも早く時が過ぎ、もうホグワーツ特急に乗って家に帰る時が来た。イリスはトランクに荷物を詰めている時、ふとベッドの下に視線をやり、息を飲んだ。——かつて、リドルに与えられた“空飛ぶ絨毯”が、クルリと丸められて転がっている。イリスは、絨毯を今すぐダンブルドアに提出するべきだと思った。

——けれど同時に、リドルと共に大空を思う存分飛び回った、素晴らしい思い出がよぎり、イリスの胸はズキンと痛んだ。“利用されていただけだ”——そうなのかもしれない。しかし、リドルの助けがあったからこそ、イリスは学ぶ喜びや、空を飛ぶ楽しさを知り、凄まじい成長を遂げる事が出来たのだ。リドルは豹変するまでは、とても良い教師だった。

イリスはリドルを嫌い、憎み切る事など出来なかった。イリスの瞳から、一粒の涙が零れ落ちて、ポツンと絨毯に小さな染みを作る。イリスは黙って絨毯をトランクに仕舞い込んだ。

☆

イリス達は、汽車内のコンパートメントを一つ独占した。夏休みに入る前に、魔法を使う事を許された最後の数時間を、みんなで十分に楽しんだ。「爆発スナップ」をしたり、フレッドとジョージが持っている最後の「花火」に火をつけたり、互いに魔法で武器を取り上げる練習をしたりした。

ホグワーツ特急は速度を落とし、とうとう停車した。キングズ・クロス駅で、ハリーは羽根ペンと羊皮紙の切れ端を取り出し、三人の方を向いて言った。

「これ、電話番号っていうんだ」

電話番号を三回走り書きし、三つに裂いてそれぞれに渡しながら、ハリーがロンに説明していた。

「君のパパに去年の夏休みに、電話の使い方をお教えたから、大丈夫だと思う。ダーズリーのところに電話をくれよ。あと二カ月もダドリーしか話す相手がないなんて、僕、耐えられない……」

「電話するよ、ハリー」

イリスが言うと、ハリーは嬉しそうに微笑んだ。四人はそれぞれお別れを言うと、お互いの家族の元へ歩みを進めていく。イリスも、人込みの中にイオの姿を探して、歩き出そうとした。しかし、誰かがその手をガツと強く掴んだ。

「——これで終わったと思うのかい？」

イリスは目と耳を疑った。——リドルの声だ。“目の前にリドルがいる”。スリザリン生の制服に身を包み、ルビーのように輝く双眸を煌めかせ、嗤っている。——信じられない。彼は消えた筈だ。イリスは恐怖で頭が真っ白になり、掴まれた手を振り解く事が出来なかった。周囲の雑音が急速に遠のいていく——視界がグニャグニャと歪んでいく——どうして——

「イリス、どうしたの？」

イリスはふと我に返り、目を何度も瞬かせた。——目の前にハリーがいて、彼がイリスの腕を掴み、心配そうに彼女を覗き込んでいる。

「……何でもないよ、ゴメン」

慌ててイリスは、ハリーに謝った。——どうかしてる。“ハリーとリドルを見間違えるなんて”。

☆

ドラコは、無事マルフォイ邸へ帰還した。小奇麗に整えられた庭には、少し季節遅れのスターチスの花が咲き乱れ、良い芳香を周囲に漂わせていた。早々と荷物を片付け終えたドラコはサロン室へ向かい、テーブルに置かれた菓子を摘みながら、寛いでいた。

——ふとテーブルの隅に、キラリと煌めくものを見つけ、ドラコは立ち上がった。近寄って拾い上げると、それは銀色のリボンだった。日の光を反射して、優しく輝いている。

「きれいだ」

ドラコは思わず微笑んだ。彼は迷う事無く——何故、自分がそんな行動に出たのか、疑問に思う事すらなく——リボンを自分の手首に、ブレスレットのように巻き付けた。

その瞬間、ドラコは途方もない安堵感と幸福感が、全身を包み込むのを感じていた。初めて見るものなのに、ずっとずっと長い間、これを探し続けていたような気さえする。彼はリボンを見つめるうちに、気が抜けて、眠くなった。そして彼は、束の間の眠りに落ちた。

## アズカバンの囚人編

### Act 1. 不思議な電話

イリスは、九と四分の三番線のホームから魔法の柵を通り抜けた途端、誰かに息が止まるほど強く抱き締められた。

「イリス！」

——イオおばさんだった。今のイリスにとってその声は、世界で一番安心出来るものだった。イオはイリスの肩を掴んで少し体を離すと、涙を一杯に湛えた瞳で、愛する姪を心配そうに見つめ、苦痛に喘いだ。まるでイリスを“秘密の部屋”に送り込んだのは自分だ、と思っているかのように。

「どこも怪我は？ ああ、わたしが不用心だった！ わたしのせいだ、わたしのせいでお前が——！」

「落ち着きなさい、イオ」

取り乱した様子 of イオの後方から、穏やかな声があった。イリスが顔を上げると、くたびれたローブを羽織った細身の魔法使い——ロンのパパ、アーサー・ウィーズリー氏だ——が、イオを宥めるように、その肩へ手を置いている。それから彼はイリスに目をやり、朗らかに微笑んだ。

「やあ、イリス。 また会ったね」

しかしイリスはイオにしがみ付いたまま、返事も笑顔も返す事が出来なかった。

——それには理由がある。アーサーは、今のところイリスに対して好意的な態度を取ってくれている。だがそれは、“ルシウス・マルフォイもそうだった”からだ。

アーサーさんだって、もしかしたらルシウスさんみたい——イリスの脳内で、自分に乱暴を働くルシウスの姿がフラッシュバックし、彼女は唇を固く引き結んだ——もう、あんな目に遭うのは嫌だ。“秘密の部屋”事件の経験を通して、イリスは『余り面識がないのに愛想の良い大人は、用心すべき対象だ』という事も学んでいた。

イオはそんなイリスの頭を労し気に撫でると、振り返ってアーサーを見ながら語り掛けた。

「イリス。アーサーは大丈夫だ。彼が、あいつの手先からわたしを助けてくれたんだよ」

イリスは、あの時のダンブルドアの言葉を思い起こした。——つまり、アーサーが「偶然観光中だった知り合い」だったのだ。『彼がイオおばさんを助けてくれた。彼は味方なんだ』。イリスは心の中で何度も自分にそう言い聞かせ、おずおずとアーサーを見上げて、謝罪の言葉を口にした。しかし彼は、ゆつくりと首を横に振り、こう言った。「いや、いや・・・私を警戒するのは、当然の事だ。謝りたいのは私の方だよ、イリス。君が連れ去られたと聞いた時、何とかして君を……あー、”彼”から離そうと努力したのだが……」

アーサーはそこで言葉を区切り、悔しそうに歯噛みした。ルシウスの事を“彼”と濁したのは、イリスに気を遣ったためだろうという事は、誰でも容易に推測出来た。イリスはじつと、縋るようにアーサーの瞳を見つめた。——そこには、かつてイリスが恐怖を抱いたルシウスのような鋭利さはなく、素朴な暖かみだけがあった。

イリスはやつとアーサーを信じる事が出来た。彼は「駅の出口まで一緒に歩こう」とイリスに持ち掛け、前方で待っているイオやモリー夫人、子供たちに、先に行っているよう伝えた。ロンだけは、心配と好奇心を剥き出しにした目で二人を見ていたが、やがてモリー夫人に呼ばれ、彼女の傍へと駆けて行った。アーサーはイリスを促して、人込みを掻き分けながらゆつくりと歩き出す。イリスは、燃えるような赤毛の人々に囲まれるようにして歩くイオの後姿を見ながら、ぼんやりと歩いた。

「イリス。おばさんの事は心配ご無用だよ。我々が目を光らせているし、何よりおばさん自身も強い。正直なところ、私の手助けすら、いらなかったくらいだからね」

その目線の先を見透かしたように、アーサーがおもむろに口を開いた。イリスが驚いて見上げると、彼は疲れた顔に少し悪戯っぽい笑みを浮かべている。——フレッドとジョージにそっくりだ、とイリスは



思った。アーサーは、両手で空中を殴るようなジェスチャーをしながら、おどけた調子で言葉を続ける。

「ボツコボコだったよ。．．ああ、悪者の方が、だがね。危険だから家に隠れているよう指示したのに、まさか魔法をかけられる前に杖を奪い取るとは驚きだった。それからマウントを取って、タコ殴りだよ。もう一人に失神呪文をかけた後、私が止めに入らなければ．．．（アーサーはそこでブルツと震えた）全く、君のおばさんの勇猛っぷりは、モリーと良い勝負．．．」

「何ですって、あなた？」たちまち前方から鋭い声が飛んできて、アーサーは縮こまった。

「な、何でもないよ、愛するモリーや」

アーサーは慌てて答えた後、モリー夫人の注意が自分から逸れた瞬間、イリスに「地獄耳だ」といかにも恐ろし気に囁いたので、イリスは思わずプツと吹き出してしまった。彼女がやつと子供らしく笑ったのを見ると、アーサーは少し安堵したように溜息を零した。

「ダンブルドアから、今回の事を聞いたよ。——辛い決断だったろう。本当はずっと君と話してみたかったんだが、なかなか機会がなくてね。」

何が正しいのか、誰を信じてよいのか、分からない中で．．．君はまさしく“正しい道”を選び取った。本当に良く頑張った。君のご両親もきつと、君の事を誇りに思っているだろう」

“正しい道”。その言葉が、彼女の心に、不意にズシツと重く押し掛かる。ダンブルドア先生に言われた時は、何とも不安に思わなかった。——けれど、マグル界へ戻り、頼りになる大人や友人達とも離れて一人きりになった今、それはイリスを勇気づける言葉から、重圧を与える言葉へと変貌してしまった。イリスは戸惑いながら言葉を探し、静かに口を開く。

「アーサーさん。．．あの人が言ったんです。私も、私のお父さんも、本当は彼の“従者”になるのが正しい事なんだって。私のお父さんはそうならなかったから、裏切り者だって。」

でもダンブルドア先生は、何が正しいのかは、人じゃなくて自分が

決める事だつて仰いました」

イリスは唇を舐め、一瞬言い淀んだ。ダンブルドアがイリスに対して求めているものは、たつた十二歳の平凡な女の子が完全に理解するには、まだまだ複雑で、大きすぎるものだった。

「あの時は、ハリー達が助けてくれました。私がここにいるのは、みんなのおかげなんです。私一人じゃ、絶対できませんでした。

でも、もしこれから先、今度は誰の助けもなく、私一人だけで、何が正しいかを決めないといけない時が来たとしたら？そう思うと、私・・・間違わないでいられるか、とつても自信がないんです」

アーサーはイリスの言葉の意図を理解すると、歩みを止めた。イリスも思わず立ち止まり、じっとアーサーを見上げる。

「イリス。誰しもが人生において、正しい事と間違っている事の間で迷いながら、歩んでいくものだ。

だが、君なら絶対に大丈夫だ。案ずる事は何もないんだよ。迷いそうになった時は、自分の胸に手を当てて、心に聞いてごらん。そして君の心の声に、素直に従いなさい。それはきつと”正しい事”だ”  
「どうして”正しい”ってわかるんですか？」

イリスは尋ねずにはいられなかった。すると、アーサーはこれ以上ない位に優しい目をして、彼女を頭を撫で、微笑んだ。

「君がこうして、元気に生きているからだよ」

二人はまた歩み始めた。出口付近のロータリーで、イオが古ぼけたタクシーのトランクに、イリスの荷物をせつせと詰め込んでいる。アーサーはポケットから小さな茶色い包みを取り出すと、イリスに手渡した。促されて開けてみるとそれは――手のひらに乗る位の、小さなカセットレコーダーだった。

「ネーレウスから君へのプレゼントだ。本当は去年の夏に、君が遊びに来てくれた時、渡したかったんだが、諸事情で出来なくてね。元は彼の愛用品だった。私との力作だよ。ホグワーツでも壊れないし、“池電”要らずだ。おまけに“フォーンイヤール”付き」

イリスは驚いて、それをまじまじと見つめた。お父さんが、こんな何の変哲もないカセットレコーダーが好きだったなんて。アーサー

は嬉しそうに頬を綻ばせ、手を伸ばして、再生ボタンを押し込んだ。途端にスピーカーから、陽気で軽快な音楽が流れ始める。

「私と君のお父さんの友情は、これから始まったんだよ。中のテープには、彼が好んだ音楽が——恐らく、君の一生分じゃないかな——入っている。」

元々マグルには無関心だった彼と、ちよつとした用事のついでに、たまたま話す機会があつて……その時、私がこの——当時手に入つたばかりだった貴重な——レコーダーでマグル界の音楽を聴かせると、無類の音楽好きだった彼は、たちまち夢中になった。『マグルもこんな素晴らしい曲を作れるのか!』つてね。

——イリス。君のお父さんも、君と同じように、時に迷いながら“正しい道”を立派に歩み切つた。でもそれには適度な休憩も必要だ。きつと彼にとつて、これはそういったものだったのだろう」

☆

次の日、二人は無事に日本へ帰国した。イリスは車のフロントガラスから、徐々に近づいて来る出雲神社を見た途端、息を飲んだ。——遠目でも分かる位にはつきりと、鎮守の社である豊かな森林から、淡い光を放つ粒子が空に向かって立ち昇り、神社全体をシャボン玉のように覆っていたからだ。前にはこんなものは無かつた筈だ。イリスの様子に気づいたのか、イオが何でもないような口調で、ハンドルを捌きながら言った。

「ああ、あれか。結界だよ。まあ用心を兼ねてね。心配すんな、マグルには見えないよ」

やがて二人は実家へ帰り着いた。結界の薄い膜は、通り抜けると水で出来たカーテンのように冷たくて、とても心地良く感じられた。——しかし、イリスはそれを喜ぶ事など出来そうになかつた。たった一年で、慣れ親しんだ出雲神社が、跡形もなく変わり果ててしまったよ。うな気がしたのだ。他ならぬ、自分自身のせいだ。イリスは黙って、服の上から右腕を掴んだ。そして二人は、今までと同じように鳥居をくぐり、手水舎で手を清め、拝殿へ赴き、一年の無事と力を与えてくれた事を神様に感謝した。

☆

荷物を整理した後、イリスはこの一年の出来事を、ぼつりぼつりとイオに話し始めた。イオは辛抱強く耳を傾け、イリスが途中で言葉を詰まらせたり、泣きじやくつたりすると、決まって何も言わずにギュウツと強く——愛する姪が落ち着くまでの間——抱き締めるのだった。

何とか全てを話し終えたイリスは、カセットレコーダーで音楽を聴く事の他は何もせず、最初の数日間を過ごした。——ホグワーツでは、連日の忙しさに追われたり、友人達に囲まれていたために、考えないでいられた事が、今更になって重く押し掛かる。——“秘密の部屋”事件、リドルの事、ドラコの事……そして、ダンブルドアやアサーの言葉の意味を、イリスは何度も考えた。レコーダーが奏でる音楽は、そんな彼女の鬱屈した感情を癒し、和らげるのに役立った。イリスは気になってレコーダーを色々調べてみたけれど、至って何の変哲もないもので——唯一変わっている事といえば——『本当に一生分入ってるんじゃないか』と疑ってしまう位、テープが回り続ける事と、そのテープをどう頑張っても取り出せない事くらいだった。

ある日のお昼時の事、イリスはダイニングテーブルの椅子に腰掛け、傍らに置いたレコーダーから音楽をぼんやりと聴き流していた。イオはキツチンで、イリスの大好きな海鮮チャーハンを作っている。その時、不意に家の黒電話が鳴り始めた。我に返ったイリスは慌てて立ち上がり、受話器を取って耳に押し当てた。

「はい、出雲です」

「もし!!もし!!聞こえ!!ますか?!」

受話器から聞こえたのは、紛う事無きロン・ウィーズリーの大絶叫だった。イリスはびっくりしてたまらず跳び上がり、受話器を耳から三十センチも離して持つ羽目になった。

「僕!!イリス!!ゴーストと!!話したいのですけど!!」

どうやらロンは、電話をする時の声量について盛大な勘違いをしているようだった。イリスは、ロンが受話器の向こうで息を整えている

うちに、素早く受話器に口を寄せる。

「ロン。イリスだよ。あのね、ちよつと声が・・・」

「イリス?!?!元気がいい?!」

しかしイリスが『大きすぎる』と指摘する前に、ロンの息は再び整ってしまった。イリスは、受話器から放たれる声の暴力に目を白黒させながら、尚も頑張つて食い下がった。

「ロン、あのさ、声が大きいよ」

「なに?!?!なんか言った?!?!」

「あのさ!!」

もうイリスも絶叫するしかなかった。——まるでサッカー場のスタンドの端と端に立って会話をしているような、二人の滑稽な様子を目の当たりにしたイオは、昼ご飯を作る手を一時中断し、涙を流して大笑いしていた。

「そんなに!!大声で!!話さなくてもいいよ!!普通の声で!!いいんだよ!!」

「だって!!そうしたら!!君の声が!!聴こえなくなるだろ!!」

「それは!!ロンが!!受話器から!!耳を!!離してるからだよ!!」

「ハア、ハア・・・(今や二人共、叫び過ぎて声が枯れ、息も大分上がった)・・・え、そうなの?」

すつたもんだの挙句、ロンはやつと電話の正しい使い方をマスターした。通常のボリュウムに戻ったロンから、『さっきの調子で、一足先にハリーの実家に電話し、保護者のマグルにガチャ切りされた事件』を聞くと、イリスは思わず——ロンではなくハリーに——同情せざるを得なかった。ハリーの親戚は、根っからの魔法界嫌い——つまり常識人だと聞いていたからだ。約束した手前、ハリーには申し訳ないけれど、もう彼の実家に電話するのはやめておいた方が良いだろう。イリスは溜息を零しながら、ロンに言った。

「そんな大声で話したから、ハリーのおじさんがびっくりしたんだと思うよ」

「やつちまったなー。マグルがハリーに酷い事しないといいんだけど。ハーマイオニーにも気を付けるように、知らせとかなきゃ」

ロンの声はしよげ返っていた。深く反省しているようだ。——イリスは彼を励ますために、今度は明るい口調で話しかけた。どんな形であれ（※鼓膜が破れるかと思う程の絶叫であれ）、ロンが自分に電話をしてきてくれたことが、単純に嬉しかったのだ。

「でも、ロンが電話くれて、嬉しいな。どうして、うちの番号を知っていたの？」

「僕も君の声が聴けて嬉しいよ。でもなんか、変な感じだな。僕は手紙の方が性に合ってるみたいだ。——ああ、パパが君のおばさんから聞いたんだって」

イリスが暫くの間、仲睦まじく魔法界の友人とお喋りしている様子を、イオはじっと見守っていた。

☆

——イリスは、夢を見ていた。満点の星空が見下ろす、果てのない草原に、イリスは一人で立っている。そして、そこからそう遠くはない距離に、大きな塔が建っていた。その天辺はあまりに高く、星空の中に溶け込んでいるのかと思うほどだ。イリスは柔らかな草を踏みしめ、塔に向かって歩き出した。すると、塔のある方向から——ほんの微かにではあるが——美しい女性の歌声が聴こえてきた。

やがて、イリスは塔の近くへと辿り着いた。古びた石造りのその建物は、空に向かって真っすぐにそびえ立ち、繁茂した茨が、鉄条網のように塔全体に絡み合っている。歌声は、間違いなく塔の天辺から聴こえていた。

イリスは——自分でも不思議な位に強く——塔の上に行かなければならない、と思った。『歌声の主に会わなければならぬ』。それは自分にとって、鳥が空を飛び、獣が大地を駆けるのと同じように、至極当然の事なのだと感じた。塔の根元には扉があり、それを開けると、中には果てのない螺旋階段があった。イリスは歌声に誘われるように、ふらふらと階段を登り始め、やがて——気が遠くなって——目が覚めた。

☆

イリスは瞼を擦りながら、枕元に置いた懐中時計を見た。朝の五時

だ。まだ太陽は昇っておらず、部屋の中はしんとした静寂と闇に包まれている。

その時、窓のカーテンを透かして、キラキラと七色の光が舞い躍った。イリスは驚いてベッドから勢い良く起き出した。そしてカーテンをこわごわと捲つて、外の様子を伺い見るために目を凝らし、息を飲んだ。

——巫女の衣装に身を包んだイオが、手桶から“何か”を柄杓で汲んでは、結界に向けて撒いている。しかもよく見ると、その“何か”は水ではなく、虹色に輝く“液状の光”だった。イオから光を掛けるたびに、結界の輝きは増し、層はより厚くなっていく。

好奇心をくすぐられたイリスは、自分の部屋を出て、玄関を通り抜け、イオの近くまで一目散に駆けて行つた。

「起きたのか」

イオは振り返り、イリスを見て微笑んだ。イリスは彼女の持つ手桶の中を見て、思わず感嘆の声を漏らした。——まるでダイヤモンドを砕き入れたかのように、美しい輝きを放つ光が、チャプチャプと波打っている。

「これ、何？とつてもきれいな」

「“慈雨”というんだ。出雲家、そして虹蛇様の魔法力を、形にしたものなんだよ。さあ、来てごらん」

イオは、イリスを本殿のそのまた奥にある、小さな庭まで導いた。——そこには、古びた井戸があった。促されてそつと覗いてみると、キラキラと——さつきの“慈雨”と同じ——虹色の輝きが、奥の方で静かに揺れている。

「“慈雨”は、出雲家の当主がスクイブだった時に使われる。まあ、要するに“お助けグッズ”さ。これは、虹蛇様が時々降らしてくれるだけじゃなくて、代々の出雲家の魔法使い達も、不出来な未来の子孫たちのために、この中に溜めておいてくれるんだ。わたしの祖父母やエルサも、例に習って、大分多めに溜めてくれたんだよ。

これがあるから、私はお前にお守りを作ったり、結界を張ったりできると。お前も、もし魔法が有り余ってるなんて事があつたら、

ちよいと一口分くらい、降らしてくれたって構わない」

やがて日が昇り、辺りを見る間に、美しいオレンジ色に染めていく。二人は再び境内に出て、特に会話をする事もなく、世界が徐々に朝へ変わっていく様子を眺めていた。

「イリス。ホグワーツをやめるか？」

イオの突然の発言に、イリスはびっくりして、思わず彼女を見上げた。どうしておばさんは、そんな事を言ったんだろう。ホグワーツをやめるだなんて……。しかし、イオはただ静かに微笑み、イリスを見つめ返しながら、尚も言葉を続けた。

「お前が辛いなら、やめたっていい。ネーレウスとエルサは『ホグワーツへ行く事がお前のためだ』と言ったが……。お前がもう行きたくないっていうなら、全部捨てる。」

虹蛇様も『お前を守るために力を貸す』と言ってくれた。お前を十分守って養っていける位の力を、わたしは持つてる」

イオは、立ち竦むイリスをギュツと抱き締めた。まるで世界の全てから、彼女を守ろうとするかのように。

「あまり一人で考え込むな。お前が思う道を進んだらいい。迷ってもいい。道を踏み外しちまってもいい。立ち止まってもいいんだ。」

お前がどんな道を歩もうとも、どんな姿になろうとも……。わたしはお前の味方だ。わたしが全部、受け止めるよ」

——イリスがずっと溜め込んでいた、言葉に出来ない苦しみ、不安や迷いを、イオは最初からちゃんと分かっていた。子供の全てを受け入れる親だからこそ、作り出せる“無償の愛”が、イリスの心に慈雨のように染み渡っていく。彼女の心は大きく震え、体が燃えるように熱くなり——気が付くとイリスは、イオに縋り付き、生まれたばかりの赤子のように泣きじゃくっていた。イオは何も言わずに、イリスをしつかりと受け止めた。

固く抱き合う二人を癒し守るかのように、不意に空から、細やかな粒子の雨が降り注いでいく。イオは嬉しそうに目を細め、イリスに話しかけた。

「朝雨だ、虹蛇様の“慈雨”だよ。きつとすぐに晴れる」



イオの言う通り、雨はすぐに晴れ、空には美しい虹が掛かった。イリスはイオに甘えながら、何となく思った。——きつと今頃、井戸の中は“慈雨”で満たされているのだろうと。

☆

イリスは、夏休みの残りの日々を、ロンやハーマイオニーと手紙のやり取りをし（とは言っても、日本—イギリス間のため、そう頻繁には出来ないが）、それぞれの旅行先での話を楽しんだり、ハリーの誕生日プレゼントを——ちょうど七月三一日午前零時ピッタリに届けられるように——サクラやウメと綿密なスケジュールを立てたり、イオとちよつとした旅行に出掛けたりして、元気に過ごした。そして後半はやはり、宿題に追われて過ごした。

夏休みの終わりに差し掛かった頃、イリスが居間で「魔法史」の教科書と睨めっこしながら、宿題のレポートを必死に書き進めていると、急に黒電話がジリジリと鳴り始めた。イオは夕飯の買い出しに出かけていて、今は不在だ。イリスは羽根ペンをインク壺に戻し、立ち上がると、受話器を取った。

「はい、出雲です」

しかし、相手からの返答はない。受話器の向こうで、相手のものらしき息遣いが、微かに漏れ聴こえてくるものの、それ以外は『ザー』という雑音が続くだけだ。——それはいわゆる、無言電話というやつだった。

訝しむイリスは、やがてピンと来た。イリスの実家の電話番号を知っている魔法界の人間は、ロンとアーサー氏だけだ。二人はこんな悪趣味ないたずらはしない。となれば恐らく、あの赤毛の双子辺りが番号を盗み出し、今現在いたずらにしているのだろう。受話器を握りながら、フレッドとジョージが声を押し殺し、必死に笑いを堪えている様子が思い浮かび、イリスはムカツとして頬を膨らませた。

「もうフレッド？ジョージ？」

「——イリス」

しかし次の瞬間、その予想は大きく裏切られ、彼女は口を噤んでしまう事となる。——受話器から聴こえたのは、『彼女が全く知らない

男の声』だった。男は一瞬の沈黙の後、恐怖のあまり呂律の回らなくなつた口調で、イリスに喚き立て始めた。

「ああ、イリス！——私は裏切られた、見捨てられた！——私は君を、ずっと見守っていたのに——あいつに殺される、私を見ている——ああ、なんて恐ろしい！怖い！」

「あ、あなたは誰？大丈夫ですか？」

何が原因かは不明だが、とにかく男は強烈な不安と恐怖に駆られて、一時的なパニック状態に陥っている様子だった。イリスが心配して懸命に声を掛けても、それに答える余裕すら無いようだ。やがて男は、ふと我に返つたかのように言葉を止め、不規則になつた呼吸を辛うじて整えようと努力しながら、イリスに語り掛けた。

「イリス、聞いてくれ！私は……」

——その時、受話器の向こうでバタバタと階段を駆け下りるような忙しない物音がして、男が息を飲む声があった。

「ブラックに気を付けろ！」

そして男はそれだけ言い捨てると、電話をガチャンと荒々しく一方的に切ってしまった。——一連の出来事にただ茫然とするイリスを一人、置き去りにして。

## Act 2. クルツクシャンクス

イリスは受話器を戻した。年を経た男の赤ん坊のように泣きじゃくる声が、今もイリスの耳にこびり付いて離れない。高鳴る鼓動を落ち着けるために、彼女は自分の心臓に手を当て、深呼吸した。

——さっきのは、一体何者だったのだろうか。自分が日頃聞き慣れている、独特のイギリス訛りの英語だったから、恐らく魔法界の人間で間違いないだろう。それから、『ブラツク』って何だ？イリスは頭を捻った。人の名前だろうか、それとも単純に色？魔法界の人間なら知っている事なのだろうか。電話の前で突っ立ったまま考え事をしているうちに、俄かに玄関のドアが開く音がして、両手に買い物袋を提げたイオが帰って来た。

「ただいま。何かあったか？」

ドサツと買い物袋を居間のテーブルに置き、イオは何気なくイリスに問いかける。イリスが口を開こうとした途端、また電話が唐突に鳴り始めたので、彼女は驚いて跳び上がった。イオはその様子に苦笑しながら、イリスの頭をポンと軽く叩いて受話器を取り当てる。

「はい、出雲ですが。…ああ、アーサーさんか。エジプトはどうだった？」

イオの日本語は、途端に親し気な英語へと切り替わった。イオは手短かに電話を終えると、イリスに優しく言った。

「さ、イリス。今から荷物をまとめて、明日の朝イギリスへ出発だ。アーサーさんが、一足先に『漏れ鍋』へ来ないかってさ。もう九月まで日数もないし、学用品も揃えないとな」

「うんー」

イリスは元気良く頷いた。ロンたちに会える。心の中いっぱい幸せの風船が膨らみ、イリスはまるで花が咲くように、愛らしく微笑んだ。

☆

明朝、二人は飛行機でイギリスへ飛んだ。大勢の人でごった返す空港や街、地下鉄をやり過ごし、無事『漏れ鍋』へ到達する。——古び

たドアを開けると、バーのカウンターにアーサーとロンがいて、その隣にはハーマイオニーがいた。

「イリス！」

イリスを見つけた途端、二人は一目散に彼女の元へ駆け寄り、ハーマイオニーがギュツとイリスを抱き締めた。イリスはその時、ハーマイオニーから良い匂いがするのに気付いた。——華やかで上品な薔薇の香りだ。改めて二人の外見をじっくりと見ると、ロンはそばかすの数が前よりもずっと増えていたし、ハーマイオニーはこんがり小麦色に日焼けしていた。夏休み中、ロンはエジプトへ、ハーマイオニーはフランスへそれぞれ旅行に行っていたのだ。イリスは大好きな親友達に会えた喜びで、ふわふわ浮き上がるような気持ちに身を任せながら、明るい口調で言った。

「久しぶり！二人共、エジプトとフランスはどうだった？」

「もう最っ高さ！」ロンが上機嫌で答えた。

「フランスもとっても素敵だったわ。興味深い魔法史の文献をいくつも読んだの。私、それで「魔法史」のレポートを全部書き替えちゃった！」

ハーマイオニーが朗らかにそう言うと、ロンは不満げにため息を吐いた。

「ひどいんだぜ、彼女。僕が『書き替える前のをくれよ』って言っても、くれないんだよ」

「当たり前でしょー！」ハーマイオニーが腕組みをしながら、ジロリとロンを睨み付けた。

もう日常茶飯事となったこの二人の口論を聴いているうちに、イリスは陽だまりにいるような温もりを感じて、柔らかに微笑んだ。不意にロンがポケットをゴソゴソ探り、何かを取り出してイリスに手渡した。——それは、硝子製のミニチュア独楽のようなものだった。イリスの掌の上で、先端でバランスを取ってしっかり立っている。

「エジプトのお土産。〃<sup>スニーコスコープ</sup>かくれん防止器〃<sup>スニーコスコープ</sup>っていうんだ。胡散臭い奴が近くにいると、光ってクルクル回り出すはずだよ。ハリーのもそれにしたんだ。君たちには特に必要かと思っさ」

「ありがとう、ロン」

イリスは“かくれん防止器”をまじまじと見つめた。とても可愛らしい外見だ。それに小さいから、ポケットに入れて持ち歩くのにも丁度良い。イリスが嬉しそうにお礼を言うと、ロンは照れ隠しなのか、鼻を仕切りに擦りながら言った。

「でもそれ、ちょっと壊れてるかもしれない。前にエジプトで……あーあ！やっぱり！」

ロンが話の途中で、露骨にがっかりした声を出した。“かくれん防止器”がイリスの掌の上で、急にピカピカと光りながらクルクル回り始めたからだ。イリスは驚いて、思わずそれを落としてしまった。丁度ロンの足元までよろよろ歩いて来ていたスキャバーズに、落下していく“かくれん防止器”がぶつかりそうになり、スキャバーズは慌ててロンの足を駆け上がって、彼の内ポケットに収まり事なきを得た。

「まったく……こいつ、僕が近くにいると、とにかくずっと光りっぱなしなんだよ。エジプトの寂れた露店で買ったから、不良品でも掴まされたかな？」

「あら、貴方が『胡散臭い奴』だからじゃない？」ハーマイオニーがクスクス笑いながら言った。

「冗談じゃないぜマリーンの髭！ゴメン、イリス。君たちのお土産もハーマイオニーのと同じ、“香水瓶”にすれば良かったよ」

イリスは驚いて、思わずロンを見上げた。彼の口から“香水瓶”なんてお洒落な単語が出るなんて、思わなかったからだ。ハーマイオニーは何故か少し頬を赤らめ、口元は愛らしくきゅつと上がっている。——しかしその笑みは、ロンの続く言葉で跡形もなく掻き消された。

「“かくれん防止器”一つ買ったなら、『あと一つ買ったら“香水瓶”をオマケする』って商人が言ったから、買ったんだ。でもこんなことから、三つとも“香水瓶”にすりゃよかったなあ。“香水瓶”の方がちよっと安かったし……アイタッ！何するのさ、ハーマイオニー！！」

「貴方に、ちよつとでも、期待した方が、バカだったわ！」

「ハーマイオニーは今度は怒りで顔を真っ赤に染め、くしゃくしゃに握り締めた」日刊予言者新聞」で、ロンを叩いていた。

「期待って何を？」ロンが涙目で尋ねた。

「もういいわよ！行きましよ、イリス。ハリーを探さなきゃ」

「——なら、一緒に行っておいで。金庫の鍵も渡しておくよ。あと、これは預かっておこう」

二人の様子を見ていたのか、今にも吹き出しそうな顔をしたイオが、金色の鍵をイリスに手渡し、*“かくれん防止器”*を摘み上げながら、優しく言った。ようやく落ち着いたハーマイオニーは、*“日刊予言者新聞”*をきれいに折り畳んで自分のカバンに戻した。イリスは、ハリーのふくろうのヘドウィグと仲良くお喋りを始めたサクラにお別れを言ってから、二人と一緒に『漏れ鍋』を出た。

☆

三人は、まず“グリーンゴッツ銀行”へ行つて、イリスの金庫で今学期必要な分の貨幣を下ろした。その後、フローリシユ・アンド・ブロッツ書店で、とんでもなく凶暴な「怪物的な怪物の本」なる教科書を始めとした、三年生を迎えるに当たつて必要な教科書を買ひ（ハーマイオニーだけは——驚くべき事に——三年次の全ての授業の教科書及び、それらに関連する本をどつきり買い込んでいた）、マダム・マルキンの洋装店で制服の丈を調整してもらつたりした。三人は学用品を買い足す道すがら、ハリーを探して横丁中を彷徨い歩いた。しかし、彼はどこにもいない。

——ハリーを探している間、イリスはロンから、ハリーについての“驚くべき情報”を聞いた。何でも夏休み中、ダーズリー家に遊びに来た叔母と口論になり、ハリーが激昂した拍子に魔法が暴発して、彼女を風船のように膨らませてしまったらしい。その後、一人ぼっちで家を出たハリーは、イギリスの迷子の魔法使いや魔女の御用達バスと呼ばれる『夜の騎士バス』に運良く乗る事ができ、無事『漏れ鍋』へ辿り着いた。そこへ、ハリーの行方を搜索していた魔法大臣ファッジが合流した。しかし、彼はハリーに注意をただけで、退学にはしな

かったそうさ。——イリスは一連の話を聞き終わると、ハリーの心情を思い、唇を噛み締めた。ハリーは思慮深く優しい子だ。そんな彼を、魔法が暴発するまでひどい言葉で追いつめるなんて。ハリーの親戚は、やはり彼の言う通り、心ない人たちばかりなのだろう。

どれだけ探しても、依然としてハリーの姿は見当たらない。三人はやがて疲れ果てて、一旦休憩を取るために、フローリアン・フォーテスキュー・アイスクリーム・パーラーのテラスに落ち着き、チョコレート・サンデーを注文した。日当たりの良いテラスの椅子に腰掛けたところで、不意にロンが嬉しそうに叫んだ。

「ハリー！ハリー！」

イリスが振り返ると、通りを往来する人込みの中に、——ハリーがいた。ハリーはテラスに座る三人を見つけた途端、零れるばかりの笑顔を浮かべた。イリスは嬉しくなっただけ席を立ち上がり、一目散にハリーの元へ駆け寄って行った。

「久しぶり！元気にしてた？」

「ああ。まあ、残りの二週間はね。あと、プレゼントありがとう」

ハリーの傍まで来ると、彼の背は少し伸び、声も少し低くなっていた。きつと声変わりだろう。ハリーはイリスの頭を愛おしげに撫でると、照れ臭そうに、上質そうな素材のリストバンドをチラツと見せた。——イリスは、いつも汗びっしょりになってシーカーを頑張っているハリーのために、日本製の最高級素材を使った、スポーツ用のリストバンドとタオルセットをプレゼントにしたのだ。

「ううん。とつても質が良いのにしたから、どれだけ汗を拭いてもサラサラだよ！」

「助かるよ。これでより一層、頑張れそうさ」

二人が一緒に席に座ると、ハーマイオニーはサンデーをもう一つ注文し、ロンが明るく話しかけた。

「僕たち、君を探しに『漏れ鍋』に行ったんだけど、もう出ちやっただけだよ。書店や洋装店にも行ってみたんだけどさ」

「ああ。僕、学校に必要なものは先週で全部、揃えてしまったんだ。それよりも、『漏れ鍋』に泊まってるってどうして知ってたの？」

ハリーが首を傾げながら尋ねると、ロンは「パパさ」と屈託なく答えた。

「ねえ、ハリー。貴方ホントに叔母さんを膨らましちやっただの？」

話の流れを切り、ハーマイオニーが大真面目な口調でハリーに問いかけた。何だかそれが可笑しくて、ロンとイリスは揃って吹き出してしまった。そんな二人の様子を見て、つられてハリーも唇の端っこが今にも笑い出しそうにひくひくしながらも、彼女に合わせ、いかにも真面目くさった態度で答えてみせる。

「そんなつもりじゃなかったんだ。ただ、僕ちよつと、——キレちやつて」

それがツボにさらに入り込んだのか、今やイリスとロンはお腹を抱えて笑い転げていた。

「二人共、笑うような事じゃないわ」ハーマイオニーは窘めるように言い放った。

「ホントよ。むしろ、ハリーが退学にならなかったことが驚きだもの」  
「僕もそう思ってる」

ハリーは、その時の状況を思い返しているのか、真剣な表情に戻って言った。

「退学処分どころじゃない、逮捕されるかと思った。だって僕、規則を破ったんだもの。去年、ドビーがうちでデザートを投げつけただけで、僕は公的警告を受けたのに。……ロン、大臣がどうして僕のことを見逃したのか、君のパパ、ご存じないかな？」

「たぶん、君が君だからだよ。違う？」

ロンが、世の中大抵そんなもんだと言わんばかりに、肩を竦めて見せた。

「だって君は『有名なハリー・ポッター』なんだから。いつものことさ。叔母さんを膨らませたのがもし僕だったら、きつとまず大臣は僕を捕まえるのに、スコップを持って来ないといけないだろうね。だって、きつと僕、ママに殺されて、うちの庭にでも埋められちゃってるよ。……おい、イリス、笑いすぎだろ。」

とりあえず、今晚パ・パに直接聞いてみるよ。ハリー、僕たちも『漏



れ鍋』に泊まるんだ。だから、明日は僕たちと一緒にキングズ・クロ  
ス駅まで行ける。ハーマイオニーとイリスも一緒だよ！」

「ワオ、最高ー！」ハリーが嬉しそうに叫んだ。

☆

その後、四人は届いたサンデーに舌鼓を打ちながら、他愛無いお  
しやべりに興じた。ロンは新しく買ってもらった自分用の杖（『三十  
三センチ、柳の木、ユニコーンの尻尾の毛が一本』と、何度も自慢げ  
に繰り返すので、イリスは耳にタコが出来そうだった）を見せびらか  
し、『怪物本』をどうやったら読む事が出来るのかについて議論し、  
ハーマイオニーの取る今期の授業量の多さにびっくりしたりした。  
話が一区切りついたところで、ハーマイオニーが財布を覗き込みなが  
ら言った。

「私、まだ十ガリオン持つてるわ。私のお誕生日、九月なんだけど、マ  
マが一足早くプレゼントを買いなさいって、お小遣いをくださったの  
の」

「じゃあ、ご本なんていかが？」ロンが瞳を瞬かせ、乙女チックな口調  
で聞いた。

「お気の毒様」ハーマイオニーは動じず、冷静に返した。

「私、ふくろうを買うつもりなの。だって、ハリーにはヘドウィグ、イ  
リスにはサクラがいるし、ロンにはエロールがいるでしょう？」

「エロールは僕のじゃなくて、家族共有のふくろうなんだ。僕にはス  
キャバーズだけだよ」

ロンはそう言うと、内ポケットからスキャバーズを引っ張り出し  
た。——さつきは動いていたので気付かなかったが、よく見るといつ  
もより随分痩せているし、髭は見るからにだらりとしている。

「どうしたの。ずいぶん弱ってるみたい」イリスが心配そうに、横たわ  
るスキャバーズに手を伸ばした。

「ウン。最近、弱っていく一方なんだ。あんまり餌も食べない。どう  
も、エジプトの水が合わなかったらしくて」

ロンも心配そうにスキャバーズを覗き込んでいたが、やがてパチン  
と指を弾いて、期待に満ちた目でイリスを見た。

「そうだ！イリス、スキヤバーズに聞いてみてくれよ。どこか気分が悪いとか、何をしたら元気になるか、とかさ」

その時、スキヤバーズがロンの言葉に反応したかのように、黒い目をパチツと開けてイリスを見た。そしてよたよたと立ち上がると、小さなイリスの手に縋り付こうとしながら、チューチューと鬼気迫る様子で鳴き始める。

「・・・あれ？」

しかし、スキヤバーズの声は、何時まで経ってもネズミの鳴き声のままだ。“人間の言葉に変換されない”。そんなイリスの事情を知らないスキヤバーズは、彼女の手にしつかりと掴まって、依然として何かを一生懸命訴え続けている。——やがて、茫然とスキヤバーズを見つめるばかりのイリスに痺れを切らし、ロンが尋ねた。

「ねえ、何て言ってるんだい？」

「・・・わからない」

「エ？」素っ頓狂な三人の声がハミングした。

「スキヤバーズの言葉がわからないの。どうしてなんだろう？」

イリスは首を傾げた。どうして蛇でもないのに、急に“スキヤバーズの声だけ”わからなくなってしまうんだらう。しかし、イリスの言葉はスキヤバーズには伝わっているらしく、スキヤバーズは見るからに落ち込んだ調子で、テーブルに突っ伏してしまった。

「君の言葉は、スキヤバーズにはわかってるみたいだね」とロン。

「受信だけ出来なくて、送信だけ出来る状態ってことかしら？」とハーマイオニー。

「でも可笑しいな、ついさっきまで、サクラとお話しできてたのに」

イリスは困り果てて、うな垂れるばかりのスキヤバーズを見つめた。——今までどんなに体調が悪くても、蛇以外の動物（果ては植物までも）とは問題なく会話出来ていたはずなのに。もしかして、魔法が一時的に弱くなっているのだろうか。それとも、スキヤバーズ自身が弱っている事と、関係性があるのだろうか。スキヤバーズを助けてあげたいのに。顎に手を当て、考え込むイリスを見て、ハリーが口を開いた。

「ウーン。そうだ、すぐ近くに『魔法動物ペットショップ』があるよ。そこに行かない？ そうしたら、イリスはホントに魔法の調子が悪いのか確かめられるし、ロンはスキヤバース用に何か探せるし、ハーマイオニーはふくろうが買える」

ハリーの言葉は、ごちゃごちゃになった場の空気を、一瞬でまとめ上げた。四人は手早くサンデーの残りを掻き込むと、席を立ち上がった。

☆

『魔法動物ペットショップ』の内部は、壁じゆうにびつしりとケージが敷き詰められていて、とても狭苦しかった。色んな動物の臭いがごちゃ混ぜになってプンプンする上に、ケージの中で動物たちがひっきりなしに騒ぐので、とにかく喧しかった。

イリスは店に入った瞬間、自分の魔法が正常に働いている事を、難なく確認できた。——店中の彼方此方から、《買ってくれ！》だの《腹減った！》だの、好き勝手な動物たちの叫び声が、人間の言葉に交換されて耳に飛び込んで来たからだ。店の奥にあるカウンターでは、店員の魔女が、二又のイモリの世話を先客の魔法使いに教えているところだったので、それを待っている間、イリスは三人に話しかけた。「やっぱり、ちゃんと聴こえるよ。スキヤバースの時だけ、ダメみたい」

「そっか。もしかして、こいつと君の波長が合わないのかな。ていうか、今までこいつと話したことあった？」

ロンに指摘され、イリスはこれまでの記憶の糸を辿った後、首を横に振った。そう言えば、スキヤバースは今までずっと、寝ているか、何かを一生懸命食べているかで、何かの言葉を発した事すらなかったからだ。やがて二又イモリの先客がいなくなると、ロンがカウンターへ行った。

「僕のネズミなのですが、エジプトへ帰って来てから、ちよつと元気がないんです」

「フム。カウンターへバンと出してごらん」

黒縁眼鏡を取り出した魔女に促され、ロンはスキヤバースを内ポ

ケツトから取り出し、同類のネズミのケージの隣に置いた。楽しそうに飛び跳ねていたネズミたちは遊びを止め、よく見えるように押し合いへし合いしながら、金網の前に集まった。——スキヤバーズは哀れな事に、そのケージ内の毛艶が良いネズミと比べると、より一層しよぼくれて見えた。

「このネズミは何歳なの？」スキヤバーズを慎重に摘み上げ、魔女は尋ねた。

「知らない。けどかなりの歳。前は兄のものだったんです」

「どんな力を持つてるの？」

「えーっと……」

途端にロンは言葉に詰まり、助けを求める様にイリスをチラツと振り返った。しかし、今までスキヤバーズとろくにコミュニケーションを取って来なかったイリスに分かるはずもなく、首を横に振るしかない。魔女の目が、スキヤバーズのボロボロの左耳から、指が一本欠けた前足へと移った。それからチツチツと大きく舌打ちした。

「満身創痍も甚だしい。随分とひどい目に遭ってきたようだね、このネズミは」

「もらった時から、こんな感じでした！」ロンは弁解するように言った。

「あいわかった。まあね、こういう普通の家ネズミは、せいぜい三年の寿命なんですよ。つまり、老衰だろうね。もっと長持ちするのがよければ、例えばこんなのが……」

魔女が意味ありげに言葉を途切らせ、ケージの中の黒ネズミに目配せすると、ネズミは途端に自分の尻尾で縄跳びを始め、ロンに対して盛んに自己アピールをした。しかし、ロンの反応がイマイチなのを見て取ると、魔女は今度は、カウンターの下から小さな赤い瓶を取り出した。

「では、この『ネズミ栄養ドリンク』を使って、暫らく様子を見てあげてください」

「OK。いくらですか？……アイタツ!!」

《みんな離れろっ!!そいつは危険だ!!》

——その時、耳をつんぎくような大絶叫が聞こえて、イリスは思わず耳を塞いだ。彼女の目の前で、何やら大きなオレンジ色のボールのようなものが、一番上にあつたケージの上から飛び降り、ロンの頭に荒々しく着地した。

——それは、オレンジ色の毛がふわふわとした、一匹の猫だった。

《怪しいやつめ!!オレの目は誤魔化せないぞ!!》

猫は叫びながら、痛みに悶絶するロンの頭から更なるジャンプを強行し、前足に付いた鋭い爪をぎらつかせて、魔女の持つスキヤバーズに襲い掛かった。

「ゴラッ!クルックシャンクス、ダメッ!!」

魔女がスキヤバーズを抱え込もうとしながら、猫に向かって怒鳴った。身の危険を感じたスキヤバーズは、するりと石鹸のようにその手を擦り抜けて、無様にベタツと床に落ちた。そして、出口目掛けて小さな手足を高速で動かし、横丁の人込みの中へ消えていく。「スキヤバーズ!」とロンが叫びながら、夢中でその後を追いかけて、脱兎のように店を飛び出し、ハリーも後に続いた。カウンター上で素早く方向転換し、出口へ向かおうとする猫の行く手を、イリスは必死に塞いだ。「やめて、スキヤバーズを傷つけないで!」

猫は、研ぎ澄まされた刃のような鋭利さと、豊かな知性の詰まったような、その不思議な瞳を細めて、冷静にイリスを見つめた。——まるで、イリスが動物の言葉を解するのを、最初から知っていて、そしてそれは何でもない事だ、と思っているかのように。そして猫は、静かに口を開いた。

《アンタ、ネズミの飼い主に警告しろ。》 あいつの正体はネズミじゃない》

そして猫は、呆気に取られるイリスの目の前で、あえなく店員の魔女にがつしりと抱っこされてしまった。

「全く!お前ってやつは!ダメでしょ!」

「ま、待ってください!」

抱っこされて身動きが取れず、真正面から怒られるままになっていった猫と魔女の間に、ハーマイオニーが必死で割って入った。

「その子、クルックシャンクスっていうんですか？」

「ええ、そうですよ」

魔女は猫からハーマイオニーに顔を向けると、輝くばかりの営業スマイルになっていた。クルックシャンクスと呼ばれた猫は、ハーマイオニーを見た途端、そのとびきり気難しそうな顔が——まるで暖炉の上でドロドロに溶かした美味しいヌガーのように——フニャンと柔らかくなったように、イリスには思えた。ハーマイオニーは魔女と手短に商談を終えると、輝く笑顔でイリスを見た。

「この子、とっても可愛いわ。私、この子をペットにする！」

カウンターでハーマイオニーが、クルックシャンクスを迎え入れる手続きをするのを見守りながら、イリスはさっきの彼の言葉を何度も思い返していた。胸がざわざわと騒ぎ、落ち着かない。——”スキヤバーズの正体はネズミではない”。この言葉がもし真実だとするならば、一体スキヤバーズは何だと言うのだろう。

☆

二人と一匹が店を出ると、無事スキヤバーズを捕獲出来たロンとハリーに合流した。しかし、ハーマイオニーがクルックシャンクスを愛し気に抱えているのを見ると、二人は驚愕に目を見開いた。

「君、まさか、あの怪物を買ったのか？」ロンは口をあんどぐり開けていた。

「そいつ、危うく僕の頭の皮を剥ぐつもりだったんだぞ！」

「そんなつもりはなかったのよ。ねえ？」

ハーマイオニーは上機嫌で、愛猫の喉をくすぐった。クルックシャンクスは満足気に喉を鳴らし、愛する飼い主に身を寄せる。その様子を、理解しがたいものを見るような目で見ながら、ロンが辛辣に言い放つ。

「全く、スキヤバーズのことはどうしてくれるんだい？イリス、そいつによく言い聞かせてくれよ。『スキヤバーズはお前の餌じゃない』ってさ」

《イリス。ロンに“さっきのこと”を言え。オレのところこそいつを持ってきてくれたら、その言葉が真実であると必ず証明してみせ

る」

クルックシャンクスが、鋭い目付きで油断なくスキヤバースを睨みながら、イリスに言った。イリスとクルックシャンクスの目が交錯する。――イリスは、彼がとても嘘を吐いているようには見えなかった。イリスは小さな声で囁くように、彼に尋ねた。

「スキヤバースの正体がネズミじゃないなら、一体何だっていうの？」  
《わからない。それを確かめるんだ。オレが今の段階ではつきりと分かるのは、”そいつがネズミの皮を被った怪しいやつだ”って事だ》

「スキヤバースが、他の誰かに成り代わられてるって事？本物のスキヤバースが、どこかに閉じ込められてるの？」

《だから、それを確かめるんだ》クルックシャンクスはイライラとした様子で、ふわふわの尻尾を左右に振った。

《イリス、早くしてくれ。あんな胡散臭いやつを、オレの飼い主に近づけたくない》

「わかったよ。でも、彼を傷つけないって、約束する？」

クルックシャンクスは微かに頷き、イリスの心は決まった。彼女は意を決して、その場から一歩踏み出し、ロンに言った。

「ロン。こんなことを言うと、きつとロンは驚くと思うけど・・・聴いてほしいの」

「何？」ロンが素っ頓狂な声で聞いた。

イリスは真っ直ぐな瞳でロンを見据え、戸惑いながらも、静かにこう言った。

「その子が教えてくれたの。”スキヤバースの正体はネズミじゃない”って。”自分のところに連れてきてくれたら、それを証明する”って言ってる」

――三人は、呆気にとられたようにイリスを見つめた後、一斉に吹き出した。ハーマイオニーも苦笑しながら、腕の中のクルックシャンクスへ、悪戯っ子を見るような眼差しを送る。

「えーと・・・君、自分が何言ってるか分かってる？」とロン。

「わかってるよ」

イリスが引き下がる様子を見せないと、ロンはスキヤバーズを大事そうに抱え直しながら、不機嫌そうに言った。

「イリス。何年も僕と一緒にいたスキヤバーズより、このポツと出の猫の話の方を信じるっていいのかい？」

「私もスキヤバーズのことは大好きだよ。でも、クルックシャンクスが嘘をついてるようには見えないもん」

イリスがクルックシャンクスの方を擁護すると、ロンはますます不機嫌さを募らせた。

「僕にはそうは思えないね。〃こいつがネズミじゃない〃だつて？どこからどう見たつて、こいつはネズミそのものだよ！きつとその凶暴猫が、スキヤバーズを平らげたい為についた嘘だ。馬鹿な僕らが信じ込んで、スキヤバーズをそいつの鼻先まで持つて行つたら、これ幸いとペロリといっちゃおうつて算段だつたのさー！」

「まあ、凶暴だなんて！こんなに可愛いのに、なんてひどい事を言うの！」

ハーマイオニーが、ロンに『ネズミ栄養ドリンク』を渡すついでに、彼に食つて掛かった。——結局三人は、イリス（というよりクルックシャンクス）の話を、全く信じてくれなかった。余りにも突拍子の無い話は、たとえ真実でも、素直に受け入れられるとは限らない。大事そうにロンの内ポケットに仕舞われるスキヤバーズを睨みながら、クルックシャンクスが不満そうに《失敗した》と一鳴きした。一体、どうしたらいいんだろう。頭の中で色んな情報が錯綜し、無意識に救いを求める様に彷徨つたイリスの瞳は、やがて動物ショップの外壁に貼られている一枚の紙に吸い寄せられた。

——それは“指名手配書”だった。写真には、もつれた長い髪の毛のこけた男が映っており、彼はイリスを見てゆつくりと瞬きした。そしてその下には、恐らく写真の人物のものだろう、『シリウス・ブラック』という名前が印字されている。

——その時、イリスの頭の中を一筋の電流が駆け抜けた。『ブラック』。その言葉が、あの知らない男の警告と、バシッとリンクする。——そうだ。イリスは息を飲んだ。男はイリスに、〃シリウス・ブラッ



クに気を付けろ」と言いたかったのだ。イリスはその場に縫い付けられたかのように、暫くの間、動く事が出来なかった。

「どうしたの？」

やがてイリスの様子を訝しく思い、近寄ってきたハリリーが、ブラツクの指名手配書を見て言った。

「マグルのニュースにもなってたよ。知らない？・・・日本までは来てないか。最近、アズカバンから脱獄したらしいんだ」

続いてやって来たハーマイオニーが、カバンからまだ少し皺の残る“日刊予言者新聞”を見せてくれた。それには一面の見出しに、こう書かれている。

—— “ブラツクはまだ逃亡中”

魔法省が今日発表したところによれば、アズカバンの要塞監獄の囚人中、最も凶悪と呼ばれるシリウス・ブラックは、いまだに追跡の手を逃れて逃亡中である。・・・ファッジ大臣は、この危機をマグルの首相に知らせた事で、国際魔法戦士連盟の一部から批判されている。・・・魔法界は、ブラツクがたった一度の呪いで十三人も殺した、あの十二年前のような大虐殺が起きるのではないかと恐れている。

イリスは、新聞を持つ手が、恐怖でジーンと痺れ、凍り付いていくように感じられた。まさか、『ブラツク』がこんなに——アズカバンで最も凶悪と言われる程——恐ろしい魔法使いだったなんて。しかもその後、ロンたちに会えるのが嬉しくて、イオに電話の事を言うのをすっかり失念していた事も、イリスを更なる恐怖に駆り立てた。イオに大目玉を喰らう自分の姿が、容易にイメージ出来たからだ。

気が付けば、ハーマイオニーとロンも喧嘩を止め、クルツクシャンクスでさえも、心配そうに自分を見つめている。イリスはふと、三人に“隠し事はしない”と約束をした事を思い出した。そして彼女はおずおずと、三人に“電話事件”の顛末を話して聞かせた。——話を聞き終わると、三人の表情は険しくなり、眉間には皺が寄っていた。普段のスネイプ先生にそっくりだ、と不謹慎ながらイリスは思った。

「そっちの方が、大事件じゃないか！おばさんに言ったの？」

ハリーの叱責に、思わず肩を竦めたイリスが気まずそうにかぶりを振ると、三人はやれやれと言わんばかりに溜息を吐いた。

「貴方って、ホント肝心なところで、いつも抜けてるんだから。とりあえず、スキヤバーズの事は置いておきましょう。『漏れ鍋』へ戻らな  
きや」

四人はそれぞれ荷物を持ち直すと、『漏れ鍋』に向かって歩き出した。

### Act 3. 漏れ鍋にて

四人が『漏れ鍋』に戻ると、アーサーとイオがバーに座って何事かを話し込んでいる最中だった。

「おかえり、みんな。やあ、ハリー君。元気そうだな」イオが振り返り、イリス達に笑い掛ける。

四人はパンパンに詰まった買い物袋をドサリと店の端っこへ置くと、二人の傍に座った。アーサーがテーブルの上に置いた『日刊予言者新聞』から、ブラツクの顔が、静かにイリスを見上げている。

「どうした、みんな。何かあったか？」

深刻な表情で黙りこくる四人を訝し気に見て、アーサーが声を掛けた。ハーマイオニーに肩をつつきながら「言わなきゃ」と促され、ついにイリスはゴクリと生唾を飲み込み、二人に——特にイオの顔色を慎重に窺いながら——実家であった“不思議な電話”の話をした。アーサーとイオの穏やかな表情が、次第に真剣なものへと変わっていく。

——イリスの話を聞き終わった後、二人は何も言わず、互いの目を合わせた。やがてイオから視線を外し、アーサーは元の穏やかな表情に戻って言った。

「きつとその男は——君の推察通り——“魔法界の人間”で、間違いないだろう。一体どこで君の電話番号を手に入れたのか、という点だけが不可解だが」

「戻ったら、すぐに電話番号を変えるよ」イオが素早く言った。

「ああ、それがいいだろう」アーサーは頷くと、話を続けた。

「イリス。“あの人”が残した戦争の爪痕は、そう簡単に消える事はない。大切な人を亡くしたり、自分自身が傷ついたりして、心を病んでしまった人々がたくさんいる。きつと、電話の主もそういった人だろう。」

まあ、深く気にする事はないよ。今やほぼ全ての魔法族が、彼の言う通り、ブラツクに気を付けるべきだろうし。私ももし同じ立場だったら、君に電話して同じ事を忠告するだろう」

イリスは肩透かしを食らったかのように茫然として、アーサーの言葉ですんなり受け入れる事が出来なかった。——きつと二人がかりで真剣に怒られるだろうと踏んでいたのに。アーサーは、この話を適当に流して終わりにしたいような口振りだったし、イリスの事に関しては——特に心配性のイオが、一切の突っ込みを入れず、静かに頷いているばかりなのも不自然そのものだと思った。

やがて、モリー夫人が荷物を山ほど抱えて『漏れ鍋』へ入って来た。その後をパーシーやフレッドとジョージ、ジニーが続き、俄かに店内が賑やかになる。

「荷物を整理しておいで。もうじき夕食だ。お前の部屋は、ハーマイオニーちゃんと一緒にしたよ」

イオがイリスの頭を撫でながら言う。イリスはたまらず、イオに問いかけた。

「ねえ、おばさん。私の事、怒らないの？ さっきの事、言うのを忘れてたのに……」

「馬鹿言うな、あんなつまらない事で！」

イオは軽く吹き出して、イリスの髪を乱暴に掻き雑ぜた。まるでさっきの事は、『イリスが炊飯器のスイッチを押し忘れていた』位の下らない出来事だ、と言わんばかりに。——本当にそうなのかな。私の考え過ぎなのかも。“イオおばさんは嘘を言わない”。そう信じているイリスは、信頼するお婆のその様子を見て、少し安心したのだった。

☆

その夜の夕食は楽しかった。『漏れ鍋』の亭主のトムが、食堂のテーブルを三つ繋げてくれて、ウィーズリー家の七人、イリスとイオ、ハリー、ハーマイオニーの全員が、フルコースの美味しい食事を次々と平らげた。——明日はいよいよ、キングズクロス駅へ向かう日だ。めでたく首席となり、ピカピカに磨いた金色のバッジを見せびらかすパーシーを、フレッド&ジョージが思う存分からかい倒すのを見たりしながら、イリスは暖かく楽しい気分浸っていた。

やがて夕食も終わり、みんな満腹で眠くなった。明日持つていくものを確かめるため、一人、また一人と階段を上って、それぞれの部屋に戻っていく。

イリスがベッドにうつ伏せになって、ニュート・スキヤマンダー著『幻の動物とその生息地』を読んでいると、ハーマイオニーがふざけて押し掛かって来た。続いて、シユツと冷たい霧が首元に掛かり、イリスはびっくりして肩を竦めたが、程無くしてとても良い香りが漂ってくる。——清らかで芳醇な百合の香りだ。

「フランスのお土産よ、イリス」

イリスが首を振じって振り返ると、ハーマイオニーがにっこり笑って、クリスタル製の小さな香水瓶を彼女に手渡した。

「貴方に何が似合うかなって一生懸命選んで、百合リリーにしたの。私は薔薇ローズ」

「ありがとう。ハーミー」

——ハーマイオニーに最初に会った時、良い芳香がしたのは、これだったのだ。イリスは納得して、華奢なデザインの瓶を嬉しそうに眺めた。ふと視界の端で何かがキラツと光ったような気がして、ベッドの脇のサイドテーブルを見ると、イリスのものとは違う、クラシックなデザインの大きな香水瓶が置いてあった。——きつと、ロンのエジプトのお土産”問題の香水瓶”に違いない。ハーマイオニーは自分の香水をそれに移し替えたのだろう。じつと潤んだ瞳で、その香水瓶を見つめるハーマイオニーの横顔は、イリスが思わずドキツとするほど大人びて見えた。

「ハーミー、大人っぽくなったね。香水のせいかな？」

ハーマイオニーは思わずキョトンとしてイリスを見つめ返した後、軽く吹き出した。

「貴方もよ、イリス」

「私が？」

今度はイリスが驚く番だった。——どう見ても、自分が大人っぽくなったとは到底思えない。背も余り伸びていないし、ハリーやロンみたいに声変わりもしていないのに。まじまじと不思議そうに自分の

全身を見つめるイリスを面白そうに眺めながら、ハーマイオニーは頬杖を突いた。

「貴方は気づいてないのかもしれないけどね」

親友の指摘通り、イリスの印象はこの一年で劇的に変わった。一年生の時までのイリスは、固く閉じた蓮の花の蕾のように清廉で、中性的な雰囲気を持つ“子供”だった。

しかし、イリスはその次の年、恐怖に怯え、絶望に堕ちながらも、芽生えた愛を命懸けで守った。そういつた辛い経験や過去の影が、イリスにわずかな陰りを落とし——ほころび始めた蕾が、艶やかに色付き、甘い香りを纏わせるような——何とも言えない“妖艶さ”を芽吹かせたのだ。百合の、どこか官能的と言えるほど濃厚で、それでいて清らかな香りは、そんな彼女によく似合っていた。

☆

その夜、イリスはまた夢を見た。いつもと同じ内容だ。イリスは、塔の中の階段を少しずつ昇っている。塔の中には、あの美しい歌声がこだましている。石造りの外壁には、採光用の窓が等間隔にあつて、そこから月や星の光が優しく差し込んで、内部を照らしていた。

やがて、果てのないと思われた螺旋階段が一旦途切れ、踊り場が現れた。そこに、小さな影が蠢いている。

イリスは目を凝らし、アツと声を上げた。——スキヤバースだ。スキヤバースは、ずいぶん弱り果て、横たわったまま、ゼイゼイと苦し気な呼吸を繰り返している。

「スキヤバース！」

イリスは慌てて踊り場へ駆け上がり、スキヤバースに触れようと、手を伸ばした。しかし、彼女の手が触れるか触れないかのうちに、スキヤバースは弱々しく一鳴きしたのを最期に、彼女の目の前で哀れにも息絶えてしまう。そして、不意に彼の全身が、モコモコと盛り上がり始めた。——まるで内側から、何かが暴れているように。

やがて、ナイロン袋のようにスキヤバースの皮膚を乱暴に突き破り、何かが生まれ出た。

——それは、全身にミミズのような触手を無数に生やした、“おぞ

ましいい化け物”だった。恐怖の余り腰が抜けて、動く事のできないイリスを、化け物は触手を伸ばして絡め取る。それはイリスの足先から太腿までを冒し、腰辺りでグルグルと何重にも巻き付くと、イリスを自分の傍へ引き寄せた。触手は粘液を引き、ベタベタしていて気持ちが悪い。

化け物には触手の他に、ギョロギョロと忙しく動く二つの目玉と、無数の牙が生え揃う大きな口があった。それはイリスを自らの口元へ近づけると、獣臭い息を吐きつけながら——年を経た男が不安に泣きじやくるような——狂気に満ちた声で、彼女に対して懸命に訴えかけ始めた。

『ああ、イリス！助けてくれるね？き、君だけが頼りなんだ。君はとても優しい子だ！そうだろう？やつらのように、私を見捨てたりはしないだろう?!ブラックから、私を守ってくれるね?』  
「いやあつ、離してえ!」

イリスはその声をどこかで聴いた事のあるような気がしたが、化け物への恐怖心が勝り、それについて深く考える余裕など微塵もなかった。最早彼女は、ここが夢だという事も忘れていた。

今や触手はイリスの体中を弄り、蹂躪していた。——まるで彼女の体のどこかに“自分の助かる秘密”が隠されていて、それを必死に探しているかのように。その余りのおぞましさに怖気を震い、イリスは滅茶苦茶にもがき、助けを求めて泣き叫んだ。

——その時、突如として塔の中に、鼓膜が震えるほどの巨大なサイレンが響き渡った。窓から差し込んでいた優しい光は、禍禍しい夕日へと一変し、内部を血のような真紅色へ染め上げていく。

不意に、化け物の目がギョロリと動いて、螺旋階段の上方で固定された。すると化け物の全身が、恐怖に苛まれたかのように震え始め、イリスを頑強に捕えていた触手が、泥のように溶け落ちていった。イリスは化け物の視線の先を追いかけて、——息を飲んだ。

“シリウス・ブラック”がいる。階段の半ばで仁王立ちし、化け物を憎々しげに睨み付けている。しかし彼の姿は、写真で見た時のままモノクロで現実感がなく、体の至る所にノイズが走っていた。ブラッ

クは、落ちくぼんだ幽鬼のような双眸をゆつくりと瞬かせ、唇を噛み締めて、——それから、“クルックシャンクスの声で叫んだ”。

「汚らわしいやつめ！彼女に触れるな！」

☆

——イリスは目が覚めた。彼女のお腹の上に座っていたのは、もちろんお尋ね者のブラックではなく、クルックシャンクスだった。彼は、寝る前にサイドテーブルに置いた筈の、イリスの“かくれん防止器”を器用に口に啞えていた。それは鋭い口笛のような音を鳴らし、ピカピカ光って回り続けていたが、程無くして沈黙した。イリスは息を弾ませながら、よろよると起き上がる。

「クルックシャンクス・・・助けて、くれたの？」

イリスは、汗でぐっしより濡れた髪を掻き上げながら、クルックシャンクスに弱々しく礼を言った。今もイリスの心臓は、狂ったように激しい鼓動を繰り返している。——本当に恐ろしい夢だった。あの化け物の触手の感触と言ったら——。イリスは思わず身震いし、少しでも早く夢の記憶を消し去りたくて、体中を乱暴にこしこしと擦った。クルックシャンクスは“かくれん防止器”を元通り、サイドテーブルに戻すと、軽く伸びをした。

《ああ。ずいぶん覽されてみたいだったからな。・・・まあ、それだけじゃねえが》

クルックシャンクスの鋭い眼光が、一瞬部屋の隅っこを射抜いた。

——まるでついさっきまで、そこに何かがあったかのように。

イリスは、ハーマイオニーが隣で、先程の“かくれん防止器”の騒音にも負けず、健やかに眠っているままなのを確認すると、静かにベッドを抜け出した。——もう一度寝る事なんて、とてもじゃないが出来そうになかったし、それに単純に尿意を覚えたため、用を足したくなつたのだ。

トランクから出したタオルで軽く体を拭き、薄手のネグリジエを取り出して着替えると、イリスは部屋を出てトイレへ向かった。小さな燭台を持って歩いていると、どこからか怒鳴り声が聴こえて来た。——少し先の、十二号室の部屋が半開きになっていて、パーシーが、怒



りで顔を真っ赤にしながら叫んでいる。確か十二号室は、彼とロンの相部屋だった筈だ。

「ベッド脇の机にあったんだぞ！磨くのに外しておいたんだから」

「いいか、僕は触ってないぞ！」ロンも負けじと怒鳴り返した。

「イリス？」

呆気にとられながら、その様子を見守っていると、ふと近くで新たな声が聴こえて、イリスはくるりと振り返った。——ハリーだ。彼はイリスをじつと見た瞬間、顔をトマト色に染める羽目になった。

イリスは、キャミソールタイプの新グリジェを着ていた。それは花びらのように薄い生地で出来ていて、女性らしい丸みを帯びてきた体のラインが、かすかに透けて見えた。“闇の印”を隠すために巻いている右腕の包帯も、その理由を知る数少ない人間の一人であるハリーには、どこか背徳的で、艶めかしく見えてしまう。浮き出た鎖骨や、控えめなフリルの裾から見える白い肢も、かじる寸前のみずみずしい果実のように感じられ、ハリーは思わず眩暈を覚え、ごくりと生唾を飲み込んだ。

「どうしたの、ハリー？」

イリスは訝し気に尋ねるが、ハリーは彼女の言葉に答える余裕など無かった。——最初は、“小さな妹”だと思っていた。しかし、今はもう違う。何時の間に彼女は、こんなに美しくなっていたのだろうか。イリスの魅力に憑りつかれてしまったハリーの脳裏に、小さい頃、スクールの課外授業で見た“ビスクドール”の姿が浮かんだ。陶器で出来た、綺麗な女の子の人形。あれに命を吹き込んだら、きつとイリスみたいになるのに違いない。

一度、イリスを“女の子”として意識してしまうと、もうハリーはどうする事も出来なかった。体の奥から迸る、熱い感情を何とか落ち着けるために、彼は自分のくたびれた薄手のパーカーを脱ぐと、イリスから燭台を奪い、強引に押し付けた。

「着て」

「なんで？」

「いいから！」

イリスは訳が分からなかったが、首を傾げながらも、素直に袖を通す事にした。少し大きめのパーカーにすっぽりと上半身を包まれたイリスを見て、ハリーはようやくホッと息を吐く事が出来た。——これで、彼女の悩ましい体の半分は見ないでいられると。

☆

二人がそうこうしている間に、パーシーVSロンの喧嘩は、大盛り上がりを見せていた。——どうやら事の発端は、パーシーが今や『五分に一度は磨いている』と噂される“首席バッジ”が無くなってしまった事らしい。部屋の中全てをひっくり返す勢いでバッジを探すパーシーを、イライラと睨み付けながら、ロンも自分のトランクを開き始めた。

『ネズミ栄養ドリンク』もないんだよ。ハーマイオニーに貰った時、ポケットに入れたはずなんだけどなあ。寝る前に飲ませてあげたいのに」

ロンの言葉を聞いて、イリスの脳裏に、夢の中の“おぞましい化け物”の姿が蘇り、全身に鳥肌が立った。——もし、本当に彼の体に、あんな化け物が潜んでいるとしたら。

「ねえ、スキヤバーズはどこにいるの？」

イリスが思わず真剣な表情で尋ねると、ロンは素直に口を開きかけ、——それから、ハッとイリスを警戒したような目で見て、恨みがましく言った。

「あの猫を追い出したら教えるよ。僕、こんなことなら、スキヤバーズを守るためのカゴも買っておけばよかった。そうだ、一緒にバーに降りて、ドリンクを探すのを手伝ってくれない？」

「言っておくが、僕がバッジを見つかるまでは、どこにも行かせないぞ！」

パーシーがあまりの剣幕で叫んだので、三人は驚いて肩を竦めた。ハリーが困り果てたように頭を掻いて、ロンに言った。

「僕ら、ドリンクを探してくるよ。イリス、行こう」

ハリーはイリスの手を引き、一階へ繋がる階段を降りた。

☆

もうすっかり明かりの消えたバーに行く途中、廊下の中程まで来た時、またしても誰かの言い争う声が聴こえてきた。——今度は、食堂の奥の方だ。イリスはそれがウィーズリー夫妻と、“イオの声”だとすぐにわかった。

——イオおばさんが、アーサーさん達と喧嘩している？ 思わず身を固くしたイリスをハリーが心配そうに見たが、ふと会話の中で“ハリーとイリスの名前”が出て来たために——二人は無言で顔を見合わせた後、食堂の近くのドアに近寄って、こっそり耳を聳てた。

「やめてくれ、もうたくさんだ！」イオおばさんの声だ。ヒステリックに叫んでいる。

「ただでさえあの子は、去年の事でずいぶん参ってるんだ。これ以上、怖がらせたくない！」

「そうですよ、アーサー。あなたが注意しなくなつて、二人は大人しくて、賢い子です。無茶な事なんてしませんとも」

モリー夫人が窘めるようにアーサーに言うが、彼は頑として譲らない。

「私だって、いたずらにあの子たちの恐怖心を煽りたいわけじゃない。私はあの子たちに、自分自身で警戒させたいだけなんだよ。今学期は決して、危険な事をしちやならんのだ。」

いいかい、モリー母さん。相手はあのブラックだ。ハリーが親戚の家から脱走したと聞いた時、私はどんなに心配したか！そしてイリスも、やはり“死喰い人”の残党から電話を……」

——“死喰い人”の残党？アーサーの言葉に、イリスとハリーは思わず首を傾げ、視線を交わした。彼は最初にイリスが相談した時、そんな事は一言も言っていなかったのに。

「でも、あの子たちは無事だったわ。だからわざわざ何も……」

「ああ、今回は無事だった。——だが、次はどうだ？」

モリー、イオ。シリウス・ブラックは“狂った大量殺人者”だが、アズカバンから脱獄する才覚があった。しかも、不可能とされていた脱獄だ。もう三週間も経つのに、誰一人、ブラックの足跡さえ見えない。ファッジが『日刊予言者新聞』に何と言おうと、事実、我々がブ

ラックを捕まえる見込みは薄いのだよ。一つだけはつきり我々が掴んでいるのは、やつ狙いが……」

「でも、ホグワーツに入ってしまったえば、ブラックは手出しできない。二人は安全だわ」とモリー。

「我々は、アズカバンも絶対間違いないと思っていたんだよ」アーサーは弱々しく言った。

「だが、ブラックはアズカバンを破った。なら、ホグワーツにだって破って入れる」

「でも、誰もはずきりとは分からないじゃありませんか。」ブラックがハリーを狙っている。だなんて」

「ブラックがハリーを狙っている？」モリー夫人の言葉に驚く余り、イリスは軽く咳き込んでしまったが——幸か不幸か——ドスンと荒々しく木を叩く音が被さったため、扉の向こうにいる三人にバレる事は無かった。恐らく、アーサーがテーブルを叩いたのだろう。イリスが恐る恐るハリーの様子を見ると、彼は固い表情で話に聴き入っている。

「モリー、何度言えば分かるんだね？新聞にも何も載っていないのは、ファッジがそれを秘密にしておきたいからなんだ。

ブラックが脱走したあの夜、ファッジはアズカバンに視察に行っていた。その時、看守たちがファッジに報告したそうだ。ブラックがこのところ、寝言を言うって。いつも同じ寝言だ。『あいつはホグワーツにいる、あいつはホグワーツにいる』。——ブラックは、あいつは、狂っている。ハリーを殺せば、あの人の権力が戻ると考えているんだ」

重苦しい沈黙が流れた。ハリーとイリスも、可能な限り息を殺し、話の続きを聞き漏らすまいと扉の傍へ張り付いた。

「あの人がハリーに敗れ去ってから、闇の陣営に与する魔法使い達のうち——数少ない——本当にあの人と共に闇に沈んでしまった者はアズカバンへ送られ、大多数のそうではない者は、逃げ口上を述べてこちら側へ戻って来た。

——だが、闇の陣営は、裏切り者を決して許さない。ブラック

は、“あの人”の忠実な部下だった。やつが自由の身になった今、本  
当の狙いを知らない裏切り者達は、きつと報復を恐れているはずだ。  
『ブラックは自分を殺しにやって来たのだ』とね。彼らは今、やつから  
自らを守るものを必死に求めている。——イオ。イリスが気を付け  
るべきなのは、ブラックだけじゃない。今度は、不審な電話だけでは  
済まないかもしれないんだ」

イリスの心臓が、嫌な音を立てて軋んだ。——思った通りだった。  
アーサーとイオは、やはり自分を怖がらせないために、あんな風に誤  
魔化したのだろう。

「あの子にそんな力なんて無い。あの子はただの傷つきやすい、普通  
の女の子だ」弱々しくイオが言う。

「そんな事は関係ないんだよ、イオ。——ブラックにとっても、連中に  
とつても。

メーティスは、“闇の陣営”の活動が本格的になる前にこの世を  
去ったが・・・それまでは“あの人”に次ぐ実力者だった。“死喰い  
人”の基盤は彼女が作ったとされているし、いまだに彼女を信仰する  
者もいるほどだ。ハリーが“生き残った男の子”として見られるよ  
うに、イリスもまた“メーティスの子孫”という看板を背負ってい  
る。その看板だけを重視する愚かな者達には、背負う者の個人の意思  
など関係ないんだ。

イオ、君も見ただろう？ハリーとイリスは、本当の兄妹のように仲  
が良い。——もし二人が警戒心もなく、人気のない場所をふらふら出  
歩いていたら？潜伏しているブラックが、救いを求める“死喰い人”  
の残党が、その様子を見つけてしまったら？・・・イリスもまた、無  
事では済まない可能性があるんだ」

再び、沈黙が辺りを包んだ。イリスは、ハリーがグイと自分を守る  
ように抱き寄せるのを感じた。不意にガタンと椅子が倒れるような  
激しい物音がして、イオがすすり泣く声が出た。

「なあ、アーサー。どうすれば、あの子は一番安全に生きていけるんだ  
？

あの子は、私の全てだ。あの子が幸せに生きてくれるのなら、わた

しは自分の命だつて魂だつて、何だつて差し出す。エルサとネーレウスは『ホグワーツに行くことがあの子のためなんだ』と言つた。でもホグワーツへ行く度に、あの子は危険な目に遭つて帰つて来る。

最近、あの子が泣いて、震える体を抱き締める度に、強く後悔するんだ。——あの時、最初にホグワーツの手紙が来た時、わたしが何としても破り捨てて、行かせなければ良かったつて……そうすれば、あの子は今でも笑顔で……あんな……あんな酷い目に……」

イオの嘆きは、やがてくぐもつた声になつた。「大丈夫よ」とモリー夫人が労わる声がある。——きつとモリーが、イオを抱き締めて一生懸命慰めているのだらう。いつも勝気な、どんなに辛い目に遭つたつて涙ひとつぶさえ見せないイオが、不安に泣きじやくつている。——私の為に。

“おばさんは、私を愛している”。その事実が、じんわりとイリスの心の中全体に染み渡つていく。イオの愛情が、何よりも強い“護りの魔法”のように自分を包んでいるのを感じると、イリスは不思議な事に——ブラックの事も、電話の事も、夢の事も——少しも怖くなくなつてしまつた。それよりも、イリスは今すぐ扉を開けて、泣きじやくるイオを抱き締め、慰めたいと強く思った。

「イオ、分かつてくれ。あの子が幸せに生きるためには、ホグワーツへ行く事が必要なんだ」アーサーが静かに言い聞かせる。

「わ、分かつてる……分かつてるよ……」イオが喘ぎながら囁いた。「大丈夫よ、イオ。ホグワーツにはダンブルドアがいらつしやる。アーサー、彼はこの事を全てご存じなのでしよう？」

「もちろん知つていらつしやる。それにアズカバンの看守たちが、ブラックを捕まえるために、学校の入り口付近に配備される事になつた。——校長はその事に、大層ご不満であつたがね」

「ご不満？ ブラックを捕まえるために配備されるのに？」モリーが怪訝そうに問いかけた。

「ダンブルドアは、アズカバンの看守たちがお嫌いなんだ」アーサーの口調は重苦しかった。

「それを言うなら、私も嫌いだ。しかしブラックのような魔法使いが

相手では、嫌な連中とも手を組まなければならんこともある」

「でも、そいつらがブラックから守ってくれるんだろ？」イオが継るように言った。

「ああ、やつらは非常に執念深い。やつらがホグワーツにいる限り、ブラックは迂闊には手出しできないはずだ」

☆

アーサーが疲れた口調で「もう休もう」と二人に持ち掛け、ガタガタと椅子の動く音がした。二人は出来るだけ音を立てずに、急いでバーに続く廊下を進み、その場から姿を消した。暫くして食堂のドアが開き、ウィーズリー夫妻とイオが、階段を昇っていく音が聞こえた。

『ネズミ栄養ドリンク』の瓶は、午後に皆がディナーを摂るために座ったテーブルの下に落ちていた。ハリーとイリスは、それぞれの部屋のドアが閉まる音が聴こえるまで、テーブルの下にしゃがんで静かに待った。

バーの中の静けさは、ハリーに——自分でもどうしてだか分からないうが——“家を出た時の記憶”を呼び起こさせた。

静まり返った夏の夜、トランクを引き摺り、息を弾ませ、いくつかの通りを歩いて、マグノリア・クレセント通りの低い石垣にがっくりと腰を下ろしたのを覚えている。まだ治まり切らない怒りが体中を駆け巡り、心臓が狂ったように鼓動していた。誰も助けてくれる人はいない。お金もない。ホグワーツの親友達——ロン、ハーマイオニー、それからイリスの事が、何度も頭をよぎった。爆発しそうな怒りと憎悪、一人ぼっちの強烈な寂しさと、これからどうなるのだろうかという漠然とした不安がせめぎ合い、夏の蒸し暑い夜なのに、体と心は氷のように冷たかった。

——『あの子は、私の全てだ』ふと、あの時のイオの声が、ハリーの耳にこえました。

ハリーは幼い頃からずっと、『両親だけが子供を愛してくれるのだ』と思っていた。バーノンおじさん、ペチュニアおばさん、マージおばさんが意地悪で自分を愛してくれないのは、自分の“両親”ではないからだ。実際、ハリーの周囲は両親がいる子供ばかりだったし、

その子たちは皆、愛されていた。ハリーはそう思う事で、不幸な境遇にある自分を納得させようと努力した。

しかし、イリスのおばは違った。イオはイリスの“両親”ではないのに、イリスを心から愛していた。そんな二人の様子を見るうちに、ハリーは“もしかしたら”と思うようになった。——“両親”ではなくとも愛してくれるのなら、もしかしたら僕だって——。

けれど、それは間違いだと、あの夜、ハリーは嫌という程思い知らされた。どれだけ鼻屑目に見ても、ダーズリー一家が自分に愛情の一欠けらさえ見出していない事は、明らかだった。

ハリーは唇を噛み締めながら、残酷な真実を受け入れるしかなかった。——イリスのおばさんは、親戚だ。でも、彼女を愛してる。でも僕の場合は、違うんだ。分かったことじゃないか、昔から。僕は“愛情”なんて無くても、生きていける。ずっとそうしてきたじゃないか。

——ハリーは強い子だった。しかし、イリスとイオの関係を見続けた事で、心に少し“綻び”が出来てしまった。それを早く塞がなければ。そうしなければ、そこから今まで我慢してきた“何か”が溢れすぎてそうな気がして、ハリーはギュツと両手を強く握り締めた。

ふと、ふわりと暖かな感覚と、優しい“百合”<sup>リリス</sup>の香りがした。——イリスが、ハリーを抱き締めている。

「どうして?」

ハリーが茫然とした声で尋ねると、イリスは彼の片頬に、自分の頬つぺたを重ねながら言った。

「今、ハリーがとても辛そうな顔をしてたから。私、いつも辛い時は、おばさんにこうしてもらおうの。そうしたら、落ち着くんのだ」

イリスの肩越しに見えたバーの扉が、あつという間に、涙で滲んでぼやけていく。

——ハリーの心の一番奥の、取り返しのつかない穴が開き、冷たい風が吹き荒ぶ所を、イリスが絆創膏を貼り、塞いでくれたような気がした。ハリーの心の傷は——両親が幼くして亡くなり、冷たい親戚に育てられた辛い記憶の数々は——決して癒される事はない。けれど



その時、確かにイリスはそこにいて、労わりを持ってその場所を撫でた。それだけで、ハリーの心はどれほど救われただろう。ハリーは『愛される』というのがどういう事か、少しだけ分かったような気がした。

二人は暫くの間そこにおいて、それから瓶を持って引き上げた。踊り場までやって来ると、フレッドとジョージが暗がりにならずくまり、声を殺して息が苦しくなるほど笑っていた。パーシーは、いまだにバツジを探するための大捜索を続けている。

「僕たちが持つてるのさ！」フレッドが笑い過ぎで掠れた声で囁いた。「バツジを改善してやったよ」

ジョージが持つバツジには「首席」ではなく「石頭」と書かれていた。——やおら、ガチャンという大きな音がして、一際大きなパーシーの沈痛な悲鳴が響き渡る。どうやら、何かの拍子に紅茶ポットを落とし、彼のガールフレンドであるペネロピー・クリアウォーターの写真を汚してしまったらしい。もうフレッドたちは、ひきつけを起こしそうなほどに笑い転がっていた。

ハリーとイリスは、ロンに栄養ドリンクを渡すついでに『ドンマイ』と言わんばかりに肩を叩いて去り、ハリーがイリスの部屋の前まで彼女を送った。ハリーは帰る道すがら、イリスから返してもらったパーカーを羽織った。——百合の良い香りがした。ハリーはその夜、一向に眠りに着く事が出来なかった。

## Act 4. デイメンター

翌朝、イリスは穏やかな気持ちで目が覚めた。足元で眠っているクルックシャンクスに布団をかけてやってから、身支度を済ませる。最後の仕上げに香水を一吹きし、朝食を取るために階段を降りた。

一階には、パンやソーセージの焼ける芳ばしい香りが立ち込めている。バーの端っこでは、アーサーが眉根を寄せながら『日刊予言者新聞』の一面記事を読んでいた。その表情からすると、まだブラックは捕まっていないようだ。

「ねえ、イリス……こっちよ」

ハーマイオニーの明るい声がして、イリスは視線を向けた。——モリー夫人が窓際の方の席で、ハーマイオニーとジニーと一緒にクスクス笑っている。

「あなたもいらっしやいな」

モリー夫人が屈託なく笑いかけ、イリスを招き寄せる。——モリー夫人は、自分が娘の頃に作った『愛の妙薬』の話を聞かせている最中のようだった。『愛の妙薬』、つまり惚れ薬。尊敬するスネイプ先生が、決して教えてくれないだろうジャンルだ。イリスも興味を惹かれ、ハーマイオニー達と共に焼き立てのクッキーを摘まみながら、聴き込んだ。

「恋する気持ちは、時に人を暴走させるのよ。私が、あの人の愛を何とか自分へ向けるために、こっそり『愛の妙薬』入りのケーキを食べさせちゃうくらいにね。ケーキ作戦は大成功、彼はたちまち私に夢中になった。最初はとても幸せだったわ。

……でもね、作戦は三日も持たなかった。私は気づいてしまったの。薬が効いている間は、確かにあの人は私を愛してくれる。でもそれは、結局“仮初めの愛”。空しいだけなんだってね」

「そんなことはないわ」

不意に、小さく強張った声が、和やかな空気を凍らせた。——ジニーの声だ。イリスが驚いて彼女の方を見ると、心なしかその瞳にはうっすらと涙が浮かんでいるように見えた。

「薬でも何でも、本当にその人が私だけを愛してくれるのなら。私……」

ジニーはそこで言葉を詰まらせ、隣に座るイリスをキツと睨んだ。乱暴に席を立ち上がると、鼻をすすりながら洗面所の方へ駆けて行く。

「まあ、どうしたのかしら。ジニー！」

モリーは慌てて席を立ち、ジニーの跡を追った。——そして後には、一連の出来事にただ茫然とするイリスと、神妙な表情を浮かべるハーマイオニーのみが残された。

☆

どうして、ジニーは私を睨んだらう？イリスがその事を必死に考えていると、件のジニーがモリー夫人と共に食卓へ戻って来た。しかし、イリスがジニーに声を掛けようと近づいた途端、彼女は露骨に目を逸らしながら、ロンのところへ行ってしまった。——まるでイリスをわざと避けているかのように。

イリスの頭上に、ますます大きなクエスチョンマークが浮かんだ。『愛の妙薬』の話を聞くまでは、至って普通に仲良くしていたはずなのに。

単純な性格のイリスは、他者の感情の機微を読み取ることが苦手だった。——つまり、ジニーの隠された恋心と嫉妬を察する事など出来る訳がなかった。

困り果てたイリスは、ハーマイオニーに相談してみようかとも思ったが、やがて始まった——ホグワーツへの旅立ちのぐたぐた騒ぎで、それどころではなくなってしまった。『漏れ鍋』の狭い階段に苦労しながら、全員分のトランクを汗だくで運び出して、出口近くに積み上げたり、みんなのフクロウやら猫やらが入った籠をそのまた上に乗せたりと、何やかやでずつと忙しかったのだ。

山のような荷物は——アーサー曰く、魔法省からのご厚意で出してもらった——古めかしい車二台のトランクに、ちゃんと収まった。みんなはそれぞれの車に乗り込んで、キングズクロス駅へ向かった。車は渋滞の中や、自転車がやつと通り抜けられる位の狭い道をすいすい

と進み、二十分程度の余裕を残して駅に到着した。

イリスはいつもの通り、イオと一緒に9と4分の3番線の固い金属の障壁を通り抜け、ホームに到達した。紅色の蒸気機関車がモクモクと白い煙を吐いている。その下で、ホーム一杯に溢れた魔女や魔法使いが、子供たちを愛情を込めて見送り、汽車に乗せていた。

「あ、ペネロピーがいる！」パーシーが叫んだ。

胸に輝く「首席」のバツジを愛するガールフレンドが絶対見逃さないうようにと、ふんぞり返って歩くパーシーを見て、イリスとジニーはパツと目が合うや否や、同時に吹き出した。——イリスは心底ホツとした。明るくチャーミングな、いつものジニーだ。きつと朝の事も、私の勘違いだったんだらう。ハーミーに相談しなくて良かった。イリスは浅はかな自分を恥じ、頬を少し赤く染めた。

「行こう、ジニー。空いてるコンパートメント、まだあるかな」

ジニーを促し、汽車へ向かおうとするイリスの服の袖を、誰かがツンと引っ張った。イリスは思わず歩みを止めて振り返り、息を飲んだ。

美しい鳶色の目を潤ませたジニーが、切なく悲しい表情を湛えて、イリスを一心に見つめている。——ただ。あの朝の時と同じ顔をしている。勘違いなんかじゃない、やっぱり私がジニーを傷つけるような事をしてしまったんだ。イリスは強い罪悪感に苛まれ、たまらず尋ねた。

「ゴメン、ジニー。私、何か……」

「……イリス。あのね」ジニーはイリスの言葉を途中で遮り、苦痛に喘ぐように言った。

「あなたとハリーは……」

「ジニー！イリス！早くこっちへいらっしやい！」

しかしモリー夫人の大きな呼び声が、ジニーの言葉の上にもろに被さってしまったため、結局イリスは話を少しも聞き取る事が出来なかった。ジニーは気まずい表情でイリスから顔を逸らし、母の下へ駆けていく。——ジニーは何を伝えたかったんだらう。イリスもモヤモヤした気持ちを抱えながら、彼女の後を付いていくしかなかった。

モリーはまず子供たち全員に、それからハーマイオニー、ハリー、イリスの順に、愛情を込めたキスをした。暖かな陽だまりのような匂いがして、イリスは幸せで満たされた気持ちになった。

「イリス。今学期は絶対に、人気のない場所に行ったり、一人ぼっちで行動しちや駄目よ。いいこと？」

モリーは潤んだ目を何度も瞬かせながら、そう言い聞かせた。続いて彼女が、みんなのために作った昼食用のサンドイッチを配り始めた時、イオがイリスを呼んだ。イオは柱の陰にイリスを誘った。——世界の端で、ハリーがアーサーにどこかへ連れて行かれる様子が、チラツと垣間見えた。イオは真剣な表情で唇を舐めてから、イリスの小さな肩に両手を置き、言った。

「お前が出発する前に、どうしても言っておかなければならない事があるんだ」

その言葉を聞いた瞬間、イリスの頭の中に、あの夜——扉の向こうで不安に泣きじやくっていたイオの声がありました。きつとイオが伝えたいのは“その事”に違いない。正直に事の次第——ハリーと一緒に盗み聞きしてしまった事——を報告すべきか迷って、イリスはイオの目をじつと見た。——お婆さんは私の全てを受け入れてくれた。彼女に隠し事はなしだ。イリスは意を決して、口を開いた。

「ブラックと“死喰い人”が、私を狙ってるって事？」

「お前、どうしてそれを……」

イオは驚きを通り越して、一瞬絶句してしまった。焦って早口になりながらも、イリスは言葉を続ける。

「お婆さん、ごめんなさい。あの、お婆さんたちが昨日の夜、話してるのを聞いちゃったの。……その、ハリーと一緒に」

イオは観念したように目を深く閉じた後、特大のため息を一つ吐いた。それからイリスを気遣わしげに、じつと眺める。

「できればお前には、もうちよつとオブラートに包んで言いたかったんだがな。……怖いか、イリス？」

しかし、イリスは首を横に振った。——漠然とした恐怖や不安な気持ちちは、あの夜に感じたイオの愛情が、きれいさっぱり消し去ってく

れていた。

「ううん。怖くない。だって、私、無敵のイオおばさんの子供だもん」  
——しまった。イリスはハツと小さく息を飲んだ。「姪っ子」だと言おうとしたのに、自分でもどうしてだか分からないが、「子供」だと言ってしまったのだ。けれどもイリスは今更、それを言い直そうという気にもなれなかった。

対するイオは大きく目を見張り、イリスを食い入るように見つめた。そして、どうして良いのか分からず、気まずそうに固まっているイリスを、潰れる程きつく抱き締めた。

「そうだとも。ああ、そうだとも。お前はわたしの自慢の娘だ。たとえ傍にいたくとも、わたしはいつもお前の心の中にいる。わたしだけじゃない。ネーレウスもエルサも虹蛇様も、みんな見守ってる。お前は、決して一人じゃないんだ」

『きつとこの瞬間が、今まで生きてきた中で一番幸福なものだ』、イリスはそう確信した。イオが自分を“自慢の娘”だと言ってくれた、その事をイリスは一生忘れないだろう。体中が幸せな感情で満たされて心地良く、イリスはそのまま風船みたいに浮き上がって、フワフワと世界中のどこまででも飛んでいけるような気がした。

——モリーが、羊飼いが群れを追うように、みんなを汽車の中へと追い込んでいる。イオはイリスの額にキスをして、汽車の中へ促した。汽車がシユーツと煙を吐き、徐々に動き出す。イリスはみんなと一緒に窓から身を乗り出して、イオとウィーズリー夫妻に向かって、汽車がカーブして三人の姿が見えなくなるまで大きく手を振り続けた。

☆

「四人だけで話したいことがあるんだ」

汽車がスピードを上げ始めた時、ハリーはイリス、ハーマイオニー、ロンに向かって真剣な表情で言った。

「ジニー、どっかに行行って」

「あら、ぐっ挨拶ね」

ロンがたまたま近くにいたジニーにそう言うと、彼女は当然の如く

機嫌を損ね、ぷりぷりしながら離れて行った。その拍子に、さっきの事を思い出したイリスが「後でね、ジニー」と声を掛ける。しかし、彼女は振り返りも返事もしなかった。

四人は誰もいないコンパートメントを探して、通路を歩いた。どこも一杯だったが、最後尾にただ一つ、空いたコンパートメントがあった。

——但し、先客が一人いる。男性が一人、窓側の席でぐっすり眠っていた。四人は驚く余りたじろいで、入り口で中の様子を注意深く確かめた。ホグワーツ特急はいつも生徒のために貸し切りとなっているため、食べ物をワゴンで売りに来る魔女の店員以外は、車中で大人を見た事がなかったのだ。

見知らぬ客は、あちこち継ぎの当たった、かなりみすぼらしいローブを着ていた。疲れ果て、病を患っているようにも見える。おまけに、まだかなり若い筈なのに、鳶色の髪には沢山の白いものが混じっていた。

「この人、誰だと思う？」

窓から一番遠い席を取り、静かに引き戸を閉め、四人がそれぞれの荷物を片付けて落ち着いた頃、ロンが声をひそめて聞いた。

「ルーピン先生」ハーマイオニーがすぐに応えた。

「どうして知ってるの？」イリスとハリーの声がハミングした。

「カバンに書いてあるわ」

ハーマイオニーは澄まし顔で、男性の頭上にある荷物棚を指差した。男性の所有物であろう——くたびれた小振りのカバンが、きちんと繋ぎ合わせた紐でグルグル巻きになっている。そしてそのカバンの片隅には、ハーマイオニーの言葉通り、“R・J・ルーピン教授”と剥がれかけた文字が押してあった。

「何を教えてくださるのかな？」イリスが首を傾げ、向かいの席にいるルーピン先生の青白い顔を見て言った。

「決まってるじゃない、『闇の魔術に対する防衛術』よ。だって空いているのはそれしかないもの」

「ま、この人が教えられるならいいけどね」ロンは完全なるあきらめ口

調だ。

「杖でチョンと突つただけでも倒れそうじゃないか？・・・ところで、ハリー、何の話なんだい？」

ハリーは主としてロンとハーマイオニーに、先日のウィーズリー夫妻とイオの話や、先程アーサーが警告した事も全て、話して聴かせた。――イリスは、ホームでの話を聞いて納得した。やはり、アーサーもイオと同じ忠告を、ハリーにしたらしい。全部を聞き終わると、ロンは愕然とした様子で口をポツカリ開け、ハーマイオニーは両手で口を押えていた。やがてハーマイオニーは手を離し、掠れた声でこう言った。

「ああ、何て事なの。本当に気を付けなきゃ。二人共、自分からわざわざトラブルに飛び込んで行ったりしないでしょうね？」

「僕、自分から飛び込んで行ったりするもんか」ハリーはじれったそうに言った。

「いつもトラブルの方が飛び込んでくるんだ」

「その通りだよ、ハリー」

イリスはハリーの言葉に、心から同意せざるを得なかった。『自分達を取り巻く環境や人々、出生のせいで、何かとトラブルに巻き込まれやすい』という特殊な境遇を持つ二人は、強い連帯感を感じ、示し合わせたように握った拳をコツンと合わせる。その様子を呆れたように見守っていたロンが、不意に口を開いた。

「何の音だろう？」

三人は思わず息を潜め、耳を聳てた。口笛を吹くような音が、微妙に聴こえてくる。四人はコンパートメント内を注意深く探し回り、やがて音の元凶を二つに絞った。――イリスのカバンとハリーのトラックからだ。

案の定、それは「かくれん防止器」だった。今や二つのそれが、プレゼンターであるロンの手の上で激しく回転し、眩しい程に輝いている。

「ねえ、それってオンオフに出来るスイッチとかないの？」

ハーマイオニーが、ロンの持つ「かくれん防止器」に、興味深そう



に手を伸ばしながら言った。

「すいっちゅ？よくわかんないけど、とりあえずハッキリしてるのは、これが安物の不良品だつてことさ」

《フン。安物の不良品なのは、お前のオツムだろ》

小さな籠に押し込められたクルックシャンクスが、間髪入れずに毒を吐いたので、イリスは思わず肩を竦めた。どうやら、ロンの飼っているスキヤバーズだけでなく、ロン自身も余り好いてはいないらしい。

「とりあえず、何とかしなきゃ。じゃないと、先生が目を覚ましちゃうよ」とハリー。

ロンは二つの「かくれん防止器」を、ハーマイオニーが機転を利かせて差し出した分厚い皮袋に詰め、紐でギユウギユウに縛つて、ハリーのトランクの一番奥に入れて蓋を締めた。

「これでよし。僕、ホグズミードであれを修理してもらつてくるよ」ロンが息をついて、席に座り直した。

『「ダービシユ・アンド・バングズ」の店が、魔法仕掛けの機械とかに詳しいんだつて。今朝フレッドとジョージが教えてくれたんだ」

「ホグズミードのこと、よく知ってるの？」

“ホグズミード”とは、端から端まで魔法族だけが住んでいると言われる小さな村だ。今年三年生になったイリス達は、保護者のサイン入りの許可証を提出すれば、ホグワーツ城の近辺にあるその村へ、週末に何回か遊びに行ける事になっていた。ハーマイオニーが好奇心に目を輝かせ、身を乗り出した。

「イギリスで唯一の完全にマグルなしの村だつて、本で読んだけど」

「ああ、そうだと思うよ」ロンは、そんな事などどうでもいい、といった様子だった。

「僕、『ハニーデュークス』に行つてみたいだけさ！」

「ねえ、それって何？」

直訳すると『Honey Duke』だろうか。何だか美味

しそうな名前だ。単純に興味をそそられて、イリスが尋ねた。

「お菓子屋さ」ロンは夢見る表情で、舌なめずりした。

「なーんでもあるんだ。激辛ペツパー・・・食べると口から煙が出るんだ。それにイチゴムースやクリームがいっぱい詰まってる大粒のふつくらチョコレート・・・それから砂糖羽根ペン、授業中にこれを舐めていたって、次に何を書こうか考えているみたいに見えるんだ」

「大粒のふつくらチョコレート・・・砂糖羽根ペン・・・」

何て素晴らしい響きなんだろう。日本で生まれ育ったために“食べる事”が人生における喜びの大半を占めているイリスも、うっとりとしてロンの言葉を繰り返した。

「それに蛙チョコも、『ハニーデュークス』で買ったやつの方が、当たりがいいんだって。僕、奮発して五個は買うかな。君も買うだろ？」

「うん！」イリスは元気よく頷いた。

ハーマイオニーが諦めずに『魔法の史跡』という本で読んだ“ホグズミード村に関する史実”をロンに語り続けるが、彼の口から出るのは『ハニーデュークス』のお菓子情報だけだった。やがてハーマイオニーは、ロンに話を聞いてもらおう事を諦め、浮かない表情をしているハリーに向き直った。

「ちよつと学校を離れて、ホグズミードを探検するのも素敵じゃない？」

「だろうね」ハリーは沈んだ声で言った。

「見てきたら、僕に知らせてくれなくちゃ」

「え？」三人の素っ頓狂な声がハミングした。

「僕、行けないんだ。ダーズリーおじさんが許可証にサインしてくれなかったし、ファッジ大臣にも頼んでみたけど・・・ダメだった」

イリスはショックの余り、口をポカンと開けた。——今年の週末、ホグズミードでみんな仲良く遊ぶのを本当に楽しみにしていたのに。けれど、この四人の中で一番残念に思っているのは、他でもないハリーの筈だ。イリスが労しげにハリーを見ると、彼は力なく笑ってみせ、モリー夫人からもらったサンドイッチをモソモソ口に入れた。

「そりやないぜ、ハリー！マクゴナガルがきつと、許可してくれるさ。じゃなきや、フレッドとジョージに聞けばいい。あの二人なら、城から抜け出す“秘密の道”を全部知って・・・」

「ロン！無責任なことと言わないで！ブラックが捕まっていないのに、ハリーはこっさり城から抜け出すべきじゃないわ」

すかさずハーマイオニーの厳しい声が飛び、ロンの言葉を遮った。「ウン。まあ、マクゴナガル先生に頼んでも、きつと先生はそう言うだろうね」とハリー。

《イリス。お取込み中すまないが、おれを籠から出してくれるように頼んでくれないか》

不意に籠の中から、クルックシャンクスの落ち着き払った声が出て、イリスは何も考えずに、怒り心頭中のハーマイオニーに提言した。「ハーミー、クルックシャンクスが出たいって」

途端に柔らかな笑顔になったハーマイオニーが喜んで籠を開け、愛する猫を抱き上げる。ハリーを一生懸命説得していたロンが、その光景を見るや否や、狼狽して叫んだ。

「おいっ！そいつを出すな！」

——だが、時すでに遅し。何時の間にかロンの内ポケットから抜け出し、窓の棧を伝って、斜め向かいに座るイリスの膝に乗っかろうとしていたスキヤバーズは、チュウツと叫んで猛スピードで駆け戻り、元の場所へと治まった。そのわずか数秒後に、飼い主の腕からスルンと抜け出したクルックシャンクスがロンの膝に飛び乗った。さらに、内ポケットに前足を伸ばそうとしたクルックシャンクスを、ロンが怒って払い落とす。

「ロン、やめてよー」ハーマイオニーが怒鳴った。

「そうしなきゃ、スキヤバーズが喰われてたよ！イリス、君も何でこいつのいう事なんか・・・！」

《イリス、そいつは放つとけ》

クルックシャンクスが、空いている席に飛び乗りながら、ロンを鼻先で指した。

《あのネズミもどきから、とても邪悪な気配がした。おれが助けなきゃ、あいつはお前のローブに潜り込んだ》

イリスは思わずゾツとして、全身が栗立った。——『漏れ鍋』で見た、恐ろしい夢を思い出したのだ。

あの悪夢の影響で、イリスは知らず知らずのうちに——スキヤバーズに警戒心を抱くようになっていた。スキヤバーズに対する得体の知れない恐怖心と、まだ『ロンの愛するペットのネズミだ』と信じていたい、と言う思いが拮抗し、イリスが慎重に言葉を選んでいたその時——ルーピン先生がもそもそ動いた。四人はギクリとしてルーピンを見たが、彼は頭を反対側に向けただけで、わずかに口を開けて眠り続けた。

☆

ホグワーツ特急は順調に北へと走り、外にはだんだん雲が厚く垂れ込めてきて、車窓には一段と暗く、荒涼とした風景が広がって行った。コンパートメントの外側の通路では、生徒が追いかけてつこをして往ったり来たりして、賑やかだ。クルックシャンクスは優雅に箱座りを決め込んだ後、ペしやんこの顔をロンへ、黄色い目をロンの内ポケット——の中にいるスキヤバーズ——へと向けていた。

一時になると、ふくよかな体つきの魔女が食べ物積んだカートを押し、コンパートメントのドア前へやって来た。その際、『ルーピン先生を起こすべきかどうか』で一悶着あったが、魔女が「必要な時は、いつでも一番前の車両にいる」と教えてくれたので、結局起こさない事に決めた。みんなは銘々自分の好きなお菓子を買い、ハリーが買った大きな魔女鍋スポンジケーキを一山、切り分けて食べた。

昼下がりになり、車窓から見える丘陵風景が霞むほどの雨が降り始めた時、——事件は起きた。不意に通路で足音がして、ドアを開けたのは——スリザリン寮の同学年であるドラコ・マルフォイト、彼の腰巾着であるビンセント・クラップ、グレゴリー・ゴイルだったのだ。イリスは、持っていた蛙チョコカードをバラバラと取り落とした。ハリーもロンもハーマイオニーも、息を飲んで目を見張り、一様に静まり返っている。

——ドラコの冷たい色をした目は、イリスを見た途端、狼狽したように大きく揺らいだ。イリスも何も言えず、呼吸する事すら忘れて、彼を見つめ返す。

その時、イリスの心の中で色んな思いがせめぎ合い——やがて一つ

の希望的観測を見出した。こんなにじつと私を見つめている。もしかしたら、私の忘却術は不完全だったのかも。そして彼は、何かの拍子に記憶を取り戻したのかもしれない。と。イリスの心が期待に震え、わななく唇が今にも微笑みそうになった。

一方のドラコは、イリスに目を留めた瞬間、強烈な違和感に打ちのめされ、暫くの間言葉を失う羽目になった。

イリスがその長い黒髪を、流れるままにしているのも——その体から、ふわりと優しい百合の香りがするの——彼女の隣に、ハリー・ポッターが寄り添っているのも——全てが違う。とにかく全部が違うんだ、と強く感じた。そして何より、気に食わない知人でしかない筈のイリスをじつと見ていると——全くもって発生原因など不明だが——深い悲しみや苦しみ、絶望が、じわじわと心に染み出してきて、居てもたつてもいられなくなってしまふのだ。

——ドラコの額を冷汗が伝い落ちる。今まではこいつを見ても、こんな不快な気持ちにはならなかったはずなのに。彼は一刻も早くいつもの調子に戻るために、冷たいせせら笑いをして、嫌味つたらしく気取った口調で言い放った。

「へえ、誰かと思えば。ポッター、ポツティーのいかれポンチと、ウイーズリー、ウイーゼルのコソコソ君じゃないか！」

クラブとゴイルは、チラツと一瞬イリスを窺い見た後、示し合わせたようにトロール並みのアホ笑いをした。

「おまけに、“血を裏切る者”と“穢れた血”までいる。フン、ここだけ空気が淀んでいるな」

しかし、いつもの調子で嫌味を言っているというのに、四人は突っかかってくるどころか——葬式に参加しているような暗い顔でドラコを見つめるばかりだった。ドラコはその反応をとてつもなく不気味に感じて狼狽し、救いを求めるように視線を彷徨わせる。やがて彼は、窓際の席にいるルーピン先生に目を留めた。

「そいつは誰だ？」

「・・・新しい先生だ」いち早く混乱から立ち直ったハリーが答えた。

「マルフォイ、今何て言ったんだ？」

ドラコは面白くなさそうに目を細めた。先生の鼻先で喧嘩を吹っかける程、馬鹿ではない。彼は苦々し気にクラツプとゴイルを促し、姿を消した。

——嵐が去った後、三人は大きなため息を零した。

「ホントに危なかつたよ。僕、もう少して『ごきげんよう、マイベストフレンド』って言っちゃうところだった」ロンが肩を撫で下ろした。「仕方がない事よ。だって、マルフォイのためなんだから。直にきつと……」

ハーマイオニーは一旦そこで言葉を区切り、チラツと気遣わし気に俯いたままのイリスを見て、「慣れるわ」と自信なさげに呟いた。

「イリス。大丈夫かい？」

見かねたハリーがイリスの肩にそつと手を置こうとするが、彼女はそれより早く席を立て、窓際の席へと避難した。——今優しい事をされたら、赤ちゃんみたいに泣きじゃくってしまう確信があったからだ。

——『君は、耐えられるのか？』イリスの頭の中に、かつてのスネイク先生の言葉が蘇った。

イリスの都合の良い希望は無残に打ち碎かれ、潰えた。窓硝子をそつと指先で撫でると、雨はより一層その激しさを増していく。硝子の外側に雨粒がいくつも叩きつけられ、その影がイリスの顔に映り、涙のように零れ落ちていった。

『迷いそうになった時は、自分の胸に手を当てて、心に聞いてごらん。そして君の心の声に、素直に従いなさい。それはきつと』正しい事だ』

ふとアーサーの助言が、イリスの心に、神託のように鳴り響いた。——そうだ。イリスはすぐさま胸に手を当て、心の声を探した。いや、探さなくたって分かる。これは『正しい事』だ。だから、私は耐えなくちゃ。

——そうだよな？イリスは自分の心に問い掛けた。けれども、心は何時まで沈黙したままで、答えを得る事は出来なかった。

☆

汽車は、さらに北へと進んでいく。窓の外は、雨足が微かに光るだけの灰色一色だ。やがてその色も墨色へと変わり、通路と荷物棚にポツとランプが灯った。汽車はガタゴトと忙しなく揺れ、雨は途切れる事なく降り注ぎ、風はビュウビュウと唸りをあげた。それでもルーピン先生は、身動き一つせず眠っている。

「もう着く頃だ」

ロンが空腹を訴える腹を摩りながら、身を乗り出し、ルーピン先生の体越しに、もう真つ暗になっている窓の外を見た。——不意に、汽車が速度を落とし始めた。

「調子いいぞ」ロンが嬉しそうに言った。

「まだ着かないはずよ」ハーマイオニーが時計を見ながら答えた。

「じゃあ、何で止まるんだ？」ハリーが首を傾げた。

汽車はますます速度を落とした。ピストンの音が弱くなり、窓を打つ雨風の音が一層激しく聴こえてくる。やがて汽車はガクンと止まった。どこか遠くの方で、ドサリ、ドシン、と荷物棚からトランクの落ちる音がした。そして、窓際でぼんやり物思いに耽っていたイリスが我に返り、慌てて立ち上がりとした瞬間に——車内の明かりが一斉に消え、辺りは真つ暗闇になってしまった。

「イリス、大丈夫かい？・・・アイタツ！」

「わあっ！ゴメン、ハリー！」

イリスは、彼女の身を案じる余り、手探りで近づこうとしていたハリーと正面衝突し、二人仲良く席へ倒れ込んでしまった。

「故障しちゃったのかなあ？」ロンの間延びした声がする。

キュッキュツと何かを引っ掻くような音がした。何とか窓際までやって来たロンが、服の袖で窓の曇りをまるく拭き、そこから外の様子を眺めている。

「何だかあつちで動いてる。誰かが乗り込んでくるみたいだ」ロンが目を細めながら言った。

イリスは暗闇の中で、一人首を傾げた。——誰が乗車してきたんだろう。もしかして乗り過ぎしてしまった学生達だろうか。しかし、今までそんな事は無かったはずだ。

急にコンパートメントの扉が開く音がして、何か重くて大きなものがドサツと倒れ込んでくる音と振動がした。

「ごめんね！」ネビルの声だ。

「ごめん！何がどうなったかわかる？」

ネビルは、ハリーとイリスに手探りで助け起こされた後、空いている——と思っていた——席に腰掛けようとして、先客のクルツクシャンクスに思いつきり引つ搔かれ、悲鳴を上げていた。ハーマイオニーは機転を利かせ、運転士のところまで行つて現状を確認してくると言い、ドアを開けようとした。しかし、タイミング悪くやって来た“新たな登場人物”と思ひ切りぶつかつて、仲良く倒れ込んでしまう羽目になつた。

「大丈夫、ハーミー？」イリスが心配そうに叫んだ。

「平気よ。あなた、だあれ？」

「じ、ジニーよ。ロンはどこ？」ジニーの不安そうな声が聴こえた。

「ジニー！僕はここだ。こつちへ来いよ！……イテツ！コラ、クルツクシャンクス！やめろっ！」ロンは色々忙しい様子だった。

「静かに！」

突然、聞き覚えのないしわがれ声があった。——ルーピン先生が、ついに目を覚ましたらしい。先生のいるであろう奥の方で、何かゴソゴソと動く音がした。みんなが押し黙り、息をひそめる。

やがて柔らかなカチリという音がして、灯りが揺らめき、コンパートメント内を照らした。ルーピン先生が、掌一杯にオレンジ色の炎を持っていて。炎が、先生の疲れ切つて覇気のない灰色の顔を照らしていた。けれども、その目だけは油断なく周囲を警戒している。

「動かないで」

ルーピンはそう言うと、ゆっくり立ち上がり、掌の灯りを前に突き出し、ドアに向かつて歩き出した。しかし彼が到達する前に、ドアが外側からゆっくりと開いた。

炎に照らし出され、入り口に立っていたのは——マントを着た、天井までも届きそうな“黒い影”だった。顔はすつぽりと頭巾で覆われていて、見る事が出来ない。マントから突き出している手は、灰白



色に冷たく光り、汚らわしいかさぶたに覆われている。みんな凍り付いたようにピクリとも動けず、その影を見つめる事しか出来なかった。

やがて、頭中に覆われた得体の知れない何者かが、ガラガラと不快な音を立てながら、ゆつくりと長く長く息を吸い込んだ。——まるでその周囲から、空気以外の“何か”を吸い込もうとしているかのよう

に。たちまち、ゾーツとするような冷気が、全員を襲った。イリスは、急に呼吸が出来なくなった。パニックになつて足掻こうとするが、イリスの皮膚の下、深く潜り込んだ強烈な寒気が——指先一本動かす事さえ許してくれない。そうこうしているうちに、冷気はイリスの胸の中を満たし、そのもつと奥を冒していく。

真冬の海の底に沈められたかのように、耳の中でゴボゴボと水の音がする。下へ下へ、奈落の底へと引き込まれていく——

——真つ暗闇の中、かすかな息遣いが聴こえた。弱り果て、今にも途絶えそうな程の。『愛してる』——ドラコの声だ。イリスに、愛の言葉を囁いている。力なく座り込んだ石の床は、全ての熱を根こそぎ奪っていきそうな程、冷たかった。両手で抱き締めているドラコの体が、みるみるうちに温もりを失っていく。血が止まらない。ドクドクと彼の体から流れ出し、イリスの腹部や膝を濡らしていく。——嫌だ、死なないで……。イリスは滅茶苦茶にもがいたが、指先一本動かす事ができない。濃い暗闇が、イリスの周囲に渦巻いている。何も見えない。——ああ、死んでしまう。血が、血が止まらない。私を置いて、どこかへ行かないで、死なないで、死んでは駄目……。——

「イリス、しっかりして！」誰かが、イリスの頬を叩いている。

——イリスは、薄らと目を開けた。床が、ガタゴトと揺れている。汽車が再び動き出し、車内はまた明るくなっていた。イリスは自分でも知らないうちに、座席から床に滑り落ちたらしい。ぼんやりとした意識の中で、ハリーも同じように床に座り込み、ロンがその脇に屈んで懸命に介抱しているのが見えた。

ハーマイオニーがイリスの前髪を掻き分け、タオルで拭いた。イリ

スの額は冷汗でびっしりと濡れていた。おまけに、今にも吐きそうなほど気分も悪い。

イリスは明るくなったコンパートメント内を、ぐるりと見渡した。ドア付近の席にいるジニーとネビルが蒼白な表情でイリスを見つめ返し、ハーマイオニーの頭の上からはルーピンの疲れた顔が覗いている。

「貴方、氷みたい体に冷たいわ」ハーマイオニーは、イリスに自分のマントを巻き付けた。

——不意にパキツという大きな音がして、みんな飛び上がった。ルーピンが、巨大な板チョコを割ったのだ。

「さあ、お食べ」

ルーピンは優しい声でそう言うと、イリスとハリーに特別大きな一切れを渡した。

「食べるといい。気分が良くなるよ」

受け取った六人の中で、一番最初にかじったのはイリスだった。するとチョコレートの甘さと一緒に、たちまち手足の先まで一気に暖かさが広がった。無心で二口目に突入したイリスを見て、みんなもおずとおずとチョコレートを食べ始める。その様子を安心したように見守りながら、空の包み紙をくしゃくしゃと丸めるルーピンに、ハリーがこわごわ聞いた。

「あれは何だったのですか？」

「<sup>デイメンター</sup>吸魂鬼”。アズカバンの看守だ」

みんなは食べる手を止めて、一斉にルーピンを見つめた。——イリスは思い出した。あの夜、アーサーが『アズカバンの看守たちがブラックを捕まえるために、学校の入り口付近に配備される事になった』と言っていた事を。まさかそれが、あんな恐ろしい化け物だったなんて。イリスは思わず、ぶるっと身を震わせた。

「地上を歩く生き物の中でも、最も忌まわしいものの一つだ。やつに近づき過ぎると、楽しい気分も幸福な思い出も、一欠けらも残さずに吸い取られてしまう。そして、心に“最悪な記憶”しか残らなくなってしまうんだ」

ルーピンはそこで一旦言葉を区切ると、労わるような眼差しでハリーとイリスをじつと見つめた。

「ハリー、イリス。君たちの“最悪の経験”は、本当に酷いものだったのだろう。君たちと同じ経験をすれば、どんな人間だって気を失ってしまう筈だ。……つまり、決して恥じる必要などないんだよ」

ルーピンは最後の言葉を、主にハリーに向けて言ったようだった。——好きな女の子の前で気を失ってしまった事を、密かに恥じていたハリーは少し顔を赤らめながら、俯いた。

「さて、私は運転士と話をしてこなければ。……失礼」

ルーピンが去った後、チョコレート頬張り終えた六人は、真剣な顔を寄せ合った。

「一体、何があつたんだい？」

改めてハリーが尋ねると、ハーマイオニーがこわばった表情で答えた。

「ええ、あれが……あのデイメンターが……あそこに立って、ぐるりと周囲を見回したの。顔が見えなかったけど、そんな風を感じたわ。そうしたら、貴方達が……」

「僕、君らが引きつけか何か、起こしたのかと思った。急に硬直して、座席から落ちて、呼んでも返事をしなくなっちゃってさ」ロンが助け舟を出す。「それなら、ルーピン先生が真っ直ぐにデイメンターの方へ歩いて行って、杖を取り出したの。そしてこう言ったわ。『シリウス・ブラックをマントの下にかくまっている者はいない。去れ』って。」

でもあいつは動かなかつた。すると、先生が何かを唱えたの。そうしたら、デイメンターに向かって銀色の煙みたいなのが飛び出して……あいつは背を向けて、すーっといなくなつたわ」

「ひぐつ。こ、怖かつたよお」ネビルの声が、いつもより上擦っていた。「あいつが入って来た時、どんなに寒かつたか、みんな感じたよね？」

——重苦しい沈黙が、暫くの間、コンパートメント内を支配した。ロンは気味悪そうに肩を揺すりながら、『もう一生楽しい気分にならないんじゃないかと思つた』と呟いた。

イリスは、先程のルーピンの言葉を思い返した。彼女にとっての“

最悪な記憶”とは、“秘密の部屋でドラコが死にかけた記憶”だったのだ。——あんな経験を二度としたくないから、彼の記憶を消したのに。デイメンターは、イリスの一番触れて欲しくない繊細な場所を暴き、踏み散らしたのだ。再び、じわりと涙が滲んできて——イリスは乱暴にマントの裾で目元を拭った。

やがてルーピンが戻って来て、あと十分でホグワーツに到着する事を教えてくれた。周囲がホツとしたような空気に包まれかけたその時、バタバタと廊下を駆けてくる忙しい足音がして、誰かがドアを乱暴に開けた。

——イリスと同年のスリザリン生、“パンジー・パーキンソン”だ。いつもツンと取り澄ましている表情が、恐怖で大きく歪んでいる。パンジーは形振り構わない様子で、イリス達を気にも留めず、ルーピンのローブに縋り付いた。

「ああ、あなた、先生なんですよ?! た、助けて! ドラコが、ドラコが、あれを見た途端・・・引きつけを起こしたの! すぐに来てえ!」

イリスは頭を誰かに思いきり殴られたような衝撃を感じ、よろめいた。ドラコもデイメンターを見て、気を失ってしまう程の“最悪な記憶”を引き摺り出されたのだ。だが、一体何の記憶だと言うんだ? 自分と関わった事以外で、彼にとって“最悪な経験”があったというのか?

ルーピン先生はローブを翻し、すぐにパンジーの後を着いていった。イリスは何も考えられなかった。ふらふらと覚束ない足を懸命に動かして、コンパルトメントを飛び出し、駆け出した。

「駄目だ、イリス!」

ハリーの叫ぶ声が、後ろから追いかけてくる。けれども、イリスは足を止める事など出来なかった。

☆

——時を少し戻し、スリザリン生が多く集まる車両では。コンパルトメントの一つを占領したドラコは、クラップとゴイル、パンジーとノット等の“いつもの取り巻き”を周囲に置いて、他愛無い世間話に興じていた。

“イリスとの愛の記憶”を失って出来た、その深く大きな穴を埋めるために——ドラコはもつと沢山の自分のプライドを満たすものを求めるようになった。取り巻き達がみんな自分に従い、媚びへつらうような視線を送る度に、ドラコは歪んだ満足感を感じた。そして彼は、以前よりもつと傲慢で冷たくなった。

けれどもドラコは、いくら周囲にちやほやされても、完璧に満たされた気持ちになる事は出来なかった。——何かが、絶対的に足りないのだ。まるで自分の影が消えてしまったかのような、漠然とした寂しさが心の奥に焼け付いて、一向に消えようとしなない。しかも、それについて真剣に考えようとすると、決まって頭が爆発するのではないかと心配になる位、痛むのだ。

そんな時、ドラコはいつも手首に巻いている“銀のリボン”を撫でた。冷たくて滑らかなその感触は、ドラコの頭痛をすぐさま和らげてくれる。すると彼は、途方もなく安心するのだった。

☆

夜の帳が下り始めた頃、汽車が不意に速度を落とし、ガクンと止まった。そして何の前触れもなく、明かりが一斉に消え、辺りが真っ暗闇になった。

「何だ?!」

ドラコは怯えて立ち上がろうとするが、パンジーが怖がつてしがみ付いてきたために、再び着席する事になってしまった。ノットだけが素早く杖を取り出し、杖先に光を点す。

すると音もなく、ドアが開いた。——入り口に立っていたのは、マントを着た、天井までも届きそうな“黒い影”だった。顔はすつぽりと頭巾で覆われている。頭巾に覆われた得体の知れない何者かは、恐怖に打ち震えるスリザリン生達の様子を静かに見回し、ガラガラと音を立てながらゆっくりと息を吸い込んだ。まるでその周囲から、空気以外の“何か”を吸い込もうとしているかのように。

ノットの杖がカランと床に転がり、光が消えた。暗闇と共に、強烈な冷気が全員を襲った。ドラコは自分の息が途中でつつかえたような気がして、必死に喘いだ。——冷たい水の中に沈められたかのように

に、呼吸が出来ない。身を切るような寒気がドラコの皮膚の下を通り抜け、彼の心臓をギュウツと驚掴みにした。そしてそのもつと奥へと浸食していく――

――ドラコは、自分の心の中の世界にいた。ドラコの世界は、彼が世界で一番安心できる“マルフォイ家の屋敷”の形をしている。

自室の窓際の席で、ドラコはイリスと魔法使いのチェスを楽しんでた。『愛している』ドラコが何度も言うたびに、イリスの姿をした“イリスの記憶”は、頬を赤らめて恥ずかしそうに微笑んだ。

ドラコはその様子を見て、胸がこれ以上ない位にときめくを感じた。ずっと一緒にいるんだ。彼女を守って生きていく。ドラコはイリスの柔らかな頬を撫でた。決して離さない。こんなに満たされた気持ちには、生まれて初めてだ。

――不意に、バキバキと何かが砕けるような大きな音が轟いて、二人の時間を引き裂いた。庭園の方からだ。何事かと訝しんだドラコは窓から外の景色を眺め――そして、恐怖の余り絶叫した。

見渡す限りの青空や、美しく手入れされた庭園、立派な造りの門扉や塀が、みるみるうちに色を失い、無数の罅（ひび）が入って粉々に崩れ、消えていく。そしてその跡には、空虚な暗闇だけが残された。

「逃げろー！ 侵入者だー！」

――何者かが自分の心の世界へ入り込み、手当たり次第に破壊している！そう確信したドラコは、怯えるイリスの手を引っ張って、無我夢中でその場を飛び出した。その数秒後、ドラコの後ろでバキバキとあの恐ろしい音がした。ドラコが走りながら振り返ると――粉々になった彼の部屋の残骸が、一つ残らず暗闇の中へ消え去っていくところだった。

ドラコは、怖がるイリスを宥めすかしながら屋敷中を逃げ回り、一番頑丈な“地下の秘密の部屋”に逃げ込んで、鍵を掛けた。イリスを抱き締め、何度も『大丈夫だ』と囁き、落ち着かせる。重厚な扉の前を――父親が持つ“闇の魔術の道具”の形を模した――ドラコの防衛本能達が固め、バリケードを築いた。

――もう、あいつはここまで来れやしないだろう。ドラコは安堵

し、ため息を零した。しかし彼の予想は、無残に踏みにじられる事となる。

不意に、ドン！と扉が激しく叩かれる音がした。ドラコとイリスは恐怖に息を詰まらせ、お互いをきつく抱き締める。扉は何度も荒々しく叩かれ、その度に大きな亀裂が走った。壁や天井からはパラパラと埃が落ち、蜘蛛の巣のような罅（ひび）が広がっていく。

一体、侵入者は何を狙っているんだ？ドラコは必死に考えた。ほぼ全ての記憶は、部屋の外にある。もう残っている記憶は、この腕の中にある。イリスの記憶。しかない。

——その時、ドラコは全てを理解し、全身の毛が逆立った。侵入者は、イリスを狙っているのだ。彼は潰れる程強くイリスを抱き締めながら、ドアの外の侵入者に向けて泣き叫んだ。

「やめてくれ！何でもやる！他の記憶なら何だつてくれてやる！これだけはやめてくれ！僕の全てだ！全てなんだああ!!」

しかし願いも空しく、扉は崩れ去った。——扉があつた場所には、小さな魔法使いが一人立っていた。次々に襲い掛かるドラコの防衛本能達を、その魔法使いは杖の一振りですべて粉砕してしまった。

魔法使いが杖をもう一振りすると、イリスはドラコから強引に引き離され、宙に浮いた。そしてみるみるうちに硝子細工のように透明になり、闇の中へと消えて行った。

「があああああつ!!」

ドラコは石の床に爪を立て、理性の欠片もない野獣の様に泣き叫んだ。——愛する者を失った今の彼には、侵入者に対する深い憎しみと怒り、殺意しか残されていない。

正気を失いかけた目を血走らせ、血が滲むほど唇を噛み締め、その身から凄まじい殺意を迸らせながら、ドラコは魔法使いに飛びかかり、力任せに組み伏せた。その細い首筋に両手を掛け、力を込める。——こいつはイリスを、僕から奪った。許せない。ググツとドラコの手が力が籠もる。殺してやる。

魔法使いは苦しそうにもがいた。その拍子に、顔をすっぽり覆っていたローブがはらりと解け、床に広がる。その正体が明らかになると

——ドラコは驚愕に目を見開き、思わず手を緩めた。

「そんな・・・」ドラコは掠れた声で唸った。

「どうして、君が・・・」

ドラコの問いに、魔法使いは答えなかった。彼女は無言で涙を流し、悲しみに顔を歪ませたまま、杖先をドラコの額にピタリと当てた。

☆

イリスは車両を繋ぐドアをいくつも通り過ぎ、スリザリン生の固まる車両の手前までやって来た。ドアの硝子面から、ルーピン先生がパンジーに手を引っ張られ、コンパートメントの一室へ入っていくのが見える。息を弾ませながらドアを開けようとするイリスの目の前を——突如として、誰かが塞いだ。

「おっと。これ以上は駄目だよ、お嬢様」マイレディ

イリスたちと同年年のスリザリン生、“セオドル・ノット”だ。ノットは氷を削り出した仮面のように、冷たく不気味な微笑みを浮かべている。

「君は僕らの敵なんだろう？」

その言葉はイリスの心に氷水のように流れ込み、彼女の今にも爆発しそうなほど興奮した気持ちを落ち着かせた。——そうだ、彼の言う通りだ。今の自分がドラコの傍へ行つたつて、余計な混乱を招くだけだ。イリスは唇をギュツと噛み締めた。——しかし、ドラコを案ずる気持ちが消える事はない。彼女は、儚く消え入りそうな声でノットに頼んだ。

「お願い。ドラコが無事かどうか、教えてほしいの」

ノットはドアを開け、件のコンパートメントの中へ入っていった。その間、イリスは両手を組んで、ドラコの無事を祈りながら待った。やがて戻ってきたノットは、穏やかな声でこう言った。

「マルフォイは無事だ。後遺症もない。ルーピン先生の介抱で、意識を取り戻したようだ。それから、今は・・・パーキンソンの膝の上に頭を乗つけて体を休めてる」

イリスの頭の中で『パンジーとドラコが仲睦まじく過ごしている光景』が、パツと思ひ浮かんだ。たちまちイリスの全身を、激しい嫉妬



の炎が包み込む。その双眸が一瞬ルビーのように美しい真紅色に燃え上がり、また元の青色へ戻っていく様子を、ノットは興味深そうに鑑賞していた。やがて彼は唇を皮肉気に歪め、再び口を開く。

「イリス。もう分かっただろ？君は弱い。今からでも遅くない、マルフォイ氏に許しを乞うんだ。そうすれば全てが丸く治まる。そして君は再び、愛を得る事ができる」

「そんなの間違ってる。私、貴方たちに屈したりなんてしない」対するイリスの声は、余りに弱く小さかった。

「馬鹿な事を！」ノットはせせら笑った。

「本当に望んでいる事が、間違いだって言うのか？——お嬢様、どうか賢明なご判断を。気が変われば、いつでも僕宛にフクロウ便を送ってくれ」

「・・・待つて」

芝居がかった動作で小さくお辞儀し、ドアを開けようとするノットの腕をイリスが掴んだ。イリスはローブのポケットから蛙チョコレートの新品の箱を一つ取り出すと、訝しむノットの手に握らせる。「お願い、これをドラコに渡して。チョコレートを食べると、とても気分が良くなったから」

対するノットは——イリスの言葉の意図を図り兼ねているかのよう——暫くの間、一切の動きを停止した。そしてイリスの心の奥底を探るかのよう、彼女の青い瞳を覗き込んだ。

「・・・ああ、わかった」

「ありがとう」

ノットが了承すると、イリスは弱々しい笑顔を浮かべ、お礼を言うてから、元来た道をよろよろと帰って行った。ノットは箱を握り締めたまま——イリスの後姿が次の車両へ消えていってしまいうまで——その姿をじつと見つめていた。

☆

ルーピンの手際の良い介抱の結果、ドラコは無事に意識を取り戻し、ゆっくりと目を開けた。

列車は再び動き出し、車内がまた明るくなっている。パンジーが不

安そうに泣きじやくりながら膝枕を提案したため、ドラコはそれを受け入れる事にした。しかしそれでも、ひどい流感の病み上がりのような気分の悪さや、震えは止まる事がない。

——今になってドラコは、あの得体の知れない影がデイメンターだったのだと分かった。汽車に乗る前に、父が『ブラックを捕まえるために、ホグワーツにデイメンターが派遣される』と教えてくれた事を思い出したのだ。けれどもまさかそれが、あんなに恐ろしいも化物だったなんて。

ドラコはあの時、間違いなく『この世で一番恐ろしい経験をした』と思った。しかし、その内容がどんなものだったのか思い出そうとした途端、あの頭痛がやってきた。たまらず彼は唸り声を上げ、パンジーの膝の上で文字通り頭を抱える羽目になってしまった。

「無理をしない方がいい」ルーピン先生が言った。

「僕は、一体……」ドラコが痛みに朦朧とする意識の中、茫然と呟いた。

「あなた、あれを見た途端、席から滑り落ちて、白目を剥いて痙攣し出したの。わたし、あ、あなたに何かあったらどうしようかと……」しゃくり上げながらドラコを抱き寄せようとするパンジーを押しわけ、ノットが強引に二人の間を割って入った。

「マルフォイ、これを」

そしてノットはドラコに、蛙チョコレートの箱を差し出した。

「……何だ？蛙チョコレートじゃないか」

ドラコは胡散臭げにジロジロと箱を眺めた。——こいつは、何で僕が頭痛で苦しんでる時にチョコレートなんか寄越したんだ？しかしドラコの疑問と不満は、すぐに解消された。ルーピン先生が感嘆したように、ノットに向けてこう言ったのだ。

「デイメンターの対処方法をよく知っているね。ちょうどチョコレートの在庫が足らなくて。助かったよ」

「いいえ、僕のじゃありません」ノットは静かに首を横に振った。

「じゃあ誰が？」

ドラコが箱の包装を慣れた手つきで解きながら、ノットに何気なく

問い掛けた。——しかし、ノットからの返事は一向にない。面倒臭く  
なったドラコは、話をそこで終わらせた。ドラコは包装を解き終わる  
と、逃げようとする蛙チョコをパクンと口に入れる。たちまち体が暖  
かくなり、頭痛は跡形もなく消え去り、気分はとても良くなった。

## Act 5. 茶の葉の未来

汽車はホグズミード駅で停車し、みんな押し合いへし合いしながら狭いプラットホームに降り立った。外は凍るような冷たさで、氷のような雨が叩きつけている。イリスはかじかんだ手で必死に籠の取っ手を掴み、ペットのサクラが濡れないように、マントの下へ避難させた。

「イツチ年生はこつちだー!」

ふと懐かしい声が聴こえた。イリス達が振り向くと、プラットホームの向こう端に、ハグリッドの巨大な姿の輪郭が見えた。例年通り、新入生達を湖を渡る旅へ連れて行くために、ランタンを振り上げ、大きな声で注意を集めている。

「元気かー!」

イリス達を見つけたハグリッドが、生徒達の頭越しに、元気良く呼び掛けてくれた。四人はそれぞれ一生懸命ハグリッドに手を振ったが、話をする事までは出来なかつた。周りの人波が、四人をホームから逸れる方向へと、どんどん押し流していったからだ。イリス達は仕方なくその流れについていき、デコボコのぬかるんだ馬車道に出た。

そこには、二年生以上の生徒達を乗せるために用意された、沢山の馬車が並んでいた。イリスは雨と暗闇に視界を遮られ、泥に足を取られて何度も転びそうになりながらも、やつとのことで馬車に乗り込んで扉を閉める。四人を乗せた馬車はひとりで走り出し、ガタゴトと揺れながら他の馬車と隊列を組んで進んでいった。

馬車は微かに、黴と藁の匂いがした。——ここまで来たら、後はもうホグワーツ城へ入るだけだ。イリスはフウとため息を零し、黴臭いクッションに深々と身を預けた。

——何しろ、デイメンターの影響を受けたばかりで、まだ完全に回復し切っていないのに、無理をして汽車の端から端まで走った上に、再び精神的なショックを受けてしまったものだから——もう“疲労困憊”状態だったのだ。ハリーも同じようで、彼女の隣でぐったりとしている。向かい側に座ったロンとハーマイオニーは、その様子を心

配そうに見つめていた。

イリスは馬車の窓から、外の景色をぼんやりと眺めた。ホグワーツ城を守る壮大な鉄の門が、徐々に近づいてくる。その両脇には立派な石柱があり、その天辺に羽根を生やしたイノシシの像が立っていた。

——そしてその近くに、頭巾を被ったデイメンターが浮かんでいる。一人ずつ門の両脇を警護しているのだ。イリスはまたあの冷たい吐き気に襲われそうになり、心臓がドクドクと波打ち、たまらなくなつた。——もしあのデイメンターが、此方を向いてしまつたら。自然と呼吸が早まってくる。

その時、右側から手が伸びてきて、イリスの肩をグイと掴んだ。——ハリーだ。静かにイリスを抱き寄せ、その顔を自分の胸に押し当てて、視界を遮ってくれた。ハリーの心臓は、今にも飛び出しそうな位に早く脈打っている。きつとハリーもデイメンターが怖いんだ。それなのに、自分を守ってくれた。イリスは恐怖で冷たくなり始めた心が、親友の思いやりに照らされて、ポツと暖かくなるのを感じた。

城へ向かう長い上り坂で、馬車はさらに速度を上げて行く。城の尖塔や大小の塔が段々近づいてきて、やがて馬車は静かに止まつた。

四人は、生徒達の群がる石段を上がり、正面玄関の巨大な樫の扉を通つて、広々とした玄関ホールに入った。そこは松明の火で赤々と照らされ、上階へと繋がる壮大な大理石の階段を輝かせていた。四人が右側へ進み、大広間へ向かおうとした途端、マクゴナガル先生の鋭い声が後方から飛んできた。

「ポッター、グレンジャー、ゴイント！私のところにおいでなさい！」  
イリス（だけでなく、ハリー、ハーマイオニー、何故かロンまでも）が驚いて振り向くと、マクゴナガル先生のとんがり帽子が、大広間へ向かう生徒達の頭越しに、ピョコツと飛び出していた。その下にある顔は厳格そのもので、四角い眼鏡に縁取られた鋭い目が、イリス達をしっかりと射貫いている。——イリス達は思わず、こわばった表情を見合わせた。不思議な事に、マクゴナガル先生の真剣な眼差しは、生徒達を『自分が何か悪さをしでかし、今から怒られる』という気持ちにさせる力を持っていた。

「揃いも揃って、そんな心配そうな顔をしなくても宜しい。少し聞きたい事があるだけですよ」

先生はやって来た四人にそう言うと、ホツとした様子のイリスとハリーに向き直った。

「ルーピン先生が、前もってふくろう便を下さいました。——ポッター、ゴント。デイメンターの影響を受け、気分が悪くなったそうですね。先生が正しい処置を……つまり、チョコレートを食べさせたと仰いましたが、体調はまだ優れませんか？」

「僕、平気です！」

イリスが返事の内容を考える前に、ハリーは顔を真っ赤にしながら弾けるように答えた。その勢いに気圧されるようにして、イリスもこくこく頷いた。

「宜しいでしょう」マクゴナガル先生は満足そうに言った。

「では、三人はそのまま大広間へ向かいなさい。グレンジャーは、私の事務室へ。今学期の時間割について、少しお話があります」

☆

グリフィンボールのテーブルに着くと、イリスはハーマイオニーの分の席を空け、組分けの儀式を見物した。大広間に浮かぶ無数の蠟燭の灯りが、みんなの顔をチラチラ輝かせている。

ハーマイオニーが戻って来たのは、組分けの儀式が終わり、フリックトウィック先生が帽子と三本足のスツールを回収し始めた頃だった。ハーマイオニーはとても嬉しそうな顔をしながら、イリスの隣に腰掛けた。

「おかえり。何だったの？」

「ただいま。ウーン……後でね」

ハーマイオニーは少し複雑な表情をして、イリスの問いの答えを濁した。——その時、ダンブルドア校長先生が挨拶をするために立ち上がったので、二人の視線と意識は必然的に教職員テーブルへ注がれる事となった。ダンブルドアは、につこりと生徒達一人一人に微笑みかける。イリスは心から安らいだ気持ちになった。

「新学期おめでとう！皆にいくつもお知らせがある。一つはとても深

刻な問題じゃから、皆がご馳走でボーつとなる前に片付けた方が好かろうの」

その言葉に、まだ少し残っていたお喋りの声が止み、大広間は完全に静まり返った。ダンブルドアは咳払いしてから、話を続けた。

「ホグワーツ特急での捜査があつたから、皆も知つての通り……我が校は、只今アズカバンのデイメンター達を受け入れておる。魔法省の御用でここに来ておるのじゃ」

ダンブルドアは憂いを湛えた表情で、重々しく言葉を切った。――生徒や教師達だけでなく、彼自身も、デイメンターが学校を警備する事をよく思っていない様子だった。

「デイメンター達は、学校への入り口という入り口を固めておる。あの者達がここに在る限り、はつきり言うておくが、誰も許可なしで学校を離れてはならんぞ。デイメンターは悪戯や変装に引つかかるような代物ではない。……『透明マント』ですら無駄じゃ」

ダンブルドアがさらりと付け加えた『透明マント』の言葉に、四人は無言で目配せをした。

「言い訳やお願いを聞いてもらおうとしても、デイメンターには生来できない相談じゃ。それじゃから、一人ひとりに注意しておく。あの者達が皆に危害を加えるような口実を与えるでないぞ。監督生よ、男子、女子それぞれの新任の首席よ、頼みましたぞ。誰一人としてデイメンターといざこざを起す事のないよう気を付けるのじゃぞ」

グリフィンボールのテーブルの上座に座っていたパーシーが、胸を張り、もつたいぶつた様子で周囲を見回した。ダンブルドアは言葉を切り、大広間をぐるつと見渡した。それだけで生徒達一人一人の心に、忠告の言葉がずっしりと押し掛かった。誰一人身動きもせず、声を出す者もない。――その様子に安心したかのように、ダンブルドアは元の穏やかな表情になって、再び口を開いた。

「楽しい話に移ろうかの。さて、さて。今学期から、嬉しい事に、新任の先生を二人お迎えすることになった。まずルーピン先生」

ルーピン先生が、教職席から立ち上がった。継ぎ接ぎだらけのロブを着たルーピン先生は、一張羅を着込んだ先生方の中で、より一層

しよぼくれて見えた。——まるで『魔法動物ショップ』で数日前に見た、ポロボロのスキヤバースとピカピカの黒ネズミ達みたいだ。イリスは実に不謹慎ながらも、そう思った。

ハーマイオニーの推察通り、ルーピン先生は「闇の魔術に対する防衛術」を担当するそうだ。先生と同じコンパートメントに居合わせたイリス達は、まばらな拍手の隙間を埋める位の勢いで、大きな拍手をした。

ふと視界の端にチラリとスリザリンのテーブルの様子が入る。ドラコは拍手をせず、助けてもらった筈のルーピン先生を、小馬鹿にしたような顔で眺めていた。イリスは、自分の心が腐り落ちていくように感じられた。

不意に、向かい側に座るロンが、イリスの手をバシバシ叩いた。イリスは思わず眉をしかめ、ドラコから視線を外した。

「イタツ！な、なに？」

「スネイプを見てみるよー」ロンが興奮した口調で囁いた。

イリスは、教職員テーブルにいるスネイプを見て、驚いて息を飲んだ。——スネイプが、ルーピンを睨んでいる。

スネイプが「闇の魔術に対する防衛術」の教師になりたがっているのはホグワーツ中の噂だが、頬のこけた土気色の顔を歪めている今の表情は、イリスの心臓が一瞬止まってしまう位の迫力があつた。怒りを通り越して、憎しみの表情だ。——そう、それは、“スネイプがハリーを見る時の表情”と同じだった。クイレル先生の時も、ロツクハート先生の時も、スネイプはこれ程までに明確な憎悪の感情を見せた事がない。

「スネイプ先生は、ルーピン先生の事が好きじゃないのかな？」イリスが尋ねた。

「そうだね。ちよつぱり好きじゃないんじゃない？・・・僕と同じぐらい」ハリーが皮肉たつぷりに答えた。

「もう一人の新任の先生は」

水面下で続けられているイリス達の議論を気にする事もなく、ダンブルドアが続ける。



「ケトルバーン先生は「魔法動物飼育学」の先生じゃったが、残念ながら前年度末をもって退職なさることになった。手足が一本でも残っているうちに余生を楽しみたいとの事じゃ。そこで後任じゃが、うれしいことに・・・他ならぬルビウス・ハグリッドが現職の森番役に加えて教鞭を取ってくださることになった」

四人は、驚いて顔を見合わせた。議論の内容も一瞬で頭から消え去った。そして四人は席を立ち上がり、手が痛くなるくらい大きな拍手を送った。特にハグリッドと仲の良い生徒が多いグリフィンドルからの拍手は、一番大きかった。ハグリッドは夕日のように真っ赤な顔をして、自分の巨大な手を見つめている。嬉しそうに綻んだ顔が、真っ黒なもじやもじや髭に埋もれていた。

「そうだったのか！噛み付く本を指定する狂った先生なんて、ハグリッド以外にいないよな！」どきどきに紛れ、ロンが大変失礼な事を言った。

四人は一番最後まで拍手し続けた。ダンブルドアが宴の始まりを告げた時、ハグリッドがテーブルクロスで目元を拭いたのを、イリスはしっかりと見た。

テーブル中の金の皿や盃に、あらゆる種類の飲み物や食べ物が溢れた。イリスは体が求めるままに、よく食べ飲んだ。大広間には話し声や笑い声、ナイフやフォークの触れ合う音が賑やかに響き渡る。

イリスは早くハグリッドにおめでどうと言いたくて、うずうずしていた。——ハグリッドほど魔法動物の扱いに長けた人物はいないだろう。まさに適材適所だ。アツアツのシエパーズパイも、よく味わわずに飲み込むようにして食べてしまう。他の三人も同じ気持ちのようで、どこかそわそわしていた。

いよいよ最後にかぼちゃタルトが金の皿から溶けるようになくなり、ダンブルドアがみんな寝る時間だと宣言し、やっと話すチャンスがやって来た。

「おめでどう、ハグリッド！」

イリス達は一斉に席を立ち上がると、教職員テーブルまで駆けてゆき、ハグリッドへ向け、口々にお礼の言葉を叫んだ。感極まったハグ

リッドは、大粒の涙をいくつも髭に滴らせた。

「みんなあんたたちのおかげだ」

ハグリッドは、ナプキンで涙に濡れた顔を豪快に拭いながら、湿っぽい声で言った。

「信じらんねえ．．．偉いお方だ、ダンブルドアは．．．これは、おれがやりたくてたまらんかったことなんだ．．．」

ハグリッドはそれ以上言葉を続ける事が出来ず、巨大な両手で自分の顔を包み込み、咽び泣き始めた。マクゴナガル先生が気を利かせ、イリス達に寮へ戻りなさいと合図した。

イリス達はグリフィンホール生に混じって大理石の階段を上がり、いくつもの廊下や階段を通り過ぎ、グリフィンホール塔の秘密の入り口に辿り着いた。新しい合言葉をしっかりと頭に叩き込みながら、「太った貴婦人」の裏の穴を通り、イリスとハーマイオニー、ハリーとロンは、それぞれ女子寮と男子寮の入り口で別れた。

懐かしい円形の寝室に、四本柱の天蓋付きベッドが四つ置いてある。一足先に部屋で寛いでいたルームメイトのパーバティ、ラベンダーとひとしきりお喋りを楽しんだ後、それぞれのベッドに潜り込もうとした時——ハーマイオニーが、イリスのベッドの縁にトスンと腰掛けた。

「どうしたの、ハーミー？」

イリスが尋ねると、ハーマイオニーはいつも精悍に輝いている瞳を翳らせ、こう言った。

「あのね、イリス。私、どうしてもやりたい事があるの。しかも、それを完璧にやれる方法も手に入れちゃった。とつても幸せだわ。その筈なのに．．．とつても不安でもあるのよ。だって、その方法をするのは生まれて初めてなんだもの。おまけにすごく複雑で、危険だわ。私、失敗せずに出来るかしら？」

——正直なところ、イリスはハーマイオニーの言葉を一クヌート分も理解する事が出来なかった。イリスが余りにもポカンとした顔で見つめているばかりだったので、ハーマイオニーは軽く吹き出し、彼女の頭を撫でた。

「ごめんなさい。抽象的過ぎて分からないわよね。今の話はなしよ、忘れて」

「ハーミー」

その時、イリスは、ハーマイオニーが自分の知らないどこかへ行つてしまうような感覚に襲われた。イリスはたまらず去り行く彼女の腕を掴み、無我夢中で言葉を探しながら言った。

「私はハーミーの味方だよ。やりたい事が出来るチャンスがもらえたなら、思いつき好きにしたらいいよ。私、応援する。失敗したっていいじゃない。今までハーミーは失敗したことなんて無かったもの。たまには失敗したって、いいんじゃない？」

ハーマイオニーは暫くの間、イリスの言葉の内容を反芻するかのようになり、静かに立ち尽くしていた。それから顔をくしゃつと歪め、ベッドに飛び込んで、イリスをギュウツと抱き締めた。

「ああ、イリス！貴方って本当に・・・最高だわ！」

耳元で、ハーマイオニーの感極まった声が聴こえる。イリスには、難しい事は分からなかった。けれど何となく、ハーマイオニーの密かな不安を、少しは和らげられたのかなと思えて嬉しかった。ハーマイオニーは自分のベッドに帰る前に、イリスにこう囁いた。

「ごめんなさい。詳しい事は言えないの。でも、誓って悪い事じゃないわ。それと・・・貴方がふと振り向いた時、私が傍にいても気にしないで」

☆

翌朝、イリスとハーマイオニーは、談話室でハリーとロンと落ち合っている、仲良く朝食を取りに大広間へ向かった。グリフィンドールのテーブルの端には、各生徒用の時間割が置いてあった。四人は銘々自分の分を取り、朝食を食べながら目を通した。

「わあ、嬉しい。今日から新しい学科がもう始まるわ」

ハーマイオニーは幸せそうだ。ロンはスクランブルエッグの皿を取り寄せるついでに、ハーマイオニーの持つ時間割を覗き込んで、顔をしかめた。

「君の時間割、メチャクチャじゃないか。ほら・・・一日に十科目もある

るぜ。そんなに時間があるわけないよ」

——「一日に十科目」？ダイアゴン横丁で、ハーマイオニーが三年生次における全ての教科書を購入していた記憶が蘇り、イリスとハリーは視線を交し合った。ホグワーツでは、三年生から授業は一部選択制となる。全ての授業を受けるのなら、一日に十科目となっても何ら可笑しい事ではない。しかしそれは不可能だ。何故なら、同じ時間枠に行われる授業があるからだ。

「大丈夫よ。マクゴナガル先生と相談して、ちゃんと決めただもの」しかし、ハーマイオニーはきつぱりと言い切った。

「でも、ほら」ロンは堪え切れず笑い出した。

「この日の午前中、分かるかい？九時、「占い学」。そしてその下だ。九時、「マグル学」。それから・・・ん？」

ロンは、まさかと言わんばかりに身を乗り出して、よくよく時間割を見て、目を丸くした。

「おいおい、その下に「数占い学」、九時と来たもんだ。おったまげーだけ、ハーマイオニー。そりゃ、君が優秀なのは知ってるよ。だけど、そこまで優秀な人間がいるわけないだろ。三つの授業にいつぺんにどうやって出席するんだ？」

「馬鹿言わないで。三つの授業に同時に出る訳ないでしょ」

ハーマイオニーはピシヤリと言い放ち、ロンが次の言葉を見つける前に、マーメイドをたつぷり塗ったトーストを頬張った。そして向かい側に座るイリスと目が合うと、パチツと意味ありげにウインクして見せた。——イリスは、昨晚ハーマイオニーが言った言葉の意味が、何となく理解出来たような気がした。

☆

朝食を終えた四人は、朝一番の授業「占い学」が行われる北塔へ向けて、テクテク歩き始めた。広々とした通路を往来する人々の中に、ある人の後ろ姿を見つけてイリスは立ち止まった。——ルーピン先生だ。くたびれたローブを羽織ったその姿は、妙に哀愁を帯びている。イリスはハーマイオニーに「後で合流する」と言ってから、先生の下へ近づいた。

「ルーピン先生」

イリスは小走りでルーピンに並びながら、名前を呼んだ。——先生が汽車でディメンターから救ってくれた時、イリスはちゃんとお礼を言う事が出来なかつた。今こそ、その時だと思つたのだ。ルーピンはゆっくり振り向くと、やつれた表情に柔らかな笑顔を浮かべた。

「やあ、イリス。あれから調子はどうだい？」

「とても良いです」イリスは元氣良く答えた。

「先生、あの時はありがとうございました」

「どういたしまして。わざわざその事を言いに来てくれたのかな？」

イリスが素直に頷くと、ルーピンは嬉しそうに頬を綻ばせた。そして、何かを言おうと唇を開いた。

「恐れ入りますがね」

突然、横から冷たい声が出た。二人が揃って声のした方向を見ると——漆黒のローブを纏つたスネイプが、幽鬼のようにゆらりと立っていた。その昏い目を不穩にぎらつかせ、ルーピンを睨んでいる。

「ゴーストをお借り願ひませんか？・・・今学期の、補習の予定を、話し合いたいのでね」

スネイプは後半の言葉を、はつきりと、ゆつくりと、そしてねつとりと言つた。——たちまちイリスの中で羞恥心が燃え上がり、俯いた顔が真っ赤になつた。

今学期から教師となつたルーピン先生は、イリスが「落ちこぼれ」と蔑まれていた事も、「魔法薬学」の補習を受けている事も知らない。そんな彼の前であんな風に、自分を辱めるように言わなくなつていいのに。

イリスは、結局二年次の時も——リドルの助けがあつても何故か——魔法薬学の成績だけは例年通り、ビリだった。だから、今学期も補習があるのは覚悟していた。それなのに……。居心地悪そうに肩を竦めるイリスをチラリと見て、スネイプは酷薄な笑みを浮かべた。

「何ということだ、ゴースト。君は、先生に言っていないのかね？ 全く、肝心な事を隠して自分を良く見てもらいたいなどは、どこぞの誰かと非常によく似ている」

イリスは長年の経験から「そんなつもりではない」と反発する事は、グリフィンドールへの無慈悲な減点を招く行為だと骨身に沁みて理解していたので、縮み上がったまま、黙りこくっていた。ルーピンはイリスのその様子をじっと見つめたまま、穏やかな、そしてどこか悲し気な声でこう言った。

「何が言いたいんだい、セブルス？」

「おやおや。そのように噛みつかれるとは」スネイプは歌うように返した。

「もしやご自分に、思い当たる節がお有りかな？」

イリスが俯いたまま、この嵐が治まるのをひたすら待っている時――ルーピンとスネイプの間に、ピリツと張り詰めた空気が流れた。しかし、それは一瞬の事だった。ルーピンはスネイプに軽く別れの挨拶をし、イリスに「また授業でね」と優しく言って、去って行った。

そして、通路にはイリスとスネイプだけが残された。処刑を待つ囚人のような顔をするイリスに、スネイプは苛立ちも隠さず、吐き捨てるように言い放った。

「ゴント、吾輩の研究室へ。グリフィンドール十点減点」

その時、たまたまイリスの近くにあった四つの寮の砂時計のうち、グリフィンドールの砂時計から、表面に乗っていたルビーが数粒、消えていくのが見えた。けれど、「どうして減点されたのか」について聴く事も、更なる減点を呼ぶ行為だとイリスは知っていた。結局、彼女は黙って、早足で研究室へ向かうスネイプに付いていくしかなかった。

☆

暗く不気味な雰囲気漂う研究室で、スネイプは杖を振るって作業机の対面上に椅子を用意し、イリスにも掛けるよう命じた。机には小さな硝子製の壺が置いてあった。

「右袖を捲り、"闇の印"を見せろ」

出し抜けにそう命じられ、イリスは狼狽してビクツと肩を跳ね上げた。――どうしてスネイプ先生はそんな事を？ 恐る恐るスネイプを窺い見るが、彼は微動だにしない。

「吾輩は忙しいのだ、ゴーント。早くしたまえ。それとも、また減点されたいのかね？」

何時まで経っても茫然としたままのイリスに苛立ち、スネイプが声を荒げた。ついにイリスは観念して右袖を捲り、印を覆っている包帯を巻き取った。

スネイプは壺の蓋を取った。中には白い軟膏が詰まっている。彼はそれを指で掬い取った。そして——リドルに印を焼き付けられた記憶を思い出し——怖がって無意識に逃げようとするイリスの右腕を、片手でガツチリと掴みながら、軟膏を“闇の印”全体に塗り込んだ。

すると程無くして、印はきれいさっぱり消えてしまった。

「あっ!!」

驚いて大声を上げたイリスを気にする事無く、スネイプは冷静な口調で説明した。

「完全に消えたわけではない。見えなくなったただけだ。そして、効果は一日しか持たない。故に毎朝忘れず、印全体に塗り込むように。今週の補習で、君にこの薬の調合法を伝授する。しかし、“闇の印”自体は強い呪いであるため、“闇の帝王”が復活を果たせば……」

——そこでスネイプは絶句した。イリスが顔をくしゃくしゃに歪ませ、号泣し始めたからだ。

イリスは、ただただ、嬉しかった。信じられなかった。これで毎朝人目を気にしながら、包帯を巻かなくて済む。トイレの度に包帯がずれていないか、確認せずに済む。みんななどのお風呂も、気を遣わなくて済む。Tシャツだって何だって、好きなように着れるんだ。何よりも——イリスにとって忌まわしく恐ろしいものでしかない——この印を見なくても済む事が、とてもとても嬉しかった。

「見苦しい。それ以上、君がみつともない泣きべそを掻き続けるようなら、この話はこれで終わりにするがね」

「す、すみません！先生」

イリスは慌てて、乱暴にローブの袖で涙を拭くと、精一杯微笑んだ。「本当にありがとうございます！私、とっても嬉しいです！」

イリスのお礼と笑みを真正面から受けたスネイプは、一瞬、眩しいものを見たように目を細めた。それから、彼女から目を逸らし、冷たく言い放った。

「君の感想など聞いておらん。薬を持ったら、早く北塔へ行きたまえ」  
イリスは薬瓶を大切そうに握り締め、最終的に「しつこい」と減点されるまで、何度もスネイプにお礼を言った。そして軽やかな足取りで研究室を出て、階段を駆け上がって行った。——イリスは疑問に思わなかった。何故スネイプが、“闇の印”を消す薬を知っていたのかを。

☆

九時前頃、イリスは北塔の階段の先にある小さな踊り場で、無事ハリー達と合流する事ができた。

「今までどこに行つてたんだい？」ロンが素つ頓狂な声で叫んだ。  
「よくこの場所がわかったね」

ハリーが感心したように言うが、イリスはもごもごと口籠るしかなかった。——何せスニジェットに変身して、ホグワーツ中に張り巡らされた排水管を通つて来たのだから。

踊り場には、階段の他に道はなかった。おかげで生徒達は、着いた方がいいものの、この先どうしたらいいのか分からず、戸惑うばかりだ。やがて、ハリーがイリスの肩をつついて天井を指差した。イリスが見上げると、そこには丸い撥ね扉があり、真鍮の表札が一つ付いている。表札には“シビル・トレローニー「占い学」教授”と打たれていた。どうやら、あそこが教室らしい。

「どうやってあそこに行くのかな？」

ハリーがそう言った瞬間、撥ね扉がパツと開いて、中から銀色の梯子がスルスル降りて来た。みんなはそれぞれ困惑した顔を見合わせながら、おっかなびつくりといった調子で昇り始める。

梯子の先は——これまで見た事のない、奇妙な雰囲気の教室だった。教室というよりも、屋根裏部屋のような内装だ。小さな丸テーブルがざつと二十卓以上は並べられ、それぞれのテーブルの周りには、縋子張りの肘掛け椅子や、ふかふかした小さな丸椅子が並べられてい



る。真紅の仄暗い灯りが部屋を満たし、窓という窓のカーテンは閉め切られている。ランプはほとんどが暗赤色のスカーフで覆われている。室内は息苦しいほど熱い上に、暖炉の火からは、気分が悪くなるほどの濃厚な香りが漂っていた。

「ようこそ」

イリス達が入口付近でまごついてっていると、暗がりの中から突然声が出た。霧のかなたから聴こえるような、儂い声だ。

部屋の奥から、トレローニー先生が姿を現した。ひよろりと痩せていて、透き通ったシヨールを肩に纏っている。シヨールや服から露出している部分——つまり、華奢な首や手首、指先は、無数の鎖やビーズの輪で覆われ、地肌が見えないほどだった。巨大な眼鏡で拡大された先生の大きな目が、みんなをじっと見つめた。

「お掛けなさい。わたくしの子供たちよ。さあ」

先生に促され、イリス達は同じテーブルの周りに座った。トレローニー先生は予言めいた事を次々と口にしながら、「占い学」のあらまし、そして今学期の大まかな予定を説明した。今年は“紅茶の葉の占い”に専念する事となり、ハリーはロンと、イリスはハーマイオニーとペアになった。イリスは壁に作り付けられた食器棚から、好きなカップを一つ選び、トレローニー先生に紅茶を注いでもらった。火傷しそうなほど熱い紅茶を急いで飲み干し、澱の入ったカップを回し、水気を切って、ハーマイオニーのカップと交換した。

「何が見えるかなあ？」

イリスはわくわくしながらカップの底を覗き込み、教科書に記載してある“茶の葉の形”を合致しているものがないか注意深く確かめた。——対するハーマイオニーは、実に疑わしげな目でカップを覗んでいる。理論的な思考を持つ彼女にとって、教科書で蓄えた知識が役に立たず、感覚や想像力、いわゆる“第六感”を働かせる事が肝要の「占い学」は、全くもって理解しがたいジャンルだった。

「子供たちよ。心を広げるのです。そして自分の目で俗世を見透かすのです！」

トレローニー先生の言葉が、妙に反響して聴こえた。——そうだ、

心を広げなきや。部屋に漂う濃厚な香りが、イリスの思考を蕩けさせ、瞑想状態へと誘っていく。やがてカップの底にへばりついている、ふやけた茶色いものが、何かの形のように見えて来た。

「えーつとね。犬が見える」

ハーマイオニーは、イリスの肩にトンと頭を預け、自分のカップを覗き込んだ。

「どこに犬がいるの？」だが、口調は訝しげだ。

「ここ。ほら、テリアみたいな犬が横を向いているでしょ」

イリスは、指先でカップの底の左側を指した。——イリスには茶の葉で出来た、横向きの小さなテリア犬が見えている。しかし、ハーマイオニーにはそう見えないらしい。彼女は小馬鹿にしたように笑った。

「見えないわよ。ただの茶の葉の塊だわ。貴方のカップもね」

「お貸しなさい」

その時、ネビルとシエーマスのペアを見ていたトレローニー先生がムツとした表情で、ハーマイオニーが持つイリスのカップを取り上げた。先生はクルクルと回しては覗き込み、それから——ハツとしたような表情になり、悲劇的な口調でイリスに言った。

「まあ。ハゲワシ」。あなたは非常に残酷な敵を持ち、そして……傘”。それに守られている。つまり、あなたはもう、敵の手中に捕えられているのです！」

「お言葉ですけど」ハーマイオニーが痛烈に言い放った。

「イリスはもう、敵の手から脱したわ。生徒ならいざ知らず……教師なら、きつと誰だって知ってる事でしょ？」

無言で睨み合うハーマイオニーとトレローニー先生の間で、激しい火花が飛び散った——ように見えた。イリスは自分の占いの内容よりも、ハーマイオニーに対して驚いていた。日頃から、教師に礼節を欠かさなかった彼女がこんな乱暴な口の利き方をする事など、今まで見た事がなかったのだ。

「んー……」

トレローニー先生が去った後も、ハーマイオニーは懨然とした態度

のままだった。イリスは少しでも彼女の機嫌を戻そうとして——何か彼女にとつて良い兆候はないかと——片目を瞑り、辛抱強くカップの底を確かめた。よくよく見ると、テリア犬の隣にはハートがあり、さらにその横には指輪があった。イリスはハーマイオニーの肩をつつき、教科書と見比べながら明るい口調で言った。

「じゃあ私の予言ね。うーんと、左側は過去、右側は未来だから。…ズバリ、ハーミーにはとっても良い友達がいる。今その人を愛してて…将来結婚するでしょう」

その瞬間、ハーマイオニーは顔が真っ赤になり、イリスのカップを落として割ってしまった。一方、隣の席では、ロンが可笑しな茶の葉の読み方をして、ハリーが堪え切れずに吹き出してしまったところだった。

「わたくしが見てみましょうね」

滑るように近づいて来たトレローニー先生が咎めるようにそう言って、ロンの手からハリーのカップを取り上げ、時計と反対周りに回しながら、じつと中を見る。

——不意に、先生が絶望の叫びを上げた。その声に驚いたネビルが自分のカップを割ってしまう音も重なり、生徒達は皆お喋りを止めて先生とハリーに注目した。先生は空いていた肘掛け椅子にドサツと身を沈め、沈痛な様子で目を閉じる。

「ああ、何て事！なんて可哀想な子！いいえ、言わない方が宜しいわ。どうか、お聞きにならないでちょうだい」

しかしそう言われると、聞きたくなくなるのが人間というものである。好奇心を剥き出しにしたティーン・トーマスが尋ねると、トレローニー先生の巨大な目がドラマチックに見開かれた。

「あなたには、グリムがついています」

「何がですって？」ハリーが尋ねた。

イリスも、ハーマイオニーと首を傾げた。——“グリム”って何なんだろう。ロンとネビルは、恐れおののいてヒツと息を詰まらせている。他の生徒達の反応も真つ二つに分かれていた。どうやら魔法界育ちの生徒は、みんな“グリム”がどんなに恐ろしいものか知ってい

て、マグル界育ちの生徒は知らないようだった。

「グリム、あなた、死神犬ですよ！」

「トレローニー先生は、肝心のハリーに話が通じなかったのがショックだったらしく、一段とヒステリックに声を張り上げた。

「墓場に取り憑く巨大な亡霊犬です！これは不吉な予兆、大凶の前兆、死の予告です！」

“死の予告”。その言葉に、みんなが青ざめた顔でハリーを見つめた。ハリー自身も、どこか思い当たる節があるかのように唇を噛み締めている。生徒達は次々にハリー達のテーブルへ集まり、ハリーのカップを好き勝手に回しては覗き込み、「グリムに見える」「いや見えない」等と批評し始めた。しかし、ハーマイオニーはハッキリとこう言った。

「グリムには見えないと思うわ。イリス、何に見える？」

ハーマイオニーが目の前にカップを突き出したので、イリスは慌てて覗き込んだ。——しかし、みんながグルグル回しすぎたせいか、茶の葉の形が大分崩れてきてしまっている。辛うじて、馬のような形だけが見えた。イリスは自信なさげに答えた。

「・・・馬に見える」

「グリムじゃなくて、馬なのね？」

「うん」

ハーマイオニーは、それ見たことか、と言わんばかりに笑った。トレローニー先生はますます嫌悪感を募らせ、ハーマイオニーをじろりと品定めした。

「こんなことを言っておめんあそばせ。あなたにはほとんどオーラが感じられませんのよ。未来の響きへの感受性がほとんどございませんわ」

こうして、ハーマイオニーとトレローニー先生との間で、本日二度目の無言の火花が散らされた。イリスがおろおろとその様子を見守っているうちに、授業は終わった。

☆

「占い学」の次に「変身術」の授業を終えた後、四人の雰囲気は少し

明るくなっていた。——マクゴナガル先生が、衝撃の事実を伝えてくれたのだ。

マクゴナガル先生曰く——『トレローニー先生は、毎年一人の生徒の死を予言している。だが、いまだに一人として死んでいない』との事。つまりハリリーのグリム騒動は、先生が最初のクラスを迎えるに当たったの、お気に入りの儀式のようなものだったのだ。

「ロン、元気出して」

四人は大広間で昼食を取っていた。ハーマイオニーが、シチューの大皿をロンの方に押ししながら、明るい声で言った。

「マクゴナガル先生が仰った事、聞いたでしょ？」

しかしロンは、まだグリムの事が頭から離れないようだった。よそつたシチューに口を付けようとせず、青ざめた顔で黙っている。やがて、ロンは深刻な表情で口を開いた。

「ハリー。君、どこかで大きな黒い犬を見かけたりとかしなかったよね？」

「見たよ」ハリーはあつさり答えた。

「ダーズリーの家から逃げたあの夜、見たんだ」

イリスは驚いて、シチューに入っていた人参を喉に詰まらせてしまい、咳き込んだ。——だからハリーは、グリムの事を言われた時、あんな表情をしていたんだ。ロンは恐怖の余り、ガタガタと震え出した。

「ハリー、それは、それは良くないよ。グリムは本当にいるんだよ！僕のおじさんがあれを見たんだ。そしたら、二十四時間後に死んじゃった！」

「偶然よ！」

しかしハーマイオニーは、至って冷静だ。イリスの背中を摩りながら、かぼちゃジュースをコップに注ぎ、飲ませつつ言い放った。

「君、自分の言ってることがわかってるのか！」ロンは熱くなり始めた。

「グリムと聞けば、たいがいの魔法使いは震え上がってお先真っ暗なんだぜ！」

そして、最早日常茶飯事となったロンVSハーマイオニーの、口喧嘩のゴングが鳴った。無事人参をお腹の中に送り込んだイリスは、ハリーの隣に座り、彼を励ますために優しく言った。

「大丈夫だよ。ハリー。私が見た時はね、馬に見えたんだ」

「本当かい？」

ハリーは少し元気になったようだった。イリスは嬉しくなって、「占い学」の教科書を開いて見せた。

「うん。・・・ほら、馬は望み事が叶う兆候だって書いてある。だからきつと、今年が良い事あるよ」

「君の予言を信じるよ」ハリーは愛おしげにイリスの頭を撫でた。

二人が仲睦まじくしている一方で、ロンとハーマイオニーの戦いは、今まさにクライマックスを迎えようとしていた。

「トレローニー先生は、君にまともなオーラが無いって言ってた！君だったら、たった一つでも自分がクズに見えることが気に入らないんだ！」

ロンの言葉は、ハーマイオニーの弱みを突いた。

——突然大きな音がして、イリスとハリーは飛び上がった。驚く事に、ハーマイオニーが教科書でテーブルを叩いたのだ。余りの勢いに、肉やら人参やらがそこら中に飛び散った。

「占い学」で優秀だつてことが、お茶の葉の塊に死の予兆を読む振りをする事なんだつたら、私、この学科といつまでお付き合い出来るか自信がないわ！あの授業は「数占い」に比べたら、全くのクズよ！」

ハーマイオニーはカバンを引つ掴み、ツンツンしながら出て行った。ロンはしかめつ面をしながら、ハリーとイリスにぼやいた。

「あいつ、一体何を言ってるんだ？まだ一度も「数占い」の授業に出てないのにさ！」

見当もつかず、ハリーは肩を竦める。イリスはちょうど近くにあったアップルパイを四つ、ナプキンに包むと、ハーマイオニーの跡を追った。

豊かな栗色の髪が荒々しく揺れる後ろ姿に追いつきながら、イリスはハーマイオニーのかつての言葉を思い出していた。「数占い」と「占

い学」は同じ時間に始まる。『詳しい事は言えない』ハーマイオニーはそう言った。だから、きつとこれは聞かない方が良い事なんだろう。

イリスはやつとのこととでハーマイオニーの隣に追いつくと、まだ怒りが収まらない様子の親友に、ニッコリ笑ってアップルパイの入った包みを差し出した。

「ねえ、ハーマミー。食後のデザートを忘れてるよ。中庭でパイでも食べない？」

ハーマイオニーは毒気を抜かれてしまったような表情でイリスを見つめた後、軽く吹き出した。二人は仲良く中庭に出て、青々とした芝生の上に座り込んだ。芝生の上で包みを広げたイリスに、ハーマイオニーが尋ねた。

「イリスったら。貴方、いくつ食べるつもりなの？」

「ハーマミー。私が予言をしましょう」

待ってました、と言わんばかりに、イリスは冗談めかして言った。――イリスが四つもアップルパイを取ってきたのには、ちゃんとした理由があるからだ。

「近い未来に、ハリーとロンもここに来るでしょう。だから、アップルパイの数は四つで良いのです。そして、ロンとハーマミーは仲直りをすることでしょう！」

「なーによ、それ！」

ハーマイオニーは朗らかに笑った後、イリスの後ろを見て、アツと声を上げた。そして、イリスの予言は現実となったのだった。

## Act 6. ロックハート

アップルパイを食べ終えた四人は、禁じられた森の端にあるハグリッドの小屋を目指して歩いた。先頭を歩くロンが、唇の端っこに付いたパイの欠片を舐め取りながら、ふと前方を見て、ゲツと呻き声を上げた。

数メートル先に見慣れたスリザリン三人組——ドラコ、クラッブ、ゴイルがいる。三人はいかにも意地悪そうな顔をして、ゲラゲラ笑い合っていた。

気まずそうに目を逸らすハリー達に反して、イリスは穏やかな笑みを浮かべた。——ドラコはデイメンターの影響による気分障害から、ちゃんと快復したみたいだ。本当に良かった。そう思い、彼女は安堵のため息を零した。

「魔法動物飼育学」の授業は、グリフィンドールとスリザリンの合同授業だった。ハグリッド先生が、小屋の外で生徒達を待っている。いつものモールスキンのオーバーを着込み、足元にはファンングを従えていた。早く始めたくてうずうずしている様子が、遠目からでも伝わって来る。

ハグリッドは興奮する余り、いつもより上擦った声で、生徒達を禁じられた森の近くにある放牧場のようなところへ連れて来た。中は、動物一匹いない。

「みんな柵の周りに集まって、ちゃん見えるようにしろよ！」ハグリッドはうきうきしている。

「さーて、イッチ番先にやることあ、教科書を開くこった」

「どうやって開けばいいんです？」ドラコの冷たく気取った声でした。

ドラコはカバンから取り出した教科書を、みんながよく見えるように掲げ持った。頑丈そうな紐で、グルグル巻きにしてある。

それもその筈——ハグリッド指定の教科書「怪物的な怪物の本」は、“名は体を表す”という諺の通り、まるで本物の怪物のように暴れ回る本だった。その凶暴さたるや、読むのはおろか、開く事さえ不可能なほどだ。だから購入した生徒達はみな例外なく——店員が本を何



とか抑え込んでくれている間に——ベルトで縛ったり、きつちりした袋に押し込んだりしなければならなかった。

意外な事にイリスもその一人で——どれだけ辛抱強く耳を傾けても、「怪物本」の唸り声が人間の言葉に変換される事は無かった——スペロテープでグルグル巻きにした本を取り出した。みんなのその様子を見て、ハグリッドはがっくりと肩を落とした。

「だ、だーれも教科書をまだ開けなんたのか？」

クラス全員がこっくり頷いた。イリスはハリーと、不安そうに視線を交し合った。ハグリッドの授業の雲行きが、段々怪しくなってきたように感じられたのだ。

不意にドラコが馬鹿にしたように笑って、イリスを指差した。

「待ってください、先生。ゴントなら知っているのでは？ 彼女は、獣と話が出来るようですし」

その言葉は、嘲りに満ちていた。イリスが弾かれたように振り返ると、ドラコの嫌らしい笑みはますます濃くなった。ドラコはテープで封じた本が、イリスの手にあるのを知っている。その上で、彼女を辱めたのだ。

——嫌だ、そんな目で見ないで。イリスの心は悲しみ一色で染まり、涙がドツと溢れた。その様子を見たハリー達は、もうそろそろドラコに対して以前のようにブチ切れていいのか、それともまだ我慢するべきなのか判断しかね、何とも形容しがたい表情を突き合わせた。

ハグリッドは、めそめそ泣き始めたイリスを見て、取り成すように慌てて言った。

「アー、じゃあ教科書の開き方だが、撫ぜりやーいいんだ。ほれ、イリス。貸してみろ」

ハグリッドはイリスの教科書を取り上げ、頑丈に縛っていたスペロテープをビリリと剥がした。本はすぐさま口を開けて噛み付こうとしたが、ハグリッドの巨大な親指で背表紙を一撫でされると、ブルツと震えて普通の本のように大人しくなった。

「ああ、僕たちって、なんて愚かだったんだろう！」ドラコが鼻先で笑った。

「撫ぜりやーよかったんだ！どうして思いつかなかったのかねえ！」  
「やめろ、マルフォイ」ついにハリーが、静かな苛立ちを含む声で言った。

ハグリッドは見るからにうな垂れている。グリフィンボール生とスリザリン生の間で、ピリピリと張り詰めた空気が流れた。

ドラコは、ハグリッドが貶された事に心を痛め、ますます憔悴していくイリスを眺め、満足気に笑った。何故かは分からないが、イリスを傷つけると気持ちが良かった。

——もつと痛めつけてやるべきだ。ドラコは心からそう思った。だって僕はもつと酷い事を——待てよ、“酷い事”って何だ？

しかし彼は、これ以上思考を巡らせる事が出来なかった。また、あの頭痛が襲ってきたのだ。ドラコは眉をしかめて教科書をクラブに投げ渡し、背表紙を一撫でさせた。

「えーと、そんじゃあ」暫くしてハグリッドは気を取り直したが、口調は随分とたどたどしい。

「教科書はある、と。それで、今度は魔法生物が必要だ。ウン。そんなじゃ、俺が連れてくる。待つとれよ……」

ハグリッドは大股で森へと入り、姿が見えなくなった。途端に生徒たちはペチャクチャお喋りを始める。

無意識に俯いていたイリスは、ふと暖かい感触が背中を包むのを感じ、ゆっくり顔を上げた。——ハリーが、自分の肩を抱いている。そして「大丈夫？」と優しく声を掛けてくれた。親友の気遣いが、心に沁み渡っていく。イリスは涙を拭いて、微笑みながら頷いた。

一方、その様子を盗み見たドラコは、言いようのない怒りの感情が、沸々と湧き上がってくるのを感じていた。強い違和感が、その後を追いかける。彼は聞こえよがしに、イライラと声を張り上げた。

「まったく、この学校はどうなってるんだろうねえ。あのウドの大木が教えるなんて、父上に申し上げたら、卒倒なさるだろうなあ……」  
「やめろって言ってるだろ」ハリーは声を荒げた。

ドラコの狙い通り、イリスの儂い笑顔は見事に砕け散った。そしてこちらをチラッと掠め見るなり、彼女は青白い顔で再び俯いてしまっ

た。

——いい気味だ。だが、まだ足りない。ドラコの心から、暗い情念が噴き出した。

ドラコにとってイリス・ゴーントは、視界に入るだけで、不可解な感情や痛みを自分に押し付ける、嫌な奴だった。しかし、彼女が自分以外の人と仲良くするのを見るのは、もっと嫌だった。

“裏切られた”、“捨てられた”、“許さない”——何の関連性もない気持ちだが、次々と湧き上がっては、形をなくして消えていく。ドラコはイリスをどこか人気のない、誰にも邪魔をされないとこころへ連れ去りたいと思った。そして、存分に痛めつけるのだ。だって僕にはその権利がある。僕だけに——“僕だけに”？しかしまたしても彼の思考は、すぐさまやって来た頭痛に、ドロリと溶かされた。

不意にラベンダーが放牧場の向こう側を指差して、大きな歓声を上げた。イリスも思わずその方向を見て、息を飲んだ。

イリスが今まで見た事の無い、奇妙な生き物が十数頭、早足でこちらへ向かってくる。胴体、後ろ脚、尻尾は馬で、前脚と羽、そして頭部は巨大な鳥のように見えた。鋼色の残忍な嘴と、大きくギラギラしたオレンジ色の目が驚そっくりだ。前脚の鉤爪は十五、六センチと、見るからに殺傷力がありそうだ。それぞれ分厚い革の首輪をつけ、それを繋ぐ長い鎖の端をハグリッドが全部まとめて握っていた。

ハグリッドは鎖を振るい、ヒツポグリフたちをイリスたちのいる柵の方へと追いやった。イリス以外、みんながじわつと後ずさりした。「ヒツポグリフだ。美しかろう、え？」

ハグリッドは上機嫌で言った。確かにヒツポグリフは美しかった。輝くような毛並みが羽から毛へと滑らかに変わっていく様子は見応えがある。それぞれ色が違い、嵐の空のような灰色、赤銅色、赤ゴマの入った栗毛、漆黒など、色とりどりだ。

「こんにちは」

イリスはおずおずと、一番近くにいた灰色のヒツポグリフに話しかけた。ヒツポグリフはじつとイリスを見つめた後、大きな嘴を静かに開いた。

《君に悪意はない。そして、礼節も弁えているようだ。・・・ああ、こんにちは》

ヒツポグリフは頭を下ろし、柵の間から嘴を覗かせた。イリスが嘴を優しく撫でると、ヒツポグリフは気持ち良さそうにとろりと目を閉じる。ハグリッドは飛び上がらんばかりに喜んだ。

「よくやった、イリス！お辞儀なしで心を通わせるなんざ、お前さんぐらいのもんだ。えらいぞ、バックビーク！」

イリスは照れ臭そうに微笑んだ。バックビークと呼ばれたヒツポグリフは、誇らしげに何度か蹄を鳴らした。ハリー達を筆頭に、グリフィンドールの生徒から喝采が上がる。

「決めた！僕、君の後ろにいるよ！」

イリスの背後にサツと隠れながら、ロンが叫んだ。イリスが知らない間にヒツポグリフと心を通わせていた事で、すっかりいつもの調子を取り戻したハグリッドは、両手を揉みながら嬉しそうに言葉を続けた。

「さーて、そんなじゃ。今回の授業は、イリスが手本を見せてくれたように・・・『ヒツポグリフに触ること』だ。まずイツチ番最初に知っておかなきゃなんねえのは、”ヒツポグリフは誇り高い”ってこと。・・・イリス、そいつはお前さんに何て言ってた？」

急に話題を振られ、イリスはもたつきながらも、チラリとバックビークを見て、口を開いた。

「えっと・・・”私に悪意はない”、”礼節も弁えてる”って言った・・・言っていました、先生」

「その通り！」ハグリッドは頷いた。

「ヒツポグリフにやあ、”こつち側に悪意がない”ってことを見せなきゃなんねえ。相手の誇りを傷つけねえように、”礼儀正しく”な。そのために必要なのは、お辞儀だ。お辞儀をすりゃあ、どんな生き物だって、そいつが礼儀正しくて悪意がないってーことが分かる。・・・そんで気を付けろ、ヒツポグリフはすぐ怒る。間違ってもこいつらの目の前で、侮辱するようなことだけはしちゃんねえぞ」

ハグリッドは真剣な表情で、ヒツポグリフと触れ合うための手順、

諸注意を説明した。

しかしドラコはろくに話も聴かず、クラブやゴイルと何やらヒソヒソ話をしている。それを見咎めたハリーは、ロンやハーマイオニーと不安そうに視線を交わし合った。どうやったたらうまく授業をぶち壊しにできるか、企んでいるように見えたのだ。

「よーし、誰が一番乗りだ？・・・ああ、お前さんはもういいぞ」

ハグリッドが、手を挙げたイリスに丁重に断りを入れてから、嬉しそうに聞くと、みんな答える代わりにザッツと後ずさりした。ヒツポグリフは——イリスと仲睦まじくしているバックビーク以外——鎖に繋がれている事自体が気に入らないのか、猛々しい首を振りたてたり、たくましい羽をばたつかせたりして、落ち着かない様子だったからだ。

やがて、誰も名乗りを上げないのを見て、不安そうな顔をするハグリッドを見兼ね、ハリーが手を挙げた。

「僕、やるよ」

「頑張つてね、ハリー」

イリスは元気づけるように、ハリーの背中を軽く叩いた。仲睦まじい二人の様子を見て、ドラコが忌々しく舌打ちする。

ハリーは放牧場の柵を軽々と乗り越え、バックビークと対峙した。慎重にバックビークと視線を合わせ、ゆつくりとお辞儀をする。すると驚いたことに、バックビークも鱗に覆われた前脚を折り、お辞儀のような恰好をした。どうやらハリーもイリス同様、バックビークに認められたようだ。

「やったぞ、ハリー！」ハグリッドは狂喜した。

「よーし、きつとそいつは、お前さんたちを背中に乗せてくれると思うぞ」

“お前さんたち”？思わずキョトンとするイリスの頭上に、大きな影が差した。——ハグリッドだ。ヒョイとイリスを片手で抱きかかえ、バックビークの背中に乗せた。

「わ、わ・・・！」

イリスは何度も滑り落ちそうになり、必死でバランスを取ろうと努

力した。何しろ目の前は一面の羽根で覆われ、ツルツルしていて、どこを掴んだらいいのかも分からない。そうこうしているうちに、巨大な翼の付け根に足を掛けて、ハリーがイリスの前にひらりと飛び乗った。さすが現役のシーカーだけあって、抜群の運動神経とバランス能力を有している。

《翼に足をかけるな。飛べなくなる》

「ご、ごめんなさいっ」

バックビークに注意され、イリスは思わず足を退けてから、考え込んだ。――“飛べなくなる”？ということとは、今から飛ぶのか？いやいや、そんなのあり得ない！イリスは不穏な考えを振り払おうと、首を横に振った。だって手綱も何も無い、不安定な状態だもの。まさかバックビークの言う通り、このまま飛ぶなんて――。

「二人共準備はいいな？よし、そーれ行け！」

しかし、イリスの恐れは現実となった。ハグリッドは二人の返事をろくに聞こうともせず、バックビークの尻をバシンと叩き、飛行の合図を送ったのだ。

「待って、ハグリッド！う、嘘だろ・・・っ」

ハリーの狼狽した声は、バックビークが広げた両翼の、力強い羽ばたき音に掻き消された。覚悟を決めたハリーは、バックビークの首に両腕をしつかりと回し、後ろにいるイリスに「僕に掴まって！」と怒鳴った。イリスが無我夢中でハリーに抱き着いた瞬間、バックビークは大空へと舞い上がった。

バックビークは二人を乗せて、放牧場の上空をゆつたりと一周した。イリスはいつ振り落とされるかと、ずっとヒヤヒヤしっぱなしだった。どう頑張っても足が翼に引つかかるし、ツルツルした羽や毛のおかげで、踏ん張る事もできない。リドルがくれた空飛ぶ絨毯の旅とは大違いだった。イリスは持てる力の最大限を使い、目の前のハリーにギョツとしがみつくしかなかった。

一方のハリーも、バックビークと行く空の旅の不便さを身に染みて感じていた。箒とヒツポグリフどちらが好きかと聞かれれば、間違いなく前者だと答えるだろう。

しかしハリーは、この空の旅を嫌いにはなれなかった。——背中を覆う心地よい温もりに、幸せを感じていたからだ。バックビークが気ままに旋廻する度に、イリスは悲鳴を上げて、ますますハリーにしがみつく。もっとバックビークが乱暴な飛行をすればいいのに。ハリーは不謹慎にも、そう願った。

やがて、バックビークは地上へ戻った。イリスは心底安心した表情で、ハリーは少し残念そうな表情で、それぞれバックビークから降りて来ると、生徒達から拍手と歓声が上がった。

「よくできた、二人共！さて、他にやってみたいもんはあるか？」

二人の成功に励まされ、みんなおずおずと放牧場へ入ってきた。ハグリッドは手際良くヒツポグリフを解き放ち、生徒達への指導を始める。ロンとハーマイオニーは、イリスとハリーの見えるところで、栗毛のヒツポグリフとお辞儀の練習をした。

「フン。簡単じゃないか」

不意に近くで気取った声がして、イリスは振り返った。ドラコがクラップとゴイルを従え、バックビークの嘴を撫でている。どうやら彼も無事認められたらしい。——しかし、バックビークを見る彼の目は嘲りに満ちていた。嘴を指先でコンツと軽く弾き、馬鹿にしたような口調でこう言い放つ。

「お前、全然危険なんかじゃないなあ。そうだろ？醜いデカブツの野獣君」

《私を侮辱したな！》

ドラコの行いは当然、バックビークの逆鱗に触れた。激昂したバックビークは鋭い鉤爪を振り上げ、タブーを冒したドラコへ襲いかかる。

鉤爪はドラコの腕を浅く切り裂いた。彼は情けない悲鳴を上げながら地面に転がり、ローブがみるみるうちに血で染まっていく。

イリスの脳内で、デイメンターに呼び起こされた“あの忌まわしい記憶”が鮮やかにフラッシュバックした。パニック状態になったイリスは、何も考えずにバックビークの首に縋り付いた。

「やめてえー！乱暴しないで！」

《黙れ！邪魔をするな！》バツクビークが吼えた。

「イリス、何しとる！お前さんは離れとけ！」

ハグリッドは必死の形相で、イリスの襟首を掴んで後方へ引き離れた。そしてバツクビークに首輪を付けるため、奮闘し始めた。もうイリスだけでなく、クラス中がパニック状態に陥っている。

「死んじやう！僕死んじやう！」

ドラコは傷ついた腕を抑えながら、泣き喚いた。腕には長い切り傷があり、そこから血がドクドクと流れ、草を伝って地面に染み込んでいく。イリスはドラコに“癒しの呪文”を掛けようと、杖を引き抜いて歩み寄った。しかしそれを阻むように、誰かがイリスを軽く突き飛ばした。

「ドラコっ、大丈夫?!」

——パンジーだった。蒼白な表情でドラコに縋り付き、ハンカチで傷口を抑えようとしている。生徒達が、二人の周りにワツと集まった。イリスは輪の外から、二人の様子を見守る事しか出来ない。

違う。イリスの青い目が不安定に揺らめいて、ポロツと涙が零れ落ちた。ドラコの傍にいるのは、あの子じゃない。私の筈なのに。

不意に大気が魔法力を帯び、イリスのやり場のない思いと同化するかのように、熱を上げていく。涙でぼやける視界の中で、ハグリッドがドラコを抱きかかえ、城へ向かって駆け上がっていくのが見えた。

「生徒に怪我をさせるなんて、信じられない！すぐクビにすべきよ！」  
パンジーが涙ながらに訴えた。

「マルフォイが悪いんだ！」  
デイーンがきつぱり言い放つ。

「ねえ、何だか暑くない？」  
ネビルがおどおどと言った。

ネビルの言う通りだった。何時の間にか周囲の気温は、まるで真夏に戻ったかのような熱気を帯びていた。生徒達は額に浮かび始めた汗を拭い、首を傾げながら、一人一人城へと戻っていく。

ハリーは、茫然と突っ立ったままのイリスを促そうと、肩に手を掛け——それから、驚いて悲鳴を上げた。

「イリス。とりあえず、城へ……熱ッ！」

「……えっ？」



——イリスの体温は、炎のように熱くなっていた。

イリスの“血の戦い”は現在も進行中であり、魔法力は増大の一途を辿っている。今の彼女の体には、一人前の魔法使いを軽く凌駕するほどの魔法力が循環していた。しかし十三歳の平凡な少女にとって、その力はまだ重すぎた。

かつてイリスの魔法力を育て上げ、完全に制御していたリドルは、永久に消え去った。完璧な司令官を失った魔法力は、少しずつイリスに逆らい始めた。イリスが精神的なストレスを強く感じ、激しく心を乱す度——コップに並々と注がれた水が、少しの振動で零れるように——体から溢れ出し、彼女の意志と関係なく暴走するようになってしまったのだ。

幸い、ハリーの声で注意を取り戻したイリスの体温は、一瞬で元に戻った。イリスは、ハリーが赤くなった手をフーフーと必死で冷ましているのに気づき、眉をひそめた。

「大丈夫、ハリー？どうしたの？」

ハリーは何も答えず、ただ確かめるように、そっとイリスの頬に触れた。——ちゃんとした人並みの暖かさだ。さっきのは、気のせいだったのだろうか。ハリーは訝しんで、軽い火傷のあとが残る自分の手を見つめた。

☆

その日の夕食は、四人の喉をろくに通らなかつた。ドラコはいまだスリザリンのテーブルへ戻っておらず、教職員テーブルにハグリッドの姿もない。

「ドラコ、大丈夫かな」

イリスが所在なげにマッシュポテトを口に運びながら、心配そうに言った。ハリーは、嫉妬の炎が心を軽く焦がしていくのを感じながら、少し乱暴な口調で答えた。

「そりゃ、大丈夫さ。マダム・ポンフリーは、切り傷なんてあつという間に治せるよ」

イリスは安心し、口の中のポテトを飲み込んだ。医務室の守護神であるマダム・ポンフリーの腕は確かだ。イリスも様々な病気や怪我を

短期間で治療してもらったことがある。ロンは頭を無造作にガリガリ搔きながら、困ったように言った。

「だけど、ハグリッドの最初の授業であんなことが起こったのは、やっぱりマズイよな？」

「ハグリッドをクビにしたりしないわよね？」ハーマイオニーも不安そうだ。

「そんなことしないといいけど。でも、マルフォイのやつ、引つ掻き回してくれたよなあ。あいつ、君がいないと、ホントのホントにクズ野郎だ！」

ハーマイオニーが眉をしかめて暴言を窘めるが、ロンは「ホントの事じゃないか！」と譲らない。落ち込むイリスの皿に、大きめに切り分けたステーキ・キドニー・パイを乗せ、ハリーが提案した。

「これを食べ終わったら、ハグリッドのところへ行かない？ たぶん、家にいるはずだ」

☆

まだ湿り気を帯びたままの芝生が、黄昏の中でほとんど真っ黒に見えた。ハグリッドの小屋へ辿り着き、ノックをすると、中から「入ってくれ」とうめくような声があった。

ハグリッドはシャツ姿で、洗い込まれた白木のテーブルの前に座っていた。フアングが慰めるように、彼の膝に頭を載せている。

一目見ただけで、相当深酒していることが分かった。バケツ程の大きさのある錫製のジョッキを片手に、ハグリッドは焦点の合わない目付きで四人を見た。

「こいつぁ新記録だ」ハグリッドはどんよりと言った。

「一日しかもたねえ先生なんざ、これまでいなかっただろう」

「ハグリッド！ まさか、クビになったんじゃ・・・」ハーマイオニーが悲鳴を上げた。

「いんや、まだだ。だけんど、時間の問題だわ、な。マルフォイのことで・・・」

「あいつ、そんなにひどいの？」ロンが咎めるように聞いた。

「マダム・ポンフリーができるだけの手当てをしたんだが、マルフォイ

はまだ疼くと言つとる。包帯グルグル巻きで、うめいとる」ハグリッドは呂律が回っていない。

「ふりをしてるだけだ」

ハリーが即座に言った。——もうハリーとロンは、ドラコとお互いをいがみ合う昔の關係に、すっかり戻ってしまつたようだった。

「学校の理事たちにも知らせがいった。俺が最初から飛ばし過ぎたつて、理事たちが言うとる。ヒップグリフはもつと後にすべきだった。みんな、俺が悪いんだ」

悲しみに暮れるハグリッドは、いつもより一回りも二回りも小さく見えた。イリスは大好きなハグリッドを、何とか元気づけてやりたかつた。ハグリッドの手に自分の両手を重ね、真剣な表情でこう言つた。

「ハグリッドは悪くない。悪いのは、ドラコの方だよ。侮辱したりすると危ないつて、ハグリッドは最初にちゃんと注意してた。バックビークも、ドラコが侮辱したから怒つたんだよ。注意を守らなかつたドラコが悪いよ。それに、ハグリッドの授業はとっても面白かつた。私、次の授業が楽しみだよ。だから元氣出して」

「そうだよ。ハグリッド、心配しないで。僕たちがついてる」

ロンが明るい口調でそう言うつと、ハリーとハーマイオニーも口々にハグリッドを激励しながら、彼の傍に近寄つた。

ハグリッドの真つ黒な黄金虫のような瞳から、涙がボロボロ零れ落ちた。彼は四人を引き寄せ、骨が砕けるほど強く抱き締めた。やつこのことで解放された四人が、胸をさすりながらフラフラと元の席に戻ろうとすると、ハグリッドはやおら席を立ち、小屋の外へ出た。

「な、なにしてるの？」ハリーが弱々しく聞いた。

「水の入つた樽に顔を突つ込んで」窓の外を覗いたロンが、喘ぎながら言つた。

やがて長い髪と髭をびしょ濡れにしたハグリッドが戻つてきた。犬のように頭をブルブルツと震わせ、水気を飛ばした後、ハグリッドは嬉しそうに言つた。

「なあ、お前さん達。会いに来てくれてありがとうよ。本当に俺……」

そこでハグリッドは急に立ち止まり、目を限界まで見開いて、イリスとハリーを交互に見つめた。まるで二人がいるのに、今初めて気づいたかのように。

「お前さん達、一体何しちよる！えっ?!」

ハグリッドが余りに大きな声を出したので、みんな驚いて三十センチも飛び上がった。その様子を気にも留めず、ハグリッドは呆気に取られる四人を強引に立ち上がらせ、城へ引っ立てた。

「二人とも、暗くなつてからウロチョロしちゃいかん！ロン、ハーマイオニー！お前さん達も、この二人を出しちやいかん！ええか、もう二度と、暗くなつてから俺に会いにきたりするんじゃないやねえ。俺にそんな価値はないんだ」

☆

ドラコは木曜日の昼頃、グリフィンドールとスリザリン合同の「魔法薬学」の授業が、半分ほど終わった頃に姿を見せた。包帯を巻いた右腕を吊り、ふんぞり返って地下牢教室へ入って来る様子は、まるで恐ろしい戦いに生き残った英雄のようだ。ハリーとロンは腹立たしげに互いの顔を見合わせた。イリスはドラコのその様子を見て安心した。——本当に大怪我をしたならば、そんな余裕綽々の顔でいられない筈だからだ。

「座りたまえ、さあ」スネイプが明るく言った。

『座りたまえ?』ロンは目をギョロリと回し、ロバクでハリーに訴えた。もし遅れて来たのが自分達だったら、『座りたまえ』なんて言うどころか、厳罰を科すに違いないと思つたからだ。

ドラコはクラブとゴイルの隣ではなく、ハリーとロンのテーブルに自分の鍋を据えた。それから自分の「縮み薬」のための材料を二人に切らせるようにと、スネイプに頼んだ。あつという間に険悪なムードに包まれていく三人の様子を、イリスがハラハラと見守つていて、隣の席にいるネビルに肩を弱々しく突かれた。

「い、イリスー!どうしよう!色がおかしいんだ!」

イリスはネビルの鍋をそつと覗き込んで、首を傾げた。本来なら明るい黄緑色になる筈の水薬が、なんとオレンジ色になつてしまつてい

た。

——「魔法薬」は手順だけでなく、材料の数や量ですら、ほんの少し間違えただけで失敗作となるか、運が良ければ全くの別物となる。恐らくネビルも何かを間違えてしまったのだろう。しかし失敗は誰にだってある。イリスも補習授業の時は、数えきれないほど失敗作を生み出す。そうしながら、少しずつ成功への道を辿っていくのだ。

イリスは今までの補習で得た知識をフル回転させ、やがて水薬がオレンジ色になった原因を特定した。——つまりこの原因は、“ネズミの脾臓とヒルの汁を多く入れてしまった事”にある。

「ネビル。ネズミの脾臓を……」

「フム。オレンジ色か。ロングボトム」

いきなり背後から凍り付くように冷たい声が降って来て、二人はピタツと動きを止めた。スネイプはイリスの頭上から手を伸ばし、ネビルの鍋から柄杓で薬を掬い上げ、高々と流し入れて、みんなが見えるようにした。

「オレンジ色。君、教えて頂きたいものだが、君の分厚い頭蓋骨を突き抜けて入っていくものがあるのかね？吾輩ははつきり言った筈だ。ネズミの脾臓は一つでいいと。聞こえなかったのか？ヒルの汁は少しでいいと。明確に申し上げたつもりだが？いったい吾輩はどうすれば君に理解して頂けるのかな？」

ネビルは赤くなって小刻みに震えている。今にも涙を零しそうだ。しかし不思議な事にスネイプは、ネビルがどんなにひどい失敗——それこそ、“落ちこぼれ”時代のイリスに匹敵する位の大事件を引き起こしても——こんな風にクラス中の晒し者にしたたり、罰則を命じたりするものの、補習授業に参加させる事は決してしなかった。今回もスネイプは『授業の最後、トレバーにネビルの失敗作を飲ませる』と脅しついただけだ。そして恐怖で息も出来ないネビルを残し、その場を去っていった。

「助けてー！トレバーが、トレバーが死んじゃうー！」ネビルはパニック状態だ。

「ネビル、落ち着いて。大丈夫だよ」

イリスは一先ず、ネビルを落ち着かせる事にした。今の状態では、たとえ正しいやり方を教えても、また失敗してしまう可能性が高いからだ。そしてイリス自身も注意しなければならぬ。——以前ネビルを助けようとした時、それを見咎めたスネイプに減点を喰らってしまったのだ。イリスはなるべく唇を動かさずに、小さな声で言った。「ネビルは「魔法薬学」が嫌い？」

ネビルはおどおどと周囲を見回し、スネイプが近くにいない事を確認してから、自信なさげに呟いた。

「き、嫌いじゃないけど……。スネイプ先生が、怖いんだ。だから僕、余計にへまをしちゃって」

「確かに先生は怖いよね」

イリスとネビルは、申し訳なさそうにニヤツと笑い合った。

「でもそのおかげで、気を引き締めて作業するから、大きな事故をしなくてすんでるんじゃないかな。って、思うんだ。「魔法薬」は出来上がるまでの工程が、とっても複雑で危険なもの。誰だって間違えて当たり前だよ。私も、補習で何回もミスしちゃうもの」

イリスが朗らかにそう言うのと、ネビルは安心したように肩の力を抜いた。顔色も少しずつ良くなってきたみたいだ。イリスはネビルの前に教科書を置いて、「縮み薬」のページを開いた。

「ネビル、教科書をよく読んでみて。少しずつでいいから、今までの自分の手順を思い出してみて。……大丈夫。ネビルは「薬草学」が得意で、色んな植物を覚えてるじゃない。きっと思い出せるよ」

「うーん……」

随分と冷静になってきたネビルは、教科書を指で辿り、アツと声を上げた。

「僕、ヒルの汁を大きじ三杯も入れちゃった。ネズミの脾臓も二つ。……どうしてこんなことしちゃったんだろう？」

「たぶん緊張してたからじゃないかな。これからは、事前にしっかりと薬の材料や、手順を予習しておくのがいいよ」

こうしてネビルはイリスの指導の下、終業時間ギリギリで無事、水をオレンジ色から明るい黄緑色へ戻す事に成功した。スネイプは

生徒達をネビルのテーブルへ集め、トレバーに薬を飲ませたが、トレバーは当然のようにオタマジャクシの姿に縮んだだけだった。グリフィンドール生は拍手喝采だったが、スネイプは実に面白くないという顔でトレバーを元のカエルに戻した後、憎々しげに言い放った。

「グリフィンドール、十点減点。出しやばるなど再三警告してきた筈だ、ゴント。授業終了」

スネイプは、ネビルの水薬の色が通常よりも少し明るくなっているのを見た瞬間、イリスの介入を見抜いた。

——スネイプは前学期末の補習授業の段階で、すでに三年次の「魔法薬」の内容をイリスに予習させていた。その際、「縮み薬」を本当に正しく調合するには、ネズミの脾臓を「教科書通り」に一つ入れるのではなく四分の三だけ入れるのが肝要だと、イリスに教えていた。そうする事で、効能は変わらず口当たりだけがまろやかになり、完成色はより明るい黄緑色になるのだ。——今のネビルの薬のように。

グリフィンドール生達から、笑顔が一瞬で消え去った。みんなはイリスとネビルに同情的な視線を送り、スネイプへ反感を込めた視線を叩きつけた。それをものともせず、スネイプは平然とした態度で杖を振り、地下牢教室の後片づけを始める。

ネビルが——まるでデイメンターの接吻を受けたかのように——魂の抜けた顔で立ち竦んでいる一方で、イリスは比較的ケロツとしていた。二年間の補習授業を通して、彼女は「魔法薬学」の豊富な知識だけでなく、スネイプに対する耐性も身に付けていた。イリスは茫然自失状態のネビルの片付けを手伝ってやりながら、彼を一生懸命慰める事に終始した。

イリス達は地下牢教室を出て、大広間へ向かうため、玄関ホールへの階段を昇った。——ハリーは真剣な表情で、何かを考えながら歩いている。ロンはさっきの事がまだ腑に落ちない様子で、怒り狂っていた。

「水薬がちゃんとできたからって十点減点か！君も黙ってなんかないで、ネビルが一人でやりましたって言えばよかったのに！ハーマイオニーも何か言って・・・アレ？」

後ろを向いたロンが、素つ頓狂な声を上げた。イリスとハリーもつられて振り返り、一様に首を傾げる。——さつきまで一番後ろを歩いていたはずのハーマイオニーの姿が見当たらないのだ。階段の一番上で立ち止まった三人を追い越し、ハツフルパフの上級生たちが大広間へと駆けていく。

「どこに行っちゃったんだ？すぐ後ろにいたのに」ロンも首を傾げた。暫くして、ハーマイオニーが階段を昇って来た。片手にカバンを抱え、もう一方の手で何かをローブの前に押し込んでいる。

「どうやったんだい？」

ロンが不思議そうに聞くと、三人に追いついたハーマイオニーが息を弾ませながら「何を？」と問い返した。

「君、ついさつきは僕らのすぐ後ろにいたのに、次の瞬間、階段の一番下に戻ってた」

「え？えつと、私、忘れ物を取りに戻ったの。アッ！あーあ・・・」

ハーマイオニーが小さく悲鳴を上げた。カバンの縫い目が、急に破けてしまったのだ。中には大きな重い本が、少なくとも一ダースはギユウギユウ詰めになっている。荷物を一旦整理するために、ハーマイオニーがロンに本を数冊渡している間、イリスは杖を振るってカバンの破れ目を修復した。

「ありがと、イリス」とハーマイオニー。

「でもさ」ロンは疑わしげに、本の表紙をジロジロ眺めた。

「今日はこの科目はどれも授業がないよ。午後に『闇の魔術に対する防衛術』があるだけだろ？」

「ロンったら、私がどんなに沢山の授業を取っているか知ってるでしょ。その予習復習のためよ。・・・さ、お昼ご飯食べにいきましょう！美味しいものがあるといいわ」

ハーマイオニーは矢継ぎ早に話し終えると、はち切れそうなカバンを抱えて、一人大広間へスタスタ歩いて行った。

「あいつ、何か僕らに隠してると思わないか？」

ロンが訝しげに問いかける。イリスはあからさまに目を逸らしながら、「さあね」と濁した。



ギルデロイ・ロックハートは、イギリスの魔法界において、非常に有名な魔法使いとして知られている。自分の活躍を記した数々の著作により、闇の力に対する防衛術連盟名誉会員になり、勲三等マーリン勲章を授与される等、様々な輝かしい経歴を持っている。容姿もとてもハンサムで、『週刊魔女』チャーミングスマイル賞を五回連続で受賞しているほどだ。

しかし実際のところは、ロックハートはペテン師だった。彼が自慢げに語る英雄譚は、自分で掴み取ったものではない。全て、他者から盗み取ったものだ。

——ロックハートは、魔女の母とマグルの父の間に生まれた。気の強い母親は三人の子供のうち、唯一魔法力を示したロックハートだけを可愛がり、甘やして育てた。母親の過剰な愛情は、彼に『自分は特別な存在だ』と思い込ませるのに、十分なものだった。

やがて十一歳になったロックハートは、ホグワーツ魔法魔術学校へ入学した。確かに彼はホグワーツでも優秀だった。しかしそれはあくまで“平均以上”というだけだった。

首席やメダルを取る事も出来なければ、クイディッチで選手になるほど卓越した才能を発揮させる事も出来ない。とりわけ聡明な者ばかりが集うレイブンクローにおいて、平凡な彼は目立たない存在だった。『自分は特別な存在ではない』——俄かに信じがたい真実を目の当たりにし、彼は強いショックを受けた。

二人の姉は、母親や弟を見返すために、マグルの世界で一生懸命努力して、勉強やスポーツで優れた成績を残した。そして、魔法の学校で鳴かず飛ばずの弟を『あんたのどこが特別なの?』と嘲笑った。母親はロックハートを抱き締め、『この子は特別なのよ! あんたたちとは違う!』とヒステリックに叫んだ。

母の言葉は、ロックハートの心に重く押し掛かった。そうだ、僕は特別だ。いや、特別にならない。何としても。——彼の

子供らしい純真な心が、徐々に歪み始めた。

愛する母の期待に応えるべく、ロックハートは『自分の中で間違はなく特別だ』と思えるものを模索し、発見した。——ハンサムな容姿だ。彼はその長所を最大限に利用し、とにかくみんなの注目を集める事で『特別になろう』と考えた。クイディッチ・ピッチに長さ六メートルの文字で自分のサインを刻んだり、自分の顔の形をした巨大な光る映像を打ち上げたり、自分宛に八百通ものバレンタインカードを送って、フクロウの羽や糞などで朝食が一時中止になる事態を招いたりもした。

たちまち“目立ちたがりの問題児”として、ロックハートの名がホグワーツ中に知れ渡った。教師や生徒達が向ける視線は決して良い意味を含んでいなかったが、どんな形であれ、みんなの関心を集める事が出来て、彼は本当に幸せだった。一部の物好きな生徒達がファンクラブを作り、熱心に彼を誉めそやした。溢れるほどのファンからのラブレターを母親に渡すと、『やっぱり貴方は特別な子だわ』と褒めてくれた。

やがてロックハートは、ホグワーツを卒業した。あつという間に彼は、平凡な人間へ戻った。ただの“目立ちたがりの問題児”を、魔法省や有名な企業が雇い入れる筈がない。地味な仕事は、ロックハートが嫌だった。かといって、芸人や舞台俳優になれるほどの演技力を有しているわけでもない。彼は余りにも平凡過ぎた。

ある日のこと、ロックハートはいつものように仕事を探してダイアゴン横丁を彷徨い歩き、へとへとに疲れ果てて、「漏れ鍋」のバーのカウンターに腰を落ち着け、深酒をしていた。しばらくすると、隣の席に冴えない容貌の男がやってきた。酒の勢いも手伝い、二人はすぐに仲良くなった。

男は、世界中を旅する魔法地質学者だった。彼は酒の肴にと、アイランド地方にある小さな村で、泣き妖怪バンシーに出会った話をしてくれた。

——本来ならば、人が死にゆく時にしか泣かない筈のバンシーが、ある日を境に、四六時中ずっと泣き叫び続け、村の人々は深刻な不眠

症に悩まされていた。男は、村長にバンシーの駆除を頼まれたが、ふと嫌な予感がして周辺をよく調べてみると、なんと村を支える地盤が緩んでいる事が分かった。バンシーはもうじき起きる地崩れを予言し、その時に死ぬ被害者達のために泣いていたのだ。男の助言で、無事避難し災害を免れた村人たちは、男に深く感謝したという――

ロックハートはその話を聞いた時、素直に感動した。『もつと周りの人々に自慢するべきだ、君はもつと有名になれる』そう助言したが、男は『そんなものに興味はない』と笑い、バタービールを飲み干すだけだった。

ロックハートは全くもって理解出来なかった。こんなに輝かしい功績を有効活用しないなんて。宝の持ち腐れも良いところだ。――私なら。ロックハートは懐の杖をギュッと握り締めた。私なら、もつと上手く使える。ああ、喉から手が出るほど、その経験が欲しい。もしこの男ではなく私が、村人を救っていたら。――その時、ロックハートの心に悪魔が囁いた。

ロックハートは男と交友を深め、しばしば一緒に飲む仲になった。その一方で、彼は自分の能力を『忘却術』だけに一点集中させた。血の滲むような努力の末、彼は『忘却術』を――ただ忘却させるのではなく、人の記憶を丸ごと抜き取り、奪い取る――といった、より高度なものへと昇華させた。奪い取った記憶は、ロックハートの心の世界で、好きなだけ眺める事が出来た。

そして、一年後。ロックハートは男を呼び出し、酒を飲ませて酔わせ、油断した時を見計らって、泣き妖怪バンシーの記憶を盗み取った。そして盗んだ記憶を元に本を書き、『自分の経験である』と偽って、魔法界でも著名な出版社に提出した。出版社は大喜びで受け取り、本として出すや否や、イギリスの魔法界で大ヒットした。

こうしてロックハートは一躍有名人となり、幸福な気分にとっぷり漬かることが出来た。記憶を奪われた友人の行方がどうなったかなど、気にもならなかった。これに味を占めたロックハートは次々と同じ手法で新作を出し、その度にますます知名度を高めていった。母親は本を抱き締め『やっぱり私の息子は特別だわ』と喜んだ。しかし二

人の姉は冷たくせせら笑うだけだった。——彼女たちは、ロックハートの本質を見抜いていたのだ。

ロックハート自身も、全く良心に欠けていたわけではない。何度もやめようと思った。しかし『もうこれつきりにしよう』と決意を固め、新作を出す度に、魔法界中の人々が自分を偉大な魔法使いだと認め、ますます熱狂的に誉めそやす。たちまち彼の決意は消え去り、少しでも早くまたその快感を得るために、ロックハートは新たな犠牲者を求めた。

そうしながら、ロックハートの心は少しずつ腐っていった。——母親も他の人々も、本当の自分を認めているわけではない。『盗んだ記憶があるからこそ、特別でいれるのだ』。そして『特別』でいなければ、誰も平凡な自分に関心を抱かない。母親も愛してくれない。だからこそ彼は、もう後戻りなど出来なかった。ロックハートは更なる名声や名誉を求め、人知れず犯罪を重ね続けた。

——だが、ロックハートは気づかなかつた。口ばかりが達者で、優秀な魔法戦士に相応しい行動が伴わない彼の存在を、疑問に思う者が徐々に増え始めている、という事を。

☆

さてイギリスはスコットランドを遠く離れ、ウイルトシャー地方にある、なだらかな丘の上に建つマルフォイ邸では。客人として招かれたロックハートが、当主のルシウスと共に昼食を楽しんでいた。

美しい銀の装飾皿に盛り付けられた、ローストビーフとヨークシャーピングに舌鼓を打ちながら、ロックハートはルシウスに求められるままに、自らの英雄譚を話し続けた。

去年、危うく“秘密の部屋”の“継承者”と決闘されかけ、言うこの体でホグワーツから逃げ出したロックハートは、性懲りもなく次なるターゲットを探し、やがてダイアゴン横丁で見つけた。

——ワルデン・マクネア、魔法省で働く危険動物の処刑人だ。マクネアが休暇中に偶然訪れたニュージールランドで、暴れ者のドラゴン（オーストラリア・ニュージールランド・オパール種）を羊と羊飼いから守ったという話は、ロックハートにとって非常に魅力的なものだっ

た。だから彼は、マクネアから記憶を奪い取った。しかもそれはつい最近の事なので、まだ出版社にも出していない新ネタだ。

ロックハートが勿体ぶった口調でその話をすると、ルシウスは食事の手を止め、非常に興味深そうに聴き込んだ。——『やはりこの話をして良かった』そう思い、ロックハートは密かにほくそ笑んだ。ルシウス・マルフォイは大変な大金持ちであると同時に、魔法大臣に意見する事が出来るほどの有権者だ。そんな彼に気に入られる事は、自分にとってメリット以外の何物でもない。

ルシウスは自慢げに鼻を鳴らすロックハートに、愛想の良い微笑を浮かべながら、指をパチンと鳴らしてこう言った。

「いや、いや。実に素晴らしい。そして興味深い。噂通りの人物のようだ。」

次の瞬間、ロックハートはナイフとフォークを取り落した。不意に食堂室のドアが開き、彼が記憶を奪った筈の——マクネアが出て来たからだ。

「お前が奪った、俺の記憶はニセモノだよ。ペテン師め！」

マクネアは大柄でがっちりとした体を鷹揚に動かしながら、ロックハートを見てニヤツと悪辣に笑った。

——“はめられた”！ロックハートはやつと気づいたが、もう何もかもが遅かった。身を守ろうと振り上げた杖は、マクネアに手首ごと捻り上げられ、没収されてしまった。情けない悲鳴を上げるロックハートを見物しながら、ルシウスは優雅な動作で葡萄酒を飲んだ。

「どうやら君の悪事にも、ようやくツケを払う時が来たようだ。君に疑問を持つ者は、意外に多くいるのだよ。言い訳をしても結構。なに、君を魔法省へ突き出し、つぶさに調べれば分かる事だ。」

何なら真実薬を飲ませてやってもいい。すぐにそれを用意できる優秀な知り合いが、私に一人いてね」

ロックハートは、目の前が真っ暗になった。今までコツコツと積み上げて来たものが、たった一瞬で跡形もなく吹き飛ばされてしまう。母親がヒステリックに自分を罵り、二人の姉がさも愉快そうに高笑いし、魔法界中の人々が自分を嘲って石を投げる光景が、ロックハート

の頭の中を埋め尽くした。何も支えるものがなく、奈落の底へ転げ落ちていく気持ちだった。

「助かりたいかね、ロックハート？アズカバンへ行きたくないか？」

——ルシウスのその言葉は、今のロックハートにとって天使の囁きに聞こえた。ロックハートは赤子のように泣きじゃくりながら、何度も何度も頷いた。するとルシウスは、分厚い羊皮紙の束を投げてよこした。

「ならばこの通りに本を書き、出版しろ。君が途中で逃げ出した、ホグワーツの“秘密の部屋”に関する真実が記してある」

ロックハートはおずおずと羊皮紙を取り上げ、文章に目を通した。そして、驚愕に息を詰まらせた。ストーリーの主人公はもちろん自分だが、ヴィラン役がいつも通りの怪物や妖怪などではなく——ある一人の女生徒”だったからだ。

そうだ、“あの子”だ。ロックハートは女生徒のスペルを指先でなぞりながら、去年の記憶を呼び起こした。自分の熱烈なファンであるハーマイオニー・グレンジャーの後ろにいた、大人しい女の子だ。有名なハリーポッター、お調子者のロン・ウィーズリー、優秀なハーマイオニー・グレンジャーの影に隠れたような子だった。彼の体は、不安に戦慄いた。

——ロックハートは他者の記憶を奪い取る時、いつも緻密な情報操作を怠らない。なるべく社会交流の少なそうな人物をターゲットに選んだし、ターゲットと仲の良い人物がその記憶に関わっている場合は『忘却術』を掛けたりもした。可能な限り痕跡を消し、辻褄を合わせておかなければ、後でどんなトラブルが起きるか分からないからだ。

しかし今回の話は、全くのイレギュラーだ。ヴィラン役の女の子が、もし本当に“秘密の部屋”事件に関わっているとするとしたら、ロックハートがこの件とは一切無関係な事を知っている筈だ。そして『この話はデタラメだ』と訴えられたら、一巻の終わりだ。最悪の場合、このストーリー自体が全くのでっち上げという可能性も考えられる。どちらにせよ、その時点で自分はおしまいだ。

ロックハートは自分の保身に躍起になり、不用心に口を開いた。

「この話は、本当に真実なのか？」

——その瞬間、凄まじい衝撃がロックハートを襲った。

いつの間にか背後に回ったマクネアが、ロックハートの後頭部をがっしりと掴み、テーブル上に渾身の力で叩きつけたのだ。彼の意識がバチツと音を立てて消え、やがてじんわりと回復していく。ゆつくりと明瞭になっていくロックハートの視界は、どろりとした赤い色に染まっていた。ご自慢の形の良い額がパツクリと裂け、そこから流れ出た血がテーブルクロスを汚している。マクネアがさらに力を加えると、彼の頭蓋骨はギシギシと嫌な音を立てて軋んだ。

「私は」ルシウスはゆっくりと口を開いた。

「君に、質問する事を許したかね？」

ロックハートは恐怖におののき、声にならない声で何度もルシウスに謝罪した。マクネアの手から解放されても、ロックハートは真冬の海に沈められたかのような、激しい震えを止める事が出来なかった。

——ここで逆らえば、間違いなく自分は殺される。人を殺す事に躊躇のない優秀な闇の魔法使い二名を相手にするには、『忘却術』しか能わないロックハートは余りに無力だった。血で汚れたテーブルクロスを、屋敷しもべ妖精に片付けさせると、ルシウスはクリスタル製のグラスを三つとウイスキーの大瓶を用意させた。それから三つのグラスに、ウイスキーを注いだ。

「では君の新作を祝って、乾杯するでしょう。君の好きなオグデンのオールド・ファイヤだ。味わって飲みたまえ」

ロックハートは乾いた笑みを張り付けながら、グラスに震える口を付けた。いつも美味しく飲んでいられるはずのウイスキーは、血の味がした。

## Act 7. 企む動物たち

「闇の魔術に対する防衛術」の教室にやって来た時には、ルーピン先生はまだ来ていなかった。四人が席に着き、教科書と筆記用具類を取り出して、あれこれとお喋りをしていると、やっと先生が教室に入ってきた。ルーピンは曖昧に微笑み、くたびれた古いカバンを先生用の机に置いた。

「やあ、みんな」ルーピンが挨拶した。

「教科書はカバンに戻してもらおうかな。今日は実地練習をすることにしよう。杖だけあればいいよ」

素直に教科書をカバンに仕舞うイリスとロンとは対照的に、ハリーとハーマイオニーは怪訝そうに互いの顔を見合わせた。今まで「闇の魔術に対する防衛術」で実地訓練など受けたことがない。ただし、昨年度の担当だったロックハート先生が、ピクシー妖精をひと籠持ち込んでクラスに解き放し——そして生徒達を置いて一人逃げ出した事件を、一回と数えるなら別だが。

「よし、それじゃ。私についておいで」

ルーピンは生徒達の準備が出来ると声を掛け、ゆっくりと立ち上がった。みんな好奇心溢れる表情を浮かべ、彼のあとに続いていく。向かった先は職員室だった。その道中で一行は、悪戯ゴーストのピーブスが、掃除用具入れのドアの鍵穴にチューイングガムを詰め込んでいる現場に遭遇した。するとルーピンは見事な“逆詰め呪文”でピーブスの鼻の穴にチューイングガムを逆詰めし、撃退してしまったのだ。その鮮やかな手並みに感動したグリフィンドール生達は、ルーピンに対する好感度を爆上げした。

みんなが冴えないルーピン先生を尊敬の眼差しで—————去年のロックハート先生の時とは大違いだ———見つけていた。しかしルーピンの快進撃はそこで終わらなかつた。凶らずも再び、彼の好感度を引き上げる出来事が、職員室の中でもう一つあったのである。

「さあ、お入り」

ルーピンは職員室にたどり着くと、ドアを開け、生徒達を先に入れ



るために一步下がった。職員室は板壁の奥の狭い部屋で、ちぐはぐな古い椅子がたくさん置いてあった。がらんとした部屋には、たった一人の先生がいるだけだった。――スネイプ先生だ。

スネイプは肘掛け椅子に座ったまま、生徒達が列を成して入って来るのをジロリと見回した。淀んだ色の目を不穏にギラつかせ、口元には意地悪なせせら笑いを浮かべている。――ちなみにスネイプと視線が合った時、イリスはおずおずと挨拶をしたが完全に無視された。ルーピンが最後に入ってドアを閉めると、スネイプが口を開いた。

「ああ、開けておいてくれ。我輩、出来れば見たくないのですね」

スネイプは悠々とした所作で立ち上がり、黒いマントを翻して大股にみんなの脇を通り過ぎていった。そしてドアのところどころでくりりと振り返り、捨て台詞を吐いた。

「ルーピン、たぶん誰も君に忠告していないと思うが、このクラスにはネビル・ロングボトムがいる。この子には決して難しい課題を与えないようにご忠告申し上げておこう。ミス・ゴントが自分の知識をひけらかしたいが為に、こここそ指図を与えるなら別だがね」

ソルジャー・スネイプによる唐突な爆撃を喰らったネビルとイリスは、たちまち顔を真っ赤に染め上げ、揃って俯いてしまった。ハーマイオニーは両手で口を押え、ハリーとロンはスネイプを憎々しげに睨み付ける。他のグリフィンドール生の反応も同じようなものだった。スネイプが自分のクラスでいじめをしているのは有名な話だが、他の先生の前でもいじめを強行するなんてとんでもない！と、みんな考えているのだ。

するとルーピンは眉根をキュツと吊り上げ、はつきりと言った。

「僕にはそうは見えない。今回の授業では、ネビルに僕のアシスタントを務めてもらいたいと思っています。彼はきつと上手くやるだろう。・・・それに、君の“可愛い教え子”の成長をそんな風に言っただけはいけないよ」

すでに熟したトマトのような色になっていた二人の顔は、違う意味でもっと赤くなった。――“可愛い教え子”――この言葉がイリス

の脳内で、何度も何度もリフレインした。もしかして先生もそう思っ  
てくれているのかな。イリスはそんな期待を込めてチラツとスネイ  
プを見たが、怒り狂った目にギラギラと睨み返されてしまったので、  
慌てて顔を俯けた。

ルーピンの毅然とした態度に、ハリー達はみんな息を飲み、ますま  
す彼を尊敬の眼差しで見つめた。スネイプは憎々しげにルーピンを  
睨んでいたが、そのままバタンとドアを閉め、出て行った。

「ねえ、〃可愛い教え子〃だって！」イリスは嬉しそうに声を弾ませ、  
ハリーに囁いた。

「スネイプ先生が否定しなかったってことは、先生もそう思ってくだ  
さってるってことかな？」

その時、ハリーだけでなく、たまたま近くにいたロンとネビルも、初  
めてデイメンターを見た時のような顔をイリスに向けた。

「君、気が狂ってるよ!!」

そして三人は同時にそう叫んだ。イリスはしゅんとなって肩を竦  
めた。

「さあ、それじゃ」

場の興奮が鎮まってから、ルーピンは部屋の奥まで来るようにと、  
みんなに合図した。奥には、先生方が着替え用のローブを入れる古い  
洋箆筒がポツンと置かれている。ルーピンがその脇に立つと、箆筒が  
急にわなわなと揺れ、バーンと轟音を立ててジャンプした。イリスだ  
けでなく、何人かも驚いて飛びのいたが、ルーピンは静かに言った。

「心配しなくていい。中にまね妖怪——ボガートが入ってるんだ」

それからルーピンは、ボガートは生来暗くて狭い場所を棲家として  
好む事と、このボガートは昨日の午後に偶然入り込んだもので、今回  
の授業に使用したいため、許可を取った上で放置していた事を告げ  
た。

「それでは最初の問題ですが、まね妖怪のボガートとは何でしょう?」

その言葉に、みんなが一斉にハーマイオニーを見た。こういう知識  
の問題にかけては、彼女が一番優秀だと知っていたのだ。みんなの期  
待を込めた眼差しを誇らしげに受け止め、ハーマイオニーは手を挙げ

てすらすらと答えた。

「形態模写妖怪です。私達が一番怖いと思うのはこれだと判断すると、それに姿を変えることが出来ます」

「素晴らしい。私でもそんなに上手くは説明できなかっただろう」

ルーピンは心を込めてハーマイオニーを褒めた。イリスが小さく拍手を送ると、ハーマイオニーはポツと頬を染め、につこり微笑んだ。

次いでルーピンは、時に質問を挟みながら、ボガートを退治する方法を説明した。先生曰く、方法は二つある。一つは、複数の人間と一緒にいる事で、怖いと思うものをミックスさせ、妖怪を混乱させる方法。二つ目は、簡単な呪文を使用し、妖怪に怖いどころか滑稽だと思える格好をさせ、その姿を笑い飛ばす事で撃退する方法だ。

「リディークラス、馬鹿馬鹿しい！」

ルーピンの詠唱に続いて、生徒達が一齐に呪文を唱えると、彼は満足気に頷いた。

「そう、とっても上手だ。でも呪文だけでは十分じゃないんだよ。そこでネビル、君の出番だ」

いきなり名指して呼ばれたネビルは、いまや洋筆筒よりもガタガタ震えていた。ルーピンはそんな彼を落ち着かせるように優しく微笑むと、彼にとつて一番怖いものとは何かを尋ねた。ネビルは少しまごついた後、消え入りそうな声で答えた。

「・・・スネイプ先生」

ほとんど全員が笑った。しかしルーピンは真面目な表情をしたまま、今度はネビルの祖母の服装について問いかけた。可笑しな質問だと言わんばかりに首を傾げながらも、ネビルは服装の特徴を丁寧に説明する。ルーピンは満足気に頷くと、ネビルに朗らかな口調でこう言った。

「よし、それじゃ。ネビル、君の場合だとかいう流れになる。

ボガートが洋筆筒からウワーツと出て来るね。そうして、君を見るね。そうすると、スネイプ先生の姿に変身するんだ。そしたら君は杖を上げて、呪文を叫ぶんだ。そして、君のお祖母さんの服装に精神を集中させる。・・・全てが上手くいけば、ボガート・スネイプ先生は

てっぺんにハゲタカのついた帽子を被り、緑のドレスを着て、赤いハンドバッグを持った姿になつてしまふ」

全員が大爆笑した。洋箏筒が抗議するように一段と激しく揺れた。「ネビルが首尾よくやつついたら、その後、ボガートは次々に君達に向かつてくるだろう。みんな、ちよつと考えてくれるかい。何が一番怖いかつて。そしてその姿をどうやつたら可笑しな姿に変えられるか、想像してみて……」

部屋がしんと静まり返つた。——イリスは考えた。この世で一番恐ろしいもの。トム・リドルの姿がパツと思ひ浮かんだ。ハンサムなスリザリンの模範生、その実態は最も恐ろしい闇の魔法使い——彼を可笑しな姿に変える？じわじわと足元から冷たい恐怖の感情が染み出して来て、イリスは必死にネビルの祖母の服装をイメージした。てっぺんにハゲタカのついた帽子、緑のドレス、赤の——

『これで終わったと思うのかい？』

しかしそれを遮るかのようには、プラットフォームで聞いた“リドルの幻聴”が木霊する。怒りに燃え滾るあの赤い双眸、美しく冷徹な声、嫌だと泣き叫んでも圧倒的な力でねじ伏せられ、逃げ出そうとしても無理矢理引き戻され、全てを蹂躪し焼き尽くされた、あの絶望感——。イリスは大きく身震いした。たった一年足らずのあの経験は、彼女の心に深い傷跡を残していた。

「みんな、いいかい？じゃあ、始めようか。ネビル」

ルーピンの言葉で、イリスはふつと我に返つた。そして突然、恐怖に襲われた。——まだ心の準備が出来ていない。本当にリドルが出てきたらどうしよう。しかし、これ以上待つてとは言えなかつた。なにしろ、みんながこつくり領き、勇んで腕まくりをしていたからだ。

ルーピンはネビルに合図を送つた後、杖を振るつて洋箏筒を開けた。扉は勢い良く開いて、スネイプそつくりに変身したボガートが、ネビルを憎々しげに睨み付けながら現れた。ネビルは杖を上げたものの、恐怖に顔を歪ませ、口をパクパクさせながら後ずさりしてしまつた。生徒達から不安そうな声がかかる。ボガート・スネイプは、ローブの懷に手をつ込みながら、ネビルに迫つた。

「り、リディクラス、馬鹿馬鹿しい！」ネビルは上擦った声で呪文を唱えた。

パチンと鞭を鳴らすような音がして、スネイプが躓いた。それがやっと体勢を取り戻した時、服装は劇的に変わっていた。いつもの漆黒のローブではなく、長いレースで縁取りした緑色のドレスを着ている。見上げる様に高い帽子のてっぺんに虫食いのあるハゲタカをつけ、手には巨大な真紅のハンドバックをゆらゆらぶら下げている。

——その恰好の可笑しなことといったら！イリスの恐怖心は木っ端みじんに砕け散った。そしてみんなと一緒には大声で笑った。ボガート・スネイプは途方に暮れたように立ち止まる。ルーピンは大声でパーバティを呼んだ。

パーバティの前で、スネイプはパチンと音を立て、血に塗れた包帯のミイラに姿を変えた。しかし彼女が「リディクラス！」と叫んだ瞬間、包帯が少しばかりハラリと解けてミイラの足元に落ちた。それに絡まって、ミイラは頭からつんのめり、床の上でジタバタもがいた。

ルーピンは生徒がボガートを退治する度に、次の生徒を呼んだ。シエーマスは泣き妖怪バンシーの声をガラガラに枯らし、デインは切断された手首をネズミ捕りに挟ませた。

ボガートは混乱してきたのか、誰も目の前にいないのに、次々と姿を変え始めている。辺り一面、生徒達の熱気と歓声で満たされている。イリスも段々自信がついてきた。みんな順調に出来ているじゃないか。きつと私だつて上手くやれる。リドルに、ネビルのお祖母さんの服装を着せるんだ。そして思いっきり笑うんだ。イリスは何度もそう自分に言い聞かせた。

「混乱してきたぞー」ルーピンが叫んだ。

「ロン、次だー」

ロンの目の前で、ボガートは二メートル近い毛むくじやらの大蜘蛛に姿を変えた。何人かの生徒が悲鳴を上げる。おどろおどろしく鋏をガチャつかせ、向かってくる大蜘蛛に杖を突きつけ、ロンは轟くような声で「リディクラス！」と叫んだ。

蜘蛛の足が消え、丸っこくなつた胴体だけが、ゴロゴロと転がり出

した。ロンが可笑しそうに笑った。ラベンダーが金切声を上げて、スパイダー・ボールを避ける。ボールは緩やかな弧を描いて——やがてイリスの目の前で急停止した。イリスに迷いはなかった。

ボガートはパチンと音を立て、そして——一人の男子生徒の姿に変身し、床にうつ伏せに倒れた。

——イリスは言葉もなく、立ち尽くした。カラン、と彼女の杖が床に転がる音が、生徒達の怪訝そうなきわめきに溶けていく。うつ伏せでも分かる。冷たい銀色の髪、スリザリン生である事を示すローブの縁取りの色。それは紛れもなく——ドラコ・マルフォイの亡骸だった。

「ねえ、あれってマルフォイじゃない？」ラベンダーがパーバティに囁いた。

「あいつってマルフォイが怖いのか？」デイーンが首を傾げた。

「イリス、気をしっかり持つんだ！そいつは幻だ！」

ルーピンの声が、どこか遠くで聴こえた。イリスは恐怖で凍り付いた意識を、必死に解かそうと努力した。可笑しな姿にしなきゃ。笑えるような姿に……。

しかしイリスの視界はたちまちぼやけ、熱い涙が幾筋も零れ落ちていく。いや、そんな事出来ない。だってこの姿をどう変えて、笑えるっていうんだ？何をしたらって変わらない。彼が死んだら、私の世界は……。

「ごっちだー！」

不意に目の前がクシャクシャの黒髪で覆い尽くされ、ハリーの大声が轟いた。——ハリーがイリスを庇い、前に立って、ボガートの注意を引きつけている。ボガートはすぐにハリーの一番怖いものを認識した。ドラコのローブがますます大きく広がり、裾はボロボロになり、大きなフードが頭をすっぽり覆った。そしてそれは、ゆつくりと立ち上がりかけた。

その時、ルーピンがハリーを押しよけるようにして、さらに前へ出た。ボガートはパチンと音を立て、銀白色の玉になって空中にふわふわと浮かび始める。ルーピンはほとんど面倒臭そうに「リディクラス

！」と唱えた。ボガートがまたもや混乱し、ゴキブリに変身して床にボトツと落ちたところで、ルーピンが叫んだ。

「ネビル、前へ！ やつつけるんだ！」

ネビルは今度は決然とした表情でぐいと前に出て、「リディクラス！」と叫んだ。ほんの一瞬、レース飾りのドレスを着たスネイプの姿が見えたが、ネビルが大声で笑うと、ボガートは破裂し、何千という細い煙の筋になって消え去った。

「よくやったー！」全員が拍手する中、ルーピンが大きな声を出した。

「ネビル、よくできた。みんな、よくやった。そうだな、ボガートを退治したグリフィンドール生一人につき五点やろう。ネビルは十点だ。二回やったからね。ハーマイオニーとハリーも五点ずつだ」

「でも、僕、何もしていません」ハリーが訝しげに言った。

「イリスを庇ってあげただろう？」ルーピンはさりげなく返した。

やがて終業のチャイムが鳴り、授業終了となった。みんな興奮した様子でペチャクチャ喋りながら職員室を出る。ロンとハーマイオニーは、互いにルーピンの事を褒め合っていた。——しかしハリーは心が弾まなかった。ルーピン先生は、自分がボガートと対決するのを意図的に止めた。どうしてなんだ？ ハリーは自分が勇敢である事を知っていたし、他の生徒達と同じように敵をやっつけたいと思っていた。もしかして先生は、また僕が気絶すると思ったのか？ 物思いに沈むハリーの肩を、イリスがポンと叩いた。

「ありがとう、ハリー。助けてくれて」

ハリーはぎこちなく微笑んで、イリスの頭を撫でた。——イリスを目の前にしたボガートは、“マルフォイの死体”に変身した。彼女にとって一番恐ろしいものは、マルフォイの死なんだ。イリスはあいつを愛している。もしあれが“自分の死体”だったなら——ハリーは一人想いを馳せた。そんなことを考えるなんて、それこそとっても馬鹿馬鹿しい事だけ——もしそうだったなら、どれほど幸福だっただろう。僕はこんなに君を愛しているのに。

イリスの髪から、ふわりと百合の香りが漂う。いつも大好きなその香りが、今だけは、ほろ苦く感じられた。

☆

「闇の魔術に対する防衛術」は、たちまちほとんど全生徒の一番人気の授業になった。ドラコとその取り巻き連中のスリザリン生だけが、ルーピンの粗探しをした。

「あのローブを見ろよ！」

大広間での昼食中、スリザリンのテーブルの脇をルーピンが通ると、ドラコは——グリフィンボールのテーブルにいるイリスにも聞こえるほど——大きな声で嘲笑った。

「僕の家を屋敷しもべ妖精の格好じゃないか！」

「小物ほど大きな声で吠える」とはこの事だな」

ドラコの暴言に落ち込むイリスの肩をポンと叩き、フレッドが明るく言った。

「あいつのボガート、何に変身したと思う?…こわくいデイメンターさ! そしたら、やつこさん小便チビツて、ルーピンの足元でブルブル震えてたみたいだぜ」ジョージがゲラゲラ笑った。

イリスは辛うじて笑ってみせ、鬱屈した気持ちを発散させるように、焼き立てのブラックベリーパイを四切れも食べた。

☆

ルーピンの授業は二回目以降も、最初と同じように面白かった。ボガートのあとはレッドキャップで、次はカツパだ。どれも実地訓練のため、スリルがあり、退治させることで生徒達の自信を付けさせた。

「闇の魔術に対する防衛術」が絶大的な人気を誇る一方で、「魔法薬学」は過去最悪の不人気さを記録していた。スネイプはますます不機嫌となり、みんなの頭(※スリザリン生を除く)を悩ませた。理由ははっきりしていた。ボガートがスネイプの姿になった、ネビルがそれにおぼあちゃんの服をこんな風に着せた、という話がホグワーツ中に、野火のように広がったからだ。

ルーピンの名前が出ただけで、スネイプの目はギラリと剣呑に光ったし、ハリーとネビルいじめはいつそう酷くなった。イリスも死にゆく覚悟を固めていたが、何とも不気味な事に、待てど暮らせどスネイプは、授業中も補習中でさえも、イリスに対して理不尽な理由で当た



る事は全くなかった。

「占い学」は相変わらず意味不明だった。ハリーは教室に入るたびに、トレローニー先生が大袈裟に息を飲み、巨大な目に涙を浮かべて自分を見つめる。お馴染みのリアクションに心底うんざりしていたし、イリスに至っては何を占つても先生が毎回毎回『敵の手に囚われている』と主張して、ハーマイオニーと目の前で口論を繰り広げるものだから、正直辟易していた。

しかし先生を崇拜に近い敬意で崇める生徒もたくさんいた。パーバティやラベンダーなどは、昼食時に先生の塔に入り浸りになり、みんなが知らない事を知ってるわよ、とばかりに、鼻もちならない得意顔で戻って来る。

「魔法生物飼育学」の授業は、最初のあの大活劇のあと、とてつもなくつまらないものになり、誰も心から楽しむ事は出来なくなった。ハグリッドは完全に自信を失い、レタス食い虫の世話を毎回の授業で教え続けた。文字通りレタスが好物で、ほとんど動かない褐色の太い芋虫だ。しかも引つ切り無しに生徒達が喉に刻みレタスを押し込み続けるものだから、レタス食い虫たちはみんな『もう満腹だ』という抗議の声を上げ、まるまると太った体を苦しそうにくねらせていた。

「ハグリッド。レタス食い虫が、『もうお腹いっぱいだ』って言ってるよ」

たまりかねてイリスがハグリッドに主張すると、ハグリッドは虚ろな声で「そうか」と言うなり、巨大な樽いっぱいに入ったエサ用の刻みレタスを、そのままシヤムシヤと食べ始めた。心ここに在らずといった様子だ。胸が痛くなったイリスはサラダクリームの瓶を呪文で呼び寄せ、クリームをレタスいっぱいにかけて、少しばかり一緒に食べた。

☆

十月になると、俄かにホグワーツ中が活気づき始めた。クイディッチ・シーズンの到来だ。諸々の授業による影響で鬱々とした気分になっていたハリーも、今年こそ大きなクイディッチ銀杯を獲得するためにチーム一丸となり、練習に励み始めた。

ある夜、イリスは談話室で、ロンとハーマイオニーと共に「天文学」の星座図を仕上げていた。二人が、十月末に開催される運びとなった“ホグズミード観光”<sup>Draco</sup>について楽しげに会話をしている中、イリスはなるべく丁寧な『りゅう座』の綴りを書いていた。やがてハーリーがクイディッチの練習を終え、満足気な顔で談話室へ戻ってきた。

ハーリーは室内が生徒達で賑わい、明るい雰囲気にも包まれている事に、疑問を抱いたようだ。イリスの隣にドサツと座ると、ロンに尋ねた。

「何かあったの？」

「第一回目のホグズミード週末さ」

ロンはくたびれた古い掲示板に張り出された「お知らせ」を指差した。そこには『十月末、つまりハロウィーンの日、ホグズミードへ訪れる事が許可される』と明記してある。ハーリーの表情がみるみるうちに沈んでいくのを見兼ね、ハーマイオニーが彼の膝にポンと手を置きながら、言った。

「ハーリー、この次にはきつと行けるわ。ブラックはすぐに捕まるに決まってる」

「いや、次なんて永遠にこないね！マクゴナガルに聞けよ。今度行っていいかってさ」ロンが被せる様に言い放った。

無言で睨み合うハーマイオニーとロンをおろおろと見守っているイリスを見ているうちに、ハーリーの覚悟は決まった。

「ウン、やってみる」ハーリーの言葉に迷いはなかった。

反論するためにハーマイオニーが口を開けたその時、クルックシャンクスが軽やかに彼女の膝に飛び乗って来た。大きな蜘蛛の死骸をくわえている。

「わざわざ僕らの目の前でそれを食うわけ？」ロンが眉をしかめた。

《ああ。だってお前、蜘蛛が嫌いなんだろう？》

クルックシャンクスはとても楽しそうにそう言うと、小馬鹿にしたようにロンを見据えたまま、大きく口を開け、蜘蛛が咀嚼されていく様子を見せつけた。——ロンとクルックシャンクスがお互いを見る目は、はつきりと『お前なんか大っ嫌いだ！』と言っている。イリス

は胃がキリキリと痛んだ。少しでも場の雰囲気をよくするために、クルックシャンクスがゴクンと蜘蛛を飲み込んだのを確認してから、イリスは屈託なく話しかけた。

「久しぶりだね、クルックシャンクス。元気にしてた？」

——本当にクルックシャンクスとこんな風に、腰を落ち着けて話すのは久しぶりだ。イリスはオレンジ色のふわふわした尻尾を撫でながら、そう思った。

それというのも新学期が始まって以来、クルックシャンクスの姿がほとんど見えなかったからだ。しかし、いつもイリス達が眠りにつく頃にベッドに戻って来て、イリスかハーマイオニーどちらかの傍で丸まって眠り、朝にはまたどこかへ消えていた。そしてハーマイオニーが寂しがって呼ぶと、どこからともなく姿を現す。彼はとても賢い猫だった。

《おれは元気だよ、イリス。それよりも、お前に頼みたいことがある》

「何？」

クルックシャンクスは不意に黄色い目を細め、イリスの椅子の肘掛けにトンと飛び乗った。そして、他の三人がフレッドとジョージと一緒にになって、ホグズミードの事について話し合っているのを確認してから、口を開いた。

《お前に会ってほしいやつがいるんだ》

「会ってほしいやつ？」

イリスは首を傾げた。——イリスは気付かなかった。何時の間にか、ロンの内ポケットからスキヤバーズが抜け出て、二人の会話に聞き耳を立てている事を。しかしクルックシャンクスはそれを知っていて、わざとスキヤバーズの耳にも入るように、大きく鳴いた。

《そして、そいつに力を貸してほしい》

「私、力なんてないよ」イリスは慌ててかぶりを振った。

《おれはお前を信じているし、評価してる。だからこそ、頼みたいんだ》

「どうして私を信じてくれるの？」

《お前の頭が、動物みたいに単純で曇りがないからだ。普通の人間の頭はゴチャゴチャした雑念で溢れてて、周りの汚れた空気に簡単に染まっていく。だから隠された本当の感情や、真実に気づかない。．．．でもお前は違う。お前の澄んだ眼は、真実を見通せると信じている》

それは、一見巧妙に隠された“悪の存在”をすぐさま見抜く事の出来る、稀有な能力を持つクルックシャンクスだからこそ言える事だった。イリスは言葉の意味を暫く考えた後、少しばかり頬を膨らませながら言い返した。

「．．．それって褒められてる？」

《ああ、褒めてる。おれなりに》クルックシャンクスはきっぱりと言いつ切り、さりげない調子で言葉を続けた。

《それから、あのネズミの正体もわかった。あいつは．．．》

「ギイイイイッ!!」

その時、突如として金属を引つ掻いたような、耳障りな音が響き渡り、イリスは驚いて悲鳴を上げた。——スキヤバーズが凄まじい鳴き声を上げながら、ロンの肩から大ジャンプを決行し、クルックシャンクスに襲い掛かったのだ。

クルックシャンクスが素早く前足でスキヤバーズを払いのけると、スキヤバーズはベシヤツと床に落ち、ロンの下へと一目散に駆け戻って行った。あわやスキヤバーズが、追いついたクルックシャンクスに食われる寸前——ロンがカバンを無茶苦茶に振り回し、愛するネズミを魔猫の手から救い出した。

《今ので確信がいったよ!》クルックシャンクスが嘲笑った。

「この猫を引つ掴まえろ!」ロンが怒りで顔を真っ赤にして叫んだ。

この一連の騒ぎに、今やロンだけでなく、ハリーとハーマイオニーも立ち上がっていた。他のグリフィンドール生達も、ちらほらと興味深げな視線を向けている。ハーマイオニーは眉をしかめて言い返した。

「今回はスキヤバーズが悪いわよ。だって、クルックシャンクスに襲い掛かってたじゃない!」

「こいつは頭がおかしくなっちゃったんだ！可哀想に！君の猫が四六時中、こいつを付け狙ってるからだ！」

ロンはカンカンになって怒鳴り、両手にしっかりと抱き締めた、よれよれのスキヤバーズを三人に見せた。

「見ろよ！こんなに骨と皮になって、やつれ切ってる！」

「ロン、猫はネズミを追っかけるものなのよ！」ハーマイオニーが、あんまりな言い訳をした。

——ロンには悪いけれど、今回の件はハーマイオニーの言う通りだ。確かにスキヤバーズの方が、クルツクシヤックスを襲っていたもの。でもどうしてなんだろう。イリスは顎に手を添え、思索した。

新学期が始まってから、イリスはスキヤバーズにも会えていなかった。何しろ、飼い主であるロンにスキヤバーズの「ス」でも言おうものなら、親の敵のを見るような目で睨まれてしまうからだ。

だから最近のスキヤバーズの調子はてんで分からないけれど、さつきはまるで人ならぬネズミが違ったみたい、凶暴になっていた。もつと穏やかな気質だった筈だ。もしかして本当にスキヤバーズの気が——。イリスはそこまで考えて、ふと視線を感じて顔を上げ……ゾツとした。

スキヤバーズが黒いビーズのような目をギラギラと滾らせ、じつとイリスを見つめていた。

☆

——その夜、イリスは数日振りに“塔の夢”を見た。塔の中の螺旋階段を少しずつ昇っている。中には、あの美しい歌声がずっと木霊している。石造りの外壁には、採光用の窓が等間隔にあって、そこから月や星の光が優しく差し込んで、内部を照らしていた。

もう随分と上の方まで昇ってきたみたいだ。窓から外を覗き込むと、草原がずっと下の方に見えた。

ふと新たな歌声が聴こえて来て、イリスは足を止めた。あの鈴を転がすような女性の声ではなく、たくさんの子供たちが合唱しているような声だ。繰り返し、同じ歌を口ずさんでいる。イリスは単純に興味を惹かれ、声のする方へ足を向けた。

やがて螺旋階段が一旦途切れ、踊り場が現れた。そこで道が二手に別れている。一方は、塔の頂上へ行くための階段が続いている。そしてもう一方はアーチ状に壁をくり抜かれ、くぐると外に出る事が出来そうだった。——歌声は、そこから聴こえていた。イリスはアーチをくぐって、外に出た。

外は広々としたバルコニーになっていて、美しい景色——見上げれば満点の星空、見下ろせば一面の草原が穏やかな夜風に揺れている——を存分に見渡せた。歌は後ろの方から聴こえているようだ。イリスはくるりと振り向いた。

アーチの傍に、大きなイチイの木が生えていた。その枝にフクロウ達が止まっていて、みんなで体を揺らして拍子を取りながら、歌をさえずっていた。

“もうすぐ、蛇の女王が目覚める

深い海から太陽が昇る時、女王が目覚める

仮初めの言葉は永久に枯れ、真の言葉が蘇る

ああ、幸いあれ！我らが蛇の女王に幸いあれ！”

イリスはイチイの木に近寄って、息を飲んだ。フクロウ達はみな、一羽のフクロウの指揮に従って歌っていた。指揮者のフクロウを、イリスは見た事がある。——マルフォイ家のフクロウ、イカロスだ。夢の中という事もあり、イリスの心に警戒心は無かった。

「イカロス、一体何の歌なの？」

イリスが尋ねると、イカロスは一旦歌を中断させ、首をぐるりと回して彼女に目を留めて、厳かな口調で答えた。

《蛇の女王を称える歌さ》

「蛇の女王って誰？」

イカロスは、イリスの問いに答えなかった。フクロウ達に向き直ると、両翼を指揮棒のように器用に振るって、再び指揮を執り始める。イリスは首を傾げたが、再び階段を昇るため、アーチをくぐろうとした。

すると、ふと右肩にトンと優しい重みを感じ、耳を小さく甘噛みされた。イリスはすぐにそれが誰か分かった。——自分のペットのフ

クロウ、サクラだ。サクラはイリスの耳元で、静かにこうさえずった。  
《イリスちゃん。これ以上、階段を昇っちゃダメ》

思わずイリスは振り向いて、驚く余りたじろいだ。——サクラの両目は、奇妙な虹色に輝いている。その目を見ているうちに、イリスの意識はゆつくりと霞んでいった。——どこか遠くの方で、イカロスがサクラを罵り、怒っている声が聴こえる——そして、意識はふつりと途絶えた。

☆

ハロウイーンの前日まで、ロンとハーマイオニーは仲が悪いままだった。おまけにもう一つ、悪い出来事が起こった。ハリーは“ホグズミード行き”をマクゴナガル先生に掛け合っただけのもの、結局許可してもらえなかった。

そうして、ハロウイーンの日がやってきた。ハリーはあくまで気丈に振る舞い、玄関ホールまで三人を見送ってくれた。管理人のフィルチがドアのすぐ内側に陣取り、長いリストを手に名前をチェックしていた。それだけでは飽き足らず、一人一人疑わしそうに顔まで覗き込んでいる。イリスが列に並んで順番を待っていると、後ろにいるハーマイオニーが息を飲む声があった。

「ゴーント、少し話がある」スネイプの声だ。

ロンがくりくりとした目玉を人類の限界まで見開いて、列を抜け出すイリスとスネイプを凝視している。スネイプはイリスを見下ろすと、出し抜けにこう言った。

「吾輩はこれから夕方に掛け、非常に高度な魔法薬を調合する。しかし一人では少々骨が折れる作業だ。良ければ君に、手伝ってもらいたい。あー・・・」可愛い教え子“である君に。

勿論、君が素晴らしい友人達と共に、ホグズミードでくだらない観光に身を投じたいと言うならば、話は別だがね」

——それはイリスにとって間違いなく、夢のようなお誘いだった。彼女は感激する余り、ウサギのようにピョンツと高く飛び上がった。尊敬するスネイプ先生が、ついに自分を認めてくれた！おまけに自分の事を“可愛い教え子”だと言ってくれた！今までの苦労が、やつと

報われたような気持ちだった。

「私、やります！やらせてください、先生！」

イリスは夢中で叫んだ。——まだ見ぬホグズミード村と、ロンとハーマイオニーの姿がチラリと脳裏を掠めたが、スネイプによく認められた嬉しさの方が勝った。それにホグズミードは次回もある。こんなチャンス、二度とないもの。イリスは自分を奮い立たせた。二人だって、きつと理解してくれるはずだ。彼女に迷いはなかった。「・・・よからう。ならば付いてきたまえ」

スネイプは満足気と言うとローブを翻し、研究室に向けて歩き出した。イリスは、ポカンとするばかりのロンとハーマイオニーに事情を説明し、スネイプについて駆け出した。——彼が、邪悪極まりない笑みを浮かべているとも知らずに。



## Act 8. ダブル・トラブル

イリスはスネイプの研究室へやって来た。部屋の奥に古びた黒板が置かれ、ある魔法薬の調合手順が事細かに記載されている。スネイプはイリスを黒板の前まで連れて来ると、独特の囁くような声で説明を始めた。

「今日我々が作るのは『トリカブト系脱狼薬』だ。非常に複雑な工程を要するものであり、正しく調合出来る魔法使いは数少ない。

人狼が満月の夜の前の一週間、この薬を飲み続けると、変身した際も理性を失わずにいられる。非常に苦い薬だが、砂糖を入れると効き目が無くなるという事を留意しておけ」

“人狼”——その言葉を聞いて、イリスは怯えたように立ち竦んだ。「闇の魔術に対する防衛術」の前任、ロックハートが著した『狼男との大いなる山歩き』を思い出したからだ。

そこで登場する人狼は、満月の夜——つまり月に一回——恐ろしい化け物に変身し、本能のままに暴れ回り、物語の舞台となるリュカオン村を滅茶苦茶に破壊した。

物語の中盤で、常にロックハートを助けていた善良な村の住人が、敵の人狼に噛まれた途端、呪いを受けて人狼に変身し、ロックハートの敵として立ちはだかったのは、涙なしではとても語る事の出来ない、実に印象的なシーンの一つだ。

ロックハートは、ストーリーにより凄味を利かせるために、人狼を“呪いを受けた一人の人間”としてではなく、“人間の皮を被った化け物”として書いていた。だがそれは、彼だけに限った事ではない。昔からマグル界でも魔法界でも、人狼は不当な差別や偏見の対象として見られていた。

つまるところ、単純なイリスはその情報を鵜呑みにし、人狼を——ディメンターと同じ——恐ろしい闇の生物だと思いついてしまったのだ。スネイプは、イリスのその様子を実に楽しそうに眺めながら、驚くべき言葉を放った。

「そしてこの薬は完成後、速やかに服用しなければならない。ゴーン

ト、君が私の代理として件の人狼の下へ、薬を届けるのだ。そして必ず、人狼が薬を全て飲み干すのを確認しろ。満月までの数日間、この一連の流れを繰り返す事となる」

イリスは驚いて、か細い悲鳴を上げた。ロックハートの作品で登場した人狼は、人間の姿の時でも——それはその人物が、元々ゴロツキだった所為でもあるのだが——血に飢えた獣のように、荒々しい気性のキャラクターだった。そのためイリスは、人狼はみな人間の姿の時でも凶暴なものだ、とも思い込んでいた。

自分が人狼のところへ行つて、薬を飲むのを監視するだつて？ 襲われたらどうしよう。ディメンターやまね妖怪ボガートと対峙した時の恐怖を思い出し、イリスは身震いした。

おまけに自分は、英雄ロックハートが、人狼を元の人間に戻す際に使用した『異形戻しの術』も知らないのだ。万一、その人狼が満月に関係なく、自在に変身できる能力を持っていたとしたら——。

「せ、先生」イリスは恐怖に震える声で尋ねた。

「もし、お、襲われたら……」

「案ずるな、ゴーント」

スネイプはゾツとするような猫撫で声で、やんわりと言った。彼の薄い唇の端は、今にも笑い出しそうなほど、不自然に引き攣っている。「幸運な事に、その人狼はよく飼いなさらされている。満月の夜以外は、基本的に無害だ。……だが用心を怠るな。いつ何時も杖を手放さぬ事が肝要だ」

☆

そして『脱狼薬』の調合が始まった。その工程は複雑怪奇極まりないもので——いくらスネイプの下で「魔法薬学」の深淵を覗いて来たとはいえ——一介の生徒に出来る事はほとんどなかった。結局イリスは、ほぼ全ての作業を眺めて過ごした。何しろ、鍋の中身を掻き回す際の杖の動きでさえも、気が狂いそうなほどの精密さを要するのだ。

イリスは、鍋の表面にわずかに吐息が掛かっただけで、スネイプにこつぴどく叱られた。基盤となるトリカブトの塊根を一度目はその

まま、二度目は乳鉢ですり潰し、三度目は粉々に砕いて入れた。それだけではない。イリスの目玉が飛び出る位の高価な材料が、惜しげもなく次々に投入されていく。

最後に、杖を振るって出した魔法の青い炎に、一握りの上質な銀箔をくぐらせて鍋に入れると、鍋の中身全体がほんの一瞬青い炎に包まれ、グツグツと激しく煮え出した。スネイプが鍋に掛けた火を止めても、依然として煙は消えず、煮えたぎっている。

「完成だ。純銀製のゴブレットを」

スネイプは、イリスに最高級の純銀製ゴブレットを持って来させると、柄杓で掬った薬を注ぎ入れた。薬はいまだに煙を上げ、煮えているが、ゴブレットはひんやりと冷たいままだ。スネイプはゴブレットの中身を再確認すると、杖を振って後片付けを始めた。

イリスはやつと一安心し、いつも通りの呼吸をする事が出来た。何故かは分からないが、スネイプが作業中ずっと、今までにない位に殺気立っていたからだ。きつととんでもなく複雑な調合だったからに違いない。イリスはそう思い、スネイプの後ろ姿に労りの眼差しを向けた。

「ゴーント。その薬を、ルーピン先生の下へ持っていきたまえ」

不意に、スネイプが振り返らずにそう言った。余りに何でもないような口調だったので、イリスは言葉の意味をすぐに理解する事が出来ず、ポカンとした表情で首を傾げた。——ルーピン先生が、何だって？

「・・・へ？」

「聞こえなかったのかね？」

イリスの間の抜けた反応に気分を害したのか、スネイプはぐるりと振り返り、吐き捨てるように言った。

「ルーピン先生の下へ持つていけ、と言ったのだ！」

スネイプは盆の上にゴブレットを載せ、いまだ茫然状態のイリスに押し付けた。そして研究室から追い出すと、扉をガチャンと閉めた。

しかしここに来てはまだ、イリスの“時”は止まったままだった。彼女の周りで動いているものは、ゴブレットから立ち昇る煙だけだ。

——そうだ。イリスはハツとなり、盆を持ち直した。この薬は、時間が敵なのだ。早く持つて行かないと。——そう、ルーピン先生のところだ。だってスネイプ先生がそう言ったんだもの。イリスは覚束ない足取りで、ルーピンの自室へ向けて歩き出した。

混乱するイリスの思考は、やがて一つの強引な解釈を生み出した。『きつとルーピン先生のところには人狼が来ていて、その人に薬を届けに行くのだ』と。そうだ、それならば辻褃が合う。先生は「闇の魔術に対する防衛術」の担当だもの。

ルーピン先生が人狼である訳がない。イリスは否定するように、強くかぶりを振った。あんなに優しい先生が、ロックハートの本に出て来るような“邪悪な化け物”に変身するなんて、全くもってありえない話だ。

☆

やがてイリスはルーピンの自室へ到着した。控えめにノックすると、奥の方で小さく物音がしてドアが開き、ルーピンが覗き込んだ。

「やあ、イリス」

ルーピンはイリスに柔らかく微笑んでから、彼女が持っている盆——の上に乗っているゴブレットへ視線を移し、それから恐ろしいほどの無表情になった。

二人の周囲を、沈黙のヴェールが包み込む。——どうして先生が黙り込む必要があるんだ？ルーピンの予想外の行動に、イリスは途方に暮れてまた混乱し始めた。待てよ、もしかして先生はこれが何の薬か知らないのかもしれない。なら、教えてあげないと。イリスは薬の名前を告げるために、おずおずと口を開いた。

「先生。あの・・・」

「ありがとう。よかったら入って」

ルーピンはイリスの言葉を遮ると、ドアを大きく開いて、招き入れた。イリスは素直に返事をして、中に入った。きつと人狼がいるに違いない。イリスはそう思い、注意深く部屋の中を見渡して——絶句した。

寮の談話室にいる筈の、ハリーがいたのだ。彼の近くには大きな水

槽の中があり——恐らく次の授業で使われるのだろう——グリーンデローがこちらを睨んでいる。グリーンデローは緑色の歯を威嚇するように噛み合わせ、隅の水槽の茂みへ潜り込んだ。人狼らしき人物は、どこにもいない。

「は、ハリー？」

「イリス？どうして君が……」

イリスとハリーはお互いの存在に、たまらず驚きの声を上げた。次いでハリーは、イリスの持つゴブレットに鋭い視線を投げかける。ルーピンは至って穏やかな様子で、イリスの分のカップに紅茶を注ぎ入れると、ハリーの隣に掛けるように勧めた。そして、イリスの盆からゴブレットを受け取った。

「スネイプ先生からだね。いつもの薬だ。ありがとう、助かるよ」

そしてルーピンは——呆気に取られるイリスの目の前で——ゴブレットの中身を一口飲んで、ブルツと身震いした。

「毎回思うんだけど、全くひどい味だ。砂糖を入れられたらいいんだが、そうすると効能がなくなるらしくてね。」良薬口に苦し」とは、正にこのことだ」

ルーピン先生が人狼だったのだ！余りに衝撃的な真実を目の当たりにして、イリスは二の句を告げる事が出来なかった。『いつもの薬』——『砂糖を入れたら効能がなくなる』——彼はこの薬を『脱狼薬』だと理解している。隣からハリーの熱い視線を嫌というほど感じるが、イリスは“全身金縛り術”に掛かったかのように、ピクリとも動けない。

「スネイプ先生が、この薬を作ったんですか？」やがて痺れを切らしたハリーが、鋭く聞いた。

「ああ、ハリー」ルーピンは笑顔で応えた。

「私は病を患っていてね。これがないと、とても辛く苦しい思いをするんだ。このおかげで、私はどれだけ救われているか分からない。

この薬を調合出来る魔法使いはそうそういないから、スネイプ先生がいてくれて本当に助かっているよ」

ルーピンはそう言って、また一口飲んだ。ハリーは話を聞いて納得

するどころか、今すぐゴブレットをルーピンの手から叩き落とすたくてたまらない、と言わんばかりの顔をしている。

しかしルーピンの正体を知るイリスには、その言葉の意味がよく分かった。彼女は自分の過ちを知り、恥じ入る余り、ソファアの上で小さくなった。体の内側からじわじわと羞恥心が込み上げてきて、白い膚を染めていく。

——『もし襲われたら』だって？イリスは心の中で、無知だった自分自身を責めた。先生は、人狼の姿になるのは辛く苦しい事だと言っていた。それを抑制する『脱狼薬』と調合したスネイプに、感謝していたじゃないか。

この時イリスは身をもつて、知識は全て正しいとは限らない事を思いついた。実際に触れ合ってみなければ、分からない事も沢山ある。ルーピンは確かに人狼だが、ロックハートの本に出て来るような、粗暴な悪党ではなかった。人狼は闇の生物ではなく、呪いを受けた一人の人間なのだ。イリスは激しい自己嫌悪に駆られ、ギユウツと自分の手を握り締めた。

ふと手元に暖かい温もりを感じ、イリスは知らぬ間に俯いていた顔を上げた。ルーピンが労わりの笑顔を浮かべ、イリスの手に空のゴブレットを握らせている。ゴブレットからは、まだ煙が立ち上っていた。

「イリス。君は、この薬の手伝いを？」

「・・・はい。でも、ほとんど見ているだけでした」

イリスは、消え入るような声で答えた。ルーピンは感嘆したように唸った。

「スネイプ先生は、非常に実力ある人だ。戯れで助手を頼むような事は、決してしない。・・・例えば、見ているだけ」でもね」そうやって悪戯っぽく微笑んだ。

「君は素晴らしく聡明な魔女だ。きっとスネイプ先生も、君の事を誇りに思っているだろう」

——イリスはもう耐えられなかった。自分を恥じ入る余り、熱い涙がボロツと零れて、ゴブレットに滴った。私は聡明なんかじゃない。

本の情報を鵜呑みにして、人狼の事を誤解していたのに。

「先生、ごめんなさい」

イリスが涙混じりの声でそう言うと、ルーピンは飛び上がりながら驚いた。まるで「ごめんなさい」と言われる事など、今までの人生でなかったかのような反応だった。

やがてルーピンはショックから立ち直ると、どこか神妙な顔つきで、イリスの頭を優しく撫でた。——一連の出来事にただ茫然とする、ハリーとグリンドローを置き去りにして。

☆

黄昏時、ロンとハーマイオニーは寒風に頬を染め、人生最高の楽しい時を過ごして来たかのような顔をして、グリフィンホール寮の談話室へ戻って来た。そして——自分達の帰りとお土産を待ち詫びている筈の——親友達の異様な雰囲気、揃って口を噤んだ。

いつもの特等席——暖炉の近くにある四人掛けソファアの端っこにイリスが座り、青ざめた顔に涙を浮かべて黙り込んでいる。そしてその向かい側でハリーが腕を組み、そんな彼女をじつと睨んでいたのだ。——いつも仲睦まじくいる二人の様子を見慣れているロンとハーマイオニーにとって、この光景は本当に驚くべきものだった。

「おいおい、どうしちゃったんだよ？そんなにホグズミードに行きたかったのか？」

ロンはハリーの隣に座り、ハーマイオニーはイリスの隣に座った。しかし二人は微動だにしない。ロンがこれ見よがしに、抱えていた紙袋いっぱいのお菓子をテーブル上にぶちまけても、無反応だ。

「ねえ、何があったの？」

ハーマイオニーがイリスの頭を撫でながら尋ねると、代わりにハリーが“ゴブレット事件”を洗いざらい二人に話した。ロンは驚いて、口をパカッと開けた。

「ルーピンがそれ、飲んだ？マジで？」

「イリス、教えてくれ。一体、何の薬なんだ？君は現場を見たんだろ？」

ハリーは少し語気を強めて、辛抱強く尋ねた。しかし、談話室で再

会してからずっとこの問いを繰り返していたのだが、彼女は決して口を割ろうとしない。

ハリーにしてみれば、イリスの反応は怪しいことだらけだった。ゴブレットを持って部屋に入ってきた時、あからさまに挙動不審だったし、自分を見てギクリとしていた。ルーピンがゴブレットの中身を飲んでいいる時は、まさに茫然自失状態だった。そして最後には「ごめんなさい」と言って泣いたのだ。

——怪しすぎる。そして薬を調合したのは誰であろう、あの憎つくきスネイプだ。間違いない。ハリーは確信していた。あの中身は「薬」じゃない、「毒」なのだ。

「何の」薬かは言えないよ。先生のご病気の事だもの」やがてイリスは、弱々しく口を開いた。

「スネイプは、闇の魔術に関心がある」ハリーが厳しい声で言い返した。

「闇の魔術に対する防衛術」の講座を手に入れるためなら、何だっにするって聞いているよ」

イリスは思わず俯いていた顔を上げ、ハリーを見つめた。つまり、彼は何て言いたいんだ？まさか——イリスは怒りの感情がゆっくりと心臓を覆い尽くしていくのを感じた——スネイプ先生が『脱狼薬』に毒を盛ったと言いたいのか？

「ハリーは・・・スネイプ先生が、薬に毒を入れたって言いたいの？」  
「ねえ、そろそろ降りた方がいいわ。宴会があと五分で始まっちゃう」とハーマイオニー。

「イテッ！（ハーマイオニーに足を蹴られた）何だよ、ハー・・・そう、そう、早く行こう！」とロン。

ハーマイオニーは、二人の雲行きが本格的に怪しくなってきたのを感じ——ポーツとしているばかりだったロンを睨けつつ——腕時計をチラチラ見ながら、大広間へ促そうと試みた。

しかし、ハリーとイリスは止まらなかつた。いつも「百味ビーンズのわたあめ味」並みに甘々な関係だった二人が喧嘩をしている、という前代未聞の光景に、いまや他のグリフィンドール生達も興味深げな



視線をちらほらと向け始めている。

「そうだ」ハリーははつきり言い切った。

「私、ちゃんと見たよ。薬の調合の工程を。先生はそんなことしなかった」イリスもはつきり言い切った。

「でも初めての薬だろ？ 黒板に書いてある内容も、スネイプが書いたものだ」

「ねえ、早く行きましようよ！」

ハーマイオニーが泣きそうな声でイリスの袖を引っ張ったが、依然として二人は睨み合ったままだった。

イリスはローブのポケットに入ったガラス製の壺を、ギュツと握り締めた。確かにスネイプは嫌味で陰湿な先生だ。しかしイリスが危機に瀕した時、密かに救いの手を差し伸べてくれたのもスネイプだった。

先生は、リドルに捕えられた私を一生懸命助けようとしてくれた。ドラコとの事も考えてくれた。"闇の印"を消す薬もくれたんだ。イリスは目の前の頑固な親友を、強い眼差しで見つめた。スネイプ先生は、とても良い人だ。

対するハリーも、負けじとイリスを睨み返した。ハリーにとって、スネイプは『ホグワーツで一番嫌い』と言っても過言ではない人物だ。何もしていないのに、最初から自分を憎んで嫌ってきた。おまけにいじめをするし、露骨な依怙贖もするし、スリザリン寮生以外の全生徒達から毛嫌いされているほどの、本当にろくでもない人物だ。はつきり言って、嫌わない方が難しいくらいだ。

イリスの補習の件だつて、ずっとおかしいと思っていた。彼女はもう十分に「魔法薬学」の実力はある。それなのにスネイプは、わざと低い成績を付けてまで彼女を離そうとしない。露骨な横暴行為じゃないか。それなら、ルーピンを「闇の魔術に対する防衛術」の座から引き摺り落とすために、薬に毒を仕込むなんて事も簡単にしてしまえる筈だ。

「スネイプ先生は、絶対そんなことしない。ハリー、それってとっても失礼なことだよ！」

「君はスネイプを信じすぎなんだ！」

ハリーはイライラとした様子も隠さずに言った。——談話室の隅っここでは、悪戯双子のフレッドとジョージが、『ハリーとイリスの口喧嘩、どちらが勝つか』で、グリフィンドールの同級生達とクヌート銅貨を賭け合っている。

「そうだよ。私、先生を信じてる！」

イリスはついに立ち上がった。呆気にとられる三人を見下ろし、凜とした態度で言い放つ。

「他の誰が何と言ったって、私はスネイプ先生を信じる！」

ハリー側に賭けたフレッドとその同級生達が、残念そうな声を出した。銅貨がチャリチャリとテーブル上にぶちまけられる音に重なるようにして、古びた壁掛け時計が、宴会の始まる時刻になった事を告げる。四人は慌てて談話室を抜け出した。

☆

ハロウインパーティーは豪勢だった。大広間には何百ものジャック・オランタンが輝き、生きた蝙蝠が群がって飛んでいた。燃えるようなオレンジ色のリボンが、荒れ模様の空を模した天井の下で、何本も鮮やかなウミヘビのように、くねくねと泳いでいた。

食事もとても素晴らしかった。ハーマイオニーとロンは、ハニーデュークスのお菓子でお腹がはち切れそうだった筈なのに、全部の料理をお代わりした。そして二人は——何とも珍しい事に——喧嘩を引き摺って気まずい雰囲気の中、ハリーとイリスが元通り仲良くできるまで、一生懸命フォローしてくれた。

イリスは何となく教職員テーブルを見た。ルーピン先生は楽しそうで、特に変わった様子もなく、「呪文学」のフリットウィック先生と何やら楽しそうに話をしている。イリスはホッと一安心して、表面のカラメルがカリカリに焦がされた、パンプキンペイニングを口に運んだ。

宴の締めくくりは、ホグワーツのゴーストによる余興だった。壁やらテーブルやらから一斉に現れて、見事な編隊を組んで空中滑走した。グリフィンドールの寮憑きゴースト「ほとんど首無しニック」は、

しくじった打ち首の場面を再現し、みんなに大ウケした。最初から最後まで、ずっと楽しいパーティーだった。イリスとハリーは知らない内に仲直りしていた事に気づくと、お互いに安心したように笑い合った。

四人は浮かれた雰囲気を漂わせながら、グリフィンドール寮の談話室へ戻った。イリスはハリーと一緒に、ロンとハーマイオニーの“ホグズミード村の土産話”を楽しんだり、買って来てくれたハニーデュークスのお菓子を摘まんだりした。二人は、ほとんど村の全ての店を回ったようだった。魔法用具店の「ダービッシュ・アンド・バングズ」、悪戯専門店の「ゾンコ」、「三本の箒」では泡立った温かいバタービールをマグカップで引っかけたり・・・などなど。

ベッドに潜り込む頃には、イリスは非常に良い疲労感に包まれていた。ロンに買って来てもらった蛙チョコカードを眺めているうちに、眠気に誘われ、ゆっくりと瞼を閉じた。

——心地良いまどろみの中、誰かが、小さく肩を揺すぶっている。

《イリス、イリス》

「う、ウーン・・・誰？」

イリスはうつらうつらしながらも、目をこじ開けた。——クルックシャンクスが真剣な表情をして、目の前に座っている。他のルームメイトが深い眠りに就いている事を確認してから、彼は張り詰めた声でこう言った。

《支度をしろ、すぐ出発だ。みんな祭りの後で浮かれている、今が一番、学校中の注意が少ない。黒いヤツらも注意散漫のようだ。あいつに会うのは、今しかない》

☆

イリスは、百味ビーングズの箱から“強烈ミント味（※明るい緑色で、軽く触れるだけで指先がスーツとするため見つけやすい）”を摘まんで眠気を吹き飛ばすと、ネグリジエの上にローブを羽織り、“目くらまし呪文”を掛けて姿を消した。クルックシャンクスが先に談話室の穴を出て、透明になったイリスがその後を付いていく。「太った貴婦人」は、いつもの気まぐれ猫が、夜のお散歩に出て来たのだと思い、

大きな欠伸をしただけだった。

黒々とした芝生の上を、イリスとクルックシャンクスは黙々と歩いた。月と星の明かりだけが、うつすらと足元を照らしてくれている。

『今学期は絶対に、人気のない場所に行ったり、一人ぼっちで行動しちゃ駄目よ。いいこと?』——不意にイリスの頭の中で、モリー夫人の忠告がこだました。

けれどもイリスは、誰かに助けを求められれば、可能な限り応えようとするお人好しな性格だった。そしてクルックシャンクスと同じように、イリスも彼を信頼していた。『彼と一緒になら危険な事にはならない』——そう信じさせるものが、このオレンジ色の賢い猫にはあったのだ。

「ねえ、その動物はどんな子なの?」

イリスは、クルックシャンクスの言う“あいつ”は動物だと思っていた。するとクルックシャンクスは、振り向かないまま、静かに応えた。

《黒い犬だ。大型のな。そしてひどく弱り、痩せている》

「じゃあ、ハグリッドのところへ連れて行った方がいいかもね」

イリスが心配そうに言うと、クルックシャンクスは暫く沈黙した。それから口を開いた。

《なあ、イリス。ヒトはどうして濁るんだ?》  
「え?」

《ヒトはみんな生まれた時は、おれたち動物と同じ純粋な心を持つてる。純粋な心は、隠された悪意を見抜くんだ。

でもヒトは成長していくのと一緒に、心が濁っていく。周りのヒトや見えないモノばかりを見て、目の前の真実を見落とす。そして嘘を真実だと、悪意を善意だと勘違いするんだ》

クルックシャンクスの言葉は、イリスの心の奥底へ静かに浸透していった。若い雄猫に見えるけれど、本当はとても長生きなのかもしれない。イリスは彼をじっと見つめながら、そう思った。今の彼は、まるで永い時をたった一人で生きて来たかのような、不可思議な雰囲気放っていた。

やがて二人は、禁じられた森の近くまでやって来た。ハグリッドの小屋の灯りも消えている。夜風の小さな囁きと木の葉の擦れる音だけが、辺りを優しく包み込んでいる。

禁じられた森は、濃厚な暗闇にとっぷりと沈み込んでいた。イリスは“目くらまし呪文”を解くと、用心のために杖を握り、時折キラリと光るクルツクシャンクスの目だけを頼りに歩いた。

ひととき大きな樹木を通り過ぎた時、目の前の木の根元に、大きな黒い犬が座っている。儂い月明かりが一筋、木々の隙間から入り込んで、犬を照らしていた。クルツクシャンクスは振り向いて、こう言った。

《イリス。今から起こる事を見ても、何も考えるな。考える事が、濁るきつかけになる。感じるんだ》

クルツクシャンクスの言葉を合図としたかのように、不意に黒い犬がうずくまった。

——そして犬は、みるみるうちに“一人の人間”へと姿を変えた。とても背の高い、痩せた体躯の男だ。汚れきった髪が、もじやもじやと肘まで垂れている。垢と泥に塗れた体を、ボロボロの布切れが覆っていた。男はゆっくりと立ち上がり、緩慢な動作で髪を掻き上げて、顔を露わにした。暗い落ちくぼんだ眼窩の奥で、目だけがギラギラと輝いている。それは、まるで生きた骸骨のような有様だった。「ああっ……！」

イリスは掠れた声で叫び、恐怖の余り腰が砕けそうになるのを、何とか気力で持ちこたえさせた。——自分はこの男が誰か、知っている。目の前の男の顔と、ダイアゴン横丁で見た『シリウス・ブラックの指名手配書』が、バシツとリンクした。間違いない。この男は、大量殺人犯のシリウス・ブラックだ！

「イリス・ゴイント。君の事は、この猫から聞いている」  
ブラックはイリスを静かに見据えたまま、しわがれた声を出した。声の使い方を長い事忘れていたかのようにだった。

自分の名前を呼ばれた瞬間、イリスは反射的に杖を構え、震える手でブラックへ照準を合わせた。——逃げなきや。クルツクシャンク

スはきつとブラックに操られていたのに違いない。彼は、私に害を成そうとしている。

だがブラックは杖を向けられていると言うのに身動き一つせず、イリスをじつと眺めているだけだった。

どうして攻撃してこないんだ？イリスは疑問を抱いた。ブラックはたった一度の魔法で十人余りもの人々を殺めた、凄腕の魔法使いだ。自分を殺してしまう事など、赤子の手を捻るより簡単だろうに。

——ふと、ルーピン先生の姿が思い浮かんだ。間違った知識を信じ込んだために、傷つけてしまったかもしれない先生の事を——。

“考えるな、感じるんだ”——クルックシャンクスの言葉が、イリスの背中をグイと押した。イリスは思考を放棄し、感覚を研ぎ澄ます事だけに集中した。周囲の木々のざわめき、何かの動物の叫び声、たちまち聴こえなくなる。彼女はただ、ブラックの落ちくぼんだ眼窩の奥、光る眼だけを見つめ続けた。

どれほどの時間が経ったのだろう。やがて、イリスはゆっくりと杖を下ろした。——ブラックの目に、悪意はなかった。決して悪者の目ではない。その目はとても澄んでいた。

ブラックは、イリスが攻撃する意志をなくしたのを確認すると、ドサリと力なく地面に座り込んだ。その時、たまたま月明かりが反射しただけなのか、目の奥がキラツと光ったような気がした。次いで彼は、チラリとクルックシャンクスを見て、口火を切った。

「今から、君に全てを話す。その上で私に関わりたくないと言うのなら、杖を貸してくれ。君の記憶を消去し、寮へ返す。協力してくれるのなら、私たちと共に”あのネズミ”を捕まえてほしい」

イリスの心臓が、大きく脈打った。——”あのネズミ”とは、きつとロンのペットのスキヤバーズに違いない。クルックシャンクスに出会った時の警告、スキヤバーズの悪夢、やたらに接触を凶ろうとする奇妙な行動、あの黒いギラギラとした目——この全ての謎が結びつくたった一つの真実を、ブラックは知っているのだ。イリスは、ブラックの言葉に耳を傾けた。

「あいつはネズミじゃない。魔法使い、『動物もどき』だ。名前は、ピー

ター・ペティグリュール」

そしてシリウスは、全ての真実をイリスに明かした。

☆

シリウス・ブラックは、「純血主義」を家風とする魔法族の名家で、長男として生まれた。しかし、シリウスはその家風を心底嫌っていた。そのため、狂信的な純血主義者だった両親からは、家風に忠実だった弟と比較されて育った。

ホグワーツ魔法魔術学校に入学後はグリフィンドール寮に所属し、そして同寮のジェームズ・ポッター、リーマス・ルーピン、ピーター・ペティグリュールと親しくなった。

深まっていく四人の友情と反比例するようにして、シリウスとブラック家との確執は年を経るごとに、より大きなものとなっていった。とうとうシリウスは、十六歳の夏休みに実家を飛び出し、ポッター家に転がり込む事となった。そしてホグワーツを卒業後、ダンブルドア校長が「闇の陣営」に対抗するために創設した組織「不死鳥の騎士団」に加わった。

“不死鳥の騎士団”と“闇の陣営”との争いは、熾烈を極めた。いかに凄腕揃いの魔法使いや魔女たちと言えども、相手はその二十倍も的人数を誇っていた。シリウスたちも団員として日々死と隣り合わせの生活を送っていたが、やがて『ポッター一家をヴォルデモートが狙っている』という情報が流れ、周囲は騒然となった。

シリウスは、ジェームズとリリーと話し合った。その結果、シリウスに“忠誠の術”を掛けて、“ポッター家の所在地”の情報を閉じ込める“秘密の守り人”とする事で話がまとまりかけたが、シリウスはそれを良しとしなかった。万が一の事があってはならないと、親友の一人であるピーターに“秘密の守り人”を変更するように、ポッター夫妻に持ち掛けたのだ。自分は囃として、“闇の陣営”と最後まで戦うと。

しかし——秘密は破られた。ポッター夫妻はヴォルデモートに殺され、ハリーだけが生き残ったのだ。

「あの夜、私はピーターのところへ行く手筈になっていた。やつが無

事かどうかを確かめるために。ところが、隠れ家に行ってみると、もぬけの殻だ。争った形跡も、密かに連れ去られたような形跡もない。

私は嫌な予感がして、すぐにジエームズたちの家へ行った。そして、家が壊され、二人が殺されているのを見た時、私は悟った。ピーターが何をしたのかを。私が何をしてしまったのかを」

——イリスは言葉もなく、ただシリウスを見つめた。喉の奥が詰まり、声も出ない。シリウスの声には涙が混じり、少しの間だけ言葉が途切れた。

「私は死に物狂いであいつを見つけ出した。殺すつもりだった。後は自分がどうなろうと、どうでも良かった。

ついにあいつをマグルの町中で追いつめた時、あいつは道行く人々全員に聴こえるように叫んだ。あいつではない、私がジエームズとリリーを裏切ったんだと。

それから、私が呪いをかけるより先に、あいつは隠し持った杖で道路を吹き飛ばし、自分の周り五、六メートルにいた人間を皆殺しにした。そして指を一本切り落とすと、素早くネズミに変身し、下水道に逃げ込んだ。

私は取り逃がしてしまった。そして魔法省の連中に拘束され、裁判すらなく、すぐさまアズカバンへ放り込まれた」

「そんな！」

イリスは絶望の声を上げた。——余りに一方的過ぎる。マグルの世界では、例えどんな極悪人だって、もう少し融通を利かせてくれる筈だ。

「何もしていないのに。あなたは無実だって信じてくれる人は、証明する人はいなかったんですか？たとえ証拠がなくても……」

「その時代は、まさに疑心暗鬼ばかりだった。ヴォルデモートは人々の間に不安や疑いの気持ちを抱かせるのが、非常に得意だった。私でさえ、無二の友をスパイだと疑っていたんだ。

……みんなが、友でさえも、私をそうだと信じた」

シリウスはその時の光景を思い浮かべているのか、再び言葉を途切らせた。——イリスは、シリウスに掛ける言葉が見当たらなかった。



最初は、四人は親友だった。けれど、ピーターの裏切りでジェームズたちは死に、あろうことかシリウスがその汚名を着せられ、ルーピンもシリウスがスパイだったと思つて助けようとしなかった。固く結ばれていた筈の友情は、たった一夜の裏切りと死で、永遠に引き裂かれたのだ。

シリウスは毒を吐き出すかのように苦しげな表情で、口を開いた。「それからの十二年間は、地獄だった。デイメンターは囚人の幸福な気持ちを吸い取り、次々に狂わせていく。耐え切れずに自ら命を絶つた者、吸い尽くされて廃人に成り果てた者も、沢山いた。

その中で、私なんか正気を保っていられたのは……『自分が無実だ』と知つていたからだ。その思いは幸福な気持ちではない。だから、あいつらは吸い取る事が出来なかった。

しかし、私はとても弱つていた。杖なしにはきつとデイメンターを追い払うことも出来ない、諦めていた。

そんな時、魔法大臣のフアツジが査察へやつて来た。私は、彼が新聞を持っていたのを見て、興味本位で貰つた。クロスワードが懐かしくてね、少しやつてみたいと思つたんだ。

するとそこに——スキヤバーズが——”あのネズミ”がいた”

イリスは、ウィーズリー家が”日刊予言者新聞ガリオンくじグランプリ”を見事引き当て、エジプト旅行へ行つた事を思い出した。日刊予言者新聞が開催している宝くじなので、もちろん当選者は毎年新聞の一面を飾る事となる。ハリーが「漏れ鍋」で、ロンから貰つたという写真付きの記事のスクラップを見せてくれたのだ。

その写真は、大きなピラミッドの前でウィーズリー一家が全員集合しているものだった。ロンの肩の上には、スキヤバーズがちよこんと乗っていた。『指を一本切り落とすと——』不意にシリウスの言葉が蘇り、イリスはアツと声を上げそうになった。魔法動物ショップで見たスキヤバーズは、前足の指が一本欠けていた。

「スキヤバーズの飼い主である子供が、ホグワーツでハリーと一緒にだ」という事も分かった。

“闇の陣営”が再び力を得たとの知らせが入ってきたら、あいつは

すぐさまハリーをやつらに差し出すだろう。自分の保身のためだけに。そのための完璧な態勢だ。

私は何かをせねばならなかった。ピーターが生きていると知っているのは、この世界で私一人だけだ」

シリウスの瞳の奥で、怒りの炎が燃え盛り、静かな声は激しい熱を帯びた。イリスは「漏れ鍋」で盗み聞きしたアーサーの言葉を思い出した——『あいつはホグワーツにいる、あいつはホグワーツにいる』シリウスは獄中でそう繰り返していた。「あいつ」とはハリーではなく、裏切り者のピーターの事だったのだ。

「まるで誰かが、私の心に火をつけたかのようにだった。デイメンターはその気持ちを砕く事は出来ない。幸福な気持ちではないからだ。

しかし、その気持ちが私に再び力を与えた。デイメンターが食事を運んできて独房の戸を開けた時、私は犬に変身してその脇を擦り抜けた。

幸運な事にやつらは目が見えないし、動物のような単純な感情を理解する事が出来ないのです、混乱していた。

そして私は犬の姿で泳ぎ、島から戻ってきた。北へと旅し、ホグワーツの校庭に入り込み……それからずっとこの森に棲んでいた」

☆

「私は一人でやつを見つけ、殺すつもりだった。しかし、この猫が力を貸してくれた」

シリウスがクルックシャンクスを優しい眼差しで見つめた。猫は、満足気に喉を鳴らした。

「そして君の事を教えてくれた。イリス、君がハリーやピーターと最も近い距離にいる事も、動物と話せる事も全て。

だがこれは危険な戦いだ。君に無理強いするつもりはない。君が嫌だと言うなら……」

「私、ピーターを捕まえます」

イリスは強い口調で、シリウスの言葉を遮った。——彼を助けないではいられなかった。想像を絶する孤独と狂気の中、自分の命を賭してでもハリーを守ろうとするシリウスの気高く強い心は、イリスの勇

敢な気持ちを燃え上がらせていた。

「罪を償ってもらいます。そして、あなたの濡れ衣を晴らします」

——シリウスは暫く茫然とし、イリスを眺めた。クルツクシャンクスの強い勧めで、接触を凶ろうとしたのだが、まさかこんなに上手く事が運ぶとは。

本当にこの子は、自分の話を信じたというのか？世間では“大量殺人鬼”として有名な男の話に、みじんの疑いも抱かないなんて。自分を騙すために、嘘を吐いている可能性を考えないのか？よほどの馬鹿か、それとも策士か。判断しかね、シリウスは低く唸った。

シリウスは、イリスの父親であるネーレウス・ゴーントを思い出していた。彼の心に、強い罪悪感と疑念が湧き上がる。

ネーレウスは、年不相応なほどに達観した男だった。品行方正で、誰にも分け隔てなく接する優等生だったが、いつも悲しい目をしていたのを強く覚えている。

シリウスの学生時代は、“闇の陣営”が最も力を発揮していた時期だった。その時代で、“反闇の勢力”を唱えるシリウス達の存在は、同じ志を持つ生徒達にとつて憧れの存在だった。

その一方で、ネーレウスは“闇の陣営”側における有名人として、人々から好奇や畏怖の目で見られていた。だが彼は、常に良い人間であろうとし続けた。だがシリウス達も周りの人々も、彼がどんなに良い行いをしていても信じなかった。外では良い顔をしておきながら、裏では闇の帝王と密通しているのに違いないと囁いた。それほどにヴォルデモート卿の影響は強かったのだ。

シリウス達はしつかりとした信念を持っていたし、それを最後までやり遂げる胆力を備えてもいた。そして若かった。だがその真っ直ぐな心根は、時に道を違える切っ掛けにもなる。

ネーレウスは“闇の陣営”側の人間ではないと言いながら、スリザリン生であり、“死喰い人”を親に持つ生徒達と親しかった。シリウス達はそれに目を付け、ネーレウスを攻撃した。しかし彼が呪いを受けたり怪我をする事は、一度としてなかった。そしてその結果は、ますますシリウス達を逆上させる事となった。さらに彼らの神経を逆

撫でするかのように、宿敵スネイプとのいざこざが始まると、ネーレウスが決まってどこからかやって来て、邪魔立てするようになった。しかしどれだけネーレウスを怒らせても、決闘をしても、その心の内は見えなかった。投げつけた誹謗中傷の言葉も、放った無数の呪いも全て、彼の悲しい目に吸い込まれて、融けて消えて行くかのようだった。

——あいつが何を考えているのか分からない。本当は何を望んでいるのかも。だからシリウス達は“不死鳥の騎士団”に入っても、『在学中から籍を置いていた、君たちの先輩だ』と紹介されたネーレウスを信頼する事など出来なかった。本当は“闇の勢力”のスパイなのではないかと、何度も四人で話し合った。

しかし、やがてその話し合いも終結を迎えた。ネーレウスが最初から最期まで“闇祓い”として戦い、魔法省で善良な魔法使いとして真面目に働いた事が証明されたのだ。——娘を守るため、妻と共にヴォルデモートに殺されたという事実が公になった事によって。たちまち彼は今までの優れた功績を認められ、勲一等マリーリン勲章を授かった。彼に信頼を寄せていた多くの者達は、世間の馬鹿げた掌返しに憤慨したという。

その数か月後、シリウスの親友のピーターが裏切った。ジェームズとリリーはヴォルデモートに殺され、シリウスは濡れ衣を着せられてアズカバンへ投獄された。

——シリウス達は誤った人物を信じ、信じるに値する人物を信じられなかった。

☆

ニユクス

夜は星の光を引き連れて西へ渡り、東から暁の気配が忍び寄る。木々の枝から見える星空が、漆黒から濃紺色へ変わっていく。不意にその空を、黒い影がいくつか飛び去って行った。——デイメンターだ。デイメンターが作った影が、ほんの一瞬二人と一匹を撫でただけで、シリウスは反射的にビクリと肩を跳ね上げた。それほどまでに、アズカバンでの十二年間は、シリウスを弱らせ、深い傷跡を残していた。

その様子をじつと見つめていたイリスは、ハッと思いついたように息を飲むと、ローブのポケットから蛙チョコレートの箱を一つ取り出して、シリウスに渡した。

「これを食べて。チョコレートを食べると、気分が楽になります」

「・・・懐かしい。蛙チョコレートか」

シリウスはぎこちなく笑って見せたものの、受け取った箱を開く事は出来なかった。——『もしかして、毒が入っているのでは?』と警戒したためだ。

対するイリスは、シリウスの心の内など知る由もない。彼はきつと細かい作業が出来ない程に、ひどく疲労しているのだ。そう判断したイリスは、代わりに箱を取り上げて開封した。そしてピョンと跳び出したチョコレートを上手く掴まんで、シリウスの口に入れてやる。

——シリウスは拒否する事など出来なかった。間近で見たイリスの瞳は、生まれたての赤子のように、純粋な輝きで満たされていた。長い間、昏い場所で生きてきたシリウスには、その光は眩し過ぎた。

この目の何と美しいことか！ネーレウスは、この輝きを守るために、命を賭けたのだ。この時シリウスは、やっとネーレウスを理解し、信じる事が出来た。そして、自分の過ちを受け入れた。

「ああ、許してくれ」

シリウスは、呆氣に取られるイリスの肩に顔を押し付け、咽び泣いた。

「君の父親を、最期まで信じる事ができなかった私を！」

イリスは、大人に継り付いて泣かれる事など初めてだったので、最初の方こそ狼狽していたが、やがてシリウスの頭におずおずと腕を回した。——ハグリッドは、ハリーのお父さんと私のお父さんが、とても仲が悪かったって言ってた。ハリーのお父さんとシリウスは親友だった。だからきつと、シリウスと私のお父さんも——。

イリスはシリウスと自分の父親との仲が悪かったという事実を知っても、シリウスを嫌いにはなれなかった。彼が良い人間であると分かっていたからだ。やがてシリウスが、ネーレウスと自分達との確執の思い出を洗いざらい話しても、イリスの気持ちは変わらなかつ

た。

## Act 9. 守護霊の呪文

イリスはシリウスに別れを告げ、禁じられた森を出た。そして金色に輝くスニジェットに変身し、クルックシャンクスと共に中庭を通り抜け、学校内を毛細血管のように走る排水管を駆け巡り、談話室の暖炉脇に出来たひび割れをくぐって、何とか無事に寮へと戻ってきた。

幸運な事に、談話室にはまだ誰もいなかった。イリスは元の姿に戻り、杖を振って自分とクルックシャンクスに付いた汚れを取り払うと、男子寮へ続く階段をじっと見つめた。——あの先に、スキヤバズがいるのだ。

暖炉の残り火が、イリスの体をじんわりと暖め、急速に緊張を和らげていく。するとシリウスの話が、まるで夢物語のようにも思えてきた。スキヤバズの正体が人間——それも悪い魔法使い——だったなんて。ここ最近の様子こそ可笑しかったけれど、それまでの彼は寝る事と食べる事が生き甲斐の、至って大人しい老ネズミだった。そして一年生の時にはゴイル達からみんなを守ってくれた。

イリスはふと、フローリアン・フォーテスキュー・アイスクリーム・パラーのテラスで、スキヤバズが懸命に何かを訴えかけていたのを思い出した。あの時、彼は一体、自分に何を伝えたかったんだろう。ぼんやりとその事について考えていると、クルックシャンクスがおもむろに口を開いた。

《すまない、イリス。巻き込んでしまつて》

イリスが我に返つてクルックシャンクスを見ると、彼は申し訳なきように耳を下げた。

《だが、おれたちだけでは、もうこれ以上どうする事も出来なかつたんだ。

あいつは、おれたちが組んでいるのをどこからか嗅ぎ付けた途端、日中はロンの内ポケットで過ごし、寝る時はロンの耳元で眠るようになった。

何かあればすぐに鳴いて、ロンを叩き起こせるように。

そうしておれがあいつに近づけない事が分かると、シリウスは——

杖も持っていないのに——強引にここへ入り、力尽くであいつを殺そうとした。

——そんなの無理だ。無謀過ぎる。おれは、友達を死なせたくなかった》

イリスの脳裏に、シリウスの姿がパツと思ひ浮かんだ。まるで抜き放たれた刃のようにキラリと輝く、その灰色の瞳を。ピーターを殺すためなら、彼は喜んで自分の命を投げ出すだろう。それはとても勇敢で気高い行為だ。誰にだって出来る事ではない。

しかし彼を大切に思う者にとつては、それはとても悲しい行為だ。クルックシャンクスは、死地へ突き進むうとする友人の姿を見て、何とか助けようと考えたに違いない。

《おれはシリウスが好きだ。暗い場所ではなく、明るい場所へ向かって進んでほしかった。

だから説得した。確実にやつを仕留めるには、協力者が必要だとおれたち動物と会話ができ、とても澄んだ心を持つ魔女がいる。その子に協力を仰ごうと》

クルックシャンクスの精悍な目が、イリスを真っ直ぐに射抜いた。その時、彼女は初めて自覚した。

今までは、周りの大人達や友人達が守ってくれた。だが今回は、自分一人の力で立ち向かわなくてはならない。クルックシャンクスの目は、イリスを子供ではなく、一人前の魔女”として見ている。リドルや誰かに命じられたのではない。自分の意志で、杖を振るうのだ。恐れとも不安ともつかない感情が込み上げて来て、イリスはブルツと身震いした。

やがてイリス達は自室へ戻った。ベッドにそつと潜り込んでから、”目くらまし呪文”を解除する。イリスは目を瞑って、眠りの世界に入ろうと頑張った。ルームメイトの規則正しい寝息が、心を少しずつ落ち着かせていく。

——スキヤバーズは、いやピーターは今、どんな気持ちでいるのだろう。イリスはうつらうつらしながら、考えた。彼は、最初から悪い魔法使いだっただろうか。かつての自分のように、闇の帝王に操ら



れたのか。それとも、何かを切っ掛けに変わってしまったのだろうか。

シリウス達とピーターは、親友だった。もし本当に四人が仲良しで、闇の帝王にも操られていなかったのだとしたら——親友を裏切れるほどの何かが、ある日突然、彼の身に起きてしまったという事になる。けれどそれは一体、何なのだろう——。イリスは沈みゆく意識を、そっと手放した。

☆

イリスはまた“塔の夢”を見た。塔の中の螺旋階段を少しずつ昇っている。天辺からは、あの美しい歌声が優しく降り注いでいた。石造りの外壁には、採光用の窓が等間隔にあって、そこから月や星の光が差し込み、内部を照らしている。

——もう随分と昇って来たはずだ。イリスはもどかしい気持ちで、真上を見上げた。しかし歌声との距離は、少しも縮まったような気がしない。

《イリスちゃん。これ以上、階段を昇っちゃダメ》

不意に、かつての夢の中のサクラの言葉が、警鐘のように耳元で鳴り響いた。——そう言えば、どうしてサクラはあんな事を言ったんだろう。イリスは足を止め、考え込んだ。自分の欲求と相棒の忠告の間でしばらく悩んだ結果、イリスは階段の端っこに腰を下ろし、少し休憩する事にした。

どれほどの時間が経っただろう。微かに石段を下りる小さな足音がした。イリスのものではない。塔の上部から、それは段々近づいて来て——やがて、イリスの隣にゆっくりと腰掛けた。

イリスは横を向かなくても、それが誰か分かった。恐れたり驚くべきはずなのに、すぐさま立ち上がって逃げるべきなのに、彼女には出来なかった。

代わりに込み上げてきたのは、真逆の感情だった。再会の喜び、けれど夢の中の出来事だと分かっている故の悲しき、心臓が押し潰されるような罪悪感——。

「あなたはリドルなの？」

リドルはイリスのすぐ傍で、あの頃と何も変わらない微笑みを見せ、静かに首を横に振った。

——イリスは咄嗟に呼吸を忘れてしまうほどの悲哀の感情に支配され、苦しみに喘いだ。当たり前前だ。彼はもうこの世には存在しない。他ならぬ私が、陛下の崩御に手を貸してしまったのだから！

「残念だが、失ったものは決してかえらない」

リドルは美しい声でそう言うと、愛おしげにイリスの黒髪を指で梳いた。彼女はただ自分のしでかした事の罪深さに、咽び泣く事しか出来ない。

「だが良い兆候だ。こちらの力が強くなったのか、あちらの力が弱くなったのか。——僕から言える事は、ただ一つ」

リドルはイリスをぐつと強く抱き寄せ、その小さな耳に口付けてから、こう囁いた。

「階段を昇り続けなさい。女王が、君を待っている」

イリスが応えようとした途端、窓の一つを突き破り、虹色に輝く巨大な蛇が現れて、リドルに襲い掛かった。リドルが杖を振り上げ、怒りに顔を歪めて何かを叫んでいる。イリスの視界は、あつという間に虹色一色に埋め尽くされた。

七色のきらめき以外、何も見えない、絶え間なく雨粒が降り注ぐ音のせいで、何も聴こえない——みるみるうちに、意識が霞んでいく——

☆

イリスは、眠りから目覚めた。とても悲しく切ない夢を見たような気がする。けれどもそれがどんな内容だったのかは、思い出せない。ふと投げ出した手の先に違和感を覚え、イリスは何となく視線をそちらへ向けた。

——ベッドの傍に置いたトランクが、不思議な事に少しばかり開いていた。そこから、かつてリドルから貰い受けた“空飛ぶ絨毯”の一部が覗いていて、銀色の豊かな房飾りの一つが、指先に絡まっている。イリスが驚いて反射的に手を引くと、房飾りは指先を離れ、するりと独りでにトランクの中へ納まった。

どうしてこんなことに？少しずつ明確になり始めたイリスの意識は、談話室から飛び込んできたロンの怒声で、一気に覚醒する事となる。

「見ろよ！」

「ロン、どうしたの？」ハーマイオニーの声だ。ひどく怯えている。

「スキヤバーズが見ろ！スキヤバーズが！」

——“スキヤバーズ”だって？イリスは寝間着姿のまま、慌ててベッドから飛び出し、よろよろと談話室の階段を駆け下りた。

談話室には沢山の寮生が寛いでいたが、みんなシーンと押し黙っている。その代わり、好奇心を剥き出しにした彼らの視線だけが、あるところへ一点集中していた。——いつものイリスたちの特等席だ。

ハリーとハーマイオニーが座り、ハーマイオニー側のテーブルには大量の書物が広げられている。そしてその傍にはロンがいて、ものすごい剣幕でベッドのシーツを揺さぶっていた。その余りの勢いに、ハリーは顔が引きつり、ハーマイオニーは仰け反るようにしてロンから離れようとしている。

イリスは一目散にハリー達の下へ駆け寄った。戸惑うような顔をしていたハリーが、ふとロンの持つシーツの一点に、視線を釘づけにした。ハーマイオニーも同じ箇所を見て、息を飲んだ。イリスも不吉な予感がして、二人の視線の先を辿った。シーツの真ん中に、何か赤いものが付いている。それはまるで——

「血だ！」

茫然として言葉もない部屋に、ロンの涙交じりの叫びだけが響いた。

「スキヤバーズがいなくなった！それで、床に何かあったかわかるか？」

「い、いいえ」ハーマイオニーの声は震えていた。

ロンはテーブルの上に、何かを投げつけた。三人は一斉に覗き込んだ。——数本のオレンジ色の猫の毛が散らばっている。それは紛う事無き、クルックシャンクスのものであった。

☆

イリスは、クルックシャンクスが犯人とは思えなかった。彼は『もう自分の手では不可能だ』と明言していた。それにもし百歩譲って本当にスキヤバーズを捕えたとしたなら、協力者である自分に向けて、何かしらの連絡があるはずだ。

しかしイリスの思考はそこで途切れた。目の前で、ロンとハーマイオニーが凄まじい口喧嘩を始めてしまったからだ。その喧嘩の凄まじさたるや、最早二人の友情もこれまでかと危ぶむほどだった。互いに相手に対してカンカンになっていたので、ハリーもイリスも助太刀のタイミングが一向に見えなかった。

クルックシャンクスがスキヤバーズを食ってしまおうとしているのに、ハーマイオニーはその事を一度も真剣に考えず、猫を見張ろうともしなかった！とロンは激怒した。しかも、ハーマイオニーも素直に非を認めず、クルックシャンクスの無実を装い、男子寮のベッドの下を探してみたらどうなの、とうそぶくので、ロンはますます怒り心頭になった。

おまけにハーマイオニーは、クルックシャンクスがスキヤバーズを食べてしまったという証拠がない、オレンジ色の毛はずっと前からそこにあったのかもしれない、その上、ロンは「魔法動物ペットシヨツプ」でクルックシャンクスがロンの頭に不時着した時から、ずっとあの猫に偏見を持っている、と猛烈に主張した。

残念ながら、ハリーはロンの味方の方ようだった。確かに状況証拠を見れば、クルックシャンクスが犯人以外、考えられない。イリスもクルックシャンクスから様々な話を聴いていなければ、ハリーと同じ考えをしていただろう。何にせよ、一刻も早く真実を確かめる事が肝要だ。イリスは強くそう思い、ロンの肩にポンと手を置いて、おずおずと言った。

「ロン。私、クルックシャンクスに聞いてみるよ」

しかし、ロンはイリスの言葉にますます傷を抉られたようだった。「聞いてみるよ！そしたらヤツは君に、スキヤバーズのグルメレポートをするだろうさ！あいつの尻尾を、口の端っここらぶら下げながらね！

僕、君に何回も、あいつに注意してくれって言ったよな！動物と話せるくせに、何にも助けてくれなかったじゃないか！」

愛するペットを失い自暴自棄になったロンは、目にいっぱい涙を浮かべ、攻撃的な言葉をイリスに投げつけた。イリスは驚いて身じろいだが、何も言い返す事は出来なかった。彼の言う通りだと思ったし、スキヤバーズには色々ややこしい裏事情がある。ハーマイオニーはイリスを庇うように傍に引き寄せ、ロンに突っかかった。

「ロン！言い過ぎよ！あなたたつて最低だわ！」

「何言つてんだよ！」ロンは怒鳴り返した。

「君と君の飼い猫の方が最低だろ！」

☆

その後、ロンはハリーと共に行動し、ハーマイオニーとイリスには目もくれなかった。イリスはハーマイオニーと一緒に、大広間で朝ご飯を食べた。ハーマイオニーは青ざめた表情で、オートミールの入った大皿に「数占い学」の教科書を立て掛け、羊皮紙に何かを書き付けている。イリスはトーストにブルーベリージャムを塗りながら、彼女に優しく話し掛けた。

「大丈夫だよ、ハーミー。私、クルックシャンクスにちゃんと話ししてみようから」

親友のロンに激怒された事はとてもショックだが、今のイリスにとってはスキヤバーズの安否の方が大事だった。——彼は今、一体どこにいるのだろう。イリスはハーマイオニーのゴブレットにオレンジジュースを注いでやりながら、考えた。シートの血痕は量が多かった。大怪我をしているのだろうか、それとも本当に——クルックシャンクスに食べられてしまったのだろうか。

一方、ハーマイオニーはイリスの気遣うような眼差しを受け止めた途端、両手で顔を覆って、わっと泣き出した。

「イリス、どうしよう！ほ、本当にあの子が食べちゃったのかもしれないわ！だとしたら私のせいなのに……ついカッとなってロンに、滅茶苦茶に言い返しちやっただの！」

いつも大人びた雰囲気のハーマイオニーが、小さな子供のよう

感情を剥き出しにして泣きじゃくっている。その光景にイリスはびつくりして、慌ててハーマイオニーの背中を摩ってあげた。——近くでよく見ると、泣き腫らした彼女の瞳の下には、くつきりとした隈があった。顔色もあまり良くないみたいだ。

「ハーミー、大丈夫？なんだかとても疲れているみたい」

ハーマイオニーはハツとしたような表情で、イリスを見た。それから何かを言いかけたが、ぐっと堪えるように唇を引き結び、スプーンでオートミールを掬って、黙々と口に運び始めた。

☆

イリスがクルックシャンクスに再会できたのは、朝ご飯を食べたあとの事だった。朝一番のクラスが行われる教室へ向かう途中、廊下の先の曲がり角に、見覚えのあるオレンジ色の尻尾が見えた。誘うように、左右にふらふらと揺れている。思わずイリスはアツと声を上げて、ハーマイオニーの方を振り返った。

「ねえ、ハーミー！クルックシャンクス……」

しかし彼女の姿はどこにも見当たらなかった。——可笑しいな。ついさつきまで、自分の後ろにいた筈なのに。イリスは首を傾げながらも、尻尾の方へ駆け足で向かった。

《おれはスキヤバーズを食ってない》

イリスがクルックシャンクスの目線に合わせてしゃがみ込むと、彼はきつぱりとそう言い切った。それから悔しそうに歯噛みし、尻尾を膨らませる。

《あいつはおれたちの会話を盗み聞きしていたんだ。お前が敵になった以上、ロンだけでは力不足だと判断したんだろう。だから自分が死んだということにして、雲隠れした》

「でも、血は？あなたの毛はどうやって？」

クルックシャンクスはへちやむくれの顔を、皮肉気に歪めた。

《自分で傷を付けて血を出し、シートに擦り付けたんだろうさ。シリウスも同じ意見だった。だってあいつはかつて同じ事をしたんだから。》

毛はきつと……あの時だ。あいつがおれに襲い掛かった時》

イリスは、その時の光景を思い出した。スキヤバースが凄まじい鳴き声を上げながら、ロンの肩から大ジャンプを決行し、クルックシャンクスに襲い掛かった時の事を。もしスキヤバースがああ騒ぎに紛れて毛を数本引っこ抜いたとしても、誰も——当のクルックシャンクスでさえも——気付かなかっただろう。スキヤバースはクルックシャンクスを口止めしようとしたのでも、気が狂って襲い掛かったのでもない——宿敵を陥れるための道具を奪い取るのが目的だったのだ。

《おれはあいつを見くびっていた。これ以上面倒な事になる前に、あいつの居場所を何としてでも突き止めなくては。》

今回の件で興奮したシリウスを落ち着かせるのに、かなりの時間を費やしたんだ。なあ、何か名案はないか？お前は魔法を使えるだろ？

》  
イリスは考え込んだ。——“呼び寄せ呪文”は生き物には使えない。スニジェットに変身して排水管中を探し回るというのも、余りに非効率だ。生憎、ネズミの知り合いもない。ホグワーツのネズミ事情に詳しい、なんていう知り合いがいればいいのに。イリスは思わずため息を零した。人間でも動物でも何だっつかまわらない——動物でも？ふとイリスの頭に、ある猫の姿がポツと思ひ浮かんだ。

☆

イリスはその日じゅう、ハーマイオニーと一緒に過ごした。談話室の隅っこで、一人きりで勉強に励むハーマイオニーを残していくのは気が引けたが、イリスには成さねばならぬ使命——脱狼薬の調合のお手伝いだ——がある。特等席でロンとチェスをするハリーに、アイコンタクトで「後をお願い」と言ってから（ハリーは肩を竦めてかすかに頷いた）、イリスは地下牢へ赴いた。

満月の夜は、着実に近づいてきている。イリスが地下牢へ入るや否や、スネイプは相変わらず不機嫌真っ盛りりの口調で、黒板に書いてある材料を持ってくるように厳命した。イリスは保管庫へ行って、杖を振っては彼方此方の薬草棚を開け、指定された材料を小さなバスケットに集めた。

イリスは色んな材料がぎっしり詰まったバスケットを見て、大きな溜息を零した。彼女の頭もバスケットと同じように、様々な心配事であっぴいだったからだ。シリウスは大丈夫なのか、スキヤバースは一体どこにいるのか、クルツクシャンクスはロンにいじめられていないか、ロンとハーマイオニーの友情の行方は――。

ガタン。不意に薬棚の一つが大きな音を立てて震え、イリスはびつくりして跳び上がった。風も何もないはずなのに、ひとりでにガタガタと震えている。

――イリスは、ふとスキヤバースの事を思い出した。バスケットを床に置き、ゆっくりと杖を構える。地下牢と保管庫を繋ぐ扉が閉まっている事を確認してから、彼女は恐る恐る口を開いた。

「スキヤバース？」

棚の動きが、一瞬止まった。それから、一層激しくガタガタと揺れ始めた。イリスは覚悟を決め、杖を振って呪文を唱えた。

「システム・アペーリオ、箱よ開け！」

呪文の光線が当たると、棚は丸ごと空中に飛び出した。スローモーションを見ているようにゆっくりと、棚の中にわずかに残っていた薬草が散らばっていく。

そして――そして、ネズミよりも随分と大きな黒い影が、棚の中から飛び出してきた、勢い良くイリスにぶつかかった。イリスは思わず悲鳴を上げ、影と一緒に冷たい床に転がり落ちた。痛みと衝撃に顔を顰めた後、彼女はこわごわ目の前の影を見て――驚きの余り、息を飲んだ。

「ど、ドラコ？」

――そう、それは、紛れもなくドラコ・マルフォイだった。

薬棚はせいぜい猫一匹が治まれば良い位の大きさで、決して人間が入れるような余裕はない。冷静に考えれば、先週対決したばかりのまね妖怪・ボガートだと分かりそうなものだ。だがイリスは愛する者に再会した事で、冷静さを欠いてしまった。床に転がった杖を拾う事も忘れ、彼女は大好きな灰色の瞳を見つめ返した。ドラコは彼女を抱き締め、愛おしげにその頬を撫でた。



「イリス。僕は君を・・・」

しかしドラコは言葉の途中で表情をこわばらせ、不自然に息を詰めた。そしてあの温かな感触が、イリスの腹部をじわじわと浸食していく。

——ああ、思い出した。思い出してしまった！イリスは目の前の現実を認めたくなくて、駄々っ子のように泣きじゃくりながら、何度も何度もかぶりを振った。

だがイリスの抵抗も空しく、愛する者の目は急速に光を失っていく。イリスは恐怖の余り呼吸すらまともに来ず、身も心も氷のように冷たくなっていった。無意識のうちに記憶を辿り、彼の背中を探るイリスの指先は——やがて彼の背中から腹部にかけてを深々と貫く、バジリスクの牙へ到達した。

「いやっ・・・いやあ・・・！」

もうイリスは、ここが“秘密の部屋”ではなくスネイプの保管庫である事も、このドラコが本物ではなくボガートだという事も理解できない。彼女は極寒の地にいるかのように震え、いくつも涙を零れ落としながら、ドラコの亡骸をギュウツと抱き締めた。

突如として、イリスは襟首を乱暴に掴まれ、床に引き倒された。

——スネイプだ。涙でぼやけた視界の中で、前方に立つスネイプのローブ越しに、床に転がったドラコの死体が少し大きくなり、短い銀髪が豊かな赤毛へ変わっていくのが見えた。

スネイプはそれに杖を突きつけ、「エクスペクト・パトローナム、守護霊よ来たれ！」と怒鳴った。彼の杖先から銀色の輝きが噴き出し、一頭の雌鹿が輝きながら現れた。白銀にきらめく雌鹿が威嚇するように前脚を蹴立てると、赤毛の死体は何千という煙の筋になって、どこかへ消え去った。

イリスはここに来てやっと、あれは本物のドラコではなく、ボガートだったのだと理解した。雌鹿はゆっくりとイリスの前に近づいて来て、親しげに頬を寄せる仕草をした。優しい眼差しをしている。傍にいてだけで、お天道様のような暖かみを感じた。けれどもイリスが撫でようとした時、雌鹿はふっと空中に融けるようにして消えてし

まった。

「三年目にもなつて、ボガート一匹も退治できないとは！かの優秀なルーピン先生は、ボガートと相対した時、ただ泣き喚くだけで退治できると教えたのかね？」

代わりにやって来たのは、スネイプの厳しい叱責の声だった。だがイリスは不思議な事に、その声にも——先程の雌鹿のように——温かみや優しさが含まれているように感じられた。スネイプはまだシヨックが抜け切っていない様子の彼女を助け起こし、杖を振るって柵と材料を元の位置に戻した。

「あの・・・先生。さっきの鹿は、一体何の魔法ですか？」

イリスはスネイプに助けしてくれた事のお礼を言ってから、おずおずと尋ねた。——気になってたまらなかつた。銀色の鹿は、イリスがどう頑張つても退治できなかった恐ろしいボガートを、いとも容易く退けてみせたのだ。スネイプは彼女に向き直ると、唇の端を皮肉気に歪めた。

「『パトローナス・チャーム守護霊の呪文』と呼ばれるものだ。非常に高度な魔法で、所謂『ふ普通魔法ろレベル（O・W・L）』資格を優に超える。

我らが親愛なるルーピン先生があのかラスに席を置く限りは、百年掛かつてもご教授願えないものでしょうな」

そこでスネイプは「諦めろ」と言わんばかりに、言葉を途切らせた。イリスはどう言えばスネイプにその魔法を教えてもらえるのか、必死に考えながら、ゆっくりと口を開いた。

「私は危機に陥った時、先生に何度も助けていただきました。先生は、闇の魔術や生物に対する術を、誰よりもたくさんご存じです。

恥ずかしながら私はその・・・出来が悪くつて、皆と同じようにボガートを退治する事が出来ません。ですから、ぜひその魔法を教えてくださいいただきたいのです」

拙い言葉ではあつたが、スネイプの自尊心をくすぐるには足りたらしい。彼は昏い目を輝かせ、細長い鼻の穴をひくつかせた。

「フム。いや、ボガートを退治できないのは、君のせいではない。君のせいでは。」

では話を戻そう。——“守護霊の呪文”は、主にデイメンターから術者を守るための保護魔法の一種だ。守護霊は、純粋なプラスのエネルギーのみで構成される。

デイメンターはプラスのエネルギーを好物としているが、守護霊は人間のように絶望しない。よって、デイメンターは守護霊を傷つける事ができない。故に、守護霊は術者を守る強力な盾になりえるのだ。

そして先程のように、ボガートやレシフオールドのような、プラスのエネルギーを嫌う一部の闇の生物にも防衛効果が認められている」

イリスは思わず目を見張り、スネイプを見つめた。この魔法を習得すれば、ボガートだけではなくデイメンターすらも退ける事が出来る。あの最悪の記憶を見ずに済むのだ。スネイプは杖を振ってバスケットを部屋の隅に追いやると、イリスに杖を拾うように命じた。

「まだ調合までに時間はある。——三十分やろう。何か一つ、幸せだった記憶を強く思い浮かべ、呪文を唱えるのだ。その時、守護霊は現れる」

スネイプは再び呪文を唱え、守護霊——白銀の雌鹿を呼び出した。雌鹿はイリスの周りを楽しそうに飛び跳ねて回ると、銀色の光の粒子をまき散らしながら、壁の向こうへ消えて行った。

イリスは杖を構えながら、頭を捻って必死に思い浮かべた。——“幸せな記憶”。パツとドラコの顔が思い浮かんだ。“秘密の部屋”で想いが通じ合い、頬にキスしてもらった時の記憶だ。イリスは甘酸っぱくも切ないその思い出で胸を満たしながら、呪文を唱えた。

「エクスペクト・パトローナム、守護霊よ来たれ！」

イリスの杖先から、シュツと、か細い銀色の煙が一瞬吹き出して、消えた。——どうして？一番幸せな瞬間だったはずなのに。戸惑った顔をするイリスをスネイプは目を細めて見つめ、静かに尋ねた。

「何の記憶を思い浮かべた？」  
「えっと……」

イリスは頬を紅潮させ、もごもごと口籠った。しかし無理を言っただけでスネイプに個人教授をしてもらっているのに、正直に報告しないのは失礼に当たる。ついに彼女は覚悟を決め、口を開いた。

「秘密の部屋」にいた時、ドラコが助けてくれて、それから……頬つぺにキスを、してもらった記憶です」

スネイプは一瞬驚いたように目を見開いたが、やがて元の陰湿陰険な顔つきに戻って、こう言った。

「誠に残念ながら、その記憶は君の一番幸福な記憶ではないらしい。他の、もっと幸福な記憶がある筈だ」

——イリスはショックだった。ドラコの記憶が、自分にとって一番幸せな記憶ではないなんて。

イリスはそれから時間の許す限り、ドラコのみならず、ハリー達との様々な記憶で試してみたものの、いずれも失敗続きだった。どの記憶も、確かに自分が幸せだと感じられたものだ。それなのに、守護霊は一向に出てこない。やがて、残り時間は五分を切った。自分の一番幸福な記憶とは、一体何なのだろう。イリスが諦めかけたその時——『お前は私の自慢の娘だ』ふと、イオの言葉が蘇った。

プラットフォームでイリスをギュツと抱き締めながら掛けてくれたものだ。——そうだ。イリスはやつと辿り着いた。

唯一の家族——イオおぼさんとの思い出。今まで当たり前にあったために、考えもしなかった。幸福は、すぐそこにあつたじゃないか。イリスは、イオが自分を『自慢の娘だ』と言ってくれた時の記憶で、胸をいっばいに満たすと、杖を構えて呪文を唱えた。

「エクスペクト・パトローナム、守護霊よ来たれ！」

イリスの杖先から、大量の銀色の煙が噴き出した。それはみるみるうちに形を成していき——一匹の大きな双頭の蛇になった。驚いて身じろぎするイリスの足元に優しく絡みつき、尾の中程で二つに分かれた蛇たちは、愛おしげにイリスの頬へ代わる代わるキスをした。スネイプが目を見張り、息を飲んだ。

「……成功だ。一体、何の記憶を？」

「おぼさんが、私を娘だと言ってくれた時の記憶です」

イリスはくすぐったくてクスクス笑いながら、嬉しそうに応えた。スネイプは言葉もなく、彼女の守護霊へ震える指先を伸ばした。片方の蛇がスネイプへ近づき、親しげに指先へ触れた。もう一方の蛇はイ

リスを守るように、その肩に頭を載せている。スネイプは片方の蛇を凝視したまま、暫く凍り付いたかのように動かなかった。

「先生？」

やがてイリスが不安になって尋ねると、スネイプは火傷をしたかのように指先を素早く引つ込めた。同時にイリスの集中力も切れ、守護霊が空中に霧散していく。スネイプはバスケットを拾い上げると、今までに見た事のないくらい穏やかな顔つきで、こう言った。

「見事だ、ゴースト。その記憶と感覚を忘れず、毎晩繰り返し。そうすれば、維持できる時間も増えるだろう」

生まれて初めてスネイプに褒められた事で、イリスは有頂天になった。そしてその高揚した気分は、彼女の自制心のタガを緩めた。イリスは純粋な好奇心が導くままに、研究室へ戻るスネイプの背中に問い掛けた。

「先生は、どんな幸せな記憶を思い浮かべたんですか？」

——それは、決してしてはならない質問だったらしい。スネイプの歩みはピタリと止まり、ゆらりと幽鬼のように振り返る。その顔は怒りに硬直し、目は危険な輝きを帯びていた。イリスはその時、自分の過ちを思い知った。スネイプは黄色い不揃いの歯を剥き出しにし、吐き捨てるように叫んだ。

「グリフィンドール十点減点！」

☆

第一回目のクイディッチ試合が近づくにつれて、天候は着実に悪くなっていった。しかしそれにもめげず、グリフィンドール・チームは以前にも増して激しい練習を続けた。ハリーは連日、びしょ濡れになって寮に帰って来るようになった。

イリスに出来る事といたら、ロンの目を掠めてハリーの濡れた衣服を乾かしてやる事と、「元気の出る薬」を少し垂らした暖かい飲み物を作ってやる事くらいだった。ハリーは嬉しそうに飲み物を何杯もお代わりしたが、それでも精神的な疲れは、完全に取れ切っていないようだった。何しろ、直前で対戦相手がスリザリンからハッフルパフへ変更になったのだ。それまでスリザリンを相手とした綿密な作戦

を立てていたキャプテン、オリバー・ウツドにとって、これは凄まじいバッドニュースだった。

試合前日、風は唸りをあげ、雨はいつそう激しく降った。廊下も教室も真つ暗で、松明や蝋燭の明かりだけが学校内を照らしている。ウツドは授業の合間に急いでやってきては、ハリーにあれやこれやと指示を与えた。イリス達が昼食を終え、「闇の魔術に対する防衛術」のクラスへ向かおうとしている時も、ウツドはハリーがまだろくに飲み食いできていないのを知っていながら、激アツな対ハツフルパフ戦のトークを繰り広げ続けていた。

「ウツドったら。私たち、学生なのよ！」ハーマイオニーは机に教科書を置くと、プリプリしながら言った。

「学生の本業は勉強！お忘れかしら」

不意に、扉が荒々しく開く音がした。ハーマイオニーが息を飲む。生徒達の好き勝手なお喋りがピタツと止み、サーツと冷たい空気が教室内に広がった。イリスは教科書に注いでいた視線を教壇へ向け、目を丸くした。

——教壇にはルーピン先生ではなく、スネイプが立っていた。彼はギリリと暗い目を光らせ、ずいとクラス中を見回した。

「ルーピン先生は本日ご気分が悪く、教壇に立てないとのことだ。故に吾輩が、教鞭を取る」

思わずイリスは、頭を抱えたくなった。——今日は満月の日だった！その事をすっかり忘れていた。もう少し早く気付けていれば、ハリーが少しでも早く教室に着けるように、ウツドを説得できた（※かもしれない）のに。

グリフィンドール生達は、みんな話を聞いて納得するどころか、いかにも不満そうな顔つきでざわめいている。スネイプはその後、ルーピンがこれまでどのような内容を教えて来たのか、という記録を残していない事を存分にこき下ろし始めた。そしてその最中に——なんと恐ろしい事に——ハリーが、息せき切ってやって来た。案の定、ハリーは自分の席に着くまでに、優に十点分ほどの抵抗を見せた。イリスは齡十三年目にして初めて、ストレス性の胃痛を味わう羽目になっ

た。

授業開始からわずか二十分ほどで、生徒達の雰囲気は“過去最低”を謳えるぐらいに悪くなっていた。——みんな、大人しくスネイプの言う通りにしたらいいのに。そうしたら被害は比較的最小限で済む。どうしてみんな、こぞつて反抗したがるんだろう。グリフィンボール生達の血気盛んな性格を、イリスはただ嘆いた。ハリーは反抗心を剥き出しにした態度を保ちつつ、不自然なほどにのろのろとしたスピードで、自分の席に腰掛けた。

「ポッターが邪魔をする前に話していた事であるが、ルーピン先生はこれまでどのような内容を教えていたのか、全く記録を残していないからして……」

「先生。これまでやったのは、ボガート、レッドキャップ、カッパ、グリンドローです。これからやる予定だったのは……」

「黙れ」

スネイプは、ハーマイオニーの言葉を冷たく遮った。

「教えてくれと言ったわけではない。我輩はただ、ルーピン先生のだらしなさを指摘しただけである」

「ルーピン先生はこれまでの「闇の魔術に対する防衛術」の先生の中で、一番良い先生です」

シエーマスの勇敢な発言を、クラス中が賑やかに支持した。スネイプの顔がいつそう威嚇的になった瞬間、イリスは胃痛で医務室へ駆け込むプランを真剣に考え始めた。

「フン、点の甘い事よ。レッドキャップやグリンドローなど、一年坊主でも出来る事だろう。我々が今日学ぶのは……」

スネイプは、教科書の一番後ろまでページをめくっていった。——そこに何が載っているのか知る者は、ハーマイオニーとイリスくらいだろう。イリスはとてつもなく嫌な予感がした。少し前にルーピン先生の事をもっと知るために、その部分を何度も繰り返し読んだ覚えがあったのだ。

「——人狼である」とスネイプは言った。

やはりそうだった。イリスはハーマイオニーと深刻な目付きを交

し合った。人狼は今学期の一番最後に習う予定の筈なのに、番狂わせも良いところだ。やがてスネイプの強引な命令で、みんなは嫌々と言わんばかりの態度で人狼のページを開いた。

——イリスは心臓がドクンドクンと痛い程に鼓動を早め、たまらなくなつた。何故スネイプ先生は人狼の事を教えようとするんだ？何かの拍子にルーピン先生が人狼だとみんなにバレてしまったら、大事になってしまうかもしれないのに。

「人狼と真の狼をどうやって見分けるか、分かる者はいるか？」スネイプが聞いた。

みんなシーンとして身動きもせず、座り込んだままだった。当然だ。まだ習ってもいないのだから、知る筈もない。ハーマイオニーだけが、いつものように勢い良く手を挙げる。

「誰かいるか？」

スネイプはハーマイオニーを当然のように無視した。口元にはあの薄ら笑いが戻っている。イリスは教科書だけに視線を注ぎ、忍者のように気配を消す事だけに専念していた。

「ゴント、分かるかね？」

しかしスネイプは許さなかった。スネイプはイリスの傍までやってくると、穏やかな——しかし反論を許さない声で——質問した。彼女は覚悟を決め、ゆつくりと息を吸い込んだ。隣ではハーマイオニーがなるべく唇を動かさないようにして、質問の答えをゆつくりと言つてくれている。

「・・・わかりません、先生」

スネイプの唇が、不満気にめくれ上がった。イリスは心の中で、スネイプに許しを乞うた。もちろん彼の推察通り、自分は人狼の知識を有している。

しかしここで自分がすらすらと答えてしまったら——もしかしたら——今学期最後に習うはずの人狼についてすでに知っている者がいる事と、満月の日、そしてルーピン先生の体調不良を関連付け、怪しむ者がいるかもしれない。それに正しく応えたとしても、今現在隣で回答を教えてくれているハーマイオニーも、かつての自分と同じよ



うな理由で、巻き添えを喰らうかもしれないのだ。イリスはルーピン先生と親友を守るために、頑なに口を閉ざした。スネイプは面白くなさそうに鼻を鳴らした。

「実に嘆かわしいことだ。クラスの誰も、答えを知らないとは。グリフィンドール……」

スネイプが今まさにイリスを減点しようとしたその時——ハーマイオニーがイリスを守るために、意を決して口を開いた。

「先生、狼人間はいくつか細かいところで本当の狼と違っています。狼人間の鼻面は……」

「勝手にしゃしゃり出て来たのはこれで二度目だ、ミス・グレンジャー」

スネイプはいらただしげな視線をイリスから外した後、冷ややかな声でハーマイオニーに言った。減点の対象が、イリスからハーマイオニーへ変更された瞬間だった。

「鼻もちならない知ったかぶりだ、グリフィンドールから更に五点減点する」

スネイプの余りの非道さにイリスは息を飲み、思わず彼を仰ぎ見た。ハーマイオニーは真っ赤になって、目に涙を一杯浮かべて俯いている。

クラスの誰もが、少なくとも一度はハーマイオニーを「知ったかぶり」と呼んでいる。それなのに、みんながスネイプを睨み付けた。クラス中の生徒が、スネイプに対する嫌悪感を募らせたのだ。ついにロンが顔を真っ赤にして立ち上がり、こう叫んだ。

「先生はクラスに質問したじゃないですか。ハーマイオニーだけが答えを知ってたんだ！答えてほしくないんなら、なんで質問したんですか？」

さすがにこれは言い過ぎだ、とみんなが思った。ハーマイオニーは涙に濡れた瞳を驚愕に見開いて、ロンを見つめている。クラス中が息を潜める中、最終的な標的を見定めたスネイプは、じりじりとロンに近づいた。

「罰則だ。ウィーズリー。更に、吾輩の教え方を君が批判するのが、再

び吾輩の耳に入った暁には……君は非常に後悔する事になるだろう」

☆

終業のチャイムが鳴る頃に、スネイプは“人狼の見分け方と殺し方”という非常に物騒なテーマについて、羊皮紙二巻き分もの大量の宿題を出した。イリス達は（ちなみにロンは罰則のために残された）、クラスのみんなと外に出た。イリスとハーマイオニーはハリーと一緒に、ロンを待った。

「いくらあの授業の先生になりたいからといって、スネイプは他の「闇の魔術に対する防衛術」の先生にあんな風だったことはないよ。一体ルーピンに何の恨みがあるんだろう？」

ハリーが首を傾げながら、ハーマイオニーに問い掛けた。一方のイリスは浮かない表情で、いまだにキリキリと痛むお腹をさすった。――きつとスネイプは人狼が嫌いだから、ルーピンに意地悪をしているのだろう。でもハリー達はルーピンが人狼である事実を知らない。それを知っているのは、自分と先生方だけだ。ああ、何だか今とつても穴を掘りたい。馬鹿みたいな事をイリスは願った。それで穴に向かって思いつきり叫ぶのだ。『王様の耳はロバの耳!!』と。そしたらきつと、とつてもスツキリするに違いない。

十分後、ロンがぶりぶりしながら戻ってきた。

「聴いてくれよ！あの××（ロンがスネイプの事を「××」と呼んだので、イリスとハーマイオニーは悲鳴を上げた）」

「××が僕に何をさせると思う？ 医務室のおまるを磨かせられるんだ。魔法なしでだぜ！」

ロンはハリーに向かって拳を握り締め、息を深く吸い込んでから――今更のようにハーマイオニーとイリスの存在に気づき、気まずそうな顔をした。四人の間を、奇妙な静寂が包み込む。仲直りするなら今だ――イリスの頭上にピカツと豆電球が付いた。彼女の気持ちを汲み取ったハリーが、かすかに頷いてみせる。

「行こうぜ、ハリー。こんなところにいられないよ」

「アー、ちよつと待って。僕、靴紐がほどけちゃった」

そう言うなり、わざとらしく地面にしゃがみ込み、ハリーはきちん

と結ばれていた靴紐を乱暴に解いて、物凄くゆつくりと丁寧結び直し始めた。イリスは、ツンツンとハーマイオニーをせつついた。聡明な彼女なら、イリスの意図するところは分かったはずだ。

しかし彼女は口をパクパクさせるものの、言葉が一向に出てこない。——どうしてなんだ！イリスは焦った。あんなに怖いスネイプ先生の前でスラスラと意見できるのに、どうしてロンの前で言葉が出てこないのか、イリスにはこれっぽっちも理解する事が出来なかった。そうこうしているうちに、ロンはそわそわしながら「先に行つてるよ！」と言い捨て、足早にその場を去っていく。

「私も手伝うわ！」ハーマイオニーの声が、その後を追いかけた。

ロンはポツカリと口を開け、振り返ってハーマイオニーを見つめた。ハーマイオニーの顔は、夕日のように真っ赤に染まっている。

「何を？」ロンは素っ頓狂な声で聞いた。

「おまる磨きよ」とハーマイオニー。

「別に、君は関係ないだろ。ただ僕がムカツとしただけさ、あの×××に……」

「ああ、ロン！」

ハーマイオニーは感極まり、ロンの首っ玉に抱き着いて、わっと泣き出した。ロンはおたおたして、ハーマイオニーの頭を不器用に撫でた。

「スキヤバーズのこと……本当に、本当に、ごめんなさい！」

ハーマイオニーはしゃくり上げながら謝った。——イリスはびつくりした。彼女はクルックシャンクスが本当にスキヤバーズを食べたと思っているのだ。それは違うよ、と言い掛けた時、何かがつんとイリスのローブの裾を引っ張った。

《黙つときな。蒸し返すのは野暮ってもんさ》

クルックシャンクスだった。彼は器用に片目をパチツと瞑ってみせると、するりと人込みに紛れ、消えて行った。

「あー、ウン。仕方ないよ。あいつ、年寄だったし」

今やロンの顔も、ハーマイオニーと良い勝負をするくらい真っ赤だった。ハーマイオニーが鼻をすすりながら離れると、ロンは心底

ホツとしたような様子で、胸を撫で下ろした。

「ゴメン、結び終わったよ」

ハリーが立ち上がり、靴の爪先をトントンしながら、イリスに向かってニヤツと笑い掛けた。イリスも思わず安堵して、にっこり笑った。——彼女のたくさんある心配事のうち、一つは解決したからだ。

## Act 10. フェイト

いよいよ第一回目のクイディッチ試合の日がやって来た。対戦カードは、グリフィンボールとハッフルパフだ。その日の天候は、ここ最近で一番と言っても良いぐらいに悪かった。イリスはいつものようにハーマイオニーに起こされる前に、シャワーのように降り注ぐ豪雨や恐ろしい雷鳴、城の壁を打つ風、遠くの“禁じられた森”の木々の軋み合う音で、目が覚めた。——ハリーはチームメイトたちと共に、早朝からクイディッチピッチにいます。嵐だろうが、雷だろうが、そんな些細なことでクイディッチが中止された前例はない。ハリーは大丈夫だろうか。それに、森に潜んでいるはずのシリウスも心配だ。イリスはベッドから起き出し、カーテンを開いて硝子窓におでこをくっ付け、外の様子を眺めた。辺り一帯をぎつしりと雨粒が覆い隠している中、辛うじて——恐ろしい勢いで木々が揺れている森の輪郭だけが、うつすらと見えた。

三人は談話室で落ち合い、大広間で手早く朝食を済ませてから、試合を観に外へ出た。機転を利かせたハーマイオニーが、三人のローブと靴に“防水呪文”をしつかり掛けてくれたので、イリスは“肥大呪文”を重ねて、ローブを合羽代わりかっぱに使えるよう、少しだけ大きくした。三人はローブのフードを目深に被り、荒れ狂う風に向かって頭を低く下げ、競技場までの芝生を駆け抜けたが、それでも雨はローブの中に吹き込み、みんなの体温を容赦なく奪っていった。

やつとのことのでロッカールームにたどり着き、いつものように扉をノックすると、真っ赤なユニフォームに身を包んだハリーがやって来た。少し緊張気味の彼の肩越しに——いつもなら口角泡を飛ばして熱弁を振るっているはずのグリフィンボール・チームのキャプテン、ウッドが悲壮極まりない顔つきで黙り込み、フレッドたちが彼の肩を揺さぶったりして、懸命に励ましているのが見えた。

「どうしたんだい、彼？」

ロンが目を丸くして、ハリーに目配せをしながら尋ねた。やれやれと言わんばかりに肩を竦めてみせ、ハリーは浮かない声で答える。

「結局、ハツフルパフの対策が完璧にできなかったからね。おまけに、この雨だし」

「きつと大丈夫だよ。ハリーは凄腕のシーカーだもの。自分出来る事を精一杯したらいいよ」

イリスが心を込めてそう激励すると、ハリーは照れ臭そうに頬をかきながら、「ウン」と頷いた。

「ねえ、眼鏡を貸してくれない?」

ハーマイオニーは、あちこち小さな傷が目立つ眼鏡をハリーから受け取り、イリスに「手伝つて」と目配せした。イリスは再び杖を振り、ピカピカの新品同様に眼鏡を修復し、ハーマイオニーは念入りに“防水呪文”を掛けた。

「これで水を弾くわ!ユニフォームは…きつと防水しても意味ないわね。私達もこれだもの」

イリス達はお互いの姿を見て、その不思議さにニヤツと笑い合った。ローブや靴は一切濡れていないのに、その中身——頭から足先に至るまでが、しつとりと水気を帯びていたからだ。ハリーも釣られたように笑い、嬉しそうにお礼を言ってから、魔法仕掛けの眼鏡を受け取った。

☆

三人はハリーに別れを告げると、恐ろしい嵐が待ち受ける外へ出た。風之物凄さに、みんな横ざまによろめいた。なんとか観客席の一番良い席を陣取ったが、イリスはフードが風で吹き飛ばされないようにするのが精一杯で、いつものように周囲を見渡す余裕などなかった。下方に広がるピッチも無数の雨粒に塞がれ、靄がかってよく見えない。

やがてピッチの両端から真紅色のユニフォームを着たグリフィン・ドール・チームと、黄色のユニフォームを着たハツフルパフ・チームがぞろぞろと出て来た。みんなは歓声を上げたが、耳をつんざくような雷鳴とゴロゴロという唸り声にかき消された。キャプテン同士が歩み寄ってピッチの真ん中で握手すると、両チームの選手たちが泥に深々と埋まった足を引き抜き、箒にまたがって、次々に上空へ舞い上

がって行った。少しして、フーチ先生の吹く鋭い笛の音が、どこか遠くの方で聞こえた。——試合開始だ。

試合中、イリスはフードの切れ目から、ハリー達の様子を一生懸命追いかけた。しかしホグワーツ城を丸ごと飲み込んでしまいそうなほどの雨と風、雷のせいで、ほとんど状況が分からない。解説を頼りにしようにも、いつもならはつきりと聴こえるはずのリー・ジョーダンやマクゴナガル先生の声が、全くと言っていいほど耳に届いてこないのだ。

乱気流の中で、ハリーが背後から迫って来ていたブラッジャーを間一髪で避けた。イリスがホッと安堵のため息を零した瞬間、ひと際大きな雷鳴をとどろき、樹木のように枝分かれした稲妻が走る。イリスは思わず悲鳴を上げたが、その声すらも豪風の音でかき消された。——どうか雷がハリーに落っこちませんように！イリスは両手を組み、神様に祈った。

「ねえ——今はどっちが——勝ってるの?!」

隣から、ハーマイオニーの微かな声（※実際は、声の限りに叫んでいるのに違いない）が聴こえた。横を向くと、彼女がロンのフードに顔を寄せて、彼の耳元で話しかけているのが見えた。

「今は——僕らが——五十点——リードさー！」

ロンはハーマイオニーに向き直り、身振り手振りを交えて、怒鳴り返した。——この嵐の中、よく試合の状況がわかるものだ、とイリスは内心舌を巻いた。けれども、素直に感心して「ロン、すごいね」と口を開こうとした途端、大量の雨粒が飛び込んできたので、イリスは暫くの間、ひどく咳き込む羽目になった。結局、イリスは口を閉じたまま、二人の会話に聞き耳を立てる事しか出来なかったのである。

「でも——早くハリーが——スニッチを取らなきゃ——夜にもつれ込むぞー！」

その時、辺り一帯がフラッシュを炊いたようにまばゆく光った。この世が崩れるかのような雷鳴が鳴り響き、ハーマイオニーが悲鳴を上げて、近くにいたロンにしがみつく。——突如として、ハリーが空中に矢のように飛び出した。ある一点を目掛け、箒の柄の上に真っ平ら

に身を伏せて、疾走している。スニッチを見つけたのだ！イリスは思わず歓声を上げた。

すると、奇妙なことが起きた。競技場にサーツと気味の悪い沈黙が流れた。風は相変わらず激しかったが、唸りを忘れてしまっている。神様が、世界の音のスイッチを切ってしまったかのような——突然イリスの聴覚が麻痺してしまったかのような——一体、何が起こったんだ？イリスは慌てふためいて、周囲を見渡した。

おもむろに視界の端で、誰かの腕が上がるのが見えた。風に流されることなく、その指先は、上空のある一点を指していた。——隣に座るハーマイオニーだ。その表情は、大きめのフードにすっぽりと隠れて見えない。イリスはなんだか不吉な予感がして、恐る恐る指し示す方向を見た。

ハリーのいる上空付近に、見覚えのある黒い影が何体か、ゆらゆらと空中に浮かんでいる。まるで競技場が、自分達のテリトリーであるかのように。——デイメンターだ。イリスは恐怖の余り、全身が総毛だった。なぜ、学校の見張りをしているはずのデイメンターが、ここにいるんだ？ハリーはデイメンターのいる方向へ箒の先を向けたまま、その場に縫い止められたかのようにピクリとも動かない。するとあろうことか、デイメンターたちは——ハリーにスーツと近づいた。ハリーの頭が、ガクンとうな垂れた。手からするりと箒が離れ、意識を失った彼の体が、空中を落ちて行く。

——イリスは、頭が真っ白になった。観客たちが傘を捨て、立ち上がり、次々にハリーを指差している。イリスの目の前で、ハリーはまるでスローモーションのようにゆっくりと落ち——いや、本当に落下のスピードがスローになった。地面まであと数メートルのところまで、ハリーの体は見えないクツクションに受け止められたかのようにフワツと浮き上がり、静かに地面へ横たわった。

真っ先にフレッドとジョージが駆け寄って、肩を揺さぶるが、ハリーは死んだように動かない。ハリーの下に、空から次々と選手たちが舞い降りて来る。赤いユニフォーム、黄色いユニフォーム、そして

——黒いボロボロのローブを被った、あれは——デイメンターだ。



上空にいたはずのデイメンターたちが、ゆっくりとハリーに——そして彼を助けようとするグリフィンドルやハッフルパフの選手たちに、音もなく近づこうとしていた。ハッフルパフのキャプテンがいち早く気づき、杖を引き抜きながら、みんなに注意を呼び掛けている。——デイメンターは、ハリー達を傷つけようとしている。イリスの心は凄まじい怒りの感情で沸騰し、わなわなと全身が震えた。

“ハリーを、みんなを守るんだ”。イリスは何度も自分にそう言い聞かせ、杖を引き抜いた。デイメンターに立ち向かう術を、私は有している。スネイプ先生が与えてくれた。——デイメンターを遠目に睨み付けると、さつきまで音が聴こえなかったはずの耳に、あの時のドラコの最期の声が忍び寄ってきた。

すかさずイリスは頭を振って、気合を入れた。もう二度と、あんな想いをしたくない。イリスは横殴りに吹き付ける風にも負けず、スタンドの手すりから身を乗り出し、心をイオとの幸福な記憶でいっぱいにした。プラットフォームでイオがイリスを抱き締め、特別な言葉を贈ってくれた記憶。その思い出は、イリスの耳から恐ろしい幻聴を追い出した。——守護霊、それもとびつきり大きいのを。イリスは杖を握る手に力を込めた。嵐に負けない、強いのを。

イリスは生まれて初めて、力を欲した。主の命令に従い、異なる血同士の“争い”はますます激化し、銀色と虹色の蛇は肥大する一方のお互いを浸食するため、狂ったようにグルグルと回り続けた。イリスの瞳にきらめく、わずかな金色が——ズズ、と音を立てて、青色を冒し、その輝きを増していく。

「エクスペクト・パトローナム、守護霊よ来たれ！」

イリスは杖先をデイメンターへ向けると、“守護霊の呪文”を唱えた。たちまち杖先から銀色の輝きが迸り、その中から大きな双頭の蛇が噴き出した。蛇は、水を得た魚のように活き活きと、自由自在に競技場内を泳ぎ回り、デイメンターたちを少しずつピッチから遠ざけていく。蛇からほとぼしる白銀色の粒子が、数多に降り注ぐ雨粒に反射して、辺り一帯は幻想的な輝きに満たされた。

デイメンターがハリーたちを避け、観客席の方へ向かおうとする

と、蛇はそこへも滑り寄ってきて、シューシューと唸り声を上げて  
デイメンターを威嚇した。蛇はらせん状にグルグルと競技場内を回  
り、ついにデイメンターたちを遙か上空まで追い払った。最後に、蛇  
は空中でゆっくり一回転すると、雨粒に融けるようにフツと消えてし  
まった。その様子を見届けてから、イリスはピッチに目線を落とすし  
た。マダム・フーチが杖を振って魔法の担架を作り出し、選手たちが  
ハリーをそれに乗せ、どこかへ運んでいく。——良かった、ハリーは  
大丈夫だ。イリスは安心した途端、全身の力が抜けて、目の前が真っ  
暗になった。

☆

——時を少し戻し、試合中では。ハリーは乱気流の中、箒に活を入  
れていた。これ以上ないくらいびしょ濡れで、おまけに寒くて凍えそ  
うだが、とにかく目だけはハッキリと見える。——ハーマイオニーと  
イリスの魔法のおかげだ。ハリーはスニッチを探して、四方八方へ油  
断なく目を凝らした。早くスニッチを手に入れて試合終了させなけ  
れば、天候とウツドの精神が危ない。

その時、ひと際大きな稲妻が観客席を照らし、ハリーの目に何か  
飛び込んできた。——巨大な毛むくじゃらの黒い犬が、鈍色の空を背  
景に、くつきりと影絵のように浮かび上がったのだ。一番上の誰もい  
ない席に、じつと座っている。あの時、ダーズリーの家から逃げ出し  
た時、見た犬と同じだ。死神犬<sup>グリム</sup>。ハリーは、完全に集中力を失った。  
かじかんだ指が箒の柄を滑り落ち、ハリーは一メートルも垂直落下  
した。我に返ったハリーは、慌てて頭を振って、目にかかった前髪を  
振り払い、もう一度観客席の方をじつと見た。——犬の姿は消えてい  
た。

「ハリーー」

不意に、グリフィンボールのゴールから、ウツドの振り絞るような  
魂の叫びが聴こえた。

「ハリー、後ろだー」

慌てて見回すと、ハッフルパフチームのキャプテン兼シーカー、セ  
ドリック・デイゴリーが上空を猛スピードで飛んでいる。ハリーとセ

ドリツクの間の空間はびつしりと雨粒で埋まっている。その中に、キラキラと輝く小さな点のような金色の光が見えた。——スニツチだ。ハリーはすぐさま箒の柄の上に身を伏せると、スニツチ目指して突進した。

「頑張れ！もつと速く！」

ハリーが箒に呼び掛けた瞬間、奇妙なことが起こった。競技場のすべての音が、サーツと遠のいていった。雨風の音も、雷鳴も何も聴こえない。そして、あの恐ろしい感覚が、冷たい波がハリーを襲い、心の中にひたひたと押し寄せてきた。目の前のセドリツクが何かを片手に掴んだまま、ピタリと空中停止し、上空を見上げている。ハリーも彼の目線を追いかけた。

ほんの数メートルのところに、デイメンターが数体、ふわふわと浮かび、隠れて見えない顔をハリーに向けている。氷のように冷たい水がハリーの胸に流れ込み、体中を切り刻むようだった。それから、声が聴こえた。ハリーの頭の中で叫ぶ声——女の人だ。

『ハリーだけは！ハリーだけは、どうぞハリーだけは！』

『どけ、馬鹿な女め！さあ、どくんだ』

『ハリーだけは、どうかお願い。私を、私を代わりに殺して……』

ハリーの頭の中いっぱい白い霧が渦巻き、思考を痺れさせた。恐怖が全身を麻痺させ、指先一本動かすことすらできない。一体、僕は何をしているんだ？どうして飛んでいるんだ？あの人を助けないと——死んでしまう——殺されてしまう——。ハリーは落ちて行った。何も支えるものがなく、冷たい霧の中を真つ逆さまに落ちていく。

『ハリーだけは！お願い……助けて……許して……』

甲高い嗟い声が響く。女の人の痛々しい悲鳴が聴こえる。——ああ、わかった。ハリーは理解した。あの声は、僕の母さんだ。母さんの最期の声だ。そしてハリーは、何も分からなくなった。

『お前は異常だ！まともじゃない！』

真つ暗闇の中、バーノンおじさんの声が、鼓膜に突き刺さった。目を開けると、バーノンが憎々しげに自分を睨み付けていた。バーノンは、ハリーの手を掴むと、階段下の物置に閉じ込め、鍵を掛けた。かび臭く埃だらけの部屋で、ハリーはゴホゴホと咳をした。耳を澄ませると、扉の向こうにあるダイニングで、バーノンが一人息子のダドリーを膝に乗せ、楽しそうにお喋りをしているのが聴こえた。ハリーは扉の隙間から、外の景色を眺めた。ダイニングの暖炉の上には、ダドリーが両親に囲まれて、幸せそうに成長を重ねている写真が沢山飾られている。

『バーコンを焦がすんじゃないよ！』

ペチュニアおばさんの声だ。ハリーはキッチンで、ダーズリー一家の分の朝食を作っている。自分が家政婦のように働く横で、ダドリーが子豚のように鳴きながら、ペチュニアに甘えている。ペチュニアは嬉しそうに頬を綻ばせ、ダドリーを抱き締め、ほっぺにキスをし、頭を撫でている。

『お前にお似合いじゃないか、この制服！』

ダドリーの声だ。洗い場に置かれた大きなたらいに浮かぶ、悪臭漂う灰色のボロ布を見ながら、ダドリーが厭らしく笑った。ハリーの新しい学校のための制服だ。ペチュニアが、ダドリーのお古を染め直しているのだ。ダドリーはピカピカの制服を着ていて、バーノンとペチュニアは心底嬉しそうに、その姿を見つめていた。

——ハリーは愛されたかった。ほんの一言でいい、ほんの一欠けらでいい、ほんの一瞬でかまわない。ダドリーに注いでいる愛情を、自分に向けてくれたら。しかしバーノンもペチュニアも、マジすらも、ハリーを愛してはくれなかった。

『どうして僕を愛してくれないの？ダドリーと同じように！』

まだハリーが子供らしい純粋な心を持っていた頃、彼は泣き叫んだ。

『お前がダドリーと同じ？馬鹿な事を言うな！』バーノンは顔を真っ赤にして怒った。

『育てているだけ、感謝しなさい！居候の分際で！』ペチュニアは冷た

く言い放った。

どれだけ泣いても叫んでも、二人はハリーを愛してくれなかった。三人がダイニングで美味しいディナーを食べている時、物置の部屋で、ベッドに座ってパンを齧りながら、ハリーは自分自身に問い掛けた。

『どうしておじさんもおばさんも・・誰も、僕を愛してくれないの？』  
たとえ衣食住が満足に揃っていても、ヒトは愛情なくして健やかに生きることは難しい。この過酷な環境で生き残るためには、ハリーは自分の心を強くしなければならなかった。自分自身を守るために、彼の心は、ハリーにこう答えた。

『期待するな。この家で生きていくためには、疑問を抱いちや駄目なんだ。目の前にある、ちっぽけな幸せで満足しよう。必要最低限のご飯を貰えて、着るものがあって、寝床もある。それで十分生きていくる。』

ダドリーと同じように、他の子供らと同じように、自分を愛してくれると思うな。お前はこれからずっと、一人ぼっちのまま、生きていくのさ』

ハリーは自分を守るために、心に冷たい鎧をまとい、皮肉の兜を頭にかぶり、何も感じないようにした。目の前の“ちっぽけな幸せ”で我慢するんだ。ハリーは何度もそう言い聞かせた。それで自分は強くなったと、思っていた。

——嫌だ、思い出させないでくれ！ハリーの心の世界を、ダーズリー一家との辛い日々の記憶が埋め尽くしていく。幸福な記憶は、デイメンターが残らず吸い尽くしてしまっていた。どれだけ駆けずり回っても、今のハリーには辛く悲しい記憶しか残されていない。

やがてデイメンターは、ハリーの心の奥深くに入り込んだ。幼い子供の姿をしたハリーは布団を頭からかぶり、かつての物置の部屋のベッドで小さく丸まっている。デイメンターは扉の通気口からズルリと入り込むと、ハリーがまもっていた最期の鎧と兜ををいとも容易く引きはがした。

守るものが無くなったハリーは、瞬く間に絶望に苛まれていく。――

—ずっと平気な振りをしていたけれど、本当はもう耐えられない。このまま僕はずっと生きていくの？ハリーの目から光が失われ、涙が零れ落ちる。僕のことなんて、誰も愛してくれない。こんな人生なら——生きていたって仕方がない。

自我を失い、泣き崩れるハリーの耳に、優しく扉をノックする音が飛び込んできた。デイメンターがさかさずハリーの両耳を塞ぐが、不思議な事にその手を通り抜け、その音は彼の鼓膜を確かに揺さぶった。

『ハリー、ハリー！』

——少し舌足らずな、高い女の子の声だ。バーノンおじさんの声でも、ペチュニアおばさんの声でもない。とても大切に大好きな人の声だ。でも、誰だったか思い出せない。その時、扉の下の通気口から、美しい銀色の光が差し、うずくまるハリーの体をシマシマ模様で照らし上げた。デイメンターが呻き声を上げ、ハリーから離れて、光を避けて部屋の隅へと避難する。

なんて綺麗な光なんだろう。ハリーはベッドを起き出して、扉を開けた。まばゆい銀色の光が、ハリーを包み込む——

『ハリー。私たちの、可愛いハリー』

母さんの声だ。おぼろげに見える、緑色の目が優しくに微笑んだ。とても良い匂いがする。母さんの匂いだ。

『愛してる。僕たちの宝物だ』

父さんの声だ。くしゃくしゃの黒髪をした男の人が、にっこりと笑って、ハリーの頭を愛おしげに撫でた。

——父さん、母さん！ハリーは夢中になり、そう叫ぼうとした。しかし出るのは、言葉にならない声だけだ。それでも、少しでも両親に近づきたくて、ハリーは我武者羅に手を伸ばした。小さなその手を、ジェームズはしっかりと掴み、嬉しそうに自分の頬に押し当てた。

『ああ、見たかい？リリー！ハリーが笑った！』

リリーは朗らかに笑った。そして二人はハリーを抱き上げ、小さな体じゆうに優しいキスの雨を降らせた。——それは、ハリーの両親がヴォルデモート卿に殺される前の、一年間の記憶だった。成長を重ね

る中、ハリーがいつの間にか忘れてしまっていた、大切な思い出だ。ハリーの冷たく凍り付いていた心が、みるみるうちに解かされ、ぽかぽかと暖められていく。ああ、僕は愛されていた。ハリーの瞳から、今度は喜びの涙が零れ落ちた。僕は、愛されていたんだ。

『ハリー。お前さんは魔法使いだ』

不意に後ろで、大好きな声があった。——ハグリッドだ。海の上に建つボロ小屋まで追いかけてきて、ハリーに真実を教えてくれた時の記憶だ。思い出した。僕は魔法使いになったんだ。ハリーはホグワーツからの手紙を握り締め、微笑んだ。ハリーはこの時、どれだけ胸がときめき、嬉しかったか分からない。

ハリーは自分の体が、グングンと上昇していくのを感じた。その度に、楽しく幸せだった記憶が次々に現れて、ハリーの心を暖め、満たしていく。ハグリッド、イリス、ロン、ハーマイオニー……数えきれないほどの人々がハリーに微笑みかけ、手を振っている。僕は、こんなにも沢山の人に愛されている。僕はもう一人じゃない。一人じゃないんだ。イリスの守護霊によって呼び戻された幸せな記憶は、ハリーの心に悪影響を及ぼそうとしたデイメンターを退け、そして彼自身の辛く悲しい記憶をくしゃくしゃに丸めて、隅っこへ追いやってた。

ハリーがふと上を見上げると、太陽のようにまばゆく輝く、銀色の水面がゆらゆらと揺れていた。彼はザバツと水面に飛び出し、顔を出した。——そう思った瞬間、ハリーは意識を取り戻した。

世界は、銀色一色に染まっていた。雨粒の一粒一粒に光が乱反射して、まるでダイヤモンドが降り注いでいるかのようにだ。輝く雨のカーテンを切り、白銀色にきらめく帯のようなものが、ハリーの周りをぐるぐると回っている。ハリーはいつの間にか、柔らかな地面の上に、仰向けに倒れ伏していた。自分の両脇にはフレッドとジョージがしゃがみ込み、ある方向を一心に見つめている。ハリーも、二人の視線の先を追いかけた。

観客席で、一人の女生徒が手すりから身を乗り出して、杖を構えていた。銀色の輝きで視界がぼやけ、その人をしっかりと見る事が出来

ない。ハリーは目を凝らした。風に遊ばれ、翼のように舞い散る髪は、光を透かして明るく見えた。キラキラと輝く瞳は、緑色に輝いている。それはまるで――

――“母さん”。ハリーはそう呟くと、再び意識を失った。

☆

ハリーの耳に、ボソボソと囁き声が聴こえてきた。しかし何を言っているのか、全く分からない。一体自分はどこにいるのか、どうやってここに来たのか、その前は一体何をしていたのか、一切分からない。「こんなに怖くって凄いいもの、今まで見た事ないよ」

怖い――一番怖いもの――フードを被った黒い姿――冷たい――叫び声――。ハリーは目をパチツと開けた。医務室のベッドの上だ。グリフィン・ドール・チームの選手たちが、頭の天辺から足の先まで泥まみれで、ベッドの周りに集まっていた。ロンとハーマイオニーも、今しがたプールから出て来たばかりのような姿で、そこにいた。ハリーは二人の間の空間がぽっかりと空いていることに気づき、首を傾げた。――イリスはどこだ？

「ハリー！」泥まみれの真っ青な顔で、フレッドが声を掛けた。「気分はどうだ？」

フレッドの言葉が起爆剤のようにハリーの頭の中で弾けると、今までの記憶が早回しのように戻ってきた。稲妻――グリム――スニッチ――デイメンター――そして、銀色の輝きの中にいた、“母さん”。「どうなったの？」

ハリーがあまりに勢いよく飛び起きたので、みんなが驚いて息を飲んだ。

「君、落ちたんだよ」ジョージが答えた。

「ぎつと・・・そう、二十メートルかな」

「みんな、あなたが死んだと思ったわ」アリシアは震えていた。

「そしたら、ダンブルドアがピッチに駆け込んで来て、杖を振ったの。地面にぶつかる寸前に、落ちるスピードがともスローになったわ」

ハーマイオニーが真っ赤に充血した目を擦り、小さく「ヒクツ」と声を上げた。――ハリーは思い出した。何もかもが分からなくなる



寸前、上空にデイメンターたちがいて、自分をじつと見つめていたのを。僕はそれでまた、気を失ったんだ。恐怖心と自己嫌悪と羞恥心が体中を駆け巡り、ハリーは黙り込んだ。

そして僕が再び意識を取り戻した時、銀色の光が辺りを包んでいた。ハリーは記憶の糸をゆつくりと辿り、胸がむず痒くなった。——あれも、ダンブルドアが出してくれたのだろうか。詳しくは覚えていないが、あれのおかげで、ハリーは死の世界から生き返ったような気持ちになったのを覚えている。そして、あの“母親のような人物”も。

「ねえ、あの銀色の輝きは？夢だったのかな。僕……」

みんなの目の前で『母親を見た』と言うのは憚られ、ハリーは言葉を濁した。フレッドたちはシンと静まり返り、それから興奮した面持ちで、互いの顔を見合わせた。

「夢じゃないわ。イリスが“守護霊”を出して、貴方を守ったのよ」

ハーマイオニーが驚嘆と誇らしさが入り混じった声で、ハリーに答えた。——“守護霊”って何だ？ハリーが言葉の意図を掴みかねていると、ハーマイオニーがその概要を事細かに説明してくれた。曰く、“守護霊の呪文”は、主にデイメンターから術者を守るための保護魔法の一種だと。非常に高度な魔法で、一介の生徒で扱える者はまづいない。ロンが興奮の余り、頬をピンク色に染め、感慨深げに言った。

「凄かったなあ！真っ直ぐに君の所へ飛んで行ってさ、デイメンターを一匹残らず追い払ったんだ。あんなにカッコいいの、見た事無いよ！」

ハリーはびっくりした。いつも僕がイリスを守っていたのに——まさか彼女が、僕を守ってくれたなんて。おまけに、イリスを母さんと見間違えてしまった。ハリーは寂しさと恥ずかしさが綱交ぜになり、何とも言えない複雑な心地になった。今すぐ彼女にお礼を言いたくて、ハリーは忙しなく周囲を見渡した。——しかし、イリスはどこにもいない。ハリーはざわざわと胸が騒いだ。

「イリスはどこだい？」

みんなの表情は、みるからに曇った。ロンとハーマイオニーの目

が、チラツと一番奥のに設置されたベッドへ移ったのを、ハリーは見逃さなかった。分厚いカーテンが引かれている。ハリーの胸騒ぎは、ますますひどくなつた。ついにハーマイオニーが、重い口を開いた。「その、守護霊を出したあと……イリスは倒れたの。マダム・ポンフリーは過労だつて。頑張り過ぎたのよ」

——“僕を守るために”。ハリーの胃袋は、ズシンと地の底まで落ち込んだ。たまらずにベッドを起き出してイリスの所へ向かおうとする、マダム・ポンフリーが鬼の形相でやってきた。

「面会は許可しましたが、患者の移動までは許可していません！ポッター、安静にきなさい！」

「でも、イリスが心配なんです。彼女は僕のために……」ハリーは食ひ下がった。

「ええ。あなたのために頑張りました。そのあなたが無茶をしてまた体調を崩したら、彼女はどう思いますか？少しはガールフレンドの気持ちも考えなさい」

マダム・ポンフリーはピシヤリと言い放ち、チョコレートの塊を小さなハンマーで砕くと、小皿いっぱい盛りに付けて、ハリーに残さず食べるようにと厳命した。それから親の敵を見るような目で、泥だらけの選手たちを見つめた。

「さあさあ、面会時間を過ぎましたよ！あなた方もお帰りなさい！」

フレッドたちはそれぞれハリーを労う言葉を送り、泥の筋をしつかりと残しながら、そろそろと部屋を出て行った。マダム・ポンフリーは全くしやうがない、という顔つきでドアを閉めた。ロンとハーマイオニーが、ハリーのベッドに近づいた。

「君が“守護霊の呪文”を教えたの？」

「それ、ロンや他の人達にも、散々訊かれたわ」

ハリーが尋ねると、ハーマイオニーは心底うんざりとした口調で返した。

「私は教えていないわ。逆に教えてほしいくらいよ。だって『普通魔法レベル（O・W・L）』資格を軽く超えるほどの、高度な魔法なのよ。一体誰が、あの子にあの魔法を教えたのかしら？」

それぞれ考え込む三人の頭に、“同じ人物”がポツと思い浮かんだ。——日記の人物、トム・リドルだ。しかし、それはあり得ない。ハリーは頭を振りながら、答えた。

「リドルじゃないと思う。だってそれなら、列車でデイメンターに会った時、追い払えていたはずだ」

「まあマクゴナガルかルーピンか……スネイプはあり得ないな」ロンは腕組みをしながら、もっともらしい口調で言った。

「だってあいつに、幸せな記憶なんてありっこないし」

☆

イリスは再び、塔の夢を見ていた。虹色の蛇が窓を突き破り、リドルに襲い掛かった——あの場所にいる。硝子も、それを嵌めるための木の枠も無くなった窓からは、静かな夜風だけが吹き込み、茫然と立ち竦むイリスの頬を優しく撫でた。どれほど周囲を見回しても、声を囁らして呼んでも、ここにリドルはいない。あの蛇が、連れ去ってしまったのだ。その事実を受け止め切れず、イリスが悲しんで泣いていると、すぐ傍で大きな羽音がした。

《何故泣いている？》

——マルフォイ家のふくろう、イカロスだ。窓に留まり、イリスに問い掛けている。彼女は零れ落ちる涙を拭いもせず、イカロスを見上げた。

「リドルが……陛下がいなくなってしまった。それが悲しいの」

イカロスはイリスの涙とその言葉に満足したかのように、上機嫌に嘴を噛み合わせた。

《案ずるな。あの方は、まだこの世界に存在している。——行く。あの方は、今まさに、君の力を必要としている》

俄かに、溢れるほどの羽音が周囲を包み込んだ。イリスは音のする方向——イカロスの方を見て、息を飲んだ。いつの間にか現れた、沢山のふくろうたちが、かつてイリスがリドルに与えられた“スリザリンの絨毯”をそれぞれの嘴に咥え、窓を通り抜けようとしている。ふくろうたちは、戸惑うイリスを絨毯で器用に包み込み、再び窓を通り、外の世界へ飛び出した。

イリスが振り向くと、塔がみるみるうちに遠ざかっていくのが見えた。あの歌声もかすんでいく。イリスは懸命に目を凝らしたが、塔の天辺には分厚い雲がかかっている、よく見る事が出来なかった。イリスは絨毯に身を預け、周囲の景色を見渡した。満点の星空が、美しくきらめいている。見下ろすと、一面に穏やかな草原が広がっていた。「陛下はどこにいらっしやるの？」

《分からない。我々に分かるのは、進むべき方角だけだ》イリスのすぐ傍を飛びながら、イカロスが優しい声でさえぎった。

《君は、陛下への“贈り物”だ。我々は文字だけでなく、“贈り物”に込められた想いを読み取り、進むべき道を手に入れる。——君に込められた想いが、陛下のもとへと導くのだ》

ふくろうたちは、いくつもの山や森、海や国を越えて、ある森へと到着した。イリスはイカロスたちにお礼を言うと、森の奥へ向かって、迷うことなく足を踏み出した。鋭い草がたおやかな足を傷つけ、鬱蒼と茂る樹木の枝が白い膚を叩き、いくつもの痣を残しても、イリスは歩みを止める事などできなかった。

ひたすらに奥へと進むと、次第に辺りの空気が重くなっていった。そして足元に枯れ葉が降り積もり、小動物の亡骸がいくつも転がるようになった。——ここに陛下がいる。イリスは確信し、疲れた体に鞭を打って、ただ我武者羅に駆け続けた。

やがて、木々に絡み合うツタの間に、揺らめく銀色の霞が見えた。それは辛うじて人の形をしているが、苦しそうに喘ぎ、今にも消えてしまいそうな程に弱っていた。イリスは戸惑うことなく、その足元に縋り付いた。

「ああ、陛下！お許してください。私はなんということを……」

——そうだ、私はこの方に仕えるために生まれた。こんな大切なことを今まで忘れて、生きていたなんて。この方はたった一人で、こんなに弱り、苦しんでいたのに。イリスは罪悪感に身が押し潰されそうになり、苦痛に喘いで、咽び泣いた。

「どうか私を殺してください！私は、私は……」

それは細く長い指先で、イリスの唇の輪郭をゆっくりとなぞった。

それ以上言葉を続けることができず、イリスはしゃくり上げ、黙り込む。それは、イリスを細い両腕で抱き締め、冷たい唇で——舐めるように口付けた。イリスが凍り付いたように身を竦めた瞬間、それは、彼女の唇を貪った。潰れるほど強く唇を押し付け、蛇のように細長い舌が侵入する。怖がって逃げようとするイリスの小さな舌を絡め取り、引き抜くかと思うほどに吸い上げ、彼女の魂と魔法力をちぎり取り、唾液と共に飲み込んだ。

それが喉を鳴らして、旨そうにイリスを喰らう毎に、霞の色はしつかりと濃いものになり、抱き締める力も強くなった。やがてイリスは意識がおぼろげに霞んで、全身の力が抜け、くたりとそれに身を預けてしまった。——苦しい。息ができない。イリスはその腕の中で、苦痛に喘いだ。けれど私を食べる毎に、あの方は力を増していく。イリスは、それがとても嬉しかった。このまま全てを食べられてしまっても本望だ、とさえ思った。だって、あの方にお仕えすることが、私の生まれて来た意味なのだから。

その時、見覚えのある虹色の光が目の前で炸裂し、イリスとそれを隔てた。——嫌だ、お願い、やめて。イリスはもがいた。私から、あの方を取らないで。しかしイリスの懇願も空しく、あの雨の叩きつける音が、耳を塞ぎ、何も聴こえなくなった。虹色の光のせいで、何も見えない。また、意識が霞んでいく——

☆

ハリーは順調に回復し、次の日には医務室を出る事が出来た。そして談話室で、二つの悪いニュースを聞くことになった。一つ目は、試合は“ハツフルパフの勝利”に終わった、という事だった。ハリーが落ちる直前に、セドリックがスニッチを取ったのだ。事態が落ち着いたあと、彼は試合中止を求めたが、それはならなかった。二つ目もつと悪い。ハリーの相棒の箒ニンバス2000が暴れ柳に当たり、バラバラになってしまった事だ。初めて試合で負け、相棒を失い、ハリーは深く落ち込んだ。まるで親友の一人を失ったかのような気持ちだった。人が変わったかのように塞ぎ込んで歩くウツドを見る度に、ハリーは申し訳なきに胃がキリキリと痛んだ。

ハリーにとって、悪いニュースがもう一つある。イリスの回復が遅い、という事だ。三人はあれから毎日欠かさず、医務室へ足繁く通ったが、マダム・ポンフリーは頑として見舞いを許可しなかった。

「彼女はとても魔法力を消費したので、昏睡状態にあります。今はただ、眠り続ける事が必要なんです」

驚くべきことに、イリスの見舞い客は、ハリーたちだけではなかった。グリフィンドールのクイディッチチームのメンバーや、同級生たちだけでなく——他寮の生徒たちも、プレゼントやカードを持って医務室へやってくるようになったのだ。一部のスリザリン生たちも、医務室の扉の前で、恭しく頭を下げているのを見た、とネビルが教えてくれた。大きな守護霊を呼び出し、多くのデイメンターを追い払ったイリスは、ホグワーツで「一躍」時の人”となっていた。

「おったまげー。まるで君じゃないか!」

デイメンター事件から三日目の朝、ハリーたちは大広間で朝食を摂っていた。ロンが、イリスへ贈られた蛙チョコの箱の山を、彼女に成り代わって持ち帰り、次々と開封しながら、冗談めかしてハリーに言った。

「ロンったらー後でイリスに怒られても、知らないわよ」

ハーマイオニーはジロリとロンをひと睨みし、冷たく言い放った。すかさずロンが「イリスが見やすいように、仕分けしてるのさ!」と言いつつ、言い訳がましく言い返す。そんないつもの光景を聴き流しながら、ハリーはクイディッチの考察本を広げつつ、トーストを頬張った。——ことクイディッチに関しては、問題が山積みだ。ニンバス2000が無くなった今、代理の箒でなんとかしなければならぬし、もうグリフィンドールには後がない。

その時、視界の端を黒いものが掠め、ハリーは驚いてビクツと肩を跳ね上げた。——それは、一羽のふくろうだった。ハリーが天井を見上げると、無数のふくろうが上空を飛び交い、生徒達に荷物や手紙を落としていくのが見えた。デイメンターではなかった。ハリーは思わず安堵して、肩を撫で下ろした。そう、グリムでも——。

ハリーは、ふと試合中の出来事を思い出した。観客席の一番上にい

た、毛むくじやらの黒い犬のことを。心臓が、ギシギシと嫌な音を立てて軋む。ハリーは、ロンにもハーマイオニーにも、あの時見たグリムのことを話していなかった。ロンはきつとシヨックを受けるだろうし、ハーマイオニーには笑い飛ばされると思ったからだ。

しかし、事実、犬は二度現れ、二度とも危うく死ぬような目に遭っている。最初は“夜の騎士バス”に牽かれそうになり、二度目は箒から落ちて二十メートルも落下した。グリムは、ロンが言う通り、確かに実在しているのだろうか。自分が本当に死ぬまで、取り憑くのだろうか。これからずっと、犬の姿に怯えて生きていかなばならないのだろうか。ハリーはトーストを食べる手を止め、物思いに沈んだ。

『大丈夫だよ、ハリー。私が見た時はね、馬に見えたんだ』

大好きな親友の声が、ハリーの耳元で優しくこだました。「占い学」で不安な気持ちになっていた時、イリスが掛けてくれた言葉だ。——ハリーはイリスに会いたくて、たまらなくなった。弱気になっちゃ駄目だ。ハリーは頭を勢いよく振って、雑念を追い払った。イリスは倒れるまで、僕を守ってくれた。今度は、僕が守らなきゃ。そう、もつと強くならなきゃ駄目だ。ハリーがそう決意を固めていると、目の前にふくろうが一羽舞い降りてきて、ハーマイオニーが黄色い歓声を上げた。

「何事だい？」カードの仕分けをしていたロンが、気もそぞろに問いかける。

「ロックハートの新作よー」

ハーマイオニーがうきうきとした口調で答えると、たちまちロンの関心は蛙チョコカードへ、ハリーの関心はクイディツチの考察本へ戻った。親友たちの完全なる無関心さに気分を害することなく、ハーマイオニーは包装を解きながら、二人に向かって話し続ける。

「すつごく楽しみにしてたのよ。イリスも彼の事が好きだから、あとで貸してあげなきゃ。あなたたちはその後ね。今回は、一体どんなタイトル……」

不意に、ハーマイオニーの言葉が途切れた。——ハリーは本から視線を上げ、訝し気にハーマイオニーを見た。ハーマイオニーの幸せそ

うな表情が、みるみるうちに彩りを失くし、固く凍り付いていく。

「ハーマイオニー？」

ハリーの静かな声に、只事ではない雰囲気を感じ取ったのか、ロンもカードから視線を外して、隣に座るハーマイオニーをチラッと伺い見た。——しかし彼女は黙り込んだまま、答えなかった。代わりに、包装紙から本を取り上げ、テーブル上に、静かに置いた。

ハリーとロンは、それぞれ覗き込んだ。立派な装丁の施された、赤色の本だ。表紙には金色に光る文字で、題名が刻印されている。——

『継承者とのこっそり一学期』そこには、そう記されていた。



## A c t 1. 魔法省と大人たち

まるで時間クロノスの神が、三人のいる空間だけを切り離してしまったかのように、彼らは暫くの間、ピクリとも動くことが出来なかった。——みんな同じ事を思っていた。『何故ロックハートが、“秘密の部屋”について物語を書くことが出来たんだ?』と。

やつとのものでハーマイオニーが震える手で本を拾い上げ、席を立った。ハリー達も先を争うようにしてテーブルを飛び出し、ハーマイオニーに追いついた。彼女は覚束ない足取りで大広間を出ると、人気がない廊下の角へ駆け込んだ。それから素早く周囲に視線をめぐらせ、人がいないことを確認してから、立ったまま速読を始めた。——その速さといったら! あつという間に目が左から右へ流れ、手が次のページをめくっていく。ハリー達は呆気にとられ、口をポカンと開けたまま、彼女の様子を見守ることしか出来なかった。やがてハーマイオニーは最後のページを読み終えると、静かに本を閉じた。

「なあ、何が書いてあったんだい?」

待ちきれなかったロンが、そわそわしながら尋ねた。ハーマイオニーは応えようと口を開いたが、なかなか言葉が出てこない。しかしその反応だけで、二人は本の内容が良いものどころか——とてつもなく悪いものであることを推測できた。ハーマイオニーは、まるで二人に“この世の終わり”が来たことを告げるかのように、ゾツとするような暗い声で呟いた。

「・・・イリスよ。あの子が・・・」

“イリス”——その一言で、ハリーの肩がビクリと跳ね、ロンの口がパカッと開いた。『どうして本にイリスの名前が載っているんだ?』二人は同時にそう思った。ダンブルドアはイリスを守るために、“秘密の部屋”の“継承者”が誰であるかを明言していなかった。だからホグワーツの教師陣と“部屋”に関わった人間以外、誰もイリスが継承者だということを知らないはずなのだ。うろたえる二人の目の前で、ハーマイオニーの青白く光る目から涙が浮き上がり、いくつも頬を滑り落ちていく。

「リドルの日記」に操られたんじゃない。イリスが自分の意志で、“秘密の部屋”を開いて、そしてみんなを襲ったって……」

ハーマイオニーは、それ以上言葉を続けることが出来なかった。本を取り落とし、床にへなへなと崩れ落ちると、小さな子供のように両手を覆ってしゃくり上げ始める。ロンはおたおたして、不器用な手つきで、彼女の肩を撫でた。ハリーも彼女の傍に座り込みながら、地面に落ちた本に手を伸ばす。——ハリーの頭の中を、イリスとの思い出が走馬灯のように駆け巡った。ホグワーツで一緒に過ごす中、数えきれないほど自分に与えてくれた、向日葵のような笑顔と楽しく幸せな日々の記憶。そして——“部屋”の祭壇に横たわる、衰弱し切ったイリスの身体と痛々しい涙の痕。

ハリーは思わず頭を強く振り、嫌な記憶を追い払った。——“秘密の部屋”事件は、もう終わった話だ。イリスは去年の辛い思い出を忘れて、幸せになるべきなんだ。だからこんなこと、あってはならない。ハリーは何度も自分にそう言い聞かせながら、本の中身に目を通し始めた。ロンも不安そうな様子で、ハリーの肩越しに本を覗き込む。

“秘密の部屋は開かれたり 継承者の敵よ 気を付けよ”——冒頭は、その文句で始まっていた。ストーリーは、「闇の魔術に対する防衛術」の担任となったロックハートが、突如開かれた“秘密の部屋”、その犠牲者たちの特徴から、“継承者”の正体突き止めるというミステリー調のものだ。ストーリーのクライマックスで、ロックハートは独力で“秘密の部屋”の在処突き止め、そこに君臨している“継承者”イリスと対峙する。イリスは友人達には隠していたが、本当は狂信的な純血主義者だった。“死喰い人”であった祖母の遺志に従い、“秘密の部屋”を開いて、穢れた血たちを退けていたのだ。ロックハートはイリスがけしかけたバジリスクと戦って勝ち、相棒を失って茫然とするイリスに、『君はマグルの素晴らしさを知るべきだ。魔法界とマグル界が織り成すハーモニー、それこそがこの世界をより良くしていくのです』と説得する。イリスは見事に改心し、自らの過ちを反省して、“秘密の部屋”を永久に閉じた。最後にロックハートは、あとがきでこう記している——『この事件の後、ダンブルドアと

の話し合いにより、イリスは通学を継続することとなりました。ご心配なされるな。彼女はもう危険な魔女ではありません。私のおかげで改心していますから!』と。

「なんだよこれ!ふざけるなよ!」ロンが地団太を踏み、怒り狂って叫んだ。

「全部、嘘っぱちじゃないか!今すぐみんなに言おう!」

——その通りだ。滅茶苦茶じゃないか!ハリーは、本を今すぐビリビリに引き裂きたい衝動を我慢するので精一杯だった。イリスがこれを読んだら、一体どんなに嘆き悲しむだろう。ロックハートに対する烈しい怒りの感情が、ハリーの体中を駆け巡り始める。しかし、ハーマイオニーは悲しみに打ちひしがれた様子で、力なく首を横に振った。

「もう遅いわ。ロックハートのファンは魔法界中にいるのよ。彼がどんなに人気のある魔法戦士だったか、私が一番知っているわ」

「ところがどっこい、僕らはそいつが大ウソつきだって知ってる。実際に現場を見たからね!」ロンが挑戦的な口調で言い返す。

「そうだ、僕らが証言するよ。」秘密の部屋”の真実をみんなに話す。ホグワーツの先生たちだって、きつと味方になってくれるはずだ」とハリー。

「...ねえ、二人共。どうして”リドルの日記”が物語に出てこないのか、疑問に思わない?」

おもむろにハーマイオニーが、浮かない口調で二人に尋ねた。ハリーとロンは、思わず互いの顔を見合わせる。——確かに、彼女の言う通りだ。物語の最初から最後まで、”リドルの日記”は登場しない。あくまで、全てイリスの意志で行ったとされている。しかし不思議なことに、”秘密の部屋”事件に関するそれ以外のシーン——壁に書かれた文字、ミセス・ノリスを始めとする犠牲者たちの様子や、”秘密の部屋”の構造やバジリスクの容姿に至るまで——は、まるでロックハートが実際に目撃したかのよう、具体的に描写されていた。”ロックハートの作り話”と決めつけるには、到底無理なほど、現実味がある。ちなみに本当に活躍したハリーやロン、ハーマイオ

ニー、ドラコは残念なことに殆ど登場しなかった。たまにロックハートの引き立て役として、物語の片隅に他の寮生たちと共に、チョコロツと描かれるくらいのものであった。

「そう言えば、そうだよ。本当にあいつが百万歩譲って“秘密の部屋”に行つたとしたなら、“リドルの日記”のことだつて知つてるはずじゃないか」とロン。

ハリーは顎に手を当て、思索した。——異常なほどの目立ちたがりで、自分の失敗さえ、強引に手柄としていたロックハートなら、“リドルの日記”だつて貪欲に利用するに違いない。ロンの言う通り、ロックハートが事件の真相を全て知っているなら、その流れの通りに描写した方がよほどスマートだ。しかし、彼はそうしなかった。不自然に真実を捻じ曲げてまで、日記の存在を隠している。——どうしてだ？日記の存在を知られると、不都合なことが起こるから？そもそも日記の最初の所有者は——。ハリーは、ハツと息を飲んだ。ようやくハーマイオニーの意図するところを理解し、押し黙つたままの彼女の瞳をまじまじと見つめる。

「そうよ、ハリー。この本の制作に関わつたのは、恐らくロックハートだけじゃない」

「誰だよ？」ロンが訝しげに問い返す。

「“リドルの日記”を知られて、困るのは誰？日記をイリスに持たせた人物よ」

「……マルフォイの父親だ！」

ロンが我が意を得たりと言わんばかりに叫ぶと、ハーマイオニーは頷いた。

「だけど、どうしてそんなことを？」とハリー。

「そうね。考えたくもないけど……きっと、失敗したからじゃないかしら」ブルツと身震いしながらハーマイオニーが呟く。

「恐らく“リドルの日記”を使って、イリスを悪い魔女にさせようとしたのよ。だけど、イリスはそうならなかった。だから今度こそ、ロックハートと組んでまで、彼女を……」

「マーリンの髭狂ってつたらないぜ！」

『あの人がハリーに敗れ去ってから、闇の陣営に与する魔法使い達のうち——数少ない——本当にあの人と共に闇に沈んでしまった者はアズカバンへ送られ、大多数のそうではない者は、逃げ口上を述べてこちら側へ戻って来た。だが、闇の陣営は、裏切り者を決して許さない。彼らは今、やつから自らを守るものを必死に求めている』——不意にハリーの頭の中で、「漏れ鍋」で盗み聞いたアーサーの言葉がこだました。マルフォイの父親は、かつて闇の陣営側の人間だった。

『ヴォルデモートはこの世から消え去ったわけではない。ハリー。彼はいつか再び、権力を手にしようと、今もどこかで乗り移るための体を探していることだろう』——一年生の時、賢者の石をクイレル先生から守った後、医務室でダンブルドアはそう言った。いつ復活するかもしれないヴォルデモート、その忠実な部下だったブラック。双方から身を守るために、マルフォイの父親が画策し、イリスを貶めようとしているとしたら？

ハリーの脳裏に、あるイメージが浮かんだ。いわれのない誹謗中傷を受け、心を壊してしまったイリスの姿。やせ細ったその体を貢物のように差し出して、マルフォイの父親は恭しく頭を下げる。『ああ、ここまで育て上げるのに、苦勞致しました。ご主人様、私は貴方様の、誰よりも忠実な家来で御座います。この娘が、その証明です』それに続いて、甲高い嗤い声が満足気にこだました。デイメンターが近づいたびに、ハリーの頭の中で聴こえるあの声だ。ブラックが固まった蟬のような顔を歓喜に歪ませ、幽鬼のようにゆらゆらとイリスに近づく——。

そんなこと、させてたまるもんか。ハリーは、怒りにわなわなと震える拳をギュッと握り締めた。イリスを守るんだ。ハリーは何とか冷静になろうと努力しながら、思案を巡らせる。——まず、この状況を打開する方法を考えるんだ。何かないか——そうだ、そう言えば。彼は、はたと思い返した。どうしても納得のいかない、不自然な点がある。

「ねえ、可笑しいと思わないかい？ ロックハートが、マルフォイの父親

から“秘密の部屋”の情報を得たとして……じゃあ、どうしてあいつは、真相を全て知っているんだ？ ロックハートは臆病風を吹かせて逃げ出したし、“部屋”には僕らの他に誰もいなかった。真実を知るのは、僕らしかいないはずなんだ」

「そうだけ。もしかして……マルフォイの記憶を見たのかな？ イリスの魔法を破つてき。考えられるのは、そこしかないよ」

ハーマイオニーはしばらく思索した後、首を横に振って否定した。「それは、ないと思うわ。“忘却術”を破る術は、そう簡単に無い筈だもの」

三人は気難しそうな表情を突き合わせ、考え込んだ。もうすでに朝一番のクラスが始まって随分と時間が経過しているが、みんな——あの勤勉なハーマイオニーですらも——授業の事など考える余裕はなかった。不意に柔らかな感触が足に触れ、ハーマイオニーは驚いて悲鳴を上げそうになり、その方向へ目をやって笑顔になった。——クルックシャンクスだ。オレンジ色の豊かな毛並みを飼い主の足に擦り付けながら、猫はニヤアと一言鳴いた。その時、実に奇妙な事なのだ、三人には猫の言葉の意味が分かった。『イリスが目を覚ました事を、伝えに来たのだ』と。

☆

大広間にフクロウ便の時間が訪れ、広大な空間を無数のふくろうたちが飛び交っていく。クイディッチの考察本を眺めていたハリーと擦れ違った、真っ黒なふくろうが一羽、スリザリンのテーブルに降り立ち、二年目のスリザリン生、セオドール・ノットに手紙を落とす。ノットは手紙を受け取り、差し出し主を確認した。——父親からだ。上質な封を破り、中身に素早く目を通す。

『愛する我が息子、セオへ』

昨晚を境に、私の印がほんの少しばかり、濃くなった。だが、決して見間違いなどではない。あの方が力を取り戻し始めている証拠だ。やはり、我々の案じていた通りの結果になった』

ノットの視界の端で、幾羽ものふくろうがスリザリンのテーブルへやってきては、スリザリン生たちに手紙を落としていく。受け取る寮

生たちは、みんな一つの共通点を有していた。——両親や兄弟、関係の深い親戚が“死喰い人”だった、という点だ。運良くアズカバン行を逃れた彼らは、“闇の印”が濃くなっていることを発見し、慌てふためいて子供たちに手紙を送り付けた。『あの方の復活もそう遠くはないかもしれない。マルフォイ家のご子息とますます懇意な間柄になるように』——詳細の違いこそあれど、おおむねこんな風な内容の文章を、子供たちは読む事となる。

かつて“死喰い人”だった彼らは、二年前に開催されたマルフォイ家のクリスマスパーティーに出席した時、当主であるルシウスの手の中に、イリスがあるのを知っていた。ルシウスはパーティーを通して、“闇の帝王”に対する強力な命綱を、“闇の陣営”が全盛期だった当時、“死喰い人”内で最高の権力を誇っていた自分が所持している、と周囲の魔法族に宣言し、また同時に牽制していたのだ。

“闇の陣営”は裏切り者を許さない。近い未来、あの方が復活を果たした時、アズカバン行を体よく逃れ、あの方を探しもしなかった自分たちが助かるには、もうルシウスにすぎるしかない。そう判断した彼らはこぞって子供たちに、その愛息子であるドラコのご機嫌取りをするように命じた。自分の家族を守るため、子供たちは今までより一層ドラコをちやほやとし始めた。傲慢不遜な態度で彼らに迎合するドラコを冷めた目で眺めながら、ノットは手紙の最後の文面を読んだ。

『お嬢様の“血の魔法”も、いつ発動するか知れない。セオ、つつがなく事が運ぶよう、尽力せよ。お嬢様をお守りするのだ』

☆

イリスは、ゆっくりと目を開いた。パチパチと瞬きするたびに、おぼろげな視界が少しずつクリアになっていく。——ここは何処だろう。ああ、この天井、見覚えがある。医務室だ。イリスは緩慢な動作でベッドから身を起こすなり、驚いて息を飲んだ。サイドテーブルには、まるで菓子屋が丸ごとそっくり引越してきたかのように、イリスの大好きな甘いもの（※蛙チョコレートを除く）が山のように積み上げられている。

「ああ、目が覚めたのね。これはみんな、あなたの信奉者からですよ」  
後ろの方から、マダム・ポンフリーの優しい声がやって来た。――  
“信奉者”だって？イリスがびっくりして咳き込むと、ポンフリーは少しばかり呆れた様子で背中を摩り、水差しを口に運んでくれた。その美味しさと言ったら！イリスは水差しが空っぽになるまで、夢中で飲み続けた。水分が体中に行き渡ると同時に、おぼろげだった今までの記憶が、頭の中でチカチカと瞬いては消えていく。

――そうだ。クイディッチの試合中、ハリーがデイメンターに襲われて、守護霊でデイメンターたちから、みんなを守って――それから、一体どうなったんだろう。イリスが一生懸命頭を捻って思い出そうとしていると、オートミールを作るためにベッドを離れたポンフリーと入れ替わるようにして、懐かしいオレンジ色の毛玉がやってきた。  
《イリス、本当に良かった。このまま目覚めないんじゃないかと思っちゃよ》

「クルックシャンクス！」イリスは明るい声で言うと、友猫の頭を撫でた。

「ねえ、ハリーは怪我をしてなかった？みんなは無事？」

《みんな健康そのものさ、お前以外はな。全く、無茶しやがって！》

ああ、良かった！私、ちゃんと守れたんだ。スネイプ先生のおかげだ。イリスは安堵する余り、力が抜けてまた倒れ込みそうになるのを、なんとか気合で持ち直した。クルックシャンクスはそんな彼女に、親しみを込めて軽い猫パンチをした。

「私、どのくらい眠っていたの？」ふと気になり、イリスが尋ねた。

《三日間さ》

「三日間っ?!」

《冗談じゃないぜ、本当さ》悪びれなく、クルックシャンクスが応えた。

《そうだ。待ってる、今からハーマイオニーたちを呼んでくる。そのくらい元気だったら、マダム・ポンフリーも面会を許してくれるだろう》



まさか、三日間も眠りっぱなしだったなんて。イリスは自分自身に驚くやら呆れるやらで、特大の溜息を一つ零してしまった。どうりで、体のあちこちに強い倦怠感があるわけだ。イリスは伸びをしようとして、そろそろと両腕を持ち上げようとして——ハッと息を飲んだ。右腕には、“闇の印”がある。

ぼんやりとしていた意識がとたんに覚醒し、弛緩していた体は、氷のように冷たく凍り付いた。——どうしよう。スネイプ先生の薬の効果は、とうに切れているはずだ。マダム・ポンフリーや他の人に、このことを知られたら。イリスはごくりと生唾を飲み込み、恐る恐る右腕を見て——そして首を傾げた。何者かによって右腕全体に包帯がきっちり巻かれており、印を見ることが出来ない状態になっている。

「心配しなくとも、あなたが眠り続けている間、誰もそれを見ていませんよ。さあ、少しずつ噛んでお食べなさい」

マダム・ポンフリーが何でもなような口調できびきびと言いつち、オートミールが入った皿とスプーンをイリスに差し出した。彼女は、イリスに“闇の印”があることを知っていて、他の者たちの目から守ってくれたのだ。イリスは、心がポツと暖かくなるのを感じた。拙い口調でお礼を言うと、蜂蜜がたっぷり混ぜ込まれたオートミールを口に運び始める。

やがて医務室のドアを忙しくノックする音が聞こえた。期待に胸を弾ませるイリスとは対照的に、マダム・ポンフリーがまるで敵がやってきたような険しい表情で、ドアの近くへ歩み寄って行く。そして勢い良くドアを開け放ち、呆れたように叫んだ。

「まあまあ、あなたたち、一体全体授業はどうしたんです！最初のクラスが、とうに始まっている時間ですよ！」

「お願いします、大事な用事があるんです。イリスに会わせてください」ハリーの声だ。

イリスは嬉しくてたまらなくなつて、よろよろとベッドを起き出し、ドアの方へと駆けて行った。ポンフリーの体越しに、こちらを心配そうに覗き込む親友たちの姿が垣間見える。

「ハリー！ロン！ハーミー！」

懐かしい声を聴いて、ハリーたちは一気に笑顔になった。ポンプリーとドアの間を器用に擦り抜け、三人はイリスをギュツと抱き締め、口々に再会の喜びの言葉を送った。

「イリス、本当にありがとう。君のおかげで、みんな助かったんだ」

ハリーは、心から感謝の言葉をイリスに伝えた。いつも自分を助けてくれた、尊敬する兄のような存在のハリーに褒めてもらえるなんて。イリスはなんだか恥ずかしくなって、俯きながら「ウン」と頷いた。ロンが蛙チョコカードの束をローブのポケットから取り出しながら、お楽しみを奪われてムツとした様子のイリスに言い訳がましく言い訳をしている間、ハーマイオニーは今にも三人を追い出そうとする怒れるマダム・ポンフリーに、あの本を見せながら、事情を話した。気を遣って席を外したポンフリーを見送った後、三人はチラツと視線を交し合い、イリスに話しかけた。

「あの、それでね。イリス。・・・ちよつと真剣な話があるのよ」

ハーマイオニーはそう言うと、立派な装丁の施された真新しい一冊の本を差し出した。——イリスはそのタイトルを見たたん、三日振りに親友たちに会えた喜びで膨らんでいた心臓が、パチンと音を立てて破裂したように感じられた。『継承者とのこつそり一学期』——そこにはそう書かれている。ポカンと口を開け、絶句するイリスをそつと見つめながら、ハーマイオニーは重い口を開いた。

「その、本当はもつと後にしようと思ったんだけど、もう他の人達が読んでいる可能性もあるから、じっくり落ち着いて話せるこの時にしようと思ったの。」

でも貴方は何も心配する必要はないわ。私達が絶対を守るもの。まずはダンブルドアに報告に行くつもりよ。ロックハートは大ウソつきだわ。こんなことつて、本当に許されない！」

ハーマイオニーの言葉が、イリスの耳の中をふわふわと通り過ぎていった。——そんな、どうして、ロックハート先生が。イリスは恐怖にかじかんだ手で、ゆっくりと表紙を開き、内容に目を通し始めた。そこには、イリスが自分の意志で“秘密の部屋”を開き、“継承者”

として学校を恐怖に陥れ、人々を襲っていく様子が克明に描かれている。イリスの目が、ふとあるシーンでピタリと止まった。

イリスがハーマイオニーを“穢れた血”と罵りながら、バジリスクに命じて、物言わぬ石像に変える残酷な場面だ。イリスの目は灼けるように熱くなり、喉が締め付けられたように苦しくなって、いくつもの涙がページ上を零れ落ち、嘘の言葉たちを滲ませていく。

「わ、私、自分の意志で、ハーミーを、傷つけて、ない」

「分かっているー！」三人は一斉にイリスに飛びつき、同じ言葉を叫んだ。

不意に、ロンが口をパカツと開けて、サイドテーブルの方を見つめ始めた。つられるようにして、その方向に視線を向けたハリーとハーマイオニーも、驚いた様子で息を飲んだ。ピラミッドのように積み上げられたお菓子の山が、一つ残らず、ふわふわと宙に浮かんでいるのだ。

「あ、ああ、ごめんなさい。」  
ユア・マジエステイ 陛下下”。違う。私のせいじゃない、私のせいじゃ……」

ロックハートの本が起爆剤となり、再び“秘密の部屋”事件の辛い記憶を思い出してしまったイリスは、一時的なパニック状態に陥った。激しい感情の高ぶりは、イリスの魔法力をいとも容易く暴発させる。今やお菓子だけでなく、医務室中のこまごまとしたもののまだが、空中をゆらゆらと漂い始めていた。まるでここだけ無重力空間になったかのように。

「ねえ、何が起こってるの？」ハーマイオニーが不安そうに叫んだ。

ハリーはふと、夏休みの終わりに起こした大事件を思い出した。――マージおばさんに自分の両親を馬鹿にされたあの時、感情が高ぶったハリーは、おばさんを風船のように膨らませた。そうだ、もし“あの時”と同じように、イリスも魔法力を暴発させているとしたら？

「きつとイリスの魔法力が暴発してるんだ。僕がおばさんを膨らませた時みたいー！」

イリスを落ち着かせなければ。ハリーはイリスの両頬に手を添え、焦点の合わない青く霞んだ目と、何とかして繋がりうと試みながら、何度も彼女に語り掛けた。ガタリと音を立てて、医務室じゅうの見舞

い用の椅子が浮き上がったのは、天井に音を立ててぶつかっていく。

「イリス、大丈夫だよ。僕の目を見て。落ち着くんだ」

「ああ、ハリー。ごめんなさい。どうしよう、どうしたら・・・」

ハリーの力強い言葉は、イリスを恐ろしい過去の記憶から現実の世界へと引き戻した。イリスはハリーに根気強く説き伏せられ、どうにかして自分の気持ちを落ち着けようと努力した。けれども深呼吸しようとしたとたん、陶器製の花瓶が壁に叩きつけられ、粉々に破壊されてしまう。ハーマイオニーが悲鳴を上げ、ロンにしがみついた。

——ああ、落ち着かなきゃ。感情を抑えないと。イリスは懸命に自分に言い聞かせた。私のせいで、みんながまた傷ついてしまう。しかし、彼女の想いも空しく、やがて浮き上がったものは、嵐のように部屋中を暴れ始めてしまった。四人がお互いをひしと抱き締め合ったその時、不意に前方から穏やかな声があった。

「イリス、もう大丈夫じゃ」

イリスが固く瞑っていた目を恐る恐る開けると、何時の間にかダンブルドアがベッドの脇に座り、イリスの手を優しく包み込んでいた。ダンブルドアが杖を一振りすると、暴れ回っていたものは全て、元の場所へ戻った。壊れた花瓶もビデオテープを巻き戻して観ているかのように、みるみるうちに修復され、あるべき場所へ納まった。『ダンブルドアが来てくれたなら、もう安心だ』——四人は思わず安堵のため息を吐き、ベッドに力なく座り込んだ。ダンブルドアの後ろでは、マダム・ポンフリーが息を切らしながら、壁を背に預けて立っている。きつと大急ぎで、ダンブルドアを呼んできてくれたのだろう。

「校長先生、ロックハートの書いたこの本はデタラメです！」

ハリーが烈しい口調でそう抗議すると、ダンブルドアはしっかりと頷いた。ダンブルドアの瞳には、これまでハリーたちが見た事のないような激しいブルーの炎が燃えている。

「その通りじゃ。一刻も早く、真実を明らかにせねばならぬ。イリス、共に魔法省へ行こう。コーネリウスと話をしなければ」

「お言葉ですが、校長先生。この子はいさつき目覚めたばかりで、魔法力も不安定です。まだ外を歩き回れるほどに回復は・・・」

「ポピー、事は急を要する。彼女を守るためには、今この時、動かなければならぬのじゃ」

ダンブルドアは静かな口調で言い放った。マダム・ポンフリーはきつと口を結ぶと、クローゼットからイリスの着替えを持って来て、三人をベッドから追い出した。そして杖を振ってベッド周りのカーテンを閉じ、イリスがネグリジェから制服へ着替えるのを手伝った。

ダンブルドアを見上げると、銀色の眼鏡から優しい眼差しが向けられる。たったそれだけで、イリスは大いに勇気づけられた。振り返ると、ハリーたちが心配そうに自分を見つめてくれている。イリスは親友たちにお別れを言った後、ダンブルドアに伴われ、ホグワーツ城を出た。そして差し出された腕を掴んだ瞬間、凄まじい衝撃の中に放り出され——気が付くと、ロンドンの町中に立っていた。

☆

イリスは周囲の光景を見回し、呆気に取られた。魔法を感じさせる要素など一欠けらも見当たらない、マグルの世界だ。こんなところに、本当に魔法省があるのだろうか。しかしダンブルドアはうろたえる様子すらなく、ひよいひよいと器用に人込みの間を擦り抜けながら、ある古めかしい建物の下に設置された、赤い電話ボックスの中に入った。

「魔法省はロンドンの地下にあるのだよ。外来者はみな、この電話ボックスを通さなければならぬのじゃ」

ダンブルドアは慣れた調子で『6, 2, 4, 4, 2』とダイヤルし、受話器を取り上げる。

「アルバス・ダンブルドアじゃ。魔法大臣に至急、謁見を願いたい。イリス・ゴント嬢もいる」

そう用件を言うと、コインが出てくるところから、四角い銀色のバッチが、コロニコロンと二つ転がり出て来た。イリスが手渡されたバッジをまじまじと覗き込むと、『用件：魔法大臣と謁見、氏名：イリス・ゴント』と刻まれている。イリスが制服のベストにバッチを付けると、エレベーターのようにゆっくりと、電話ボックスの床が沈んでいった。

やがて床の降下が止まり、電話ボックスの扉が開いて見えた光景に、イリスは息を飲んで周囲を見回した。——そこは、まるで別世界だった。ロンドンの地下に、こんなにも大きな空間があったなんて。広大なエントランスホールの中央には、魔法使いや魔女、ゴブリンなどの魔法生物が寄り添い合う像が特徴的な、立派な造りの噴水が設置されている。壁際には無数の暖炉がずらりと並んでおり、そこから何人も魔法使いや魔女たちが現れては、それぞれの職場へと歩き去っていく。

『魔法族の和の泉』じゃ。中を覗いてごらん」

ダンブルドアに促され、イリスは美しいその泉を見下ろした。中には、数えきれないほど大量のコインが降り積もっている。この泉に投げ入れられたコインは全て、聖マンガ魔法疾患傷害病院に寄付されるのだと、ダンブルドアが教えてくれた。噴水の横には、立派な大理石と白銀で作られたフロアガイドが設置されている。フロアガイドの情報を信じるとするならば、ここはなんと——地下8階だ。

- 地下 1階 魔法大臣室、次官室
- 地下 2階 魔法法執行部
- 地下 3階 魔法事故惨事部
- 地下 4階 魔法生物規制管理部
- 地下 5階 国際魔法協力部
- 地下 6階 魔法運輸部
- 地下 7階 魔法ゲーム・スポーツ部
- 地下 8階 エントランスホール
- 地下 9階 神秘部
- 地下10階 法廷

「さあ、イリス。我々は、守衛室に行つて杖を預けなければならぬ」  
二人が守衛室に向かい、担当の魔法使いに杖を預けていると、バタバタと忙しない足音が背後からやってきた。

「アルバス！来てくれたか！」

背が低く恰幅の良い体をした、初老の魔法使いだ。くしゃくしゃの白髪頭で、何か悩み事があるような顔をしている。奇妙な組み合わせ

の服装で、細縞のスーツ、真っ赤なネクタイ、黒い長いマントを着て、先の尖った紫色のブーツを履いていた。男はイリスに気が付くと、たっぷりとした同情を込めた目付きで、たじろぐ彼女に握手を求めた。

「君がイリス・ゴントだね？私はコーネリウス・ファツジ、魔法大臣だ。・・・可哀そうに。なんということをするのだ、あの男は」

「コーネリウス。状況はどうなっている？」

ファツジは、堰きを切ったように話し始めた。——現時点で、ロツクハートの新作『継承者とこつそり一学期』を出版停止処分にし、購入者には魔法省への自主的返却を求めているという事。ロツクハートには早急に事実確認をしたいので、魔法省へ召喚命令を出したが、肝心の当人が行方不明だという事。今、魔法警察部隊を動員し、彼の行方を目下捜索中だという事。そして、魔法界ではロツクハートの話を信じる者と信じない者で、二分に別れているという事。信じる者からは『イリスをホグワーツに置いては危険だ。しかるべき場所へ連れて行くべきだ』と、信じない者からは『真っ赤な嘘、デタラメだ。彼女の父親と彼女が可哀想だ』という、相反する内容のクレームの手紙やら吼えメールが相次いでいるという事。

——『ロツクハート先生が行方不明？』イリスの心臓が、嫌な音を立てて軋んだ。魔法省の追及から逃げているのか、それとも——。だが、もうかつての闇の帝王、トム・リドルはこの世から消滅したし、バジリスクもない。一体、ほかの誰が、彼に害を成そうというのだろうか。

ふと、イリスの脳裏にある魔法使いの姿がフラッシュバックした。——ロツクハートの話には、“リドルの日記”は登場しなかった。きつとこの件には、ルシウスが関わっているのに違いない。いずれにせよ、当事者とされるロツクハートがいない限り、イリスの無実が完全に晴れることはないのだ。ふつつつとした冷たい泡のような焦燥感と絶望がイリスの体じゅうを覆い尽くし、彼女はたまらず俯いた。「大丈夫だよ、イリス。何も心配することはない」ファツジは優しく話しかけ、塞ぎ込むイリスの頭を撫でた。

「君のお父さんは立派な魔法使いだった。私は、もちろん君を信じている。だがね、世間は——お尋ね者のブラックのこともあつて——一時的なパニック状態に陥っているんだ。」

今の状況ではきつと、ホグワーツでも居心地は悪いだろう。この件は、私が必ず解決してみせる。暫くの間ホグワーツを離れて、母国のマホウトコロ学校へ身を寄せてはどうかね？」

ファッジはマントのポケットから、上質な布の貼られた巻物を取り出し、イリスに手渡した。軸は美しい白翡翠で出来ており、内側から仄かに輝いている。イリスの視線に反応したかのように、表面に墨汁の文字が次々に浮き上がった。『ようこそ、マホウトコロ学校へ。出雲いりすさん』——懐かしい日本語で、そう書かれている。

茫然とその巻物を見つめるイリスに労しげな眼差しを注ぎながら、ダンブルドアは穏やかな声ではつきりと言った。淡いブルーの瞳には、依然として烈しい炎が燃えている。

「コーネリウス、この事件の黒幕は、断じてロックハートなどではない。"秘密の部屋"の真相は、以前にもきみに話した筈。」

きみは彼を捕え、真実を解き明かす権限を持っている。今こそ、魔法大臣としての権力を使う時ではないのかね？」

「ダンブルドア、その話はよそう」

ファッジの顔がたちまち土気色に変わり、冷や汗が吹き出した。彼はハンカチで流れ落ちる汗を拭いながら、ダンブルドアと目を合わせることなく話し続ける。

「私も難しい立場なのだ、分かってくれ。それに、ルシウスが……彼が犯人などあり得ない。彼は聖マングを始めたとする様々な施設に多額の寄付をしているし、遙か昔から続く純血の名家、圧倒的な有権者だ」

「コーネリウス。家柄や財産や権力は、その者が邪悪ではないと証明するものにはならない」

ダンブルドアは眉をひそめて言い放ったが、ファッジは自分の考えを改めるような素振りも露ほども見せてはくれなかった。——イリスは足元の地面が急激にガラガラと崩れていくような感覚に囚われ



た。どうして大臣は信じてくれないんだ？イリスは巻物を握り締め  
たまま、ファツジにすぎるように必死に願った。

「本当です。大臣、信じてください。私、必要ならペリタセラム 眞実薬を飲みます。  
嘘を吐いてなんていません。本当なんです」

「ああ、イリス。君はきつと混乱しているだけだ」

ファツジはまるでお気に入りの姪を相手にしているかのように、気  
さくな様子でイリスの頭を搔き雑せた。

「私も君ぐらいの多感な年頃にはよくあつた。ありもしない事を本当  
だと思ひ込む。現実と妄想がごちゃ混ぜになつてしまふんだ。恐ら  
く、ロツクハートの件でショックを受けて、記憶が一時的に混乱して  
いるだけだよ。」

それに、例え冗談でも、彼にそんな失礼なことを言つてはいけな  
いよ。彼はこのことでも心を痛め、そして君を案じていた。ロツク  
ハートを捕まえるのに、多額の援助をしてくれただ。

とにかく、ロツクハートさえ捕まえられれば、君の汚名も払拭され  
る。さて、あいつを何とかしてとつちめなければ！」

ファツジは二人を振り返ることなく、せかせかとした足取りでどこ  
かへ去つて行つた。まるで何かから、逃げようとしているかのよう  
に。

☆

「全く、なんということだ！」

もう一人、バタバタと忙しない足音がして、魔法使いが一人やつて  
きた。ロンたち赤毛の民のパパ、アーサー・ウィーズリーだ。アー  
サーは、茫然と立ち竦むばかりのイリスをギュウツと抱き締めた。  
「こんな罪もない子供に、なんという仕打ちを。あの嘘つきめ！ダン  
ブルドア、大臣にはお会いしましたか？」

「ああ。だが状況は思わしくないようじゃ」ダンブルドアは深刻な表  
情で応えた。

「そうでしょう。誰に思わしくないような状況にされているかは、一  
目瞭然ですがね。あいつは一体、どれほどのガリオンをばら撒いたん  
だ？」

ダンブルドアとアーサーは、真剣な顔つきで話を始めた。——イリスは何をするでもなく、ただぼんやりとその様子を見つめていた。さつき聞いたばかりのファッジの言葉が、頭の中でガンガンと鳴り響き、イリスは自分が今、ちゃんと地面の上に立っているのかも分からなくなっていた。

最初に出会った時、ルシウスは自分との再会を喜び、涙を流して抱き締めてくれた。その年のクリスマスは、本当のお父さんのように愛情を込めて接してくれた。その次の年は、怯えるイリスを押しさえつけ、“リドルの日記”を持たせて、彼女を不幸のどん底に突き落とされた。右腕に焼き付けられた“闇の印”を見た時のあの笑みを、イリスは今でも克明に思い出せる。

狡猾な大人の心情を理解できるほど、イリスは成熟しきっていない。ルシウスが自分を愛しているのか、憎んでいるのかすら、もう分からない。『ルシウスさんは、私のことが嫌いなんだ。だからひどいことをする。あの人は敵だ』——混乱したイリスは、やがて彼をそう結論付けた。

しかし、ファッジはあの時、こう言った。『彼はこのことでとても心を痛め、そして君を案じていた』と。——イリスは再び、混沌の渦の中へ突き落された。ルシウスさん。大好きだったのに。どうしてそんなことをするの？

「・・・イリス、大丈夫かい？」

不意にアーサーの声が聴こえ、イリスは我に返った。いつの間にか、イリスはアーサーと共に魔法省のエレベーターに乗り込んでいた。——ダンブルドアはどこへ行ったのだろう。イリスの考えを汲み取ったアーサーが、優しい声で応える。

「ダンブルドアは大臣のところへ行っている。信頼できる筋から、やつの目撃情報があったみたいだね。」

君が落ち込む必要なんて、何一つないんだ。モリーは有志の魔女を募って、ロックハートに対する抗議活動を始めたよ。君を信じる人々はたくさんいるんだ」

イリスはアーサーに心配をかけまいと、頑張って微笑んで見せた。

エレベーターがチンと音を立てて止まり、古めかしいローブを着こんだ妙齢の魔女が乗り込んできた。隅っこに立つイリスをじろじろと興味深そうに眺めていたが、アーサーがこれ見よがしに咳払いすると、慌てて目を逸らした。やがて扉が閉まる直前、紙飛行機がひらりと飛んできて、アーサーの鼻を突つついた。アーサーは器用に片手でそれを捕まえると、開いて中の内容を読み、露骨に顔をしかめた。

「ああ、こんな時に！イリス、少しここで待っていてくれ。すぐに戻る」

アーサーはイリスをエレベーターから連れ出すと、近くのソファで待っているように告げ、足早にどこかへ駆けて行った。イリスはソファから立ち上がり、エレベーターの横に貼り付けられたフロア表示を見た。ここは『地下四階 魔法生物規制管理部』のようだ。

「ここがそうなんだ」

イリスは、その場所を知っていた。ホグワーツの指定教科書である『幻の動物とその生息地』を著したニユート・スキヤマンダーが所属していた部署だったからだ。魔法生物規制管理部は、三つの課に別れている。魔法動物を担当する動物課、ヒトたる存在を担当する存在課、ゴーストを担当する靈魂課の三つだ。エレベーター横で佇むイリスの前を、多くの魔法使いや魔女が行き交い、それぞれの職場へついでいく。

「お願いです。なんとかありませんか。また職場をクビになったんです」

チンと音を立ててエレベーターの扉が開くと同時に、切羽詰まった様子の男の声がした。イリスが声のした方へ視線を向けると、継ぎ接ぎだらけのローブに身を包んだ中年の魔法使いが、隣に立つ魔法省の役人らしき男に、嘆いている。役人は困ったように眉を下げ、気遣わしげにこう言った。

「では援助室へ行きましょう。良い仕事があればよいのですが」

「ああ、ありがとうございます。なんでもします！日雇いでも、汚れ仕事でも、なんでも」男はすすり泣いた。

「妻が病を患っていて、薬を買うための金が必要なのです。しかし、誰

もかれも、私が“人狼”だと知ると・・・」

肩を落として嘆き悲しむ男を役人が支え、金属製のプレートに「存在課」と刻印された、重厚な造りの扉の奥へ消えて行った。——イリスは暫くの間、じつとその扉を見つめ続けた。さっきの男の人も、ルーピン先生も、シリウスも、そして自分も。みんな同じだ。みんな、間違った知識のせいで、不当な扱いを受けている。

イリスは巻物をぎゅっと握り締めた。果たして、自分は耐えられるのだろうか。さっきの男の人やルーピン先生のように、自分の運命を受け入れることができるのだろうか。シリウスのように、非情な現実には、真つ向から歯向かうことができるのだろうか。イリスはもう自分に、自信を失くし掛けていた。

「どうしたんだい、お嬢ちゃん。迷子か？」

おもむろに野太い男の声が飛んできて、イリスはびっくりして振り向いた。——ニヤニヤと悪辣に笑う大柄な魔法使いが、すぐ後ろに立っている。

男はイリスの頭の天辺から足の先までを、じろじろと無遠慮に見つめていた。まるで肉食獣が、獲物をどこから食べようかと見定めているような目付きに、イリスは本能的な恐怖を感じて、思わず一歩退いた。しかし男はイリスが後ずさった分、大腿で距離を詰めるので、やがて彼女は壁際まで追いつめられてしまった。

男の傍にいと何とも血腥い匂いが鼻を突いて、イリスは頭がクラクラした。——よく見ると、男の腰のベルトには使い込まれた、黒ずんだ斧が差さっていて、所々に血が飛んだ革製のトランクをぶら下げている。

「私、迷子じゃありません。その・・・」

イリスが怖がる余りにつつかえながらも、もう間もなくアーサーが迎えに来てくれるという事を説明すると、男は大袈裟に肩を竦めて見せた。

「ああ、そりゃ良かった。なんならそいつが迎えに来るまで、おれがこの部署を案内してやろうか？」

「いいえ、結構です。あの、私、もう・・・」

「固え」と言うなよ、お嬢ちゃん。おれはここで危険な動物を処分する仕事をしてるんだ。おれの事務所に来てくれりゃあ、色んな動物のはく製を見物できるぜ？」

恐怖で身を竦めるイリスにさらに顔を近づけ、男はニヤリと笑った。じやらり、と重々しい金属音がして、イリスが思わずそこへ視線を向けると、男の腰のベルトに何種類もの形状の鎖が下げられていた。男は自慢げに説明を始める。

「良いもんだろう。夜の闇横丁ノクターンで買った、おれの自慢の仕事道具さ。あそこの鎖は質がいい。獲物を絶対に逃がさねえからな」

男はおもむろに、金色の華奢な造りの鎖を指ですくい上げ、イリスの目の前でピンと張ってみせた。

「この黄金の鎖なんてどうだ。これには『拘束の呪い』が掛かっている。獲物が逃げようと体を振ると、締め付けて殺さない程度に動きを封じるんだ。

・・・なあ、この綺麗な鎖は、あんたの透けるような白い膚にピツタリだと思わねえか？」

「何をしている！」

その時、厳しい声が矢のように飛んできて、イリスと男の間を隔てた。——アーサーだ。急いでやって来たのか、激しく息を切らしながらも、男を睨み付けている。イリスは脱兎の如く駆け出して、アーサーに飛びついた。ブルブルと震えるイリスの体を抱き留め、アーサーは警戒した眼差しで、男を牽制する。男は一瞬の沈黙の後、ゲラゲラと大声で笑った。

「ハハハ、冗談さ！ちよいとばかし、怖がらせ過ぎちまったみたいだな。

おたくの部署がまだ潰れていなかったとは、驚きだね。ミスター・ウィーズリー。急に席を外さないといけないほどの、仕事はまだあるとは！」

「私も、君ほどの粗暴な人間が、役所で働いていることの方が驚きだよ」アーサーは冷たく言い返した。

「——フン。貧乏人が、言いやがる。なーにがマグル製品だ。「ケンタ

ウルス担当室」の方が、おたくよりマトモな仕事をしているさ」

男は吐き捨てるようにそう言い放つと、自分の持ち場へトランクを引き摺りながら歩いて行った。ホツと安心する余り、気を抜き掛けたイリスに、背後から再び、絡みつくような男の声が飛んできた。

「お嬢ちゃん。あんたはちよいと華奢すぎだ。もつと太った方がいいぜ」

「行こう、イリス。彼とはあまり関わらない方がいい」

アーサーは溜息を零し、イリスを促して再びエレベーターへ乗せた。

「アーサーさんは、あの人のことを知っているんですか？」

「マクネア、危険動物の処刑人だ。彼に関する良い噂は、とんと聞かないね」

アーサーは顔をしかめて唸るようにそう応えた後、疲れ切った顔に笑顔を浮かべた。

「怖い思いをさせてすまなかった。ダンブルドアが戻ってくるまで、少し私の部署でお茶をしないか？」

エレベーターは『地下2階、魔法法執行部』へ到着した。――アーサーの働く「マグル製品不正使用取締局」は、イリスが今まで見てきた他の部署の中で、一番小さくてみすぼらしい部屋だった。狭苦しい室内には、机が三つ、ぎゅうぎゅうに押し込まれ、そこらじゅうに書類の山やらマグル製品やらが散乱している。大変失礼な話ではあるが、お世辞にも“魅力的な職場”とは言えなかった。

しかし不思議なことに、奇跡的にきちんと片付いている空間があった。三つの机の中で、窓際に設置された机だけが、ものが埋積することなく、磨き上げられた飴色の表面を輝かせている。机上にあるものと言えば、レモンキャンデーの入った硝子皿だけだ。イリスにそこへ掛けるように促すと、杖を振ってポットにお湯を満たしながら、アーサーが嬉しそうに言った。

「イリス、そこは君のお父さんの場所だった。君がそこに座っていると、まるで彼が戻ってきたかのようだ」

イリスはかつて父が座っていた椅子に座り、周囲の様子を眺めた。

窓には、美しい森の景色と抜けるような青空が映っている。アーサーが、イリスにほかほかの紅茶を差し出しながら、ここは地下なので、本当の外の景色を見ることはできない。だから、魔法で自在に映し出しているのだと教えてくれた。——この景色は、偽物なんだ。イリスはじつと、魔法仕掛けの森を見つめながら、想いを馳せた。

アーサーさんはとても良い人だ。それなのに、マクネアという人は、彼とその職業を馬鹿にした。世の中は、私が思っているよりもずっと、不平等なのかもしれない。シリウスは『私のお父さんは、人々から良く思われていなかった』と言った。この狭い部屋の中で、偽物の窓の景色を眺めながら、お父さんは一体どんな気持ちで過ごしていたんだろう。イリスは迷いながらも、口を開いた。

「アーサーさん。私のお父さんは、人々から、よく思われていなかったって聞きました。お父さんは、その・・・幸せだったんでしょうか？」

アーサーはじつとイリスの目を見つめた。まるで彼女の瞳の中から、何かを見出そうとしているかのように。やがて発せられたアーサーの声には、不思議な響きがあった。

「確かに、彼が歩んだ道は、およそ平穏とは程遠いものだったかもしれない。けれど、彼は、自分の人生の中で、幸せなことを一つ一つ見つけ出していた。

その一つが、ここだ。彼はこのデスクに座り、音楽を聴きながら、マグル製品をいじるのが好きだった。もちろん、この窓の景色もね」

イリスは何の変哲もない机を、まじまじと眺めた。そして、かつて自分の父親が幸せだと感じていたのと同じことを、やってみることにした。窓の景色を眺め、カセットレコーダーから音楽を聴きながら、レモンキャンデーを一粒口に入れてみる。

しかし、気分は一向に良くならなかった。ちつともお父さんに近づけた気もしない。魔法仕掛けの景色は息が詰まるようだったし、軽快な音楽にも心が浮き立つことはなかった。レモンキャンデーは酸っぱく、美味しくなかった。イリスにはまだ、成熟した大人が癒され、また好むものを理解することはできなかった。イリスはさすがのように、

マホウトコロ学校の巻物をギュッと強く握り締めた。



## Act 12. ホグワーツ

あれからダンブルドアは随分と力を尽してくれたものの、ロックハートの行方は依然として掴むことが出来なかった。日がとつぷり暮れた頃、イリスはダンブルドアと共にホグワーツへ戻った。

大広間で夕食を摂るようにと促されたが、そんな気には到底なれない。イリスは鉛のように重い体を引きずって、グリフィンホール寮の談話室へ向かった。肩にショールを掛け直していた「太った貴婦人」が、イリスの顔色を見るなり、労しげに眉をひそめる。

「まあ、ひどい顔。また、医務室へ行っていたの？」

「うん。えっと・・・」

イリスは浮かない声で合言葉を唱えようとして、はたと気が付いた。そう言えば、医務室で数日寝込んでいたので、最新の合言葉を知らないのだ。——どうしよう？イリスがまごついていると、おもむろに後方から、大好きな親友の声が飛び込んできた。

「イリス！心配したのよ！」

ハーマイオニーだ。自分よりも一回りほど小さなイリスを柔らかく抱きしめて、彼女は涙混じりの笑顔を浮かべた。上品な薔薇の芳香が、イリスの周囲をふわりと漂う。ハリーとロンも嬉しそうに走って来て、イリスの頭をくしゃくしゃに掻き雑ぜた。

——三人の存在は、まるでお天道様のように冷たくかじかんだ心を暖めてくれる。なんだかイリスは、やっと日常へ戻ってきた気がした。

「おいおい、君ってホントに泣き虫だな！どれだけ僕らに会いたかったんだい？」

張り詰めていた緊張の糸が切れ、イリスがめそめそ泣き始めたのを見て、ロンは呆れたように吹き出した。

「きつと安心したんだよ。さあ、中に入ろう」

ハリーはとびきり優しい声でそう言うと、イリスの頭を愛おしげに撫でた。

「温かいミルクティーを淹れてあげる」ハーマイオニーも微笑んだ。

そうして、四人は談話室へ入った。ほとんどの生徒たちはまだ夕食中らしく、室内にいるのはほんの数人だけだ。いつもの特等席を確保したあと、イリスは三人に、魔法省での出来事を話して聴かせた。全ての話を聴き終わると、ハーマイオニーは憤懣やる方ないという調子で腕を組んだ。

「やっぱりね。そんな事だろうと思ったわ」

「なんでファッジ大臣は、イリスが証言するって言ったのに無視したんだ？本人の話を聞くのが、一番手っ取り早いのに」

ロンが大きく首を傾げると、ハーマイオニーは短い溜め息を零した。

「貴方って本当に鈍いのね。マルフォイの父親が手を引いているに決まってるじゃない。『この件には手を出すな』って釘を刺したに違いないわ」

「確かに大臣は、あいつに対して立場が弱いみたいだった。ハグリッドが連行された時も、あいつの言いなりだったし」ハリーが真剣な声で話す。

「でもさ、魔法大臣だろ？」ロンはしつこく言い張った。

「常識的に考えて、イギリスで一番偉いのは大臣じゃないか。なのにどうしてファッジ大臣は、あんなやつにへこへこする必要があるんだ？」

ハーマイオニーは、今度はとびつきり長い溜め息を吐き、ロンをじろりと一瞥した。

「あのね、ロン。マルフォイ家は、イギリスの魔法界屈指の大金持ちと言われているの。たくさんお金を持っている、たくさん物を買えるわよね？たくさん物を買おうと、経済が動く。——つまり、人々を支配する“権力”を得ることが出来るのよ。政治家にとって、マルフォイ家のような権力者と繋がりを持つのは、とても大切なことなの。

きつと大臣は、マルフォイ家と深い繋がりがあって、彼に頭が上がらないのよ。だからロックハートの事も、動いている振りしか出来ないというわけ」

「よく分かったよ。でもさ、君って僕のこと馬鹿にしてる？」ロンが

ムツとして言った。

「あら、馬鹿になんてしてないわ。呆れているだけよ」

☆

「やつぱり馬鹿にしてるじゃないか」とロンが言い返そうとしたその時、どこからか鋭い悲鳴が響き渡り、四人は一斉に声のした方向を見た。

——談話室へ繋がる穴の前に、小さな女の子が両手で口を押えて、立ち竦んでいる。ジニーだ。ジニーの鳶色の目は、激しい恐怖と怒りに歪み、イリスを睨み付けている。

「どうしてここにいるの？」ジニーの声はわなわなと震えていた。

「じ、ジニー？」

「私は騙されないわ!!」

ジニーが余りに大きな声で叫んだので、イリスはソファの上でたまたまず飛び上がった。周囲の生徒たちの視線が集まるのを気にもせず、ジニーは感情的な言葉を次々に投げつけながら、つかつかとイリスの傍へ詰め寄っていく。

「あなたって最低だわ！全部、嘘だったのね！皆を騙していたのね！」

「な、何を言ってるの、ジニー？」「ハーマイオニーが、掠れた声で問いかける。

「ハーマイオニー、あなたはイリスに騙されているのよ！彼女に去年されたひどい仕打ちを、もう忘れたの？」

きつとブラツクも、あなたが逃がしたに違いないわ！二人でハリリーをいつ殺してしまうか、考えてるんでしょう！……もう彼の傍にいないで、離れてよ！」

ジニーはそう言った切り、顔をくしゃくしゃに歪めて泣き出した。「なんてことを言うんだ、ジニー！」ロンが仰天して叫ぶ。

——初めて出会った頃からずっとハリリーに片思いをしていたジニーは、彼と兄妹のように仲の良いイリスを見るうちに、やがて彼女に対して強い嫉妬心を抱くようになった。その暗い気持ちは、いざイリスが不利な状況に立たされた時、彼女を守るのではなく——彼女を貶めることを選んだ。ジニーはロックハートの本の内容をすつか

り信じ込んでしまったのだ。

言葉もなく泣き崩れるジニーを、ラベンダーとパーバティが優しく助け起こし、女子の寝室に繋がる螺旋階段の方へ連れて行く。その時、ラベンダーたちは不自然にこわばった表情で、イリスをチラッと見た。もうそれは、親しいルームメイトを見る目ではない。

☆

ラベンダーたちは、その夜、部屋に戻ってこなかった。ハーマイオニーは何も言わず、イリスと同じベッドで眠りに就いた。イリスは寝た振りをして、ハーマイオニーに背中を向けたまま、古ぼけた壁を見つめていた。——きつとジニーは、ロックハートの本を信じてしまつたに違いない。イリスは静かに考えた。彼女だけじゃない、ラベンダーやパーバティも。

『今の状況ではきつと、ホグワーツでも居心地は悪いだろう。暫くの間ホグワーツを離れて、母国のマホウトコロ学校へ身を寄せてはどうかね?』

不意にファッジ大臣の言葉が、頭の中で優しく響いた。イリスは隣で眠っているハーマイオニーを起こさないように、そつとベッドから起き上がり、ローブのポケットから美しい巻物を取り出した。そしてその輝きを見つめているうちに、静かに眠りの世界へ落ちていった。

——イリスは夢の中で、懐かしい日本の小学校での記憶を追体験していた。古ぼけた玩具で遊んだり、友達と鬼ごっこや缶けりをしたり、みんなと楽しくお喋りをしながら給食を食べたり・・・などなど。

驚きの連続である魔法界に魅入られていたイリスは、今までマグルの世界を思い返すことなど、ほとんどなかった。だが今となっては、その単調でつまらない出来事の一つ一つが、とても楽しく穏やかで、満たされたもののように感じられた。夢の世界で、イリスは仲の良い友人たちとアスレチックでひとしきり遊んだ後、買い食い先をどこにしようか決めている。

「・・・ちゃん。カルメヤキ、たべにいこうよ」イリスは日本語で寝言を呟いて、微笑んだ。

ハーマイオニーは、その姿をじっと見守っていた。その指先に、と

ても長くて細い金の鎖を絡め、小さな砂時計の付いた不可思議な形状のペンダントを握り締めて。

ハーマイオニーが持っているのは、“タイムターナー逆転時計”と言われるものだ。時間を巻き戻す事ができる強力な道具で、彼女はこれを使って、同じ時間に開始される授業をいくつも受けていた。マクゴナガル先生が、お気に入りの生徒であるハーマイオニーのために、恐ろしく複雑でややこしい手続きをこなし、魔法省から特別に借り受けてくれたのだ。

先生は『“逆転時計”の事は誰にも他言せず、そして決して授業以外の用途に使わない事』を、ハーマイオニーに約束させた。それだけではない。“逆転時計”の持つ力に目が眩んで、時間にちよつかいを出した結果、何人もの魔法使いたちが、過去や未来の自分自身を殺してしまった、という悲しい出来事も——ハーマイオニーがかつての使用者たちと同じ轍を踏まないように——しっかりと話して聴かせた。

今、私が考えている事をマクゴナガル先生が知ったら、先生はどんなに失望し、悲しむかしら。ハーマイオニーは、きらきらと輝く砂時計を見つめながら思った。——そう、『イリスの過去を変えたい』だなんて。

だけど、もしイリスが去年の夏休み、マルフォイ家からの手紙を受け取らず、最初からロンの家に行っていたとしたら？ そうすれば、イリスはマルフォイの父親の干渉を受けない。自分が過去に立ち戻り、何とかしてイリスの実家へ行って、彼女に忠告するのだ。『今からすぐに荷物をまとめて、ロンの家に行きましょう』と。

幸い、過去の私はフランスに行っているから、自分と鉢合わせする危険性はない。イオおばさんに、ウィーズリー家と電話で連絡を取ってもらおうよう頼むのだ。イリスとロンたちが「漏れ鍋」で落ち合うようにして、そしてその様子を見届けたら、私は姿を消す。未来の私が時間を巻き戻した、その時が来るまで——。

なんて馬鹿らしい考えなんだろう！ハーマイオニーの理性が、大きな溜め息を吐いた。穴だらけにも程がある。本当に“その時”に行けるかどうかも分からないし、もし上手く事が運んだとしても、“過

去の私”がイリスたちから話を聞けば、きつと不審に思うわ。私だけじゃない、他の人たちだって。何より、一年間もどうやって人目を避けて過ごすつもり？ 全くもってマトモな魔法の考える事じゃないわ、狂ってる。

理性と情熱の狭間で迷ったハーマイオニーは、隣で眠るイリスを見た。イリスが持つ巻物から湧き出す光が、彼女の頬に残る涙の筋をうっすらと照らしている。

——もうこれ以上、親友が弱り、苦しんでいる姿を見たくない。ええ、狂っているわ。ハーマイオニーの情熱的な心が、理性に答えた。狂っていますとも。彼女はトランクから山のような書物を取り出し、熱心に何かの計算を始めた。

☆

十二月中、雨はずつと降り続いた。その鬱屈した天候に感化されたかのように、イリスを取り巻く環境も、日を重ねるごとにどんどん悪くなっていた。

ロックハートの新作『継承者とこつそり一学期』は、ハーマイオニーのように事前予約をして買い付けたファンや、魔法省の関係者を家族にもつ生徒、その親族らの手紙から、野火のようにホグワーツ中へ広まった。ひとの口に障子を立てることはできない。発売日からまだ間もないのに出版停止処分にされたこと、すでに購入してしまった者に対する魔法省への自主的返却命令が下されたこと、そして執筆者ロックハートが謎の失踪を遂げたこと。これらの事項は、本の信憑性や話題性を飛躍的に高めた。

そしてハーマイオニーが危惧したように、本の購入者は思った以上に多かった。魔法省は自主的返却が遅々として進んでいない現状を把握すると、すぐさま強制的な回収命令を下した。しかしその対策は皮肉なことに、本の知名度をますます高めるだけに終わった。回収命令が下された数日後、いかかわしい魔法で大量に複製された幻の新作が、文字通りこつそりと夜の闇横丁ノクタインに出回るようになったのだ。好奇心をくすぐられた多くの魔法使いや魔女たちが、こぞって本を買いあさり——かくしてロックハート事件は、イギリス中の魔法族の知ると

ころとなつてしまつたのである。日刊予言者新聞を始めとする様々なマスメディアは、連日のようにロックハート事件を取り上げ、みんなイリスと取材をしたがつた。

残念なことに、ホグワーツのほとんどの生徒たちは、ジニーと同じように『継承者とこっそり一学期』の内容を信じた。彼らがそうなつたのには、ある一つの原因があつた。——それは、“イリスの變化”だ。

一年生の時はホグワーツきつての“落ちこぼれ”だつたイリスが、二年生から急激に成績を伸ばしたこと、おまけに三年生の時には大人顔負けの大きな守護霊を出したこと。いくら優等生の教えで急成長を遂げたのだとしても、限度がある。『本当は十分な実力があつたに違いない。みんなの目を避けるために、今まで“落ちこぼれ”だつた振りをしていたのだ』——ロックハートを信じる生徒たちは、イリスをそう結論づけた。中にはジニーと同じように『ロックハートを始末してしまつたのではないか』、『今世間を賑わせているお尋ね者のブラックと、関係があるのではないか』などと邪推する者も多々いた。

生徒たちは廊下でイリスに出会ふと、まるでイリスが牙を剥き出したり、誰彼構わず死の呪いを連射したりするとも思つてゐるかのように、みんな彼女を避けて通つた。イリスがそばを通ると、指差しては「シート」と言つたり、ひそひそ声で何かを囁き合う。イリスはより一層萎縮して大人しくなり、三人の影に隠れて過ごすようになつた。

しかし、スリザリン生だけはイリスに対して、他の寮生とは違ふ反応を示した。彼らはみな、イリスがそばを通ると、敬意を込めた礼を捧げるようになった。あんなにイリスのことを馬鹿にしていたパンジーやミリセントも、今では彼女をからかう素振りすら見せようとならない。

ある日の朝、イリスが自分のテーブルに向かおうとしていると、スリザリンのテーブルから冷たい声が飛んできた。

「やあ、ゴースト」

ドラコだ。彼は気取つた調子でイリスに微笑みかけ、自分の隣の席

をポンポンと手で叩いた。

「どうして僕に教えてくれなかったんだい？」スリザリンの末裔”である君の席はそこじゃない。こここの筈だろう？」

「黙れ、マルフォイ」

どこからか騒ぎを聞きつけたハリーがスニッチ顔負けのスピードでやって来ると、イリスの手をグイと掴んで自分の方へ引き寄せながら、冷たく言い放つ。ドラコは面白くなさそうに鼻を鳴らし、見るからに落ち込んだ様子のイリスを見た。二人の双眸が短い間、交錯する。

——その時、ドラコは初めてじっくりとイリスの瞳を見た。

ぱつと見れば深い青色だが、よく見ると——海の底を通して太陽を見ているように——金色の光がちらついている。まるで貴重な宝石を鑑賞しているようだ、ドラコは思った。彼女を見つめることで生じる謎の副作用——脳髄を蕩かすような頭の痛みや、ブルツと震え立つような不快感さえ、一時的に忘れてしまうほど、彼はこの美しさに魅了されていた。

やがて彼女が悲しげに顔を背けるまで、ドラコはその瞳から目を離す事が出来なかった。

「ねえ、ねえ！ドラコったら！」

惚けたように座り込むドラコを見兼ねて、向かい側に座るパンジーが話しかける。青ざめた顔を恐怖で引き攣らせ、彼女はドラコにこう言った。

「あまりゴーンの機嫌を損ねない方がいいわ」

「・・・なんだ、君もあいつがそうだって信じてるのか？」

我に返ったドラコは冷たく取り澄ました声で答えると、前髪を掻き上げる。パンジーの媚びとおべっかを存分に含んだ視線を心地良さそうに受け止めながら、彼は大袈裟な動作で肩を竦めてみせた。

「あのみつともない泣きつ面を見てみるよ！あんなやつが”スリザリンの継承者”？フン、全くもってあり得ない話さ。ロックハートもどうせ嘘を吐くなら、もっとマシな人間を選べば良かったものを！」

「でも彼の話は、信憑性があるわ」パンジーは辛抱強く言った。



「言っておくけど、ゴーントは本当にスリザリンの直系の子孫よ。ミ  
リセントと図書室で、家系図を調べたんだから。それに彼女のお祖母  
様も・・・(パンジーはそこでブルツと震えた)・・・最初から知って  
たら、あの子をいじめたりなんてしなかったわ！先輩方だけじゃな  
い、パパやママにも『彼女になるべく関わるな』って警告されたのよ。  
もう私たちの中で、今までみたいなのにゴーントをからかっているの  
は、だーれもないの！・・・あなた一人を除いてね」

パンジーは興奮した調子で話し続けていたかと思うと、自分の身を  
案じて不安そうに顔を歪め、最後は怒りをぶつけるかの如く眉根を寄  
せ、頬を少し膨らませながら、目の前に座るドラコをびしっと指差し  
た。まるで玉虫のように目まぐるしく変わる彼女の表情を興味深そ  
うに眺めながら、ドラコは臆することなく自信満々にこう答える。

「なんと言われても、僕の意見は変わらないね。あの本の方が嘘つば  
ちだ。あいつはただの泣き虫さ。・・・まあ、僕だけじゃない、僕の  
父上や母上も同じお考えだけどね」

——ドラコの中に残るイリスとの記憶は、彼女自身の手によって限  
界まで希釈されている。現在の彼にとってイリスは、マグルかぶれの  
『友達以下』にも関わらず、父のお気に入り故に目を掛けねばならな  
い、楽しい学校生活に影を差す目の上のタンコブのような存在に戻っ  
ていた。おまけに最近は、傍にいただけで激しい頭痛や不快感に襲わ  
れる始末。そう、嫌いにならない理由がないのだ。

けれどもドラコは、世の中や信頼するスリザリン生たちの意見に逆  
らってまで、頑なにイリスの無罪を信じた。イリスのことが嫌いだが  
ら、自分より絶対的立場になるのを拒んでいるのでもなく、尊  
敬する両親の言葉を妄信しているのでもない。『イリスがそんなこと  
を出来るわけがない』——ごく単純に、そう思っただけだ。しかしそ  
の思いは城塞のように強固で、他者の好き勝手な意見から、今に至る  
まで彼の心を守り続けていた。

ドラコはうつろな眼差しで、パンジーの肩越しに、グリフィンドー  
ルのテーブルに座るイリスを、チラリと見やった。——たとえ再び激  
痛に苛まれても、あの目をもう一度見たい。あんなに心動かされるほ

ど美しいものを、彼は今まで見た事がなかった。

☆

「おい、どういうことだよ。これ」

その日の夕方、談話室の掲示板に貼り出された『緊急告知』の内容を見て、ロンは絶句した。——それは、蛙子ヨコ交換会が『無期限の活動休止』をする運びとなったという知らせだった。

「せっかくイリスを連れて行ってやろうと思ったのに！」

ロンの魂の叫びを聞きつけたネビルは、彼の傍までやって来ると、イリスが周囲にいない事を何度も確認してから、困り果てた様子でこう言った。

「僕、会長に聞いたんだ。そしたら『イリスが来たら怖いから、しばらく中止する』って。他のみんなも同じ意見だって言ってた」

「もしかして、君もそうなのか？」

ロンが怒りに任せてそう唸ると、ネビルは慌てて首を横にぶんぶん振った。

「ぼ、僕は違う！イリスはとっても優しくって、良い子だよ。僕を何度も助けてくれた。それに、うちのぼあちゃんもとても怒ってた。『前からロックハートは好かなかった』って。『きつとあいつが嘘を吐いてるに違いない』って、手紙に書いてたの」

その言葉を聴いて、ロンの溜飲は下がった。ネビルは不安そうに掲示板を見つめながら、か細い声でこう続ける。

「でも、イリス大丈夫かなあ？最近、ずっと死にそうな顔してるし。いつか倒れるんじゃないかって、ヒヤヒヤしてるんだ」

二人の頭に、イリスの弱り切った様子がポツと思ひ浮かんだ。

ロンは、幼い頃から自負心に欠けていた。才能ある兄たちが五人もいて、妹も唯一の少女として可愛がられる、ウィーブリー家七人兄妹の中で育ったために、己の個性と立場についての自信がなく、劣等感

に苛まれていた。また裕福な家庭でもないため、兄たちのお下がりや自分に合っていない中古品を与えられることが多く、そうではない他の生徒たちに対し、引け目を感じてもいた。

有名人であるハリーや、ホグワーツきつての秀才であるハーマイオニーは、ロンにとってかけがえのない親友であると同時に、自分の暗い気持ちを増幅させる存在でもあった。二人に対して、嫉妬心や劣等感を抱いたことが、今まで何度あっただろう。

しかし、いつもそんな時、イリスの存在はロンの傷ついた自尊心を癒し、慰めてくれた。

動物と話せるという特別な才能はあるけれど、それ以外はこれと違って平凡——いや、それ以下の存在。おまけに気性は穏やかで、敵を作る性格でもない。ロンは自分より下、言わば妹のような存在のイリスと共に過ごすことで、才能の塊のような二人の親友を見ても、劣等感をこじらせずに自尊心を保つ事が出来た。

そんな時、ある日を境に、イリスもハリーたちと同じ“人々から注目を集める存在”になった。けれどもロンは、ハリーたちに対するものと同じ感情を、イリスに対して抱くことはなかった。

ハリーやハーマイオニーは、自分が有名になったことで生じる、明るい部分を受け入れ、また暗い部分をはねつける強さがあつた。しかし、イリスはそうではない。周囲の人々が向ける好奇心や畏怖の視線が、イリスの身体を少しずつ削り、彼女は一回りも二回りも小さくなっていく——ロンにはそんな風に見えた。

イリスがまだ自分自身について何も知らなかった頃、彼女は自由で明るく、キラキラと輝いていた。だが今は、もう見る影もないほど疲れ果てている。

有名になることは、必ずしも人を幸せにするとは限らない。けれども平凡は、間違いなく人を幸せにする。ロンは、そう理解せざるを得なかった。

「ロン、イリスにこれを渡してあげてよ」

ネビルは立ち去る時に、一枚の蛙チョコカードをロンに手渡した。  
——ホグワーツの創始者の一人、ゴドリック・グリフィンドールだ。

イリスが欲しがっているカードの一つで、現にネビルもこれ一枚きりしか持っていない筈だ。ロンは訝しげな目付きで、ネビルを見つめ返す。

「イリスにプレゼントするよ。これで、少しでも元気になれるといいんだけど」

自らの寮の信条として、勇猛果敢な騎士道を挙げる人物だ。不思議なことにも、かつてロンがイリスに成り代わって大量の蛙チョコレートを開封した時も、グリフィンドールのカードは一枚たりとも出てこなかった。立派な髭を蓄えたグリフィンドールが、じつと己の生徒を見上げている。ロンとグリフィンドールの視線が、ほんの短い間、交錯した。

——その時、ロンはなんとなく、このカードをイリスにあげるのは、彼女のためにならない気がした。イリスが自分自身の手で見つける方が、きつと良い。そして、その日は必ず来る。ロンの直感はその告げていた。彼は気まずそうに唇を舐めると、ネビルにこう言った。

「ゴメン、あいつには渡せないよ。その、上手く言えないんだけど、このカードは・・・イリスが自分の力で見つける方が、絶対良い気がするんだ」

「・・・はえ？」

ネビルはポカンとした表情で、ロンを見つめるばかりだ。ロンの手の中で、カードの中のグリフィンドールは満足気に頷いた。

☆

ネビルの予想は外れた。倒れたのは、イリスではなくハーマイオニーの方だった。イリスの様子に目を光らせながら、“逆転時計”を使用して全ての授業を履修し、その予習復習も欠かさず、そして過去に戻るための計画を練り続けていれば、どんなに凄腕の人間でも疲労困憊してしまう。やがてハーマイオニーは、イリスと共に図書室へ向かう途中、強い立ちくらみを起こしたあと、パタリと倒れてしまった。

——意識を取り戻したハーマイオニーが目を開けると、そこは医務室のベッドの上だった。

「目を覚ましましたか、ミス・グレンジャー」

すぐそばで、穏やかな女性の声がした。——マクゴナガル先生だ。何時の間に来たのだろう、ベッドの脇に座って、ハーマイオニーをじつと見つめている。その膝の上に広げられた羊皮紙の束を見て、ハーマイオニーは思わず青ざめ、大きく息を詰めた。ここ数日、自分がほとんど寝ずに書き上げた——「イリスの過去」を変えするための資料が全て、そこにあつたのだ。彼女の反応を受け止め、マクゴナガル先生はわずかに微笑み、こう言った。

「貴方はやはり、非常に優秀な魔女です。一般の生徒以上の日々の学業をこなし、親友を見守りながら、このように壮大で綿密な計画を立てる事ができた。

しかし、この計画を見過ごすことはできません。あなたは魔法界の大きな規則を破る事になるのですから」

「・・・先生、どうして、分かったのですか？」ハーマイオニーは掠れた声で、問いかけた。

「あなたの監視は、私の義務です。“逆転時計”の持つ強大な力は、持ち主を破滅させる危険性がある。まだ未成熟なあなたがそれに飲み込まれぬよう、ずっと影ながら見守っていたのです」

ハーマイオニーは震える唇を噛み締め、俯いて考えた。——きつと先生は、この計画のことを、随分と前から分かっていたのでだろう。約束を破ったかどで、“逆転時計”を回収されてしまったらお仕舞いだ。イリスを救えなくなってしまう。彼女はただ我武者羅に、口を開いた。

「先生、どうかお願いします。イリスを守るためなんです。私は、彼女の人生が悪い方向へ変わった“過去の出来事”を知っています。その時点まで遡って、過去の彼女に忠告できたなら・・・現在の彼女の人生は、きつと良い方向へ変わるはずですよ」

マクゴナガル先生は、じつとハーマイオニーを見つめた。四角い縁のメガネの奥にある鋭い目が、キラツと光ったような気がした。

「・・・ミス・グレンジャー」先生は、静かに話し始めた。

「大切な人を思い、その人のために自分の全てを投げ打つ行為は、とても気高く尊いものです。しかし過去に干渉する事は、決して容認でき

ません。それはこの世界の安全を保つためでもあり、あなたのためでもあり……そして何より、ミス・ゴント自身のためでもあります。はつきりと言っておきましょう。『過去を変えることは不可能』です。これは“逆転時計”を保管している神秘部が、時間というものについて途方もなく長い時間と労力を割いて、出した結論です。

あなたが“逆転時計”を使って過去に立ち戻り、その出来事を変える事が出来たとしましょう。しかし近い未来にそれと全く同じ、又は類似する出来事が起き、ミス・ゴントは同じ苦しみを味わう事になる。あなたが何度、過去を繰り返しても、その出来事を無くす事は出来ないのです。何よりも、あなた自身を危険に晒すそのような行為は、ミス・ゴントが望む筈はありません」

「そんな。では、私は一体どうしたら……」

ハーマイオニーは絶望に打ちひしがれた声で、呟いた。マクゴナガル先生は、迷いのないはつきりとした声で、こう答える。

『今を変える』、つまりミス・ゴント自身が強くなる手助けをする事です。彼女の未来を、より良い方向へ導くために」

「先生、イリスはとても繊細で弱い子なんです。あんな辛い苦しい現実立ち向かうことなんて、とても出来そうにありません！」

「ええ、彼女一人では出来ません。しかし彼女は幸いな事に、一人ではない」

ハーマイオニーはまるであたたかな太陽の光を浴びたように、涙に濡れた目を細め、尊敬する恩師の顔を見た。彼女は愛する生徒の不安を丸ごと受け止めるかのように、しっかりと頷いてみせた。

「人は一人で成長し、強くなるものではありません。苦難に立たされ、正しい事と易き事を選択が迫られた時、傍にいて大切な人々の温もりや、人々と過ごした思い出が、その人を強くするのです」

マクゴナガル先生は、羊皮紙の束をハーマイオニーの手に戻しながら、静かに言った。

「この書類は、見なかった事にしておきます。よろしいですね。ミス・グレンジャー、あなたの友人に必要なのは、過去を変える事ではない。今の彼女に寄り添い、支える事です」

先生が去ったあと、ハーマイオニーは羊皮紙を抱えたまま、暫らくの間、虚空をじつと見つめていた。――イリスの過去を変える事こそが、最善の道なのだと思ひ込んでいた。本当に先生の仰る通り、イリスが強くなる事なんて出来るのだろうか。

ふと物思いに沈むハーマイオニーの鼻腔を、良い香りが掠めた。――百合の芳香だ。そうだ、思い出した。彼女の脳裏に、その香りと共にある光景が浮かび上がった。

イリスが自分を背負って、一生懸命医務室まで走ってくれた記憶だ。どうして今まで忘れていたのだろう。自分よりも一回りほど小さなイリスが、何度も自分を励ます言葉を掛けながら、杖も使わず、汗びっしょりになって助けてくれたことを。ハーマイオニーはベッドを抜け出し、走り出した。イリスのもとへ、向かわないではいられなかった。

☆

イリスはハーマイオニーを医務室へ届けたあと、談話室への帰路を辿っていた。

イリスの精神は、日を重ねるごとに弱まっていく一方だった。平穩に暮らしてきたイリスにとって、今まで仲良くしていた友人たちに怯えられ、ホグワーツ中の人々から警戒されることは、とても耐えられない代物ではない。おまけに“秘密の部屋”の出来事は、リドルに操られたとは言え、イリス自身が行ったことでもある。彼女は連日、強い自責の念に駆られ続けた。

その様子を見兼ねたハリーたちは、今まで以上に、誰かしらは必ずイリスの傍にいるようになった。イリスはそのことがとても心強い反面、申し訳なくてたまらなかった。――ハリーは自分と一緒にいること自体が気に入らない“ロックハート派”の生徒たちと、頻繁に口喧嘩をするようになったし、ロンは魂を捧げるほどの情熱を注ぐ“蛙チョコ交換会”が、自分のせいで当分中止になってしまった。そして、ハーマイオニーは過労で倒れてしまった。

みんな、自分のせいだ。やはり自分はファッジ大臣の言う通り、暫くホグワーツを離れた方が良いのかもしれない。イリスが塞ぎ込み

ながら角を曲がろうとした時、不意に前方から声がした。  
「ついに借りれたんだ、ほら、見ろよ！」男の子の声だ。

角の手前辺りで、数人の生徒たちがざわざわと騒ぎ、次々に息を飲む声がした。なんだか不吉な予感がして、イリスは思わず立ち止まった。

「本当だ！」違う男の子の声が叫びた。

「ここだ・・・書いてある。メーティス・ゴント、”死喰い人の始祖”」

イリスの不安は的中した。——メーティス・ゴント。自分の祖母の名だ。彼女の心臓がドクン、ドクンと大きく波打ち始める。男の子は至近距離に当人がいることなど知りもせず、興奮した口調で文面を読み上げ始めた。

「”名前を言っってはいけないあの人の、最も忠実な側近。”あの人の血縁関係があるとされている。”死喰い人”の基盤を作り、彼らを集め、導いた。多数の魔法族やマグルを誘拐、監禁、傷害、殺害し、またその示唆をした。1961年、七名の闇祓いと交戦の末、うち四名を道連れにし、夫と共にゴント宅にて殺害された。享年35歳”この魔女がゴントのおばあさんだ。やっぱり、あいつは悪い魔女だよ！”」

「そうかしら？ゴントは、そんな風に見えないわ。それに私のパパも、彼女のお父さんはすごく良い魔法使いだったって言ったもの。それに、もし彼女がそうなんだとしたら、何よりダンブルドアが放っておかないと思うけど」女の子の声だ。

「ハンナ。じゃあ、ロックハートが嘘を吐いているっていうのかい？彼だって、有名な魔法戦士だぜ？」

声たちは興奮冷めやらない様子で、段々こちらへ近づいて来る。——一刻も早く、この場を離れなければ。そう思っているのに、イリスは凍り付いたようにその場を動くことが出来ない。

「ロックハートの話は、実際に起きたことにピツタリ当てはまる。おまけに今、彼は行方不明だって言うじゃないか。

きつと真実をバラされて腹を立てたゴントが、彼を殺しちまった



に違いないよ。お尋ね者のブラックを使ってさ」

「馬鹿言わないで、アーニー！彼女は、守護霊を出してポッターを守つたのよ」

「そうさ、特大の守護霊を出してね。・・・きつと“落ちこぼれ”の演技をしていたんだ。あいつとしては、ポツと出のディメンターに宿敵のポッターを殺されるのは面白くない。だから渋々守つたんだよ」

そこで、ついに声たちが廊下の角を曲がり切り、硬直しているイリスと出会ってしまった。——ハツフルパフ寮の同級生たちだ。かつてイリスが石化していくのを止められなかった、ジャステインの姿もある。みんなはイリスを見るや否や、いっせいにカチンと凍り付いた。とりわけアーニーは、この世の終わりが来たような顔をした。

「ああ・・・」

トラウマを刺激されたジャステインは、恐怖の余り、腰が抜けてドシンと尻餅をついた。——この場から離れるんだ、早く！イリスの理性が何度も叫ぶが、体が言うことを聞いてくれない。それでも何とか一歩足を踏み出すと、今度はアーニーが杖を構え、ジャステインを守るようにして立ちほだかった。

「やめろー！こ、こいつに手を出すな！」

「ちがうよ。私は・・・」

アーニーの恐れと警戒心に満ちた眼差しとまともにぶつかったイリスの心は、嵐のようにぐちゃぐちゃに吹き荒れた。それに呼応するように、彼女の体から膨大な魔法力が溢れ出て、大気と同化していく。凄まじい爆裂音がして、イリスたちの近くにあって廊下の窓ガラスが、粉々に割れた。松明の炎が激しく燃え盛り、バチバチと火花を照らす。か細い悲鳴を上げ、ハンナとスーザンが、お互いをひしと抱き締め合った。

「闇の魔法だあ！」引き攣った声で、ジャステインが叫んだ。

「こ、殺される!!」

「——何をしているっ!!」

突然、しわがれた大声が轟いた。廊下の端の方から、足を引き摺り

ながら、ホグワーツの管理人、アーガス・フィルチがやってきた。頭を分厚いタータンの襟巻でグルグル巻きにし、鼻は真っ赤に染まつている。相棒猫、ミセス・ノリスが弾丸のようにその足元から飛び出して、イリスを守るように立ち、アーニーたちにシャーッと威嚇をした。フィルチは鼻息も荒く周囲を見渡し、窓ガラスが粉々に砕け散っているのを見ると、怒りの余り頬をピクピク痙攣させた。飛び出した目玉が、生徒たちの中で唯一杖を構えていたアーニーを憎々しげに見据える。

「なんだこれはっ！お前だな、マクラミン！」

「ち、違います！僕じゃありません」

濡れ衣を着せられそうになったアーニーが、必死に弁明するが、すぐさまフィルチのヒステリック極まりない叫び声に掻き消された。

「じゃあお前がご大層に構えていなさるその杖はなんだ、え?!」

フィルチはイリスたちの中で、唯一杖を構えているアーニーが犯人だと断定し、“ 医務室のおまる磨き ” の罰則を言い渡した。パニツクから回復したハツフルパフ生たちが口々に友人の無実を主張するが、フィルチは意にも介さず、茫然と立ち竦んだままのイリスの手をグイと掴んでその場から立ち去った。

☆

フィルチはミセス・ノリスを伴い、事務室までイリスを連れて来た。薄汚い窓のない部屋で、低い天井からぶら下がった石油ランプが一つ、部屋を照らしている。恐らくフィルチたちが夕餉に食べたのだろう、魚のフライの匂いが微かに辺りを漂っていた。フィルチは、たった一つしかない古ぼけた椅子をイリスに譲り、足を引き摺りながらお茶の準備を始めた。ミセス・ノリスがイリスの膝に乗り、その冷たい頬をざらざらとした舌で舐めた。

《怖かったですでしょう？もう大丈夫よ。少しばかり、ここで休んでいきなさいな》

筋金入りの子供嫌いな一人と一匹から、前代未聞の“おもてなし”を受けている。他のホグワーツ生がこの光景を見たら、みんな卒倒するに違いない。けれども今のイリスには、もうそれを驚いたり感謝し

たりする余裕すらなかった。それでも彼女は震える唇を開き、なんとか言葉を捻り出した。

「窓ガラスが割れたのは、私のせいなの。アーニーじゃない。

私・・・最近、魔法力を制御できなくなってしまっんです。心がぐしゃぐしゃになると、もう何も分からなくなってしまっす」

《力が暴走してしまうのね》ミセス・ノリスが労しげに助け舟を出した。

「フン、そんなに力が有り余ってるのか。贅沢なこって！わたしにも分けてほしいもんだ！」

赤錆びたやかんでお湯を沸かしながら、フィルチが痛烈に言い放つ。イリスはたまらなくなつて、両手で顔を覆った。今まで我慢していたことが、熱い涙と一緒にどつと溢れてくるようだった。

「あげます、フィルチさんに全て。魔法力も、全て、何もかも！」

生まれたばかりの赤ん坊のように泣きじゃくるイリスを慰めながら、ミセス・ノリスは凄まじい目付きでフィルチを睨んだ。その怒りを真正面から受け止めた彼は、気まずそうに頭を掻いた。

☆

その夜、ハリーはクイディッチの練習を終え、ウッドの魂のアドバイスをたっぷり一時間強聴き終わってグリフィンボールの談話室へ戻ってきた。寒くてまだ体中の彼方此方がこわばっていたが、ハリーは練習の成果に満足していたし、何より早くイリスに会いたかった。しかし、彼が談話室に繋がる穴をくぐるや否や、ロンとハーマイオニーが青ざめた表情で駆け寄ってきた。

「ねえ、イリスを見なかった？談話室へ戻ってたと思っただけだ」

——イリスが行方不明だっけ？ハリーの心臓が嫌な音を立てて軋んだ。“ロックハート事件”以降、三人のうち、少なくとも誰か一人はイリスと一緒にいるように協力し合っていたのに。ハリーの戸惑うような視線を受け止めたハーマイオニーが強い自責の念に駆られ、涙を浮かべて自分が倒れてしまったことを話そうとしたその時、シエーマスがひどく狼狽した様子で、穴から転げ落ちるようになつて談

話室に飛び込んできた。

「た、大変だ！イリスが、ハツフルパフ生を襲った！闇の魔法を使いかけたのを、ファイルチに止められて、事務室へ連行されたって！」

「何だって?!」

いつせいに青ざめ、ざわめく生徒達とは反対に、ハリーは激昂してシエーマスに掴みかかった。シエーマスは突然の友人の凶行に驚き、目を白黒させながらも踏ん張った。

「本当さ、ハツフルパフのアーニーから聞いたんだ！もうちよつとで、切り裂かれるところだったって」

「あの子はそんな子じゃない！どうしてみんな、それが分からないの？」ハーマイオニーが涙ながらに反論する。

「それも演技なのかもしれないわ」

ラベンダーが恐怖に引き攣った声で、そう言った。

「二年前、あなたをトロロールから助け出したのだって、本当はあの子がトロロールを操っていたのかも。トレローニー先生が言っていたもの。」

『あの子は敵の手に囚われている』って」

「よくもそんなことを！」

ハーマイオニーは金切声で叫び、ラベンダーに掴みかかろうとしたが、寸でのところでロンに止められた。今やハリーは爆発するような怒りの感情を抑えるのに、わなわなと震えていた。

「君たちは三年一緒に過ごした友達よりも、ロックハートのデタラメ話の方を信じるのか？あいつが使えない大嘘吐きだってことは、去年で知ってるはずだろ？」

しかしハリーの言葉をもってしても、みんなの気持ちを良い方向へ変える事は出来ないようだった。

「無駄だよ、ハリー」ロンがハーマイオニーを慰めながら、静かに言った。

「イリスのところへ行かなくちゃ」ハーマイオニーが、あとを続ける。

ハリーたちは先を争うようにして談話室を出ると、ファイルチの事務室へ急いだ。

☆

イリスは、もう耐えられなかった。

——非情な現実には立ち向かい、自分の信じる道を歩み抜いた父やシリウスのような強さも、ルーピン先生や魔法省で見かけた“人狼”の魔法使いのように、自分の運命を受け入れる事の出来る力もない。ホグワーツの子供たちが向けてくる偏見や恐怖の目にさらされる日々を、イリスはもうこれ以上、耐え忍ぶことが出来なかった。

『ホグワーツに来たのが、間違いだった』——やがてイリスは、そう思うようになった。自分がホグワーツに来なければ、“秘密の部屋”事件も起きずに済んだ。みんな平和に暮らせたんだ。今すぐにでも荷物をまとめて、日本に帰った方がいい。イリスは鼻をすすりながら、ジャステインの恐怖に歪んだ顔を思い浮かべた。そうすれば、みんな安心して楽しい学生生活を送ることが出来る。ハリーたちにこれ以上、負担や迷惑をかけずに済むんだ。

それが“正しい事”だ、そうだよ？イリスはかつてアーサーに教えてもらった事を思い出し、自分の胸に手を当てて、心の声に耳を澄ませた。

『印や傷跡、血筋なんかで、何もかも決められてたまるもんか。自分の事はいつだって、自分が決めるんだ』

不意にハリーの力強い声が、耳元でこだました。イリスは心の世界で、“秘密の部屋”の祭壇の上に座り込んでいる。

自分が“秘密の部屋”に連れ去られた時、ハリーたちは命懸けで助けに来てくれた。ハーマイオニーは石になっても、イリスを守ることを選んだ。イリスはそのことが、どんなに嬉しかったか分からない。もしみんなのように、自分も強くなれたとしたら——。

『イリス、君はどうしたい？君の意見が聞きたい。ヴォルデモートの部下の末裔としてじゃない。イリス。君自身が出す答えだ』

ハリーがそう尋ねた時、自分はなんて答えた？

——そうだ。イリスはやつと思いついた。

『みんなといっしょに、いたい』って——そう言ったんだ。イリスの目から、温かい涙が零れた。自分の本当にしたい事、その答えは、ずっと前に出ていたのだ。

大切な人たちと過ごした記憶は、知らないうちにイリスの心を強く成長させていた。ハリーたちと離れたくない。だから、この現状を変えなければいけないんだ。

それはイリスが生まれて初めて発した、“負けん気”だった。心の中にどくどくと流れ込んでくる熱い感情は、イリスの頭をかえって冷静にさせた。

『ああ、イリス——私は裏切られた、見捨てられた！——私は君を、ずっと見守っていたのに——あいつに殺される、私を見ている——ああ、なんて恐ろしい！怖い！』

ふと、今年の夏休みにかかってきた“不思議な電話の声”が、頭の中に響いた。——そうだ。全ての始まりは、あの電話だった。

そしてアイスクリームパーラーで出会った、ロンのネズミのスキヤバーズ。彼は、何かを必死にイリスに訴えかけていた。しかしイリスには、何を言っているのかさっぱり理解できない。

『彼らは今、やつから自らを守るものを必死に求めている。——イオ。イリスが気を付けるべきなのは、ブラックだけじゃない。今度は、不審な電話だけでは済まないかもしれないんだ』

アーサーは“漏れ鍋”で、あの電話の主は、イリスに救いを求める“死喰い人”の残党だと言っていた。もしその事が真実だとしたら、何故その人は、出雲家の電話番号を知っていたんだ？そしてマグルを差別視している筈の“死喰い人”が、どうしてマグルの機械の扱い方を知っていたんだ？

『あいつはお前のローブに潜り込もうとしていた』

ホグワーツ特急でスキヤバーズの凶行を阻止したクルックシャンクスは、警戒心も露わにそう唸った。初めて出会った瞬間から、クルックシャンクスはスキヤバーズを“胡散臭い奴だ”と敵視していた。スキヤバーズの無実を証明したいのに、イリスは彼と会話することができない。おまけに、ここ最近のスキヤバーズは、強引な手段を

用いてまで、イリスとずっと接触をしたがっていた。——一体どうして？ギラギラと燃え滾る黒いビーズのような目を、イリスはいまだに忘れることが出来ない。

『私は何かをせねばならなかった。ピーターが生きていると知っているのは、この世界で私一人だけだ』

シリウスは、静かにそう呟いた。彼は獄中で、ウィーズリー家の集合写真から、ロンの肩の上にちよこんと乗ったスキヤバーズを見つけ出した。親友たちを裏切って死に追いやり、自分に濡れ衣を着せたピーター・ペティグリュウ。ピーターはイリスとシリウスが協力関係を結んだと気づくと、すぐさま自らの死を偽装して行方を晦ませた。

——その時、イリスの中で、全ての謎がつながった。頭の天辺から足の先までを、一筋の電流が駆け抜ける。

あの電話の主は、ピーターだったのでは？それならば、出雲家の電話番号を知っていたのも辻褄が合う。何せ、魔法界でそれを知っているのは、最初はアーサーだけだったのだ。きっとロンがイリスに電話するためにアーサーから聞いたのを、覚えていたに違いない。

ピーターは日刊予言者新聞を見て、シリウスが脱獄したのを知り、慌てたのだろう。シリウスが命を賭けて追い詰める対象は、親友の殺害を示唆し彼にその罪を着せた、自分自身だけだ。しかし、今更人間の姿に戻る事など出来ない。だから、イリスに助けを求めた。しかし一向にそれが上手くいかない事に業を煮やしたピーターは、やがて強制的にイリスと接触を図るようになった。

ロックハートの本の内容は、イリスやハリーたちしか知らないはずの“秘密の部屋”の様子が克明に描かれていた。まるで、実際に見聞きしたかのように。だけど、周囲には誰もいなかった。——本当に誰もいなかったのだろうか？例えば、もつと小さい存在なら？そう、ネズミは小さい。スキヤバーズなら、ロンのポケットに紛れていたたり、物陰に潜んでいたって、誰も気付かないし何とも思わないに違いない。

——そう、ピーター・ペティグリュウが、ルシウス・マルフォイにイリスの情報を売っていたのだ。

イリスは自分の心を落ち着けるために、何度か深呼吸を繰り返した。俄かには信じがたいけれど、そう考えれば全ての辻褃が合う。ピーターが繰り返していた言葉の意味も、理解できる。彼は狂っていたのではない。本当にイリスに助けを求めていたのだ。『私は裏切られた、見捨てられた』——あの時、ピーターはそう言っていた。きつとルシウスは、協力関係にあるピーターをシリウスから守らなかつたのだ。

おもむろに事務室のドアを激しく叩く音がした。ファイルチが鬼のような形相で、小窓から外の様子を確認したあと、渋々と言わんばかりの表情でドアの鍵を外した。ハリーとロン、ハーマイオニーが、先を争うようにして、イリスの下へ駆け寄ってくる。

イリスはこの事実を、一刻も早く親友たちに知らせなければならぬと思った。けれどそれにはまず、シリウスの事を話さなければならぬ。イリスは意を決して口を開いた。



### Act 13. 救済の手

イリスは、みんなにシリウスとの出来事を話して聞かせた。ハロウィーンの夜、クルックシャンクスの導きでシリウスに出会った事、それから彼に聞いた話の全てを――。ハリーたちの顔色がみるみるうちに真っ青になり、強い恐怖と警戒心を帯びていくその一方で、フィルチとミセス・ノリスは、イリスが話をしている間、彼女の瞳をじつと眺めているだけだった。彼らはイリスの目の色だけで、話が真実かどうかを判断することのできる、動物特有の特異な感覚を持ち得ていた。二人は話が終わった後、真剣な表情でお互いの顔を見合つて、確信を得たとばかりに一つ頷いた。

「君・・・ブ、ブラックとグルだったのかよ！」ロンが思わず後ずさりながら、素っ頓狂な声で叫んだ。

「イリス、貴方は正気じゃないわ！ブラックに操られているの！」錯乱の呪文”を掛けられているのよ！」

ハーマイオニーは両手で口を覆い、恐怖の余り掠れた声で、苦しうに言った。ハリーは青ざめた顔つきのまま、黙りこくつている。彼にとつて、この話はさぞかし衝撃的な事実だったに違いない。

――やはり、想像した通りだ。イリスは眉根を寄せ、唇を噛み締めた。しかしイリスとシリウスの事件の裏側が思った以上にずっと複雑で危険だと分かった今、一刻も早い解決策が必要だ。いつも自分を信じてくれるみんなを信じて、シリウスの秘密を話したのだ。ここで自分が踏ん張らなければ、彼の安全が破られてしまう。イリスは静かに首を横に振って、口を開いた。

「みんな、どうして私の話を信じてくれないの？実際に会ったり話したりしたこともない人を、どうして“悪い魔法使い”だって決めつけるの？」

「何、馬鹿みたいなこと言ってるんだよ！目を覚ませ！」ロンが激昂して怒鳴った。

「ブラックに泣き落としでもされたのか？新聞にも書いてあったじゃないか！魔法界じゅうが知ってるよ、『ブラックは大量殺人鬼だ』って

！」

「新聞に書いてあることは、絶対に真実なの？ 周りの人たちの言うことが、間違いじゃないって、どうして言い切れるの？」

ようやくイリスが何を言いたいのか、理解したハーマイオニーは、さつと口を噤んだ。ハリーは興奮した様子のロンを諷めようとしながら、イリスに無言で続きを促した。

「私もシリウスと出会うまで、みんなと同じ考えだった。周りの人たちが言うこと、本や新聞に書いてあることは、全部正しいんだって思ってた。でも、間違ってることもある。・・・私の本みたいに」

部屋じゅうに充満したパニックの感情が、すーっと音を立てて鎮まっっていくようだった。ハリーたちの頭の中に、イリスの本の内容やそれを鵜呑みにした友人たちの顔が、次々と思い浮かんだ。敵意を剥き出しにしたジニー、怯えるラベンダーやパーバティたち、廊下でイリスと擦れ違う度に、たつぷりとした畏怖の視線を注ぐホグワーツの生徒たち――。

ハリーたちがどんなに口酸っぱく説教しても、みんなの考えは変わらなかった。彼らは三年間、現実世界で苦楽を共にしたイリスよりも、紙に書かれた活字の方を信じたのだ。ロックハートのみならず、素晴らしい肩書や数々の称号を持つ人間の言葉は――その内容が、本当に真実なのかどうかは別として――受け取る者に、確かな重みを生じさせる。

ハリーたちは戸惑う顔を見合わせた。イリスは何とも驚くべきことに、シリウスも無実だと訴えたいのだ。世間を騒がせた、おぞましい罪の数々は全くの濡れ衣で、本当は善良な魔法使いなのだ。真犯人は“動物もどき”のスキヤバーズもといピーター・ペティグリューで、おまけに彼はルシウス・マルフォイにイリスの情報を流していたのだと。

三人がそんなイリスの話を『馬鹿馬鹿しい！』と一蹴できないのは、ある一つの理由があった。それは、“イリスが放つ雰囲気の変化”だ。――きつとフィルチにいじめられ、くしゃくしゃになって泣いているだろう姿を想像し、矢も楯もたまらず駆けつけた三人にとっ

て、今の彼女の姿は本当に驚くべきものだった。自分の心に眠る“本当の望み”に気づく事で、揺るぎない精神的な強さを手に入れたイリスは、体に溢れる魔法力を無意識のうちに支配し、名家の娘に相応しい気品と威厳を備えた一人前の魔女へと変貌していた。

彼女が放った言葉には確かな重みがあり、その真摯な瞳には言い知れぬ凄味があった。それらを真正面から受け止めたハリーたちは、イリスの言葉を嘘だと思い切る事など出来なかった。『友の言葉を信じたい』という気持ちと、『ブラックに騙されているのでは？』と案じる気持ちとが、三人それぞれの心の中で終わりのないシーソーゲームを繰り返している。

「貴方の言いたい事は分かるわ。とつてもね。でも、それとこれとは・・・」ハーマイオニーは青ざめた唇を舐め、言い淀んだ。

「ううん、一緒だよ。私も、シリウスも」

イリスは首を横に振り、毅然とした態度で応えた。そう、同じだ。シリウスはピーターから、イリスはロックハートから、濡れ衣を着せられて、悪者に仕立て上げられた。——イリスはローブのポケットに手をつ込み、マホウトコロ学校の巻物をギュウツと握り締めた。もう私は逃げない。シリウスと一緒に戦うんだ。自分たちのローブに擦り付けられた汚れを、絶対に拭い去ってみせる。

「お願い、シリウスを信じて。もし本当に彼が悪い魔法使いで、ハリーを狙ってるなら、とつくの昔に私に魔法を掛けて、ハリーを襲わせていたはずだよ」

「そいつは嘘を吐いてない」

不意にしわがれた声がして、イリスたちは一斉にその方向を見た。——フィルチだ。ずずつと鼻をすすりながら、彼は不機嫌そうにこう続けた。

「目を見りゃあ、分かる」

《私も彼と同意見だわ》ミセス・ノリスは上機嫌な様子で、ゴロゴロと喉を鳴らした。

イリスは淹れ立ての紅茶を飲んだ時のように、体がほかほかと温まってくるのを感じた。かつて交わした盃は、二人と一匹の友情を確

かなものにしてきていた。

☆

ハリーは長い間、言葉もなく、イリスをじっと見つめることしか出来なかった。

俄かには信じがたい事実だ。シリウス・ブラックが、本当は自分の両親の親友で、そして自分達を守るために囹となつて命懸けで戦ってくれていた。しかし親友と思ひ全てを託したピーターに裏切られ、彼自身とマグル殺しの濡れ衣を着せられ、アズカバンの囚人となつた。おまけに十二年振りの脱獄の理由は、私利私欲などではなく、ピーターの手からハリーを守るためだ。現在、彼は密かにホグワーツ内に潜伏し、ピーターの行方を捜索しているという。

ハリーの脳裏に、自分に冷たく接するダーズリー家の人々の様子が思い浮かんだ。新聞や指名手配書に掲載された、ブラックの骸骨のような顔が、それに重なる。——ハリーの心臓に、今まで感じた事の無い不思議な感情が流れ込んでくる。

冷静になれ、とハリーの心の声が叫んだ。そんな荒唐無稽な話、ありっこない。イリスは筋金入りのお人好しだし、今までに何度も悪い魔法使いに魅入られていた。今回の件だって、イリスがブラックに操られていると考える方が、よほどスムーズに理解できるというものだ。

だけどそれなら、どうしてイリスの言う通り、今まで僕を殺しに来なかったんだ？——もう一つの心が、彼に静かに囁いた。いくらでもチャンスはあつた筈だ。イリスを通じて、誰が聞いたって嘘だと思ふような話をするメリットなんて、どこにある？僕らがそれを信じ込んで『ブラックは無実だ』と主張したって、周りの大人たちに言い包められて、再びアズカバンへ連れ戻されてしまうのが関の山なのに。

戸惑うハリーは何かに縋るように、イリスの双眸を見つめた。宝石のように神秘的に煌めく青い目が二つ、ハリーを見つめ返す。曇りのない、ひたむきな瞳だ。イリスの瞳の輝きは、最初に出会った頃から何も変わっていない。

不意にハリーは喉が詰まり、声が出なくなつた。——本当なのか？

心から僕を思い、命を賭けて守ろうとしてくれる人がいるなんて。

「僕、ブラックに会ってみたい」

気が付けば、ハリーはそう呟いていた。

「おいおい、ハリー！正気かよー！」ロンが目を剥いて叫んだ。

「僕はブラックを信じてるわけじゃない。……イリスを信じてるんだ」  
パニックになるロンに言い返し、ハリーは静かにイリスを見つめた。その言葉で、イリスの心はどれほど救われただろう。二人は微笑かに微笑み、視線を交し合った。

「会えば、はつきりするはずだ。本当にブラックが悪者なら、会った瞬間に僕を殺すはずだもの。」

それにピーターが真犯人なら、早く手を打たないと、秘密をバラしたイリスの身がますます危なくなる。今もどこかで僕らの話を盗み聞いているかもしれないんだ」

ハーマイオニーは何か言い返そうと口をパクパクさせていたが、やがてこの世のすべてを諦めたかのように、盛大なため息を零し、腕組みをしながらこう言い放った。

「分かったわ。でも貴方達だけでは行かせない、私も着いていく」

「僕も行くよ。乗りかかった泥船さ」ロンもやけっぱちになって言った。

「でもさ、どうやってブラックに会うんだい？外はデイメンターだらけだ。話を聞きに行こうにも、“禁じられた森”なんて行けそうにな  
いよ」

みんなは思わず考え込んだ。確かにその通りだ。ハロウィーンの夜は、たまたまデイメンターの注意が浮かれた子供たちに向いていたので無事だったが、もうすぐクリスマス休暇でホグワーツから人がごっそりいなくなる事を考えると、獲物に飢えた彼らと出くわす危険性はますます増える。ふとハーマイオニーが思いついたように、伏せていた瞳を上げた。

「……いいえ、方法はあるわ。もうすぐ学期末最後のホグズミード村観光があるじゃない」

「君、頭大丈夫？ブラックと白昼堂々仲良く観光しようってのかい？」

すぐさま元の調子を取り戻したロンが肩を竦めて尋ねるが、ハーマイオニーはピシヤリと言り返した。

「その言葉、そっくりそのままお返しするわ。誰もブラックと観光しようなんて言っていないでしょう。ホグズミード村なら、夕方までデイメンターの干渉を受けないの。クルックシャンクスが伝達係になって、どこか安全な場所で落ち合うっていうのはどうかしら？」

「そりゃあ名案だね。だけど、一つ大きな穴がある。肝心のハリーが行けないよ！」

みんなは、再び考え込んだ。透明マントや目くらまし呪文も、デイメンターには通用しない。そんな中、『ホグワーツ内にいくつか存在する抜け道にもデイメンターを置くように校長へ進言したので、気を付けるように』とフィルチが苦々しげに情報提供してくれたので、ハリーたちはギョツとして、性悪だったはずの管理人を見つめた。

「どうやらフィルチたちは、退屈な日常を吹っ飛ばす“シリウス&イリス事件”を目の当たりにして、解決に向けて俄然乗り気になってくれたようだ。ホグワーツを隅々まで知る一人と一匹が仲間になってくれた事は非常に頼もしく力強いが、彼らの力を持ってしても、現時点でデイメンターに見つからずにホグワーツを出る事はおよそ不可能に近いらしい。」

「私が抜け道を通って、ハリーと一緒に行く。デイメンターが来たら、守護霊を出して追い払うよ」

「それは危険だよ。デイメンターが仲間を大勢呼ぶかもしれないし、もし追い払えたとしてもその後、きつと大騒ぎになって、ホグズミード観光そのものが中止になるかもしれない」

イリスの提案は、ハリーの冷静な判断であえなく却下された。その後、四人と一匹はかび臭い紅茶と湿気たクッキーを嗜みながら、なんとか解決策を模索したが、彼らの心の距離がぐつと縮まった以外の進展はなかった。

☆

学期が終わる二週間前、ずっと厚く垂れ込めていた雨雲が晴れ、眩しい乳白色になったかと思うと、ある朝、泥だらけの校庭がフワフワ

の雪に覆われていた。城の中はクリスマス・ムードに満ち溢れた。フリットウィック先生がいくつものクリスマスツリーに、キラキラ輝く本物の妖精を飾り付けている。みんなはブラックやイリスの話をする時ばかりはすっかりと忘れて、休み中の計画を楽しげに語り合っている。イリスたちは勿論、休暇中はホグワーツに残るつもりだった。

いよいよホグズミード行きが間近に迫った金曜日の朝、見回りの振りをしてやって来たミス・ノリスは、四人がいまだに名案を思いついていない現状を把握すると、『フィルチがハリーの玄関ホール通過をうっかり見逃す』という、強引すぎる最終的手段を持ちかけた。

次の日の早朝、ハリーは談話室へ降りて来たたん、誰かに後ろからハグされた。

「ハリー、シーツ！」聞いたことのある声だ。

「君にプレゼントしたいものがあるのさ！きつと気に入るぜ」この声もそうだ。

ハリーが驚いて振り向くと、ホグワーツといっても過言ではない“悪戯問題児”コンビ、フレッドとジョージがニヤニヤと笑って自分を見つめている。フレッドは大袈裟な動作で周囲に人がいないかどうかを確認してから、マントの中から恭しく何かを引っ張り出して、机の上に広げて見せた。四角くて大きな、相当くたびれた羊皮紙だ。ハリーは羊皮紙をじっと見つめた。

「これ、いったい何だい？」

「これはだね、ハリー。僕らの成功の秘訣さ」ジョージが羊皮紙を愛おしげに撫でた。

「君にやるのは実に惜しいぜ。しかし、これが必要なのは僕らより君の方だって、昨日の夜決めちゃったのさ！」

フレッドは訝しむハリーに、この羊皮紙を手に入れた経緯いきさつを面白可笑しく話して聴かせた後、ジョージに目配せをした。ジョージは杖を取り出し、羊皮紙に軽く触れて、仰々しい声でこう言った。

「われ、ここに誓う。われ、よからぬことを企む者なり！」

すると、たちまちジョージの杖の先が触れたところから、細いインクの線が蜘蛛の巣のように広がり始めた。線があちこちで繋がり、交

差し、羊皮紙の隅から隅まで伸びて行つた。そして一番天辺に、渦巻形の大きな緑色の文字がポツポツと現れた。

『ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズ。われら「魔法いたずら仕掛人」のご用達商人がお届けする自慢の品、“忍びの地図”』

ハリーは息を飲んで目を見張り、それを見つめた。——それは、ホグワーツ城と学校の敷地全体の詳しい地図だった。驚くべきことはそれだけではない。こまごまとした小さな点が地図中を動いており、一つ一つに細かい字で名前が記してある。一番上の左の隅には“ダンプルドア教授”と書かれた点があり、書齋を歩き回っていた。ミセス・ノリスは三階の廊下を徘徊しているし、ポルターガイストのピースは今、優勝杯の飾つてある部屋をうろついている。イリスはハーマイオニーとぴったりくつついて（二つの点が、仲良く重なり合っていた）同じベッドで寝ているようだ。見慣れた廊下を地図上であちこち見ているうちに、ハリーはあることに気づいた。

その地図には、ハリーが今まで一度も入った事のない抜け道がいくつか記されていた。以前、フィルチが教えてくれた抜け道は、こんなに多かつただろうか。全部で七つ記されている。そしてそのうちのいくつかがなんと——。

「察しがいいな、ハリー。そう、この道はホグズミードへ直行さ」フレッドが指でそのうちの一つを辿りながら言った。

「全部で七つの道がある。フィルチはそのうち四つを知ってる。しかし、残りの道を知っているのは絶対に僕たちだけだ。五階の鏡の裏からの道はやめとけ。僕たちが去年の冬までは利用していたけど、崩れちまって、もう完全に塞がってる。それから、こっちの道は誰も使ったことがないと思うな。何しろ“暴れ柳”がその入口の真上に植わってるし。しかし、こっちのこの道、これはハニーデュークス店の地下室に直行だ。僕ら、一体何回、この道を辿り続けたことか」

「ムーニー、ワームテール、パッドフット、プロングズ」

地図の上に書いてある名前を撫でながら、フレッドが悩ましい溜息を零した。



「我々は、この諸兄にどんなにご恩を受けたことか」

「というわけで」窓に差し込んできた日光に目を細めながら、ジョージがきびきびと言った。

「使った後は、忘れずに消しとけよ。じゃないと誰かに読まれっちゃう」

「こんな風にな」

フレッドは悪戯っぽくウインクしてみせると、地図にもう一度杖を叩いて、「『いたずら完了』」と唱えた。すると地図はすぐさま消え、元の古びた羊皮紙に戻った。

——ハリーは興奮と歓喜の余り、今すぐ談話室じゆうを駆け回りたい衝動を堪えるのに、とんでもなく大きな自制心を必要とせねばならなかった。この地図と透明マントを使えば、ファイルチの手を煩わせることなく、安全そして確実にホグズミード村へ行けるのだ。しかし、何故こんなに素晴らしく貴重なものを、二人は自分にくれたのだろうか？ハリーが大いなる感謝の眼差しで二人を見つめると、ジョージが勿体ぶった調子で咳払いしながら口を開いた。

「あと一つ、大切なことを教えてやろう。若き無法者よ」

「ホグズミードでイリスを捕まえたら、”マダム・パディフット”のカフェに行け。お勧めの席は、モミの木に隠れた一番奥の二人席だ」フレッドがあとを続ける。

「周りは、堅実なる壁と親愛なるモミの木が塞いでてくれる。あとは分かるな？」

二人の言葉の意図するところが掴めず、ハリーはキョトンとしてしまった。何故いきなり、イリスの名前が出て来るんだ？すると二人は示し合わせたようにニヤリと笑って、ハリーにぐっと顔を近づけ、こう言った。

「思いつきりハグして、熱いキスをかましてやりな。何ならもつと先のことをしたっていい。誰も気にしないさ、あそこはそういうところだからな。そしたら、お嬢ちゃんもちよつとは元気になるだろ」

ハリーの顔は、突然噴火したかと思うほど熱く燃え上がった。——僕がイリスにキスをするだって？そんなハリーの初々しい反応を見

て、怪訝そうに眉を寄せたジョージは、腕を組みながら尋ねた。

「おいおい、まさかとは思うが・・・おたくら、まだ付き合っていないのか?」

「・・・ま、まだだよ」ハリーは何が何だかわからないまま、モゴモゴと口籠った。

「オー・マイ・パーシー!なんてこった!」フレッドがわざとらしく片手で目を塞ぎ、嘆いてみせる。

「僕ら、てつきり君がもうあいつを・・・なんだっけ?ほらジニーから聞いただろ、あの素敵な、美しい・・・」

「蛙の新漬け色」ジョージがすかさず補足した。

「そうさ、蛙の新漬け色」に染めちまつてるものかと。おいおいハリー、相手は「レタス食い虫」フロバールワーム並みに大人しいイリスだぜ?君つてどれだけ奥手なんだい?」

「まあよいではないか、兄弟。若者のこれから期待しよう」

憤懣やる方ない様子で、ハリーを今にも説教しようとするフレッドを宥め、ジョージはハリーに意味ありげに目配せした。そして二人は『頑張れよ』と代わる代わるハリーの肩を叩き、満足気な笑みを浮かべて、部屋を出ていった。

ハリーは、はやる気持ちを抑える事ができなかつた。まるで心臓が体中をピョンピョン跳ね回っているかのように、そわそわして、じつとしている事ができない。——まさかイリスと自分の仲が、そんな風に思われていたなんて。

駄目だ、今はそんな事を考えてる余裕なんてない。ハリーは頭が千切れそうになるくらい強く横に振り、雑念を追い払った。とにかく、とんでもなく素晴らしい道具が手に入った。これで僕はホグズミードに行ける。シリウス・ブラックに会って、話を聞くんだ。気を引き締めなければ。

しかし、そんな彼の努力を嘲笑うかのように、頭の隅っこに、あどけないイリスの顔がポツと思ひ浮かんだ。少し舌足らずで高い声、透けるように白い膚、ふつくらとした桜色の唇——『思いつきりハグして熱いキスを』——『なんならもつと先の事をしたっていい』——追

い払おうとした想いは、すぐさまハリーの頭じゆうを覆い尽くし、彼を思い悩ませる。ハリーが密かにイリスを愛していた事を、フレッドたちはとつくの昔に知っていた。だから二人のために、大切な宝物だった“忍びの地図”をくれたのだ。

『馬鹿なことを考えるなよ、イリスはマルフォイを愛しているんだぞ。これは望みのない恋だ。知ってるはずだろ?』ハリーの中の理性が冷たく突き放した。

『それはどうかな。今後、あいつがイリスを愛することはない。けど、僕はこれからもずっと彼女を愛することが出来る。つまり、僕にもチャンスはあるはずだ』ハリーの中の情熱が、熱く反抗する。

結局、ハリーに次いで早起きしてきたロンは、凍るように寒い真冬の談話室で、水差しの水をぶっかけて物理的に頭を冷やしているハリーを見つけ、度胆を抜かれる事となった。

☆

一足先に、みんなと一緒にホグズミード村へ着いたイリスたちは、ハニーデュークス店内で、シヨップピングをする振りをしながらハリーを待っていた。店内は、大勢の人々でごった返していて、誰もイリスを見咎めるような素振りは見せなかった。おまけに格子窓の外は、吹き荒れる大雪模様だ。この調子ではきつと、イリスだけでなくハリーも透明マントなしで問題なく動けるだろう。イリスは安堵する余り、ふざけたロンが自分の鼻先まで持ってきていた“ゴキブリ・ゴソゴソ豆板”のガラス瓶に気づく事が出来なかった。

「イリス、大丈夫かい?」

ガヤガヤとした喧騒の中に一瞬混じったイリスの悲鳴を聞きつけ、透明マントをかなぐり捨てて勢いでやって来たハリーが目にしたのは、怯えてまなじりに涙を浮かべたイリスと、顔を真っ赤にして笑い転げているロンと、そんな彼の石頭を力の限りにぶつ叩いた、憤懣やる方ない様子のハーマイオニーの面々だった。

《ねえ、揃ったのならもう行きましょう》

如何にも退屈そうに尻尾をくねらせながら、イリスの足元でミセス・ノリスが一鳴きした。彼女の相棒である管理人フィルチは、業務

のためにホグワーツを出る事が出来ない。そこで急遽、彼女が代理人として、イリスたちの旅に同行する運びとなったのである。

四人と一匹は連れ立って店を出た。ホグズミード村はまるでクリスマス・カードからそのまま抜け出て来たかのように、豪華で楽しい霧囲気に満ち溢れている。かやぶき屋根の小さな家や店がキラキラ光る雪にすっぽりと覆われ、戸口という戸口には柵のリースが飾られ、木々には魔法で美しいキャンドルや飾りがくるくると巻き付けられていた。凍るような雪と風が服の中から入り込み、チクチクと皮膚を刺した。四人は身を寄せ合い、深々とした雪の轍わだちを作りながら歩いた。ミセス・ノリスはイリスのマントの中に入り込んだきり、出てこなくなった。

ハーマイオニーが提言した“ホグズミード村内の安全な場所”については、クルックシャンクス伝手に話を聞いたシリウスが良い案を出してくれた。——英国一の呪われた館と言われる“叫びの屋敷”だ。

人氣のパブ“三本の箒”の前を通り、坂道を登ると小高い丘に出た。件の屋敷はそこに建っていた。窓という窓には板が打ち付けられ、庭は草が好き放題に生い茂っており、とても薄気味悪い。観光地の一つであるにも関わらず、周囲にはイリスたちを除いて人っ子一人、ゴースト一体も歩いて（浮いて）いない。耳を澄ませると、吹雪く音に混じって、かすかに屋敷の方から不気味に軋む音が聴こえてくる。四人は思わずこわごわと体を寄せ合った。

「僕、『ほとんど首無しニック』に聞いたんだ。そしたら、ものすごく荒っぽい連中がここに住み付いてるって聞いたことがあるんだってさ。だーれも入れやしない。兄貴たちも当然やってみただけど、入り口は全部密封状態だったって」

ロンが鼻をすすりながら、ますます人を怖がらせるようなことを言ったので、ハーマイオニーはジロリと彼を睨んだ。——本当にシリウスはここにいるのだろうか。イリスはクルックシャンクスに教えられた通りに、杖を上げて合図代わりの魔法を放った。彼女の杖先から赤い火の玉が飛び出て、屋敷の正面扉に嵌まった擦りガラスを三回

ノックし、パチツと弾けて消える。

すると、固く閉じられていたはずの扉が開き、中から懐かしいオレンジ色の猫、クルックシャンクスが現れた。クルックシャンクスは『来い』と言わんばかりに、ふわふわの尻尾を一振りさせて、扉の奥へと消えていく。四人は注意深く周囲に視線を巡らせながら、屋敷の中へ足を踏み入れた。

屋敷の中は埃っぽかった。壁紙は剥がれかけ、床はシミだらけで、家具という家具は全て、まるで誰かが打ち壊したかのように破損している。窓には全部、分厚い板が打ち付けられていた。最後に入ったハーマイオニーが扉を閉じると、ビュウビュウと吹き荒れていた外の風鳴り音が、ほとんど消えてしまった。

「久しぶりだね、クルックシャンクス」

イリスは微笑んで、ミセス・ノリスと顔合わせが終わったばかりのクルックシャンクスに話しかけた。彼はイリスを優しい眼差しで見つめ、穏やかな声でこう言った。

《ああ。暫く会わない間に、お前は見違えるばかりに成長したみたいだ。おれたちの心配は、無用だったな》

クルックシャンクスは隣のホールに移動して、崩れ落ちそうな階段を上があった。どこもかしこも厚い埃をかぶっている。踊り場まで辿り着くと、薄暗い廊下の先で、一つだけ開いているドアがあった。クルックシャンクスに続いて、イリスたちもそのドアをくぐり抜けた。

そこは大きな寝室のようだった。中には埃っぽいカーテンの掛かった壮大な四本柱の天蓋ベッドが一つあるきりで、そこには一人の痩せ細った男が腰かけている。——そう、シリウス・ブラックだ。

イリスは三人の様子を注意深く見守った。ハリーは警戒し切った表情でシリウスを見つめ、ハーマイオニーは怯えて息を詰まらせながらロンの腕を強く掴み、ロンは歯を食いしばりながら無意識にハーマイオニーの前に立つ。ミセス・ノリスはスンと鼻を鳴らしたきり、何も言わなかった。

シリウスは、いま自分の見ているものが、とてもじゃないが信じられないとでも言うかのように、白く固まった蠟のような顔を驚愕に歪

ませ、落ちくぼんだ灰色の瞳を見開き、イリスを見て、ハーマイオニーを見て、ロンを見て、ミセス・ノリスを見て、——最後に、ハリーをじっと見つめた。

「こんな風に見る事など、もう決してないと思っていた」

やがて青ざめた唇を開き、しわがれた声で彼はこう言った。ハリーは自分でも不思議に思うほど、彼の瞳に惹きつけられ、目を逸らす事が出来なかった。

そしてシリウスは、全てをみんなに話して聴かせた。

あれから数日が経ち、いよいよクリスマス休暇が始まった。里帰りする生徒たちを吐き出したホグワーツは空っぽになり、その隙間を埋めるかのように、大掛かりなクリスマススの飾り付けが始まっていた。柵や宿り木を編み込んだ太いリボンが廊下じゅうに張り巡らされ、全ての鎧の中から神秘的な灯りがきらめき、大広間には金色に輝く星を天辺に飾ったクリスマス・ツリーが立ち並び、学校に残った数少ない生徒たちの目を楽しませた。

そんな楽しいな雰囲気をもよおし、イリスたちは連日集まっては、“スキヤバーズ捕獲大作戦”についての話し合いを続けていた。かつてのイリスと同じように、ハリーたちもシリウスを信じてくれたのだ。シリウスにとって何より幸運だったのは、相手が社会の空気に染まった大人ではなく、純粋な心を持つ子供たちだった事だ。最初の段階でイリスが懸命に説得した事も、シリウスの言葉を受け入れやすくする助けとなった。あれだけスキヤバーズを可愛がっていたロンも、彼への愛情など綺麗さっぱり忘れてしまったかのように——いや、むしろ忘れたいかのよう——熱心な様子で作戦に参加してくれている。

しかし依然として状況は変わらず、スキヤバーズの行方は分からぬままだ。イリスはミセス・ノリスやヘドウィグ、サクラだけでなく、他の動物にも助けを求めようとした。しかし、あらゆる動物たちを束ね

るリーダーであるハグリッドの元を訪れたが、彼は留守だった。留守番をしていたファンングに聞くと、『ハグリッドはとても怒っていた。そしてそのまま家を出て行ったきり、帰ってこない』と鳴くばかりだった。

「二体、ハグリッドはどこへ行ったのかしら？クリスマス・イブも間近だつて言うのに」

腹ペコのファンングのために、バケツ一杯分の燻製肉を暖炉の炎で炙つてやりながら、ハーマイオニーは首を傾げた。結局、その日もハグリッドは家に帰つて来ることはなかった。

☆

クリスマス・イブを明日に控えたその夜、イリスはふと目が覚め、ベッドから身を起こした。隣で眠るハーマイオニーを起こさないように、そつとベッドを抜け出し、窓の景色を眺める。深々と降り積もる雪を、遠くの方に見える“禁じられた森”の木々が、ざわざわと騒ぎながら飲み込んでいく。その近くに見えるハグリッドの小屋の明かりは、依然として付いていないままだ。

ガラス越しに入り込む冬の冷気が、窓にぺつたりと身を寄せたイリスの奥深くに染み込んでいく。イリスは思わずブルツと身震いした。——このまま寝床に入ると、ハーマイオニーを自分の肌の冷たさで起こしてしまうかもしれない。談話室の暖炉に火を起こし、少しばかり体を暖めてから部屋に戻ろう。そう考えたイリスはローブを羽織つて、杖を持ち、階段を降りて、談話室のいつもの特等席に腰を下ろそうとして——目の前に据えられたテーブルに、視線が釘付けになった。

——そこには、ハリーが持っているはずの“忍びの地図”が広げて置いてあった。

イリスは、シリウスと“叫びの屋敷”で再会したあの日の夜、ハリーが自分たちに、赤毛の双子から譲り受けたこの道具を見せてくれた事を思い出した。ロンは、兄たちが何故弟の自分に教えてくれなかったのかと憤慨し、ハーマイオニーは『マクゴナガル先生に提出するべきだ』と口酸っぱくハリーに説教した。ハリーはハーマイオニー

に没収される前に、すぐさま元の羊皮紙に戻して、自分のローブのポケットの奥深くに仕舞い込んでいた。どうしてそれが、地図になった状態でここにあるんだ？

「ハリー？」

イリスは小さな声で彼の名前を呼び、暖炉を炎で満たした後、注意深く周囲を見渡した。当然のように、ハリーの姿は見当たらない。よくよく考えてみれば、ハリーが自分にこんな悪戯をする筈がないのだ。――では一体誰が、これを持ち出してここに置いたんだろう。イリスは訝しげに地図上に視線を巡らせ、やがて驚愕に目を見開いた。

――現在地であるグリフィンドールの談話室には、“イリス・ゴースト”と書かれた小さな点の一つある。その近くに、もう一つ点があった。そこには、“ピーター・ペティグリュー”と書かれている。

イリスは息を飲んで、椅子から素早く立ち上がった。冷え切っていたはずの体が興奮で熱くなり、ドクンドクン、と心臓がうるさいほどに波打ち始める。しかし暖炉の明かりだけでは、部屋の隅々に至るまでを観察する事は難しかった。イリスは再び、地図上に視線を落とすた。

ピーターは、何時の間にか談話室の外へ出ていた。ゆっくりとしたスピードで、寮の前の廊下を歩いている。イリスは杖先をコツンと頭に当てて、“目くらまし呪文”を唱えると、談話室をこっそりと抜け出した。暫くの間、訝しげに周囲を見渡していた「太った貴婦人」がうたた寝を再開したことを確認すると、イリスは早足でピーターの後を追った。

――イリスはもつと警戒心を持つべきだった。あれほどハリーが大切に仕舞い込んでいた“忍びの地図”が、何故自分の目の前に『見てください』と言わんばかりに置いてあったのか。巧みに行方を晦まし続けていたピーターが、何故急に自分の前に姿を現したのか。冷静に考えれば、分かったはずだ。イリスは談話室を出ずに、ハリーたちを起こしに行くべきだった。

しかし、彼女はそうしなかった。自分の心に眠る“本当の望み”に気づいたイリスは、不必要なまでの臆病さがなくなり、自分に対して



年相応の自信を持てるようになった。おまけにシリウスのことも、一人で抱え込んでいた時と違って、今は助けてくれる仲間が沢山いる。イリスは心から安心して、日々の生活を送ることが出来るようになった。だが大きな安心は、時として慢心となることがある。故にイリスは、これを罫だと見抜くことが出来なかった。

ピーターは松明どころか、美しいクリスマススの装飾の灯りすら届かない廊下の突き当りまで来ると、イリスを待ち受けるかのようになり、ピタリと歩みを止めた。窓には大きなステンドグラスが嵌め込まれていて、わずかな雪の輝きを反射して輝いている。そしてその前の床に、雪明かりに照らされたネズミが佇んで、じっとイリスがいるであろうところを見つめている。老いた灰色の痩せネズミだ。

「スキャバーズ？」

呪文を解いたイリスは、思わず掠れた声で囁いた。それに応えるかのように、スキャバーズが不意にモゴモゴと動き始めた。まるで木が育つのを早送りで見ているかのようだ。頭が床からシュツと上に伸び、手足が生え――、次の瞬間、一人の男がイリスの目の前に立っていた。

小柄な男だ。イリスより一回りほど大きい位で、ハリーやハーマイオニーの背丈と余り変わらない。まばらな色褪せた髪はくしゃくしゃで、天辺に大きな禿があつた。皮膚はまるでスキャバーズの灰色の体毛と同じように汚れ、尖った鼻や小さく潤んだ目には、どこことなくネズミ臭さが漂っている。

男の油断ならない狡猾さを滲ませた目だけが、素早くイリスの持つ杖に走り、またイリスに戻った。男は不安そうに引き攣った笑みを見せると、ネズミのようにキーキーとした高い声で、イリスに語り掛けた。

「やあ、イリス。私をずっと探していたんだらう？そう、私がピーター・ペティグリュードだ」

## Act 14. インフエルノ

「聴いてくれ、イリス。わ、私は自首しに来たんだ。優しい君ならきくと、私の話をきちんと聞いてくれると信じて」

——自首するだつて？イリスは信じられないものを見るかのように、まじまじとピーターを見つめた。まさか、今まで散々逃げ回っていたピーターが、自分の罪を償うために、やって来てくれたなんて。

『だけど、どうして今更なんだ？』——イリスの中で警戒心がむくむくと持ち上がり、彼女は継るように杖を握り締めた。しかし、もし自分の推測が全て当たっているとすれば、これで——シリウスやイリス、ロックハートの事でさえも——全ての問題が解決されるのだ。つまり、ハッピーエンドだ。

ピーターを信じるべきか、信じないべきか。イリスは迷った挙句、かつてシリウスと出会った時のように、ピーターの瞳を見つめようとした。けれども、彼はイリスと目が合った瞬間、ひっと恐怖に息を詰まらせ、顔を背けてしまった。その姿は何とも哀れで痛々しく——シリウスが教えてくれたような——狡猾で卑劣な人間には、とてもじゃないが見えない。ピーターは、イリスの持つ“忍びの地図”を震える手で指差すと、涙を零しながら、ぎこちなく微笑んだ。

“忍びの地図”。これを作った頃が、懐かしい」  
「あなたがこれを作ったの？」

イリスはびっくりして、思わず杖を下ろしてしまった。ピーターは大きく息を吸い込み、ゆっくりと頷いた。

「そうだ。だが、私だけじゃない。シリウス・ブラック、リーマス・ルーピン……そしてジェームズ・ポッター。我々は何をするにも、ずっと一緒だった。地図の製作者である四つの名前は、我々の中だけで通じる、秘密の呼び名だった。ああ、懐かしい。何も知らなかった、あの頃に戻りたい。戻れるのなら、何をしたらって構わない」

ピーターの伏せ目がちな瞳から、涙が一筋零れ出て、頬を伝ってポロリと床に落ちた。その様子を見たイリスは、心臓が締め付けられるようにギョツと痛んだ。過去を悔いるピーターの姿と言葉は、イリス

に去年の辛い記憶を思い出させた。リドルの記憶に支配されたイリスも、ずっとそう思い、苦しんでいたからだ。

「あなたの気持ち、とても良くわかるよ。でも、なら、どうして・・・友達を裏切ったの？」

ピーターの顔色は、たちまち土気色になった。哀れみを乞うように身を振りながら、ネズミのようにキーキーと高い声で叫んだ。

「し、仕方がなかったんだ！あの方に脅された。あの方はあらゆることを征服し、そして何でもご存じだった。あの方を拒んで、いったい何が得られただろう？仕方がなかった、言わなければ、私が殺されかねなかったんだ」

ピーターはがくりと膝を折り、止めどなく震えながら、立ち竦むイリスのローブに縋り付いた。あまりの力の強さに、イリスの体勢が崩れ、杖が手を離れて床にカランと転がり落ちる。思わず拾おうとしたイリスを、ピーターはぐっと強く抱き寄せた。

「離して、ピーターー！」

ピーターの足が自分の杖を後方へ蹴り飛ばしたのが、彼の肩越しに見え、イリスはもがいた。しかし、相手は一回りも大きい成人した男性だ。びくともしない。ピーターは毒を吐き出すかのような苦しみに満ちた声で、こう囁いた。

「イリス。君は、かつての私のように、素晴らしい友達を持っている。みんな友達のために、躊躇なく自分の命を賭けられる人間たちだ。だが、君はどうだ？いぎ、死を目前にして、自分の命よりも、友達の命を優先できるか？」

ピーターは、イリスの胸に伏せていた顔を、ゆっくりと上げた。――その瞳は、ゾツとするほど濁っていた。イリスが恐怖に息を詰まらせたその時、真横からオレンジ色の毛玉が飛び出し、視界をいっぱいに塞いだ。毛玉は恐ろしい唸り声を上げ、ピーターの顔面にガツチリ組み付くと、滅茶苦茶に暴れ始めた。

――クルックシャンクスだ。ピーターは痛々しい悲鳴を上げ、イリスを乱暴に押しのとけると、床の上を転げ回った。

《逃げろ、イリス！こいつは、お前に明確な悪意を持っている！》

クルックシャンクスは振り返らずに、イリスに向かって怒鳴った。しかし、イリスが体勢を整える前に、ピーターはローブの奥底から埃だらけの杖を引き抜くと、クルックシャンクスに突き付けた。杖先から目も眩むような光が迸り、それをまともに受けたクルックシャンクスはボールのように弾んで壁にぶち当たって、床にくしゃつと丸まり、ピクリとも動かなくなってしまった。

「クルックシャンクス！」

イリスが悲鳴を上げ、猫に駆け寄ろうとしたその時——、イリスの身体を奇妙な感覚が襲った。最初は、背中の一点がとても熱いと感じただけだった。しかし瞬く間に、それは激痛へと変わり、体じゅうにわっと広がった。リドルの魂と融合した時に感じたものとは全く違う、悪意に満ちた痛みだ。イリスがまだ痛みの弱い箇所には縋ろうと無意識に身を振るたび、面白がるようにそこを激しく責め立てる。もしこの痛みが意志を持っているとするなら、今頃それはきつと大笑いしているに違いない。まるで毒ナイフで全身をくまなく何度も突き刺されているような、その耐え難い痛みに、イリスは泣き叫んだ。

「あああああああつ・・・!!」

イリスは、やがて失神した。しかし、安寧の時は長く続かなかった。気を失っても尚、続く激痛から逃れるため、危険信号を発したイリスの身体は、再び覚醒してしまったのだ。胃が激しく痙攣し、イリスは食べたものを全て吐き戻した。冷たい石の床を掻き毟っても、どれほど叫んでも、この苦痛は終わらない。ああ、誰か、私を殺して・・・イリスはたまらず、誰かに願った。誰でもいい、早くこれを終わらせて、解放してほしい。

——不意に、痛みが治まった。誰かが、自分の傍にしゃがみ込んでいる。ピーターだ。涙でぼやけて滲んだ視界に入ったピーターの顔は、おびただしい猫のひっかき傷で真っ赤に染まり、まるで恐ろしい悪魔のようだった。彼は、倒れたイリスを助ける訳でもなく、観察するかのようじつと見つめているだけだ。——どうして、こんな酷いことを？イリスは力なく咳き込みながら、ピーターに囁いた。

「ど、どうして、ピーター、こんな・・・」

「イリス、仕方がないんだ。私はまだ死にたくない。生き残るためなんだ」

ピーターはそう言うと、イリスに杖先をピタリと当て、息を吸い込んだ。——駄目だ！イリスの心が叫んだ。逃げろ、逃げるんだ！次の瞬間、イリスは持てる力を総動員して、スニジェットに変身しようと試みた。しかし、金色の光がイリスの身体を舞い始めたのを見るや否や、ピーターの顔は焦りと驚愕に引き攣り、イリスの頬を張り飛ばして無理矢理魔法を解除させてしまった。か細い悲鳴を上げるイリスを、ピーターは憎々しげに睨み付ける。

「まだそんな力が残っているのか。・・・クルーシオ、苦しめ！」

——あの痛みが、再び、イリスを襲った。

大小の痛みの波が理性を押し流し、何も考えることが出来ない。ピーターは馬乗りになってイリスの動きを完全に封じ込めると、ますます呪文の威力を強めた。イリスは掠れた声で泣き叫び、少しでも痛みから逃れようと、狂ったように首を横に振り続けた。必死にピーターを押し戻そうとするが、痛みに震える手では、何の抵抗にもならない。

やがてイリスの魔法力が彼女自身を守ろうとするために暴走し、ピーターを攻撃し始めた。しかしピーターはいくら傷ついても、イリスへの呪いを止めなかった。すると魔法力はイリスの精神を守る方へ働き、徐々に威力を弱めていった。気の狂った拷問は、イリスの魔法力の暴発が完全に消えてしまうまで、ずっと続けられた。

☆

——どれほどの時間が経っただろう。

ピーターはやっと呪いを解除し、激しく息を荒げながら、イリスの白い頬を撫でた。たったそれだけで、イリスはびくりと大きく身体を痙攣させ、怯え切った目でピーターを見つめ、わずかに開いた口の端から唾液を垂らし、呂律の回っていない掠れた声で、何度もピーターに許しを乞い続ける。——イリスは心身ともに、ピーターに屈してしまったのだ。ピーターは安心したように大きく息を吐いて、あらかじめ周囲に張っておいた“人避けの呪文”の威力を弱めた。

「イリス、分かったね？これが本物の恐怖だ。人はこれに堪えられる勇敢な者と、そうでない臆病者に別れる。．．．君は残念ながら、私と同じ臆病者だったようだ」

「臆病者」——その言葉は、イリスの傷だらけになった心の奥底まで、すうつと染み込んでいった。ピーターはすすり泣くイリスを抱き寄せ、優しく頭を撫でた。今まで激痛に苛まれていたイリスにとっては、それがどれほど心地良かったか、嬉しく思えたか分からない。思わず涙が零れ落ち、イリスはおずおずとピーターの胸に小さな頭を寄せた。

ピーターは、イリスを痛めつけるために「磔の呪文」を掛けたのではない。——イリスを自分に従う人形にするために、彼女を大切に想うルシウスやリドルの記憶では絶対に与えることの出来なかつただろう、「本物の恐怖」を教え込み、彼女の全てを支配しようとしたのだ。

しかし、実際のところは、イリスだけでなくピーターも疲労困憊状態だった。イリスの魔法力が、傷ついた彼女の精神を回復する方へ働き続けたために、何度もイリスに「磔の呪文」を掛けることになってしまったためだ。「禁じられた呪文」はいずれも大量の魔法力を使うし、おまけに「人避けの呪文」を最大出力で掛け続けていたものだから、一時はピーターの方が先に気を失うかと危ぶんだほどだった。だが、計画はなんとか上手く運んだ。あとはイリスの魔法力が回復してしまう前に「服従の呪文」を掛け、共に帝王の下へ向かうだけだ。彼女を人質にすれば、あの忌々しいシリウスも手を出してこないだろう。ピーターは一人ほくそ笑むと、イリスだけでなく、どこか自分自身にも言い聞かせるように、静かにこう囁いた。

「臆病者のイリス。君もいずれば、私と同じように恐怖に負け、友達を裏切るだろう。あの方はメーティスの一族に、並々ならぬ執着心を抱いている。あの方に従わなければ君は、さつきよりも、もつと苦しく恐ろしい目に遭わされるに違いない。『友達のために死ぬ』？友情に命を賭けるなど、気が狂っている！馬鹿らしい！一番大事なのは自分の命だ、そうだろうか？」

『さつきよりも、もつと苦しく恐ろしい目に遭わされるだろう』——この言葉は、イリスをより一層、強い恐怖の渦に陥れるのに、十分なものだった。あの痛みよりも、もつと酷い目に遭うなんて——。イリスは極寒の地に放り込まれたかのようにガタガタと震え、すすり泣き始める。それを見たピーターは、ただ自分の成果に満足した。そして油断した挙句、魔法力が緩んで——知らずの内に、“人避けの呪文”を解除してしまったのだ。だが彼は気づかず、ねっとりとした視線をイリスに注ぐだけだった。

「私は、君のことなら何でも知っている。ずっと、君を見守ってきたのだから……」

イリスは怯え切った眼差しをピーターに向ける。

「ルシウス・マルフォイが、友の忘れ形見である君に、随分とご執心だったのは昔から知っていたよ。だから、私の飼い主であるロンが、君と親友になったのは、私にとって本当に幸運なことだった。ルシウスは、唯一の情報源であるセブルス・スネイプすら知らない、君の細かな情報をずっと知っていたがっていたんだ。」

だから、ある日、ダイアゴン横丁で彼に出会い、取引をもちかけた。そして私は、安全な隠れ家と大量のガリオンを報酬にと約束され、君の情報をセオドル・ノットに渡し続けた。ネズミの姿で羽根ペンを動かし、羊皮紙に書きつけるのは少々骨の折れる作業だったが、将来のことを考えると頑張れたよ。あと数年で、みすぼらしい家族や、ネズミの栄養ドリンクやパンくずと、おさらばできると思えたからね。

——だが、そんな日は来なかった。シリウスが脱獄したという知らせを聞くや否や、ルシウスは、私から手を切ったんだ！どうせ私が臆病者で、君やハリーに手出しすら出来ず、シリウスに殺されると踏んでいたんだろう。フン、だが実際はどうかね。私は見事、君を手中にしてみせた！——ああ、イリス！私の可愛いイリス！」

ピーターは感極まり、イリスの汗ばんだ頬に強く口付けた。「イリス。私以外の大人を、信用してはならない。ルシウスも、シリウスも、ダンブルドアでさえも、みんな君を利用するつもりなんだ。ルシウスは、自らの保身のために。シリウスは、私を殺すための道具と

して。ダンブルドアは、使い勝手の良い駒として、君を捉えているんだよ。

あいつらはみな、“本物の恐怖”に堪えることの出来る、勇敢な人間だ。私や君のように臆病な人間を見下し、ただの道具として考えている。君をその気にさせるため、聴こえの良い言葉をずらずらと並べ立て、いざ都合が悪くなれば切り捨てられる。——かつての私のように。

そんなやつらのところより、私と共にいる方が安全だ。君と私は似た者同士だ。私はルシウスのように、君を裏切ったりしないよ。ずっと一緒だ”

ピーターは満足気に笑い、杖を取り出すと、イリスに“服従の呪文”を唱えた。

「インペリオ、服従せよ。．．．イリス、これからは私の言うこと全てに従いなさい。まずは私と共に、アルバニアの森へ行くんだ”

たちまちイリスの心身を、圧倒的な多幸福感が包み込んだ。イリスは正気を失った瞳で、ピーターをぼんやりと見つめ返す。——彼の濁った目の奥に、キラツと一瞬だけ、虹色の光が輝いた。イリスはすうつと意識を失い、ピーターの胸に小さな頭をもたせ掛けた。

☆

やがて、イリスは目を覚ました。ガタゴト、と妙に聞き慣れた音に合わせて、世界が揺れている。周囲を見回すと、やはりここは——イリスが思った通り——ホグワーツ特急のコンパートメントの一室のようだった。イリスは呆気にとられ、言葉を失った。一体、何がどうなって、自分はこんなところにいるんだろう。ホグワーツは——いや、それよりピーターはどこに行ってしまったんだ？

おまけに硝子窓からは、お天道様の光が、燦々と差し込んでいる。イリスはますます首を傾げた。最早ここが現実なのか、夢なのかも分からない。さらにもっとヘンテコなことに、窓に近づいて外の景色を覗こうとすると、イリスが映っているはずなのに——全く違う姿が、硝子面に映っていた。ハムスターによく似た雰囲気、小太りの男の子だ。



イリスはその顔を見た瞬間に、はっと思い出した。——そうだ、僕はピーター、ピーター・ペティグリュード。

ふとコンパートメントのドアが、遠慮がちにノックされた。そして入って来たのは、鳶色の髪をした、大人びた様子の少年だ。少年は大きく深呼吸をしてから、ぎこちない笑顔を浮かべて、ピーターに話しかけた。

「やあ。ここ空いてるかい？ほかは、どこもいっぱい」

「いいよ。どうぞ座って」

「ありがとう」

少年が向かい側にそっと座ると、ピーターは穏やかに微笑んで、丸っこい手を差し出した。

「僕、ピーター。ピーター・ペティグリュード。君は？」

少年は何とも不思議なことに、ピーターが差し出した手を、暫らくの間、信じられないとでもいうかのように、じっと凝視していた。しかし、やがてその手を、震える両手で包み込み、ピーターが「痛い」と思わず悲鳴を上げてしまうまで、勢いよく何度もブンブンと振り続けた。そして零れるばかりの笑顔を顔いっぱい浮かべ、興奮で上擦った声で、こう答えた。

「よろしく、ピーター。僕はリーマス。リーマス・ジョン・ルーピンだ」

そうして二人は、あつという間に友達になった。やがてピーターが空腹を訴え始めると、リーマスが車内販売のワゴンを探しに行こうと持ちかけ、二人はコンパートメントを出た。

「・・・ザリンは闇の魔法使いが入るところだ。フン、まともなところじゃないね」

不意に、あるコンパートメントから、男の子の大きな声がして、二人はピタツと歩みを止めた。そっと中を覗き込むと、そこには、四人の男女が座り、何やら剣呑な雰囲気醸し出している。くしゃやくしゃの黒髪の少年が、その隣に腰掛けた、見惚れるほどハンサムな少年と一緒にあって、向かい側に座る、陰湿な物言いの少年と言い争っているのだ。その傍にいる赤毛の美しい少女は、一生懸命三人の喧嘩を仲裁しているようだった。

「彼らは誰だい？」

ピーターが余りにも熱心な様子で、くしゃくしゃの髪の毛の少年とハンサムな少年をじつと見つめるので、リーマスは思わず小声で尋ねた。「かっこいいなあ。君、知らない？ ジェームズ・ポッターとシリウス・ブラックだよ。僕、ポッターのご両親が開催したお茶会に招かれた時、二人と初めて会ったんだ。きっと二人は、僕のことなんて覚えていないだろうけど」

——ピーターの脳裏に、ポッター家の壮大な屋敷で催されたお茶会に、母親と共に参加した華々しい記憶が蘇る。ピーターは父がマグルで、母が魔法族だった。とは言っても、母の実家はあまり著名ではない家柄であるため、サロンの席も末端に近い方だったが、それでも上座に座るジェームズは、幼馴染のシリウスと一緒にあって、身体の内側からキラキラと輝いて見えた。彼らは容姿や才能、自信に満ち溢れ、またそれを使いこなす力を持っていた。ピーターにとって、二人の存在は、さながらスーパースターも同然だったのだ。

「ふうん」

その一方で、リーマスは、それほど二人に対して憧れを抱いていないようだった。それよりもピーターの方が大切なようで、彼を急かして、次の車両へ行くようにもちかける。リーマスはピーターを引きずるようにして、次の車両へ繋がるドアを開けた。

——その瞬間、イリスは荒涼とした大地の上に、ぽつんと立っていた。

ゆつくりと振り返ると、すぐ後ろには、人が一人すっぽり入れるほど大きなサイズの卵たまごが転がっている。卵には、まるで何かがそこら生まれ出てきたかのように、大きな穴が空いていた。イリスはこわごわ、穴の中を覗き込むと——俄かには信じられないことだが、そこには空洞の代わりに、イリスが先程いたばかりのホグワーツ特急の光景が広がっていた。

どうやらイリスは、この卵から出て来たらしい。では、ピーターたちは一体、どこに行ったと言うのだろうか。

まったくもって訳が分からず、イリスは注意深く周囲を見渡した。

——草木一本すら生えていない、荒涼とした大地が、地平線の果てまでずっと続いている。そして所々に、大きささまざまな大きさの卵が転がっている。上空は、血のような真紅色に染め上げられた分厚い雲が一面に広がっていて、時々走る稲光が、雲を不気味に光らせていた。なんて恐ろしい世界なんだろう。イリスは思わず、ブルツと身を震わせた。まるで“インフェル地獄”だ。

突如として、世界が真つ二つに引き裂かれるような、凄まじく大きな音が轟き、イリスは悲鳴を上げてしゃがみ込んだ。よく聞いてみると、それは——とてつもなく巨大な乗り物（があるとすればの話だが）の駆動音に似ていた。音は、雲を掻き乱しながら上空を横切り、雲の上に巨大なシルエットを残して去って行った。——雲の上には、巨大な化け物が周回しているようだ。

ますますどうしていいのか分からず、イリスは所在なげに立ち竦んだ。ふと足元に視線を落とした瞬間、イリスは息を飲んだ。——自分のものとは違う足跡が、ずっと先の方まで続いている。足跡は、先の方に転がっている卵まで、続いているようだ。イリスは導かれるように、足跡を辿った。卵にはやはり大きな穴が空いており、そこからガヤガヤと大勢の人々の話し声が聴こえてくる。イリスは思い切って、穴を覗き込んだ。

☆

二つ目の卵の中には、ホグワーツの大広間の光景が詰まっていた。一列に並べられた子供たちは、それぞれ緊張した顔を引き締める。序盤で呼ばれたシリウスは、自信満々といった様子で出て来て、組分け帽子を被るや否や、グリフィンボールに決まった。スリザリンのテーブルのざわめきをもとせず、堂々とした態度でグリフィンボールの席に着く。ピーターは、それを羨ましそうに見ていた。リーマスもグリフィンボール、ジェームズもグリフィンボール。そしていよいよ、ピーターの番だ。彼は緊張の余り、震える手で帽子を被り、願った。

「僕は、勇敢な人間になりたい。ジェームズやシリウスみたいに！」  
「良かろう、君にはその素質がある。グリフィンボール！」

組分け帽子が高らかに叫んだ。ピーターは信じられないと言わんばかりに目を見張り、転がるようにして椅子を飛び出した。グリフィンドールのテーブルでは、一足先に席に着いていたリーマスが、嬉しそうに出迎えてくれた。

「よかったよ、ピーター！君も一緒だったんだね」

「リーマス、お前の友達か？」

シリウスが親しげな様子で、リーマスに話しかける。驚いたことに、早くもリーマスは、ジェームズたちと友達になったようだった。ジェームズは眼鏡の奥で気さくに微笑んでみせると、固まるピーターに手を差し出した。

「僕はジェームズ、こいつはシリウスさ。よろしくな、ピーター」

ピーターは友人リーマスの助けで、その日に憧れのスターたちと友情を築いたのだった。そしてさらに幸運は続くもので、四人は同じ部屋だった。ピーターは興奮と喜びで一向に寝付くことが出来ず、四人で夜通し下らないことを話し、笑い続けた。

☆

「僕は人狼なんだ」

三つ目の卵の中は、リーマスの静かな告白で満たされた。誰もいない空き教室に、四人は集まっている。余りの衝撃的なその事実には、三人はそれぞれポカンと口を開いた。リーマスはその視線から逃れるように、顔を俯かせたまま、矢継ぎ早にまくし立てる。

「今まで黙っててごめん。でも怖かったんだ。今までずっと一人ぼっちだった。だから、せつかく出来た友達を失うのが怖くて。・・・だけど、それももう終わりだ。そうだろ？僕はホグワーツを退学になる」

「何言ってるんだよ、誰が退学になるって？」

一番最初に衝撃から立ち直ったのは、ジェームズだった。くしゃくしゃの髪を指で乱雑にほぐし、ちらりとシリウスに視線を送る。

「リーマス、お前を一人ぼっちになんかしなさい。そうだろ、ピーター？」

シリウスの言葉に、ピーターはごくごく頷いた。リーマスは静か

に両手の中に顔を埋め、暫らく何も言わなくなった。

☆

四つ目の卵の中には、三人の特訓の日々がぎゅうぎゅうに押し込められていた。満月の夜に成熟した狼になるリーマスのために、三人は自らも同じ獣になることを選んだ。並みの魔法使いでも難しいと言われる“動物もどき”の訓練も彼らの敵ではなかった。ホグワーツ一の秀才と謳われたジェームズとシリウスは、三年の月日を重ねてついに、非公認の“動物もどき”になることが出来たのだ。

ピーターも、二人より少しばかり遅れたものの、無事“動物もどき”になることが出来た。しかし、その姿が少々問題だった。“動物もどき”は、その人の資質に合った姿になる。ジェームズは立派な牡鹿、シリウスは熊と見まごうほど大きな黒犬、そしてピーターは――。「おいおい、ドブネズミかよ！ピーター！全く、お前らしいぜ！」

ピーターの晴れ姿を見たたん、シリウスはジェームズと一緒に泣いて、涙を零しながら大笑いし始めた。そう、ピーターは小さなドブネズミだったのだ。リーマスも少し申し訳なさそうに笑っている。どんなに頑張っても、三人には追いつけない。今の自分の姿は、そのことをただ残酷に、ピーターに知らしめた。彼の小さな心は、劣等感到に苛まれた。

しかし、ネズミだからこそ、ピーターには大いに役立つ一面があった。リーマスが閉じ籠もっている“叫びの屋敷”に繋がる、暴れ柳のこぶに触り、その動きを止めることが出来るのは、小さなピーターだけだったのだ。ピーターは、再び自信を取り戻した。

三匹は、屋敷で狼になったリーマスに合流し、ありとあらゆる場所を、夜な夜な歩き回った。――冷たい夜特有の空気、心が浮き立つような背徳感、全ての生き物が寝静まった濃紺色の世界を、ピーターは一生忘れないだろう。そして彼らは夜明けと共に学校に立ち戻り、その情報を全て“忍びの地図”に書き起こした。

☆

五つ目の卵の中は、恐ろしい閃光が飛び交う、戦争の最中だった。仮面を被った“死喰い人”と、彼らに抗う者たちが混戦する戦場で、

ピーターは戦っていた。しかし、血のように赤い光線が頬を掠めると、余りの恐ろしさに、ピーターは救いを求める小さな魔女の手を振り解いて、一心不乱に逃げてしまった。

「何をしてる、ワームテール！戦え！」

すかさずジェームズの怒号が飛んでくる。——『戦え』だつて？もう少いで、僕が死ぬところだったのに！ピーターは這う這うの体で、ボロボロに破壊されたパブに逃げ込み、バタービールの空き樽に身を隠して震えることしか出来なかった。樽の継ぎ目の隙間から、シリウスが数人の敵をまとめて相手にしている間に、リーマスが魔女を助け出し、安全な場所へ“姿くらまし”しているのが見える。結局、ピーターは戦いが完全に終結してしまうまで、その中から動くことが出来なかった。

「なぜ戦わないんだ、臆病者！」

激昂したシリウスが、バタービールの樽の中に手を突っ込み、小さなピーターの胸倉を掴み上げる。ジェームズも腹立たしげに、ピーターを睨んでいる。三人共、最前線で戦っていたために、体中が傷だらけだった。しかし、ピーターは傷一つなく、ぴんぴんしている。ピーターは哀れな声で言い続けた。

「恐ろしかったんだ、光線がすぐ目の前を掠めて……！」

「黙れ、役立たずめ！この……！」

「やめろ、パッドフット！」

リーマスがシリウスを押し留める。ピーターは再び、樽の中へ崩れ落ちた。——どうして、どうしてこんなことに。ピーターはみじめな思いで胸をいっばいに膨らませ、小さな体をより一層縮こまらせた。学生時代は平和だった。僕はそれで充分だった。だけど、ジェームズたちはそれで終わらず——今度は、“闇の陣営”と戦いを始めるようになった。

“動物もどき”になり、あの特別な夜と一緒に過ごしたことで、やっと彼らと同じ場所に立てたと浮かれていた。だが、現実はそうではなかった。ピーターがほんの一秒立ち止まった間に、彼らは何十キロも先を歩いていた。やつとの思いでネズミになったピーターに、今

度は命を賭けて人のために戦え、と彼らは言う。ピーターは、疲弊し始めていた。

☆

六つ目の卵の中は、暗闇と血の匂いに満ちていた。ピーターは“死喰い人”に捕えられ、“闇の陣営”の本拠地へ連行され、王座の間へと引つ立てられた。玉座へ優雅に腰を下ろしたヴォルデモート卿が、ピーターをじっと見つめる。ピーターは恐怖の余り、骨の髄まで震え上がっていた。

「ピーター・ペティグリユ、いや、ワームテールと呼んだ方が良いか？ お前の選択は二つだ。一つは俺様に忠誠を誓うか、それとも……」  
ヴォルデモート卿が不自然に言葉を区切ると、ピーターの目の前に、一人の人間が引き摺り出された。衣服は全て剥ぎ取られ、あばらが浮いた体軀には、痛々しい傷跡が至る所に走っている。目玉は二つともくり抜かれ、虚ろな眼窩からは血の涙が滴って石の床を汚していた。髪や爪は残らず引き抜かれ、舌や歯すら抜かれた口からは、唾液混じりの嗚咽が漏れている。男はもう正気を失っているようで、芋虫のように、床の上で力なくのたうち回るだけだった。ピーターの周りを固める“死喰い人”たちはその様子を見て、面白そうに笑っている。

「このように、酷い目に遭うか」

ヴォルデモート卿が気怠げな動作で指を振るうと、“死喰い人”たちが一斉に呪いをかけた。男は体じゅうを深々と切り裂かれ、声にならない悲鳴を上げて——やがて、血溜まりの中でピクリとも動かなくなった。ピーターは恐怖の余り、立っていられなくなり、ついには床に力なく崩れ落ちた。ヴォルデモート卿は、何時の間にか現れた巨大な蛇が、男の亡骸を飲み込んでいくのを眺めながら、静かに言った。

「お前は賢い男だ、そうだな？」

ピーターは震えながら、ヴォルデモート卿に忠誠を誓い、“闇の印”を左腕に焼き付けた。

——そうして、ピーターのダブルエージェントの日々が始まった。最初の方こそ、ピーターは罪悪感に突き動かされ、いつシリウスたち

に本当のことを打ち明けようかと悩んでいたが、やがてその気持ちは心の奥底へ沈んでいった。シリウスたちは、ピーターがいくら「真剣な話があるんだ」と相談を持ち掛けても、少しも耳を傾けようとはくれなかつた。それどころか、相変わらず戦場で鳴かず飛ばずのピーターを「役立たずだ」と叱りつけるばかりだったのだ。

その一方で、ヴォルデモート卿は、ピーターを高く評価した。実際、彼は自分自身が自覚している以上に、反“闇の陣営”勢力の重要な立ち位置にいたのだ。その彼から得られる情報は、ヴォルデモート卿に有益なものばかりだった。帝王は今までに聞いた事のないほどの、甘い言葉で、ピーターを誉めそやした。“死喰い人”たちから羨望や嫉妬の視線を向けられ、ピーターは有頂天になった。

☆

七つ目の卵の中は、恐れと不安が吹き荒れていた。「ジェームズとリリーの子、ハリーがヴォルデモート卿に狙われている」——反“闇の陣営”勢力内にその情報が流れ、緊迫した状況はより一層ひどくなった。シリウスは青ざめた表情で、いくつもある隠れ家の一つに、ピーターを呼び出した。ピーターが赴くと、そこにはジェームズとリリーもいた。リリーの腕には、すやすやと眠る赤子——ハリーが抱えられている。

「ワームテール、お前を“秘密の守り人”にする」  
「ど、どうして? どうして僕が?」

シリウスの言葉に、ピーターは恐怖と罪悪感の渦に飲み込まれそうになった。——いくらヴォルデモート卿に忠誠を誓っていると云っても、ジェームズたちはピーターにとって親友だ。今や、全ての“死喰い人”がポッター家の所在地を知りたがっている。その親友の家の情報を自分が知っているとなったら——、いや、あのお方は全てを見通す。とてもじゃないが、隠し通せない。ピーターは慌てて言った。

「僕には無理だよ。君やリーマスの方が、よっぽど適任だ。そうだろう?」

「リーマスにはスパイの嫌疑が掛けられてる。知ってるだろ?」シリ



ウスは苛立たしげに言い放った。

「それに、僕だと目立つからな。〃死喰い人〃どもに恨みを買って過ぎてる。目立たないお前がちょうど良いんだよ。

僕が囷になる。お前には安全な隠れ家を用意した。お前はいつもと同じように、そこで一人で震えていればいい。隠れるのは得意だろ？」

「シリウス・ワームに、そんな言い方・・・」

リリーが苦しそうに言ったが、シリウスは気にも留めていないような様子だった。ピーターの心は、氷水に浸したかのように、急速に冷え切っていった。――「安全な隠れ家」だって？そんなもの、あのお方の前では、藁作りの小屋に等しい。たった一吹きで、跡形もなくなってしまう。

“秘密の守り人”にするということは、秘密を封じ込めた人間を命の危険に晒すということだ。何度すがっても僕の話は聞いてくれなかつたくせに、いざ自分の命が危ないと知ると、僕の命を平気で危険に晒すのか。自分達は安全な場所に隠れておいて。

ポッター家の所在地をピーターに封じ込めた後、ポッター一家は“姿くらまし”をした。ピーターは、去り行くシリウスの背中に話しかけた。

「もし僕がヴォルデモートに捕まって、ポッター家の在処を言えと脅されたら？」

シリウスは立ち止まり、振り返らずにこう答えた。

「友を守るために、死ぬしかない」

――その時、ピーターの中で、ジェームズたちとの友情を大切に思う気持ち、静かに崩れていった。『ジェームズたちを守るために、僕が死ぬ』――美しい友情だ。じゃあ、僕は？僕のために、ジェームズたちは死んでくれるのか？いや、そんなはずはない。彼らは、僕の命のことなんて、大切に思っただけなんかいらない。じゃなければ、僕に厄介な秘密を押し付けるもんか。最初から、僕を友達と思っただけじゃなかったんだ。

ピーターは想像した。手酷い拷問を受けた挙句、ボロ雑巾のように

なつて死んだ、哀れな自分の姿。しかし、ジェームズたちは、自分の家でぬくぬくと過ごし、嗤っている。『あの役立たずのワームテールでも、少しは役に立ったな』と。

ピーターは一直線に、“闇の陣営”の本拠地へ向かった。そしてヴォルデモート卿の足元に恭しく跪き、こう言った。

「やりました、ご主人様。ポッター夫妻が、わたくしめを“秘密の守り人”にしました」

☆

十月三十一日、ピーターはネズミに変身し、ゴドリツクの谷のポッター家付近で、ヴォルデモート卿の様子を見守っていた。——あのお方は他の誰でもなく、僕だけに同行をお許しになった。ピーターは歪んだ満足感に酔いしれ、帝王がポッター家を破壊していくのを眺めていた。そして屋敷の二階部分で、目も眩むばかりの緑の閃光が炸裂し、——ハリーの泣き声は一向に止まない。ずっと続いている。おかしい。一体、どういうことだ？

ピーターはネズミの姿のまま、屋敷へ向かった。瓦礫だらけの玄関ポーチには、ジェームズの亡骸が転がっていた。ハシバミ色の目は光を失くし、虚空を見つめている。ピーターは、手摺を伝って二階へ上がった。子供部屋は、まるで嵐が過ぎ去った跡のようにひどい有様だった。ベビーベッドだけが、傷一つない綺麗な状態で残っており、その上に覆い被さるようにして、リリーがこと切れていた。ハリーは掠れた声で、ずっと泣き続け、物言わぬ母親にハグをせがんでいる。——しかし、ヴォルデモート卿はどこにもいない。

ピーターは、開け放たれた窓から外の景色を眺めた。まさか、もうどこかへ行ってしまったのか？一番の目的である、ハリーを始末せずには？窓枠から身を乗り出したピーターの髭を、冷たい夜風がふわっと撫でた。

——その時、ピーターの心の中に、あの夜の素晴らしい思い出が蘇った。冷たい夜特有の空気、心が浮き立つような背徳感、全ての生き物が寝静まった濃紺色の世界。確かに、自分はみんなよりも——というより、ホグワーツ中の誰よりも——遥かに出来が悪く、劣ってい

た。しかし、みんなはそれをからかいながらも、今に至るまで、決して自分を見捨てようとしなかった。

どうして、今までそのことに気が付かなかったのだろう。ポッター家の所在地も、“秘密の守り人”に立候補する仲間たちは多かった。彼らの方が、自分よりよほどしつかりしていたし、出来が良かったはずだ。けれども、シリウスはあくまでピーターに固執した。——他の誰でもない、自分を信頼していたからだ。僕たちは、友達だったんだ。ヴォルデモート卿による恐怖の支配から解き放たれ、自由になったピーターは、やっと真実に気づいた。だが、もう全てが遅すぎた。ピーターは、玄関ホールに倒れ伏した、親友の虚ろな瞳を思い出した。どさり、と音を立てて、リリーの亡骸が床に崩れ落ちる。

「ギイイイイイイイイ!!!」

ピーターの精神は、音を立てて崩壊した。滅茶苦茶に暴れ、自分自身を引っ掻き、傷つけ、のたうち回る。ネズミの尋常ではない断末魔の声に怯え、ハリーはますます大きく泣き叫んだ。

「……ハリー……ハリー!」

やがて轟くような大声と足音が、混沌とした子供部屋に飛び込んできた。——熊のように毛むくじやらかな大男、ハグリッドが、ハリーを助け出しにやって来たのだ。玄関ホールでジエームズの亡骸を見たのだろう、顔を悲しみに歪めたハグリッドは、ベッドに寄り添うようにして倒れ伏したりリーの姿が目に入ったとたん、ハリーをベッドごと抱き締めたまま、おんおんと泣き崩れてしまった。狂ったように踊り狂う奇妙なネズミの姿に、気づきもしないまま。

不意にバイクの駆動音が遠くの方でこだましたかと思うと、やがて屋敷の空気を震わせるほど大きくなっていった。——空飛ぶ魔法のバイク、シリウスのものだ。きつと自分の裏切りを嗅ぎ付けたに違いない。こちらへ向かっている。幸か不幸かピーターは、その音で自我の一部を取り戻した。

「そうだ、あいつが元凶なんだ」

ピーターはグルグルとその場を回りながら、自分に言い聞かせるように、何度も何度も呟いた。ネズミの声は小さく、ハリーもハグリッド

ドも、誰も気付かない。

「あいつが、僕を“秘密の守り人”にしなければ良かったんだ。僕のせいじゃない、あいつのせいだ。僕は悪くない。僕は悪くない……」

☆

——イリスは何時の間にか、荒涼とした大地の上に立っていた。とめどない流涙が、乾ききった地面を潤していく。しゃくり上げながら足元に目をやると、足跡はずっと先の方まで続いていた。あれほど沢山転がっていた卵は、もうこの先にはどこにもない。代わりに、小さな人影がよろめきながら、地平線の果てに向かって休むことなく進み続けている。

イリスは、この世界が一体何なのか、理解した。卵の正体が何なのか、小さな人影が誰なのかも。イリスは走り出した。人影に近づく毎に、その足跡は乱れ——やがて血が混じり、肉片や体液までもが混入するようになっていった。イリスは息を荒げながら、足跡の主の下にたどり着いた。

「ああ、イリス。待ちくたびれたよ。来てくれたんだね」

ピーターは振り返ってイリスを見ることはなく、前を向いたまま、穏やかな声で言った。しかし、歩き続けるその足は、イリスが思わず顔を背けてしまうほど、ひどい有様だった。ボロボロに傷つき、皮膚は破れ、筋肉や骨が突き出し、足を前に向かって踏み出すたびに、血や体液、肉片が周囲に飛び散っている。それでも、ピーターは歩くことを止めなかった。

「ピーター、私……」

「イリス、みなまで言わなくても分かる。あの卵の群れを見たんだね」  
ピーターの声には、はつきりとした恐怖の感情が滲んでいた。

「世にも恐ろしい化け物が生まれた卵だ。あいつらは生まれるたびに、互いを喰い合って、やがて一匹の大きな化け物になった。あの空を翔けているのが、それだよ。」

だが、イリス。安心しなさい。あいつの足はとても遅い。こうして歩き続けていれば、決して追いつけない。だが、疲れて一瞬でも立ち止まると、たちまち追いつかれてしまう。あいつはとても素早いん

だ」

ピーターが進む先には、見渡す限りの広大な地平線が広がっていた。しかしまるで神様が、世界をそこから綺麗さっぱり消してしまつたかのように、そこから先は、何も無い。イリスは戸惑つて、ピーターに問い掛けた。

「一体、どこへ向かっているの？地平線の先には、何も無いよ」

「ああ、何も無い」ピーターは当然だと言わんばかりに、応えた。

「だが、そこまでは安全だ。そうだろうか？」

ピーターは、隣を歩くイリスに向かって優しく微笑んでみせた。けれどもイリスには、その顔が悲しくて泣いているようにしか見えなかった。——イリスは泣き腫らした目で、じっと地平線の先を見つめた。確かに、ピーターの言う通り、全てを投げ出して逃げ続けていれば、安全な日々を送ることが出来るかもしれない。だけど、そこには何も無い。ただ死ぬまで、息を吐いて吸い、心臓を鼓動し続けるだけの生活。それに、何の価値があるっていうんだ？イリスは震えながらも、ピタリと立ち止まった。

「二緒には行けないよ、ピーター。たとえどんなに苦しくても、怖くても……私は、みんなと一緒にいたい」

「……僕だつて」

絞り出すようなピーターの声は、さつきよりもずっと若々しく張りがあつた。見る見るうちに、ピーターの後ろ姿は若返り、グリフィンドールのローブを纏った学生時代のものへと変わる。彼にとって、一番輝かしく栄光に満ちた時代の姿だ。

「そうしたかつた。でも、もう遅いんだ」

ローブに包まれたピーターの手を、イリスは追い継り、必死で掴んだ。

「そんなことない！私、ピーターが苦しんでいたこと、みんなに分かつてもらうよ。……罪を償おう、ピーター」

イリスは、卵の中に隠された“罪の記憶”を見た。ピーターの犯した罪は、到底許されることではない。しかし彼に石を投げ、責め立てることの出来る人間が、一体どれくらいいるのだろうか。人間は誰しも

が自分の命を顧みず、他者を守ることの出来る強さを持てる訳ではない。また、強い誘惑や恐怖に打ち勝てる忍耐強さを維持し続ける人間も、そう多くいる訳でもない。イリスは自分自身が強い人間ではないと、自覚していた。だから、自分自身に負けたピーターの心の弱さが、痛いほどに良く分かった。

ピーターは立ち止まり、初めてイリスを振り返った。小太りの気の弱そうな男の子が、顔をぐしゃぐしゃに歪め、泣いている。

「ああ、こんなはずじゃなかったんだ。僕は、僕はなんてことを……！」

イリスは何も言わず、咽び泣くピーターを、潰れるほど強く抱き締めた。

「ワーミー？」

不意に後方から、柔らかな女性の声があった。二人は声のした方向を見つめ、そして絶句した。——それは、小さきまざまな大きさの人間を寄せ集め、ぎゅっと圧縮してドラゴンの形に成形したかのような、醜悪でおぞましい化け物だった。不自然に振れた身体の一部から覗くいくつもの顔は、みんな瞬きもせず、ピーターを不気味に見つめている。化け物は、恐怖におののくピーターを掴み上げた。

一番巨大な女性の顔——その美しい緑色の目が、ピーターを睨み付け、耳をつんぎくような金切声でピーターを責め立てる。助けようと我武者羅に手を伸ばしたイリスは、何者かに首根っこを引っ掴まれ、どこかへ遠いところへ投げ飛ばされるのを感じながら、意識を手放した。

☆

イリスは気が付くと、現実世界へ戻っていた。冷たい石の床に倒れ込んだイリスに、苦しみに喘いでいたピーターが、ギラリと憎悪の視線を突き刺す。

「き、君は、私の心に、入り込んだな！」

ずっと誰にも言わずに秘めていた、自分の心の内を勝手に覗き込まれたことで、怒り狂ったピーターは泡を飛ばしながらそう怒鳴ると、イリスに馬乗りになり、憎しみに任せてその細い首を絞めた。イリス

はたちまち、意識が遠のいていった。おぼろげに霞んだ視界の中で、眼前に輝くステンドグラスを突き破り、熊のように大きな黒犬が侵入し、ピーターに襲い掛かったのが見えた。

☆

傷だらけで息も絶え絶えとなったクルックシャンクスが隠れ家にとどり着き、イリスの危機を伝えた時、シリウスは風のような速さで森を駆け抜け、中庭を飛び越し、件の場所までやって来た。

そしてシリウスがステンドグラス越しに目にしたのは——ぐったりとしたイリスに馬乗りになり、その首を締める、宿敵・ピーターの姿だった。シリウスの全ての感情が爆発した。何も考えず、衝動に任せてステンドグラスを突き破る。突然の侵入者に驚いて、目を丸くしたピーターは、すぐさまイリスを突き飛ばし、ネズミに変身した。

恐ろしい唸り声を上げ、シリウスはピーターに襲い掛かった。ピーターは寸でのところで逃げおおせ、ひび割れた壁の隙間に、スルンと入り込んだ。

——それで逃げたつもりか、忌まわしい裏切り者め。たぎる怒りは、シリウス自身を燃やし尽くすほどの激しきで、『殺せ、殺せ！』と狂ったように彼を急ぎ立てた。ここにはイリスの杖も、“忍びの地図”もある。どんな手段を使っても、今すぐあいつを目の前に引き摺り出し、そして殺してやる。

シリウスが本能に従って、今まさに人間の姿に戻ろうとしたその時

——か細い呼吸音が、シリウスの耳をくすぐった。その音のした方向を睨み付けた瞬間、シリウスの中で膨れ上がった憎悪の感情が、急速に静まっていった。

イリスの汗と涙で、ぐしやぐしやに汚れた顔の下には、嘔吐物が広がっていた。滅茶苦茶に暴れたのだろう、衣服は乱れ切っている。スカートの下には、恐らく失禁してしまったのか、黒い水溜りが広がっている。——シリウスには、一目で分かった。彼女は、ピーターに“磔の呪文”を受けたのだと。“死喰い人”共が好んで使った、拷問の呪いだ。かつてシリウスは何度も、この呪いを受けてこんな痛々しい

姿になった仲間たちを見ている。

『イリスー』と叫んだ声は、犬の鳴き声に変換された。——ああ、なんて小さく華奢な身体だ。こんな小さな女の子に、自分は助けを求め、縋っていたのか！シリウスの心の中を、凄まじい罪悪感が支配した。かつての忌まわしい罪の記憶、ジエームズとリリーの亡骸の姿が、イリスの弱り切った姿と重なった。

——今までの自分は、どうかしていた。こんな事態になることなど、想定出来ていただろうに。怒りと憎しみに任せて、この子を巻き込み、傷つけてしまった。ああ、自分のせいだ。シリウスは、駆け出した。

☆

スネイプは夜間の見回りをしている最中、フリットウィック先生に声をかけられた。小さな姿の後ろに、新しくホグズミード村で仕入れたのだろう、美しく輝くクリスマスオーナメントをふわふわと浮かせている。

「こんばんは、セブルス。よろしければ、見回りの交代の前に、中庭の飾り付けを手伝ってもらっても？」

「構いませんとも」

二人が連れ立って中庭へ向かおうとすると——、不意に目の前の廊下を、何か<sup>が</sup>塞いだ。

「あれは何だ？」フリットウィック先生が、キーキー声で叫ぶ。

スネイプは目を凝らした。細々とした月と雪明かりに照らされ、大きな黒犬の姿が浮き上がった。犬は身じろぎもせず、じつと二人を見つめている。そして、二人が自分を視認したことを理解した瞬間、身をひるがえして、次の角を曲がった。

「こら、待ちなさい！全く、またハグリッドの動物が逃げ出したのか？」

二人が揃って角を曲がると、さっきの犬が廊下の先で待っていた。——まるで、何かの道案内をするかのように。しかし、今度はさっきよりずっと距離は近い。フリットウィック先生が杖に大きな灯りを点すと、その犬の姿がよく見えた。大きな犬だ。妙に凄味のある、冷



たい灰色の瞳をしている。その目を見た時、スネイプの記憶の奥底が、ちくりと痛んだ。

——忌まわしいあの四人組。憎んでも憎み切れないあの男の隣にいて、いつも笑いながら嫌がらせの数々を仕掛けて来た、あいつ。そう言えば、かつて自分が奴らを懲らしめようとこつそり後を付けた時、奇妙な姿をしていたことが、しばしばあった。ジェームズ・ポッターは頭に鹿の角が生やし、シリウス・ブラックは狼のような黒い耳と尻尾が生え、その様子をピーターとリーマスが笑って見ていた。あの時は、また下らないことをしていると気にも留めなかったが——冷たい灰色の目、狼のような耳と尻尾、まさか、あれは——。

「シリウス・ブラック……」

記憶の底から湧き上がった、忌々しいその名前が意図せずしてスネイプの口から出たその時、犬はぴくりと身を震わせ、また駆け出した。「待てっ！」

——その瞬間、スネイプの心を憎悪の感情が支配した。追い縋るフリットウィック先生の言葉など、もう彼の耳には届かない。目の前の犬に焦点を合わせ、“切り裂き呪文”を唱える。光線は狙い変わらず命中し、犬の腹部を大きく切り裂き、夥しい量の血が噴き出した。

やがて犬は、よろめきながら立ち止まった。壊れたステンドグラスの穴から吹き込んだ雪が、その傍で倒れ伏した一人の少女を包んでいる。——犬は少女を見て、スネイプを見た。そして穴から飛び出し、白銀の雪景色に、痛々しい血の跡を点々と残しながら、外の世界へ走り去った。

スネイプは、犬の視線に誘われるように少女の姿を視界に入れた後、思わず絶句した。——イリス・ゴントだ。近づけば近づくほど、彼女がひどい暴行を受けていたことが分かった。“磔の呪文”だ。しかも、一度や二度ではない。何度も受けている。

「ゴント！」

スネイプは形振り構わず、イリスを抱きかかえた。彼女はそれに応えるように、透明な胃液を少し吐いたあと、ピタリと呼吸を止めた。スネイプの脳裏に、かつての辛く苦しい思い出が蘇る。彼は、自分で

も気づかないほど無意識の内に、かつての幼馴染とイリスとを重ねていた。——あいつは、彼女だけでなく、この子まで奪うつもりなのか。「セブルス、一体・・・ああ、ミス・ゴーント！なんということだ！」やがてフリットウィック先生が追いつき、スネイプの抱えているものに気づくと、甲高い悲鳴を上げる。

「フィリウス、すぐにポンフリーに知らせを。この子は、シリウス・ブラックに暴行を受けた」

## Act 15. 変わるもの、変わらないもの

イリスは、医務室でマダム・ポンフリーによる懸命な看護を受けながら、自分の体に十分な魔法力が満ちるまで、短い覚醒と長い睡眠のサイクルを繰り返した。

——三度目の覚醒の時、イリスはゆっくりと目を開いた。意識も視界も、何もかもがぼんやりしている。一体、ここは何処だろう。誰かの話し声がする。年老いた男性の声と、暗い調子の女性の声。けれども肝心の話の内容が、耳から脳にのろのろと移動していくように聴こえてちつとも理解できない。

イリスは枕の上で頭を動かした。霞かすみがかった視界の中で、小豆色のローブに身を包んだ女性と、漆黒のマントを羽織った男性が向き合っている、何事かを話し合っている。その時、イリスの視線に気が付いたのか、男性が此方を向き、杖を持って近づいて来た。男性はよく見ると小太りで、イリスのベッドの傍までやって来ると、心配そうな口調で話しかけた。

「イリス！目が覚めたんだね。安心しなさい、もうあいつはいない。ここは安全だ」

『イリス、仕方がないんだ。私はまだ死にたくない。生き残るためなんだ』

しかしイリスには、男性が自分を労わるために掛けてくれたその言葉が、全く違ったものに聴こえた。

『小太りの男性が、自分に対して杖を向けている』——たったそれだけの事で、つい数時間前に受けたあの恐ろしい拷問の記憶がフラッシュバックし、心身を蹂躪していく。イリスは、男性をピーターだと誤認した。——全身からぶわつと汗が噴き出し、心臓は激しく鼓動を打ち始める。完全なパニック状態に陥ったイリスは、息を荒げながら、男性から逃れるように這いずって、ベッドから転げ落ちた。

「大臣、杖をお仕舞いになってください！この子は、それに対して恐怖心を抱いています！」

「ああ、わ、悪かった。ほら、イリス、杖をしまったよ！」

『まだそんな力が残っているのか。．．．クルーシオ、苦しめ!』

イリスの視線の先と反応を一目見ただけで、素早く現状を把握した女性——マダム・ポンフリーは、鋭い声で言い放ちながらイリスを抱きすくめた。しかし小太りの男性——ファッジ大臣がいくら優しい言葉を掛けても、彼女の耳には届かない。イリスはポンフリーの拘束から抜け出そうと、ますます強く暴れた。もうイリスはここがどこで、周りにいるのが誰かなのも理解できないほど、ひどく錯乱していた。ファッジはどうしていいか分からない様子で、杖を仕舞ったり出したりしては、二人の周りをうろうろと歩き回っている。

「ゴーント!」

やがて騒ぎを聞きつけたのか、医務室の扉が大きく開かれてスネイプが入ってきた。イリスのただならぬ様子を見るや否や、大股で歩み寄ると、ポンフリーに代わって彼女を強く抱き締める。

「ゴーント、私の声を聞け。もう大丈夫だ。あいつはどこにもいない」  
喘ぐように呼吸を繰り返すイリスは、空気に混じってツンとした独特の匂いが鼻を突いたのに気づいた。——無数の薬草や材料が混ざり合う事で生まれた、不思議な香り。芳香は鼻から脳へ伝わり、イリスに良い記憶を思い出させた。

この匂いのする人は、いつも私を助けてくれた。『この人はピーターじゃない』——イリスは硬直していた身体の力を抜き、スネイプのローブに深く顔を埋め、子犬が母親に甘えるように、ローブの匂いをくんくんと嗅いだ。そして彼の腕の中でポンフリーが差し出す薬を飲み、あつという間に深い眠りに落ちた。

やつと眠ったイリスを見て、三人はそれぞれ安堵のため息を零した。スネイプはイリスを慎重にベッドに横たえ、ポンフリーは悲しみの涙を堪えながら、イリスの首へ薬に浸した布を巻き付ける。

「言語道断、何たることだ．．．ブラックが学校に侵入していたなんて。デイメンターは一体全体、何をやっていた?」ファッジは怒りに震える声で言い放った。

「動物もどき」です。閣下」スネイプは冷え冷えとした声で応えた。「あやつは動物に変身し、デイメンターの監視をかくぐって学校へ

侵入した。恐らく、一年の中で最も人気のないクリスマス休暇を狙い、ポッターを殺害しに来たのでしょう。だが、いくら動物に変身できても……」

「寮に入るには、合言葉が必要だ。だから、同じ寮生であるこの子を襲ったというのかね？」

ファッジが後を続けた。まるで理解しがたいものと対峙しているかのように、眉根を寄せてたつぷりとした顎を撫で、落ち着かない様子でその場を歩き回る。

「しかし、なぜあの子は、夜中に寮を抜け出していたのだ？……（ファッジは目を見開き、息を飲んだ）……まさか、いじめで寮に居場所が……」

「大臣、これを。彼女のいた場所に落ちていたものです。フリットウィック教授が拾いました」

スネイプはファッジに、小さく裂かれた羊皮紙片を差し出した。——そこには乱雑な文字で、『友の命を助けたければ、夜更けに一人で中庭に來い シリウス・ブラック』と書かれている。

「学校内に侵入した奴は、この子の目に着く所にこれを置いたのでしょうか。そして彼女はそれを鵜呑みにし、寮を出た」

「だが何故、この子は危険を顧みず、たった一人で向かったのだ？もし本当に友人の命が危機に晒されていたとしても——相手は狂った殺人鬼だ——子供一人で立ち向かえる相手ではない。何より、彼女はそんな無謀な事をするようには見えないが……」

「閣下。この子は、ハリー・ポッターの親友です。少なからず、彼の影響を受けている」

スネイプは土気色の顔を歪め、いつも通りの陰湿陰険な物言いで、話を続けた。

「ポッターは人々から英雄視され、自分が特別な存在だと思い込んでいる。彼の親友の、ウィーズリーやグレンジャーも同じです。彼らはこれまでも色々と上手くやりおせ、どうも自分達の力を過信している節があるようで……。それに、勿論ポッターの場合、校長が特別扱いで、相当な自由を許してきました。彼は校則のすべてを違反し、好き勝手な行動をして目立つ事が好きなのです。」

そしてこの子は、その彼をまるで兄のように慕っている。彼のようになりたいたいと憧れているのです。だからこの子は一人で行った。尊敬するポッターなら、そうするだろうと。——だが、自分の助けなど待っている友はいない。いるのはブラックだけだった」

二人の間を、重苦しい沈黙のヴェールが包み込んだ。やがてイリスへ視線を投げかけながら、ファッジが口火を切った。

「ああ、ブラックは合言葉を尋ねたのだろう。やつは、この子を“例のあの人”のものだと思い込んでいる。だから彼女を呼びつけた。ハリーのそばにいながら彼に手をかけなかった事も、責めたに違いない。しかし彼女はハリーの親友だ。合言葉を教える事も、彼を殺す事も拒んだ。そしてその事にブラックは激昂し……“磔の呪文”を掛けた」

「それも一度や二度ではありませんわ、大臣！」ポンフリーが涙ながらに訴える。

「何度でもす！この子の魔法力が生まれつき潤沢でなければ……シヨック死してしまっても、可笑しくない状況でした」

「勇敢な子だ、なんと勇敢な」ファッジは、押し潰されたような声で唸った。

「そして、何度痛めつけても口を割らない彼女に殺意を覚え、ブラックは首を絞めた」

スネイプが怒りに打ち震えた声で後を続けると、ポンフリーは鼻をすすりながらイリスの髪を撫で、ファッジは唇を噛み締めた。

「か弱い子供に何ということ。正に鬼畜の所業だ。この子はやはり、日本に帰らせるべきだった」

「閣下、これで信じていただけの筈です。この子は“あの人”の意志など継いでいないと。この子についての良からぬ噂は間違いなくデタラメであると、公の場で証言して頂けますか？」

「ああ、勿論だとも」ファッジは力強く頷いた。

「この子は命を賭けて親友を——ハリーを守った。この姿を見て、一体誰がそんな事を言えるだろう！」

ファッジはスネイプを見つめ、しみじみとした口調で言った。

「この子が生きているのは君のおかげだ、スネイプ。君がいなければ、彼女は命を落としていたか、やつにもつと惨い目に遭わされていたに違いない」

「ええ、その可能性も充分にあり得ました、閣下。奴は人々に対する見せしめのために、この子の下へ吾輩を導いたのでしよう。だが、相手が悪かった。吾輩は、奴に深手を負わせる事に成功致しました。そう長くは持ちますまい」

☆

日付が変わってクリスマス・イブの早朝、イリスの意識はゆっくりと浮かび上がった。なんだかとてもふらふらしている。けれど今、自分が医務室にいる事だけはしっかりと理解できた。手足が鉛のようだ。瞼が重くて開けられない。この心地良いベッドに、何時までも横たわっていたい。

《起きたのか?》クルックシャンクスの声だ。

陽だまりの匂いが鼻腔を掠め、イリスは頑張って瞼をこじ開けた。——クルックシャンクスが、イリスの枕元に座り込んでいる。イリスが身じろぎしようとする、猫は首を横に振り、前足で医務室の扉の方を差した。そこにはマダム・ポンフリーがいて、瑠璃色に輝く液体の入ったボールに、清潔な布をしっかりと漬け込んでいる。

《イリス、おれもシリウスも無事だ》

クルックシャンクスは、今イリスが一番聞きたかった事を教えてくれた。安堵のため息を零したイリスに、猫は不器用に微笑んで見せた。

《シリウスから伝言を預かってきた。どうか何も言わずに、このまま聴いてほしい》

——そして一瞬の沈黙の後、猫から静かに告げられた伝言は、イリスにとって本当に驚くべきものだった。

《“イリス。私のせいで、君を危険な目に遭わせてしまった。本当にすまない。》

この先、君は誰から何を言われても『ブラックに襲われた』と言うんだ。些細な事だが細工もした。後は、上手く周りが対処してくれる

だろう。安心しなさい、ピーターは必ず私が始末する。君は何があってもこの医務室から出るな。

君は私を地獄の底から救い上げてくれた。そのことを、私は永遠に忘れないだろう。あともう一つ、ハリーに伝えてくれ。『“忍びの地獄”は元の持ち主のところへ帰ったよ』と』」

「ま、待って、クルツクシャンクス！ 訳が分からないよ、どういうことなの？」

イリスは掠れた声で問いかけた。——シリウスは一体、何を言っているんだ？ 他でもない彼自身が、ピーターの魔の手から自分を救ってくれたのに。しかしクルツクシャンクスはイリスの問いに答えず、彼女の頬にふわふわした顔を擦り付けるだけだった。

《さよならだ、イリス。おれはシリウスと共に往く。ハーマイオニーには、新しい猫を飼えと言ってくれ》

「待って、行かないで！」

イリスは去り行くクルツクシャンクスを引き留めようと、無我夢中で手を伸ばした。けれども猫はその手を器用に擦り抜け、物陰にするりと入り込み、どこかへ歩き去って行く。

「ああ、ゴースト。意識が戻ったのね」

イリスの声を聞きつけ、ポンフリーが作業を中断し、優しげな笑みを浮かべて此方へやって来た。そして、イリスが必死にベッドから這い出そうとしている様子を見て取ると、慌てて彼女をベッドに押し込んだ。

「何をしているのですか、ゴースト！ 安静にしていなさい。——大丈夫ですよ、ブラックはもうじき捕まります。魔法省から派遣された闇祓いや先生方が、学校中を搜索しています。ここは安全ですよ」

——『シリウスが捕まる』だって?! イリスはたまらず驚愕の叫び声を上げた。しかしその声は廊下まで聴こえたらしく、次の瞬間、ファッジ大臣とスネイプが医務室へ飛び込んできた。

「イリス、何事だね？」

ファッジは慌てふためいた口調で尋ね、自分の杖を——イリスを怖がらせないために——ローブの奥底にサツと仕舞い込んだ。



「すっかり眠っていないといけないよ」

「大臣、どうか聞いてください！」

イリスは無我夢中で、呆氣に取られるばかりのファツジのローブに縋り付いた。

「シリウス・ブラックは無実です！ピーター・ペティグリューが、自分が死んだと見せかけたんです！私はピーターに拷問を受けました！」

三人は神妙な顔で互いを見つめ合った。ファツジはイリスの視線に合わせてしやがみ込み、微かに笑いを浮かべて首を横に振った。

「イリス、君は混乱している。あんなに恐ろしい目に遭ったのだ。さあ、横になりなさい。この件は、我々が全て掌握している。ブラックは必ず捕まえるよ、安心しなさい」

「掌握してません！」イリスは叫んだ。

「捕まえる人を間違えています！」

しかし、三人はイリスの話に耳を傾けてはいるものの、話の内容までは信じていないようだった。みな一様に沈黙し、イリスに対して憐れみの視線を注いでいる。イリスにはそれが、とてつもなく不気味に思えた。——何故みんな、自分の話を信じてくれないんだ？拷問を受けたのは、他でもない自分の筈なのに。イリスは焦って、ますます強くファツジにしがみ付いた。

「大臣、ピーターはネズミの“動物もどき”だったんです！ロンのネズミのスキヤバーズだったんです！指を切り落として、自分が死んだという事にして、事件の犯人をシリウスのせいにしたんです！それに——」

「お分かりでしょう、閣下」スネイプが静かに言った。

「“錯乱の呪文”です。ブラックは見事に術を掛けたものだ」

「私、錯乱してなんかいません！」

イリスはついにボロボロと泣き出した。——どれほど喉を嚔らして真実を訴えても、みんな自分の話を信じてくれない。まるで自分の発した言葉が、全て嘘になる呪いを掛けられたみたいに。ひどい癩癧を起こした子供のように泣きじやくりながら、ブラックの無実を訴えるイリスを、ファツジは宥めるように優しくあやしつけた。

「イリス、落ち着きなさい。もう君は休むべきだ。・・・ポンフリー、この子はしばらく聖マンガで入院した方が良いのではないかね？もしかしたら他の呪いも受けている可能性がある」

「ええ、その件でさきほどフクロウ便を送ったばかりです。ゴーント、この薬を飲んで。何も心配することはないのよ」

ポンフリーはイリスに小さなゴブレットを差し出した。中には、澄んだ水の色をした薬がチャプチャプと揺れている。——強力な眠り薬、“生ける屍の水薬”だ。こんなものを飲まされたら、たちまちぐつぐつと眠ってしまう。一刻も早くシリウスを助けないといけないのに！イリスは我を忘れてゴブレットをポンフリーの手から払い落とした。床に落ちたゴブレットは、粉々に砕け散る。

「いやっ、薬で眠らせないで！」

「まあ、何ということ！」ポンフリーがイリスの暴挙に、たまらず悲鳴を上げた。

「ゴーント」

スネイプは深々と眉根を寄せ、新しいゴブレットをポンフリーから受け取ると、イリスを落ち着かせるために、静かにベッドに乗り上げた。イリスは何とかしてスネイプ——の持つ薬入りのゴブレットから逃げ出そうと壁に背中を擦り付けながら、縋るような目で彼を見つめた。

「スネイプ先生。どうか、どうか信じて下さい、お願いします。私、一番強い“真実薬”を飲みます。何度でも証言します」

「もう何も喋るな。君は本当に良く頑張った。さあ、この薬を飲みなさい」

しかしスネイプは、嫌々と言わんばかりに首を振るイリスの頭を優しく抑え込み、ゴブレットの口を近づけた。——もう駄目だ。イリスは自分の非力さをひしひしと感じ、涙を流した。シリウスが、また無実の罪で捕まってしまう。イリスの口内に、今まさに薬が流し込まれようとしたその時——まるでそれが幻であったかのように、何の前触れもなく、ゴブレットがスネイプの手から消え去った。

☆

「その子を離してやりなさい、セブルス」ダンブルドアの声だ。

四人は一斉に、声のした方を振り向いた。——医務室の扉が開け放たれ、ダンブルドア校長が真剣な表情を湛えて立っていた。その後ろには、息を切らした様子の管理人、アーガス・フィルチが佇んでいる。「暫くの間、イリスと話がしたい。コーネリウス、セブルス、ポピー。席を外してくれないかの」

「校長先生！」ポンフリーが慌てた。

「この子は休息が必要なんです。さきほどもひどい痲癩を起こして——」

「ポピー。この子に必要なのは、休息ではない」ダンブルドアは穏やかな口調で言った。

「現状を理解する事じゃ」

ポンフリーは大きなため息を吐き、イリスを心配そうな目付きで一度見て、病棟の端にある自分の事務所に向かった。ファッジはベストにぶら下げていた大きな懐中時計を見た。

「そろそろマクネアが来る頃だ。迎えに出て、処刑が延長になった事情を説明しなければ。ではアルバス、終わったら上の階で待っているよ」

ファッジは医務室の外で、スネイプのためにドアを開けて待っていた。しかし、スネイプは動かなかった。先程のダンブルドアの言葉がどうにも引つかかる、と言わんばかりに目を細め、囁くように小さな声で言った。

「まさかこの子の話を信じる訳ではないでしょうな？」スネイプはダンブルドアの方に一歩踏み出した。

「お忘れになってはいますまいな、校長？ブラックは十六歳の時に、人殺しの能力を露わにした。かつて吾輩を殺そうとした事を、忘れてはいますまい？」

「セブルス。わしの記憶力は、まだ衰えてはおらんよ」ダンブルドアは、どこかイリスにも言い聞かせるように、静かに言葉を続けた。

「リーマスの秘密を暴こうとしたきみに、シリウスが行き過ぎた悪戯心で——完全な人狼になりかけていた彼と会うように、そそのかした

事も。——そしてそれをジェームズが阻止し、きみの命を救った事も」

その言葉を聞いたスネイプは納得するどころか、ますます土気色の顔を怒りで歪めた。踵を返し、フアツジが開けて待っていた扉から肩を怒らせて出て行つた。そして医務室には、イリスとダンブルドアの二人だけが残された。ダンブルドアはキラキラ光るブルーの瞳で、イリスをじつと見つめた。

「我々は、何という過ちを犯してしまったのじゃ。——イリス、シリウスは無実なんだね？」

ダンブルドアは、イリスの話を——シリウスの無罪を信じてくれた。イリスはもう我慢出来なかつた。何度も何度も頷きながら、ダンブルドアにすがり付き、思いの丈をぶつけるように泣きじやくつた。

——イリスの涙が落ち着くのを待つてから、ダンブルドアは事の次第を話して聴かせた。『イリスがブラックに暴行を受けた』という知らせが、学校中に広まった時、フィルチが息せき切つた様子でダンブルドアの下へやって来た。そしてシリウスについての真実を、包み隠さずダンブルドアに話してくれたのだと言う。ダンブルドアが、かつてシリウスの親友だったルーピンにその事を告げると、彼は強い自責の念に駆られながら、今まで秘めていた、シリウスたちが在学中に非公認の“動物もどき”になるに当たつた経緯を明かしてくれた。ルーピンは現在、シリウスを救うために、密かに彼の行方を捜しているのだと言う。

イリスは世界じゅうに希望の光が満ちていくような気持ちをした。ダンブルドアがいれば、安心だ。きつとシリウスは助かる。——しかし、彼の表情は硬く、口調は静かなままだつた。

「イリス、どうか落ち着いて聞いておくれ。実際のところ、状況は非常に厳しいのじゃ。シリウスの無実を証明するものは、今の時点では何一つないに等しい。あの通りには、シリウスがペティグリューを殺したと証言する目撃者が沢山いたのじゃ。わし自身、魔法省に、シリウスがポッター家の“秘密の守り人”だつたと証言した」

ダンブルドアはその時の光景を思い返しているのか、瞳を曇らせ

た。

「対してシリウスの証人は、君たち十三歳の子供、スクイブであるアーガス、そして猫、人狼であるリーマスのみ。みな、我々の仲間内では『立場が弱いとされている者』ばかり。君らがいくら支持したところで、ほとんど役には立たぬじやろう。それに、リーマスとシリウスは旧知の仲でもある」

イリスはダンブルドアの深刻な表情を見上げ、さつきまでの幸福な気分が跡形もなく消え、足元の地面がガラガラと急激に崩れていくような感覚に囚われた。ダンブルドアなら、何もないとこころからでも、驚くべき解決法を引き出してくれると信じていた。——だが、そうではなかった。いくらダンブルドアでも不可能な事があるのだ。『シリウスは助からない』——その残酷な事実を突きつけられ、茫然とするばかりのイリスの肩に手を置き、彼はこう言った。

「分かるかね、イリス？ 必要なのは確固たる証拠——ペティグリュ——そのもの。生きていても死んでいても、とにかく彼がいなければ、シリウスに対する判決を覆すのは不可能なのじゃ」

「でも校長先生」イリスは悲しみに喘ぎながら言った。

「ピーターはどこにもいません。きつとネズミに変身して、どこか遠くへ逃げてしまったのかもしれない！」

「いや、その可能性は低い。必ず、この学校内のどこかに潜んでいるはずじゃ」

ダンブルドアは厳しい口調でそう言うと、医務室の扉へ向かって歩き出した。

「きみは本当に良く戦った。安全のために、医務室から決して出てはならぬ。わしは理解のある友人らに協力を求め、少しでも上手く事が運ぶよう尽力しなければ」

最後にイリスへ労いの言葉を掛けて、ダンブルドアは部屋を出て行った。——イリスは逸る気持ちを抑える事が出来ず、そわそわしながら周囲を見渡した。医務室を出るなど言われても、自分だけじっとしているなんて、とてもじゃないが出来そうにない。一刻も早くピーターを捕まえないければ、シリウスがまたアスカバンへ引き摺り戻され

てしまうのだ。

「ハリー、ロン、ハーミー……」

イリスはまるで祈りの言葉のように、親友たちの名前を呟いた。今ここに彼らがいてくれたら、どんなに心強いだろう。救いを求めるように、グリフィンドール塔のある方角へ顔を向けた時、不意にマクゴナガル先生の緊迫した声で校内放送が流れた。

『ホグズミード村で、ブラックの目撃情報がありました。生徒達は引き続き、寮外への外出を禁じます。作戦に参加している先生方、応援の方々は、至急ホグズミード村へ向かって下さい』

イリスが慌ててベッドの傍にある大きな窓を覗くと、大勢の魔法使いたちが、深々とした雪原の中を同じ方角へ向かって進んでいくのが見えた。ざっと数えただけで、二十人以上はいる。シリウスの助っ人は猫だけだ。おまけにシリウス自身も衰弱し切っていて、今まで気力で持ち応えてきたようなものなのに。——イリスは思わず、絶望の悲鳴を上げた。シリウスに勝ち目は無い。なんとかして彼を助ける方法はないだろうか？

——その時、窓枠の外を何かが動いた気がして、イリスは視線を下ろした。そして心臓が止まりそうになるほど、驚いた。信じられない、スキヤバーズだ！古ぼけた硝子越しに、灰色の老ネズミが欠けた前足の指をちよちよこと動かし、黒いビーズのような目でイリスをじっと見つめている。暫くしてスキヤバーズは窓枠から飛び降り、どこかに向かって駆け出した。

「待って、スキヤバーズ！」

イリスは何も考えられなかった。無我夢中で枕元の杖を掴み、“開錠の呪文”で窓の鍵を開けると、ネグリジエの上にローブを羽織る事も忘れ、裸足のままでスキヤバーズを追いかけた。まだ充分に回復し切っていない体は鉛のように重く、深く降り積もった雪も手伝って、思うように進めない苛立ちを感じながら、イリスは覚束ない足取りでネズミを追い続ける。学校中の人手は今、ほとんど村へ回されていて、一人と一匹の奇妙な鬼ごっこを不審に思う人間は、幸か不幸か誰もいなかった。

やがてスキヤバーズは、雪の重さでずっしりと枝を俯かせ、ますます鬱屈とした雰囲気を募らせるばかりの“禁じられた森”へと入り込んだ。イリスも森の中へと続き、息を荒げながら、懸命にスキヤバーズに手を伸ばす。——あと、もう少しで手が届く。イリスの指先が、ついにスキヤバーズの尻尾に触れた。

——その時、目の前が真つ赤な光に染まり、イリスの視界は真つ暗になった。

☆

「二丁上がりだ。まったく、学習心や警戒心の欠片もありやしねえ。こんな扱いやすい生き物、おれは今までお目に掛かった事がないね！」

魔法省の処刑人であるマクネアは、“失神呪文”を受けて気を失ったイリスの身体が重力に従って地面に崩れ落ちる前に、片手で軽々と抱き上げた。そしてスキヤバーズ——によく似せたネズミに杖を向け、“服従の呪文”を解除する。ネズミはあつという間に野生に戻り、森の奥へと消えて行った。

「面倒臭え奴らは二セの情報を押まされて、みんな村に行っちゃまったし。・・・チツ、やっぱあれから体重は増えてねえか。この子と同じ重さのガリオンをくれるっつー約束だったのによ。」

おい、ロックハート。ぼやつとしてねえで、さつきとこつちに来いよ。この子を抱っこしてる。腫れ物に触るように、丁寧になぞ」

マクネアは少し離れた場所から、茫然と様子を見守っているばかりだったロックハートを呼び寄せ、イリスを押し付けた。そして茂みの中に隠していたトランクを引き摺り出し、鍵穴の横に付いた大きなダイヤルを三度回した。鍵を外してガチャリと蓋を開けると、そこには上質なビロードの貼られた空間が広がっていた。暖かく良い匂いにして、高級そうなクッションが敷き詰められている。マクネアはロックハートからイリスを受け取ると、彼女をそこに横たえた。そしてイリスに対する罪悪感から逃れるように、必死にトランクから視線を背け続けているロックハートを嘲笑い、マクネアはこう続けた。

「次にトランクが開けられた時、この子は一体どこにいますか？・・・」

ルシウス閣下の地下牢だ。可哀想に、もうこの子は一生まともには生きられねえ。閣下が腕によりをかけて、“あのお方”好みに調教するんだからな。頼むぜ、あいつだけじゃなくておれも助けてくれよ？」まるで出荷前の商品に傷がないか確かめる、熱心な商人のように、マクネアはイリスの全身をくまなく確認した。彼女の服に付いた汚れを清め、わずかな傷を癒すと、蓋を閉めて鍵を掛ける。——『ガチャリ』と言う鍵の音が、ロックハートの耳に重々しく響き渡った。かすかに残った良心が、彼の心臓をチクリと突き刺す。ロックハートは乾いた唇を舐め、掠れた声で問いかけた。

「本当に大丈夫なのか？この子の親が魔法省に捜索依頼を出したら？世間や学校の人間だって黙ってはいないだろう。この子の失踪は、私の時のように大騒ぎになるに違いない」

マクネアは大きく吹き出して、ゲラゲラと笑い始めた。そして小馬鹿にしたような目で、立ち竦むロックハートを見上げる。

「お前は馬鹿か？こいつの親は、役立たずのスクイブしかいねえ。それに“メーティスの一族”の、おまけに“秘密の部屋”の“継承者”だとされる子供が行方不明になったって、一体誰が心配するっていうんだ？みんな、『ついにこの子も闇に堕ちた』と思うだけさ。」

おいおい、今更善人面するんじゃないやねえよ。お前が先陣切って、この子の人生を滅茶苦茶にしたんだろうが！他の間抜けな被害者共と同じようにな」

マクネアの辛辣な言葉は、ロックハートの硝子の心臓を粉々に破壊した。真つ青な顔で黙り込んだロックハートを見向きもせず、マクネアはトランクのダイヤルを二度回した。そして蓋を開けると——今度は、ムツとする悪臭が鼻を突いた。腐った血肉の匂いだ。ロックハートが恐る恐るトランクの中を覗き込むと、そこには——全身をバラバラに切断された動物の死骸がぎゅうぎゅうに押し込まれ、耐え難い臭いを放っていた。思わずゾツとしてマクネアを見ると、なんと彼はこちらに杖を向けている。

「な、何をするつもりだ？」ロックハートは引き攣った声で言い、たじたじと後ずさった。



「この子をトランクに詰めたら、私を解放してくれると言ったじゃないか！」

「そうだ、解放してやるんだよ。この世からな」

身の危険を感じたロックハートは慌てて杖を引き抜いたが、マクネアは無言呪文で彼の杖を弾き飛ばした。

「ロックハート、お前は知り過ぎた。お前が生きていると、色々と面倒な事になるんだよ。」

安心しな、すぐには殺さねえ。ブラックをアズカバンへぶち込んで、獣をぶつ殺してから、おれの部屋でじっくりいたぶってやるよ。人間の獲物は久々だからな」

——ロックハートが自らの死を予感したその時、マクネアの背後の茂みが音もなく揺れ、熊のように大きな黒犬が飛び出して、彼に襲い掛かった。黒犬はマクネアに鋭い牙で噛み付いた。そして咄嗟に身動きが取れないマクネアに渾身の体当たりをかまし、木の幹に叩きつけて昏倒させた。情けない悲鳴を上げ、その場を這いずりながら逃げ出していくロックハートを見向きもせず、犬は人間の姿に戻り、そばに落ちていたイリスの杖を拾い上げ、トランクに“開錠の呪文”を掛けた。何とかイリスのいる空間を見つけ出したシリウスは、昏睡状態のイリスに“蘇生呪文”を掛け、優しく抱き起こした。

「エネルギー、活きよ。イリス、起きるんだ。しっかりしなさい」  
「シリウス、シリウス！」

イリスは目を覚まし、目の前にシリウスがいるのを見た途端、涙を流して彼にしがみついた。——もう会えないかと思った。まだ彼は生きている。本当に無事で良かった。対するシリウスは、戸惑うようにイリスの頭を撫でた。

「何故、こんな危険な事を。『医務室から出るな』と言ったのに」

「シリウス、お願い、死なないで。あなたを助けたかったの」

シリウスの瞳が揺れ、彼はイリスを強く抱き締めた。そして周囲に素早く視線を巡らせ、静かな口調でイリスに言い聞かせた。

「ここは私が何とかする。君は振り返らず……ッ！」

不意に、シリウスの身体が——誰かに突き飛ばされたかのように――

—大きく揺れ、噛み締めた唇の端から血が噴き出した。シリウスは、怯えて悲鳴を上げたイリスを庇うように抱き寄せ、後方を忌々し気に睨み付けた。

——ピーター・ペティグリュード。茂みの中から杖を構え、シリウスに向けて、狂気的笑みを浮かべている。

「やつとお出ましか。裏切り者め！」シリウスが吼えた。

「ひひひ、君なら、必ずこの子を助けると思っていた！」ピーターが叫んだ。

「作戦は成功、今や君は風前の灯、虫の息だ。その大怪我ならもう動けまい。“地図”で血眼になって私を探していたようだが、無駄だったね。私はずっと教授達の傍にいたんだから！」

「イリス、大丈夫だ。私の後ろから離れるな」

トラウマの元凶であるピーターを見て、イリスは思わず震え上がった。シリウスは力強い口調でそう言ってイリスの頭を撫で、よろめきながら立ち上がる。——その後ろ姿を見て、イリスは余りの痛々しさに息を飲んだ。背中が大きく切り裂かれ、血が流れている。腹部に巻かれた包帯には、どす黒い血がたっぷりと滲んでいた。

「優しいなあ、シリウス！涙が出そうだ！僕の時も助けてもくれなかった癖に、この子の時は——命を賭けて守るのか！」

「黙れっ！」

シリウスが激昂し、二人の杖から迸る光線が中空で激しくぶつかり合い、爆発した。ピーターは信じられないものを見たとばかりに、驚愕に顔を歪めて叫んだ。

「何故だ！その子の杖は、他の人間では使い物にならない筈なのに！」  
「何を言っている？」シリウスは冷たい声で言った。

「この杖は自分のもののように、良く馴染んでいるがな」

深手を負った状態であるにも関わらず、シリウスは凄まじいまでの執念と卓越した戦闘能力を發揮し、確実にピーターを追いつめていった。ピーターの放った呪いを捻じ伏せ、杖を吹き飛ばした時、ピーターは恐怖の余り腰を抜かして、情けない声でキーキーと喚き出した。

「誰かああ！助けてくれえええ！ここにシリウス・ブラックがいるんだああ！」

「ああ、存分に叫ぶがいい！」シリウスはせせら笑った。

「この子は助かる。——だが忘れるな、ピーター。僕は何度アズカバンへ戻っても、お前を殺しにやって来る。例え“接吻”を受け、心を失いデイメンターに成り果てたとしても、お前に対するこの憎しみと殺意だけは、永遠に消えないだろう！」

その言葉を聞いたピーターはまるで頬を平手打ちされたかのように、ブルツと大きく震えた。血の気を失った虚ろな顔は——やがて、身の毛もよだつような不気味な笑顔に変わった。ピーターは大きく息を吸い込み、シリウスの影に隠れているイリスに怒鳴った。

「イリス、こっちに来い！早く！」

——イリスは不意に気が遠くなり、気が付くとピーターの傍にいた。イリスは無意識の内にスニジェットに変身し、ピーターの下へ飛んで行ったのだ。シリウスが憎々しげにピーターを睨み付ける。

「“服従の呪文”を掛けたな！この子に！」

ピーターは卑屈な笑い声を上げ、咄嗟に逃げようと身を振るイリスの髪を掴み、力任せに揺さぶった。

「この子は僕のものだ！冷血なお前たちとは違って、この子だけが僕を助けてくれる。イリス、良いか。少しでも妙な動きをしてみろ。またあの痛いお仕置きをしてやるぞ！」

ピーターの掛けた“服従の呪文”は見えない鎖となって、イリスの心身をきつく締め上げた。怯えるイリスの腕を掴み、ピーターは“暴れ柳”の動きを止めて、穴の中へ入った。——穴の先には、“叫びの屋敷”がある。あの子に何をするつもりだ？シリウスは今にも気を失いそうなほどに重症の身体に鞭を打って、二人の跡を追いかけた。

☆

グリフィン・ドール塔の談話室で、ハリーたちは気を揉みながら話し合っていた。ハリーたちは早朝からマクゴナガル先生に叩き起こされ、『イリスがブラックから暴行を受けた事』と、『今後、許可が出るまで塔の外に出ない事』を厳命させられた。ハーマイオニーは目に涙

を浮かべ、蒼白な表情で言った。

「イリスにひどい事をしたのは、ペティグリューに違いないわ。あの子は無事なのかしら。どうにかして、イリスに会う事は出来ないの？」

その時、三人の不安を更に助長させるかのように、マクゴナガル先生の緊迫した声で、校内放送が流れた。

『ホグズミード村で、ブラックの目撃情報がありました。生徒達は引き続き、寮外への外出を禁じます。作戦に参加している先生方、応援の方々は、至急ホグズミード村へ向かって下さい』

三人は絶望に塗れた顔突き合わせ、先を争うようにして、窓の外を覗き込んだ。ロンが引き攣った声で叫ぶ。

「あれ見ろよ、闇祓いたちだ！みんなホグズミード村へ行くんだ。シリウスが危ない！」

——何でも良い、この現状を打開出来る方法はないか？ハリーは焦る気持ちを落ち着けようと努力しながら、頭をフル回転させた。グズグズしている間に、シリウスがまた無実の罪で逮捕されてしまう。おまけに頼みの“地図”は忽然と消えてしまったし、ペティグリューの行方も掴めていない。何より、イリスが心配で仕方がない。

その時、ハリーの視界の端を何かが掠め、何気なくその方向を見て——彼は目を見張った。イリスが、中庭を歩いている。

「ねえ、イリスがいる！」

ハリーが指差す方向を、ロンとハーマイオニーが互いのおでこを嫌というほどぶつけながら、覗き込んだ。——間違いない、イリスだ。寝間着姿のまま、よろよろと“禁じられた森”の方へ歩いていく。何かを追いかけているかのように、指先を進む方角へ伸ばし、顔を下に向けている。

「何かを追いかけてる。何だろう？」ハリーが目を細め、囁いた。

「待って、双眼鏡を取ってくる！」

ロンは飛ぶような速さで、自分の部屋からクイディッチ観戦用の双眼鏡を取って来ると、早速覗き込み、それから素っ頓狂な悲鳴を上げた。

「おい、嘘だろ。ネズミ……きつとスキャバーズだ！」

三人が双眼鏡を奪い合うようにして覗き込んでいる間に、イリスの姿は森の奥へと消えた。——そして赤い光が一瞬、森の中を明るく照らした。

「ねえ、あの赤い光は何？」ハーマイオニーが引き攣った声で囁いた。「まさか……」

ハリーは、もう我慢出来なかった。矢も楯もたまらず自分の杖を掴み、“透明マント”を引っ掴んで、談話室の外へ繋がる穴へと走る。ロンとハーマイオニーも、無我夢中で彼の跡に続いた。

☆

幸運な事に、みんなホグズミード村へ出払っていて、誰かに見つかる可能性はなかった。三人は“禁じられた森”へ辿り着き、息を荒げながら“透明マント”を脱ぎ捨てた。

——森の中は、大変な事になっていた。そこら中に血が飛び散り、雪は踏み散らされている。おまけに一番大きな木の根元には——屈強な体格の男がだらりと四肢を投げ出し、伸びていた。ぱつくりと口を開けたトランクが、良い芳香を辺りに漂わせている。

「何があったんだ、一体」

ハリーは茫然と呟き、イリスの姿を探した。しかし、彼女は何処にも見当たらない。失神している男の顔をこわごわ覗き込んだロンが、確信を得たとばかりに叫んだ。

「こいつ、マクネアだ！パパがこいつの悪口言ってた。『マルフォイの父親と繋がってるクソ野郎』だって」

「ロン、近づいちゃ駄目よ！」ハーマイオニーがロンの腕を引っ張った。「起きていたらどうするの？」

「“忍びの地図”だ！」

ハリーは茂みの近くに、“忍びの地図”が落ちていているのを見つけた。無我夢中で雪を取り払い、血眼でイリスを探す。——イリスはどこだ、どこにいる——いた！“イリス・ゴースト”と書かれた点だ、“ピーター・ペティグリュー”の点に引き摺られるようにして、“暴れ柳”の下を移動し、今まさに“叫びの屋敷”に入ろうとしている。そ

してその後を、“シリウス・ブラック”が一定の距離を保ちながら追いかけている。

「大変だ、イリスが危ない！」

何も考えずに“暴れ柳”に近づこうとするハリーの腕を、ハーマイオニーが強く引つ張った。ほんの数秒後に、さつきまでハリーの身体があつたところを、凶暴な大枝のブローがぶちかまされた。小枝が握り拳のように、固く結ばれている。

「ハリー、ロン。助けを呼ばなくちゃ」ハーマイオニーが喘ぎながら言った。

ハリーとロンはあちらこちらを飛び回り、息を切らしながら、恐ろしい大枝の攻撃をかいくぐる道を何とかして見つけようとしていた。しかし、柳の枝の届かない距離から、一歩も近づく事が出来ない。

「駄目だ、ハリー」ロンが激しく息を荒げながら唸った。

「僕らじゃ入れない。誰か助けを呼ばなくちゃ」

「そんな時間はない、何としても入るんだ！」ハリーは諦めなかった。

「グズグズしている間に、イリスが殺されてしまうかもしれない！」

「フリペンド、打て」

不意に、しわがれた声があった。後方から呪文の光線が飛んできて、柳が振り回す枝の隙間を擦り抜け、幹のこぶの一つを叩いた。次の瞬間、柳は大理石になったかのように、ピタリと全ての動きを止めた。木の葉一枚そよともしない。

「ルーピン先生！」

三人は声のした方を向き、口々に叫んだ。——ルーピン先生だ。ルーピンは厳しい表情で杖を振るい、マクネアを魔法で出した縄できつく縛り上げてから、ハリーたちに言った。

「ここからは私が対処する。今こそ、過ちの償いをしなければならぬ。君たちは今すぐ学校へ戻りなさい」

「その必要はない」

——冷たい嘲るような声がして、ルーピンはどこからか噴き出した魔法の縄で全身を縛り上げられ、地面に転がった。程なくして茂みを掻き分け、杖を構えたスネイプがやって来た。スネイプは少し息切れ

してはいたが、勝利の喜びを抑え切れない顔をして、ルーピンを見下ろした。

「単独行動をする貴様を不審に思い、つけていたら・・・やはりブラツクと繋がっていたか！」

「やめろ、先生を離せ！」ハリーが叫んだ。

スネイプの目は、今や狂気を帯びてギラギラと光っていた。——スネイプの杖から再び、蛇のように細い縄が大量に噴き出て、ハリーたちを縛り上げる。学生時代の憎悪の感情に囚われたスネイプは、ルーピンたちの言葉に耳を貸す事も、周りを見る事も出来ないほど興奮していた。

「セブルス、君は誤解している」ルーピンは切羽詰まった口調で言ったが、スネイプは無視した。

「吾輩は繰り返し校長に進言した。お前が旧友のブラツクを手引きして城に入れていると。ルーピン、これが良い証拠だ。いけ図々しくもこの古巣を隠れ家に使うとは、さすがの私も思い付かなかったよ……」

ハリーは何とか縄を解こうともがきながら、目の前に投げ出された“地図”に視線を落とした。——“イリス・ゴースト”が“ピーター・ペティグリュー”に激しく突き飛ばされたように、何センチも地図上を飛んだ後、また引き摺り戻されている。『イリスが、ペティグリューに暴行を受けている！』——その事実にはハリーの理性が音を立てて爆発し、気が付けば彼は声を限りに叫んでいた。

「イリスが死んだらお前のせいだ、スネイプ！」

「何だど？ポッター！」

ルーピンと言いつ争っていたスネイプが、憎々しげにハリーを睨み付けた。しかし、ハリーは引かなかつた。涙に濡れた緑色の双眸と、昏い感情を宿した黒い瞳がぶつかり合う。

『「イリスが死んだらお前のせいだ」って言ったんだ！」

「頼む、セブルス。私はどうなっても構わない」ルーピンが押しつぶされたような声で言った。

「どうかその“地図”を見てくれ」

——イリスの名前は、スネイプの心身を支配していた憎悪の感情を

瞬く間に鎮めて行った。スネイプは眉根を寄せながら“地図”を見て、そして唇を噛み締めた。

☆

スネイプとルーピン、そしてハリーたちの五人は、柳の穴からトンネルに入り、やがて“叫びの屋敷”の内部へ侵入した。『学校へ戻れ』という命令を無視し、縄を解くや否や、決死の形相でくっ付いて来て一歩も離れないハリーたちを、スネイプはうっとうしいと言わんばかりの目で睨み付ける。——しかし、その顔はすぐに張り詰めたものへと変わった。二階に繋がる階段へ近づくにつれ、男たちの怒鳴り合う声に混じって、女の子のすすり泣く声が聴こえてきたからだ。階段へ近づく程、声はもっとはっきりしたものになった。

「その子を離せ、ピーター！」

「なら杖を捨てろと言ってるんだ、シリウスっ！捨てないなら……」  
耳をつんざくような、凄まじい女の子の悲鳴が響き渡った。——イリスの声だ。パニック状態に陥ったハーマイオニーの口を、すぐさまルーピンが塞いだ。今にも崩れ落ちそうなほどに震えるハーマイオニーと目を合わせ、『静かに』と合図する。ハーマイオニーはなんとか嗚咽を堪えようと努力し、その肩をハリーとロンが支えた。ルーピンとスネイプの深刻な表情は、ハリーたちの激情を抑えるのに役立った。相手は邪悪な魔法使いだ。もし自分達がへまをして気づかれてしまったら、イリスは最悪の場合——殺されてしまうかもしれない。「やめろおおお！分かった、杖を捨てる！」シリウスは悲痛な声を上げた。

男の狂ったような笑い声が聴こえ、バーン！と凄まじい爆発音がして、屋敷中がガタガタと揺れた。

「止めてえー！シリウスが死んじゃうー！」

「黙れっ！」

何かがドサツと倒れ込む音がした。虚ろな呻き声混じりの、男の呼吸音と、イリスのすすり泣く声がある。

「無様だな、シリウス！ええ?!あの時、僕を見捨てなければ、利用しようとしなければ、お前はこんな事にならなかった。全てお前のせいだ



！」

激情のままに喚き散らしている男の声に紛れるように、スナイプとルーピンは互いに目配せをして、音もなく階段を昇り、踊り場までやって来た。開いている扉が一つだけある。奇しくもそこはかつて、シリウスと対峙した部屋だった。ハリーは、そつと扉の中を覗き込んだ。

☆

——消えゆく意識の中、シリウスは懸命に呼吸を繰り返した。しかし、口の中だけでなく肺にまで血が溢れ返り、ろくに酸素を取り込む事が出来ない。シリウスの身体じゅうが傷つけられ、血がドクドクと溢れ出して、埃だらけの床を汚していく。まだ死ぬ訳にはいかない。シリウスは霞む視界に活を入れ、目の前のピーターを睨み付けた。

不意に、シリウスは人の気配を感じ、扉の方に少しだけ眼球を動かした。——見覚えのある緑色の目が二つ、薄らときらめいた。それだけではない。扉の奥では、何人かの影がひっそりと蠢き、息を潜めている。ああ、助けがやって来た。この子は助かる、良かった。安心した瞬間、シリウスは気を失いそうになった。走馬灯のように、今までの記憶が脳内を猛スピードで駆け巡る。彼は最後の力を振り絞り、口の中に溢れた血を吐き出すと、ピーターの注意を自分だけに向けるため、掠れた声で言った。

「ああ。全ては僕のせいだ、ピーター。僕はお前を信頼していた。だから他の誰でもない、お前に秘密を託した。……だが、それは過ちだったようだ」

「うるさい！きれいごとを言うな！」ピーターは泡を吹きながら喚いた。

「お前は僕を利用したんだ！信頼していたなら、僕に秘密を押し付け、命の危険に晒すものか！」

「臆病者め、僕が怖くてたまらないか？親友を裏切った事実と向き合う事が？」シリウスはせせら笑った。

「僕を殺してどうする。また逃げるのか？」

「黙れ——黙れ——黙れ！」

「断言してやろう。僕を殺しても、お前は永遠に逃げ続ける。お前に安全な場所など存在しない。そうして恐怖に怯え、一人ぼっちで死ぬんだ。」

ピーター、お前が逃げているのは、自分自身だ」

二人が言い争っている時、イリスは全く違うものを見ていた。

——目の前の古ぼけた壁に、三人の影が薄っすらと映っている。突如としてピーターの影がもごもごと動き、二つに分かれた。その一つは、やがて巨大な卵の姿になり、二つに割れて、中から——恐ろしい化け物の影が、奇声を上げながら姿を現した。イリスの脳裏に、かつてピーターの心の世界で見た『本当の姿』がフラッシュバックした。彼女は無我夢中で、虫の息のシリウスに向けて“死の呪文”を放とうとするピーターにしがみつく。

「だめ、ピーター！殺してはいけない！」

「黙れ！また痛い目に遭いたいのか！」

ピーターはイリスの髪を乱暴に引つ掴み、脅すように目の前で杖先の火花を弾けさせた。しかしイリスは負けなかつた。——イオおばさん、お母さん、虹蛇様。どうか力を貸して。イリスは意識してピーターの心に接触しようと試みた。イリスの青い目とピーターのくすんだ目が、交錯する。ピーターの目の奥に、あの虹色の輝きが見えた。「やめろ——僕の心に——入り込むな！」

——イリスはピーターの制止を擦り抜け、彼の心の最深部へ潜り込んだ。

荒涼とした大地の上で、世界の果てに向かい、ピーターは歩み続ける。すぐ後ろの方で、卵の殻を蹴破り、恐ろしい産声を上げる、新たな化け物から逃げるように、ボロボロの足を踏み出し続けるピーターの手を、誰かがガツと掴んだ。

「ピーター、『あの夜』を思い出して！」

空を覆っていた分厚い雲が、ぱつかりと二つに裂けた。そこから陽だまりのように暖かな記憶が流れ落ち、乾き切った大地を潤している。——冷たい夜特有の空気、心が浮き立つような背徳感、全ての生き物が寝静まった濃紺色の世界。ジェームズたちと過ごした、輝かし

い思い出の数々。それらの全ては間違いなく、ピーター自身の手で勝ち取ったものだ。ピーターの耳に、目に、肌に、心に——その素晴らしい記憶が染み渡っていく。思わず立ち止まったピーターに、新たな化け物を飲み込んだばかりの、あの醜悪なドラゴンが襲い掛かった。「戦って、ピーター！戦って！」

イリスはピーターの隣に並び立ち、竦み上がる彼の手をギュツと握った。このドラゴンは、今までピーターが積み重ねて来た『罪の記憶の権化』だ。これから逃げ続ける限り、ピーターはずっと救われな  
いままだ。

「自分に勝って！ねえ、全部失ってもいいの?!」

イリスは力強い口調で叫んだ。自分自身を見つめるピーターの目に、一筋の涙が零れ落ちた。

☆

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

スネイプの合図で、五人が一斉に掛けた“武装解除呪文”は、イリスを傷つける事無くピーターだけを吹っ飛ばした。強制的に現実世界へ戻ったイリスを、ハリーたちが息せき切って取り囲む。スネイプは険しい表情でピーターを拘束し、ルーピンは一直線にシリウスの下へ向かった。

「シリウスが死んでしまう！」

イリスが悲痛な声で叫ぶと、スネイプはバケツ一杯の苦虫を噛み潰したような表情で、シリウスへ杖先を向けて歌うように美しい呪文を唱えた。すると、シリウスの身体中を走る夥しい量の傷跡が、みるみるうちに塞がっていった。

「フン、やはり“闇の魔術”か」シリウスが唸った。

「薬が効かず、苦しんだかね？」スネイプは冷たくせせら笑った。

二人はギラギラと睨み合った。二人の顔に浮かんだ憎しみは、甲乙つけがたい激しきだった。スネイプは、シリウスに近づこうとするイリスの腕を掴んで、自分の傍へ引き寄せた。

「“魅了の呪文”か？」スネイプとシリウスの声がハミングした。

——その場をルーピンが上手く取り成してくれなければ、二人の間

で殺し合いが始まっても可笑しくない状況だった。かくして全ての誤解は解かれ、みんなは屋敷から出た。スネイプは一番先頭で、気絶したピーターの体を縄で繋ぎ、空中に浮かばせてバルーンのように持ち歩いた。その後ろを、ロンとハーマイオニーが続く。安心して全身の力が抜けてしまったイリスをハリーが背負い、シリウスはリーマスに肩を貸してもらい、しんがりを歩いた。

イリスは微睡みながら、ハリーの首元に顔を埋めた。——良かった、本当にこれで全部上手く行く。シリウスは無罪になるんだ。強い睡魔が襲って来て、イリスは束の間の眠りに落ちた。

☆

やがてイリスはトンと何かにつっかり、目を覚ました。一行は長いトンネルを抜け、“暴れ柳”の穴の前までやって来ていた。穴全体を塞ぐようにしてスネイプが立ち止まり、外の様子を伺っている。その事で歩みが停滞し、イリス（と彼女をおんぶするハリー）は前を歩くハーマイオニーと軽くぶつかってしまったのだった。

「用心した方が良い。マルフォイの手先が、この子を攫おうとしている」シリウスが疑わしげにスネイプを睨み、言った。

俄かに木々の騒めく音が強くなり、そして急速に治まった。

「どうやら、奴らは逃げ遂せたようだ」

スネイプは静かにそう囁いた後、やっと穴を出た。イリスは、ハリーの頭越しに夜空を見上げた。複雑に絡み合う樹木の間からでもはつきりと、美しい満月が輝いているのが見える。みんな、冷たい月明かりを浴びていた。

——不意に後方から、強い獣の匂いが鼻を突いた。

「逃げろ」シリウスが低い声で言った。

『逃げろ』って何の事だ？イリスは思わず振り返った。——月光に照らされ、ルーピンがシリウスに肩を貸した体勢のまま、硬直している。そして、手足が震え出した。イリスの頭の天辺から足の先までを、一筋の稲妻が駆け抜けた。満月——月光——ルーピン先生は人狼だ——今夜、“脱狼薬”を飲んでいないとするなら——！異変に気付いたハリーが振り返り、大きく息を飲んだ。

「私に任せて、逃げるんだ！」

恐ろしい唸り声がした。ルーピンの頭が長く伸び、体も伸びた。背中が盛り上がり、体中に毛が生え出した。手は丸まって、鋭い鉤爪が生えた。人狼と化したルーピンが後ろ足で立ち上がり、バキバキと牙を打ち鳴らした時、地面に投げ出される寸前に大きな黒犬に変身したシリウスが襲い掛かった。人狼の首に食らい付いて後ろへ引き倒し、イリスたちから遠ざけようとした。しかし人狼はシリウスを振り飛ばし、バネのようにしなやかな筋肉を使い、跳躍した。——余りの出来事に茫然とするばかりの、イリスたちを狙って。

スネイプは咄嗟に生徒たちの前に躍り出て、“守りの呪文”を唱えようとした。しかし、それよりも早く人狼の鋭い爪はスネイプの杖を弾き飛ばし、彼の身体を蹴り飛ばした。

「先生——」イリスたちは金切声で叫んだ。

茂みの中に放り込まれたスネイプは意識を失ったのか、ピクリともしなくなつた。舌なめずりをしながら、こちらを見る人狼に、再びシリウスが襲い掛かる。——イリスたちはこの光景に立ち竦み、他のもつと大事な事に気が付かなかつた。

「エクスペリアームス、武器よ……——ッ！」

ハリーのひつ迫した声で、イリスはハッと我に返つた。いつの間にか意識を取り戻していたピーターが、ルーピンの落とした杖に飛びつき、それに気づいたハリーを失神させていた。ロンが夢中でピーターに襲い掛かり、ハーマイオニーも掠れた声で“武装解除呪文”を唱えようとするが、相次いでピーターに“失神呪文”を受け、力なく地面に倒れ伏す。

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

イリスは杖を向け、無我夢中で叫んだ。ピーターの手から、ルーピンの杖が弾け飛ぶ。しかし、もう何もかもが遅かつた。ピーターはもう小さなネズミに変身し、草むらの中を慌てて走り去っていった。跡を追いかけようとしたイリスの耳に、情けない男の悲鳴が聞こえた。

イリスはその方向を見て、思わず自分の目を疑つた。——ギルデロイ・ロックハートだ。人狼に茂みから引つ張り出され、泣きじやくり

ながらもがいている。何故、彼がこんなところにいるんだ？

☆

ロックハートは、マクネアが昏睡状態から回復し、縄を無言呪文で切った後、目を皿のようにして自分を探している間、茂みの中に隠れ、必死に息を潜めてやり過ごそうとした。

幸運な事にその搜索は長く続かなかった。突如として、マクネアは“暴れ柳”の方を睨みながらブツブツ言い始め、足早にトランクを掴んでその場から逃げて行ってしまったのだ。しかし今度はスネイプを始めとする魔法使いの集団が、“暴れ柳”の中から出て来たために、逃げ出そうとしたロックハートは再び茂みの中へ隠れる羽目になった。おまけに不運な事は続くもので、その内の一人の魔法使いが人狼に変わり、人々を襲い始めた。そして人狼はあろうことか近くにいた自分の匂いを嗅ぎ付け、襲い掛かって来たのだ。

「ひ、ひいいい……！」

ロックハートは掠れた悲鳴を上げた。けれども人狼が鋭い爪で彼を押さえつけ、その首元にいざ噛み付こうとしたその時——淡く光る透明な膜が目の前に展開され、彼を守った。

「先生、早く逃げて！」

ロックハートは、我が目を疑った。——信じられない、イリス・ゴードトだ。我が身可愛さに人生を無茶苦茶にしてしまったその子が、守りの結界を張って自分を守ってくれている。折角の楽しみを邪魔された人狼は怒り狂い、今度はイリスに狙いを定めて襲い掛かると、地面に荒々しく引き倒した。

イリスのか細い悲鳴を聞かなかった事にしながら、ロックハートは一目散に逃げ出した。——何も考えるな、自分だけ助かればそれで良い。ロックハートは何度も自分に言い聞かせた。どうだっていいじゃないか、あんな子。すぐに忘れるさ。自分の身さえ良ければ、いいんだ。今までずっとそうして生きてきたじゃないか。

森から出る直前、ロックハートは人狼が自分を追いかけていないか確認するために、振り返った。——イリスは、人狼に組み伏せられていた。鋭い爪がイリスの服を無残に引き裂き、ざらざらとした熱い舌

が、白い膚を旨そうに舐め上げる。

「先生、お願いです……元の先生に戻って……」イリスは恐怖にもつれる声で、囁いた。

《元の僕に戻る方法？それはたった一つしかない》ルーピンは苦しそうに喘いだ。

《人間を傷つける事で、僕は楽になる。元に戻れるんだ。君の柔らかな膚を引き裂いて溢れた血を啜り、引きずり廻し存分に辱めて……最後は僕と同じにしてやる。イリス、嬉しいだろう？》

「いや、いや……」

イリスの懇願も空しく、ルーピンが涎を垂らしながら彼女の身体に食らいつこうとした時、誰かの声がある呪文を高らかに叫んだ。

『アレーソース、アフエシス、アポリュトローシス！異形の者よ、元の姿へ戻れ！』

たちまちルーピンは苦しそうな悲鳴を上げ、イリスの拘束を解くと、地面の上をのたうち回った。みるみるうちに体毛が抜け、牙や鉤爪が引っ込み、体が縮んで——ボロボロの服をまとった人間の姿へ戻った。イリスは震えながら、ルーピンの下へ近づいた。気を失っているようで、ピクリともしない。

『危ないところだったなあ、お嬢ちゃん。あんたも人狼にされるところだった！』

頭上から見知らぬ男の声が聴こえ、イリスはびっくりして空を見上げた。大きく背の曲がった鷲鼻の魔法使いが、ふわふわと宙に浮いている。おまけにその身体は、ゴーストのように銀色で透き通っていた。魔法使いは、杖先をイリスに向けたまま、茫然と立ち尽くすばかりのロックハートを睨み付ける。

『この忌まわしい盗っ人め！元の体に戻ったら覚えておけよ！』

魔法使いは透き通った腕で、ロックハートの頭を一発殴った後、風のような速さで空の彼方へと飛んで行った。

「ああ、もう……終わりだ。全てが……終わった」

ロックハートはがくりと膝を突き、うな垂れた。イリスはおずおずとロックハートに近づき、彼の傍にしゃがみ込んだ。

ロックハートは人生の全てを諦めたかのような、暗い表情で、イリスに全てを話して聴かせた。自分は今まで他者の輝かしい記憶を盗み取り、自分のものとして本を書き、有名になったのだと。そしてマルフォイ氏にその秘密を暴かれ、イリスを陥れるよう強いられたのだと。あの魔法使いのゴーストは盗んだ記憶の一つで、自分が解放したこと、『元の持ち主』のところへ還った。きっと今頃、記憶の戻った持ち主はカンカンに怒り、盗っ人である自分を血眼で探し始めているだろうと。

「どうして自分がこんな事をしたのか、理解出来ない。気が付いたら呪文を唱えていたんだ。これから先、どうして良いのかも分からない。今、君の記憶を消すべきなのかも・・・」

——その時、ロックハートは狼狽して口を噤んだ。自分を憎んでいる筈のイリスが、ギユウツと抱き着いてきたからだ。

「助けてくれて、ありがとう」

イリスは涙混じりに囁いた。それは生まれて初めてロックハート自身に向けられた、素直な“感謝の言葉”だった。

☆

不意に、暗闇の中から、キャンキャンと苦痛を訴える犬の鳴き声が聴こえて来た。——シリウスの声だ。助けを求めている！イリスは疲弊し切った身体を叱咤し、森の奥へ駆け出した。

「駄目だ！危険だ！行ってはいけない！」ロックハートの声がどんどん遠ざかっていく。

甲高い鳴き声は、湖のそばから聴こえてくるようだ。イリスはその方向へ疾走した。引き裂かれた衣服から覗く白い膚に、降り続く雪の結晶に混じって、ゾツとするような冷気が染み込んでいく。鳴き声が、急に止んだ。湖のほとりに辿り着いた時、それが何故なのかをイリスは理解した。

「やめろおお・・・！」シリウスが呻いた。

——デイメンターだ。人間の姿に戻り、うずくまって頭を抱えるシリウスの頭上を、少なくとも百人を超えるデイメンターが黒い塊になり、渦巻きながらこちらへ近づこうとしている。デイメンターたちが



発する余りの冷氣に、湖面が音を立てて凍り付いていく。氷のような冷たい空気は、イリスの心をも凍らせようと襲い掛かった。目の前が霧のように霞んできた。四方八方の闇の中から、デイメンターが包囲してくる。イリスは必死に頭を振り払い、心の内側から聴こえ始めた――あの死の間際のドラコの息遣いを振り切ろうと、頑張った。

「エクスペクト・パトロナム、守護霊よ来たれ！」

銀色の輝きが杖先から噴き出して、イリスとシリウスの周りを守るように取り囲む。シリウスが大きく身震いをして地面に横たわり、動かなくなつた。死人のように青白い顔だ。守護霊を押し潰すように、デイメンターがドーム状に重なり、イリスの視界を覆い尽くしていく。銀色の輝きがぶるぶると震え、瞬く間に弱く霞んでいく。

「エクスペクト・・・おばさん、おばさん、助けて・・・エクスペクト・パトロナム、守護霊よ来たれ・・・」

イリスは膝に冷たい下草を感じた。形にならない守護霊の弱々しい光で、イリスはデイメンターがすぐ傍に立ち止まるのを見た。マントの下からヌメヌメとした死人のような手が伸びて来て、守護霊を振り払うような仕草をした。守護霊は揺らぎ、果てた。

「エクスペクト・・・」

《娘の―口を―塞げ―また―邪魔を―されるぞ》

ザーザーというデイメンターの吐息に混じり、邪悪でざらついた声が聴こえて来た。一番近くのデイメンターが、イリスをじっくりと眺め回し、腐乱した両手を上げ、フードを脱いだ。――目があるはずのところには、虚ろな眼窩と、のつぺりとそれを覆っている灰色の薄いかさぶた状の皮膚があるだけだった。しかし、口はあった。がっぽりと空いた形のない穴が、死に際の息のように、ザーザーと息を吸い込んでいる。

恐怖がイリスの全身を麻痺させ、動く事も声を出す事も出来ない。真っ白な霧が視界を覆った。べっとりとした冷たい腕が、イリスの杖を取り上げていく。何本もの手がイリスに伸び、口を塞ぎ、四肢を押さえつけ、幸せな記憶を思う存分吸い上げた。

《素晴らしい―良い味だ―どれだけ吸い付いても―滲み出て来る

—そしてそれと同じだけ—暗い記憶を—秘めている》

デイメンターはガザガザと笑い、イリスの黒髪を掻き分け、隠れてしまっていた顔を露わにした。青ざめたその顔に生氣はなく、伝う涙は途中で凍り付いていく。塞いでいた手を外し、デイメンターは虚ろな口を、イリスの唇に近づけた。——腐ったような息が顔にかかる——  
—耳元でドラコが最期に、自分に愛の言葉を囁いているのが聴こえた——  
—ドラコ、私も愛してる。イリスは思った。最期に聴く声が、あなただけで良かった——

——その時、イリスをすっぽり包んでいる霧を貫いて、銀色の光が見えるような気がした。段々強く、明るくなっていく。イリスは自分の身体が、ゆっくりと草の上へ落ちていくのを感じた。最早身動きをする力もなく、吐き気がし、震えながらイリスは目を開けた。目も眩むような光が、辺り一帯を照らし上げている。耳元のかすかな声や冷気が、徐々に退いていった。

何かが、デイメンターの群れを追い払っている。イリスとシリウスの周りをグルグルと回っている。デイメンターのザーザーという邪悪な声が、遠のいていく。暖かさが戻ってきた。あらん限りの力を振り絞り、イリスは顔を持ち上げた。眩い光の中で、三つの人影がこちらへ近づいて来る。女性なのか男性なのか、大人か子供なのかも分からない。けれど、三人は自分の大好きな人たちだ——その事だけは、はっきりとわかる。イリスはかすかに微笑み、意識を手放した。

「ハリー、私、信じられない。あんな大量のデイメンターを追い払えるほどの、守護霊を創り出せるなんて。はっきり言って、イリス以上の規模だったわ」

ハーマイオニーはイリスの介抱をしながら、ハリーに言った。ハリーはロンと協力して、シリウスの身体を担ぎ上げる。

「僕、ルーピン先生に教わったんだ。今度は僕が、イリスを助けたいと思ったから。——でも、こんなに大きなものを出せたのは、今回が初めてだ」

「いったい、どんな幸せな記憶を思い浮かべたんだい？」ロンが屈託のない口調で尋ねる。

ハリーは少し寂しそうな微笑みを浮かべ、あどけなく眠るイリスをチラリと見た。たったそれだけで、ハーマイオニーはハリーが一体何の記憶を思い浮かべたのか、分かったような気がした。

☆

ピーターは必死に雪原を駆け抜け、逃げていた。しかし、突如として凄まじい衝撃が体じゆうを襲い、ピーターはクシヤクシヤになって、冷たい地面に叩きつけられた。激痛で渗んだ視界の中に、驚くべきものが目に入り、ピーターは引き攣った悲鳴を上げた。

——猫だ。痩せた灰色の老猫、ミセス・ノリスが、自分に狙いを定めている！身の危険を感じたピーターが人間の姿に戻ろうとしたその時、猫は恐るべきスピードでネズミの首根っこを咥え、鋭い牙に力を入れた。プツツと音を立てて首の薄皮が切れ、太い首の血管を猫の牙がコリコリと遊ぶように撫でさする。その余りの恐怖に、ピーターはたまらず失神した。

《そうだ、忘れるところだった。前足の指が欠けてるか、ちゃんと確認しないとダメなんだったわ》

ミセス・ノリスはネズミを噛み砕く直前に、イリスとの約束を思い出した。そして彼女は地面に落としたネズミの手足を確認し、やがて嬉しそうに一鳴きした。

《まあ、欠けてるじゃない！あの子がきつと喜ぶわね！》

猫はしっかりとネズミを咥え、軽やかにスキップをしながら学校へ戻って行った。

## Act 16. ファイアボルト

イリスは自分の上の方で、青いものが二つ光っているのが見えた。優しい色、おぼさんの目だ。イリスは手を伸ばしておぼさんに触れようとしたが、腕が重くて上がらない。イリスはパチパチと瞬きをした。青く光るものの上に金色の眼鏡が掛かり、それはダンブルドアの顔になった。にこやかに微笑んでいる。

「イリス。目が覚めたんだね」

ダンブルドアの声だ。イリスはダンブルドアをぼんやりと見つめた。——そして、記憶が蘇った。

「先生、ピーターが逃げてしまいました！早く捕まえないと！」

「どうか落ち着いておくれ、イリス」ダンブルドアは穏やかな声で言った。

「君は少し時間がずれておる。ピーターは今、魔法省で取り調べを受けている最中じゃ。さあ、これを飲みなさい」

——『ピーターが捕まった』？イリスはごくりと唾を飲み込み、周囲を見渡した。見慣れた医務室だ。ダンブルドアは杖を振るい、イリスのベッドの壁際にクッションを敷き詰め、そこに身体を預けるよう指示した。イリスは手渡されたゴブレットに視線を注いだ。華奢な硝子製のゴブレットの中にはレモンの輪切りが一枚浮かんでいて、湯気と共に甘酸っぱい香りを漂わせている。

「中身が気になるかね？」ダンブルドアは子供のように目をキラキラ輝かせた。

「生ける屍の水薬」の代わりに蜂蜜をたっぷり混ぜた、正真正銘のホットレモネードじゃ。“真実薬”を飲んでもいい」

ダンブルドアの冗談に、イリスは軽く吹き出してしまった。レモネードは程好い温度で、一口飲むごとに暖かさが身体中を満たしていく。ダンブルドアは時折ゴブレットの中身を補充しながら、全てを話してくれた。——あれからクルックシャンクスが、学校に戻ってきたダンブルドアにイリス達の居場所を教えてくれたので、迅速な対応ができ、深刻な後遺症の残る者は誰一人いなかった。そして逃亡中のス

キャバーズは、運悪くパトロール中だったミセス・ノリスに発見され、捕まった。マダム・ポンフリーが、イリスのベッドの枕元にスキヤバーズが置いてあるのを見つけ、不衛生だと判断し中庭に捨てようとした。しかし、その騒ぎを聞きつけたダンブルドアが、ポンフリーの手からスキバーズを奪還し、ファツジ大臣達の目の前でピーターの姿へ戻して、シリウスの強制連行を中止させた。『シリウスに脅され、逃げていた』と言い継ぎるピーターに騙されかけたファツジは、ダンブルドアを始めとする良い魔法使い達に根気強く説得され、もう一度十二年前の事件の真相を調べ直す事を決定した。現在、シリウスとピーターは魔法省の監視の下で、取り調べを受けていると言う。

「シリウスとピーターの裁判は、近い内に行われる。全てが良い方向に動くじやろう。みな、君のおかげじや。シリウスは言葉に出来ぬほど、君に深く感謝していた。そしてもう一人、君が救った人間がいる。・・・ギルデロイ・ロックハート」

ダンブルドアは優しい眼差しをイリスに注いだ。

「わしがギルデロイからの知らせを受けて会った時、彼は憑き物が落ちたようにすつきりとした顔をしておった。そして全てを話してくれたよ。法廷に赴き、然るべき罰を受けると約束してくれた。君の濡れ衣も、間もなく晴れるじやろう」

——イリスはまるでクリスマスとお正月が一緒に来たみたいに、夢心地だった。ダンブルドアはイリスにまた一掴みのレモンキャンデーを掴ませ、医務室を出た。

ハグリッドが扉から体を斜めにして入ってきた。部屋の中では、ハグリッドはいつも場違いなほど大きく見える。イリスの隣に座ってチラッと顔を見るなり、ハグリッドはおんおんと泣き崩れてしまった。

「ハグリッドー！」イリスはその姿に驚いて呼び掛けた。

「大丈夫？どうしたの？」

「お、お前さんのおかげだ！バックビークは殺されねえで済んだー！ハグリッドはしやくり上げた。

ハグリッドが言うにはこうだった。——クリスマス休暇に差し掛

かる前の日、「魔法動物飼育学」の授業でバックビークがドラゴを傷つけた事を、ルシウスが魔法省に訴えた事で、「危険動物処理委員会」による裁判が開かれた。出頭を命じられたハグリッドは、ろくに準備もできない状態のまま何度も控訴したが、ルシウスの息が掛かった委員会は聞き入れず、異例の速さでバックビークは処刑される事となった。奇しくもその日はクリスマス・イブ——指名手配犯、シリウス・ブラックがホグワーツに出現した日と同じだった。学校に戻ったハグリッドは、ブラックの魔の手からハリー達を守るため、他の魔法使い達と共に捜索に努めた。しかし事態は誰もが予期せぬ方向へと収束した。やがてその後片付けも一段落付き、バックビークをかぼちゃ畑に繋いでハグリッドが深い悲しみに暮れていたその時、なんと委員会から届いたのは——『バックビークの処刑中止の知らせ』だったのだ。

「処刑人のマクネアは、ルシウス・マルフォイの昔っからのダチだ。ダンプルドアが、今回の事件にヤツらが関係しとると言いなきった。ピーキーの処刑どころじゃなくなっただろう。みーんな、お前さんが事件を解決してくれたおかげだ。ちいぢやなお前さんが、俺たちを救ってくれたんだ！」

ハグリッドはそう言うなり、また大きな体を震わせて泣き出した。ハグリッドの顎鬚に大粒の涙がポロポロと零れ落ちている。

「違っよ、ハグリッド。私のおかげじゃない」イリスは慌てて首を横に振った。

「ミセス・ノリスのおかげだよ」

《《その通りだわ》》

ツンと澄ましたような鳴き声が聴こえた。イリスはその方向を見て、明るい歓声を上げた。——灰色の老猫、ミセス・ノリスだ。クルツクシャンクスもいる。イリスはミセス・ノリスを抱き上げ、身体中にキスの雨を降らせた。ノリスは嫌がって身を振りながら、叫んだ。

《《勘違いしないで！べ、別にあなたのためにやったんじゃないわ！ たまたまお腹が空いてただけだったんだから！》》

《《よく言うぜ》》ニヤニヤと笑いながら、クルツクシャンクスがノリ

スの傍に近づいて来た。

《学校中の猫に命じて、夜も寝ないでスキヤバーズを探してたくせに。アーガスも心配し・・・》

しかし全ての言葉を言い切る前に、ノリスの強烈な猫パンチがぶちかまされ、哀れなクルツクシヤンクスはボールのように弾んで、勢い良く壁際にぶち当たった。

☆

ロックハートは魔法省に用意された一室で、弁護人を待っていた。ファッジに面会を求めて真実を話した時、彼はとても狼狽していたが、慌てた調子で『弁護人を呼び、事情聴取をする事』を約束してくれた。——これであの子は無罪放免になる。ロックハートはイリスの純粋な眼差しと優しい言葉を思い出した。たった一瞬のことだ。『ぎゅつと子供に抱き着かれて、お礼を言われた』——ただそれだけの事が、ずっと自分の心の中心で消えない松明のように燃え盛り、現在に至るまで、彼が闇の中に葬り去った罪の輪郭を照らし続けている。『お前は本当に馬鹿な事をしたな』ロックハートの中の意地悪な声が、冷たくせせら笑った。

『あの子に惑わされたか？お前はきつと死ぬまでアズカバンに収監される。デイメンターに魂まで吸い尽くされる時、後悔したって遅いんだぞ！』

余りに残酷なその声に耳を塞ごうとした時、不意に扉をノックする音が聴こえた。そして入って来たのは——弁護人ではなく、ロックハートが今一番会いたくない魔法使いだった。

「やあ、ロックハート」ルシウスは食い縛った歯の間から挨拶をした。「ただでさえ面倒なこの時に、君は本当に愉快な事をしてくれた」

ルシウスの立ち振る舞いには、いつもの冷徹さは欠片も見当たらない。憤怒と焦燥の感情がぎゅつり詰まった細い目が、ロックハートを射抜いた。ルシウスは荒々しい手付きで杖を振るい、扉を何重にもロックした。『そんな、どうして彼が——大臣は裏切ったのか？』——自らの死を予期し、恐怖で息も出来ないロックハートににじり寄り、ルシウスは酷薄な笑みを浮かべた。

「安心したまえ、君を殺す事はしない。頭に少しばかり細工をするだけだ」

「わ、私に何をするつもりだ！」ロックハートは杖を振り回し、わめいた。

「分かるだろう？」ルシウスはねつとりと言った。

「あの子が清廉潔白だと証明されては、困るのだよ。せつかくあそこまで育ったのだ。・・・開心、レジリメンズ！」

ルシウスは淀みない動きで“開心術”を掛け、ロックハートの心の中へ侵入し、記憶を引っ掻き回した。ロックハートは抵抗したが、ルシウスは彼を容易く押さえつけ、様々な記憶を引っ張り出しては鑑賞し、自らの都合の良いように改竄していく。ルシウスは時系列に沿って記憶を眺め、やがてイリスがロックハートに抱き着いてお礼を言う場面まで到達した。ルシウスは冷笑し、その記憶にも杖を向ける。――『止める、それを弄るな！』ロックハートは吼えた。『それだけは駄目だ！止める――止める――』

「・・・止めろっ!!」

ロックハートは無意識の内に“閉心術”を使い、ルシウスを追い出した。ルシウスは驚いたと言わんばかりに目を丸くする。

「この記憶は、私のものだ！」

「お前がそれを言うのか？」ルシウスが哄笑した。

ルシウスの言葉は鋭いナイフのように、ロックハートの心臓を突き刺した。ロックハートは、今まで自分が被害者に対してどんなに残酷な事をしてきたのかを、その時やつと理解した。

もう終わりだ。ロックハートは震える手で杖を引き抜いた。彼と戦ったって勝ち目はない。となると残された道は、たった一つしかない。ロックハートは杖先をルシウスに向けた。

「戦うつもりか？」

「・・・いや、勝負はもう決まった」

ロックハートは何の前触れもなく、杖先を自分の頭に向けた。

「私の勝ちだ」

たちまちロックハートの身体から銀色の輝きがいくつも噴き出し



た。それらは小さな衝撃波を生み出し、ルシウスを壁際まで吹き飛ばした。ロックハートは今まで奪ってきた記憶の全てに少しの細工を施し、『元の持ち主』達のところへ解放したのだ。そして、それらに混じって“自らの記憶”をイリスの下へ飛ばすと、自分の心を再起不能なまでに破壊した。

ルシウスが体勢を取り戻した頃には、もう全てが終わっていた。ロックハートは人の好きそうな顔で、ルシウスを見上げた。

「やあ、あなたは誰です？ 何だかとっても怖いお顔をしていますね！ ホットミルクを飲んではいかが？」

ルシウスが怒りに任せてロックハートを捻じ伏せ、いくら“開心術”を使って心の中を覗き見ても——もう彼の精神は、見る影もないほどに壊れ切っていた。

その夜、イリスは不思議な夢を見た。——ギルデロイ、と呼ばれるハンサムな男の子の半生を紡いだ物語。母親に愛されるために『特別』を求め、夢や希望は破れて、それでも諦めずに試行錯誤し、他者の記憶を奪って自分のものとする事で、強引に『特別な存在』になった青年時代。しかし、青年の心は深い罪悪感と虚無感に満ちていた。その気持ちはやがて、彼に“奪った記憶を元の持ち主へ戻す魔法”を開発させる切っ掛けになった。青年は何度も何度もその術を唱えようと杖を振り上げては——止めている。自分の良い心と悪い心の間で葛藤し、苦しんでいる。

——小さな女の子に抱き締められ、感謝の言葉を囁かれた時、青年はやつと自分の気持ちに気づいた。本当は『特別』になりたいのではなくった。ただ誰かにありのままの自分を見つめ、愛して欲しいだけだったのだと。——青年は透き通る身体を通して、みるみるうちに自我を失っていく自分の姿を見た。そして流れ星のように空を渡り、ある古城の窓を通り抜けて、ベッドで眠る小さな女の子の下を訪れた。『この記憶と魔法を全て、君に授ける』——青年はそう言うと、女の子

の身体に融け込んだ。

☆

その数日後、二つの特大スクープが、イギリスの魔法界中を大いに賑わせる事となった。マスメディアの最先端に行く。『日刊予言者新聞』は、後々『今世紀最大』と謳われるほどに良く売れたと言う。——一つ目は、『指名手配犯、シリウス・ブラックの無罪、死んだとされていたピーター・ペティグリューの逮捕』。そしてもう一つは、『優秀な魔法戦士、ギルデロイ・ロックハートの詐欺罪』。

イリスは、マダム・ポンフリーがオートミールと一緒に運んでくれた新聞に目を通し、驚きの余り、空いた口が塞がらなかった。——『ギルデロイ・ロックハート、真つ赤な嘘！』記事の前面に、そんなタイトルが躍っている。『ロックハート氏は、ホグワーツで自分の無力さを露見させ、半ば追い出されるようにして学校を退職した。新作を書けない事に焦った彼は、あろうことか何の罪もない子供に罪を着せ、人々から聞いた情報を元に、“継承者とのこっそり一学期”を執筆した。しかしフアτζ大臣の迅速な判断により、逆に追われる身となった彼は、自暴自棄になって酒に溺れ始め、そして来たる○月○日魔法省に捕獲された。だがその日の夜、彼は酔っぱらって魔法を逆噴射させ、廃人となつてしまった。彼にとつて最も幸運だった事は、盗んだ記憶が全て元の人間へ戻つたという事だ（※これらの証言は全て、“ロックハート被害者の会”の会員達の、奪われた記憶がロックハート氏の心を通して見た“記憶”？——と表現するしかないが——を基にしたものである）。現在、彼は聖マンゴにて治療を受けているが、その情報をいち早く聞きつけた会員達が彼に報復しようと殺到したため、一時聖マンゴがパニック状態に陥ってしまった。その時の状況を癒師オマルは……』

『※これらの証言は全て、“ロックハート被害者の会”の会員達の、奪われた記憶がロックハート氏の心を通して見た“記憶”？——と表現するしかないが——を基にしたものである』——イリスは震える指先で、その一文をなぞつた。数日前に見たあの不思議な夢は、ただの夢ではなかった。あれはロックハートの記憶だったのでは？だと

したら、彼は自分を守るために——。イリスはオートミールの皿をぐいと押し遣り、マダム・ポンフリーに言った。

「ダンブルドア先生に会わせて下さい！この記事の内容はデタラメなんです！」

「イリス」

扉を開けて、ダンブルドアが入って来た。——いつもきらきらと輝いている筈の青い瞳は、悲しみに暮れている。

「ギルデロイは君を守るために、勇敢な行動を取った。それを無駄にしてはならぬ」

イリスが言い返す前に、ファッジ大臣がせかせかとした足取りでやって来た。『ルシウスさんが犯人なんです！』イリスはファッジにそう訴えようと、息を吸い込んだ。

ふと、脳裏にロックハートの記憶がよぎった。透き通った銀色の青年が、壊れていく自分の姿を静かに見つめていた、あの光景。『ギルデロイは君を守るために、勇敢な行動を取った。それを無駄にしてはならぬ』——ダンブルドアの言葉が、その姿に重なった。

その時イリスは初めて、いくら真実を叫んでもそれが受け入れられるとは限らないという事、そしてだからこそ、人を守るための嘘もあるのだという事を学んだ。イリスは喉の奥から込み上げてくる熱い感情をぐつとこらえ、謝罪の言葉を掛け続けるファッジに、ある一つのお願いをした。

☆

イリスは制服に着替え、ファッジ大臣に“付き添い姿くらまし”をしてもらって、聖マング魔法疾患障害病院に辿り着いた。聖マングは、ロンドンの中心部にある駅から程近いデパート「パージ・アンド・ダウズ商会」の中にあつた。ショーウィンドウに飾られた、一番醜いマネキンに向かって、ファッジが用件を話すとマネキンが合図する。それに従って、二人はショーウィンドウの硝子突き抜け、中に入った。総合受付で確認すると、ロックハートは5階のヤヌス・シツキー病棟——呪文による永久的損傷を負った患者のための隔離病棟で入院している事が分かった。

ファツジは病室前までイリスを案内すると、『くれぐれも危険な事はしないように』と念を押した上で、席を外してくれた。ベッドは三つあった。その内の二つには分厚いカーテンが引かれていて、中の様子は分からない。窓際のベッドに、イリスの求めていた人物がいた。人の好きそうな笑顔を浮かべ、ロックハートはイリスを見つめた。

「やあ、可愛いお嬢さん！」

——ロックハートはイリスの事を綺麗さっぱり忘れてしまっていた。イリスは思わず涙を零し、ロックハートに抱き着いた。

「やれまあ！」ロックハートは呆れたように言った。

「こんな可憐な女の子を泣かせるなんて、私はさぞかしひどい人間だったのでしょうか？」

「良かったわねえ、ギルデロイ！」癒師がにこにこ笑い、イリスを見た。

「まともな見舞客は、あなたが初めてですよ。他の連中と来たら、全く！」ハナハツカ薬がいくらあっても足りない位だったわ！」

ロックハートは、しゃくり上げながら癒師と言葉を交わす女の子をまじまじと見つめた。——彼はもう自分や他人の事だけでなく、ほんの数分前の事すら記憶出来ないほど、脳の機能が衰弱していた。しかし、そんな真つ白な頭の中で、この少女の姿はキラキラと輝いて見えた。その輝きは、ロックハートの心臓の表面を暖かく撫で、時に切なく焦がしていく。

「お嬢さん、君の名前を教えてくださいませんか？」ロックハートは尋ねた。

「イリスです」イリスはぎこちなく微笑んだ。

「イリス・ゴーント」

「美しい名前だ」

ロックハートはうつとりと囁いた。——とても綺麗な名前だ、忘れないようにしなければ。私は忘れっぽいから。私は——。暫くして、ロックハートは今初めてイリスの存在に気づいたと言わんばかりに、パチパチと瞬きして、明るい声で言った。

「やあ、可愛いお嬢さん！どうして泣いているのですか？」

「さあさあ、ギルデロイ。そろそろお昼寝しましょう？」

ショックを受けた様子のイリスを気遣って、癒師はロックハートにクマのぬいぐるみを持たせ、薬を飲ませて寝かしつけた。赤子のように眠り始めた彼の姿を見て、癒師は労りの涙を流した。

「彼は、本当に可哀想な子なの。ご家族は誰一人お見舞いに来ない。来るのは、彼に復讐しようとする人達だけ。あそこのご両親は、お母様や息子さんがよく会いに来られるのに。・・・ああ、またなの！」  
「おい、ロックハートはいるか！」

どこかで聞いたような声がして、イリスは俯いていた顔を上げた。  
——病室の扉の前に、大きく背の曲がった鷲鼻の魔法使いが立っている。間違いない。イリスは息を飲んだ。この人は、自分をルーピン先生から助けてくれた記憶の持ち主だ。男もイリスを見た瞬間、驚いたと言う風に目を丸くした。

男はぶつきらばうな口調で、ルー・ガルと名乗った。ルーはイリスを伴って、外来者用の喫茶室や売店のある6階まで行くと、湯気のホカホカ立ったバタービールをご馳走してくれた。二人はこじんまりとした造りのテラス席に腰掛けた。ルーはバタービールを一口飲み、ぽつぽつと話し始めた。

「記憶が戻ってから、〃ロックハート被害者の会〃に参加したが・・・どうも俺だけ、会員の奴らと記憶が違っていてね。可笑しいと思っただ。お嬢ちゃん。あんたは全部、知ってるんだろ？」

イリスはルーに『誰にも口外しない事』を約束してもらった上で、全てを話した。ルーは大きく頷き、かすかに微笑んで言った。

「そういう事だったのか。よし。あいつの善行に免じて、特製のクソ爆弾を顔にぶちこんでやる計画は、中止してやる事にするよ」

ルーはローブのポケットから特大のクソ爆弾(すごい匂いだ)を取り出し、ニヤツと底意地の悪い笑みを浮かべた。——イリスはふと、ドラコの事を思い出した。記憶を失っている間、一体この人は、どんな気持ちで過ごしていたんだろう。

「記憶を失くしている間のこと、覚えていますか？」

「ああ、もちろん覚えてるさ」ルーは頷いた。

「あれは間違いない、俺の人生の中で一等、平和な日々だったな。どこ

か知らない村で住むところを貰って、畑を耕して暮らしてた。毎日が、欠伸が出るほど穏やかだった」

ルーはどこか遠いところを見つめているように、目を細めた。しかしその顔は、凡そ幸せだとは言い難いものだった。

「だが、それだけだ。まるで胸にぽっかり穴を開けられたみたいに虚しくて、だけどその原因が何なのか分からなくて、毎日ずっと苦しかった。記憶が戻った時、胸の穴が塞がって、やっと生きてるって実感出来たよ。あいつが奪っていったものは、俺の人生、俺の全てだったんだ」

「人狼と戦う記憶が、ですか？」イリスが驚いて尋ねると、ルーはしっかりと頷いた。

「そうだ。毎日が危険と隣り合わせだがな。噛まれたら終わりだし。．．．ああ、言っておくが、俺は人狼の全てが悪い奴らばかりじゃないと知ってるぞ。俺が戦うのは、グレイバックみたいな根っからの悪だけさ。」

奇襲や報復が恐ろしくて、寝れない日もある。死ぬほど痛い目に遭った事もある。もう二度と思いついたくない事も。だけどそれもひっそるめて、俺の人生、生き様なのさ」

イリスは俯き、ギョツとビールのマグカップを握った。マグカップの底で揺れる水面に、ドラコの優しい笑みが浮かんで、儚く消えた。『平穏な日々よりも、危険な日々の方が良い』——ルーはそう言った。そんな筈はない。ルーの言葉は、イリスの心を激しく掻き乱した。

「そのことが原因で、死んでしまったとしても？」イリスは掠れた声で言った。

「その記憶がなければ、忘れたままだったら．．．あなたはずっと平穏な日々を送ることが出来たのではないですか？」

「あんたはロックハートのやった事が正しいって言うのか？」ルーは鼻白んだ。

「違います！でも、私．．．」イリスは慌てて首を横に振り、言い淀んだ。

「もし大切な人が、その記憶がないことで平和に生きていられるのな

ら・・・」

イリスはそれ以上、言葉を続ける事が出来なかった。ルーはそんな彼女の様子を見て、何かを察したようだった。温くなったビールの残りを飲み干して、彼は静かに口を開いた。

「あんたが誰のことを言っているのか、俺には分からねえ。だが、一つ聞きたい。そいつは自分の意志で、あんたに『死ぬのが怖いから記憶を消してくれ』って頼んだのか？」

ルーはイリスの反応を見なかった。ただ一呼吸置いて、彼は言葉を続けた。

「もしそうじゃねえなら、あんたはそいつに許されない事をした。ロックハートの野郎と変わらねえ。自分勝手な都合で、あんたはそいつの人生を滅茶苦茶にしたんだ」

——それはあんまりな言い方だった。ドラコを守るためにしたことが、自分勝手だつて？イリスは思わずカツと熱くなり、立ち上がった涙ながらに叫んだ。

「そんなことない、先生は『彼を守るために正しい事をした』つて言ってくれた！私、彼が死ぬのは嫌だったの。彼を守るためにしたことなのに！」

「そいつはあんたのペットか？一人の人間だろ」ルーは呆れたような口調で言った。

「お嬢ちゃん。あんたは子供だからまだ理解出来ないのかもしれないが・・・相手の意見に耳も貸さず、安全な鳥籠に閉じ込めるのは、一方的な愛情の押し付けだ。」

本当に人を愛するというのは、相手と同じ高さに立って、意見を尊重し、受け入れることだ」

「・・・相手が、死ぬことを選んで？」イリスは震える声で言った。「そうだ」ルーは静かに応えた。まるで何かを思い出しているかのようになり、ゆっくりと瞬きをしながら。

「あんたにはあんたの人生、そいつにはそいつの人生がある。そして自分の人生は他人じゃなく、自分自身で選択するものなんだ」

ルーは立ち上がり、貨幣をテーブルに放ると、イリスの頭を軽く撫

でた。そして蛙チョコレートの箱を一つ握らせ、どこかへ去って行った。イリスは暫くの間、ルーの言った事を考えた。——私はドラコを愛してる。彼が死ぬなんて耐えられない。だから彼を守るために、記憶を消した。しかしそれは、ルーの言う通り、自分勝手な行動だったのだろうか。もしあの時勇気を出して、未来に起きる出来事をドラコに話していたら——。

☆

ロックハートはお昼寝の時間が終わった後、上機嫌で羊皮紙の束に自分のサインを書いていた。記憶は完全に失われてはいるが、身体に刻み込まれた癖の一部は、まだ抜けきっていないらしい。ロックハートは——以前より随分控えめにはあるが——自分が目立ったり、注目を浴びたりするのが何となく好きだった。そんな彼の様子を愛おしげに眺め、癒師は言った。

「まあ、沢山書けたのね！今度イリスちゃんが来てくれたら、一番良く書けたのをプレゼントしたらどう？」

「イリスちゃん？」ロックハートは無邪気に首を傾げた。

「誰の事だい？」

——その時、ふとロックハートが書いていたサイン入りの羊皮紙が一枚、ひらりと机の上から床へ舞い落ちて行った。羊皮紙は床に落ちる寸前に、煌めくライラック色の小鳥に姿を変えた。小鳥は、呆気に取られるロックハートの周りを飛び、美しい声でさえずった。

「わあーすごいー！」ロックハートは興奮して叫んだ。

「僕、この色が大好きー！」

羊皮紙は次々にロックハートの手元から離れて、空中を舞い、様々な姿に変身した。良い芳香を漂わせる花卉、勝手に三重奏を始める弦楽器たち、シンバルを打ち鳴らす小猿、羽衣を纏って踊る人形……それらはロックハートを讃えて美しい声で歌い、はしやく彼の周囲をぐるぐる回って楽しませた。やがて歌は終盤を迎え、病室中にライラック色の花火と一緒に『ロックハートは最高だ！』のメッセージが浮かび上がると、彼は感極まってベッドから立ち上がった。

「すごい、すごいーまるで魔法だー！」



花火が終わった後、羊皮紙で出来たパレードの仲間たちは元の姿に戻る前に、ロックハートに小さなプレゼントの箱をくれた。わくわくしながらそれを開けると、そこには“ギルデロイ・ロックハート”の蛙チョコカードが入っていた。大きな自分の写真が、にこにここと笑っている。裏返してみると、『ギルデロイ・ロックハート。最高にカッコいい魔法使い』と書かれていた。ロックハートは大興奮だった。

「私の写真だー！」

「まあ、本当だわ！良かったわねえ、ギルデロイ」癒師は優しく囁いた。

病室の扉の前で、イリスは杖を下ろした。そしてロックハート・パレードを実行している間、同じ病室の病人達の迷惑にならないように“防音魔法”などを掛けてくれたファッジ大臣にお礼を言った。

「君は不思議な子だ」ファッジは呆れたように言った。

「あんな詐欺師を喜ばせて、一体何になる？それともこれは、高度な皮肉かね？」

イリスは微笑んで、何も言わなかった。ファッジと共に学校へ戻る道中、イリスはルーから貰った蛙チョコレートの箱を開けた。グリフィンドールのカードだ。——ロックハートは勇敢な魔法使いです。イリスはファッジの背中に向けて、心の中で呟いた。私だけが、それを知ってるんです。イリスの手の中で、グリフィンドールはにっこりと笑った。

☆

長かったクリスマス休暇が終わり、生徒たちが“日常”をそれぞれ手にぶら下げて、学校へ戻って来た。マダム・ポンフリーの最終診察からやっと解放されたイリスは、一人で朝食を取りに大広間まで行った。あれからハリー達はちよくちよく医務室へ顔を出しに来てくれたけれど、彼ら以外の生徒たちと会うのは本当に久しぶりだ。イリスが着いた時には、もう大広間は人でいっぱいだった。

イリスが入っていくと、突然生徒たちの話し声が止み、シーンと静

まり返った。その後、全員が一斉に大声で話し始めた。イリスは気にしない振りをして、真つ直ぐにグリフィンドールのテーブルへ向かった。その時、不意にテーブルから二人の女の子が立ち上がった。――ラベンダーとパーバティだ。

「イリス、本当にごめんなさい！全部、嘘だったのね」ラベンダーが涙ながらに言った。

「私たちひどいことを言ったわ」パーバティがしゃくり上げた。

イリスの心の中に、熱い感情が込み上げる。本当は激情のままに、みんなに真実をぶちまけたかった。――ハリー達は、イリスを心配そうに見つめている。イリスは目を閉じ、大きく深呼吸をした。

「ううん、全部が嘘じゃない」イリスは冷静になろうと努力しながら、言った。

「半分は本当だよ。私はゴント家の人間で、お祖母さんは有名な“死喰い人”だった」

生徒たちのガヤガヤ声が、急速にしぼんでいく。大広間じゅうの視線が自分に一点集中しているのが分かっていられるのにも関わらず、イリスは目頭が熱くなり、涙が溢れるのを止める事が出来なかった。

『お祖母さんが“死喰い人”だった。だから、君もそうなるべきだ』って、言う人たちもいるよ。

だけど私は、他人の意見に左右されるんじゃないやなく、自分の意志で決めたいの。何が正しくて何が間違っているのか、自分がどうなりたいのかを。

どんなに苦しい状況でも、人はそうして生きる事が出来る。周りの人たちが、それを教えてくれたから」

イリスは鼻をすすると、ハリーの隣に座った。気まずそうに身じろぎするラベンダーとパーバティの方を見ないようにしながら、イリスは自分の大皿にスクランブルエッグを盛り付けようと手を伸ばした。しかし、それよりも先に丸っこい手が伸びて来て、取り分け用のお玉を取ると、イリスの皿にスクランブルエッグをたっぷりと載せた。――イリスは手の主を見て、目を丸くした。ネビルだ。

「け、ケチャップはいる？」ネビルは真つ赤な顔で尋ねた。

イリスが頷くより早く、今度はあり得ない量のケチャップとマスタードが彼女の背後から噴き出し、スクランブルエッグを覆い隠していった。——悪戯双子、フレッドとジョージだ。

「素晴らしい演説だったぜ、兄弟」とフレッド。

「痺れたね。これにはパーフェクト・パーシーも真つ青だ！」とジョージ。

グリフィンドール生が次々に立ち上がり、わっとイリスの下へ集まった。それだけではない。他の寮生——ハツフルパフ生アーニー、ジャステインもいる——も大勢やって来て、イリスの皿に様々な食材を載せていく。ソーセージ、ベーコン、ブラッド・プディング、卵、ハツシユドポテト、マツシユルム、トマト、ビーンズ、そして食パン。気がついた頃には、イリスの大皿は、特大のイングリッシュ・ブレックファストが出来上がった。

「現金なヤツらだよな、ホント！」ロンがイリスのソーセージを齧りながら、呆れたように言う。

「そんなに食べられるの？」ハリーが心配そうに聞いた。

「大丈夫」

イリスは込み上げてくる涙を隠すために、口いっぱいハツシユドポテトを頬張りながら、もごもご言った。——全ての人と和解できた訳ではない事は、イリスが一番良く分かっていた。パーシーはふてくされたような顔でその場を動かないジニーを叱っていたし、スリザリンのテーブルでは変わらずドラコが冷たい視線を送っている。だけどイリスは、とても清々しい気持ちでいっぱいだった。ハーマイオニーはイリスが食べやすいように、ソーセージを一口大に切っている。イリスは口の中のものをゴクンと飲み込んで、ハリーに向けて照れ臭そうに微笑んだ。

「全部、食べられるよ」

☆

それから日々は飛ぶように過ぎ、気が付くと、優勝杯を賭けたグリフィンドール対スリザリンの試合が、イースター休暇明けの最初の土曜日に迫っていた。いざ試合の当日になると、ウッドはまだ選手たち

が誰も食べ終わらないうちに朝食を切り上げさせ、状況を掴んでおくためにピッチに行け、と急かした。イリス達も慌てて朝食の残りをかき込んで、観客スタンドへ走った。イリスにとって幸いだったのは、スリザリンのシーカーがドラコから代理の選手に代わった事だった。これでハリーとドラコが争う様子をハラハラしながら見なくて済む。イリスは安堵してため息を零した。

一方のハリーは青ざめた表情で、真紅のローブに着替えていた。この試合に負ければ、優勝杯をスリザリンに奪われる事となる。余りのプレッシャーに押しつぶされ、ハリーだけでなく、選手達は誰一人口を聴こうとしなかった。みんな僕と同じ気持ちなのだろうか、とハリーは思った。朝食に、やけにもぞもぞ動くものを食べたような気分だ。ハリーは継るように、代理の箒の柄をギュツと握った。やれることはやったんだ。ハリーは自分に言い聞かせ、『もしニンバスがまだ生きていたら』という気持ちを遠くへ追いやろうとした。

——その時、ふとテントの切れ端が揺れ、ハリーが今一番聞きかけた声をした。

「ハリーー」イリスの声だ。

ハリーが慌てて声のした方向へ駆け寄ると、グリフィンドールの応援グッズに身を包んだイリス達が、にっこり笑って立っていた。しかも彼女たちだけではない。サングラスを掛けた背の高い男性が、長く薄い包みを抱えて、ハリーを見つめている。——シリウスだ。たった数週間で、彼の様子は明らかに様変わりしていた。骸骨のように落ち窪んでいた顔は生氣を取り戻し、もじやもじやの髪は綺麗に切り揃えられ、小粋な感じにまとめられている。清潔でシンプルな服装に身を包んだシリウスは、とてもハンサムで魅力的に見えた。瞳に掛かるほど長い前髪を払い、シリウスは言った。

「身の回りの細々としたことが、ようやく一段落付いてね。ダンブルドアに許可を貰って観戦に来たんだ。

あとこれを。君への贈り物だ。君の名付け親から、十三回分の誕生日をまとめたのプレゼントだと思って受け取ってほしい」

「開けてみるよ、ハリーー」ロンが大興奮した様子で叫んだ。

促されるまま、包みを破ったハリーは、大きく息を飲んだ。——見事な箒が、太陽の光に照らされてキラキラ輝いている。信じられない。『ファイアボルト炎の雷』だ。ハリーがダイアゴン横丁で毎日通い詰めた、あの夢の箒と同じものだ。箒の振動を感じて手を離すと、それは独りで空中に浮かび上がり、ますます燦然と煌めいた。ハリーが跨るのにぴったりの高さだ。ハリーの目が、柄の端に刻まれた金文字の登録番号から、完璧な流線型にすらりと伸びた樺の小枝の尾までを、吸い付けられるように動いた。

「あ、ありがとう」

ハリーは掠れた声で言った切り、言葉が出てこなくなった。言葉がなくなると、彼がどんなに喜んでるかという事は、イリス達には良く分かった。しかし、ハリーの幸運はそれだけでは終わらなかった。シリウスは微笑んで、さらなる幸せの爆弾をハリーに落としたのだ。

「ハリー。以前、私は君に言った事があったね。『一緒に暮らさないか？』と」

ハリーの胸の奥で、何かが爆発した。彼の心にずっしり押し掛かっていたプレツシャーは、もうとつくに何処か遠いところへ吹き飛んでしまっていた。ハリーはごくりと唾を飲み込んで、シリウスの次の言葉を待った。シリウスの言おうとしていることが、自分の考えていることと同じだったら？シリウスは犬が吠えるように快活な笑い声を上げ、言った。

「そうだ、私達は一緒に暮らせる事になった！少しばかり複雑で面倒な手続きが必要だがね。今学期が終わったら、早速引越しを始めよう」

——この瞬間を、ハリーは生涯忘れないだろう。人は溢れるばかりの幸せで包まれた時、こんなにも素晴らしい気持ちになれるのだ。もし、今、デイメンターが群れを成してその辺りにいたら・・・ウッドに引き摺られるようにしてその場を連れ出されながら、ハリーは思った・・・今なら、世界一大きな守護霊を創り出せるに違いないと。

☆

シリウスはイリスたちに引つ張られるようにして、スタンドに駆け

上がった。観衆の四分の三は真紅のバラ飾りを身に付けて、グリフィンドールのシンボルのライオンを描いた真紅の旗を振るか、『行け！グリフィンドール！』とか『ライオンに優勝杯を！』などと書かれた横断幕を振っている。

シリウスはサングラス越しに競技場を見渡したり、年季の入った木製の手摺りを撫でながら、思った。——ホグワーツは、自分が在学していた頃から、どんな些細なものでさえ何一つ変わっていない。今までは戦うことに必死で、こんな風にゆったりと周囲を観察する余裕などなかったが、こうして見るとまるで学生時代に戻ったかのようだ。自分にとって最も輝きに満ちた、あの頃に。

俄かに、割れるような歓声が周囲を包み込んだ。思わず警戒して身構えるシリウスの耳に、懐かしい声が飛び込んできた。

「ジェームズだ！」ピーターだ。

「そして、ああ、我らがスリザリンのお出ました！」リーマスがうつとりとした声音で囁いた。

驚いて声のした方を見ると、グリフィンドールの制服に身を包んだ悪友たちが、手摺に噛り付くようにして、熱心な眼差しをピッチに注いでいる。シリウスが呆気に取られて辺りを見渡すと、近くに座っていた女学生たちと目が合った。彼女らはポツと頬を赤らめ、黄色い歓声を上げる。

——ああ、これまでのことは、全部夢だったんだ。みずみずしく張りのある自分の手を見つめ、シリウスは安堵のため息を零した。なんて長く、生々しい夢だったんだろう。

スリザリンのゴールポストの後ろでは、二百人の観衆が緑の服を着て、スリザリンの旗にシンボルの銀色の蛇をきらめかせていた。その中で暗い笑みを浮かべているスネイプと目が合い、二人は歯を剥き出しながらお互いを威嚇した。しかし、試合開始のホイッスルが鳴った瞬間、二人の関心はクイディッチへ戻っていく。

ジェームズは天性の才能を発揮し、自由自在に空を飛び回った。シリウスは観衆と一体になって、スリザリン・チームが執拗な嫌がらせをすると激しく罵り、グリフィンドール・チームが素晴らしいプレー

をすると歓声を上げ、喜んだ。ジェームズは良いプレーを決めるたびに、魅惑的なウイנקをリリーに送った。しかしその全てが冷たく無視されているのを見て、シリウスたちは堪え切れずに吹き出した。

不意に、ジェームズが上空から一直線に降下し始めた。その弾丸のようなスピードにみんなは見惚れ、歓声を上げた。——スニッチを見つけたのだ！

「いいぞ、ジェームズ！」シリウスは夢中で叫んだ。

ブラッジャーがジェームズに向けて打ち込まれるが、彼は箒の柄にぴったりと身を伏せ、ひらりと躲してみせた。そして、見事にスニッチを掴んだのだ。ジェームズが急降下から反転し、きらめくスニッチを高々と掲げてみせた。その瞬間、競技場全体が爆発したかのような、凄まじい大歓声が沸き起こった。

「し、信じられない！優勝杯よ！私達が優勝よ！」

どこかで聞いたことのある、女の子の声がした。——そう、ハーマイオニーだ。シリウスが横を向くと、感極まった彼女がイリスの首つ玉に抱き着き、嬉し泣きをしている。その隣では、ロンがぴよんぴよんと兎のように飛び跳ねながら、何かを叫んでいた。リーマスもピーターもリリーも、どこにもいない。シリウスは急にこの世界から切り離され、一人ぼっちになったような気がした。ジェームズはどこだろう。シリウスはピッチを見回した。

目の前の上空で、ジェームズが振り返り、自分を見てにっこりと微笑んだ。優しい緑色の、リリーと同じ目で。——違う、この子はジェームズじゃない、ハリーだ。僕がそう名付けた。二人の大切な子供だ。

——ジェームズたちを失ったあの日から、シリウスの時間は止まっていたままだった。過去の輝きと後悔だけが、シリウスの心臓を動かし続けた。アズカバンを脱獄してからは、ピーターを殺害することだけを考えた。その後の、自分の未来など、何も考えられなかった。——これからハリーと共に生活していく資格があるのだろうか。彼の両親を奪った自分に。半壊したポッター家で見た親友たちの虚ろな顔は、シリウスを過去に縛り付け、今になってもそこから進むことを頑なに

許してはくれなかった。

しかしハリーの笑顔を見たたん、シリウスは自分を雁字搦がんにじがらめめに縛っていた“過去の呪縛”が、壊れていくのを感じた。——もう二人はどこにもいない。過去は覆らない。それなのに、ハリーを借りて、彼らが笑い掛け、自分を許してくれたような気がしたのだ。今までの想いがグツと胸に込み上げて来て、シリウスは堪え切れずにサンングラスを取り、溢れる涙を拭った。

試合終了のホイッスルが鳴った時、真紅の応援団が柵を乗り越えて、波のようにピツチに雪崩れ込んだ。次の瞬間、ハリーも他の選手も、みんなに肩車をされていた。ハグリッドは真紅のバラ飾りをいくつも付け、勝利の歓声を上げている。パーシーはいつもの尊大ぶりはどこへやら、狂ったようにぴよんぴよん飛び跳ねている。マクゴナガル先生はウッド顔負けの大泣きで、巨大なグリフィンドールの寮旗で目を拭っていた。そして、ハリーに近づこうと人群れを掻き分ける、イリスとロン、ハーマイオニーの姿を見て、彼は言葉もなくにつこりと笑い掛けた。スタンドでは、ダンブルドアが大きなクイッツ優勝杯を持って、グリフィンドール・チームの到着を待っている。ウッドがしゃくり上げながら優勝杯をハリーに渡し、彼はそれを高く掲げた。

グリフィンドール優勝杯獲得のお祭り騒ぎは、それから三日三晩、ずっと続けられた。

☆

グリフィンドールのお祭りがやっと落ち着いた頃、魔法省内にあるウイゼンガモット法廷にて、ピーターの判決が言い渡された。——彼の犯した多くの罪は余りに重く、魂を奪い人格を破壊する最高刑『ディメンターのキス』が執行されるのに十分なものとなった。判決が言い渡されたたん、蠟のように白い顔をしてぶるぶると震え出し、よだれを垂らしながら泣き喚くピーターを、シリウスだけでなく、ファッジ大臣や裁判長を始めとする他の人々も、冷たい表情で見つめていた。

最高刑執行となる翌日の朝、ファッジ大臣とディメンターが一体、



そしてそれを操る役人が一人、ピーターのいる拘置室に入つて来た。デイメンターが入つた瞬間、部屋の中をゾツとするような冷気が包み込む。魔法を妨害する効果が込められている、特殊なロープで椅子に縛り付けられたピーターは、狂つたように頭を横に振りながら泣き叫んだ。

「いやだあああつ!!どうして僕がキスを受けるんだよおつ!お、同じ罪だ!シリウスと!あいつはアズカバンに連れて行かれただけじゃないかあ!僕も同じようにしてください!死にたくないいいつ!

「同じ」ではない!」ファツジはピシヤリと言い放つた。

「罪人はお前だけ。ブラックは、罪を犯してなどいなかった。お前は善良な魔法使い二名を殺す手引きをし、大勢のマグルを殺した。そしてブラックにその罪を擦り付け、無実の者を投獄させた。それだけではない。いたいけな子供に手を出し、“闇の魔術”を用いて拷問したではないか。キスを施すのに、十二分に値する悪漢だ!」

ファツジがいくら理路整然と言いつても、ピーターは聞く耳も持たない様子で、「違う、違う!」と泣きながら繰り返すばかりだった。おぞましい光景だった。育ち過ぎた、頭の禿げかけた赤ん坊が、椅子の上で竦んでいるようだった。ファツジと役人は『何が“違う”んだ?』と言わんばかりに、引き攣つた顔を見合わせた。長い時間、獲物を目の前にしながら“おあずけ”状態を強いられているデイメンターが、わずかにロープをはためかせた。その冷気がピーターの頬を撫でた瞬間、彼は我に返り、涙交じりの声で懇願した。

「ああ、どうか、このことをあの子に!イリスに知らせてください!あの子ならきつと今の僕を哀れに思い、助けてくれる!今すぐあの子を呼んでください!」

「その名前を出すとは、どういう神経だ?あんなに惨い事をしておいで!」ファツジは憤り、目を白黒させながら唸った。

「あの子に知らせるのは、キスが執行された後だ。お前が抜け殻になつたと知ったら、彼女も安心して毎日を過ごせるだろう」

ファツジは上質なマントのポケットから罪状を取り出すと、役人に

執行の合図を送った。すると衣擦れの音を響かせながら、デイメンターが近づいて来る。ピーターは耳障りな金切声を上げ、何とかその場から逃げ出そうと身を振るが、魔法のロープは少しも軋まない。しかしその時、目の前で罪状を読み上げていくファッジの右手の親指に、大振りのダイヤモンドの指輪が嵌まっているのが目に入り、ピーターは息を飲んだ。

「大臣、どうかお考え直しを！私はあなたのお役に立ってみせます！」  
ピーターははつきりとした声で叫んだ。

「この国の最高権力者である筈の、あなたの更の上に立ち・・・あなたを影で操っている、彼に関する有力な情報を知っています！」

ファッジは読み上げるのを止め、羊皮紙から視線を外して、訝しげにピーターを見つめた。——こいつは一体、何を言っているんだ？  
ファッジの意図を察した役人は、デイメンターをその場で待機させた。ファッジにとって好都合なことに、彼は自分の息の掛かった人間だった。あとでいくらか賄賂を渡せば、この時の会話を聴かなかった事にしてくれるだろう。デイメンターの動きが止まると、ピーターはますます勢いづいて、歪んだ笑顔で言った。

「その立派な指輪は、彼に与えられたものでしょう！一目見ただけで分かる、それは彼の懇意にしている宝石商のものだ！私をこれ以上尋問せず、なるべく早く抜け殻にするようにと命じられたに違いない！」

今度はファッジの顔色が、蠟のように真っ白になる番だった。ピーターの予想が、全て当たっていたからだ。役人は表面上そっぽを向いているが、今の会話を一言も聞き漏らすまい、と言わんばかりに聞き耳を立てているのが、ファッジにはありありと感じ取れた。——しかし、今はそれどころではない。ピーターの言葉は、ファッジが全てのリスクを度外視してまで、刑執行を踏みとどまらせるのに、十分な力を持っていた。

「私は、彼の弱みを握っています！この情報があれば、あなたは彼を支配できる！もうおこぼれに預かる必要なんてない！彼の持っている、途方もない富や権力を奪い取り、思うままにできるのです！あなたが

私を見逃してくだされば、私はすぐにもその情報をお伝えします！

ファツジはごくりと唾を飲み込んだ。——ピーターが言う彼の正体は言うまでもなく、ルシウス・マルフォイの事だ。今回の件もピーターの言う通り、ルシウスが目も眩むばかりに美しいダイヤの指輪と、東南アジアの素晴らしく広々とした別荘付の土地を贈る代わりに、『これ以上深入りはせず、迅速にキスを執行すること』を約束させたのだ。ファツジは暫くの間、思いを馳せた。

ルシウスは、欲望に忠実な人々の扱い方をよく心得ていた。しかしそれは、人々に慕われる事と同義ではない。表面上は友好的な態度を示しておきながら、影で彼を忌み嫌う者は大勢いた。ファツジもその一人だ。——いつも彼には頭を下げ、その尻拭いに奔走されるばかりだった。今回もさらなる余罪を追及しようとする尋問を要求してきた闇祓いの連中やダンブルドアを黙らせるのに、どれだけ苦労したことか。だが、ピーターがもし真実を言っているなら、その苦労も終わる。今度は自分に向かって、ルシウスが頭を垂れるのだ。ファツジの口角が、ピクツと動いた。秘密を暴かれた彼が焦って自分を襲おうとしても、こつちには大勢味方がいる。やってられないことは、ないのではないか？もしピーターが苦し紛れに嘘を言っていたとしても、“真実薬”を使えばすぐに分かることだ。

「貴様、何をしているっ！勝手な行動を……！」

——役人の怒号とピーターのつんざくような悲鳴で、ファツジは我に返った。

デイメンターは飢えていた。数週間前、小さな娘からたった一口吸い上げたきり、何も口にしていない。少量の御馳走は、空腹をより際立たせる。本当なら、あの娘を思う存分貪りたい。だが、彼女はもういない。ならば、目の前にいるこの貧相な男はどうだ？あの子のように美味くはないだろうが、魂までしゃぶり尽くせば、きつと腹は膨れるに違いない。もう我慢ができない。デイメンターは役人の命令を無視して、ピーターに覆い被さろうとしたのだ。

思いもよらぬ事態に、ファツジは焦った。——あいつがキスを受け

れば、せつかくのチャンスが消えてしまう。役人の放った守護霊がピーターとデイメンターの間に滑り込んだのと、ファツジがピーターの拘束を解放する呪文を唱えたのは、ほぼ同時だった。糸の切れた操り人形のように、ぐらりと椅子からピーターの体が揺らぎ、床に崩れ落ちる。デイメンターを遠ざけようと奮闘する役人を横目に、ファツジは慌ててピーターに近づいた。

「ああ、何という事だ……」

しかし、もう遅かった。ピーターはキスを受けた後だった。淀んだ目は焦点を失い、半開きになった口の端から涎が垂れている。——ああ、希望は潰えた。ファツジは傍にしゃがみ込んで肩を揺さぶりながら、ピーターの顔を覗き込んだ。

——その時、ピーターの焦点を失った筈の目が、ギョロリと動いてファツジを見た。そしてファツジが足元に転がっていた杖をむしやぶりつくようにしてもぎ取り、ピーターは叫んだ。

「ストウーピファイ、麻痺せよ……」

放たれた赤い光線は、思わず身構えたファツジを通り過ぎて、役人に命中した。意識を失った役人に襲い掛かろうとしたデイメンターを、ファツジはピーターから杖を奪い返し、守護霊を出して守った。

——そして事態が収束した数秒後、ファツジがピーターを振り返った時には、もう彼の姿はどこにも見当たらなかった。ファツジはもつとピーターを警戒するべきだった。ピーターは死が間近に迫っても尚、生きるためのチャンスを貪欲に探し続け、そして見事にそれを掴んだ。ファツジはピーターにしてやられてしまったのだ。

余りの事に茫然自失状態となりながらも、ファツジは役人を介抱するために立ち上がった。その時、不意に指に強い痛みを感じ、彼は顔をしかめた。見ると、あの美しいダイヤの指輪が抜き去られていて、小さな動物の噛み跡から血が滲んでいる。ファツジは自分の欲望のせいで、指輪や別荘地だけでなく、ルシウスを始めとする様々な人々の信用を失ったと痛感した。彼はそれ以降、離れていく人々の信頼を繋ぎ止めるかのようになり、ますます自分の権力に固執するようになった。

その日、日刊予言者新聞が、ピーター事件でお祭り騒ぎ状態となった。そしてピーター・ペティグリューはイギリスの魔法界やマグル界において、最重要の指名手配犯として名を馳せることとなった。魔法界の手配書の写真には、人間の姿とネズミの姿が両方掲載されるといふ異例の扱いになり、イギリスの家庭中でネズミ捕りが飛ぶように売れ、ペットショップのネズミには魔法省による厳しい定期チェックが入った。マグル界はさすがにネズミの写真まではないものの、政府からネズミに関する巧妙な印象操作が行われた結果、人々がネズミをますます忌み嫌うようになった。ピーターはイギリス中の人々だけでなく、イギリス中のネズミも敵に回してしまったのである。

## Act 17. プリベツト通り四番地（前編）

学期末の試験は、子供たちの頭から下世話なゴシップ記事を奪い取り、非情な現実を突きつけた。——城はあつという間に、異様な静けさに包まれた。月曜日の昼食時、三年生は「変身術」の教室から、血の気も失せ、よれよれになって出て来て、結果を比べ合ったり、試験の課題が難し過ぎたと嘆いたりした。ティーポットを陸亀に変えるという課題もあった。ハーマイオニーは自分のが陸亀というより海亀に見えたとやきもきして、みんなを苛立たせた。他の生徒は、そんな些細なことまで心配するどころではなかったのだ。

「なあ、亀つてそもそも口から湯気を出すんだっけ？」

「出さないよ、ロン」イリスは「呪文学」の教科書と睨めっこしながら、冷静に返した。

「出すのは紅茶だよ。私のは完璧な陸亀だったと思う。口から出る紅茶も、ちゃんとアールグレイの良い香りがしたし」

「マジかよーマジなのかよー」ロンは気が狂ったように、頭を掻き毟った。

「おいおい、二人共待ってくれ。亀は、口から湯気も紅茶も出さない」ハリーは頭を抱えながら、際限なくボケ続ける二人に突っ込んだ。減点される未来を予想し、絶望の呻き声を上げる二人を見て、ハリーは自嘲気味に笑って続けた。

「だけど安心して。僕のなんか、尻尾のところポットの注ぎ口のままだったんだ。まるで悪夢だよ。減点されるのは、ハーマイオニーを除いてみんな一緒さ」

昼食後、少しの空き時間を挟んで、すぐに教室に上がって「呪文学」の試験が始まった。ハーマイオニーが予想した通り、フリットウィック先生は「元氣の出る呪文」をテストに出した。イリスとハーマイオニーのペアが、程好い加減で呪文を掛け合う一方で、ハリーは緊張してしまったのか少しやり過ぎてしまい、相手のロンは笑いの発作が止まらなくなり、静かな部屋に隔離され、一時間休んでからテストを受ける羽目になった。夕食後、みんな急いで談話室に戻ったが、のんび

りするためではなく、次の試験科目、「魔法動物飼育学」、「魔法薬学」、「天文学」の復習をするためだった。

次の日の午前中、「魔法動物飼育学」の試験監督はハグリッドだった。バックビークが助かったことが余程嬉しかったのか、ハグリッドは大きな顔いっぱい溢れるばかりの笑みを浮かべ、イリスたちに課題を出した。――“禁じられた森”の手前にある、古い木に棲ませたボウトラックルに攻撃される事なく、葉っぱを一枚取って来るというものだ。ボウトラックルとは最大二十センチほどの小さな生き物で、見かけは樹皮と小枝で出来ており、そこに小さな茶色の目が二つ付いているため、肉眼で見つけるのは極めて難しい。普段は昆虫を食べ、大人しく内気な性格だが、自分の棲む木に危険が迫ると、棲家に危害を加えようとする木こりや樹医に襲い掛かり、長く鋭い指で目玉をほじくると言われている。そのため、魔法使いや魔女が杖用や薬用に木の一部を切り取る時には、ワラジムシを供えると、ボウトラックルをその間、宥めておく事が出来るとされる。

「目玉をほじくる、ですって?」

ハグリッドが手本を見せるため、嬉々としてボウトラックルの棲む木に向かっている間、ハーマイオニーが『信じられない』と言わんばかりに目玉をグルリと回し、イリスに囁いた。

「ハグリッドって、どうしてこう・・・極端なの?」

「あいつにとっては、きつと魔法動物はどっちなんだよ」ロンがしたり顔で頷いた。

「生きるか死ぬか、フロバークワームレタス食い虫かヒップポグリフか・・・そういうことさ」

ハリーとイリスは盛大に吹き出してしまったが、ハーマイオニーだけはクスリとも笑わなかった。

「三人共笑いごとじゃないわ、ホントに。こんな危険な課題、また怪我人が出かねないもの!」

だがハーマイオニーの心配をよそに、ハグリッドの課題は怪我人を出す事無く、無事に終了した。――よく見るとハグリッドらしくらぬ、細やかな気遣いや工夫が、随所に凝らされていたためだ。まず初

めに、ハグリッドは生徒全員に、防護魔法の施されたサングラスを配って回った。課題の木は、素人目でもボウトラックルが見つつけやすいように、程好く剪定されていた。そしてトラップとして、ボウトラックルに似た人形を所々に置き、生徒が誤って人形の方にワラジムシを供えると、人形はブーブー音を鳴らし、自分がニセモノであると生徒に知らせた。生徒が間違える度に、ハグリッドがやってきて、本物と人形の違いを説き、正しい外見のものを見つけるようにと教えた。三回連続でニセモノを掴んだネビルに、ハグリッドは言った。

「落ち込むこたあねえ。最初は誰だつて失敗するさ。この世界にや、フレディ（このボウトラックルのことらしい）みてえに不思議な生き物が、たーんとおる。おれはそんな生き物たちがいるつてえことをお前さんらに知つてほしいし、対処法を間違えさせしなけりや、怪我もしねえし仲良くもなれる。そのことを知つてほしいんだよ。」

ネビル、お前さんは草花が好きだろう。フレディたちは、それこそ杖の元になるような、魔法力に満ちた良い木にしか棲まねえ。今頑張つて、こいつと仲良くなる方法を覚えときゃあ、いつかきつとお前さんの役に立つ。そう思わねえか？」

——その時、生徒たちのハグリッドを見る目が、少し変わったような気がした。ネビルは勇気を奮い起こし、コクリと頷いて根気強く課題に励んだ。

午後は「魔法薬学」で、課題は「混乱薬」の調合だった。教科書以上にドロリとした濃度の薬を調合したイリスとは対照的に、ハリーは完全に大失敗してしまったようだった。彼の薬はいくら頑張つても濃くならず、イリスの薬を見終えたスネイプは、ハリーの傍に立って、日頃の恨みを晴らすかのようにそれを楽しんでみていたが、次の生徒のところに行く前に、ノートに大きく「ゼロ」のような数字を書き込んだ。

その後は、真夜中に一番高い塔に登つての「天文学」で、水曜の朝は「魔法史」。水曜の午後は、焼け付くような太陽の下で、温室に入つての「薬草学」だった。みんな首筋を日焼けでひりひりさせながら、談話室に戻り、すべてが終わる翌日の今頃を待ち焦がれた。



最後から二つ目のテストは木曜の午前中、「闇の魔術に対する防衛術」だった。ルーピン先生はこれまで誰も受けたことがないような、独特の課題を出題した。——戸外での障害物競争のようなもので、睡魔のグリンデローが入った深いプールを渡り、赤帽のレッドキャップが潜んでいる穴だらけの場所を通り、道に迷わせようと誘う、おいでおいで妖怪のヒンキーパンクをかわして沼地を通り抜け、最後に、最近捕まったまね妖怪・ボガートが閉じ込められている大きなトランクに入って戦うというものだ。

「素晴らしい、イリス。満点以上だ」

仲良し四人組の中で、一番最初に呼ばれたイリスが、銀色に輝く双頭の蛇を片腕に絡ませて、トランクから出て来ると、ルーピンが低い声でそう言つて大きく頷いた。——本当に良かった、スネイプ先生のおかげだ。イリスは蛇を消し、安堵の溜め息を吐いた。それからトランクの付近の壁に寄りかかつて、三人が試験を終えるのを待つ事にした。

次に呼ばれたのはロンだ。ロンはヒンキーパンクのところまではうまくやったが、ヒンキーパンクに惑わされて泥沼に腰まで沈んでしまい、そこで終了となった。イリスが泥だらけで落ち込むロンを一生懸命慰めている間、ハリーは全て完璧にこなし、イリスの視線をチラツと気にしながら、ボガートが潜むトランクに入ったまでは良かったが、一分程して真っ青な顔で飛び出してきた。

「ハリー」ルーピンが驚いて声をかけた。

「どうしたんだい？」

「シリウスが」ハリーがそこで言葉を失い、トランクを振り返つた。

「シリウスが『僕を嫌いになった』って。『ダーズリーの家に戻れ』って言われたんだ。どうしよう?」

ルーピンは何とも言えない表情を浮かべた。ロンは余程ツボに入ったのか、教室を飛び出して廊下で崩れ落ち、笑い転げていた。イリスが茫然自失状態となったハリーを落ち着かせるのに、しばらく時間がかかった。ハリーがやっと『あのシリウスは本物ではなく、ボガートだ』という事実気づき始めた頃、ハーマイオニーが叫びなが

らトランクから飛び出してきた。

「マ、マ、マクゴナガル先生が！先生が、私、全科目落第だつて！」

——もう、現場はしっちゃかめっちゃか状態だつた。やっと笑いが治まって教室に戻って来たばかりのロンは、笑いのツボの暴力に再び打ちのめされ、床の上で“磔の呪文”を掛けられたように、もがき苦しむ羽目になった。二人がようやく普段の調子を取り戻してくれたところで、イリスたちは連れ立って城へ向かった。いつも優秀な二人の弱みを知ったロンは、“ボガート騒ぎ”をちよいちよいからかつた。

「いい加減にしろよ、ロン」ハリーはイライラしながら言った。

「わーかったよ、ゴメンゴメン。・・・あつ、シリウスだ！」

「エツ?!」

ハリーは慌ててロンの指差す方向を見たが、そこにはシリウスどころか、誰もいない。——ロンはまたしても笑い転げ、イリスはその顔に、あの“悪戯双子”の片鱗を見た気がした。ハリーは般若のような形相で、呪いを掛けるために、ロンに向けて杖を振り上げた。これから起こる悲劇を予知したハーマイオニーは呆れ顔で、イリスの目を『見ちゃダメ』と言わんばかりに両手で塞いだ。かくしてロンは、この猛暑の中、激しいタツプダンスを繰り返しながら、ゼイゼイ息を切らして、一人で城へ向かう羽目になったのであつた。

☆

大広間では、周りのみんなが昼食を食べながら、午後には全部試験が終わるのを楽しみに、興奮してあれこれ喋っていた。最後のテストは「占い学」、ハーマイオニーの最後のテストは「マグル学」だつた。大理石の階段をみんなと一緒に登り、二階の廊下でハーマイオニーが去り、イリス達は八階まで駆け上がった。トレローニー先生の教室に登る螺旋階段にはクラスの他の生徒が大勢腰掛け、最後の詰め込みをしていた。三人がそれぞれ座ると、ネビルが「二人一人試験するんだつて」と教えてくれた。

教室の外で待つ列は、なかなか短くならなかつた。銀色の梯子を一人ひとり降りて来る度に、待っている生徒が小声で課題の内容を尋ね

た。しかし、全員が固く口を閉ざした。

「もしそれを君たちにしゃべったら、僕、ひどい事故に遭うって、水晶玉にそう出てるって言うんだ！」

一足先に試験を終えたネビルが、梯子を下り、イリスたちのところまでやって来ると、甲高い声でそう喋った。

「勝手なもんだよな」ロンがフフンと鼻を鳴らした。

「アイツが当たってたような気がしてきたよ（ロンは頭上の撥ね戸に向かつて中指を突き出したので、イリスが慌ててその手を掴み、下ろさせた）まったくインチキばあさんだ！」

「まったくだ」ハリーも悪びれずに呟いた。

「イリス・ゴースト」

まるで二人の会話を聴いていたかのようなタイミングで、聞き慣れた、あの霧のかなたの声が、頭の上から聴こえて来た。三人は肩をビクツと跳ね上げ、それぞれの顔を見た。

「僕、君が水晶玉に何が見えるか予言してあげる。今日の晩飯だろ？」  
「違うよ」ハリーが勝ち誇ったように言った。

「デザートさ。イリスはデイナーの時のデザートを、一日の中で一番沢山お代わりするんだから」

軽口を叩き合う二人をしかめっ面で睨んでから、イリスは大きく返事をして、階段を上がった。――塔の天辺の部屋は、いつもよりいっそう暑かった。カーテンは閉め切られ、火は燃え盛り、むせ返るような香の匂いで、イリスは頭がクラクラした。大きな水晶玉の前で待っているトレローニー先生のところまで、椅子やテーブルがごった返している中を、イリスは躓きながら進んだ。

「こんにちは。良い子ね」先生は静かに言った。

「この玉をじつと見て下さらないこと。ゆっくりでいいのよ。それから、中に何が見えるか、教えてくださいませいな」

イリスは先生に言われた通り、水晶玉を食い入るように見つめた。

――しかし、白い靄が渦巻いている以外に、何も見えない。

「どうかしら？」トレローニー先生がそれとなく促した。

「何か見えて？」

——イリスは返事をしようと息を吸い込んだが、すぐ傍の暖炉から漂ってくる煙と香を喉に引っかけ、咳き込んでしまった。おまけに、異様に暑い。イリスは段々、意識がぼんやりしてきた。どれだけ頑張つて控えめに呼吸しても、暖炉の熱と癖のある香が、泥のように体内へ入ってくる。汗びっしょりで暑さに喘ぐイリスの肩に、トレローニー先生は枯れ木のように細い手を載せた。

「ここだけの話、わたくし、あなたを気に入ってますのよ？あなたには、未来を見据える才覚がありますわ。わたくしには分かるのです。あなたはエルサ・イズモの娘ですもの」

しかし、トレローニー先生の言葉は、イリスの右耳から左耳へと、空しく受け流されていくのみだった。

「あの高慢ちきな理解のない友人が、あなたの才能を潰しているのですわ」

不意に、水晶玉の煙が、風もないのにユラユラと揺らめいた。イリスは吸い寄せられるように、顔を近づけた。

——水晶玉の中から、歌が聴こえて来る。美しい女性の声だ。どこかで聴いた事のあるような気がする。煙を掻き乱して、玉の中を何かが走っている。——ネズミ、スキヤバーズだ。イリスは驚いて、息を飲んだ。

スキヤバーズは、その小さな口にキラキラ輝くものを咥えて、一心に走っている。野を越え、山を越え、深々とした森を越えた時、キラキラ輝くものは口から消えていた。そしてネズミは森を越え、ポロポロの屋敷を通り抜けて、寂しい墓場に辿り着き、やっと足を止めた。

そしてダイヤモンドのように輝く涙をひとつづつ零した。零れた涙は地面に落ちた瞬間、つんざくような女の悲鳴が聴こえ、煙が真っ赤に染まり、水晶玉が粉々に砕け散った。生暖かい血飛沫がイリスの顔にビシヤリと掛かって、耐え難い鉄錆びの匂いが鼻腔に突き刺さる。イリスは恐怖の余り、悲鳴を上げて転びそうになった。

「まあ、どういたしましたの？」トレローニー先生が叫んだ。

「あなた、何か見えましたのね。一体何が？」

イリスは早鐘のように打ち続ける心臓を押さえ、喘いだ。そして何

度も目を瞬いて、水晶玉を見た。——ただの灰色の煙が詰まっているだけだ。今の光景は、一体何だったのだろうか。幻覚だったのだろうか。だが、血の匂いだけは、それが現実のものであったかのように、未だに鼻にこびり付いている。イリスは急に気分が悪くなった。

「先生、何か匂いませんか？その・・・」イリスは言い淀んだ。

「血の匂いとか」

「いいえ？」

トレローニー先生は疑わしげに鼻を動かし、暫くして首を横に振った。

「良いお香の香りしかいたしませんわ」

「先生、すみません。私、気分が悪くて・・・」

イリスは突然苦いものが喉元に込み上げて来て、手で口を押えた。

——吐きそうだ。

「試験は棄権します。すみません、先生」

トレローニー先生は落胆と好奇心が緇交ぜになった声を出したが、イリスは一刻も早く此処から立ち去りたかった。成績が落ちたつて構わない。イリスは振り返る事無く、勢い良く螺旋階段を駆け下りて、一目散に談話室へ飛び込んだ。一足先に戻って来たハーマイオニーに、先程の出来事を話すと、彼女は冷たい水をゴブレットに入れ、一息に飲み干すように助言した。

「イリス、それは幻覚よ。さあ、これを飲んで。気分がすっきりするわ。マグルの世界でも良くある事よ。幻覚を見せるような作用のある香を焚いてるに違いないわ」

ハーマイオニーの言葉を信じ、イリスは頭の中に掛かっていた靄もやが、少しずつ消えていくような気がした。水を一気に飲み干すと、血腥い匂いも綺麗さっぱりしなくなった。——数十分後、ロンを伴って談話室へ戻って来たハリーは、険しい表情をしていた。ハリーは『トレローニー先生が予言をしたのだ』と、三人に言った。トレローニー先生はいつもとは打って変わって太く荒々しい声で、こう言ったのだと。

『闇の帝王は朋輩に打ち捨てられて、孤独に横たわっている。たまさ

かに訪れる魂の欠片だけが、渴きを癒す。その召し使いは十二年間、鎖に繋がれていたが、その鎖は腐り落ちた。三度目の満月の夜、召し使いは帝王の下へ馳せ参ずるであろう。召し使いは、闇の帝王の庇護なくして生きられぬ。しかし召し使いだけが、闇の帝王を救う力を持つ。闇の帝王はその血肉を喰らい、再び立ち上がるであろう。以前より、さらに偉大に、より恐ろしく！」

ハリーは唇を噛み締めながら、低い声で言った。

「きつとペティグリューに関する予言だ。いいかい？『十二年間、鎖に繋がれていた』、『鎖は腐り落ちた』——これはペティグリューのことに違いないよ。つまりあいつは、ヴォルデモートの復活に手を貸すんだ」

「ちよつと。ハリーまで、しっかりとよ！」ハーマイオニーは呆れたように言った。

「それは先生の虚言、つまりはパフォーマンスよ。マクゴナガル先生も仰ってたわ。『古い学は魔法の中でも一番不正確な分野の一つ』だって。現に、ハリー。貴方、あの人に死の宣告をされた事をもう忘れたの？マグルの世界でも、胡散臭いオカルト信奉者が良くやる事だわ！」

「だけど、本当に様子が可笑しかったんだ」ハリーは語気を強めた。

「えつとそれは・・・今まで以上に？」

混ぜっ返すロンの言葉を聞き、ハリーは一瞬、吹き出した。しかし、すぐ真顔に戻った。

「笑い事じゃないんだ、ロン。僕は真剣だ」

——イリスは顎に手を当て、思案を巡らせた。さつき自分が水晶玉で見た、スキヤバーズの映像が思い出される。もしあれが、未来の出来事だったとしたら？ハリーもイリスも、ピーターに関連する事象を見た。それを『ただの偶然』という言葉で片付けてしまう事は出来そうにない。イリスはおずおずと、ハリーに自分が古い学のテスト中に見た事を話して聴かせた。ハリーは確信を得たように、しっかりと頷いた。

「やっぱり、ダンブルドアに報告しよう。それが一番良いよ」

イリスとハリーが、どこか安心したように微笑み合う一方で、ロンとハーマイオニーは『全くしようのない』と言わんばかりに大きな溜め息を零した。頑固なところのあるハリーは、一度大きな決心をするど、何があつてもそれを実行する性格である事を二人は知っていたのだ。ハリーは明るい声で言った。

「それで、それが終わったたら、みんなでホグズミード村に行つて、冷たいバタービールをしこたま飲もうよ。・・・勿論、ロンのおごりで」  
「勘弁してくれよ！」不意打ちを喰らつたロンが、焦つて捲し立てた。  
「あの時はホントに悪かつたつて！」

四人の雰囲気は一気に和やかになった。

☆

四人は揃つて談話室を出て、校長室を目指して廊下を歩いていく。すると先方から、大柄な人物が歩いて来るのが見えた。——ハグリッドだ。

「ああ、お前さんたち。おれの試験、よう頑張つたな。みんな満点にしといたぞ」ハグリッドはそう言つて、にっこり笑つた。

「まあ、ありがとう」ハーマイオニーが恐る恐る言つた。

「ねえ、ハグリッド。その・・・誰も怪我人は出なかつた？」ハーマイオニーがそつと付け加えた。

「・・・例えばスリザリンとかで」

「だーいじょうぶだ、ハーマイオニー。だーれも出んかつたよ。問題も何一つ、起きんかつた」

ハグリッドは人を安心させるような暖かい笑みを浮かべ、頬をポリポリ搔いた。四人は安心して、肩の力を抜いた。

「ルーピン先生に、大分手伝ってもらつたからな。本当に良い先生だつたよ、あの人は。人狼じゃなけりや、来年も此処にいらたろうに・・・」

「何だつて？」ハリーは驚いて咳き込みそうになりながら、尋ねた。

「なんと、まだ聴いとらんのか？」

ハグリッドは面食らい、周りに誰もいないのに声を落として、こう言つた。

「ほれ、その・・・（ハグリッドはイリスをチラリと見て、一瞬、言い淀んだ）、あのことがあつたらうが。」

ダンブルドア先生は誰も大事にも至ってねえし、内々に済ませようとしたんだが・・・それを知ったスネイプ先生がカンカンに怒ってな。ルーピンに猛抗議をした。で、またあんなことが起きちゃなんねえつてことで、テストが終わって一区切りついたところで、辞表を出したんだ」

——四人は急いで、ルーピン先生の部屋へ向かった。部屋のドアは空いていた。グリーンデローの水槽は空っぽになっていて、その傍に使い古されたスーツケースが蓋を開けたまま、ほとんどいっぱいになって置いてあつた。ルーピンは机に覆い被さるようにして何かをしていたが、ハリーのノックで初めて顔を上げた。

「やあ、みんな」

ルーピンは穏やかに笑いかけ、机の上に置いてあつた“忍びの地図”を取り上げた。

「君たちがやってくるのが見えたよ」

「先生、ハグリッドから聞きました。お辞めになるって、本当ですか？」

ハリーが単刀直入に尋ねた。彼の目には、薄らと涙が浮かんでいる。

「本当だ」

「どうしてですか？」イリスはたまらず、追いつがった。

「私のことなら、お気になさらないでください。私、先生に噛まれていません。みんな無事です。それに、先生は何度も謝ってくださいました。・・・あの夜、先生はたまたま薬を飲み忘れてしまった、ただそれだけです」

「そうだ」ルーピンは真剣な表情で、イリスに向き直った。

「そして君はたまたま出くわしたロックハートに救われ、人狼にならずに済んだ。彼がいなければ今頃、私は君を傷つけ・・・噛んでいただろう」

恐らく人狼になった時の記憶が蘇つたのだろう、ルーピンは震える



唇を噛み締め、力なく俯いた。——イリスは何も言えなくなった。確かにその通りだ。

「こんなこと、二度とあってはならないんだ。やはり、私のような者がここに来るべきではなかった」

「そんなこと仰らないでください！」イリスは叫んだ。

「そうです。先生は今までで最高の「闇の魔術に対する防衛術」の先生です。辞めないでください」ハリーも続けた。

「二人共、ありがとう」ルーピンは疲れた顔に、微笑みを浮かべた。

「イリス、あんな恐ろしい目に遭わせてしまった私に、そんな優しい言葉を掛けてくれるなんて。……その言葉だけで、私は充分だ」

ルーピンは、黙り込んだハリーの手を取り、森で回収したと言って“忍びの地図”と“透明マント”を返してくれた。不意にドアをノックする音がした。——ダンブルドア先生だ。イリス達がいるのを見ても驚いた様子もない。

「リーマス、門のところに馬車が来ておる」

「校長、ありがとうございます」

ルーピンは古ぼけたスーツケースと、空になったグリンドローの水槽を取り上げた。そして四人一人ずつに、微笑みかけた。

「それじゃ、さよなら。短い間だったが、君たちの先生になれて嬉しかったよ。私が唯一誇れる点は、それだけだ。君たちを見てみると、昔を思い出す。またいつかきつと会える。校長、門までお見送りいただかなくて結構です。一人で大丈夫です」

そうして、ルーピンは部屋を出て行った。主のいない部屋は、ダンブルドアとイリス達がいるのにも関わらず、がらんとしているように感じた。暫くみんな喋らないでいると、ダンブルドア先生がいつもの飄々とした顔で尋ねた。

「どうしたね？そんなに浮かない顔をして。“永遠の別れ”という訳ではないのじゃよ」

「……何もできませんでした」ハリーは苦いものを噛み締めるように言った。

「何もできなかつたとな？」

ダンブルドアは静かに言い、一人ずつの顔をじつと覗き込み、最後にイリスの顔をじつと見つめた。

「とんでもない。それどころか、君たちは大きな変化をもたらした。君たちは、隠された真実を明らかにするのを手伝った。一人の無実の男を、恐ろしい運命から救ったのじゃ」

『恐ろしい』——その言葉は、ハリーの記憶を刺激した。『以前よりさらに偉大に、より恐ろしく』——トレローニー先生の予言だ！ハリーはイリスに目配せし、二人はそれぞれ「占い学」のテスト中に見聞きした出来事を、ダンブルドア先生に話して聴かせた。ダンブルドアは少し感心したような顔をした。

「これは、これは。トレローニー先生はもしかしたら、もしかしたのかも知れんのう」

ダンブルドアは感慨深げに言った。

「こんなことが起ころうとはのう。これでトレローニー先生の本当の予言は全部で二つになった。給料を上げてやるべきかの・・・」

ハリーもイリスも思わず呆気にとられて、ダンブルドアを仰ぎ見た。——ダンブルドアは、トレローニー先生の予言を本物だと信じている。だとしたら、ヴォルデモートは本当に復活するんだ。どうしてダンブルドアは平静でいられるんだろう？

「皆に言うておくが・・・我々の行動の因果というものは、非常に複雑で多様なものじゃ。だから、未来を予測するというのは、まさに非常に難しいものなのじゃよ」

ダンブルドアは、何故かハーマイオニーに向けて、パチンとウインクして見せた。ハーマイオニーはハツと息を飲み、三人に気づかれなように、胸ポケットにそつと手を置いた。

「どうあっても過去は変えられぬし、未来を予測することも困難じゃ。近い未来、ヴォルデモートは復活するじやろう。ペティグリューを逃がしたことが吉と出るか、凶と出るかは、その時になってみないと分からぬ。悲しい事に、ちっぽけな我々にとって唯一出来る事と言えば、今を精一杯生きることだけなのだから！」

ダンブルドアは、四人それぞれに微笑んだ。それだけで、イリス達

は不思議と勇気づけられる気がした。

「しかしその積み重ねが過去となり、未来となる。過去は後悔するのではなく、そこから学ぶためにある。未来は恐れるものではなく、現在を一生懸命生きている者たちが、目指すべきものとするためにあるのじゃ。そう考えて生き続ける限り、ヴォルデモートも、ペティグリュームも、わしらが恐るるものに足らぬ」

——ぼたり。不意に、あたたかな滴が手の甲にしたたつたような気がして、イリスは顔を上げた。ダンブルドアのキラキラ輝くブルーの瞳から、涙が零れ落ちていく。イリスが驚いて瞬きすると、ダンブルドアの目から涙はきれいきっぱり消えていた。いつもの飄々とした表情を浮かべているだけだ。——自分の見間違いだったのだろうか、イリスは首を傾げた。ダンブルドアは、ポケットに手を突っ込んで、のんびりとした口調で言った。

「さて皆、レモンキャンデーを食べるかね？少し買い過ぎてしもうてのう」

☆

リーマス・ルーピンは古ぼけたスーツケースを抱え直し、廊下を歩いていた。——『一人で大丈夫です』、自分の言った言葉が、心の中で何度もリフレインした。

そう、僕は一人で大丈夫だ。いや、そうでなければならぬ。

小さな頃に狼男に噛まれて、忌まわしいあの呪いを受けてからというもの、リーマスはずっと一人でいなければならなかった。両親は惜しみない愛情を注いでくれたが、人狼になる夜——人生で一番恐ろしく辛い時——には、傍にいてくれなかった。それは仕方のない事だったが、リーマスにとっては、人狼である自分も、自らの一部に他ならない。

血を分けた両親ですら受け入れる事が出来ないなら、もうこの世界に僕を理解してくれる人はいないのだろう。幼いながらにリーマスはそう結論づけ、世の中のもの全てから、少し距離を置くようになった。——それはリーマスなりの処世術だった。

しかしホグワーツに来て、ピーター、ジエームズ、シリウスに出会

い、彼らが人狼になる満月の夜に、同じ動物となって傍にいる事を選択してくれた時——、リーマスの人生はがらりと変わった。自分の全てを理解し、受け入れてくれる人達がいる。毎日がとても楽しくて、人狼になる夜すら、最早恐れなどなかった。

その時、リーマスは賢いはずなのに、呪いで変質した自分の危険性を見てみない振りをした。“同じ動物”とは言っても、ピーター達はヒトの皮を被った動物もどき、対して自分は“理性を失った怪物”だ。いくら素晴らしい友人がいても、強力な薬を飲んでも、呪い自体がなくなる事はない。たった一度の失敗が、取り返しのつかない事態を招く。

——人狼になった時の記憶は、おぼろげではあるが脳の片隅にいつも残っている。イリスの怯え切った表情が浮かび、リーマスは慙愧に耐えない思いで、唇を強く噛み締めた。大切な教え子に、私はなんて恐ろしいことを。あの時、ロックハートが助けてくれなければ、きっと私は……。

『もう何も考えるな、人間もどき。化け物のくせに、人間を装って生きるのはやめようぜ』

ふと頭の中で、とても意地悪な声が出た。呪いを受けた時から、自分だけに聴こえる声でずっと囁き掛けてくる、大嫌いなやつだ。リーマスは思わず立ち止まった。少し曇った窓硝子には、白髪交じりの瘦せた男が突っ立っている様子が見えた。誰に向けるでもなく、くたびれた愛想笑いを浮かべている。声は舌なめずりをして、さらに続けた。

『なあ、分かっているんだろ？自分を擦り減らして、こんなにボロボロになるまで頑張っても、世間はあんたを認めてはくれない。ここがあなたの生きる場所じゃないからさ。本当のあんたを認めてくれるやつらは、違う場所にいる。暗くてジメジメしていて、血肉と悲鳴が迸るところさ……』

「リーマス」

突然、優しい声が矢のように飛んできて、意地悪な声に突き刺さった。——ダンブルドアの声だ。声はくぐもった悲鳴を上げたのを最

後に、もう聞こえなくなった。リーマスは一瞬びくりと身体を強張らせたが、すぐにいつもの落ち着いた調子を取り戻し、穏やかな表情でダンブルドアに向き直った。

「校長先生。見送りは良いと、申し上げた筈なのに」

そう言つてリーマスはダンブルドアを見上げ、言葉を失つた。ダンブルドアがこれ以上ない程に真剣な眼差しで、自分を見つめていたからだ。

「きみに頼みたいことがある」ダンブルドアは静かに言った。

「わしの力になつてくれぬか？ヴォルデモートが復活を遂げようとしている。共に働き、人々を守つてほしい」

リーマスの痩せた肩が、ぎくりと強張つた。ヴォルデモートが不滅の存在だという事は予想していたし、戦いの最中に再び身を投じる事にも躊躇いはなかった。だが、ダンブルドアと手を取り戦う資格が、果たして今の自分にあるのだろうか。学生時代の自分の傲慢さや、組み伏せた教え子の華奢な身体を思い出し、リーマスは思わずその場から一步、退いた。意地悪な声が、さも愉快そうに嘲笑する。

「せっかくのお話ですが、私は・・・」

「きみにしか出来ぬことじゃ、リーマス」ダンブルドアは、迷いなく一步踏み込んだ。

「きみのように呪いと向き合い、抗いながら懸命に生きてきた者にしか、成しえぬことじゃ」

リーマスの感情は爆発した。——ああ、この人も、本当の僕を理解していない。本当の僕は・・・

「私は抗えてなどいません！」リーマスはしわがれた声で叫んだ。

「今まで、誘惑に耐え切れず、数々の過ちを犯してきました。ピーター達が何故“動物もどき”になったのか、そして私の不注意で薬を飲み忘れ、イリスを噛みかけた事も、校長はご存じの筈。

私はあなたの思っているような、良い人間ではない。ヒトの皮を被つた怪物だ。現に今だつて、欲望や恐れに飲み込まれそうになりながら、やつとの思いで立っているんです」

「そう、きみはこうして立っている・・・見るがよい」

ダンブルドアは揺るぎない口調でそう言うと、ローブの中から両手で抱える程の大きさの箱を取り出して、リーマスに手渡した。——リーマスが訝し気な表情で蓋を開けると、そこには手紙やカード（吼えないように魔法で封印された）“吼えメール”もある（がぎつちりと詰まっている。どうせこれは人狼である自分が教鞭を取っていた事に対する、クレームの手紙達だろう。落胆の溜め息を零すリーマスに、ダンブルドアは飄々とした口調でこう言った。

「遠慮せず、読んでみてはどうかね。それは、きみを擁護し、退職することに對する抗議の手紙達じゃ」

リーマスは思わずダンブルドアを仰ぎ見た。——『人狼である自分を擁護する』だつて？ 恐る恐るカードを一枚取って、メツセージを読む。二年目のハツフルパフの男子学生が、拙い文字で一生懸命、ダンブルドアに抗議の意思を示している——『校長先生、ルーピン先生はとても良い先生です。もう一度チャンスを与えるべきです。僕は先生が大好きですし、他のみんなもそうです（※純血のアイリーンを除きます）。現に僕は先生のおかげで……』

「きみを慕っていた生徒達は、このように沢山いた。人狼だと分かってでもそれは変わらない」ダンブルドアは穏やかに言った。

「さすがに皆“動物もどき”になれるほどの才能は持ち合わせてはいないじやろうかの」

人狼のみならず、強い呪いを受けた人間は皆、程度の違いはあれど不自由な人生を歩む事となる。リーマスもその一人だ。『この苦しいばかりの人生に、意味はあるのだろうか』——人狼となった瞬間に芽生え、今日に至るまでリーマスを悩ませ続けたこの疑問に、彼は今、やっと答えの一部を見い出せたような気がした。

協力を申し出たリーマスに、ダンブルドアは早速、“ある情報”を精査する仕事を依頼し、ローブの内側から二巻き程の羊皮紙を差し出した。諜報活動なら、以前の自分の得意分野だ。リーマスは情報を把握するために羊皮紙の文面をざっと読み込もうとしたが、ある単語を見た途端、——リーマスの目の動きが、ピタリと止まった。

☆

「自由に」

その日の夜、ホグズミード村の外れにある小さなパブで、シリウスとリーマスはビールグラスをカチンと合わせ、乾杯した。お互いに何かと忙しい身であるため、こうしてじっくりと時間を掛けて話すのは、実に数週間ぶりだった。二人はクリスプス（ポテトチップス）を摘みみながら、ハリーの新しい部屋に置く家具の木材や小物、漫画の種類について話し合ったり、リーマスへ向けた学生達からの手紙を読んだりして、和やかな一時を過ごした。

ふと二人の会話が途切れた頃、シリウスは口を開いた。——イースター休暇明けの土曜日、優勝杯を賭けたグリフィンドール対スリザリンの試合の日、“ファイアボルト炎の雷”を持ってハリーに会いに行った日の事だ。

☆

イリスは試合が始まる前に、『聞いてもらいたい事がある』とシリウスに向け、恐る恐るといった調子で切り出した。シリウスは快諾し、イリスの目の高さまでしゃがみ込み、話の続きを促した。——彼女には返し切れない程の恩がある。彼女の話ならどんな事だって聞いてやりたいし、力にもなつてやりたかった。

しかし、イリスが『ピーター』という単語を口にした瞬間、彼のその気持ちは鋭く凍てついた。

「ピーターの心の世界を見たの。彼は今も、自分のしてしまった事を悔やんで、とても傷ついて心を痛めている」

シリウスは驚きを通り越して呆れが生じ、二の句が告げなかった。——何を言い出すかと思えば、お人好しにも程がある！あんな酷い仕打ちを受けたのに、彼女はまだあいつを庇うつもりなのか。直情的なシリウスの心の声は、そのまま言葉になって飛び出した。

『心を痛める』？あいつが？」シリウスはせせら笑った。

「本当に心を痛め、罪を償う気持ちがあるなら、逃げない筈だ。だが、あいつはまた逃げた。そして今も逃げ続けている」

シリウスの脳裏に、かつて“叫びの屋敷”でピーターと対決した時の記憶が思い起こされる。結局、あいつは自分の犯した罪を認める事が出来なかった。本当に救いようのない奴だ。もうどうしようもで

きない。

そう結論づけた後、俄かにシリウスはイリスが心配になってきた。この筋金入りのお人好しの女の子——実際、自分も彼女に救われたのだが——に忠告をしなければ。いつ何時、またピーターのような悪人に、言葉巧みに利用され傷つけられるか分からない。彼は、小さな子供に言い聞かせるようにゆっくりとした口調でこう言った。

「イリス、君はとても優しい。私も君に救われた。だが世の中には、ピーターのように、その優しさを向ける価値のない者もいる」

「どうして？ピーターが間違っただけをしてもしまったから？」

イリスが尋ねると、シリウスは当然のように「そうだ」と頷いた。この子は、全ての人間が良い心を持っていて、どんな悪人でもいずれば改心すると信じている。だが、実際はそうではない。ピーターのように救いようのない悪党も存在する。この事実をどう分かりやすく言えば、彼女に理解してもらえるのかと思ひながら、ファイアボルト“炎の雷”の包みを持ち直すシリウスに、イリスは意を決したように再び口を開いた。

「去年の夏、私が迷っている時、アーサーさんが教えてくれたの。『誰しもが人生において、正しい事と間違っている事の間で迷いながら、歩んでいくものだ』って」

シリウスは思わず包みからイリスへ、その視線を移した。彼女は宝石のように輝く双眸を瞬かせ、シリウスをじっと見つめ返す。——まるで禁じられた森で、初めて二人が相對したように。

「私はそれを聞いて『間違えたらどうしよう』って、不安な気持ちになった。……正しい事をし続けるって、とっても難しいことだから」

イリスの伏せた瞼の裏に、凶らずも見た、二人の大人の心の世界の光景が蘇る。——ロックハートは、他人の記憶を盗み取り、自分のものとした。ピーターは親友達を裏切り死へ導いて、無実の罪を着せて牢獄に押し込めた。それらは決して許される事無い、間違った行いだ。だがその裏には、誰にも語られない、強く激しい悩みや苦しみ、悲しみがあつた。

「でも、周りの人達を見て思ったの。たとえ間違っていたとしても、そ



の人がどんな思いでしようしようと決めたのか。それを考えると、どんな事だつて意味があるんじゃないかと思って思えるんだ」

☆

シリウスは全てを話し終わつた後、温くなつたビールを一口飲んだ。傷だらけのグラスを見ると、泡立つた黄金色の水面が揺れ、店の灯りに反射して煌めいている。アルコールか、それともイリスの言葉に影響を受けたのかは分からないが、その時シリウスは珍しく感傷的な気分にも包まれていた。

——弟と比較されて孤独に育ち、愛情に飢え、苛立つた気持ちを学校で発散させた学生時代。誤つた人物を信じたために親友たちが死に、自分は十二年間も牢獄に閉じ込められた。裏切り者を制裁するために命掛けで脱走を図り、死にかけてが九死に一生を得、今は濡れ衣も晴れて、ハリーと共に暮らす新しく素晴らしい人生が始まろうとしている——

こうして振り返れば、激情に身を任せるばかりの、不安定で間違いだらけの人生だつた。間違い続けたのは、ピーターだけでなく、自分も同じだ。これこそが正しいと信じて進み続け、振り返つて間違いだと知つた時、それは変えようのない過去の出来事となつていた。けれども、その行動一つ一つにも、意味があつたとしたら。

失つたものは決して帰らないし、心の傷が癒える事はない。しかし、それを踏まえた上で、現在が不幸であるとはシリウスには思えなかつた。あいつもいつか、そう思う日が来るのだろうか。

「それで、君は訊いたのか？」

リーマスが静かに尋ねると、シリウスはまるで人狼薬を飲んでいられるように、苦々しい表情で残り少ないビールを飲み干して、低い声で応えた。

「ああ」

「僕にも教えてくれ」

リーマスは疲れ切つた顔をわずかに微笑ませ、シリウスに言った。「僕は、ピーターを許す事は出来ない。だが、…あいつは、僕にとつて一番最初に声をかけてくれた友達だつた。どんな思いであんな事

をしてしまったのか、本当の理由を知りたい」

二人はついに空になったビールグラスを気にする事もなく、話し続けた。一度話し出すと、もう止まらなかつた。『ジエームズとリリーの死』——もう変える事が出来ないために、お互いに蒸し返す事を避けていたその悲しい出来事の中には、ピーターだけでなく、シリウスとリーマスにも数えきれない程の苦悩や強い思いが秘められていた。話して話して、もううんざりだという所まで話しても、二人は店を出ようという気にはなれなかつた。二人は少し吹っ切れたような表情で、湯気の立つホットバタービールを注文した。

「あの子は純粹だ」シリウスは届いたバタービールを啜り、上機嫌で言った。

「泥の中に咲く蓮ロータスの花のように、穢れなく清らかだ」

リーマスは、暫らく何も言わずに、バタービールから立ち昇る湯気を見つめていたが、やがて抑揚のない声でぽつりと呟いた。

「つまりそれは、善にも悪にもどちらでも染まりうるという事だ」

「何が言いたい」シリウスは苛立った口調で唸った。

「まさか彼女を信じていないのか？」

「違う。僕は心配しているんだ」

シリウスの訝し気な視線を気にする事無く、リーマスは熱に浮かされたように滔々と話し続ける。

「ずっと疑問に思っていた。ダンブルドアは何故、厄介者の僕になんかに親切にしてくれるのかって。たった一人の人狼のために、“叫びの屋敷”を用意してくれたり新しい薬の開発に携わってくれただけでなく、ホグワーツの教師という仕事まで与えてくれた。

だが、今日その謎が解けた。本当に救いたいのには僕じゃなかつた。似た環境である僕と彼とを重ねていたんだ」

「彼？」

リーマスは観念したように目を深く閉じ、言った。

「ネーレウスだ。彼も呪いに蝕まれていた。僕と同じ、血に取り憑く呪いだ」

「人狼の呪いか？」

「違う、そんな甘いものじゃない・・・死に至る呪いだ」

シリウスは呆気にとられ、茫然とリーマスを見つめた。ネーレウス・ゴントはイリスの父親の名だ。“血に取り憑く”、“死に至る呪い”だと？

「ヴォルデモートが何故、ダンブルドアの下にいたネーレウスを自由にさせていたと思う？殺す必要がなかったからだ。

ネーレウスの祖母の血を受け継ぐ者は、ヴォルデモートに忠誠を尽さなければ、永くは生きられない。・・・それは、イリスも例外じゃない」

魔法省から逃げ出したピーターは、小さな手足を懸命に動かして、アルバニアの森を目指し、草むらの中を一心に走っていた。

『みんな、八つ裂きにしてやる！』ピーターは声にならない声でそう吼えて、狂ったようにゲラゲラ笑った。僕を裏切った奴らは全員許さない。報復してやる。ルシウスもファッジもシリウスも、みんなみんな、あのお方の餌食になるがいい！

『戦って！ピーター、戦って！』

ふと、復讐に狂うピーターの頭の中に、イリスの澄んだ声が響き渡り、彼はその小さな歩みをピタツと止めた。今でも克明に思い出せる。あの恐ろしい化け物と対峙し、恐怖で震えながらも、彼女は繋いだ手を離さなかった。

『ねえ、全部、失ってもいいの?!』

そうだ、今ならまだやり直せる。ピーターは我に返った。あの子と約束した。罪を償うんだ。罪を・・・。ピーターは、草むらに出来た小さな水溜りにその身を映した。美しい月や星灯りに照らされて、やつれた老いぼれネズミの輪郭がゆらゆらと揺らいでいる。口に啞えた指輪の宝石が、灯りを反射してほんの一瞬キラッと光り、水面を明

るく照らした。

——その時、ピーターは世にも恐ろしい光景を目の当たりにし、恐怖で息を引き攣らせた。自分のすぐ後ろに、あの恐ろしい化け物が迫り、今にもその歪な鉤爪を伸ばそうとしている！

ピーターは情けない悲鳴を上げ、その拍子に水溜りへ落とした指輪を啜え直し、一目散に駆け出した。

不意に、彼の黒いビーズ玉のような目に涙が溢れた。やがてその小さな粒は、朝露に紛れて何処へともなく消えて行った。

## Act 18. プリベット通り四番地（後編）

学期の最後の日に、試験の結果が発表された。四人共、全科目合格だった。あれほどひどい薬の出来だったのに、「魔法薬学」をパスした——ビリから二番目（ビリは勿論イリスだ）の成績ではあるが——のには、ハリーも驚いた。ダンブルドアが中に入って、スネイプがハリーを落第しようのを止めたのではないか、という推理が、ハリーとロンとの間で盛んに立てられた。

パーシーはN・E・W・Tテストで一番の成績だったし、フレッドとジョージはそれぞれ、O・W・Lテストでかなりの科目をすれすれでパスした。グリフィンドール生達が思い思いの成果を残す一方で、グリフィンドール寮は、主にクイディッチ優勝戦の目覚ましい成績のおかげで、三年連続で寮杯を獲得した。学期末の宴会は、グリフィンドール色の真紅と金色の飾りに彩られ、グリフィンドールのテーブルはお祝い気分で、一番賑やかだった。みんな、大いに食べ、飲み、語り、笑いあった。

今学期最後の「魔法薬学」の補習授業は、そんな楽しい宴会の後に予定されていた。その事実を告げた瞬間、憤懣やる方ない表情で『スネイプを hogwarts から追放する会々クソ爆弾を添えて』を結成し始めたハリーとロン、フレッド&ジョージ等の面々を見なかつた事にして、イリスは一人、談話室を出て地下牢へ向かった。

スネイプはいつもの陰湿陰険な調子で、今学期の総復習と来学期に向けての予習の要点を説明した。補習を続けるうちに、何時の間にか苦手だった「魔法薬学」が一番大好きな授業になっていたイリスは、一つも聞き漏らすまいと夢中でノートに書き取った。——どれほど実力をつけても、イリスの成績はずつと落第すれすれの低空飛行状態を続けている。その理由は分からない。分かるのは、きつと来年も補習授業が行われるだろうという事だけだ。

しかし、イリスはそれを嬉しくも思っていた。スネイプは厳しく意地悪な先生だが、いつもイリスが完全に理解できるまで根気強く丁寧に教えてくれるし、教科書に載っていない新しい知識をたっぷりと与

えてくれるからだ。講義は滞りなく進んでいき、脱狼葉の調査についての簡単なテストと、“守護霊の呪文”の実施訓練を終えると、スネイプは「授業終了」と唸った。

イリスを見送る事なく背を向け、壁面に設置された薬棚の整理を始めたスネイプに向けて、イリスはしつかりと一礼し、今学期も教鞭を振るってくれた事に対して、心を込めたお礼の言葉を告げた。そして地下牢と階段に繋がる扉を開けようとした時――

「ゴーント」

――スネイプに呼び止められ、振り向いた。暫くの間、何も言わず、幽鬼のような昏い表情を湛えて、スネイプはイリスを見つめていた。やがてその薄い唇がわずかに開き、抑揚のない声でこう尋ねた。

「良く眠れているかね？」「恐ろしい夢”を見る事は？」

――『恐ろしい夢』だつて？質問の意図が掴めず、イリスはすぐに返事をする事が出来なかった。どうして先生はそんな事を訊くんだろう。ピーターに乱暴を受けた自分が悪夢に魘されていないか、心配してくれているのだろうか。そこまで考えて、イリスはふと“不思議な塔を登る夢”を思い出した。――確かにその夢で、一度怖い思いをした事はあった。しかし、おぼろげにしか思い出せないけれど、あの夢自体が悪いものだとは思えない。イリスは首を横に振り、柔らかな声音で応えた。

「はい。大丈夫です」

スネイプはその返答に安堵した様子もなく、静かに唇を引き結んだ。やがて彼はイリスから目を逸らし、ぽつりと呟いた。

「ならばいい。行きなさい」

イリスがその場を立ち去って暫くしてから、スネイプは自らの作業机へ近寄った。採点を終えた生徒達のレポートの束に紛れて、旧友、ルシウス・マルフォイからの手紙が封を切った状態で置いてある。スネイプは鷹揚な動作で服の袖を捲り、瘦せた土気色の腕を見つめた。

――かつて闇の帝王と契約を結んだ証、髑髏と蛇をモチーフにした“闇の印”は、日毎にその輝きを増していく。

☆

「時は来た。いよいよだ」ロンは芝居がかった口振りで叫んだ。翌朝、ホグワーツ特急がホームから出発し、イリス達はコンパートメント内で思い思いの時を過ごしていた。ロンが時折軽快な鼻歌を交えながら、終始楽しそうな様子を崩さない一方で、ハリーはそわそわと落ち着かない様子だった。そんな二人を、向かいに座るイリスとハーマイオニーは少し心配そうに見つめている。

ロンは、親友のハリー宅が、大の魔法嫌いのマグルが住む家から「魔法族が住む家」へ変わった事で、気軽にフクロウ便を飛ばしたり遊びに行けるようになった事を喜んでいるようだった。そんな単純で明るい考えのロンとは違い、小さな頃から不幸に慣れっこだったハリーは、前から分かっていた事ではあるが——『ダーズリー家と離れてシリウスと一緒に暮らせる』という信じられない程の幸福をいざ目の前にした途端、その眩しさに目が潰れ、尻尾を巻いて逃げ出しそうになっていた。

最早茫然自失状態となっているハリーを見兼ねて、イリスが声を掛けようとした時、ハーマイオニーが窓の方を向いて、出し抜けに「ねえ」と言った。

「そっちの窓にいるもの、何かしら？」

三人は示し合わせたように、窓を見た。——窓の外に、何か小さくて灰色のものがピョコピョコ見え隠れしている。近づいてみると、それは小さなチビフクロウだった。イリスが急いで窓を開けてやると、フクロウはハリーの席に手紙を落とし、コンパートメント内をブンブンと元気良く飛び回った。

《速達です、速達です！》フクロウは幼い声でさえずった。

《シリウス・ブラックから、ハリー・ポッターへ！》

ハリーは物も言わずに手紙を掴むと、乱暴な手つきで封を破り、中身を読んだ。固唾を飲んでその様子を見守る三人の前で、ハリーの表情はみるみるうちに曇っていく。

やがてハリーは三人に手紙の内容を話してくれた。——今日、ハリーはキングズクロス駅で、最後のお別れに来てくれる筈（たぶんねと、ハリーは笑った）のダーズリー家の人々から自分の荷物を回収し、

シリウスと共に新しい家へ向かう予定だった。しかしシリウスには、ハリーの荷物の他に、ダーズリー家から絶対に手に入れなければならないものがあつた。

「ペチュニアおばさんの血？」イリスは茫然と呟いた。

「うん」ハリーは力なく頷く。

「バーノンおじさんが物凄く怒ってるんだって。シリウスは『必ず説得するから、駅のカフェで時間を潰してくれ』って書いていたけど……」

「そんなのいざとなれば、魔法で無理矢理奪つちまえばいいじゃないか」

「ちよつとロン！」

物騒な事を言い放つロンに、ハーマイオニーが眉を潜めた。しかし、ハリーの表情が和らぐ事はない。

「僕だってそうしたいさ。だけど、“無理矢理”じゃダメなんだって。ペチュニアおばさんが“自分の意志で”くれた血じゃないと、効果がないんだ。……そんなの、あり得ると思う？」

——ハリーの中には“守りの魔法”が流れている。ハリーの母親、リリーがヴォルデモートから我が子を守るため、自らの命を燃やして遺した“愛の魔法”だ。これがあるから、ヴォルデモートはハリーに指一本触れる事が出来ない。但し、その魔法を維持するためには条件があつた。『リリーの血縁者と同じ場所で生活し、その場所を“自分の家”だとハリーが認識する事』。ダンブルドアの計らいで“守りの魔法”は保たれ、今日に至るまで、家は確かにハリーを守つた。しかし、そこに愛はなかつた。

けれどもシリウスの登場で、状況は一変した。ダンブルドアが、“守りの魔法”のルールを一部改変したのだ。

強い愛情は時として、血の繋がりを凌駕する。血こそ繋がっていないものの、実の親に負けない程、強い愛情を持ったシリウスを、『ハリーの血縁者である』と“守りの魔法”に誤認させる技術を、ダンブルドアは密かに開発していた。但し、それにはある条件を満たした道具が必要だった。——それは、ペチュニアが自らの意志で差し出し



た、一滴の血だった。

ハリーは両手で頭を抱え、特大の溜め息を吐いた。——ダーズリー一家の人々は、僕に与えるものなら、家の隅に落ちてる埃の一欠けらだって惜しいだろう。それが、まさか、血だなんて！バーノンおじさんが顔を真っ赤にしながら断固拒否し、ペチュニアおばさんが恐怖に引き攣った顔で罵る光景が、目に浮かぶようだった。そうして僕は、またあの家に連れ戻される……。

暗く沈んだ空気を少しでも和ませようと、ロンが『今年の夏に開催されるクイディッチのワールド・カップが、父の伝手で手に入るの、みんな一緒に見に行こう』と持ち掛けても——イリスとハーマイオニーは、わざとらしい位に歓声を上げて喜んで見せた——ハリーは生返事だった。遊びに来たフレッドとジョージがいきなり炸裂させた“爆発スナップ”にもほぼ無反応だったし、イリスがハリーの分も買いたんだ、盛り沢山のランチにもほとんど手を付けようとしなかった。

そうこうする内に、ホグワーツ特急は駅に到着し、四人は列車を降りた。——とてもじゃないが、今の状態のハリーを一人にする事など出来ない。三人は暗黙の了解で、ハリーの後を無言で着いて行った。

魔法の柵を通り抜けると、人が混雑する中で、大きな怒声の飛び交うエリアがあった。ハリーに続いて、野次馬の人垣を押し退けるようにして中に入ると、ちっぽけなトランクを一つ抱えた、でっぷりとした中年男性（この人がバーノンおじさんと、ハリーがこっそり教えてくれた）が、マグルの服装を小粋に着こなし、髪と目の色を明るく変えたシリウスと、大層な剣幕で言い争っている。

かつてイギリス中を恐怖のどん底に陥れた大量殺人犯が目の前にいるとは思っても寄らないバーノンは、恐怖に怯えて立ち竦むばかりの、痩せて背の高い女性（この人がペチュニアおばさんらしい）を背に庇い、口角泡を飛ばしながらシリウスにがなり立てた。

「断るー何故、愛しい妻の血をやらねばならんだ！」

——その言葉を聞いた瞬間、ハリーの顔から一切の感情が消え去った。そして、『ほらね』と言わんばかりに三人を振り返った。

「ハリーの命を守るためだ！」シリウスは吼えた。

「月に一度、ほんの一滴の血！ たったそれだけだと言っているだろう！」

シリウスは最早狂犬のように歯を剥き出してバーノンを威嚇していたが、ハリーに気づいて優しく微笑みかけた。

「やあ、ハリー。取り込んでいてすまない。大丈夫だ、すぐに話を付けるよ」

「話など付けん!!」

バーノンは丸太のような足を踏み鳴らし、声の限りに絶叫した。その余りの声の大きさに、様子を見物していた野次馬の群れが風もないのにガザガザと揺れて、バーノンから一步距離を置いた。

「全くもってマトモじゃない！・・・もういい！小僧はやはりこつちで預かる！ 訳の分からん気狂い達に、私の妻を傷つけられてたまるか！」

さも憎々しげにそう吐き捨てて、バーノンはシリウスを乱暴に押し退けると、ハリーの手を掴んで力任せにグイと引っ張った。その時、イリスはハリーを見て絶句した。——なんて冷たい表情なんだろう！

「ハリー！」イリスは夢中で、ハリーの腕にしがみ付いた。

氷のように冷ややかな仮面を被った、緑色の目の奥がキラリと虹色に光る。——ハリーがダーズリー一家で過ごした日々の思い出が、イリスの頭の中に流れ込んでくる。なんて悲しい、寂しい、辛い記憶・・・。

イリスは何としても、ハリーをあの家に戻すのは絶対に駄目だと思つた。たった一日、たった一秒足りとも。ピーターとの対決で“開心術”の使い方を習得したイリスに、迷いはなかった。

その時、イリスはふと視線を感じ、振り返つた。——ペチュニアだ。ハリーにしがみつくイリスを、何とも言えない複雑な表情で見つめている。イリスは彼女の目を見つめ、力を込めた。やがて目の奥に虹色の煌めきを見出し、彼女の心の世界へ入り込んでいく——

悲しみの涙で濡れた緑色の双眸が、幼いペチュニアを見つめ返す。  
——“あの時”と同じだ。私の制止を振り切つて、何度も振り返りながら、魔法の世界へと行つてしまつたりりー。ホグワーツの校長へ手紙を書き、自分も学校に行きたいと何度も訴えたが、願ひは聞き届けられず、断りの手紙を読んでは泣いた日々。両親はペチュニアに構わず、りりーがホグワーツから帰つて来る度に、彼女を盛大に誉めそやした。

確かにりりーは、私よりずっと可愛かつたし、優秀だつたし、優しかった。パパとママがりりーばかり可愛がるのも、納得はいかないけど、理解はしていた。

だけど、いつかは追いつけると思つていた。最初は、一緒の場所に立つていたんだもの。私がりりーに対して抱えている劣等感の数々も、努力すれば何とかなるレベルのものだ。りりーとは、これからもずっと一緒にいるんだから。少しずつ向き合つて、消化していけばいいわ。——そう思つてた。だけど魔法の世界は、ペチュニアだけを無情に突き飛ばし、違う場所へ弾き出した。

りりーは、一気に手の届かない存在になつた。魔法の世界なんて、努力ではどうにもならない。ペチュニアは、床に散らばつた断りの手紙を見て、思った。自分に見向きもせず、魔法の世界に陶醉するりりーと両親を見て、思った。

居場所を奪われたペチュニアは、自分の力で居場所を見つけるしかなかった。——長い事彷徨つてやつと見つけた、まともな夫、可愛い息子、自慢のマイホーム。

しかし、その幸せは永く続かなかつた。突如として押し付けられた赤ん坊は、ペチュニアに再び、あの悪夢の日々を思い出させた。——もう二度と関わりたくない！それなのに血が繋がっているから、私が育てないといけないだつて？“魔法界のお友達”にさせりやあ、いいじゃないか。冗談じゃない！

ミルクをせがんで泣き続ける赤ん坊を見下ろし、ペチュニアは思つ

た。——魔法界は勝手だ。いくらこつちが願っても聞き入れてくれない癖に、こつちが拒否しても厄介事は押し付ける。こつちの都合はおかまいなしで。フン、じゃあこつちだって勝手にするわ。育てりやいいんでしよう、育てりやあ！ペチュニアは、無垢な緑色の目を忌々し気に睨み付けた。

——長く葬られていた筈の、複雑な感情がペチュニアの心の世界を満たしていく。“あの時”と同じように、ハリーが去っていく。もう自分の手が届かない場所へ。だが、“あの時”と違い、自分が拒否すれば引き留める事が出来る。“あの時”、リリーがホグワーツへ行っていたいなかったら。いや、私がホグワーツへ行っていたら。リリーに対する劣等感は、変わらざるだろう。だけど今でも、私達は仲良く暮らしていただろうか。お互いの家族を交えて食事会をして、子供の名前を付け合って、子供たちも仲良くなって……。

☆

「ペチュニア、どうしたんだ？しつかりしておくれ！」

ペチュニアは、バーノンに揺さぶられて意識を取り戻した。愛する夫が、自分を心配そうに見つめている。その頼もしい肩越しに、泣くのを我慢するかのように唇を固く引き結んだ、黒髪の少女の姿がチラリと垣間見えた。——その時、ペチュニアは理解した。『自分はあの子供に、記憶を弄られたのだ』と。

ペチュニアは頑なな表情で、あらかじ予めダンブルドアから渡されていた“魔法の待ち針”をポシエツトから取り出した。指先を軽く突き刺すと、ちつとも痛みはないが、針は銀色から真紅色へ変わる。そしてそれを、すっかり毒気を抜かれた様子のシリウスに押し付けた。

「月に一度、送ります」ペチュニアはシリウスと目を合わせる事無く、冷たい声で言った。

「フクロウ便を送る」シリウスは礼も言わず、ただ唸った。

ペチュニアはバーノンに手を引かれてその場から立ち去る寸前に、イリスを憎しみのこもった眼差しで睨み付けた。——その時、イリスは気づいた。ハリーを守るためにした行為が、ペチュニアを傷つけた。相手の同意を得ずに行う“開心術”は、デイメンターが人の心を

踏み荒らす事と同じなのだ。

「さあさあ、行こう、ペチユニアや！ やつと厄介払いができた！ ダドリーが喜ぶぞ！ 早速、あいつの部屋の掃除をせねば！」

バーノンが構内に響き渡るような大声で、上機嫌に叫んだ。ついに堪忍袋の緒が切れたシリウスが、今にもダーズリー夫妻の背中へ杖を向けようとするのを、駆けつけたアーサーが必死になって止めている。——ハリーはその場から動かず、黙りこくってダーズリー夫妻を見つめていた。暫くの間、イリス達はハリーに声を掛ける事が出来なかつた。

☆

シリウスは“移動キー”<sup>ポर्ट</sup>で、ハリーを新居へ連れて来た。——ホグズミード村に比較的近い地区に建つ、こじんまりとした造りの一軒家<sup>デタッチドハウス</sup>だ。家の前には小川が流れ、規模こそ小さいものの、緑豊かな表庭と裏庭もある。シリウスは茫然とするばかりのハリーを伴って、家の間取りの説明を始めた。

「本当はもっと良い物件があつたんだが、諸事情でお流れになってね。こんなしよぼくれた家ですまない」シリウスが残念そうにハリーに言った。

「ここがキッチン、ここがダイニング兼リビングルームだ。あの暖炉は見かけより狭いから、“煙突飛行粉”<sup>フルーパーパウダー</sup>を使う時、頭をぶつけて失敗しないよう気を付けて。ここがゲストルームで、ここは・・・言わなくても分かるだろうが、一応、バスとトイレだ。さあ、二階に上がる」

二階に上がると、突き当りがバルコニーと繋がる廊下を挟んで、二つ部屋があつた。

「左側は私の部屋で、右側が君の部屋だ」

シリウスは、向かつて右側の部屋のドアを開けた。——室内に入ると、心地良い風がハリーの頬をくすぐった。程好い大きさの空間に、シンプルな造りのベッドと勉強机、本棚（魔法界で流行りの漫画がぎっしりだ）、クローゼットが収まっている。どれも買ったばかりなのだろう、みずみずしい木の匂いを漂わせている。カーテン越しに木

濡れ日が差し込んで、周囲を優しく包み込んだ。

「ここが僕の部屋？」ハリーは『信じられない』と言わんばかりに、掠れた声で尋ねた。

「ああ」シリウスはハリーの反応を見て、焦って言った。

「やっぱり、少し殺風景過ぎるか？ 気に入らないものがあるなら……明日、変えればいい。新しい家具を見に行こう」

シリウスは親しみを込めて笑い、ハリーの肩を優しく抱いた。『大丈夫だよ、ハリー。私が見た時にはね、馬に見えたんだ』——その拍子に、ハリーの耳に大好きな人の声が蘇った。前学期の「占い学」でグリムの意味を知り、不安な気持ちになっていた自分に、イリスが掛けてくれた言葉だ。“馬”は“望み事が叶う兆候”を示す。イリスの予言は当たった。自分の本当に望んでいた事、欲しかったもの。それは今、間違いなく目の前にあった。

☆

やがてハリー達の引越し作業を手伝うため、イリスとイオ、ハーマイオニー、ウィーズリー一家の面々がガヤガヤとやって来た。大人達が、他愛無い世間話を交えながら作業を進める一方で、すっかり元の調子を取り戻したハリーは、フレッドとジョージの持ち込んだ“スーパー爆発スナップ”に、イリス達と一緒に興じていた。

その頃、家の地下室では、“血の魔法”を更新するための儀式が厳かに執り行われていた。——部屋の中心部には複雑な魔法陣が描かれている。シリウスは純金製のゴブレットを両手に捧げ持ち、陣の中心へ静かに立った。

「シリウス。君はハリーの後見人として、ハリーを生涯守る事を誓うかね？」

「誓います」

シリウスが宣誓した瞬間、ゴブレット自体がバチバチと火花を散らし、電気を帯びたように青白く輝いた。シリウスは躊躇う事なく、その中身を飲み干した。

シリウスのハリーに対する強い愛情が、仮初めの“血の魔法”を強くする。毎月の初め、シリウスは然るべき手続きを踏んで、ペチュニ

アの血が含まれたこの薬を飲み、“血の魔法”を更新しなければなら  
ない。そうすればこの家はダズリーの家と同じ効力を持ち、リリー  
がハリーに与えた“守りの魔法”は継続される。

——その日の夕食はとても豪華だった。イオとモリー夫人が腕に  
寄りをおかけたフルコースが食卓に並び、みんな舌鼓を打ち、全部の料  
理をお代わりした。ハーマイオニーはローストビーフを上品に切り  
分けながら、三人に今学期の自分の秘密——“逆転時計”<sup>タイムターナー</sup>の事だ——  
を話して聴かせた。

“逆転時計”<sup>タイムターナー</sup>を使えば、過去に戻って別の授業を受けられるの。で  
も正直言つて、あの時計、私、気が狂いそうだった。だから先生にお  
返ししたわ。「マグル学」と「占い学」を落とせば、また普通の時間割  
に戻るし。何より、私が一番大切にしたいのは、今だもの」

そう言つて、ハーマイオニーはイリスに親しみを込めてウイंक  
し、優しく微笑んでみせた。

“逆転時計”<sup>タイムターナー</sup>！」ロンが呻き、絶句した。

「君が僕らにそのことを言わなかったなんて、信じられないよ。まる  
で裏切られた気分だ！」

『使つてる間は、誰にも言わない』って先生と約束したのよ」ハーマ  
イオニーが言った。

「だけど僕ら、親友だろ？」ロンが食い下がった。

「ハリー、本当に良かったわね。これから幸せな生活が待ってるわ」

ハーマイオニーはロンが仕掛けた永遠の言葉のループをばっさり  
断ち切り、ハリーへ慈愛に満ちた視線を送った。

「うん。今でも何だか夢を見てみたいで、実感がないけどね」ハリー  
は肩を竦めた。

「色んな人に感謝しなくちゃ」

「でも、ダンブルドアは流石だわ。そう思わない？だって彼、“血に關  
する魔法の権威”でもあるもの」

ハーマイオニーは『みんなもそう思うでしょう』と言わんばかりに、  
自信満々な様子で三人を見渡し、誰もついてきていない事実を目の当  
たりにして、愕然とした。

「貴方達、ダンブルドアの執筆した『血の魔法』に関する書物を読んだ事、ないの？」とつても興味深いのに！蛙チヨコレートにも『彼はその分野の権威である』って書いてあったでしょう？」

「そんな血<sup>ちなまぐさ</sup>腥いの読んでは、君だけさ。ところで君、『マッドマグルの冒険』を読んだことないのかい？」とつても興味深いのに！」すかさずロンが混ぜ返した。

☆

引越し作業が一段落した後、イリスとイオは空港へ向かい、日本へ帰国した。二人は結界を抜け、鳥居をくぐり、手水舎で手を清め、拝殿へ赴き、一年の無事と力を与えてくれた事を神様に感謝した。イリスはくたくたに疲れ切った身体をシャワーで軽く清め、ベッドに倒れ込んで、あつという間に眠りについた。

——ふと気が付くと、イリスは夢の世界にいた。美しい大理石で出来た、立派な造りの大広間の中心に立っている。周囲には大勢の人々がいて、皆イリスに向けて賞賛の拍手を送っていた。

「おめでとう、おめでとう」

「良く此処まで辿りついた」

人々の中から豊満な体つきの美しい女性が進み出て、イリスを我が子のように愛おしそうな様子で抱き締める。痩せ細った初老の男が<sup>かす</sup>傅き、「お嬢様」と呻きながら、イリスの手の甲に恭しく口付けた。最後にルシウスがやって来て、リドルがくれた『空飛ぶ絨毯』をイリスの背中にそつと掛けてくれた。その瞬間、絨毯は上質なローブへと変わった。

「さあ、あの御方が待っている。行きなさい」

ルシウスはイリスの前髪を掻き上げ、小さな額に優しく口付けた。そして静かに彼女の背中を押した。沢山の惜しみない拍手に送られて、イリスは迷う事無く大広間の出口へ向かった。

「駄目だ、行くな！」

不意に誰かの叫ぶ声がして、イリスは立ち止まり、声のした方を振り返った。——ドラコだ。何時の間にか、銀色の仮面を被り、黒装束に身を包んだ人々の群れの中に、スリザリンの制服に身を包んだ少年



が立っている。その目は奇妙な虹色に輝き、イリスを心配そうに見つめていた。しかし次の瞬間、彼の姿は、怒り狂った周囲の人々に揉みくちやにされて、あつという間に見えなくなってしまった。

ドラコを助けようと一步を踏み出した瞬間、あの荘厳で美しい歌声がイリスの脳髓をどろりと蕩かした。彼女は歌声に導かれるように、覚束ない足取りで出口の敷居を跨いだ。

☆

出口の外は、塔の天辺だった。広々とした濃紺色の空に星々が散りばめられ、神秘的な煌めきを放っている。天辺はこじんまりとした石造りの空間で、その中央にはローブを目深に被った女が、古びた糸車を回しながら、同じ歌を繰り返し口ずさんでいた。——なんて美しい声なんだろう！イリスは思わず聴き惚れて、涙を流した。

『スカバーバラの市へ行ったことがあるかしら？パセリ、セージ、ローズマリーにタイム、

そこに住むある人によろしく言って、彼はかつての恋人だったから』

イリスは誘われるようにして、女の傍へ近づいた。——糸車には、ダイヤモンドのように美しい輝きを放つ、純白の糸が紡がれている。

「とても綺麗。何を紡いでいるの？」

「時間よ」彼女は鈴を転がすような声で応えた。

「もつと近くで見てもいい？」

「ええ、どうぞ。これは貴方のものだもの」

女は上品な所作で椅子から立ち上がり、イリスに座るようにと促した。イリスはお礼を言つて椅子に座ると、その煌めく糸を思う存分眺めた。——なんて綺麗なんだろう。イリスはうつとりとして溜息を零した。ほんの少しで良い、触つてみたい。そして何も考えずに、指先を伸ばそうとした時——

「駄目だ!!!」

——凄まじい怒声が響き渡り、イリスは驚いて飛び上がった。それから声のした方を振り返って、絶句した。——イオおばさんだ。体じゅうを傷つけられ、出口近くの壁に寄りかかつて息を荒げながら、

イリスに真摯な眼差しを向けている。イオの目は青色ではなく、奇妙な虹色に輝いていた。

「イリス、それに触るな！こっちに来るんだ！」イオが叫んだ。

「まあ」女は、形の整った眉を潜めた。

「死に損ないが、随分としつこいのね」

女は、白魚のような指を軽やかに鳴らした。——その瞬間、イオは苦悶の表情を浮かべて頽くすおれた。そしてその体がスルスルと縮んでゆき、やがて小さな虹色の蛇になった。そんなイオの只ならぬ状況を見て、イリスは椅子を蹴倒すようにして立ち上がり、彼女の傍へ駆け寄ろうとした。

しかしそれを阻むかのように、ローブの四隅にあしらわれた銀色の房飾りが鋭いナイフに変わり、石造りの床に深々と突き立ってイリスをその場に縫い止めた。——イリスは身じろぎしたが、指先一本動かす事が出来ない。声を出す事も。

「これはお前の親戚ではない。その姿を借りた邪魔者よ」

涼やかな声でそう言つて、女は蛇を踏みつけた。蛇は苦しそうに鳴いて、煙のように霞んで消えたしまった。『おばさん！』——声にならない声で、イリスは叫んだ。

——その声に気づいたかのように、女はこちらを振り返った。彼女は鷹揚な動作でフードを外し、イリスに自分の顔が良く見えるようにした。

黒檀のように美しい髪が、風に遊ばれて翼のように舞い踊る。明るい褐色の瞳が、内側から満ちる魔法力を帯びて金色に煌めき、蠱惑的に瞬いた。凜とした佇まいの、妖艶な雰囲気を放つ女性。——イリスは驚きと絶望に打ちのめされ、息をする事すら忘れて喘いだ。かつて見たリドルの記憶のまま、その姿は変わらない。間違いない、自分の祖母、メーテイス・ゴントだ。

メーテイスはイリスの右手を優しく取って、その人差し指の先を糸車の針に突き刺した。輝く程に純白だった糸は、イリスの血を吸い込んで真っ赤に染め上げられていく。その様子を確認し、メーテイスはゾツとする程、凄艶な笑みを浮かべた。

「この時をずっと待っていた。私の可愛い孫娘」

鈴を転がすような声でそう歌い、彼女は糸車の針に、今度は自分の指先を突き刺した。——その瞬間、轟音と共に糸車が爆発した。粉々に砕け散った破片から夥しい量の血が噴き出して、イリスを——メーテイスを——塔全体を——この世界を、飲み込んでいく。

イリスは悍しい血の海に溺れ、声もなく足掻いた。体にまとわりつくローブがずしりと重みを増し、イリスを海の奥底へ誘っていく。やがて肺の中の空気が尽きて、イリスは夢中で血を飲んだ。一口飲む毎に、イリスの心身に“呪い”が染み込んでいく。しかしイリスはそれをどうする事も出来ない。

「あのお方に忠誠を誓いなさい、イリス」

真つ赤に滲む世界の中で、メーテイスの声だけが冷酷に響いた。

「さもなければ、お前は永くは生きられないでしょう。——お前の父親のように」

イリスの肺に“呪い”が満ちた時、少女の全てが血の海に融け込んだ。その小さな身体だけでなく、精神や魂の一欠けらまでもが、一度分解されて“呪い”を組み込まれ、新しい存在へと再構築されていく。急速に霞んでいく意識の中、イリスはただ助けを求めて手を伸ばした。——何もかも分からなくなる寸前、誰かがその手を掴んだような気がした。

☆

日本を遠く離れた、イギリスの地で。

——ドラコは息を切らして跳ね起きた。心臓が今にも飛び出しそうな位、大きな音を立てて波打っている。汗でぐっしより濡れた髪を気にもせず、ベッドの上で座り込んだまま、彼は小刻みに震え続ける自分の手を見つめた。

ほんのついさつきまで、この手は『何か』を掴んでいた。——今までの虚栄に満ちた、つまらない灰色の人生を丸ごと塗り替えてしまえるようなものを。例えるならばそれは、陽だまりのように暖かく、野に咲く花のように素朴で、春風のように優しく、大地のように慈愛に溢れたものだった。

こんなに安らかで暖かい気持ちになったのは生まれて初めて、の筈だった。しかしドラコはその気持ちに対して奇妙な既視感を感じてもいた。彼はごくりと生唾を飲み込んで、思考を巡らせた。——僕はかつて、こんなにも満たされて幸福な気持ちになった事があった。じゃあ、僕をそんな風にしたものは、一体何だ？

ドラコがそこまで考えた瞬間、またあの脳髓を蕩かすような頭痛が襲って来た。彼は思わず頭を抱え、呻きながらベッドの上でうずくまる。

——その時、ドラコの頭の中に、狂ったような痛みに混じって、今にも消えそうな程に儂く小さな少女の声が聴こえた。その瞬間、彼は理解した。誰かが助けを求めている、自分だけがその子を助けられる。そしてその子こそが、かつて自分に幸せを与えてくれ、また先程の夢の中で自分が掴んでいたものなのだ。

『君を助きたい』——永久に続くかのような痛苦つらくの中で、ドラコは歯を食い縛って足掻き続けた。

ドラコは例えこの痛みで気が狂ってしまったとしても、その子を忘れたくないと思った。——まるで自分の影が消えてしまったかのような、漠然とした寂しさを抱えて、彼は今まで生きてきた。何故、僕はこんなに寂しく空しいのか。その問いの答えは、いつも決まってこの痛みだった。しかし今日彼は痛苦の中に、ついに一縷の望みを見出した。

きつと痛みの中に聴こえた声の主が、問いの答えを知っている。頭痛はいつも治まると同時に、苦しんだ時の僕の記憶を少し奪っていく。痛みが消えてこの声も忘れてしまうのなら、いつそのままでもいい。やっとなにをしたわづかな手がかりを、絶対に忘れたりするもんか。——ドラコは惨痛の末にベッドから転げ落ち、脂汗を滲ませ、のたうち回りながらも、恐ろしい痛みを耐え続けた。

☆

——どの位の時間が経ったのだろう。ドラコは床に突っ伏していた顔を、のろのろと上げた。虚ろに開いた唇の端から、血の混じった唾液が垂れ落ちる。もう痛みはない。しかしあの声の記憶は、色褪せ

る事無く今でもはつきりと覚えている。

ドラコは、イリスが掛けた“忘却術”の一つである“想起妨害魔法”を凄まじいまでの執念で打ち破った。彼にはまだ、夢の中でその手を掴み、痛みの中で聞いた声の主の正体が誰かは分からない。けれどその子は必ずどこかにいて、今も自分に助けを求めている——その事だけは、しっかりと分かっている。やがて疲れて気を失ってしまうまで、彼は熱に浮かされたように、部屋の中に詰まった暗闇に向け、同じ言葉を繰り返し囁き続けた。

「僕が助ける。必ず、君を見つげ出す」

## 炎のゴブレット編

### P e t a l l . 父の記憶

——『あのお方に忠誠を誓いなさい。さもなくば、お前は永くは生きられない』——

夢の世界で聞いたメーティスの声が、真つ暗なイリスの意識内にポツンと落ち、大きな波紋を描いて覚醒へ導いていく。ゆつくりと瞼を開くと、イリスはベッドではなく——外の世界にいた。一体、ここはどこだろう。まるで頭の中に靄もやが掛かっているみたいにぼんやりして、まともに思考を巡らせる事が出来ない。鉛のように重い身体を引き摺って周囲を見渡してみると、ほんの十メートル程先に、見慣れた出雲神社の鳥居があった。

帰らなきや。そう思つて、イリスが足を踏み出した途端、視界の全てが白く染まって、何も見えなくなった。無数の細かな水の粒子が、イリスのわずかな動きに反応して舞い踊る。

——辺りは濃霧に包まれていた。イリスは先程までの記憶を頼りに神社を目指して歩き続けたが、いくら歩いても辿り着かない。何十分歩いただろう。もうとつくに着いている筈なのに。やがて息が切れ、疲れ果てて、イリスはがつくりと地面に座り込んだ。

ふと、どこか聞き覚えのある音が聴こえてきた。——大きな鳥の羽ばたく音。それは段々近づいて来て、上空の方から霧を突き抜け、——イリスのフクロウ、サクラが飛んできた。懐かしい相棒の姿を見て、イリスはホツと安堵の溜息を零し、「サクラ」と呼んで微笑んだ。サクラは少女の目の前に止まると、不思議そうに大きな目を丸くして「ホウ」と一鳴きした。

——サクラの言葉を理解する事が出来ない。

どうやらサクラもこちらの言葉を理解出来ないようで、何度話しかけても、サクラは『何と言っているのか分からない』と言わんばかりに首を傾げ、鳴くばかりだった。晴れるどころか、ますます濃く立ち込めるばかりの乳白色の霧が、イリスの不安感に拍車を掛ける。つい

に彼女は強烈な孤独感に襲われ、一時的なパニック状態に陥った。

しかし、うずくまり喘ぐように呼吸を繰り返すイリスの精神は、徐々に和らいでいった。——優しいピアノの旋律が聴こえてきたからだ。顔を上げ、ゆつくりと音源を辿ると、一メートル程先に古びたカセットレコーダーが置いてある。レコーダーの傍にはサクラがいて、心配そうにこちらを見つめていた。

サクラは、イリスが精神的に落ち込んだ時、レコーダーから流れる音楽を聴いて元気を出している事を覚えてくれていたのだ。『たとえ言葉は分からなくとも、サクラは私を大切に想ってくれている』——イリスは涙を拭い、サクラに手を伸ばした。相棒はとびっきりの愛情を込めて小さな主人の指を甘噛みした。

その時、微かな足音がして、少女とフクロウは揃って音のする方向を見た。霧の中にじっと目を凝らすと、淡い光がゆらゆら揺れながら、足音と一緒にこちらへ近づいて来る。——きつとイオおばさんが迎えに来てくれたんだ。一人と一羽は思わず見つめ合い、微笑んだ。ぼんやりとした灯りの中に、ついに人影が見えた時、イリスはカセットレコーダーを拾い上げ、サクラを促してこちらへ近づいた。

「おばさん？」

しかし、影は答えなかった。やがて薄い霧のヴェールを纏い、イオが片手に懐中電灯を握ってやって来た。イオはイリスを見つけた途端、ニヤリと不気味に笑い、懐中電灯を大きく振りかぶった。振り上げた瞬間、それは輝く大剣<sup>ロングソード</sup>へ変わった。イオは茫然と立ち尽くすばかりのイリスに狙いを定め、剣を振り下ろす。

——もう少しでイリスの髪に剣の切っ先が触れるという時、イリスと剣の間を“緑色のもの”がシュツと入り込んだ。かつてリドルがイリスに与え、夢の中でイリスを苦しめた“空飛ぶ絨毯”だ。絨毯はイリスを守るように包んでふわりと空中に浮かび、あつという間に遙か上空へと連れ去った。

「イリスー！行くな！どうして逃げるんだ！」

地上で懐中電灯を振り回し、イオは叫んだ。

イオが普段、“慈雨<sup>じゅう</sup>”を使用して張る結界は『悪意のある者が近づ

くと濃霧の幻を出して迷わせる』効果を持っていた。——イオは先程のイリスの様子を思い出し、唇を噛んだ。あの子は、いくら懐中電灯で逆光になっているとはいえ、目の前にいる私の事が全く見えていないようだった。まるで濃霧の中にいるみたいだ。そして自分が近づくと酷く怯えていた。おまけに、あの子を攫った“緑色の何か”。明らかに尋常じゃない。

絨毯に追い縋ろうとしたサクラが、やがて力尽きて戻って来た。イオはサクラを肩に留まらせ、家に駆け戻り、逸る気持ちを何とかして押さえつけながら黒電話を掴み、アーサーの電話番号を押した。

☆

サクラの追跡を振り切った絨毯は、上空でぴたりと止まった。まるでイリスの命令を待っているかのように。——どこへ行ったらいいんだろう。落っこちないように絨毯の端をしっかりと掴み、こわごわ地上を見下ろすと、鎮守の社である豊かな森林全体を乳白色の霧が覆い、月明かりを反射して淡く輝いているのが、遠目でもはっきりと確認できた。先程のイオの凶行を思い出し、イリスは思わずブルツと震えた。どうしておばさんが——誰も信じる事が出来ない。まるでまだ悪夢を——塔の夢の続きを見ているみたいだ。夢ならどうか早く覚めてほしい。

『“恐ろしい夢”を見る事は?』——ふと脳裏に、スネイプの言葉がよぎった。

スネイプにそう質問された後、確かに自分は“恐ろしい夢”を見た。——今思えば、まるでその事を予期していたかのような様子だった。先生はきつと夢の事を知っている。『スネイプ先生のところへ』——イリスが命じると、絨毯は音もなくスルスルと空を飛翔し始めた。

☆

イギリス—日本間は、飛行機で片道約十二時間かかる。絨毯はその倍の時間を必要とした。休む事なく一定の速度で飛び続ける絨毯は、イリスにとって丁度良い温度を維持したり、表面をよりフカフカにして良い芳香を漂わせたりして、主の体調を細やかに気遣った。イリス



はそんな絨毯のおもてなしに導かれ、何度も眠ってしまいそうになった。

だがその度に、耳元で得体の知れない笑い声がして、その余りの不気味さにハッと意識を取り戻す。『眠ってはいけない』——眠ってしまったら、その声の主が自分に害を成すような気がした。イリスは握り締めたカセットレコーダーから聴こえる音楽に全神経を集中し、眠りの誘惑から目を逸らし続けた。

日本を飛び越え、大いなる海の冒険を終えた絨毯は、廃墟となった工場と汚れた川の近くにある荒れ果てた袋 スピナーズ・エンド 小路を見つけ、緩やかに高度を下げていった。ひしめき合うように建ち並ぶ家々を通り過ぎ、ある一軒家の玄関前でイリスを優しく下ろすと、まるで『自分はただの絨毯です』と言わんばかりの様子でクルリと丸まり、近くの壁に立てかかる。——そんな一連の様子を、疑問も恐怖もなく自然に受け入れてしまえる程に、今のイリスは疲弊し切っていた。

イリスはふらつく体に鞭打って、古びた造りの扉をノックした。——ガチャリと鍵の外される音がして、開いた扉の隙間からスネイプの警戒し切った顔が覗き、少女を見つけた途端にその表情は驚愕一色に染まった。スネイプは油断なく周囲を見張りながら、イリスを中に入れ、扉を閉める。

「君の家族から我々へ向け、『君が行方不明になった』と知らせがあった。今までどこにいた？それに、どうやってここへ？」

「空の上に。絨毯に連れて来てもらいました」イリスは今にも閉じようとする頑固な臉と戦いながら応えた。

「絨毯は外にいます」

スネイプは何か言いたそうに口を開閉させていたが、諦めた様子で杖を構えて玄関の扉を開け、イリスを連れて来たと言う。絨毯なるものを確認しに行ったようだった。やがて戻ってきたスネイプは、警戒心も露わに眉を潜めて唸った。

「ゴーント。あれは非常に強力な“闇の魔術”が編み込まれている。一体、どこであんなものを」

「二年生の時、リドルから譲り受けました」イリスは挑むような口調で

遮った。

『君の祖母の一族に代々伝わっていたものだ』と

“祖母”という単語をイリスが口にした瞬間、スネイプの顔がより一層険しくなった。——その反応を見て、彼女は確信した。恐らく先生は、夢の秘密を知っている。

「昨日の夜、私は夢の中で、祖母・・・メーティスに会いました。とても恐ろしい夢”でした。先生はこの夢の事について、何かご存じなのですか？」

スネイプはゆっくりと目を閉じ、噛み締めた唇の隙間から長い溜息を吐き出した。やがて彼はダイニングルームにイリスを誘い、テーブルに二つ設置された椅子の一つに腰掛けるよう促した。

「君は”<sup>オブスキュラス</sup>体を蝕む闇の力”を知っているか？」対面の椅子に座るや否や、スネイプは言った。

「オブスキュラス？」

「直訳すると”抑圧された力の具現”、有体に言えば”純粋な魔法力の塊”だ。太古の昔に存在していたもので、現在は殆ど实例を見ないとされている。

オブスキュラスは、魔法族の子供が何らかの理由により、魔法力を抑圧せざるを得ない状況で発生する。一度発生すると、もう二度と消す事は出来ない。暴力や苦痛に満ちた怒り等、マイナスな要因が引き金となるか、宿主が弱り制御を失うと、オブスキュラスは体外へ放出される。そして主に、宿主の苦痛の源を攻撃するが、周りにも被害を与えるとされている」

イリスがオブスキュラスの事を凡そ理解した事を確認すると、スネイプは話を続けた。

「君の祖母、メーティス・ゴントは、先日の夢を通して、君を『闇の帝王に忠誠を尽すための存在』へと生まれ変わらせた。現在の君の体には、先程のオブスキュラスに似せた構造の”呪い”が組み込まれている。

今後、君が闇の帝王を敵とみなした時、また彼を滅ぼすために行動した時、呪いは増大する。あの人に仇名す事自体が、非常に大きなマ

イナスの要因——言わば『苦痛』となるからだ。君があの人を敵と認識する限り、呪いは際限なく膨れ上がり、やがて制御する事が出来なくなつた時、放たれた呪いの力は主に苦痛の源である、君自身を攻撃する」

イリスはスネイプの言葉を理解するのに、多くの時間を必要とした。『闇の帝王に忠誠を尽すための存在』——『あの人に仇名すと、呪いは増大し』——『放たれた呪いが自分自身を攻撃する』。スネイプは茫然とするばかりの彼女を静かに見つめ、薄い唇を開いた。

「君の父、ネーレウス・ゴントは、わずか六歳の時に呪いが発現し、その後十七年間生きた。あの人に歯向かう毎に呪いは膨れ上がり、ついに彼は体内で暴れる呪いを押さえつけるために、他の魔法が使えなくなつた。そしてあの人の前で自らの呪いを解放し、妻と共に死んだ」

——イリスの感情が爆発した。お父さんが呪いのために苦しみ、死んだ？そんな大事な事を、何故今まで誰一人、教えてくれなかつたんだ！椅子を蹴立てて立ち上がり、彼女はよろめきながらスネイプの胸元に縋り付いた。

「どうして——どうして——教えてくれなかつたのですか。先生は今までずっと私の傍にいて下さっていたのに！」

「教えたとして、それでどうなる？」スネイプは激情を秘めた声音で唸った。

「君が真実を知る事で、呪いが消えるのか？悪戯に不安を煽るだけだ。・・・私が出る事は、来たるべき時が来るまで、君を見守り続ける事だけだった」

☆

二人の間に迸る情感の炎が鎮まると、今度は沈黙のヴェールが舞い降りた。俄かにイリスはまるで極寒の地に放り込まれたかのように、ガタガタと震えが来て止まらなくなつた。

「案ずるな。あの人に敵意を抱かない限り、呪いが君を害する事はない」

スネイプは再びイリスに席に着くよう勧めると、キッチンへ行つて

大皿を取って来た。中身を小皿に取り分けて蜂蜜を掛けると、スプーンを添えて差し出す。

「食ばなさい。その後は湯浴みをし、眠るべきだ」

イリスは限のくつきり浮いた目で、お皿の中を見つめた。——レーズン入りのオートミールだ。皿から顔を上げると、スネイプがこちらを観察するかのようじつと見つめている。不意にその眼差しと、霧の中で見たイオの笑みが重なり、イリスはスプーンに手を伸ばす事が出来なかった。

スネイプはイリスのその様子を見て取り、黙って席を立って、小皿とスプーンを持って戻って来た。そして大皿からオートミールを取り分け、スプーンで掬って食べて見せた。

「ご覧の通り、毒は入っていない」自分の皿に蜂蜜を一匙足しながら、スネイプは言った。

「君がオートミールを口にする事で、呪いは増大しない。食ばなさい」イリスはおずおずとスプーンを手に取り、オートミールを掬って口に入れた。——蜂蜜と牛乳と穀物、レーズンの素朴で優しい味が口内に広がった。冷たいけれど、不思議な暖かみを感じる。愛情の籠もった味だ。それは舌を通じて脳に伝わり、彼女の中に単食う呪いの一部を少しだけ遠ざけた。

その時、イリスは気づいた。——霧の中で見たイオの恐ろしい姿は、まやかしだったのだと。イオは必死の形相で自分の名前を呼びながら、懐中電灯を振り回し、一心にこちらへ向かっていた。冷静に考えてみれば、おばさんが自分を傷つけようとする筈がない。どうして、あんな見間違い”をしてしまったのだろう。「家に帰りたい」イリスはそう言った途端、熱い涙が零れて止まらなくなった。

「言われずとも、君は数日後に家へ帰る予定だ」

スネイプは冷静に切り返し、しゃくり上げながらオートミールを食べ続けるイリスを呆れが混じった目で眺めた。薄い唇が皮肉気に捲れ上がる。

「君は本当に泣き虫だ。これから先が思いやられる」

イリスはその後、蜂蜜入りのオートミールをもう一杯お代わりし、湯浴みをして、スネイプのベッドを借りて横になった。スネイプは無地のティーカップに暖かいカモミールティーを淹れてくれた。お礼を言つて受け取ったものの、イリスはそれに口を付ける事無く沈んだ声で囁いた。

「眠るのが怖い」

「何故？」 スネイプが訊いた。

「眠りそうになると、耳元で……誰かが冷たく笑う声が聴こえるんです」

スネイプは暫くの間、何も言わなかった。しかし、やがて不自然な程に優しい声音でこう言った。

「それは幻聴だ。さあ、お茶を飲みなさい。私が傍にいる」

イリスは安心してカモミールティーを飲み、スネイプの見守る中であつという間に眠りに就いた。規則正しい寝息を立てる少女から視線を外し、スネイプは濁った窓ガラス越しに映る月を睨んだ。――月は欠ける事無く満ち、美しい輝きを放っている。

☆

寝室の扉を控えめにノックする音が響き、スネイプはゆっくりと振り返った。

「眠ったかね」

扉を開けて静かに入って来たのは、上質な漆黒のローブに身を包んだ魔法使い、ルシウス・マルフォイだった。スネイプがしっかりと頷き、呪いが無事発動した事を告げると、ルシウスは満足気に微笑んだ。しかしスネイプの表情はそれに迎合する事無く、頑ななままだ。その様子を見咎め、ルシウスは言った。

「君が気に病む必要はない。呪いは必ず発動する。こちら側へ来させれば済む事だ」

「哀れな娘です」 スネイプはポツリと呟いた。

「この子は眠る事を恐れていた。今はどのような夢を見ているのでしょうか」

「滅多な事を言うな、セブルス」 ルシウスはスネイプに詰め寄った。

「今や我らの行動は、この子を通してあのお方に筒抜けだ。邪魔が入るまでは、あのお方にこの子を差し出しておく必要があると言っただろう。その事が、引いては彼女の為にもなるのだ」

その時、柔らかな笑い声がして、二人は凍り付いたように息を詰め、声の主を探した。——イリスだ。幸せな夢を見ているのだろうか、かすかに微笑んでいる。ルシウスが静かに近づくと、少女は彼のローブの端に顔を寄せて「ドラコ」と呟いた。ルシウスのローブに染み込んだ“マルフォイ家の屋敷の香り”から、ドラコと過ごした幸福な日々を思い出しているのだろう。

スネイプの目の前で、ルシウスのいつも冷たく取り澄ました表情が、一転して“父親の顔”になり、彼はベッドに跪いて少女の頭を優しく撫で、頬にキスをした。

「イリス。辛い思いばかりさせてすまない。もう少しの辛抱だ。二度と君に涙は流させないと約束する」

「良いのですか、ルシウス」スネイプは静かな声音で窺めた。

「あのお方が・・・」

「分かっている!」

苛立ちをたっぷり含んだ声で言い返し、ルシウスはベッドから立ち上がった。——もうすっかり元の表情に戻っている。鋭利な灰色の瞳が、扉の先を射抜いた。

「それに、ようやく邪魔者が来たようだ」

☆

イリスは夢の世界で、一年生の時にマルフォイ家の屋敷で過ごしたクリスマス休暇の思い出を追体験していた。大好きなドラコと思う存分遊んだ、輝きと胸の高鳴りに満ちた記憶。屋敷の前に広がる、一面の美しい雪景色の中で、イリスはドラコと一緒に雪合戦をしたり、ふざけて転げ回って笑っていた。

雪塗れになった二人がフカフカの雪の上に倒れ込んだ瞬間、一面の雪原は——“緑豊かな草原”へと変わった。

イリスはこの光景を、かつて見た事があった。——リドルに誘われて図らずも見た、どことも知れない谷の上での記憶。その思いを肯定

するかのようになり、隣でゆっくりと起き上がったのはドラコではなく、リドルだった。彼は優雅な動作でパチンと指を鳴らした。

——その瞬間、イリスの世界は漂白された。真っ白だ。何も無い。「もう君には必要のないものだ」リドルは冷笑した。

リドルによつて唐突に全ての記憶を奪われたイリスは、声もなくその場に崩れ落ちた。——何も思い出す事が出来ない。「ここはどこだ？」——『自分は誰だ？』——『一体、何を失ったんだ？』

その時、イリスの前に——銀色の長い髭を蓄えた老人が現れた。その青く澄んだ瞳は、激しい怒りに燃えている。老人は淀みのない動きで杖を振るつた。杖先から噴き出した炎がリドルを舐めると、彼の身体表面がズルリと剥け、中から蛇を彷彿とさせるような外見の——背の高い痩せた男が姿を現した。

「もう遅いぞ、ダンブルドア！」

老人がイリスを抱き抱え、夢の世界から離脱しようとする様子を見ながら、男は冷たい声で哄笑した。

「この娘は俺様のものだ！」

☆

ガチャン。何か硬いものが砕け散る音がして、イリスは意識を取り戻した。——音のした方向へ顔を向けると、ベッドのすぐ傍に、たつぷりとした銀色の髭を湛えた老人がいて、大きく身を乗り出した状態でこちらをじっと見つめている。きつとその時に引つ掛けたのだらう、一組のティーカップとソーサーが割れて、その破片がサイドテーブル上に散らばっていた。

この老人は誰なのか、イリスは懸命に思考を巡らせて、思い出した。この人は——“ダンブルドア先生”だ。その瞬間、頭の中が熱いもので満ちて身体が勝手に動き出した。彼女はサイドテーブルに手を伸ばし、鋭く尖った陶器の欠けらを掴み取ると、自らの首に突き刺した。ブツツと音を立てて、イリスの首の薄皮が切れ、血が滲んでいく。しかし、血はそれ以上流れる事はない。ダンブルドアがその手をしっかりと掴んでいるからだ。イリスは欠けらを力任せに握り込んだ。指の隙間から、血がボタボタと垂れ落ちて、ダンブルドアの手を汚し

ていく。

「何故止める？」イリスの口が勝手に動き、笑った。

「お前がこれからしようとしている事」だ。今度はこの娘を使い捨て、殺すのか？」

イリスの言葉を受け、ダンブルドアの手の力は明らかに弱まった。その隙を突いて、彼女はダンブルドアの拘束から抜け出し、彼の心臓に狙いを定めて、自らの血で真っ赤に染まった欠けらを——力の限り、突き刺した。

肉を断つ鈍い音がして、ダンブルドアのローブからどす黒い血が滲み始める。しかし彼はそれを気にする事無く、少女を優しく抱き締めた。老人の深く閉じた瞼から涙が滲み、雫となってイリスの手に滴った時、頭の中で小さな呻き声が響いて、彼女の体は自由を取り戻した。イリスは余りの事にどうする事も出来ず、むせ返るような血の匂いの中、ただ力なく咽び泣いた。

「すまない」ダンブルドアは涙に滲む声で、その言葉を何度も繰り返した。

「きみの中に流れる」出雲の血”に甘えていた。いつかは必ず言わねばならぬことだったと言うのに」

☆

ダンブルドアは全てを話して聴かせた。——イリスには呪いを内包した“スリザリンの血”だけでなく、同じだけの力を持つ“出雲家の血”も流れていた。双方がお互いを滅ぼそうと戦っていたために、呪いの発動はダンブルドアが予期していたよりもずっと遅くなった。イリスが一つずつ年を重ねていく度に、ダンブルドアは“出雲の血”に対して期待を抱くようになった。これほど年を経ても、彼女は呪いの予兆である夢の片鱗すら見てはいない。『出雲の血”は、呪いを打ち破るかもしれぬ』——しかし、その期待は儂くも消え去った。長い戦いの末にスリザリンは出雲を退けた。そしてより増大したスリザリンの血は、今まで以上に強力な呪いを生み出した。“今まで以上に強力な呪い”——イリスはその言葉を聞いて、先程スネイプに手当てをしてもらったばかりの、包帯を巻いた自分の手をじっと見つめ



た。

その時、何の前触れもなく、懐かしい親友達——ハリー、ロン、ハーマイオニーの顔がポツと思ひ浮かんで、イリスの胸に熱い感情が込み上げた。

「あと何年、生きられるのですか」イリスは蚊の鳴くような声で訊いた。

ダンブルドアは、その問いに答える事が出来なかった。イリスは震える手で、顔を覆った。

「一人にしてください」イリスは悲しみに喘いだ。

「お願いです・・・ひ、一人に、して・・・」

——微かな衣擦れの音と共に、パタンと静かに扉の閉じられる音がした。イリスは絶望に打ちひしがれ、力なく泣き崩れた。『たとえ今は辛くとも、自分に出来る精一杯の事をして一生懸命生きていけば、いつか必ず幸せになれる』——彼女は苦しい現実と立ち向かう内に、無意識の中でそんな信念を抱くようになった。だが、現実は無情だった。ヴォルデモートの庇護がなければ、自分は永く生きられない。

ふと視界の端に何かが映り、イリスはサイドテーブルに視線を送った。——父がくれたカセットレコーダーが、部屋の灯りを反射して、鈍く表面を光らせている。手を伸ばし、それを手に取った。

「お父さん」イリスはポツリと呟いた。

「私はどうして生まれてきたの？」

問い掛けと共に生まれた涙が頬を伝って、カセットレコーダーに滴った。——その時、カチャンと音を立てて、レコーダーのテープ挿入口が開いた。

イリスはびっくりして、レコーダーをまじまじと見つめた。以前、どれだけ頑張っても開かなかった挿入口が、急に開いた。挿入口からカセットテープをそつと取り出すと、何気なく裏返して、息を飲んだ。

——裏面には無地のシールが貼ってあり、そこには曲名のタイトルではなく金色の文字で『イリスへ』と書かれている。

“カセットテープには、A面とB面がある”。昔、イオに教えてもらった事を思い出し、イリスはテープをひっくり返して挿入し、再生

ボタンを押し込んだ。暫くは、ジジジと磁気テープだけが回る、優しいノイズ混じりの静寂が続いていたが、やがてそれは破られた。

『イリス』優しい男性の声だ。少しリドルに似ていたが、その声は芳りに満ちていた。

『これを聴いているという事は、君の“呪い”は発動してしまったんだね。このテープをダンブルドアに渡してほしい。僕達の一族についての情報と、僕自身の記憶が入っている。どうかこれが少しでも、君の人生の助けになる事を願って』

テープの再生はそこで終わり、再びガチャンと挿入口が開いた。イリスはテープを引き抜き、部屋を飛び出してダンブルドアを呼び戻した。彼はテープを暫く見つめた後、杖を振るって、丁寧に磨かれた浅い石製の盆を呼び出した。外縁にはルーン文字が彫られていて、中は光を放つ銀白色の物質がゆらゆらと揺れている。

「『憂いベンシープの篩』じゃ。他者の記憶をこの中に入れると、それを追体験することができ」

ダンブルドアは、テープを静かに傾けた。するとテープの端から、銀色に輝く糸のような流れが一筋、篩の中に落ちていく。ダンブルドアに促され、盆に顔を近づけた途端、イリスはネーレウスの記憶の世界へ入り込んだ。

☆

——気が付くと、至る所にノイズが走っている不安定な白黒の世界に、イリスはダンブルドアと共に立っていた。まるでポロポロにフィルムが傷ついた映画を観ているように、世界中の彼方此方に雑音やノイズが走っている。目を凝らすと、二人は粗末な造りの家の中にいるようだった。

雑音の中に女性のか細い悲鳴が聴こえ、イリスは声のした方向へ顔を向けた。——檻樓切れを纏った美しい女が一人、両手で地面を掻いて、扉もない簡素な部屋から逃げ出そうとしていた。女の両足は麻痺しているように、ピクリとも動かない。彼女はひどく泣いていて、その身体には薄い布で隠し切れない程に、痛ましい暴行や鬱血の跡があった。

「こんな所はもう嫌！」

女は悲しみに喘ぎながら、火のついていない暖炉の前で座り込んでいる少女に話しかけた。

「メローピー、あなたも・・・」

メローピーと呼ばれた少女はゆっくりと振り返った。メローピーのその絶望に打ちひしがれているような顔は、『女が今から何をするつもりなのか』を悟った瞬間、歪んだ笑みに変わった。彼女は歓喜に震えた声で叫んだ。

「役立たずのマイアが逃げるわ！☒兄さん、マイアを捕まえて！☒」

イリスは、最後にメローピーが唇の端から空気のように漏らした言葉の意味を理解する事は出来なかったが、それが良くないものである事だけは分かった。マイアと呼ばれた女の顔が恐怖に引き攣り、先程自分が逃げ出したばかりの部屋を見つめ始めたからだ。やがてそこから、髪に埃がへばり付いた不気味な風貌の男が出て来ると、マイアは恐れおののきながらも鋭く口笛を吹いた。

するとどこからともなく絨毯が飛んできて、マイアを乗せてふわりと浮かんだ。追いつがる男に彼女は絨毯の上から杖を向け、閃光を放った。

☆

眩い光の乱反射が治まった頃、世界はモノクロからセピア色へ変わっていた。——こじんまりとした、清潔感のある部屋の中には様々な種類の植物が垂れ下がり、中央に設置された大きな作業用テーブルの上には、魔法薬の調合に必要な道具が整頓して並べられている。綺麗に磨かれた窓からは、穏やかな田園風景が見えた。暖炉の前にあるロッキングチェアに座り、マイアは幸せそうな顔で膨らんだお腹をさすっている。奥の方のキッチンでは、男が口笛を吹きながら料理を作っていた。

ふと目の前に下がった植物から葉っぱが数枚ばかり、ひらひらと落ちていった。イリスが床に散らばった葉っぱから視線を戻した時、マイアはロッキングチェアではなく、ベッドに伏していた。病に侵されているのか、身体は痩せ、顔色も良くない。弱々しく咳き込んでいる

と、小さな少女が慌てて駆け込み、悲しみの表情を湛えながらベッドの傍に座り込んだ。

「メーティス。愛おしい子」マイアは娘の頬をそつと撫でた。

「私の命が尽きる前に、お前に言っておかなければならない事がある」——その瞬間、世界全体を覆い尽くす程の砂嵐が突然発生し、イリスとダンブルドアを襲った。彼女は思わず目を深く瞑り、その場にしゃがみ込んで横殴りに吹き付ける暴風の衝撃に耐えた。

やがて嵐は去り、イリスがそつと目を開けると、かつてマイアが逃げ出した——あの粗末な造りの家に再び立っていた。私服に身を包んだリドルとメーティスが、マイアに乱暴をした男と対峙している。あの時より年老いたものの、男が放つ不気味な雰囲気は変わらないままだった。男はメーティスを無遠慮に眺め、ニヤツと笑い、唇の端から空気が抜け出るような奇妙な言葉を喋った。——その途端、リドルの目は怒りの感情に熱されて赤く燃え上がり、杖を振り上げ、光線を放った。それは狙い違わず命中し、男は身体中を切り裂かれて、自らが生み出した夥しい量の血の海に溺れ、動かなくなつた。何か靄のようなものがりドルの身体から抜け出て、メーティスの捧げ持つ小さな指輪の中へ吸い込まれていく。

そこでふとりドルがイリスを振り返り、気さくに微笑んだ。

「おや。可愛らしい観客がいるね」

「まあ、本当に」メーティスも笑った。

『違う、これは記憶だ』——イリスは思わずたじたと後ずさりながら、自分に何度も言い聞かせた——『こちらに干渉できる筈がない！』しかし、イリスのその思いを踏みにじるかのように、二人は彼女に近づいて、捕えようとするかのように手を伸ばした。

その瞬間、ダンブルドアがイリスの前に進み出て杖を構えた。杖先から迸る炎の海が、世界を焼き尽くしていく。真つ赤な炎の中に消える寸前、メーティスは「残念<sup>oops</sup>！」と言って微笑んだ。

「記憶の一部が、呪いに侵されておる」

ダンブルドアはイリスと共に、自ら作つた結界の中から、業火の燃え盛る外の世界を眺めながら、静かに口を開いた。

「呪いが全ての記憶を浸食する前に、焼き払わねば」

☆

永遠に続くかと思われた火炎の世界が治まった頃、イリスは立派な造りの屋敷の一室に立っていた。部屋の真ん中には、上質な木材で作られたベビーベッドが設置されており、メーティスがその傍に座って、中ですやすやと眠る赤子を見つめている。

しかしその平和な時間は長く続かなかつた。突如として、凄まじい破壊音と人々の怒鳴り合う声が屋敷内に響き渡る。

「殺せ、レオ・ブラックだ！」サーヴァント 従者の忌まわしい犬「め！」  
「奇襲だ！逃げろ！メーティ……」

レオ・ブラックと呼ばれた男の声は、途中で途切れた。やがて扉を荒々しく蹴り飛ばし、七名の魔法使い達が殺気立った表情で雪崩れ込んで来た。メーティスは生まれたばかりの赤子を守るようにして、ベビーベッドの前に立つ。そして居並ぶ敵の中からダンブルドアを見つけると、美しい目を輝かせ、歌うような声でこう囁いた。

「ねえ、親愛なるダンブルドア先生。貴方は罪もない赤子を殺せるの？」

「黙れ、この——悪魔め！」

ダンブルドアが凍り付いたように動きを止めた一方で、残る魔法使い達はメーティスを蔑む言葉を投げつけ、戦闘を開始した。戦いは熾烈を極め、メーティスは産後の肥立ちの悪い体でありながら、七名の優秀な闇祓いのうち、四名を道連れにして死んだ。生き残った二人の魔法使いは血走った目を、ベビーベッドの中の赤子へ向ける。しかし、それをダンブルドアが阻んだ。

「殺してはならぬ。それでは“死喰い人”共と変わらぬ」

「この子は普通の子じゃない、ゴーンの子だ！生かしておけば、いずれ世の災いとなるぞ！」

「そうはさせぬ。わしが育てる」

「馬鹿を言うな。今に寝首を掻かれるぞ」

記憶の中のダンブルドアは戦友たちの忠告を物ともせず、赤子を抱き上げた。無垢な感情を湛えた瞳が、ダンブルドアを見つめ返す。――

—その行動がメーティスの言葉に影響を受けた為なのか、彼自身の意志なのか、イリスには判断しかねた。ただ、自分の傍で静かにその様子を眺めている現在の彼の様子を見る事は、彼女には**はばか**られた。

☆

「父さん。僕、”怖い夢”を見た」

後ろから幼い声が聴こえて来て、イリスは振り返った。——いつの間にか、世界は彩りに満ちていた。少年は淡い褐色の瞳を翳らせ、枕をギュツと抱えて、書齋で書き物をしているダンブルドアに話しかけている。

「母さんが怖い顔をして言うんだ。『ヴォルデモートに従うために僕は生まれてきた。従わないと役立たずだから死ぬんだ』って」

メーティスが夢を通して我が子に与えたのは”愛情”ではなく”死に至る呪い”だった。席を立ち、少年の前にしゃがみ込むダンブルドアを仰ぎ見て、彼は小さな声で言った。

「僕、ヴォルデモートのところへ行かなくちゃ」

「ネーレウス」ダンブルドアは静かに少年の名前を呼んだ。

「それはきみの意志か？」

ネーレウスと呼ばれた少年は暫く黙りこくった後、首を横に振った。ダンブルドアは小さな肩に手を置き、揺るぎない声で言い聞かせた。

「きみがどう生きるのか。それはきみの母でも、ヴォルデモートでも、わしでもない。他の誰が決めるのではなく、きみ自身が決めるのじゃ」

「僕が決めていいの？」

ネーレウスが素直に尋ねると、ダンブルドアは微笑みながら頷いた。ネーレウスは枕を強く抱き締め、恥ずかしそうに耳を真っ赤にしながら呟いた。

「僕、父さんが好き。父さんと一緒にいたい」

ダンブルドアはギュツと強くネーレウスを抱き締めた。

☆

不意に耳をつんざくような悲鳴が響き渡り、イリスは声のした方向

へ駆け出した。お父さんの声だ。ダンブルドアが少年を抱き締めて  
いる書斎の、向かいの部屋から聴こえて来る。彼女は躊躇う事なく扉  
を開けた。

——部屋の中は、地獄のような有様だった。闇の帝王を敵とみなし  
た事で、ネーレウスの呪いが増大したのだ。ダンブルドアの目の前  
で、少年の体から黒い液体状の禍禍しい魔法力が放出され、彼自身を  
傷つけていく。

「父さん、苦しいよ！助けて！」

ネーレウスは血を吐き、泣き叫んだ。ダンブルドアがすぐさま“失  
神呪文”で眠らせると、黒い魔法力はじわじわと彼の肌に染み込むよ  
うにして消えていった。小さな傷だらけの体を抱き締めて、ダンブル  
ドアは茫然としたまま動く事が出来なかった。

☆

「ニユート、きみの書物で”オブスキュラスを魔法の泡で閉じ込める  
ことができた”と……」

丹念な手当てを受け、ベッドの上で穏やかに眠るネーレウスを見つ  
めながら、ダンブルドアは並び立つ老齢の魔法使いに話しかけた。し  
かしニユートと呼ばれた魔法使いは、力なく首を横に振るばかりだっ  
た。

「アルバス。あれは”宿主が死んだ後”の事だ。宿主がまだ生きてい  
る状態ではどうする事も出来ない。しかもこの子の場合は、オブス  
キュラスと構造自体は非常に良く似ているが、呪いを組み込まれた人  
工物……つまり全くの別物だ」

ニユートは静かに唇を引き結ぶダンブルドアの肩に手を置いた。

「君に友人として忠告しておく。この子は君の手に負える存在ではな  
い。魚は陸の上では生きられない。あるべき場所へ帰すべきだ」

☆

俄かに弾けるような熱気が立ち込め、気が付くとイリスは懐かしい  
ホグワーツ魔法魔術学校の大広間に立っていた。——厳正なる組分  
けの結果、ネーレウスはスリザリン生になった。周囲から注がれる畏  
怖の視線を物ともせず、友好の手を差し伸べたルシウス・マルフォイ

と特に親しくなり、ネーレウスは寂しいばかりの学生生活にやっと拠り所を見つける事が出来た。

ルシウスは人望に厚く勉学に秀でていっただけでなく、“闇の魔術”に関する造詣も非常に深かった。ネーレウスは純粹な知的好奇心に駆られ、その世界へ足を踏み込んだ。“決してダンブルドアが教えてくれない世界”——そこは、善悪の区別がない無限の可能性に満ちていた。厳しく難解である筈のその場所で、呪いを制御する方法を編み出し、まるで水を得た魚のように自在に泳ぎ回るネーレウスを見初め、食指を伸ばす者がいた。

ネーレウスは、いつものように書齋で書き物をしているダンブルドアの所へ向かった。大きな書齋机の上には、血に関する魔法や呪い、古の魔法、オブスキュラスについての書物が山のように積んである。「父さん。僕はヴォルデモートの下へ行く」

ダンブルドアは書物から顔を上げ、じっとネーレウスを見つめた。

「それは君の意志かね」

「そうだ。僕の意志さ」ネーレウスは冷たく吐き捨てた。

「ならば止めはせぬ。行くがよい」

「ああ行くさ。でもただでは行かない。あなたの首を手向けに持つていく」

そう言うや否や、ネーレウスは杖を引き抜いて、その先をダンブルドアに向けた。——しかし、手がぶるぶると震え、焦点を合わせる事が出来ない。ダンブルドアは穏やかな口調で、同じ言葉を繰り返した。

「それも君の意志かね」

「うるさい！黙れ！僕の苦しみなど、何も知らない癖に！」

ネーレウスは激昂し、杖を振るってダンブルドアをその場から引き摺り下ろし、床に引き倒した。そして抵抗せず、されるがままとなっている老人に馬乗りになり、杖をその胸に押し当てた。

「僕を殺してみろ！」ネーレウスは怒鳴った。

「お前のせいで、僕は本当に行きたい所へ行けない！したい事だつて出来ない！どうしてあの時、母さんと一緒に僕を殺さなかった！どう



して……」

ネーレウスは言葉の途中で杖を取り落とし、老いた養父の胸に縋って泣き崩れ、蚊の鳴くような声で囁いた。

「……僕を愛した？」

☆

「ルシウス、僕は“死喰い人”にはなれない」

親友が放った突然の“決別の言葉”に、ルシウスは驚いて目を見開いた。

「そんな。まさかダンブルドアに“破れぬ誓い”を……」

「違う」ネーレウスは首を横に振り、微笑んだ。

「そんなものよりずっと強く抗えないものだ。……僕は、父さんを愛している」

「そんなものはまやかしだ！」

ルシウスは激昂し、ネーレウスの肩を掴んで揺さぶった。

「目を覚ませ、ネーレウス。あいつは聞こえの良い言葉や態度で、君を懐柔しているだけだ。君の生きるべき場所はこちら側だ。今ならまだ間に合う！あのお方も君を哀れんでいらつしやる。このままでは君は、自分の呪いに食われて死ぬぞ！」

「母さんは僕に“愛情”ではなく“呪い”を与えた」ネーレウスは静かに応えた。

「ヴォルデモートは僕に、今までの悪行に対する償いとして“ダンブルドアの殺害”を命じた。そんな場所で長く生かされるより、例えばほんの僅かな間でも、僕は暖かく安らかな場所で生きてゆきたい」

「愛のために君は死ぬと言うのか！」

ネーレウスは何も言い返さなかった。ルシウスは友人の決心が固く揺るがない事を思い知り、彼の肩から力なく手を下ろし、その場に崩れ落ちた。

「頼む、ルシウス。君はとても良い友達だった。傷つけたくない」

そう言って背を向けたネーレウスに向けて、ルシウスは灰色の目に涙を湛え、歯を食い縛りながら“服従の呪文”を唱えた。ネーレウスが振り向き様に放った呪文とぶつかり合い、周囲は一際明るく輝い

た。

☆

眩しくて瞑っていた瞼をそろそろと開くと、辺りの景色は鬱屈とした森の中へ変わっていた。以前に何度か立ち入った事のあるイリスは、ここが何処かすぐに分かった。——禁じられた森だ。

樹齢何千年の檜の古木が複雑に絡まり合い、生い茂った枝葉の隙間から差し込む陽光が、前方にある小さな泉を照らしている。泉のほとりにはネーレウスがいた。イリスはそつと近寄って、父の隣にしゃがみ込んだ。ネーレウスは杖を足元に放り出し、座り込んで、ぼんやりと澄んだ水面を見つめている。

後方で草を踏み締める静かな音がして、イリスは振り向き、驚いて目を丸くした。——エルサ、自分のお母さんだ。スリザリンの制服に身を包んだその姿は、イリスが大好きなイオおばさんに良く似ていた。エルサは迷いのない足取りでネーレウスの傍までやって来ると、彼の隣（イリスの反対側だ）にそつと座った。ネーレウスは水面からエルサへ視線を移し、軽く笑った。

「やあ。君は確か、エルサ・イズモだね」

「ええ」エルサはネーレウスを見つめ、儂げな微笑を浮かべた。

「あなたと同学年よ。同じ寮生でもあるわ」

イリスは若き両親の様子をじつと見守っていた。どうやら二人はこの時まで、面識は殆どなかったようだった。ネーレウスは傍らに転がした自分の杖を取り、訝しげな口調で呟いた。

「可笑しいな。〃人避けの呪文〃を重ね掛けた筈なんだけど」

「私は人じゃないわ。動物だもの」エルサはクスクス笑った。

「〃動物避けの呪文〃も掛けたよ。〃敵避けの呪文〃もね」ネーレウスは納得がいけないと言わんばかりの口調だ。

「この泉に来る時は誰にも邪魔されたくないから、ありとあらゆる魔法を掛けている。人一人、動物一匹足りとも、この場所を認知する事すら出来ない筈だ。……だけど君はやって来た。一体どうやって?」

ネーレウスの警戒した眼差しを受けても、彼の杖先が自分へ向けられていても、エルサは動揺する素振りすら見せず、静かに微笑んだま

まだだった。彼女の青い瞳は曇り一つなく澄んでいて、まるで世界の全てを見通しているかのように静謐な輝きを放っている。ネーレウスは暫くの間、魅入られたように彼女を見つめていたが、やがて杖を放り出し、泉へ視線を戻した。

「僕が心を覗けない学生は、君が初めてだよ」ネーレウスが皮肉混じりに笑った。

「怯えないで。私はあなたの敵じゃない」エルサは静かに応えた。

「あなたはここへ来て、一人で何をしているの？」

「考え事さ。誰にも邪魔されずに思案したい事が、僕には山ほどあるからね」

ネーレウスは一旦そこで言葉を区切り、暫くしてから口を開いた。

「今日、大切な友達を失った。まるで兄のように慕っていた人だった。僕は本当は・・・彼と共に生き、同じ道を歩みたかった。だけど、それは僕の父を裏切る行為だ。」

結局、僕は父を選んで友達を捨てた。何かを得るには何かを捨てるなければならない”。分かつてはいる事だけど、とても苦しくて寂しいよ」

エルサはそつとネーレウスの肩に手を置いた。彼女の方を向いた青年の目から、一筋の涙が頬を伝い落ちていく。

“友達を捨てた”なんて言わないで”エルサは優しく言った。

「あなたと彼の友情はそんなことで終わったりしない。たとえもう会えなくとも、魂の絆で繋がっている。」

人も動物も、最初はみんな同じ場所で生まれ、そして同じ場所へ帰っていくわ。苦しく寂しいのは生きている間、ほんの一瞬だけ。最期にはきつとまた彼と会える」

ネーレウスは言葉もなく、継るような目でエルサを見つめた。やがて彼は震える声で尋ねた。

「死ぬ事は怖い？」

「いいえ」エルサは静かに応えた。

「痛みや苦しみもなく、眠るように穏やかで、自由だわ。そしてあなたの愛する人たちが、いつも傍にいる」

その言葉を聴いて、ネーレウスは肩を震わせて泣き始めた。——彼はたった一人で呪いと向き合い、死の恐怖に苛まれていた。イリスは唇を噛み、触れる事の出来ない父の肩へ、そっと手を伸ばした。エルサが娘の気持ちに応えるかのように、自分より一回りも大きな青年をギユツと抱き締め、労しげに頭を撫でる。

「ありがとう」ネーレウスは湿った声で言った。

「少しだけ、気が楽になった」

「良かったわ。私はそのためにここにいるもの」

ネーレウスは思わず吹き出して、身体を離し、エルサを見つめた。淡い褐色の瞳に明るい光が戻っている。

「君は不思議な事を言うんだね。まるで自分のなすべき事が全て分かっているみたいだ」

「ええ、その通りよ」エルサは動じる事なく、微笑んだ。

「私は自分の未来が全て見える。どのように生きて、死を迎えるのか、もう分かっているわ。私は、あなたと出会うために生まれたの」

☆

二人の様子を言葉もなく見つめるイリスの耳に、軽快な音楽が聴こえて来た。その方向へ顔を向けると、周囲の景色は森の中から寂れた酒場へと変わっていた。——漏れ鍋だ。客は、カウンターに赤毛の魔法使いが一人座っているだけで、音楽はそこから聴こえていた。きつとアーサーおじさんだ。イリスの予想は当たった。老年の亭主が顔を顰めながら、彼の事をそう呼んだからだ。

「頼むから、そんな物騒なものをここに持ち込まんでくれ。〃死喰い人〃に見つかったら、この店ごと燃やされちまう」

アーサーはうっとりとして古びたテープレコーダーを見つめていたが、亭主の指摘にハツと我に返り、慌ててレコーダーを弄り始めた。

「すまないね」アーサーは亭主の冷たい視線を一心に浴びながら、必死に言った。

「何しろ最近手に入れたばかりだから、嬉しくって。．．．分かった、すぐに止めるよ。あれ、どうすれば止まるのだったか．．．いや勿論、分かっているさ。頼むから、杖をこちらへ向けないでくれ」

試行錯誤の末、アーサーが弄つたのは音量調整用のつまみだった。音楽は止まるどころか逆に大きくなる始末で、怒りに燃える亭主が今にもテープレコーダーを吹き飛ばそうと杖を振りかざした時、来店者を告げるための店のベルがカランと鳴った。

固まった二人とイリスが恐る恐る戸口を見ると、ネーレウスが立っていた。彼は驚いたと言わんばかりに目を丸く見開き、朗らかな口調で言った。

「その音楽は一体、どこの国のバンドなんだい？とても素敵なお曲だね」  
やつと純粋な興味を示した相手が現れた事に、アーサーは気を良くした様子だった。亭主はネーレウスの顔を見たおとたん、緊張が解けたのか溜息を零して杖先を下ろした。ネーレウスは亭主に軽く挨拶し、アーサーと短い自己紹介を交わしてから、彼の隣に座った。

「この曲は確か、イギリスのバンドだ」  
「イギリス？」ネーレウスは眉を顰めた。

「この国の魔法界の音楽なら、ほとんど聴き尽した筈なんだけど。聴き零しがあつたのかな」

「マグルのバンドだよ」

その言葉に、ネーレウスは衝撃を受けた様子だった。——元々魔法界で生まれ育つた彼にとって、マグル界は馴染みの薄い存在だった。完全な無関心でいる事は出来ないため、必要な時は踏み入るけれど、自分から好んで知ろうとは思わない。だがネーレウスはこの時、音楽を通じて初めてマグル界に興味を持った。彼は好奇心と驚嘆が入り混じった目でテープレコーダーを見つめ、やがて感嘆したように唸った。

「マグルがこんなに素晴らしい音楽を作れるなんて！」

☆

テープレコーダーから流れる曲が切り替わると、記憶の風景も一変した。——魔法省の「マグル製品不正使用取締局」だ。狭苦しい室内には、机が三つ、ぎゅうぎゅうに押し込まれ、そこらじゅうに書類の山やらマグル製品やらが散乱している。その内の一つの窓際の席で、テープレコーダーの奏でる音楽に耳を傾けながら、ネーレウスが古び

た電気ポットを弄っていた。ポットの底には小さな足が生えていて、ネーレウスの拘束を逃れようと激しく暴れている。しかし彼が杖を振ると足はパツと消えて、何の変哲もない電気ポットへと戻った。

「直ったよ。念のため、確認を」

「ありがとう」

アーサーは電気ポットを受け取り、くまなく調べ、やがて感心した口調で「完璧だ」と唸った。

「君のおかげでどれほど仕事が捗っているか。自慢の部下だよ。私には勿体ないほどだ」

「よしてくれ、単にスピードが早いだけさ」ネーレウスはレモンキャンデーの包装紙を解きながら、笑った。

「僕はこの仕事が好きなんだ。大好きな音楽を聴きながらこの窓の景色を見て、マグル製品を弄っていると・・・無心になれる。職場環境も申し分ない。ボスは信頼のおける素晴らしい人だし、先輩も良い人だ。レモンキャンデーも食べ放題だしね」

二人が親しげに笑い合ったその時、突如としてネーレウスが口元を抑えて、身体をくの字に折り曲げた。少しして、彼の体の表面から黒い液体状の禍禍しい魔法力がじわじわと染み出していく。血相を変えて駆けつけようとしたアーサーを片手で押し留め、何とか呪いを体内に押し込めたネーレウスは、噛み砕いたレモンキャンデーの欠片と共に、込み上げてきた血の塊を飲み下した。

☆

雨の降りしきる鬱蒼とした天候の中、ネーレウスは一人の男と対峙していた。男が被っていた銀色の仮面を外した時、イリスは驚いてアツと声を上げた。――スネイプ先生だ。

「セブルス、〃 闇の陣営〃 から手を引け。今ならまだ間に合う。このままでは、君は大切なものを失う事になるぞ」  
「フン、またあの女の狂言か？」

スネイプは冷たくせせら笑い、杖を引き抜いてネーレウスに向け  
た。

「私はお前のような〃 弱虫〃 とは違う。あのお方に心から忠誠を誓っ

ているのだ。お前こそ、自分の立場を自覚してはどうだ？」

その言葉を皮切りに、スネイプと同じように銀色の仮面を被り、漆黒のローブに身を包んだ魔法使い達が大勢現れて、ネーレウスに向けて一斉に光線を放った。強力な防護呪文でそれらを弾き飛ばし、迎撃するための呪文を唱えようとしたネーレウスは、突如として体内から滲み出てきた黒い液体状の霧に自らを攻撃され、杖を取り落して跪いた。そこへ決死の表情を湛えたアーサーが出現し、ネーレウスを連れてその場から消え去った。

☆

気が付くと、イリスは懐かしい出雲神社の境内に立っていた。古めかしい鳥居の下に、ネーレウスとエルサ、そしてイオが立っている。イリスは三人の近くへ歩み寄った。

「イオ、君を」秘密の守り人」に」ネーレウスが静かに言った。

イオはその言葉に応えず、険しい表情でネーレウスを睨み付ける。彼女の腕の中にあるものを見て、イリスは小さく息を飲んだ。——ブランケットに包まれた赤子、きつと過去の自分だ。

「嫌だね！」イオは吐き捨てた。

「頼む。この子を守るためなんだ」

ネーレウスが誠意を持った声でそう言うと、イオは言葉を荒げた。「この子を守るためなんだったら、その」悪い魔法使い」に従えばいいじゃないか！そうしたら、あんたは犬死しなくて済むんだろ？」

「ヴォルデモートは、娘に異常な執着心を抱いている」ネーレウスが歯噛みした。

「それに僕らは余りに抗い過ぎた。許しを乞うたところで、ヴォルデモートは僕らを許さず殺し、娘を自分の玩具にするだけだ。

今までは僕が守り人となって所在地を隠していたが、もうこれ以上は無理だ。僕に残された力は、ほとんどない。イリスには物心つくまで信頼できる人と共に、安全で穏やかな場所で育ててほしいんだ」

イオは納得がいかない様子で、唇を真一文字に引き結び、健やかに眠る小さなイリスを見つめている。やがてイオは二人を見て、懇願するようにまくし立てた。

「わたしたちは、親なしだ。なあ、エルサ。両親のいる他の子供が羨ましくて、”わたしたちもそうだったら”って、話した事が何度もあったよな？」

頼むよ、この子から両親を奪わないでくれ！どうにかならないのか？わたしもそのヴォルデモートって奴に、一緒に謝るよ。どんな罰を受けたっていい。どんな悪事の手伝いだってするさ。この子を一人ぼっちにしないでくれよ」

やがて泣き始めたイオを、エルサは赤子ごと優しく抱き締めた。ネーレウスは沈痛な表情でその様子を見つめている。不意に彼は顔をわずかに背けて、鼻を吸った。口惜しそうに噛み締めた口の端から、震えた声を漏らす。

「すまない、イオ。イリスを頼む」

エルサはそつと体を離れた。露わになったイオの顔は、悲しみの涙でぐしゃぐしゃに汚れている。イオは片手で乱暴に涙を拭くと、忌々しげに叫んだ。

「ああ、分かったさ！どこへでも行っちゃまえよ、子不幸の親め！この子は・・・この子は、わたしが守る。わたしの子だ」

二人は悲哀の表情を湛え、後ろ髪を引かれる思いで何度も振り返りながら、その場を去って行った。二人が遠ざかるほどに、イオの姿は——ネーレウスの記憶の世界から外れていくのか——少しずつ染み出してきた暗闇に覆われていく。やがて完全にその姿が消えてしまいうまで、イリスは彼女の傍から動く事が出来なかった。

「可哀想に・・・可哀想に・・・」

イオは小さな赤子を抱き締め、涙に暮れながら、何度も同じ言葉を繰り返していた。

☆

世界が完全な闇に閉ざされた時、ふと後方から本のページの捲る音がして、イリスは振り向いた。その瞬間、彼女は以前に何度か見た事のある、ダンブルドアの書齋に立っていた。書齋机には、ネーレウスの呪いに関する書物が山のように積み重ねられて、その中に埋もれるようにして、ダンブルドアが書き物をしている。



「父さん」

不意に穏やかな声がして、イリスは戸口の方を見た。ネーレウスが静かに立っていて、愛おしそうな目でダンブルドアを見つめている。「今までありがとう」ネーレウスは微笑んだ。

「僕はヴォルデモートのところへ行くよ」

その言葉を聞いた途端、ダンブルドアは形振り構わずに書き物を放り出し、机を離れてネーレウスの肩を掴んだ。キラキラと光っているブルーの瞳は、今は見る影もなく霞み、目の下には酷い隈がしっかりと刻まれている。――ダンブルドアは、かつてのように落ち着いた様子で「ネーレウス自身の意志か」と尋ねる事はなかった。

「待っておくれ。もう少しなんじゃ」ダンブルドアは懇願した。

「もう少しで、きみの呪いを解く魔法式が完成する。あともう少しで・・・」

「父さん。エイプリルフルはもう終わったよ」ネーレウスは涙を流しながら弱々しく笑った。

「これは僕の意志だ。僕は・・・」父さんの息子として死にたい」ネーレウスは小さい頃のように、ダンブルドアにギュッと抱き着いた。そして「さよなら」と言って体を離し、戸口から出て行った。イリスはその様子を見ている現在のダンブルドアを仰ぎ見る事など出来なかった。その代わりに視線を下ろし、彼の靴を見つけると、そつと傍に近づいて、老いた指先に自分の指を絡めた。やがて節くれだった暖かい手は、イリスの手を優しく握り返した。

☆

深々とした森に張られたテントの中で、ネーレウスは病状に伏していた。痩せ細った身体を周り巻くように、黒い液状の靄が不気味に漂っている。やがてエルサが走り寄り、彼の手を優しく握り締めた。

「あの子の未来を見たわ」

彼女は熱を帯びた声でそう言うと、ネーレウスの瞳をじっと見つめた。やがて生気を失っていた彼の双眸が丸く見開かれ、みずみずしい潤いと優しい光が蘇り――歓喜の涙が幾筋も零れ落ちた。まるで素

晴らしく幸せなストーリーの舞台を観終わったかのように、ネーレウスは感極まったような笑みを浮かべた。

「ああ、エルサ」ネーレウスはしわがれた声で囁いた。

「僕のやってきた事は、間違いではなかった」

二人は互いを見つめ合い、声もなく咽び泣いた。

☆

ネーレウスは最後の力を振り絞り、エルサを伴ってマルフォイ家の屋敷の門を叩いた。数年振りに再会した友人は、見る影もない程にやつれ果てていた。——数日前に最愛の一人息子が、敵に“呪いの道具”を贈られた事で命を落としたのだ。ドラコの亡骸を愛おしそうに抱え、あやし続ける妻の姿を見て、ルシウスは憔悴しきった様子で笑った。

「安心したまえ、今はもう君とやり合う気力すらない。・・・良く来たな。私を嘲笑いに来たのか？それとも殺しに？」

「違う」ネーレウスは労りに満ちた声で応えた。

「お別れを言いに来たんだ、ルシウス」

その言葉は、ルシウスの心をほんの少しだけ正気に戻した。

「待て、早まるな。君まで失ったら・・・」

「僕の命はもう残り少ない。最期に、君にお別れを言いたかった」ネーレウスは穏やかに微笑んだ。

「君に会えて良かった。君になら、安心して娘を任せられる。少し泣き虫過ぎる所が心配だが、とても優しい子なんだ。どうか宜しく頼むよ」

「何を言っている？」ルシウスは困惑している様子だった。

「君の娘を我が家の養子にする事を、君は拒否していたじゃないか」

——その時、ルシウスの耳に信じられないものが聴こえ、彼の思考は真つ白になった。赤子の泣き声だ。ナルシッサがぐしやぐしやに泣き崩れた顔で、ルシウスの胸に縋り付いた。

「あなた——ドラコが——エルサが、この子を生き返らせてくれたー」

『信じられない、息子は死んだ筈だ』——そう突っぱねる理性を押しつけ、ルシウスはナルシッサの腕に抱かれたドラコを食い入るように

見つめた。健やかに息づいている。温かい。生きている。ルシウスは溢れる歓喜の涙を拭いもせず、ネーレウスとエルサを探した。しかし、彼らはもうすでに去った後だった。

☆

イリスは気が付くと、懐かしい出雲家の居間に立っていた。ベビーベッドの中ですやすやと眠る赤子の頬を撫でながら、ネーレウスは静かに話しかける。

「イリス、愛しているよ。」君に寂しい思いをさせて、本当にすまなかった。」

『お父さんは赤ちゃんの私に話しかけているんじゃない』——イリスはその事に気づき、ベビーベッドの前までやって来て、彼と同じ視線までしゃがみ込んだ。『今の私に向けて、話しかけてくれているんだ』——木製の柵越しに、ネーレウスの淡い褐色の瞳が赤子をじっと見つめているのが見える。

「僕は君に、自由を与えたかった。養父が僕に与えてくれたのと同じように。」

——イリス、君は自由だ。“呪い”に怯える必要なんてない。

ヴォルデモートに従う道を選んでも良い。ダンブルドアと共に戦う道を選んでも良い。自分自身で道を切り開いても良い。君の望む道を進むんだ。例え今は辛く険しい道程でも、きっとその先には幸福が待っている」

☆

イリスは“憂いの篩”からゆっくりと顔を上げた。——父の記憶の世界で見た様々な出来事が頭の中で縋交ぜになり、とても複雑な気分だった。しかし、それは決して悪いものではなかった。

お母さんが予知した“私の未来”を見て、お父さんは嬉しそうに笑って泣いていた。『例え今は辛く険しい道程でも、きっとその先には幸福が待っている』——お父さんがくれた言葉を信じて、もう一度頑張ってみよう。いつか素敵な未来を実現出来るように。イリスはテープレコーダーを握り締めて、静かに決意を固めた。やがてスネイプがやって来て、思慮深い眼差しでイリスを見つめた。その姿は、記

憶の中で見た——傲慢で冷たい態度の昔の様子とはまるで違って見えた。

「先生は〃死喰い人〃だったのですか？」

スネイプは先程イリスと目を合わせた時に彼女の心の内を読み取ったのか、驚く様子もなく自分の〃闇の印〃を見せた。

「かつて私はそうだった。あのお方に心酔し、〃闇の魔術〃が持つ魅力に憑りつかれた。君の父は命を賭して私を諫めてくれたが、私は聞き入れなかった。そして——大切なものを失った」

スネイプの昏い色を湛えた瞳の奥が、少しだけキラリと光ったような気がして、イリスは目を凝らした。だがもうその輝きはない。見間違いだっただろうか。

「私には〃呪い〃を消し去る事は出来ない。だが、選んだ道を進む力を与える事は出来る。」

闇の帝王の力はまだ不完全だ。しかしやがては先程のように、君の心身を完全に掌握しようとするだろう。それまでに君は、心を閉じる術と呪いを制御する術を習得しなければならぬ。もし君が望むなら、私は師となってその術を教えよう」

スネイプはそう言って、瘦せた自分の手を差し出した。イリスは迷う事無く、その手を握った。

## Petal 2. クイデイツチ・ワールドカップ

翌々日の朝、イリスはスネイプと共にロンドンの空港へ向かった。広々としたエントランス内は、色取り取りのスーツケースや旅行鞆を下げたマグルの人々で溢れ返っている。そんな中で一人だけ、鞆も何も持たずに落ち着かない様子でウロウロと歩き回っている女性がいる。——イオおばさんだ。イリスは一直線に駆け出して、彼女の胸に飛び込んだ。

「この馬鹿たれが！」

イオはイリスをしつかり抱き留めた後、少女の小さな肩を掴んで体を離し、強い口調で叱った。自分を睨むイオの目は真っ赤に充血していて、肌は病人のように青ざめ、いつもきちんと結い上げている髪はぐしゃぐしゃに乱れていた。——おばさんはこんなボロボロになるほど自分を案じてくれていた。姪を案じる余りにやつれ果てたイオの姿は、イリスが数日前に靄の中で見た“イオの幻”の記憶をくしゃくしゃに丸め、遙か遠くへ放り投げた。

「勝手に家を飛び出して、どれだけ心配かけたと思ってる！みんな必死でお前を探し回ってたんだぞ！もしお前に何かあったら……」

イオはそれ以上言葉を続ける事が出来ず、イリスをギョウツと潰れるほどに抱き締めながら咽び泣いた。イオおばさんの腕の中はとても暖かくて、優しくて、世界中のどこよりも安心できる場所だった。今まで無意識に張っていた緊張の糸がプツリと切れた瞬間、一人ぼっちで空を彷徨った時の記憶がどっと押し寄せて来て、イリスは幼い子供のように泣きじやくりながら、イオにしがみ付いて「ごめんさい」の言葉を繰り返した。

そんな二人の様子を、野次馬の中に紛れて遠巻きに見守っていたスネイプに、イオは涙でぐぐもった声で何度もお礼を言った。スネイプはイオが差し出した御礼の品を慇懃丁寧に断り、二人がチェックインを済ませて搭乗口へ向かうまでの様子をしっかりと見送り、去って行った。

☆

二人は日本へ帰国し、靄の晴れた出雲神社へ帰り着いた。二人が境界を抜け、鳥居をくぐり、手水舎で手を清めていると、後方から懐かしい羽ばたきの音が聴こえてきて、イリスは急いで振り返った。

《イリスちゃん！おかえりなさい！》

フクロウのサクラだ。イリスはまたサクラとお話してできるようになった事が嬉しくて、明るい歓声を上げながら相棒を腕の中へ迎え入れた。どうやらスネイプ先生が教えてくれた通り、自分の体にあの人が介入した影響で、一時的に会話魔法が使えなくなっていただけらしい。サクラは小さな主人の頬に自分の頬を擦り付けながら、涙混じりの声で必死にさえずった。

《本当に心配したんだから！もうどこにも行かないでね！》

「ごめんね、サクラ」イリスは相棒の健気な愛情を受け、たまらなくなつて涙に滲む声で囁いた。

「心配かけて、ホントにごめんなさい」

そうして二人と一羽は拝殿へ赴き、イリスが無事に帰つて来れた事を神様に感謝した。やがてイリスは参拝を終えたが、イオは依然として目を瞑つたまま、一心に祈りを捧げ続けている。そのひたむきな姿を見て、イリスは体の内側からふつふつと力が湧いてくるのが感じられた。——『このままじゃ駄目だ』、ギュツと両手を握り締めながら彼女は思った。『おばさんに心配をかけてばかりじゃダメ。もつと強くないと』

イリスが決意を新たにしている間にイオの祈りは終わり、二人は拝殿を出て住所の玄関前までやって来た。扉を開けたとたん、黒電話のジリジリと鳴る音が二人の耳に飛び込んで来て、イリスは慌てて居間に駆け込み、受話器を手に取った。

「もしもし、出雲・・・」

「イリス!!」

——ハーマイオニーの声だ。彼女が余りにも大きな声で叫んだので、イリスは耳がキーンとなり、目を白黒させながらも踏ん張った。イリスの声を聴いて張り詰めた糸が切れたのか、ハーマイオニーは泣き出しながらも親友の無事を心から喜んでくれた。

「無事だったのね！ああ、本当に良かった！パパ、ママ！イリスが帰って来たわ！」

大好きな親友の声は、イリスの心を暖かくて安らかな気持ちでいっぱいになり、満たしてくれた。そんな幸福な感情と、友を不安にさせてしまったという罪悪感とが綱交ぜになり、イリスは喉に込み上げてくる熱いものと戦いながら、心からの謝罪の言葉を送り、改めて二人で無事を喜んだ。受話器を置いた数秒後、また電話が鳴った。イリスは受話器を取り、自分の家の名を名乗るか名乗らないかの内に、また親友の叫び声が聴こえた。

「イリス!!」

ハリーだ。まるで全力疾走をしてきたかのように、激しく喘いでいる。受話器のすぐ近くで、ロンが慌てて父とシリウスを呼ぶ声はつきり聴こえた。二人はそれぞれの親に伴われ、同じ場所にいるようだった。やがて誰かが話しながら慌しく駆け寄ってきて、受話器からガサゴソという音がした。

「無事で本当に良かった。少し待ってくれ」シリウスの声だ。深く安堵した様子だった。シリウスが一旦言葉を区切ると、ガサガサという音が再び生まれ、今度は素朴で懐かしい声があった。

「イリス」アーサーだ。陽だまりのように暖かな声は、涙に濡れてくぐもっていた。

「先程、スネイプ先生からフクロウ便が来たよ。…本当に良かった。君に何かあったらと心配でたまらなかった。また私の家に来た時、今回の話を聞かせてくれ。」

疲れただろうから、今日はゆっくりと休みなさい。おばさんに代わってくれるかい？」

イリスは沢山の人々の愛情と心配を受けて、溢れてくる涙を拭いながら、イオに受話器を渡した。彼女は小さな姪の頭をポンと優しく叩いてタオルを渡し、アーサーと話をし始める。柔らかなタオルからはイオが良く使っている柔軟剤の香りがした。イリスの心はますますフニャフニャに和らぎ、イオがキッチンで料理をし始めた様子をぼんやり眺めている内に、ダイニングテーブルでそのまま寝入ってしまう

た。

やがてイリスはそつと起こされて、目が覚めた。テーブルにはイオが腕によりをかけた日本料理の数々が、所狭しと並んでいる。どれも自分の好きなものばかりだ。二人は揃って手を合わせ、遅いディナーを摂り始めた。美味しいご飯は、イリスの体に栄養と大切な話を話す勇気を注ぎ込んでくれた。——今までの出来事をおばさんに報告しなくちゃ。彼女はだし巻きを飲み込むと、“塔の夢”を見たあと、気が付くと神社の外にいた事——靄の中で“イオの幻”に襲われ、空飛ぶ絨毯に助けられた事——スネイプの家で聞いた、祖母が遺した呪いの事——闇の帝王に心身を掌握されかけた事——“憂いの篩”で見た、父の記憶の事などを、イオに全て話して聴かせた。

「おばさん。私、自分にできることを精一杯やってみる」イリスは迷いのない声で言った。

「お父さんがくれた言葉を信じるよ」

イオは真剣な眼差しで、話の腰を折る事なく、時折相槌を交えながら聞いてくれた。そしてイリスの決意を受け、優しい声でこう言った。

「お前の思う道を進んだら良い。いつだって、わたしはお前の味方だよ」

イオはありつたけの愛情を込めて、イリスをギュウツと抱き締めた。——イリスは今なら守護霊を百匹も出せるのではないかと思う位、とても幸せな気分になった。素直に甘える少女の額にキスをして、イオは歯を磨いて寝るようにと言う。デザートデザートの杏仁豆腐をかき込んでから洗面台に向かったイリスを見送ると、イオはキッチンキッチンのシンクシンクによろよると歩み寄り、今まで食べたものを全て吐き戻した。

——冗談冗談じゃない。イオはブルブルと震える両手で何とかシンクの端を掴み、倒れないようにしがみ付きながら思った。たった一晚の夢で、姪の体は“闇の帝王に忠誠を尽すための存在”へと変わってしまった。あの子はもう自由に生きられない。闇の帝王に仇名すと呪いは増大し、放たれた呪いが彼女自身を攻撃するからだ。

何故こんな大切な事を、私に誰も教えなかった？イオの心を激しい



怒りの感情が駆け巡り、炎のように熱い涙が頬を伝い落ちていく。ネーレウス、エルサ、ダンブルドア、アーサー、今まで自分が信じていた人達は、イリスの呪いの事を知っていたんだ。なのにその事を隠し、代わりに“イリスをホグワーツへ行かせるように”と何度も言い聞かせた。だが結局、ホグワーツへ行つて何が起きた？あの学校へ行く度にイリスは恐ろしい目に遭い、学年を一つ上げる度にその内容は凄惨さを増していく。拳句の果てに、闇の帝王に従わなければいつ死ぬかも分からない、おぞましい呪いを植え付けられた。

『お父さんがくれた言葉を信じるよ』

イリスの健気な笑顔と言葉がふつと頭をよぎり、イオはへなへなと力なく床に座り込みながら、深い失意の感情に溺れ、泣き崩れた。――ネーレウス達は、あんな素直で感じやすい子に『呪いに抗いながら生きる』と言うのか。いつ死ぬかも分からない恐怖と戦い、呪いに体を冒され、血反吐を吐きながら、それでも生きろと。そして私はあの子の意志に従い、黙つてその様子を見守つていろと。ネーレウスは自らの記憶を通して、イリスに『君は自由だ』と言った。『呪いに怯える必要なんてない』とも。――自由だと？イオは唇の端から唾液が垂れ落ちるのも構わず、正気を失つた顔でうつつすら笑った。自由に物事を考え、闇の帝王と戦う道を選んだら、あの子は死ぬ。よくもそんな残酷な事を言えたもんだ！イオは血走つた目で床を睨み付け、掌に血が滲むほど強く握り締めた。お前があの子に遺した呪いだろうが！

――ネーレウスとイオの間には、イリスに対する考え方において、一つの大きな違いがあった。ネーレウスはイリスを娘として深く愛していたが、同時に“自分と同じ過酷な運命を背負った、一人前の立派な魔女”だとも考えていた。しかし育て親であるイオにとつては、イリスは愛する娘以外の何者でもない。今まで信じていた人々への信頼が、ボロボロと腐り落ちていく。イオは床に這いつくばりながら、無力な自分を呪い、ダンブルドア達を恨み、神様に救いを求めた。

「助けてくれ」イオは呻いた。

「誰か、あの子を助けてくれ」

その時、ズボンのポケットから何か白いものがするりと抜け出して、イオの視界の端で止まった。まるで神様が救いの使いを出してくれたような気がして、イオは藁にもすがる思いでそれを手に取った。——それは、上質な羊皮紙で作られた一通の手紙だった。金箔混じりの封蝋にはマルフォイ家の指輪印章シグネットリングが捺されていた。

☆

それから休暇の日々は何事もなく流れていった。イリスはハリー達に手紙を書いたり、宿題をしたり、カセットレコーダーから流れる音楽を聴いたりして過ごした。ある日、イリスが魔法薬調合用の鍋を熱心に磨いていると、黒電話がジリリと鳴った。立ち上がって受話器を取り、耳に押し当てる。

「もしもし、出雲です」

「コンニーチハ。ヴォーク、ロン・ウィーズリー、デース」

出し抜けにロンのヘタクソな日本語が飛び込んできて、イリスはたまらず笑い転げてしまった。つられてロンも吹き出しながら、いつもの砕けた英語に戻って話し始める。

「何だよ、フレッドは、ネイティブさながらの発音だ」って褒めてくれたのに。(イリスはますます笑った)

ねえ、早めにイギリスこっちへ来れる？イリス喜べよ・・・悲願の僕ん家に泊まってから行くんだ。ホラ、前に言ってたクイディッチ・ワールドカップだよ。僕らだけじゃない、ハリーとハーマイオニーも一緒だ！

「行くー」イリスは即決した。

ロンは明るい歓声を上げた。すると受話器の向こうでガサゴソと音がして、懐かしい声が出た。——アーサーだ。

「やあ、イリス。おばさんに代わってくれないか？私から話をしよう」イリスはイオを呼んで、受話器を渡した。イオはアーサーと何かを話し込んでいたが、やがて電話を切り、鍋磨きを早めに終わらせて出発の準備をするようにと優しい口調で言った。いつもの仲良し三人組に会える事がたまらなく嬉しくて、イリスは軽やかにスキップしながら、使い込まれた黒鍋の下へ向かった。

☆

イリスはイオと共に空港に向かい、イギリスの魔法族御用達パブ・漏れ鍋へ到着した。暗くて古めかしい店内では、モリー夫人とハーマイオニーがイリス達を待っていた。ハーマイオニーはイリスを見たとなん、華やかな笑顔をパツと浮かべて、一回りも小さなイリスを包み込むように優しく抱き締めた。モリー夫人も愛情溢れる眼差しでイリスを見つめ、熱烈なほっぺキス&ハグをしてくれた。イオとモリー夫人が連れ立ってカウンターへ向かう様子を眺めながら、イリスは和やかな気持ちで口を開いた。

「迎えに来てくれて、ありがとう」

「どういたしまして。でもそれだけじゃないのよ」

ハーマイオニーは、可笑しくつてたまらないと言わんばかりにクスクス笑った。その言葉の意図が分からず、首を傾げるばかりのイリスを引き連れて、ハーマイオニーはダイアゴン横丁へやって来た。彼女は真っ直ぐにお洒落なブティック、“グラドラグス魔法ファッション店”へ向かっていく。店内は色取り取りのパーティードレスやドレスローブでぎっしりだった。

「余り時間はないんだけど」ハーマイオニーは腕時計を確認してきびきびと言った。

「貴方と私のドレスを選ばなくちゃ」

「ドレス？」

イリスが思わず呆気に取られておうむがえ鸚鵡返しすると、ハーマイオニーは呆れ顔のため息を零した。

「貴方だったら！四年生の学用品必要リストに書いてあったでしょ？どうして必要なかは分からないけど、どうせなら素敵なのを選びたいじゃない？」

そうして二人はドレスを選び始めた。タイミングの良い事に、同じ寮生で友人のラベンダーとパーバティもやって来て、四人は団子のようにくっついて他愛無い世間話に花を咲かせた。

ふと、イリスは目の前のドレスローブが気になって、自分の傍に引き寄せた。——濃紺色でシンプルなデザインのものだ。それは、かつ

て彼女が一年生の時に出席した“マルフォイ家のパーティー”で着たドレスローブと、少しだけ雰囲気が似ていた。懐かしく切ない思い出が、心の表面を焦がしていく。ラベンダーがそのドレスを取り上げ、しげしげと眺めた。

「あなたに似合うと思うわ」ラベンダーがドレスをイリスにあてがいつながら言った。

「でも、ちょっと地味過ぎない？」パーバティが眉を寄せながら唸る。「華やかなデザインのアクセサリーを付けるのはどう？ブレスレットとかネックレスとか」ハーマイオニーがまとめた。

その後、あーでもないこーでもないと言いつつ、四人はそれぞれに合うドレスとアクセサリー類を購入した。ラベンダーにお茶を誘われたが、用事があるため丁重に断って二人は漏れ鍋へ戻り、一旦帰国するイオと別れを告げ、漏れ鍋の古暖炉を借りて、モリー夫人と共にロンの家——“隠れ穴”へ向かった。

「やあ、イリス。久しぶりだね」

高速回転を何とかやり過ぎて、そろそろと目を開けると、頭の上からハリーの声がした。イリスは急いで顔を上げ、そして言葉を失った。——背が高く、がっしりした体格のハンサムな男の子が、自分に笑いかけている。この人は一体誰だろう。彼女は困惑して声も出せず、しばらく目の前の少年を見つめた。優しい緑色の目に、古びた銀縁の丸眼鏡——信じられない、ハリーだ！

「は、ハリーなの？」イリスはびっくりして呟いた。

「良かったな、ハリー」ロンがニヤニヤ笑いながら痛烈に言い放った。「二時間も髪をこねくり回してた甲斐があつたじゃないか！」

「黙れよ」ハリーが顔を赤らめて吐き捨てた。

たった数週間、愛情と栄養をたっぷり与えるだけで、人はこんなにも変わるものなのだろうか。イリスはしみじみと感じ入り、ハリーを眺めた。——少し青白く痩せ気味だった体は、しっかりと筋肉が付き背も伸びて、健康的に引き締まっている。衣服や靴も、彼の身の丈に合ったお洒落なデザインのものに変わっている。クシヤクシヤの黒髪は整髪料を使って小粋な感じにまとめられていた。トレードマー

クである丸眼鏡も若々しい格好に不思議とマッチして、彼の大人びた魅力をより際立たせていた。

「ハリー、すごく素敵になったね。カッコいいよ！」イリスは素直に賞賛した。

「ありがとう」

ハリーは口籠りながら、イリスを助け起こした。その時、彼の体から爽やかな香りがした。きつと香水を振ったのだろう。しばらく見ない間に、すっかり洗練されたハリーに感心しながら、ふと視線を感じて前方を見ると（後ろの方で「あら、ハリー！」とハーマイオニーの仰天する声が聴こえた）、洗い込まれた白木のテーブルに、ロンとジョージが座っていて、他にもイリスの知らない赤毛の男性が二人座っていた。二人はそれぞれ、ビルとチャーリー、ウィーズリー家の長男と次男だと紹介してくれた。チャーリーはがっしりとした筋肉隆々な体躯で、ルーマニアでドラゴン関係の仕事をしている。ビルは魔法銀行のグリーンゴッツに勤めているが、職場の雰囲気はそぐわないようなワイルドで格好良い服装をしていて、それが良く似合っていた。背が高く、長く伸ばした髪をポニーテールにし、片耳に牙のようなイヤリングを付けている。

イリスはテーブルの端つこに腰掛けて、興味深そうに周りを見渡した。ずっと遊びに行きたいと願っていたロンの家は、木々のぬくもりと賑やかな生活感がぎっしり詰まった、とても魅力的な場所だった。

——暖炉の上には『自家製魔法バターの作り方』、『デザートを作る素敵な呪文』、『一分間でご馳走を——まさに魔法だ！』、『ホームパーティー編』などといった料理に関する不思議な本が、うず高く積み重ねられている。キッチンの流しに置かれたラジオからは、放送が聴こえて来た。人気歌手のセレスティナ・ワーベックなる人物をゲストに迎え入れるというような事を、ラジオパーソナリテイの魔女が興奮した様子で説明している。

ロンが紅茶の入ったポットとマグカップを持って来てくれたので、みんなでティータイムの準備をしていると、ポンと小さな音が二つして、テーブルの近くにアーサーとシリウスが現れた。ダイアゴン横丁

で購入したのだろう、両手にどっさり大きな荷物を抱えている。シリウスはますます健康的になり、ハンサムに磨きが掛かった様子だった。今のハリーとシリウスは、どこことなく雰囲気似通っているように感じられた。

アーサーはイリスを見ると、お茶を飲みながら少し話をしようと言つて庭先へ連れ出した。――外から見る“隠れ穴”もとても面白かった。大きな石造りの家からニョキニョキといくつもの部屋が芽を出し、それらは出来損ないのトーテムポールみたいに、くねくねと曲がりながら連なつて建っている。きつと魔法で支えているに違いない、とイリスは思った。赤い屋根に煙突が数本、ちよこんと乗っかっている。広々とした庭じゆうを駆け回る鶏と、我が物顔で花壇を占領する庭小人を避け、伸び放題の芝生に腰掛けると、イリスはアーサーに全てを話して聴かせた。アーサーは目頭を押さえながら、イリスの差し出したテープレコーダーをじつと見つめ、しばらく何も言わなかった。

「君のお父さんは本当に勇敢な人だった。私の誇りだ」アーサーは静かに口を開き、優しく微笑んでイリスを見つめた。

「イリス。君は強い。きつと呪いを克服し、ご両親の見た“素晴らしい未来”を実現できるだろう」

――私が強い？アーサーの口から飛び出した思いも寄らぬ言葉に驚き、イリスは紅茶にむせ返りながらも、慌てて首を横に振った。

「私、強くなつてないです。力もないし、泣き虫なもの」

「イリス。腕つぶしの強さや魔法力の豊富さ、精神の強靱さが、人としての強さを示すのではないよ。本当の強さとは、他人の弱さを受け入れて許し、心に寄り添えることだ」

イリスは言葉もなく、しんとなつて聴き入った。アーサーはテープレコーダーを彼女の手に握らせると、熱意の籠もった声で話し続けた。

「誰にだって出来ることじゃない。だが、君はやり遂げた。そして無実の男を地獄から救い出し、悪人を見事に改心させた。これは、世界中のどんなに素晴らしい魔法使いや魔女でも・・・そう、ダンブルド

アでさえもできなかつた事だ。君はたった一人で、この世界を良い方向へ変えたんだ」

アーサーの言った事を呑み込むのに、多くの時間が必要だった。――私が、ダンブルドア先生ですらできない事をやってみせた？世界を良い方向に変えたなんて、大袈裟だ。私はただ、周りの人々に助けってもらいながら、ジタバタしていただけだったのに。イリスは心臓がとでもむず痒くなって、もじもじとしながらアーサーに言い返した。

「アーサーさん。世界が良い方向に変わったとするなら、それは私を助けてくれた皆のおかげです。私は皆に守られながら、泣いてただけだもの」

アーサーはその言葉に反論することなく、優しく微笑んだだけだった。やがて二人は立ち上がり、花壇からモリー夫人が料理に使うためのハーブを沢山摘み取って、家の中へ戻った。

☆

イリスがキッチンのシンクでマグカップを洗っていると、ジニーがひよっこり顔を出した。燃えるような赤毛に鳶色の瞳が特徴的な、可愛らしい女の子だ。しかし彼女はイリスを見つけた途端、すつと目を逸らした。イリスが三年生の時に起きた“ロックハート事件”以降、ジニーとの仲はずつと冷戦状態だった。

「久しぶり、ジニー」イリスは遠慮がちに言った。

「ハイ」ジニーは短く答えて、ジョージの傍にすくと座った。

気を利かせたハーマイオニーの合図で、四人はキッチンを抜け出し、狭い廊下を通って、グラグラする階段を上の方へジグザグ昇っていった。小さな踊り場をいくつも通り過ぎて、やがて一行はペンキの剥げかけたドアに辿り着いた。小さな看板が掛かり『ロンの部屋』と書いてある。こじんまりとした室内は、ほとんど何もかもが――ベツドカバー、壁、天井に至るまで――燃えるようなオレンジ色で統一されていた。まるで暖炉の中に入り込んだみたいだ、とイリスは目を見張りながら思った。壁と切妻の天井には、ロンの鼻肩のクイディッチチーム、チャドリー・キャノンズのポスターが貼られ、絵の中で選手が自在に飛び回ったり、手を振ったりしている。窓際の水槽にはとび

きり大きな蛙が一匹入っていた。そしてその部屋じゅうを、かつてホグワーツ特急にいるハリーに手紙を届けた、チビフクロウがブンブンと飛び回っていた。

《僕はロン・ウィーズリーのフクロウです！僕はロン・ウィーズリーのフクロウです！》

「ロンのフクロウだって自慢してるよ」

イリスがそう言うと、ロンは鼻を乱暴に擦りながら、『スキヤバーズの代わりにシリウスがくれたんだ』と嬉しさを隠し切れない声で言った。名前はピッグウィジョン、愛称はピッグと言うらしい。三人は、ロンがペットに対して愛情深い性格である事を知っていたので、ピッグが声高に自慢するのも無理はないと思えた。窓から外を覗くと、庭の中でクルックシャンクスが夢中で庭小人を追いかけて回って遊んでいるのが見える。

——こんなまったりとした空気の中で、数週間前に経験したあの出来事を話すことは、イリスにとって非常に勇気のいる行為だった。彼女が親友達の心配そうな眼差しを一心に受けて、どうすれば彼らが比較的ショックを受けないように上手く話せるのかと考えあぐねていると、ドアが軽くノックされる音がした。ロンが返事をする、ドアが静かに開いた。

「やあ」シリウスだ。五人分のお茶と山盛りのお菓子が載った盆を、片手に乗せている。

「もし良ければ、私も話を聴きたいのだが」

頼りになる大人・シリウスの登場で、重苦しくなり始めた空気は一気に和んだ。イリスはゆっくりと記憶の糸を辿りながら、全てを包み隠さず正直に話した。誰もお茶やお菓子に手を付けようとせず、話に聴き入った。やがて長い話が終わり、彼女は乾いた喉を潤そうと冷めた紅茶を一息に飲み干し、クリーム入りの大粒チョコレートを口に押し込んだ。イリスが「やりきった」という満足感に浸っている一方で、ハリー達は「金縛りの術」に掛けられたかのように、ピクリとも動く事ができないでいた。シリウスは重々しい表情で、何事かを考えている様子だった。



「そんな・・・私・・・」やがてハーマイオニーが口火を切ったが、それ以上言葉を続ける事ができず、蒼白な表情でイリスを見つめるばかりだった。

「私・・・何て言ったら良いか・・・」

「大丈夫だよ」イリスはチョココレートを急いで飲み込むと、取り成した。

「本当にこの先、どうなるか分からないけど・・・お父さんの言葉を信じて頑張ってみる。それに私には、助けてくれる優しい人達が沢山いるもの。スネイプ先生もあの人に抵抗する魔法を教えてくださいるって仰っていたし」

すると、イリスが発した“スネイプ先生”と言う言葉で忘我状態から回復したのか、ハリーとロンが猛反撃を始めた。

「死喰い人」の、スネイプだろ？」ハリーとロンの声がハミングした。

「かつてだよ」イリスは子供に言い聞かせるように優しく言った。

「かつてって言うのは、今はそうじゃないって言うこと」

「だが、その証拠がない」シリウスが静かに口を挟んだ。荒野を生きる狼のように鋭く尖った灰色の目が、冷静にイリスを見つめている。

「イリス、あいつを頼るのは危険だ。ヴォルデモートは（ロンがヒツと叫んで耳を塞いだ、シリウスは気にしなかった）裏切り者を決して許さない。」

“死喰い人”にはヴォルデモートに対する忠誠心なんてない。あののは“自己保身”、ただそれだけだ。奴らは我が身可愛さに平気で嘘を吐く。スネイプが本当に足を洗って反省しているなら、然るべき罰を受ける筈。だが、あいつはそうしなかった。ピーターと変わらな。い。おまけにあいつはルシウス・マルフォイと旧知の仲だと聞いている。

これから何か困った事があれば、スネイプではなく私かアーサーを頼りなさい。いいね？」

イリスは素直に返事をする事ができなかった。——シリウスが自分の事を本当に心配してくれているのは、痛いほど伝わって来る。だ

がそれ以上に、イリスはスネイプを心から信頼していた。三年間の学生生活で築き上げられた二人の絆は、シリウスの言葉一つで壊れるほど柔なものではなかった。イリスが毅然とした態度で言い返そうとしたその時、扉をノックする音が聴こえた。扉の向こうから、ジニーの遠慮がちな声がした。

「皆降りて来て。ママが食事の用意が出来てるって」

☆

ビルとチャーリーが杖を振るって庭に大きなテーブルを二つ並べ、白いテーブルクロスを掛けた。七時になり、モリー夫人の腕に寄りかかっていたご馳走が幾皿も並べられ、ウィーズリー家の人々とシリウス、ハリー、イリス、ハーマイオニーが食卓についた。イリスは燻製されたチキンハムとポテトサラダをお皿に盛りながら、パーシーとアーサーの話をぼんやり聞き流していた。

パーシーは魔法省の“国際魔法協力部”に就職していて、自分のボスであるクラウチ氏がどれだけ素晴らしい人であるか（ロンがイリスに『この二人、その内婚約発表するぜ』と耳打ちしたので、イリスは飲んでいたかぼちやジュースを吹き出した）と言う事を力説し、それに比べて“魔法ゲーム・スポーツ部”のルード・バグマンという男は不甲斐ない人物で、部下であるバーサ・ジョーキンスという魔女が休暇でアルバニアへ行った切り、一ヶ月も行方不明なのに野放しにしている事を嘆いていた。

「私もバーサが心配だ」シリウスはチキンを大きく齧りながら唸った。「バグマンはバーサを忘れっぽくぼんやりした人物だと評していたが、私の知る彼女はその逆だ。ゴシップとなると素晴らしい記憶力を誇っていた。いつ口を閉じるべきかを知らない女で、そのせいで良くトラブルに巻き込まれていた。だからこそ、バグマンが長い間探そうともしなかつたのだろうか・・・」

「私もルードに言及したのだが」アーサーが落胆のため息を零しながら言った。

「彼女は前にも何度かなくなった事がある」と言っただけで一向に動かない。ルードは楽観的と言うか、ある種ルーズな所がある。彼女に万が

一の事があれば、一体どうするつもりなのだろう」

パーシーは大袈裟に嘆いて見せ、ニワトコの花のワインをグイツと煽った。

「国際魔法協力部」ももう手一杯で、他の部の搜索をする余裕がないんですよ。その後にもう一つ大きな行事を控えているし。ねえ、お父さん？」

パーシーはさも意味ありげな目付きでハリー、イリス、ハーマイオニー、ロンを見て、最後にアーサーを見た。アーサーは困ったように眉を寄せて「ああ」と唸った。シリウスは苦笑しながら葡萄酒をゴブレットに注いでいる。

「あいつー」ロンが呆れたような口調で三人に囁いた。

「パーシーのやつ、僕らに何の行事か聞いてほしくて、就職してからずっとあんな調子なんだ。聞いても教えてくれないくせにさ！どうせ今やってる仕事関係だろ。」厚底鍋展覧会」とか

庭が暗くなってきたので、アーサーが蝋燭を取り出して火を灯し、空中にいくつも浮かべた。デザートは手作りのストロベリー&バナライスクリームだった。皆が食べ終わる頃、夏の虫がテーブルの上を低く舞い、ラベンダーの香りが暖かい空気を満たしていた。それからモリー夫人の合図で、皆協力して夕食の後片付けをし、明日の準備をしつかり済ませ、寝る準備に入った。クイディッチ・ワールドカップ観戦のため、夜明け前に出発するのだ。イリスはハーマイオニー、ジニーと同じ部屋だった。

予定時刻になりモリー夫人に起こされた時、イリスはたった今ベッドに横になったばかりのような気がした。

「寝坊助さんたちー」モリーは呆れた声で言った。

「男の子たちはもう皆起きていますよー！」

イリスはむつくりと起き、半分目を閉じたまま服を着て、サイドテーブルに置いてあったクリームケーキを一口齧りながら何気なく二人の様子を見て、ギョツとした。——二人共、手鏡を見ながら薄く化粧をし、口紅を塗っている。イリスは女の子らしく着飾る事に無頓着で、化粧もした事がなかったため、自分の先に行くこの二人がとて

も大人びて見えた。

「な、何してるの？」

「メイクよ。あなたってそばかすがなくて膚が白いから、必要ないのかもかもしれないけど」

イリスが圧倒されて尋ねると、ジニーがつっけんどんに言い返した。その直後、ジニーは気まずそうに俯き、自分のバッグから小さなものを取り出して、顔を背けたままイリスに突き出した。

「これ、あげる。私には色が合わなかったの。表面を削って使うと良いわ」

「ありがとう、ジニー」

イリスは小さな友の親切に嬉しくなり、お礼を言ってお受け取った。

——パールの入った可愛いピンク色のリップで、小さなクリスタルの練り出し式容器に入っている。早速表面を薄く削り、手鏡を見ながら唇に塗ってみた。

「どうかな。ハーミー」

イリスに喰ってかかるジニーの様子を心配そうに横目で伺っていたハーマイオニーは、イリスを見た途端、絶句して、それから爆笑し始めた。ジニーも涙を流しながら大笑いしている。イリスは訝し気に自分の手鏡を見て、アツと驚きの声を上げた。——彼女は何時の間にか、大きなカナリアに変身していた。

ウイレスリーウィザートウイレス  
「W W W 新商品、カナリア・クリーム大成功だ！」部屋の様子をこっそり見ていたフレッドが、ヒーヒー笑いながら言った。

「さすがだ、食いしん坊イリスよ。誰が置いたかも分からないクリームケーキを躊躇いなく齧るなんて、君くらいのもんだぜ！」ジョージが痛烈に言い放った。

やがて鳥の羽は全て抜け、中から羞恥の余り、耳まで真っ赤に染まったイリスが姿を現した。言葉もなく、フレッドとジョージを憎々しげに睨み付けている。やがて騒ぎを聞きつけたモリー夫人が、悪戯双子をグウの音も出ない程締め上げるまで、皆の笑いは止まらなかった。

☆

クイディッチ・ワールドカップの開催地へは、移動する時間と地点が決められた“移動キー”<sup>ポータル</sup>を使用する事になっていた。何とか身支度を終えた一行は、村に向かって暗く湿っぽい道をひたすら歩いた。静けさを破るのは、自分の足音だけだ。村を通り抜ける頃、ゆっくりと空が白み始めた。ストーツヘッド・ヒルの頂上に辿り着き、“魔法生物規制管理部”に勤めるエイモス・デイゴリーとその息子、ハツフルパフの上級生セドリック・デイゴリーに合流し、皆は押し合いへし合いしながら“移動キー”に集まり、開催地へ向かった。

無事に到着するとデイゴリー親子と別れ、一行は荒涼とした荒れ地を歩き、キャンピング地を目指した。——クイディッチは『シーカーがスニッチを掴むまで』試合は終わらない。試合が何日も続く場合もあるため、宿泊する場所が必要だった。ロバーツというマグルの男性（疑り深い性根が崇つて“忘却術”を何度も受け続けており、ポーツとしていた）の下で受付の手続きを済ませ、指定の場所まで歩いた。アーサーたつての願いで、魔法を使わず手作業で男性用と女性用のテントを設置した後、イリスはハリー達と一緒に水を汲みに出かけた。

水を汲んで戻って来ると、テントの前に焚火が熾されていて、その前にアーサーとシリウスと、見知らぬ男が二人立っていた。一人は鮮やかな黄色と黒の横縞が入ったクイディッチ用の長いローブをしていて、少したるんではいるものの、たくましい体をしている。顔つきは少年のようにあどけない。まるで人間サイズのミツバチのような外見で、とても目立っていた。

もう一方の男はシャキツと背筋を伸ばしており、非の打ち所のない程、立派なスーツとネクタイを着こなしていた。髪も口髭も一部も狂いもなく整えられており、マグルの銀行の総取だと言われても納得出来る程の堂々とした佇まいだ。——二人の男は見事なまでに対照的だった。アーサーはイリス達に気づき、笑顔で二人を紹介した。まずはミツバチのような外見の男性からだ。

「みんな、こちらはルード・バグマン。今回の我々のチケットを取って下さったんだよ」

イリス達がお礼を言うと、バグマンは人好きのする顔で「気

にするない！」と笑った。何だか、憎めない感じのする男だった。その時、ふと強い視線を感じてイリスは顔をそちらへ向けた。スーツを着こなした初老の男が眉を潜め、不愉快そうな表情でこちらを睨んでいる。アーサーはそれに気づく事無く言った。

「こちらはバー……」

「クラウチさん！こんばんは！」

アーサーがバーティ・クラウチの『バ』を言った瞬間、テントの中からパーシーがスニツチのように勢い良く飛び出し、クラウチの前へ飛んで行った。イリスは彼の表情を見る事が出来なくなつた。クラウチはパーシーと二、三、言葉を交わした後、バグマンを伴って“姿くらまし”した。

次の瞬間、様々なお土産をぶら下げた行商人があちこちに“姿現し”したため、『どうしてクラウチさんは、私の事を睨んだのだろうか？』と言うイリスの思考は一旦中断された。シリウスは『四人全員分のお小遣いだ』と言って、ハリーに小袋一杯のガリオン金貨を持たせてくれた。イリス達は思う存分、露店を吟味した。光るロゼット、踊る三つ葉のクローバーがびっしり飾られた緑のトンがり帽子、打ち振ると国家を演奏する両国の国旗……などなど。ハリーが“オムニオキュラー万眼鏡”を、ハーマイオニーがプログラムを、それぞれ人数分買い込んでいる間、ロンはイリスが“百味ポップコーン”（クイディッチ・ワールドカップの限定品だ）を買うのを止めていた。

「やめときなつて！食う暇なんか、絶対ないぜ！」

「じゃあ、帰りがけに買うよ。……それなあに？」

ロンが嬉しそうに掌へ乗せているのは、コレクター用の有名選手の人形だった。ブルガリアの名シーカー、ビクトール・クラムだ。イリスが近寄ってしげしげ眺めると、クラムは猫背のまま、うろろうと落ち着きなく掌の上を歩き回っていた。

クイディッチ・ワールドカップの競技場は、とてつもなく大きかった。この中に大聖堂なら優に十個は収まるに違いない。観客席への階段は深紫色の絨毯が敷かれていた。一行は階段を昇り続け、てっぺんに辿り着いた。そこは“貴賓席”と銘打たれた小さなボックス席

で、観客席の最上階、しかも両サイドにある金色のゴールポストの間に位置している。紫に金箔の椅子が二十席ほど二列に並んでいて、イリス達はみんな前列に並んだ。——文句の付け所のない、素晴らしく良い席だった。競技場そのものから発する神秘的な金色の光にじつと魅入っていると、トン、と誰かに後ろから軽くぶつかられたような気がして、イリスは振り向いた。

「いけません——いけません——お手をお出しに——なられては！」

——後列の奥から二番目の席に、一匹の屋敷しもべ妖精がいた。妖精は甲高くか細い声で何事かを呟き、バタバタと両手足を暴れさせ、不思議な事に椅子よりちよっぴり浮いていた。やがてすぐに重力に従い、ストンと座った。イリスの視線の先を辿ったハリーが「ドビー？」と出し抜けに問いかけると、その妖精はふつと顔を上げた。

屋敷しもべ妖精は、自分はドビーではなく、クラウチ家に仕えるウインキーである事、ドビーは友人だが、ハリーの助けを借りて自由になった事で有頂天になり、雇い先に休暇と給金を要求し始めたために一向に仕事が見つからないのだと嘆いていた。ハリーは屋敷しもべ妖精が無給無休で働かなければならない事に衝撃を受け、ハーマイオニーは『奴隷労働だ』と憤懣やる方ない様子だったが、イリスはそれどころではなかった。——ファッジ魔法大臣がマルフォイ親子を連れて上がって来たからだ。

イリスのマルフォイ家に対する思いは、色々な事象が重なり、最早複雑極まりないものとなっていた。しかしそれでもイリスはドラコがとても大切だし、ナルシッサが与えてくれた“母のような優しさ”を忘れる事も出来ないし、ルシウスを憎み切る事だつて出来なかった。結局、今のイリスが出来る事と言えば、彼らの視界に入らないよう、なるべく遠くへ後ずさる事だけだった。

ナルシッサは『何て嫌な匂いなんでしょう』と言わんばかりに美しい顔を顰めていたが、人々の中に紛れたイリスを見た瞬間、その薄い色の目に涙の膜を張った。ルシウスはいつもの慇懃無礼な調子でアーサーを馬鹿にし、ハーマイオニーにまでその毒牙に掛けようとした所で、シリウスが口達者に言い負かし、現在憎々しげに睨み合つて

いる。ハリー達だけでなく、ドラコも固唾を飲んでその勝負の行方を見守っていた。ナルシッサはその隙を突いて、静かにイリスに近寄った。

「イリス。変わりはありませんか？」ナルシッサの声が熱を帯び、イリスの手を包んだ。

「何かあれば私の力の及ぶ範囲ではありますが、必ず助けます。いつでも知らせを」

まるで実の母親のように自分を案じてくれるその姿に、父の記憶の世界で見た“ドラコの亡骸をあやす姿”が重なり、イリスは何も言えず、こくと弱々しく頷いた。イリスはハリー達と同じようにマルフォイ家を『敵』として見る事も、完全に繋がりを断ち切る事も出来そうにないと感じた。断腸の思いで関わりを断とうと頑張っても、彼らの方がそれを許してくれない。ナルシッサはイリスに向け、今学期には高級店のケーキやチョコレート菓子の詰め合わせ（マルフォイ家に滞在していた時、イリスが好んで良く食べた銘柄のものだ）を贈ると言い、今やファッジ大臣を差し置いて激しい舌戦を繰り広げ続けるシリウスとルシウスの様子を見守るドラコを連れ戻して、席に座ろうとした。

余りの気まぐさにイリスが急いでその場から離れようとした時、ドラコがこちらをじつと見て、口を開き掛けた。——その時、ゾツとするような憎しみに満ちた低い声が、後方から聴こえた。

「盗っ人め」

イリスは本能的に身の危険を感じ、思わず杖に手を掛けながら振り返った。しかしそこには誰も居ない。ウインキーがまた謎のジタバタ運動をしているだけだった。やがて試合開始の時間が近づき、ルシウスとシリウスの戦いも収束に向かったようだった。

☆

試合は本当に素晴らしかった。ロンの言う通りポップコーンなど食べる暇もなく、イリスは試合に熱中した。合間に行われる各チームのマスコットキャラ——ブルガリアは魅了のヴィーラ、アイルランドはレプラコーンだ——のミニショーも見応えがあった。何より良



かったのが、ブルガリアのシーカー、ビクトール・クラムだ。彼はチームの点差を縮められないと理解するや否や、スニッチを掴んで自ら試合を終わらせたのだ。その潔い結末に、四人は残らずクラムのファンとなり、興奮冷めやらぬ様子で何度も試合の内容を話し合った。イリスは帰りがけに、ポップコーンと一緒に彼の人形を買っておく事も覚えておかなければならなかった。

イリス達はテント前の焚火に立ち戻り、“百味ポップコーン”の大きなバケツを囲み、アーサーの作ってくれた温かいココアを飲みながら、試合の話に花を咲かせた。やがて消灯の時間となり、イリスはハーマイオニー、ジニーと共にテントに潜り込んで眠りに就いた。

☆

「起きて、イリス！早く！」

ジニーの恐怖で引き攣った声が聴こえ、イリスはびつくりして飛び起きた。——キャンプ場の様子が可笑しい。先程まで聴こえていた歌声や賑やかなお喋り声が止み、代わりに人々の悲鳴や叫ぶ声で溢れている。胃の中に冷たい氷を滑り落とされたような悪寒が走り、イリスは枕元の杖に手を伸ばし、握り締めた。ハーマイオニーがカーディガンを押し付け、急ぎ立てた。

「森へ急ぐのよ！」

外に出ると、キャンプ場の向こうから何かが奇妙な光を発射し、大砲のような音を立てながらこちらへ向かってくるのが確認出来た。大声で野次り、笑い、酔って喚き散らす声が段々近づいて来る。そして、突如強烈な緑色の光が炸裂し、辺りが照らし出された。揃って銀の仮面を付け、黒いローブを纏った魔法使い達が杖を一齐に真上に向け、キャンプ場を横切り、ゆつくりと行進して来る。その遙か頭上に宙に浮かんだ四つの影が、グロテスクな形に歪められ、必死にもがいている。

多くの魔法使いが浮かぶ影を指差し、笑いながら次々と行進に加わった。群れが膨れ上がると、その中から光線がいくつも飛び出し、それが命中したテントは次々に潰され、倒された。燃えるテントの上を通過する時、宙に浮いた姿が突然映し出された。キャンプ場の受付

人、ロバートとその家族だ。思わず助けようと駆け出すイリスの腕を誰かがグツと掴んだ。——シリウスだ。

「君達は森へ行きなさい、いいね」有無を言わせぬ強い口調だった。

「シリウス！」ハリーが叫んだ。

「僕も行く」

「駄目だ、お前にはまだ早い！」

ハリーにピシヤリと言いつ返し、シリウスは集団に向かって駆け出し、杖を振り上げた。アーサー、ビル、チャーリー、他の役人の魔法使いや魔女達も次々に交戦を始めている。だが、助けようとする者達よりも、集団に加わっている者達の方が数が多く、宙に浮いている四人の人間がいるために、戦いは難航しているようだった。

一番小さい子供のマグルが、首を左右にグラグラさせながら、二十メートル上空で独楽のように回り始める。『どうしてあんな酷い事が出来るんだ？』——イリスは余りの残酷さに涙が滲み、視界がぼやけた。

ハリーが無言でイリスの腕を引っ張り、四人は森へ向かって駆け出した。競技場への道を照らしていた色とりどりのランタンはもう消えていた。木々の間を黒い影が右往左往している。ひんやりとした夜の空気を伝って、子供たちが泣き叫ぶ声、不安げに叫ぶ声、恐怖におののく声が響いている。

不意に周囲が明るく輝いた。ハーマイオニーが杖に光を点したのだ。それに習って、イリスとロンも光を掲げた。しかし、四つ目の光が生まれる事はない。三つの光源が重なり、昼間のように煌々とした空間が、ハリーの慌てふためいた表情を照らし出した。

「…僕、杖をなくしちゃった！」ハリーは信じられない事を言った。

「エーッ！」三人の声がハミングした。

魔法使いは基本的に皆、杖は肌身離さず持っている。きつとこの暴動の最中で止む無く落としてしまったのだろうか、この逼迫した状況で丸腰でいるのはとても無防備だ。しかし、今更来た道に戻る訳にも行かない。三人は無意識にハリーを囲むような陣形を取り、森の奥へ向かってそろそろ歩き出した。

やがて三人は月が生み出す白銀の光を浴びた一角に入り込んだ。ここなら開けているし、見晴らしも良い。四人はこの場所で待機する事に決め、腰を下ろした。ロンがそつと下ろしたクラムの人形が、サクサクと音を立てて落ち葉の上を歩く様子を、皆は疲れ切った表情のまま、ぼんやり眺めていた。

「下ろしてあげられたかな。あの人達」イリスが言った。

「きつと大丈夫さ。シリウスもいる。どうにかして助けるよ」ハリーが慰めた。

「でも、今夜のように魔法省が総動員されている時にあんな事をするなんて、どうかしてるわ」ハーマイオニーが憤然とした口調で呟いた。「あんな事をしたら、只では済まないじゃない？ 飲み過ぎたのかしら。それとも単に……」

ハーマイオニーの声が不意に途切れ、後ろを振り向いた。三人も急いでその方向を見た。誰かがこちらへ向かって歩いて来る音がする。四人は物も言わず、暗い木々の影から聴こえる音に耳を澄ませた。――突然、足音が止まった。

「誰かいますか？」ハリーが静かに言った。

突然、イリスは透明な何かに覆い被さられた。巨大な手にグツと押さえ付けられたかのように背中が大きく曲がり、成す術なく落ち葉だらけの地面に突っ伏した。――すぐ傍で、誰かの息遣いを感じる。余りの恐ろしさに息を詰めたイリスの耳元で、静かな声が出た。

「お前も父親と同じか？」

――嘲笑うような、深い憎しみの籠もった男の声だ。男は喉の奥で低く笑い、イリスの首筋を強く吸い上げ、鈍い痛みを残した。イリスは杖を握り締め、夢中で叫んだ。

「プロテゴ、護れ！」

イリスの周囲に淡い半透明の防護膜が展開され、何かを近くから弾き飛ばしたように、魔法の膜が大きくドンと振動した。ロンとハーマイオニーが恐怖に怯えながらも立ち上がって杖を構え、ハリーがイリスの傍に駆け寄って来ようとした時、男の大きな声が出た。

「モースモードル、闇の印よ！」

すると巨大な緑色に輝く何かが暗闇から打ち上がり、木々の梢を突き抜け、空へと舞い上がった。四人は空に現れたものを凝視した。エメルド色の星のようなものが集まって描く髑髏の口から、舌のよう  
に蛇が這い出している。それは高く昇り、緑がかった靄を背負って、  
真っ黒な空にギラギラと禍禍しい輝きを放った。イリスは無意識に  
自分の右腕を掴んだ。――信じられない、“闇の印”だ。

周囲の森から爆発的な悲鳴が上がった。ハーマイオニーが恐怖におののき、逃げるためにイリスの手を掴んだ時、ポン、ポンと立て続けに音がして、どこからともなく二十人の魔法使いが現れ、四人を包囲した。次の瞬間、イリスが見たものは、自分目掛けて飛んでくる無数の赤い光線だった。

### P e t a l 3 . 取り戻した記憶の欠片

二十人の魔法使い達が放った無数の光線が、今にもイリス達に襲い掛かるうとした時、近くの茂みから熊のように大きな黒い獣が飛び出した。

獣はイリス達に覆い被り、強引な“伏せ”を決行した。もれなくクシャツと落ち葉の上に“伏せ”をしたイリス達は、獣の黒い毛を透かして、目も眩むような光線が次々と走り去っていくのを見た。空き地を突風が吹き抜け、木の葉を舞い上げる。光は互いに交錯し、木の幹にぶつかり、跳ね返って闇の中へ消えていった。次の瞬間、押し掛かっていた獣の重みが消え、頭上から怒声が響き渡った。

「どういうつもりだ！この子たちは子供だぞ！」シリウスの声だ。

イリスが見上げると、シリウスが杖を握り締め、周囲の魔法使い達を油断なく睥睨している。アーサーが茂みの中から走り出し、真つ青な顔で、大股でこちらへ近づいて来るのが見えた。

「そこをどけ、ブラツク」冷たく不愛想な声が出た。

クラウチが魔法省の役人達と一緒に、じりじりと包囲網を狭めている。ハーマイオニーが恐怖に息を飲み、イリスの腕をギュツと掴んだ。相手に引く気がない事が分かると、シリウスは無言で四人の周りに強い防護魔法を展開させ、杖を構えて迎撃態勢を取った。その灰色の目は激しい怒りに燃えている。クラウチの冷淡な眼差しが、イリスを射抜いた。

「お前だな、ゴースト」クラウチがばしりと言いつ切った。

「お前が”闇の印”を創り出した」

クラウチの放った無情な言葉は、空中で鋭い氷の矢となってイリスの心臓に突き立ち、彼女の感情を冷たく凍らせた。ふつつつとした泡のような不安感が、体を埋め尽くしていく。――“あの時”と一緒に。イリスは段々不規則になっていく呼吸を整えようとしながら、思った。ロツクハートが嘘の本を書いた時、真実をいくら訴えても信じてくれなかった人々の記憶が鮮やかにフラツシユバックして、イリスを苦しめる。やがて彼女は乾いた唇を開き、かすれた声で言った。

「ち、違います」

「黙れ。お前を連行する。……そこをどけと言ったんだ、ブラック！」  
「違います！イリスじゃありません！」

我に返ったハリー達がイリスの前に走り寄り、口々に叫んだ。しかし、クラウチは「白々しい事を！」と吐き捨てただけで、杖先をイリスに向けたまま下ろす事はなく、言葉が続けた。

「お前の素性なら良く知っている。父親はダンプルドアのしつけが行き届いた飼いだだったが、あの印を見るにお前はそうではないようだ」

「バーティ!!」

余りの侮辱の言葉に激昂し、アーサーは顔を真っ赤にして怒鳴った。他の魔法使い達もクラウチの暴言に眉を潜め、杖を下ろしたり、彼から少し距離を置いたり、何事かを小声でヒソヒソ話し合ったりしている。

「この子と——その父親を——侮辱するな！」

「本当にイリスじゃないんです。信じて下さい」

極限に張り詰めた空気の中、勇敢にもハーマイオニーが一步前に進み出て、震える声で言った。

「姿は見えなかったけど、誰かが近づいて来てイリスを襲ったの。そして呪文のようなものを叫んだ」

「ほう。随分と詳しいようだ。お嬢さん」

クラウチは戦闘態勢を解く事無く、ハーマイオニーに向かって微笑した。凜猛に輝くその目は、誰が信じるものかとはつきり言っている。

「あの印を出すには呪文が必要だと、良くご存じのようだ。まるで普段から、印を出すのを傍で見してきたかのようだ」

ハーマイオニーの体を激しい怒りの感情が駆け巡り、彼女はクラウチに強い眼差しを投げかけながら、イリスの前に立った。彼女の行動に賛同するように、次々と魔法使い達も杖を下ろしていく。どうやら、クラウチ以外の人々は最早誰一人として、イリスが“闇の印”を創り出すなど、到底ありえないと思いは始めている様子だった。アー

サーはその状況を確認すると、優しい声でハーマイオニーに尋ねた。

「ハーマイオニー、どこで声を聴いたんだ？」

「確か、あっちの方角よ」

豊かな栗色の髪を揺らし、少女は木立の向こうを指差した。アーサーの指示で、魔法使い達の半分が輪を抜け出し、そろそろと横一列に並んで、茂みの奥へ入っていく。

「イリス」

ふと優しく名前を呼ばれ、イリスはふつと我に返った。ハリーがすぐ傍にいて、俯いた自分の顔を覗き込んで、安心させるような微笑みを浮かべている。

「大丈夫だ。すぐに終わるよ。テントに帰ったら一緒にココアを飲もう。君の好きなマシユマロ入りのやつ。．．．いいね？」

親しみを込めて肩を軽く揺すぶって、ハリーは気さくに言った。まるで今の状況が、何でもない事であるかのように。彼の思いやりによりリスは何度救われた事だろう。彼女の身体を不気味に膨らませていた不安はパチンと弾けて消えた。少女は浮かんできた涙が気取られないように、かすかに笑って見せた。

その間も、クラウチとシリウスの杖先はそれぞれ下がる事無く、膠着状態を保っていた。やがて何かを発見したのか、森の奥で次々に大きな声がして、小枝が折れる音、木の葉の擦れ合う音を引き連れながら、アーサー達が戻って来た。その中の一人を見て、イリスはアツと声を上げた。

ハツフルパフの上級生、セドリツクの父、エイモス・デイゴリーが、小さなぐったりしたものを両腕に抱えている。——競技場の貴賓席で見かけた、屋敷しもべ妖精のウインキーだ。

エイモスは押し黙って、クラウチの足元にウインキーをそつと寝かせた。人々は一斉にクラウチを見つめた。暫くの間、彼は理解しがたいものを目の当たりに行っているかのように、ウインキーを見下ろしたまま、立ち竦んでいた。やがて我に返ったかのように、彼は杖をゆつくりと下ろしながら、途切れ途切れの声で呟いた。

「そんな——筈は——ない——絶対に」

クラウチはおもむろに踵を返し、森の奥へ向かって歩き出した。しかしエイモスはその背中に、容赦のない追い打ちを掛ける。

「無駄ですよ、クラウチさん。他には誰もいない。それに……」

エイモスは中途半端に言葉を切り、ウインキーの手元を指差した。その先にあるものを見て、周囲が一樣にざわめき始める。イリスはハーマイオニーと一緒に少し近づいて、目を凝らした。——ウインキーの右手には、一本の杖が握られている。エイモスは厳かな口調で言った。

「ご覧の通り、このしもべは杖を持っていた。これならどんな魔法だって創り出せる。だが、まずは”杖の使用規則第三条の違反”だ。“ヒトにあらざる生物は杖を携帯し、またこれを使用することを禁ず”」

今や、疑いの的はイリスではなくクラウチへと変わっていた。シリウスはこの場にいる全員の杖が下がった事を確認し、防護魔法を解除した。

「その妖精を調べる必要があるんじゃないか、クラウチ？」シリウスは冷笑した。

「同じ過ちを繰り返す前に」

二人の間に、今にも殺し合いが始まりそうな程の殺意がみなぎった瞬間、抜群のタイミングで、バグマンがポンと音を立てて現れた。バグマンは出し抜けに空を見上げ、今初めて“闇の印”を見つけたとばかりに慌てふためき、アーサーから事情を聞き出してびっくり仰天していた。その一連のコミカルな動きとひょうきんな彼の雰囲気は、二人の興奮状態を宥め、人々の冷静さを取り戻した。

「エネルベート、活きよ」

“魔法生物管理規制部”に勤めるエイモスが、ウインキーの尋問役を担当する事になった。彼が杖を向けて呪文を唱えると、ウインキーがピクリと動いた。大きな茶色の目が微かに動き、寝惚けたように二、三度まばたきした。ウインキーはおずおずと顔を上げ、空の上に光る“闇の印”を見つけた途端、狂ったように辺りを見回した。自分の周りを取り囲む大勢の魔法使いを見て、ウインキーは怯えたように



噉り泣きを始めた。

「しもべ！」エイモスは厳しい口調で言った。

「見ての通り、今し方〝闇の印〝が打ち上げられた。そしてお前はその後、印の真下で発見されたのだ。申し開きはあるか！」

ウインキーはさらに恐怖の追いつめられ、激しい息遣いを始めた。——その様子は、まるで〝弱い者いじめ〝そのものだった。哀れな妖精を守る者は誰一人いない。イリスとハーマイオニーは不安そうに視線を交し合った。

「あ、あ、あたしはなさっていません！やり方をご存じありません！」  
「ではお前が持っているその杖は何だと言うのだ？」

ウインキーはやつと自分の持つ杖に気づき、か細い悲鳴を上げてそれを放り出した。杖はクルクルと回転して落ち葉だらけの地面で一度バウンドし、イリス達の近くに転がった。次の瞬間、ハリリーがアツと驚きの声を上げた。

「それ、僕の杖です！」

その場にいる全員が目が、ハリリーに一点集中した。ハリリーは言ってしまった後、今の逼迫した状況を思い出したのか、努めて冷静になろうとしながら続けた。

「落としたんです。森に入ってすぐ後に、杖が無くなった事に気づきました」

「しもべよ」エイモスが言った。

「お前がこの杖を拾い、印を打ち上げたのか？」

ウインキーは最早、過呼吸寸前の状態になっていた。イリスはたまらずエイモスの前まで駆けて行って、彼女の無実を訴えた。

「ウインキーじゃありません。私を襲ったのは男の人のようでしたし、呪文を唱えたのも男の人の声でした」

しかし助け舟を出したのにも関わらず、ウインキーは感謝するどころかますます縮み上がり、耳をバタバタさせて必死に首を横に振るばかりだった。まるでイリスが秘密をばらしてしまったかのように。その後、エイモスが〝直前呪文〝を使用し、ハリリーの杖から〝闇の印

“が創り出された事を確認すると、ウインキーの嫌疑はいよいよ強まった。エイモスが勝ち誇ったような顔つきでウインキーをお縄に掛けようとした時、静かな声がそれを阻んだ。

「エイモス。つまり君は」クラウチだ。嫌に冷静な声だった。

「私がしもべ達に常日頃から“闇の印”の創り方を教えていたと、そう言いたいのかね？」

その途端、エイモスの顔からサーツと音を立てて血の気が引いていき、彼はしどろもどろに言った。

「クラウチさん、そんなつもりは……」

「私が“闇の魔術”とそれを行う者をどんなに侮蔑し嫌悪してきたか、長いキャリアの中で私の残してきた証を、君はまさか忘れたわけではあるまい？」

どうやらクラウチは、魔法省での立ち位置が他の人々よりも高いようだった。エイモスはさっきまでの勢いは何処へやら、今は小さく縮んで目の前の男を仰ぎ見ている。

「ああ、その通りだろうさ」シリウスはクラウチに聴こえないよう、小さく野次を飛ばした。

「私のしもべを咎める事は、私を咎める事だ！」

「二人共、落ち着いてくれ」

やがて二人の様子を見守っていたアーサーが進み出て、冷静に言った。

「クラウチ家のしもべが“闇の印”を創り出せる訳がない。イリスは男がいたと言った。ではその男がハリーの杖を拾い、“闇の印”を出してから杖を放棄したと考えるのが妥当だ。自分の杖を使って足が付くのを恐れたんだろう。」

ウインキー、君はこの杖をどこで拾ったんだね？そしてその時、誰かを見なかったか？」

ウインキーはアーサーが優しく話しかけたにも関わらず、まるで怒鳴りつけられたかのようにビクツと体を痙攣させ、ガタガタ震え始めた。

「あたしが杖を発見なさったのは、あの木立の中でございます。そし

てあたしは、誰もご覧になっておりません」

「エイモス」

不意にクラウチが口を挟んだ。有無を言わせぬ、強い口調だった。「通常なら君がウインキーを連行し、尋問するべきだろう。だがこの件は、私に処理を任せて欲しい」

そう言つて彼は、ウインキーに視線を注いだ。老いてはいるが、品のある端正な顔つきに皺の一本一本がより深く刻まれて、険しい表情を作り出している。その目は、何の哀れみもない冷徹な輝きに満ちていた。

「心配ご無用、必ず罰する。私はテントで待機するようにとウインキーに言い付けたが、これは従わなかった。……洋服”に値する”洋服”だつて？——重々しい罰には凡そ当て嵌まらない単語を聴き、イリスは思わず首を傾げた。その様子を見て、ハリーがこつそり耳打ちした。

「屋敷しもべ妖精は、主人から服を与えられると自由になれるんだ。つまり、解雇つてこと」

「お止めください！どうぞ、どうぞ、洋服”だけは！”」

ウインキーはクラウチの足元に身を投げ出して、悲痛な声で叫んだ。主人に縋り、さめざめと泣きながら自分の服——ボロボロのキツチンタオル——にしがみ付いているウインキーを見て、イリスは胸が張り裂けるようだった。しかし当の主人であるクラウチは哀れむどころか、磨いた靴にへばり付いた汚物でも見るような目でウインキーを睥睨しながら、足を一步引いて彼女から距離を置いていた。

「私の命令に逆らうしもべに用はない」

クラウチは冷酷に言い放った。ウインキーの悲惨な泣き声が辺り一面に響き渡り、ひどく居心地の悪い沈黙が流れた。やがてアーサーはハリーの杖を拾い上げて、場の解散を告げた。シリウスがイリス達を促したが、イリスはその場を動く事が出来ず、暫らくの間、ハーマイオニーと一緒にウインキーを見つめていた。

☆

空き地を離れて、木立の間を抜け、一行は無事にテントへ帰り着い

た。哀れな妖精の泣き声がチューイングガムのように耳にこびり付き離れようとしないので、皆一様に暗い顔をして押し黙っていた。テントの周囲は壊された残骸が散らばり、燃えたテントがジリジリ燻っていた。

テントの入り口に着くと、チャーリーが飛び出して来て、皆の無事を喜んだ。ウィーズリー家の若者達は大事には至らなかったものの、心か体のどちらかに怪我を負っていた。ビルは腕にシーツを巻き付けていてそこから血が滲んでいたし、チャーリーのシャツは大きく裂け、肌に大きな痣がいくつもあった。パーシーは鼻血を出している。フレッドとジョージはショック状態だったが、青ざめて黙りこくったジニーの背中をずっと撫でていた。

カバンを取って来て、手持ちの薬で出来る限りの治療をしようとしたイリスは、誰かに名前を呼ばれてふと振り返った。——シリウスだ。彼は深刻な表情で、少女を呼び寄せた。

「君は、男に襲われた」と言っただね。一体、何があった？」

イリスは全てを話して聴かせた。——姿の見えない男に背後から押し掛かれた事、男に「父と同じか」と言われて噛われた事、その直後に首筋に走った「鈍い痛み」の事。シリウスは心配そうに眉根を寄せた。

「鈍い痛み」？首を見せてくれ」

シリウスはイリスの髪をそつと掻き上げて、痛みの痕らしきものを見つけ出した途端、息を潜めた。——彼女の首筋には赤く鬱血した「接吻痕<sup>キスマーク</sup>」があった。彼女を襲った男が何の目的でそれを付けたのか、大人であるシリウスには嫌でも理解出来た。気取られないよう小さく舌打ちし、汚らしいゴミを見るかのような目でそれを睨み付ける。一方のイリスは、余りに長い事シリウスが自分の首を見つめているので、心配になって尋ねた。

「シリウス、どうしたの？何かあった？」

「いや、何でもない。ちよつとした痣だな」

シリウスは気さくに微笑んで、魔法で氷の欠片を削り出し自分のハンカチで包んで、即席の氷嚢を作ってくれた。

「氷が解けるまで、ここに当てているんだよ。そうすれば消えるだろう」

☆

キャンプ場の修復作業は夜通し続けられた。ウィーズリー家の人々の看護も終わり、ココアを飲んでホッと一息吐いて眠りに就こうとした時、シリウスが外から帰って来て、イリス達を呼び集めた。「君たち、用心なさい。事態は思ったより深刻かもしれない。」

ハリー。訊きたいが、競技場へ入るまでに杖があつたか分かるか？」

ハリーは困ったように眉を寄せ、髪をくしゃくしゃと掻き乱し、暴動のせいで複雑にこんがらがってしまった記憶を整理した。やがて彼は頷いて、ゆっくりとした口調で応えた。

「うん、あつたよ。競技場へ入る前に“万眼鏡”をポケットに入れたかったから、杖の位置を少し変えたんだ」

「それから無くすまでに杖を確認したか？」

「ううん。そこからは見てない。森に入って光を点そうとポケットを探したら、“万眼鏡”しか無かった」

そこまで言ってから、ハリーはやつとシリウスの意図している事を察した。ハリーは乾いた唇を舐め、静かに言った。

「“闇の印”を創り出した誰かが、競技場の席で僕の杖を盗んだって言う事？」

「その通り」シリウスは我が意を得たりとばかりに笑った。

「ウインキーは杖を盗んだりしないわ！」

すかさずハーマイオニーが反撃したが、シリウスはゆっくりと首を横に振り、口を開いた。

「席にいたのはウインキーだけじゃない。他国の大臣やファツジ、バグマン……それにあの親子もいた」

「マルフォイ一家だ！」ロンが勝ち誇ったように叫んだ。

「絶対、ルシウス・マルフォイだ！」

「ち、違うよ！あれは……ルシウスさんの声じゃなかったもの」

イリスは慌てて反論した。耳元で聴いたあの声は、明らかにルシウ

スのものではない。シリウスは彼女の意見に同意したようで、チラリと彼女の首の辺りに視線を投げかけ、冷静に言葉を続けた。

「私も同感だ。と言うのも、あいつはあの馬鹿げた集団の指揮を取っていたからね。離れた森の奥で“闇の印”を出す事は出来ない。いつも通り何の証拠も残さずに消えてしまったから罪を咎める事も出来ないが、私は遠目にもすぐ奴だと分かったよ。いくら仮面とローブで身なりを隠そうと、あいつの“死喰い人”としての立ち振る舞いは変わらない。アズカバンに行くまで、ずっと戦ってきたからね」

イリスは余りのショックで茫然とし、咄嗟に呼吸を忘れて喘いだ。——ルシウスさんがあの集団の指揮を取っていた？可哀想なマグルの家族をあんなに酷い目に遭わせて、他の人々と一緒に笑っていたの？ハリーとロンが興奮した顔つきで何度も頷き合う一方で、ハーマイオニーはイリスを自分の傍に引き寄せ、何も言わずに彼女の頭を優しく撫でた。

「じゃあ、一体誰が？」

ハーマイオニーが静かに尋ねると、シリウスは暫らく言い淀んでいく様子だったが、やがて口を開いた。

「正直言って分からない、と言うのが現状の見解だ。だからより一層、注意して日々を過ごさなくては。唯一の手掛かりであるウインキーは、クラウチに取り調べを拒否されてしまったし」

「あいつ、ムカつくよ」ロンがイライラして言った。

「ホントはあいつが“闇の印”を創り出したんじゃないのか？」

「ロン。それは違う」シリウスは力なく笑った。

「彼は決してそんな事をする人間ではない。もし彼が本当に“闇の印”を出したとしたなら、私はこの先一生ドックフードだけで生きてみせるよ」

「クラウチを知ってるの？」

ハリーが訊いた瞬間、シリウスの表情がきつと曇った。イリスはシリウスと最初に会った時の事を思い出した。——蠟のように固まった白い顔には深く皺が刻まれ、暗く落ち窪んだ眼窩の奥で目だけがギラギラと輝いている。まるで時間が巻き戻ったかのように、シリウス

はあの時の顔つきに戻っていた。

「ああ」シリウスは暗い声で応えた。

「私をアズカバンに送れと命令を出した人物だ。裁判もせずに」

イリス達は驚いて息を飲み、お互いの顔を見合わせた。『同じ過ちを繰り返す前に』——ふとイリスは、森の中で放ったシリウスの言葉を思い出した。あれはクラウチへ向けた皮肉だったのだ。シリウスはこれから話す事は大部分がアズカバンを出てから得たものであると前置きした上で、クラウチの素性をゆっくりと話して聴かせた。

——当時、クラウチは魔法省の警察である“魔法法執行部”の部長だった。彼は非常に実力のある素晴らしい魔法使いで、並々ならぬ権力欲も有していた。しかし“闇の陣営”を嫌い、どんな脅しや甘言を弄されても屈する事はなく抵抗していた。

“闇の陣営”が最も力を持っていたその時代、イギリス中は恐慌状態に陥っていた。“闇の帝王”は人心掌握術に長けている。最早誰が敵で、誰が味方も分からない。やがて家族や友人だけでなく、自分すらも信じる事が出来なくなっていく。毎日、多くの魔法族やマグルが殺されたというニュースが飛び込んでくる。そう言った極限の状態で、人間の本性は露呈する。最良の面を發揮する者もいれば、最悪の面を出す者もいる。

いつの時代も混乱をまとめるのは、強い信念を持ったカリスマ性のある人物だ。クラウチはその資質を有しており、魔法省でたちまち頭角を現した。そして彼は“闇の帝王”に従う者に極めて厳しい措置を取り始めた。殺人、拷問、疑わしい者に対する“許されざる呪文”の許可。暴力には暴力を、死には死をもって抵抗する。

クラウチが“闇の帝王”と同じ、冷酷無情な人間であると人々が気づき始めた時、彼はあと一歩で大臣の座を手にする所までやって来ていた。人々が賞賛していたクラウチの最良の面は近づいてよく観察すると、最悪の面の間違いだった。そしてついに“闇の帝王”が失墜し、今まさに大臣に就任すると言う時に、不幸な事件が起こった。

彼の息子が捕まったのだ。“闇の帝王”を探し出して復活させようと企み、闇祓いの夫婦を拷問した“死喰い人”の一味と共に——

「クラウチさんの息子が？」

イリスは呆気に取られて尋ねた。話を聞く限り、クラウチは“闇の陣営”とは対極に位置する人物のようだし、その息子が“死喰い人”と関係しているなんて到底思えない。しかし、シリウスは静かに頷いた。

「そうだ。彼にとつては相当シヨックだっただろう。彼は権力に取り憑かれ、家庭を顧みなかった。その報いがやって来たんだ。たまには早く家に帰り、自分の子供ともっと話をしてやるべきだった」

「その人、本当に“死喰い人”だったの？」ハーマイオニーが眉を潜めた。

「分からない。本当にそうだったのか、それとも単にその場に居合わせただけだったのか」

「クラウチは息子と話し合ったの？彼を助けてあげた？」

ハリーが真剣な表情で尋ねると、シリウスは力なく笑い、肩を竦めて見せた。

「ハリー、イリスやウィンキーに対する態度を見ただろう？少しでも自分の評判を傷つけるような存在は、すぐ消してしまうような奴だ。彼はイリスの素性しか見なかったし、ウィンキーが“闇の印”を創り出した杖を持っているだけで、忠実な妖精を解雇した。」

クラウチは息子が“闇の陣営”に関係していると知った瞬間、排除した。裁判だってどんなに自分が息子を憎んでいるかを公に見せるための口実に過ぎなかった。無実を訴える息子の声を無視し、彼は真つ直ぐアズカバン送りにした。

私は彼の息子が牢屋に連れて来られるのを見たよ。まだ十九歳になるかならないかの青年だった。ずっと母親を呼んで、泣き叫んでいた。デイメンターの瘴気に当てられ、数日すると静かになったがね」

イリスはクラウチの息子を心から気の毒に思った。——無実を訴えても聞き入れられず、アズカバンに収監されて母を呼んで泣き叫んだ哀れな青年。果たして彼は本当に“闇の陣営”に関係していたのだろうか。もしかしてシリウスと同じように、今からでも助ける事が出来るのでは？イリスはそんな期待をもって口を開いた。



「ねえ、シリウス。その息子さんにもう一度話を聞いて、裁判をし直す事は出来ないの？」

シリウスはその言葉を聴いた時、暗い眼差しをイリスに向け、ゆっくり応えた。

「いや、それは無理だ。彼は連れて来られてから一年後に死んだ」

余りに残酷なその答えを、イリスは暫く受け入れる事が出来なかった。シリウスは苦々しい口調で、話を続けた。

——アズカバンでは、殆どの人間が気が狂ってしまう。デイメンターが幸福な記憶を吸い上げ、最悪な記憶しか残らないようにするため、生きる意志を失うのだ。クラウチは魔法省の重要人物であるため、もうじき息子が死ぬという時、夫人を伴っての最期の面会を特別に許された。その後、夫人は病に倒れ、憔悴の末に亡くなった。クラウチは息子の遺体を引き取りに来なかったので、デイメンターは監獄の外に埋葬した。

クラウチは一時、魔法省大臣と目された英雄だったのに、次の瞬間、息子と夫人は死に、家名は汚された。やがて獄中死した彼の息子に人々の同情が集まった。クラウチ家は純血の名家だった。そんな由緒正しい家柄の子供が“死喰い人”になるなんて、きつと家庭に問題があつたに違いないと。それに伴い、クラウチの人気は大きく落ち込んだ。そして大臣の座をファッジに奪われ、“国際魔法協力部”という傍流に押しやられてしまった。彼は全てをやり遂げたと思った瞬間、全てを失ってしまったのだ——

五人の間に、重苦しい沈黙が流れた。イリスは今なら、森の中で見たクラウチの行動や言動の全てが理解出来ると思つた。今や“闇の陣営”に関わる全てのもが、彼にとって大きなトラウマとなつていくのに違いない。シリウスはイリスとハーマイオニーの上着を取り、差し出しながら言つた。

「兎に角、君達には非常に残念な話で申し訳ないが、今学期も安全を心がけて生活する事だ。一人で人気のない場所に行つたりしないように。……まあ、私に言えた事ではないが。何かあればすぐ手紙を送りなさい。」

さあ、女の子達。テントへ戻ろう。私が送っていく」

☆

ドラコは“あの夢”を見てからと言うもの、ずっと心が塞ぎ込み、食事もろくに喉を通らない日々が続いていた。夢の世界で、名も知らぬ少女の手を握っている僅かな間に感じられた、無上の安らぎ。どれほど贅を尽した生活を送っても、あの幸福感が再び蘇る事はない。まるで空からお日様が消えてしまったかのように、毎日が暗く寂しく感じられる。もう二度と味わえないと思いつたからこそ、より一層恋しかつた。ドラコは何度も夢の事を考え、握った少女の手の感覚や助けを求める小さな声を思い浮かべた。

やがてドラコの様子を心配して、ルシウスは“クイディッチ・ワールドカップにファッジ大臣の客人として招待された事”をドラコに教えてくれた。見晴らしの良い貴賓席で、宿泊地も屋敷しもべ妖精付きの豪華な別荘を用意していると。ドラコは、クイディッチで現在の自分の気持ち満たされるとは到底思えなかった。かつてあんなに大好きだったスポーツも、今となつては欠片程の興味すらない。しかしドラコは父の好意を無下にする事など出来ず、彼の機嫌を害さないように子供のようににはしゃいで喜んで見せた。

しかしファッジ大臣の誘導で貴賓席に着いた途端、ドラコの機嫌は上昇するどころか、ますます急降下した。重厚な深紫色の絨毯の上に、凡そ似つかわしくない赤毛の連中がいたからだ。しかも自分は後方の席であるため、試合中にあのみつともない赤毛が嫌でも入ってくる。全くもって最悪の気分だ。おまけに金魚の糞のようにポツターとグレンジャー、ゴントが連なつて並び、こちらに警戒した眼差しを向けている。

「これはこれは皆様、お揃いで」

ルシウスは威厳ある佇まいで一列に並ぶ人々を睥睨し、驚いたとばかりに目を見開いて低い声で言い放った。

「これほどの人数の貴賓席の切符を手に入れるのに、アーサー、何かお売りになりましたかな？ 最もお宅を売っても大した金にはならないでしょうが」

ファッジ大臣は目の前でアーサーが侮辱されたにも関わらず、冷や汗を浮かべて愛想笑いを浮かべるだけだった。ルシウスは耳まで真っ赤になって黙り込むアーサーを通り過ぎ、今度はハーマイオニーを見て侮蔑的な笑みを浮かべた。ドラコはしたり顔で笑った。『こいつは“穢れた血”です』——ドラコは心の中から父親に囁いた——『クイディッチは魔法界のスポーツだ。こいつがいて良い場所じゃない』そうしてルシウスが今にも口を開き掛けた時、鋭い声が飛んできた。

「その子を侮辱するのは許さんぞ」

ドラコは声のした方向を見て、眉を潜めた。——自分の叔父であるシリウス・ブラックだ。最も親戚であるとは言っても関わりを持った事などない。物心ついた時から彼はアズカバンに収監されていたし、無罪放免されてからもこちらへ挨拶に来る事なんてなかったからだ。叔父の姿は、手配書で見た写真と全く違っていた。端正で優美な顔立ちに相応しい格好をしていて、母と同じ灰色の瞳が鋭く父を射抜いている。

「言いがかりだ、シリウス。私は何も」

ルシウスが大袈裟に肩を竦めながら、小馬鹿にしたような猫撫で声でやり返す。シリウスは素直に自分の非を認めようというので、気まずそうに頭を掻きながら言い放った。

「ああ、すまない。君のそのどうしようもなく底意地の悪い顔は元からだったな。十数年振りの再会だったから、その事をすっかり忘れていたよ」

その言葉を皮切りに、ルシウス対シリウスの口喧嘩が始まった。ウィーズリー家の人々は残らず吹き出し、ハリーとロンはニヤツと笑って互いの肩を小突き合った。ハーマイオニーも少しばかり小気味良さそうに微笑んでいる。ファッジ大臣はあからさまにおろおろとし始めていたが、戦いは白熱する一方だった。ドラコは早速良からぬ反応を示したハリー達一人一人に噛み付き、その後は今にも決闘が始まりそうな程に殺意が高まっている二人の戦いを固唾を飲んで見守った。

しかし、やがて母が迎えに来たために、彼は澁々自分の席に戻った。その様子を目敏く見つけたロンが「喧嘩が怖くなったのかい？ママが大好きな白イタチちゃん！」と罵ったので、すかさず「いや違う。君達が臭くて逃げ出したのさ。ちゃんと体を洗ってるのか？」とやり返した後、ふと視線を上げた。

そこにはゴントが一人で佇んでいて、ドラコを見た途端、怯えたように体をビクリとこわばらせた。ドラコは彼女の宝石のような瞳に吸い寄せられ、何も言う事が出来なかった。深い青色だった目は、今は金色の光が深く入り混じって、時々エメラルド色に輝いている。なんて美しい——まるで貴重な宝石を鑑賞しているようだ。ドラコは思った。そして彼は一つの異変に気付いた。

ゴントを見た時に起こる、脳髓を蕩かすような頭痛がさつぱりと消えている。その事は彼の思考を明瞭にし、さらなる思考の深みへと導いた。

——元々、ドラコは賢い子だった。冷静に考えてみれば、可笑しな話だった。知人の一人に過ぎず、必要最低限の関わりしか築いてこなかった彼女を見ると、何故こんなにも深い悲しみや苦しみ、絶望がじわじわと心に染み出してきて、居ても立ってもいられなくなってしまふのか。そして彼女が他の人々と仲良くしているのを見ると、激しい憎悪の念と独占欲がふつふつと湧いて来る。それらの感情は、自分とゴントの間にある薄っぺらい繋がりと、どう照らし合わせても不釣り合いなものだ。それに頭痛が消えた事自体も気にかかる。

その時、ドラコの頭の天辺から足の先までを、一筋の電流が駆け抜けた。彼の中で多くの事柄が収束し、一つの推測を導き出した。“この一連の出来事に、ゴントが関係しているのでは？”『君は一体誰だ？』——ドラコがそう問い質そうとした時、ゾツとするような殺意が籠められた、低い男の声が突き刺さった。

「盗っ人め」

その言葉はドラコのプライドを深く傷つけ、彼はカツとなった。純血の名家、マルフォイ家の子息であるこの僕を卑しくも“盗っ人”だと？ドラコはイリスから視線を外し、声の聴こえた方向を睨み付け

る。だが、そこには屋敷しもべ妖精が一匹いるばかりで、他には誰もいない。

次の瞬間、ドラコの頭がつんぎくように痛んだ。砂嵐に似た雑音が耳の中一杯に広がり、ドラコは耐え切れずその場に蹲った。すると閉じた瞼の裏に、ある光景が見えた。

——真つ暗な靄が詰まった空間で、誰かが自分を見下ろして、激しい嫉妬と殺意の感情を向けているのを感じる。ドラコはその人物に強い恐怖心を抱いていた。彼は今、確かに何かを盗んで見つかり、その持ち主に責め立てられていた。盗んだものはあたたかく息づいていて、ドラコは取られないようにギュッと強く抱き締める——  
「どうしたのですか？」

気が付くと、ナルシツサが心配そうな目で覗き込んでいた。ドラコは狐につままれたような気分で、周囲を見渡した。先程の暗闇の世界は消え去り、辺りは賑やかな空気に包まれている。ドラコは母親に余計な気遣いをさせないように、平気ですと答えて観戦を続けた。

☆

その夜、ドラコは夢を見た。真つ白な靄に包まれた世界に立っている。ふと良い花の香りが鼻をかすめ、見下ろすと、地上には一面に真つ白なケシの花が咲き乱れていた。周りを見渡しても靄のせいで遠くの方までは見えないが、人の気配はない。

かすかな声が靄の奥から聞こえて来て、ドラコは弾かれたように顔を上げた。——あの痛苦の中で訊いた、女の子の声だ。泣いて、僕に助けを求めている。ドラコはケシの花を蹴散らし、我武者羅に駆けだした。やがて靄の中から、透明な硝子で出来た巨大な壁が出現した。壁の奥は靄がぎっしり詰まっっていて、中の様子をよく見る事が出来ない。声は壁の向こうから聴こえる。

ドラコは素早く上方を見上げたが、壁の先は靄に埋もれていて、途方もない高さがある事が推測出来た。ドラコは壁伝いに進んで、扉か何かないかと探したが、どれほど息を切らして走っても見当たらない。壁は非常に強固で取っ掛かりもなく、登る事も出来ない。まるで壁の外と内とで、この世界を二つに分断しているようだった。ドラコ

は激しく息を弾ませながら、イライラと舌打ちした。

——ふと視界の端にある靄の一部が微かに揺らぎ、そこからぼんやりとした少女の影が姿を現した。ドラコは壁に両手を押し当て、食い入るように彼女を見つめた。心臓が爆発しそうな程に膨れ上がり、早鐘のように鼓動を打ち始める。間違いない、僕が夢の中で手を握り、痛みの中に見出した声の主は、この女の子だ。

壁一枚を通して、少女はすぐ近くにいるようにも、反対に遙か遠くの方にいるようにも見えた。しかしその姿を見つめるだけで、ドラコは自分の中に、言葉に出来ない程の熱い感情が込み上げてきて、涙が溢れ出るのを止める事が出来なかった。

「開けてくれー！」

ドラコは何度も壁を叩いたが、びくともしない。彼は頭に血が昇り、無我夢中で壁を蹴り飛ばした。この壁を壊せれば、目の前にいる少女に会えるのに。——この壁さえなければ！

少女はドラコが壁を破壊しようとするのを見て、ますます激しく泣き始めた。そしてゆっくりと首を横に振った。“そんな事をしてはいけない”と忠告するかのよう。

突如として、少女の頭上から巨大な黒い影が伸び上がった。ドラコは驚いて、アツと声を上げた。——優に六メートルの体長はあるに違いない、大きな蛇だった。少女は怯えて逃げようと駆け出すが、蛇はいとも簡単に少女に巻き付いてガブリと噛み付いた。耳をつんざくような痛ましい少女の悲鳴が、周囲に響き渡った。

「やめろおおお!!」

ドラコの感情が音を立てて爆発した。壁に爪を立て、理性の欠片もない野獣の様に泣き叫ぶ。——早く助けなければ、あの子が喰われてしまう！ドラコは体じゅうがボロボロになるのも構わず、我武者羅に壁への体当たりを続けた。

何度目かの体当たりの時、ビシリと小さな音が走り、壁の一部にわずかな蜘蛛の巣状の罅ひびが入った。細かな硝子の欠片が飛び散り、罅の隙間から靄が噴き出してくる。ドラコがそれを吸い込んだ瞬間、脳裏にある光景が思い浮かんだ。

——ホグワーツへ入学する前、ダイアゴン横丁でイリス・ゴーントと初めて出会った。髪を短く切った中性的な容姿の少女はドラコにあとけなく微笑みかけ、握手を交わした。“あたたかく柔らかな掌の感触”——

——ホグワーツ特急でイリスを探し回り、やっと見つけたと思ったら、彼女は憎つくきポッターやウィーズリーと一緒にいた。そしてからかいの言葉に対して、果敢に言い返してきた。“自分の思い通りにならない存在への苛立ち”——

蛇は鎌首をもたげて、こちらを嘲笑っているかのようシユールシユール低い声で唸り、少女をじわじわと締め上げ始めた。苦しそうにもがく少女を一刻も早く助けたくて、ドラコは強く壁に衝突し、ますます罅は大きくなった。

——組分け帽子がスリザリンを勧めたのに、イリスはグリフィンドールを選んだ。初めて同年代の子と口喧嘩をした。“言いようのない不愉快な気分”——だが幸いな事にイリスは泣き虫な上、落ちこぼれだったため、彼女の鼻を明かし、いじめる要素はたっぷりであった。“自分に抗った者を捻じ伏せたいと願う、歪んだ支配欲”——

ドラコが体当たりを繰り返す毎に、罅は徐々に大きくなっていき、新たな靄を吸い込む度に、様々な光景が浮かんで消えていく。

——クリスマス休暇で、せっかく両親に甘えたいのにイリスと言うお邪魔虫がくっついて来るのが、とても嫌だった。だが嫌でも毎日顔を突き合わせていると、少しずつ違う感情が湧いて来た。支配したかった者をたっぷりと独占し、余裕の出来た心の底から湧いて来た思いを留める事が出来ず、ドラコはイリスにキスをした。“柔らかな唇、甘酸っぱい恋の感情”——

——しかしドラコにイリスの思いは通じず、行違う二人の思いはやがて激しい対立を生み出した。クイディッチ競技場で睨み合う二人。イリスを振り向かせたくて、ドラコは意地悪な事を言って泣かせた。“涙交じりの青い目、歪んだ愛情”——

——やがてポッター達が何かを企んでいる事を嗅ぎだすと、イリスを呼び出し、自分の思い通りになるように脅し付けた。しかし彼女は

従わない。“愛おしさと憎らしさが入り混じった、複雑な思い”――

――罰則を命じられたドラコは、禁じられた森の中を逃げ惑っている最中に、錯乱状態になったイリスの姿を見つけて心臓が止まりそうになった。イリスを助けたいという思いが恐怖心を打ち消し、ドラコは無我夢中で崖を滑り降りて彼女を助けた。我に返ったイリスは涙を流しながら、ギョツと自分にしがみ付いた。“抱き締め返した時に感じた充足感、胸の高鳴り、少女の体のあたたかさ”――

――ホグワーツ特急でイリスに再会したドラコは、彼女に銀のリボンを結んだ。彼が今まで見てきた中で一番好きな髪型を選んだ。イリスは恥ずかしそうに微笑んで、ドラコを見つめる。その目は僕だけを見つめている。“言葉に出来ない程、幸せな気持ち”――

やがて硝子の壁は罅だらけになり、最後の衝撃で粉々に砕け散った。ドラコは硝子の欠片が体じゅうを傷つけるのも構わず、弾丸のように飛び出して、巨大な蛇に襲い掛かった。ドラコが蛇を殴りつけるために拳を振り上げた時、その手首に巻いていた“銀のリボン”が強く輝き、美しい銀細工の剣へ変わった。ドラコは何も考えずにそれを振りかざし、蛇の口蓋を深く貫いた。

彼が剣を離すと同時に、蛇はドツと横様に床に倒れ、ひくひくと痙攣し始める。やがて蛇は黒い靄となって、空中に融けていった。その靄の一部を吸い込んだ瞬間、ドラコの頭の中に、様々な記憶の一場面が次々と浮かんで、砂嵐に消し去られていく。

――“ダイアゴン横丁で、胸の中に飛び込んで来たイリスを抱き締め返した場面”――砂嵐が起きた――“イリスが怒って自分を責め立てている場面”――砂嵐が起きた――“イリスの膨大な量の宿題を手伝う中、早速サボり始めた彼女を叱った場面”――砂嵐が起きた――“イリスが自分のシーカー姿を見て頬を赤らめている場面”――

――砂嵐が起きた――砂嵐――砂嵐……



気が付くと、ドラコは箒にまたがり、降りしきる雨に打たれるまま、途方に暮れていた。競技場からは大勢のブーイングが響き渡り、プレッシャーに押し潰されそうなドラコを嘲笑い、責め立てている。

「ドラコー！がんばれーっ！」

不意にイリスの声が聴こえた。ドラコが視線を下げると、クイデイツチの観客スタンドにイリスがいる。びしょ濡れになるのも構わずに、一生懸命声援を送っていてくれている。

「あきらめちゃダメ！夢だったんでしょ！」

☆

瞬きをした瞬間、ドラコはあの霧の世界へ戻っていた。足元に倒れ伏した少女を見つけ、形振り構わず抱きかかえる。——イリスだった。ゴーストのように半分透き通っていて、体じゅう傷だらけだった。イリスは弱々しく呼吸を繰り返しながら、ドラコを見つめた。労しげに頬を撫でるドラコの手にとつと触れ、イリスは涙に滲んだ声で囁いた。

「私を助けて」

突然、世界は不気味なエメラルド色に染まった。くぐもった爆発音が彼方此方で発生し、地面がグラグラと大きく揺れて、ケシの花が次々に萎れていく。ドラコは応えるようにイリスの手を掴みながら、はつきりと理解した。この少女は“自分の持つイリスの記憶”なのだ。一際強い爆風が吹き荒れて、ドラコの意識はプツリと途切れた。

ドラコは静かに目を覚ました。——彼はイリスが掛けた“忘却術”の一部を破り、記憶の欠片を取り戻した。イリスは“忘却術”を掛ける時、一つのミスを犯した。“秘密の部屋”に関係した記憶以外の、自分と関わった記憶全てを、忘却させるのではなく限界まで薄めて希釈させた事だ。

それはより自然にドラコが日常生活を送れるようにするための計らいだったが、薄めた記憶は想起しにくくなっただけで、ドラコの心の内に確かに存在していた。夜空に輝く星々が昼間に見えないよう

に。非常に強い執念と想い、そして切っ掛けがあれば、記憶を取り返す事は不可能ではなかった。

彼はゆっくりとした動作でベッドから立ち上がり、窓辺へ近づいた。マルフォイ家は客人として招かれているため、一般のキャンプ場ではなく、特別区域に建築された別荘に宿泊している。カーテンを開けて外の様子を見ると、キャンプ場の上空に緑色の光が花火のように次々と打ち上がっていった。黒々とした集団が、空中に何かを浮かばせて振り回している。爆発音と、人々の悲鳴や怒号、笑い声が飛び交っている。そんな非現実的な光景をドラコは無表情で見つめながら、手首に巻いた銀のリボンを解いてギョツと握り締めた。

やがてドラコは自室を出て、広々としたダイニングルームへ向かった。窓際の近くに置かれた椅子に腰掛けて、ナルシッサが外の様子を静かに眺めている。ルシウスの姿はない。時々炸裂する緑色の光が、彼女の険しい表情を映し出している。ドラコが母親の対面に腰掛けると、彼女は我に返ったかのように息子を見つめ、微笑んだ。

「大丈夫ですよ、ドラコ。あの集団は純血の者に害を成しません」

ドラコはその事に応えず、黙ってナルシッサの前に銀のリボンを突き出した。彼女の顔が見る見るうちに冷たく凍り付いていく。

「母上」ドラコははつきりと言った。

「イリスの事を思い出しました」

余りの事にナルシッサは言葉を失い、どうする事も出来ずにドラコの目を見つめた。——この子はイリスの事をファミリーネームではなくファーストネームで呼んだ。“忘却術”はそう簡単には破れない。イリスの力がまだ未熟で魔法が不完全だったのか、ドラコの魔法力が非常に強かったのか。だがナルシッサは、魔法が破られたのはそんな単純な理由だけではなく、何か大きなものの力が働いているような気がした。

思い返せば、夫が“イリスの呪いが発動した”と言った日に、息子は不思議な夢を見たと言った。それからずっと塞ぎ込むようになった。そして奇しくも“死喰い人”達が大騒ぎをしたこの日に、ドラコは記憶を取り戻した。

——かつてドラコはエルサに命を救われた。今回の出来事とその事と関係があるのか、それとも呪いや魔法を打ち破る程の思いや絆が二人の間にあるのか。ナルシッサには分からない。ただ、何のために息子は二度目の生を受けたのか、その理由が今なら分かるような気がした。ドラコは体の中から毒を吐き出すように苦しげな声で、言葉を続けた。

「イリスと僕はとても親しかった。だけど今はそうじゃない。どれだけ思い出しても、僕らが仲違いをした原因が分からないんです。それに夢の中でイリスは僕に助けを求めている。どうすれば彼女を助ける事が出来るの？」

俄かに窓の外が強く輝いて、大勢の悲鳴が上がった。程なくして別荘の玄関で物音がし始めた。——夫が帰って来た、時間がない。ナルシッサは夢中でドラコの手を握り締め、押し殺した声で言った。

「ドラコ。この事は誰にも知られてはなりません。父上にもです。私からはこれ以上、何も言えない。そしてどうすればイリスを助ける事が出来るのか。その答えはあなた自身の手で見つけるのです」

やがてダイニングルームの扉を開け、マルフォイ家の当主であるルシウスが帰って来た。ドラコは静かな決意を秘めた眼差しで、銀のりボンをポケットに突っ込み、父の目に触れないようにした。

## P e t a l 4 . 本当の敵は誰？

ハリーはベッドに横たわり、夢と現実の狭間にふわふわと浮かんで、微睡んでいた。そうしていよいよ夢の世界へ飛び立とうとする時、わずかな異変を感じてハリーは五感を研ぎ澄ませた。——それは小さな音だった。ハリーが意識を集中させると、その音はどんどん大きくなり、はつきりと聴こえるようになった。炎がゴウゴウと唸って薪を燃やし、パチパチと火の粉が爆ぜる音——“暖炉の火が燃える音”だ。ハリーはゆっくりと目を開いた。暗闇の中にオレンジ色の光が現れ、ゆらゆらと揺らめきながら周囲の様子を映し出す。

——気が付くと、ハリーはどことも見えない大きな部屋の中で、ゴーストのように浮かんでいた。床に敷かれたカーペットの上には埃が降り積もっている。暖炉の前には古めかしい肘掛け椅子が置いてあった。椅子はちょうどハリーに背を向けるような位置にあったが、誰も座っていないように見えた。その時、部屋の奥——暖炉の炎が届かない暗がりの中から、小さな男が一人現れた。尖った鼻に丸く小さな目を持ち、ずんぐりとした姿はどこともなくネズミに似ている。小男は椅子に向かい、おどおどと戦いた声で言った。

「我が君、お腹がお空きのようでしたら、まだ少し瓶に残っておりますが」

「あとにする」

すると椅子の近くから、別の声があった。不自然に甲高く、冷たい声だ。ハリーは周囲を見回したが、声の主はどこにも見当たらない。声の主は苛立つ感情を隠す事なく舌打ちし、歯噛みしながら言葉を続けた。

「ああ、あれの魂、魔法力が恋しい。なんと美味だったことか！あれぞ“甘露”と言うに相応しい。一口飲む毎に、この弱った身体に力が満ち溢れてくるのを感じられた」

「前の満月の夜に、お召し上がりになっていたではありませんか」

小男は引き攣った声で宥めようとしたが、声の主の嘆きは止まらなかった。

「ほんの少しだ。あの古いぼれがまた邪魔をした。もう俺様には、再びあれに取り憑く力は残されていない」

シューシューと空気を吐き出すような不思議な音がして、小男は怯えた悲鳴を上げた。巨大な蛇が埃だらけの床を悠々と這いずって、椅子の近くへやって来た。暖炉の炎が、蛇の黒々とした菱形模様をキラキラと輝かせる。やがて小男の嫌悪感と恐怖心が入り混じった激しい息遣いに紛れ、液体のようなものがポタポタと落ちる音が聴こえてきた。冷たい声の主は、嘆かわしいとばかりに溜め息を零した。

「本来ならば、あれが俺様の世話をする筈だった。忠実なるしもべの娘が」

「私も忠実なるしもべでございます」

小男は喘ぎながらも言い返した。その声には、はつきりとした口惜しさが含まれている。小男は椅子の前まで行くと、しゃがみ込んだ。何かを飲み込む、弱々しい音が聴こえてくる。しばらくの間、静寂が訪れた。やがて冷たい声が残酷に嘲笑った。

「忠実なるしもべだと、ワームテール？笑わせるな。今のお前の表情を鏡に映し、見るが良い。お前は他に頼るところもなく、恐怖心から俺様に従っているに過ぎない」

「そんな、私は心からあなた様に忠誠を誓っております。あなた様のためならどんなことでも！」

小男は激しく体を揺すり、命乞いをするかのように悲痛な声でキーキーと叫んで、椅子の近くへ身を投げ出した。冷たい声の主はそれを楽しむかのように笑っている。

「殊勝な心掛けだな。確かにお前はいくつか素晴らしい行いをした。お前が盗んだ指輪は貴重な財源となり、高価な薬の材料を入手するのに役立つ。それにあの女は命と引き換えに、俺様に良い情報をもたらしてくれた」

小男はごくりと生唾を飲み込んだ後、慌てて口を開いた。まるで気が挫けない内に、無理にでも言ってしまうかのように言った。

「本当に、決断されるおつもりですか？他の魔法使いでもよろしいの

では？」

「ハリー・ポッターでなくてはならぬ。俺様が昔以上の力を手に入れるためには」冷たい声には、脅すような響きが籠もっていた。

「時は来た。“父親の骨、しもべの肉、敵の血”。それらを手にする準備は整った。もう決定した事だ、ワームテール。議論の余地はない」突然、ガタガタと大きく震え始めた小男の姿をどうやって見たのかは分からないが、声の主はゾツとするような冷たい笑い声を上げた。「ワームテールよ、俺様の言った事をもう忘れたのか？お前は忠実なるしもべではない」

小男の震えがピタリと止まった。椅子の近くから再び冷たい声が出た。その声には底知れない執着心と欲望の感情が渦巻き、ギラギラと輝いている。

「あの娘の血肉はその為にある。至誠しせいのしもべはホグワーツへ向かった。ハリー・ポッター、そしてイリス・ゴント。二人の子供は最早、我が手内にある」

☆

ハリーは目を覚ました。額の古傷が、焼き鑊を押し付けられたかのように痛んでいる。――あれは夢だったのだろうか。ハリーは懸命に呼吸を整えようとしながら、必死に考えた。だとしたら、なんて生々しい夢だったんだろう。

サイドテーブルに置いた金色の懐中時計に手を伸ばし、その曇りな鏡面を覗き込んだ。傷跡はいつもと変わらないが、まだ刺すように痛い。ハリーは今しがた見たばかりの夢の内容を懸命に思い出そうとした。――暗い部屋がぼんやりと思い出された。小男はピーター、そして姿こそ見えなかったけれど、あの冷たく甲高い声の主はヴォルデモート卿だ。そう思っただけで、ハリーの胃袋に氷の塊が滑り落ちるような感覚が走った。

ヴォルデモートは小さい頃に僕の両親を殺し、今までも何度も僕を殺そうとしてきた。いや、それだけじゃない。ハリーは懐中時計をグツと握り締めた。――あいつはイリスの両親も殺した。そして忌々しい呪いでイリスを縛っている、僕の敵だ。ハリーの凍り付いた

心はたちまち怒りの炎で、激しく燃え盛り始めた。彼は顔をしかめ、夢の内容を更に詳しく想起しようと集中した。

しかしハリーが思い出そうと躍起になればなるほど、まるで両手で掬った砂のように、細かな事が指の隙間からスルスルと零れ落ちて行つた。——ピーターとヴォルデモートが、何かの計画について話していた。そしてそれには自分とイリスが必要だと言つていた。ハリーは消えゆく夢の残骸の中から、辛うじてこの二つの事実を掴み取つた。

次の瞬間、シリウスの顔がパツと思ひ浮かび、ハリーは思わず俯いていた顔を上げた。『そうだ、彼にこの事を知らせなきゃ』——ハリーは生まれて初めて“大人に頼ること”を覚えてくれた大好きな人物を思い浮かべ、ギョツと手を握り締めた。

☆

小さな頃から、ハリーは大人に頼つたり、甘えたりすることが苦手だった。困つた時に手を差し伸べ、助けてくれるような大人が周りにいなかったのだ。新しい家での生活が始まると、ハリーは自分を息子のように愛してくれるシリウスとどう接しているのかわからず、思い悩むようになった。二人の暮らしは、まるで錆びだらけのブリキ人形のようにギクシャクとした有様だった。

おまけにダーズリー家の人々は、何かにつけてハリーを“心ない言葉の暴力”で傷つけて育てて来たため、ハリーは自尊心にも欠けていた。『またおじさんやおばさんみたいにシリウスにも嫌われて、ダーズリー家に戻れと言われたら？』——ある日、そんな恐ろしい考えがハリーの心を支配して、ついに彼は“自分が何をしたいのか”という事も分からなくなつてしまった。やがて石像のようにカチコチと固まつてしまったハリーを見て、シリウスは穏やかにこう言つた。

「ハリー。十二年間、私達は離れ離れだった。これから十二年かけて、その空白を埋めていこう。焦らなくていいんだ。ゆっくりでいい、少しずつでいい、ありのままの君の姿を見せてくれ」

次の日、シリウスはハリーと共にダイアゴン横丁へ向かつた。そして魔法界とマグル界双方の流行を取り入れた大型洋装店へ行くと、ハ

リーの新しい服や靴、小物などを購入した。シリウスは卓越した審美眼で、少年の体格や雰囲気合い、着回しもしやすいベーシックなデザインのものをつくも選んだ。——ハリーは試着室で新しい服を着た自分の姿を見て、面食らった。ダドリーのぶかぶかなお古を着ていた、さつきまでの姿とはまるでかけ離れている。

「こんなの似合わないよ。変だ」

両手に大きな紙袋を下げ、恥ずかしそうに周囲の視線を気にしながら歩くハリーに、シリウスはきつぱりと言った。

「いいや、とても良く似合っている。ハンサムだよ。君はもつと自信をもつべきだ」

ハリーの試練はそこで終わらなかった。昼食を食べ終わると、シリウスは評判の良い美容院へハリーを連れて行った。——ハリーは遠慮して縮こまった。何しろ自分の髪はすぐ伸びる。あまりに早く伸びるので、ダーズリー家にいた時はバーノンおじさんが頻繁に切っていたし、在学中は自分で切っていた。髪の長さは気になっても、髪型なんて一度も気にした事がなかったのだ。

「ごめん、シリウス。僕の髪はすぐ伸びるから、お金を掛けたってきつと意味ないよ」

「知ってるよ。君のお父さんもそうだった」シリウスはニヤツと笑った。

「だがプロが切った方が、髪が伸びてもスタイルを維持しやすいんだ」

そうして、ハリーは生まれて初めて美容院でのカットを経験した。あくまで魔法界の美容院なので、マグルの世界での美容院がどのようなかは分かり兼ねるけれど、七色の泡で洗われるシャンプーはとても心地よかったし、ハサミとクシが空中で社交ダンスを踊りながら自分の髪を切っていく様子は見応えがあつて面白かった。あつという間に作業は終わり、鏡の前には——まるで別人のように洗練された男の子が映っていた。いくらお洒落に疎いハリーでも、以前のみすぼらしい姿より、今の方がずっと素敵だと思えた。ハリーは初めて自分の外見に少しでも自信を持った。

「まるであいつが、ジェームズが帰ってきたみたいだ」シリウスは少し



掠れた声で言って、笑った。

ハリーの外見をプロデュースし終わったシリウスは、今度は彼の内面へ目を向けた。プロデューサー・シリウスは、『どうせ』『僕なんて』から始まる、ハリーが自分自身を否定する言葉と真正面から向き合っている、何故そう思うのかをじっくり話し合って、解決策を一つずつ見出していった。ハリーの中のネガティブな感情は少しずつ消えてゆき、やがてそこから自信の種が芽を出して、すくすくと育っていった。

それからシリウスは『ハリーが“何かをしたい”と言う事』をとっても喜んだ。ハリーが行きたいという場所は、どんな突拍子もない場所だろうが連れて行き、食べたいと言ったものはどんな高価なものでも食べ、遊びたいと言ったものはどんな危険なものだろうが手に入れて、一緒に遊んだ。ハリーがどれだけ無茶な我儘を言っても、シリウスはありのままを受け入れてくれ、時には子供を愛する親として冷静に叱ってくれた。

シリウスが与える無償の愛情は、まるで春の息吹のように暖かく、ハリーが十二年間かけて作り上げた氷の仮面や皮肉の鎧をいとも容易く解かし、壊してくれた。ハリーは乾いたスポンジのように愛情と栄養を吸収し続け、数週間経つ頃には身体がたくましくなり、年相応の少年らしい心を持つまでに快復した。そうしていつの間にか、呼吸するように自然な感じで、シリウスを頼る事が出来るようになっていった。

——シリウスは僕がどんな突拍子のない事を言っても信じ、僕を案じてくれる。ハリーは夜明けが早く来る事を心待ちに思い、ベッドに潜り込んだ。

☆

ハリーが不吉な夢を見てから数時間後、イリス達は再び起き出して、キャンプ場を出発する準備を始めた。アーサーがあんなにこだわっていた手作業ではなく、魔法でテントを畳んでくれたので、片付け作業はとてもスムーズに進んだ。キャンプ場を離れ、途中で受付小屋の戸口を通ると、受付人のロバーツがぼーっとした表情で「メリークリスマス」と手を振って挨拶してくれた。

「大丈夫だよ」心配そうにロバーツを見つめるイリスに、アーサーが優しく言った。

「大規模な記憶修正を掛けられると、一時的に酩酊状態になるんだ。だがじきに治る」

イリスはホツとして肩を撫で下ろした。一行が“移動キー”の置かれていた場所に近づくと、大勢の人々が押しかけ、担当の魔法使いを取り囲んで、とにかくキャンプ場を早く離れたいと大騒ぎしていた。みんなは列に並び、“移動キー”の古タイヤに乗って丘まで戻り、“隠れ穴”へ帰り着いた。“隠れ穴”の入り口ではモリー夫人が真っ青な顔で待っていて、帰って来たみんなを見るなり、アーサーの首っ玉に抱き着いてさめざめと泣き始めた。

その時、夫人の手から“日刊予言者新聞”が滑り落ちた。イリスが近寄って拾い上げると、新聞の一面に巨大な見出し——“クイティッチ・ワールドカップでの恐怖”——が書かれ、梢の上空に“闇の印”がチカチカ輝いている写真が引き伸ばされて掲載されている。イリスは写真の下にずらずらと並ぶ記事に目を通した。

“森の外れで怯えながら情報をいまや遅しと待ち構えていた人々は、魔法省から早急な安全確認の知らせを期待していたが、みんな見事に失望させられた。” “闇の印”の出現から暫くして、魔法省の役人が姿を現し、誰も怪我人は出なかつたと主張し、それ以上の情報を提供することを拒んだ。それから一時間後に、数人の遺体が運び出されたという噂や、“闇の印”の下で暴れ回るペティグリューらしき男を目撃したという噂を、この発表だけで十分に打ち消す事ができるかどうか疑問である”

“それから一時間後に、数人の遺体が運び出されたという噂や、“闇の印”の下で暴れ回るペティグリューらしき男を目撃したという噂”——イリスはその一文を指でなぞり、首を傾げた。印の下にいたのは明らかにピーターではない別の男性だったし、死人だって誰一人出していない。誰がこんな根も葉もない噂を流しているんだろう。

「思った通りだ。記者はリーター・スキーター・・・ああ、やれやれ」ふと後方から弱り切った声が聴こえ、イリスは振り返った。アー

サーがイリスの肩越しに覗き込み、その記事を読んでいる。そして彼は嘆かわしいとばかりに溜め息を零した。

「アーサーさん。本当にこんな噂が立ってるの？」  
「まさか」

アーサーは大袈裟に肩を竦めてみせると、イリスの手から新聞を取り上げ、代わりにブランデーを垂らした熱々の紅茶が入ったカップを持たせた。

「スキーターはでっち上げの中傷記事が大得意なフリーライターだ。だがこんなことを書かれたら、確実にそういう噂が立つだろうね」

それから一週間、アーサーとシリウスとパーシーは家を出た切り、ほとんど家へ帰らなかった。朝はみんなが起き出す前に家を出て、夜は遅くまで帰らない日々が続いた。モリー夫人は働きづめの夫を心配し、少しピリピリとした様子だ。いよいよ明日ホグワーツに帰るといふ日曜日の夜、やっとパーシーだけが帰って来て、遅い夕食を摂りながら、事の次第をもったいぶった口調で教えてくれた。

パーシー曰く、キャンプ場に来ていた人々がワールドカップでの警備の苦情を“吼えメール”にしたためて山のように送り付けたため、一週間ずつとその火消し作業や苦情の対応に追われていたのだという。悪いことは続くもので、その数日後、さらに火に油を注ぐような事件が起きた。お騒がせ新聞記者、リーター・スキーターが新たなネタ——“バーサ・ジョーキンスの行方不明事件”——をどこからか嗅ぎ付け、尾ひれはひれを盛大に付けた上で、大々的に書き上げたのだ。“吼えメール”は再び豪雨のように魔法省へ降り注ぎ、対処しきれなかった部署でボヤ騒ぎが何度も起きたという。

☆

月曜日の朝は、生憎の激しい雨模様だった。シリウスはとある一軒家の庭先で、散らばったゴミを片付けていた。——そこは、アラスタ・ムーディという老年の魔法使いの家だった。現在こそ一線を引いているが、アズカバンの独房の半分はムーディが埋めたとされているほど、往年の彼は非常に実力ある“闇祓い”だった。しかしその分、彼を恨む者も多くいて、彼らから数々の報復を受ける度に、次第

にムーデイは激しい被害妄想に取り憑かれるようになった。やがて人間関係のトラブルを何度も起こすようになり、仕事だけでなく日常生活にも支障をきたし始めて、彼は“闇祓い”を引退した。

だが引退してからも、ムーデイの被害妄想は健在だった。今、シリウスがここにいるのもそれが原因だ。——昨日の深夜頃、ムーデイは自宅の庭先に何者かが侵入する音を聞いたのだと言う。防犯の魔法が掛かった庭のゴミバケツ達が侵入者に反応し、轟音を立ててそこら中にゴミを発射し、その様子を運悪くマグルの警察が発見してしまった。魔法界において、マグルに魔法を見られることはご法度だ。魔法省にたまたま早朝出勤していたエイモスがいち早くその情報を察知して、ムーデイの被る罪が最小限で済むようにとアーサーに取り成してくれなければ、彼はもつと酷い罰を受けていただろう。

シリウスは庭を一望し、腕を組んで思索した。——アーサーは『きつと野良猫か何かを侵入者だと見間違えたんだろう』と言っていたが、彼と同じようにこの出来事を『ムーデイのいつもの被害妄想だ』と割り切ることは、今のシリウスには出来そうになかった。——イリスの呪い、“死喰い人”共の馬鹿騒ぎ、打ち上げられた“闇の印”、行方不明のバーサ・ジョーキンズ、指名手配中のピーター・ペティグリュウ、そしてハリーが見たと教えてくれた“不吉な夢”。一見して何の関わりもなさそうなこれらの事柄が、まるで一つの意志をもつて動いているような気がする。妙にきな臭い。心の奥底から言いようのない不安が沸き起こり、彼を急ぎ立てた。

その時、シリウスの頭の中に、ある女性の姿がパツと思ひ浮かんだ。——イリスの叔母、イオ・イズモだ。艶やかな黒髪に青い目がよく似合う、竹を割ったような性格の優しい女性。新しい家の引っ越し作業を手伝いに来てくれた時、二人はお互いの子供達を通じて、親交を深めていた。イリスの呪いが発動したと聞いてからずっと、シリウスはイオの身も案じていた。シリウスは調査を終えたアーサーに許可を取り、キングズ・クロス駅へ向かった。

☆

シリウスがキングズ・クロス駅に到着すると、駅の構内のベンチに

イオがポツンと腰かけているのが見えた。物憂げな表情で、降り続く雨をじつと眺めている。シリウスは近くのカフェでコーヒーを二つテイクアウトし、隣に座った。しばらく見ない間に、彼女の顔はぐつと老け込んだように見えた。

「大丈夫か？」

シリウスは気遣わしげに眉を潜め、イオにコーヒーを手渡した。彼女は小さく礼を言って受け取ったものの、口を付ける事無く、首を静かに横に振った。――ハリーという愛する息子を持ったシリウスには、今のイオの苦しみが身に沁みるようだった。それでなくとも彼にとって、命の恩人であるイリスは大切な存在だ。シリウスは真摯な眼差しでイオを見つめ、口を開いた。

「イオ。君の苦しみは分かる。だがどうか私達を信じてくれ。あの子を守ると約束する」

イオはしばらくの間、何も言わずにカップから立ち昇る湯気を見つめていた。やがて彼女は小さく笑い、奇妙に上擦った声で、滔々と話し始めた。

「ああ、信じてたよ。今までずっとな。だがその結果がどうだ？」

一年目は森の中で恐ろしい化け物に追いかけられた。二年目は亡霊に操られて酷い目に遭わされた。三年目は言われもない中傷を受けて心を壊し、極悪人に正気を失うまで拷問を受け、悪い魔法使いに誘拐されかけ、得体の知れない奴に魂を吸われかけた。どんどん・：どんどん酷くなる。そして今年は、いつ死ぬかも分からない爆弾みたいな呪いと来た」

イオは唇を噛み締め、黙り込んだ。膝の上に置いた両手がガタガタと震え、カップ内のコーヒーは今にも零れそうなほど不安定に揺れている。シリウスが固唾を飲んで見守る中、イオは何とか心の乱れを落ち着けることに成功し、カップに視線を注いだまま、静かな口調でこう言った。

「だが、闇の帝王に従えばあの子は呪いに殺されない。ルシウス・マルフォイがそう教えてくれた」

イオの口から“ルシウス・マルフォイ”の名が飛び出した瞬間、シ

リウスの灰色の目が剣呑な輝きを帯びた。——“死喰い人”共の馬鹿騒ぎを指揮し、罪のないマグルをいたぶり、見世物にしたあの男性懲りもなくまた悪事を働いていたのか。あいつがイリスを手に入れようとする目的など知れている。“自己保身”、ただそれだけだ。シリウスはほとぼるる激情に任せ、強い口調でイオに迫った。

「イオ、戯言を真に受けるな。あいつはイリスを救うつもりなんてない」

「あんたらだつて、あの子を救うつもりなんてないだろうが！」

突如として、イオがヒステリックに叫んだ。カップを足元に叩きつけ、シリウスの胸倉を力任せに掴み上げる。シリウスは返す言葉もなく、目の前のイオの顔を茫然と見つめた。——彼女の青い目は光を失くし、深い絶望の感情で濁り切っている。カップからコーヒーが零れて二人の足を汚し、行き交う人々が好奇の視線を投げかけても、イオの激情は止まらなかった。彼女はますますシリウスに迫り、口調を荒げた。

「綺麗事ばかり言いやがって！あんたにわたしの苦しみの何が分かる？じゃあ、想像してみろよ。あんたの息子があの子と同じ立場になって、わたしがあんたと同じ事を言ったら、あんたは納得するのか？『ああ信じるよ、元気が湧いて来た』ってな！」

己の傲慢さに打ちひしがれ、シリウスはされるがままとなり、何一つ言い返す事など出来なかった。“愛する子供を持つ親として、イオの苦しみが分かる”——とんだ思い上がりだった。シリウスが想定していたよりもずっと深く暗い場所で、彼女は一人ぽつちで苦しみ、悲しんでいたのだ。やがてイオは我に返り、ヒステリーを起こした自分が何をしてしまったのかを理解した。わなわなと震える手で顔を覆い、声にならない謝罪の言葉を繰り返すイオを、シリウスは抱き締めて慰めることしかできない。

「イオ。イリスの呪いは、ダンブルドアとルーピンが研究を進めている。ヴォルデモートは私達が必ず倒す。あの子は私を救ってくれた。その恩に報いたい。どうか、どうか信じてくれ」

『信じてくれ』——それしか言えない無力な自分を、シリウスは恨ん

だ。

☆

ホグワーツ特急が発車する十五分前、構内のロータリーにタクシーが二台留まり、中からウィーズリー家の子供達、モリー夫人、ハリー、イリス、ハーマイオニーが転がり出てきた。イリスのあどけない表情を見た瞬間、イオはボロボロになった自分の心臓が、一瞬の内に回復していくのを感じた。イリスはイオを見つけると、彼女の腕の中へ一直線に飛び込んで幸せそうに笑った。その様子をフレッドとジョージがからかっても、どこ吹く風だ。

『離したくない』——イオはギュツとイリスを抱き締めながら、心からそう思った——『このまま連れて帰りたい』。だけど、この子はホグワーツへ行くべきだ。あの子の両親がそう言ったのだもの。それにイリス自身もホグワーツに行きたがっている。シリウスやみんなを信じなければ。イオは断腸の思いでそう決断し、イリスの体を引き剥がした。イリス達は9と4分の3番線の柵を通り抜け、ホームへ入り、列車に駆け寄って、運良く中程に空いたコンパートメントを見つけ、荷物を押し込んだ。

イオはイリスのほっぺと額にキスをして優しく抱き締めながら、一心に祈りを捧げた。——虹蛇様、私ならどうなっても構わない。どうかこの子を呪いから、他の脅威からお守りください。やがて列車の汽笛が鳴り、イリスは元気良く列車に駆け戻った。列車の窓から身を乗り出して、イリスは大好きな叔母に向け、一生懸命手を振った。イオは列車がホームを離れ、角を曲がって見えなくなってしまうまでも、ずっとその場から動く事が出来なかった。

☆

「私の手紙は読んでくれたかね？」

後方から気取った声がして、我に返ったイオは急いで振り返った。

——ルシウス・マルフォイが立っている。何時の間にか、ホームには人氣がほとんどなくなっていた。イオは警戒した表情でルシウスを睨み、応えた。

「ああ、読んだよ」

「それは結構」ルシウスは微笑した。

「そう言えば、あれは・・・シリウスは、君になんと言っていた？」

「・・・」私達を信じろ」とイオは歯噛みしながら応えた。

「そうだろうな」ルシウスは世界一つまらないジョークを聴いたような顔をして、軽く笑った。

「きつとあの子にも同じ事を言い続けるだろう。馬鹿の一つ覚えのように。あの子が呪いに蝕まれ、苦しみもがいて死ぬ時までずっと」

「やめろ!!」

イオは狼狽える余り、震える声で叫んだ。——あの子が苦しみもがいて死ぬだって？そんな恐ろしい事、想像したくもない！イオは今や、嵐のように荒れ狂っている自分の感情を制御しようと、懸命に努力した。冷静に考えろ、こいつの口車に乗っては駄目だ。ネーレウスが『闇の帝王はイリスに対して異常な執着心を抱いている』と警告していたじゃないか。イオは確かめるような口調で、ルシウスにこう言った。

「闇の帝王に従えば、あの子は今まで通り平穏には暮らせなくなる。そうだろう？」

「イオ。まさか君は・・・ダンブルドアの下にいればイリスが平和に生きる事が出来ると思っているのか？」

ルシウスは芝居がかった動作で眉を上げると、信じがたいものを見るような目でイオを射竦めた。

「直にあのお方が復活すれば、我々とあの老いぼれとの戦いが始まる。イリスはどちら側につこうが、戦いの最中に身を投じる事になるだろう。戦いはゲームじゃない、命懸けだ。イリスがそれを望まなくとも、生き残るために人を傷つけ、殺す事だっている。」

だが、一つ約束しよう。私なら、あの子を戦わせないようにあのお方に進言できる。呪いもこれ以上増大させない」

その言葉は、イリスを愛するイオにとつて“悪魔の囁き”も同然だった。彼女の脳内に、イリスと歩んできた日々の記憶が走馬灯のように駆け巡っていく。その余りの輝かしさに彼女はふらりとよろめきながらも、ルシウスをはったと睨んだ。



「信じないぞ。あんたはイリスを何度も陥れ、傷つけた」

「その必要があつたからだ」

しかしルシウスは動じる事無く、揺るぎない口調で言い放った。まるで自分は何も悪いことはしていないと言わんばかりの様子だった。「あの呪いは、宿主の魂が闇に蝕まれるほど……つまり、恐怖や憎しみ、悲しみといった“暗い感情”に宿主が襲われるほどに早く発動する。発動が遅くなればなるほど、呪いの威力は強大になる。だからこそ、私はあえてイリスを奈落の底へ突き落とすような行動を繰り返した。ホグワーツにいる親しい友人にも協力を仰いだ。

だが、それでも遅すぎた。君達の家系の血が、随分と邪魔をしてくれたおかげでね」

ルシウスは口惜しそうに歯噛みし、上質なステッキで苛立たしげに地面を突いた。

「ネーレウスは六歳の時に呪いが発動し、それから十七年生きた。イリスは十三歳でやっと呪いが発動した。

さあ、あと何年生きられる？ 膨れ上がった呪いは、たった一度の叛逆であの子を殺すかもしれぬ。良く考えろ、イオ。イリスにとつての本当の敵とは誰だ？」

やがてルシウスが去って行ってしまっても、イオは“金縛りの呪い”を掛けられたように、その場から一步も動く事が出来なかつた。――『「本当の敵」とは誰だ？』、その言葉がイオの耳の中で何度もリフレインし、心の奥底へ沈んでいった。

☆

ドラコはコンパートメント内で一人、窓際の席に腰掛けて、じつと物思いに耽っていた。窓を打つ豪雨で、窓の外は殆ど何も見えない。クラブとゴイルは一足先に車内販売に行くとして出て行った。列車が動く音と降りしきる雨音が、ドラコの思考をより深く掘り下げていく。

ドラコは記憶を取り戻したあの夜から今朝に至るまで、隙を見ては自室に籠もって、自分の記憶を何度も思い返し、その情報を羊皮紙に書き起こして、イリスとの関係性が変わった“具体的な時期”を探つ

た。元々ドラコは物覚えが良く、一度見たり聞いたりしたことは忘れにくい性分だったため、この作業は苦ではなかった。

ドラコの努力は奏を成し、“具体的な時期”は明らかになった。――『二年前の夏休みから二年生の学期が終わるまでの間』だ。ウィーズリー家に行こうとしたイリスを、父が強制的に我が家へ連れ去ったその時から、ドラコの記憶に“謎の空白”が生まれるようになった。二年次の学期の後半辺りは空白が特に著しく、思い出せるような記憶がほとんどない。唯一覚えているのは、学期の終了した頃に“イリスと決別しても良い”と父から連絡があつた事くらいだ。それ以降ドラコの記憶に空白が生まれる事はなく、イリスとはずっと疎遠な状態が続いている。

ちょうどこの時期に、ホグワーツに眠る“秘密の部屋”が開かれた。去年に、ギルデロイ・ロックハートという元教師の詐欺師が、その事件の全貌を本に書き起こしている。――そう言えば、ロックハートは何故こんな本を出版したのだろう。ドラコはローブのポケットから赤い装丁の本――『継承者とこつそり一学期 ギルデロイ・ロックハート著』を取り出し、表紙をまじまじと見つめた。夜の闇横丁でスリザリン生の知人が手に入れ、話題作りにとくれたものだ。

新聞ではロックハートを“愚かな嘘吐き”だとこき下ろしていたが、実際に彼から記憶を盗まれた被害者は、みんな実力ある魔法使いや魔女達ばかりだった。少なくともロックハートは、彼らから返り討ちに遭う事無く記憶を盗み取り、その記憶を自分のものとするために、周囲の人々を含めた緻密な情報操作をやり通す頭脳と才能があつた。

しかしこの本は、内容はいくつか真実に沿っている点はあるものの、他はほぼ全くのデタラメで、犯人は実在する学生――イリス・ゴーストだった。しかもイリス本人や周囲の人々の記憶を消す事無く出版し、真偽の追及を逃れるため、彼は行方を晦ませた。ロックハートはその本を出すという行為が、いかに危険であるかを分かっていた。冷静に考えて、僕が彼と同じ立場なら絶対にそんな危険を冒さない。誰かに強制でもされない限りは。

『半分は嘘で、半分は本当』——三年生の終わり頃、イリスが大広間で言った言葉がふと思いきこされた。

おかしいのは自分の父もだ。一年目の時はイリスを自分の娘のように可愛がり、その次の年は“呪いのコイン”を贈ってまで我が家へ連れて来るほど執着していたのに、その年の終わりには自分に“イリスとの関係を断て”と言った。しかしイリスの実名が出されたロツクハートの本が出版された時には、彼女を率先して庇い、魔法省に多額の寄付をして、彼女を守るための進言を繰り返していた。だが、父自身が問題解決のために動く事はなかった。——本当にイリスを大事に思っているなら、あんな大騒ぎになる前にどうにかして揉み消す筈だ。そうでないなら何故イリスを庇う？父は好まない相手にはとことん冷酷だ。

『誰にも知られてはなりません。父上にもです』——記憶を取り戻したあの夜、母が真剣な表情で言った言葉がふと脳裏を掠めた。

その時、ドラコの脳裏に“ある光景”が浮かび上がった。——いつもポーカーフェイスを崩さない父が、犬歯を剥き出しにした獰猛な笑みを浮かべている場面だ。その妄想とも現実ともつかない恐ろしい姿に、ドラコはたまらずブルツと震え上がった。本の内容の真偽については定かでないが、実際に“秘密の部屋”は開かれ、その間の記憶が自分からすっぽりと抜け落ちている。『恐らく、父と僕は“秘密の部屋”事件に関係していた可能性がある』——ドラコは記憶の欠片を取り戻してからわずか数週間で、早くも真実に迫り始めていた。

☆

コンコンと控えめにドアをノックする音が響き、自我を取り戻したドラコは顔を上げた。クラツブとゴイルは、間違っても“ドアをノックする”なんて上品な真似はしない。『一体誰だ？』——ドラコは訝しげに眉を寄せた。やがてドアが静かに開いて、スリザリンの制服に身を包んだ青年がそっと顔を覗かせた。

「こんにちは、マルフォイ」

青年は媚びをたっぷり含んだ笑みを浮かべ、ドラコに挨拶した。その顔を見て、ドラコは思い出した。——確か彼は、自分の一学年上の

先輩だった筈だ。彼の父は聖マンゴ魔法疾患傷害病院に勤務していて、自分の父と親交があった事を覚えている。青年はドラコが後輩であるのにも関わらず、不自然な程にへりくだった態度を崩さなかった。

「僕の父が、君の父上には是非御礼を申し上げてくれ」と。聖マンゴへまた寄付をしてくれたんだろう？」

「ああ、その事か」

ドラコは慣れた様子で頷いた。父はしばしば病院や孤児院などへの寄付や、様々な奉仕活動や慈善事業、いわゆる<sup>ノブレス・オブリージュ</sup>「貴族の義務」を行っていた。そこに勤務する親を持つ子供達から、大人の代理として感謝の謝辞を告げられる事は、ドラコにとって珍しい事ではない。

「父に良く言っておくよ」

そう言うと、青年は愛想笑いをし、扉を閉めて出て行くとした。——その時、ドラコはある事を思い出した。聖マンゴにはロックハートがいる筈だ。ドラコが何気ない振りを装ってその事を尋ねると、青年は俄かに目を輝かせた。そして開き掛けた扉を閉め、もったいぶった口調でこっそり耳打ちをし始める。

「そのことについて面白い話があるんだ。ただ、これは患者の個人情報に当たるからくれぐれも内密にね。君と僕だけの秘密としてほしい」

恩着せがましい青年の様子に内心苛立ちながらも、そういった感情は微塵も見せずに、ドラコは興味深そうな表情を作って話の続きを促した。そんなドラコの反応に気を良くしたのか、彼は滔々と話し始める。

「ロックハートの悪行は知ってるだろう？彼が聖マンゴに来てから、  
“まともな見舞客”なんて来なかった。来るのは彼に報復しようとする被害者ばかり。彼の為に高価なハナハツカ薬が何本も消費されて、魔法薬課は大迷惑さ。」

だが数ヶ月前について来たんだ、“まともな見舞客”が。——イリス・ゴーントだ。前学期の終わり頃、ファツジ大臣に連れられてやって来たゴーントは、ロックハートを抱き締めて涙を流して労わったら

しい。おまけに彼を楽しませるための魔法のパレードを実行したんだと」

青年の語った言葉は、俄かには信じられないものだった。『イリスがロックハートを労わった？』——彼女の行動の真意が掴めず、ドラコは無意識の内に青年を見つめた。彼は話の真偽を疑われたと思つたらしく、焦った口調でまくしたてた。

「本当さ。ロックハートのカルテに書いてあつたのを父が見たんだ。間違いない」

「車内販売よ、お坊ちゃんたち」

話の腰をポツキリ折られた二人が声のした方を見ると、扉を半分ほど開けた販売員の魔女がニコニコと笑っていて、彼女の目の前にはどつさりのご馳走を積んだワゴンがあつた。青年はドラコに別れの言葉を告げて、自分のコンパートメントへ帰って行つた。

ドラコはワゴンの上に蛙チョコレートの箱が山積みになされているのを見た時、あることを思い出した。——去年、列車の中でデイメンターに襲われた時、ノットが蛙チョコレートをくれたが、誰から貰つたのかは教えてくれなかつた。あの時は頭痛が邪魔をしてそれ以上深く考える余裕などなかつたが、一体誰がああチョコレートをくれたんだ？

次の瞬間、ドラコが予想した相手は余りにも都合が良すぎる人物だった。——それは予想ではなく願望だ。ドラコは静かに首を横に振って、自分に言い聞かせた。「イリスが僕にくれた」なんて。あの時、僕は彼女に何と言つて侮辱した？

だけど、僕だつてそうしたくてそうした訳じゃない。ドラコは必死に自分に言い訳をし、今までイリスにぶつけてきた、数々の罵詈雑言の礫つぶてから目を逸らそうと躍起になった。それでもしなければ、とてもじゃないが罪の気持ちに耐えられそうもない。イリスを見る度に湧き起こる暗い気持ち、僕をそうするように駆り立てた。ドラコは自分にそう言い聞かせた後、はたと気が付いた。そもそも、このやり場のない苦しみ、憎しみ、怒り、嫉妬の感情はどうして発生するんだ？僕はイリスを愛しているのに。

その時、ドラコはクイディッチ・ワールドカップの競技場で見た、ポッターの姿を思い出した。しばらく見ない間に、ポッターは随分と垢抜けていた。外見の変化は心境の変化に通じると聞く。『まさかあいつとイリスは付き合っているんじゃないだろうか』——嫌な予感がよぎり、ドラコの背中を冷汗が伝った。もしかして、自分はイリスに嫌われたから何かの拍子で記憶を失くし、疎遠になったのだろうか。だから彼女を見るとこんな気持ちに襲われるのだろうか。ポッターとイリスが仲睦まじくいる様子を想像するだけで、心臓がギュツと握り潰されたかのように息苦しくなり、ドラコは苦痛に喘いだ。

全てが分からない。あらゆる人物が疑わしく思える。何もかもが不透明で、不確かだ。誰も真実を教えてくれないし、どうすれば謎を解き明かせるのかも分からない。ドラコは蛙チョコレートを一つ買い、じつと眺めた。——だけど、僕はイリスを愛している。それだけは、はつきり分かる。その思いがある限り、どんな相手が立ちほだかろうが、僕は決して諦めたりなんてしない。どんな手段を使っても、この手に彼女を取り戻して見せる。——ドラコは体の底から力が湧き上がってくるのを感じた。心の中には永遠に消えない炎が燃え盛り、自分が進むべき道を明るく照らしている。

ドラコはほとぼしる熱い情熱を込め、蛙チョコレートの箱に強く口付けた。そしてその様子を呆気に取られて見つめる販売員の魔女に、このワゴンがこれからグリフィンドール生が固まっている車両へ向かうかどうかを尋ねた。

☆

その頃、イリス達はコンパートメント内で他愛無いお喋りに興じていた。部屋の片隅では、ヘドウィグが落ち着きのないピッグウイジョンに“伝書フクロウの何たるか”をこんこんと説教し、サクラが時々優しくフォローを入れていた。クルツクシャンクスはハーマイオニーが買ってくれた“魔法猫用またたび入りクッキー”を夢中になつて齧っている。

やがて車内販売のワゴンがやって来た。イリスがドルーブルの風船ガムと杖型甘草飴、それから蛙チョコレートの箱を一つ買うと、販

売員の魔女がポケットから箱をもう一つ取り出して彼女に押し付けた。

「あなたへのプレゼントですよ。誰からは秘密！」彼女はこっそり耳打ちし、悪戯っぽく微笑んだ。

イリスは貰った箱を上げ上げと眺めた。『誰からは秘密』——誰がくれたんだろう。その時、イリスが予想した相手は余りにも都合が良すぎる人物だった。まさか、ドラコの筈がないよ。自分の儂い希望を打ち消すように首を横に振り、イリスは箱を開けて、逃げ出そうとする蛙を器用に摘まみ上げ、口に放り込んだ。

「何のカードだった？」

ハリーがかぼちやパイにかぶり付きながら、イリスに尋ねた。彼女は口をもぐもぐさせながら、箱からカードを取り出して小さな歓声を上げた。見た事のないカードだ。額飾りを付けた美しい女性が、イリスに向かって上品に微笑んでいる。イリスは嬉しそうにハリーに写真を見せ、カードの裏面を読み上げた。

「アルウエン・ウンドーミエル。」「永遠の命を捨て、限られた時間を愛する者と共に生きる事を選んだ」だって。とってもロマンチックな人だね」

「そうだね」

ハリーはイリスの分の魔女鍋ケーキを大きめに切り分けながら、優しく言った。

## Petal 15. アラスタター・ムーデー

ホグワーツ特急は徐々に速度を落とし始め、やがてホグズミード駅に停車した。列車の扉が開いたとたん、濃灰色の空がパツと明るく輝き、その直後に凄まじい音量の雷鳴が轟いて、イリスは思わず首を竦めた。外は土砂降りで、みんな背を丸め、目を細めて降りた。まるで頭から冷水をバケツで何杯も浴びせかけるように、雨は激しく降り続けている。嵐の音に紛れ、ハグリッドの声が聴こえたような気がして、イリスは前方に目を凝らした。ハグリッドがランプを振り回し、一年生達を引率していくのが見える。——伝統に従い、一年生達をボートに乗せて湖を渡らせるのだ。

「こんなお天気の時湖を渡るなんて、ホントに可哀そう」ハーマイオニーが呻いた。

イリスもこれには同感だった。こんな嵐のような天候では、ホグワーツ城の美しい景観なんてろくに見る事が出来ないのに違いない。四人は人波に混じって暗いホームをのろのろと進み、なんとか駅の外に出ると、ずらりと居並ぶ馬なしの馬車の一台にいそいそと乗り込んだ。そしてびしょ濡れの顔を突き合わせて、雨に打たれる事なく快適にホグワーツへ行ける事を感謝した。

羽根の生えたイノシシの像が両脇に並ぶ門を通り、嵐のように激しく吹きすさぶ雨風に耐えながら、馬車は正面玄関のがっしりした檜の扉へと上る石段の前でピタッと止まった。四人は無言で目線を交わしたあと、示し合わせたように馬車を飛び降り、石段を一目散に駆け上がった。玄関の中に入ってから、四人はやつと顔を上げた。

「さあ、止まらずにどんどん進みなさい！」

玄関ホールではマクゴナガル先生が待ち構えていて、余りの寒さに震えるばかりの哀れな濡れ鼠達に向け、容赦なく言い放った。四人は一息吐く間もなく、水でできた大きな足跡を残しながら玄関ホールを進み、途中で悪戯ゴースト・ピーブスによる赤い水風船爆撃を受けながら、なんとか大広間へ辿り着いた。大広間は例年通り、見事な飾り付けが施されている。各寮の長テーブルには生徒達がぎっしり座り、



杖を振って体を乾かしたり、衣服を絞って水気を取ったりしながら、他愛無いいお喋りに興じていた。

グリフィンドールのテーブルに向かい、それぞれの定位置に腰掛けると、四人はやつと人心地付いたような気がした。イリスは早速マントを脱ぎ、ギユウと絞って水気を取りながら、職員テーブルを見た。嵐と戦いながら一年生を連れて来るハグリッドを手伝うためなのか、軽い洪水状態のホグワーツ城を掃除するためなのか、理由は分からないけれど、半分ほどの空席がある。テーブルを端から端まで眺めていると、スネイプがこちらをじつと見つめているのに気が付いて、イリスはちよこんとお辞儀をした。スネイプは良く注視していなければ分からないほど、かすかな動きで黙礼した後、「天文学」を教えるシニストラ先生との会話に戻った。

「闇の魔術に対する防衛術」の新しい先生はどこかしら？」

豊かな栗色の髪をギユツと握って水気を取りながら、ハーマイオニーが言った。彼女の言う通り、去年「闇の魔術に対する防衛術」を担当していたルーピン先生は皆に惜しまれながらも退職してしまったので、今年もまた新しい先生が教鞭を取る手筈となっている。——そう言えば「闇の魔術に対する防衛術」の先生は不思議な事に一年以上続いた試しがない。イリスは空っぽのお腹を摩りながら思った。もしかしてこれもホグワーツに秘められた謎の一つなのだろうか。

「たぶん誰も見つからなかったんじゃないかな」

ハリーがスニーカーを脱ぎ、ひっくり返して中の水を捨てながら言った。テーブルの中央にはダンブルドア校長先生が座っていて、半月眼鏡の奥から天井を見上げて、何か物思いに耽っている様子だった。イリスもつられるようにして天井を見上げた。天井は魔法で本物の空と同じに見えるようになっていて、こんなにひどい荒れ模様とたん、天井に木の枝のような形の稲妻が走り、みんなが床に捨てた水で創り出された、小さな湖を輝かせた。

その時、大広間の扉が開いて、みんなしんと静まり返った。マクゴナガル先生を先頭に、一列に並んだ一年生の長い列が大広間の奥へと

進んでいく。一年生の状態は、イリス達よりもずっとひどかった。湖をボートで渡って来たというより、泳いできたみたいにならず濡れた。マクゴナガル先生が三本足の丸椅子を一年生の前に置いて、継ぎ接ぎだらけの古い三角帽子、“組分け帽子”を置く。かくして帽子は歌い出し、組分けの儀式は滞りなく行われた。

一年生が一人ずつ呼ばれては、叫んだ寮のテーブルへ駆けていく様子を、イリスはぼんやりと見守っていた。マルコム・バドックという生徒が、今回の組分けで初めてスリザリン寮に選ばれた時、イリスは何気なくスリザリンのテーブルを見てしまい、慌てて顔を戻そうとした。

その時、拍手を送る人々の端の方で、小さな人だかりが出来ている事に気づき、イリスは目を凝らした。人々の中心には一人の少女がいて、具合が悪そうに俯いて、両手で口元を抑えている。“深窓の令嬢”という言葉が良く似合う、儂げな雰囲気少女だった。やがて監督生に連れられてスネイプが大股で歩いて来ると、少女を連れてどこかへ去って行った。きつと医務室へ行ったのだろう。

——大丈夫だろうか。きつと嵐のような天候に影響を受けて、気分不良を起こしたのだろう。イリスがそう思って心配していると、俄かに目の前の金の皿がご馳走でいっぱいになった。組分けの儀式は、無事に終了したらしい。よほどお腹が空いていたのか、ロンは猛烈な勢いでステーキを切り分けて口いっぱい頬張り、早速喉に詰まらせて、呆れ顔のハーマイオニーに介抱されている。ハリーは大皿に沢山の料理を載せ、イリスの隣にやって来た。イリスは自分とハリーのゴブレットにかぼちやジュースを注ぎ、二人で仲良く並んで、他愛無い会話を楽しみながら美味しい料理に舌鼓を打っていた。するとグリフィンドール付きのゴースト、“首無しニック”がやって来てこう言った。

「今晚はご馳走が出ただけでも運が良かった。さつき厨房で問題が起きましてね」

「もんひゃい？」ハリーがステーキの塊を口いっぱい頬張りながら訊いた。

ニックが言うにはこうだった。——悪戯ゴースト、“ピーブス”が、祝宴に参加したいと駄々をこね始めたため、彼を参加させるべきかどうかを『ゴースト評議会』で吟味した。しかしスリザリン付のゴースト、“血みどろ男爵”が頑なに拒否し、ピーブスの願いは叶わぬ夢となつてしまった。今までのピーブスの行いを鑑みれば当然の結果ではあるのだが、その事に機嫌を損ねた彼は、あろうことかホグワーツの厨房に忍び込み、盛大に暴れ回ったのだと言う。調理器具も料理も何もかもひっくり返しての大暴れで、厨房で働いている屋敷しもべ妖精達は幸いな事に怪我こそなかったものの、皆物も言えずに怯え切つてしまったのだとか。

「ちよつと待つて」

その時、ハーマイオニーが恐怖に引き攣つた声で叫んだ。その尋常ではない声色に、イリスはヨークシャーピングを切り分ける手を止めて、彼女を見た。——ハーマイオニーの知性に輝く顔は、今や大いなる絶望に染まり、青白く光る目がニックを凝視している。彼女の取り落した金のゴブレットからオレンジジュースが零れて、テーブルクロスにじわじわと広がっていったが、その事を気に留める余裕すらないようだった。

「屋敷しもべ妖精が、このホグワーツにもいるってどういうの？」

「さよう」ニックは当然至極といった調子で応えた。

「イギリス中のどの屋敷よりも大勢いるでしょうな」

「だけど、今まで私、一人も見た事ないわー」ハーマイオニーが猛然と言り返す。

「そう、日中は滅多に厨房を離れることはないのですよ」

ニックは、ハリーがかぶり付いているキドニーパイを羨ましそうな目でじつと見つめながら言った。

「夜になると、出て来て掃除をしたり、火の始末をしたり……つまり姿を見られないようにするのです。良い屋敷しもべ妖精の証拠なのですよ。“存在を気づかれない”というのは」

ニックの言葉に、イリスは納得して一人頷いた。——いつも談話室の暖炉の火を熾してくれたり、部屋をきれいに掃除してくれたり、い

くら食べてもお皿から湧き上がって来る料理を作ってくれたりしているのは、ホグワーツ城にかかった魔法ではなくて、大勢の屋敷しもべ妖精達だったのだ。イリスはプティングを切る作業を再開しながら、マルフォイ家で過ごした記憶を思い返していた。

屋敷の中で時々見かける妖精達は皆、家の人々に対していつも忠実で、命令された以上の事をテキパキとこなしていた。だがマルフォイ家の人々は、そんな健気な彼らを労ったり、感謝の言葉を送ったりする事は一度としてなかった。ハーマイオニーはごくりと生唾を飲み込み、確かめるような口調でニックに尋ねた。

「でもお給料はもらってるわよね？お休みとか、病欠とか、年金とかも色々」と

その言葉がよほど面白かったのか、ニックは豪快に笑い出した。あんまり高笑いしたので、ひだ襟がずれ、真珠色の薄い皮一枚でかろうじて繋がってる首が今にも落ちそうにグラグラしている。

「屋敷しもべ妖精に給料ですって？」ニックは涙を零しながら言った。「彼らは自分の働きに報酬を望んでいません。主人に無休無償で奉仕する事が名誉なのですから。ましてや病欠や年金なんて、彼らには生涯縁のないものですよ！」

恐らくニックの言う通り『屋敷しもべ妖精は主人に奉仕する事こそが名誉だ』という考えが魔法界の常識として根付いているのだろう。しかし中には、彼らの献身に礼を尽さぬどころか酷い虐待をしたり、不当な理由で解雇するような心無い主人達もいる。せめてホグワーツに勤める屋敷しもべ妖精達が悲しむ事のないように、目の前にある料理を感謝して食べなくては。

イリスが決意を新たにし、一口大に切ったプティングを咀嚼し始めた一方で、ハーマイオニーは恐ろしい程の無表情で、ほとんど手を付けていない自分の皿を見下ろしていた。ニックが去って行ってしまっただけから、彼女はナイフとフォークを置いて皿を遠くへ押し遣った。ハーマイオニーは料理を食べない事で、屋敷しもべ妖精の不当な待遇に抗議する意志を示したのだ。色んな味のソーセージを一口ずつ食べ比べようと、嬉々として切り分けていたイリスはそんな彼女に

異議を唱えた。

「勿体ないよ、ハーミー。せつかく作ってくれたのに」

「そうだぜ」ロンが牛肉の煮込みをかつ込みながら援護した。

「君が絶食したって、屋敷しもべ妖精が病欠を取れるわけじゃないよ」

「“奴隷労働”よ」ハーマイオニーは気色ばんで言い放った。

「このご馳走を作ったのが、それなんだわ。奴隷労働！」

ハーマイオニーはそれ以上、一口も食べようとしなかった。やがて皿の料理が種々様々なデザートに代わり、イリスが幸せ一杯の表情で、焼き立ての糖蜜パイにアイスクリームをたっぷり添えて食べようとした時、ハーマイオニーが待ったを掛けた。

「“奴隷労働”なのよ、イリス」

イリスは口をあんぐり開けたまま、ピタツと動きを止めた。ハーマイオニーはほとばしる情熱を込めた声で追い打ちをした。

「可哀想なウインキーを思い出して！」

イリスの頭の中に、クラウチ氏に縋り付いて泣きじやくる、哀れな屋敷しもべ妖精の姿が思い起こされた。——可哀想なウインキー。彼女は今、どうしているだろう。確かにハーミーの言いたい事は分かった、イリスは思った。屋敷しもべ妖精は、無休無償の過酷な状態で日々働いている。しかし目の前の糖蜜パイを食べない事が、彼らの不当な扱いに抗議する事と同義だとは思えない。イリスはそう決断を下し、溢れる食欲のままにパイを味わった。

「どうして食べるのよ！」

ハーマイオニーの猛烈な怒りを物ともせず、イリスは口の中のパイとアイスクリームの魅惑的なハーモニを楽しみ、しっかりと飲み込んでから、本来大人しい気質の彼女にしては珍しく熱弁を飛ばし始めた。

「ハーミー。確かに屋敷しもべ妖精はとても可哀想だっと思う。だけど、その事とお料理は別だよ。このお料理の一つ一つは、屋敷しもべ妖精が私達のために心を込めて作ってくれたものだよ。食べれば“愛情の籠もった味”だって、決して嫌々作らされたものじゃないって、ちゃんと分かる。それを食べないっていう抗議はダメだよ。本当

にそうするつもりなら、何か別の方法を考えた方が良い」

「ワーオ。君って食べ物絡むと、ホントに必死だな」ロンがドン引きしながら言った。

ハーマイオニーは親友の言葉を受け、何事かを考えているようだった。やがてデザートもきれいさっぱり平らげられ、最後のパイ屑が消えてなくなると、ダンブルドアが立ち上がった。大広間を満たしていたざわめきが一斉に止み、聴こえるのは風の唸りと叩きつける雨音だけになった。ダンブルドアは例年通り、管理人のフィルチの場内持ち込み禁止品が一部更新された事、禁じられた森は立ち入り禁止だという事、ホグズミード村への観光は三年生から許される事を告げ、最後に特大の驚くべき爆弾を放った。——なんと『寮対抗のクイデイツチ試合は、今年度は取り止めになる』と言うのだ。

「エーッ！」

ハリーは絶句した。彼は優れたシーカーであると同時に、クイデイツチに関してはウツドに負けない位の情熱と努力を注いできた。イリス達もハリーの活躍する姿を見るのが大好きだった。それなのに今年いっぱい中止だなんて。イリス達も戸惑いを浮かべた表情で目線を交し合う。今までクイデイツチは余程の緊急事態でなければ、嵐だろうが何だろうが開催されていたのに、一体どうしてなんだ？ チームのビーターを務めるフレッドとジョージに至っては余りの衝撃に言葉を失くしたのか、ダンブルドアに向かって、酸欠の金魚のように口を空しく開閉させる事しか出来ないようだった。ダンブルドアはそんな二人の様子を労りに満ちた目で見守り、言葉を続けた。「これは十月に始まり、今学年の終わりまで続くイベントのためじゃ。しかし、わしは皆がこの行事を大いに楽しむであろうと確信しておる。ここに大いなる喜びをもって発表しよう。今年、ホグワーツで——」

その時、耳をつんぎく雷鳴と共に大広間の扉がバタンと開いた。

——戸口に一人の男が立っている。長いステッキに寄りかかり、黒い旅行マントを纏っている。男はフードを脱ぎ、馬のたてがみのような長い暗灰色の髪をブルツと振るうと、教職員テーブルに向かって、

ぎこちなく体を引きずりながら歩き出した。片足は義足で、一歩踏み出す毎にコツツという鈍い音が、静まり返った大広間に響いた。稲妻が男の姿をくつきりと浮かび上がらせ、その歪な顔が一ミリの隙もないほど傷で覆われていることを映し出した。最も不気味なのが男の目だ。片方は黒く小さな普通の目だが、もう片方は明るい青色をしていて絶えずグルグルと動き回っている。とても迫力のある、恐ろしい風貌の男だった。イリスは椅子に縛り付けられたかのように固まって、男の様子を見守る事しか出来なかった。

大広間中の誰もが口を閉ざし、男に視線を注いだまま、ピクリとも動けなかった。男は教職員テーブルまでやって来て、ダンブルドアと握手をし、示された席に座ると、目の前に置かれたソーセージの皿を持ち上げて匂いを嗅ぎ、ポケットからナイフを出してソーセージを刺して豪快に食べ始めた。その間もブルーの目は休む事なく動き回っていたが、ふと目がこちらを見て、そのままピタツと静止した。イリスは飛び上がるほどびっくりして、ハリリーの背中にさっと隠れた。『闇の魔術に対する防衛術』の新しい先生を紹介しよう「静まり返った中で、ダンブルドア先生の明るい声が言った。

「ムーディ先生です」

しかしダンブルドアとハグリッド以外は、誰も握手をしなかった。二人の拍手だけが静寂の中でパラパラと寂しく鳴り響き、すぐに止んだ。他の全員はムーディの余りに不気味な有様に言葉もなく、ただじっと見つめるばかりだった。

「ムーディって、マッド・アイ・ムーディ？」後ろ手でイリスの膝をポンポンと優しく叩きながら、ハリリーがロンに訊いた。

「もしかして、君のパパが今朝助けに行った人？」

ロンは魅入られたような眼差しでムーディを一心に見つめながら、「たぶん」と頷いた。——それを聞いて、イリスは思い出した。今朝早くに、アーサーは魔法省に早朝出勤したエイモスに緊急要請を受け、「マッド・アイ・ムーディ」なる人物を助けに行ったのだ。彼は往年は優秀な闇の魔法使い捕獲人、つまり「闇祓い」だったが、現在は心を病んで引退しているとビルから聞いた。まさかムーディがこんな

に迫力のある人で、おまけに「闇の魔術に対する防衛術」の新しい先生だなんて。

「なあ。なんであんなに傷だらけなんだ？」ロンが目を凝らしながら呟いた。

「知らないわ」ハーマイオニーが囁き返した。

ムーデイはお世辞にもあたたかいとは言えない歓迎ぶりにも、全く無頓着のようだった。目の前のかぼちやジュースのジャーには目もくれず、ポケットから携帯用酒瓶を取り出してグイグイと飲み始める。やがてダンブルドアが咳払いし、みんなの注目は彼へ戻った。ダンブルドアはキラキラと光る青い目で生徒達を見渡し、朗々とした声で語り始めた。

「さて、これから数ヶ月に渡り、我が校は誠に心躍るイベントを主催するという光栄に浴する。この催しはここ百年以上行われていない。この開催を発表するのは、わしとしてもおおいに嬉しい。

今年、ホグワーツで“三大魔法対抗試合”を行う」

その瞬間、大広間中が大きな歓声と笑い声に包まれた。さつきまで絶望に打ちひしがれていた筈のフレッドとジョージまでが「御冗談でしょう！」と言って笑い転がっている。——“三大魔法対抗試合”って何だろう。イリスが首を傾げていると、ダンブルドアが和やかになった場の雰囲気を楽しむかのように笑いながら、説明を始めた。

——“三大魔法学校対抗試合”とは、およそ七百年前、ヨーロッパの三大魔法学校の親善試合として始まったものだった。ホグワーツ、ボーバトン、ダームストラングの各校から代表選手が一人ずつ選ばれ、三人が三つの魔法競技を争うのだ。五年ごとに三校が回り持ちで競技を主催した。若い魔法使い、魔女達が国を越えての絆を築くには、これが最も優れた方法だと、皆が信じていた。しかしある年に夥しい数の死者が出る事件が起こり、競技そのものが中止された。それから何世紀もの時が過ぎ、その間に何度もこのイベントを復興しようという試みが起きたが、どれも失敗に終わった。しかしこの夏、イギリス魔法省の『国際魔法協力部』と『魔法ゲーム・スポーツ部』が結束し、選手達の安全を守るために万全な体制を整え、各校との綿密な



話し合いを乗り越えて、いよいよ数世紀越しの「三大魔法学校対抗試合」を再興する運びとなったのだ――

「パーシーが言ってたのは、このことだったんだ」ロンがイリス達を見て、興奮した顔で言った。

「鍋底展覧会」よりずっといいや！」

「十月にはボーバトンとダームストラングの校長が、代表選手の最終候補性を連れて来校し、ハロウィーンの日には学校代表選手三人の選考が行われる。優勝杯、学校の栄誉、そして選手個人に与えられる賞金一千ガリオンを賭けて戦うのに、誰が最も相応しいかを公明正大なる審査員が決める」

「立候補するぞー」フレッドが立ち上がり、力強く吼えた。

今やグリフィンドルだけでなくどの寮のテーブルでも、栄光と富とを同時に手にする期待に熱く燃え、顔を輝かせる生徒や、熱っぽい表情で夢を語り合う生徒達の様子を見る事ができた。しかしダンブルドアはそんな彼らに警鐘を鳴らすかのように厳格な口調で、言葉を続けた。

「ただし代表選手になれるのは、十七歳以上の生徒だけじゃ。このことは我々がいかに予防措置を取ろうとも、試合の種目が難しく危険であることから、必要な措置であると判断したためじゃ。年少の者がホグワーツの選手になろうとして、時間を無駄にせぬよう、わし自ら目を光らせることとする」

ダンブルドアの目が、たちまち反抗的な顔つきになったフレッドとジョージを捉えて、悪戯っぽく笑った。

「ボーバトンとダームストラングの代表団は十月に到着し、今年度はほとんどずっと我が校に留まる。外国からの客人が滞在する間、みんな礼儀と厚情を尽すことを信ずる。ホグワーツの代表選手が選ばれた暁には、みんな心からその者を応援するであろうということも。さあ、夜も更けた。明日からの授業に備えて、ゆっくりお休み」

ダンブルドアの号令で、生徒達は一斉に席を離れ、玄関ホールへ繋がる二重扉へ向かって歩き始めた。イリス達はその流れに乗る事なく、立ち尽くしたままダンブルドアを睨み付けるフレッドとジョージ

を見つけて、立ち止まった。

「そりゃ、ないぜー」ジョージはイライラしながら言った。

「僕ら、四月には十七歳だぜ。なんで参加できないんだ？」フレッドが続ける。

「二人とも。さあ、早く行かないと」ハーマイオニーが急ぎ立てた。

「ここに残ってるのは私達だけになっちゃうわ」

イリス達は二人を引きずるようにして連れ出し、グリフィンホール塔へ向かった。タペストリーの裏の隠し戸を通り、悪戯階段に嵌まったネビルを助けつつ、数ヶ月振りの再会を果たした「太った貴婦人」と挨拶を交わし、穴をくぐって懐かしい談話室へ帰り着いても、皆の話題は“三大魔法対抗試合”でもちきりだった。フレッドとジョージは真剣な話し合いの末、“老け薬”を使って少しばかり年を誤魔化し、審査員の目を掻い潜る作戦を思い付いたと言い、イリスに向けて魅惑的なウインクを放った。

「イリス。俺の可愛い子猫ちゃん」フレッドが猫撫で声でやって来て、イリスの顎をくすぐった。

「大好きなスネイプの保管庫から材料をいくつか取って来てくれよ」

「絶対にいやだ」イリスは即答した。

「タダでとは言わないさ」

ジョージは追い継り、イリスにポケットから取り出した金色のカードを手渡した。カードの表面には“WWW・VIPカード”という赤い文字が躍っている。——そう言えばWWWとは何だろう。以前もカナリア・クリーム入りのケーキを食べた時、彼らがその名前を出して笑っていた。

ウイリスリーウイザードウイリス  
「WWWって何？」

イリスが率直に尋ねると、“よくぞ聞いてくれました”とばかりに、ジョージが自慢げに鼻を擦った。

「僕らが創立した“悪戯グッズ専門店”さ。そしてこれは、僕らの商品が半額になる魔法のカード」

「どんな商品があるの？」

イリスが好奇心に駆られて訊くと、ジョージがローブのポケット

から丸めたカタログを取り出し、見せてくれた。——そこには面白そう  
な商品が沢山載っていた。食べると舌が伸びる「ベロベロ飴」、半分  
を食べると気絶・鼻血・発熱・嘔吐などの症状が現れるが、もう半分  
を食べると回復するようになっていて、なりたい症状別のお菓子が  
入った「ずる休みスナックボックス」、手に取ると動物の鳴き声として  
その動物（※但しゴム製）になる「騙し杖」・・・などなど。かつてイ  
リスが引つかかった「カナリア・クリーム」も掲載されている。面白  
そうな商品ばかりだ。彼女は顔を上げて、賞賛に満ちた眼差しでフ  
レッド&ジョージを見つめた。

「二人共、凄いなあ。こんなに面白そうなものを沢山開発できるなん  
て」  
「まあ、それほどでもないさ」フレッドはイリスの肩を抱き、誇らしげ  
に笑った。

「今回の件で君が協力してくれるってんなら、半額どころか、もつと興  
味深い僕ら秘蔵の商品を・・・」

「やめて、イリスを巻き込まないで！」

ジョージが熱心にイリスを口説いていると、その様子を見咎めた  
ハーマイオニーがすかさず彼女の肩をグツと掴んで引き離し、二人に  
凄んだ。

「もう、みんな危機感がなさすぎるわ。死人が出てるのよ」

WWWの若き店主達は「マクゴナガル先生」が来た！」と言って  
笑い、イリスの手からカードとカタログをちやっかりと抜き取って  
去って行った。残念そうな顔をするイリスを引き連れ、女子寮に続く  
ドアを開けて入っていくハーマイオニーを見送りながら、ロンがぼつ  
りと言った。

「僕、立候補するかも。フレッドとジョージがやり方を見つけたら。  
やってみないと分からないしな。・・・千ガリオンだし。君はどう  
する？」

ハリーは頭の中に次々と浮かんでくる輝かしい姿に翻弄されてい  
たので、ロンの言葉にきちんと応える事が出来なかった。——彼が夢  
見ていたのは、審査員を出し抜いて代表選手に選ばれ、大歓声を上げ

る全校生徒の前で、勝利の印に両手を上げて校庭に立つ自分の姿だった。そこには賞賛に顔を輝かせたイリスがいて、うつとりと自分を見つめている。ハリーは力強く彼女を抱き寄せ、熱い口づけを……そこまで考えて、我に返ったハリーは慌てて首を横に振り、馬鹿げた妄想を打ち消した。けれど一度高まった想いはなかなか消えず、ハリーはせっかくな屋敷しもべ妖精が忍ばせてくれた湯たんぽを放り出し、ベッドの上で眠れぬ夜を過ごすこととなった。

☆

嵐は翌朝までには治まっていた。しかし大広間の天井には、まだ鉛色の重苦しい雲がどんよりと渦巻いている。イリス達はいつもの席で朝食を摂りながら、配られたばかりの時間割を確かめていた。四人から少し離れた席で、フレッド&ジョージとリー・ジョーダンが、どんな方法を使えば首尾良く代表選手になれるかを討議している。

「うわ」ハリーが顔をしかめながら、時間割の一部を指差した。

「ここ「占い学」が二時限続きだ」

「ご愁傷さま。貴方達も「占い学」を止めればよかったのよ。私達みたくに」

ハーマイオニーはトーストにバターを塗りながら、イリスに向かって親しみを込めてウインクして見せた。イリスは四年生次より「占い学」を止めて「数占い学」を履修することにしたのだ。あの水晶玉に映った恐ろしい幻覚に戦ったイリスは、ハーマイオニーの勧めで、彼女と同じ授業を取得する手続きを取ったのだ。ともあれ、ハリーの落胆する気持ちはイリスも良く分かる。「占い学」の教室の——あの異様な暑さとむせ返るような香の匂い、そして不吉な事ばかりを口走るトレローニー先生の三重苦を二時限ぶっ続けで耐えるのは、かなりの苦行に違いない。

「ハリー。元気出して」

イリスがハリーの皿にソーセージを入れながら明るく言うと、彼は少し考えるような素振りを見せたあと、悪戯っぽい笑みを浮かべてこう返した。

「君がそれ食べさせてくれたら、元気になるかも」

「ハリーが」それ」と指さしたのは、イリスが入れたばかりのソーセージだった。——どうしてハリーが自分に食べさせてもらったら元気になるのかは分からないけれど、そんな事くらいお安い御用だ。イリスは快諾し、ソーセージを一口大に切り分けフォークで刺して、ハリーの口元へ持つていった。

「はい」

ハリーは戸惑ったような表情を浮かべ、イリスとソーセージを交互に見た。まるで自分の言葉が本当になるなんて思いも寄らなかったと言わんばかりの様子だ。しかしやがて顔を赤らめながらも口を開けて、差し出されたソーセージを食べた。——イリスに食べさせてもらえるなんて。彼は夢心地で咀嚼し、ごくんと飲み込んだ。胸がいっぱい味なんて分からないけれど、ハリーは束の間の幸せに酔いしれていた。向かいの席では、イリスが今度は目玉焼きを切り分け、フォークに差しして自分の口元に持つて行こうとしてくれている。

——その時、ゾツとするような殺意の籠もった視線が背中に突き刺さり、ハリーは思わず振り返った。そのまま注意深く周囲を見渡すが、どのテーブルの寮生達もこちらを見る事無く食事をしたりお喋りをしたりしているばかりだ。さっきのは気のせいだったのだろうか。ハリーは首を傾げながら元の位置に戻り、幸せの続きを堪能した。

しかし、それは「ハリーの気のせい」ではなかった。スリザリン寮のテーブルから、密かにイリスの様子を見守っていたドラコが、彼に向けて殺気を飛ばしていたのだ。ハリーは近い未来、ドラコが買収したお騒がせ記者、リータ・スキータの手により、好き放題のでっち上げ記事を盛大に書かれる事となるのだが、現在の彼はそんな事を知る由もなく、イリスが差し出したパンを幸せ一杯の気分で咀嚼するばかりだった。

「おーや、また食べるようになったじゃないか」

ロンはハーマイオニーの食事風景を見て、勝ち誇ったように笑った。

「何とでも言いなさい」ハーマイオニーはピシヤリと言い返し、トーストを齧った。

「屋敷しもべ妖精の権利を主張するのには、もっと良い方法があるって分かったのよ」

「もっと良い方法」って何？」

イリスがハリーと半分こした林檎をかじりながら尋ねると、ハーマイオニーは「まだ秘密よ。未来の副会長さん」と囁いてにっこりした。ますます訳が分からない。イリスは首を傾げながら、みずみずしいプラムを手を取った。

☆

朝食が終わると、学校の日常——つまり授業が始まった。四人は沼地と化した野菜畑を通り、第三温室に辿り着いて、スプラウト先生の指示の下で、“腫れ草”<sup>フボチユーバー</sup>——真つ黒な太い大ナメクジが土を突き破って直立しているような外見で、テラテラと光る大きな腫れ物が吹き出し、その中に液体のようなものが詰まっている——の膿を集める作業をした。この膿は頑固なニキビを治す薬の原材料となるのだと、スプラウト先生が教えてくれた。膿絞りは癖になるような楽しさがあった。ドラゴン皮の手袋をして腫れたところを突くと、黄緑色のドロツとした膿がたつぷり溢れ出して、強烈な石油臭がした。

次は「魔法動物学」だ。イリス達は芝生を下り、禁じられた森の外れに立つハグリッドの小屋へ向かった。ハグリッドは足元に木箱を数箱、蓋を開けた状態で置いている。近づくと、奇妙なガラガラと言う声が聴こえて来た。時々、小さな爆発音のような音もする。

「おはようさん！」ハグリッドは不気味なほどに清々しい笑顔で四人を迎えた。

「スリザリンを待った方がええ。あの子たちも、こいつを見逃したくはねえだろう。」尻尾爆発スクリユート<sup>だ!</sup>」

「ゴメン、もう一回言って？」ロンが耳をかつぽじりながら尋ねた。

勇敢にも箱の中身を見に行ったラベンダーは、覗き込むなり凄まじい悲鳴を上げて、近くにいたパーバティにしがみ付いた。イリスもこわごわ箱に歩み寄り、そつと中を確認する。——「尻尾爆発スクリユート」は、殻をむかれた奇形のエビのような姿をした、なんとも形容しがたい奇妙な生き物だった。ひどく青白いヌメヌメとした胴

体からは、勝手気ままな場所に足が突き出し、頭らしい頭が見えない。一つの箱におよそ百匹ほど、ひしめいている。体長約十五、六センチほどで、重なり合って這い回り、闇雲に箱の内側にぶつかっていた。体臭は腐った魚のような匂いで、時々尻尾らしいところから火花が飛び、パンと小さな音を上げて、そのたびに十センチほど前進している。「こ、こんにちは」

イリスは恐る恐る挨拶したが、スクリユート・ベイビー達はガヤガヤと好き勝手な事を話すばかりで、ろくに返事もしなかった。ハグリッドは生徒達の引き攣った表情が『スクリユート大好き!』という顔に見えているのか、自信満々な口ぶりで『この生き物の好む餌を見つける事が今日の授業だ』と言い放った。

自分の担当する箱にハグリッドが準備した様々な餌を差し入れながら、イリスは思案した。——この子達はまだ幼すぎて会話も出来ないから、好みの食べ物は何であるかを聞き取る事が出来ない。それにこんな狭いところで密集させては可哀想だ。現に今も、小規模ではあるが仲間外れやイジメが起きているのが確認できる。イリスは顔を上げ、ハグリッドに言った。

「ハグリッド。この子達、もう少し広い場所で過ごさせてあげた方がいいんじゃないかな。お散歩させてあげたりとか」

次の瞬間、イリスの箱からパンと大きな音がして、スクリユートが数匹、大きく飛び上がった。——イジメに耐えかねたスクリユートが、他の者達を巻き込んで反乱を起こしたのだ。不幸な事にハリー達を含む他の生徒は、それぞれの担当する箱内のスクリユートに手一杯で、この事態に気付いていなかった。興奮したスクリユート達は空中で大きく弧を描き、赤々と熱されている鋭い針がびっしり付いた尻尾が、茫然と座り込むイリスに向かって襲い掛かった。

その時、誰かがイリスの腕を強く掴んで引つ張り、彼女はコロんと地面に転がった。イリスの前に着地したスクリユート達はすかさず誰かの足に力の限り蹴飛ばされ、彼らはパンと爆発してネビルのところへ一直線に飛んで行った。

「待って! そんな、ひどいよ・・・」

蹴飛ばすなんて、と言い掛けたイリスは、足の持ち主を見上げて、ピシリと石像のように固まった。——ドラコだった。怒りに燃える灰色の目が、スクリユート・ベイビーに塗れて慌てふためくネビルを冷たく睥睨している。

「僕の方に飛んできた。あのスクリユートが」

ドラコはイリスを見る事無く陰湿な怒りに満ちた声で言い、そのまま去って行った。一連の彼の不可解な行動に、イリスは思わず首を傾げた。ドラコの持ち場は自分と離れている。スクリユートは間違いなく、自分に向かつて襲い掛かって来た。恐らくドラコはたまたま自分の傍を通りかかったのだろう。イリスはそう結論付け、束の間の幸せ気分浸った。ほんのわずかではあるが、彼の近くにおいて言葉を交わせたからだ。イリスはお騒がせなスクリユートを少し好きになった。

☆

——あの忌々しい化け物め！図書室で本を探しながら、ドラコは小さく悪態を吐いた。僕がイリスに目を光らせていなければ、もう少しで彼女が怪我をするところだった。ドラコはハグリッドの能天気な笑顔を思い出し、イライラと歯噛みした。どうやらあの愚かな木偶の坊は、もう一度痛い目に遭いたいらしい。今度またあの不気味なモンスターを授業に出したら、僕は父上に抗議の手紙を書いてやる。ドラコはそう決意を固めると、高ぶった感情を深呼吸して鎮め、目の前の本の題名を確認する事に意識を集中した。——「記憶の一部が思い出せない」という自分の状況と、他者の記憶を想起させないようにする“忘却術”とを結び付けたドラコは、手がかりを求めて“記憶に関する魔法”に関する書物が集められた区域に立ち寄っていたのだ。

ドラコは『忘却術の全て』という医学書を見つけて抜き取ると、周囲に人がいない事を確認してから、真剣に読み始めた。聖マンゴに勤める癒師が、実際に忘却術を掛けられた患者の症例を基に執筆したものだ。読み進めていく内に、やがて彼は興味深い一文に辿り着いた。

——“非常に大切な記憶を忘却させた場合、患者は、稀に術者に対し、激しい憎しみ、怒り、喪失感、不快感を感じ、術者を攻撃するこ



とがある”——

ドラコは震える指先で文章をなぞった。——激しい憎しみ、怒り、喪失感、不快感、この症状は全て思い当たる。“イリスを見た時に起こる感情”だ。力を失くした彼の手から本が滑り抜け、ドサツと床に落ちた。しかし彼はそれを拾う余裕すらなく、茫然と虚空を見つめ続ける事しか出来ない。——本当にこの本の記述を信じるならば、僕は忘却術を掛けられた可能性が高い。そしてその術者はイリスだ。だが何故、彼女は僕の記憶を消した？ 答えのないその問い掛けは、ドラコの心の奥底に沈み、澱のように留まった。

☆

それから二日間は、イリスにとって大きな事件もなく、平和に過ぎ去った。「数占い」はとても面白かった。「魔法薬学」の授業では、スネイプはますますハリーを毛嫌いするようになっていた。ロン曰く、ハリーが自分の髪を整えようと手グシで掻き雑ぜる度に、スネイプの肌に尋常ではない量の鳥肌が立っていたという。それを聞いたハリーはいよいよ挑戦的になり、スネイプをより不快な気分させるための“効果的な身だしなみの整え方”を極めるようになった。

そして木曜日の昼食後は、あのムーディ先生の「闇の魔術に対する防衛術」が予定されていた。彼の授業はとても刺激的で面白いらしい。一足先に受講したフレッド達からそう聞いて以来、イリス達はこの日が来るのをずっと楽しみにしていたのだった。四人は最前列の机の真正面に陣取り、先生を待った。やがて廊下をコツコツと歩く音がして、ムーディが教室へ入って来た。右足の義足をキラリと光らせながら、彼は教科書をしまうように命じると（ロンが顔を輝かせた）、点呼を取り、唸れた声で唸った。

「このクラスについては、ルーピン先生から手紙をもらっている。お前達は“闇の怪物”と対決するための基本を満遍なく学んだようだな。まね妖怪や赤帽鬼、水魔など。そうだな？」

みんながガヤガヤと同意すると、ムーディは節くれだった両手をパッと叩いた。

「宜しい。この一年でわしが教えるのは、“闇の怪物”ではなく“魔

法使い同士”の対決についてだ。わしらがどこまで呪い合えるものなのか、お前達を最低線まで引き上げる。魔法省によれば、わしが教えるものは反対呪文であり、そこまでで終わりだ。違法とされる”闇の呪文”がどんなものか、六年生になるまでは見せてはいかん事になっっている。

しかし、見た事がないものからどうやって身を守ると言うのだ？今しも違法な呪いをかけようという魔法使いが”これからこういう魔法をかけます”などと教えてはくれまい。お前達の方に備えがなければならん”

ムーデイはそこで一旦話を区切り、好き勝手に動き回るブルーの目でラベンダーをじろりと睨め付け、彼女がテーブルの下で「占い学」の宿題を広げてパーバティに披露している事を注意してから、再び口を開いた。

「さて、魔法法律により最も厳しく罰せられる呪文が何か、知っている者はいるか？」

——”最も厳しく罰せられる呪文”、その言葉を聴いた瞬間、イリスは徐々に心臓の鼓動が早まってくるのを感じた。理由は分からないう。けれど、足の先からじわじわと不安感や焦燥感が込み上げて来て、イリスは余りの不快さに身震いし、椅子の上で小さく縮こまった。二つ隣に座るロンが手を挙げて、自信のなさそうな口ぶりで応える。「えーと、パパから聞いた事があるんだけど、確か”服従の呪文”とかなんとかか？」

「その通りだ。お前はウィーズリー家の息子だな？」ムーデイはロンを褒め、彼は照れ臭そうに頷いた。

「数日前、お前の父親のお蔭で窮地を脱した。・・・そう、彼なら確かにそいつを知っているはずだ。一時期、魔法省を手こずらせた事がある」

ムーデイはグイと勢いを付けて立ち上がり、机の引き出しからガラス瓶を取り出した。——黒い大蜘蛛が三匹、中でガサゴソ這い回っているのが見えた。蜘蛛が苦手なロンは、ぎくりと体をこわばらせた。イリスは一瞬、瓶の中に閉じ込められた彼らが自分の姿に見えて、強

い吐き気と眩暈を覚えた。——違う、あの蜘蛛達は私じゃない。イリスはギョツと目を瞑り、自分自身に何度も言い聞かせた。ムーデイは瓶から蜘蛛を一匹掴み出し、掌に載せて、みんなに見えるようにした。そして杖を向け、呪文を唱えた。

「インペリオ、服従せよ」

その呪文を聴いたとたん、イリスの体からサーツと音を立てて血の気が引いて、頭の中が真っ白になり、呼吸がしづらなくなった。——彼女は深い恐怖と絶望に喘ぐ中で、ルシウスやピーターにその呪文を唱えられた事を思い出した。あの蜘蛛も、かつて自分が与えられた“自我を失う程の圧倒的な多幸感”を感じているのに違いない。蜘蛛は細い絹のような糸を垂らしながら、ムーデイの手から飛び降り、糸を切つて机の上に着地したかと思うと軽快なタツプダンスを始めた。イリスにはそれが、ルシウスやピーターに操られ、意志を失くした人形のように動く自分の姿にしか見えなかった。陽気な蜘蛛のダンスを見て、イリスとムーデイ以外の皆が大笑いする。

「面白いと思うのか？」ムーデイが低く唸った。

「わしがお前達に同じ事をしたら、喜ぶか？」

皆の笑い声が一瞬にして消え、後味の悪い沈黙が訪れた。噛み締めるように、ムーデイは言った。

「完全な支配だ」

——“完全な支配”。その言葉が、イリスの背中にずしつと押し掛かった。そう、イリスは抗う事ができなかつた。日記を自分のものだと思ひ込み、ピーターの下へスニジェットに変身して飛んで行った。ムーデイは蜘蛛に掛けた魔法を解除し、瓶の中にしまいながら、『ヴォルデモートの全盛期、誰が無理に動かされているのか、自らの意志で動いているのか、そこを見分けるのが魔法省にとって一仕事だった』と締めくくった。

「服従の呪文」と戦う事はできる。これからそのやり方を教えていこう。ただ一筋縄ではいかん。強い意志が必要だ。できれば呪文を掛けられぬようにした方が良い。油断大敵！」

突然のムーデイの大声に、皆びつくりして飛び上がった。そんな様

子を気にする事無く、ムーデイは厳しい表情で生徒達をぐるりと見渡した。

「他の呪文を知っている者はいるか？何か禁じられた呪文を？」

ハーマイオニーの手が拳がると同時に、ネビルの手も拳がった。ハリー達は驚いて目を見張り、少しざわめいた。彼がいつも自分から進んで応えるのは、他の科目よりも得意な「薬草学」の授業だけだったからだ。何よりもネビル自身が、手を挙げた事にびっくりしている様子だった。

「何かね？」ムーデイは唸った。

イリスは今すぐここを飛び出したい、と強く思った。体じゅうから冷たい汗が吹き出してきて、とても気分が悪い。でも目の前にはムーデイ先生がいるし、両隣にハリーとハーマイオニーが座っているの、簡単には出られない。何より、みんな集中して話に聴き入っている。“逃げたいのにそうする事ができない”という状況は、過去のトラウマに苦しむイリスを追い詰め、激しいパニック状態へ追いやっていった。——お願い、ネビル、答えを言わないで。イリスは震える両手を組んで、願った。きつとその答えを私は知ってる。

「『磔の呪文』です」

しかしイリスの願いは通じなかった。ネビルは小さな、けれどもはつきりと聴こえる声で応えた。ムーデイはしばらくの間、何も言わずにネビルをじっと見つめていた。

「お前はロングボトムという名だな？」やがて魔法の目を名簿に走らせ、ムーデイは言った。

ネビルはおずおずと頷いたが、ムーデイはそれ以上追及しなかった。そしてガラス瓶から二匹目の蜘蛛を取り出し、机の上に置いた。蜘蛛は恐ろしさに身が竦んだらしく、じっと動かない。そしてイリスだけに聴こえる小さな声で、助けを求めている。

《助けて、誰か助けて》

「やめて……」

イリスは恐怖に見開いた双眸から涙を流し、蚊の鳴くような声で囁いた。涙でぼやける視界の中で、テーブルの上で立ち竦む蜘蛛と、

ピーターに“磔の呪文”を受けて床に転がる過去の自分の姿とが重なって見えた。ムーディは目の前にいる彼女の様子に気付いていた筈なのに、作業を止めようとはしなかった。彼は蜘蛛をより状況を分りやすくするために肥大化させ、杖を振り上げる。

「クルーシオ、苦しめ！」

たちまち、蜘蛛は脚を胴体に引き寄せるように内側に折り曲げてひっくり返り、七転八倒し、痙攣し始めた。イリスの耳に、蜘蛛の声にならない絶叫が突き刺さる。——その時、何の前触れもなく、イリスの体に痛みが走った。思い出したくもない、毒ナイフで何度も体を突き刺されるかのような、あの悪意に満ちた痛みだ。イリスがまだ痛みの弱い箇所に縫ろうと無意識に身を振るたび、面白がるようにそこを激しく責め立てる。“磔の呪文”とその犠牲となった蜘蛛は、イリスの心から恐ろしい記憶を引き摺り出し、かつてピーターから受けた拷問の痛苦を再体験させた。その耐え難い痛みによりイリスはたまらず身を振り、泣き叫んだ。

「あああああああつ・・・!!」

イリスの尋常ではない事態を察して、ハリー達は口々に何かを叫びながら取り押さえようとした。しかし激しい錯乱状態にあるイリスは、今自分の周りにいる全ての人間がピーターに見えて、自分自身が傷つくのも構わず、無茶苦茶に暴れ回った。その時、ネビルが蒼白な表情で、イリスを助けようと近づくハリーを力任せに押しつけた。

「どいてー」

ネビルは切羽詰まった声で叫び、イリスの懐に入り込むと、彼女の口にシュツと何か液体のようなものを吹きつけた。彼女は無意識の内にそれを飲み込んだ。するとたちまち意識はぼんやりと霞み、硬直していた体の力は急速に緩んでいった。——真っ白な世界の中で、温もりと共に優しい男の子の声がする。

「ママ、大丈夫だよ。ゆっくり呼吸して」

やがてイリスは自我を取り戻し、そっと目を開けた。すぐ目の前にネビルがいて、自分を抱き締め、涙を浮かべて心配そうに見つめている。彼だけではない、今やクラス中の人々がイリスを取り囲み、痛々

しいものを見るような眼差しを向けていた。

ムーディは静かな口調でイリスとネビルに教室の外で待つようにと指示したため、二人はふらふらとした足取りで教室を出た。イリスは物も言わずに廊下の窓に飛びつき、大きく開けて、みずみずしい外の空気を思いつきり吸い込んだ。そして何度も頭を振るい、脳裏にこびりつく拷問の記憶の残滓を追いやった。まだ体じゆうがズキズキと痛くて、気持ちが悪い。過去のトラウマに苦しむイリスの様子を見て、とうとうネビルはこらえきれずに声を上げて泣き始めた。

「ご、ごめんね！」ネビルはしゃくり上げた。

「僕が答えを言っちゃったから。怖い思いをさせて、本当に、本当にごめん！君がペティグリュウに・・・まさか、〃磔の呪文〃を受けてたなんて知らなかったんだ！」

「ネビルのせいじゃないよ」イリスは我に返り、慌てて取り成した。「授業だったんだもの。それより、助けてくれて本当にありがとう」

ネビルはイリスの傍にそっと座り込み、背中を優しく撫でてくれた。そしてローブのポケットから小さな硝子製の香水瓶を取り出して、じつと見つめた。中には透明な液体が詰まっている。——イリスはおぼろげな記憶の中で、何かを飲み込んで気分が楽になった事を思い出した。きつとこれがそうなのだろう。ネビルはチラツとイリスを伺い見てから、今にも消え入りそうな声で話し始めた。

「これ、〃安らぎの水薬〃を含んだ鎮静剤なんだ。ママがパニックになった時に使うんだよ。・・・僕のパパとママ、聖マングゴに入院してるの。」

僕がまだ小さい頃に、〃死喰い人〃に〃磔の呪文〃を何度も掛けられて、心を壊しちゃったんだって。もう僕の事を覚えてないし、ずつとボーツとしてる。そう言えば、最近ロックハート先生が同じ病室に入ってきて、僕びつくりしちゃった」

ネビルはふつと笑った。その言葉を受け、イリスはロックハートの病室へお見舞いに行った時の事を思い起こした。——彼の病室には、分厚いカーテンが閉じられたままのベッドが二台あった。ろくな見舞客の来ない彼を哀れんだ癒師は『あのベッドにいる両親は良く家族

が会いに来る』と言っていた。

「ママが怖い夢を見てパニックになる時があるんだ。その時にこれを使ってあげたらいいって、知り合いの癒師さんがくれたんだ。

これを口に吹きかけて、ギュツて抱き締めてあげるの。"ママ大丈夫だよ" って。そうしたら、安心してまた寝るんだ。きつとママは覚えてないだろうけどね」

ネビルは寂しそうに微笑んで、硝子瓶を大切そうにポケットに仕舞った。——イリスは何も言えなかった。自分の事を覚えていない両親を、それでもネビルは大切に想っていて、労わり、無償の愛を捧げている。自分がもし彼と同じ境遇に立たされたとしたら、果たして彼と同じように行動する事が出来るだろうか。イリスはネビルをとっても愛情深く、強くて優しい人だと思った。イリスはネビルの手を取り、真摯な気持ちで言った。

「そんなことない。私、ネビルにそうしてもらった時、とても楽になったよ。きつとネビルのお母さんは感謝してる。絶対に忘れっこないよ」

「ありがとう」ネビルは顔を真っ赤にさせ、もごもごと言った。

「このこと言ったの、君が初めてなんだ。お願いだから、他の誰にも言わないで」

やがて授業終わりの鐘が鳴り、ムーデイが生徒達より一足早く教室を出て、杖を手にかけて足を引き摺りながら、こちらへやって来るのが確認できた。イリスはびくりと大きく体を強張らせた。——あの呪文が引き金になったのか、今は杖を持っている男の人を見るだけでも強い恐怖を感じる。ムーデイはいつもの唸り声よりずっと低く、優しい声で話しかけた。

「ゴーント、おいで。お前に話さねばならん事がある。・・・ロングボトム、お前は大丈夫だな？」

ネビルはムーデイに気圧されたように、何度も頷いた。イリスは本当は早くハリー達のところへ帰りたいかった。拝むような目でムーデイを見たが、彼の意志は変わらないようだった。やがてイリスは観念したように立ち上がり、彼の跡に続いた。

ムーデイはイリスを自分の部屋まで連れて来ると、寛ぐように言った。部屋の中は色んな不思議な道具がひしめいていた。扉の横にはくすんだ色の鏡があり、窓際には錠前が沢山付いた、とても大きなトランクが置いてある。所在なげに立ち竦むイリスを見て、ムーデイは一唸りした。

「ゴーント。わしが怖いか？」

イリスが素直にこくと頷くと、ムーデイは言った。

「お前がペティグリュウーからどんな仕打ちを受けたのか、ダンブルドアから聞いている。何度も“磔の呪い”を掛けられたそうだな。お前のように呪いを受けて心を壊した者を、わしは大勢見て来た」

ムーデイはそこで一旦言葉を区切った。イリスの頭の中に、先程のネビルとの会話が蘇る。——彼の両親は“死喰い人”に拷問を受け、精神を壊してしまったと聞いた。

「呪いをかけようとする者は、お前が恐怖心に飲み込まれ、震えて縮み上がっている様子を哀れんで、落ち着くまで待つてくれるような事などしない。涎を垂らして無力なお前に襲い掛かり、いたぶつて殺すだけだ。

お前は一刻も早く、恐怖心を克服せねばならん。過去に“磔の呪文”を受けた時の記憶が心に強く焼き付き、フラッシュバックしている。過去と現実の区別がつかっていない、危うい状態だ」

そう言うと、何の前触れもなくムーデイは杖を構えて、イリスに“磔の呪文”を唱えた。——とたんにイリスの体をあの悪意に満ちた痛苦が再び埋め尽くし、彼女はたまらず床に転がって泣き叫んだ。

「やめてえー」イリスは余りの苦痛にのたうち回り、悲痛な声で喘いだ。

「ゴーントー」ムーデイは轟くような大声で唸った。

「わしはお前に“磔の呪文”を掛けていない。杖を向けているだけだ。今お前が感じている痛みは、過去の記憶からなる幻覚だ。これは過去の出来事、もう終わった事なのだと、自分に言い聞かせ続けろー」

——この痛みは過去の出来事、もう終わった事。今、受けている事じゃないんだ。恐ろしい辛苦の中、イリスは必死でムーデイの言葉に



しがみ付いた。やがて次第に痛みが遠のいていくのを感じて、イリスはそつと目を開けた。涙でぐしゃぐしゃになった視界の中で、ムーデイが自分に対して杖を向けているのが見える。けれど、もうあの痛みは感じない。イリスの様子が一段落した事を確認すると、ムーデイは杖を下ろして穏やかな口調で言った。

「危険はどこにでも潜んでいる。人間は危険な目に遭うと、もう二度と同じ轍を踏むまいと、その経験を恐怖心と共に記憶に刻み付ける。それらは自分の身を守るために必要なものだ。だが、それに溺れてはならん」

——ムーデイはとびきり荒療治ではあるが、イリスのトラウマを克服する手伝いをしてくれたのだった。その事を理解したイリスがお礼を言うと、彼はふつと笑った。笑ったせいで傷跡だらけの顔が歪み、恐ろしい形相がますます迫力を増したが、イリスは不思議なあたりかさを感じて、つられたように微笑んだ。

ムーデイはイリスに“談話室へ戻って体を休めるように”と言い、扉を開けて部屋の外へ送り出してくれた。最後に一礼をして塔へ向かって歩き出そうとしたその時、不意に手をグツと掴まれて、イリスはよろめきながら止まった。思わずびっくりしてムーデイを仰ぎ見ると、彼は物も言わずに厳しい顔つきで自分の手を見つめている。

イリスは目を凝らして、アツと小さく声を上げた。——先程暴れた拍子に傷つけたのだろう、左手の甲の一部が切れて、血が滲んでいる。しかし“平気です”とイリスが言う前に、ムーデイはその手を口元に持っていくと、血を丁寧に舐め取った。

「勿体ない。大切な血、大切な身体だ」イリスの腰を掴んで力強く引き寄せ、ムーデイは唸った。

「大事にしろ」

その後、ムーデイは一旦自室に戻って救急箱を取ってくると、傷の手当てをしてくれた。イリスは塔に向かいながら、包帯の巻かれた掌をぼんやりと見つめた。——血を舐めるなんて、もしかして先生は吸血鬼のかな。ムーデイの行動は不可解だが、彼は自分の恐ろしいトラウマを治療してくれた良い先生でもある。嫌な気持ちはしなかつ

た。寮に帰ったら、この事をハリー達やネビルに伝えなきや。イリスはそう思い、タペストリーの裏の隠し戸を通った。

## Petal 6. 炎のゴブレット

イリスはグリフィンホール寮へ帰り付き、穴をくぐり抜けて談話室へ戻った。いつもの特等席にはハリーとロンがいて、イリスを見つけると二人揃って羽根ペンを放り出し、心配そうな顔をして駆け寄って、迎え入れてくれた。――テーブルの上には「占い学」の教科書と星座表、羊皮紙が散乱している。二人はこれから一ヶ月間の自分の運勢を、惑星の動きと自分の持つ星座表から読み解く振りをして、トレローニー先生受けしそうな“悲劇的な運命”を書き連ねていく作業をしていたところだと教えてくれた。ロンは残り数日で悲劇のネタ切れを起こしたのだと言って、羨ましそうにイリスを見た。

「君は良いよな。悲劇的なネタには事欠かない人生だろ？」

「おい、ロン！」ハリーはあんまりな発言をしたロンの頭を小突いた。怒ったイリスがロンの宿題を“消失呪文”で消そうとして、ロンが彼女の足元に縋り付きながら必死で謝っている時、ハーマイオニーが図書室から戻って来た。彼女はイリスを見た途端に労しげな表情を浮かべ、泣きベソを搔いてうずくまっているロンを不気味そうに跨いでから、イリスの隣に座った。いつものメンバーが揃ったところで、イリスは彼らにムーディ先生との出来事を話して聴かせた。

「変わった先生だよな。血を舐めるなんて」ロンは宿題をそつと隠しながら言った。

「でも貴方のトラウマをそんな短時間で治療してくださるなんて、本当に実力ある人なのね。心の傷を治すのって、普通はもつと長い年月が掛かるものよ」とハーマイオニー。

「もう平気なの？」

ハリーは緑色に輝く瞳を心配そうに翳らせ、イリスの頬をそつと撫でた。――ふと彼の頭の中で、我武者羅に暴れて泣きじやくっていた少女の姿が思い浮かぶ。あの時、僕は何も出来なかった。ハリーは強く唇を噛み締めた。ネビルが助けてくれるまで、僕は何も……。そんな彼の心の内を知る事無く、イリスは朗らかな表情で頷いた。彼女のあどけない微笑みは、ハリーの中にくすぶる“無力な自分を責める

気持ち”を瞬く間に溶かし、“もつと強くならなければ”という闘志へ変えていった。

「ねえ、授業の続きは何だったの？」

イリスが何気なく尋ねると、三人は黙り込んだ。やがてハリーが口を開いた。

「“死の呪い”だよ。禁じられた呪文の最後の一つだ」

イリスはしんと静まり返った。ハリーの両親はヴォルデモートに“死の呪い”を受けて殺された。それを目の前で見るなんて、いくら知らなければならぬ事だとしても、残酷過ぎる。ハリーは一体どんな気持ちで、呪いを掛けられた蜘蛛を見たのだろう。イリスの労わるような視線を受け、彼は強がって笑った。

「でも僕は知るべきだった。彼の言う通り。いずれ、対決することになるかもしれないしね」

ハリーはイリスの頭を優しく撫でた。——そうだ、この子を守るためなら“死の呪い”も怖くない。今度こそ、僕は彼女を守るようになりたいんだ。やがて暗く沈み込んでしまった場の空気を和ませようと、ハーマイオニーが明るい声を上げた。

「さあ、明るい未来のお話をしましょう。でっち上げの悲劇的な未来じゃなくてね！」

“明るい未来の話”だって？一体何の事だろうと三人が首を傾げていると、ハーマイオニーはローブのポケットから小さな箱を取り出した。箱の中には色とりどりのバッジが五十個ほど入っていた。全てのバッジには“S・P・E・W”という同じ文字が印字されていた。

“反吐”？ハリーはバッジを一個取り上げ、しげしげと眺めた。

「何に使うんだい？」

「反吐じゃないわ」ハーマイオニーはもどかしげに言った。

「エス・ピー・イー・ダブリュー。つまり、エスは協会、ピーは振興、イーはしもべ妖精、ダブリューは福祉の頭文字。しもべ妖精福祉振興協会よ」

イリスは感心しながら、ハーマイオニーから渡されたバッジを鑑賞した。“しもべ妖精福祉振興協会”、そんな団体が魔法界に存在して

いるなんて。さすがは博識なハーマイオニーだ。恐らくその協会に参加し、バッジを手に入れたのだろう。

「そんな協会があるんだね。さすが」物知り「ハーミー」

「違うわ」ハーマイオニーが威勢よく胸を張った。

「私が始めたばかりです」

「エツ？」

三人は思わず呆気に取られて、ハーマイオニーを見つめた。——かつてイリスは彼女に『料理を食べない事以外で、しもべ妖精を助ける方法を考えた方が良い』と助言した事を思い出した。その方法を彼女は見事に編み出したらしい。ハーマイオニーは意欲に燃える瞳で三人を見下ろし、妖精の奴隷制度は何世紀も前から続いているという事、我々の短期目標は“しもべ妖精の正当な報酬と労働条件を確保する事”で、長期目標は“杖の使用禁止に関する法律改正”、並びに“しもべ妖精代表を一人『魔法生物規制管理部』に参加させる事”だと言いつつ放った。何故なら、彼らの代表権は愕然とするほど無視されているからであると。

「メンバーは私達の四人から始めるわ。入会費は二シツクルと考えたの。そのお金でバッジを買い、その売り上げ資金を基にピラ撒きキャンペーンを展開するわ。」

イリス、貴方は副会長よ。メンバー集めと私の補佐を頼むわ。ロン、貴方は財務担当。上の階に募金の空き缶を置いてあるから。ハリー、貴方は書記よ。だから私が今喋っている事を全部記録しておくといいわ。第一回会合の記録として」

ハーマイオニーは一切の淀みのない口調でそう言い切ると、につこりと一人ずつに微笑みかけた。その笑顔からは『当然、貴方達はしてくれるわよね？』という無言のプレッシャーがにじみ出ている。ロンはいつもの軽口を叩く余裕すらなく、ナメクジを吐く呪いを受けた時のような顔を彼女に向けている。ハリーはそんな彼の表情を見て、吹き出しそうになっていた。イリスは口は災いの元だという事を学び、ひとまずメンバーになってくれそうな友人達を片っ端から思い浮かべていた。

☆

それから数週間が経ったが、SPEWの活動は上手く行かなかつた。イリスはまずネビルを始めとした仲の良いグリフィンドル生に声を掛け、それから蛙チョコカード交換会でも他の寮の友達に、積極的に声を掛けた。フィルチにも声を掛け、ミセス・ノリスにも署名代わりに肉球を押しもらった。しかしそれ以上、メンバーが増える事はなかった。おまけに、みんなハーマイオニーにとやかく言われるのが嫌だから入会しただけで、真面目にこの活動に取り組む者はイリスとハーマイオニー以外、ほとんどいなかった。このままでは会長が掲げるマニフェストを達成する事ができない。夕食後の蛙チョコカード会を終え、副会長が悩みながら階段を昇っていると、踊り場にしゃがみ込む少女が見えた。力なく座り込み、苦痛に喘いでいる。

「大丈夫？気分が悪いの？」

イリスは慌てて駆け寄ってからはたと気付いた。——この子は確か、スリザリンのテーブルで見たあの華奢な女の子だ。女の子は返事する事すらできないようで、イリスを継るような目で見つめて涙を零し、激しく咳き込んだ。イリスはポケットを探り、“王の草”<sup>アセラス</sup>と呼ばれる薬草を取り出した。それを指先で揉み潰し、彼女の鼻先へ持って行く。潰された草は、朝露が濡れる爽やかな草原のような、清らかな香りを放った。女の子は気持ち良さそうに深呼吸し、咳は止まった。しかし、これはあくまで応急処置にしかない。イリスは女の子を励ましながら手を貸し、医務室へ連れて行った。

マダム・ポンフリーの手当てを受け、ベッドで横になりながら、女の子はイリスにお礼を言った。近くでよく見ると、波打つ栗色の髪と黒目がちな瞳が愛らしい、上品な立ち振る舞いの少女だという事が分かった。

「本当にありがとうございます。さつき薬草を嗅がせてくれましたよね。とても良い匂いだった。あれは何なのですか？」

「王の草”だよ。揉み潰すと、気分が良くなる香りを放つの」

イリスはポケットから残りの“王の草”を取り出した。——濃い緑の葉と白い花が特徴的な薬草で、ヨーロッパ地方の清らかな山林に

群生し、ホグワーツでもスプラウト先生が少しばかり温室で育てている。指先で揉み潰すと独特の清涼感のある芳香を放ち、その香り自体が病や怪我による気分不良を浄化するのだ。より広範囲に香りを振り撒きたい時は、湯の中に放り込むと良い。先週行われた「魔法薬学」の授業の終わりに、スネイプ先生が『トラウマを思い出し、またパニツクになった時に使用するように』と教えてくれた、教科書に載っていない知識の一つだった。やがて女の子が尊敬の眼差しで自分を見つめている事に気付き、イリスは我に返って恥ずかしそうに笑った。

「まあ、全部スネイプ先生の受け売りなんだけどね」

二人はクスクス笑った。やがて女の子はハッと息を飲むと、ベッドの上から身を起こし、身だしなみを整えて、優雅に一礼してみせた。「自己紹介が遅れて、大変失礼を。アステリア・グリーンングラスと申します。スリザリンの二年生です」

「そんなの気にしなくていいよ、アステリア」イリスは朗らかに笑った。

「私はイリス・ゴント。グリフィンドール生で、君の二年先輩になるかな。よろしくね」

イリスはちよこんとお辞儀をしてから、アステリアの手を取って“王の草”の残りをあげた。——“王の草”のある温室の場所はスネイプから聞いていて、いつでも取りに行つて良いとスプラウト先生から許可も頂いている。自分はまた取りに行けば良いだけの事だ。アステリアは薬草を受け取り、嬉しそうに笑った。

「助かります。また発作が出た時に使えるもの」

「発作？」イリスは心配そうに言った。

「病気なの？」

アステリアは言おうか言うまいか悩んでいるといった風に視線を彷徨わせ、イリスを見上げた。——イリスの動物のように純粋な輝きを持つ目は、彼女の警戒や緊張心を和らげた。やがてアステリアは自分の胸にそつと手を置き、囁くように小さな声で話し始める。

「病気じゃないの。“血の呪い”なんです。私の一族の、何世代も前の当主に掛けられた呪いが先祖返りしてしまったの。だから生まれ

つき、とても体が弱いんです」

“ 血の呪い ” —— イリスはその言葉に、まるで電撃を放たれたような強い衝撃を受けた。イリス自身も祖母の手によって、非常に強い“ 血の呪い ” を掛けられている。この子は私と同じ苦しみを背負っているんだ。アステリアに共感を覚えたイリスは、彼女の手を優しく取って、塞ぎ込む彼女の目を覗き込んだ。

「アステリア。私もね・・・」

イリスが言葉を続けようとしたその時、涙に濡れたアステリアの瞳の奥に、虹色の輝きが見えた。イリスはその輝きに吸い込まれるようにして、少しの間、意識を失った。

気が付くと、イリスは真つ暗な空間に四肢を投げ出して、ふわふわと浮かんでいた。やがて目の前に、奇妙な虹色で縁取られた白いスクリーンがパツと浮かび上がり、ある少女の人生を映画のように再生し始めた。

—— ホグワーツの図書室で訪れたアステリアは、たまたまドラコと同じ本を取ろうとして偶然手が重なり合い、二人は惹かれたように見つめ合う。それから二人は順調に仲を深め、お互いの家を行き来する親密な間柄になっていく。聖マンガで治療を受け、アステリアはどんどん健康的になっていった。ホグズミード村のマダム・パディフットのカフェで、カップル用の特別なメニュー表を眺め、二人は照れ臭そうに笑っている。二人はホグワーツを卒業して間もなく結婚し、一人息子を立派に育て上げ、やがて深く年老いて、家族の見守る中でお互いの手を取り、穏やかに息を引き取った ——

「イリス？」

軽く肩を揺さぶられる衝撃で、イリスはハッと意識を取り戻した。アステリアが自分の肩に手を置いて、心配そうな眼差しを注いでいる。

「大丈夫ですか？」

イリスは全く大丈夫ではなかった。頭の中はさつき見た映像の事でもいっばいだった。しかし、まるで内側から誰かが動かしているみたいに、勝手にイリスの口が動いて「大丈夫だよ」と答え、にこっと笑



みの形を作った。やがてマダム・ポンフリーがやって来てイリスを追い払い、彼女はふらふらとグリフィンドール塔へ向かって歩き出した。どこをどう歩いたのかも覚えていないが、イリスは何とか自室へ辿り着いて、虚ろな手つきで寝間着に着替えると、ベッドに仰向けに倒れ込んだ。

さっきの映像は、アステリアとドラコの未来だったのだろうか。二人はとても幸せそうだった。イリスはベッドの上で寝返りを打ちながら、思いを馳せた。私と一緒にいた時のドラコの未来は、恐怖と死の影に覆われていた。でもアステリアと一緒になら、彼はしわしわのおじいちゃんになるまで幸せに生きる事ができる。ドラコの幸せを考えるなら、それはとても良い事だ。イリスは微笑もうとして、上手く出来なかった。

ふと見上げると、クローゼットに掛かったローブの胸にSPEWのバッジが輝いている。——『反吐』だ』。イリスの胸の隅っこで、誰かが呟いた。とても意地悪で嫉妬深くて、憎たらしい声。それは自分の声だった。その余りにもおぞましい声に、イリスは思わず耳を塞いだ。——違う。そんな事、私は思ったりしない。ドラコを愛しているもの。彼の幸せを一番に願ってる。——『反吐』。

「違う。反吐じゃない。エス・ピー・イー・ダブリュー」

イリスは両手を強く脛に押し付けて、自分にしつかりと言い聞かせるように、何度も呟いた。——泣いては駄目だ。イリスは思った。今泣いてしまったら、部屋の暗がりから世にも恐ろしい化け物がやって来て、自分を無茶苦茶に壊してしまうような気がした。今まで積み上げてきたものが、跡形もなく消え去ってしまうような気がした。喉に込み上げてくるとびきり熱い感情も、胸の端っこで叫び続ける意地悪な声も、イリスは知らない振りをして、ただ無心に四つのアルファベットを繰り返す。——イリスはドラコに“忘却術”を掛けた事を、後悔し始めていた。

☆

それから数日、イリスはアステリアとドラコの事を気にしないよう

に努めて過ごしていた。考えてもどうしようもない出来事から目を逸らすには、別の事に意識を向けるのが一番だ。イリスは今まで以上に、学校の勉強と蛙チョコカード交換会、それからSPEWの活動に精を出すようになった。献身的に補佐を務めてくれる副会長に感激したハーマイオニーは、ますます声高にしもべ妖精の権利と福祉厚生を訴えたが、耳を貸す者はほとんどいなかった。

ハーマイオニーがいつもの熱弁を振るい、同じグリフィンホール生で後輩のコリンとデニス・クリービー兄弟にバッジを売りつける事に成功した日（コリンとデニスは興奮して「すごい！反吐だ！カッコ良い！」と喜んでいた）の夕方、「闇の魔術に対する防衛術」の授業が始まった。ムーデイは、今度は“服従の呪文”を生徒一人一人に掛け、その力に抵抗できるかどうかを試すという、驚きの授業内容を発表した。ムーデイは杖を一振りして机を片付け、教室の中央に広いスペースを作った。そして興奮してガヤガヤと騒めいている生徒達の間を縫うようにして、イリスのところへやって来た。

「ゴント。あの時」と同じだ。できるか？」ムーデイは唸った。「できぬならこの授業は免除する。心配するな、成績に影響はない。図書室で自習をしている」

イリスの頭の中に、前回の授業での記憶が鮮やかに蘇った。――“服従の呪文”を受けて、軽快なタップダンスを繰り広げる蜘蛛の姿を思い出し、イリスは唇をギュツと噛み締める。果たして出来るのだろうか、またパニックになってしまったらどうしよう。その時、不安に苛まれるイリスの心に、ムーデイの言葉が彗星のように降ってきて砕け散り、周囲を明るく照らし上げた。『あの時と同じだ』――そうだ。私が“服従の呪文”を掛けられた事は、それを克服できなかった事は、今じゃない。イリスはローブの中の“王の草”を握り、呟いた。そう、それは過去の事だ。

「やってみます」

イリスは真っ直ぐにムーデイを見つめると、勇気を振り絞って応えた。彼はわずかに笑い、イリスの頭を不器用な手つきで撫でると、教室の中心に戻って授業をスタートさせた。ムーデイは生徒一人一人

を呼び出して、“服従の呪文”を掛け始めた。呪いのせいでクラスメート達が世にも可笑しな事をするのを、イリスはじつと見ていた。ロンはホグワーツの校歌を声高に歌いながら、スキップをして教室を一周した。ラベンダーはウサギの真似をしたし、ネビルは普通だった。誰一人として呪いに抵抗出来た者はいない。ムーデイが呪いを解いた時、みんな初めて我に返り、自分の奇行を恥じていた。

「ゴースト」ムーデイが唸るように呼んだ。

「次だ」

イリスはごくりと唾を飲み込んで、ポケットの中で揉み潰した“王の草”の香りを一嗅ぎしてから、ムーデイの前に進み出た。心地良く清浄な空気に包まれながら、イリスは自分に言い聞かせた。——今日の前にいる人は、ルシウスさんでもピーターでもない。今いる場所はマルフォイ家の屋敷でもホグワーツの片隅でもない。この人はムーデイ先生、これは授業なんだ。心の準備ができたイリスが頷くと、ムーデイは杖を上げ、呪文を唱えた。

「インペリオ、服従せよ」

その瞬間、圧倒的な多幸感がイリスの心を包み込んだ。全ての思いも悩みも優しく拭い去られ、掴み所のない漠然とした幸福感だけが頭に残り、イリスはふわふわと甘ったるいコットンキャンディーみたいな空間に揺蕩っているような気がした。やがてムーデイの声がどこか遠くの方から、けれど響き渡るような強さをもって聴こえて来た。

『右袖を捲り、軟膏を取り払って、クラスメートに“闇の印”を見せろ』——声はそう言っていた。なんて素晴らしい声なんだろう。すぐに先生の言う通りにしなきゃ。イリスは恍惚とした表情で、袖をゆつくりと捲り、軟膏を消失させる魔法を掛けるために、杖を持つ手をピクリと上げた。

『待ってよ』——その時、頭の中で“別の声”が目覚めた。『どうして印を見せるの、そんなの絶対可笑しいよ。皆に見られてしまったら、大変な事になる』——『右腕の印を見せろ……』——『嫌だ、絶対にしたくない！』今やイリスの頭の中で、ムーデイの命令する声と、

それに抗う声とが激しい攻防を繰り広げていた。次の瞬間、ムーデイの怒鳴り声がすぐ耳元で聴こえて、イリスはたまらず飛び上がった。『印を見せろ！今すぐだ！』

「いやだつ!!」

イリスは力の限り叫んだ。そしてハッと我に返った。

「よーし、それだ！それでいい！」

ムーデイの唸り声がして、突然イリスは頭の中の虚ろな感覚が消え去って行くのを感じた。あの暴力的な程の幸福感がさつとなくなり、代わりにクラスメート達の割れるような歓声がイリスを包んでいた。

——“服従の呪文”を受けている間、自分に何が起こったのかをイリスははつきり覚えている。ムーデイ先生は、イリスの右腕に“闇の印”がある事を知っていて、それを皆に見せようとしていた。ムーデイはイリスを振り返る事無く、生徒達に言った。

「お前達見たか、ゴーントが呪いを克服した！戦い、打ち負かしたのだ。あの時のゴーントの目を忘れるな。その目に鍵がある。・・・さあ、次はポッター、お前だ！」

イリスは音もなく教室の壁際に後ずさりながら、ムーデイへ強い警戒心を含んだ眼差しを送った。——『どうして先生はあんな事を命じたの？』それに気づいたのか、ハリーに“服従の呪文”を掛ける時、ムーデイの青い目だけがギョロリと動いてこちらを射抜いた。その目はまるで冷たく笑っているように見えて、イリスはぞくりと寒気を覚え、急いで目を逸らした。

一時間後、教室からフラフラになって出て来た四人は、大広間で昼食を摂っていた。特に疲れがひどいのはハリーだ。彼も“服従の呪文”を破る寸前までいったため、喜んだムーデイが『ハリーの力量を發揮させる』と言い張って、彼がイリスよりも早く確実に呪いを打ち破れるようになるまで、何度も呪いを掛け続けたのだ。

「ムーデイの言い方ときたら」ハリーはげっそりとした顔でポテトを摘まみながら言った。

「まるで僕ら全員が、今にも襲われるんじゃないかって気がしてくるよ」

「その通りだ。ホグホグワツワツ・・・」

ロンはミスパイにかぶり付こうとした口が校歌を歌い出し始めたのに気付いて、急いで口をパチンと閉じた。ムーデイは昼食時までには呪文の効果は消えるとロンに請け合ったのだが、残念な事にロンはイリスやハリーに比べてずっと呪いに弱かったらしい。たつぷりワンコーラス分の沈黙を経て、彼は再び口を開いた。

「魔法省がムーデイがいなくなつて喜んだのも無理ないよ。あいつがシエーマスに聞かせてた話を知ってるか？エイプリルフルに、後ろからワアツて脅かした魔女に、あいつがどんな仕打ちをしたか！」

ハリーとロンは示し合わせたように深く目を閉じ、溜息を吐いてみせたが、ムーデイに愛想を尽かしているという訳ではなさそうだった。むしろ彼に愛着が湧き、このスリル満点な授業を楽しんでいるように見えた。ハーマイオニーが、イリスのゴブレットに林檎ジュースを注いでやりながら、優しく言った。

「でも貴方凄いわ。」服従の呪文を一発で打ち破るなんて。きつとムーデイ先生の治療が効いたのよ」

「うん・・・」

イリスは生返事をしながら、フライドポテトを口に押し込み、林檎ジュースで流し込んだ。あれは私の実力じゃない。皆に「闇の印」を見せたくないから、必死で抵抗しただけだ。きつと皆みたいにスキップしろとか、動物の真似をしろとかいう可愛らしい命令だったら、イリスは喜んで従っていただろう。——もしあの時、「服従の呪文」に屈して、印を皆に見られてしまったら・・・その先は想像したくもない。イリスはブルツと身震いし、焼き立てのブルーベリーパイを大きめに切り分け、口に運んだ。もしかして先生は、私が「闇の印」を見せまいと抵抗するのを見越して、確実に「服従の呪文」を破らせるためにそんな事を命令したのだろうか。答えのない思考の海に深く身を沈めたイリスは、やがて今日は木曜日であるという事に気が付き、瞳を輝かせた。——明日は金曜日。その夜は、いよいよ今学期第一回目の「魔法薬学」補習の日だ。

☆

次の日の夜、夕食をたつぷりと摂ったイリスは寮を出て、一人地下牢へ向かった。——最初に「魔法薬学」の補習授業を受けるために地下牢へ繋がる階段を降りた時、イリスはまるで地獄へ堕ちていくような気持ちになった。けれど今となっては、慣れ親しんだ実家への帰り道みたいなものだ。イリスは軽やかに階段を駆け下り、扉をノックした。スネイプはいつも通りの陰湿陰険な表情で、にこりともせず彼女を迎え入れてくれた。何年経っても愛想の欠片すら見せないその様子にどこか安心感を覚えたイリスは、スネイプにムーデイに授業で“服従の呪文”を掛けられた時の出来事を話して聴かせた。彼は暫く思案した後、静かに口を開いた。

「恐らくムーデイは、君を警戒しているのだろう」  
「警戒？」

イリスは首を傾げた。何も悪い事はしていない筈なのに。その時、イリスの右腕がちくりと痛んだような気がして、彼女は小さく息を飲んだ。——ムーデイは往年、腕利きの“闇祓い”だった。アズカバンの半分は彼が埋めたとされている。それほどまでに、彼は“闇の陣営”に与する人々を憎悪しているのだ。“闇の印”が打ち上げられた夜、クラウチ氏が自分に向けた目と、ムーデイの青い目は、イリスへ同じメツセージを放っていた。

「君がイリス・ゴントだからだ」スネイプが静かに言った。

「闇の帝王”の唯一の血縁者であり、彼の最も重要な側近の孫でもある。この出自は“闇祓い”の連中から充分に警戒されるに足るものだ。

はつきりと申し上げておく。今日まで自由に生きられたのは、君が人畜無害でお人好しな性格だからではない。

君の父が命懸けで“闇の帝王”に逆らい、善良な魔法使いとして生き抜いたからだ。その事を決して忘れてはならない」

その言葉は鉛のように重く、氷のように冷たく、イリスの背中にずっしりと押し掛かった。スネイプは保管庫に行き、摘み立ての“王の葉”を一掴み取って来ると、悲壮な表情を浮かべる彼女に手渡し、言葉を続けた。

「だが、君が父と同じ志を持つ限り、ムーデイも“闇祓い”の連中も警戒こそすれど、手を出す事までは出来ない。もし彼らが攻撃してきた時は、私とダンブルドアが必ず君を守る。

君が本当に身を守るべきなのは、彼らではなく“闇の帝王”だ。印は確実に濃くなってきている。残された時間は少ない。力を取り戻した帝王が再び君に取り憑く前に、それを防ぐ術を身に付けなければ」

スネイプはそう言うと、杖を振るい、地下牢内の作業机を片付けた。四方の壁に作り付けられた薬品棚が、壁の中に吸い込まれるようにして消えていく。スネイプはイリスを部屋の中央へ招き寄せ、薄い唇を開いた。

「これから教えるのは、“閉心術”だ。文字通り自らの心を閉じて、他者に読まれぬようにする。

“闇の帝王”はその逆、心の内を開き見る術である“開心術”の達人だ。君の父は双方共に、帝王にひけを取らぬ程の実力を有していた。

まずは、何もするな。今から君の心を開く。——開心、レジリメンズ」

スネイプはイリスがまだ何の準備もできていない内に呪文を掛け、彼女の心の中に侵入した。そのエメラルド色に輝く瞳を通り、頭の内側を擦り抜け、脈打つ小さな心臓を撫でて、さらにその奥へと——

☆

スネイプはイリスの心の世界に到達し、腕組みをして思案に暮れていた。その傍らにはイリスがいて、困り果てたように眉根を寄せ、彼を見上げている。

かつてスネイプが訪れた時、彼の命令に従い、イリスの心の世界は、両脇にずらりと記憶の窓が並べられた、清らかな乳白色の廊下へと姿を変えた。しかし今は、いくらスネイプが力を込めて命じても、彼女の世界は混沌としたまま、何一つ変わろうとしない。

スネイプの目の前には、とてつもなく大きな、立派な造りの劇場があった。入口の上方には、劇の内容を示す看板が設置されていた。恐

らく恋愛物なのだろう、二人の男女が仲睦まじい様子で向き合っている絵が描かれている。——その二人の顔を、スネイプは良く知っている。我が寮の生徒、ドラコ・マルフォイとアステリア・グリーングラスだ。何故、この二人が彼女の世界に登場する必要がある？次の瞬間、どこからともなく色とりどりの丸いボールが沢山転がって来て、「反吐だ！」「反吐だ！」と野次を飛ばしながら、ニョキツと突き出した細い腕で、劇場に向けてクソ爆弾を投げつけ始めた。

——ますます訳が分からない。スネイプは劇場を調べるために歩を進めるが、チケット売り場の担当者が大股でやって来て、彼の行く手を塞いだ。彼は目の前の人物に目を遣って、思わず唾然となり、立ち尽くした。チケット売り場の担当者は、スネイプだった。もう一人の彼は、本人そっくりの陰湿陰険な口調で「チケットはもう売り切れだ」と言う旨を伝え、後ろに控えるイリスを睨んだ。

「君は“耐えられる”と言った。そうだな？」責めるような口調だった。

「早く来たまえ。観客は君一人だ。もうすぐ上演が始まる」

本物のスネイプが振り返ると、イリスは涙と鼻水でぐしゃぐしゃになった顔で、握り締めていたチケットを見つめた。やがて劇の始まりを告げるブザーが鳴り、しびれを切らした偽物のスネイプが、彼女を連行するために肩を怒らせながらやって来る。それを杖の一振りで吹き飛ばし、本物のスネイプは彼女の肩にそっと手を置いた。——イリスの手の中にあるくしゃくしゃのチケットには“LOOK AT ME”という劇の題目が印字されている。彼女は秘めていた自分の心の内を見られ、強い羞恥と自己嫌悪と悲哀の感情に震えて、ただ黙りこくっていた。

「戻ろう。私が悪かった」スネイプは自分でも驚くほど優しい声で言った。

程無くして、二人は現実世界へ戻った。スネイプはイリスの涙が落ち着くまで静かに待つと、何故彼女の心にドラコとアステリアが影響を及ぼしているのか、その理由を聞き出した。イリスは全てを話し終えると、自分の余りの厭らしさに嫌気が差して、吐きそうになった。



——気にしていないつもりだった。ドラコとアステリアを応援しているつもりだったのに。彼を愛しているなら、そうするのが当然なんだ。だけど、本当の自分は……。彼女はスネイプの顔を見る事が出来ず、小さく縮こまった。きっと心の世界のスネイプ先生みたいに、本物の先生も私を責めるのに違いない。あの時、私は耐えられるって言ったのに、結局耐えられなかったんだもの。

しかしスネイプは杖を振り、無地のティーカップを呼び寄せて、暖かいカモミールティーを淹れてくれただけだった。それから彼は、今週は“閉心術”のトレーニングの代わりに“ある事”をするようにとイリスに命じた。彼が再び杖を一振りすると、かつてイリスが見た事のある“憂いの篩”が姿を現した。彼は実際に自らの記憶を篩に落としてみせ、イリスに言った。

「今の君は様々な思いが交錯し、混乱している。これは文字通り“憂いの篩”だ。君の憂い、溢れた想いをここに落とし、ゆっくりと吟味し、整理しなさい。今日から一週間、君は好きな時にここに来て構わない。一週間後、“閉心術”の訓練を再開する」

イリスはおずおずと篩を見つめた。水盆に渦巻く銀色の物質が、不意に揺らめいて美しい女性の顔が浮かび上がった。その顔が華やぐように笑って何かを口にした時、スネイプが盆の前に立ち、杖を振ってその姿を消してしまった。

☆

それから一週間、イリスは暇な時間を見つけては地下牢へ赴き、“憂いの篩”に記憶を落とし続けた。——ドラコと初めて出会ったダイアゴン横丁での記憶から、彼が命懸けで自分を守ってくれた“秘密の部屋”での記憶、果てはスクリウトを通して短い会話をした最近の記憶まで、どんな些細な事でも入れ、銀色の霞の中でたゆたう記憶の数々をじつと眺めた。記憶を引き出すと、“腫れ草”を突いて膿を出すのと同じように、彼女の気分は少し楽になった。しかし依然として気持ちはスッキリしないままで、“閉心術”の訓練再開の日だけが着実に近づいていた。

そんな中、ついに“三大魔法学校対抗試合”の二校、ボーバトンと

ダムストラングの代表団がやって来る事になった。玄関ホールにその掲示が貼り出されてからというもの、城じゅうの話題はそれで持ち切りだった。誰がホグワーツの代表選手に立候補するか、試合はどんな内容か、ボーバトンとダムストラングの生徒は自分達とどう違うのか：：などなど。城は今まで以上にくまなく掃除され、埃を被っていた肖像画は残らずピカピカに磨き上げられ、赤むけ顔を迷惑そうに歪めていた。甲冑達も新品同様に磨き上げられ、滑らかに動くようになり、ウキウキとした様子だ。

ハロウィーンの前々日、朝食を摂るためにイリスがハーマイオニーと一緒に下りていくと、大広間はすでに前の晩に飾り付けが済んでいた。壁には各寮を示す巨大な絹の垂れ幕が掛けられている。教職員テーブルの背後には一番大きな垂れ幕があり、ホグワーツ校の紋章が描かれていた。その日は夕方にボーバトンとダムストラングからお客が到着する事に気を取られ、誰も授業に身が入らなかった。反対に先生方は神経を尖らせ、ピリピリとしている。そんな状況であるにも関わらず、「魔法薬学」の授業中、ペアを組んだネビルが十秒ごとに洒落にならない間違いを犯すので、イリスはずつと気が気でなかった。ネビルをフォローしながら、何とか失敗作を作る事無く授業をこなし、イリス達は急いでグリフィンドール塔に戻ってカバンと教科書を置き、マントを着て、階段を降り、玄関ホールへ向かった。

各寮の寮監が生徒達を整列させている。マクゴナガル先生はロンの帽子が曲がっている事を注意した後、イリスとハーマイオニーの胸元に視線を止めた。

「ミス・ゴント。ミス・グレンジャー。二人揃って何という名前のバッジを付けているのです。」反吐「などと！即刻外しなさい」

ハリーとロンは盛大に吹き出し、まだ笑いのツボが治まらないのか、体をくの字に折り曲げて悶絶していた。イリスは急いでバッジを外し、ポケットに突っ込んだ。ハーマイオニーは顔を真っ赤にして、マクゴナガル先生を見つめ、何か言いたそうに口をパクパクさせていたが、やがて諦めたのか、悔しそうに唇を噛み締めながらバッジを外した。

マクゴナガル先生は、一年生を先頭にしてみんなを引き連れ、正面の石段を下り、城の前に整列した。晴れた寒い夕方だった。深い夕闇が迫り、禁じられた森の上に青白く透き通るような月がもう輝き始めていた。イリス達は寒さに震えながら、まだ見ぬ人々の到着を待った。

「もうすぐ六時だ」ハリーが懐中時計を覗き込んで言った。

「どうやって来ると思う？ 汽車かな？」とロン。

「違うと思うわ。ずっと遠くからだし」

ハーマイオニーが思慮深げにそう言った時、ダンブルドアが先生方の並んだ最後列から、明るい歓声を上げた。

「ほっほー！ わしの目に狂いが必要ならば、ボーバトンの代表団が近づいてくるぞ！」

生徒達がでんでんばらばらな方向を見ながら熱い声を上げていたが、やがて誰かが森の上空を指差して「あそこだ！」と叫んだ。イリスは急いでその方向を見た。何か大きなもの、巨大な黒い影が、濃紺の空をぐんぐん大きくなりながら、城に向かって疾走してくる。それが禁じられた森の梢をかすめた時、城の窓灯りがその姿を捉えた。――大きなパステル・ブルーの馬車だ。大きな館ほどの馬車が、十二頭の天馬に引かれてこちらへ飛んでくる。天馬は金銀に輝く月毛パロミンで、それぞれが象ほども大きい。イリスはこんなに大きな馬も馬車も、生まれて初めて見た。

馬車はそのままの猛烈なスピードを維持したまま高度を下げ、着陸したので、ドーンという凄まじい衝撃と地響きがイリス達を襲った。すかさずネビルが後ろに吹っ飛びそうになったので、イリスは慌てて“呼び寄せ呪文”で彼のマントを呼び寄せ、彼がスリザリンの集団に突っ込むという未曾有の事態を防いだ。やがて馬車から一人の女性が出た。――この女性ほど大きく美しい人も、イリスは今までの人生で見た事がなかった。ハグリッドと背丈はほとんど変わらないだろう。小麦色の滑らかな肌を黒襦子で覆い隠し、見事なオパールをあしらわれたアクセサリーが襟元や指先を彩っている。そんな気品あふれる大き

な貴婦人に、ダンブルドアは近づいて片手を差し出した。ダンブルドアも背は高かったが、手にキスするのにほとんど体を曲げる必要がなかった。

「これはこれは、マダム・マクシーム」ダンブルドアが優雅に挨拶した。「ようこそホグワーツへ」

「ダンブルドア。お元気そうで何よりですわ」柔らかな、少しのんびりとした訛りのある声で、彼女は応えた。

「わたくしの生徒です」

マダム・マクシームは巨大な手の片方を後方へ向けて、ヒラヒラと振った。イリスがつけられるようにしてその先を見ると、そこには十数人の男女学生が薄い絹のようなローブを纏い、寒そうに震えている。みんな不安そうな顔でホグワーツを見つめていた。マダム・マクシームとダンブルドアは世間話を交えながら、ダームストラングの到着を待った。

数分後、濃紺色に染まった世界の中から、不気味な音が伝わって来た。まるで深い水の底でとびきり大きな嵐が巻き起こっているような、くぐもったゴロゴロという音だ。

「湖だー」リー・ジョーダンが叫び、指差した。

「湖を見るよー」

みんな一齐に湖を見た。立っている場所が芝生の一番上で、校庭を見下ろす位置だったので、湖の黒く滑らかな水面がはつきり見えた。その水面が突然揺れ、中心の深いところがざわめき始めた。湖の中心が渦を巻き、巨大な渦潮を創り出す。やがて渦の中心から、長い黒い竿のようなものがゆっくりとせり上がって来た。そして帆桁が現れ、ゆっくりと堂々と、月明かりを受けて巨大な船が水面に浮上した。イリスは他の生徒達と一緒に大きな歓声を上げ、魅入られたように船を見つめた。まるで引き上げられた難破船のようで、丸い船窓から見える仄暗い霞んだ明かりが、幽霊の目のように見える。船は水面を波立たせて滑り、岸に着くと、船員たちが姿を現した。

分厚い毛皮のマントを着込んだ生徒達だ。先頭には滑らかな銀色の毛皮を着た男がいた。痩せて背が高く、短く切った銀髪と先の縮れ

た顎鬚が特徴的だった。男は人を食ったような笑顔を浮かべてダンブルドアに近づき、両手で握手をした。

「やあやあ、しばらく。元気かね？」男は耳に心地よく、とても愛想の良い声をしていた。

「元気いっぱいじゃよ。カルカロフ校長」ダンブルドアが挨拶を返した。

男はホグワーツを見上げて懐かしそうに微笑んだが、その目だけは冷たく研ぎ澄まされたままだった。彼は父親のように優しい顔つきで、後ろに並ぶ生徒の一人を差し招いた。

「ここに来たのは本当に嬉しい。・・・ビクトール、こっちへ。暖かいところへ来ると良い」

イリスはその生徒が近づいてきて通り過ぎた時、奇妙な既視感を覚えた。この人の事を、見た事がある。どこで見たんだろう。次の瞬間、大興奮したロンに腕をしこたまパンチされ、痛みを叫び出した拍子にイリスはハツと思いついた。曲がった目立つ鼻、濃く黒い眉、痣黒い膚。――間違いない。クイディッチ・ワールドカップで見たブルガリア・チームの名シーカー、ビクトール・クラムだ。

☆

「まさか！」

ロンが茫然として言った。ダームストラング一行の跡に続いて、ホグワーツの学生が整列して石段を上がる途中だった。ハリーもそわそわと落ち着かない様子で、クラムの後ろ姿を見ている。

「クラムだけ、ハリー！ビクトール・クラム！」

「落ち着きなさいよ、ロン。たかがクイディッチの選手じゃない」ハーマイオニーは呆れ顔で言ったが、ロンは耳を疑うという顔で彼女を見るばかりだった。

「たかがクイディッチの選手だって？クラムは世界最高のシーカーの一人だけ！僕、まだ学生だなんて考えてもみなかった！」

イリス達がホグワーツの生徒に混じり、再び玄関ホールを横切つて、大広間に向かう途中、リー・ジョーダンがクラムの頭の後ろだけでもよく見ようと、つま先立ちでピョンピョン飛び上がっているのを

見た。五年生の女子学生の集団が、サインを貰おうとしているのか、口々に囁き合いながらポケットをひっくり返し、夢中で羽根ペンを探っている。

四人はグリフィンドール寮のテーブルまで行き、腰かけた。ロンはわざわざ入口の見える方に座った。——ダームストラングの生徒達が、どこに座って良いか分からずにまだ入り口付近に固まっていたからだ。先頭に立つクラムは野獣のような目を光らせて、大広間中を見渡し、何かを探しているようだった。一方、ボーバトンの生徒達はレイブンクローのテーブルを選んで座った。みんな不満そうな表情で大広間を見渡している。中の三人は、いまだに寒そうに体を抑えてブルブルと震えていた。

「そこまで寒いわけじゃないでしょ」ハーマイオニーがその様子を見咎め、イライラと言った。

「あの人達、どうしてマントを持って来なかったのかしら？」

その時、ロンが「ぐえ」とも「うえ」ともつかない、何とも不思議な鳴き声を上げたので、イリスはSPEWバッジを胸に着ける手を止め、向かいの席に座る彼を見た。ロンは青い目を人類の限界まで見開いて、イリスを指差している。——いや、正確にはその上だ。彼女は身の危険を感じ、急いで振り返った。

そこにはクラムを始めとしたダームストラング生がずらりと並んでいた。クラムの黒い厳格な目が、イリスを真っ直ぐに見つめている。

「君がイリス・ゴースト？」

抑揚がなくボソボソとしているが、妙に迫力のある声で、彼は尋ねた。気圧されるようにしてイリスが頷くと、彼はチラリと教職員テーブルの方を伺い見てから、イリスに握手を求め、ぶっきらぼうな口調で言った。

「ビクトール・クラムだ。僕ら、ここに座らせてもらっていいかな？」

「モチのロンさ!!」

イリスが応える前に、ロンがテーブルから勢い良く立ち上がり、目をキラキラと輝かせて叫んだ。わっと歓声を上げて、周囲から大勢の

グリフィンドール生が集まり、イリスを弾き飛ばしてクラムを取り囲んだ。

それからずっとグリフィンドールのテーブルは賑やかだった。だが、それは他の寮のテーブルも同じ事だった。たかだか二十人、生徒が増えただけなのに、大広間は何故かいつもよりずっと混み合っているように見えた。

クラムは最初にイリスへ声を掛けたものの、それ以降、再び話しかける事はなかった。なにしろロンを始めとしたファンの生徒達がクラムに首ったけ状態でその対応に追われているようだったし、イリスもイリスで、他国の生徒達のために調理されたのだろう、初めて見るような新たな料理に夢中になっていたのだった。

「君はクラムと話さないの?」

イリスがブイヤベースを自分の皿に注ぎ、次なるターゲットとしてボルシチをロックオンしていると、ハリーが尋ねた。

「うん。ハリーこそ、彼と話さないの?」

イリスは美味しい貝類のシチューに舌鼓を打ちながら、ハリーに訊き返した。——今年こそ活躍できないものの、凄腕のシーカーである彼の方がクラムと話したいと思っただけで然るべきはずなのに、彼は少しふてくされたような表情で頬杖を突き、イリスの傍にいるばかりだったからだ。

ハリーはイリスが両頬いっぱいシチューを詰め込んでいるのを見て、毒気を抜かれたようにふっと笑った。かくして彼の中にくすぶっていた小さな嫉妬の炎は鎮められ、彼はイリスのリクエストに従い、ボルシチの大皿を目の前に持って来てあげたのだった。

やがて色とりどりのデザートが消え、金の皿がピカピカになると、ダンブルドアが再び立ち上がった。心地良い緊張感が、今しも大広間を包み込む。彼は、ホグワーツの管理人・フィルチが持ってきた、寶石の散りばめられた箱の中から、大きな荒削りの木のゴブレットを取り出した。一見まるで見栄えのしない杯だったが、その縁からは溢れんばかりに青白い炎が躍っている。ダンブルドアは木箱の蓋を閉め、その上にそつとゴブレットを置いて、大広間の全員に見えるようにし

た。

「炎のゴブレット」じゃ」ダンブルドアは嚴かな口調で言った。

「代表選手に名乗りを挙げたい者は、羊皮紙に名前と所属校名をはつきりと書き、このゴブレットの中に入れなければならぬ。立候補の志ある者は、これから二日間以内にその名を提出するように。明後日、ハロウインの夜に、ゴブレットは各校を代表するに最も相応しいと判断した三名の名前を返してよこすであろう」

フレッドとジョージは青い目を大いなる野心と希望に輝かせて、ゴブレットを見つめている。いくらダンブルドアが、十七歳に満たない者は「年齢線」によってゴブレットに近づく事が出来ないと警告しても、どこ吹く風だった。やがて宴は終わり、みんなは席を立って、玄関ホールへ出るドアの方へ進み始めた。

「じゃあ、おやすみ」

クラムは帰る直前にやっとイリスの事を思い出してくれたのか、彼女の肩を軽くポンと叩き、ぎこちなく微笑んで挨拶をした。それからチラツと熱を帯びた目で、イリスの近くにいるハーマイオニーを見てから、前方にいるカルカロフ校長の下へ去って行った。

イリスが何となしにその様子を見守っていると、カルカロフは父親のような優しい目をしてクラムを迎え入れ、二、三、言葉を交わしたようだった。すると不意にその視線がイリスに向けられ、なんと彼は人懐っこい笑顔を浮かべながら、一直線にこちらへ向かって歩いて来た。狼狽したイリスは助けを求めようと周囲を見渡したが、もうハリー達はずでに寮へ帰ってしまった後だった。

「やあ、君がイリス・ゴントだね？」

カルカロフは愛想の良い声でそう言うのと、イリスと握手した。その手はじつとりと汗ばんでいる。圧倒されたイリスがただ頷いていると、彼はクラムを振り返り、不自然な猫撫で声で言った。

「ビクトールが」とても君を気に入った」と言っていてね。どうかかな？これから私の船で、彼と一緒に玉子酒でも飲みながらゆったりと過ごしては？」

イリスは困ったようにクラムを見たが、彼はうんともすんとも言わ



ず、仏頂面で立っているばかりだった。——カルカロフ校長先生は、一体何を言っているんだろう。イリスは眉根を下げ、困り果てた。そもそも彼とは挨拶以外、ほとんど話していないし、その顔はどう見たって自分に対して“気に入る”どころか、友好的な様子ですらない。それにイリスは明日に“閉心術”の本番が控えているため、早く寮に帰って眠りに就きたかった。彼女が慎重に言葉を選びながらも断ろうと口を開いた時、不意に背後から強く腕を掴まれ、誰かの胸に引き寄せられた。びっくりしたイリスは反射的に頭上を見上げ、息を飲んだ。

——ムーディ先生だ。イリスの腕をむんずと掴み、もう片方の腕でステツキに身を預け、カルカロフを激しい憎悪に満ちた目でギラギラと睨み付けている。イリスの目の前で、彼の顔からさっと血の気が引き、怒りと恐れのはっきりとした凄まじい表情へ変わった。

「お前は——」カルカロフは亡霊でも見たような目で、ムーディを見た。「わしだ。薄汚れた手で、彼女に触れるな」ムーディは地を這うように低く、凄味のある声で迫った。

「もう夜も更けた。カルカロフ、退くがよかろう。出口を塞いでいるぞ」

確かにその通りだった。大広間の生徒の三分の一がその後ろで待たされ、何が自分達の邪魔をしているのだろうと、あちこちから首を突き出して前を覗いている。やがて一言も言わず、名残惜しそうにイリスをチラリと見てから、カルカロフは自分の生徒を掻き集めるようにして連れ去った。ムーディはその姿が見えなくなるまで、ブルーに輝く魔法の目でじつと睨み付けていた。傷だらけの歪んだ顔に、激しい嫌悪感が浮かんでいた。

## P e t a 1 7 . 『例え闇に囚われても』

宴も終わり城中の人々が寝静まった頃に、スネイプは一人、学校内を歩いていた。彼は玄関ホールを通り過ぎる時、中央に飾られた“炎のゴブレット”に静かな一瞥をくれてから、正面の石段を下り、灌木の茂みを抜けて、大きな石の彫刻の立ち並ぶ散歩道へやって来た。あちらこちらに彫刻を施したベンチが置かれていて、その一つに見知った魔法使いが座っている。——ダームストラング校の校長、イゴール・カルカロフだ。スネイプがベンチに座ると、カルカロフはやおら自分の服の左袖を捲り、“闇の印”を見せつけた。

「この数ヶ月の間にますますはつきりしてきた」イゴールは不安ではち切れそうな声で嘆くと、痛々しい傷跡を見るかのような目で自らの印を見つめた。

「私は真剣に心配しているのだ、セブルス。否定できる事ではないだろう?」

スネイプはカルカロフにすぐ印を隠すようにと忠告すると、警戒心に満ちた目で周囲を見渡した。——今この学校にはムーデイがいる。彼は公の授業で明確な敵意を見せるほどに、“闇の帝王”と深い繋がりを持つイリスを警戒していた。あのあらゆるものを見透かす魔法の目がこの光景を見つけたら、彼は間違いなく再び逮捕されるだろう。それどころか、彼と一緒にいた自分まで危ない。普段はもつと用心深い性分である筈のカルカロフは、スネイプに指摘を受けるまで『かつての宿敵がこの学校にいる』という事実を思い出す余裕すらなかったようだった。彼は我に返ったように息を飲み、急いで袖を引き伸ばして印を隠した。そして長い顎鬚を指に巻き付け、神経質そうな顔つきで何事かを考え込んでいる。

——イゴール・カルカロフはスネイプと同じ元“死喰い人”で、魔法省に捕えられた時、多くの“死喰い人”を告発して難を逃れた人物だった。皮肉な事にスネイプもその告発された者の一人だったが、ダンプルドアの証言により無罪放免となった。しかしカルカロフのように仲間を売ってアズバン行を逃れた者は、他にも大勢いた。敵の

手に捕まるよりはと名誉の戦死を遂げたり、ご主人様への忠誠を貫きアズカバンへ入った者の方が、むしろ少ないくらいだ。多くの“死喰い人”はヴォルデモートが失脚した途端、もう彼は二度と戻って来ないと思切りを付けた。

しかし彼らの目論見は外れた。十数年の時を経て、“闇の帝王”は再び現世へ降臨せんとしていた。闇の帝王は裏切り者を決して許さない。力を取り戻した彼がまず行うのはかつての仲間を呼び集める事、そして裏切った者への容赦のない制裁だ。カルカロフは朝目覚め、印が昨日よりも濃くなっているのを目の当たりにする度に、生きた心地がしないと云って、憐れみを誘う声でしくしくと嘆いた。しかしスネイプは彼を助ける余裕などない。自らの命よりも大切な、果たさねばならない使命がある。彼は落ち着き払った口調で応えた。

「私は何も騒ぐ必要はないと思うが、イゴール」

「この期に及んで、君は何も起こっていない振りをするつもりか？」

カルカロフは薄い色の目を驚愕に見開き、盗み聞きを恐れるかのように周囲を見渡してから、不安げな押し殺した声で言った。

「あのお方はまもなく復活を遂げるだろう！もう我々に残された時間はほとんどない」

「なら、逃げればどうだ？」スネイプはそっけなく言い返した。

「私が言い訳を考えてやる。しかし、私はホグワーツに残る」

「余裕だな、セブルス。ご自分は安全な場所に守られ、ぬくぬくと高みの見物というわけか」

カルカロフは唐突に吐き捨てた。先程までの耳障りの良いへつらい声も、笑みも、今やかなぐり捨てている。まさに醜悪な形相だった。彼の薄い色の目は氷の欠片のように冷たく研ぎ澄まされ、スネイプを睨み付けている。

「噂で聞いたぞ。お前はあの子が入学して以来ずっと、不正な補習授業で拘束しているそうだな。あのお方から自分だけを助けてもらうように教え込む時間はたっぷりであった訳だ」

「あの授業は、旧友からの指示で実行しているだけだ」スネイプは冷えてとした声で応えた。

「断じて私の意志ではないし、元より彼女に助けを乞うつもりなどない」

「白々しい事を抜かすな！」

カルカロフはついに怒りを爆発させ、スネイプの胸倉を掴み上げた。

「セブルス、あの子の加護を私にも与えろ！今すぐだ！さもなければ女学生が一人、この学校から永久に消え去る事になるぞ」

「ああ、好きにすれば良い」スネイプの黒い目がギリリと剣呑な輝きを放った。

「だがあの子はルシウスのものだ。手を出す事は私が許さん。あの子ではなく、デイメンターの加護を君が欲しているというなら別だがね」

その時、睨み合う二人の左腕に僅かな違和感が走った。カルカロフはまるで雷に撃たれたかのように体を大きく痙攣させた後、急いで袖を捲り上げて印を覗き込み、深い絶望の感情に沈み込む事となった。その様子を見るだけで、スネイプには嫌というほど理解できた。――  
“闇の帝王”の復活がますます近づいてきているのだと。

☆

翌日の夜、地下牢にて“閉心術”の訓練が再開された。スネイプはイリスの心の表面をざつと眺め、精神状態が比較的安定している事を確認すると、杖を振るって地下牢内の作業机を片付けた。四方の壁に作り付けられた薬品棚が、壁の中に吸い込まれるようにして消えている。スネイプはイリスを部屋の中央へ招き寄せ、薄い唇を開いた。

“開心術”は言葉の通り、心を開き見る術だ。術者は相手の目を見る事で心を開く。非常に卓越した術者なら、目線を交わしただけで、相手が今何を考えているのかを垣間見る事だけでなく、必要であれば深く心の世界に潜り込み、本人すら気づいていないような奥底に眠る秘めた思いも把握する事が可能だ。

ゴント、“開心術”を侮るな。『自分の心を見られるだけなら、痛くも何ともない』と思っっているな？『磔の呪文”の方がもっと辛い』とも」

スネイプは知らない内に“開心術”を使い、イリスの心の内を盗み見ていた。本心を暴かれて顔を真っ赤にするイリスを見て、スネイプは意地の悪い笑みを浮かべ、小さな子供に昔話を聴かせるように優しい声で言葉を続けた。

「では能天気な君にもご理解頂けるよう、分かりやすい表現で説明して差し上げよう。

“闇の帝王”は不世出の“開心術”の達人である、最も偉大なる魔法使いだ。近い未来に、彼が復活を果たしたとする。君は再び彼に憑依された。彼は“開心術”を使って君の心に侵入し、君の友人関係を洗い出した。そして彼は君と最も親密な関係にある、三人の子供を見つけた

“三人の子供”——すぐにハリーとロン、ハーマイオニーの顔が思い浮かび、イリスはドクンと心臓が大きく脈打つのを感じた。かつてリドルはイリスの友人関係を間違ったものだと言い放ち、自分を助けようとしてくれたハーマイオニーを“穢れた血”と罵り、彼女にバジリスクをけしかけた。

「ハリー・ポッター、ロン・ウィーズリー、ハーマイオニー・グレンジャー。この三人は、狂信的な純血主義者である彼にとつて生きるに値しない子供達だ。君がいくら頑固に口を閉ざそうが、彼らと親友ではないと見え透いた嘘を吐こうが、何の意味も成さない。口は簡単に嘘を吐けるが、心だけはそうできないと、彼は良く知っているからだ。“闇の帝王”は舌舐めずりをして、泣き叫ぶ君の目の前で彼らを一人ずつ斃り殺した」

イリスはサーツと音を立てて血の気が引いていくのを感じた。バジリスクに石化の魔法を掛けられ、硝子のように硬く変質したハーマイオニーの肌の感触が蘇り、思わずブルツと身震いした。そんな彼女の様子に構わず、スネイプは歌うように話を続ける。

「親友を失って絶望に泣き叫ぶ中で、君は無意識の内に家族へ助けを求めた。“闇の帝王”の食指が再び動いた。——君の叔母君であるイオ・イズモはスクイブだ。君を帝王の目から守り、今日に至るまで隠し通した人物でもある。彼はまるでピクニックに行くような気軽

さで、君の心から家の所在地を抜き取り、君の家へ“姿現し”した。いくら君のおば君が勇敢に戦ったところで、あのお方に勝つ事など出来ぬ。かくして君のおば君は、君の前へと引き摺り出され、最も無惨な方法で殺された”

スネイプの言葉は、イリスの心に正視に堪えないほど恐ろしいイメージを生み出した。——大好きなイオおばさんがヴォルデモートの手によって深く傷つけられ、苦痛に呻きながらも自分を心配そうに見つめ、やがて命を手放していく光景だ。彼女は余りの恐怖に顔を真っ青にして、縮み上がった。おばさんが殺されるなんて、そんな事、決してあってはならない。ごくりと生唾を飲み込んでスネイプを仰ぎ見ると、もう彼は笑ってなどいかなかった。真剣な表情で腕を組み、イリスをじつと見つめている。

「ご理解頂けたかな？」優しい声でスネイプは囁いた。

「“開心術”はあまねく全ての秘密を暴く。それに比べれば自分が苦しむだけの“磔の呪文”など、むしろ生温い方だ”

スネイプは腕組みを解き、杖を構えながら言った。

「君が本当に大切なものを守りたいと思うのなら、“閉心術”を会得しなければならぬ。“閉心術”に呪文はない。強い拒絶の意志をもって、心を閉じるのだ。最初は、箱の中に自分の心臓を入れるイメージをすると良い。」

今から私は、再び君に“開心術”を掛ける。私が君の心へ直に触れる感触を感じられるように、ゆっくりとした速度で君の中へ入っていくとしよう。——ゴーンと、強く思い、また想像する事が肝要なのだ。君の心臓を箱に入れ、私に触れられないようにしろ。私を拒絶するのだ”

イリスは杖をギュツと両手で握り締め、目を深く閉じて一生懸命想像した。——自分の体から心臓を取り外し、脈打つそれを箱の中に入れ、蓋をして鍵を掛ける。イリスのイメージが固まった事を確認すると、スネイプは“開心術”を用いてイリスの心の中に侵入した。そのエメラルド色に輝く瞳を通り抜け、小さな頭を通り過ぎ、脈打つ心臓を撫で、さらに奥の方へと——

☆

イリスの心の世界で、二人は向かい合って立ち並び、真剣な表情で見つめ合っていた。——イリスは薄い硝子で出来た透明な箱の中に入っている。それは彼女が急ごしらえで作り上げた“閉心術”が、精神世界で具現化されたものだった。スネイプは箱の前まで歩み寄ると、その表面にひたりと手を当てて、力を込めた。

やがてびしりと音を立てて大きな罅が入り、その罅を中心として蜘蛛の巣のような亀裂が広がっていく。——このままでは箱が壊されてしまう！焦ったイリスは両手を組み、目をギュツと瞑って想像を膨らませた。箱がもつと大きくなり、頑丈になるイメージだ。彼女の意志に従って表面の罅は修復されてゆき、硝子の箱は徐々に肥大化していく。しかしスネイプの方が、もつとずっと強かった。

「私を拒絶しろ、ゴント！」スネイプは怒鳴った。

「このままでは、君は大切なものを全て失う事になるぞ！」

大好きな親友達の明るい笑顔、イオおばさんに抱き締められた時のぬくもりが思い起こされ、イリスはたまらず震え上がった。——私のせいで、皆を危険に晒したりするもんか！彼女は奮起し、より一層力を込めた。もう二度と、あの人にハーミーを傷つけさせたりしない。見る間に箱全体がキラキラと光り輝き、罅は一つ残らず修復され、元の滑らかな表面へ戻った。箱は二倍ほどの大きさに成長し、厚みを増した壁が光を屈折させ、今は遠くの方に歪んで見えるばかりとなったイリスを見て、スネイプは満足気に言った。

「素晴らしい」

イリスは言葉を発する余裕もないほどに集中していたが、不意にスネイプに褒められた事で有頂天となり、大きく気持ち揺らいだ。その結果、せっかく上達しかけていた“閉心術”が乱れて、あれほど頑丈だった箱は今度はビニールのように柔らかくなり、イリスに覆い被さってきた。余りの自分の至らなさに恥じ入り、俯くイリスの様子を見て、スネイプは呆れたような笑いを口元に滲ませる。

「だがまだまだだな」

スネイプが長い指で箱の残骸を一押しした瞬間、それは眩い光を放

ち、粉々に砕け散った。イリスは降り注ぐ欠片から身を守るために、強く目を瞑ってしやがみ込んだ。

☆

やがて大好きな親友達の声が出て、イリスはゆっくりと目を開けた。——イリスはいつの間にか“隠れ穴”のロンの部屋にいた。クイディッチ・ワールドカップへ出かける前の日、オレンジ色に燃え盛るロンの部屋で、もう一人の自分がハリー達とシリウスの前で、祖母・メーテイスが遺した呪いの事を話している。スネイプは、湯気が立ち昇る五人分のティーカップとお菓子が載った盆の横に立ち、その様子をじつと観察していた。

——これは“自分の過去の記憶”の世界だ。しばらく経ってからその事実に至ったイリスは、やがて大いに慌て始めた。自分の記憶が正しければ、もうすぐシリウスが『スネイプを信用するべきではない』と忠告してしまう。スネイプ先生がそれを聞いて心を痛める前に、どうにかしてここから移動しなくては。どうして彼は寄りにもよって、こんな記憶の中にいるのだろう。イリスがはらはらと気を揉んでいると、スネイプはふとこちらを向き、静かな口調で言った。「ゴーント、先程の感覚を忘れるな。君の準備ができ次第、再浮上し、先程の作業を繰り返す」

「私、もう大丈夫です！」

イリスは急いでまくし立てた。そしてわざとらしく何度も咳き込んで、ハリーとロンが揃って言い放った言葉を掻き消そうと頑張った。

☆

——その時、窓から明るい陽光が差し込んで、イリスの豊かな黒髪を明るく透かし、彼女の白い膚を淡く光らせた。金色と青色の光が深く入り混じり、美しいエメラルド色へ変わった大きな瞳がスネイプを再び仰ぎ見る。

スネイプはまるで時が止まったかのようにその場で立ち尽くし、彼女の目を魅入られたかのように見つめ返したまま、ピクリとも動かなかった。



「先生？」

スネイプはイリスの言葉に応えなかった。感情の読めない昏い瞳がふと揺らいで、キラツと光を放ったような気がした。彼は熱に浮かされたように覚束ない足取りでイリスに近寄ると、顔を苦しそうに歪ませ、茫然と佇む彼女の頬へ手を伸ばした。

しかしスネイプの指先が触れる寸前に、彼がイリスに覆い被さるような形になった事で窓の光が遮られ、彼女はすつぽりと影に包まれた。——まるで魔法が解けてしまったかのように、イリスは元の姿へ戻った。我に返ったスネイプは、火傷をしたように素早く手を引つ込める。彼女は恩師の不可思議な行動に首を傾げながらも、心配そうに見上げて口を開いた。

「先生、大丈夫ですか？あの・・・」

『だがその証拠がない』

突然シリウスの鋭い声が後方から突き刺さり、彼女は驚いて息を詰めた。——なんてことだ、すっかり忘れていた。イリスがブリキ人形のようにぎこちない動作で振り向くと、記憶の中のシリウスが過去の自分へ向けて忠告を始めたところだった。いつも自分を助けてくれるスネイプ先生に、こんな事を聴かせたくなかった。静まり返った部屋の中で、シリウスの言葉だけが残酷に響き渡っている。イリスが気まずそうに縮こまる一方で、スネイプは先程の自分の行動の理由を静かに思い返していた。

☆

——カルカロフの狂気、ムーデイの警戒、そして濃くなる一方の“闇の印”。カルカロフに言われるまでもない事だ、“闇の帝王”はまもなく復活を遂げる。彼が降臨を果たした時、世界は再び——自分の事すらも信じられなくなるような——猜疑心と恐怖心、そして悪意に満ちたものへと変わっていくだろう。人を疑い、警戒し、自ら杖を取って戦う意志を持たなければ、この子は生き残れない。悪しき人々に利用され、絞り尽されて、無残に殺されるだけだ。不意にかつての幼馴染の亡骸の記憶がフラッシュバックし、スネイプはほとんど反射的に“耐えられない”と思った。

スネイプは先程イリスに触れようとした手を茫然と見つめながら、新たに芽生えた愛をやつと自覚した。——自分がルシウスの命令に従い、どんなに辛く当たり傷つけるような言動を繰り返しても、彼女は健気にそれを耐え、いつでも陽だまりのような笑顔で浮かべて慕ってくれた。窓際に立った先程のイリスの姿と、かつて自分に笑顔を向けてくれた幼馴染の姿が重なり、スネイプは込み上げる想いを耐え忍ぶかのように深く目を瞑る。

彼が永久の愛を捧げるリリー・エバンスとイリスは、あらゆる面で非常に良く似ていた。

たった数年の間に、イリスはスネイプがどうする事も出来ないほど深く大切な場所にするりと入り込んで、リリーの思い出と一緒に笑っていた。この子の傍にいてずっと見守りたいと、スネイプは思った。しかしそんな事が出来る訳がないという事も、彼は良く分かっていた。

——“リリーを二度死なせる訳にはいかない”。そして彼女に警鐘を鳴らす事が出来るのは、今の自分だけだ。スネイプは唇を強く噛み締め、覚悟を決めた。

やがてジニーが皆を呼びに来たために、記憶の中の人々は立ち上がってぞろぞろと部屋を出ていった。——イリスの記憶の領域から外れたのか、徐々に色を失っていくロンの部屋の中で、スネイプはただ物も言わずにじっと佇んでいる。彼女はその様子に狼狽し、唇を噛み締めた。きっと先生はシリウスの言葉に傷ついてしまったんだ。イリスはそつとスネイプの傍に近づいた。今やロンの部屋は跡形もなく消え去り、白い霞だけが二人を静かに包んでいる。

「君は何故、ブラックの忠告を信じない？」

スネイプは唐突に尋ねた。昏い感情を宿した黒い目と、明るい光を放つ青い目が交錯したとたん、彼は眩しいものを見たかのように目を細め、顔をわずかに背ける。『何故シリウスの言葉を信じないのか』だって？イリスはその問いにすぐ答えを見出す事が出来た。そんなの決まってる。『私が先生を信じているから』だ。

「私は先生を信じています」イリスは揺るぎのない口調で言った。

「先生は私の味方です」

「・・・味方？」

しかしスネイプはイリスの言葉尻を捕え、口元に酷薄な笑みを浮かべた。まるでイリスが「魔法薬学」の授業で間違えた回答をしてしまった時にするような、嘲りに満ちた顔つきだ。——どうして先生はそんな顔をするのだろうか？イリスは大いに戸惑いながらも、スネイプを仰ぎ見た。次の瞬間、彼は感情の読めない目で小さな少女を絡め取り、静かな声で尋ねた。

「君は何故、私が味方だと思うのかね？」

その瞬間、本能的に身の危険を感じたイリスの世界は、血のような真紅色に染まった。周囲から無数のボールが転がって来て、茫然と立ち竦む主人を守り、ニョキツと突き出した細い腕でスネイプに向かつてクソ爆弾を投げつけ始める。しかしそれらを受ける前に、スネイプは杖を一振りしてボール達を弾き飛ばすと、イリスの腕を掴んでグイと引っ張った。

二人はイリスの心の世界から弾き出され、現実世界へ戻った。イリスは思わずよろめきながらも何とか踏ん張って、スネイプを継るような目で見つめた。胸がざわざわと騒ぎ、言いようのない不安が込み上げて来る。——先生は私の味方だ。彼女は何度も自分に言い聞かせた。さっきのは、きつと聞き間違いだったのに違いない。けれどもそんな思いを嘲笑うかのように、スネイプは左袖を捲って印を見せ、彼女の目の前で口付けてみせた。

「先生？」イリスは乾き切った唇を開き、何とか声を絞り出した。

「君はブラツクの言う通り、彼らを頼るべきだった。私の家に来たのは間違いだっただな」

スネイプは冷笑し、イリスに“切り裂き呪文”を放った。禍禍しい光線は左肩に命中し、皮膚が大きく裂けて鮮血がほとばしり、彼女は痛みと驚きの感情に打ちのめされ、苦痛に喘ぎながらスネイプを見た。——本当は彼の手により、受けた傷はすぐさま治癒されていたが、恩師の裏切りに狼狽するばかりのイリスは気づかなかつた。自分で創り出した血溜まりに足を取られて転び、床を這いずって逃げよう

とする彼女に向け、スネイプは“磔の呪文”を唱えた。それはイリスがピーターに受けたものとは比べ物にならないほど優しい痛みだったが、彼女はそれに気づく余裕すらなく、自らの血に塗れながら泣き叫んだ。

「やめてください！やめて・・・」

「君がみだりに人を信用するからだ。改心する”死喰い人”など存在しない」

本当にその通りだった。スネイプが知る中で、過去の罪を本当に悔い改めた“死喰い人”など、一人足りともいなかった。——かくいう彼も足を洗った身だが、それは今までの行いを反省したからではない。リリーの子供を守るためだ。彼らは皆ずる賢く、嘘が上手い。そう遠くない未来、『スネイプ先生も改心したから大丈夫だ』と、本当の悪意を秘めた彼らに口先三寸で騙され、利用し尽されるイリスの姿が目に見えるようだった。スネイプは容赦なくそう言い放ち、壁際にまで後ずさり、涙を浮かべて自分を見つめる彼女を射竦めた。——この期に及んでも彼女は杖を取ろうとせず、縋るような目を向けている。攻撃を止めてくれると信じているのだ。ギリと唇を噛み締め、スネイプは唸った。そして杖を向け、力を込めて“ある呪文”を唱えた。

「アバダ・・・」

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

スネイプの杖先に恐ろしい緑色の火花が飛び散った瞬間、イリスは反射的に杖を引き抜き、“武装解除呪文”を唱えた。かくして彼の杖は弾き飛ばされ、“死の呪い”は回避された。——イリスは生まれて初めて、スネイプに抵抗した。彼は武器を失っても戸惑う様子すら見せず、彼女の傍にしゃがみ込んで、小さな顎を掴み、自分の方にグイと向けさせた。

「ゴーント。私の心の内が見えるか？」

スネイプはすっかりとした声音で問いかけた。イリスは怯えながらも力を込めて彼の瞳を見つめたが、いくら頑張っても彼の目の奥に虹色の輝きは見い出せない。彼女は力なく首を横に振った。

「心の内が見えぬ者は信じるな。そしてそれは、私も含めてだ」

スネイプは静かにそう言うと、床に転がった自分の杖を拾い上げて、イリスに向けて歌うように美しい呪文を唱えた。するとみるみるうちに彼女の体に残るわずかな傷が全て消え去り、床に広がる血溜まりや衣服の裂かれた部分までもが綺麗に修復されていった。スネイプはイリスに“血の生成を促す薬”を飲ませ、言葉を続けた。

「君は“開心術”の才能を有している。常に相手の心を覗き、見えぬ者は信用せぬ事だ。——かつて“闇の帝王”が支配していた時代は人を疑う心と嘘、そして悪意が蔓延していた。君のように嘘を見抜けないお人好しは、いつも死の一番乗りだった。表面上は優しい笑顔を浮かべているが、その裏で悪しき事を考える者は、吐いて捨てるほど存在する。君は人に対して、もっと警戒心を持つべきだ」

——それはスネイプが身をもつて発した“警告”だったが、その意味を真に理解するには、まだたった十四歳の平凡な女の子には早すぎた。イリスは空っぽになった薬瓶を持ったまま、スネイプの昏い目を頑固に眺めていた。いくら力を込めても、虹色の煌めきは見えない。彼が深く心を閉ざしているからだ。

やがてスネイプはイリスの手から薬瓶を回収し、彼女の体調の最終確認を終えると『寮に帰ってゆつくりと体を休めるように』と言い、部屋の外へと送り出し、扉を閉めようとした。しかしその扉をガツと掴んで、阻んだ者がいた。——イリスだ。

「心の内を読める者だけを、先生は信じろと仰いました」

涙と鼻声でくぐもった声で、イリスは挑むように言った。——一体、何が言いたい？彼女の言葉の意図が読めず、スネイプはゆらりと幽鬼のように顔を下げて、小さな少女を見つめた。泣き腫らしたエメラルド色の目が、はつきりとした決意に燃えている。先生や他の人々が何をどう言おうが、私は先生を信じたい。イリスは強くそう願った。今まで築き上げて来た彼との絆は、そう簡単に崩れるものではない。彼女は一切の迷いのない声音で、こう続けた。

「私、いつか必ず先生の心を開きます。そうしたら、また私は先生を信じる事ができるから」

余りの事にスネイプは言葉もなく、ただイリスを見つめた。——い

つも頼りなくおどおどとしているこの少女は、時として驚くような芯の強さを垣間見せる。まるで“蓮の花”だ、スネイプはそう思った。汚泥の中で一片の穢れもない美しい花を咲かせる蓮のように、自分がどれほど傷つけ、冷たく突き放しても、イリスはずっと傍にいて、清らかな笑顔を向けている。

——イリスの力が遠く及ばない、暗く深い海の底、際限のない後悔と懺悔の感情に埋め尽くされた場所で、リリーの亡骸を抱き締めようとずくまるスネイプに一条の光が差した。彼は虚ろな目でその光を見つめ、力なく微笑み、こう言った。

「やってみるがいい。君にできるものなら」

☆

イリスは地下牢を出たあと、ぼんやりとした足取りでグリフィン・ドール塔へ戻った。もう夜も更け、談話室にはほとんど人気はない。部屋の隅っここにはフレッドとジョージがいて、羊皮紙を片手に何やら真剣な表情でヒソヒソと話し合っている。

「おかえり」

不意に優しい声がして、イリスは急いで声のした方へ視線を送った。——ハリーだ。いつもの特等席に座り、クイディッチ・ワールドカップのプログラムを読み込んでいるようだった。彼は朗らかに笑い、テーブルの上に置いてあった皿を差し出した。美味しそうなスコーンがいくつか載っていて、クロテッドクリームもたっぷりと添えられている。

「こつちにおいでよ。・・・疲れただろ？お茶にしよう」ハリーはポットから暖かい紅茶を注ぎながら言った。

「紅茶にミルクを入れようか。どうする？」

『心の内が見えぬ者は信じるな』——その時、スネイプの言葉が警鐘のようにイリスの耳の中で鳴り響き、彼女は無意識の内にハリーの目を覗き込んで、虹色の光を見出していた。——彼の心は、自分に対する愛情と思いやりに溢れている。その優しい気持ちはまるで暖炉の炎のように、冷え切った彼女の心を暖めた。そして親友の心を勝手に覗き見た事で生まれた罪悪感と、そうしなければ生きる事ができない

と説いたスネイプの忠告が、イリスの頭の中で複雑に入り混じり、心臓が張り裂けそうに震えた。彼女は黙ってハリーの隣に座ると、彼の肩にそっと頭をもたせ掛けた。彼はたまらず顔を真っ赤に染め上げ、優しく抱き寄せる。

「イリス、どうしたの？」

しかしイリスは問い掛けに応えなかった。代わりに、わずかに鼻をすする声が聴こえた。——泣いている。たちまちハリーの脳裏にスネイプの意地の悪い顔がパツと思ひ浮かび、彼は警戒した声で言った。

「あいつに何かされたのか？」

イリスは首を横に振り、ますます強く彼にしがみついた。ハリーは彼女が心配な一方、とても心地良い幸福感に身を任せ、ひとまず彼女が落ち着くまでずっとこうしている事にした。

「大丈夫だよ。僕が傍にいる」

ハリーが頭を撫でながら優しく言うと、イリスは安心したようにこくと頷いた。——イリスはハリーを實の兄のように慕い、甘えていたが、ハリーは一人の女性としてイリスを愛していた。それぞれが抱く想いはとても似ているようで、その行く先は悲しいほどに異なっていた。

その時、どこからかクスクスと忍び笑いが聴こえてきて、ハリーは我に返り、後ろを振り向いた。——フレッドとジョージだ。二人はハリーの視線に気づくや否や、芝居がかった所作でお互いを見つめ合い（ジョージはイリス役を買って出たのか、妙に乙女チックな立ち振る舞いをしていた）、熱烈なキスをするジェスチャーをした。そしてハリーに向かって“行け！”とハンドサインを出した。

二人が何をさせようとしているのか理解したハリーは、ただ顔を真っ赤にして硬直するばかりだった。いつまで経っても彼が動かないので、しびれを切らした二人は溜息を零して席を立ち、「おやすみ」と言って男子の部屋へ続く階段を上がって行ってしまった。——フレッドは二人の傍を通る時、「チキン！」とハリーの頭を軽く小突いた。

☆

翌日は土曜日で、普段なら遅い朝食を摂る生徒が多いはずだった。しかしイリス達はこの週末はいつもよりずっと早く起きた。身だしなみを整えた四人が玄関ホールに下りていくと、すでに二十人ほどの生徒がウロウロしているのが見えた。みんな朝食を持ち込んで、ホールのあちこちに座り込み、〃炎のゴブレット〃を眺め回している。ゴブレットはホールの真ん中に、いつもは〃組分け帽子〃を載せる丸椅子の上に置かれていた。床には細い金色の線で、ゴブレットの周りに半径三メートル程の円が描かれている。

「ねえ、誰か名前を入れた？」ロンがうずうずしながら、近くにいたハッフルパフ生の女の子に訊いた。

「ダームストラングが全員。だけどホグワーツからは、私は誰も見えないわ」

「昨日の夜、皆が寝てしまってから入れた人もいると思うよ」ハリーは言った。

「僕だったらそうしたと思う。皆に見られたくないもの。ゴブレットが名前を入れたとたんに掃き出してきたりしたら嫌だろ？」

その時、ハリーの背後で大きな笑い声が出て、四人は一斉に振り返った。――フレッドとジョージ、リー・ジョーダンが急いで階段を降りて来るところだった。三人共ひどく興奮している様子だ。

「やったぜ」フレッドが有頂天で言った。

「〃老け薬〃を飲んだんだ。一人一滴な」ジョージが両手を擦り合わせながらロンにウインクした。

「三人の内、誰かが優勝したら一千ガリオンは山分けにするのさ」

リー・ジョーダンはニヤリと不敵に笑ったが、ハーマイオニーは〃極めて遺憾です〃と言わんばかりの表情を浮かべ、実に彼女らしい警告の言葉を送った。しかし三人は見事にそれを聞き流し、早速フレッドが足を踏み出した。イリスは固唾を飲みドキドキしながら、その様子を見守った。今や彼女だけでなく、玄関ホールの全ての人々が息を飲んで見守る中、フレッドは勇気をもって線の中に足を踏み入れた。

一瞬、上手くいったとみんなが思い、口々に歓声を上げかけた。



ジョージもきつとそう思ったのだろう、フレッドの後を追って飛び込んだのだ。しかし次の瞬間、双子は金色の円の外に放り出された。二人は三メートルほども吹っ飛び、冷たい床の上に叩きつけられ、それから全く同じ“白い髭”が生えて来た。

玄関ホールが大爆笑に湧いた。フレッドとジョージでさえ、落胆するどころか、立ち上がってお互いの髭を眺めたとたん、腹を抱えて笑い出した。やがてダブルドアがやって来て、ブルーの目を悪戯っぽく輝かせながら注意をし、医務室へ行くようにと指示を出した。ゲラゲラ笑っているリーに付き添われ、医務室へ二人は向かい、イリス達も笑いながら朝食を摂るために大広間へ向かった。

大広間の飾りつけは今朝はすっかりと変わっていた。ハロウインらしく、生きたコウモリが大きな群れを成し、魔法のかかった天井の周りを飛び回っていたし、何百というジャック・オ・ランタンがあちこちの隅に飾られている。イリスが丁寧に裏ごしされたカボチャのポタージュに浸したパンを食べている間にも、大広間中の生徒達はみんな、誰もかれもが顔を合わせては、誰がホグワーツから立候補したかと話している様子だった。

「ハツフルパフじゃ、みんなセドリツク・デイゴリーのことを話してる」シエーマスが軽蔑したように言った。

“セドリツク・デイゴリー”——イリスは名前を聴いて、はたと思い出した。クイディッチ・ワールドカップで出会ったハツフルパフの上級生だ。とても礼儀正しいハンサムな青年で、クイディッチではハツフルパフ・チームのキャプテン兼シーカーを務めている。その時、玄関ホールの方で大きな歓声が上がった。やがてグリフィンドールの上級生、アンジェリーナ・ジョンソンが少しはにかんだように笑いながら大広間に入って来て、イリスとハーマイオニーの間に腰掛けるなり、明るい声で言った。

「私、名前を入れて来たわ！先週が誕生日だったの！」

輝くような笑みを浮かべるアンジェリーナを、イリスとハーマイオニーは憧れに満ちた眼差しで見つめた。——竹を割ったような性格の彼女は、グリフィンドール・チームの名チエイサーであり、女の子

達の憧れの的でもあった。何より、グリフィンドールで立候補者が出るのはとても嬉しい事だ。二人はアンジェリーナの肩越しに見つめ合い、微笑んだ。

「貴方が選ばれるといいな、アンジェリーナ」とハーマイオニー。

「私もお祈りしてるよ」とイリス。

「ありがとう、二人共」

アンジェリーナは凜とした顔を優しく緩ませ、微笑みかけてくれた。そうこうしている内に四人は朝食を摂り終わり、短い話し合いの末、久しぶりにハグリッドの小屋へ遊びに行く事になった。ハーマイオニーが『ハグリッドにSPEWの勧誘をしていなかった』と言って、バツジを取りに駆け戻っている間、三人は玄関ホールに佇み、何をするでもなく“炎のゴブレット”をじっと見つめていた。

その時、ポーバトン生が校庭から正面の扉を通ってホールへ入って来た。一団の中に、とんでもなく美しい少女がいる。長いシルバーブロンドの髪がさらりと腰まで揺れ、大きな深いブルーの瞳は宝石のように輝き、にっこりと笑うと真つ白で綺麗な歯並びがキラリと光った。——イリスはこんなに美しい人を見たのは、生まれて初めてだと思った。“炎のゴブレット”を取り巻いていた生徒達が、一行を食い入るようにつめながら、道を開ける。マダム・マクシームが生徒の後からホールへ入り、彼女の指示で生徒達は一人ずつゴブレットへ紙を投げ入れていく。

「あの人、ヴィーラだ！」ロンが掠れた声で言った。

「間違いない、あれは普通の女の子じゃない！」

ロンが言う事も最もだとイリスは思った。まさに惹きつけられるような美しさだ。通常は男性にしか作用しない筈の美少女が有する“ヴィーラの魔力”は、“動物と会話できる能力”を持つ、感受性の高いイリスにも充分な影響を与えていた。ゴブレットを入れる時の所作さえ美しく見えて、イリスは思わずホウと感嘆の溜め息を零した。

「ホグワーツじゃ、ああいう女の子は作れない！」とロン。

「ホグワーツだって、女の子はちゃんと作れるよ」

ハリーは反射的にそう言い返し、イリスを熱を帯びた目でチラツと見た。——ハリーにとつてはシルバールブロンド美少女より、隣に立つイリスの方が遥かに魅力的だった。ロンはやがて、バッジを取りに戻ったハーマイオニーにバシツと頭を叩かれ、我を取り戻した。かくしてイリス達はハグリッドの小屋を指指して歩き出したが、ロンの目は依然として、前方を歩くボーバトン生——の中にいる美少女——へ据え置かれたままだった。

禁じられた森の端にあるハグリッドの小屋に近づいた時、小屋から百メートルほど離れた場所に、数日前にボーバトン生が乗つて来た、巨大なパステル・ブルーの馬車が安置されているのが見えた。彼らはその馬車へ向かい、順番に中に入って行く。その様子を見守りながら、イリスは数日前にカルカロフ校長に言われた言葉を思い出した。——彼は“自分の船で寛いではどうか”と言っていた。恐らくボーバトン生もダームストラング生も、三校対抗試合が行われている間は、馬車や船の中で寝泊まりするのだろう。

ハリーが代表して小屋の扉をノックすると、すぐにファングの低く響く吠え声が出た。ハグリッドが勢いよく扉を開け、出迎えてくれた。

「よお、お前さん達！元気か？」

ハグリッドはにつこり笑ったが、四人はピシリと固まって二の句が告げないでいた。——ハグリッドは一張羅の毛がモコモコと膨らんだ茶色い背広を着込み、黄色と橙色の格子縞ネクタイを締めていた。おまけに髪を撫でつけようとしたらしく、業務用のグリースかと思われる油を塗りたくったせいで、ギラギラとした虹色に輝いている。髪は何故か二束にくくられて垂れ下がっていた。どう鼻屑目に見てもハグリッドには似合わなかったし、むしろ前の恰好の方がずっと良かった。ハーマイオニーは目を白黒させてハグリッドを見つめていたが、結局何も言わない事に決めたらしく、こう言った。

「エーツト・・・スクリユートは元気？」

「元気だぞ。でっかくなつて、もう一メートル近いな。ただ困った事に、お互いに殺し合いを始めてなあ」

ハグリッドは『お前さんの忠告した通りだった』と言って、悲しそうな顔でイリスを見つめた。心配そうにハグリッドを見つめ返す彼女は、他の三人が明らかにホッと胸を撫で下ろしている様子に気付かなかった。

「だがもう大丈夫だ。もう別々の箱に分けてやった。今度の授業はあいつらのお散歩だぞ。お前さんのリクエストに応えてな！」

ハグリッドは嬉しそうにイリスにウインクしてみせた。すかさずロンが殺意を込めた視線を彼女に飛ばしながら、変に明るい声でこう言った。

「ワーオ！お散歩だってさ。イリス、ナイス・アイディア！」

ロンの放った皮肉は、ハグリッドには通じていないようだった。やがてハグリッドがお茶の準備を始めたので、四人はテーブルに着き、すぐにまた三校対抗試合の話に夢中になった。ハグリッドは何やら試験の内容を知っているようだったが、いくら四人がせっついても笑ってはぐらかすばかりで教えてくれようとはしなかった。ハグリッドはランチに鉤爪入りのビーフシチュー、デザートにカチカチのロククケーキを出してくれた。それに（イリスだけ）舌鼓を打ちながら、試合の種目が何なのか、あの手この手で彼に言わせようとしたり、立候補者の中で代表選手に選ばれるのは誰なのか推測したり、フレッドとジョージの髭はもう取れただろうかなどと話したりして、四人は楽しく過ごした。

昼過ぎから小雨になった。急に使命を思い出したハーマイオニーは、バツジを片手に熱弁を振るってSPEWに勧誘したが、ハグリッドは『それは屋敷しもべ妖精のためにならない』と言って拒否した。イリスはそんな彼をベッドに座らせ、その後ろに立って杖を振るい、彼の髪型をお洒落なポニーテールにする事に成功した。それから彼が“オーデコロン”だと言い張る、耐え難い匂いを放つ謎の水の成分を調べ、手持ちの薬草をいくつか放り込んで、彼に似合うような爽やかな香りが漂う、本物のオーデコロンへ再調査した。そんなのんびりとした穏やかな時間が過ぎ、いよいよハロウィーンの晩餐会、そして“炎のゴブレット”が選んだ各校の代表選手を発表する時間が迫っ

て来ていた。

イリス達は小屋を出て、大広間へ戻るために学校に向かつて歩いた。すると途中でボーバトン生を引き連れてマダム・マクシームがやって来た。その瞬間、イリス達の目の前で、ハグリッドが駆け出した。そして早足で彼女に追いつくと、二人はふと立ち止まり、熱を帯びた目でお互いを見つめ合った。マダム・マクシームがハグリッドの髪を撫で、心地良さそうに鼻を動かしているのが見える。やがて二人は仲良く寄り添い、歩き去って行った。彼らの後を、ボーバトン生が小走りでくっついていく。

「まさか、あの二人付き合ってるの？」ハーマイオニーが愕然とした声で言った。

「子供ができたなら、新記録だぜ。一体何トンあると思う？」ロンが囁いた。

二人の未来の行く末は分からないけれど、後ろ姿はとても良く似合っている。イリスは心の中で二人の初々しい姿に声援を送りながら、学校へ戻った。

☆

四人が大広間に戻った頃には、蝋燭の灯りに照らされた大広間は、ほぼ満員だった。“炎のゴブレット”は、今は職員テーブルの正面に移されていた。フレッドとジョージが髭もすつかりなくなり、失望を乗り越えて元の調子を取り戻し、気さくに笑っている。やがてダームストラング生の一行がぞろぞろとやって来て、クラムはイリスの傍に座った。そしてまたあの熱を帯びた目でチラツとハーマイオニーを見た。

ハロウィーンパーティーはいつもより長く感じられた。大広間の誰もかれもが首を伸ばし、待ちきれないという顔をし、そわそわしたり立ち上がったたりしている。みんな早く皿の中身が片付けられて、誰が代表選手に選ばれたか聞けるといいのにと思っていた。イリスは大きなシユークリームを食べている時、ハリーに小突かれて、彼の指し示す方を向いて、アツと驚きの声を上げた。かつてクイディッチ・ワールドカップで見かけた、バグマン氏がカルカロフ校長の隣に、そ

してクラウチ氏がマダム・マクシームの隣に座っている。

「あの二人だ」ハリーが驚いて声を上げた。

「一体何をしに来たのかな？」

「きつと三校対抗試合を組織したのは、彼らなんじゃないかしら？」

ハーマイオニーがイリスと白く豊かなブラマンジェを半分こしながら、思慮深げに言った。

「誰か代表選手になるのか、見たかったんだと思うわ」

ついに金の皿がきれいさっぱりと元のまっさらな状態となり、大広間のガヤガヤが急に大きくなったが、ダンブルドアが立ち上がると、一瞬にして静まり返った。ダンブルドアはまず、このイベントを復活させるに当たったの立役者としての二人——「国際魔法協力部」部長のクラウチ氏、「魔法ゲーム・スポーツ部」部長のバグマン氏をみんなに紹介した。クラウチ氏の時はパラパラと儀礼的な拍手が送られたが、バグマン氏の時はとても大きな拍手が上がった。ビーターとして有名だったからかもしれないし、ずっと人好きする容貌だからかもしれないなかった。

バグマンは誰彼構わず笑顔で手を振っていたが、イリスとバチツと目が合うと熱烈な投げキッスをしてくれた。その様子がとても面白くて、彼女は思わず吹き出してしまった。一方でクラウチは皆に向かつてにこりともせず、手を振りもしない。ゴブレットにも全くの無関心で、ほとんどうんざりとした表情だった。イリスがこわごわ目を凝らしてみると、なんと彼は遠目にも分かるほどにげっそりと痩せている。一体どうしたんだろう。イリスは心配になって尋ねた。

「ねえ、クラウチさん、すごく顔色が悪いよ。大丈夫かな」

「さあね。フレッドが残した“老け薬”でも飲んだんじゃない？」口元が適当に言った。

そして、いよいよその時はやって来た。ダンブルドアは『代表選手として名前が呼ばれたら、大広間の一番前に来て、教職員テーブルの先にある部屋に向かうように』と告げ、杖を一振りした。くり抜きかぼちやを残して、あとの蠟燭が全て消え、部屋はほとんど真っ暗になった。“炎のゴブレット”はいまや大広間の中でひとときわ輝き、キ

ラキラした青白い光が目にも痛いほどだった。全ての目が見つめ、待った。

やがてゴブレットの火が、突然赤くなった。火花が飛び散り始め、次の瞬間、炎が宙を舐めるように激しく燃え上がり、炎の舌尖から焦げた羊皮紙が一枚、ハラリと落ちて来た。全員が固唾を飲んだ。ダンブルドアがその羊皮紙を捉え、再び青白くなった炎の灯りで読もうと、腕の高さに差し上げた。そして力強い口調で読み上げる。

「ダームストラングの代表選手は、ビクトール・クラム」

大広間中が拍手の嵐、歓声の渦に飲み込まれた。イリスが「おめでとう」と言うと、クラムはぎこちなく微笑んで立ち上がり、前かがみでダンブルドアの方へ歩いて行き、やがて指示された部屋へと消えた。カルカロフ校長も満足気な様子で、彼を褒め称えている。

数秒後、再び赤く炎が燃え上がり、拍手とお喋りはすぐに静まった。みんなの関心を集め、炎に巻き上げられるように、二枚目の羊皮紙が中から飛び出した。ダンブルドアがそれを捕まえ、また読み上げる。

「ボーバトンの代表選手は、フラー・デラクール！」

「ロン、あの人だ！」

ハリーが叫び、ロンは魅入られたように少女を見つめた。美少女が優雅に立ち上がり、シルバーブロードの豊かな髪をサツと振って後ろへ流し、長テーブルの間を滑るように歩いて、部屋の奥へと去って行った。——ロンは気が付かなかった。彼が夢中になってその後ろ姿を見ている間、ハーマイオニーが嫉妬の炎を宿した瞳で自分を睨んでいる事を。

フラーが行ってしまおうと、また沈黙が訪れた。しかし今度は興奮で張り詰めた沈黙が、ビシビシと肌に喰い込むようだった。——次は、ホグワーツの代表選手だ。そして三度、“炎のゴブレット”が赤く燃えた。溢れるように火花が飛び散り、炎が空を舐めて高く燃え上がり、その舌尖からダンブルドアが三枚目の羊皮紙を取り出した。そしてその名前を見て、暖かな笑顔を浮かべた。

「ホグワーツの代表選手は、セドリック・デイゴリー！」

「ダメー！」

ロンが大声を出したが、幸運な事にイリス以外には誰にも聴こえなかった。ハツフルパフ生は総立ちになり、叫び、激しく足を踏み鳴らした。セドリツクがにつこり笑いながら、その中を通り抜け、テーブルの向こうの部屋へと向かった。セドリツクの拍手が余りに長々と続いたので、ダンブルドアが再び話し出すまでにしばらく間を置かなければならないほどだった。

「結構、結構！」

大歓声がやっと収まり、ダンブルドアが嬉しそうに呼びかけた。

「さて、これで三人の代表選手が決まった。選ばれなかったボーバトン生も、ダームストラング生も含め、みんな一緒に心から代表選手達を応援してくれることと信じておる。選手に声援を送る事で、みんなが本当の意味で貢献でき……」

ダンブルドアが突然言葉を切った。何が気を散らせたのか、誰の目にも明らかだった。――“炎のゴブレット”が再び赤く燃え始めたのだ。火花が迸った。突然空中に炎が伸び上がり、その舌先にまたしても羊皮紙を載せている。ダンブルドアが反射的に長い手を伸ばし、羊皮紙を捕まえた。彼はそれを掲げ、それに書かれた名前をじっと見た。長い沈黙が流れ、今や大広間中の目がダンブルドアに集まっていた。やがて彼は咳払いし、そして読み上げた。

「ハリー・ポッター」

☆

大広間中の目が一斉に自分に向けられるのを感じながら、ハリーはただ座っていた。驚いたなんてものじゃない。体中が痺れて感覚がない。夢を見ているのに違いない。そうだ、きつと聞き間違いだったのだ。ハリーは何度も自分にそう言い聞かせた。

誰も拍手しない。みんながハリーを睨み付け、好き勝手な事をヒソヒソと囁き合い始め、その声は怒った蜂の群れのようにわんわんと唸り、大広間じゆうに広がった。凍り付いたように座ったままのハリーを立ち上がって良く見ようとする生徒もいる。上座のテーブルでは、マクゴナガル先生が立ち上がり、切羽詰まった様子で何事かダンブルドアに囁いた。ダンブルドアは微かに眉を寄せ、彼女の方に体を傾け



て耳を寄せている。

ハリーはイリス達の方を振り向いた。イリスとハーマイオニーは揃ってポカンとした表情を浮かべ、彼を見つめ返した。ロンは彼の方を見ようともせず、熱心な眼差しをゴブレットに注いだままだ。その周りに、長いテーブルを取り囲むようにしてグリフィンドールとダームストラングの面々が座り、みんな口をあんぐり開けてこちらを眺めている。

「僕、名前を入れてない」ハリーは放心したように呟いた。

「僕が入れてないこと、知ってるだろ？」

「分かってるよ。そんなことより、もう少し待てよ、ハリー」ロンは息を潜めながら、とうに火が消えているゴブレットを用心深く見つめた。

「今にイリスの名前も出て来るぞ」

——その言葉は静まり返ったグリフィンドールのテーブルに思いの外響き渡り、みんな一斉に大爆笑した。ボーバトン生とダームストラング生、他の三つの寮の生徒達が冷ややかな視線を向ける中、グリフィンドールのテーブルの雰囲気は一気に和やかになった。

「ハリー・ポッター！」

ダンブルドアが名前を呼んだが、先程よりは少し声音は柔らかかった。

「行くのよ」

ハーマイオニーはハリーの背中を押して囁いたが、イリスは顔を真っ青にして彼の服の袖を掴み、引き留めた。

「ダメだよ、だってハリーは名前を入れてない。行く必要ないよ！」

「イリス。あのゴブレットには魔法契約の拘束力があるの」ハーマイオニーは苦しそうに言った。

「つまりハリーは代表選手に選ばれた以上、試練を果たす義務がある。行かなきゃ」

「大丈夫だ、イリス」ハリーは果敢にも微笑んで、イリスの頭を撫でた。「行ってくるよ」

ハリーは歩き出した。何百と言う目がサーチライトのように一斉

に自分に注がれ、心無い誹謗中傷の言葉がハリーに襲い掛かったが、親友達が自分を信じてくれていると思うだけで、彼の気持ちは不思議と揺らぐことがなかった。彼はダンブルドアの指示に従い、部屋の中へ入った。

☆

疑念の渦が湧き起こったまま、宴は解散となり、イリス達は談話室へ戻った。みんなどんな理由であれ、ハリーが代表選手に選ばれた事が嬉しいのか、談話室内はかなりのお祭り騒ぎ状態になっていた。ご馳走がたつぷりと談話室には用意されていて、イリス達はバタービールの瓶とお菓子を少しばかり持つと、騒ぐ人々から離れて、いつもの特等席に座り込んだ。

「なあ、一体誰が名前を入れたんだと思う？」ロンがバタービールの瓶の栓を抜きながら、呟いた。

「言っておくけど、ホントにハリーじゃないぜ。あいつ、前に僕がこっそりゴブレットに名前を入れるかどうか相談した時に、返事しなかったんだ。それに・・・」

ロンはチラリとイリスを見て、気まずそうに目を伏せた。

「君が「闇の魔術に対する防衛術」の授業であんなひどいパニック起こしたのに、名前を入れようって思う訳ないよ。あいつなら傍にいてやろうとするはずだろ？それこそ金魚のフンみたいにさ。代表選手になってる時間がもったいないって思うはずだよ」

——元・平凡代表選手のイリスを通して、自分がいかに恵まれている境遇にいるかという事を思い知ったロンは、昨今の彼女の強烈なパニックを間近で目撃し、ますますその思いを強くしたようだった。彼のハリーに対する思いやりと友情は、イリスとハーマイオニーの心を優しく暖めた。

「もういいわよ」ハーマイオニーは顔を赤らめながら言った。「でも本当に、誰が名前を入れたのかしら？生徒になんてできやしないわ。ゴブレットを騙す事も、ダンブルドアを出し抜く事も」

すると、談話室の穴が開いて、ハリーが帰って来た。彼はすぐさま、待ち構えていたグリフィンドール生達に包囲され、拍手喝采と大歓声

の中で、疲れ切った表情を隠そうともせずには佇んでいた。やがて彼は無理矢理、人々を振り切つて、リー・ジョーダンに無理矢理巻かれたグリフィンボール国旗を引き摺りながらやって来た。三人は急いでハリーを迎え入れ、イリスはバタービールの瓶の栓を抜いて手渡した。彼はあからさまにホツとした表情を浮かべ、ソファにどさつと座り込んで、バタービールを一气飲みした。

「どうだった？」

イリスが尋ねると、ハリーは浮かない表情で事の次第を教えてください。——あれから三校の代表選手、そして校長先生、スネイプとマクゴナガル、クラウチ氏とバグマン氏を交えて話し合いをしたが、ハリーは結局“四人目の代表選手”として出場する事になった。悲しい事に一部の人——マクゴナガルとダンブルドアとムーデイ——以外は、みんなハリーが自分の名前を入れたと思い込んでいて、彼らに警鐘を鳴らすべくムーデイはこう言い放った——『ゴブレットから名前が出てくればポッターが戦わねばならぬと知っていて、誰かが名前をゴブレットに入れた。そしてその者は恐らく、彼の死を望んでいる』と。

周囲の浮かれた喧騒があつという間に遠のき、三人は青ざめた表情でハリーを見つめた。彼は強がって笑い、イリスを愛おしそうに見つめた。

「君の名前が出て来なくて良かったよ、ホント」

「でも誰なんだよ、死を望む者って……マルフォイか？」とロン。

しばらくの間、ハリーは顎に手を添えて思案していたが、やがてふつと顔を上げた。——かつて見た夢の事を思い出したのだ。僕を死を望む者はたった一人、ヴォルデモートだけだ。もし奴らが話していた計画の一部が、この事だったとしたら。しかしこの事はシリウスだけに話し、皆には怖がらせると言っていなかった。ハリーがイリスに気を遣い、あえて彼女の部分は伏せてその話を聴かせると、三人はますます震え上がった。

「シリウスに相談しましょう」ハーマイオニーがきつぱりと言った。

「彼と話すべきだわ」

「それからハリー、一つだけ約束してくれ」不意にロンが深刻な表情で口火を切った。

「もし一千ガリオン獲得したら、半分僕にくれるって」

四人は一斉に吹き出した。——お茶目なロンは皆のムードメーカー的存在で、いつも雰囲気や暗い影が覆い被さる事の多い四人の学校生活の中で、いつしか彼の存在はなくてはならないものになっていた。それをロン自身も知っていて、その事は彼の自尊心をますます強くさせた。かつて兄弟たちの間に埋もれ、自信をなくしていた彼は、自らの力で失った自信を取り戻し、強く育て上げる事に成功していたのだった。

P e t a l 8 . 愛の炎が君を守る』

ハリーが四人目の代表選手となったその夜から、学校じゅうの生徒達の彼を見る目は、明らかに様変わりしてしまった。——ロンの“鶴の一声”で、去年のイリスの事件を思い出して反省したのはグリフィンドール生だけだ。他の寮生は皆、ハリーがゴブレットに名前を入れたのだと思っていた。いつも寮同士で仲の良いハッフルパフ生は、グリフィンドール生全員に対してはつきり冷たい態度に出た。「薬草学」の授業でグループを組んだ時、同級生のジャスティンはずっとこちらを無視していたし、“蛙チョコカード交換会”でもハッフルパフ生は皆、イリス達グリフィンドール生からの交渉だけをバシッと拒否した。

しかし、彼らの怒りは最もだった。ハッフルパフ寮は他の三つの寮と比べ、滅多に脚光を浴びることがないとされている。だがそれは、一部の人々が揶揄するように『ハッフルパフ生が他の寮生より劣っている』からではない。彼らは皆、名声や権力よりも、忍耐強さや人々を思いやる気持ちこそが人生において一番大事だと分かっていた。だからその信念に従い、長い間、表舞台に立とうとしなかっただけなのだ。だが今年、“三校対抗試合”におけるホグワーツの代表選手として、ハッフルパフの監督生、セドリック・デイゴリーが選ばれた。やつと巡って来た千載一遇のチャンスに、彼らは残らず立ち上がり、狂喜乱舞した。——ゴブレットが四人目の代表選手となる、ハリーの名前を吐き出すまでは。

元よりハリーを快く思っていなかったスリザリン生は、今まで以上に彼をからかうようになった。賢明な生徒が集う事で知られるレイブンクローでさえも、ハリーがさらに有名になろうと躍起になって、ゴブレットを騙して自分の名前を入れたと思ひ込んでいる様子だった。そんなわけで、グリフィンドール生以外の人々は皆、ハリーが通りすぎる時、特大の“尻尾爆発スクリニート”を目撃したかのように大騒ぎするようになってしまったのだった。

四人はほとほと疲れ果て、せめてランチの時くらいは人目につかな

い場所でゆつくり休もうという事で意見がまとまり、ハーマイオニーが用意してくれたバスケットにご馳走をたっぷり詰め込んで、素早く玄関ホールを通り、急ぎ足で芝生を横切つて、湖のほとりに座り込んだ。ほとんどの生徒はランチを摂るために学校にいるようで、湖の周りに人気はない。四人はホツとして肩の力を抜き、バスケットの中身をゴソゴソ探り始めた。湖の岸边には、ダムストラングの船が繋がれ、水面に黒い影を落としている。

「つまり、何にも学んでないのよ。イリスを巡って起きた、去年の出来事からね」ハーマイオニーが憤懣やる方ない口調で言い放った。

「ロックハートの本の内容を鵜呑みにしてイリスを疑って、今度はゴブレットからハリーの名前が出てきただけでハリーを疑って！物事の上辺だけを見て、騒ぐのが大好きなお子ちゃまたち！少しは考えるって事をしないわけ？」

ハーマイオニーの叱声に驚いて、イリスは思わずレーズンパンを地面に落としてしまった。慌てて拾い上げて土を払い落とし、こつそり食べようとしたイリスの試みは、ハリーパパによって阻止された。彼は“全く油断も隙もない”と言わんばかりの顔つきで、彼女の手からパンをそつと取り上げ、湖に放り投げる。パンはしばらくの間、水面にプカプカと浮いていたが、すぐに吸盤つきの太い足が一本空中から伸びて来て、さつと拾って水中に消えていった。

「いつものことだし、気にしないさ。僕はね」

ハリーは肩を竦めて言い、バスケットから新しいレーズンパンを取り出して、イリスに手渡した。ダーズリー家という戦場でソルジャー並みに鍛え上げられた彼の心は、ハツフルパフ生顔負けの忍耐力を誇っていた。おまけに彼には、如何なる時も自分を信じてくれる、心強い戦友たちがいる。ハリーは深い緑色の目を優しく細め、彼らをじつと眺めた。

「それに君達がいてくれるしね」

「そうだぜ」ロンはチキンの骨を湖に放り投げながら、言った。

「少なくとも、グリフィンドールは君の味方さ。だろ？」

「ええ、貴方のおかげでね」ハーマイオニーは頬を赤らめ、ロンをちら

りと横目で見て、微笑んだ。

「やあ、ここにいたのか。ハリー」

ふと後方から明るいう声がして、四人は一斉に振り返った。——ルード・バグマンだ。以前とはまた違った色合いではあるけれど、相変わらず派手なデザインのプロブに身を包んで、ニコニコと笑っている。バグマンはイリスと目が合うなり熱烈なウインクをよこしたので、彼女はまた吹き出してしまった。それから彼は弾むような足取りでハリーに近づくと、グイツと腕を掴んで立ち上がらせた。

「さあ、行こうハリー。これから」杖調べの儀式がある」

「杖調べ？」

聞き慣れない言葉に四人が揃って首を傾げていると、バグマンは快活に笑い、爽やかな口調で教えてくれた。

「杖調べ」とは、三校対抗試合に出場する代表選手の杖が、万全の機能を果たしているかどうかを調べる儀式だよ。杖はこれからの課題に最も重要な道具なんでね」

かくしてハリーはバグマンに連れ去られ、イリス達が大広間で夕食を摂っている頃に、憔悴しきった顔で帰ってきた。——ハリー曰く、「杖調べ」の儀式はオリバンダー老人の手により滞りなく進められ、彼の杖に問題は見当たらなかった。しかし、本当の問題はその後だった。かつてクイディッチ・ワールドカップで起きた「闇の印」事件や、いまだ行方不明の魔法省職員、バーサ・ジョーキンス事件を散々にこき下ろして書き、魔法省を「吼えメール」の海に沈めたとされる恐怖の新聞記者、リータ・スキーターその人が現れたのだ。

もれなくハリーは彼女に捕まり、インタビューを受ける羽目になった。——イリスはアーサーが、スキーターの事を『でっち上げの中傷記事が大得意なフリーライターだ』と言っていたのを思い出した。アーサーの表現はそのものずばりだった。彼女が操る魔法仕掛けの「自動速記羽根ペンQQQ」は強敵で、インタビュー中、ハリーはほとんど口を開かなかつたのに、ずっと羊皮紙上をスケート選手のように軽やかに動き回り続け、ダンブルドアの介入によってインタビューが強制終了される頃には、優に羊皮紙数巻き分もの記事を書き上げて

いたのだと言う。

「あの人、最初から最後まで、僕の話を全然聞きやしない。自分でストーリーを作ってるんだ」ハリーはうんざりしながら、かぼちゃジュースのジャーを取った。

「今度はホグワーツが“吼えメール”の海に沈むかもね。まったく、お楽しみだ」

☆

翌日の昼過ぎ、イリスはハーマイオニーと共に「数占い学」の教室へ向かっていた。二人で占いに関連した数字を諳んじながら、廊下の角を曲がると、マクゴナガル先生にばったり出くわした。彼女は両腕に沢山の書物を抱えていて、厳格な眼差しでイリスを射抜くと、確かな足取りでこちらへ近づいて来た。

「ミス・ゴント。探していました」マクゴナガル先生がそう言うと、二人は不安そうに視線を交わし合った。

「今すぐ、医務室へ向かいなさい。聖マンゴの方から、あなたへ大切なお話があるそうです。「数占い学」の授業は特別に免除するようにと、私から先生に伝えておきます」

『どうして聖マンゴの人が、私に大切な話があるんだろう？』、イリスは頭上に無数のクエスチョンマークを浮かべながらも頷き、ハーマイオニーに後で授業のノートを見せてもらうように頼んでから、医務室へ急いだ。やがて辿り着いた彼女が、息を弾ませながら扉を開けると、そこにはマダム・ポンフリーとライム色のローブを着た知らない男性、そしてルーピン先生がいた。

「ルーピン先生！」

イリスが明るい声を上げて近づくと、ルーピンは疲れた顔に優しい笑みを浮かべ、彼女を優しくハグして頭を撫でてくれた。彼はシンプルではあるが、上質な造りのマントを着込んでいて、髪もこざっぱりと整えられ、白いものが目立つ事はなかった。たったそれだけで、彼は随分と若返って見えた。

「久し振りだね、イリス。だが、もう私は先生ではない。どうかリーマスと呼んでくれ」リーマスは照れ臭そうに笑った。



「あなたがミス・ゴーストですね？」

ふと名前を呼ばれて、イリスは声のした方に顔を向けた。——リーマスの隣には、先程のライム色のローブを着た魔法使いが立っている。縮れた黒髪と褐色の肌が特徴的で、黒縁眼鏡に縁取られた理知的な瞳が、イリスを興味深げに眺めていた。リーマスは気さくな調子で彼の肩に手を置き、紹介してくれた。

「紹介するよ。聖マンゴで勤務する魔法薬学者、プロセウ・コマイ氏だ」

「よろしく、ミス・ゴースト。お会いできて光栄です」プロセウは手を差し出した。

「初めまして、コマイさん。イリス・ゴーストです」

イリスは快く応えた。二人が友好的な握手を交わす様子を静かに見守りながら、リーマスは言葉を続ける。

「私はダンブルドアの命を受け、君の呪いを治す方法を探しているんだ。その時にプロセウに出会った。彼は、“君の血”について研究がしたいと言っている」

イリスは驚いて、思わずリーマスを仰ぎ見た。——まさか彼が自分の呪いのために頑張ってくれているなんて、知らなかった。プロセウは興奮した様子でイリスの手を握り、熱心な口調で言った。

「あなたに流れる“出雲家の血”は、我々が手の施しようがないほど、強力な闇の呪いの進行を何年も遅らせた。今もその血の力は弱まってはいるものの、依然として君を守り続けている。

“出雲家の血”は、“呪い全般に対する特效薬”になりえるかもしれない。あなたの存在は、魔法薬の歴史を大きく変えるでしょう。ぜひ聖マンゴに来て、私達に協力していただきたいのです」

イリスは茫然となり、二の句が告げなかった。私の中に流れる“出雲家の血”が、呪い全般に対する特效薬になるかもしれないなんて。プロセウは知的好奇心がみなぎり、今にも爆発しそうなほど高まった声で、リーマスの持つ人狼の呪いや、許されざる呪いを受けて心身を壊した者にも効果はあるのだと説いてみせた。イリスはまだ見ぬネビルの両親を思い描き、大いなる期待に胸を膨らませた。

その時、ふと心の片隅にある光景が引つかかった。ホグズミード村のマダム・パディフツトのカフェで、ドラコとアステリアがカツプル専用のメニューを見て、恥ずかしそうに笑っている様子だ。彼女は慌てて首を横に振ってそれを追いやると、「協力します」と応えた。

しかし、リーマスとプロセウは戸惑ったような表情を浮かべて、イリスを見ているばかりだった。——あれ、おかしいな。彼女は首を傾げた。私の声が聴こえなかったのかもしれない。もう一回言わなきゃ。イリスは慌てて息を吸い込んで、口を開いた。

「いやです」

——イリスは自分の放ったその言葉を聴いて、愕然とした。「協力します」と言っただけなのに、何故「いやです」と言っただけ？ まるで自分の意志と反した言葉を口走ってしまふ呪いを掛けられてしまったような思いがして、彼女はひどく狼狽して立ち竦んだ。一方のプロセウはしばらくの間、何かを考え込んでいたが、やがて優しい声でイリスにこう言った。

「心配しないで。君の血を少し採取するだけで、それは痛くもなんともないんだ。怖がる必要はないんだよ」

「そういうことじゃない」

突然、イリスの口が勝手に動いて話し始めた。もう止められなかった。

「あなたは、私の呪いを『我々の手の施しようがないほど、強力な呪い』だと言った。他の呪いは私の血で治せても、メーティスの呪いだけは無理だということ？ 私のことはどうだっただいいの？」

『違う、違うんだ！』イリスは心の中で、必死になって叫んだ。こんな意地悪なことを言いたくないじゃない！ だけど、彼女がいくら大きな声で叫んでも、その声は喉の奥でダムのように塞き止められ、口から飛び出す事はできなかった。やがて彼女はハッと思い出した。

——今の状況と同じ事が、以前にもあった。『きつと』闇の帝王が自分に取り憑いて、こんな酷いことを言わせているに違いない』、イリスはそう思い込み、今にも爆発しそうに高ぶっている、自分の“本当の気持ち”を力任せに押し退けた。

プロセウは自分の言葉が原因で彼女を傷つけてしまった事にやっと思ひ至り、慌てて少女の肩の手に置いた。その温もりは思ひのほか優しく感じられ、次の瞬間、イリスの体は再び自由を取り戻した。

「ごめんなさい！」

イリスは突如として、両目が溶けるほどに熱くなつたと感じ、涙がボロボロと零れ出していくのを止める事が出来なかつた。

「私、こんなことを言うつもりじゃ・・・」

「こちらこそ本当にすまなかつた！」プロセウは土下座をする勢いで、心から謝つた。

「私が無神経だつた。君の呪いだってもちろん・・・」

その時、どこかから少女の小さな泣き声が出て、三人は一斉に振り向いた。医務室にあるベッドの一つにカーテンが引かれていて、泣き声がそこから聴こえている。イリスはその声の主を知っているような気がして、言いようのない不安を感じ、胸がざわざわと騒いだ。

「ミス・グリーングラス」マダム・ポンフリーが困り果てた様子で、泣き声の主に声を掛けた。

「カーテンを開けてはいけないと言つたでしょう。・・・」防音の魔法「が解けてしまつたわ」

——イリスの不安は的中した。彼女はもう我慢できず、プロセウ達の制止を振り切つて、医務室を飛び出した。彼らは追つてこなかつた。

☆

その頃、ドラコは「占い学」の授業を受けていた。暖炉から立ち昇る甘つたるい匂いがまとわりつき、カーテンは閉め切られ、円形の部屋はスカートやショールで覆つた無数のランプから出る赤い光で、ぼんやりと照らされている。そこかしこに置かれた布張り椅子の一つに腰掛け、ドラコはトレローニー先生の霧の彼方から聴こえるような声をぼんやりと聞き流していた。

——イリスが自分の記憶を消したという可能性に行き至つてから、彼の心はずつと暴れ柳のように荒れ果てていた。きつとイリスはポッターを愛していて、僕が邪魔だから記憶を消したんだ。ドラコは

そう思い、ポッターへの憎しみをますます募らせた。どうせ“炎のゴブレット”だって、目立ちたがりのあいつが名前を入れたに決まっている。

だが、ドラコは諦めなかった。イリスがポッターに心変わりしたとしても、またその心を僕に戻せばいいだけだ。——ただ、あいつだけは許さない。かくしてドラコは憎つくき恋敵に報復するため、父に頼んで、お騒がせ新聞記者であるリータ・スキーターを買収し、ポッターについて少し刺激的な内容の記事を書くようにと依頼したのだった。図らずも、彼はかつての父と同じ手口を使って、偽りの情報で人を陥れる方法を選んだのである。

リーターは非常に優れた諜報能力を有していて、たった数日でハリーと彼を取り巻く人間関係を調べ上げた結果、驚くべき事実をドラコに教えてくれた。なんと『ポッターとイリスは付き合っていない』と言うのだ。『ハリーはイリスに熱を上げているが、イリスには全くその気がない』とも。それを聴いたドラコは、どれほど安心したか分からない。けれど、今度は違う疑問がムクムクと頭をもたげた。——それなら何故、彼女は僕の記憶を消したんだ？

ドラコが深い思案に暮れる一方で、トレローニー先生は熱に浮かされたような覚束ない足取りで教室内を歩き、生徒達を見回していた。生徒達はみんな居眠りをしたり、テーブルの下で他の授業の宿題をすることで精一杯だったが、トレローニー先生も自己陶醉に浸ることで精一杯だった。彼女はいつもの特徴的な囁き声で、今回の授業内容について話し始めた。

「みなさま、ついに“未来視”を学ぶ時が来ました。……ああ、ミス・パーキンソン。教科書を閉じなさい。これはそれに載っていることではございませんわ」

トレローニー先生はパンジーが開き始めた教科書を見咎め、わずかに首を振りながら、たしなめるような口調でそう言った。——パンジーが複雑そうな表情で閉じたのは「変身学」の教科書だった。彼女は次の時間に始まる「変身学」の予習をしたかったのだ。最早スリザリン生達のちよつとした自由時間と化している現状を知る事無く、ト

レローニー先生は悦に入った口調で話を続ける。

「そう、〝未来視〞とはその名の通り、〝未来の映像を見る能力〞の事。残念な事ですが〝未来視〞は魔法省の認可が下りなかったため、正式な存在ではありません。かの有名な神秘部は『真の未来を指し示すのは予言のみである』と証言しました。〝未来視〞は不可解な白昼夢に過ぎないと。しかし、あたくしは信じております。〝未来視〞は本当にあるのです」

トレローニー先生は、暖炉の傍でふと立ち止まった。ごつてりと身に付けたビーズやチェーン、腕輪が、暖炉の光を受けてキラキラと輝いている。今や誰一人としてその話に耳を傾けている者はいないが、彼女はそんな事を気にもせず、ますます巨大な眼鏡に縁取られた大きな目を悲劇的に輝かせ、口を開いた。

「かつて、あたくしにそのことを教えてくれた魔女がいました。ちやうどあなた達と同じ学年のグリフィンドル寮に彼女の血を受け継ぐ者がいましたが・・・残念ながら、彼女はここから永久に去ってしまつた。悪魔の囁きに耳を貸してしまつたのです」

「グリフィンドル寮」、〝同じ学年〞、〝彼女〞——ちやうどイリスの事を考えていたドラコにとつて、それらの言葉は彼女の事を連想させるのに最適なものばかりだつた。たちまち彼の意識は覚醒し、椅子から勢い良く体を起こし、トレローニー先生を見つめた。

「それは誰です?」ドラコは素早く周囲に視線を巡らせ、誰もこちらに注意を向けていない事を確認してから、小さな声で尋ねた。

「イリス・ゴントですわ」トレローニー先生はうっとりとした声で応えた。

「彼女の母、エルサ・ゴントは優れた〝未来視〞の才能を持っていました。エルサは在学中、〝未来視〞について素晴らしい論文を書き残しています。本来会おうべきではなかった、あたくしと彼女との運命的な出会いをお話したいしましょう。それは今から・・・」

「その論文はどこ?」

ドラコはバツサリと話の腰を折り、鋭い口調で尋ねた。トレローニー先生のいつ終わるか分からない〝なれそめ話〞を我慢して聞い

ているより、実際に論文を読んだ方がずっと手っ取り早くて確実だ。彼女はせつかくのお楽しみを邪魔され、明らかにイライラした様子だった。それからいつもの間延びしたかすかな声音とは打って変わった、きつぱりした声でこう言い放った。

「図書館にあります。場所はマダム・ピンズに訊くと良いでしょう。そろそろ、本題に戻って良いかしら？ さあ、”未来視”とは……」

☆

終業のチャイムが鳴った瞬間、ドラコは梯子を急いで降りて、夕食も摂らずに図書室へ向かい、マダム・ピンズにエルサが書き残した論文について尋ねた。“未来”に関する書物を集めた区域の片隅に、それはひっそりとあった。夢中でその本を取ろうとした時、横からすつと白い手が伸びて来たので、ドラコは驚いて身を引いた。——スリザリンの下級生、アステリア・グリーングラスだ。彼女もちょうど同じ本を手を取ろうとしていたようだった。アステリアの目は泣き腫らした後のように、少し赤かった。しかし彼女はそれでも気丈に微笑んで、スカートの裾を掴まんで一礼した。

「こんにちは、ドラコ」

「ああ、アステリア」

ドラコは見知った顔に少しばかりホツとしながら、挨拶に応えた。二人は家同士の繋がりもあり、顔見知り以上の関係だった。アステリアは両腕に書物をどっさり抱えている。そんな彼女に断りを入れて、目当ての本を棚から抜き取ると、ドラコは改めて彼女をじっくりと見つめた。彼女が所持している本の内容は、いずれも”未来”に関するものだった。

「君はこういったことに興味があるのか？」ドラコは本を軽く振ってみせ、問いかけた。

「ええ。自分の将来がどうなるのか、とても気になるから」

アステリアの言葉を聴いて、ドラコは納得がいったように小さく頷いた。——アステリアは病弱な体質で、小さな頃から聖マンゴに入退院を繰り返していた。彼女の姉であるダフネ・グリーングラスは同じ寮の友人だが、彼女から『アステリアは一族の先祖に掛けられた呪い

が先祖返りしたのだ』という事を聞いている。ドラコはアステリアから書物の山を取り上げると、空いていたテーブルに運んであげた。

その時、書物の隙間から、分厚い羊皮紙の束がピヨコンと飛び出しているのを見つけて、ドラコは思わず目を凝らした。大きなクリップで留められたその羊皮紙の下部には、聖マンゴのエンブレムが捺してある。何度も読み返されているのだろう、羊皮紙の四隅はいずれもボロボロに擦り切れていた。やがてドラコはその中の一文に目を吸い寄せられる事となる。

『イリス・ゴントに流れる“出雲家の血”の可能性は・・・』

しかしドラコがそれ以上を読み込もうとする前に、アステリアが素早くそれを取り上げて、抱え込んでしまった。彼女は強い警戒心に満ちた表情で、ドラコを見つめている。

「イリス・ゴント、僕と同学年のグリフィン・ドール生だな。どうして彼女の名前が、聖マンゴの公的資料に載っているんだ？」ドラコは努めて冷静になろうとしながら、問いかけた。

「どうかこれ以上、何も聞かないで」

アステリアは恐怖に震える声で言い放った。——自分の不注意のせいで、イリスの秘密を他者に見せてしまったのだ。医務室で見た彼女の苦悩が思い起こされ、アステリアはギョツと唇を噛み締めた。

「彼女のプライベートに関わる事です」

「アステリア」

だが、ドラコは許さなかった。イリスに関する“新たな情報”を握っている人物が、目の前にいるのだ。どんな手段を使っても、彼はその情報を手に入れるつもりだった。ドラコは至って冷静な眼差しで、アステリアを値踏みした。彼にとって実に幸いな事に、グリーングラス家よりもマルフォイ家の方が位は高い。おまけに彼女のかかりつけ病院である聖マンゴには、父が定期的に多額の寄付金を送っている。その事に思い至った彼は冷たい笑みを浮かべながら、こう言った。

「今まで通り、聖マンゴで治療を受けたいだろうか？グリーングラスの家名に不要な傷を付けられたくないなら、僕に知っている事を話せ」

余りにひどい恐喝の言葉に、アステリアは青白い顔を怒りに染め上げて、ドラコをキツと睨んだ。それでも彼女はしばらくの間、思い悩んでいるかのように口を閉ざしていたが、ドラコがわざとらしく咳払いをすると、やがて観念したように浅い溜息を吐いて、ゆっくりと話し始めた。

「私のかかりつけ学者、コマイから、『イリスは非常に強い』血の呪い“を受けている』と聞きました。たった一つの条件を満たすだけで宿主を死に導く、とても恐ろしい呪いです。

しかし彼女に流れるもう一つの家系の血は、長らくの間、その呪いの進行を食い止めていました。コマイは、その血こそが“他の呪いを壊す力“を持っていると言い、イリスに協力を要請しました。けれどイリスは協力を断った。それから、泣いて苦しんでいました。

その様子を見て、私は自分が恥ずかしくなりました。自分のことしか考えず、優しい彼女が協力することが当たり前だっと思っていました。・・・彼女も私と同じ苦しみを抱いていたのに。きっと彼女はあの時、こう思っていたんだわ。『どうして私だけ辛い思いをして、みんなは平和に生きられるの』って」

アステリアはそう話し終えると、やがて強い自責の念に堪えられなくなったのか、静かに泣き出した。その肩に手を置いて慰めながら、ドラコは思いを馳せた。——イリスはとても強い呪いを掛けられている。アステリアは“イリスが苦しんでいる”と言った。ポッターを愛していないなら、僕への気持ちは消えていない筈だ。どうして僕に助けを求めずに、記憶を消した？ドラコはイリスが何を考えているのか、分からなくなった。彼は継るような目で、手元にある本を見た。“未来視について エルサ・イズモ著”——そう銘打たれた本は、まるで彼の気持ちに応えるかのように優しく輝いて見せた。

☆

その様子を、静かに見つめている者がいた。——イリスだ。医務室を飛び出した彼女は、終業のチャイムが鳴るのを待つてハーマイオニー達と合流を果たし、彼女立ってのリクエストで図書室へ来ていたのだった。詳しい状況は遠く離れていて良く分からないけれど、アス



テリアが泣いていて、それをドラコが慰めているのはしつかりと理解できた。

——きっとアステリアは、さっきの自分の事を言っているのだろう。余りの申し訳なさに、イリスは小さく縮こまった。アステリアを傷つけてしまった。ドラコは自分の事をますます嫌うに違いない。そしてかつて見た“未来の映像”の通りに物事が進むとしたなら、これから二人は付き合い始めるんだ。

ハリーは「古い学」の宿題のために“悲劇的な魔法使い・魔女の人生百選”あなたは涙なしではいられない”を熱心に読み、羊皮紙に使えそうなネタを書き写していたが、自分の向かいに座るイリスが小さくすすり泣いているのを聴き、驚いて顔を上げた。——彼女の澄んだ目は、じつと一点を見つめている。急いでその方向を見たハリーは、露骨に顔をしかめた。マルフォイド。知らないスリザリン生の女の子と一緒にいる。

その瞬間、ハリーの心を恐ろしい考えがよぎった。——あいつとイリスが関係を断つてから、もう一年余りが過ぎた。それなのにイリスはまだあいつの事を愛しているのか？ハリーの心身は激しい嫉妬の炎で燃え盛り、彼はすぐさま席を立ち上がると本を返却棚に入れ、SPEW関連の本を熱心に閲覧しているハーマイオニーと彼女の本持ち役となっているロンに“先に大広間へ行く”と断りを入れてから、イリスの背後に立つと両手を伸ばして視界を優しく塞いだ。

「イリス、行こう。僕、お腹が空いちやった」

我に返ったイリスが見上げると、大好きな親友の暖かな緑色の目が自分を見下ろしている。二人は仲良く図書室を出た。夕食を摂りに大広間へ向かう道すがら、ハリーはやけに明るい声で言った。

「ねえ、そう言えば昨日、レイブンクローのテーブルにマカロン・タワーが出てたんだ。もし今日また出てきたら、こっそり持って来てあげる。一緒に食べようよ」

イリスは親友の思いやりに応えるため、頑張って微笑んで見せた。

☆

やがてハーマイオニーとロンも合流し、四人はあれこれと話をしな

がら夕食を摂った。イリスはいつもの通りに沢山食べ、ハリーがレイブンクロー生に頼んで（というよりも、彼が話しかけたとたんに皆、ざっと引いたので、ろくに会話もできなかった）、もらってきたマカロン・タワーを食べた。歯が解けるほどに甘いと聞いたマカロンは、不思議と味がしなかった。

夕食を終えた後、イリスとハーマイオニーは寮の自室へ行ってお風呂セットの入った袋を掴み、シャワールームへ向かった。監督生以外の生徒には男女別の大型シャワールームが用意されていて、消灯時間までにそこへ向かう必要があった。イリスはなんとか空いている個室を確保すると、カーテンを閉め、蛇口を捻った。

「イリス、シャンプーハットをちゃんと着けた？忘れちゃダメよ」

右の個室からハーマイオニーの声がした。——まるでお母さんみたいだ。すかさずその声を聴きつけた、左の個室にいるラベンダーがクスクス笑っている。イリスは恥ずかしくなって、慌てて言った。

「い、今から着けるからー」

イリスは急いで自分の袋を探り、シャンプーハットを取り出した。——その時、自分の右腕が視界に入って、イリスはピタリと動きを止めた。ちようどスネイプ先生の薬の効果が切れたのか、じわじわと“闇の印”の輪郭が形を成し始めている。イリスはアステリアと初めて会った時に見た、彼女の滑らかな白い膚を思い出した。制服越しでも分かるほど傷一つない、綺麗な身体だった。

——『他の呪いは私の血で治せても、メーティスの呪いだけは無理だということ？私のことはどうだっていいの？』——

プロセウに投げつけた心無い言葉が、イリスの耳にこだました。——本当は、分かっていた。あれは“闇の帝王”が取り憑いて言わせた言葉じゃない。“自分の本当の気持ち”なのだ。

周囲はシャワーの流れる音と湯気、様々な香り、女の子達のざわめく声で溢れている。みんな笑ったり、喋ったり、恋愛や宿題の事で、一生懸命に頭を悩ませている。——もし私もそんなことを考えるだけでいい、“普通の女の子”だったら。イリスは虚ろな目で、ますますくつきりしてきた“闇の印”を見つめながら、思った。

——それは決して考えてはいけない事だった。いくら考えたってどうしようもできないし、思考から覚めた時、余計に現実の辛さが襲い掛かるだけだ。だけど、イリスはそうせざるを得なかった。シャワーの音と少女達の声のおかげで、彼女が泣いているのを気づく者は誰もいなかった。

『自分のすべき事は分かっている』——イリスはプロセウの顔を思い浮かべながら、静かに思った。きつとアステリアは未来、私の血から作られた薬を飲んで呪いを克服し、ドラコと一緒におばあちゃんになるまで長生きするんだ。それはとても素晴らしい事だ。おばさんだって、きつと私を誇りに思うはず。イリスはシャンプーハットをギョツと握り締め、自分に言い聞かせた。私の血で皆を助ける事が出来るなら、そうしたい。アステリアだけでなく、リーマスやネビルのご両親も快復するかもしれないんだもの。

『だけど、私はどうなるの?』——その声に反抗するように、イリスの胸の隅っこで、意地悪な声が、惨めに泣き叫んだ。みんなが健康を取り戻し、私に心からのお礼を言つて、それぞれの輝きに満ちた人生を歩んでいく。私は同じ場所にずっと取り残されたまま、その様子をぼんやり眺めていることしかできないの?——でも皆の幸せを願うなら、私は決断するべきなんだ。

アステリアにドラコを盗られるのは嫌だった。だけどイリスはアステリアがとても良い子だと分かっていたし、彼女に友情を抱き、助けてやりたいと思つてもいた。どうすることもできない、相反する感情が自分の心臓を滅茶苦茶に傷つけて、イリスは余りの苦しさに呻き、うずくまつた。『ドラコ、私を見て』——イリスの叫びは、空しく泡のように弾け、誰に聴かれる事もなく湯気の中に溶けていった。『アステリアじゃなく、私を愛して』

☆

その夜、イリスはベッドからむっくりと体を起こした。ルームメイトが寝静まった事を確認すると、杖先をコツンと頭に当て、“目くらまし呪文”を掛け、部屋を出た。透明になった彼女はスニジェットに変身し、談話室の壁のひび割れから外へ出ると、静まり返った学校内

を飛び回り、地下牢へ忍び込んだ。

地下牢にはもちろんスネイプ先生はいない。部屋の片隅に目当ての物を見つけると、イリスは人間の姿に戻り、そっと近づいた。――「憂いの篩」だ。またイリスの気持ち迷った時のためにと、スネイプ先生は「閉心術」の訓練が再開された後も、これを置いていてくれた。イリスは虚ろな目で、盆の中を覗き込んだ。水面に風が渡るように、表面にさざなみが立ったかと思うと、雲のようにちぎれ、滑らかに渦巻いている。イリスは盆の中に顔を突っ込んだ。

盆の中を満たす銀色の物質の奥は、透明になつていた。――マルフォイ家の屋敷にある、ドラコの部屋が見える。窓際の特等席で、ドラコはイリスに魔法使いのチェスのルールを丁寧に教えていた。カーテン越しに陽光が差し込んで、仲睦まじい二人を優しく包んでいる。氷のように冷たいものがイリスの頭を包んだが、彼女は構わずに盆の両端に手を置いて、ますます顔を近づけた。

その時、誰かが彼女の肩をグツと掴み、後ろに引いた。たちまち過去の思い出は消え去り、イリスは我に返って後ろを振り返り、大きく息を飲んだ。――スネイプ先生だった。ゆったりとした寝用ローブに身を包んでいたが、その目は厳しい怒りに燃えていた。

「何をしている」スネイプは低い声で唸った。

「私が『憂いの篩』をここに残したのは、君に気持ちを整理させるためだ。記憶と遊ばせるためではない。君が過去の思い出を乗り越えようとしないうちに、いつまで経っても今を生きる事などできないぞ」

スネイプの言葉は理路整然としていて、その正しさはイリスの繊細な心を傷つけた。彼女は所在なく立ち竦み、光を失った目でスネイプを仰ぎ見た。

「先生、私は『普通の女の子』に生まれたかった」イリスは掠れた声で呟いた。

「血の呪いもない、平凡な女の子に……」

「嘆いたところで、呪いが消える訳でもない」

スネイプは容赦なくピシヤリと言いつつ放った。――彼は小さく縮こまるイリスを見守りながら、数日前にムーディと起こした「静かな諍

い”の記憶を思い起こしていた。ムーデイはカルカロフと同様、元“死喰い人”であるスネイプも警戒していた。彼はスネイプの地下牢と保管庫を抜き打ち調査した後、イリスとの補習授業についても厳しく問い詰め始めたのだ。スネイプがいくら冷静にダンブルドアから許可を受けて行っているという事を説明し、授業の詳細な内容をレポートにまとめて提出しても、ムーデイは“甚だ疑わしい”と言わんばかりの目でスネイプを睨み付けるだけだった。

本気になったムーデイの手に掛かれれば、この授業もいつまで続けられるか分からない。スネイプは強い危機感を抱いていた。限られた日数の中で、少しでも多くの事を彼女に教えなければ。イリスは儂い想いに迷っている時間などないのだ。スネイプはそう思い至り、更なる残酷な真実を彼女に突き付けた。

「ゴーント、そろそろ君は”自分の出生”を受け入れる時だ」スネイプはイリスの肩に手を置いた。

「君は”特別な女の子”だ。今までの平凡な生き方を捨て、宿命を受け入れなさい」

“特別な女の子”、イリスはその言葉を心の中で茫然と呟いた。――今までの平凡な人生を捨てなければ、これから先を生きていく事はできない。呪いが孕む”死の恐怖”に怯えながら、自分の本当に欲しかったものは永遠に手に入らず、善い人々からは警戒され、悪しき人々から狙われ続ける。そんな苦しいばかりの人生が自分の生きる道だと言うのなら、私はこれ以上生きていたくない。

――その時、イリスはちょうど十四歳だった。その年頃の子供たちは思春期真っ只中にあり、とても多感な時期であることが多い。男女共に成長期でありながら、学校内での社会的な役割も意識するようになり、理想の自分と現実の自分の狭間に立ち、本格的に悩むことだつてある。しかし”特別な女の子”であるイリスにとって、そんな子供たちと同じように自分の人生を思い悩むことは、メーティスの呪いを増幅させる、非常に危険な行為に他ならなかった。

イリスは自分の人生に深く絶望した。嘆きはやがて怒りに変わり、そして激しい憎しみの感情へと形を変貌させていく。こんな呪いさ

えなければ、私はこんな苦しい思いをしなかった。『呪いを作ったのは誰？』ふとイリスの胸の端っこで、意地悪な声が囁いた。——メーティス・ゴント、私のお祖母さん。『じゃあ、どうしてメーティスはこんな呪いを作ったの？』、意地悪な声は苦しそうに血を吐きながらも、悲しい笑い声を上げた。

「ヴォルデモートのせいだ」イリスは静かに呟いた。

イリスはヴォルデモートを恨んだ。彼がいなければ、メーティスは呪いを作らなかつた。——全部、彼のせいだ。イリスの憎悪の感情は、血の呪いを大きく増幅させた。歪なオブスキュラスが彼女の体内で膨れ上がり、じわじわと皮膚上に黒い靄となつて染み出してきて、周囲の大気を揺らめかせる。その様子を見た瞬間、スネイプは絶望の呻き声を上げ、なりふり構わずイリスに縋り付いた。

「ゴント！感情を鎮めろ！君はまだ呪いを制御する方法を学んでいない！」スネイプは自分の手が傷つくのも構わず、彼女の膚を覆う黒い靄を払い落とそうとした。

「あの人に敵意を抱くな！」

体内のオブスキュラスは突然、針のように表面を尖らせ、イリスの内臓をズタズタに突き刺した。イリスは呼吸ができなくなつて、空気の代わりにゴボツと大量の血を吐いた。——薄れゆく意識の中で、イリスはスネイプが自分を掻き抱き、杖を何度も振るつて助けようとしてくれているのを、ぼんやりと見つめていた。もうどうだっていいんだ。イリスは思った。きつと私はもう死んでしまう。だけど、呪いの痛みは“磔の呪文”よりずっと優しい。自分を殺すのに必要な痛みしか与えないからだ。

ふとイリスの頭の片隅に、父の記憶の中で見た光景がポツと思ひ浮かんだ。死の恐怖に怯える父に、母が優しく掛けた言葉が思い起こされる。——お母さんは、『死は怖くない』つて言っていた。イリスの目にどつと新たな涙が溢れた。『眠るように穏やかで、愛する人たちがずっと傍にいる』とも。死ぬことは怖くない。天国で、きつとお父さんとお母さんは私を褒めてくれる。イリスは静かに目を閉じ、襲ってくる眠気に身を任せた。頑張ったねって、でももう頑張らなくていい

んだよって、優しく抱き締めてくれるはずなんだ。

☆

「ああ、止めてくれ！頼む！」

スネイプは黒い靄からイリスを守るかのように、深く抱き締めながら、絶望に呻いた。かつてダンブルドアに教えられたように、“失神呪文”を掛けて宿主であるイリスを気絶させようとしたが、靄はまるで防護呪文のように強固で、どれほど魔法力を込めても光線を通しはしなかった。ありとあらゆる呪文を掛けても、強力な護りの魔法を唱えても、呪いは嘲笑うかのようにその全てを跳ね返し、スネイプの前でイリスの命を喰らい続けている。

やがてスネイプの腕の中で、イリスは大量の血を吐いた。——その瞬間、彼の脳裏にかつての幼馴染の姿が鮮やかにフラッシュバックした。荒れ果てた子供部屋の中で、ハリーの眠るベビーベッドだけが傷一つない状態で守られていた。そしてその上に覆い被さるようになって事切れているリリー・エバンズの亡骸を見たとき、自分に自分を襲った、あの耐えがたいほどの絶望の感情がスネイプをわつと覆い尽くし、彼はたまらず慟哭した。

「君を愛しているー」スネイプは黒い靄が自分の体じゅうを突き刺すのも構わず、イリスを抱き締めた。

「頼む、二度も失わせないでくれ……！」

スネイプの目から一粒の涙が零れ落ち、黒い靄を通過して、イリスの頬に滴った。涙に含まれた深い愛情は、恐ろしい呪いを退け、白い膚を通り過ぎ、イリスの心の奥深くに浸透して、闇に囚われた彼女の魂を強く揺さぶった。

☆

やがて彼が見守る中で、イリスを覆い尽くしていた靄は徐々に体内へ染み込むようにして消えていった。イリスが緑色に輝く目で再び自分を見つめてくれた時、スネイプは感極まる余り、その小さな額に優しく口付けた。

「私の負けだ。イリス」スネイプはイリスを初めてファーストネームで呼び、微笑んだ。

「君は私の心を開いた」

スネイプの黒い目の奥に、虹色の輝きがちらついている。彼はずっと閉ざしていた心の扉を開き、イリスに永久に愛する者の記憶を見せてくれた。——豊かな赤い髪の可愛い女の子が、小さな彼と一緒に笑っている。スネイプは彼女を愛していた。しかしその愛は彼女に届かず、ホグワーツで喧嘩別れしたのを最後に会えなくなってしまう。けれど彼はずっと彼女を想っていた。やがて自分の過ちで彼女を死なせてしまい、愛が嘆きと後悔の感情に代わるまで。

イリスはスネイプの愛を受け取り、ただ柔らかかに微笑んだ。まだ意識はぼんやりしていて、身体は満足に動かないけれど、さつきまでイリスを覆い尽くしていた暗い感情は、スネイプのおかげできれいさっぱり消え去っていた。——今の二人に言葉はいらなかった。自分が向けた想いを受け止め、同じだけの愛情を返してくれる。まるでずっと寒さに凍えていた者が、生まれて初めて暖炉の炎のぬくもりを知ったかのように、スネイプはリリーと仲違いしてから凡そ感じる事なかった、その幸福に酔いしれ、また涙を流した。

この子を失う訳にはいかない。一刻も早く呪いを制御する方法を教えずには、次はないかもしれない。スネイプはそう思い、静かに唇を噛み締めた。それから彼は杖を振って一人掛けのソファを呼び寄せ、まだ快復し切っていない状態のイリスをそっと座らせると、ダンブルドアから伝え聞いている情報を思い返ししながら、医務室へ連れて行く前に、可能な限りの治療を始めた。彼の手際は素晴らしく、イリスの意識は十分はつきりとしてきた。その様子を確認すると、彼はイリスの前にひざまずき、そっと彼女の手を取って小さな胸に当てさせた。

「イリス、これから私の言うことを良く聴いてくれ。君が自分の宿命と共に生きていくには、もうこの方法しかないのかもしれない」——それはスネイプが独自に編み出した魔法の一つだった。今日に至るまでずっと自分を支え、導いてくれたものだ。イリスは戸惑うようにスネイプを仰ぎ見た。

「これから先、君は先程のような思いを何度もする事になるだろう。



その時に、胸に手を当てて問いかけるのだ。『自分は何のために、ここに  
いるのか』と。さあ、やってみなさい」

スネイプに促され、イリスはおずおずと目を瞑り、自分自身に問い  
掛けた。自分は何のためにこの世界に生きているのだろうか。——そ  
の時、ふとイオおぼさんの優しい笑顔がポツと思いい浮かんだ。いや、  
彼女だけではない、ハリーやロン、ハーマイオニーにネビル、ハグリッ  
ドやシリウス、サクラにウメ、スネイプ先生にドラコ・・・イリスが  
今までの人生で出会った大切な人々の素晴らしい記憶の数々が、彼女  
の頭に次々浮かんでは、心の奥底へ降り注いでいく。

やがてそれらは一つの炎となり、永遠に消えない魔法の火のよう  
に、彼女の心の中で静かに燃え盛り始める。血を失った自分の体はと  
ても冷たいのに、心だけはポカポカと暖かかった。その様子を見て、  
スネイプは安心したように微笑んだ。

「その炎は、“闇の帝王”が決して触れられぬものだ。誰にも消す事  
はできず、あらゆる脅威から君を守る。そして君が暗闇の中に閉じ込  
められた時、その炎は君を明るく照らし、成すべきことを教えてくれ  
るだろう」

## P e t a 1 9 . 第一の課題

数日後、順調に快復したイリスが医務室から出ると、スネイプは再び、彼女を心の世界へ誘った。二人がイリスの心の世界に降り立つと、前方に美しい虹色の炎が現れた。それは明るく輝き、暗闇ばかりが続く寂しい空間を穏やかに照らしている。

「あの炎は、君の愛そのものだ」

スネイプは静かに言った。ますます近づくと、炎に照らされて“あるもの”が見えた。——大きさまざまな薪が無数に積み重ねられ、塔のように高くそびえ立っている。通常の焚火ならば、積み重ねた全ての薪に火が燃え移り、やがて一つの大きな炎となるはずだ。しかし奇妙な事に、燃えている薪は一部だけだった。盛んに燃えているものもあれば、くすぶっているだけのものもある。遠くで見ると一つに見える炎は、近くで見るとまばらな火の集合体に過ぎなかった。

スネイプは薪で出来た塔の下方で、一番元気良く燃えている薪に近づくと杖先を向けた。虹色の炎がスネイプのローブに触れたが、火はローブに燃え移らず、彼も熱がる様子を見せなかった。俄かに薪は水晶のように透き通り、内側から輝きを放ち始める。——イリスは驚いて、息を飲んだ。なんと透明な薪の中にイオおばさんがいて、自分に向かって優しく微笑みかけている。

「この薪は全て“他者が君に与えた愛”だ。与えた愛が大きいほどに薪も大きくなる」スネイプはそう言つて、まばらな火の塔を仰ぎ見た。「君が彼らの愛を理解し受け入れることが火種となり、永遠に燃え続けるのだ」

イオの薪は塔の土台となり、他の薪達を力強く支えていた。大ききも勿論一番で、大人が二人手を繋いで囲えるほどの太さがある。イリスは恐る恐る手を伸ばした。虹色の炎が彼女の手を舐めたが、全く熱くない。けれど、心には不思議な温もりを感じた。イリスが暖かな笑顔を浮かべた一方で、スネイプは腕組みをして塔を見つめ、唸った。「この塔は未完成だ。この状態では、闇の帝王から身を守る事などできない」

確かに塔の火はまばらだった。恐らく本物の焚火のように全ての薪が燃えれば、今とは比べ物にならないほどもっと大きな炎になるに違いない。イリスはスネイプを仰ぎ見て、尋ねた。

「どうして燃えている薪と、そうでない薪があるのですか？」

「君が、愛の本質を理解していないからだ」スネイプは冷静に応えた。「薪の一部に火が付かないのは、君がその者から与えられた愛を理解せず、受け入れようとしていないためだ」

『愛の本質を理解していない』——イリスはその言葉の意図が分からず、大きく首を傾げた。人を愛するという事を、彼女は自分なりに分かっていたつもりだった。スネイプの言う“愛の本質”とは、一体何なんだ？そして自分が受け入れる事の出来ない愛を注いだ者とは、誰なんだろう。

イリスがふとイオの薪を見ると、その隣に同じくらい大きな薪があった。しかしそれはいくらイオの薪の炎を受けても、燃えるどころかくすぶつてもいないで、ただ静かにそこにあるばかりだった。彼女はスネイプの見よう見まねで、杖先をそれに向けてみた。見る間に薪は透き通り、内側から輝き始めた。そしてその中に映った人物の顔を見た。たん、イリスは絶句して杖を取り落した。

——ドラコだった。そんなはずはない。私が彼の愛を理解せず、受け入れもしないなんて、そんな事はない。イオおさんの薪と同じように轟々と燃え盛っても良い位なのに。イリスが言葉もなく立ち竦んでいると、やがてスネイプがやって来てドラコの薪を認め、目を見張った。

「非常に大きな薪だ。彼はそれほどまでに深く、君を愛していた」スネイプは杖先で、薪の末端を指し示した。良く見ると、そこだけ焼け焦げている。

「そしてくすぶっていた痕跡がある。君もまた彼を愛していた。だが、今はそうではないらしい」

「そんな、私は彼を愛していますー！」

イリスは思わず言い継った。しかし次の瞬間、ドラコとアステリアが仲睦まじくいる未来の光景がパツと思ひ浮かんで、彼女の表情は大

きく翳った。——どれほど強く想っても、彼は自分の事を決して愛してくれない。そして新しい女性を見つけて去って行く。

かつてドラコの記憶を消した時、彼女に迷いはなかった。スネイプが忠告したように、彼が自分の事を忘れて冷たく拒絶し、他の女性と愛し合うようになって、彼が幸せなら後悔などないと、心から思っていた。

——だが、現実には甘くなかった。実際にその通りの出来事が起こると、イリスの心は激しい嫉妬の感情に支配され、アステリアの呪いの治療に協力する事を拒否し、ドラコの愛と関心を再び求めるようになってしまった。今の彼女にとってドラコに愛を捧げるという事は、果てのない砂漠を永遠に歩き続けるのと一緒だ。ただ虚しく辛いだけの日々。イリスはギュツと両手を握り締め、掠れた声で言った。

「でも・・・彼はもう、私のことを愛してくれない」

ふと肩に手が置かれ、イリスは力なく俯いていた顔を上げた。スネイプが神妙な面持ちで自分をじっと見つめている。しかしそれは決して責めているという風ではない。

「与えられなければ、君の愛は終わるのか？」スネイプは静かに囁いた。

「愛は“グブレイシアン”の火”そのものだ。一度芽生えれば、永遠に消えはしない。君は何故、彼が残したものに目を向けようとししないかね？」

イリスは、スネイプの言葉に答える事ができなかった。——愛は人との関わりの中で生まれ、その人が去ったなら愛も共に消え去るのだと、イリスはそう思っていた。でも彼はそうではないと言う。彼女は大いに戸惑って、美しい輝きを放ち続ける想い人の薪を見つめた。——硝子のような樹皮を通して、ドラコは穏やかに笑いかけてくれた。

☆

現実の世界へ帰っても、スネイプの訓練は終わらなかつた。彼は心の中だけでなく、“心の外”——現実世界でもイリスを敵の手から守るために、戦う術を教えると言ったのだ。スネイプはダンブルドアの同意を得た上で、消灯時間を迎えてからも彼女が寮外で行動すること

を許可した。寝間着から軽装に着替え、しっかりと準備運動をするイリスにスネイプはこう言った。

「ムーディが我々の関係を怪しんでいる。この補習授業もいつまで続けられるか分からない。それまでに少しでも多くの時間を作り、君に身を守る術を教えなければ」

かくして二人の戦闘訓練が始まった。戦うための魔法は、学校で習う基礎的な魔法や、かつてリドルが教えてくれた主に忍びの行動に役立つ魔法と異なり、神経をすり減らし、大量の気力と体力、そして魔法力を必要とするものだった。イリスは学校生活に加えて、毎晩行われる戦闘訓練で膨大なエネルギーを消費し、また回復するためにそれ以上のエネルギーを求めるようになった。

やがてイリスは頻繁に空腹を感じるようになった。元々一般的な女子に比べて良く食べる方だったが、今では成人男性の優に数倍以上の量を求めるようになった。彼女は大広間で食事を摂る時、授業が始まる時間のギリギリまで、また休みの日や、後は寮に帰るだけといった夕食の時などは、屋敷しもべ妖精による食事の供給時間が終わり、皿が空っぽになってしまいうまで、テーブルにかじり付いて永遠に食べ続けた。

まさかイリスが毎晩スネイプと決闘しているとは思っても寄らない親友達は、突然爆誕した小さなフードファイターをぎよつとした目付きで見守っていたが、ある日、ついにロンが根を上げた。彼は朝、一足先にテーブルに着いている彼女を見るなり、吐きそうな顔をしてこう言い放ったのだ。

「勘弁してくれよー！」ロンは席に着くなり、イリスから顔を背けながら、自分の皿を彼女の方へ押し遣った。

「もう君の顔見るだけで、満腹で吐きそうになっちまうー！」  
「そう言ってるな。きつと成長期なんだよ」

ハリーはイリスの皿にソーセージを山のように注ぎ入れながら、一生懸命フォローした。——実際、彼の言葉は的を得ていた。大量のエネルギーの消費と供給が繰り返される激動の日々の中で、イリスはそのサイクルに最も適した、まさに戦うための体へ進化していく過程に

あつたのだ。スネイプもこの事態を予期していたようで、『君の体が今の状況に慣れれば、空腹は治まる。それまで様子を見るように』と助言した。

ロンの非難がましい目付きを受け流しながら、イリスは三本目のソーセージを咀嚼して飲み込んだばかりのお腹が早速グウと鳴るのを聴いてしまい、心底うんざりした表情を浮かべた。——きっとスネイプの言う通り、いつかは治る事なのだろうが、どれほど沢山食べてもすぐにお腹が空いてしまう。彼女は今や全ての授業で一度は、静まり返った教室内で、腹の虫を鳴らして皆に笑われてしまい、恥ずかしい思いをしていた。しかしそれでもお腹は空く。いくら食べるのが好きでも、イリスだってもう勘弁してほしかった。

☆

時間は飛ぶように過ぎてゆき、『第一の課題』が行われる日があと二週間前に迫った土曜日、三年生以上の生徒は全員、ホグズミード行きを許可された。イリス達は心が弾んだ。みんなに——特にハリーにとって——気晴らしになるし、イリスは大量の食糧を備蓄できるし、おまけに『三本の箒』でシリウスと落ち合う事になっているからだ。

久し振りに訪れたホグズミード村は、とても楽しかった。ホグワーツの生徒達はみんな休暇を満喫する事に精一杯で、ハリーに気を留める者はほとんどいなかった。かくして彼は素晴らしい開放感を味わう事ができ、四人は本能の赴くままに思いつき遊び尽くした。村じゅうの細々とした店を一つ一つ冷やかして、『叫びの屋敷』を見学し、『ダービツシュ・アンド・バングズ魔法用具店』で皆の時計の定期点検をした後、ハーマイオニーの『新しい羽根ペンを買いたい』と言うリクエストにお応えして、イリス達は『スクリベンシャフト羽根ペン専門店』へ向かう事にした。

広々とした店内には、種々様々な羽根ペンや羊皮紙、インク壺などの文房具類がぎっしりと詰まっていた。商品を真剣な表情で吟味しているハーマイオニーを待つ間、イリスが何気なく周囲を見回すと、右の壁際に『高級羽根ペン』と書かれた看板が吊り下げられ、その下

に立派なショーケースが設置されているのが見えた。

好奇心をくすぐられて近づくと、ケースの中には大きな羊皮紙と薄緑色の羽根ペンがふわふわと浮かんでいる。ケースを載せた台座には“自動速記羽根ペンQQQ(Quick-Quotes Quill)”と刻まれた、金属製のプレートが打ち込まれている。ロンが退屈そうに伸びをしながらやって来て、商品名の下に明記された値段を見た。ウツと呻き声を上げた。

「これ、リータ・スキーターが使ってたペンだ」ハリーがイリスの隣に並び、しげしげと眺めた。

「そうなんだ」

イリスは改めて、じつくりとペンを観察した。これがハリーが言っていた——勝手にストローを創り出す——世にも奇妙な羽根ペンなのか。ペンはわずかに震えながらも空中に静止していた。豊かなライム色の羽根が店内の明かりに反射し、キラキラと輝いている。すると次の瞬間、ペンがひとりでに動き出したので、三人はアツと小さく声を上げた。ペンは空中に浮かんだ羊皮紙上をすると滑らかに往復し、一生懸命何かを書き付け始めた。ハリーは目を凝らしてその様子を見ていたが、やがて息を飲んだ。

「ねえ、見て！僕らの事が書いてある」

イリスとロンは急いでショーケースに近づき、揃って硝子に額をぶつけて痛みに呻きながらも、羊皮紙に書かれた文章を読んだ。そこには一系乱れぬ美しい文字で、こんなことが書いてあった。

——「日刊予言者新聞」を一躍有名にした名記者、リータ・スキーターが使っているペンだ。ああ、なんて美しい羽根なんだ。彼女の魅惑的なブロンドにびったりだよ」

愛らしい少年はそう言うと、深い緑色の目を熱っぽく潤ませ、ペンを見つめた。

「なんて可愛い色なのかしら！」

傍らに立つ少女は、ショーケースに両手を押し当て、感嘆の溜め息を零した。花のように可憐な容姿を持つ女の子だ。

「私、ライム色が世界で一番好きな色になっちゃった！」——

「そんなこと言っていないよ」

余りにも事実無根過ぎる速記内容に、呆気に取られたハリーとイリスの声がハミングした。

「自動速記羽根ペンじゃない」ロンは腕を組み、したり顔で頷いた。

「自動妄想羽根ペンだな」

その瞬間、ペンは怒ったかのようにブルブルと震え、凄まじい勢いで羊皮紙の上を乱舞し始めた。

——「自動妄想羽根ペンだな」

勝ち誇ったようにそう言ったものの、この見るからに貧乏臭い、ひよろ長く痩せっぽちな少年がこのペンを本当に欲していることは明らかだった。彼は未練がましい目付きでペンを見て、何度もプレートの値段を確かめた。しかし彼のボロボロに擦り切れた財布には、たったの1クヌートしか入っていない——

「おい、嘘書くな！」ロンは怒り狂って硝子を叩き、ペンに怒鳴った。「僕の財布にはもう少し入ってるぞ！」

しかしペンは小馬鹿にしたように羽根をゆらゆら揺らすと、とてつもなく汚い大きな文字で『やーい、万年1クヌート野郎！』と書き殴ってみせただけだった。やがて会計を終えたハーマイオニーが合流し、三人は異変に駆け付けた店員の冷たい視線を一心に浴びながら、ペンと本格的な口喧嘩を始めたロンを引きずるようにして店の外へ連れ出さねばならなかった。

「僕、決めた」肩を怒らせて歩きながら、ロンはグルルと唸った。

「リータ・スキーターの書いた記事は、全部嘘っぱちだって思うことにする！」

「ああ、そうしてくれると助かるよ」ハリーは安心したように笑った。

それから四人は“ハニーデュークス”へ行き、生徒達のごった返す中で店内をじっくり見回って、新作のお菓子などを吟味した。棚という棚には色とりどりのお菓子が所狭しと並べられ、魅惑的な香りを放っている。ナッツがたっぷり練り込まれた大きなヌガー、真珠色に輝くココナッツ・キャンディ、とろけるような舌触りのトフィー……などなど。正面の壁一面に造り付けられた巨大な棚には、何百種類も



のチョコレートがずらりと陳列されている。“百味ビーンズ”や、炭酸浮上キャンディ“ファイ・フィズビー”の樽が壁際に転がされ、甘い匂いを漂わせていた。

イリスが正面の壁に立ち、目の前のチョコレートを全種類一つずつ買い占めるには、一体何シツクル必要なのかと一生懸命計算していると、ハーマイオニーがやって来た。

「これ、お勧めよ」ハーマイオニーは輝く白い歯を見せ、“糸楊枝型ミントキャンディ”を見せてくれた。

「歯の掃除も出来るし、美味しいし、何より気分がスッキリするわ」  
「どうせミントを買うなら、こっちの方が絶対いいね！」すかさずロンが近づいて来て、“ヒキガエル型ペパーミント”を差し出した。透明な包装紙の中で、白いタブレットでできた魔法の蛙がピョコピョコ跳ねている。

「こっちの方がずっとスッキリするよ。なんせ胃の中で、こいつが本物みたいに飛び跳ねるんだ」

ロンは悪戯っぽい笑みを浮かべた。イリスは二つとも会計用のバスケットに入れる事にした。それからチョコレートをたつぷりと買い込んで、四人は“ドルーブル風船ガム”を仲良く噛みながら店を出た。通行人の邪魔にならないように脇道を選んで歩きながら、誰が一番大きなリンドウ色の風船を創り出せるか勝負しつつ、シリウスの待つ村一番のパブ“三本の箒”に向かった。

☆

“三本の箒”は大勢の人でごった返し、暖かくて、うるさくて、煙でいっぱいだった。土曜の午後の自由行動を楽しんでいるホグワーツ生が一番多かったが、他では滅多に見かけることのない種々様々な魔法族もいた。ホグズミードはイギリスで唯一の魔法尽くめの村なので、うまく変装できない鬼婆や吸血鬼のような種族などにとっては、ここはちよつとした安息所なのだろう。カウンターの向こうには魅惑的な曲線美の女性がいて、荒くれ者の魔法戦士達に酒とつまみを出している。このパブの小粋な女主人、マダム・ロスメルだ。

「僕、あの人にシリウスがどこにいるか訊いてくるよ」ロンはロスメル

タを見つめ、耳を赤くしながら言った。

「結構ですわ」ハーマイオニーがつんつんとした口調で言い返した。

実際、ロンの気遣いは無用だった。突然ハリーが駆け出して、カウソターの奥に座るシリウスの肩を親しげに叩いたからだ。シリウスはおおらかな笑みを見せ、ハリーを優しく抱き締めると、イリス達に気付いて手を振った。それからシリウスは隣に座る魔法使いに声を掛け、席を立った。その魔法使いに何気なく目を遣って、イリスはたじたじと後ずさる。——ムーディ先生だ。ムーディはシリウスに続いて席を立ち上がり、足を引き摺りながら出口に向かつて歩き始めた。イリスはなるべく彼の視界に入らないようにロンの背に隠れて、忍者のように気配を消す事に勤めた。

シリウスはイリス達のために、六人掛けのテーブル席を予約してくれていた。そしてテーブルにやって来たロスマルタに、作り立てのホットバタービールと山盛りのランチを注文した。ロスマルタはまるでスニツチのような速さで、バタービールが注がれたジョッキを人数分運んできた。

「君達の素晴らしい友情に」シリウスはそう言うジョッキを掲げ、イリス達を愛情の籠もった目で見つめた。

「良くハリーを信じてくれた。本当にありがとう」

ハリーは顔をポツと赤らめながら、自分の頭を乱暴に掻き毟ったので、せつかくお洒落な無造作ヘアになっていた髪がクシャクシャの癖っ毛に戻ってしまった。そうして五人は乾杯し、泡立った熱いバタービールを啜った。一口飲んだだけで、身体のコまで暖まる。やはりバタービールは“三本の箒”で飲むのが一番美味しい。イリスはあつという間に飲み干し、ロスマルタとシリウスに苦笑されながら二杯目を持って来てもらおう事になったのだった。

「当たり前だよ。だって僕はハリーと、ずっと一緒にいるんだぜ」ロンはビールをグイッと呷り、胸を張った。

「僕ら、四六時中手を繋いでるし、トイレやお風呂の時だって片時も離れたりしないもの。ゴブレットに名前を入れる暇なんてないよ。寝る時も一緒さ。同じベッドで手を繋いで向かい合って寝……冗談だ

よ、ハリー。杖を下ろせよ」

調子に乗っていたロンは、正面に座るハリーの殺意の籠もった目線と向けられた杖先を見て、引き攣った笑い声を立てた。その様子を見兼ねたハーマイオニーは、溜息を零しながら助け舟を出した。

「つまり、ロンが言いたいのはこういう事よ。『イリスがいるのに、君がそんなことしつこない』ってね」

ハーマイオニーは“自動速記羽根ペンQQQ”とは比べ物にならないほど正確に、ロンの気持ちを翻訳してくれた。ロンはもじもじとして口籠り、シリウスとイリス達はハリーに優しい眼差しを送った。彼はその目線をくすぐったように受け止めながら、かつて胸の中で膨らませた“下らない自分の妄想”をこっそりと恥じた。

やがてロスメルタが大きな盆を運んできて、テーブル上は見る間にご馳走でいっぱいになった。燻製された大きなチキン、ソースの染み込んだポークリブ、彩り豊かなガーデンサラダに、揚げたてのフィッシュ&チップス・・・などなど。イリス達は美味しい料理の数々に舌鼓を打ちながら、シリウスと“三校対抗試合”で行われる予定の“第一の課題”について話し合った。

「ねえ、シリウス。“第一の課題”は何だと思う？」とうもろこしに噛り付きながら、ハリーが訊いた。

「知っているが、その内容を教える事はできない」

シリウスは静かに応え、届いたばかりの蜂蜜酒を飲んだ。どうやら彼は“三校対抗試合”の内情に通じているようだった。

「ハリー、君はジェームズの子だ。どんな難解な課題だって、きっと達成できる」

シリウスは気さくに笑い、愛する息子の頭をかき混ぜた。照れ臭そうに微笑みながらも、不安の感情を滲ませるハリーを覗き込み、彼は言葉が続けた。

「それに課題が行われる日は、私も観に行くよ。何かあれば、必ず助ける。君は何も心配せず、目の前の出来事に集中しなさい」

それを聴いて、イリス達は心から安心した。シリウスがハリーの傍にいてくれるなら、絶対に大丈夫だ。どんな課題であれ、最悪の結果

にはならないだろう。ハリーは代表選手に選ばれて以来、胸を締め付けていた硬い結び目が、ぐつと緩んだような気がした。しかし次の瞬間、シリウスは一転して真剣な表情になり、周囲に素早く視線を巡らせて、他に話を盗み聴いている者がいないかどうかを確かめると、静かに口を開いた。

「それよりも、君達に警告しておかなくてはならない事がある。カルカロフだ」

四人は思わず食事の手を止め、きよとんとした顔を見合わせた。――カルカロフは、ダームストラング校の校長先生だ。シリウスは続きざまに、驚くべき事実を言い放った。

「あいつは“死喰い人”だった」

カルカロフが“死喰い人”？その衝撃的な真実を脳が理解して吸収するのに、しばらく時間が掛かった。――イリスは宴の終わりに、カルカロフが親しげに声を掛け、自分の船に招待してくれた事を思い出した。彼の声はとても耳障りが良かったが、その手はじつとりと汗ばんでいた。シリウスは甘い蜂蜜酒を飲んだのに、苦々しげな顔つきのまま、話を続ける。

「当時“闇祓い”だったムーデイがカルカロフを逮捕したが、奴は魔法省と取引をし、他の仲間たちの名前を告発することで難を逃れた。そして出獄してからは、私の知る限り、自分の学校に入学する者に“闇の魔術”を教えてきた。だから、ダームストラングの代表選手にも気を付けなさい。

今回の件にはどうも奴が一枚噛んでいる可能性がある、というのが私とムーデイの見解だ」

利口なハーマイオニーはシリウスの言わんとしている事をすぐに察し、精悍に輝く瞳を翳らせながら囁いた。

「カルカロフがゴブレットにハリーの名前を入れたという事？」

「でも、それならあの人はずいぶん役者だ」ハリーは戸惑うように言い淀んだ。

「僕がホグワーツで二人目の代表選手に選ばれた事をカンカンに怒ってたし、参加するのを阻止しようとしてたもの」

「そうとも、ハリー。あいつは役者だ」シリウスは静かに笑った。

「魔法省に自分を信用させ、釈放させたほどの男だ」

ふとイリスの脳裏に、スネイプの言葉がよぎった。『心の内が見えぬ者は信じるな』——船に誘われた時、イリスはカルカロフが“死喰い人”だったなんて知らなかったし、彼の心の内を覗こうとも思わなかった。そしてスネイプはこうも言った——『表面上は優しい笑顔を浮かべているが、その裏で悪しき事を考える者は、吐いて捨てるほど存在する』と。カルカロフの人懐っこい笑顔を思い出し、イリスは熱気に満ちた店内にいるのに、寒気を覚えて思わずブルツと震え上がった。——ムーディ先生が助けしてくれなければ、今頃、自分はここになかったかもしれないのだ。

「現時点では、カルカロフが君の名前を入れたという証拠はまだない。だが近頃、どうも可笑しな事ばかりを耳にする」

シリウスは蜂蜜酒を一口飲んで喉を潤してから、話を続けた。

「“死喰い人”の動きが活発になっている。クイディッチ・ワールドカップでの馬鹿騒ぎ。そして“闇の印”を誰かが打ち上げ、イリスを襲った。ハリーの見た、不吉な夢も気にかかる。ホグワーツへ来る予定だったムーディは、何者かに襲撃を受けた。人々はいつもの空騒ぎだと言ったが、今回に限っては、私はそうではないと思う。彼が近くにいると、仕事がいやになることを知っている者がいる。彼は魔法省始まって以来の優秀な“闇祓い”だったし、その能力は現在も衰えていないはずだ。

それに、行方不明になっている魔法省の魔女職員の事は聴いているね？」

四人は大きく頷いた。クイディッチ・ワールドカップの前日、ロンの家泊まった時、夕食の席でアーサー達はその事について話をして聞いたのを聴いたのだ。

「パーシーが何回も繰り返すもんだから、耳にタコができちゃったよ。エーット・・・誰だっけ？」ロンがとぼけて頭を掻いた。

「パーサー・ジョーキンス。何が耳にタコよ」ハーマイオニーが呆れながら補足した。

「そう、彼女だ」シリウスが話の主導権を握り直した。

「アルバニアで姿を消したと言われている。ヴォルデモート（ロンがバタービールを吹き出した）が最後にそこにいたという噂のある場所ずばりだ。その魔女はバグマンの部下だった。つまり、“三校対抗試合”が行われる事を知っていたはず。」

バーサは私の数年先輩だったが、その頃から知りたがり屋で、余計な事に首を突っ込むのが好きだった。彼女なら簡単に罠に嵌まるだろう」

なんとなくシリウスが言いたい事が分かって来た四人は、それぞれ不安そうな顔を見合わせた。

「それじゃ」ハリーが皆を代表して口を開いた。

「ヴォルデモートがバーサ・ジョーキンズを捕まえて、試合の事を知った。そしてカルカロフがヴォルデモートの命令を受けてここへ来て、ゴブレットに僕の名前を入れたって言いたいのか？」

「それはまだ分からない」

シリウスは考えながら言った。ロンは口の周りをバタービールでベトベトにしていたが、それを気にする余裕すらなく、青ざめてはいるが真剣な顔つきで話に聴き入っている。イリスとハーマイオニーも同じ気持ちだった。

「しかし、その可能性は高い。カルカロフはヴォルデモートの力が強大になり、自分を守ってくれると確信しなければ、彼の元へ戻る男ではないだろう。ヴォルデモートを裏切った罪滅ぼしに、君の命を差し出すというのはありえない話ではない。試合は君を襲うには好都合だし、事故に見せかけられるには良い方法だと考えざるを得ないからね」

シリウスが言葉を切ると、周囲をずっしりとした重い空気が立ち込めた。誰もご馳走に手を付けようとしなない。そんな空気が創り出してしまった魔法使いは少し申し訳なさそうな表情で咳払いをし、今度はイリスへ視線を注いだ。

「それにヴォルデモートに対する罪滅ぼしという意味なら、イリス、君にもとても大きな価値がある。カルカロフにクラムを餌に船へ連れ込まれようとしていたと、ムーディから聞いたよ」

たちまちハリー達の驚愕に満ちた眼差しが自分に一点集中し、イリスは慌てて言い返した。

「私、断ろうとしたんだよ。次の日は大切な用事があったんだもの」「いや、君だけでは恐らく奴に言い包められていた」シリウスが鋭い声で切り返した。

「カルカロフは君を手に入れば、ヴォルデモートから守られると思っっているんだ。」

イリス。君にはまだ早いかもしれないが、もうこの際はつきり言っておこう。かつて君の父は『ヴォルデモートとメーティスの子供ではないか』という嫌疑を掛けられていた。ダンブルドアが魔法省の評議会で『レオ・ブラックが父親である』と証明したがね。しかし今でもそうではないかと疑う者もいるのだ」

シリウスは遠い目をして、パブの出口を見た。——まるでさっきまでそこにいた誰かの面影を探しているかのよう。

「それほどまでに、二人の関係は深かったとされている」

「ちよつと待つて。じゃあイリスとシリウスは、親戚なの？」ハリーが水を差した。

「ああ、そうだ」シリウスは事も無げに言った。

「我が偉大なるブラック家は至る所に親戚関係がある。．．あのマルフォイ家ともね」

「マルフォイ家?!」

四人の声がハミングした。とりわけイリスはショックの余り、二の句を告げる事が出来ないでいた。そんな彼女の様子を労しそうな目で見守りながら、シリウスは同情をたっぷり滲ませた声で続けた。

「そう言えばマルフォイ家の倅が、君達と同級生だったな？あの子は君のはここに当たる存在だ。可哀想に」

「マルフォイとイリスは親戚同士なんだ」ハリーは勝ち誇ったような顔つきで言い放った。

「親戚同士の結婚なんて絶対ダメだ。そうだよね？」

「別にいいだろう？」ロンがいらぬ助け舟を出した。

「今時、魔法族はどこだって親戚だぜ。さすがに兄弟くらい近かった

ら厳しいけどさ」

「ああ。ブラック家は、君達ウィーズリー家やポッター家とも繋がりがあるはずだよ」

ハリーは複雑極まりない表情で、黙り込んだ。ハーマイオニーがイリスの皿にフィッシュ&チップスを盛り付けてやりながら、墓穴を掘ったわねと言わんばかりの顔で、その様子をじっと観察していた。「さて、君とイリスが結婚しても何の問題もないとお分かり頂けた所で、話を元に戻して良いかな？」

シリウスはハリーに向けて、悪戯っぽい笑みを浮かべた。彼は愛する息子の想い人を、しっかりと把握しているようだった。それから彼は蜂蜜酒を一息に飲み干し、イリスを心配そうに見つめた。

「つまり、いまだに君を『ヴォルデモートとメーティスの孫』だと疑う者もいるという事だ。

——イリス、君は女性だ。“闇の陣営”が最大の権力を誇っていた時、“死喰い人”共はこぞつて君を探し出し、自分の息子や親族の妻にしたがった。奴らにとつて君を娶ると言うのは、ご主人様に次ぐ権力や地位を得る事と同じだ。カルカロフが君を必死で手に入れようとする理由が分かっただろう。

おまけに君は“死喰い人”だけでなく、“闇祓い”の連中にも注意を払わないといけない。特にムーディには気を付けなさい。迂闊な行動をして、彼に不要な疑惑を抱かせてはならないよ」

イリスは無意識に服の上から右腕を掴み、俯いた。——前に行われた「闇の魔術に対する防衛術」の授業で、ムーディは“服従の呪文”を使って、自分に“闇の印”を出してクラスメートに見せろと命じた。それを聴いたスネイプは『君を警戒しているからだ』と言った。でもイリスは何も悪い事などしていない。他の生徒達と同じように、平凡な学生生活を送っているだけだ。これ以上どうすれば、疑われないで済むというのだろうか。

イリスはフィッシュ&チップスを口に運びながら、ふとドラコの事を思い出した。——もし自分達が親戚である事を知ったら、一体彼はどんな反応をするだろう。単純に驚くだろうか、それとも「そんな事



も知らなかったのか？」と言い、親戚だからと遠慮する自分を笑い飛ばしてくれるだろうか。彼女の胸はきゅんと痛んだ。

それから五人は色んな話をしながら、大いに食べ、飲んだ。シリウスは最後に『何かあればフクロウ便を送るように』と皆にしつかり言い残して、会計をして店を出た。

☆

「いよいよ、”第一の課題”が来週に差し迫った土曜日の朝、四人が仲良く朝食を摂っていると、俄かに無数の羽ばたき音が大広間じゅうを埋め尽くした。——フクロウ便の時間だ。広々とした天井をフクロウ達が飛び交い、お目当ての生徒に手紙や荷物を落としていく。

やがてハーマイオニーの元に、フクロウ通信販売で買った本が数冊入った包みと、”日刊予言者新聞”が届けられた。嬉々として包みを開き、『屋敷しもべ妖精の実態』と銘打たれた分厚い本を読み出すハーマイオニーを見て、ロンが”こっちにもうんざりだ”と言わんばかりに盛大な溜め息を零した。すると不意にハリーが手を伸ばして新聞を取り、そのまま読み始めた。

ネビルと世間話をしながら彼の席付近に出ていたワッフルを取り、自分の席に戻ろうとしたイリスは、ハリーの肩越しに新聞の一面が視界に入ったとたん、ピタリと動きを止めた。——そこには一面に大きく引き伸ばしたハリーの写真が掲載されていた。写真の中の彼は困ったような目でイリスを見たり、気まずそうに視線を逸らしている。『生き残った男の子、ハリー・ポッターの全て』——『悲劇の運命はまたしてもハリーを選んだ』——そんな仰々しい見出しが至る所に載っていて、点滅したりユラユラと揺れている。

それはリーター・スキーターが書いた”三校対抗試合”についての記事だったが、試合についてのルポというよりも、ハリーの人生を散々脚色した記事だった。記事の内容は全て彼の事ばかりで、ボーバトンとダムストラング校の代表選手名は最後の一行に詰め込まれ、セドリツクに至っては名前すら出ていなかった。

ハリーの様子が可笑しい事に気付いたロンとハーマイオニーが固唾を飲んで見守る中、さらに記事を読み進める彼の顔はみるみる内に

真つ赤に染まってゆき、やがて酷い胸やけを起こしたように腹を撫でさすり始めた。リータ・スキーターと彼女の操るQQQは、ハリーが一度も言った覚えがない事ばかりを、山ほどでっち上げ引用していたのだ。

“ 僕の力は、両親から受け継いだものだと思います。今の僕を見たら、両親はきつと僕を誇りに思うでしょう。ええ、夜になると僕は今でも両親を想って泣きます。試合では絶対に怪我をしたりしません。だって、天国から両親が僕を見守ってくれているんだもの”

『こんな事、一言足りとも自分は言っていない』——ハリーは齒噛みし、新聞を握り締める両手に力が籠もった。QQQは、彼が言った「えーと」を長ったらしい鼻もちならない文章に変えてしまっていた。そうして最後のページをめくったハリーは、やがて大いなる驚愕に目を見開き、さつきまで怒りで真つ赤にしていた顔をサーツと青ざめさせる。小刻みに震え始めた。その明らかに尋常ではない様子に、三人は心配そうに顔を見合わせた。——まさか、何かとんでもなく恐ろしい事が書いてあるのでは？

「なあ、何が書いてあるんだよ？」ロンが手を伸ばしてハリーの見ているページを取ろうとしたが、彼は躍起になって新聞を自分の胸に引き寄せた。

「ダメだ、君は見るな！」

しかしそう言われると気になるのが、人というものだ。かくして二人は揉み合いになり、やがて新聞は二つに裂かれ、半分がひらりと四人の座るテーブルに落ちた。——そこには、こう書かれていた。

“ 『みんな僕を愛して』——ハリーの愛らしい目はそう言っている。彼は多くの愛を求め、ついにホグワーツで本当の愛を見つけた。ロン・ウィーズリーだ。ハリーは彼と離れていることは滅多になく、トイレやお風呂でも一緒に、寝る時も同じベッドで、手を繋いで寝るらしい。

ロン・ウィーズリーは純血の魔法使いで、彼と同じグリフィンドール生である。明るく元気な彼の性格は、悲劇的な運命を背負うハリーを慰め、力づけたに違いない。我々は彼らの愛を応援するべきである

“ ロンは今や、酸欠寸前の金魚のように喘ぎ、蒼白な表情で口をパクパクさせているばかりだった。一方のハーマイオニーは記事の一文をなぞり、何事かを考えている様子だった。

「知らなかったよ、ポッターにウィーズリー。君達が愛し合っていたなんて！」

スリザリンのテーブルの方からドラコがやって来て、大広間じゅうに響き渡るような大声で痛烈に言い放った。スリザリン生がそれに合わせて、一斉に笑った。ハリーは電光石火のように反応し、彼を忌々し気に睨み付ける。するとドラコは眉を潜め、芝居がかった口振りで言った。

「なんだい、熱を帯びた目で僕をじっと見つめて？まさか、僕に“心変わり”したんじゃないだろうな？」

ハリーは思わずカツとなってドラコに掴み掛ろうとしたが、彼が大袈裟な悲鳴を上げて「襲われる！」と叫び、ゲラゲラと笑った。ハリーの怒りは凄まじく、イリスが必死になって肩を掴んで抑えようとしても、どうにもできないほどだった。その時、ハーマイオニーが毅然とした態度で、三人の間に割って入った。

「馬鹿言わないで。ハリーだって人を選ぶわ。貴方みたいに最低な人、誰が選ぶもんですか！」

「ダメだ、ハーマイオニー」ハリーはドラコを睨み付けながら、冷静に囁いた。

「その発言はまずい」

「何よ」ハーマイオニーはハリーを睨んだ。

「貴方も同性間の恋愛を差別するつもり？」

ハーマイオニーはSPEWの活動を通して、“差別そのもの”に過剰反応を示すようになっていた。やがて彼女は拳を握り締め、熱く語り始めた。SPEWの次は、同性間の愛情についての活動を立ち上げそうな勢いだった。

「愛は誰にも等しくあるべきよ。愛を育む対象が異性間でないとダメと言った取り決めはないわ」

「ハーマイオニー。頼む」我に返ったロンがやって来て、歯を食い縛りながら唸った。

「シヤラップだ！」

☆

「君のせいだぞ、ハーマイオニー！」

談話室に戻った後、ロンはカンカンに怒ってハーマイオニーを責め立てた。ハリーはとびきり長い溜息を吐いて、特等席におずおずと腰かけたイリスの隣にどきつと座った。

「今や僕らが付き合ってるって、みんな思ってるぞ！」

「言いがかりはよして」ハーマイオニーは悪びれずに言った。

「私は貴方達が付き合ってるなんて、一言も言ってるないわ。正しい事を言っただけ。それに貴方、恋愛にこれっぽちの興味もないんだから、誰にどう思われたって困らないじゃない」

「馬鹿言うな、困るんだよ！」ロンが駄々っ子のように地団太を踏んだ。

「誰に思われたら、困るのよ？」ふとハーマイオニーの目が、マクゴナル先生のように厳格な輝きを放った。

「あのシルバードブロンドの女の子とか？」

その言葉には差別を嫌う彼女らしからぬ、嘲るような響きが込められていた。ひどく居心地の悪い空気が流れ、イリスはその様子をはらと見守りながら、テーブルに置かれていたお菓子——色鮮やかな包装紙に包まれた大きなヌガーだ——を一口口に入れた。

「そんなの、君に関係ないだろ！」ロンが吐き捨てた。

「少なくとも君じゃないことは確かだ！」

ハーマイオニーは大きく息を飲んだ。いつも精悍に輝いているその顔が、今にも泣き出しそうに歪んでいる。イリスは慌てて立ち上がり、俯く彼女の傍に駆け寄って声を掛けた。

「はーいー、らいようう？」

——あれ？妙に締まりのない声だ。イリスは自分の声に違和感を感じて、首を傾げた。おまけに口の中も、何だか変な感じがする。ハーマイオニーは鼻を吸りながら顔を上げてイリスを見たたん、大

きな悲鳴を上げた。

「イリス！貴方、舌をどうしたの?!」

ハーマイオニーは心配そうな目でイリスの首元に手を伸ばし、ピンク色の細いロープのようなものを持ち上げた。その先は自分の口に繋がっている。——彼女の舌は、約一メートル程に伸びていた。

「ついに正体を現したな、食欲モンスター！」

すぐさまいつもの調子を取り戻したロンが叫び、イリスは面白くなって自分の舌を手で持ってブンブンと振り回しながら、ふざけて逃げる彼を追っかけようとした。その時、誰かが彼女を背後から抱き締めた。——フレッドだ。

「おやおや。これはもしや、我がWWWご自慢の品トシ・タン・トフライ「ベロベロ飴」じゃないか？いやー、実に良く伸びてる」

フレッドはイリスの舌をそっと持ち上げ、惚れ惚れとした口調で言った。

「なあ、それってあの素敵な商品のことかい？一つ五シツクル、半ダースで二十五シツクルの？」とジョージ。

「ちよつと待てよ」

フレッドはイリスの両手を持って人形のように操り『待て』という仕草をさせた。

「じゃあ単品で買うより、セットで買う方が五シツクルもお得ってわけか？」

イリスの両手を持ち『信じられない』という動作をさせながら、フレッドが言った。

「そういうことに、なるな」

ジョージはしみじみとした口振りで応え、それから二人揃って談話室内に響き渡る声で言った。

「詳しくはカタログで！」

「二人共、イリスを実験台にするのを止めてくれよ！」

やがて怒れるハリーがやって来て、フレッドの魔の手からイリスを奪い返した。ジョージは心外だと言わんばかりに肩を竦めてみせる。

「違う、僕らじゃない。だってそれは完成品だろ」

「僕らがイリスに試すのは、いつだって試作品さ」フレッドはイリスに親しみを込めてウインクした。

「じゃあ誰がやったんだよ？」

ロンが尋ねると、二人はしばらくの間考え込んでいたが、やがてポンと手を叩いた。

「あー、なるほど。そう言えば最近、これを買ったお客がいるな」

「誰だい？」ハリーが殺気立った声で訊いた。

「それは舌が伸びても、いや口が裂けても言えないね」フレッドは可笑しな事を口走り、クスクス笑った。

「顧客の個人情報を守らなきゃな」ジョージが当然といった口調で続けた。

そうして彼らはぴったりと肩をくっ付け合って即席の盾となり、顔を真っ赤にしたジニーが談話室から走り去って行くのを隠した。そうこうしている内に、イリスの舌は元の長さに戻っていった。心から安心した様子のハリーとハーマイオニーを見て、少しは良心が痛んだのか、フレッドとジョージはイリスにこう話しかけた。

「まあ僕らからもそいつに注意しておくけど、しばらく談話室のお菓子は控えた方がいいかもな」

「その代わりに、ご馳走食べ放題の素晴らしい場所を教えてやるよ。食欲モンスターちゃん！」

二人はハーマイオニーからイリスを遠く引き離し、ヒソヒソとこのような事を囁いた。――玄関ホール左手にあるドアを開けると、赤々と松明に照らされた広い石の廊下がある。廊下の壁には食べ物を描いた絵が沢山飾ってあるが、その中に巨大な銀の器に果物が盛つてある絵がある。その中の緑色の梨をくすぐると、梨はクスクス笑いながら隠し扉へ姿を変える。そこは屋敷しもべ妖精の厨房に繋がっているのだと。

「あいつら、君がお腹が空いたって言った瞬間、雄牛の丸焼きだって持ってくるぜ」とフレッド。

「エクレアやらシュークリームやら、山盛り食べさせてくれるぞ」ジョージが舌なめずりをして笑う。

「ダメよ、イリス」

三人は一斉に振り向いた。何時の間に背後に潜んでいたのか、毅然とした表情を湛えるハーマイオニーが仁王立ちしていた。

「屋敷しもべ妖精に時間外労働をさせてはいけません！副会長の貴方が！」

「連中は働く事が生き甲斐なんだよ！」フレッドは心底うんざりしたような声で言った。

「こいつを飢え死にさせる気か？」

ジョージが責めるような口調で抗議すると、それに同調するようにイリスのお腹もグウと鳴った。ハーマイオニーは良心の呵責に苛まれて言葉に詰まったが、意志は変わらないようで、結局イリスが厨房に行く事を許してくれる事はなかった。

☆

その日の夜中、イリスは空腹の余り、目が覚めてしまった。自室を出て談話室に下りて行って、杖を振って暖炉の火を灯し、特等席に座り込む。前にハニーデュークスで買ったお菓子は数日前に底を突いた。今なら「ベロベロ飴」<sup>トシ・タン・トライ</sup>だろうが「カナリア・クリーム」だろうが、お腹いっぱい食べたい気分だったが、残念な事に談話室には食糧が何もない。万事休すだ。

ふと昼前にフレッドとジョージが教えてくれた、屋敷しもべ妖精の働く厨房の話がパツと思ひ浮かんだが、イリスは親友を失望させるのは嫌だった。——それに食べ物が全くない訳じゃない。彼女のトランクの隅っこには、“百味ビーンズ”の外れ味だけを集めた小袋が置いてある。確か一握りくらいはあったはずだ。鼻を摘まんで何とか噛んで飲み込んだら、少しはこの空腹が紛れるだろうか。イリスはそう考えている内に、うとうとと微睡んだ。

——誰かがすすり泣いている。甲高く、消え入りそうな、か細い声で。イリスのおぼろげな意識の中で、小さな泣き声がこだまして聴こえる。

「あ、あたしの奥方様・・・小さな可愛い、あたしの奥方様・・・」

ふと美味しそうな匂いがして、イリスはゆっくりと目を開けた。そ

して目の前に広がる信じられない光景に、大きく息を飲んで目を見張った。——テーブル上に、沢山のご馳走が所狭しと並べられている。オードブルにスープ、焼き魚とフライにした魚がまるまる一匹ずつ、メインディッシュの分厚く柔らかそうなステーキに、塊で焼いたロースト・チキン、野菜とフルーツの混ぜ込まれたサラダ、バターソテーにした野菜料理、色とりどりのデザートにフルーツ、アイスクリーム、チーズの盛り合わせ・・・などなど。

余りの幸福に眩暈を覚え、イリスはぐくりと唾を飲み込んだ。『これは夢に違いない』——彼女はそう思った。きつと空腹に耐えかねた自分が見た、束の間の楽しい夢なのだ。夢ならば、遠慮したり警戒したりする事もない。イリスは喜び勇んで食べ始めた。

それからこの夢は、イリスの体の状態が落ち着くまでずっと続いた。何とも不思議な事にその夢を見た翌朝は、お腹が空く事はなかった。——まるで本当に、夜中にたらふくご馳走を食べたみたいに。

☆

「いよいよ」第一の課題がやってきた。ハリーは深刻な表情で押し黙り、一部の意地悪な生徒達が「ウィーズリーと最後のお別れのキスをしなくていいのか、ポッター？」とからかってきても、無反応だった。それはイリス達だって同じ事だった。いくらシリウスが見守っているとは言え、過去に死者を出した程の危険な課題である事は確かなのだ。なんとか授業を終えて、大広間で四人がランチを摂っていると、マクゴナガル先生が急いでやって来てハリーを連れ去って行った。イリス達は口々にハリーを応援したが、それに応えた彼の声はいつもの声とまるで違っていた。

イリスの空腹は、この時ばかりは鳴りを潜めてくれた。数時間後、彼女達は先生方の指導に従い、禁じられた森の近くに設置された、広大な敷地を持つ囲い地へ向かった。その周囲をぐるりと取り囲むようにして観客席が創り出されていて、イリス達はシリウスと合流し、一番前の席に座り込んだ。シリウスは少し青ざめた表情をしていたが、それでもイリス達を安心させるような笑みを浮かべ、杖を所在なげに弄びながら、じつと眼下に広がる大地を見つめていた。



ついに我慢できなくなったロンがシリウスに尋ねようとした時、恐ろしい猛り声が響き渡った。

《私の卵に手を出すな！汚らわしい人間共！》

やがて囲い地の柵の一部が大きく裂けた。そこから姿を現したのは——信じられない、ドラゴンだ。見るからに獰猛な巨大な成獣で、後脚で立ち上がり、吼え猛り、鼻息を荒げている。地上十五、六メートルもの高さに伸ばした首の先で、大きく開いた口は牙を剥き、空に向かって火柱を吹き上げていた。観客は一斉に悲鳴を上げ、叫び、息を飲んだ。

「嘘だろ」ロンが真っ白な顔で呟いた。

バグマンが嬉々とした声でアナウンスを始め、『“第一の課題”はドラゴンから金の卵を取る事だ』と説明してくれたが、イリスはそれに耳を貸す所ではなかった。——囲い地の中に、ハリーが入って来たからだ。ドラゴンが象だとするなら、ハリーは蟻のように小さかった。鱗に覆われた黒いトカゲのようなそのドラゴンは、一胎の卵をしつかりと抱え込んで伏せている。両翼を半分開き、邪悪な黄色い目でハリーを睨み、棘だらけの尾を地面に激しく打ち付けては、硬い地面に幅一メートルもの溝を削り込んでいた。

『こんな無理だ』——イリスは深い絶望の感情に飲み込まれながら、心からそう思った。このドラゴンは母親だ。子供を守るためにとんでもなく殺気立っているのに、“卵を取れ”だなんて。このままじゃ、ハリーが死んでしまう。ドラゴンは鋭い目を細めて彼を認めると、ますます卵を用心深く守り、嘲笑った。

《さあ、来るがいい！地べたを這いずるしか能のない、ちつぽけな人間め！すぐに踏みつぶしてやる。それとも貧相な棒切れに跨つてのろのろと飛び回り、私に焼き殺されたいか？》

『貧相な棒切れに跨つてのろのろと飛び回り』——その言葉を聴いた瞬間、イリスの頭の前から爪先に掛けて、一筋の電流が駆け抜けた。ハリーが身を守るには、もうこの方法しかない。彼女はそつとその場を抜け出し、素早く周囲に視線を巡らせて、誰も自分に注意を払っていない事を確認してから、スニジェットに変身した。

☆

ハリーは目の前の全てが、まるで色鮮やかな夢のように見えた。何百何千という顔が観客席から自分を見下ろしている。そして、巨大なドラゴンがいる。ハリーが恐ろしい黄色い目に射竦められながら、今から自分がどうするべきなのかという事を懸命に模索していた時、ふと視界の端に金色の光が躍った。長年シーカーとして活躍していた彼は、無意識にそれを捕え、驚いて息を飲んだ。

——スニッチだ。何故こんなところに？キラキラと光るスニッチは観客席の人々の頭上をジグザグと自在に飛び回っている。やがてハリーは思い出した。自分はクイディッチの選手で、ドラゴンと戦う術は杖を使う以外にもう一つあるのだという事を。「呪文学」の授業で習ったばかりの“呼び寄せ呪文”を唱えるため、全神経を杖先に向けて、彼は叫んだ。

「アクシオ、ファイアボルト！」

数十秒後、背後の空気を貫いてファイアボルトが疾走し、囲い地に飛び込み、ハリーの脇でピタリと止まって、彼が乗るのを宙に浮かんだまま待った。彼は観客席を再び見た。もうスニッチの姿はない。彼は片足をサツと上げて飛び乗り、地面を蹴った。バグマンが何か叫んでいる。観衆の騒音が一段と高まった。しかしそんな事は今のハリーにとって、取るに足らない事だった。空高く飛翔して、無数の観客やドラゴンがミニチュア人形のように小さくなった時、彼は気づいたのだ。——これはクイディッチの試合と同じなんだ。このドラゴンは醜悪な敵のチームじゃないか。

そう考えてから、ハリーは早かった。巧みな陽動作戦でドラゴンを翻弄し、立ち上がらせてその下をかいくぐり、金の卵を獲得する事に成功したのだ。代表選手の中で一番目に課題に取り組む事となった彼は、他の選手達より遥かに早く卵を獲得する事に成功したのだった。鼓膜が痛いほどの大歓声の中、ハリーは観客席へと飛び戻り、鮮やかに着地した。“生き残った”という爽快感がみなぎり、言葉に出来ない程に誇らしく、浮き上がるような思いだった。シリウスがやって来て、彼をきつく抱き締めた。

「良くやった、ハリー。ファイアボルトを呼び出したのは、実に君らしい、素晴らしいアイデアだ」シリウスの声は涙でぐももっている。

シリウスはハリーを伴って救急テントの中に入り、マダム・ポンフリーの治療を受けさせた。やがて息せき切った様子でイリスとハーマイオニー、ロンが飛び込んで来た。——ハリーはイリスの顔を見たのとたん、かつて“秘密の部屋”で、彼女が自分を守るためにスニジェットに変身した事を思い出した。あのスニッチは、きっと彼女だったのに違いない。ハリーはイリスの手を引き寄せ、ギュツとハグした。

「あのスニッチは君だろ？ ヒントをくれて、ありがとう」

ハリーが優しく言うのと、イリスは照れ臭そうに笑い、かすかに頷いた。

——その時、彼は恐ろしい試練に打ち勝った事でアドレナリンが体内にみなぎり、今にも爆発しそうなほど興奮していた。イリスのエメラルド色に輝く目が自分を見つめた時、不意に外の観衆の騒音やドラゴンの咆哮が遠のき、周囲の人々の視線も気にならなくなった。まるでこの世界に自分とイリスだけしかないような、奇妙な錯覚に囚われた。

ハリーはイリスの頬に手を添えた。かすかに開いた彼女の唇から甘い香りの吐息が零れて、彼の指先をくすぐった。彼はミツバチが蜜を求めて花の中に潜り込むように、イリスの唇へ自らの口を近づけた。

誰かがハリーの肩を後ろから掴み、彼はハッと我に返った。——マダム・ポンフリーだった。彼女は般若のような顔つきで、痛烈に言い放った。

「お座りなさい」と言った筈です、ポッター。“ガールフレンドにキスしなさい”とは言っておりません！」

急に自分の世界に音や人々が戻り、ハリーは慌ててポカンとした顔で自分を見つめているイリスを引き離し、彼女とマダム・ポンフリーに謝った。

『今、僕は何をしようとした？』——ハリーは今にも口から飛び出し

そうなほど、激しく鼓動を打ち始めた心臓を何とか押さえつけようと頑張りながら、先程の無謀過ぎる行動を反省した。今、シリウスやロンたちがどんな目で自分を見ているか、怖くて確認する事なんてできない。——どうかしてた。こんな大勢の人々がいる前で、まだ告白もしていないのに、イリスにキスしようとするなんて。

——十四歳になり、多感な時期を迎えたのはイリスだけでなく、ハリー達だって同じ事だった。固い友情で結ばれていた彼らの関係は、お互いの性を意識し始めた事で、少しずつその形を変えようとしていた。

## P e t a i l l o . 秘密の部屋へⅡ

ハリーが自分の行動を恥じている間にも、第一の課題は着々と進められていた。――セドリックは岩を犬に変身させ、ドラゴンの注意を引いている内に卵を取ったが、その瞬間に気づいたドラゴンに攻撃を受け、火傷をしてしまった。フラーはドラゴンに魅惑呪文をかけて恍惚状態にする事に成功したが、卵を取っている間に、ドラゴンの炎混じりのいびきがスカートに掛かり、大きく燃え上がってちよつとした騒ぎになった。クラムは結膜炎の呪いをドラゴンにかけ、苦しんだうち回っている間に易々と卵を取ったが、本物の卵の半数は潰れてしまった。課題の結果は審査員達がそれぞれ付けた点数を合算して判定される。審議の結果、ハリーとクラムは同点で一位となった。カルカロフが四点という低い点数を付けなければ、ハリーが一番だったとロンは何度も言い、悔しがった。

「卑怯者、依怙鼻頂のクソツタレ！クラムには十点やったくせに！」  
「きつと僕が死に損なったからだ」

しかし、ハリーは肩を竦めてみせるだけだった。実際、彼にとつて一番になる事などどうでもいい事だった。ドラゴンを出し抜き、生き残ったという達成感がまだ体中をいっぱい満たしていたし、観衆の声援が今までとまるで違っていたからだ。その場に臨んで、ハリーの立ち向かっているものが何なのかを見た時、全校生の大部分がセドリックだけではなく、ハリーの味方にもなってくれた。もう彼に心無い野次を飛ばしたり、ロンとの関係を大声でからかう者はほとんどいなかった。

点数発表の後、ハリーは選手用のテントへ呼び出され、しばらく経った後、金色に輝く卵を抱えて戻って来た。先程、彼が命懸けでドラゴンから掠め取ったものだ。ハリー曰く、テントの中にはバグマンがいて、第二の課題は二月二十四日に行われるという事と卵の中にあるヒントを解く事で、第二の課題の内容が解るといふ事を説明してくれたらしい。

その夜、グリフィンドールの談話室はまたもお祭り騒ぎ状態だった

た。悪戯双子が学校の厨房からくすねてきた、山のようなお菓子の数々、大瓶入りのかぼちやジュースやバタービールが部屋中のテーブルにびっしりと並んでいる。みんなは恥ずかしがるハリーを無理やり胴上げし、やんやと喝采を浴びせた。リー・ジョーダンが“ドクター・ファイリバスターのヒヤヒヤ花火”を爆発させたので、周りにじゆうに星や火花が散った。そんな浮かれに浮かれている皆の様子を冷静に観察しながら、ハーマイオニーは特等席から動かぬまま、腕組みをしてしかめっ面でこう言った。

「皆、本当に能天気ね。課題はあと二つもあるのよ。あれが第一の課題なら、次は何が来るやら、考えるのも嫌」

「ワーオ、君ってまるで太陽のように明るい人だね」

ロンはすかさず嫌味を言った。イリスは肩を竦めてそれをやり過ぎながら、テーブル上に置かれた菓子皿から美味しそうなヌガーを一つ取って、恐る恐る一口かじってみた。——何も起こらない。これは大丈夫だ。イリスは安心して、ヌガーをパクパクと食べ始めた。そうこうする内にハリーが戻って来て、彼女の隣に座り、金の卵をテーブルに置いた。イリスが興味深そうな視線を注いでいると、彼が卵を取って「重いよ」と言ってから膝の上に乗せてくれた。本当にずっしりと重い。卵の表面には放射線状に溝が走っていて、てっぺんにある蝶番を捻ると、花卉のように開き、中身が見えるような仕組みになっていた。シエーマスがやって来て、イリスの抱える卵をしげしげと見て言った。

「開けてみるよ、ハリー。中に何かあるか見てみようぜ！」

イリスは卵をハリーに返し、わくわくと心を弾ませながら、皆と一緒に彼の動向を見守った。リクエストにお応えし、ハリーは蝶番を捻って中を開いた。——空っぽだ。中には何も無い。しかし次の瞬間、その空洞の中から凄まじい金切声のような音が爆発し、部屋中に響き渡った。余りの騒音に、みんな耳を抑えて悲鳴を上げたりしゃがみ込んだりしている。ハリーが急いで卵の殻を閉めると、音はピタッと止んだ。

「今のは何だ？」シエーマスが耳を押さえつけていた両手を離しながら

ら、茫然と言った。

「バンシー妖怪の声みたいだったな。もしかしたら次にやつつけないといけないのはそれだぞ、ハリー」とリー・ジョーダン。

「イリス、何か分かった？」

ハーマイオニーが卵から視線を外し、イリスを見て問いかけた。しかし彼女はゆっくりと首を横に振った。——あの声は、全く言葉を成していないかった。ただ一つだけ気になったのは、声に“奇妙な渇き”を感じた事だ。まるでカラカラに乾き切ったミイラが水を求めて叫んでいるみたいに。イリスは顎に手を当て、思案しながら言った。「うーん。何て言ってるかは分からなかったけど、声が乾いてるような感じがしたかな」

そんなイリスの発言を受け、ハーマイオニーはしばらく何かを考え込んでいた。何故かフレッドまでもその横に並び、真面目くさった顔つきで思考に耽る振りをしている。

「フム、渇きか。君達も喉を潤した方が良いんじゃないか？このバタービールでも飲めよ」

そう言ってフレッドはローブのポケットからバタービールの大瓶を取り出し、四人の座るテーブルに置いた。四人は実に疑わしげな視線を大瓶に注いだまま、動かなかった。その様子を見て、フレッドがニヤツと笑った。

「おいおい、心外だな。ハリーが無事に課題を達成した、そんな素晴らしい晴れの日には悪戯なんかすると思うかい？・・・おっと」

フレッドは口をつぐんだ。突然、イリスが鼻血をボタボタと垂らし始めたからだ。——彼女がさつきまで食べていたヌガーの中には、WWの商品「ずる休みスナックボックス」の一つ、「鼻血ヌルヌル・ヌガー」が隠されていた。三人の非難がましい目線に急ぎ立てられるように、フレッドはポケットからヌガーの半分を探り当てるとイリスに放ってよこした。

「言っておくけど、僕じゃないぜ。イリス、これを食べ。すぐに治るよ」

果たして彼の言う通り、ヌガーの半分を食べるとイリスの鼻血はす

ぐに止まった。四人は安心して溜息を零した。それから四人は卵の謎の声について話し合ったり、ハリーが第一の課題の時に貰ったのだと言うドラゴンのミニチュア人形と遊んだりして過ごした。皆が寝室に戻ったのは夜中の一時近くだった。寝ぼけ眼を擦りながらイリスはルームメイト達にお休みの挨拶をして、ぐっすり眠った。

☆

イリスはベッドに横たわり、心地良い微睡の中にいた。ふと鼻腔を良い香りが掠め、彼女は鼻をクンクンと動かした。焼き立てのパン、アールグレイ、ベーコンと目玉焼き——“朝ご飯”の匂いだ。もうすぐイオおばさんが私を起こしに来てくれる。やがて誰かが自分の体を揺さぶり始めた。——やっぱりそうだ。イリスは寝惚けて微笑んだ。さあ、起きて顔を洗って着替えなきゃ。彼女の意識はぐんぐんと上昇し、ゆっくり目を開いた。

「ねえ、イリス！起きてってばー！」

しかし目の前にいるのはイオではなく、ハーマイオニーだった。困り果てたような表情を浮かべている。彼女の両隣にはルームメイトのラベンダーとパーバティがいて、二人は好奇心と心配が絢交ぜになったような複雑な顔で、こちらをじっと見つめている。ハーマイオニーは豊かな栗色の髪を掻き上げ、イリスに問い掛けた。

「これって一体、どういうことなの？」

その質問の意味が分からず、イリスは大きく首を傾げた。そもそも、“これ”って何の事なんだ？——そこまで考えて、ふと気づいた。そう言えば、美味しそうな匂いは今もしている。“自分の目の前”から。彼女は何気なく匂いの元を辿り、やがてアツと驚きの声を上げた。

自分のベッドの上、ちょうど足元付近に、精緻な細工の施されたベッドトレイが置かれている。その上には、様々な料理の載った皿と紅茶のポットやカップが並び、湯気と一緒に美味しそうな匂いを漂わせている。サイドテーブルには花が飾られ、小さな香炉も置いてあり、柑橘系の爽やかな香りを放っていた。

イリスは思わず自分の頬をつねった。痛みが走ったという事は、こ



れは夢ではないんだ。彼女は布団からゆっくりと抜け出し、ベッドト  
レーまでおそおすと近づいた。——整然と並べられた銀食器のデザ  
インに、不思議と見覚えのあるような気がする。イリスははたと気づ  
いた。そうだ、一時期ずっと見ていた“不思議なご馳走の夢”と同じ  
食器だ。あれは夢の中の出来事じゃなくて、現実だったんだ。彼女は  
磨き上げられた銀のフォークを手に取った。柄の先端には小さなサ  
ファイアが埋め込まれている。ラベンダーがこらえ切れないように  
身を振り、くすくす笑いながら言った。

「とつてもロマンチックじゃない？きつとあなたにお熱な人が、屋敷  
しもべ妖精に命じてさせたんだわ！」

「少なくともグリフィンドールじゃないのは確かだね。こんな気の利い  
た事、うちの人達にできるはずないもの」

パーバティもそう言つて笑い転げたが、ハーマイオニーだけは警戒  
心に満ちた表情を崩さなかった。彼女の唇が動き、イリスだけに分か  
るように、声を一切出さずに“カルカロフ”と呟いた。もしかしたら  
ドラコかもしれないという淡い期待を抱いていたイリスは、親友から  
の静かな警告を受けたとたん、フォークを取り落した。カチャンと音  
を立ててトレー上に落ちたそれを拾い上げ、ラベンダーは片目を瞑つ  
て透かしたり眺めたりし始めた。

「誰が犯人か推理してあげる。……ワオ、宝石が嵌め込んであるわ！  
きつと相手はお金持ちね」

ラベンダーはやがてフォークをひっくり返し、素っ頓狂な声を上げ  
た。

「あなたの名前が刻んであるわ。あ、でも待って。名字が違う。“イ  
リス・クラウチ”」

“イリス・クラウチ”だつて？——四人は思わず、きよとんとした  
顔を見合わせた。クラウチと言えば、三校対抗試合の立役者であり、  
魔法省の“国際魔法協力部”の部長で、パーシーが愛してやまない上  
司でもある。カルカロフの容疑は晴れたが、依然として謎は解けず、  
真犯人は見えない。パーバティが気まずそうに身じろぎし、ポツリと  
言った。

「ねえ、もしかして“人違い”とか？」

ラベンダーはそつとフォークをトレイに戻し、一步引いた。しかし当のイリスはもつとぼつが悪かった。もしかしたら学校に“イリス・クラウチ”という女学生がいて、その子のために調理された料理を知らずに食べていたのだとしたら……。イリスは申し訳ない気持ちでいっぱいになり、ベッドの上で小さく縮こまった。

「でもイリスなんて名前の人、貴方以外、この学校にいるかしら？」

ハーマイオニーが静かに疑問を投げかける。彼女は青ざめた表情で唇を引き結び、見事な半熟状態のスクランブルエッグを熱心に眺めているイリスへ鋭い警告を放った。

「食べちゃダメよ、イリス。危険だわ。毒が入っているかもしれない」「大丈夫だよ、ハーミー」イリスは親友を安心させるために、優しい声で応えた。

「何度も食べてるもの。毒なんて……」

その瞬間、背筋をゾクツと冷たいものが走り、イリスは反射的に口をパチンと閉じた。それから、恐る恐るハーマイオニーを仰ぎ見た。——彼女の豊かな栗色の髪は凄まじい怒気を帯び、風もないのにゆらゆらと揺らいでいる。その様子を見るや否や、ラベンダーとパーバティはヒツと息を飲み、「大広間に行ってるわ」と口々に言つて部屋を駆け出して行つた。まるで猫に捕食される寸前のネズミのような気持ちで、イリスは今、ハーマイオニーと対峙していた。怒れる猫は恐ろしい程に完璧な笑顔で、震え上がるネズミに問い掛けた。

「ねえ、イリス。“何度も食べてる”って、一体どういう事？」

☆

かくしてハーミーママの告発で、イリスの“不思議な夜のご馳走事件”はハリーパパの知れる所となり、イリスは大広間のいつもの席で小さくなつて、二人の説教を受ける羽目になった。ハリーは父親らしい厳格な怒りに満ちた顔で、イリスにこう言った。

「あれほどシリウスが注意していたじゃないか。“迂闊な行動はするな”って。誰が作ったかも分からない料理を食べ続けるなんて、信じられない。どうして僕らに相談しなかったんだ？」

「だって夢だと思ったんだもん」

二人の間ですくすくと育ったイリスは今、“反抗期”を迎えようとしていた。拗ねたような口振りでそう言い返し、バターをたっぷり塗ったトーストを二枚重ねてかじる。そんな難しい年頃の娘をどう扱って良いか分かりかね、溜息を吐くハリーパパを見て、ハーミーママが静かに口を開いた。

「それだけじゃないの。食器に名前が彫ってあったのよ。“イリス・クラウチ”って」

「何だって？」ハリーがかぼちゃジュースに咽ながら、訊き返した。「クラウチって、あのパーシーの婚約者の？」すかさずロンも混ぜっ返す。

「そのクラウチ家に私達と同じような年頃の子供はいないわ。唯一の息子さんはその・・・亡くなったでしょ」ハーマイオニーが言い淀んだ。

「でもこの学校に、イリスと同じ名前の女の子なんていたかな？」ハリーが首を傾げた。

しばらくの間、四人は一言も声を発さず、それぞれ思案に耽っていた。やがてロンが閃いたとばかりに目を輝かせ、ポンと手を打って明るい声で言った。

「分かった！ほら、前にシリウスが言ってたじゃないか。『ブラック家は至る所に親戚関係がある』って。もしかしたら、クラウチ家とも繋がりがああるんじゃない？僕ん家の親戚が、遠縁の家を引き継いだ事があるんだ。魔法族って途絶える時はあつという間だからさ。」

クラウチ家には跡取りがない。でもパーシーじゃ子供は産めない。で、君にそのお鉢が回って来たとか」

「本当にクラウチさんがイリスを跡取りに考えたんだとするよ」ハリーがウインナーを突き刺したフォークを掲げ、静かに話し始めた。「じゃあどうして、クラウチさんはイリスに何も言いに来ないんだ？屋敷しもべ妖精に命じて、夜中や早朝にこっそりご馳走を用意するだけなんて、不自然過ぎる。それにウインキーはもう解雇されたはずだろ？」

イリスもハリーと同じ思いだった。キャンプで初めて会った時や“闇の印”が打ち上げられた時、クラウチ氏はまるで特大の“尻尾爆発スクリユート”を見るような目を自分に向けていた。自分を養子にするくらいなら、彼はスクリユートを喜んで家族の一員に迎えるだろう。仮に百歩譲ってそうだとしても、お腹を空かせた彼女を哀れに思い、ご馳走を用意するなんて優しさを持っているようには思えない。

「やっぱリラベンダーの言う通り、人違いなのかな」イリスは弱り切った声で呟いた。

「でも」イリス・クラウチ“なんて子、聴いた事がないわ。・・・ねえ、私達、厨房に行くべきよ」とハーマイオニー。

「厨房？」三人の声がハミングした。

「ご馳走を用意したのは屋敷しもべ妖精だわ。だから厨房に行けば、何か手掛かりが見つかるかもしれない」

ハーマイオニーの瞳は知的な探求心に輝いていた。そうして四人は朝食を摂った後、以前にフレッドとジョージが教えてくれた道程を辿り、屋敷しもべ妖精が働く厨房へ向かった。大広間を出て玄関ホールを歩き、左側にあるドアを開ける。石段を下りると、赤々と松明に照らされた広い石の廊下があった。主に食べ物を描いた、楽しいな雰囲気絵が飾ってある。その中の一つに、巨大な銀の器に果物を盛った絵があった。ここがフレッド達と言った、厨房への隠し扉なのだろう。喜び勇んで、絵の中の緑色の梨に指先を伸ばすハーマイオニーを見兼ねて、ロンが口を挟んだ。

「ハーマイオニー」ロンはとても疑わしげだ。

「これは」イリスを助けるため“なんだよな？決して”反吐のため“なんかじゃないよな？”

「も、もちろんよ」ハーマイオニーは僅かに体をこわばらせ、口籠った。「それにSPEWよ、ロン。“反吐”なんて呼ばないで」

ハーマイオニーの指先にくすぐられた梨は、クスクス笑いながら身をよじって大きな緑色のドアの取っ手に変わった。彼女は取っ手を掴んで隠し扉を大きく開け、四人はぞろぞろと中へ入った。

☆

厨房は、とても天井が高く巨大な部屋だった。上の階にある大広間と同じくらい広く、石壁の前には丁寧な磨き上げられた鍋やフライパンが山積みになっている。部屋の奥には、大きなレンガ造りの暖炉があった。四人がそれぞれ興味深そうに周囲を眺めていると、部屋の真ん中から一匹の屋敷しもべ妖精が飛ぶような勢いでやって来た。妖精はハリーとイリスの目の前で急停止し、甲高く興奮した声で叫んだ。

「ハリー・ポッター様！ゴーストお嬢様！」

「ドビー？」二人の声ハミングした。

ドビーは二、三步下がってイリスを、次いでハリーを見上げ、にっこりと笑った。巨大なテニスボールのような緑の目が、嬉し涙でいっぱいだ。——ドビーはとても独創的な服装をしていた。彼がマルフォイ家で働いていた時は、汚れた枕カバーを着ているだけだった。しかし今は、帽子代わりにティーポットカバーをかぶり、それにキラキラしたバッジを沢山留め、裸の上半身に馬蹄模様のネクタイを締め、子供用のサッカーパンツを履き、ちぐはぐな靴下を履いている。——その片方を見て、ハリーは目を見張った。かつてマルフォイ氏がドビーに与えるようにと計略を仕掛け、ドビーを自由の身にした“自分の黒い靴下”だ。そうだ、彼は自由になった筈だ。ハリーは腕組みをした。何故、彼は Hogwarts の厨房にいるんだろう？

「どうしてここにいるんだい？」ハリーは率直に尋ねた。

「ドビーは Hogwarts に働きに来たのでございます！」ドビーは興奮してキーキーと言った。

「ダンブルドア校長が、ドビーとウインキーに仕事を与えてくださったのでございます！」

「ウインキーもここにいるの？」ハーマイオニーとイリスの声がハミングした。

「ヤッようびいいますともー！」

ドビーは嬉々としてイリス達を誘導し、四つの長い木のテーブルの間を引っ張って厨房の奥に連れて行った。テーブルの脇を通る時、イ

リスはそれぞれがちょうど大広間の各寮のテーブルの真下に置かれているという事に気付いた。今は朝食も終わったので、どのテーブルにも食べ物はない。しかし一時間前は食べ物や飲み物がぎっしり置かれ、天井からそれぞれのテーブルへ魔法で送られたのだろう。

ドビー一行が部屋の真ん中を突っ切っていく中、少なくとも百人の小さな屋敷しもべ妖精が厨房のあちこちで会釈したり、頭を下げたり、膝をちよんと折って宮廷風の挨拶をしてくれた。全員が同じ格好をしている。 Hogwarts の紋章が入ったキッチンタオルを、洒落たトীগ風に巻き付けて結んでいた。やがてドビーはレンガ造りの暖炉の前で立ち止まり、その脇のテーブルに突っ伏す妖精を指差しながら言った。

「ウインキーでございます！」

ウインキーはドビーの声に返事もしなかった。彼女は小さなスカートのブラウス姿で、それに合ったブルーの帽子をかぶっている。しかしドビーの珍妙なごた混ぜの服はどれも清潔で手入れが行き届いているのに、ウインキーの方は全くそうではなかった。ブラウスの前はスープの染みだらけで、スカートには焼け焦げた跡がある。おまけにテーブル上にはバタービールの空瓶が散乱していた。余りに荒れ果てた妖精の様子に、四人は何と声を掛けて良いか分からず、立ち竦んだ。

「ウインキー」

やがて勇気を出してイリスが一歩進み、名前を呼んだ。するとウインキーがぴくりと動き、顔を上げて彼女を見た。次の瞬間、ウインキーは戸惑ったように厨房を見回しながら椅子から飛び降り、こちらにやって来た。

「まあ、奥方様。こんな所に来てはいけません。火傷などしたらどうします？」

——「奥方様」だって？イリスは思わず呆気に取られ、ウインキーを見下ろした。彼女だけでなく、ドビーを含めた他の皆も絶句して、二人の様子を眺めている。四人と一匹が注ぐ驚愕の眼差しを物ともせず、ウインキーは不意に何かを思い至ったかのように息を飲んで、

まるで愛しい悪戯っ子を見るような目でイリスを見つめた。——その大きな茶色い瞳は大量のアルコールで濁り、正気が失われている。「さてはまたお腹が空いたのですね？」ウインキーはそう言うと、イリスの手を取って出口に向かって歩き出した。

「さあ、お坊ちやまの所へ戻って下さい。さもないとウインキーがお叱りを受けます。心配しなくても、すぐに軽食をお持ちになりますわ」

ウインキーはくすくす笑った。イリスは手を引かれるままに歩きながら、さつきウインキーが言った言葉を心の中でゆつくりと反芻した。「奥方様」——「ウインキーが叱られる」——「お坊ちやま」——これらの言葉が紡ぐ答えは、恐らく一つしかない。ウインキーはきつと亡くなったクラウチ夫人と自分を重ねているのだ。クラウチ夫人の名前は自分と同じなのに違う。

「ウインキー？」

イリスははつきりした声で、もう一度名前を呼んだ。——ピタリ、とウインキーの動きが止まった。そうして彼女はまるでブリキ人形のようにぎこちない動きで振り返り、イリスを見て、周囲の景色を見渡し、もうクラウチ家のキツチンタオルではなくなった自分の新しい服を見下ろしてから、唇を震わせて泣き出した。大きな茶色の目から涙が溢れ、滝のように流れ落ちていく。

「あああああああ……ウインキーは……なんということ……」  
イリスは矢も楯もたまらず、床に崩れ落ちようとすするウインキーをギョツと抱き留めた。イリスの腕の中で、哀れな妖精はますます激しく泣きじやくった。ハリーは静かに近づいて、銀のスプーンをウインキーに見せた。

「これは君のもの？ご馳走を作ったのも君なの？」ハリーが訊くと、ウインキーは微かに頷いた。

「イリス・クラウチ」は、一体誰なんだい？」

「ああ、ウインキーは言えないのです。ウインキーはご主人様の秘密を守ります」

ハリーがそう問いかけたとたん、ウインキーは帽子の穴から出てい

る耳を両手でぴったりと押さえつけ、一言を聴こえないようにして、キーキーと泣き叫んだ。そしてか細い声で、こう囁いた。

「ウインキーは夢をご覧になっていました。もう決して叶う事の無い夢をご覧になっていたのです」

それ以上は、ウインキーの口からちゃんとした言葉は一言も聴けなかった。ただ力なく泣きじやくるばかりのウインキーの頬を、イリスは優しく撫でた。——例え自分のために作られたご馳走ではなかったとしても、イリスは彼女にきちんとお礼を言いたかった。空腹で苦しんでいた時、あご馳走に何度助けられた事か。まさに命の恩人等にしい存在だった。イリスは真摯な眼差しを妖精に向け、しっかりと感謝の言葉を捧げた。

「ウインキー、あなたの料理はとても美味しかったよ。本当にありがとう」

「奥方様・・・あたしの可愛い、奥方様・・・」

ウインキーは感極まったようにそう呟くと、イリスの腕の中でゆつくりと目を閉じ、眠った。イリスはそつとウインキーを抱き上げ、椅子を二つ並べてその上に寝かせてあげた。やがて六人くらいのしもべ妖精がやって来て、大きな銀の盆にティーポットと人数分のティーカップ、ミルクと砂糖入れ、大皿に盛ったビスケットを持って来てくれた。それらに舌鼓を打ちつつ、眠るウインキーを見守りつつ、イリス達はドビーと話をした。

——ドビー曰く、ホグワーツで働き始めたのは今から一週間前という事だった。ドビーはマルフォイ家から自由の身になってからというものの、丸二年間仕事を探して国中を旅した。ドビーの労働条件はただ一つ、“雇い主から給料を貰う事”だ。しかし、そもそも解雇されたしもべ妖精が新しい職を得るのは本当に難しい事だし、大多数の魔法使いは給料を要求するしもべ妖精を欲しがらない。しもべ妖精達自身も、無休無給である事を美德だと信じている。——実際、ホグワーツのしもべ妖精達はドビーの英雄譚に耳を貸すどころか、まるで彼が伝染病でも持っているかのように、じりじりと距離を置き始めていた。そんな過酷な旅の中でドビーはウインキーと出会い、二人一緒



に同じ職場に就けるほど沢山の仕事がある所はホグワーツしかない  
と閃いて、ダンブルドアへ会いに行った。そしてめでたく再就職の運  
びとなったのだと言う。

「ドビーはダンブルドアから一週間に一ガリオンと、一ヶ月に一日の  
お休みを頂くのです！」とドビー。周囲のしもべ妖精が凄まじい悲鳴  
を上げ、厨房内を逃げ惑った。

「それじゃ少ないわー！」ハーマイオニーは怒ったように言った。

「お嬢様、違うのです。ダンブルドアは最初、ドビーに週十ガリオンと  
週末を休日にするようにと仰いました」

ドビーはそんなに暇ができたら恐ろしいとでも言うように、ブルツ  
と大きく震えた。

「ドビーは給料を値切ったのです。ドビーは自由が好きでございま  
す。でもドビーはそんなに沢山欲しくはないのです。働く方が好き  
なのでございます」

ドビーはそう言うと、とても幸せそうに笑った。彼の笑顔を見て、  
イリス達は幸福のお裾分けを貰ったような気分になった。四人が紅  
茶を飲んでいる間、ドビーは自由な屋敷しもべ妖精の素晴らしい生活  
や、貰った給料をどう使うつもりなのかといった計画を楽しそうに話  
し続けた。ドビーはファッシュョンに強い興味があるらしく、次の給料  
でセーターを買うのだという事を聞いたロンが、毎年クリスマスに自  
分の母がくれる栗色のセーターをあげると約束したので、ドビーは大  
喜びだった。ロンは彼の事が気に入ったらしい。

やがてドビーの話も紅茶も尽きて、四人は帰り支度を始めた。イリ  
スは杖を振ってウインキーの衣服の汚れを綺麗に取り除き、重ねた銀  
の食器の上に魔法でこしらえた花を一輪添えた。四人が立ち上がった  
瞬間、周りのしもべ妖精が一齐に寄って来て、寮に持ち帰ってくだ  
さいとスナックを押し付けた。ハーマイオニーはしもべ妖精達が  
引っこ切り無しにお辞儀をしたり、膝を折って挨拶する様子を苦痛そう  
に見ながら断ったが、イリス達はカップケーキやエクレアなどをポ  
ケット一杯に溢れるほど詰め込んだ。

そうしてイリス達はドビーに見送られながら、厨房を後にした。玄

関ホールへの階段を昇り始めた時、ハーマイオニーが静かに口を開いた。

「きつとクラウチさんの亡くなった奥さん、イリスって名前だったんじゃないかしら。きつと名前だけじゃなくて、面影もどこか貴方と似ていたのよ。だからウインキーは……」

ハーマイオニーはそこで言葉を途切らせた。イリス達も何も言わなかった。——皆、同じ事を考えていた。“叶う事の無い夢”——きつとウインキーはクラウチ家を解雇された事で正気を失い、ちようど同じ名前のイリスをクラウチ夫人だと錯覚し、かつての幸せだった日々を再体験していたのだろう。

「どうしてあんなに献身的なウインキーを解雇できるの?」

ハーマイオニーの声には堪え切れない涙の色が滲んでいた。そして彼女は、SPEW活動にますます熱を上げて行くようになるのであった。

☆

十二月が、冷たい風と雪を連れてホグワーツへやって来た。冬になると、ホグワーツ城は確かに隙間風だらけだったが、氷の張った湖に浮かぶダームストラングの船を見る度に、イリス達は暖かい暖炉の火や厚い壁を有難く思った。船は強風に揺れ、黒い帆が暗い空にうねっている。とても寒そうだ。禁じられた森の近くに設置されたポーバトンの馬車だつて暖かそうには見えない。そんな冬の強烈な寒気を、ハーマイオニーが教えてくれた青い炎を瓶に入れて暖を取ったり、グリッドお手製の生姜の効いた熱い紅茶を飲んだりしながら、イリス達は何とか乗り切つて行こうと頑張っていた。

「ポッター、ウィーズリー、ゴントー!こちらに注目なさい!」

そんなある木曜日の事、「変身学」の授業中、マクゴナガル先生のイライラした声が鞭のようにビシツと響き渡った。イリス達は一斉に飛び上がり、慌ててマクゴナガル先生を見た。

授業が終わりを告げる数分前の事だった。生徒はもう課題をやり終えていたし、黒板に書かれた宿題も写し終わっていて、終業のベルが今にも鳴つてやろうとばかりに少し傾いた状態で待ち構えていた。

教室の後ろの方で、ハリーとロンはW W Wの商品「だまし杖」をそれぞれ一本ずつ持ってチャンバラ中だった。ロンの持つブリキ製のカラスと、ハリーの持つゴム製のシーラカンスが熾烈な争いを繰り広げる様子を、イリスは夢中で観戦していたのだ。

「全く。あなた方にはいい加減、年相応の振る舞いをして頂きたいものです」

マクゴナガル先生はそう言い放ち、イリス達を怖い目で睨んだ。ハーマイオニーも先生とそっくり同じ目で、三人をジロリと睨め付ける。いまだ交戦中の戦士達を急いで隠す二人を見ながら、マクゴナガル先生は咳払いをして口を開いた。

「皆さんにお話があります。クリスマス・ダンスパーティーが近づきました。三大魔法学校対抗試合の伝統でもあり、外国のお客様と知り合う貴重な機会でもあります」

不意に、前方に座るラベンダーが甲高い声でクツクツと笑い始めた。パーバティも一緒に笑い出したいのを顔を歪めて必死に堪えながら、ラベンダーの脇腹をつついた。そして二人は揃って振り返ると、イリスとハリーを交互に見てニヤニヤ笑いをした。――『なんでもこつちを見て笑うんだ?』二人の行動の意図が掴めず、イリスは首を傾げた。マクゴナガル先生は、そんな二人を注意する事無く無視し、話を続けた。

「パーティーに参加する者は、ドレスローブを着用する事。ダンスパーティーは大広間で、クリスマスの夜八時から始まり、夜中の十二時に終わります。」

ダンスパーティーに出席するには、異性のパートナーが不可欠です。特に代表選手は伝統に従い、ダンスパーティーの最初に踊ります。…つまりポッター、貴方は必ずパートナーを見つけなければなりません」

イリスは気軽な調子でハリーの脇腹を突き、自分を指差してみせた。その様子を見て、ラベンダーとパーバティはますます忍び笑いをした。――本当にちょうど良い、とイリスは思った。自分とハリー、それからロンとハーマイオニー。お互いに異性同士だし、おまけに仲

良しだ。ダンスは苦手だけど、ハリーと一緒にならきつと楽しいに違いない。しかしマクゴナガル先生は嚴格極まりない口調で、こう続けた。

「クリスマス・ダンスパーティーのパートナーは“友達”を選んでではありません。貴方が男性ならば格好良く気取った姿を、女性ならば最も美しく着飾った姿を見せたい、と思う相手としか踊ってはならないのです。それが、相手に対する礼儀というものです」

イリスの明るい考えは、マクゴナガル先生の言葉がずっしりと押し掛かった事により、ペシヤンコに潰されてしまった。——自分が着飾った姿を見せたい相手なんて、一人しかいない。机の下で、ロンのカラスに襲われて首を切り落とされたハリーのシーラカンスをぼんやりと眺めながら、イリスは思った。おまけにその相手は決して自分を選んでくれないんだ。しよげ返るイリスの様子を、隣に座るハリーが物も言わずにじつと見つめていた。

☆

ハーマイオニーと図書室で別れ、寮へと戻る道すがら、イリスはぼんやりと考え事に耽っていた。——本当にマクゴナガル先生の言う通り、自分が着飾った姿を見せたい相手としか踊ってはいけけないのなら、自分はパーティーには参加できない。でも、それで良いのかもしれない。イリスは騙し階段を避けて昇りながら、自嘲気味に笑った。ドラコが他の女の子と踊っている姿なんて、見たくないもの。「ねえ、ちよつと。イリス・ゴーント」

その時、後ろから誰かに呼び止められ、イリスは足を止めて振り向いた。——ハッフルパフ生である事を示す黄色いタイを締めた女学生が、階段の下段に立って自分を見上げている。小麦色の滑らかな肌が目鼻立ちのはっきりした顔つきが似合う、快活そうな雰囲気的女性だ。彼女はにっこりと笑うと、こう問いかけた。

「君、ダンスパーティーに出る予定あるの？ パートナーは決まった？」

イリスは素直に首を振って応えた。

「ううん、出ないよ。パートナーもいないしね」

すると女性は焦げ茶色の大きな瞳をキラキラと輝かせ、階段を勢い

良く駆け上がってイリスの手を掴んだ。

「やっぱり？じゃあ今年のクリスマスは、私達と一緒に劇に出ない？  
“物語のヒロイン”としてね」

——“劇”だって？イリスは狼狽する余り、階段からずり落ちそうになった。劇なんて、小学校の時にした“ごんぎつね”の劇で、草木の役をした事ぐらいしかない。物言わずその場に佇むだけの役でもイオは大喜びし、『素晴らしい草木振りだった。まるで本当の植物みたいだった』と褒め千切ってくれたっけ。やがて我に返ったイリスは、慌てて首を横に振った。そもそも人前に入るなんてとても恥ずかしいし、耐えられる訳がない。

「そんな、私には無理だよ。見栄えだって良くないし」

「それマジで言ってるの？」アンヌは信じられないと言わんばかりに、ぐるりと目を回してみせた。

「あんた可愛いよ。それにその隠し切れない憂いに満ちた表情が最っ高！アマータ役にぴったりだわ」

女生徒はそう言うと言目をして、イリスの顔を両手の指で作ったフレームに閉じ込めるジェスチャーをした。——私、そんなに暗い顔してるのかな。不安そうに自分の顔を触るイリスの手を掴み、女生徒はうきうきとした調子で階段を昇り始めた。

「心配しないで、台詞はほとんどないのよ。劇自体もとっても短いしね」

もうその女生徒の中では“イリスが劇に参加する”という話がまとまっているようだった。戸惑うイリスの手を引いて階段を昇り切ると、彼女は小さな空き教室の扉を開いた。そこには劇に使う小物やら衣装やらがぎっしり詰まっっていて、その中に埋もれるようにして、二人の生徒が杖を振って何かの作業をしている。やがてその内の一人が立ち上がり、イリスを見たたん、嬉しそうに頬を綻ばせた。

「アンヌ！彼女はオツケーしてくれたの？」

「もちろんよ」

“アンヌ”と呼ばれた女生徒はウインクした。イリスが“まだオツケーしていない”と言う前に、アンヌは両手を広げてくるりと部

屋の中を一回りしてみせた。

「イリス、ここが魔法劇クラブの部室よ。部員は私、アンヌ・バーレスクと・・・」

「パトリシア・パストラルよ。アンヌと同じハツフルパフで、七年生。よろしくね」

先程アンヌを呼んだ女生徒——金髪をお下げにし、そばかすの浮いた健康的な顔つきの女の子がおっとりとして笑いかけ、イリスに握手を求めた。それからパトリシアとアンヌは、会話に参加しようとせず、部屋の隅でこちらに背を向けたままの男子生徒をじろりと睨んで、呆れかえった声で「ジョン！」と叫んだ。すると彼は苦虫を噛み潰したような表情で、くるりと振り返った。

「レイブンクローの七年生。ジョン・ペープサート」

ジョンはまるで“口を開く事が罪悪だ”と言わんばかりにボソボソ喋った。そして話し終わった瞬間に再び壁の方を向いて、元の作業へ戻っていった。余りにそっけない彼の様子にアンヌは溜息を吐き、イリスを見て肩を竦めてみせた。

「この三人。で、あんたを入れると四人になる」

——たった三人？イリスは驚いて、二の句が告げないでいた。かつてイリスが行った小学校の演劇でさえ、演者や裏方を含めて優にクラス分の人数を必要としたのに。いくら魔法が助けしてくれるとは言え、たった四人でどうやって劇をするんだ？しかしアンヌはそんなイリスの不安を気にもしないで、自信満々な口調でこう言った。

「それで今回、私達がやる劇はこれよ。・・・『豊かな幸福の泉』！」

満を持してアンヌが掲げた本には『吟遊詩人ビードルの物語』という題名が刻まれていた。——『豊かな幸福の泉』？聞き慣れない物語のタイトルに啞然とするばかりのイリスを見て、アンヌは絶句して本を取り落としそうになった。

「もしかして『ビードルの物語』読んだことないの？ジャスティンから、”あんたは純血”って聞いたんだけど」

「アンヌ、イリスはマグル育ちなのかもしれないわ」パトリシアが優しくフォローした。

「気にしないで。私もマグル育ちだったから『ビードルの物語』を知らなかったの。

ほら、私達の育ったマグルの世界で、シンデレラとか人魚姫とかピノキオってお伽噺があるでしょ？『ビードルの物語』はそれと同じよ。魔法界の子供たちのお伽噺なの」

パトリシアの説明はとても解りやすかった。イリスはアンヌから本を借りて、さらさらと読んでみた。——そこには吟遊詩人ビードルがルーン文字で綴った五篇の物語が、英語に翻訳されて一冊の本に集約されている。

——一つ目の話は優しく親切な父とは正反対の息子が、父親の遺した魔法のポットに手を焼く『魔法使いとポンポン飛ぶポット』、二つ目はどんな女性にも心動かされない筈だった、ある魔法使いの非業の結末を描いた『毛だらけ心臓の魔法戦士』、三つ目は愚かな王様を騙すペテン師と老魔女バビデイが活躍する『バビデイ兎ちゃんどぺちやくちや切り株』、四つ目は死が三人の兄弟に不思議な贈り物をする『三人兄弟の物語』、そして最後は幸せを求めた三人の魔女と一人の騎士が力を合わせる物語『豊かな幸運の泉』——

『豊かな幸運の泉』の粗筋はこうだ。——一年に一度、魔法の園の上に守られた泉に辿り着いた者は幸福になれると言われ、悲しみや辛さを抱えた者達が集まった。その中で魔法の園に誘われ、泉への道を獲得した四人の人物がいた。——病に苦しむ魔女アシャ、悪人に騙され、全てを奪われた魔女アルシーダ、深く愛した男に捨てられた魔女アマータ、ドジばかり踏む不運の騎士、ラックレス卿。四人は一致団結して泉への道へ繋がる試練を次々と乗り越えていくが、その過程でそれぞれが抱えた悲しみや苦しきは癒されゆき、泉に幸せにしてもらう必要はなくなった。泉の魔法の力を借りるのではなく、自分自身の力で苦難を乗り越えて幸せを掴む、とても前向きなストーリーだ。何かと魔法に頼りがちなマグルの世界のお伽噺とはまた違った趣の話に、イリスは深く感じ入った。

「あなたにはアマータ役をやってほしいの」アンヌはイリスに言った。「私はアシャ役、パトリシアはアルシーダ役。それからナレーシヨン

はジョンよ」

「ジョンはラックレス卿じゃないの？」

——ジョンがやらなければ、ラックレス卿の席は空っぽのまままだ。イリスが思わずそう尋ねると、アンヌは腕組みをして渋い顔つきで考え込んでみせた。

「そこが問題なのよね。うちの寮の連中には軒並み断られたし。．．．ねえ、あんた、ネビル・ロングボトムに声を掛けてみてくれない？あの子なんてラックレス卿役にぴったりだわ。ドジでうだつが上がりないけど、誠実そうだし」

今度はイリスが考え込む番だった。——ネビルだって自分と同じで、目立つのは好きじゃない方だ。果たして彼は了承するだろうか。それにネビルがもし好きなパーティーを誘ってダンスパーティーに参加するつもりなら、断られる可能性が高い。

「うーん。一応言ってみるよ」イリスは自信のなさそうな声で言った。「ありがとう！」アンヌはパンと両手を合わせ、イリスを拝んだ。

「本当に劇に参加して大丈夫なの？たぶん準備や後片付けがあるから、ダンスパーティーは参加できなくなっちゃうかもしれないよ。パーティーは本当にいないの？」とパトリシア。

「うん。大丈夫だよ」

イリスはダンスパーティーに参加できなくなる事が、逆にありがたいと思った。他の女の子と踊っているドラコを見ないで済むなら、たとえ恥ずかしい思いをしても、劇でも何でもやる方がずっとマシなのかもしれない。アンヌは勿体ぶった調子で咳払いをし、新入りのイリスに向けて話し始めた。

「イリス、魔法劇クラブはこれでも百年以上の歴史があるのよ。このクラブが創設されて数年経った頃に、クリスマスの催しに『豊かな幸運の泉』をやるとういうことになったの」

アンヌはこのような話を聴かせてくれた。——魔法劇クラブの顧問であり、当時の「薬草学」の教授だったヘルベルト・ビーリー先生は熱心なアマチュア演出家で、ホグワーツの教職員と生徒達を楽しませるクリスマスの余興として、この劇の開催を決定した。しかし劇の



結果は散々だった。アマータ役の生徒と恋仲だったラックレス卿役の生徒がアシャ役の生徒に心を移してしまい、そのごたごたが劇中に爆発したのだ。結果、彼らが泉に辿り着く事はなかった。物語に登場する白い芋虫は、当時「動物学」の教授だったケルトバーン先生が、アッシュワインダーに“太らせ呪文”をかけて演出していたのだが、幕が上がった瞬間に正体を現し爆発して、大広間を煙と舞台道具の残骸で埋めてしまった。アマータ役とアシャ役の生徒達は突然決闘を始め、その激しい応酬に巻き込まれたビーリー先生は呪いの十字砲火を浴び、大勢の人々が医務室へ担ぎ込まれた。大広間から鼻を突くきな臭い匂いが消えるまで数ヶ月かかったし、ビーリー先生が回復し、ケルトバーン先生が休職処分を解かれるまでにはもつと長い月日がかかった。当時のデイペット校長はそれ以後一切の芝居をご法度にし、今日に至るまでホグワーツ校には演劇なしという誇りある伝統が続いたのだと言う。

「でもそれを今年のクリスマスに解禁してくださいと、ダンブルドア先生が仰つたの！きつと外国のお客様のためでしょうね」

パトリシアは夢見る瞳でそう囁いた。——イリスはどうしてこの二人が、そんな壮絶極まりない事件を過去に引き起こした、呪われた物語『豊かな幸福の泉』の劇をしようと思えるのか信じられなかった。アンヌは真剣な表情で拳を握り締め、熱く語った。

『過去の汚名を払拭し、ホグワーツに再び演劇を』——これはずっと以前から受け継がれてきた、私達のスローガンだったの。私達は数十年、演劇なしの学生生活を耐えて来た。そしてやっとそのチャンスが巡って来た。この劇を成功させる事が、後々の魔法劇クラブの将来に関わって来る。二度と同じ轍は踏まないわ！」

夢に燃えるアンヌ達を見て、イリスは大いなるプレツシャーと共に、やる気が沸々と湧き上がって来るのを感じていた。——ただ“ダンスパーティーに参加したくないから”じゃなくて、この人たちのために心から劇を頑張らなくちゃ。まずはしっかりと台詞を覚えよう。イリスは部屋を出て寮へ帰る道すがら、アンヌが貸してくれた本を開いて『豊かな幸福の泉』を読み耽った。——物語の中で、アマータは過

去の恋人の記憶を川に流し、未練を断ち切って、ラックレス卿という  
“新しい愛”を見つける。“新しい愛”——その言葉が胸のどこか  
に引っかかり、イリスは気もそぞろになつて、肖像画の“太った貴婦  
人”に思いつきりぶつかつてしまった。

「まあ、まあ、まあ！……本に夢中になるのは学生として良い事ですけど  
ね！」貴婦人はご機嫌斜めだ。

「ごめんなさい！エーツト……『ボールダーダッシュ』」

貴婦人は呆れかえりながらも扉を開けてくれた。お礼を言つて穴  
をくぐつて談話室に入ると、ちょうどネビルが軽食を食べようとして  
いる所だった。イリスは彼の隣に腰掛け、屈託のない声で尋ねた。

「ねえ、ネビル。君つてダンスパーティーに出るの？パーティナーは決  
まつた？」

ネビルは持っていたソーセージロールをバラバラと取り落した。  
顔をトマトのように真っ赤に染め、イリスを見ている。

「き、き、決まつて、ないよ」

「じゃあさ」イリスは杖を振つてソーセージロールをネビルの手に戻  
して、言った。

「もし良かったら、私と一緒に劇に出ない？」

「……劇？」

ソーセージロールを握り締めたまま、ネビルはきよとんとしてイリ  
スを見つめた。

☆

クリスマス・ダンスパーティーの噂は、スリザリン寮にも届いていた。  
最もドラコを含めた——“魔法省と関係が深い家族”を持つ生徒は  
予めその事を知っていたという者も多かった。談話室は細長い天井  
の低い地下室で、壁と天井は荒削りの石造りだ。天井から丸い緑が  
かつたランプが鎖で吊るしてある。前方の壮大な彫刻を施した暖炉  
の前で、ドラコは溜息を零しながら『未来視について』と書かれた本  
をぱたんと閉じた。エルサの本には大体、このような旨の事が書き記  
してあった。

『未来視とは“未来の映像を見る能力”である。過去も現在も未来

も、全て一つの道で繋がっている。予言は言葉で、未来視は映像で、その道を表している。予言が“言葉の解釈の仕方”によって未来の多様性を示すように、未来視も幾多の映像で未来の多様性を示す。二つとも根本は同じである。予言や未来視からヒントを得て、諦めずに注意深く行動すれば、必ず望む未来を掴む事ができる』

ドラコは本をポケットに滑り込ませ、溜息を吐いた。イリスの母が未来視の能力を持っている事は分かった。もし彼女も同じように未来視の能力を持っているのだとしたら・・・一体どんな未来を見たら、僕の記憶を消そうと思うんだ？——”多様な可能性”の一つ。先程の本の言葉がふと胸に引かかった。父と僕は“秘密の部屋”に係っていた可能性がある。

まさか”僕が将来、彼女を裏切る未来”を見たのか？ドラコの心臓はみるみるうちに冷たく凍り付いていった。そもそも”秘密の部屋”が開かれた時、僕は彼女の味方だったのか？——それはドラコが無意識の内に、考えるのを拒絶していた事だった。だが、それが一番辻褄が合う考えだ。イリスがマルフォイ家に連れ去られてすぐ僕の記憶は不鮮明になり、“秘密の部屋”が開かれた。その翌年にはイリスを”スリザリンの継承者”だとする本が出回り、彼女はその事に対し『半分は本場で半分は嘘』だと発言した。本当に僕がイリスの味方だったなら、彼女は記憶を消さなかつたはずだ。

黒く濁った不快な匂いのする不安の感情が体中を覆い尽くし、ドラコは居ても立っても居られなくなった。その時、彼に甘くしなだれかかる者がいた。——同級生の女生徒、パンジー・パーキンソンだ。

「ねえ、ドラコ。ダンスパーティーのパートナーには、誰を選ぶの？」  
鼻にかかった甘えたような声だった。栗色の目は魅惑的に潤んで、ドラコをうっとり見つめている。ふわり、と質の良い香水の香りが鼻をくすぐった。普通の男の子なら、とても魅力的に映る筈のその少女を見て、ドラコは思った。

——なんて空虚なんだ、と。彩りが失われた灰色の人生。常に愛想笑いをし、声色や目の色の微かな違いから機微を読み取り、家柄を値踏みし、自分にとって都合の良い地位を確保し続ける。まるで足の着

かない深い海を泳ぎ続けるように、不毛で意味を成さない生活。どれほど頑張っても、後に残るものは何もない。力尽きれば、沈んで終わるだけ。パンジーだって僕を愛しているんじゃない、僕の家柄を愛しているだけだ。

かつて、そんな暗い海を泳ぎ続けるドラコに、救済の手を伸ばした者がいた。あどけない笑顔を浮かべ、彼女はドラコを救い出し、夢の島へ連れて行った。——そこは二人しかいない、花の咲き乱れる素晴らしい場所だった。太陽が燦々と輝き、風は優しく凪ぎ、二人は他愛無い事を疲れ果てるまで話して、明るく笑い合った。ドラコはイリスとの関わりを通して、様々な事を知った。世界は彩りと輝きに満ちているという事、自分の本当の笑い声は思ったよりも大きいという事、様々な感情の揺れはこんなにも激しく心を突き動かすのだという事、そして家柄など関係なく、自分自身を純粋に見つめる目は、とても力強く暖かくて愛おしいものなのだという事を。——けれど、今はもう何も無い。夢の島は永遠に消え去った。

だが消え去ったからこそ、尚更愛おしかった。凍える冬に春の到来を待ち詫びるように、夜の孤独を恐れて日の出を恋しがるように、ただイリスの温もりが欲しかった。ダンスパーティーのパートナーなど、最初から決まっている。ドラコはいつもの気取った立ち振る舞いで彼女に答えるために、口を開いた。

「それはもちろん、父のお眼鏡に叶った相手さ」

それはドラコのさりげない牽制だった。パンジーは気後れし、やがてじりじりとその場から去って行く。——パンジーは別に僕じゃなくたっていいんだ。彼女が今度はノットに色目を使い出すのを横目で見ながら、ドラコは鼻白んだ。だけど僕はイリスじゃなきゃダメなんだ。彼女がいなけりゃ僕は——これから先、この灰色の人生を歩んでいく自信がない。

『「秘密の部屋」に行こう』——ドラコはそう思った。残された手掛かりは、もうこれしかない。危険な目に遭ったって構わない。たとえ死んだって、ここで何もせずじっとしているよりずっとマシだ。ドラコは立ち上がり、かつてロックハートの本で読んだ“秘密の部屋

“の入口——” 嘆きのマートル”の棲む二階の女子トイレへ向かった。

☆

女子トイレに入ると、床は水浸しになっていた。一番奥の個室だけが閉まり、そこから泣き声が出ている。——きつとあの声の主がロックハートの書いていたトイレ憑きのゴースト、“嘆きのマートル”なんでしょう。ドラコはなるべく足音を立てずにトイレの中央の手洗い場まで行った。本に書かれた通り、銅製の蛇口の脇のところ、引っ搔いたような小さな蛇の形が彫つてある。物語の中では、ロックハートは旅の中で後天的に覚えた“蛇語”を話して、入り口を開いた。しかしドラコは蛇語を話す事ができない。

「開け」

ロックハートのセリフをそのまま言ってみたが、蛇口はピクリとも動かない。蛇語ではないからだ。杖を振って蛇を呼び出し、「開け」と言え」と命じたが、蛇はのんきにとぐろを巻くばかりで、ドラコの言う事を聞く素振りすら見せない。——躍起になるドラコは気づかなかった。何時の間にか、背後でしていた泣き声が止んでいる事を。

「ここは女子トイレよ」

「うわああああっ！」

耳元で女の子の陰気な声が出て、ドラコはたまらず大声を上げて飛び上がった。——“嘆きのマートル”がすぐ後ろにいた。彼女は胡散臭そうな目つきでドラコをジロジロ見ていたが、やがて目をキラキラと輝かせ、とても意地悪そうな声でこう言った。

「オオオオウ、あんた、あの時の“みつともない男の子”じゃない！」  
「みつともない」？」ドラコは眉を潜めて訊き返した。

「ちょうど二年前だったかしら？あたしのハリーとそのおまけのノツポが、ここにやって来たの。ここに入り口を開いて、いざ行こうっていう時に、あんたがやって来たのよ！」

マートルは大袈裟な身振り手振りでドラコの当時の物真似をしてみせると、ケラケラ笑った。

「あんたったら真つ青でぶるぶる震えて、あたしのハリーに掴み掛ら

れてギャーギャー泣き喚いていたわ。でも最後はあんたたち、一緒に入り口を降りて行ったけどね」

———どういうことだ？ドラコは愕然とし、二の句が告げないでいた。ポッターとウィーズリーが“秘密の部屋”に行き、自分はそれに同行しようとし、ポッターに攻撃を受けて泣いた。だが、最後は共に行った。つまり、つまり、僕は……。ドラコは自分の立てた残酷な想像を飲み下すのに、多くの時間を必要とした。

僕は“秘密の部屋”に関係していた。イリスはスリザリンの血を引く、本物の“スリザリンの継承者”だ。夏休みに父がイリスに魔法をかけて“秘密の部屋”を開くように命じ、僕はイリスの敵になった。あるいは、傍観していた。だが途中で良心の呵責に耐え切れなくなり、ポッターやウィーズリーと一緒にイリスを助けに行った。———これが、一番辻褃の合う話だ。ドラコは何とか冷静さを取り戻すと、マートルに尋ねた。

「ポッターはどうやって入り口を開けたんだ？」

「知らないわよ。なんだか変な言葉を喋ってた。外国語みたいだね」「どんな感じの？」

ドラコが必死で追い続けると、マートルは頭を捻ってしばらく考え込んだ。その間もドラコは用心深く蛇口を観察し、より近づくために、ポケットの中で嵩張って邪魔をするロックハートとエルサの本を取り出して、蛇口の近くに重ねて置いた。

「そうね。なんだかシューシューって空気の漏れるような、変な言葉だったわ」

やがて思い出したマートルがそう言った時、まさにその通りの“不思議な音”が蛇口付近から聴こえた。次の瞬間、蛇口が眩い光を放ち、回り始めた。手洗い台が動き出して沈み込み、本と一緒にみえる消え去った後に、太いパイプが剥き出しになった。大人一人が滑り込めるほどの大きさだ。二人はしばらくの間、物も言わずに、パイプの中に詰まった暗闇を見つめていた。

「今のは一体、誰だ？君か？」

「私じゃないわ。だってあっちの方でしたでしょ」マートルが蛇口の

あつた方を指差し、言った。

湿った冷たい空気がパイプから漏れ出て、ドラコの頬を不気味に撫でていく。しかし彼は構わず、パイプの中に入り込んでその縁に手を掛けた。不意にマートルがすーっと滑るように接近してきて、不自然に優しい声でこう言った。

「もしこの先であんたが死んだら、あたしと一緒にここに寄り憑いていいわよ」

——どうやらマートルはドラコの事をとても気に入ったようだった。しかし彼は冷たく取り澄ました声でこう応えた。

「残念だが、僕が死んだら取り憑く先はもう決まってる」

そしてドラコは手を離れた。——ちようど果てのない、ヌルヌルした暗い滑り台を急降下していくようだった。あちこちに枝分かれしているパイプが見えたが、自分が下りているものより太いものはない。そのパイプは曲がりくねりながら、下に向かって急勾配で続いている。やがてパイプが平らになり、出口から放り出され、ドスツと湿った音を立てて、暗い石のトンネルの床に落ちた。

「ルーモス・マキシマ、大きな光よ」

ドラコはすぐさま杖に光を点した。自分の声がトンネルの闇に反響した。トンネルは立ち上がるのに十分な高さだ。足元に落ちていた本二冊を回収し、ドラコは迷いのない足取りで歩き出した。足音が湿った床に大きく響いた。——狂気に満ちた暗闇の、得体の知れない恐ろしい場所で、ドラコはたった一人、歩いていた。トンネルは墓場のように静まり返っている。時折、小さな動物の骨を踏み潰しながら彼は進んだ。

次の瞬間、ドラコは静かに足を止めた。——行く手を塞ぐように、何か大きくて曲線を描いたものがある。しかし、彼は不思議と怖くなかった。まるで一度開けたびつくり箱をもう一度開く時のように、奇妙な安心感があった。ドラコは『あれが危険なものではない』と分かっていた。やがて杖明かりが照らしたのは、巨大な蛇の抜け殻だった。毒々しい鮮やかな緑色の皮が、トンネルの床にとぐるを巻いて横たわっている。——やっぱりそうだ。そう思った瞬間、ドラコは気づ

いた。『僕がかつて確かに、ここを通った事がある』と。

——ドラコのイリスに対する凄まじい執念は、彼女の掛けた“忘却術”を少しずつ破り始めていた。彼の思った通り、抜け殻は片方の壁の方に押しやられていて、地面には数人分の足跡がしっかりと残されている。彼はさらに先へ進んだ。

トンネルはくねくねと何度も曲がった。永遠に続くかと思われるトンネルを進んでいく内に、ドラコの体中の神経がキリキリと不快に縮んでいく。——もし今、気が狂ってパニック状態に陥ってしまったら。突然杖が壊れて、光が灯らなくなり、暗闇に閉じ込められてしまったら。自分が今、ここにいる事はマートルしか知らない。僕は間違ひなくここで死ぬ。

しかしそれでもドラコは進む事を止めなかった。そして何度目かも分からない曲がり角を通過したとたん、ついに前方に硬い壁が見えた。——二匹の蛇が絡み合った彫刻が施してあり、蛇の目には輝く大粒のエメラルドが嵌め込んである。ここが“秘密の部屋”の扉だ。彼は再び言った。

「開け」

しかし扉はびくともしない。エメラルドの目が嘲るようにチラチラと輝いている。さつきは開いたのに。ドラコは歯噛みして、そしてある事に気付いた。——あの不思議な声は、蛇口付近から聴こえた。そこには本が置いてあった筈だ。ドラコはポケットから本を取り出し、最初にロックハートの本を調べた。立派な赤い装丁の施された本には、可笑しな所は何もない。続いて、エルサの本を調べた。シンプルな青い装丁の本で、裏返すと——表紙の右端に“銀色の二対の蛇の絵”が書かれている。蛇たちは仲良く交差し、お互いを見つめ合っている。

不意にその絵が、杖の光を受けてキラツと輝きを放った。——その時、あの蛇口付近で聴こえた声の主が何だったのか、そして今から自分は何をすべきなのかという事を、ドラコは理解した。彼はエルサの本を扉に近づけ、蛇の絵が描かれた面をそつと押し当てた。

本の中から低く微かなシューシューという音が聴こえ、壁が二つに



裂け、絡み合っていた蛇が分かれ、両側の壁がスルスルと滑るように見えなくなった。——“秘密の部屋”は再び開かれた。ドラコはごくりと唾を飲み込み、その中へ入って行った。

☆

ドラコは細長く奥へと延びる、薄明りの部屋の端に立っていた。またしても蛇が絡み合う彫刻を施した石の柱が、上へ上へとそびえ、暗闇に吸い込まれて見えない天井を支え、妖しい緑がかつた幽明の中に、黒々とした影を落としている。ドラコは左右一対になった、蛇の柱の間を前進した。一步一步踏み出す足音が、薄暗い壁に反響する。彫り物の蛇の虚ろな眼窩が、自分の姿をずっと追っているような気がした。一度ならず、蛇の目がぎろりと動いたような気がして、ドラコは胃がざわざわと騒ぎ、今にも大声で叫び出したい気持ちを懸命に堪えながら、先を進んだ。

最後の一对の柱のところまで来ると、部屋の天井まで部屋の天井まで届く程高くそびえる石像が、壁を背に立っているのが目に入った。年老いた猿のような顔に、細長い顎鬚が、その魔法使いの流れるような石のローブの裾当たりまで伸び、その下には灰色の巨大な足が二本、滑らかな床を踏みしめている。そしてその前には石造りの祭壇が置かれていた。——ドラコは明かりに照らされたその四角い輪郭を認めた瞬間、我武者羅に走り出した。祭壇の上には小さな女の子が横たわり、静かに眠っている。

「イリス……っ」

しかしドラコが夢中で手を伸ばした瞬間、女の子は霞のようにかき消えてしまった。それは取り戻しかけている記憶が見せた“過去の幻影”だった。——そうだ。あの時、確かにイリスはここにいた。埃の降り積もった祭壇を確かめるように撫でながら、ドラコは唇を噛み締めた。

その時、灯りに照らされて、大きな何かが目に入り、ドラコは横を向いた。——それは巨大な蛇の亡骸だった。さっきのトンネルで見た抜け殻の主に違いない。月日の流れは蛇の亡骸から肉をこそげ取り、白骨へ変えていた。彼が震える足で近づいて良く見ると、蛇の周

辺の柱や壁、床はひび割れ、壊され、ボロボロになっていた。それほどに激しい戦いが、ここであつたのだ。ふとドラコの足が、何かを蹴飛ばした。

それは、かつて母が自分に与えた“破魔の短剣”の残骸だつた。精緻な銀細工が施された柄の部分には、エメラルドが嵌め込まれ、その下にマルフォイ家の家紋が刻印されている。間違いない、自分の守り刀だ。それがどうしてここに？柄から先の刃は碎け、その欠片だけが辛うじて残っている。戸惑うように柄を握り締めた時、激しい頭痛が襲い掛かり、ドラコは耐え切れずにその場でうずくまつた。

——真つ暗闇の中で、ドラコは命懸けで何かを守つた。腹部を貫く激しい痛みと共に、握り締めた柄の先から、熱い何かが噴き出て、自分を濡らすのを感じていた——

——そうだ、僕はここで確かに戦つたんだ。ドラコは蛇の亡骸を見上げて、先程取り戻したばかりの記憶の破片を、心の中でしっかりと噛み締めた。イリスを守るために、僕はこの蛇を殺した。

ドラコは恐る恐る蛇の亡骸へ近づいた。——こんなに巨大な蛇の化け物を、自分は今まで見た事がない。大人三人をまとめて噛み碎けるほど、大きな口だ。おまけに“バジリスク”——直視の魔眼の呪いをもつ蛇でもある。ポッターやウィーズリーと一緒に、僕はこいつからイリスを守つた。なのに何故僕だけが、彼女の世界から弾き出されたんだ？

ドラコはただ静かに、自分の手元へ視線を注いだ。ボロボロになつた“破魔の短剣”が、まるで今の自分の姿のように見えた。——イリスは素直で泣き虫で、繊細な子だ。だがこんな恐ろしい蛇に襲われる程の目に遭い、強力な呪いを抱えるという非業の宿命を背負つてしまった。彼女はそんな事、きつと耐えられない。僕に助けを求めずだ。けれど彼女は僕の記憶を消し、他の誰かを愛する訳でもなく、一人で生きる事を選んだ。

——つまりそんなにも、僕は無力だつたという事か？ドラコの目から熱い涙が溢れ、彼はドサツと床に崩れ落ちた。僕では力不足だと、呪いや宿命を支える力になれないと君は思ったから、記憶を消して僕

を捨てたのか？

その時、視界の端に何かチラついた。無意識にそちらへ目線をやって、ドラコは息を飲んだ。——エルサの本の裏表紙に描かれた“蛇の絵”が、銀色に光っている。彼が急いでにじり寄ると、二対の蛇はするりと別れて銀色のインクへ変わり、あるメッセージを描いた。

——『愛を信じなさい』——

次の瞬間、文字は幻のように消え失せ、蛇は元の絵に戻っていた。しかしその言葉はドラコの心にしっかりと焼き付けられた。“愛を信じなさい”——その言葉を噛み締めたたん、ドラコの心の中に、イリスと過ごした素晴らしい記憶の数々が鮮やかに蘇った。イリスがドラコに優しく触れた瞬間、灰色に淀んだ世界は彩りと輝きに満ち、凍えた身体はポカポカと温まり、悪口や皮肉が染み込んだ水溜りは澄んだ泉へ変わった。——彼女が与えたものは、言葉にできないほど“大切なもの”だった。命を懸けて戦うに足る、尊いものだ。

『僕はイリスと育んだ愛を信じる』——ドラコはそう思い、絶望に呑まれかけた心を取り戻した。冷静に考えろ、イリスがそんな事をする筈がない。もし僕がイリスと同じ立場で、未来視の能力を持っていたとするなら、一体どんな未来を見たら記憶を消そうと思う？僕なら、彼女を守るために記憶を消す。“彼女を守るため”——ドラコはハツと息を飲んだ。

ドラコはやつと真実に辿り着いた。未来視は“多様な可能性”の一つだと、エルサは説いた。恐らくイリスは“最悪な未来”を見たのでは？たとえば僕が死ぬ未来。彼女は僕を守るために記憶を消したのでは？

やがてどこからともなく音楽が聴こえて来た。音楽は徐々に大きくなった。やがてその旋律が高まり、ドラコの胸の中で肋骨を膨らませるほどに感じた時、すぐ傍の柱の頂上から炎が燃え上がった。

——“不死鳥”だ。白鳥程の大きさの真紅の鳥が、ドーム型の天井にその不思議な旋律を響かせながら姿を現した。その旋律は、ドラコの心を不思議な程に勇気づけた。孔雀の羽根のように長い金色の尾羽を輝かせ、不死鳥は彼の肩にずしりと止まった。長く鋭い金色の嘴

に、真つ黒な黒い目が、彼を優しく見つめている。

それはまるで、今ドラコが感じている希望をそのまま形にしたように、美しく輝きに満ちていた。彼は以前にもこの鳥を見た事があるような気がした。そしてこの鳥はまた自分を助けてくれる、彼はそうも思った。

「君に助けられるのはきつと二度目だ、そうだろう？」

ドラコが尋ねると、フォークスは応える代わりに優しく彼の指先を甘噛みした。――“逢いに行こう”。彼は素直にただそう思った。もうこれ以上の答えは、彼女と直接会う以外に見い出せない。僕の人生のパートナーは、彼女しかいないんだ。不死鳥の尾羽を掴み、“秘密の部屋”を脱出する彼の姿を、一人の老人が静かに見守っていた。

## P e t a l l e . 愛のスタンピード

学期最後の週は、日を追って騒がしくなった。クリスマス・ダンスパーティーの噂が学校じゅうを満たし、好き勝手に飛び交い始めたのだ。ダンブルドアがマダム・ロズメルタから蜂蜜酒を八百樽買い込んだとか、魔法界の人気バンド「妖女シスターズ」の出演を予約しただとか——みんな、どんな些細な内容の噂でも一つ一つ丁寧に拾い上げ、熱心に話し合った。しかし悲しい事に、校内の壁にひっそりと貼られた劇の広告に目を留め、噂をする生徒は誰一人いなかった。——ただ一人のスリザリン生を除いて。

イリスは何人かの生徒達に、ダンスパーティーのお誘いを受けるようになった。ボーバトン生を始め、レイブンクローやハツフルパフの生徒達・・・などなど。皆イリスが断ると一様にかっかりした顔をしていたが、それが自分と踊るのが嫌だからではなく、劇に出るためだ——という事を知ると、なんとか気を持ち直していた。——この断り方は本当に素晴らしい、とイリスは思った。誰も傷つかないで済むし、ついでに劇の存在を知ってもらえる。

ある時、イリスが自分を誘いに来たボーバトンの上級生と『「ビードルの物語」に登場する魔女ビバティは本当に“動物もどき”<sup>アニメーガス</sup>なのか?—作中において、彼女はうさぎの状態で会話をしている。しかし“動物もどき”は動物に変身している間、人間の言葉を話せない——』という議題について話し合っていると、ふと後ろから肩を叩かれた。何気なく振り向いて、イリスは目を丸くした。——ビクトール・クラムだ。

「ちよつと、良いかな。二人きりで話したい。・・・席を外してくれないか」

クラムは低く小さいが、妙に迫力のある声音でイリスにそう言うと、隣に突っ立っているボーバトンの上級生をジロリと睨んだ。華奢な雰囲気の上級生は、クラムの野獣のような目に気圧されたのか、お別れの挨拶もそこそこにその場を立ち去って行く。イリスは所在なく立ち竦み、クラムをこわごわと見上げた。『ダームストラングの代

表選手にも気を付けなさい』——以前に“三本の箒”で、シリウスから受けた忠告の言葉が頭の中にこだまする。

イリスは無意識の内に、スネイプに教えられた“警戒態勢”を取っていた。ポケットに手をつまみ振りをして、布越しに杖に触れ、いつでも魔法が放てるようにする。クラムはなるべく人気のない廊下の端へ彼女を連れて来ると、咳払いをし、静かにこう言った。

「君の親友、いるだろ。あの髪がふわふわした、いつも図書室にいる女の子」

「ハーミーの事？」イリスはすぐにピンと来た。クラムの顔が少し赤くなった。

「彼女のダンスパーティーのパートナーはもう決まった？」

イリスはしばらく考えて、首を横に振った。あの「変身術」の授業以降、仲良し三人組からダンスパーティーの話題が出ることはなかった。だが、もしハーマイオニーのパートナーが決まったのなら、彼女はきつと自分に教えてくれるはずだ。クラムは安心したように溜息を零し、イリスに短くお礼を言っ去って行こうとした。

その時、イリスの緑色の目とクラムの黒い目がほんの一瞬、交錯した。『カルカロフは私の知る限り、自分の学校に入学する者に“闇の魔術”を教えてきた』——かつてのシリウスの言葉が、イリスの背中をそつと押す。彼女はクラムの心を“盗み見”した。

——イリスに突出した“開心術”の才能があると見抜いたスネイプは、相手に気付かれないほど微弱で繊細な魔法力を放出し、相手の目から侵入して心の内を走査する魔法を教えていた。上手く行けば相手の心を気づかれずに確認できるし、上手く行かなければ——つまり弾かれてしまえば、それは相手が心を閉じているというサインだから、そのまま“警戒態勢”に入る事ができる。しかし走査の結果、クラムに悪意はなかった。あるのはハーマイオニーを大切に想う、暖かくて甘酸っぱい気持ちだけだ。

「ごめんなさい」

イリスは前かがみになって、玄関ホールを足早に歩き去って行くクラムの後姿を見送りながら、小さな声で謝った。そして三人の親友の

内、一人はパートナーが決まりそうである事に、ホッと安堵の溜息を零したのでった。

☆

クリスマスが近づくとつれ、生徒達の学業への関心は見るからに薄れていった。何人かの先生方は——フリットウィック先生もその一人だったが——生徒が全く上の空なので、しつかり教え込むのは無理だと諦めてしまった。フリットウィック先生は水曜の授業で、生徒にゲームをして遊んで良いと言い、自分はほとんどずっと、対抗試合の“第一の課題”でハリーが使った完璧な“呼び寄せ呪文”について、熱心に彼と話し込んでいた。

しかし他の先生はそこまで甘くなかった。ビンズ先生やムーディ先生、マクゴナガル先生は最後の一秒まできっちり授業を続けたし、スネイプももちろん、クラスで生徒にゲームをして遊ばせるくらいなら、迷う事無く死を選んだだろう。彼は生徒達一人一人を意地の悪い顔で睨み付けながら、学期最後の授業で“解毒剤”のテストをすると言い渡した。

“解毒剤”は非常に難解な魔法薬の一つだ。『この陰湿蝙蝠は、僕らに山ほど勉強させて、楽しいクリスマスを手無しにする気なんだ』——イリスを除いたグリフィンドル生達は皆、一様にそんな事を考えた。彼らの憎悪と殺意に満ちた視線は、スネイプにとって暖かな春の日差しに等しい。素晴らしい日光浴を堪能した彼は、終業のチャイムが鳴った後、イリスを呼び寄せた。

「只今より、補習授業と訓練を無期限の中止とする。すまない、ムーディを抑える事ができなかった」

——イリスはショックの余り、教科書を取り落しそうになった。今までずっと自分を支えてくれていた恩師ともう会えないなんて。まるで暖かな自分の家から放り出されたように、寂しく心細い気持ちになり、彼女はたまらず追いつがった。

「そんな。私、まだたくさん、先生に教えて頂きたいことがあったのに。ムーディ先生にお話しに行きます」

「君は迂闊に動くな。話が余計にこじれるだけだ」

スネイプはさつきまで生徒達に見せていたものとは全く違う、険の取れた、とても穏やかな表情で、イリスにわずかな微笑みを見せた。「それにこれは予期していた事だ。私は君にできうる限りの事を教えた。」

何かあればフクロウ便か守護霊を、緊急事態の時は救援信号を打ち上げなさい。それに授業の終わりには、どんな些細な事だろうと、私に話して構わない」

「はい、セブルス先生」

イリスは元気良くそう返事して、二人は短い間、優しく笑い合った。たとえばムーディ先生がいくら邪魔立てしようとも、二人の絆は固く結ばれたままだった。軽い足取りで地下牢へ続く階段を駆け上がっていく少女の様子を、遠くの方から不気味な青い目が覗いていた。——その目は激しい嫉妬の感情に狂っている。

☆

クリスマスにホグワーツに残る希望者リストは、いまだかつてないほどの大勢の人数が書き込まれる事態となった。四年生以上は、全員が残るようだ。みんなダンスパーティーの事で、頭がいっぱいだった。女子学生は特にそうだった。廊下でクスクス笑ったり、男子学生がそばを通り過ぎるとキヤアキヤア笑い声を上げたり、クリスマスの夜に何を着ていくかを夢中で情報交換していたり……。

しかしそんな事は、“魔法劇クラブ”には一切無縁だった。イリス達は残り少ない日数で、台詞を覚えたり、衣装や小道具を作ったりすることで精一杯だった。幸い、とても複雑で大きな仕掛け——豊かな幸運の泉と、登場人物が登る丘のミニチュア——はダンブルドア先生が演出してくれる事になった。しかし、他にもやる事は山ほどあった。楽観的なアンヌは『このホグワーツ城だって、たった四人の魔法使いが創り上げたのよ。私たちはなんと、五人もいる！』と豪語してみせたが、創設者とイリス達とは如何せん、格が違い過ぎる。

作業は難航を極めた——と言いたいところだが、不思議とトントンの拍子で進んでいく事の方が多かった。奇妙な事に、その日中にできずにやむなく放り出した事が、次の日に部室に戻ると、完璧に出来上



がっているのだ。今朝も、ラックレス卿が装備する甲冑の錆がきれいに取り去られ、まるで新品のように輝いていた。イリスがフィルチに頼んで借り受けたものだが、昨日まではボロボロの錆だらけだった筈なのだ。

「ダンブルドア先生がこっそり手伝つてくださっているのかしら。まるで“靴屋の小人”みたいに」パトリシアが腕組みをして、朝日に煌めく甲冑を見つめた。

「何よ、“靴屋の小人”って。庭小人とどう違う・・・あら！」

アンヌはふとテーブルに視線をやって、絶句した。清潔な白いテーブルクロスが掛けられ、大きな銀の盆にジュースや紅茶のポット、スナックがたっぷり積まれた大皿が載せられている。その皿の横に、小さな虹色の花弁が落ちていて、イリスはそっと拾い上げた。かつて自分が創り出した“魔法の花”に似ている。――“靴屋の小人”はウィンキーかもしれない。イリスは微笑んで、心の中で彼女にお礼を言った。

しかしいくら“靴屋の小人”が付いてくれているとは言っても、現在進行中のネビルのドジを治す事までは出来なかった。彼は甲冑の中で思うように動けず、何度も転ぶので、ストーリーがなかなか先に進まないのだ。

「ちよつとネビル、不運な卿なのよ。<sup>ラックレス</sup>不安定な卿じゃないのよ」アンヌが困り果てて、頭をかいた。

「可笑しいなあ。“転倒防止呪文”を掛けてるんだけど。そんなに転ぶはずなのに」パトリシアも首を傾げた。

しかし、それがネビルだった。それでも何とかストーリーは進んでゆき、区切りの良いところでイリス達は揃ってテーブルに着き、軽食を摂ることにした。――イリスはそれぞれ異なる寮に住む三人から、色んな話を聴いた。彼らが言うには、レイブンクロー寮の談話室は青い内装に星座が施された落ち着いた雰囲気、ハッフルパフ寮の談話室は黄色と黒のインテリアが施された暖かな部屋らしい。そしてハッフルパフの談話室に入るには、入り口近くの樽の山から決められた樽の底を二回叩く必要があると言う。

「ハツフルパフ・リズム」って言うの」

アンヌとパトリシアは、揃ってリズムカルにテーブルの端をトントンと叩きながら、朗らかに笑った。アンヌはにやりと笑いながら、ネビルに言った。

「あんだ、ハツフルパフじゃなくて本当に良かったね。樽やリズムを間違えそうなもの。熱したビネガー塗れになるところだったよ」

ネビルは真っ青になって、開封したばかりの蛙チョコレートを取り落とした。蛙チョコはピョンと跳ねてテーブルを飛び降り、どこかへ去って行った。パトリシアはくすくす笑い、イリスが杖を振ってネビルの手の上に蛙チョコを呼び戻す様子を眺めながら、穏やかな口調で話し始めた。

「でも一番大変なのは、きつとレイブンクローね。だって“謎解き”をしないといけないのよ」

「謎解き？」イリスとネビルの声がハミングした。

「ドアノッカーから毎日違う謎が出されるんだ。それを解かないと、談話室に入る事が出来ない」

すぐさまジョンが優越感に満ちた声で補足してくれた。——なんて大変なんだろう。さすがは知性に富んだ者達が集う寮だ。イリスとネビルは思わずお互いを見つめ合い、舌を巻いた。ジョンは皮肉気に笑いながら、皆にこう言った。

「謎さえ解ければ、他寮の生徒でも談話室に入れる。だがお馬鹿な君達は、永久に無理だろうね」

「なんですって！」アンヌが怒った。

「あんだだっつて、うちの陽気な“ハツフルパフ・リズム”で樽なんて叩けないでしょうよ」

「まあまあ。お二人とも、ご自分に最適な寮に入れたって事で」

二人の痴話げんかを見兼ねたパトリシアが、おっとりとした調子で仲裁に入った。それからパチンと悪戯っぽくウインクして、イリスとネビルにそつと囁いた。

「こう見えても、二人は“恋人同士”なのよ」

「・・・エツ？」

イリスとネビルは目を丸くして、二人を眺めた。ジョンはさつきまでの嫌味たらしい態度はどこへやら、たちまち顔をトマトのように真っ赤に染め、急いで部屋の隅っこへと飛んで行って、背景の色塗り作業を再開した。アンヌは頬杖を突いてその様子を呆れたように見ていたが、口元はかすかに綻んでいた。——社交的で明るいアンヌと、知的で大人しいジョン。まるで光と影のように、正反対のキャラクターを持つカップルだ。

——そう言えば、自分とドラコも正反対な性格だった。イリスはふと過去の記憶を懐かしんだ。良くハリー達には、自分達の仲を反対されていたっけ。魔法劇クラブにはスリザリン生がいない。スリザリン寮の談話室は一体どんな雰囲気なんだろう。合言葉とかはあるのだろうか。結局、訊けず仕舞いだったな。もつと沢山、色んな事を話しておけば良かった。イリスがぼんやりと思いを馳せながら、皿上をうねうねと這い回る、赤いナメクジ・ゼリー（ストロベリー味だ）を口に運んでいると、アンヌが急にこう言った。

「ねえ。あんた、失恋中でしょ」

イリスはナメクジ・ゼリーを喉に詰まらせて、激しく咳き込んだ。——どうして分かったんだ？涙で滲む視界の中で、アンヌが我が意を得たりとばかりに、にんまりと微笑んでいる。だが、こちらをからかっているという素振りはない。

「顔を見たら分かるよ。あー、でもそのままできてね！とっても良い表情してるもの」

アンヌは片目を瞑ると、両手の指でフレームを作り、イリスの顔を嵌め込んでみせた。どうやらこの行動は彼女の癖らしい。アンヌは同情と共感をたっぷりと込めた目で、イリスを見つめて言葉を続けた。

「あんたが今どんなに辛いか、すつごく良く分かる。・・・ハリーを口に盗られて、悲しいわよね」

今度はネビルが、ナメクジ・ゼリーを盛大に吹き出す番だった。どうやらアンヌは、“日刊予言者新聞”でスキータが書いた記事の内容を信じているらしい。イリスが慌ててそれは嘘であると言う前に、ア

ンヌは“百味ビーンズ”の箱をぐそぐそやって、お目当ての味を探しながら言った。

「私も前の恋人に浮気されてさ、立ち直るのに三年かかったの。で、今年ジョンに出会った。そうしたら、今までの辛さが何だったの？って感じよ。」

愛を失った辛い気持ちは、時の流れと新しい出会いが拭い去ってくれるわ。あんたも劇が終わったら、“新しい恋”を見つけなきゃ。アマータみたいだね。……ウワー、最悪。ハウレンソウ味だわ。芽キャベツ味だと思ったのに！」

すぐさまジョンが嬉しそうにやって来て、「ハウレンソウ味も芽キャベツ味も大して変わらない」とからかい、二人は痴話げんかを再開した。その様子を眺めながら、イリスは静かに思った。——決して、アンヌとジョンの愛を否定するつもりはない。確かに“新しい愛”を得られれば、今の寂しい気持ちは消えるだろう。しかし今のイリスには、それはとても空虚なもののように思えた。

目の前でネビルがかぼちゃジュースを飲み干し、空き瓶をゴミ箱に捨て、今度はバタービールの瓶を取った。さつきまで重い甲冑を着て動き回っていたので、よほど喉が渴いているのだろう。イリスは浮かない顔で、ゴミ箱の中の瓶を見つめた。——愛は“瓶詰め”のジュースと同じで、飲み干して空になったら捨てて次の瓶を探し、またなくなったら新しい瓶を探す——その繰り返しなのだろうか。空っぽになった瓶は、もう意味がないものなのだろうか。『与えられなければ、君の愛は終わるのか？』——かつて心の世界でスネイプに言われた言葉が、耳の中で静かに木霊した。

☆

イリスが談話室に戻ると、ロンがいつもの特等席に座り、「爆発スナップ」ゲームのカードを積んで城を作るのに夢中だった。カードの城がいつ何時いっぺんに爆発するか分からないので、マグルのトランプを使うよりずっとスリルがあって面白い。ハリーは彼の愛読書の一つである『キャノンズと飛ばう』を熱心に読み込んでいた。ハーマイオニーの姿は見当たらない。きつと図書室に行っているのだろう。

イリスはハリーの隣に腰掛け、『ビードルの物語』を開いた。

ハリーはイリスをチラツと横目で伺い見て、落ち着かないとばかりに身じろぎした。——彼はあの「変身学」の授業以来ずっと、ダンスパーティーのパートナーをイリスにいつ申し込もうかと、やきもきしていたのだ。なんとか二人きりになれるタイミングを模索していたが、ダンスパーティーの噂が広まってからというもの、自分に声を掛けて来る女生徒がととも増えてしまい、彼はそれどころではなくなってしまった。彼女達をやつと振り切つて戻つてくると、今度はイリスが知らない男子生徒にパートナーのお誘いを受けている。

もうハリーは気が気でなかった。そもそもあの時、マクゴナガル先生が“余計な事”を言わなければ、こんな苦勞をせずに済んだんだ。でもイリスはその事を聞いて、見るからにがっかりしていた。——イリスが“誰に”最も着飾つた姿を見せたいのか、ハリーには嫌でも理解出来た。やっぱり彼女はまだマルフォイを愛している。

だが、それで諦めるハリーではなかった。彼が格好良く気取つた姿を見せたいのは、イリスだけだったからだ。彼女はとても熱心に何かの本を読んでいる。——ダメだ、イリスに申し込むなんてできない。一度意識すると、もうどうすることも出来なかった。心臓が馬鹿みたいに早いスピードで鼓動を打ち始める。でも、やらなければ。僕はイリスとじやなきや、ダメなんだ。ごくりと生唾を飲み込んだハリーを鼓舞するかのように、不意にイリスが良く通る声で本の内容を音読し始めた。

『意気地なし！』ハリーは思わず、本を取り落としそうになった。

『騎士よ、剣を抜くのです。そして私たちが目的の場所に辿り着けるように助けるのです！』

「イリス、静かにしてくれよ。今、良い所なんだから」

ロンは目を細めながらイリスを窺め、最後の二枚のカードを城のてっぺんに置こうとしていた。しかし乙女の一声で、騎士・ハリーの決意は固まった。彼は唇を噛み締め、ゆつくりと本を閉じてポケットにしまい、イリスを呼んだ。彼女はロンのカードの山（今にも爆発しそうだ）をこわごわと見てから、ハリーに真正面から向き合った。ハ

リーは彼女の目を見た時、まるで階段を踏み外したかのように内臓がグラリと揺れた。

「イリス。僕の……」ハリーは乾き切った唇を舐め、今にもくじけそうな言葉を外の世界へ押し出した。

「僕のダンスパーティーのパートナーになってほしい」

ロンとイリスは揃って呆気にとられた顔で、ハリーを見つめた。次の瞬間、全部のカードが爆発し、ロンの眉毛がジユツと焦げた。イリスはやがて申し訳なさそうに眉を下げ、こう言った。

「ごめんなさい。私、劇に出るから、ダンスパーティーには行けないんだ」

「劇？」ハリーとロンの声がハミングした。

「うん。ハツフルパフの人に誘われて、劇に出る事になったの」

ハリーは胃の中に、鉛をたっぷり詰め込まれたような気分になった。——愛情に飢えて育ったハリーは、イリスを心から愛していたが、生まれたばかりの彼の愛はまだ幼く、シリウスによって長い抑圧状態から解放されたばかりという事もあり、自由奔放——いわゆる自分本位な一面も有していた。『劇だって？』——ハリーは鼻白んだ。そんなの、今までホグワーツで聞いたことがない。そんな嘘を吐いてまで、僕と踊りたくないっていうのか？恐ろしいほど大きな嫉妬の影がハリーの背後から覆い被さり、彼の暗い気持ちをグツと外へ押し上げた。

「もしマルフォイが君をパートナーに誘っていたら、それでも劇に出ていたの？」

イリスは凍り付いたように頑なな表情になり、沈黙した。——その反応を見ただけで、答えは明らかだった。どうして僕を見てくれないんだ。あいつよりずっと前から、僕はイリスと出会って愛していた。彼女は僕のものなのに。ハリーの魂の一部に巢食った“邪悪なもの”が、彼の心をますます悪い方向へけしかけていく。

「僕とは踊りたくもないって訳かい？」ハリーは冷たく笑った。

「着飾った姿を見せたくもないって？だから“劇に出る”なんて、そんな下らない嘘を吐くんだろ？」

イリスは突然、親友から心無い言葉を掛けられて、咄嗟に呼吸する事を忘れ、苦痛に喘いだ。——どうしてハリーがこんなことを？ 応援してくれるとばかり思っていたのに。彼女は激しくかぶりを振って、ハリーに言い継った。

「嘘じゃないよ、本当だよ！ 今年のクリスマスに、特別に催されるの」「お、おい……どうしたんだよ？」ロンが眉を触りながら、慌ててこちらへやって来た。

「良いんじゃないか？」ハリーは冷たい声で言い放った。

「そうやっていつまでも、意地を張ってあいつを想っていれば。

言っておくけど、君がどれほど修道女みたいにしていったって、あいつは何とも思わないぞ。君を思い返しもしないし、愛しもしない。君達の愛は、もう終わったんだ。

あいつが新しい家庭を作り、幸せな人生を歩んでいくのを、指をくわえてずっと一人ぼっちで見ている方がいい」

突然、ハリーの頬を熱いものが張った。——ハーマイオニーだった。息を荒げ、怒りの感情に満ちた目がこちらを睨んでいる。彼女の足元には沢山の書物が散らばっていた。

やがて、ハリーの耳にかすかな声が聴こえてきた。「イリスの泣き声」だ。それはハリーの心から、巨大な嫉妬の影と邪悪な魂の囁きを遠ざけた。彼はやつと我に返った。——『一体、僕は何をした？』まるでさつきまで悪霊に取り憑かれていたかのように、自分の言った事が信じられなかった。イリスは弱々しく泣きじやくっていたが、やがてよろよろと立ち上がり、談話室を出て行った。思わず追いかけてきたハリーの手を、ハーマイオニーが掴んだ。

「一つだけ、言わせてほしいんだけど」ハーマイオニーが静かに言った。

「イリスが劇に出るのは本当よ。貴方、少し頭を冷やすべきだよ」

その言葉は、ハリーの心を完膚無きまでに打ちのめした。——嫉妬に駆られ、最も大切な人を傷つけてしまった。彼は自分を「磔の呪文」に掛けたくてたまらなくなった。

☆

談話室を飛び出したイリスは、覚束ない足取りで玄関ホールを出て、中庭を歩いていった。立ち止まったら、さつきハリーに掛けられた言葉に追いつかれてしまいそうな気がして、彼女はただ一心に足を動かし続けた。——その時、後ろから懐かしい鳴き声がして、イリスは急いで振り向いた。

《やあ、イリス。久しぶりだな》

——クルックシャンクスだ。オレンジ色のふわふわした毛が、風に優しくそよいでいる。隣にはフィルチの相棒である灰色の老猫、ミセス・ノリスがいる。どうやら二人はお散歩中らしかった。クルックシャンクスはイリスに向けて、小粋な感じでウインクしてみせた。

《ダンスパーティの相手は見つかったかい？お前は大勢の男に愛を向けられているからな。一番目を引いたのは、あのヘンテコな皮を被った男さ。あの青い目の・・・》

《ちよつと！デリカシーがないわよ。その人をイリスが愛していたら、どうするの？》

厳しい口調でクルックシャンクスを窘めるノリスのお腹は、良く見るとふつくらと丸みを帯びている。——まさか。イリスは大きく息を飲んで、ノリスに尋ねた。

「ねえ、なんだかお腹が大きくなった？もしかして・・・」

《そうよ！》ノリスは堪え切れないように、クスクス笑った。

《本当はね、あなたがあのよく分からない・・・》

《“S P E W”だ。“しもべ妖精福祉振興協会”》淀みのない口調で、クルックシャンクスが補足した。

《《そう、その勧誘に来た時、言いたかったんだけど・・・秘密にしておいたの！》》

《《もうすぐ生まれる。おれたちの子だ》》

クルックシャンクスは、愛おしげにノリスの尻尾に自らの尻尾を絡ませると、イリスを見上げて誇らしげに言った。

《《おれたちは夫婦になったんだ》》

「わあ、本当におめでとうー！」

イリスは明るい歓声を上げた。二匹の猫は溢れるほどの愛に包ま



れ、仲良く寄り添い合っている。——なんだかイリスは、自分がとてもちつぽけな存在のように思えた。二匹の仲睦まじい様子と、ドラコとアステリアの未来の映像が、ふっと重なって見えた。——私だつて、マダム・パディフットのお店で、ドラコと一緒にカップル専用のメニューを見て笑い合いたかった。でもドラコと一緒にいる事は、彼を死に導く未来へ繋がる。

『あんたはそいつに許されない事をした。ロックハートの野郎と変わらねえ。自分勝手な都合で、あんたはそいつの人生を滅茶苦茶にしたんだ』——その時、かつて聖マンゴで聴いた、魔法使いルーの言葉が心の中にこだました。ルーは私がドラコの命を守るために記憶を消したのを、“許されない事だ”と言った。じゃあ、私はドラコが死ぬのを我慢すれば良かったの？そんなの、たどえ自分勝手だと言われたつて、彼を愛していないと言われたつて、絶対に出来ない。

——自分が一緒にいるせいで、ドラコが死ぬのは嫌だった。でもドラコが違う女性と幸せになる事も、嫌だった。

イリスは、心の世界で見た薪を思い出した。火が消えたままの薪を見て、スネイプが言った言葉も。『君が、愛の本質を理解していないからだ』——『薪の一部に火が付かないのは、君がその者から与えられた愛を理解せず、受け入れようとしていないためだ』

私は結局、自分の幸せしか考えていなかったんだ。——イリスは自分の愛の幼さに、やっと気づいた。本当に愛していないから、薪はいつまでも燃えないんだ。

「うわああああん……!!」

イリスは自分が恥ずかしくて、悲しくて、ただやるせなくて、込み上げて来る熱い感情を我慢する事も出来なくて、手放して幼子のように泣き出した。——それから何があったのか、彼女は良く覚えていない。気が付くと、ファイルルの管理人室にある古ぼけた椅子に座っていて、テーブルの上で二匹の猫が心配そうに自分を見つめていた。ファイルルがせかせかとした足取りでやって来て、暖炉の炎で温めたバタービールの瓶と、“ハニーデュークス”印のチョコチップクッキーの缶を乱暴に置いた。

「全く、このクソ忙しい時に・・・！」

《悪かったわね、クソ忙しくさせて!!》

突然、ノリスがまるで猫が変わったように凶暴な顔つきになってイライラと叫んだので、イリスはびつくりして飛び上がった。ファイルチはびくりと体をこわばらせ、引き攣った声で「そんなことはないんだよ、お前」と必死で取り成した。良く見ると、彼の目の下にはくつきりとした隈があったし、顔には小さなひつかき傷が無数にあった。――どうやら妊娠中は、とても気が立つものらしい。クルックシャンクスは前歯で器用に缶の蓋を開け、イリスに食べるようにと勧めてくれた。彼女はクツキーを齧りながら、二匹に全てを話して聴かせた。

「私はドラゴを本当に愛していなかったんだ。だから薪は燃えないんだよ」

しかし二匹の猫はイリスを責めるといふ訳でもなく、ただ不思議そうな目で彼女を見つめるばかりだった。やがてクルックシャンクスが、ノリスとチラツと視線を交し合った後、静かにこう言った。

《なあ。なんで、そんなに難しく考えるんだ?》

――イリスはしんと静まり返った。クルックシャンクスの純粋な言葉は、沢山の人々の言葉や自分自身の想いに惑わされ、混乱している彼女の心を通して、さらにその奥の方へと浸透していく。

《お前は不思議な力で、”自分と一緒にいるせいでドラゴが死んでしまう未来”を見た。だから彼の命を助けるために記憶を消して、今までずっとその事を彼に打ち明けずに、我慢してきた。

それが正しい事だろうが、間違っている事だろうが、お前がドラゴを助けるためにした事に変わりはない。・・・それが愛じゃなくて、一体何だっけ言うんだ?》

《イリス。自分の気持ちを責めたり、否定しないで。大好きな相手に愛してもらえないのは、誰だっけ辛くて当然よ》

ノリスが優しい声でそう言って、ザラザラした舌で彼女の頬に伝う涙を舐め取った。

《もつと自分を受け入れて、褒めて、愛してあげなさい。私たちは皆、あなたのことが大好きよ》

二匹が代わる代わる掛けてくれた、とびきり暖かくて優しい言葉たちは、複雑にこんがらがっていたイリスの頭を、素朴で清らかな状態へ戻してくれた。彼女は咽び泣きながら、二匹をそっと抱き締めた。「ありがとう。二人はまるで、私の“猫の両親”みたい」

《まあ！親にはあなたがなるのよ》ノリスはころころと笑い、イリスの頬に口付けた。

《名付け親を頼むよ。良い名前を考えててくれ》クルツクシャンクスは恥ずかしそうに鳴いた。

《おれの見立てでは、生まれる子供はきつと三匹だ。フィルチのおやっさんとお前、ハーマイオニーに名付けを頼む予定なんだよ》

ジニーは“隠れ穴”で初めてハリーに遭った時から、ずっと彼に夢中だった。いわゆる、“一目惚れ”というものだ。ファンクラブにも入り、今も尚、熱心に活動を続けている。そんなジニーにとって、イリスは友人であると同時に“憧れの存在”でもあった。あのハリーの傍にずっといて、まるで兄妹のように仲睦まじく過ごしている。いつか自分もそんな風になりたいと、憧れの眼差しで彼女はイリスを見つめていた。

しかし、何時の頃からか、その憧れの気持ちに“不純物”が紛れ込むようになった。——黒くて濁った、不快な匂いのする、暗い感情。気が付くと、イリスは“憧れの友人”から“憎つくき恋のライバル”へ変わっていた。イギリスの魔法界の人々にとって、ハリーは彼自身が思っているよりずっと有名で、いわば英雄そのものだ。ジニーがどれほどに恋焦がれても、平凡な女の子である自分とハリーとの距離感は一向に縮まらない。その一方で、イリスはいとも簡単に彼に触れて仲良く笑い合っている。

——ハリーがイリスを愛している事は、グリフィンドール生なら誰

もが知っている事だった。だからハリーがイリスをパートナーに誘うのも、至極当然の事だと言えた。“ダンスパーティーのパートナーに誘う”という事は、間接的な“愛の告白”と同じだ。これで二人が付き合ったら、ジニーはハリーへの想いを終わらせるつもりだった。なのに、イリスは逃げた。“劇に出るのだ”と見え透いた嘘を吐いて。

『馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ』——ジニーは噴気し、血が滲むほど強く唇を噛み締めた。もう我慢の限界だった。WWの商品をこっそり紛らせるだけでは、この鬱憤は晴らせない。“直接対決”だ。——ジニーはイリスが帰ってくるのを、「太った貴婦人」の肖像画の近くで待ち伏せしていた。するとイリスがやってきた。遠目でもはつきりと分かるほどに、涙の痕が滲んでいる。『どうせ、またそれでハリーの同情を買うつもりなんでしょ?』——ジニーは心の中で冷たく嘲笑い、強い口調でイリスに迫った。

「ハリーをダンスホールで一人ぼっちにさせるつもり? 彼に恥をかかせる事が、そんなに楽しいの?」

イリスは突然、ジニーに問い詰められて、しばらくの間、狼狽して立ち竦んでいたが、やがてハリーの心無い発言を思い出し、ムツとした表情で言い返した。

「私が断ったのは、ハリーに恥をかかせるためじゃない。劇に出るためだよ。」

ハリーを一人ぼっちにさせたくないのなら、ジニーが彼を誘えばいい」

その瞬間、ジニーの感情が凄まじい音を立てて大爆発した。我を忘れて、イリスの頬を強く張り飛ばす。

「よくも——よくも——そんなことが言えるわね」ジニーの唇はわなわなと震えていた。

「私がハリーを好きだつて分かっているくせに。私の目の前で彼といちゃいちゃして、見せびらかして、どれだけ私の心を傷つければ気が済むの?」

ここにきて、イリスはジニーの言わんとしている事をやっと理解した。——ジニーは、自分とハリーが愛し合っていると勘違いしている

のだ。イリスは両手を前に出し、慌てて取り成すように言った。

「ジニー。私とハリーはそんな仲じゃないよ。誤解しないで」

「そりゃあ、あなたはそうでしょうよ！」ジニーは涙ながらに叫んだ。「でもハリーはそう思っていないわ。——あなたを愛してる！それなのにあなたは、気まぐれにベタベタして、彼の心を悪戯に弄んでばかり！あなたがそんないい加減な態度だから、私はいまだに彼を諦めることができないの！」

イリスは驚きの余り、二の句が告げなかった。——“ハリーが自分を愛している”だって？そんな事、全くもってあり得ない話だ。確かに仲はとも良いけれど、さつきだって喧嘩をしたばかりなのに。ジニーはイリスのそんな間の抜けた顔を見て、大粒の涙を流しながら嘲笑った。

「ほらね、あなただっていつもそう。……簡単よね？”私、何も知りません”って馬鹿な振りして、時々ポロポロ泣いて悲劇のヒロインぶってれば、ハリーが夢中になってくれるんだから！」

ジニーはただ切なくて、苦しくてたまらなかった。——どうして、私じゃないの。こんなに彼を愛しているのに。どうして彼は、私じゃなくあなたを愛するの？愛らしい鳶色の瞳を、激しい恋慕の感情に曇らせて、ジニーはイリスのローブを掴み、力なく揺さぶった。

「ねえ。お願いだから、私と代わってよ。私……あなたみたいになりたかった！」

しかしイリスはこの期に及んでも、抵抗する訳でもなく、ただ静かに突っ立っているだけだった。——どうせこの後で、ハリーに私が意地悪した事を告発するんだわ。ジニーが絶望にすすり泣いていたその時、頭上からとても静かで低い声が降って来た。

「あなたは悪い魔法使いに操られて、親しい人や動物を傷つけてしまった事がある？」

それは、イリスの声だった。ジニーは戸惑っておずおずと彼女を見上げた。ジニーがイリスの目の奥に虹色の輝きを見出した瞬間、ある映像が薄っすらと垣間見えた。——硝子のように硬く変質してしまったハーマイオニーの頬に触れ、イリスが涙を流している。

「親友に悪意を向けた嘘の本を書かれて、苦しんだ事はある？——」  
「磔の呪文」を何度も掛けられて、心に深い傷を負った事は？——自分の気持ちさえ自由にできない呪いを掛けられて、生きる意志を失った事はある？」

イリスの問い掛ける言葉と共に、映像は次々と切り替わっていった。——ロックハートが書いた本の内容を皆が信じ込み、まるでモンスターを見るような目を向けられて、イリスはどんどん憔悴していく。悪い魔法使い、ピーター・ペティグリューに襲われ、イリスは精神が崩壊する寸前まで拷問を受けた。思春期特有の感情の揺れは、イリスの呪いを発動させて、彼女の命を蝕む結果となった。——それらの凄惨な映像は、ジニーの心に巣食っていた悪い感情を、あつという間に拭い去った。ジニーは今までずっと『イリスが受けた悲劇の全ては嘘なんだ』と高をくくっていた。だが、それらは全部、本当だったんだ。二人は今や言葉もなく、ただ静かに泣いていた。イリスは涙を乱暴に拭い、ジニーに言った。

「ハリーとのこと、あなたを傷つけてしまったこと、心から謝るよ。

でも私だって、悲劇のヒロインになりたくてなってるわけじゃない。ここまで来るのは、決して簡単じゃなかったよ。それでも皆に助けてもらいながら、一生懸命生きてきたんだ。・・・私だって、あなたが羨ましい。あなたになりたいよ」

イリスはジニーの手をそっとローブから外し、「太った貴婦人」の前を通り過ぎて、どこかへ去って行った。ジニーは静かにしゃくり上げながら、自分の行いを反省した。——私は確かにイリスに傷つけられた。でもそれ以上に、私は彼女を傷つけてしまったんだ。

☆

イリスは、寮に戻る気になれなかった。スニジェットに変身し、排水管を通って外の世界へ飛び出し、グリフィンホール寮の塔の屋根に上ると、ぼんやりと座って星空を眺めていた。その時、ふと空を“何か大きなもの”が横切った。それはみるみるうちに近づいて来て、やがてイリスの傍にやって来た。——“ファイアボルト”に跨ったハリーだ。ハリーは気まずそうに頭をかき、箒を横に置いて、彼女の隣

にそつと腰を下ろした。

「ごめん。僕は……君にひどいことを言った」ハリーは心から謝った。

「良いよ」イリスは静かに微笑んだ。

「だって、本当のことだから」

二人の間を沈黙のヴェールが包み込んだ。でもそれは、不思議と安心できるものだった。——イリスにとつて、ハリーは何も言わなくても通じ合える、実の兄のような存在だった。いつもハリーは、私が辛い時や寂しい時に来てくれて、こうして支えになってくれる。きつと彼なら、自分の本当の気持ちを理解してくれるような気がした。やがてイリスは静かに口を開いた。

「ハリー。私のお母さんは“未来の映像”を見ることができたの。私も時々見ることもあるんだ。ドラコの記憶を消したのは、私がいるせいで彼が死んでしまう未来を見たからなの。

ドラコに“忘却術”を掛けた時、私は『たとえドラコが私を忘れても、彼が元気に生きてくれればそれで良い』と思ってた。でも……」  
イリスは唇を舐め、話を続けた。

「今は違う。最近、またドラコに関する未来を見たの。それで、将来彼の妻になるはずの女の子に嫉妬をして、ひどい意地悪をしちゃった」  
ハリーは何も言わなかった。イリスは顔を上げて、星のきらめく夜空をじつと見つめた。——止まっているように見えるけど、空は少しずつ動いて、夜から朝へ変わっていく。『自分が今感じているこの感情を、ダメな事だとなじり、拒絶するのはもうやめよう』——イリスはとても素朴で清らかな気持ちだった。自分もこの空と同じように、少しずつでも動いてこの感情を受け入れていけるだろうか。先に進む事ができるだろうか。

「でも私、少しずつでも前に進んでいかなきゃ。ねえ、ハリー。私は……そうすることができかな」

次の瞬間、イリスはハリーに腕を掴まれて、強く抱き寄せられた。彼の体は火のように熱く燃え盛り、驚いたイリスが身じろぎしてもびくともしないほど、力が強い。ハリーとイリスの同じ色をした目が、交錯する。イリスの大好きな、優しい緑色の目が近づいて来る——

——そして二人は、口付けを交わした。二人の唇が離れた時、ハリーは震えていた。彼はこの行動が、今までの二人の関係性を壊す危険を孕んだものと、痛いほどに理解していたのだ。しかしハリーはそれでも真摯な目でイリスを見つめ、決意と覚悟に満ちた声ではつきりと言った。

「僕が忘れさせる。君を愛している」

ハリーの愛の告白を受け、イリスは余りの事にどうして良いか分からなかった。『新しい恋』を見つけるべきよ——アヌヌの笑顔が、ふつと心に思い浮かんだ。『ハリーはあなたを愛してる！』——ジニーの涙混じりの顔が、それに重なった。空っぽになったジューズの瓶が、ゴミ箱に投げ込まれていく——

——次の瞬間、イリスの脳裏を埋め尽くしたのは、“ドラコとの記憶”だった。彼と過ごした素晴らしい記憶の数々が、時を経て尚、克明に、鮮やかに、イリスの心を彩っていく。まるでついさっきまで、一緒にいたみたいに。

イリスはドラコとの関わりを通して、本当の愛——“自分よりも、人を大切に想う事”を学んだ。ドラコの記憶を消した後、どうして今まで、彼の記憶を戻す事無く我慢できたのか。それだけの力を、彼が与えてくれたからだ。そして今も尚、それは自分の中に生き続けている。

『ドラコ以外の人を、好きになる事なんてできない』——イリスはやっと、スネイプの伝えたかった事、そして薪が燃えなかった理由を、しつかりと理解出来た。——愛は、苦しく辛いものじゃなかった。愛した人が去るのと一緒に消えるのじゃなかった。ずっとここにあって、私を支えてくれていたんだ。夜空に輝く星々は、昼間は見えないだけで、目の前に存在している。私はその事にただ気付いていなかっただけなんだ。

イリスの心の世界で、大きな薪が狂おしいほどに燃え盛り始めた。やがてそれは他の薪を巻き込んで、とても大きな一つの炎になり、今まで以上に彼女の魂をあたため、守っていく。イリスは頬を伝う涙を拭いもせず、ハリーに言った。



「ごめんなさい。私、ハリーの気持ちに応えることはできない。ドラゴを愛してるから」

「もう終わったことだ！」

ハリーは苦しそうに喘ぎ、イリスの肩を掴んだ。

「あいつは二度と君を愛しはしない！君はこれから先ずっと、一人ぼっちで生きるつもりなのか？」

「一人ぼっちじゃないよ」イリスは涙の残る目で穏やかに笑った。

「心の中にドラゴがいる。それを感じるの。ずっと——ずっと大好きだから」

ハリーのただひたむきで幼い愛情は、イリスの深い想いを理解するにはまだ早すぎた。——すぐ目の前にいるのに、どれほど愛しても、イリスは僕を愛してくれない。今の彼の瞳に映るイリスは、何故かとても清らかで神聖なもののように見えた。まるで夜空に輝く星のように、自分の決して手の届かない遠い場所にいるようにも思えた。ハリーは黙ってイリスの頭を優しく撫で、箒と一緒に乗せて談話室まで送り届けると、男子寮へ続く階段を上がって行った。

☆

イリスが女子寮へ続く階段を昇ろうとすると、談話室の奥からジニーが駆け寄って来た。彼女は青ざめた表情に涙を浮かべ、イリスに近づいた。

「ごめんなさい。本当にごめんなさい。ハーマイオニーから全部、聴いたの。あなたの辛さも知らずに私……」

ジニーは一旦言葉を区切ると、イリスに大きな赤い袋を手渡した。——イリスがそつと覗き込んでみると、中にはWWWの商品がぎつしりと詰まっていた。短い時間、どんな魔法を使っても明かりが点かない暗闇を創り出せる「インスタント煙幕」や、地面に置くと独りでに走り出し、爆発して刺激臭をまき散らす「おとり爆弾」……などなど。ジニーはどうやらほとんど全ての品を買い占めたようだった。

「今まであなたに悪戯していたのは、私なの！これ、私に全部使って。皆の前で悪戯して構わないから」

イリスは驚いて、ジニーとバッグを交互に見た。——ジニーに悪戯

をするだつて？そんなこと出来る訳がないし、したくもない。その時、ジニーの目の奥に虹色の輝きが揺らめいて、イリスは思わず目を凝らし、息を飲んだ。その綺麗な鶯色の瞳を透かして、順調に成長を重ねたジニーとハリーが肩を並べて仲良く笑い合っている光景が、薄っすらと確認できる。

「本当に皆の前で悪戯していいの？」イリスは尋ねた。

「どんなことでも？」

ジニーが覚悟を持って大きく頷くと、イリスは杖を一振りして自分のドレスローブの入った袋を呼び出した。もう自分には必要のないものだ。その袋をジニーに渡し、イリスは悪戯っぽく微笑みながら言った。

「じゃあ、私の悪戯はこれ。——『クリスマスダンスパーティーで、ハリーと踊る事』」

ジニーは呆気にとられた顔でイリスを見つめるばかりだったが、彼女は構わずに言葉を続けた。

「もしドレスがないのなら、私ので良ければこれを使って。たぶんサイズはあまり変わらないと思うから」

「どうして？」ジニーは口籠った。

「だってこんなの、悪戯じゃないわ。それにハリーはあなたを……」  
「ハリーには、私がちやんと話すから大丈夫だよ」

イリスは朗らかに笑った。——ハリーとはお互いの想いの行き違いがあつたけれど、そんな事で二人の絆は壊れたりしない。彼女はそう強く信じていた。それに親友達が将来、幸せになれる手伝いを自分が今出来るのなら、そうするべきだとも思った。

「恋ってどんなことで始まるか分からないもの。このダンスパーティーが、その切っ掛けになったら嬉しいな。」

それに、ジニーが謝ることないよ。私の方こそ、本当にごめんなさい。あなたをずっと傷つけてしまっていた」

弱々しく泣きじゃくるジニーの肩に優しく手を置いて、イリスは心からの謝罪の言葉を送った。ジニーがハリーを好きなのは、前から分かっていた事だった。自分がもつと早くにハリーの気持ちに気付い

ていれば、二人をここまで深く傷つけずに済んだかもしれないのに。その一方で、ジニーは袋をギュツと握り締めながら、ただ強くこう思った。——『この人には、決して敵わない』と。

☆

着々とクリスマスは近づいて来ていた。ホグワーツの飾り付けは、今まで見て来た中で一番素晴らしいものとなった。石の階段の手摺りにはきらめく万年氷の氷柱が下がっていたし、十二本のクリスマスツリーがいつものように大広間に並び、飾りはルビーのように美しい輝きを放つヒイラギの実から本物そっくりの金色のフクロウまで、盛り沢山だった。鎧兜には全部魔法が掛けられ、誰かがそばを通るたびにクリスマスキャロルを歌った。ピーブスが鎧に隠れるのが気に入り、自分で作った下品な合いの手を入れるので、フィルチはますます寝不足と不機嫌に拍車がかかった。

あれからハリーはジニーと踊る事を了承してくれたが、イリスとハリーは妙にぎこちなくよそよそしい関係になってしまった。仲が悪くなつたと言うよりも、今までどんな風に仲睦まじく過ごしていたかという事を、二人共すっかり忘れてしまったような気分だったのだ。しかしそんな時、ロンやハーマイオニーだけでなく、ジニーも二人の間に入り込み、上手に仲を取り持ってくれたので、二人は本当に救われる思いだった。

ある日、イリスが部活動を終えて談話室に戻ると、ロンとハーマイオニーが火花を散らして交戦中だった。間を三メートルも空けて立ち、双方真つ赤な表情をして叫び合っている。

「貴方は三年も掛かってお気づきになられたようですけどね。ロン、だからといって他の誰もが、私が女の子だと気づかなかつたわけじゃないわ！」

「だから認めるって言ってるだろ！」ロンがイライラと叫んだ。  
「勿体ぶってないで、僕と一緒に行ってくれよ！もう他に誰もいないんだから！」

「……私は“最後の手段”って訳？」ハーマイオニーが静かに尋ねた。  
「当たり前さ、誰が君となんか！」ロンがそっぽを向き、腕組みをした。

「ハーミー！」

イリスの目の前で、ハーマイオニーが涙を散らして女子寮へ続く階段を駆け上がっていく。イリスは慌てて彼女を追いかけて、自室の扉を控えめにノックしてから、そっと開いた。

——ハーマイオニーはベッドの上に、自分のドレスローブを広げていた。綺麗な薄青色の衣装で、彼女の知的でチャーミングな雰囲気によく似合っている。イリスはそっとハーマイオニーの隣に座って、彼女の肩に手を置いた。ハーマイオニーはかすかに微笑んで、力なく首を横に振った。

「あの人は私の事なんて、どうでもいいんだわ」

「そんなことないよ！」イリスは焦って言った。

「ロンはデリカシーもないし、時々ああやってひどいことを言うけど、ハーミーのことは」大切な親友だ” って思ってるはずだよ」

不意に、ハーマイオニーが悲哀の感情に打ちひしがれたかのように、激しく泣き出した。——まるでイリスがひどい悪口を言って、彼女を傷つけてしまったみたいだ。イリスの手に自分の手を重ねて、ハーマイオニーは切ない声で言った。

「親友じゃダメなの」

——その時、イリスは理解した。『ハーマイオニーはロンを愛しているのだ』と。目の前のサイドテーブル上には、かつてハーマイオニーがロンからもらったエジプト製の香水瓶が置かれ、部屋の明かりに反射してキラキラと輝いている。彼女は空いた手で、そっとドレスを撫でた。

「これ、彼の目と同じ色なの。思わず衝動買いしちゃった。私にしては珍しいでしょ」ハーマイオニーは弱々しく笑った。

「別に彼の事なんてちっとも好きじゃなかったわ。でも何時の間にかこうなってしまった。恋って本当に難しいわね。勉強の方がずっと簡単だわ。シンプルで、確実で……」

ハーマイオニーはそう言うのと杖を振って、ドレスをトランクの中へ戻した。

「私、ピクトール・クラムと踊るの。図書室でSPEWについて勉強し

ている時、誘われたのよ」

イリスはかつて“盗み見”したクラムの心の内を思い出した。――クラムは確かにハーマイオニーを愛している。でもハーマイオニーは、ロンの事を好きなんじゃないのか？

「ハーミーはそれで良いの？」

「育む愛”もあるのよ、イリス」

ハーマイオニーは精一杯強がって見せた。“盗み見”などしなくとも、彼女が嘘を吐いている事は明白だった。

「心配しないで。ダームストラング生だけど、ビクトールは誠実な人よ。私・・・彼からのお誘いをずっと断ってたの。いつかロンが誘ってくれるんじゃないかって、思ってたから。

でも、ダメね。あの人にとって、私は“最後の手段”なのよ。学校中の女の子から断られて、最後にこれで良いかと思うような“残り物”の女の子。皆が最後に鼻を摘まんて食べる、百味ビーンズの“外れ味”。

・・・私、ビクトールのお誘いを受けるわ」

イリスは何と声を掛けて良いのか分からず、ただハーマイオニーを強く抱き締めた。彼女の腕の中で、いつも気が強く聡明であった筈の親友は、まるで年頃の女の子のように泣きじやくり始めた。

☆

クリスマス休暇がやってきた。四年生には休暇中にやるべき宿題がどっさり出されたが、それに打ち込む生徒は少なかった。グリフィンドール塔は、学期中に負けず劣らず混み合っていた。寮生がいつもよりずっと多く、みんなガヤガヤと騒々しいので、むしろ塔が少し縮んだのではないかと思う位だった。

城にも校庭にも、深々と雪が降っていた。ハグリッドの小屋やその隣のポーバトンの馬車は、まるでシュガーパウダーをたっぷり降りかけたクリスマスプディングのようだった。ダームストラングの船窓は氷で曇り、帆やロープは真っ白に霜で覆われている。厨房のしもべ妖精たちはいつにも増して大奮闘し、こつてりした体の暖まるシチューや、ピリツとしたプディングを出してくれた。それらのガツン

とした料理の数々はみんなに好評だったが、ボーバトン校の代表選手、フラー・デラクールだけは文句を言った。

「ホグワーツの食べ物重すぎますわ。私、パーティローブが着られなくなってしまうー!」

「あら、それは悲劇ですこと!」

フラーが美しいシルバーブロンドの髪をなびかせ、玄関ホールの方に出て行くのを見ながら、ハーマイオニーが痛烈に言い放った。

「あの子、全く何様だと思ってるのかしら!」

「ハーマイオニー。君、誰と一緒にパーティイに行くんだい?」

もう何千回と聴いたその質問に、ハリーとイリスは思わず顔を見合わせて、盛大な溜息を零した。——ハーマイオニーと喧嘩をしたあの日以来、ロンはずっとこんな調子だった。彼女が全く予期していない時に訊けば、驚いた拍子に応えるのではないかと思っているのか、ロンは何度も出し抜けにこの質問をした。ロンは自分がレイブンクロー寮の“謎解きドアノッカー”になったと勘違いしているようで、イリスがネビルと劇の台詞の練習をしていようが、ハリーとイリスとジニーが仲良くお喋りをしていようが、全くお構いなしで割って入ってこの謎々を繰り返すので、二人共もうんざりだった。ハーマイオニーだけは表情を一切変えず、いつものようにこう応えた。

「教えないわ。どうせあなた、私をからかうだけだもの」

☆

クリスマスの朝、イリスは目が覚めた。大きく伸びをしながら足元をチラッと見ると、クリスマスプレゼントの山がこんもりとあった。『劇の緊張は一先ず後回しにするとして、先にプレゼントを開封しよう』——彼女はそう決断し、喜び勇んで杖を振っては箱を開封し始めた。——イオからは日本のマグル界で有名なお菓子の詰め合わせ、それから頼んでいたミセス・ノリス用の安産守りが入っていた。ハリーからはイリスが“ハニデュークス”で発見して以来、ずっと欲しがっていた、蛙チョコレートのカードをしまうアルバム。それ以外の人々はほとんど、魔法界のお菓子や食べ物の詰め合わせだった。イリスのフードファイター伝説は、今や彼女の知り合いじゅうに広まっている

らしい。

ふと見慣れない簡素な茶色の包みを見つけて、イリスはそつと拾い上げた。包みを縛る紐の先には小さなメツセージカードがくくりつけられていて、“セブルス・スネイプ”と書いてある。——セブルス先生だ。初めてもらった先生からプレゼントは、リバチウス・ボラージ著の「上級魔法薬」とジグムント・バッジ著の「魔法薬之書」で、全てのページに先生の訂正文が事細かに書き込まれていた。これは言葉に出来ないくらい、とても嬉しいものだった。

それからイリスは、上質な黒いベルベット生地の大箱を発掘した。クリスマスカードが付いている。——マルフォイ家の指輪印章、ナルシツサさんからだ。イリスは急いでカードの内容に目を通した。『メリークリスマス。“あなたがホグワーツで劇に出演するのだ”と、セブルスから聞きました。頑張りなさい。応援しています。良ければこれを着てくれると嬉しいわ。あなたをイメージして作らせたものです』

イリスがそつと箱の中を伺い見ると、なんとそこには——とても見事なドレスローブが一着入っていた。まるで“雪の結晶”に魔法を掛けてきらめく衣装に変えたかのように、繊細で優美な装飾が余すところなく施されていて、寶石や真珠も編み込まれている。そしてその衣装に合う美しい靴やアクセサリー、髪飾りも添えられていた。彼女は急いでトランクの中を引っ掻き回し、ナルシツサにお礼の手紙を送る準備を始めたのだった。

☆

それからイリスはルームメイト達にクリスマスの挨拶をして、いつもの仲良し四人組で集まって、一緒に朝食を摂るために大広間へ向かった。それから四人は、午前中をグリフィンドール塔でゆったり過ごした。塔では誰もがプレゼントを楽しんでいる。昼になると再び大広間に戻り、豪華なランチに舌鼓を打った。少なくとも百羽の七面鳥が各寮の長テーブルにずらりと並び、イリス達の大好きなクリペツジの魔法のクラッカーも山ほど積み上げられていた。

その頃になると、イリスは夜に劇を控えているという事実緊張し

始め、あまり食欲が湧かなくなっていました。——ふと自分の手に暖かみを感じ、彼女は顔を上げた。向かいに座るハリーが微笑んで、手を優しく握ってくれている。

「大丈夫だ。きつと上手く行くよ」

「ありがとう」

——その時、二人は“いつもの二人の関係”にやつと戻れたような気がして、安心したように笑い合った。『そうだ、劇をするくらいのこと、なんてことない』——イリスはそう思い、自分を奮起させ、猛烈な勢いでクリスマス・プディングを食べ始めた。だってハリーはたった一人でドラゴンと戦ったんだもの。彼の勇気を見習わなくちゃ。

大広間を出た後、ハリーとロンは雪合戦をするために校庭に出て、ハーマイオニーは図書室に行き、イリスは最後の劇の打ち合わせをするために部室へ向かった。イリスが台詞を諳んじながら廊下を歩いていると、ロンが息を切らしながら走って来て、彼女の前に立ち塞がって通せんぼをしながら尋ねた。

「一体、誰がハーマイオニーと踊るんだ？」

「もうロンだったら！」イリスは本当にうんざりしながら言った。

「私、劇の練習に行かないといけないのに。時間がないんだよ。それに夜になったら分かることじゃない」

「今、知りたいんだ！」ロンは凄んだ。

「君が本当のことを教えるまで、ここは通さないぞ。．．あいつが他の誰かと踊るなんてありえない。きつと嘘を吐いてるに違いないんだ」

ロンの心無い言葉に、イリスは思わずカツとなって、彼に詰め寄った。

「ロン。これ以上、ハーマーミーを傷つけるつもりなんだたら．．私、許さないよ」

「僕、傷つけるつもりなんかない」

ロンはまるでイリスに平手打ちを喰らったような顔をした。口を開いた時、声が震えていた。

「ただ気になるだけだ」



「なんで？」

イリスが眉を顰めながら問いかけると、燃えるような赤毛との境目が分からなくなる位に、彼の顔は真っ赤に染まった。——いくら鈍感なイリスでも、その様子を見たたん、ロンの気持ちがあつた。彼女は予想を確信に変えるため、静かに尋ねた。

「もしかして、ロンはハーミーのことが好きなの？」

「そんなわけないだろ！誰があんな”本の虫”と！」ロンは精一杯強がつた。

「ロン、正直に言つて。さもないと私、あなたに”真実薬”を飲ませる」

イリスは脅すような口調でそう言うと、ローブのポケットから小さな硝子瓶を取り出して、中に入った透明な液体をチャプチャプと揺らしてみせた。——スネイプは敵から情報を訊き出す場合を想定し、相手の性格に合わせた、的確な尋問方法も教えてくれていた。瓶の中身は”王の草”の成分を蒸留させただけの無害な水だったが、そんな事を知る由もないロンは、見るからに狼狽えた。

「な、なんで言わないといけないのさ。そんなの、君に関係ないだろ！」

「関係あるよ！」イリスは瓶を握り締め、涙ながらに叫んだ。

「今までどれだけ、あなたたちに助けられてきたか。二人共、本当に大切な親友なんだよ。これ以上、仲違いをしたらなんて見たくない！」

しばらくの間、ロンはもじもじとしたまま、動かなかつた。しかし焦れたイリスが瓶をもう一度揺らすと、彼は観念したように溜息を零し、口をほんの少しだけ開いてボソボソ喋つた。

「好きだから何なんだよ！」

——その言葉を聴いた瞬間、イリスはハーマイオニーとの約束を破る覚悟を決めた。瓶をポケットに戻し、イリスはロンに真実を話した。

「ハーミーのパートナーはビクトール・クラムだよ」

「クラムだつて？」

そのとたん、ロンは烈火の如く怒り始めた。ハーマイオニーの罪の重さを十分に表現する言葉を探しているのか、必死で空を見つめ、どこか自分自身にも言い聞かせるように確かな声音で、こう言い始めた。

「あいつは敵とベタベタしてるとってわけだ！シリウスにも”注意しろ”って言われたのに！クラムが本当にハーマイオニーを好きなわけがない。あいつは騙されてるだけさ」

「クラムは、本当にハーミーを愛してるよ。だから勇気を出してダンスに誘ったの」

イリスの容赦ない迎撃の言葉は、ロンの心を完膚無きまでに打ちのめした。まるで雷に撃たれたように、身体を大きくこわばらせた親友に、イリスはさらなる追撃の矢を放った。

「取り返すべきだよ」

「馬鹿言うなよ。そんなこと、できるわけないだろ」ロンは卑屈な声で笑った。

「あいつはクラムと踊るんだ」

「ロンの弱虫！いくじなし！負け犬！」イリスは地団太を踏んで、涙に滲む声でロンを叱った。

「一生に一度しかないハーミーの最も着飾った姿を見ないことが、今、あきらめないで恥ずかしい思いをすることより重要なことだったら、そうしたら良いよ！私だったら、なんだってする。愛を取り戻せるのなら……」

イリスは流れ落ちる涙を乱暴に拭って、ロンを睨み付けた。——二人は、お互いを想い合ってる。ロンが勇気を出せば、簡単に解決する話なんだ。『プライドや恥が、一体何の役に立つって言うんだ？』——イリスはロンが本当に羨ましかった。もし私がロンと同じ立場なら、決闘だってなんだってやってやる。ドラコとの愛を再び得ることができるのなら……。イリスは茫然と立ち尽くすばかりのロンに、最後の一押しをした。

「私の尊敬する人が教えてくれたの。『心の中には愛でできた”魔法の炎”があって、それが自分のすべきことを教えてくれるんだ』っ

て。

一つだけ、ヒントをあげる。ハーミーのドレスの色は、あなたと同じ目の色だよ。……ねえ、ロン。あなたは今、何をすべきなの？」

☆

それからロンは城中を歩き回り、クラムを探した。幸いな事に、クラムはすぐ見つかった。彼はハーマイオニーと一緒に、大広間でクリペツジの魔法のクラッカーに興じていたのだ。二人の仲睦まじい様子を目の当たりにしたロンは、ギユツと唇を噛み締めると、クラムの前に立ち、大きな声でこう迫った。

「僕と決闘しろ。ハーマイオニーを賭けて！」

——クラムとハーマイオニーはポカンとした顔でロンを見上げた。やがてロンの言葉の意味を理解したハーマイオニーの頬は、みるみるうちに真っ赤に染まっていく。クラムは鼻白んだような顔つきでロンを見上げ、冷たくせせら笑った。

「僕は構わないが」ロンの毛羽立ったローブをじろりと一瞥しながら、クラムは言った。

「介添え人は誰がなるんだ？」

“介添え人”の存在をすっかり忘れていたロンは、明らかに狼狽えた。その時、彼の肩を誰かがガツと掴んだ。——ハリーだ。

「僕だ。僕が介添え人だ」

迷いのない声で、ハリーが応えた。すぐに状況を把握したハリーは、親友と共に戦うため、自ら戦地へ赴いたのだ。ロンは感激に打ち震えた目でハリーを見つめたが、ハーマイオニーはカンカンに怒り、二人を責め立てた。

「どうしてそんな恥ずかしい事をするの？嫌がらせのつもり？私はクラムと踊るのよ！」

「そんなの、知るもんか！」すぐさまロンが怒鳴り返した。

「僕が勝ったら、君にもう一回、申し込む。嫌だったら、その時に断れば良いだろー！」

「いやー、実に素晴らしい。若者たちの青春的一幕という訳だ」

子供たちの騒ぎを聞きつけたのだろう、うわっ滑りの良い声をし

て、ダームストラング校の校長、カルカロフがやってきた。カルカロフはクラムの肩を親しげに掴んで、父親のように優しく微笑んでみせたが、その目の奥はちつとも笑っていないかった。氷の欠片のように冷たい瞳が、ロンを通り過ぎて、ハリーを鋭く射抜いた。

「選ばれし」二人目の代表選手が、ドラゴンではなく魔法使い相手にどのような立ち回るのか、とても楽しみだよ」

カルカロフは最初からロンなど見ていなかった。気に喰わない存在であるハリーが、自分が腕によりをかけて育て上げたクラムに打ち負かされる事を期待しているのだ。

「この勝負、私が見届けよう。他の先生方に邪魔をされないよう、私から言い含めておく。

決闘の賞品は、この愛らしいお嬢さんとのダンス権だ。だがそれだけでは、こちら側に利益がない。我々にも”ご褒美”がなくては」

カルカロフの薄い色をした目が、ハリーの隣の空間を射抜いた。――まるでさつきまで、そこに誰かがいたかのように。

「・・・そうだな。もしこちらが勝てば、クリスマス残りの休暇を、城ではなく我が船で過ごすように魔法の誓いを立てて頂こう。イリス・ゴーント嬢にね」

かつてシリウスが放った忠告の言葉が鮮やかに蘇り、ハリーがギユツと拳を握り締めて、カルカロフを睨み付けた。――カルカロフが船の中で、イリスに何をするつもりなのか、そんな悍ましい事は考えたくもなかった。この勝負、絶対に負ける訳にはいかない。ロンやハーマイオニー、クラムまでもが、カルカロフに非難めいた視線を送り付ける。しかし彼は涼しい顔で、自らの船が留め置かれた湖のほとりを”決闘の場”とし、その場を立ち去った。

☆

その日の夕方、ホグワーツ生だけでなく、ダームストラングやポーターバトン生も含めた、大勢の生徒たちが湖のほとりに駆け付けた。カルカロフがクラムと”介添え人”となる生徒を一人従え、悠然と立っている。ハリーは以前にシリウスに教えてもらった”決闘の心得”を、ロンと復習しながら、大きく武者震いをした。そんな彼らの様子を、

ハーマイオニーは憤懣やる方ない顔つきで睨んでいる。

フレッドとジョージは、観客の一人一人に声を掛け、この決闘の勝者についての賭け金を集めていた。悲しい事にみんなクラムに大金を賭け、ロンに運命を託そうとする者は誰一人いなかった。フレッドとジョージは受け取ったコインの一枚一枚に杖を振って本物かどうか確かめてから、帽子の中に放り込んでいる。

やがて定刻となり、カルカロフの審判の下、ロンとクラムの決闘が始まった。二人は揃ってお辞儀をし、杖を構えて体勢を整える。呪文を唱えたのは、ロンよりクラムの方が圧倒的に早かった。

「エクスペリアームス、武器よ去れ！」

クラムの呪文の光線は狙い違わずロンに命中し、杖を弾き飛ばすと共に、彼を数メートルほど吹っ飛ばした。彼は空中を切り揉み回転し、氷の張った湖にダイブした。やがて巨大イカの吸盤のびっしり付いた足が、ぐったりしたロンを掴んで水面からぬっと現れ、彼を岸に下ろして元の場所へ帰っていく。——あつという間の勝負だった。クラムはもう“介添え人”となるハリーを見据えていた。ダームストラングの生徒たちがゲラゲラと笑い、ホグワーツの生徒達はロンの情けない姿に呆れたり、野次を飛ばしたりしている。

ロンは空中で激しく回転した事により軽い脳震盪を起こした後、凍るように冷たい水で心臓を圧迫されたので、意識がひどく虚ろな状態だった。——寒さに震えている自分を、皆が口々に罵り、嘲笑っている声が聴こえる。なんで、こんなバカなことをしてしまったんだろう。ロンはうつ伏せに倒れ伏したまま、口に入った泥混じりの雪を力なく吐き出した。クラムは“ワルのダームストラング生”“ただじゃない、クイディッチのブルガリア・チームの名シーカーで、選りすぐりの優秀な上級生だ。どう頑張ったって、勝てっこないはずなのに。”

——その時、観衆の野次に紛れて、誰かの泣き声が聴こえた。その

声は、くじけそうなロンの心を熱く奮い立たせた。ハリーがカルカロフの合図に従い、勇んで腕まくりをしながら、決闘の場に踊り出ようとした時、観衆がざわざわと騒いで、ある方向を指差した。——ロンが再び立ち上がり、クラムを見据えている。

「ハリー、戻れよ」ロンは氷を割った時に傷ついたのか、片目の上を深く切り、血が流れていた。

「僕はまだ終わってない」

普段、余り感情を表に出さないクラムは、この時ばかりは歯を剥き出して怒りを露わにし、ロンを威嚇した。クラムは杖を振り上げ、ロンに“くらげ足の呪い”と“できものの呪い”、それから“ナメクジの呪い”を続けざまに放った。みるみるうちにロンの顔は、不気味なくらげの足だらけになり、口から大きなナメクジが幾匹も飛び出した。両足はまるでゴムのようにフニャフニャと柔らかくなって、ロンは再び、仰向けに倒れ伏す羽目になった。

自分の吐き出すナメクジで呼吸困難に陥りかけているロンを冷たく見下ろし、クラムは『こんな下らない事、早く終わらせたい』と言わんばかりの顔でハリーを手招きしたが、彼はその場から動こうとせず、ロンをじっと見つめている。

——苦しい。息ができない。気持ち悪い。ロンはナメクジと共に苦痛に喘ぎ、のたうち回った。もうこんなバカなこと、やめよう。そもそも何で僕は、こんなことをする羽目になったんだ？

『だから誰だってあいつには我慢できないっていうんだ。まったく悪夢みたいなやつさ』——ふと、ずっと昔に自分が言った、心無い言葉が蘇った。それを聴いたハーマイオニーは涙を流し、その場を走り去っていく。ロンの胸はズキンと激しく痛んだ。

ハーマイオニーがドラコに侮辱された時、ロンは我を忘れて彼に呪いを掛けようとし、自分の壊れた杖のせいで呪文が逆噴射して苦しむ羽目になった。エジプトのお土産として香水瓶をプレゼントした時、ハーマイオニーは頬を赤らめ、とても華やかに笑ってくれた。

お互いのペットについて喧嘩中だった時、ハーマイオニーがスネイプに詰られて、ロンは自分が罰則を受けるのも厭わずに彼女を守っ

た。感激したハーマイオニーはギュツとハグをしてくれた。彼女は膚の色が白くてマシユマロみたいに柔らかくて、とても良い匂いがした。

『あなたは今、何をすべきなの？』——イリスの言葉が、静かに胸の中でこだました。

「ばだ、ばばっでだび」

クラムは思わず呆気にとられて、振り返った。——大量のナメクジの粘液が喉に詰まっているので、もはや言葉を発する事すら辛そうだったが、ロンはクニヤクニヤの足を器用に折り畳んで立ち上がろうと努力しながら、クラムに鋭い視線を叩きつけた。

——それからは、持久戦だった。クラムはありとあらゆる種類の呪いを掛け、ロンはその度に呻き声を上げて、地面に倒れ伏した。しかしどれほどボロボロになり果てても、ロンはまるで不死鳥のように蘇って、しつこくクラムに追い続ける。

やがてクラムの息が切れて来た。彼は何とも言えない複雑な眼差しで、自らの呪いで創り出してしまったモンスターを見つめた。——今やロンの姿は、成体となった“尻尾爆発スクリユート”が可愛らしいパフスケインに見えてしまうほど、恐ろしく醜悪な外見になっていた。この姿をハグリッドが見たら、“素晴らしく可愛い”と興奮して褒めちぎるに違いない。トロールを彷彿とさせる——ヘドロ色のゴツゴツとした皮膚のひび割れからは、ひどい悪臭のする粘液が流れ出ており、観衆たちはたまらず目を覆い、鼻を摘まんだ。——けれどただ一人、ハーマイオニーだけは、ロン・トロールから目を離す事ができなかった。

——最初は、ただの嫌がらせだと思っていた。しかし実際に目の前で、いくらひどい姿に成り果てても、諦めずにクラムへ向かっていくロンを見た時、ハーマイオニーは“彼は本気なのだ”と思った。だが、もう充分だ。これ以上、愛しい人が傷ついていく様子など、彼女はもう見たくなかった。『どうして、ここまでするの？』——ハーマイオニーは激しくしゃくり上げ、涙で滲む目でロンを見つめた。今まで、私に見向きもしなかつたくせに！

「もういいったら、ロン！」ハーマイオニーが立ち上がり、叫んだ。「何よ、今まで私に見向きもしなかったくせに！悪口ばかり言ってたくせに！今更——今更——何なのよ！」

ロンは黙ったまま、応えなかった。くじけそうになる度に、ハーマイオニーと過ごした素晴らしい思い出の数々が心の底から湧き上がって来て、自分に再び立ち上がる力を与えてくれる。それが何を意味しているか、ロンにはもう分かっていた。ロンは不気味な雄叫び——トロールにそっくりだ——を上げながら、渾身の力でクラムにタックルを決めた。しかしクラムはわずかによろめいただけで、ロンから杖をもぎ取ると渾身の力で殴り飛ばした。

——ロンは、ついに沈黙した。地面にうつ伏せになったまま、ピクリとも動かない。フレッドとジョージが大袈裟に嘆き悲しむ中、ハリーが杖を握り締め、“介添え人”として出て来た。クラムはハリーと相対し、まるで夜更けの湖のように静謐な目で彼を見つめ返す。

ハリーはその眼差しを受け止めたとたん、ハツと思い出した。かつてクイディッチ・ワールドカップの試合後のインタビューで、クラムはこんな風に静かな目をしていた。——この人は自分のやり方で、勝負を終わらせたいんだ。たとえその結果が、“自分の負け”となってしまうっても。ハリーは“武装解除呪文”を唱え、クラムの杖を弾き飛ばした。

「僕の負けだ。勝負は棄権する」

クラムは静かにそう言っ、急いで決戦の場に出ようとす“介添え人”の友人を、目で威嚇して下がらせた。そして腹立ち紛れにロンを蹴っ飛ばして、カルカロフの下へ去って行った。

最初、何が起こったのか、観衆には飲み込めていなかった。しばらくして、ゆつくりと、ホグワーツ列車が回転速度を上げていくように、ざわめきが大きくなり、やがて歓喜の叫びとなつて爆発した。——ロロンが、いやハリーが勝ったのだ。

「何するの！貴方って、最低だわ！」

ハーマイオニーがロンに縋り付き、懸命に介抱しながらクラムに怒鳴った。しかし、ハリーは決してそうは思わなかった。——クラムは



とても勇敢で思いきりが良く、男らしい人だ。カルカロフにお叱りを受けている最中のクラムの顔は、どこか吹っ切れたように見えた。フレッドとジョージが帽子いっぱい詰まったコインを抱き締め、咽び泣きをしている横を通りすぎて、二人は魔法で創り出した担架にロンを乗せ、医務室へ連れて行った。

☆

ロンに掛けられた呪いは余りに多く複雑だったため、彼は残りのクリスマス休暇を医務室で過ごす事となった。三人揃ってたつぷりとマダム・ポンフリーに絞られた後、ハリーは二人に気を遣って、そつと席を外した。ロンは苦い魔法薬を何杯も飲まされた結果、まともに喋る事だけではできるようになった。ただそれ以外は——特に外見は、見るも悍ましいトロールのままだ。彼は浮足立った気持ちで、心配そうに自分を見つめるハーマイオニーにこう言った。

「ハーマイオニー。今晚、僕と踊ってくれるだろ?」

「貴方って、ホントに馬鹿!」ハーマイオニーは目をグルリと回し、痛烈に言い放った。

「今、ダンスホールに行ったりしたら、皆トロールが出た!」ってパニックになっちゃうわ。

言っておきますけどね、ロン。ダンスパーティーには出れません。休暇中はずつとここで入院するんです!」

その余りに残酷な結末に、ロンは大いに打ちひしがれ、言葉もなくうな垂れた。——自分と同じ目の色のドレスを着て、おめかししたハーマイオニーの姿を見たかったのに。シリウスが「ハリーと揃いのブランドで」と買ってくれた新品のローブもお蔵入りとなつてしまった。しかしハーマイオニーの方は、不思議な事に少しもがっかりした様子を見せていなかった。

「ダンスなんてどうだっていいの。どうだっていいのよ」

ハーマイオニーは早口でそう囁くと、鱗のように硬く変質したロンの頬っぺにキスした。たちまち彼女の顔はトマトのように真っ赤に染まり、肩を怒らせてやって来るマダム・ポンフリーの脇をすり抜けて、医務室を出て行った。——ロンは呪いが掛けられた事を、この時

だけは心から感謝した。仮初めの皮膚の下に隠された、本物の頬が真っ赤になっっている事を、ハイマイオニーに気取られずに済んだからだ。

## P e t a l l 2 . 豊かな幸運の泉

七時になると、グリフィンドールの談話室はいつもの黒いローブの群れではなく、色とりどりのローブやドレスで溢れ返り、いつもとはまるで様子が違っていた。ハリーは自室でローブに着替え、部屋の隅の姿見で身形みなりを整えた。ルームメイトのシエーマスは同学年一番の美女——パーバティ・パチルと踊るのだと嬉しそうに言って、ハリーがうんざりするほどに、何度も自分の服装チエックを頼んできた。しかしハリーはそんな浮かれた気分にはなれそうもなかった。『もしイリスがパートナーだったら』——彼はシエーマスの本日五回目となる“このローブの色、変じやないか？”を聞き流しながら思った。もしそうだったら、自分も彼のようにうきうきした心持ちで何度も鏡で髪型をチエックしたり、ローブの色について思い悩んだりしたのだろうか。

シエーマスと一緒に寮の階段を降りると、燃えるような赤毛のとても可愛い女の子が、少し緊張気味にハリーに向かって手を振った。ハリーは目を丸くして、シエーマスは口をあんぐり開けた。——ジニーだ。濃紺色のドレスローブが良く似合っていて、長い髪を優雅なシニヨンに結び上げている。シンプルなデザインのアクセサリを身に付けた彼女は、ぐっと大人びて洗練されて見えた。

「ジニー。素敵だよ」

「ありがとう」

ハリーがぎこちなく褒めると、ジニーは頬に散った健康的なそばかすが見えなくなるくらい、顔を真っ赤にして俯いた。肖像画の穴から出る時、フレッドがジニーをギョツとした目付きで見た後、「素敵だぞ、“蛙の新漬け”ちゃん！」と思いつきりからかった。フレッドはその後、彼女に渾身のキックを喰らった挙句、パートナーのアンジェリーナからひんしゆく響ひんしゆく感をかう羽目になった。

玄関ホールも人でごった返していた。大広間のドアが開放される八時を待って、みんなウロウロと落ち着かない様子で佇んでいる。自分と違う寮のパートナーと組む生徒はお互いを探して、人混みの中を

縫うようにして歩いていた。

中庭を真っ直ぐに突っ切り、代表選手のフラワーを先頭にして、ポーター生の一団が入って来た。シルバークレーのサテンのパーティローブを着たフラワーは輝くばかりに美しく、レイブクロウのクイデッチ・キャプテン、ロジャー・デイビスを従えている。男子生徒達はみんな食い入るような眼差しでフラワーを見た後、ポーターに静かな鉄拳を喰らっていた。

スリザリンの一群が地下牢の寮の談話室から階段を上がって現れた。監督生を先頭に、続いてハリーの同級生であるブレイズ・ザビニが現れた。ザビニはマルフォイと一緒にハリー達をからかってくる、嫌な取り巻きの一人だ。パンジー・パーキンソンがフリルだらけの淡いピンクのパーティドレスを着て、ザビニの腕にしがみついている。クラブとゴイルは二人共グリーンのローブで、苔むした大岩のようだった。二人ぼちちでいるところからすると、どうやらポーターは見つからなかったらしい。

『マルフォイはどこだ?』——ハリーは目を凝らしたが、彼はどこにもいない。もしあいつが女の子と一緒にいたら、イリスがどんなに悲しむか。ハリーは油断なく周囲を見渡しながら、ローブ越しに杖を触った。もしあいつがポーターを連れていたら——イリスの目に付く前に、僕が呪いで吹っ飛ばしてやる。

やがて正面玄関の櫛の扉が開いた。ダームストラングの生徒が、カルカロフ校長と一緒に入ってくるのを、みんなが振り返って興味深げに眺めた。一行の先頭はクラムで、連れている女の子は——なんと、グリフィンドールの同級生、エロイーズ・ミジョンだ。少し曲がった鼻ですぐに分かった。エロイーズの顔のにきびは、以前に目にした時よりずっと良くなっていて、ふんわりした布地のオレンジ色のローブを身に纏っている。クラムはハリーに小さく黙礼すると、エロイーズの腕を優しく引き寄せた。たちまち彼女は真っ赤になって俯いた。ジニーはあからさまに信じられないという目で、彼女を見つめている。クラムをつけ回していたファンの女生徒達は、エロイーズを恨みがましい目で見ながら、ツンツンして前を通り過ぎた。

一行の頭越しに、外の芝生がハリーの目に入った。城のすぐ前の芝生が大きく盛り上がり、草花で出来た巨大な洞窟のようになっていて、中に神秘的な妖精の光が満ちていた。何百という生きた妖精が魔法で作られた薔薇の園に座ったり、石像の上をヒラヒラ飛び回ったりしている。ジニーが感嘆の溜め息を零して、ハリーの腕をギュツと掴んだ。

マクゴナガル先生の指示で、ハリー達代表選手一行は、他の生徒達が全員着席するまで待つてから入場することになった。大広間の扉が開くと、ハリー達は先生の後に従って大広間へ入った。みんなが拍手で迎えた。代表選手達は、大広間の一番奥に置かれた、審査員が座っている大きな丸テーブルに向かって歩いた。大広間の壁はキラキラと輝く雪で覆われ、星の瞬く黒い天井の下には、何百というヤドリギや蔦の花綱が絡んでいる。各寮のテーブルはなく、代わりにランタンの仄かな灯りに照らされて、十人分の椅子が並べられた、小さなテーブルが百余り置かれていた。

代表選手達が審査員テーブルに近づくと、ダンブルドアは嬉しそうに微笑んだが、カルカロフはハリーを憎々しげに睨み付けた。——恐らく、先程の決闘事件を根に持っているのだろう。マダム・マクシムはラベンダー色の流れるような絹のガウンを纏い、上品に拍手していた。ルードは今夜は鮮やかな紫に大きな黄色の星を散らしたローブを着込み、生徒達と一緒に夢中になって拍手をしている。

——クラウチ氏は、いない。代わりにパーシーが座り、ジニーをギョツとした目付きで見ている。彼は急いで自分の隣の椅子を引くと、ハリーに向けてわざとらしいほどに激しく目配せしてみせた。ジニーがとても嫌がってハリーの手を強く引っ張ったが、あまりにもパーシーの目の圧が強いので、彼はしぶしぶその席に座ることにした。パーシーは真新しい新緑色のパーティーローブを着て、鼻高々の様子だ。

「昇進したんだ」

ハリーに訊く間も与えず、パーシーが言った。その声の調子は、まるで魔法省大臣に選ばれたと発表しているかのようだった。

「クラウチ氏個人の補佐官だ。ここには代理で来たのさ」

「あの人、どうして来ないの？」

「クラウチ氏は、残念ながら体調が良くないんだ。きつと働き過ぎだろう。この三校対抗試合の準備や進行の業務もあるし、ワールドカップのボヤはまだ消えてない。それにスキーターとかいう、嫌な女がこつちをうるさく嗅ぎまわってる。

・・・ところで、少し訊きたいんだが」パーシーは不意に勿体ぶつて咳払いをし、ハリーとジニーを見た。詮索好きなスキーター女史そつくりの目の輝きだ。

「君達はそういう関係なのか？ 僕は何も・・・」

「ポークチョップ！」

パーシーの言葉を遮るように、ジニーが突然叫んだ。二人が思わず啞然としてジニーを見ると、彼女の目の前に置かれた金色の皿に、ポークチョップが現れた。ジニーの手には小さなメニュー表があった。どうやらそれに記載された料理名を口にする、自分の皿に現れるという仕組みになっているらしい。彼女はまるで親の敵を見るような目でポークチョップを睨み付け、猛然と食べ始めた。——それはパーシーに向けて放たれた、『これ以上、余計な詮索はするな』という、ジニーの無言の警告だった。

パーシーはさつと口を噤んで、ハリーにお得意の鍋底談義を始めた。それを聞き流しながら、彼はジニーの気遣いに心から感謝した。今はそつとしておいてほしい気分だし、それにこの新しい、より複雑な食事の仕方を、SPEW会長たるハーマイオニーが目撃しなくて本当に良かったと思った。彼女は今頃、マダム・ポンフリーに特別に許可をもらい、医務室でロンとささやかなクリスマスパーティーを開いている筈だ。

——もしイリスがここにいたら。ハリーは切ない思いを馳せ、丁寧に裏ごしされたポタージュを飲んだ。彼女は一体、どんな反応をしただろう。全てのメニューを注文しようと言って、自分に屈託なく笑いかけてくれただろうか。ハリーの胸はきゅんと痛んだ。

☆

食事をあらかた食べ尽くしてしまうと、ダンブルドアが鷹揚な動作で立ち上がり、生徒達にもそうするように促した。そして杖を一振りすると、テーブルは壁際に退き、広いスペースができた。それからダンブルドアは右手の壁に沿って広々としたステージを創り上げた。ドラム一式、ギター数本、リユート、チェロ、バグパイプなどの様々な楽器が、ポンポンと音を立てて空中に現れては、ステージ上の然るべき場所へ飛んでいく。このステージで何が始まるのかという事を察し始めた生徒達は、ざわざわと興奮して色めき立った。

やがて人々の騒めきは、熱狂的な歓声と拍手に変わった。魔法界人気のみュージックバンド「妖女シスターズ」が、どやどやとステージに上がって来たからだ。全員異常に毛深く、来ている黒いローブは芸術的に破いたり、引き裂いたりしてあった。ジニーが興奮してテーブルの下で足を踏み鳴らし、ハリーの腕を痛いほどに強く掴んだ。——どうやら魔法族の子供たちにとってはとても人気なバンドらしい。テーブルのランタンが一斉に消えると、ダンブルドアの合図に従い、代表選手達がパートナーと一緒に、ダンスフロアへ進み始めた。

「妖女シスターズ」はスローな物悲しい曲を奏で始めた。——今の自分の気持ちを演奏しているみたいだ、とハリーは思った。まるでダンスをするためだけに作られたロボットののように、ハリーはただ淡々とした調子でダンスフロアに歩み出ると、ジニーの両手を掴み、片方の手を自分の腰に添えさせた。マクゴナガル先生が「変身学」の授業で少し空き時間を作り、生徒達に踊り方をレクチャーしてきてくれたので、彼のリードは比較的スムーズだった。ハリーがゆつくりとターンした時、観客の中に紛れてシエーマスとティーンが手を振り、『浮気か?』『イリスは?』と口パクでからかってくるのが見えた。——僕だって、イリスと踊りたかった。ハリーはやるせなくなつて唇を噛み締め、ジニーをちらりと見て、ハッと息を飲んだ。

ジニーは顔を真っ赤にして、こちらを見つめていた。潤んだ鳶色の目はフロアの灯りに照らされて、キラキラと輝いている。——ハリーは心の中でジニーに小さく謝った。自分の事しか考えていなかった。今、イリスの事を想うのは、パートナーであるジニーに対して余りに

も失礼だ。彼は静かに自分を恥じ、ダンスを続けた。

まもなく、観客の方も大勢ダンスフロアに出て来たので、代表選手はもう注目の的ではなくなった。ダンブルドアはマダム・マクシームと優雅なワルツを踊っていた。まるで大人と子供で、ダンブルドアの三角帽子の先がやつとマダム・マクシームの顎をくすぐる程度だった。やがて「妖女シスターズ」が演奏を終え、大広間は再び拍手に包まれた。

ダンブルドアがマダム・マクシームの手を離し、二人は優雅に一礼した。続いてダンブルドアが杖を大きく振るうと、「妖女シスターズ」がいたステージがぐつと肥大し、台座が高くなり、天井からヤドリギや花蔦の絡まった黒いビロードの幕が下りて来て、ステージの前方をすっぽりと覆った。その周りを取り囲むように観客席が創られたが、ダンスで疲れた足を休めるためとか、ただお喋りをするために座る者がほとんどだった。しかしハリーとジニーはこのステージで何が始まるのか分かっていった。——いよいよ「イリスの劇」が行われるのだ。二人は目配せをして、審査員達と同じ、一番前の席に陣取った。

☆

ステージの奥には、魔法で隠された楽屋が設えてあった。イリス達はそこで待機し、最後の打ち合わせや、メイクや小物の手直しに精を出していた。——イリスが急遽持ち込んだ“ナルシツサの衣装”は本当にすごかった。ドレスローブは羽織ったとたん、勝手に動き始め、彼女にとって最適な着こなしになるように、袖の長さやドレーブのかかり具合などを微調整してくれた。冠形の髪飾りは頭に載せるだけで、彼女の黒髪に緩やかなウェーブを掛けてくれた。パトリシアは最後の仕上げとして、彼女の顔に薄く化粧をするだけで良かった。

「すっごい。まるでシンデレラみたい」

「すっごい。まるでアマータみたい」

見事なアマータ役となったイリスを見たたん、パトリシアとアンヌの声はハミングした。いよいよ開幕の時間が近づき、楽屋の外では人々の騒めく声が聴こえ始める。準備を終えたイリス達はそれぞれ緊張した面持ちで舞台袖に立ち、ブザーが鳴るのを待っていた。





り出された空には小さな太陽が浮かんで、燦々とした日差しを地上に注いでいた。小鳥のさえずりと心地良い風が、ハリー達の耳と肌を樂しませる。舞台の中央には白い漆喰で出来た厚い壁があり、その向こうにはこんもりと盛り上がった小さな丘があった。頂上には、美しい水晶で出来た『豊かな幸運の泉』が清らかな水を噴き上げている。『魔法の園の丘の上、高い壁に囲まれ、強い魔法に守られて、“豊かな幸運の泉”が噴き上げていました』落ち着いた男性のナレーションが始まった。

『一年にたった一度、一番長い日の夜明けから日没までの間に、不幸な者が一人だけその噴水に辿り着く機会を与えられ、その水を浴びて永遠に豊かな幸福を得ることができなのです』

幕が一度下り、再び上がった時、魔法の空は夜明け前へと変わっていた。舞台袖からぞろぞろと大勢の人々——を模した、藁作りの人形——が歩いて来た。老若男女、富める者も貧しい者も、魔法族もマグルも、自分こそが壁を乗り越え、水を浴びる者でありますようにと願いながら、壁の前へ集まっていく。

そんな人形たちの最後尾に連なるようにして、三人の魔女がスポットライトに照らされながら現れた。彼女達は舞台の端にある草むらに座り込んで、悲しい顔を突き合わせ、何かを話している。——今まで何の興味もなく、反対側の壁に沿って出されていた立食式のご馳走や、お喋りに夢中だった生徒たちは、ちらりと冷やかすような目で劇のヒロイン達を見るなり、ざわざわと騒ぎ出した。その声はまるでさざ波のように広がり、見る間に大広間中の人々の目が舞台上に釘づけとなった。

三人の魔女の中に、飛び抜けて美しい少女がいた。夕星（金星）——“宵の明星”に魔法を掛けて人の姿にしたら、きつとこのようになるのに違いない。緩やかに波打った黒髪には、小さな宝石を編み込んだ白銀の冠物が載せられている。華奢な衣装から覗く膚は白く滑らかで、内側から光を放っているようだった。大きな瞳には隠し切れない憂いの感情が浮かんでいて、まるで夕暮れ時のように、見る者を感傷的で切ない気持ちにさせた。少女はハリーとジニーの視線に気づ

くと、安心したように微笑んで手を振った。

——イリスだった。二人はヴィーラに魅了されたかのように、手を振り返す事も忘れ、夢中で彼女を見つめ返した。やがてイリスはその様子を見咎めた隣の魔女にこづかれ、慌てて演技に戻っていった。

『それぞれに重い苦しみを抱えた三人の魔女が、その群れの端で出会いました。そして夜明けを待ちながら、お互いの悲しみを語り合いました』

ナレーションが終わると、三人の内、一番左側に座る魔女にスポットライトが当たった。彼女は立ち上がると、両手を口に当てて、大きな動作でゴホゴホと咳き込んだ。やがて咳は止まったが、広げた両の掌には魔法で赤く光らせた血糊がべつとりと付いている。彼女はそれを見て、力なく首を横に振った。

『最初の魔女はアシャと言い、どんな癒者にも治せない病気に罹っていました。泉がその症状を拭い去り、末永く幸せな命を与えてくれますようにと願っていました』

今度は真ん中の魔女が立ち上がった。良く見ると彼女のローブはボロボロに擦り切れ、おまけに丸腰——つまり杖を持っていなかった。彼女はポケットから財布を取り出して振ったが、クヌート銅貨一枚足りとも出てこない。魔女は大きな溜息を吐いて見せた。

『二番目の魔女はアルシーダと言い、悪い魔法使いに富も杖も奪われてしまいました。無力で貧しい自分を、泉が救ってくれますようにと願っていました』

最後は一番右側の魔女——イリスが立ち上がった。彼女は胸の辺りで両手を交差して、静かに俯いた。顔の下から、魔法で白く光らせた大粒の涙がいくつも零れ落ちていく。

『三番目の魔女はアマータと言い、深く愛した男に捨てられたのです。アマータは、この心の傷が癒えることはないだろうと思っていました。この悲しみとやるせなさを、泉が癒してくれるようにと願っていました』

三人の魔女はお互いの苦しみを分かち合い、もしも自分達の中の誰かに機会が与えられたなら、力を合わせて一緒に泉へ辿り着こうと誓

い合った。

やがて魔法の空に夜明けが訪れると、中央の白い壁がわずかに開き始めた。人形たちは口々に願い事を叫びながら、どつと押し寄せた。すると壁の向こうの庭からツタが現れ、揉み合う人形たちの中をくねくねと伸びて、一番目の魔女、アシヤの腕に絡みついた。アシヤはアルシーダの手首を掴み、アルシーダはアマータのローブを掴んだ。アマータは、人形の群れにひっそりと紛れていた甲冑の騎士に、服のどこかを引っかけてしまった。ツタは三人の魔女を、開いたわずかな壁の隙間に引っ張り込み、騎士も引き摺られながらその後続いた。舞台は暗転した。

舞台に再び光が戻った時、中央にあった壁や泉、人形の群れは消え去り、大きく膨らんだ丘のふもとに三人の魔女と騎士が立っていた。アシヤとアルシーダは、うっかり騎士を連れて来てしまったアマータに腹を立てた。

『泉の水を浴びることができるのは、たった一人なのよ！』アシヤが咳き込みながらも憤った。

『三人の内、誰にするかを決めるのさえ難しいのに、もう一人なんて！』

古びた甲冑に身を包んだ騎士の頭上に、“ラックレス卿”という金色の文字が輝いた。ラックレス卿は三人の魔女の諍いを止めようとして転びそうになりながら——その冴えない足取りで、ハリーはラックレス卿の正体がネビルだと分かった——自分は身を引き、壁の外に戻るともりだと宣言した。彼はマグルであるため魔法も使えず、騎士として馬上試合や剣での決闘に優れているわけでもない。秀でた点の何もない自分には、三人の魔女を打ち負かして泉に辿り着く望みなど全くないと思ったのだ。しかしそれを聞いて、今度はアマータが腹を立てた。

『いくじなし！』アマータは騎士を叱りつけた。

『騎士よ、剣を抜くのです。そして私たちが目的の場所に辿り着けるように助けるのです！』

そして三人の魔女としよぼくれた騎士は、魔法の丘を突き進んで

いった。「妖女シスターズ」は即興で、冒険心をくすぐるような素晴らしいバックミュージックを演奏してくれた。燦々と陽光が降り注ぐ小道の両側には、珍しい草花や果物が豊かに茂っている。四人は順調に歩を進め、泉の噴き上げている丘の中腹に辿り着いた。

ところがそこには、膨れ上がった真つ白な盲目の芋虫が丸まっている。——観客席ではビリー先生が大きく息を飲み、杖をひしと掴んで臨戦態勢に入っている。きつと過去のトラウマを思い出しているのに違いない。

実はこの芋虫は——かつて悲惨な爆発事故を引き起こした——アッシュワインダーではなく、イリスがハグリッドから借り受けて「肥大呪文」を掛けた<sup>フロバークラム</sup>「レタス喰い虫」だった。四人は恐る恐る、芋虫に近づいた。イリスがネビルの影に隠れて「レタスだよ！」と囁くと、芋虫はそつと顔を上げ、彼女をじつと見つめた。

『苦しみの証を支払っていけ』おどろおどろしい声で、ジョンが言った。

ラックレス卿は剣を抜いて芋虫を殺そうとしたが、刃は空中でポキリと折れてしまった。アルシーダは石を投げ付け、アシャとアマータはあらゆる呪文を使って芋虫を抑えたり陶然とさせようとしたが、芋虫の周りには強力な防護魔法が展開されていて、小石一つ、呪文一つ通す事ができない。太陽はますます高く昇り、絶望したアシャはついに泣き出してしまった。彼女の目から、魔法で光らせた大粒の涙がいくつも零れ落ちていく。その涙はレタスの匂いがした。すると芋虫はアシャの顔ごと涙を舐め取り、くねくねとその場を離れて、レタスの山がこつそり隠された地面の穴へと消えていった。

怪物がいなくなつて大喜びした三人の魔女と騎士は、昼前には頂上に着けるに違いないと丘を登り始めた。ところが、急な坂道を半分ほど昇つたところで、四人は地面に刻まれた大きな文字を見つけ、息を飲んだ。『努力の成果を支払っていけ』——地面にはこう書いてあった。ラックレス卿は甲冑の隙間からコインを取り出して、草深い斜面に置いた。コインはコロコロと勢い良く転がり落ち、あつという間に見えなくなつてしまった。三人の魔女と騎士は丘を登り続けたが、何

時間歩いてても一歩も前進しない。頂上は近づきもしないし、地面に刻まれた文字も元の位置のままだ。太陽が頭上を越して地平線に傾き始めたのを見て、四人は大きく落胆した。それでもアルシーダは諦めず、他の誰よりも早く一生懸命歩いて、三人を力強く激励した。

『みんな、頑張るのよ！くじけないで！』

アルシーダは額の汗を拭きながら叫んだ。魔法で光らせた汗水が地面に落ちると、行く手を阻んでいた文字が消え、四人は再び前進する事ができるようになった。

二番目の障害が取り除かれた事に大喜びして、四人はできるだけ足を早め、頂上に向かった。魔法で創り出された丘は、本当に魔女達が登っているかのように沈み込んでゆき、とうとう頂上に、花や木の茂みに覆われた——水晶のように光り輝く『豊かな幸運の泉』が現れた。観客が歓声を上げ、「妖女シスターズ」がますます心躍るような音楽を奏で始める。しかしそこに辿り着く前に、頂上を囲んで流れる川が、彼らの行く手を阻んだ。澄んだ水の底から滑らかな石が浮かび上がり、その表面に光る文字——『過去の宝を支払っていけ』と刻まれている——を観客に見せた。

ラックレス卿は勇敢にも盾に乗って川の流れを渡ろうとしたが、盾は騎士の重さに耐えきれず、途中で沈んでしまった。三人の魔女は慌てて騎士を川から引っぱり上げ、自分達は魔法を使って川を飛び越えようとした。しかし川はどんな呪文を唱えても横切らせてはくれず、その間にもどんどん陽が落ちていく。そこで四人は俯いて、川の言葉の意味を考えるような素振りを始めた。最初に意味が分かり、顔を上げたのはアマータだった。アマータは杖を取り出して、そしてピタリと動きを止めた。

イリスは台本の流れを再確認した。川の求める“過去の宝”とは、“アマータの昔の恋人との幸福だった日々の思い出”だ。物語の中で、アマータはいなくなった恋人との幸福だった日々の思い出を心の中から引き摺り出し、川の急流へ落とす。そうすれば川は思い出を消し去り、その後に飛び石が現れて、四人は丘の頂上に辿り着く事が出来るのだ。——だけど、アマータは本当にそれで良かったのだろうか

か。彼女は心から恋人を愛していたのに。失った愛に苦しむアマータと自分の姿が、ふと重なって見えた。凶らずもドラコと過ごした素晴らしい過去の記憶が、イリスの心を優しく甘く満たしていく。

イリスはゆっくりと杖を下ろし、川に向かってこう言った。

「過去の宝を支払うことはできません。これは私の大切なものだから」

それは台本にない、そして『豊かな幸運の泉』の物語にもない台詞だった。観客がざわざわと騒めき、アンヌとパトリシアは口をあんぐりと開けて、突然のアドリブを始めたイリスを見つめている。イリスは静かに微笑んで、言葉を続けた。

「けれど、見せることはできません」

イリスは杖を振るい、頭から記憶の糸を引き摺り出し、空中に浮かべた。すると彼女が“昔の恋人”——に扮したネビルと仲睦まじく過ごしている、過去の楽しかった思い出の数々が輝いては浮かび上がり、融けるようにして消えていく。それらは本来、アマータが記憶の糸を急流に落とす時、観客に分かりやすい演出をするためにと創っておいたものだった。

——その一連の行動はイリスがドラコへ向けた、変わることにない“愛のメッセージ”だった。

☆

スリザリン生の一団が出払った頃に、一人談話室を出たドラコは、壁の花となって静かに劇を見物していた。そしてイリスが作中のアマータと異なり、昔の恋人の愛に殉ずる行動を見せた時——ドラコは自分の目から熱い涙が零れ落ちていくのを止めることが出来なかった。記憶を取り戻していなければ決して気づかない、ただひたむきで謙虚な愛の告白——それは確かにドラコに届き、彼の心臓をとびきり熱く切ないもので満たして、狂おしいほどに揺さぶった。『イリスは今もずっと僕を愛している』——ドラコは今すぐステージを乗り越え、彼女を抱き締めたくてたまらなくなった。

やがて川は満足したように流れを弱め、飛び石を現した。四人は急いで川を渡った。頂上に辿り着くと、目の前の泉はこれまで見た事も

ないような美しく貴重な草花に囲まれて、キラキラと輝いていた。空は夕暮れ時の茜色に染まり、泉の水を浴びるのは誰かを決める時が来ていた。

しかし四人が決めるより先に、身体の弱いアシャが倒れてしまった。頂上を目指す労苦に疲れ果てて、瀕死の状態だった。三人は急いでアシャを泉まで連れて行くとしたが、彼女は苦しきにもがき、どうか触らないでくれと弱々しく頼んだ。そこでアルシーダは大急ぎで一番効き目のありそうな薬草を摘み、ラックレス卿の持っていた皮袋の水で混ぜ合わせて、その薬をアシャの口に流し込んだ。するとアシャの体に眩い光が満ちた。彼女は嬉しそうに自分の手足を動かして、元氣いっぱい歩き回り始めた。もう咳き込む事もない。恐ろしい病気の症状もすっかり消えてしまっているようだ。

『治ったわー！』アシャが叫んだ。

『私に泉はいりません。アルシーダに浴びさせましょう！』

しかしアルシーダは先程摘んだ薬草を集めて、ローブのポケットに詰め込むのに夢中だった。

『この病が治せるのなら、私はいくらでもお金を稼ぐことができるわ！アマータに浴びさせましょう』

ラックレス卿は一礼して、アマータを泉へ促した。しかしアマータは首を横に振った。失った恋人がどれほど自分にとつて大切な存在だったか、よく分かったのだ。恋人が与えてくれた愛は永遠に心の中で生き続け、泉の力がなくなるとも、自分はまだ孤独ではない。

「川が私の哀惜を全て流し去ってくれました。今の私には愛しかありません。これで充分幸せなのです。どうぞ、ラックレス卿。あなたが浴びてください。騎士道を尽したご褒美に」

アマータはラックレス卿に優しく言った。そこで騎士は、今にも落ちようとする太陽の最後の光の中を、鎧の音を響かせながら進み出て、何百人もの中から自分が選ばれたという、信じられない幸運に眩暈を感じながらも、『豊かな幸運の泉』の水を浴びた。

太陽が地平線に落ち、ラックレス卿は勝利の栄光に包まれ、泉から出て来た。そしてすぐに彼はアマータの足元に跪いた。騎士は折れ



た剣をアマータに恭しく差し出して、迷いのない声でこう言った。

「あなたの想いは理解しています。しかし、あなたの愛が変わらないように、私の愛も変わらない。どうか、あなたの傍にいさせてください。あなただけの騎士になりたいのです」

——これもまた、台本にも、物語にもない言葉だった。アマータの過去の恋人を大切に想う気持ちを尊重した上で、共に歩んでいきたいと願う騎士の優しい愛の告白に、観客達は深く心を打たれた。アマータは騎士の捧げた“忠誠の証”である剣を受け取ると、刃にそつと口づけて、ラックレス卿に返した。『本当は泉の水には何の魔力もなかった事は、四人の誰もが知らず、また疑いもしなかった。彼らは腕を組んで丘を降り、そしていつまでも幸せに暮らした』——落ち着いた声のナレーションがそう締めくくり、惜しみない拍手と歓声の中、幕は静かに下ろされた。

☆

イリスは楽屋に戻ったとたん、アンヌに息が止まるほど強く抱き締められた。

「もう、なんてことしてくれたの？引つ掻き回してくれたわね！死ぬかと思つたわよ！」

「ご、ごめんなさい」

イリスは口ごもりながらも謝つた。みんなで練習していた時は台本通りに演じられていたのに、いざ本番を迎えた時、どうしてあんな大それた事をしてしまったのか——イリスはそれが今でも不思議でたまらなかつた。ただ本番中、これ以上ないほどに深くアマータに感情移入した時——たとえそれが演技だとしても——過去の宝を捨て去って新しい愛を選ぶ事など出来なかつた、その事だけはしっかりと覚えている。

「素晴らしいアドリブだった。私、感動したわ」パトリシアが涙ぐんだ。

「ネビルにお礼を言っておけよ。あいつがフォローしてくれたから、上手くまとまったんだ」ジョンが言った。

イリスは甲冑を脱ごうともがいているネビルに歩み寄り、作業を手

伝いながら、心からのお礼を言った。——ネビルはラックレス卿を演じてくれる事も承してくれたし、イリスの勝手なアドリブもフォローしてくれた。彼のおかげで劇は上手く行ったのだ。ネビルは顔を真っ赤にしながら何度も頷いていたが、パトリシアに呼ばれて離れていくイリスをこっそり見ながら、静かにこう思った。

——「僕は充分幸せだった」と。一年生の時、「飛行学」で助けてもらった時から、彼はイリスの事が好きだった。短い間だったが、彼女を一人占めできたこの一月ほどの思い出は、ネビルにとつてとても大切な宝物となった。ラックレス卿のあの台詞は演技などではなく、彼の本心だったのだ。

それから四人はダンブルドア先生に劇を助けてくれた事のお礼を言った後、部室に戻り、使用した小物の片付けをしていた。打ち上げをいつするかという事を仲良く話し合っていると、年若い魔法使いが穏やかに微笑みながらやって来た。——ビリー先生だ。彼はわつと駆け寄って来た三人の部員たちの頭を撫で、イリスとネビルに向けて悪戯っぽく微笑んで見せた。涙ぐみながらビリー先生を見上げるアンヌ達に気を遣い、片付けの続きは明日にする事にして、イリス達は大広間へ戻った。

☆

もう時計は十一時を回ろうとしていた。大広間には十人ほどが座れる丸テーブルが百余り出されていて、皆そこに座ってゆったりと他愛無いお喋りに興じたり、軽食を摂ったりしている。もう遅い時間なので、残っている生徒の数は本当に少なかった。もしかしたらほとんどの生徒達は、ロマンチックな雰囲気溢れる中庭の方に出払っているのかもしれない。

イリスは談話室に戻って休みたいと言ったネビルと別れ、近くのテーブルで手に入れたバタービールの栓を引き抜きながら、ハリー達の姿を探した。——彼女はまだ、ロンとハーマイオニーが決闘の末に恋人同士となり、今は医務室にいますという事も、ハリーとジニーが談話室で、パーバティに愛の告白をして振られたばかりのシエーマスを慰めている事も知らなかった。冷たいバタービールの喉を鳴らして

夢中で飲んでいると、ふと背後から視線を感じた。何気なく振り返った彼女は、やがて大きく息を詰まらせる事となった。

——ドラコが真剣な表情で、こちらを見つめていた。黒いビロードの詰襟ローブを着た彼は、非の打ち所がないほどに上品で洗練されて見えた。うつとりと見惚れていたイリスは、やがて“恐ろしい事実”に気が付いた。ドレスローブを着てここにいるという事は、ドラコにはパートナーがいるんだ。アステリアの顔がパツと思い浮かんだ。いくら過去の宝が自分を支えてくれるとは言っても、ドラコとアステリアが仲睦まじくいる様子を、自分から進んで見ようとは思わない。

しかしイリスが談話室へ戻るために立ち上がったとたん、ドラコはなんと——こちらへ向かって歩いて来た。イリスは慌てて早足で出口へ向かいながら、ちらりと後ろを振り返った。彼は追いかけてきている。『どうしてこっちに来るんだ?』——ついに彼女は駆け出した。けれども慣れないヒールのせいで思うように動けず、やがてイリスは人気のない廊下の角を曲がろうとした時、足をもつれさせてしまった。転びそうになった彼女を、ドラコが急いで抱き留める。『どうして逃げるんだ?』頭上で、ドラコの静かな声がした。

イリスはまるでバジリスクに囚われたかのように目をギョツと閉じて、その場で固まる事しか出来なかった。あれほどに恋い焦がれたドラコがすぐ傍にいて、自分を抱き締め、話しかけてくれている。『この幸福に身を任せてはダメだ』——イリスは心の中で何度も、自分にそう言い聞かせた。もうすぐ彼のパートナーがやって来て、二人は仲良く去って行く筈なんだから。自分は覚悟を決めたんだ。彼女は勇氣をもって口を開いた。

「あなたには関係ない。早くパートナーのところへ戻ったら?」

「僕はパートナーを選んでない」

その言葉にイリスは思わず我を忘れて、ドラコを見上げた。——パートナーを選んでいないだって? イリスの大好きな冷たい灰色の瞳が、自分を優しく見下ろしている。愛おしげにイリスの頬を撫で、ドラコは言葉を続けた。

「君は何故、過去の宝を捨てなかった?」

その瞬間、イリスは直感的に理解した。——『ドラコは記憶を取り戻しかけている』と。あの悍ましい未来の映像がパツと頭の中に思い浮かび、たちまち彼女の体じゅうを冷たい泡のような不安と焦燥感が覆い尽くしていった。イリスは慌ててドレスのベルトに差した杖を引き抜いたが、ドラコの方が数枚上手だった。彼は素早く“武装解除呪文”を唱え、イリスの杖を遠くへ弾き飛ばしてしまったのだ。成す術なく再び固まってしまった彼女を腕の中にしっかりと閉じ込めて、ドラコは気取った声でこう言った。

「フン。どうせ、そうするだろうと思ったよ」

そしてドラコはローブのポケットから、銀のリボンを取り出した。——かつてイリスがナルシッサに贈られたものだ。それは確か、ドビーを通じてナルシッサに返した筈なのに。言葉もなく戸惑うイリスの頭から冠を取り外し、ドラコはリボンに合言葉をそつと囁いた。リボンは蛇のように彼女の髪に巻き付き、優美なシニヨンに結び上げていく。懐かしい鈴の調べが、二人の耳を甘く彩った。

「やつぱり、それを付けていた方がいい」

ドラコは熱を帯びた目でイリスを見つめ、掠れた声でそう言って微笑んだ。まるで今、この世界には自分とドラコの二人切りしかないような、そんな奇妙な感覚にイリスは捕らわれていた。目の前にいる愛しい人が、妖精の光を浴びたかのように輝いて見える。廊下の壁を反響して聴こえて来るパーティの騒めきも、何も気にならない。何も考えられない。彼女がずっと恋い焦がれていた、灰色の目がゆっくりと近づいてくる——

——そして二人は口づけを交わした。やがて唇が離れた時、ドラコは周囲に立ちこめ始めた、むせ返るような花の香りと空中に舞い散る花弁を見て、眉を顰めた。

「これは何なんだ？」

その不可思議な現象の犯人は、イリスだった。余りの幸福に耐え切れず、彼女の魔法力が暴走してしまったのだ。彼女の白い膚は強い魔法力を帯びて真珠のように淡く輝き、周囲から色とりどりの花弁が創り出されて、二人の空間を彩っていく。イリスはハッと我に返り、慌

てて自分の心を落ち着けようとしたが、もうどうにもならなかった。「ごめんなさい。私……」

ドラコは何も言わず、再びイリスにキスをした。さつきよりもずつと深く長く口付けながら、その小さな体を狂おしいほどに強く抱き締める。劇の演技を通じて自分へ密かな愛のメッセージを送り、そして自分と再会できた事が嬉しくて、魔法力を暴発させてしまう——そんな素直でひたむきな彼女が、ただ愛しくてたまらなかった。やがてドラコの耳に優雅なワルツの曲が聴こえて来た。きつと最後にもう一曲だけ踊りたいと若き恋人達にリクエストされて、「妖女シスターズ」が特別に奏でているのだろう。

「イリス。僕と踊ってくれないか？」

ドラコは名残惜しそうに唇を離すと、イリスにダンスのパートナーを申し込んだ。イリスはまるで「服従の呪文」に掛けられたかのように従順に頷いて、夢見る瞳で彼の手を取った。ドラコはこういった社交の場に慣れている事もあり、ダンスに不慣れなイリスを上手にリードしてくれた。——今、自分達は一体、どこにいるんだ？イリスは夢のような一時を過ごしながら、頭の片隅にほんのちよびつとだけ残った理性を動かし、考えた。しかしそんな考えは、目の前の愛しい人の目を見た瞬間に跡形もなく吹き飛んでしまった。分からない、何も。ただ分かるのは、自分が今、世界で一番幸せ者だという事だけだ。けれど、現実の幸せに終わりは必ず訪れる。やがてダンスパーティーの終了時刻を告げる、十二時の鐘が鳴り響いた。けれども二人は言葉もなくお互いを見つめたままで、その場から動くことが出来なかった。

「ゴーント、マルフォイ。こんな所で何をしている？」不意に冷たい声が、廊下の奥から鋭く飛んできた。

「もうダンスパーティーはとづくに終わった筈だが」

二人はハッと我に返り、急いで振り返った。——スネイプ先生だった。彼は感情の読めない昏い目で二人を見つめながら、一步踏み出した。その瞬間、イリスの耳にかすかな雑音に紛れ、スネイプの言葉が聴こえた。

「君はもう行きなさい。彼の対処は私がする」

その言葉は、まるで暖炉の上に置いて溶かしたヌガーのように——フニャフニャに蕩けきったイリスの心を、一気に現実へと引き戻した。魔法の馬車がカボチャに、金銀の糸で編んだ立派なドレスが古着に戻ったかのように、とても冷たく侘しい気持ちになって、彼女は所在なく立ち竦んだ。『だけど、これが現実なんだ』——イリスは自分にそう言い聞かせ、涙の滲む瞳で愛する人を見上げた。ドラコが記憶を取り戻して、自分に逢いに来てくれた——たとえ一時の夢だったとしても、今夜の出来事を、イリスはきつと生涯忘れる事はないだろう。「ドラコ」イリスは久しぶりに彼の名前を呼んだ。喜びと切なさに胸がいつぱいになり、堪え切れずに零れ落ちた涙が頬を伝い、床に滴った。

「私に逢いに来てくれて、ありがとう。とつても嬉しかった」

イリスは精一杯微笑むと、少し欲張ることにした。一生懸命に爪先立ちして、ドラコの頬つぺに軽くキスしてみせたのだ。そして彼の腕を振り解き、床に転がった杖を拾い上げると、スナイプの横を擦り抜けて駆け去って行った。

「待ってくれ、イリス！」

ドラコは慌ててイリスを引き留めようと手を伸ばしたが、彼の手に残されたのは、彼女の髪から外れた銀のリボンだけだった。——せつかく僕達の想いが再び通じ合ったのに。ドラコは唇を強く噛み締め、彼女の跡を追って駆け出した。もう絶対に離さない。何としても彼女を連れ戻すんだ。

しかしその行く手をスナイプが阻んだ。ドラコはイライラとした感情を隠す事なく、自らの寮監を睨み付けた。——何故、この人は僕の邪魔をするんだ。ドラコは冷たく嘲笑うと、スナイプを仰ぎ見た。

「そこを通して下さい、先生。これ以上、邪魔をするなら……」

「父上に言い付けるかね？それは結構」スナイプが後を引き継ぎ、ドラコは口を噤んだ。

「君は今度は自分の父親に記憶を弄られ、ゴーストを翻弄するための、彼の手駒の一つとなるだろう」

ドラコの昂った感情は、その言葉で瞬く間に鎮められていった。——この人は僕とイリスの間に何があったのか、知っているんだ。スネイプは静かにドラコを見下ろして、杖先でイリスの駆けて行った方角を指し示しながら、言葉が続けた。

「君は何故、この先に行きたいと思う?」

「イリスを愛しているからです」ドラコの灰色の瞳は、真摯な輝きに満ちている。

「その愛は、君の全てを賭けるに足るものかね?」

ドラコは一切の迷いや躊躇いを見せず、大きく頷いた。——そんな簡単な質問、応えるまでもない。イリスは僕の全てだ。彼女の為なら、僕は天使にも悪魔にもなれる。その答えにスネイプはかすかに頷いて、彼を自分の地下牢へ誘った。

☆

部屋の片隅には“憂いの篩”が置かれている。ドラコは訝し気にスネイプを仰ぎ見てから、彼に促されて、渋々といった調子で盆を覗き込んだ。——これを見る事が、イリスと何の関係があるって言うんだ?中には光を放つ銀白色の物質がゆらゆらと揺れている。その時、水面に風が渡るように、表面にさざなみが立ったかと思うと、雲のようになぎれ、滑らかに渦巻いた。その奥にイリスの顔が透けて見えたような気がして、ドラコは盆の縁に両手を掛け、ますます中を深く覗き込んだ。

盆の中を満たす銀色の物質の奥は、透明になっていた。そこにはイリスの手によって希釈された——ドラコの“本当の記憶”、そして彼女自身の苦悩の日々がいっぱい詰まっていた。やはりドラコの推察通り、イリスは自分の命を助けるために記憶を忘却させていた。そして列車の中で二人は再会し、ドラコの放った心無い言葉に深く傷つけられたイリスは、窓際で静かに感傷に浸っていた。硝子の外側に雨粒がいくつも叩きつけられ、その影がイリスの顔に映り、涙のように零れ落ちていく。

ダイヤモンドによって引き摺り出された、イリスの最も恐ろしい記憶は——“ドラコの死”だった。同じくダイヤモンドに彼が襲撃を

受けたと知ったイリスは、スリザリンの車両に駆けて行って、ノットに蛙チヨコレートの箱を差し出し、ドラコに渡してくれるようにと頼んだ。『やっぱり、あれは彼女だったんだ』——ドラコの心にたちまち熱い感情が溢れ、歓喜の涙が零れ落ちた。イリスはこんなにも強く健気に、僕を想ってくれていた。自分が放った悪口の数々に心を痛め、涙ぐむイリスを見て、ドラコは自分が許せなくなり、血が滲む程に強く唇を噛み締めた。

そして時は流れ、イリスはドラコとアステリアが仲睦まじく過ごす“未来の映像”を見て、呪いを肥大させるほどに苦しむ事となる。しかし彼女は少しずつ本当の愛について学び、成長していく。ドラコはふとイリスが別れ際に言った言葉を思い出した。『私に逢いに来てくれて、ありがとう。とつても嬉しかった』——彼女は自分の幸せを願い、また身を引くつもりなのだ。ドラコは彼女の健気さにたまらなくなつて、勢い良く盆から顔を引き抜き、地下牢の扉に手を掛けた。しかし、扉はびくともしない。

「お願いです。今すぐイリスに逢わせて下さい！」

最早、恥も外聞もなく、ドラコはスネイプを振り仰いで、泣き叫んだ。イリスを抱き締め、今までの空白の期間を埋めるほどに沢山愛の言葉を囁いて、彼女の哀惜の気持ちを取り除いてやりたかった。今もこれからもずっと変わらずに、僕も君を愛するのだと、彼女が心から納得して安心するまで説明してあげたかった。けれどもスネイプはドラコがどれほどに懇願しても、扉の鍵を開ける事はなかった。その代わりに、静かに口を開いてこう言った。

「それは出来ない。『エルサの未来視』の通りでは、君が彼女に逢うのはもう少し先だ。そしてゴーントはあるものを失わなければならぬ」

ドラコは言葉を失い、スネイプを仰ぎ見た。——『エルサの未来視』“だつて？何故、彼がその事を知っているんだ？無意識にポケットに突っ込んだ手が、エルサの本の表紙を縫るように撫でた。スネイプは杖を構え、確かな足取りでドラコに迫った。

「マルフォイ、はつきり言っておく。『闇の帝王』を倒さぬ限り、イリ



ス・ゴーントが君のものになる事はない。彼女を伴侶に迎えるには、並外れた忍耐力と狡賢さが必要とされる。

君にはそれほどの覚悟があるか？ここから先は、君にとって“茨の道”だ。地べたを這いつくばり泥水を啜つても、惨めに生き延びて、彼女を支え続ける根気があるか？目の前で“闇の帝王”が彼女を抱いて見せても、発狂せずにいられる自信を持てるかね？

もし少しでも迷いを見せたら、我輩は今ここで君の記憶を消そう。君の愚かな行動で、エルサが命懸けで遺した“希望ある未来の道”を潰される訳には行かん」

スネイプに杖先を向けられながら、ドラコは先程の言葉の意味を考えた。——— どれほど理不尽な扱いを受けても、自分を失わずにイリスの支えとなる。そして現状に満足せず、虎視眈々と“闇の帝王”の失脚を狙う。イリスがああ若々しい青年の姿をした闇の魔法使いに抱かれる姿を想像した時、ドラコの心の中で、彼に対する恐怖心は跡形もなく消え去った。あるのは蛇のようにとぐろを巻く、明確な殺意だけだ。やがてドラコは迷いのない声で、はつきりと言った。

「覚悟はできています。イリスは僕の全てです」

その言葉に、スネイプは満足したように息を吐き、杖を下ろした。そして彼は、ドラコを再び“憂いの篩”の前へ促し、盆の中を杖で掻き回して、エルサが見た“最も希望に満ちた未来の映像”を見せてくれた。その映像は様々なシーンを繋ぎ合わせたかのように途切れ途切れで、とても不完全だったが、最後に映し出された光景に彼の目は釘付けになった。——— 成長を重ねた自分とイリスが、マルフォイ家の屋敷にあるサロン室でゆったりと寛ぎ、小さな男の子を愛おしげに見つめている。きつと僕たちの子だ。その輝かしい光景を見て、ドラコは溢れる涙を止める事が出来なかった。スネイプはただ静かにドラコの肩に手を置いた。彼はスネイプを仰ぎ見て、決意を新たにすることをように力強く頷いて見せた。

## P e t a l l 3 . コガネムシの受難

クリスマスの翌日は、みんな朝寝坊した。イリスは寝ぼけ眼でむっくりと起き上がり、ベッドの下を覗き込んで黒いベルベッドの貼られた箱を引つ張り出し、蓋をそつと開けた。中には美しい白銀のドレスローブが入っている。その表面をそつと撫でると、昨夜の夢のような出来事が、色鮮やかに蘇った。——それはイリスにとって、人生最高のクリスマスプレゼントだった。ドラコの愛情は、イリスの心から哀惜や嫉妬の感情を拭い去り、美しい愛だけを残してくれた。劇中で、川の流れがアマータにそうしてくれたように。イリスは微笑んで箱を閉じると、大きく伸びをして部屋を見渡した。ラベンダーとパーバティはまだぐっすり寝ていて、ハーマイオニーのベッドだけ空っぽだ。身だしなみを手早く整えてから、彼女は談話室へ向かった。

談話室はこれまでとは打って変わって静かだった。クリスマスが終わってしまった今、誰もかれも気が抜けているらしく、欠伸混じりの会話も途切れ気味だった。イリスは談話室でハリーとハーマイオニーと合流し、大広間へ朝食を摂りに行った。二人はブルガリアの名物料理である、ヨーグルトを使った冷製スープの“タラツール”と、ほうれん草と羊のチーズがたっぷり入ったキツシユのような“パニツア”に舌鼓を打ちながら、クリスマスの夕方に巻き起こったロンの英雄譚をイリスに話して聴かせた。——じゃあ、ロンは本当に自分のなすべき事を果たしたんだ。イリスは親友を誇らしく思う気持ちで、胸がいつぱいになった。

「あの人ったら、本当にしつこかったのよ。勝てる訳ないのに何度も彼に追い縋って」ハーマイオニーは自分の唇の端が大きく綻んでいるのに、全く気が付いていないようだった。

「結局、トロールみたいな姿になってしまったの。沢山の呪いを受け過ぎてね」

「エッ?!」

『トロールだって?』——イリスはショックを受けて、フォークを取り落した。その様子を見て、ハーマイオニーが慌てて取り成した。

「心配しないで、イリス。休暇までには治るわ。副作用も何もないの」  
「ロンはすごくカッコよかったよ。クラムもね」

ハリーは恐らくその時の事を思い出しているのか、遠い目をしながら穏やかな口調でそう言った。クラムの名前を出されて明らかに気分を害した様子のハーマイオニーを見なかつた事にして、ハリーは言葉が続けた。

「それに、君もとても綺麗だった。劇は素晴らしかったよ」

ハリーの優しい緑色の目は、切ない輝きに満ちていた。『豊かな幸運の泉』にないアマータとラックレス卿の行動は、生徒達の中では“魔法劇クラブ”のオリジナル演出なのだという話で持ち切りで、“子供のお伽話”を“ほろ苦い大人の恋物語”に変えたと評判になっていた。しかし、ハリーには分かつていた。——あの行動は演出などではなく、イリスの本心なのだと。イリスはただ照れ臭そうに微笑んで、こくと頷いた。

俄かに、大広間の天井を無数のフクロウが埋め尽くした。フクロウ便の時間だ。やがてイリスの前に立派なワシミミズクが一羽、舞い降りた。礼儀正しく一札をして、手紙の括り付けられた小包を落とすと、ワシミミズクは飛び去って行った。——小包にはマルフォイ家の指輪印章シグネットリングが捺されている。イリスは慌てて二人を見たが、ハリーはシリウスからの手紙に、ハーマイオニーは購読予約していた“日刊予言者新聞”に夢中になっていた。イリスは安心して、いそいそと開封に取り掛かった。

小包の正体は、イリスがマルフォイ家に滞在していた時に好んで良く食べた——高級チョコレートチョコレートの詰め合わせだった。“検知不可能拡大呪文”が掛けられているのか、掌に載るほどの大きさの箱の中を覗くと、何百という数のチョコレートがずらりと陳列されている。ナルシッサは手紙の中で、イリスがドレスを着て劇で活躍した事をスネイクから聴き、とても喜んでくれていた。イリスは彼女に“本当はもう一つ嬉しい事があったのだ”と伝えたかった。——ドラコが記憶を取り戻し、自分に逢いに来てくれ、そして夢のようなダンスをする事が出来たのだと。イリスは心の中でナルシッサへの返事を書き、フ

クロウ便を飛ばした。そして顔を上げると、ハリーとハーマイオニーが蒼白な表情でこちらを見つめているのに気づき、彼女は驚いて息を飲んだ。

「どうしたの？」

イリスが急いで手紙と箱をポケットにしまいながら尋ねると、ハーマイオニーは黙って、新聞のある一面を彼女に見えるように差し出した。イリスはこわごわと覗き込んで、目を見開いた。新聞記事の冒頭には、いかにも胡散臭そうに見えるハグリッドの写真が載っている。——どうしてハグリッドが新聞に載っているんだ？イリスは訝しみながらも、記事を読み始めた。『ダンブルドアの巨大な過ち』と銘打たれたその記事には、ハグリッドについての様々な情報が、スキーター女史監修の下、面白おかしく書き立てられていた。

“三年生の時、ホグワーツを退校処分となったと自ら認めるルビウス・ハグリッドは、それ以来、ダンブルドアが確保してくれた森番としての職を享受してきた。ところが昨年、ハグリッドは校長に対する不可思議な影響力を行使し、あまたの適任候補を尻目に、「魔法動物飼育学」の教師という座まで射止めてしまった。

危険を感じさせるまでに巨大で、獰猛な顔つきのハグリッドは、新たに手にした権力を利用して、恐ろしい生物を次々と繰り出して、自分が担当する生徒を脅している。ダンブルドアの見て見ぬふりを良い事に、ハグリッドは授業で、何人かの生徒を負傷させている。「僕たちはハグリッドをとても嫌っています。でも怖くて何も言えないのです」と、多くの生徒が口をそろえて言った”

『「僕たちはハグリッドをとても嫌っています」だって？』——記事の一文を指でなぞりながら、イリスは衝撃の余りパカンと空いた口を塞ぐ事が出来なかった。確かにハグリッドは恐ろしい生物が大好きだが、彼らを使って生徒を脅した事なんてないし、嫌われてもいい。一体全体、そんな事を誰が言ったんだ？

“「日刊予言者新聞」は、さらに極め付きの、ある事実を掴んでいない。ハグリッドは純血の魔法使い——の振りをしてきたが——ではなかった。しかも、純粋な人ですらない。母親はなんと女巨人のフリ

ドウルフアで、その所在は、いまだ不明である。“名前を言っではないけな、あの人”に仕えた巨人の多くは、暗黒の勢力と対決した“闇祓い”たちに殺されたが、フリドウルフアはその中にいなかった。海外の山岳地帯にいまなお残る、巨人の集落に逃れたとも考えられる。「魔法動物飼育学」の授業での奇行は間違いなく、母親の凶暴な性質が関係していると言えるだろう”

——ハグリッドが半巨人だった事は確かに驚くべき事実だが、彼のあの大木のような体付きを思えば、殊の外すんなりと納得できるものだった。そんな事よりも問題なのは“記事の書き方”だ。もしハグリッドを知らない人がこの記事を読んだら、彼の事を“教師と言う権力を笠に着た、極悪非道な魔法使い”だと思ってしまうような表現の仕方だった。ハリーは怒りにギラギラと燃える瞳で、テーブルを叩いた。

「あの性悪ババアめ！」僕たちはハグリッドをとて嫌っています”  
だって？嘘ばかりだ！」

「ハグリッドのところへ行きましょう」ハーマイオニーが立ち上がった。

イリス達は急いで城を出て、凍てつく校庭をハグリッドの小屋へと向かった。ハリーが代表して小屋の戸をノックすると、フアングの轟くような吠え声が応えた。

「ハグリッド、僕達だよ！」ハリーが戸を叩きながら叫んだ。  
「開けてよ！」

しかし、ハグリッドからの答えはなかった。フアングが哀れっぽく鼻を鳴らしながら、戸をガリガリ引っ掻く音が聴こえた。イリスが扉越しに、フアングに話しかけた。

「フアング！ハグリッドに開けてって言って！」

《ダメなの》フアングが残念そうに鳴いた。

《ハグリッド、ずっと泣いてる。大きい人の血が入ってるから、怖がらせるといけないから、もう会えないって言ってる》

——ハグリッドが、スキーター女史の書いた記事に心を痛め、泣いている。イリスの心臓は滅茶苦茶に傷ついた。彼女がフアングの言

葉を通訳すると、ハリーとハーマイオニーはますますハグリッドに強く呼びかけ、ドアを叩き続けた。三人はそれから十分ほど粘ったが、何の反応もない。イリス達はついに諦めて、城へ戻る事にした。

☆

その週、ハグリッドの姿はどこにも見当たらなかった。新学期が始まった後も、食事の時に教職員テーブルに姿を見せず、校庭で森番の仕事をしている様子もなかった。「魔法動物飼育学」は代用の教師として、グラブリー・プランク先生が教えてくれた。白髪を短く刈り込んだ、中性的な雰囲気を持つ老魔女だ。生徒達はみんな「日刊予言者新聞」を読んだのか、ハグリッドの代わりに違う先生がいても驚く素振りも見せなかった。イリスはプランク先生にハグリッドの事を尋ねたが、彼女は「あの人は気分が悪くて、養生しているんだ」としか答えなかった。

なんとも皮肉な事に、プランク先生の授業はとても有意義だった。みんながハグリッドに出会うまでイメージしていた「魔法動物飼育学」の授業そのものだった。彼女は大きな美しい「一角獣<sup>ユニコーン</sup>」を捕え、見物させたのだ。一角獣の輝くような白さは、周りの雪さえも灰色に見えるほどだった。金色の蹄で神経質に雪をかき、角のある頭を仰げ反らせている。夢中になって一角獣を見つめる生徒達を見て、見事復活を果たしたロンが焦って言った。

「やばいぜ。このままじゃ、先生の座をプランクばあちゃんに盗られちゃうー！」

「でもあのスキーターって女、どうしてハグリッドが半巨人だって分かったのかしら？」ハーマイオニーが首を傾げた。

「ハグリッドがスキーターさんに話したのかな？」イリスはポケットから新聞の切り抜き記事を取り出した。

「話すわけないよ。僕らにだって、一度も話さなかったのに」

ハリーが腕組みをして、憤懣やる方ない口調で言い返した。四人は一角獣を見つめながら、ぼんやりと思いを馳せた。プランク先生は遠くにいる生徒達にも聴こえるように大声で、一角獣のさまざまな魔法特性を列挙している。不意にハーマイオニーが、イリスの持つ新聞の

切れ端に目を留め、口を開いた。

「ねえ、ふと思ったんだけど。ハリーとロンの“真実の愛”の記事……」

「その話は止めてくれ」ハリーとロンの声がハミングした。

「違うの、最後まで聞いて！」ハーマイオニーがもどかしげに体を揺すった。

「あの記事に書かれてたロンの言葉……貴方は覚えてないかもしれないけど、ホグズミードの“三本の箒”で、貴方がシリウスに言った時の言葉と全く一緒なの。まるであの時、スキーターがすぐ傍にいて会話を丸写ししたみたいだね」

「あいつがどこかで盗み聴きしていたっていう事？」

ハリーは、彼女が言わんとしている事を理解して眉を潜めた。だが実際、“三本の箒”でシリウスを探して周囲を見渡した時、スキーターらしき姿は見当たらなかった。仮に自分達が席に着いた後にやって来たのだとしても、あの喧騒の中で聞き耳を立てるのなら、こちらのテーブルに相当近づかないといけない筈だ。そうすれば、自分の誰かが必ず——あの人目を引く彼女の格好に気づく。その事に思い至ったハリーは、皆にスキーター女史の特徴的な外見を伝えたが、やはり誰もランチ中にそんな姿を見かけていないと首を横に振った。

「透明マントは？」ロンが出し抜けに言った。

「それかスキャバーズ……あ、ゴメン（イリスを見て謝った）……」

“動物もどき”とか！

☆

一月半ばにホグズミード行きが許された。もしかしたらハグリッドにひよいと出会い、授業に戻ってもらおうように説得するチャンスがあるかもしれない。イリス達は雪でぬかるんだハイストリート通りを、目を凝らしてハグリッドの姿を探しながら歩いた。どの店にもハグリッドがいないことが分かると、四人は冷え切った身体をバタービールで暖めようと“三本の箒”へ向かった。

パブは相変わらず混み合っていた。しかし店内をぎつと見回した

だけで、ハグリッドの姿がない事だけは理解できた。四人はがつくりと落ち込み、カウンターに横並びに座るとマダム・ロスメルタにバタービールを注文した。ハーマイオニーが口に泡の髭を付けているのをロンがからかっていると、ハリーが出入口を見つめて鋭い声を出した。

「スキーターだ！」

三人は一斉に振り返った。——バナナ色のローブを着た魔女と、大きなカメラを下げた魔法使いが、扉を開けて入ってきたところだった。スキーターのブロンドの毛先はきつちりとカールしていて、宝石で縁が飾られたメガネを掛けている。長い爪をシヨツキングピンクに染め、赤いワニ革ハンドバッグを大事そうに抱えている。ハリーの言う通り、とても派手な外見の魔女だった。彼女は飲み物を買い、カメラマンと二人で他の客を掻き分けて、カウンターの前に設置された二人掛けのテーブルに座った。スキーターはすぐ近くでイリス達が怒りの眼差しを向けている事も知らず、とても満足気に早口で喋り始めた。

「あたし達とあんまり話したくないようだったねえ、ボゾ？きいて、どうしてか、あんた分かる？ルード・バグマンの奴、あんなにゾロゾロ小鬼を引き連れて、何してたんざんしょ？何か臭わない？ちよつとほじくってみようか？」

スキーターはパブに来る途中で、ルードと出くわしたようだった。“新たな特ダネ”——ルード・バグマンと交わした会話の内容を思い返しているのか、少しばかり宙を見つめながら、彼女は食前酒だと言わんばかりに蜂蜜酒を啜り、また口を開いた。

『魔法ゲーム・スポーツ部、失脚した元部長、ルード・バグマンの不名誉』・・・なかなか切れのいい見出しじゃないか。ボゾ、あとは見出しに合う話を付けるだけざんす・・・」

「また誰かを破滅させるつもりか？」

ついに我慢の限界を迎え、ハリーが大声を出した。何人かの客が興味深げにこちらを振り返った。スキーターは声の主を見つけると、宝石縁の眼鏡の奥で目を見開いて、にっこりと笑った。



「ハリー！素敵ざんすわ、こつちに来て一緒に……」

「お前なんか、一切関わりたくない。三メートルの箒を間に挟んだって嫌だ」ハリーはカンカンに怒っていたし、イリス達も同じ思いだった。

「一体何のために、ハグリッドにあんなことをしたんだ？」

スキーターはペンシルでどぎつく描いた眉をギョツと吊り上げ、小さな子供に言い聞かせるように優しい口調でこう言った。

「読者には真実を知る権利があるのよ、ハリー。あたくしはただ自分の役目を……」

「真実」？ハリーはカウンターから立ち上がり、スキーターを睨んだ。「お前が書いている事は、悪意に満ちた嘘ばかりじゃないか！」

今や、酒場中がしんと静まり返っていた。マダム・ロスマルタはカウンターの向こうで目を凝らしていたが、注いでいる蜂蜜酒が大ジョッキから盛大に溢れているのにも気づいていない様子だった。スキーターはわずかに動揺したように身じろぎしたが、たちまち取り繕ったような笑顔を浮かべた。ワニ革バッグの留め金をパチンと開き、ライム色の羽根ペン——きつと“自動速記羽根ペンQQQ”だ——を取り出して、彼女は一切怖気づく事無くこう言い放った。

「ハリー、君の知ってるハグリッドについてインタビューさせてくれない？君の意外な友情とその裏の事情についてざんすけど。君はハグリッドが父親代わりだと思っ？」

突然、ハーマイオニーが荒々しく立ち上がった。手にしたバタービールのジョッキを手榴弾のように握り締め、スキーターを憎々しげに睨み付ける。

「貴方って最低の女よ！」ハーマイオニーは歯を食い縛った。

「記事のためなら、何にも気にしないのね。誰がどうなるうと……」  
「お座りよ。馬鹿な小娘のくせして。分かりもしないのに、分かったような口を聴くんじゃない」

スキーターの笑顔は一瞬にして拭い去られ、彼女は研ぎ澄まされたナイフのように鋭く冷たい表情でハーマイオニーを一瞥し、嘲笑っ

た。

「あたしやね、世の中の出来事について、あんたの髪の毛が縮み上がるような事ばかり掴んでいるのさ。最も、もう縮み上がっているようざんすけど・・・」

ハーマイオニーの巻き毛を小馬鹿にしたような目で眺め、スキーターが捨てて台詞を吐いた。イリスはもう黙っていられなかった。——この人はハリーやロン、ハグリッドだけでなく、ハーマイオニーをも傷つけた。イリスは躊躇う事無く魔法力を行使し、スキーターの目を介して彼女の心を“盗み見”した。

——この時、イリスは自分の心に芽生えた変化に気付いていなかった。スネイプは悪しき者に蹂躪されるばかりだったイリスに、彼らと立ち向かう力や術を与えた。しかし強い力は時として人を溺れさせ、狂わせる。それはイリスだって例外ではなかった。彼女は“スキーターを懲らしめる”という自分の目的のためだけに、力を使ってしまったのだ。

幸いな事にスキーターの心の世界は無防備で、イリスは難なく彼女の正体を見破る事が出来た。——スキーターは自分と同じ非公認の“動物もどき”で、小さなコガネムシに変身して諜報活動を行っていたのだ。クリスマス・ダンスパーティーの夜、妖精の光が幻想的に輝く噴水の前で、ハグリッドがマダム・マクシームに自分の素性を明かしている。その大きな背中には、小さなコガネムシが一匹留まっていた。『もうこれ以上、ハグリッドを傷つけさせたりするもんか——イリスは奮起しながら、劇の演技の感覚を思い出し、自分にこう言い聞かせた。——今からする事は、劇なんだ。落ち着いてしつかりと演じなきゃ。』

『ハリーじゃなくて、私がインタビューを受けたらダメですか？ハグリッドのことで』

イリスが少し緊張した面持ちでそう言った瞬間、ハリー達はギョツとした目付きで彼女を見た。スキーターはまた笑顔に戻り、まるで素晴らしいご馳走を目の前にしたかのように舌なめずりをして目を輝かせた。何時の間にかテーブルに置かれていた羊皮紙の上を、QQQQ

が飛ぶように行ったり来たりし始める。

「まあ、まあ、君はイリス・ゴントね？良く知ってるわ、ハリーと同じ位の有名人ですもの。ようござんすよ、君の事はとっても素敵に書くようにスポンサーから頼まれていますから、楽しみにしていてね。さあ、こつちへ！」

スキーターは愛想良く言っつて、自分の隣の席を勧めた。カメラマンが慌てて立ち上がり、イリスの写真を撮り始める。しかし彼女は恥ずかしがって、俯きながら小さい声で言った。

『恥ずかしいから、お店の外でインタビューしてほしいです。あまり人の来ないところで』

スキーターは快諾し、イリスの手を引つ張つて、カメラマンと一緒に店を出て行つた。イリスはハリー達と擦れ違ふ時に、悪戯っぽくウインクしてみた。——一体、何をするつもりなんだ？イリスの行動の意図が分からず、ハリー達は戸惑いながらも席を離れ、彼らの跡をついていった。

☆

イリス達は“三本の箒”の裏手にいた。バタービールの空き樽に腰掛け、スキーターはQQQと羊皮紙を空中に浮かばせると、早速イリスに質問を始めた。

「ハグリッドは君にとってどんな人？筋肉隆々と髭もじやに隠された顔はどんな感じなの？」

『私にとつて、大切な友達です』イリスは素直に答えて、微笑んだ。

『そして笑うと小さな目がコガネムシみたいにキラキラ光つて、とても素敵なんです。まるであなたみたいに』

“コガネムシ”、あなたみたいに——イリスが放つた言葉の一部を聞き咎め、スキーターの笑顔が俄かに凍り付いた。しかし彼女は首を振り、自分の心に浮かんだ疑念を追い払つた。たまたま言葉の選び方がそうだったただけだ。こんな他愛無い小娘が、自分の正体に気付ける筈がない。スキーターは再び質問を始めた。

「君はハグリッドが父親代わりだと思ふ？」

『はい。いつも私を守つて支えてくれます』イリスははきはきと応え

た。

『この間も彼の小屋に遊びに行つた時、私の肩に付いていた毒虫を、ハグリッドがやつつけてくれたの。パン！って』

イリスがパンと両の掌を強く打ち合わせると、スキーターの肩がビクリと震えた。何時の間にか、分厚い雲が暖かな陽光を遮り、仄暗い影を落としている。薄暗がりの中で、少女の目が不気味な赤色に光つた。店内で見た時、あの目はエメラルド色だった筈だ。スキーターはごくりと唾を飲み込んで、たじろいだ。——間違いない。この娘は、自分の正体を知っている。

「あんた、何者？」スキーターの声は、恐怖で掠れていた。

『私が何者かどうかは、あなたが一番良くご存じではないですか？小さなコガネムシさん』

イリスはQQQQが羊皮紙上を狂つたように舞い踊り、遠目にも分かるほどに大きな文字で自分の素性——“例のあの人の血縁者”、“従者メーティス・ゴントの孫娘”、“秘密の部屋の真の継承者”など——を書き立てていく様子を見つめ、思わず苦笑いした。けれど常日頃、ずっと迷惑を掛けられているのだから、今回くらい“闇の帝王”やメーティスの権威を笠に着たって構わないだろう。彼女は今の時だけ、悪役になる決意をした。

『今度、私の大切な友達を傷つけたら……』

イリスはそこで言葉を区切り、杖を唇に押し当てて何かを囁いた。——イリスの“動物と話せる能力”に着目したスネイプは、いざという時に彼らの助けを得られるようにと、言葉に微量の魔法力を含ませて十数メートル四方に拡散させ、動物を呼び寄せる魔法を創り出してくれていた。かくしてイリスの声は、ホグズミード村に潜む、声なき者達の耳にしつかりと届けられた。

やがてスキーターはヒツと恐怖に声を詰まらせ、大きく仰け反つた。何十という——小さきまなサイズの蜘蛛達が、家屋や地面のひび割れから這い出て、こちらへやって来たからだ。俄かに無数の羽ばたき音がして頭上を見上げると、夥しい数のカラスが不気味な鳴き声を上げながら飛んできて、屋根に留まり、スキーターをじつと見

下ろした。——彼らはいずれもコガネムシの天敵とされる存在だ。

「あつ……あああ……」

スキーターはガクガクと震える足をなんとか押さえつけ、目の前にいる少女を見つめた。——たった十四歳の小さな少女だ、彼女は今にも恐怖で碎け散りそうな自分の心を奮い立たせ、何度もそう言い聞かせた。ついさつき自分がボサボサ頭を馬鹿にした、あの生意気な少女と同じ年だ。蜘蛛もカラスも、杖で吹き飛ばせば済む話だ。しかしスキーターにはできなかった。イリスを冠する——不名誉極まりない数々の言葉に見合うような風格や凄味を、今の彼女は有していたのだ。イリスは舞い降りたカラスを腕に乗せ、優しく撫でながらこう言った。

『今度コガネムシに変身した時、偶然通り掛かった』私のお友達が……あなたがパクツて食べちゃうかも』

《撫でてくれるのは良いんだけどさあ》カラスが不満げに鳴いた。  
《どこにとびきりの御馳走があるんだよ？おれ、腹ペコなんだ》

そのカラスの言葉は、スキーターの耳に、自分を狙う“不気味な鳴き声”として聴こえた。余りの恐怖に失禁し、彼女は声にならない叫び声を上げながら、QQQも羊皮紙も放り出して、這う這うの体でその場を逃げ出した。カメラマンが何度も転びながら、その跡に続く。

——かくして、イリスの復讐劇は幕を下ろした。どうやら上手く行ったみたいだ。ふーっと息を吐いて大きく伸びをしてから、彼女は協力してくれた小さな友にお礼を言い、今からパブで“とびきりのご馳走”を調達してくる事を約束した。そして次の瞬間、イリスはハリーとハーマイオニーに後ろからギュウツと抱きすくめられた。

「もう！貴方って——貴方って——滅茶苦茶に最高！あのスキーターの顔ったら！」イリスを抱き締めて、ピョンピョンと兎のように飛び跳ねながら、ハーマイオニーが叫んだ。

「最高にスカツとしたよ！」蜘蛛の群れから遠く離れた場所で、ロンが言った。

イリスは改めて、三人にスキーターの正体を話して聴かせた。それから揃って“三本の箒”に戻る前、ハリーはふと地面に打ち捨てられ

た羊皮紙を見つけて拾い上げた。傍にはライム色の羽根ペンも転がっている。スキーターが書きかけた原稿には、恐怖にわなわなと震える文字で、このような事が書かれていた——「闇の魔女、イリス・ゴーントは、蜘蛛やカラスをけしかけて、本誌の記者を脅し付けた。その目は真つ赤に光り、まるで例のあの人の……」

『こんなのデタラメだ。イリスが闇の魔女である筈がない』——ハリーはどこか自分にも言い聞かせるように、心の中でそう呟いて、万が一にもイリスがこれを見て心を痛めないようにと、その紙をビリビりに破り捨てた。そうして四人はパブに戻つてご馳走をたらふく買い込み、蜘蛛やカラス達にお礼をした後、ハグリッドの小屋へ向かった。

☆

四人は帰り道を走り抜け、羽の生えたイノシシ像が一对立っている校門を駆け抜け、校庭を突き抜けて、ハグリッドの小屋へと走った。小屋のカーテンは閉まったままだった。四人が近づくと、ファングが嬉しがって吼える声が聴こえてきた。

「ハグリッド！」ハーマイオニーが扉を叩きながら叫んだ。

「いい加減にして！そこにいる事は分かつてるわ！貴方のお母さんが巨人だろうと何だろうと、誰も気にしてないわ！スキーターはイリスがとつちめてくれたの！あんな女にやられてちゃダメよ！」

突然、ドアが開いた。ハーマイオニーは「ああ、やっど！」と言い掛けて、口を噤んだ。——ハーマイオニーに面と向かつて立っていたのはハグリッドではなく、ダンブルドア校長だった。

「こんにちは」ダンブルドアは四人に微笑みかけながら、優しく言った。

「私達、あの、ハグリッドに会いたくて……」

ハーマイオニーが先程までの勢いはどこへやら、しどろもどろにそう言うと、ダンブルドアはブルーの目をキラキラと輝かせて、四人を小屋の中へ迎え入れた。ファングが喜び勇んで、四人の間を駆け回った。——ハグリッドは大きなマグカップが二つ置かれたテーブルの前に座っていた。顔は泣いて斑ぶちになり、両目は腫れ上がり、髪の毛に

至っては撫でつけるどころか、今や絡み合った針金のカツラのようになっていた。見る影もなくやつれ果てたハグリッドの姿を見て、イリス達は掛ける言葉が見当たらず、ただ心を痛めるばかりだった。

「よう」

ハグリッドは顔を上げて四人を見ると、嗚れた声を出した。

「もつと紅茶が必要じゃの」

ダンブルドアは四人が入った後で戸を閉め、杖を取り出してクルクルと回した。次の瞬間、空中に紅茶とケーキを載せた大きな盆が現れ、テーブルの上にそつと着地した。皆がテーブルに着いた後、少しばかり間を置いてから、ダンブルドアが口を開いた。

「ハグリッド、ミス・グレンジャーが叫んでいたことが聴こえたかね？」

ハーマイオニーは顔を赤くしたが、ダンブルドアは彼女に優しく微笑みかけて、話を続けた。

「ハーマイオニーもハリーもロンもイリスも、ドアを破りそうなあの勢いから察するに、今でもお前と親しくしたいと思っっているよーじゃ」

「もちろん、僕達、今でもハグリッドと友達でいたいと思ってるよー」ハリーはハグリッドを見つめながら、熱い思いを込めて言った。

「あんなクソ——すみません、先生……(ダンブルドアがホツホツと笑った)……あんな女がハグリッドの事をどう書こうと、僕らが気に入る訳ないだろう？」

ハグリッドのコガネムシのような真つ黒な目から大粒の涙が二粒零れ、もじやもじや髭をゆつくりと伝って落ちた。

「それに君の敵はイリスが取ったんだ！」ロンが勝ち誇ったように言った。

「ほう。敵を取った」とは？」ダンブルドアが興味深そうに尋ねた。イリスは皆に改めて、事の顛末を話して聴かせた。皆はどつと笑い、ハグリッドもかすかに笑い声を上げた。

「なんと、これでスキーター女史も迂闊には飛び回れぬじやろう。わしもフォークスにご協力を願わねばな」

ダンブルドアは悪戯っぽくウインクして、それから労わりに満ちた眼差しでハグリッドを見つめた。

「これぞわしの言った事の“生きた証”じゃよ、ハグリッド。生徒の親達から届いた、数え切れない程の手紙も見せたじゃろう？自分達が学校にいた頃のお前の事をちゃんと覚えていて、もしわしがお前をクビにしたら一言言わせてもらおうと、そうはつきり書いてある」

「でも……全部が全部じゃねえです」ハグリッドの声は掠れていた。「みんながみんな、俺が残る事を望んではいねえです」

「それは、ハグリッド。世界中の人に好かれようと思うのなら、残念ながらこの小屋にずっと長い事閉じ籠もっているほかあるまい」

ダンブルドアの半月眼鏡の奥に輝くブルーの目が、今度は厳しい光を帯びた。

「世界中の人に好かれる者など、この世には存在せぬ。だからこそ、人は愛を求める。皆、お前と同じじゃよ。自分を愛する者とそうでない者、両方を抱えて生きておるのじゃ」

「それでも、先生は“半巨人”じゃねえ！」ハグリッドは頑固に言い続けた。

「ハグリッド、じゃあ私はどうなるの？」イリスは怒って、口を挟んだ。「私の親戚はヴォルデモートなんだよ！おまけに彼に敵意を抱いたら死ぬ呪いも掛かってるんだよ！」

たちまちその場の空気は冷たく凍り付いた。ダンブルドアでさえ、笑わなかった。ハグリッドは気まずそうに頬を掻き、「そりゃあ、お前さんはそうだろうが」と口籠って俯いた。——イリスは自分で言った言葉に打ちのめされ、しよげ込んだ。その頭をハーマイオニーが優しく撫で、穏やかな声でこう言った。

「お願いだから、戻って来て。ハグリッドがいないと、私達ホントに寂しいわ」

ハグリッドがごくくと喉を鳴らした。またしても涙がボロボロと頬を伝い、モジャモジャの髭を滴り落ちていく。その様子を見届けたダンブルドアは、ゆっくりとした動作で立ち上がった。

「辞表は受け取れぬぞ、ハグリッド。月曜日に授業に戻るのじゃ」



そう命じると、ダンブルドアは扉の傍に寛いでいたフアングの耳を少しばかりカリカリしてから、小屋を出て行った。扉が静かに閉まると、ハグリッドはゴミバケツの蓋ほどもある両手に顔を埋めて、啜り泣き始めた。イリス達は代わる代わる彼の腕を軽く叩いて、彼を慰めた。やがて顔を上げたハグリッドは、目を真っ赤にして呻いた。

「偉大なお方だ、ダンブルドアは。そうだとも、あのお方も、お前さんらも、みんな正しい。俺が馬鹿だった。俺の父ちゃんは、俺がこんなことをしてるのを見たら、恥ずかしいと思うに違いねえ」

またしても大粒の涙が溢れたが、ハグリッドはさつきよりきつぱりと涙を拭ってみせた。どこか吹っ切れたような、清々しい様子だった。

「父ちゃんの写真を見せたことがなかったな？どれ・・・」

ハグリッドは立ち上がって洋服ダンスのところまで行き、引き出しを開けて写真を取り出した。——ハグリッドのお父さんは、一体どんな人なんだろう。イリス達は興味津々に写真を覗き込んだ。白黒の世界で、ハグリッドと同じコガネムシのように輝く黒い瞳を持つ、小柄な魔法使いが、ハグリッドの肩に乗っかって笑っていた。傍の林檎の木から判断して、ハグリッドは優に二メートル豊かだが、顔には髭がなく、丸っこくてとても幼かった。

「hogwartsに入学してすぐに撮ったやつだ」ハグリッドは写真を見て、懐かしそうに微笑んだ。

「親父は大喜びでなあ。俺が魔法を使うのが下手だから、hogwartsに行けないんじゃないかねえかと心配しとったんだ。親父は、俺が二年生の時に死んだ。それから支えて下さったのが、ダンブルドア先生だ。森番の仕事をくださった。」

今ほどじゃねえが、これまでも俺の凶体を怪しんだり、なじる奴らはぎょうさんいた。だが、“恥じることはないぞ”って、俺の親父は良く言ったもんだった。“そのことでお前を叩く奴がいても、そんな奴はこつちが気にする価値もない”ってな。親父は正しかった」

イリス達はしんとなって、話に聴き入った。——それから、ハグリッドは全てを話してくれた。ダンスパーティーの夜、マダム・マク

シームと親密な間柄になり、自分が“半巨人”である秘密を明かし、同じ身の丈のマクシームもそうではないかと言ったら、彼女が憤慨してその場を立ち去って行った事。そしてその数日後に自分の記事が書かれ、自分があの夜にマクシームに言った会話の内容全て——母親の名前に至るまで——が、詳細に記載されていたという事も。写真を握り締め、ハグリッドは静かに言葉を続けた。

「マクシームは……あいつは結局、認めなかった。“骨が太いだけだ”と。だが、俺は自分から逃げん。誰が何と言おうと、自分の生まれを誇りに思うぞ」

ハグリッドの黒い目は、コガネムシのようにキラキラと輝き始めた。四人はホッと安心して、お互いに視線を交し合った。『自分の生まれを誇りに思う』——イリスはその言葉が、とても眩しく感じられた。自分もいつか、そんな風に思える日が来るのだろうか。ハグリッドは、ふとハリーに目を留めた。

「ハリー。お前さんに初めて会った時、昔に俺に似てると思った。父ちゃんも母ちゃんも死んで、お前さんはホグワーツでやっていけねえと思っちゃった。そんな資格があるのかどうか、お前さんは自信がなかったなあ。ところが、ハリー、どうだ。——“学校の代表選手”だ！」

ハグリッドは確信に満ちた笑顔を浮かべ、ハリーの肩をポンと軽く叩いた。思わずクリームたっぷりのケーキにダイビングしそうなになりながら、ハリーは部屋のトランクに永い事入れっぱなしだった“金の卵”の存在をハッと思い出した。

「ハリーよ、試合に勝って、みんなに見せてやれ。自分の生まれを恥じることなんかねえ、魔法さえ使えれば誰でも入学するのが正しいってことを、ダンブルドアが正しいってことを、みんなに見せてやるんだ。

……ところで、あの卵はどうなってる？」

——ハリーは凍り付いたように黙り込んだ。“金の卵”の存在を、ハグリッドに今指摘されるまで、すっかりと忘れていた。焦ったイリスが取り成すように、卵を開けると甲高い悲鳴が聴こえる事、そしてその声に“渴き”を感じるという事を説明すると、ハグリッドは少し

ばかり考えてから、こう言った。

「ちいと、その卵を持って来いや。それで、ここで開けたらどうだ？・・・ああ、別に手伝うつもりはねえぞ？ハーマイオニー。試練は自分一人で達成するもんだからな」

すかさず飛んできたハーマイオニーの熱い視線と込められた想いを察し、ハグリッドは悪戯っぽくウインクしてみせた。ハリーは急いで塔に駆け戻り、卵を持って帰って来た。来たるべき衝撃に備えて、イリス達がしっかり耳栓をした——ファングの耳にはハグリッド愛用の水玉模様のハンカチを巻き付けた——のを確認して、ハリーは卵を開けた。たちまち泣き喚くような甲高い悲鳴が、小屋じゆうに響き渡った。ハリーが目を白黒させながら卵をバチンと閉じると、ハグリッドは驚く様子もなく、暖炉の火にヤカンを掛けながら大きな独り言を言った。

「こりゃ、<sup>マーベール</sup>水中人」の声だな。あいつらの声は、陸の上じゃひどいもんだ。水ん中では、まともな声に聴こえるんだがなあ」

——“水中人”だつて？ロンがいち早く飛び出して、小屋の外に転がされた空のバケツを取って戻って来た。ハーマイオニーが“肥大呪文”を掛けてゴミバケツほどに大きくし、イリスが杖を振ってその中に水を満たしていく。ハリーはバケツの中にそつと卵を差し入れて、開けた。——水の中から、美しい歌声が聴こえる。しかし水の中なので、歌の文句が聞き取れない。ハリーは躊躇う事無く息を吸って、バケツの中に顔を沈めた。

“探しにおいで、声を頼りに 地上じゃ、歌は歌えない 我らが捕えし、大切なもの 探す時間は、一時間 一時間のその後は、もはや望みはありえない”♪

ハリーは一度浮上して酸素を取り込んでから、歌詞をしっかりと覚えるために、何度かバケツの中に潜った。やがて彼は卵を閉じると、バケツから体を離し、びしょ濡れの頭をローブの袖で拭った。

「たぶん水中人が僕の大切なものを捕えていて、一時間以内にそれを取り戻さないともう二度と帰らないって歌ってる。・・・分かったぞ！」ハリーが突然叫んだ。

「第二の課題」は湖に入って水中人を見つけて、大切なものを取り返す事なんだ。でも待つて、僕……」

ハリーはふと不安になった。誰かが突然ハリーの心の栓を引き抜いたかのように、興奮が一度に流れ去った。——ハリーは水泳が得意ではなかった。今までダドリー家にいた時に水泳訓練をまともに受けさせてくれなかったという事もあるが——あの湖はとても大きいし、おまけに深い。それに水中人はきつと湖底に住んでいるはずだ。ホグワーツではマグル製品である酸素ボンベを使えないだろうし、そもそもハリーはダイビング免許を持っていない。彼は思わず愕然として呟いた。

「どうやって息をすればいいんだ？」

「そりゃあ、” 鯉昆布 ” だろうが」ハグリッドは当然のような口調で言った。

「海に潜る魔法使いは、みんなそれを食うとる。魚のように水の中で息をして泳げるんだ。泳ぎに自信があるんなら、” 泡頭の呪文 ” でもええな」

「本当にありがとう、ハグリッド！」ハリーが興奮と感激に上擦った声で叫んだ。

「さすがハグリッドだよ。” 金の卵 ” の謎をこうも早く解くなんてさ」ロンがすかさず乗った。

「やっぱりハグリッドがいなくちゃ」ハーマイオニーとイリスの声がハミングした。

ハグリッドはたちまち顔を真っ赤にして針金頭を掻きむしり、しどろもどろになった。

☆

それからイリス達は、” 鯉昆布 ” の入手方法を調べたが、残念な事にそれは貴重品で、おまけに今が海水浴に凡そ適さない季節であるため、近くの店に在庫はなく、すぐに手に入るような代物ではなかった。ハリーは水泳訓練と” 泡頭の呪文 ” の練習を同時に進行しなければならなくなった。イリスとロンは喜んで協力すると約束したが、ハーマイオニーだけは” ハリーが自分の力だけで試練を達成しなければ

ならない”と突っぱねた。しかし、さすがにハリーを湖底で溺死させる訳にはいかないと思つたのか、渋々ではあるが、力を貸してくれる事になった。

ハグリッドは再び「魔法動物飼育学」の授業に出席し、プランク先生と同じ“一角獣”の授業を続けた。彼がプランク先生のする事くらい自分にもできると証明したかったのかは、分からない。しかしハグリッドが、彼がこよなく愛する怪物達と同じくらい一角獣について詳しいという事と、また一角獣に毒牙がないのは残念だと思つている事は分かった。どうやったのかは不明だが、希少極まりない一角獣の赤ちゃんを二頭も捕え、皆の心を驚掴みにするハグリッドの雄姿を見て、イリス達は安心して胸を撫で下ろしたのだった。

## P e t a l l 4 . 第二の課題

「いよいよ」第二の課題」の前夜、ハリーは空き教室で、イリスがファイルに借りた——大きな水槽の中にいた。彼の顔の周りには大きな泡があり、同じ泡を顔にくっつけたイリスが水中人の役をして、「大切なもの」に見立てたファイアボルトの前に立ちほだかっている。イリスはハグリッドから借りた木製の槍を突き出したり、水槽の底に浮かぶ海藻を動かして、ハリーに巻き付けようとしていた。

水槽の縁にはロンが腰かけ、ハリーが練習用にとダース買ったWWの商品「鼻食いつきティーカップ」を時々投げ込んだ。それらを避けながら、彼はクルクルと泳ぎ回った。複雑に絡みついた海藻を解くには、シリウスがクリスマスプレゼントにくれた「魔法のペンナイフ」——何でもこじ開ける道具と、どんな結び目も解く道具が付いている——がとても役立つた。水槽の外では、ハーマイオニーが腕時計を見ながら、ロンやイリスに指示を送ったり、じつと観察したりしている。やがてハリーの泡がパチンと弾け、彼は急いで水面に顔を出して大きく息を吸い込んだ。

「四十五分三十二秒。ウーン……まずまずね」ハーマイオニーが言った。

その時、空き教室のドアを遠慮がちに叩く音がした。——ネビルだ。ふっくらとしてあどけない顔が、ドアの影から四人の様子を興味深げに眺めている。

「ごめんね。イリス、一緒に来てほしいんだ。マクゴナガル先生が呼んでるの」「私？」

——一体、何のご用事なんだろう。四人は思わず顔を見合わせ、首を傾げた。だが、とにかく行かなければ。イリスはハリーとロンの手を借りて水槽を這い出すと、杖を振って濡れた衣服を乾かし、ネビルの跡を着いて行った。

☆

翌朝になっても、イリスは寮に帰って来なかった。三人はイリスの

身を案じたが、マクゴナガル先生がやって来て「ゴーストについては何も心配いりません。それよりもポッター、しっかりと試練をこなさない」と激励を送って去って行った。ハリーは何とか朝食を終え、重い足取りで湖へ向かった。十一月にはドラゴンの囲い地の周りに作られていた観客席が、今度は湖の反対側の岸边に沿って築かれている。何段にも組み上げられたスタンドは満席で、下の湖に大きな影を映し出していた。大観衆の興奮したざわめきが、湖面を渡って不思議に反響するのを聴きながら、ハリーは湖の反対側に回り込んで、審査員席に近づいた。水際に金色の垂れ布で覆われたテーブルが置かれ、審査員が着席していた。——クラウチ氏が座る所には、代わりにパーシーがいた。まるで自分の王国を見るような尊大な眼差しを、湖面に向けている。

——やれることはやったんだ。ハリーは湖の冷たそうな水面を見下ろして、自分に何度も言い聞かせた。ルードが代表選手の中を動き回り、湖の岸に沿って、三メートル間隔に選手を立てさせた。ハリーは一番端で、クラムの隣だ。ハリーは他の選手と同じようにローブを脱ぎ、杖を構えた。

ホイッスルが冷たく静かな空気に鋭く鳴り響くと、スタンドは拍手と歓声でどよめいた。ハリーは「すぐさま」泡頭の呪文を唱え、冷たい水の中に飛び込んだ。たちまち凍るような水がハリーの皮膚を鋭く突き刺したが、イリスとハーマイオニーが独自に研究を重ね、彼が水の中で魚のように泳げるようにと——様々な魔法を掛けてくれた“特製の水着”のおかげで、その冷たさは徐々に心地良いものだと感じられるようになっていった。狭い水槽の中から解き放たれた魚のように、ハリーは夢中で水を掻いた。見た事もない、暗い、霧のかかったような景色を下に覗ながら、彼は泳ぎ続けた。

時折水魔がやって来て、ハリーの腕を掴んだが、なんとか訓練通りに引つ張って振り解き、彼らをやり過ぎした。ハリーは少しスピードを落とし、周りを見回して再び耳を澄ませた。水の中でゆっくり一回転すると、くぐもった静寂が前にも増して強く感じられた。今はもう、湖の随分深いところにいるに違いない。彼は黒い泥地が広々と続

く場所を通り過ぎた。水を掻く度に黒い泥が巻き上がり、辺りが濁った。そしてついに、あの耳について離れない、特徴的な<sup>マイヒーブルソング</sup>水中人歌<sup>”</sup>が聴こえて来た。

“ 探す時間は、一時間 取り返すべし、大切なもの” ♪

ハリーはローブのポケットを探り、懐中時計を取り出した。——しかし、時計は止まっていた。今はもう何時かも分からない。こんな事なら定期点検をした時に、防水処置してもらえば良かった。ハリーは唇を噛み締め、急いで泳ぎ続けた。水中人歌を追って、巨大な岩——槍を手に巨大イカを追う水中人の絵が描かれている——を通り過ぎた。

藻で覆われた荒削りの石の住居の群れが、薄暗がりの中から姿を現した。あちこちの暗い窓から覗いている顔は、ハリーが想像していた人魚の姿とは似ても似つかなかった。水中人の肌は灰色がかつていて、海藻のようにボウボウとした長い暗緑色の髪をしていた。目は黄色く、あちこち欠けた歯も黄色だった。一人、二人は力強い尾鰭で水を打ち、槍を手に洞窟から出て来て、ハリーを良く見ようとした。

やがて目の前が開け、広場のような場所に突き当たった。そこには大勢の水中人がいて、その真ん中で水中人コーラス隊が歌い、代表選手を呼び寄せている。その後ろに、大岩を削った巨大な水中人の像が立っていた。その像の尾の部分に、四人の人間がしっかりと縛り付けられている。その内の一人を見て、ハリーは声にならない声で叫んだ。

——イリスだった。ハリーが水中人から取り返さなければならぬ“大切なもの”とは、彼女の事だったのだ。エロイーズ・ミジョンと、レイブンクローの上級生、チョウ・チャンの間に縛られ、ぐっすり眠り込んでいる。頭をだらりと肩にもたせかけ、口から細かい泡がぷくぷくと立ち昇っていた。チョウの横にいるのは、小さな少女だった。その銀色の豊かな髪から、ボーバトン校の代表選手、フラーの妹に違いないとハリーは思った。

ハリーは人質の方へ急いだ。そしてポケットからペンナイフを取り出し、イリスの縄の結び目を解いた。イリスは気を失ったまま、湖



底から数十センチのところの浮かび、水の流れに乗って漂っている。ハリーは彼女の体じゆうを注意深く観察した。——どこも怪我をしているところはない。彼は安堵して肩の力を抜いた。

イリスを水中人から離れたところに浮かばせると、彼はキョロキョロと辺りを見回した。——他の代表選手が来る気配はない。『何をもたもたしているんだ?』——焦ったハリーはエロイーズの方に向き直り、ペンナイフを取り出した。するとたちまち屈強な灰色の手が数本、彼を抑え込んだ。五、六人の水中人が、緑の髪を振り立て、声を上げて笑いながら、ハリーをエロイーズから引き離そうとしていた。「自分の人質だけを連れて行け」イリスの方へ顎を向け、水中人の兵士が笑った。

「他の者は放っておけ」

「それはできない!」

ハリーは激しい口調で言い返したが、その声は泡の中でわんわんと反響するだけだった。水中人は「一時間を過ぎれば大切なものは二度と戻らない」と歌った。もし他の代表選手達が助けられなければ、エロイーズ達は永久に失われてしまう。——冷静に考えれば、いくら試練とは言っても、ダンブルドアが人質を危険に晒すような事をする筈がないと分かりそうなものだが、この暗く不気味な湖底と、槍を持った恐ろしい外見の水中人に取り囲まれるといった異常な状況に置かれたハリーは、歌の内容は真実であるとすっかり信じ込んでしまっていた。

「他の人達を死なせる訳にはいかない!お願いだ!」

ハリーは邪魔をする水中人達を振り払おうともがいたが、彼らはますます大声で笑いながら、少年を押しえつけた。銀色の髪の小さな女の子は、透き通った真つ青な顔をしている。ハリーは必死になって周囲を見回した。——他の選手はどうしたんだ?イリスを湖面まで連れて行ってから、戻ってエロイーズ達を助ける時間はあるだろうか?だが戻った時、また彼女達を見つける事ができるだろうか?

その時、水中人が興奮してハリーの頭上を指差した。見上げると、セドリックがこちらを泳いでくる。同じ「泡頭の呪文」を使ってい

るのだろう、頭の周りに大きな泡が付いていた。彼の顔は、その中で奇妙に広がって見えた。

「道に迷ったんだ」パニック状態のセドリツクの口がそう言っている。「フラーとクラムも今来る！」

ハリーは心の底から安堵した。セドリツクがチョウの縄を切るのに手間取っているのを見ると、ハリーは躊躇いなく自分のペンナイフを差し出した。セドリツクは驚いたように目を見開いて、ハリーに「ありがとう」と口を動かしてお礼を言った。そしてすぐさま縄を解き、チョウを引っ張り上げ、姿を消した。——あと二人。ハリーは油断なく周囲を見回した。

やがて水中人の恐怖の叫び声が聴こえた。思わず振り返ると、水を切り裂くように近づいてくる怪物のようなものが見えた。——水泳パンツを履いた胴体にサメの顔、恐らくクラムだ。クラムは真っ直ぐにエロイーズのところに来て、縄に喰いつき、噛み切ろうとし始めた。しかし残念ながら、クラムの新しい歯は、「ロープを切る」といった繊細な作業に凡そ適していないようだった。このままではエロイーズが怪我をしてしまう。ハリーはまたも飛び出して、クラムにペンナイフを渡した。クラムは大きなサメの頭をこくと下げるとナイフを受け取り、縄を解いて、エロイーズの腰のあたりをむんずと抱え、湖面目掛けて急速浮上していった。

——さあどうする？ハリーは必死だった。フラーが来ると確信できるなら……。しかしそんな気配はまだない。『もうこうするしかない』——ハリーはクラムが放り出したペンナイフを掴み、少女の元へ向かった。しかし水中人達は少女を取り囲み、彼に向かって首を横に振った。

「邪魔するな！」

ハリーは思わず杖を引き抜いて、声にならない声で怒鳴った。すると水中人はハリーの言っている事が分かったのか、急に笑うのを止めて、彼の杖をこわごわと見始めた。——手応えありだ、ハリーは思った。彼らは明らかに杖を持った自分を怖がっている。どうやら彼らは、魔法についてはマグルと同じ程度の知識しか有していないらしい

い。

ハリーが大袈裟な動作で杖を振ると、水中人は蜘蛛の子を散らしたように逃げて行った。すかさず飛び込んで少女の縄を解くと、彼はイリスと少女の腰をそれぞれの腕で掴んで、湖面を力いっぱい蹴り上げた。

しかしそれは、なんともノロノロとした作業だった。いくらハリーが必死になって足をバタつかせても、イリスとフラーの妹は、ジャガイモをいっぱい詰め込んだ袋のように彼を引きずり下ろした。湖面までの水は暗く、まだかなり深いところにいる事は分かっていたが、ハリーはしっかりと頭上を見つめていた。やがて水中人が一緒に上がって来た。彼が水と悪戦苦闘するのを眺めながら、周りを楽々泳ぎ回っている。——時間切れになったら、水中人は自分を湖深く引き戻すのだろうか？ハリーは疲れて朦朧とした意識で、そう思った。水中人は人を食うんだっけ？泳ぎ疲れて、何度も足が攣った。イリスと少女を引っ張り上げようとしているので、肩も激しく痛んだ。

やがて息が苦しくなってきた。冷たい水がますますハリーの上に押し掛かり、不気味な笑い声がかぐくもって聴こえて来る。“泡頭の呪文”の効果が切れたのか、水が口に、そして肺にどつと流れ込んで来た。——ダメだ、呼吸ができない。今にも力尽きようとするハリーの目に、明るい陽光が飛び込んで来た。湖面に映る銀色の光が太陽のように眩く輝いている。その美しい光景は、彼に“ある情景”を思い出させた。

去年に行われたクイディッチの試合で、ハリーがディメンターに襲われて深い絶望に苛まれた時、イリスは“守護霊”を出して自分を守ってくれた。ハリーは清らかな銀色の光の中で、成長を重ねる中で自分がいつの間にか忘れてしまっていた“大切な思い出”を見た。

彼が魔法界に飛び込んでから今までに出会った、大勢の人々との素晴らしい記憶も。

イリスはハリーにとって、人生で一番最初に来た“友達”だった。ダイアゴン横丁で、彼女は自分に誕生日のお祝いをしてくれた。あの時の感動を、ハリーは生涯忘れる事はないだろう。——イリスは何も知らず、何も持っていないかった僕に、沢山のものを教えて、与えてくれた。僕を本当に愛してくれるシリウスと一緒に暮らせるようになったのだから、間違いなく彼女のおかげだ。僕は今、沢山の人々の愛に包まれて、とても幸せだ。

——その時、ハリーは“イリスに愛の告白をして振られてしまった事”が、急にちっぽけなものに感じられた。どうして僕はそんな下らない事に心を痛め、傷ついていたんだ？イリスの想いが誰に寄せられるかなんて、どうだっていいことじゃないか。イリスが僕を大切に想ってくれているのは確かだし、僕だってそうだ。“恋人”だなんて——僕はそんなものよりずっと深く、彼女を愛している。ハリーはやつと、本当に人を愛するという事に気付いた。

ハリーは最後の力を振り絞り、両足を思いきり強く、早くバタつかせて、水を蹴った。筋肉が抵抗の悲鳴を上げている。頭の中が水浸しで、意識がますます遠のいていく。ハリーは歯を食い縛り、二人の少女の腰を強く引き寄せた。止めることはできない、止めてたまるか……。

☆

その時、ハリーの頭がついに水面を突き破った。素晴らしい、冷たく澄んだ空気が、彼の濡れた顔をチクチクと突き差すようだった。彼は思いつきり息を吸い込んだ。そして渾身の力を振り絞って、イリスと少女を水面に引き上げた。ハリーの周りをぐるりと取り囲んで、ポウボウとした緑の髪の毛の頭が、一斉に水面に現れた。皆、彼に笑いかけている。

スタンドの観衆が大騒ぎしていた。叫んだり、悲鳴を上げたり、総立ちになって吹いているようだ。ハリーの目の前で、イリスが口から水をピューツと吹き出して、明るい日差しに目を瞬いた。そして彼を見る

と、にっこり微笑んだ。

「お疲れさま、ハリー！助けてくれてありがとう。・・・あれ？」

イリスは目を瞬かせて、少女を心配そうに見つめた。少女はひどく混乱して怖がっているようで、イリスの肩をギュッと掴み、彼女の影にさっと隠れた。

「ガブリエル、大丈夫？どうしてハリーと一緒にいるの？」

「フラーが現れなかったんだ。僕、この子を残しておけなかった」

ハリーが咳き込みながら言うのと、イリスは驚きの余り目を丸くさせ、それから誇らしげに彼を見て笑った。

「さすが、私の自慢のお兄ちゃん！」

イリスは言ってしまったから、気まずそうに顔を赤らめて、俯いた。——いつも兄のように思っているから、つい本当に口に出してしまった。しかしそれを聞いたハリーは、嬉しそうにイリスの頭を撫でてくれた。

「そうさ。僕は君の兄で、君は僕の大切な妹だ」

二人は幸せそうに笑い合った。『イリスが僕の妹』——その言葉は何の障害もなく、自分の心の奥にストンと収まった。そうだ、彼女は“僕の妹”なんだ。ハリーは愛おしげにイリスを見つめた。世界でたった一人の——とても大切な——僕の小さな妹。それで充分じゃないか。

それから二人は少女を引っ張り、岸へ泳いで行った。二十人の水中人が、ハリーを祝福するかのよう歌いながら、その跡を護衛兵のように付き添った。岸辺ではマダム・ポンフリーがスニッチのように素早く動き回り、セドリック達の世話をしている。ダンブルドアとルードがハリー達を岸に引き上げ、にっこりと笑いかけた。

「ガブリエル、ガブリエル！」

マダム・マクシームの制止を振り切つて、フラーが真っ青な顔で、寒さに震える少女をしつかりと抱き締めた。ツンと取り澄ました普段の姿からは想像もつかないほど、今のフラーはひどく取り乱れていた。美しい顔や白い腕は切り傷だらけで、ローブもあちこちが破れていたが、全く気にもかけていない様子だった。

「水魔なの、私襲われて……ああ、ガブリエル……もう駄目かと……」  
フラーの美しい目が、ハリーを見つめた。

「あなたは私の妹を助けてくれました」フラーは声を詰まらせた。

「あの子があなたの人質ではなかったのに。ああ、メルシーありがとうございますボーキュー」

感極まったフラーは身をかがめて、ハリーの両頬に二回ずつキスをした。そのタイミングでシリウスとロン、ハーマイオニー、ジニーがやって来た。ジニーは勿論、その様子を見てぶんぶん怒っていた。シリウスが大型犬のようにわしわしとハリーの頭をかき混ぜていると、ルードの魔法で拡大された声が辺り一帯に響き渡った。

ハリーは代表選手の中で一番最後に到着し、一時間の制限時間も大きくオーバーしていたが、水中人の長の報告によれば——なんと彼は最初に人質が囚われた場所に到着していて、そして遅れたのは自分の人質だけでなく、全部の人質を安全に戻らせようと決意したためだという事が解り、ほとんどの審査員がその気高い行為に高得点を付け、なんとハリーはセドリックと同点の一位となった。観客や審査員、代表選手の皆は、ハリーを暖かな目で見つめ、惜しみない歓声と拍手を送った。唯一、カルカロフだけが、仏頂面で彼を睨み付けていた。シリウスはますます喜び勇んでハリーを抱き締め、彼は恥ずかしがって必死にもがいた。

☆

それから月日は平和に流れた。シリウスにホグズミード村を隅々まで観光案内してもらったり、“ダービツシュ・アンド・バングズ魔法用具店”でハリーの時計を修理してもらったりした。スキーター女史は、あの事件以降、ホグワーツ関係の人間を取材するのにすっかり懲りたようだった。その代わりに、彼女は熱心に魔法省についての記事を書き立てるようになった。

ハーマイオニーから借りた今朝の新聞にも、“クラウド氏の不可解な病氣”、“魔法省の魔女バーサ・ジョーキンス、いまだに行方不明、いよいよ魔法省大臣自ら乗り出す”という大きな見出しが踊っている。イリスはフレンチトーストを切り分けながら、記事の内容をざっと読み込んだ。——“クラウド氏は十月以来、公の場に現れず”、“

家に人影はない”、” 聖マンガ魔法疾患傷害病院はコメントを拒否”、” 魔法省は重症の噂を否定”……。

「まるでクラウチが死に掛けているみたいだ」ハリーは考え込んだ。

「イリス、大変だぞ。君の継父が危篤みたいだ。いや、夫か？」ロンはソーセージを齧りながら首を傾げた。

「どうせ過労で臥せってるんだろ。」クラウチは働き過ぎだ” ってパーシーが嘆いてたし」

「ウインキーをクビにした当然の報いじゃない？」

ハーマイオニーは冷たく言い放ち、素知らぬ顔でトーストにマーマレードを塗り始めた。——イリスは” 炎のゴブレット” が代表選手の名前を吐き出した日に見かけた、クラウチの姿を思い出した。彼は遠目にも分かるほどに、げっそりと痩せこけていた。本当に大病を患っているみたいだ。イリスは今頃地下にいて、せつせと朝食を作ってくれている筈のウインキーを思い出し、心を痛めた。——もし彼女がこの事を知ったら、どんなに嘆き悲しむだろう。

☆

やがて冬は雪解けと共にゆっくりと去り、暖かな春がやって来た。これまでになく穏やかな天気が続ぎ、イリス達はきつく巻き付けていたマントを脱いで、肩に掛けている事の方が多くなった。ハグリッドはあの事件以来、生徒の心を掴む魔法動物は” 牙も毒もない生き物に限る” という事をやっと理解してくれたのか、今度は” ニフラー” —— 光るものが大好きな、フワフワの黒い可愛らしい生き物。もぐらに似ている——を使った、面白い授業を行った。生徒達がそれぞれ選んだニフラーに、畑の中に埋めた金貨を探させ、一番多くの金貨を持ってきた者にご褒美を与えるというものだ。

それは今までの「魔法動物飼育学」の中で、最高に楽しい授業となった。ニフラーはとても可愛く、土の中を魚のように自在に泳ぎ回って、這い出しては、自分の主人達の手に金貨を吐き出した。ロンのニフラーが特に優秀で、授業の終わりに彼は賞品として” ハニーデュークス” の大きな板チョコをもらった。終業のベルが鳴った後、四人は残ってハグリッドがニフラーを箱に戻す作業を手伝った。そしてハ

グリッドの小屋で、紅茶と一緒に板チョコを皆で山分けして齧っている時、ロンがうつとりとした顔でこう言った。

「ねえ、ハグリッド。あのニフラうって奴、ペットとして飼えるのかな？」

「おふくろさんは喜ばねえぞ、ロン」ハグリッドはニヤツと笑った。

「家の中を掘り返すからな、あいつらは。おふくろさんのペンダントをお宝だと持って来たって、それを売る訳にはいかないだろうが？」

ロンはがっくりして落ち込み、ハグリッドは明るい調子で笑った。

——やっといつものハグリッドに戻ってくれたような気がして、イリス達はホツと安堵して笑い合った。

☆

やがてイースター休暇が始まった。先生方がイースターエッグの代わりに与えた、山盛りの宿題をやっつけながら、イリス達は休みの日々を精一杯楽しんだ。ある朝、いつものように大広間で食事を摂っていた四人は、フクロウが重そうによるめきながら運んできた——モリー夫人お手製のチョコレートエッグと手紙を受け取った。イリスの卵はドラゴンの卵よりも大きく、中には手作りのヌガーがぎっしり入っていた。口いっぱいにヌガーを頬張りながら、イリスは自分宛に届けられた“もう一つの手紙”を読んだ。

朝食を終えると、イリスはハリー達に断りを入れて、一人で医務室へ向かった。そこにはマダム・ポンフリーと共に、リーマスとコマイ、そしてアステリアが待っていた。——イリスの心に、もう迷いはなかった。

「私、協力します」

「イリス。本当に、私・・・」

アステリアは青ざめた顔に涙を湛えて、言い淀んだ。イリスは微笑んで、彼女の手を握った。——もう後悔はない。あの特別な夜の思い出は、私の心の内で燃え盛る“新しい魔法の炎”になった。本当にドラコを愛してる。だから私は、彼が幸せになる未来を望む。

「あなたの呪いはきつと治るよ、アステリア。そしてしわしわのおばあちゃんになるまで長生きして、好きな人と一緒に暮らすの・・・」



幸せになつてね」

アステリアは顔をくしゃくしゃに歪めて泣き出して、イリスにしがみ付いた。——その日以降、イリスはリーマスに“付き添い姿くらまし”をしてもらつて、定期的に聖マンゴへ通い、コマイの研究に協力する事となつた。

☆

いよいよ“第三の課題”が一ヶ月前に迫ると、ハリーは他の代表選手達と共に呼び出され、最後の課題は——クイディッチ・ピッチに創り出された“魔法の迷路”を突破し、迷路内に仕掛けられた様々な障害を掻い潜り、“炎のゴブレット”を一番最初に掴む事だと、ルードに説明された。かくしてイリス達は再び、空き教室に集い、危険な迷路を潜り抜けるための様々な呪文を練習するようになった。

そして課題が行われる日がますます近づいたある日の夕方、聖マンガでの定期検査を終えたイリスは、ホグワーツの校門前でリーマスと別れを告げ、城へ向かつて歩いていった。コマイは検査中、魔法薬学に關する新しい知識をたつぷりと与えてくれた。イリスはいつも夢中で聴き込み、その様子に感心した彼は今日、“将来、魔法薬学者になつてはどうか”と勧めてくれたのだった。

『魔法薬学者、良いかもしれない』——イリスは嬉しくなつて、顔を綻ばせた。今度、授業の終わりにスネイプ先生に相談してみようかな。先生は、一体なんて言うだろう。イリスが想像を膨らませながら、“禁じられた森”の傍を通り抜けようとした時、視界の端で何かが動いた。——木立の中で、何かが蠢いている。イリスは反射的にその方向を見て、大きく息を飲んだ。

大きな櫨の木の影から、突然、男がヨロヨロと現れた。一瞬、イリスには誰だか分からなかったが、やがて気付いた。——信じられない、クラウチ氏だ。彼は何日も旅をしてきたように見えた。ローブの膝が破け、血が滲んでいる。顔は傷だらけで、無精髭が伸び、疲れ切つて灰色だ。きつちりと分けてあつた髪や口髭は、無造作に伸び、汚れ放題だつた。しかしその奇妙な格好も、クラウチの行動の不可解さに比べればなんでもない。絶えずブツブツと何かを呟きながら、身振り

手振りで、彼は自分にしか見えない誰かと話し込んでいるようだった。——明らかに普通の状態ではない。イリスは急いで駆け寄った。「それが終わったら、ウェーザビー、紅茶を一杯もらおうか。妻と息子がまもなくやって来るのでね。今夜はファッジご夫妻とコンサートに行くのだ」

「クラウチさん！」

イリスは大声で呼びかけ、クラウチの肩を小さく揺さぶった。彼はイリスに目も向けず、木の幹に向かって話していたが、やがてよろめいて、膝を突いた。イリスが再度呼びかけたが、反応はない。正気を失った目はグルグルと回り続け、涎が一筋、だらりと顎まで流れている。——この人は病気なんだ。イリスが慌てて杖を引き抜き、スネイプに“守護霊”を送ろうとした瞬間、突然クラウチがイリスのローブをぐっと握って引き寄せた。その目は彼女を通り越して、あらぬ方向を見つめている。

「ダンブルドア！」クラウチが喘いだ。

「私は——ダンブルドアに——会わなければ。馬鹿な事を——してしまった」

「立てますか、クラウチさん。一緒に行きましょう」

——クラウチは一言一言、言葉を発する事さえ苦しそうだった。イリスはクラウチに声を掛け、立ち上がりさせようと力を込めた。すると、クラウチの目の動きがピタリと止まり、こちらを見た。

「誰だ、君は？」囁くような声だ。

「……イリス・ゴントです」

『自分の名前を言つて、クラウチさんが怖がつてパニックになつたらどうしよう』——そう案じながらも、素直にイリスが自分の名前を告げたとたん、クラウチの口からか細い悲鳴が漏れた。そして彼ははつきりとした声で、こう叫んだ。

「今すぐ——ここから——逃げなさい！これは——罠だ！」

クラウチの言葉が終わるか終わらないかの内に、イリスの背後から赤い光線が襲い掛かった。イリスは反射的に杖を振り、“守りの呪文”を展開して辛くも防いだ。木立の奥に、自分に杖先を向けた、一人

の魔法使いが立っている。彼女は目を凝らし、そして息を飲んだ。

——ムーディ先生だった。杖先を一ミリもずらす事なく、彼は確かな足取りでイリスに迫った。『どうして先生が私に攻撃を？』——イリスは余りのショックに頭がぼうつとなり、身体が氷のように冷たくなつていくのを感じた。

「ゴーント。お前を然るべき場所へ連れて行かねばならん。杖を捨てろ」

ムーディはクラウチに一瞥をくれた後、イリスを見据えた。『恐らくムーディは、君を警戒しているのだろう』——かつてスネイプ先生に掛けられた言葉が、心の中で残酷に響き渡った。きつと先生は、私がクラウチさんに害を成したのだと思つているのに違いない。イリスは今にも倒れそうなほどに震える足を何とか踏ん張つて、ギユツと唇を噛み締めた。“然るべき場所”——それはアズカバンの事だ。イリスは必死に考えを巡らせて、口を開いた。

「先生、私はクラウチさんを傷つけていません。突然、森の奥から現れたんです。彼はダンブルドア先生に会いたがっています。早く連れて行かないと」

「杖を捨てろと言っているのだ、ゴーント」ムーディは冷ややかな口調で、そう繰り返すだけだった。

「お前を傷つけたくはない」

ムーディの青い目は、かつてクイディッチ・ワールドカップで“闇の印”が打ち上げられた夜、クラウチ氏が自分に向けた目と、“同じメッセージ”を放っていた。——自分を悪い魔女だと信じて疑わない目だ。イリスは観念して、杖を下ろそうとした。これ以上、ムーディと膠着状態を続けても埒が明かないし、クラウチさんの心身の状態が一番心配だ。きつと私はムーディに失神術を掛けられるけれど、身の潔白はスネイプ先生やダンブルドア先生がいざれ証明してくださるだろう。クラウチさんは医務室で然るべき治療を受けられる。この方法が一番良いんだ。

『心の内が見えぬ者は信じるな。そしてそれは、私も含めてだ』——その時、イリスに警告を放つかのように、スネイプの言葉がふと耳元

でございました。イリスは杖を握り直し、ムーデイの心を“盗み見”しようとしてみた。しかし見えない壁に弾かれ、進む事ができない。——心を閉じられている。

『表面上は優しい笑顔を浮かべているが、その裏で悪しき事を考える者は、吐いて捨てるほど存在する』——カルカロフの愛想の良い笑顔が蘇り、イリスはごくりと唾を飲み込んで、ムーデイを見据えた。それから彼女は勇気をもって、口を開いた。

「先生が隠した心を見せていただけのなら、私は杖を捨てます」

その言葉を聞いた瞬間、クラウチを観察していたムーデイの魔法の目が、プルプルと揺れながらゆつくりと動き、イリスを射抜いた。鋭く突き抜けるような視線だ。やがて歪んだ口元に、ゾツとするような笑いが浮かんだ。

「そうだな」

ムーデイの声が不意に高くなり、いつもの唸り声ではなくなった。

「もう隠す必要などない」

ムーデイはそう言うと、淀みない動きで杖を振るった。たちまち淡い輝きが杖先から大量に噴き出て、見る間に空を覆い、真珠色にきらめく大きなドームを創り上げた。まるで鳥籠のようだ。警戒心も露わに杖を構えたイリスは、ムーデイの普通の目の奥に“虹色の煌めき”を見出した。

——イリスの知らない男性が、ピーターの抱えている赤子のようなものの小さな手に、恭しく口付けている。恍惚とした表情で左袖をまくり、“闇の印”を見せている。男性はピーターと共にムーデイを襲い、彼の髪の毛を切り取って、瓶の中に入れて飲んだ。すると彼は見る間に、年老いた魔法使いの姿へと変身していく。——イリスは全身が総毛立った。この人はムーデイ先生じゃない、“ポリジュース薬”を飲んだ偽物だ！

「あなたは誰?！」

イリスは叫んだ。しかしムーデイは応える事無く、イリスに“失神呪文”を放った。再びそれを“守りの呪文”で弾き飛ばすと、イリスは素早く木の裏に逃げ込んで救援信号を放った。しかし赤い光はス

ネイプに届く事無く、ドームの内側で夢く砕け散った。——とても強靱な境界だ。イリスは恐怖の余り、木立の中で震え上がった。この人は何が何でも、自分達をここから出させない気なんだ。彼女は杖を握り締め、自分の心の炎に問い掛けた。誰も助けてくれる人はいない。私は一体、どうするべきなの？

『戦うしかない』——やがて魔法の炎は、静かにそう応えた。イリスは覚悟を決め、騎士のように杖を顔の前で構えて、木の影から飛び出した。その構えはスネイプとの戦闘訓練の時、彼が良くしていたものだった。イリスは多くの呪文と一緒に、その動作も無意識の内に習得していたのだ。しかしそれを見たたん、ムーデイは激しい嫉妬に狂ったような顔で、憎々しげに叫んだ。

「あの卑怯者と同じ構えだ。お前のローブには、あの陰気臭い薬草の匂いが染みついている！」

二人の杖先から眩い光線が迸り、中空で激しくぶつかり合った。最初は拮抗しているように見えたが、見る間にムーデイの呪文がイリスの呪文を喰らい尽くしていく。力量差は歴然としていた。今にも自分の杖先をムーデイの光線が舐めようとした時、イリスは辛くもスニジェットに変身して木立へ逃げ込んだ。彼女はすぐさま人間の姿に戻ると、茂みの中からそつと杖を出して、ぼんやりと佇むクラウチに“守りの呪文”を唱えた。

「本来は俺が教える筈だった。あの裏切り者の蛆虫ではなく、この俺が！」

余りの悔しさに齒噛みするムーデイの魔法の目がグルグルと激しく動いて、茂みの中に隠れたイリスを射抜いた。ムーデイは茂みを跡形もなく吹き飛ばし、恐れおののくばかりの少女を引き摺り出すと、その腕を掴んで強く振り上げた。腕に強い痛みが走り、杖を落としてしまったイリスは、思わずムーデイの目を見て、恐怖に喘いだ。——その目は、激しい劣情と嫉妬の感情に渦巻いている。

「まさかお前はこれ以上の事を、奴から学んでいるのではあるまいな？」

その言葉の意図は分かり兼ねたが、イリスはムーデイが創り出した

縄に縛られる前に、何とかスニジェットに変身して擦り抜け、人の姿に戻って杖を回収し、再びスニジェットになって飛び去る事で難を逃れた。——考えちゃダメだ、そんな暇なんてない。イリスは必死になって、どこかに抜け道はないかとドームじゆうを飛び回った。ムーデイは狂気に満ちた笑みで、その様子を見つめている。

「飛び回ったところで意味はない。お前の可愛いシーカーの友人は助けに来てくれんぞ」

しかしイリスは、ただ逃げ回るためだけに飛んでいたのではなかった。戦闘訓練の中でスネイプが教えてくれた、“三つの教え”を一生懸命思い出していたのだ。

スネイプは戦闘時において、イリスにこれから教える“三つのルール”を遵守するようにと命じた。一つ目は『敵と決して正面で打ち合わない事』。これはあくまで訓練であり、本番とは全く違う。スネイプはイリスの身の安全を第一に考えて戦うが、敵はそんな気遣いをしてくれない。戦いの技術は様々な場数を踏んでこそ、磨かれるものだ。まだその経験が浅い内は、敵と真正面から向き合うのは危険だと、スネイプは説いた。

二つ目は『スニジェットと人間の姿とに“交互変身”して呪文を繰り出し、変則的な動きを見せる事』。イリスが“動物もどき”として変身するスニジェットは、常人の目にも留まらぬ超スピードで動き回る事が出来る。それに着目したスネイプは、その姿で高速移動して敵の攻撃から身を守り、そして人間の姿に戻って攻撃する、というパターンをイリスにしつかりと覚え込ませた。このトリッキーな動きは敵に読まれにくい。

そして三つ目は『戦いを長引かせない事』。まだ戦い自体に不慣れないイリスは、力の抜き所を知っている敵と異なり、一つ一つの呪文や動作に全力を注ぎ込んでしまう。人間とスニジェットとに“交互変身”する方法は魔法力を食うため、長期戦になればイリスの方が力尽きる。おまけにいくら変則的とは言っても、卓越した能力を持つ魔法使いなら、いずれはイリスの行動パターンを読んでしまおうだろう。そうなれば、彼女は負ける。

“正面から打ち合わない”、“スニジェットに変身して逃げ、元の姿に戻って攻撃”、“短期決戦で終わらせる”——イリスは、これらのスニエプの教えを心の中にしっかりと叩き込んだ。半透明のドームの外に、懐かしい城の灯りが見える。絶対に生き残って、ハリー達のところに帰るんだ。小さな涙を散らし、スニジェットは関節を切り替えて方向転換し、ムーデイに向かって飛んだ。——さあ、作戦開始だ。

「ステューピファイ、麻痺せよ！」

イリスはスニジェットから人間の姿に戻り、ムーデイに“失神呪文”を放った。あえなく呪文は弾かれたが、すぐさまスニジェットに変身したおかげで、彼女は自分に向けて放たれた呪文をひらりと避ける事が出来た。そうしてイリスはドームじゅうを自在に飛んで逃げ回り、時折人間の姿に戻ってはムーデイに呪文を繰り出した。

「ええい、ちょこまかと……！」

ムーデイの魔法の目は、高速移動するスニジェットの跡を追って、とても忙しそうにグルグルと回っている。——その様子を見た時、イリスは“ある事”に気付いた。あの魔法の目はあらゆるものを見透かすと授業でムーデイ先生が言っていたけれど、その目が捕えきれないもの——例えば、“視界の外にあるもの”までを見通す事はできないんだ。

イリスはポケットからWWWの商品「だまし杖」をありったけ掴み取り、ムーデイに投げつけた。それらには“錯乱の呪文”が掛けてあった。『ムーデイが自分を握った魔法使いだ』と勘違いした杖達は、それぞれ様々な動物を模したブリキの人形に変身して、彼に襲い掛かっていく。それらを打ち払った後、ムーデイは再び魔法の目でイリスを探し、やがて頭上を振り仰いで、大きく目を見開いた。

——妖しい輝きを放つ月の前に、スニジェットから人の姿に戻ったばかりのイリスが、金色の粒子を散らしてふわりと浮かんでいた。重力に従って落下しながら、彼女は顔のすぐ横に杖をしっかりと添えて、“突撃の構え”を見せた。

「力比べか、面白い！」

ムーデイは悠々とした笑みを浮かべると、イリスが放った光線に、自らの光線を克ち合わせた。かくして二つの呪文は中空で激しくぶつかり合い、やがてムーデイの呪文がイリスの呪文を喰らい始めた。勝利を確信したムーデイの体勢が、不意にグラリと大きく傾いた。訝しげぶり、と生温く不愉快な感触が、自分の下半身を覆っていく。訝しんだ彼が思わず下を見ると、自分の膝半分までが、なんと沼地に沈んでいた。——それはイリスが「だまし杖」の群れに紛れて、彼の足元に放り投げた「携帯沼地」だった。優秀なWWWの悪戯商品は、ほんの一秒、ムーデイの注意を逸らした。だが、たったそれだけで、戦局は充分に変化した。

次の瞬間、ムーデイは自分の杖腕に熱い痛みが走り、ハツと我に返った。彼の注意を逸らし、呪文の威力が一時的に弱まった事で、イリスが放った“武装解除呪文”が勝つたのだ。かくしてムーデイの杖は遠くの方に弾き飛ばされ、イリスの杖先から噴き出した魔法の縄が彼をきつく縛り上げて、沼地から地面へ放り上げる。イリスは頭上を覆う魔法のドームが少しずつ薄れていく様子を確認してから、ムーデイに杖を向けた。すると彼は抵抗するどころか、地面に転がったまま、笑い始めた。

「素晴らしい、グリフィンボールに五十点与えよう。縄を解いてくれないか？ 頑張ったお前にキスをしてやりたい」  
「ふざけないで！」

イリスは疲労困憊の余り、今にも倒れそうなほどに霞んだ意識を何とか奮い立たせ、ムーデイに怒鳴った。——ムーデイは丸腰で、自分は杖を持っている。圧倒的に有利なのはこちら側である筈だ。しかし、イリスが自分にそう言い聞かせても、安心できないほどの——底知れない狡猾さと不気味さを、彼はまだ充分に有していた。

「あなたは誰ですか？」  
「そう急かすな」ムーデイがあやすように優しく言った。  
「直に分かる」

『直に分かる？』——その言葉の意図が分からず、イリスが躊躇って身じろぎしたとたん、ムーデイの顔が変わり始めた。傷跡は消え、肌



が滑らかなになり、削がれた鼻は正常な形になり、白髪交じりの鬘は頭皮の中に引っ込んで、代わりに豊かな薄茶色の髪が生え揃った。木製の義足がゴロンと転がり、健康な足がその場所に生えて来た。次の瞬間、魔法の目が男の顔から飛び出し、本物の目が現れた。——恐らくシリウスよりやや若い位の年頃だろう、白い肌に少しそばかすの散つた、精悍な雰囲気を持つその男は、イリスをじっと愛おしそうな目で見つめ、笑った。

「俺はバーテミウス・クラウチ。お前の夫となる男だ」

次の瞬間、イリスは背後から襲った赤い光線に撃たれて、意識を失った。——少女の背後には、老いたクラウチがぼんやりと立っていて、杖先を少女に向けている。重力に従って力なく倒れ伏した少女を、縄から抜け出したクラウチが優しく抱き寄せて、その白い頬をゆつくりと撫でた。激しい熱を帯びた目が、イリスに注がれている。「この時をずっと待ち望んでいた。俺がどれほどに、お前を愛しているか……」

クラウチは苦しそうに顔を歪めてそう囁くと、かすかに開いたイリスの唇に力強く口付けた。——積年の想いを刻み込むかのように、長く深い接吻を終えた後、名残惜しそうに離れた二つの唇の間には銀の糸が細く伝っていた。

「お、お前は狂っている！」

不意にか細い悲鳴が上がり、クラウチは眉を顰めて振り返った。自分の父親が死人のように青ざめた顔でこちらを睨み付け、口の端から涎を散らしながら泣き喚いた。

「その子はたった十四歳の子供だ！私が……私が、間違っていた。その子は“闇の魔女”ではなかった。お前達のしている事は、常軌を逸している！お前は、あの人に取り憑かれています！呪われたまま、時間が止まっている！狂っている！」

「ああ、そうさ。俺は狂っている」クラウチは悪びれもなく応えた。「だがそうしたのは、お前だ」

老いたクラウチはその言葉を聴いた瞬間、絶望に呻いて、その場にならずくまった。クラウチはイリスをそっと地面に横たえようと、老いた

クラウチに杖を向け、一切の躊躇いも見せずに“死の呪文”を唱えた。恐ろしい緑の閃光が迸り、命を吸い取られた魔法使いはどさりと地面に倒れ伏した。——たった一人となったバーテミウス・クラウチはしばらくの間、じっと父の亡骸を眺めていた。その様子を、妖しい輝きを放つ月だけが静かに見下ろしていた。

## P e t a l l 1 5 . 第三の課題（前編）

“第三の課題”が行われる日の前日はとても良い天気だった。金色の眩しい日光が窓から差し込み、廊下に太い縞模様を描いている。窓の外は抜けるような青空だ。大広間で昼食を摂った後、イリスとハーマイオニーは連れ立って「数占い学」の授業に、ハリーとロンは「占い学」の授業に向かった。

北塔の天辺にある「占い学」の教室はいつも通り薄暗く、そしてうだるような暑さだった。梯子を昇って室内に顔を出すや否や、焚きしめられた香気にノックアウトされたハリーは、そつと鼻を摘まみながら、窓際に設置された肘掛け椅子にどさつと座り込んだ。それからトレローニー先生に気付かれないうちに窓をほんの少し開け、僅かに吹き込む風が顔の周りを撫でるようにした。

トレローニー先生は“今日の火星の位置と支配力”の説明をするために教室内の灯りを落とし、机の下から硝子のドームに入った太陽系のミニチュア模型を取り出した。九個の惑星と月、そして燃えるような太陽が、硝子の中に浮いている。とても幻想的な光景だった。ハリーはゆったりと寛ぎ、トレローニー先生が火星と海王星が惚れ惚れするような角度を構成している事について熱心に説明しているのを、ぼんやりと眺めていた。ムツとするような香気が押し寄せ、そよ風が頬を優しく撫でていく。彼は段々眠くなり、やがて束の間の夢を見た。

☆

——ハリーは一羽のフクロウの背に乗って空高く舞い上がり、高い丘の上に立つ蔦の絡んだ古い屋敷へと向かっていた。彼とフクロウは館の上の階にある、硝子の割れた窓に辿り着いて中へ入った。それから一番奥の部屋を指して、薄暗い廊下を飛んだ。わずかに開いたままの扉を擦り抜けてその部屋に入ると、全ての窓に板が打ち付けてあるのが見えた。フクロウは部屋の中央にハリーを下ろすと、暖炉の傍に設置された肘掛け椅子の方へと飛んで行った。椅子の背はこちらに向けられていて、誰が座っているのかは分からない。フクロウは

椅子の縁に留まると、片足に結わえ付けた小包を奥の方へ差し出した。

暖炉の炎に照らされて、椅子の近くに二つの黒い影が蠢いていた。一つは巨大な蛇、もう一つは小太りの男だった。禿げかけた頭、薄い水色の目に尖った鼻——お尋ね者の魔法使い、ピーター・ペティグリュードだ。ペティグリュードはカーペットの上でうずくまり、苦痛に喘いですすり泣いている。

「ワームテール、運の良い奴よ。お前はしくじったが、全てが台無しにはならなかった」

冷たく甲高い声が、肘掛け椅子の奥の方から聴こえた。何かを旨そうに飲む音がする。

「役立たずのお前とは違い、あれの忠実なる働きは実に素晴らしい。俺様に粹な土産物を捧げ」

椅子の奥の方から、骨のように青白く細い腕が突き出した。その手には小さな硝子製の薬瓶が握られている。中にはどす黒く赤い液体が揺れていた。

「お前のしくじりを見事に挽回した。奴は死んだ」

「ご主人様」ペティグリュードが喘いだ。

「私めは、私めは、真に嬉しゅうございます。そして申し訳なく……」  
「ナギニ」硝子瓶を持った腕が、椅子の背の奥に引っ込んだ。また何かを飲む音がして、再び冷たい声が出た。

「お前は運が悪い。ワームテールをお前の餌食にはしない。だが心配するな。もうじき最高のご馳走をお前にやろう。……ハリー・ポッターだ」

大蛇は満足気に目を細め、舌をチロチロと出した。空になった薬瓶が椅子の下に放り捨てられる。

「さて、ワームテールよ」ゾツとするほど冷たい猫撫で声だ。

「お前の失態は二度と許さん。だが俺様は今、とても気分が良い。お前の体を罰するのは、あと一度だけとしよう」

「ご主人様、どうかお許しを！」

ペティグリュードはその言葉に感謝するどころか、情けない悲鳴を上

げて、震えながら椅子の足元に縋り付いた。やがて椅子の奥の方から杖の先端が出て来た。ペティグリュウがそれを見て、涎を垂らして泣き喚く。

「クルーシオ、苦しめ！」

ペティグリュウは悲鳴を上げ、カーペット上でのたうち回った。まるで体中の神経が燃やし尽くされているような、凄まじい声だ。その瞬間、ハリーの額の傷が焼き鏝を当てられたかのように痛んだ。部屋じゆうに響き渡るほどに大きな声で、彼は頭をかき毟りながら絶叫した――

☆

――親友が自分の名前を叫んだような気がして、ハリーは薄らと目を開けた。気が付くと両手で顔を覆い、「占い学」の教室の床に倒れていた。彼は震えながら周りを見回し、暗がりの中にヴォルデモートが潜んでいないかと目を凝らした。それほどに生々しい夢だった。クラス全員が自分を囲んで立ち、痛々しいものを見るような目を向けている。ロンがすぐ傍に膝をついて、青ざめた顔でこちらをじつと見つめていた。

「大丈夫かい？」ロンが訊いた。

「大丈夫な訳ありませんわ！」

恐怖に凍り付いたこの教室の中で、唯一トレローニー先生だけが喜び勇み、興奮し切っていた。大きな目がハリーに近づいて、興味深げに覗き込んだ。

「ポッター、どうなさったの？不吉な予兆？何が見えましたの？」

「何にも見えませんでした」ハリーは嘘を吐いて、よろよろと起き上がった。

「医務室へ行ってきます。ひどい頭痛がするんです」

トレローニー先生はまるでご馳走を目の前で取り上げられたかのように、不満そうな顔をしたが、ハリーを止める事はしなかった。彼がロンの助けを借りながら立ち上がると、生徒達は気を挫かれたように後ずさりした。――教室を出ると、ハリーは迷いのない足取りで、医務室ではなく校長室へと向かった。また傷が痛んだり、不気味な夢

を見た時には、すぐダンブルドアに相談するようにとシリウスが教えてくれていたからだ。学校の関係者ではない自分は、早急に迎えに行けないからと。

☆

二つの占いの授業が終わった後、ハリーは二度目の夢の内容、校長室に置かれた“憂いの篩”を通して凶らずも見てしまったものや、ダンブルドアと話した事のほとんど全てを、親友達に話して聴かせた。——ダンブルドアは『きみとヴォルデモートは掛け損ねた呪いを通して繋がっている』と言った。この傷が痛むのはヴォルデモートが近くにいる時、もしくは極めて強烈な憎しみに駆られている時だとも。ハリーは前髪の上から傷跡の輪郭をそつとなぞった。確かに、あいつは夢の中でいつも怒っていた。つまり僕が見たものは夢ではなく、現実に起こった事だったんだ。

四人共、その日の夕食は余り進まなかった。翌日はいよいよ最後の試練が控えているというのに、全く寝付く事もできず、イリス達は夜遅くまで談話室の特等席にかじりついて、納得のいくまで同じ話を繰り返した。

「ダンブルドアも」例のあの人が強大になりつつあるって、そう考えてるのかい？」

ロンが囁いた。彼はそれほど寒い夜ではないはずなのに、ブルツと大きく震えて自分の体をかき抱いた。その隣に座るハーマイオニーは、もう十分間も黙り込んだままだった。額を両手で押さえ、自分の膝を見つめながら何かを考え込んでいる。イリスは無意識に右腕を掴んで、俯いた。——”たった一度”ヴォルデモートを憎んだだけで、自分は呪いに殺されかけた。もしあの人が完全に力を取り戻したら、一体、自分はどうなってしまうんだろう。

「カルカロフ、バグマン、スネイプ」ハーマイオニーが不意に口を開いた。

「かつて“死喰い人”だった達が、今この学校に集っている。シリウスが言うように、可笑しな事が沢山起こってる。でも誰がそれらの事件の犯人なのか、貴方の名前を“炎のゴブレット”に入れたのか：：

結局、最後まで分からなかった。それが一番気に入らないわ」

「おいおい、バグマンは無実だろ」ロンは明るく口を挟み、ハリーとイリスが笑った。

「スネイプ先生もね」調子づいたイリスもそう付け加えたが、今度は誰も笑わなかった。

「二人共、相手は闇の魔法使いなのよ」ハーマイオニーは深刻な表情を湛えて、口を開いた。

「彼らは皆、狡猾で嘘が上手い。表面上はニコニコして、裏では平気で人を殺したり傷つけたりできるのよ。良い人の振りなんて簡単だわ。ムーディ先生が授業で仰っていたでしょ」

「油断大敵ー」

ロンがすぐさま唇をひん曲げてムーディの真似をしたので、皆はずかず吹き出した。まるでデイメンターが訪れた後のような——暗く冷え切った雰囲気、すつと和らいでいく。ハーマイオニーは毒気を抜かれたように笑い、ハリーに労わりの眼差しを向けた。

「ホントに油断大敵」だわ。ハリー、明日は本当に気を付けて。なんだか不安なのよ。気味が悪いわ。まるで嵐の前の静けさみたい」

もう夜も更けていた。四人はお休みの挨拶をしてから、それぞれの寮へ続く階段を上がっていった。ベッドに寝転がって目を瞑った時、イリスはハリーが「憂いの篩」で見たという——「クラウチの息子の事をふと思いついた」

クラウチの息子もカルカロフと同じ「悪い魔法使い」だったのだろうか。それとも、かつてシリウスが言ったように——ただその場に居合わせただけで、本当は無実だったのだろうか。あなたの息子だと泣き叫んだ彼に、クラウチ氏はお前など息子ではないと冷たく言い放った。もし自分が無実でイオおばさんに助けを求めた時、そんな事を言われたら——イリスはそう思うだけで、胸が張り裂けそうだった。彼はアズカバンの獄中でたった一人、どんなに辛く孤独だっただろう。イリスの閉じた瞼から一筋の涙が溢れ、頬を伝って首筋に流れしていく。——そこには針で突いたように、小さな傷跡があった。

☆

翌日の早朝、大広間のグリフィンボールのテーブルは大賑わいだつた。大勢の生徒達が入れ代わり立ち代わりハリーのところへやって来るので、彼はまだ一口も飲んだり食べたりできていない状態だった。イリス達はそんなハリーを心配しつつ、自分の期末試験の勉強もしつつで、なかなか忙しかった。対抗試合の代表選手は期末試験を特別に免除されていたので、ロンはこの時ばかりはハリーを強く妬んで羨ましがった。やがてマクゴナガル先生が生徒達の波を掻き分けながら、ハリーに近づいて来た。

「ポッター、代表選手の家族が招待されて最終課題の観戦に来ています。皆さんにご挨拶なさい」

僕の家族——シリウスだ。ハリーの不安に張り詰めた表情が、パツと明るくなつた。彼は朝食を慌ただしくかき込んで、生徒達の包囲網をくぐり抜け、マクゴナガル先生と一緒に大広間の脇にある小部屋へ向かった。その様子を見送ると、イリス達も「魔法史」の試験を受けるためにテーブルから立ち上がった。

ビンズ先生がひっそりと黒板の前で佇む中、イリスは小鬼の叛逆者の最後の名前を書き終えて、ふと窓の外に視線を向けた。——シリウスとハリーが仲良く笑いながら中庭を歩いている。まるで本当の親子みたいだ。ハリーが何かを言ったとたん、シリウスは悪戯っぽく笑って少年の頭をぐしゃぐしゃに掻き雑ぜた。イリスはとても心がほんわかして、穏やかに微笑んだ。

やがて試験の終わりを告げるチャイムが鳴り、生徒達は伸びをして凝り固まった体を解したり、試験の感想を言い合ったりしながら、自分の答案用紙を教卓机に持って行った。大広間へ昼食を摂りに行く道すがら、ロンが死んだような顔をしながら尋ねた。

「なあ、ボドロッドって名前の子鬼、確か三人いたよな？」

「ボドロッドは一人しかいません」ハーマイオニーがピシヤリと言つた。

「貴方まさか、叛逆者の名前を全員覚えていなくて、同じ名前を三回も書いたの？」

「ああ、書いたよ」ロンはやけっぱちになり、頭を乱暴に掻き毟つた。



「ボロ髭のボドロッド、薄汚いボドロッド、泣きみそボドロッドの三兄弟さ」

「まあー！」

ハーマイオニーは心底呆れたと言わんばかりに目を回してみせ、束の間、膨れつ面のロンと睨み合った。イリスは吹き出した拍子に、大切な事を思い出した。——『最後の課題に関する“重要な用事”があるため、「魔法史」の試験が終わったら自分の部屋を訪ねるように』と、数日ほど前にムーディ先生から言い渡されていたのだ。けれども、彼女はムーディ先生が苦手だった。本当は行きたくないが、仕方がない。つい大きな溜息を零しながら、彼女は前を歩く親友達に向かって口を開いた。

「私、ムーディ先生のところに行かなくちゃ」

「どうして？」ハーマイオニーが振り返ってイリスに尋ねたが、彼女は首を横に振った。

「分からない。最後の課題と関係があるんだって」

「また人質かよ！」ロンは飽き飽きしたように言った。

「お次は何だ？今度は“炎のゴブレット”の中にでも沈められるんじゃないか？水責めの次は火炙りってね！」

「もう！縁起でもない事、言わないで！」

ハーマイオニーとイリスは揃って、ロンの石頭に怒りのチョップをかました。そしてイリスは二人に手を振って踵を返し、ムーディ先生の自室へ向かった。古びた扉をノックした瞬間、イリスの意識は不意に遠のいて、何も分からなくなった。

独りでに開いた扉の隙間を擦り抜けると、そこにはムーディ先生ではなく——クラウチがいた。彼は肘掛け椅子に深く腰掛け、杖を弄びながら厳しい表情で思案に暮れていたが、イリスを見るとわずかに微笑んだ。小さな少女を抱き上げて膝に乗せ、男は愛おしげに豊かな黒髪を梳いた。イリスは人形のように大人しく抱かれ、されるがままとなっている。——そのエメラルド色に輝く瞳は、クラウチが念入りに掛けた“服従の呪文”にすっかり蕩けてほとんど意志を失くしていた。

「時は来た。しっかりと務めを果たすのだ」

イリスの頭にそつと唇を寄せると、クラウチは静かに囁いた。

「お前と離れるのは寂しい。だが少しの辛抱だ。今夜、あのお方は復活を遂げられる。そして俺達は彼の祝福の下、華々しく婚儀を挙げるのだ。

ウインキーも呼び戻そう。あれはなかなか役に立つし、お前とも上手くやれそうだ」

その時、クラウチは胸の辺りにわずかな抵抗を感じて視線を向け、眉を潜めた。——イリスが震える両手をつ張って、懸命に離れようとしている。それから少女は呂律の回らない口を動かして、“誰かの名前”を囁いた。かつて行ったクラウチの授業が凶らずも功を成し、イリスは“服従の呪文”に抵抗し始めていたのだ。見る間に男の眼光は獲物を定めた蛇のように鋭くなり、彼は杖先を躊躇う事無く少女へ向けた。

「インペリオ、服従せよ。あの薄汚い盗っ人の名など、口にするな」

クラウチは少女の顎を乱暴に掴んで、噛み付くような口付けを与えた。それから彼はゆっくりと唇を離し、激しい熱を帯びた眼差しで少女を見つめながら、優しく囁いた。

「あのお方は、俺にお前を下さると仰った。他の“死喰い人”共が夢見る事も叶わぬ名誉だ。俺の全てを賭けて、お前を大切にする。あの裏切り者の倅は忘れろ。これからは俺を愛し、俺の胸の中で健やかに生きるのだ」

「はい」

イリスは素直に頷いて、揺らめく瞳でクラウチを見上げた。彼は感極まったように低く唸り、少女を狂おしいほどに強く抱き締めた。

☆

ハリーとシリウスは城の周りをぶらぶら散歩して午後を過ぎ、晩餐会が始まる頃に大広間へ戻ってきた。まるでホグズミード村の“三本の箒”で楽しくランチをした時のように、皆は色々な話をしてご馳走に舌鼓を打った。シリウスは、晴れて恋人同士となったロンとハーマイオニーを時々からかった。イリスはその様子を微笑ましく

見守りながら、ふと教職員テーブルに視線を向けた。

——テーブルに設けられたクラウチ氏の席には、今度はパーシーではなくファッジ大臣が座っている。今朝ハーマイオニーから借りた“日刊予言者新聞”によると、自宅療養中のクラウチ氏が、定期的にパーシーへ送り付けていた指令について魔法省が疑問を抱き始め、その結果、パーシーは一時的に代理の任を外されてしまい、今現在尋問を受けているのだと言う。ファッジ大臣は彼の代理で来たのだろうか。ダンブルドアと何やら真剣な様子で話し合っていた。

食事はいつもより品数が多かったが、ハリーは今や本格的に気が昂ぶり始めてしまい、あまり食べられなかった。魔法をかけられた天井が深いブルーから日暮れの紫に変わり始めた時、ダンブルドアがファッジ大臣との会話を切り上げ、教職員テーブルで立ち上がった。広間中がしんと静まり返った。ダンブルドアは厳かな口調で、間もなくクイディッチ競技場で最後の課題が行われるという事を皆に伝えた。

ハリーは他の代表選手と共に立ち上がった。グリフィンボールのテーブルから一齐に拍手が湧き起こった。シリウスやロン、イリス、ハーマイオニーに激励され、ハリーはセドリック、フラー、クラムと一緒に広間を出て、外へ向かった。クイディッチ競技場は今や跡形もなく、代わりに六メートルほどの高さの生け垣が周りを取り囲んで、正面に隙間が空いている。——巨大な迷路への入り口だ。中の通路は暗く、薄気味悪かった。

十数分後、スタンドに人が入り始めた。何百人という生徒が次々に着席し、辺りは興奮した声と大勢の足音で満たされた。空はビロードのように滑らかな濃紺色に変わり、一番星が瞬き始めている。ハグリッド、ムーディ先生、マクゴナガル先生、フリットウィック先生が競技場に入場し、ハリー達のところへやって来た。全員、大きな赤く光る星を帽子に付けている。ハグリッドだけは帽子を被っていないので、チョッキの背にちよこんと付けていた。

マクゴナガル先生が代表して一歩前へ進み出ると、自分達は迷路の外側を巡回している事、危険に巻き込まれたり、助けを乞いたい時は、

空中に赤い火花を打ち上げればすぐ助けに来るといふ事を伝えた。やがてバグマンの号令に従って、ハリー達は迷路のどこかの持ち場に着くため、バラバラな方向へと歩き出した。ハグリッドはハリーが傍を通る時、激励の意を込めて肩を軽く叩いたので、少年の足は数センチほど地面にめり込んでしまった。

ルードの魔法で拡声された声が、スタンドに大きく響き渡る。自分とセドリックが同点だと説明された時、ハリーがふと観客席の真ん中ら辺を見ると、シリウスが千切れんばかりに手を叩いているのが見えた。その近くにロンとハーマイオニー、イリスがいて、ハリーが手を挙げるとにつこりと笑って手を振り返した。代表選手と彼らが持っている点数を全員分説明し終えたルードは、今度は首から下げたホイッスルを口に当てた。

いよいよ最後の課題が始まった。ルードが鋭く鳴らしたホイッスルの音に急ぎ立てられるようにして、迷路の中にハリーとセドリックが入ってしまうと、観客達の緊張は少し解けた。——あとはただ待つだけだ。イリスは不意に尿意を催して、席から立ち上がった。

「少しお手洗いに行つて来るよ」

「早く帰つて来いよ。ハリーがすぐにここへ帰つてくるかもしれないんだから」

ロンが入り口の方を注意深く見つめながら応えた。——“炎のゴブレット”には特別な魔法が施されていて、ゴブレットを獲得した選手は迷路の入り口に自動転送されるという仕組みになっていた。

スタンドを離れようとした時、イリスはふと——何とも形容しがたい不思議な感情に襲われた。どうしてだか分からないが、もう二度とここに戻つて来られないような気がした。彼女は思わずその場に立ち竦み、ロンとハーマイオニー、それからシリウスの後姿を、無意識の内に心のアルバムへと記録していた。やがてその視線に感づいたのか、ハーマイオニーが振り返つてくすりと笑った。

「どうしたの、夜だから怖い？一緒に行きましょうか？」

「ううん、平気」イリスは慌てて首を横に振った。

「じゃあね」

イリスは首を横に振って奇妙な感情を追い払おうとしながら、クイ  
デイツチ競技場を出て城の中に入った。『例のあの人』の力が強大  
になりつつある』、『嵐の前の静けさ』——かつての親友達の言葉が、イ  
リスの耳の中でホイッスルのように鋭く鳴り響いて、彼女はたまらず  
歩みを止めた。しかし彼らの警告は、クラウチが仕込んだ”服従の呪  
文”を打ち砕く事までは出来なかった。かくしてイリスは再び歩き  
出した。トイレではなくムーディ先生の自室へ向かい、独りでに開錠  
された扉を開いて中に入ると、彼女は肘掛け椅子に掛けられた”空飛  
ぶ絨毯”を掴んで、机に置いてある金色の指輪に触れた。次の瞬間、  
少女の姿は幻のように掻き消えた。

ハリーはゆつくりと目を開けた。頭がズキズキとする。霞がかつ  
た視界の端で、誰かがむくりと起き上がった。——セドリックだ。ハ  
リーは片腕を持ち上げ、腕時計を確認した。

今から数十分程前、確かにハリーは迷路の中にいた。そして深閑と  
する不気味な生け垣の中を進み、時折”四方位呪文”で方角を確認し  
ながら——迷路の中心に”炎のゴブレット”はある。迷路の中心に  
行くには、北西の方角へ進まなければならない——”まね妖怪”を退  
治し、入り込んだ者の天地を逆さまにする”金色の霧”を乗り越え、  
完全体となった”尻尾爆発スクリユート”をやり過ごし、ゴブレット  
への近道を守る——謎かけ魔法動物”スフィンクス”の謎々を見事  
に解き明かした。

そうして燦然と輝く”炎のゴブレット”が目前に迫った時、セド  
リックが反対の道から現れた。——そして彼の背後には巨大な蜘蛛  
も迫っていた。かくして二人は協力して大蜘蛛を倒したが、ハリーは  
毒ハサミの一撃を喰らって片足に大怪我を負ってしまった。セド  
リックはハリーが助けてくれた事に深く感じ入り、栄光の座を譲ろう

とした。

しかしハリーは拒否し、押し問答の末、「引き分け」——つまり、二人で同時にゴブレットを取る事となった。二人が一緒にゴブレットの取っ手を掴んだ時、彼らの両足は地面を離れた。風の唸りが支配する——不可思議に歪んだ世界の中を、ゴブレットにしがみ付きながら耐え忍んでいる内に、二人は意識を失ってしまったのだ。

☆

段々セドリックの顔や周りの景色がくつきりとしてきた。セドリックは立ち上がってハリーを助け起こし、彼らは途方に暮れたように辺りを見回した。——二人は今、暗く荒れ果てた墓場に立っていた。何故自分達がこんな所にいるのか、検討も付かない。もしかしてこれも課題の続きなのだろうか。ここはホグワーツとは遠く離れた場所らしく、城を取り囲む山々さえ見えなかった。右手にイチイの大木があり、その向こうに小さな教会の輪郭が見える。左手には丘がそびえ、その斜面に堂々とした古い館が建っている。しんと静まり返り、気味が悪い。

ふと暗がりの中を進む、誰かの足音がした。二人は反射的に杖を構えた。暗闇の奥にじつと目を凝らすと、墓石の間を縫うようにして、こちらへ近づいてくる人影の輪郭が見えた。——何か包みのようなものを両手に抱えている。人影は二人から数メートル程先に建てられた、立派な大理石の墓石の傍で立ち止まった。ハリーは杖を構えたまま、横目でセドリックを伺い見た。セドリックも訝しげな視線を返し、二人は再び人影へ視線を戻した。

その時、何の前触れもなく——ハリーの傷跡に激痛が走った。これまで一度も感じた事がないような痛苦だ。彼はたまらず両手で顔を覆い、がつくりと膝を折った。指の間から杖が滑り落ちたが、それを拾う余裕など微塵もない。彼は今、地獄のような痛みにも何も見えず、考える事すらできない状況にあった。セドリックが人影から視線を外し、慌ててハリーを助けようと屈み込んだ時、どこか遠くの方から甲高く冷たい声が出た。ハリーが夢の中で何度となく聴いたのと、同じ声だ。

「余計な奴は殺せ！」

☒また失敗したら今度こそ噛み殺すわよ、ドブネズミ☒

シユーシユーという空気が漏れるような不思議な声がそれに重なると、怯えたような別の声が夜の闇を引き裂いた。

「アバダ・ケタブラ、息絶えよ！」

恐ろしい緑の閃光が、ハリーの閉じた瞼の裏で光った。何か重いものが、脇の地面に倒れる音がした。ふと痛みが薄いだような気がして、ハリーはそつと目を開けた。

——セドリックがハリーの足元に大の字で倒れていた。死んでい

る。  
一瞬が永遠に感じられた。ハリーは茫然となり、セドリックの顔を見つめた。ついさつきまで精悍に輝いていた灰色の瞳は、今はただ虚ろに見開かれて、くすんだ硝子のようにハリーの顔をぼんやりと映し出すだけだった。目の前に突き付けられたセドリックの死を——ハリーは受け入れる事が出来なかった。忘我状態に陥った彼のローブを人影が掴み、立派な墓石の近くへ引き摺って行く。

人影は手にした包みを地面にそつと置いて、杖明かりを点けた。青白い光は“トム・リドル”と刻まれた墓碑銘をほんの束の間、映し出すと同時に、人影の周囲にまとわりつく暗闇も取り払った。——フードを被った小柄な男だ。ハリーは男の手によつて無理矢理後ろ向きにされると、墓石ごと魔法のロープで縛り上げられた。無数の結び目を創り出していく男の指先を見て、ハリーはハッと我を取り戻した。  
——男の手は指が一本欠けている。フードを被った男の正体はピーター・ペティグリュウ、通称ワームテールだ。

「お前だったのか！」

ハリーは絶句した。しかし、ワームテールは応えなかった。その指先は止め処なく震え、フードの中から荒く激しい息遣いが聴こえて来る。彼は頭の天辺から爪先までを、恐怖の感情に支配されているようだった。ワームテールは縄目の頑丈さを注意深く確かめると、マントから黒い布を取り出して乱暴に少年の口に押し込んだ。それから一言も言わず、ハリーに背を向けて急いで立ち去った。

セドリツクの亡骸が五、六メートルほど先に横たわっている。そこから少し離れたところに、ゴブレットが星灯りを受けて冷たく光りながら転がっていた。ハリーの杖はセドリツクの足元に落ちていた。彼の視界の端に、ワームテールが大事そうに持つていた包みがあった。漆黒のローブで包まれたそれは、良く見ると——まるで呼吸しているかのように小さく蠢いている。次の瞬間、ハリーの傷跡は再び焼けるように痛んだ。

そしてハリーは理解した。——その包みの中身が、一体何なのかを。見たくない、どうか開けないでくれ。彼は痛苦に呻きながら、じれたそうに動き始めたローブの塊から懸命に目を逸らした。しかしその視線の先には、闇の中を蠢く不気味な生き物の姿があった。

——巨大な蛇だ。夢の中でヴォルデモートが“ナギニ”と呼んでいた大蛇に違いない。ナギニはしばらくの間、鎌首をもたげてセドリツクの亡骸をじっと見つめていたが、やがて悠々とした動作でとぐろを巻き、尻尾の先に頭を載せると、こちらへ鋭い眼光を飛ばした。

——今にも闇に融け込みそうなほど黒々としたその体の隙間から、銀色に輝く小さな尻尾のようなものがちよこんと覗いている。ナギニは渦を巻いた体の内側に、何かを隠しているようだった。

ワームテールが石の大鍋を押して、墓の前まで運んできた。大人一人が充分、中に入れる程の大きさだ。鍋の中になみなみと満たされた液体が、ピシャピシャと愉しげに撥ねている。ワームテールは鍋の底のところにしてやがみ込むと、杖を振るって火を熾した。その様子を観察していたナギニはとぐろを解くと、静かに暗闇の奥へ消えて行った。——大蛇が隠していたものは、遠目にも分かるほどに立派な刺繍の施された、一枚の絨毯だった。まるで何かを覆い隠しているかのよう、絨毯の中央部分は膨らんで丸みを帯びている。四方にあしらわれた銀色の豊かな房飾りが、星灯りを受けて冷たく光っていた。

鍋の中の液体はすぐに沸騰し、やがてそれ自身が燃えているかのようには火花が飛び散り始めた。鍋の周囲に濃い湯気が立ちこめ、火加減を見るワームテールの輪郭がぼやけた。ハリーの耳に再び、あの冷たい声が聴こえた。



「急げ！」

今や液面全体から火花が噴き出し、まるでダイヤモンドを散りばめたかのように神々しく輝いていた。ワームテールがローブの包みを開いて中のものを露わにしたとたん、ハリーはくぐもった悲鳴を上げた。——それはパツと見ると、人間の子供のようだった。しかし良く目を凝らしてみるとそれに髪の毛はなく、蛇のように起伏の乏しい顔立ちをしていて、肌はどす黒くて皺だらけだ。ワームテールは嫌悪感を剥き出しにしながら、その生き物を抱き抱えて、大鍋に入れた。『どうか、このまま溺れてしまいますように』——ハリーは必死に願った。傷跡の焼けるような痛みはほとんど限界を超えている。

ワームテールはしばらくの間、注意深く鍋の中を観察していたが、やがてぐくりと唾を飲み込んで、一歩下がった。それから杖を上げると、夜の闇に向かって唱えた。

「父親の骨、知らぬ間に与えられん。父親は息子を甦らせん！」

ハリーの足の下にある墓の一部が、不意に砕けた。ワームテールの命ずるままに、細かい塵や芥が宙を舞い飛んで、静かに鍋の中へと降り注いでいく。四方八方に火花を散らしながら、液体は鮮やかな毒々しい青色に変わった。ワームテールは今度はポケットから銀色に輝く短剣を一振り取り出すと、ハリーの方へやって来た。

「敵の血、力づくで奪われん。汝は敵を甦らせん」

——ハリーにはどうする事も出来なかった。彼は精一杯もがいて抵抗したが、ワームテールはいとも容易く少年の右腕を掴んで、その肘の内側を貫いた。たちまち熱い痛みが走り、ハリーは押し殺した悲鳴を上げた。ワームテールは躊躇う事なく小さな硝子瓶をハリーの傷口に押し当てて、滴る血を受けた。それから大鍋に戻ると、その中に血を注ぎ入れた。液体は、燃えるような真紅色へ変わった。

ワームテールは短剣にべっとり付いた血の汚れを拭き取ると、ハリーの目の前を通り過ぎて、絨毯の包みの方へ向かった。彼は絨毯の前まで来ると膝をついて、布の端にゆっくりと手を掛けた。

しかし、ワームテールはそこからピクリとも動かなくなった。大鍋から湧き上がる無数の火花が、フードに覆い隠された彼の顔から、一

滴の雫がきらめきながら地面に落ちていく様子を映し出した。その時、どこかからとても聞き覚えのある声がした。——少し舌足らずで、高い声だ。

「しもべの肉、喜んで差し出されん。しもべはご主人様を甦らせん」絨毯の中から、誰かが立ち上がった。豪華な刺繍の施された布がゆっくりと滑り落ちて、中にいる者の姿が露わになった。グリフィンドールのローブに身を包み、豊かな黒髪を靡かせた小柄な少女。

——イリスだった。

どうして彼女がここにいるんだ？ハリーは今、自分の見ているものが信じられなかった。少女はワームテールから短剣を受け取ると、空いた手で彼の涙を優しく拭い去った。ワームテールが止め処なく震えながら、少女の足元で咽び泣き始める。

イリスの揺らめく瞳はワームテールを通り過ぎ——ハリーを通過して——輝くばかりの大鍋に移った。すると彼女はまるで神様を見出したかのように、陶然とした微笑みを浮かべて、大鍋に向かって歩き出した。ハリーはイリスが大鍋の前で何をするつもりなのかを理解し、全身が総毛立った。——行つてはダメだ！彼は自分が傷つくのも構わずに夢中で暴れ回り、声にならない声で何度も叫んだ。

しかし、親友の声はイリスには届かなかつた。少女は“ヴォルデモートに献身する”、ただそれだけのために生まれた。ヴォルデモートとの距離が近づいた事で、呪いの力はこれ以上ないほどに強まった。ゾツとするほど血腥く、そして蕩けるように甘い——“呪いの囁き”が、イリスの意識を狂わせていく。今の彼女にとって“闇の帝王”のために身を尽すという事は、鳥が空を飛び、獣が地を駆けるのと同じ——ごく自然な事だった。

★

イリスは大鍋の前まで来ると短剣を持ち上げ、何の躊躇いもなく自分の右肩に振り下ろした。ハリーは喉の奥が切れ、血が滲む程に絶叫した。しかし無上にも彼の目の前で、鋭い刃が少女の滑らかな白い膚をブツリと裂いて、柔らかな肉を断ち、複雑に重なり合う筋肉の繊維を一本一本切断していく。——やがて“自分自身を傷つけている”

という事に本能が激しい危機感を感じ、イリスは強制的に呪いの囁きから目を覚ました。

「ああああああああ——ッ!!」

イリスの悲鳴が、夜の闇を劈いた。彼女が見たものは、半ばまで断ち切られた自分の右腕と——それを今にも切り落とそうとする自分の左腕だった。イリスは遅れてやって来た——身を焼き尽くさんばかりの激しい痛みに痙攣し、涙を散らしながら短剣を捨てようとしたが、左腕は主の命令を無視して狂ったように動き続けた。やがて骨をぐりぐりと削る音と振動が脳髓を大きく震わせて、イリスはたまらず嘔吐した。

切り落とされた少女の右腕が鍋の中へ落ちると同時に、肩口から夥しい血液が噴き出して、辺り一帯に降り注いだ。真紅色のシャワーを浴びた液面は歓喜するかのようになり、ますます燦然と輝いた。

不意に液面が大きく盛り上がると、人の手のような形を取って、少女の肩口を掴んだ。ジュツと肉が焼け焦げるような嫌な音がして、イリスの肩口から煙が上がる。俄かに彼女の悲鳴が途絶え、その小さな体はゆっくりと重力に従って崩れ落ちていった。ワームテールが慌てて彼女を抱き留め、杖を振って傷の介抱をし始める。

しかしワームテールは、突如として襲い掛かった黒い鞭のようなものに乱暴に弾き飛ばされ、ハリリーの縛り付けられている墓石にぶつかると、彼の足元にクシャクシャになって泣き喚きながら転がった。——邪魔者を排除したナギニが、イリスに優しく絡みついていていた。ナギニは自分の体で即席のベッドを作ると少女を寝かせ、細い舌をチロリと出して涙を舐め取った。やがてナギニは、イリスを助けようと暴れ続けるハリリーを不快そうな眼差しで睨み付け、地面に転がったままのワームテールに冷たく言い放った。

☒あれを黙らせて。せつかく良く眠っているのに、起きてしまう☒  
果たしてその言葉がワームテールに理解できたかどうかは分からないが、ナギニの視線の先にあるものを見て何かを察したのか、彼はよろよろと立ち上がると、ハリリーに杖を向けて“沈黙呪文”を唱えた。とたんにハリリーの声は失われた。彼は墓石に縛り付けられたま

ま、どうすることもできずにイリスを見つめた。今までイリスと過ごしてきた素晴らしい記憶の数々を、今や真つ黒に焼け焦げた——少女の右肩の切断面が残酷に打ち砕いた。ハリーは自分の余りの無力さに、歯を食い縛って血の涙を流した。

大鍋はグツグツと煮え立ち、四方八方にダイヤモンドのような閃光を放っていた。その目も眩むような明るさに、周りのもの全てが真つ黒なビロードで覆われてしまったかのように見えた。

次の瞬間、大鍋から出ていた火花が消えた。その代わりに、濛々たる白い靄がうねりながら立ち昇って来た。濃い蒸気が、辺り一帯を埋め尽くしていく。嫌な匂いのする靄にむせ返りながら、ハリーは祈った。——きつと失敗したんだ。どうか、あれを死なせて。僕たちを元の場所へ帰してくれ。

しかし、ハリーの祈りは天に聴き入れられなかった。蒸気を掻き分けて、大鍋の中からゆっくりと立ち上がったのは——骸骨のように痩せ細った、背の高い男の黒い影だった。

「ローブを着せろ」

靄の向こうから、甲高く冷たい声がした。ワームテールは急いで地面に置いてあった黒いローブを拾い、ご主人様に被せた。痩せた男は、ハリーをじつと見ながら大鍋を跨いだ。彼もただ見つめ返した。その顔はこの三年間、ハリーを悪夢で悩まし続けた顔だった。骸骨よりも白い顔、細長く真つ赤に輝く不気味な双眸、蛇のように平らな鼻——ヴォルデモート卿は復活した。

★

ヴォルデモートは突然興味を失ったようにハリーから目を逸らせ、自分の体を調べ始めた。彼は青白く長い指で自分の胸を、腕を、顔を、愛おしそうに撫でた。両手を上げて指を折り曲げるヴォルデモートの顔は陶然とし、勝ち誇っている。その様子を見ていたナギニは、聴く者を思わずゾツとさせるような——冷たく残忍な笑い声を上げた。ふとヴォルデモートの赤い瞳が、ナギニへ向けられる。

男は大蛇のところへ静かに歩いて行った。『イリスに近づくな！』——ハリーは野獣のように牙を剥き出して、声なき声で吼えた。しか

しナギニはイリスを隠すどころか、その長い体を器用に動かして、少女をまるで神に捧げる供物であるかのように、帝王の御前へ恭しく差し出した。

ヴォルデモートはしばらくの間、少女をじっと見つめていたが、ゆつくりと屈み込んで、大量の血を失い——透き通るように白くなったイリスの顔にそっと触れた。青ざめた蜘蛛のような手が、少女の輪郭を慈しむように優しくなぞる。やがて虚ろで残酷な笑い声が、彼の口から洩れた。ヴォルデモートは鷹揚な動作で立ち上がり、ローブの中から杖を取り出した。そして杖先をイリスに向けると、古めかしい言葉で構成された、複雑な呪文を唱えた。

すると杖先から、月光のように輝く銀色の光が渦を巻きながら現れた。それはイリスの右肩に吸い寄せられ、彼女の体格に合わせて収束してゆき、見る間に美しい装飾の施された“銀色の義手”<sup>アガートラム</sup>に変貌した。ヴォルデモートは魔法の腕を掴んで内側へ向けた。するとそこに、生々しく赤い刺青が染み出してきた。口から蛇が飛び出した、不気味な髑髏の印——“闇の印”だ。彼はその印を丁寧調べ、残忍な笑みを浮かべた。

「戻っているな」ヴォルデモートが低く言った。  
「全員がこれに気付いた筈だ」

それからヴォルデモートは長く蒼白い人差し指を、イリスの腕の印に押し当てた。ハリーの額の傷跡がまたしても焼けるように鋭く痛んだ。イリスはまるで雷に撃たれたかのようにびくりと身体を痙攣させ、玉のような汗を辺りに飛び散らせた。激痛に苦しむハリーを嘲笑うかのように、少女の義手を飾る——真つ黒に焼け焦げた印が、残酷に煌めいてみせた。少女の閉じた眦から新たに溢れた涙を、ナギニが優しく舐め取った。

P e t a l l 6 . 第三の課題（中編）

「さて、この印を見て——戻る勇気のある者が何人いるか。そして離れようとする愚か者が、何人いるか」

ヴォルデモートは残忍な満足の表情を浮かべて立ち上がり、頭を仰げ反らせると、暗い墓場をひとわたり眺め回した。それから彼はふとハリーを見下ろした。蛇のように無機質な顔が残忍に歪んだ。

「ハリー・ポッター、お前は俺様の父の遺骸の上におるのだ」

ヴォルデモートはハリーの傍まで来ると、彼の後ろにある墓石を睨み付けた。

——すぐ目の前に宿敵が立っている。その冷たく赤い目には、一欠片の愛情も見当たらない。自分と同じ、生きている人間である筈なのに、彼には——どんな人間や巫人、魔法生物、果ては怪物だろうが——生きとし生けるもの全てが等しく持つている“命の温もり”がまるで感じられない。代わりに感じ取れるのは、氷のように冷たく邪悪な気配と、それに恐怖する自分の感情だけだ。ヴォルデモートは歯を食い縛ったまま、低い声でせせら笑った。

「マグルの愚か者よ。ちようどお前の母親のように。しかし、どちらも使い道はあった訳だな？お前の母親は子供を守って死んだ。俺様は父親を殺したが、奴はこの体を甦らせるのに役立った」

ヴォルデモートは恍惚とした表情で自らの手を見つめ、また笑った。ハリーの視界の端で、ナギニが冷たい声で子守唄を歌いながら、こんこんと眠り続けるイリスを優しくあやしていた。ハリーは今の状況を再確認した。——縄は非常にきつく結ばれていて、先程滅茶苦茶に暴れたのに少しも緩んでいない。杖はセドリックの亡骸の近くにある。杖も持たず、声も奪われた状態で、どうやってこの拘束を解き、ヴォルデモートとナギニをぐぐり抜け、イリスとセドリックの亡骸をホグワーツへ連れて帰る事ができる？ハリーは必死に考えを巡らせたが、状況は余りにも絶望的だった。ヴォルデモートは優雅な動作で杖を弄びながら、再び口を開いた。

「丘の上の館が見えるか、ポッター？俺様の父親はあそこに住んでい

た。母親はこの村に住む魔女で、父親と恋に落ちた。しかし正体を打ち明けた時、父は母を捨てた。父は、魔法を嫌っていた。

奴は母を捨て、マグルの両親の元へ戻った。薄情なマグルらしい、実に愚かな行為よ。俺様が生まれる前の事だ、ポッター。そして母は俺様を生むと死んだ。残された俺様は、マグルの孤児院で育った。しかし俺様は奴を見つけると誓った。復讐してやった。俺様に自分の名前を付けた、あの愚か者に。——トム・リドル」

ハリーの脳裏に、二年の頃、日記に宿った亡霊「トム・リドル」と対決した記憶が呼び起こされた。そう言えば、ワームテールに拘束される寸前、杖明かりに照らされたこの墓石の銘にもその名前があった。奇しくも、ハリーとヴォルデモートは——その理由こそ全く異なるが——両親を失い、愛情に飢えて育ったという事になる。ヴォルデモートは墓から墓へと素早く目を走らせながら、青ざめた蜘蛛のような手を自らの額にそっと押し当てた。

「俺様が自分の家族の歴史を物語るとは……」ヴォルデモートは呆れたような声で囁いた。

「なんと、俺様も感傷的になったものよ。しかし見ろ、ハリー！俺様の真の家族が戻って来た」

不意にマントを翻す音が、墓場じゆうを満たした。墓と墓の間から、イチイの木の影から、暗がりと言う暗がりから、魔法使い達が“姿現し”していた。全員がフードを被り、銀色の仮面を付けている。彼らはまるで我が目を疑うと言わんばかりに、ゆっくりとした慎重な足取りで、ご主人様の下へ歩み寄っていく。しかしその中でただ一人——上質なローブを着た魔法使いだけがその場から動かず、蛇に囚われた哀れな少女を見つめていた。不気味な仮面に隠された目が——魔法力を帯びて宝石のように輝く“銀色の義手”と、大量の血に塗れたローブへ釘づけになっていた。

☆

ルシウス・マルフォイは非常に野心に溢れ、狡猾な男だったが、自分の家族を何よりも愛していた。イリスも彼にとって家族の一員だ。比類なき親友の忘れ形見で、そして彼の妻は息子の命を救ってくれ

た。家柄も申し分なく、自分の息子と親密な間柄にあり——度重なる“血を裏切る”行為さえ目を瞑れば——性格もとても良い子だ。ルシウスはイリスを“闇の陣営”側に引き込んだ後、ドラコにきちんと話をして記憶の処理を行い、二人を婚約させるつもりだった。

そう、イリスは絶対にこちら側へ来させねばならなかった。メーティスの一族はヴォルデモートの庇護下でしか生きられない。ネーレウスは“闇の帝王”に正面から抗って、苦しみもがきながら死んだ。彼の死を知った時、ルシウスは言葉にできない程の深い悲しみに暮れたが、どこかその結末を“仕方がない”と受け入れている面もあった。

——ネーレウスは“バロット”そのものだった。彼はヴォルデモートの創り出した魔法の卵の内に生まれた。どれだけ果敢に抗ったところで、殻の中から抜け出す事はできない。反対にヴォルデモートは自分の好きな時に卵を簡単に掴み取って、煮えたぎる鍋の中に入れて茹で上げたり、そのまま握り潰す事だってできる。ネーレウスの命は文字通り、ヴォルデモートが支配していた。だが、もしネーレウスが闇の帝王の下に付けば、彼は窮屈な殻を破り、立派な成鳥となつて、広々とした空を飛び回る事ができる。聡明な彼は、闇の帝王の機嫌を損ねないように器用に立ち回る事など、朝飯前なはずだった。

しかし、ネーレウスはそうしなかった。狭い殻の中に閉じこもつたまま、愚直なまでに善い魔法使いとして生き、そして死んだ。勿論、そうさせたのはダンブルドアだ。あの老いぼれが養父になどならなければ、ネーレウスの人生はもっと輝きに満ちたものになり、今頃は自分と肩を並べてここに立っていたに違いない。だからこそ、数年前にダイアゴン横丁でイリスを見つけた時、ルシウスは思ったのだ。——たとえ悪魔と思われようと、この子を“闇の魔女”にしてみせる。ネーレウスと同じ苦しみを味わわせてなるものかと。

ヴォルデモートがイリスを深く愛し、執着しているのは、“死喰い人”達にとって周知の事実だった。——人を愛するというのは、慈しんで守る事だ。ルシウスはヴォルデモートの愛がイリスを守ると確信していた。イリスがダンブルドアに唆されて“闇の帝王”を敵と



見做さなければ、呪いがこれ以上増大する事もない。イリスはヴォルデモートに慈しまれて、彼の手の内で安全に生き続ける事ができる。——そう、思っていた。現在のイリスの姿を目の当たりにするまでは。

イリスの右腕は、銀色にきらめく義手へ変貌していた。その淡い輝きが、肩口にこびり付いた夥しい血液と、肩よりも少し上の辺りで切断されたローブの焼け焦げを、克明に映し出している。少女の顔は病人のように青ざめ、その下には嘔吐物の跡が残っていた。近くには大きな鍋がくすぶっていて、血に濡れた短剣も転がり、鈍い輝きを放っている。ルシウスはもうそれだけで、充分に状況を理解できた。イリスは意識を保ったまま、腕を切り落とされたのだ。ヴォルデモートは何よりも慈しんで守るべき存在を——自分のためだけに——大いに傷つけ、その一部を奪ったのだ。

その時、死喰い人の一人が跪いて、ヴォルデモートに這い寄った。彼はガタガタと骨の髄まで震え上がりながら、ご主人様の黒いローブの裾にキスをした。

「ご主人様……ご主人様……」その死喰い人は恐怖に引き攣った声で呻いた。

周囲にいた死喰い人達も次々と跪いて、ヴォルデモートのローブにキスをした。戻って来た一人に肩を揺さぶられ、ルシウスはハツと我に返った。——ここでご主人様の不興を買う事は、死に繋がる。ルシウスには守るべきものがあつた。彼も他の人々に加わり、そのまま後ろに退いて、仲間達が作り出した輪の中に加わった。

人々の輪はトム・リドルの墓を囲み、ハリー、イリスとナギニ、ヴォルデモート、ワームテールを取り囲んだ。その輪には所々に切れ目があつた。まるで後から来る者を待つかのよう。しかし、ヴォルデモートはこれ以上来るとは思っていないようで、ゾツとするような冷たい笑みを浮かべると、死喰い人達をぐるりと見渡した。すると風もないのに、輪がガザガザと震えた。

「よう来た。死喰い人達よ」ヴォルデモートが厳かな口調で言った。

「十三年、最後に我々が会ってから十三年だ。しかしお前達は、それが

昨日の事であつたかのように、俺様の呼びかけに答えた。さすれば、我々はいまだに“闇の印”の下に結ばれている。それに違いないか？」

誰も応えなかったし、頷きもしなかった。まるで少しでも物音を立てたら死んでしまう呪いでも掛かっているかのように、皆揃って押し黙り、凍り付いたように立ち竦んでいる。ヴォルデモートは恐ろしい顔を仰け反らせ、切れ込みを入れたような鼻腔を膨らませた。

「罪の匂いがする」ヴォルデモートが囁いた。

「辺りに罪の匂いが流れているぞ」

輪の中に、二度目の震えが走った。誰もがヴォルデモートから後退りしたくてたまらないのに、どうしてもそれができない、という様子だった。

「お前達全員が無傷で健やかだ。魔法力も失われていない。こんなに素早く現れるとは！そこで俺様は自問する。この魔法使いの一人は、ご主人様に永遠の忠誠を誓ったのに、何故そのご主人様を助けに来なかつたのか？」

ルシウスはふと、他の仲間達の視線がある方向へ一点集中している事に気付いた。——イリスだ。もし心優しい彼女が目覚めて今の状況を見たら、きつとご主人様を宥め、哀れな自分達を助けてくれるに違いない。右腕を失い、蒼白な表情で昏睡している小さな少女を、皆が救いを求めて縋るような目で見つめていた。しかし肝心の少女は一向に目を覚ます気配がない。ナギニは冷たくせせら笑い、イリスをますます大事そうに抱え込んだ。

「そして、自答するのだ」ヴォルデモートは囁いた。

「奴らは俺様が破れたと信じたに違いない。いなくなつたと思つたのだろう。奴らは俺様の敵の間にするりと立ち戻り、無罪を、無知を、そして呪縛されていた事を申し立てたのだ。

それなれば、と俺様は自問する。何故奴らは、俺様が再び立つとは思わなかつたのか？俺様がとうの昔に、死から身を守る手段を講じていたと知っているお前達が、何故？

そして俺様は自ら応える。奴らはより偉大な力が、ヴォルデモート

卿をさえ打ち負かす力が存在すると信じたのであろう。多分奴らは、今や他の者に忠誠を尽しているのだろう。あの凡人の、穢れた血やマグルの味方、アルバス・ダンブルドアにか？」

ご主人様の口からダンブルドアの名が出ると、輪になった死喰い人達が動揺し、ある者は頭を振り、ブツブツと何事かを弁明するように呟き始めた。しかしヴォルデモートはそれら全てを無視し、重々しい口調でこう言った。

「俺様は失望した。失望させられたと、告白する」

一人の死喰い人が突然、輪を乱して前に飛び出した。——エイブリーだ。ルシウスは仮面の形で分かった。エイブリーは頭から爪先までガタガタと震えながら、ヴォルデモートの足下に平伏した。

「ご主人様！」エイブリーが悲鳴のような声を上げた。

「お許しを！我々全員をお許しください！」

ヴォルデモートはゾツとするような冷たく甲高い声で笑い出した。そして杖を上げて、エイブリーに“磔の呪文”を唱えた。たちまち彼は地面をのたうち回り、凄まじい悲鳴を上げた。余りの激しい動きに仮面が外れ、想像を絶する痛苦に歪んだ顔が露わになった。その声は墓場内で不気味に響き渡り、皆の絶望と緊張感を更に高めていった。やがてヴォルデモートは杖を上げた。エイブリーは息も絶え絶えに地面に横たわり、時々痙攣している。

「起きろ、エイブリー」ヴォルデモートが低い声で言った。

「立て。許しを請うだど？俺様は忘れぬ。十三年もの長い間だ。お前を許す前に、長きに渡る不忠の罪を償ってもらおうぞ」

死喰い人達の輪にみなぎる絶望と恐怖の感情は、今や最高潮に達しようとしていた。唯一の頼みの綱だったイリスは、昏々と眠り続けている。誰もが息を潜め、透明になり、この場から逃げ出したいと強く願っていた。

「だが、最も大きな罪を犯したのは……ルシウス、お前かもしれぬ」その声で、ルシウスはハッと我に返った。気が付くと、ヴォルデモートが自分のすぐ目の前に立っていた。二つの赤い双眸がギラギラと邪悪に輝いて、こちらを睨み付けている。次の瞬間、ルシウスの

体温は氷点下まで下がり、体じゅうの水分が一気に奪われて喉がカラカラになった。――”最も大きな罪”、私が一体何をしたと言うのだ？ 闇の帝王が凋落するまで、莫大な財力と権力を使い、彼の活動を誰よりも助けていた、この私が？

「お前は何故、俺様が信頼して託した大切なものを、壊してしまったのだ？」

“大切なもの”――ルシウスはすぐに思い至った。帝王の亡霊が宿った、あの日記帳だ。不意に耳障りな笑い声が足元からして、彼は視線を下げた。ワームテールが”してやったり”と言わんばかりの意地の悪い目で、こちらを見てクスクス笑っている。奴が告発したのだ。ルシウスは反射的に杖へ手を伸ばし、憎悪の籠もった目でワームテールを睥睨したが、すぐにそれどころではなくなった。ナギニがイリスをそつと地面に横たえ、舌なめずりをしながらこちらへ這って来たからだ。

「我が、君」ルシウスの声は、強い恐怖のために裏返った。

「どうかご慈悲を。断じて、私利私欲のためではございません。全てイリスのために、彼女を愛しているからこそ行なった事なのです」

「俺様は『娘の教育の教科書としてあれを使え』と言ったか？」ヴォルデモートは冷たく言い返した。

「いや、俺様はこう言った筈だ。『これは非常に”大切なもの”。決して人目の触れぬ場所に厳重に隠しておけ』と。お前は言い付けを破り、それを失った。そしてそれを破壊したのはなんと、あの忌まわしいハリー・ポッターと”血を裏切る”一族の子供だと言うではないか。お前の倅が、偉大なるスリザリンの遺したバジリスクを屠ったとも聞いている。・・・そうだな、ワームテール？」

「その通りでございます、ご主人様―」

ワームテールは歓喜の感情に顔を歪ませ、キーキーと周囲に響き渡る程の甲高い声で叫んだ。ルシウスは骨の髄まで震え上がり、ご主人様を見つめた。自分のすぐ傍に濃厚な死の気配が迫り、その恐怖で頭が痺れて、ろくに考える事もできない状態だった。ヴォルデモートの杖先から、恐ろしい緑色の火花が飛び散った。

「お前は十三年、俺様に不忠を働いただけでなく、俺様の顔に泥を塗り、所有物を奪って壊したのだ」

次の瞬間、ルシウスの仮面が粉々に砕け散り、死の恐怖に震える白い顔が露わになった。ワームテールは今や四つん這いになり、地面を叩きながらヒーヒー笑っている。他の死喰い人達は、まるでルシウスが伝染病でも持っているかのようにザツと退いて大きく距離を空けた。ルシウスの絶望に塗れた灰色の目が、哀れな少女の姿を映し出した。——私は完璧な父親にはなれなかったかもしれないが、それでもイリスを娘のように愛していた。だが、その結果がこれなのか？

不意にヴォルデモートが屈み込んで、ルシウスの頬を優しく撫でた。それから思わず総毛立つような冷たい猫撫で声で、こう言った。「ルシウスよ、そしてお前は一つ勘違いをしている。あれはお前の娘ではない。——俺様のものだ」

ヴォルデモートは口を大きく開けて、野獣のように獰猛な笑みを浮かべた。常軌を逸した欲望と、歪んだ愛情が渦巻く——醜悪で悍ましい顔つきだ。ルシウスの周囲の死喰い人達は、その顔を見たとたんに腰を抜かす者もいた。ルシウスはまるで蛇に喰われる寸前の蛙のように無力な状態で、ヴォルデモートを見つめ返した。——私が死んだ後、あの子はどうなる？ 今際の際に立っても尚、彼は娘の身を案じた。ヴォルデモートはイリスを愛しているのではなかったのか？

「我が君」ルシウスが掠れた声で囁いた。

「あなた様はイリスを愛していると仰いました」

「ああ、愛している。この世の何よりも」ヴォルデモートは陶然として囁いた。

「では何故、彼女の右腕を……かような仕打ちを……」

「あれの全ては俺様のものだからだ」ヴォルデモートは事も無げに応えた。

「あれも十三年分の不忠の罪を償わねばならなかった。だから意識のあるままに、自らの腕を切り落とさせたのだ。当然の報いだ。」

ルシウスよ。お前は他者の杖が持ち主にどう扱われているのか、気にした事などあるのか？」

ルシウスは体じゆうから力が抜け、地面に倒れ伏した。“意識のあ  
るままに、自分の腕を切り落とさせた”——なんと、なんとという残酷  
な事をさせたのだ。もし自分が生き延びるために、愛する者の体の一  
部が必要だと言うなら、ルシウスは迷わず死を選ぶだろう。自分より  
他者を思いやる行為こそが、愛情だからだ。しかし、ヴォルデモート  
にはそれがなかった。

『ヴォルデモートは僕に、今までの悪行に対する償いとして“ダン  
ブルドアの殺害”を命じた。そんな場所で長く生かされるより、例え  
ほんの僅かな間でも、僕は暖かく安らかな場所で生きてゆきたい』

ふと、かつての親友の言葉が、ルシウスの心の中で鮮やかに蘇った。  
ルシウスはやっと、その言葉の意味を理解出来た。どんなに極悪非道  
で、闇に堕ちた家系だと蔑まれる家族の内にも——大ききや形の違い  
こそあれ——暖かい愛情があつた。しかしヴォルデモートやメー  
ティスにはそれがなかったのだ。ヴォルデモートとルシウス双方が  
唱える“愛”は同じ言葉である筈なのに、その中身が全く異なってい  
た。クリスタルの箱に閉じ込めた魔法の心臓が愛を忘れ去ってし  
まったように——魂を幾片にも裂いたヴォルデモートは、もうまとも  
に人を愛する事ができなくなってしまっていた。

「案ずるな、ルシウス。お前の家族は助けてやろう。娘が気に入って  
いるようだからな」

ナギニが目の前に迫り、口を大きく開けて、透明な毒が滴る牙を見  
せつけた。やがて襲い来るだろう死と痛苦に震撼しながら、ルシウス  
はヴォルデモートの言葉に心から安堵した。——妻と子供の命は守  
られる。だがネーレウス、すまない。ナギニの牙が首元に届く寸前、  
ルシウスの細い目から懺悔の涙が零れ落ちた。私が間違っていた。  
君の娘を守る事が出来なかった。

☆

イリスは不思議な夢を見た。どこまでも続く暗闇の中で、膝を抱え  
て座っている。

ふと、下の方から不思議な気配を感じた。下を見ると、ずっと遠く  
にあるようにも、手を伸ばせば届くほど近くにあるようにも感じる不

確かな距離に、見渡す限り真っ白に漂白された世界が広がっていた。そこには何とも不思議な事にもう一人の自分がいて、何かから必死に逃げ惑っているように、懸命に駆けずり回っている。

「気にする事はない。彼女はそう長く持たないよ」

すぐ隣から美しい声がして、イリスは急いでその方向を仰ぎ見た。——リドルだ。精悍な顔立ちの青年が、こちらを愛おしげに見つめている。豊かな黒髪を優しく梳きながら、彼は熱を帯びた口調でこう言った。

「さあ、起きなさい。君はこれからずっと永遠に、僕の傍に在り続けるのだから」

イリスの小さな心臓が溢れるほどの多幸感でいっぱいになり、言葉もなくただ頷いた。不意に、自分の意識が浮上していくのが分かった。リドルの手を離れ、ふわりと浮かんで、上へ昇っていく。上へ——上へ——

やがてイリスはゆっくりと目を開けた。辺りは真っ暗だった。こわごとと上半身を起こして見上げると、美しい星空が一面に広がっている。——ここはどこで、私は誰なんだろう。まるで生まれ立ての小鹿のように、彼女は不安げに震えながら周囲を見渡した。そして起き上がろうと右手を伸ばした時、美しい輝きを放つ“銀色の義手”が目に入った。その内側に刻まれた“闇の印”を見た瞬間、イリスは自分が何者であるかを思い出した。

ふと人々の恐怖に満ちたざわめきが聴こえ、イリスは弾かれたようにその方向を見た。——大蛇が大きな口を開け、今にもルシウスに噛み付こうとしている！少女の頭の中で、今までの記憶が走馬灯のように駆け巡っていく。きつと“あの事”が原因で、ルシウスさんは命を奪われようとしているのに違いない。ああ、私のせいだ。彼女は矢も楯もたまらずスニジェットに変身して、猛烈なスピードで飛翔した。

☆

ナギニとルシウスの間に、突然、小さな金色の光が弾けた。光はみるみるうちに膨れ上がると砕け散り、その後には一人の少女が残された。彼女は悲しみの涙を湛えて、まるでルシウスを守るかのように大

きく両手を広げて立ち、囁くように不思議な声でこう言った。

☒忠実なるお方☒イリスはナギニを讃えた。

☒夜の帳のように美しく静謐で、影のように主に付き従う、気高き神の化身よ。どうか牙をお納めください。貴方が喰らうべきなのは、この私なのです☒

ナギニは面白そうに目を細めて口を閉じると、「どうするの？」と言わんばかりにヴォルデモートを見上げた。だが彼はしばらくの間、返す言葉もなく、魅入られたようにイリスを見つめるばかりだった。——陛下がこの世に顕現し、私を見つめてくださっている。その神々しきと言ったら！イリスは腰が抜けてしまい、囚らずも彼の前に跪いた。この御姿を見られただけで、もう充分だ。イリスは溢れ出る歓喜の涙を拭い、小さくしゃくり上げた。ナギニは上機嫌で歌を歌いながら、闇の奥へと消えて行つた。

「皆に分かる言葉で申せ」

やがてヴォルデモートは満足気に鼻腔を膨らませると、尊大な口調でそう言い放つた。イリスは自らの死を覚悟して、大きく震えた。——言いたくない。陛下は今までずっと苦しんで嘆いておられた。これ以上の悲しみを与えるなんて。でも、全ては私のせいなんだ。イリスは強く頭を振って、両手を握り締めた。ルシウスさんは何も悪くない。

「恐れながら、申し上げます」イリスは震えながら、口を開いた。

「私は長らくの間、お祖母さまの下さった祝福を芽吹かせる事ができませんでした。私の中に流れる“もう一つの家系の血”が、偉大なるスリザリンの血と拮抗し、祝福の力を弱めていたからです。私は自分が何者であるかを知らずに育ちました。陛下をお探し申し上げる事もなく、一人の平凡な女の子として、のうのうと生きていたのです！」イリスは自分の記憶を思い出して、余りの不甲斐なさに歯を食い縛った。——何も知らなかったあの頃。自分の犯した罪はそれだけではない。決して仲良くなつてはいけない人々を親友とし、寮だつてスリザリンではなくグリフィンドールへ入ってしまった。

イリスは“組分け帽子”の言葉やドラコの警告を思い出し、力なく



地を搔いて咽び泣いた。どうして私はあんなにも意固地で聞き分けがなく、愚かだったのだろうか！進むべき道をきちんと教えてくれた人々がいたのに。——全てが正常に戻った今なら、分かる。イリスは虚ろな目でヴォルデモートの足下を見つめながら、痛烈に思った。一年生の時、自分はクイレル先生に手を貸すべきだった。ユニコーンの血は、動物と心を通わせる事の出来る自分なら、彼らにきちんと話をして、殺す事無く手に入れる事も出来たかもしれない。賢者の石だつて、陛下と共に在るクイレル先生と一緒になら……。だけど自分はそうしなかった。それどころか、彼らを葬る事に手を貸してしまったのだ。

「無知とはなんと……。なんと恐ろしい罪なのでしょう……」

全ての事実を知った後、イリスの心の在り方はまるで違っていた。——これほどの大罪を犯した悪人は、世界中を探しても自分以外に誰一人だっていないだろう。少女は余りの罪深さに小さく縮こまり、ルシウスが戸惑うように肩に手を置いているのにも気づかなかつた。しかしヴォルデモートは怒るどころか、悦に入つたような声で続きを促すだけだった。イリスはまるで毒を吐き出すかのように苦しげな口調で、再び口を開いた。

「ですが、そんな私にルシウスさんは救いの手を差し伸べてくださいました。あるべき場所へ立ち戻り、成すべき事を成すようにと。しかし私は愚かにも……。拒否しました。

私なのです、陛下。私が……。ルシウスさんを“陛下の御霊が宿られた聖具”を使わざるをえないと思うまでに、追い詰めてしまったのです！」

イリスはリドルと過ごした素晴らしい有意義な日々を思い返し、涙した。もう二度と帰らない、煌めきに満ちた記憶。——そうだ。この時だつて、私が陛下を助ける機会はいくらでもあった。リドルと共に旅に出て、本物の陛下を助けに行く事だつて出来た筈なんだ。それなのに……。イリスはただ悔しくて、血が滲む程に強く唇を噛み締めた。私はモンスターのように彼を怖がってジタバタして、不必要な犠牲を招いた。雄鶏、ミセス・ノリス、ジャステイン、ニック、ハグリッ

ド、そしてハーマイオニー。彼らが傷ついたのは、私のせいなんだ。「陛下の御霊は、私を正しい道へと再教育してくださいました。しかし愚かな私はそれでも拒否し、そして多くの人を巻き添えにしてみました。それだけでなく……陛下も……」

——イリスはそれから先を言う事ができなかった。“陛下の御霊を滅ぼす”という大罪を友人達に冒させ、そしてドラコにスリザリンの叡智の結晶であるバジリスクを屠らせてしまった。イリスはもう罪の意識に耐え切れなかった。彼女はおもむろに杖を引き抜いて、杖先を自分に向けて、“切り裂き呪文”を唱えようとした。

しかしそれよりも早くヴォルデモートが杖を振るって、彼女の杖を弾き飛ばした。——ヴォルデモートの顔は恐怖で鉛色に変化し、脂汗が滲んでいる。イリスは彼の足下に縋り付いて、幼い子供のように泣きじやくった。

「どうか死なせてください！こんな不実で惨めな従者の姿をお祖母さまがご覧になったら、どんなにお嘆きになる事でしょう！お願いです、陛下……どうか私を……私を死なせて……」  
「お前は充分罰を受けた。そうだな？」

ヴォルデモートの声は不自然な程に優しかった。彼は静かに屈み込むと、青白い指先でイリスの顎を持ち上げた。——なんて紅く美しい瞳なんだろう。イリスは我を忘れて、彼の目に魅入った。しかしそれを美しいと思っているのは、イリスだけだった。ルシウスや他の死喰い人達の目には、醜悪で恐ろしい化け物がどす黒い欲望と狂気に満ちた笑みを浮かべ、いたいけな少女に覆い被さっている様子にしか見えなかった。

「今、お前は罪の意識に苦しんでいるではないか。それで充分だ。」

——だが、決して忘れるな。俺様は忘れさせもせぬし、殺す事もせぬ。そしてこれからは尚一層、俺様に忠実に仕えるのだ」

「陛下……陛下……」

——なんて慈悲深く、お優しい方なんだろう。こんな大罪を犯した私をお許しくださるなんて。イリスは涙でぐしゃぐしゃになった顔で囁き、ヴォルデモートのローブの裾にギュツと縋り付いて、弱々し

くすすり泣いた。私はこのお方のために今度こそ、身を尽して働かなければ。

少女が決意を新たにしている一方で、ヴォルデモートはまるで腫れ物に触れるかのようにそっと少女を抱き締めて、愛おしげに小さな頭を撫でた。小さな少女は背の高いヴォルデモートに包まれて、たちまち見えなくなつた。彼はとても満足気に喉を鳴らした後、呆気に取られるばかりのルシウスにこう言った。

「ルシウス、抜け目のない友よ。お前は確かに罪を犯して俺様の一部を損なつたが、“本当に大切なるもの”はこうして手元に戻つてきた。俺様の慈悲をもつて、お前を許そう」

「感謝いたします、我が君」

かくしてルシウスの罪は許された。彼は言葉に出来ない程に深く安堵して肩を撫で下ろしたが、その細い目はイリスを心配そうに見つめていた。——少女の様子はまるで違っている。あれほどに怖がっていた闇の帝王を、まるで父親であるかのように慕っている。一体、彼女の身に何が起きた？やがてヴォルデモートはゆつくりと少女の体を離し、こう言った。

「お前は確かに“従者”の使命を忘れていた。だが、それはあの老いぼれの策略によるものだ。お前は何かそれの隙間を搔い潜り、時折俺様に魂を捧げ、そして右腕も捧げた。俺様は助ける者には褒美を与える。

お前の望むものを与えよう。その身を飾るゴブリン製の貴重な装飾品か？グリーンゴッツを埋め尽くす大量の金貨か？運命を捻じ曲げる程の高度な呪文か？人々が羨む高い権力か？さあ、何でも好きなものを言うと良い」

死喰い人達は皆、仮面の下で物欲しそうな顔をして、ごくりと唾を飲み込んだ。ヴォルデモートなら恐らく、どんなものでも創り出す事ができるだろう。皆、欲望がパンパンに詰まった頭で想像を働かせ、自分ならどんなものを望むだろうと考えた。しかし当のイリスは戸惑った様子で、首を横に振るばかりだった。

「陛下。私は陛下よりこのように、素晴らしいものを頂きました」イリ

スは魔法の腕を掲げてみせた。

「これ以上に何かを頂くなど……恐れ多いことです。私は陛下のお傍にいられる、ただそれだけで幸せなのです。これほどの幸福はきつと、世界中のどこにもありはしないでしょう」

——陛下はこんな至らない自分でも、傍にいていいと仰った。それだけで十分に幸せだ。イリスは感極まり、胸がいっぱいになって、新たな涙を零れ落とした。ヴォルデモートは欲望に滾る目で少女を見つめ、ごくりと唾を飲み込んだ後、静かに口を開いた。

「これは命令なのだ、イリス。お前は主の命令に背くつもりか？」

イリスはしばらく考えた。——本当は、イリスの叶えて欲しい願いは二つあった。しかし、一つは決して口にしてはならないものだ。その願いを乞う事は、ヴォルデモートへの不忠を誓う事と同義だ。イリスは二つ目のとても大切な願いを口にする事にした。きつとこれは、“従者”である自分にしか乞い願えない事だ。少女は涙を乱暴に拭い、ヴォルデモートの足下に跪いて、はつきりとした声でこう言った。「今宵は陛下が復活を遂げられた”お慶びの日”でございます。どうか、陛下のご慈悲の心を持ちまして、全ての死喰い人の罪をお許しください」

思いも寄らなかつた少女の願いの内容に、死喰い人の輪がざわざわと蠢いた。かつて同じ事を願い、聴き入れられずに拷問を受けたエイブリーは茫然とした様子で立ち竦んでいる。

「ここにいらつしやる方々は、皆、陛下と共に戦った素晴らしい魔法戦士達ばかりです。叡智に富み、とても勇敢な戦士であるこの方々が何故、陛下をお助け申し上げる事が出来なかつたのか。それはきつと……力を盛り返した敵の陣営が、彼らを妨害していたからに他なりません。

しかし今宵は皆、陛下の呼びかけに応えました。皆、陛下をお慕い申し上げているからこそです。

今は、陛下の陣営をいち早く立て直すのが一番肝要かと思われます。そしてアズカバンへ行き、幽閉された仲間達を救い出すのです。彼らは今でも、陛下の救済を待っていらつしやいます」

イリスはシリウスから聞いたアズカバンの話や、ハリーが“憂いの飾”で見たと言う——アズカバンに投獄された死喰い人達、それから自分がデイメンターと遭遇した恐ろしい記憶を思い出して、唇を噛み締めた。——あんなに絶望に満ちた辛い世界から、すぐに彼らを救い出さなければ。一方のヴォルデモートは目を見開いて絶句し、やがて昔を懐かしむように郷愁を帯びた口調で、ある“死喰い人”に話しかけた。

「ノット。もしあれがまだ生きていたら、同じ事を言ったと思うか」

輪の中で佇む一人の魔法使いが、がっくりと膝を突いて、泣き崩れた。——恐らく、彼がノットなのだろう。ノットは何度も狂ったように頷くので、その内、仮面が取れて地面に転がっていった。イリスは急いでその男の傍に行くとしやがみ込み、優しく背中を撫でながら言った。

「セオドール・ノットの父君ですね？あなたの息子に沢山ご迷惑を掛けてしまいました。不出来な“従者”である私を、どうかお許しください」

ノットはますます感極まったかのように泣きじやくり始め、イリスの足下にむしやぶりついてローブの裾に何度も口づけながら、涙と嗚咽混じりの声で一生懸命に話し始めた。イリスは必死で耳を傾けたが、“お嬢様”と“そんなことは”という言葉ぐらいいしか聞き取る事が出来なかった。その様子を満足気に見ていたヴォルデモートは、ふとルシウスに一瞥をくれた。

「ルシウスよ。直ちに体勢を立て直し、アズカバンへ向かえ。そしてカルカロフとセブルスに伝えよ。“俺様は一度だけ、お前達の罪を許す”と」

「御意に」ルシウスは素早く応えた。

「それと・・・娘の婚儀の相手だが」

ヴォルデモートはそこで一旦言葉を区切り、杖を弄んだ。ルシウスの心の中に、ドラコの顔がポツと思ひ浮かんだ。彼の心の奥底で、権力に飢えた野心の獣が唸り声を上げた。

「相応しい相手がいたが、奴は少々娘に近づき過ぎた。」

狡賢いお前ならば俺様の機嫌を損ねる事もなく、上手に立ち回れるだろう。娘もお前の倅を気に入っているようだ。良い日取りを決め、婚儀の準備を進めよ」

——その瞬間、ルシウスの立ち位置が決まった。彼は見事に死の淵から蘇り、ヴォルデモートに次ぐ“絶対的な地位”を勝ち取ったのだ。良くも悪くも、ルシウスは野心に満ちた男だった。先程までイリスを案じていた父親としての心は、目も眩むばかりの強大な権力に塗り潰された。傲慢不遜に輝く灰色の瞳が、居並ぶ仲間達を見下ろした。

☆

「そんな・・・」

ふと絶望に染まった声がして、ヴォルデモートは鷹揚な動作で振り返った。——ワームテールが呆気に取られた表情で、こちらを見つめている。ワームテールは自分を見捨てたルシウスが、ヴォルデモートに罰される事を心から望んでいたのだ。しかし彼の目論見は外れ、ルシウスは難を逃れて、あまつさえ帝王を次ぐ座に返り咲いてしまった。

「さて、ワームテールよ」

ヴォルデモートはそんなピーターの前までやって来ると、冷たい猫撫で声でこう言った。

「お前は虫けらのような裏切り者だが、今日に至るまで俺様を助けた。お前にも褒美をやらねばなるまい」

その瞬間、ワームテールの小さな目が爛々と輝いた。先程ヴォルデモートがイリスに与えようとした、目も眩むような褒美の数々が、心の中で魅力的なダンスを踊る。しかし、いかにワームテールとて身の程は弁えているつもりだった。——自分はイリスではない。実際にそれほど高貴なものも貰えないだろうが、それに準じるものはあるかもしれない。何せ自分だけが他の薄情者達と違い、闇の帝王を助けたのだから。胸を張るワームテールに、ヴォルデモートは優しく言葉を続けた。

「お前の褒美はもう決まっている。『磔の呪文』だ。嬉しかろう？」

ワームテールはヴォルデモートの言った事が信じられなかった。——今、彼は何と言った？彼を助けた自分に、“磔の呪文”を褒美として与えるだと？これは一体、何の冗談だ？余りの事にワームテールは現実を受け入れる事が出来ず、掠れた声でこう言った。

「我が君、それは一体どういう・・・？」

「お前は自分の命惜しさに、娘に“磔の呪文”を何度も掛けた。そうだな？」

ヴォルデモートの声がとたんに冷たくなった。周囲にゾツとするような冷気が立ち込め、闇の帝王から迸る、凄まじい憎悪と怒気は、彼の体をどす黒く染め上げて、一回りも大きく膨れ上がらせた。その容貌は、まるで神話に登場する魔王そのものだった。ピーターは言葉もなく震え上がり、腰が抜けて立ち上がる事も出来ず、這いずりながらその場から逃げ出そうとしている。

「お前は俺様の”大切なもの”を許可なく傷つけた。本来なら命を奪うところだが、お前は俺様を助けた。俺様の寛大なる心をもって、娘が受けたのと同じ回数だけ、呪いを掛ける事で許すでしょう」

ワームテールは感謝するどころか、ますます震撼してヴォルデモートを仰ぎ見た。——今、彼は肉体と共に完全な力を取り戻している。今までの不完全で弱々しかった時と現在とでは、同じ“磔の呪文”でも効果の度合いが全く違う。ワームテールの貪欲に救いを求める目は、やがて戸惑うようにこちらを見つめているイリスと克ち合った。「イリス！助けてえええええっ！」

ワームテールは無我夢中でイリスの足下にむしやぶりついた。——きつとこの子は僕を守ってくれる。ルシウスを死の淵から救ったように。ワームテールは滑らかな少女の足に頬を擦り付け、安堵の涙を流した。少女の傍は、まるで強力な防護の結界内にいるかのように暖かく、心地が良かった。

イリスはかつて散々ワームテールに痛めつけられたと言うのに、彼を哀れに思い、激昂して杖を振るおうとするルシウスとノットを押し留め、ヴォルデモートに言い募った。

「陛下、どうかご慈悲を！彼はただ、死の恐怖に怯えていただけなので

す」

「娘の耳と目を塞げ、ルシウス」ヴォルデモートはイリスを無視した。「どうやらそれは、生きて動くものなら何でも助けたがる性分らしい」イリスの願いは、今度は聴き入れられなかった。ヴォルデモートが杖を振るうと、ワームテールは狂ったように泣き喚きながら、イリスから乱暴に引き剥がされ、地面に叩きつけられてクシヤクシヤになって転がった。思わず駆け寄ろうとしたイリスをルシウスが素早く抱き締めて、「防音魔法」を掛けた自らのローブで包み込んだ。

「我が君！どうかご慈悲を！」ワームテールは泣き叫んだ。

「慈悲なら充分に与えているではないか、ワームテール」ヴォルデモートは残忍な笑いを浮かべ、杖先を向けた。

「クルーシオ、苦しめ！」

かくして処刑が始まり、墓場じゆうを埋め尽くすほどの——凄まじい悲鳴が響き渡った。同じ「磔の呪文」でも、先程エイブリーが受けたものと、現在ワームテールが受けているものとは全く程度の度合いが異なるようだった。ワームテールは正しく磔のように四肢をピンと突っ張って、顔じゆうに血管が浮いて真っ赤に染まり、目玉と舌が限界まで飛び出している。やがてヴォルデモートが杖を上げると、ピーターは血の混じった泡と涎を周囲にまき散らしながら、必死に叫んだ。

「殺してくれ！誰か、僕を殺してくれ！殺してくれ！殺し……」

ピーターはこの場にいる人間が誰も自分を殺してくれないと判断したとたん、舌を噛み切ってこの世から逃げ出そうとした。しかしそれよりも早く、ヴォルデモートが放った次の呪いが襲い掛かった。まるで地獄絵図のようなその光景を目の当たりにして、死喰い人達は皆恐怖に凍り付き、身動き一つ取る事が出来なかった。——あれほどに生に執着していたワームテールが、たった一度の「磔の呪文」で迷わず死を選んだ。

——それはヴォルデモートによる、死喰い人達への見せしめだった。イリスの懇願により自分達が許されたと思いい、だらりと緩み切っていた彼らの気は再びギュウギュウに締め付けられた。イリスを手



中に収めた事により、ヴォルデモートが慈悲深くなつたわけではない。彼が慈悲深いのは、彼女に対してだけだ。そして万が一にもイリスを傷つければ・・・地獄のような惨劇が自分を待っている。

十数度目の呪いを掛け終えると、ヴォルデモートはやつと杖を上げた。——そこには息づく肉の塊があつた。それはかつてピーター・ペティグリュー、通称ワームテールと呼ばれた魔法使いだつたが、今や、度重なる拷問で心と魂が粉碎されてしまい、“磔の呪文”を受ける前と全く変わらない姿である筈なのに、最早人間とも思われなまるで違つたものに見えた。死喰い人達は恐怖の波に飲まれ、しんと静まり返り、誰も笑わなかつた。ヴォルデモートは慈悲深い声でこう言つた。

「よう頑張つた、ワームテール。お前は罪を償つたのだ」

ワームテールはよろよろと起き上がり、お礼を言つた。しかしその声は前と変わらない彼自身のものである筈なのに、人の言葉にすら聴こえなかつた。何人かの死喰い人が耐え切れず、仮面の下で嘔吐した。輪の中に戻ろうと歩みを進めるワームテールを見るや否や、人々はザツと大きく退いた。その様子といまだにルシウスのローブに包まれたままのイリスを交互に見て、ヴォルデモートは少し思案した後、再び杖を振るつた。

「ルシウス。娘を解放せよ」

見る間にワームテールは空中にふわりと浮き上がり、しゆるしゆると小さく縮んでいき、老いぼれたネズミの姿に変わった。ネズミの姿はごく普通で、人間の時のあの鬼気迫る異常さは見当たらない。その様子を確認すると、ヴォルデモートはイリスの手の中にネズミをそつと落とした。

「お前に新しい仕事を与えよう。これからは一匹のペットとして、娘に忠実に仕えるのだ。」

イリス、ワームテールはお前のものだ。いたぶるなり殺すなり、好きにするが良い」

——それは生涯をネズミの姿で過ごすという、残酷な終身刑そのものだった。ワームテールは弱々しい足取りでイリスの腕を駆け上が

り、彼女のローブの胸ポケットにするりと入り込んだ。イリスはルシウスの殺気立った目線からワームテールを守るかのように、ポケットを両手で包み込んだ。

☆

ハリーは自分の見ているものを信じる事ができなかつた。——イリスがまるで父親のようにヴォルデモートを慕い、その足下に縋り付いている。自分が忠実な従者であるかのように振舞っている。現実を受け入れられないハリーは、やがてこう思った。“イリスは演技をしているのだ”と。クリスマス劇で、アマータ役を彼女は上手に演じてみせた。きつと仲間の振りをして、逃げ出すチャンス伺っているのに違いない。

しかし、イリスの演技は何時まで経っても終わらなかつた。彼女の素直で優しい性格は残酷なほどそのままに、考え方だけがまるで違っていた。やがてハリーの視線に気づいたのか、ふとヴォルデモートがこちらを見て、勝ち誇ったように残忍な笑みを浮かべた。

「ああ、これは失礼した。素晴らしい賓客を、招待申し上げていたのに、挨拶もせずに」

たちまち“死喰い人”達の視線が、一斉に自分の方へ向けられた。イリスも振り返って自分を見つめ、果て無い悲哀に満ちた感情で顔を大きく曇らせた。——その時、ハリーは理解した。彼女の瞳は今までと同じように純粹で清らかだった。これは演技ではなく、本当なんだ。ヴォルデモートは芝居がかった動作でハリーを指示し、口を開いた。

「皆にご紹介申し上げよう。至誠のしもべの働きにより、ハリー・ポッターが俺様の蘇りのパーティにわざわざご参加くださった。・・・そう言えば、イリス。お前と彼は友人の間柄だったな？」

ヴォルデモートが何気ない口調でそう尋ねると、イリスはその場に跪いて、弱々しく泣きじやくり始めた。——イリスの中で、唯一無二の親友であるハリーを大切に想う気持ちと、ヴォルデモートを屠った最大の敵と親しくなってしまうという罪悪感が絢交ぜになり、嵐が巻き起こって小さな心臓をズタズタに引き裂いた。イリスが一番叶

えたかった願いは、〃ハリーの存命〃だった。ハリーがここに連れて来られたという事は、彼がヴォルデモートに殺されるのと同義だ。しかしそんな事を、陛下に乞い願える筈もない。

「ハリーはとても大切な親友です。私は彼を兄のように慕っております」イリスは歯を食い縛って応えた。

「ポッターの命乞いはせぬのか？」ヴォルデモートが優しく尋ねた。「どうしてそんな事ができるでしょう」

イリスはしやくり上げながら、小さく頭を振った。——こんなに辛い思いをするなら、仲良くなるんじゃないやなかった。今までハリーと過ごしてきた素晴らしい思い出の数々が、イリスの脳内を駆け巡っていく。『ハリーを助きたい』——『だけど、そうする事などできない』——相反する強い感情に責め立てられ、イリスは堪え切れずに地面に突っ伏して、ますます嘆き悲しんだ。

「実に賢明な判断だ、イリス」

ヴォルデモートが小気味良さそうにそう言って、青ざめた蜘蛛のような手で少女に触れた瞬間、ハリーの感情が音を立てて爆発した。——君は、正気なのか。君に今、ベタベタと触れているこいつのせいで、僕達の両親やセドリックが死んだ。それだけじゃない。世界中の人々を傷つけて殺し、君を散々に苦しめた〃悪の親玉〃なんだぞ！ハリーは無我夢中で拘束具を噛み千切り、悲壮な声で叫んだ。

「イリス、目を覚ませ！君はそいつに操られているんだ！」

ヴォルデモートは恐ろしい顔を仰け反らせ、高笑いした。——まるで素晴らしくユーモアに満ちた、世界で一番愉快で面白い喜劇を観たかのように。周囲の〃死喰い人〃達もゲラゲラと笑い転げている。ヴォルデモートはハリーに見せ付けるように、小さなイリスを腕の中に閉じ込めてから、優越感に満ちた声でこう言い放った。

「ポッター。娘はもう目が覚めたのだ。今までが悪い夢だったのだよ」

「黙れ、お前の言葉なんて信じないぞ！汚い手で、イリスに触るな！」ハリーは我武者羅に吼えた。

「イリス、目を覚ますんだ！呪いなんかには負けるな！一緒に……一緒に

に、ホグワーツへ帰ろう！」

墓石に縛り付けられたまま、子犬のように吼え続けるハリーを見て、ヴォルデモート達はますます笑い転げた。しかしその声はローブを通過して、イリスの耳へ確かに届いた。親友の魂の叫びは、鼓膜から脳に突き刺さり、脳から心臓へ急降下していく。そしてその更にまた奥へと――

さて、時を少しだけ戻し、ホグワーツの自室でクラウチがイリスとの逢瀬を楽しんでいる頃――

――イリスは自分の心の世界で、クラウチ――正確には彼の形をした“服従の呪文”――と対峙していた。人が持つ心の世界はまるでミルフィーユのように複数の層が重なり合って出来ている。上部の層は頭で考えたり、行動や感情、表情を形作ったりするなど――他者が見る事の出来る“表面上の領域”を管理している。反対に下部の層は、他者が絶対に見る事の出来ない“裏側の領域”――無意識や潜在意識、魂に根差した思考を司る。

クラウチが念入りに掛けた呪いは非常に精密でそれでいて力強く、イリスの精神的な抵抗や“閉心術”をものともしなかった。クラウチは主であるイリスを一切傷つけずに、層の弱い所を攻撃しては突き崩し、あつという間に心の世界の最下部まで到達した。そこは彼女が一番安心できる場所である、“出雲家の境内”の形を模していた。――ここを制圧されたら一貫の終わりだ。イリスは鳥居の下で杖を握り締めながら、クラウチをきつと睨み付けた。しかし彼はたつぷりとした余裕のある笑みを見せつけながら、優雅な所作で杖を弄ぶだけだった。

「ここで最後だな。必死に抵抗するお前の愛らしい姿も、これで見納めだ」

「私はあなたの言いなりになんてならない」  
イリスは杖先をクラウチへ向け、毅然とした態度で言い返した。――この戦い、決して負ける訳にはいかなかった。自分が愛しているのはドラコだけだ。“違う人を愛するように”と魔法で心を操られるなんて真つ平御免だった。しかし対するクラウチは少女の反抗に気を害するどころか、可愛い悪戯っ子を見るような目で軽く笑うだけだった。やがて彼は淀みない動きで杖を一振りした。

次の瞬間、イリスの手から杖が弾け飛んだ。そして彼女はクラウチの杖先から噴き出した魔法の縄に縛り上げられて、石畳の上にドサツ

と倒れ伏した。いくら魔法力が生まれつき潤沢であるとは言っても、最近“閉心術”を習得したばかりのイリスと、ホグワーツでダンブルドアにさえ怪しまれる事なく、完璧に別人を演じ切れるほどの優れた魔法戦士であるクラウチとは、格が違い過ぎた。

イリスは縄目を何とか解こうともがきながら、近づいてくるクラウチを必死で睨み付けた。彼は少女の傍にしゃがみ込むと、愛おしそうにその頬を撫で、幼い子供に言い聞かせるような優しい口調でこう言った。

「イリス。もう下らない抵抗は止めて、自分の宿命を受け入れろ。あの方がお選びになった純血の優秀な男と結婚し、子を産んで後継者として育て、メーテイスの一族を存続させる。それがお前の人生なのだから」

クラウチの冷酷な言葉は魔法で出来た氷の矢となつてイリスの小さな心臓に突き立ち、冷たく凍らせた。——自分の意志など全くない、他人が決めたレールを歩んでいくだけの“操り人形”のような人生。そんなの、絶対に嫌だ。

「何もお前だけに限った話じゃない。子供は皆、親の操り人形だ。俺だってそうだった」クラウチは冷たい声で言った。

「幸運な事に俺は糸を切つて抜け出す機会を得たが、お前の場合は“特別”だ。お前はあのお方から決して逃げる事などできない」

☆

ふと、イリスは耳が痛くなるほどの異様な静けさを感じた。先程から周囲に満ちていた神社を取り巻く木々の騒めきや、小鳥達の声がピタツと止んでいる。得体の知れない不気味な静謐が、辺り一帯を包み込んでいた。イリスは視界の端に何か掠めたような気がして、身を振つてその方向へ顔を向けた。そして驚愕の余り、大きく息を飲んだ。

——クラウチの背後から、何の音も気配もなく巨大な白い津波が迫っていた。波の高さは天にも届く程で、泡立つその表面からは無数の白い手が突き出し、世界中のあらゆるものに触れてはそれらを白い塵へ変えていく。津波が過ぎ去った跡には、白い塵の降り積もる虚無

な世界だけが残された。

それはヴォルデモートが傍にいる事であつてないほどに強まった“血の呪い”の姿だった。呪いは恐ろしい津波に姿を変え、それにとつて“不要なもの”——イリスが呪いに蝕まれるまでに築いた全ての記憶達——を全て漂白しようと蠢いていた。まるで魔法の消しゴムで落書きをきれいさっぱりと消し去つて行くように、イリスの世界が失われていく。それは余りに圧倒的な力だった。一人の少女が津波の前に立ちあはだかつたところで、その進行を止める事などできない。

やがて白い津波はクラウチとイリスの間近まで迫り、白く煙った無数の手が少女の右腕に絡みついた。たちまちゾツとするような冷気が全身を包み込み、みるみるうちに腕は白い塵へと変わり、石畳の上に降り積もつていく。イリスは余りの恐怖に吞まれ、身動き一つ取る事が出来ないでいた。その時、誰かに強く突き飛ばされて、少女はコロコロと地面を転がった。

「逃げろー早くー！」

——クラウチだった。白い手の群れに全身を掴まれ、今にも波の中へ引き込まれようとしながらも、彼は愛する者を守るために決死の表情でそう叫んだ。やがてイリスの目の前で、彼はみるみるうちに白い塵へと変わり、さらさらと砂のように地面に降り積もつていく。イリスは失った右腕をかばいながら、慌てて駆け出した。

しかし、イリスの逃亡劇は長く続かなかつた。数メートルも行かない内に、目の前の景色が真っ白に変わりゆくのを見て、彼女の足はたまらず急ブレーキを掛けた。何時の間にかイリスを中心とした半径一メートル以外の全ての領域が漂白されていた。少女の足元にわずかに残った境内の名残である石畳も、見る間に小さく削られていく。四方から迫る波の中から無数の手が蠢いて、自分に手を伸ばしている。——もうおしまいだ。イリスが恐怖に縮み上がって立ち竦んだその時、頭上から親友の声が力強くこたました。

『イリス！呪いなんかには負けるな！一緒にホグワーツへ帰ろう！』

——ハリーの声だ。イリスが思わず頭上を振り仰ぐと、そこには

真つ白な空を透かして“現実世界”の光景が映っていた。ハリーが墓石から必死に抜け出そうともがきながら、正気を失った自分の目を覚まそうと一生懸命に呼び掛け続けてくれている。イリスは親友の友情と勇敢さに深く感じ入り、心がじんと熱くなつて歓喜の涙が零れ落ちた。——私も諦めない。イリスはすぐ目の前で蠢く手の群れを睨んで、強く思った。絶対にハリーと一緒に、ホグワーツへ帰るんだ。その時、イリスの足下が眩い虹色の輝きを放った。彼女が驚いて顔を下に向けると、石畳が硝子のように透け、その下に“魔法の炎”が轟々と燃え盛っている様子が確認できた。イリスは夢中で左腕を振り上げて、石畳に叩きつけた。床は碓氷うすこおりのように簡単に割れ、少女は下に落ちて行く。炎の中に入り込んだイリスを追いかけて、白い手達の指先が虹色に煌めく火に触れた。その瞬間、手の群れは苦しそうに指先を引き攣らせて、凄まじい悲鳴を上げた——

☆

——ハリーは絶叫した。ヴォルデモートが戯れに掛けた“磔の呪文”は凄まじい拷問だった。

ヴォルデモートはルシウスに乞われて自らが復活するまでの軌跡を語った後、『死喰い人達の前で、十三年前に自分の力を奪ったハリー・ポッターを殺し、彼の脅威を克服した事を証明する』と言い放った。ヴォルデモートは前菜だと言わんばかりに“磔の呪文”でハリーを軽くいたぶって楽しみ、ルシウスに命じて少年の縄目を解かせた。

ハリーは痛苦の名残に喘ぎながらも、隙を突いて走り出そうと力を込めたが、傷ついた足がぐらついたために、なんとか倒れないようにと踏ん張る事しかできなかった。そうこうする内に死喰い人の輪がハリーとヴォルデモートを囲んで小さくなり、輪の隙間を掻い潜って逃げる事も不可能になった。ルシウスは杖を振り、ハリーの手元に彼の杖を戻した。イリスはルシウスの傍に立ち、力なく啜り泣いている。

「ハリー・ポッター、決闘のやり方は学んでいるな？」

暗闇の中で真つ赤な目を邪悪にきらつかせながら、ヴォルデモート



が低い声で唸った。——その言葉で、ハリーはクリスマスパーティーの直前にロンと行った決闘や、シリウスに教えてもらった作法の事をぼんやりと思い出した。しかし、果たしてその記憶や知識が何の役に立つと言うのだろうか？どす黒い絶望の感情が、ハリーの心を覆い尽くしていく。ヴォルデモートを運良く退けたとしても、今度は大勢の死喰い人達が自分に襲い掛かって来る。こんな非常事態に対処できるようなものは、一切何も習っていないかった。ヴォルデモートは実に小気味良さそうな顔で、蒼白な表情を湛えるハリーをじつと眺めている。「ハリー、互いにお辞儀をするのだ。儀式の詳細には従わねばならぬ。さあ、間もなく訪れる“死”に礼を尽くすのだ」

ヴォルデモートはそう言うのと優雅な所作で軽く腰を折ってみせたが、蛇のような顔は真つ直ぐハリーに向けたままだった。死喰い人達が忍び笑いをしながら、ハリーの様子を見物している。しかし、彼はお辞儀などしなかった。

——殺される前にヴォルデモートに弄ばれてなるものか。彼は歯を食い縛り、宿敵を睨み付けた。そんな楽しみを与えてやるものか。けれどもそんなハリーの抵抗など何でもないかのように、ヴォルデモートは杖を一振りした。すると巨大な見えない手が少年を容赦なく前かがみにさせ、強制的にお辞儀をさせた。その滑稽な様子を見た死喰い人達は皆、腹を抱えて大笑いした。

☆

そして決闘が始まった。ヴォルデモートは杖を上げ、ハリーがまだなんら身を守る手段を取る間もなく、身動きすらできないうちに、またしても“磔の呪文”を放った。今度は先程戯れで掛けられたものよりも、ずっと長く苦しかった。まるで白熱したナイフが全身の皮膚を一寸刻みにしているような——想像を絶する痛苦に、彼は身を振って泣き叫んだ。最早、自分がどこにいるのかも分からない。ハリーはこれまでの生涯でこんな大声で叫んだ事がないというほど、大きな悲鳴を上げていた。

やがて、痛みが止まった。ハリーは激しく息を荒げながら、震える両手で地面を搔いて、よろよろと立ち上がった。ふと自分の荒々しい

呼吸音に紛れて、誰かの啜り泣く声が聴こえた。ハリーは涙と痛苦で朦朧としている視界の中で、目の前に小さな親友が立っているのを見たら。——イリスがヴォルデモートの持つ杖を包み込むようにして継り付き、背を震わせて泣きじゃくっている。

「お願いです……陛下……」イリスは蚊の鳴くような、か細い声で啜り泣いた。

「ハリーに、ひどいことしないで……」

先程までゲラゲラと笑っていた死喰い人達は急に静まり返り、皆引き攣った表情を浮かべて、思わぬ暴挙に出たイリスをこわごわと見つめた。いくらヴォルデモートの寵愛を受けているとは言え、彼女はご主人様の宿敵を屠る楽しみを邪魔してしまったのだ。しかしヴォルデモートは満足気に唸り、骨のように白い手でイリスの頭を愛おしげに撫でるだけだった。

「お前は全く、仕様の無い我儘娘だ。——良いだろう。お前の可愛い友人は、痛みもなく一瞬で殺してやる。それで良いな？」

“親友の死”が間近に迫っている事を確信したイリスは今や骨の髄まで震え上がりながらも、こくと頷いた。

——その様子を見た時、ハリーは自分の中に残る痛みの残滓も恐怖も、何もかも全てが消え去っていくのを感じた。代わりに心の奥底から沸々と湧き上がってきたのは、ヴォルデモートに対する激しい憎悪と怒りの感情だった。『僕はセドリックと同じように死ぬ』——ハリーは情け容赦のない、宿敵の赤い目を見つめ返しながら、そう思った。だけど、弱気になったりするもんか。命乞いなんてしない。あんなに優しくて純粋なイリスを呪いで一方的に穢し、僕の死を許容するほどまでに心を壊してしまった奴に。たとえ力では勝てなくとも、僕は絶対に負けたりなんてしない。

ヴォルデモートはイリスを死喰い人の輪の中へ押し遣ると、再び杖を上げた。しかし、今度はハリーも準備ができていた。クイディッチで鍛えた反射神経で、彼は横っ飛びに地上に伏せた。次の瞬間、自分を捕え損ねた呪文が、少年のすぐ近くにある墓石の一部を粉碎した。

「隠れんぼじゃないぞ、ハリー」

ヴォルデモートの冷たい猫撫で声が段々近づいて来た。死喰い人達が下品な笑い声を上げている。ますます激しく泣きじやくるイリスをルシウスが優しく抱き締めて、慰めている。ヴォルデモートは陰湿にせせら笑い、舌なめずりをした。

「俺様から隠れられるものか。もう決闘は飽きただろう。娘の願い通り、すぐに殺してやる。あつという間だ。——最も俺様には分かる筈もないが。死んだ事がないからな」

ハリーは墓石の影でうずくまり、いよいよ最期の時が来た事を悟った。——望みはない。助けは来ない。ヴォルデモートが更に近づくと、気配を感じながら、ハリーは恐れをも、理性をも超えた——“たった一つの事”を思い詰めていた。——子供の隠れんぼのようにここにくずくまったまま死ぬものか。ヴォルデモートの足下に跪いて死ぬものか。父さんのように、堂々と立ち上がって死ぬのだ。たとえ防衛が不可能でも、僕は身を守るために戦って死ぬのだ。

ハリーは果敢に立ち上がった。杖をしっかりと握り締めて構えると、墓石をぐるりと回り込んで、ヴォルデモートと対峙した。ヴォルデモートの真っ赤な双眸と、ハリーの緑色の双眸が交錯する。やがてヴォルデモートは、とてつもなく滑稽な姿をした魔法動物を見るかのような目をハリーに向け、大きな声で嘲笑った。

「なんと、ハリー！お前は娘を愛しているのか！」  
「黙れ!!」

ハリーは激昂した。ヴォルデモートの杖から緑色の閃光が走ったのと、ハリーの杖から赤い閃光が飛び出したのは、ほとんど同時だった。二つの閃光が空中で激しくぶつかり合った。そして突然、ハリーの杖が電流が貫いたかのようにブルブルと振動し始めた。

やがて眩い輝きを放つ金色の光が、ハリーとヴォルデモートそれぞれが持つ杖を結んだ。——これは何なんだ？全く事情が掴めないハリーは、ヴォルデモートの表情を仰ぎ見た。先程まで自信と残虐さに満ち溢れていたその目は、今は驚愕の感情に塗り潰され、大きく見開かれている。彼の杖も同じように震えていて、蒼白い指先がそれを抑えようと必死に握り締めていた。

しかし、驚くべき事態はこれだけで終わらなかった。今度は杖同士が金色に輝く糸に結ばれたままの状態で、ハリーとヴォルデモートの足が地面を離れ、空中に浮き上がって行ったのだ。二人は暗闇の中を滑るように飛んで、墓石も何もない場所に着地した。次の瞬間、二人の杖を繋いでいた金色の糸が裂けた。光は一千本余りに別れ、二人の間に高々と弧を描き、周囲を縦横に交差して、金色のドーム型の網――“光の籠”を創り上げた。

ルシウスは他の死喰い人達に指令を飛ばしながら、ヴォルデモートを助けるために杖を取り出した。しかしヴォルデモートは何とかこの不思議な金色の繋がりを断ち切ろうとしながらも、ルシウスを押し留め、“一切手を出すな”と言い放った。

――ふと光の籠の中から、この世のものとも思われない“美しい調べ”が聴こえてきて、イリスは思わず金色のドームへ歩み寄った。この歌をずっと昔に、どこかで聞いた事のあるような気がした。最も美しく、そして希望に満ちた調べを。

イリスは心の世界の最下部で、魔法の炎が創り出したドームの中に守られながら、外の様子を固唾を飲んで見守っていた。

「イリス、良く頑張った。もう大丈夫だ」

ふとイリスの大好きな声が、すぐ傍で聴こえた。漆黒のドレスロブを着たドラコがいて、自分に優しく微笑みかけている。――それはドラコの形をした“イリスが持つ彼の記憶”だった。イリスはヴォルデモートに絶対に知られたくない“大切な人々の記憶”を、この炎の中に隠していたのだ。

虹色の炎を透かして、無数の手が群れを成し、周囲を泳ぎ回っている様子が確認できた。それらは時々炎を触ろうとしては、火傷をしたかのように指先を勢い良く引っ込めている。大勢の人々の愛で出来た魔法の炎は、イリスにとっては陽だまりのように暖かく心地良いものなのに、手の群れにとっては“本物の火”と同じようだった。ドラ

コはイリスの手を握りながら、静かに言った。

「あいつはこの炎の中に立ち入る事はできない。中の様子を見たり、会話を盗み聴く事も出来ない。これが何なのか分からないんだ。とうの昔に忘れてしまっている」

不意に手の群れが一つに収束し、すらりと背の高い青年の姿になった。——スリザリンの優等生、トム・リドルだ。たちまちイリスの心身を恐怖の感情が支配して、彼女は極寒の地に放り込まれたかのように震えながらドラコに縋り付いた。リドルは炎のすぐ傍までやって来ると、冷たい怒りに満ちた声で命令した。

「イリス、こんな所でずっと隠れているつもりか？この炎から出るんだ。これは命令だ。また厳しい罰を受けたいのか？——それとも君の友人を一人ずつ見せしめに殺した方が、君にとって良い薬になるかな？」

呪いはどうあっても炎を破壊できないという事が分かると、イリスが自ら炎を出るように仕向けるため、彼女が最も恐怖を覚える姿——トム・リドルに変身したのだ。リドルはイリスの過去の古傷を抉るような言葉ばかりを選び、次々と投げつけた。

果たして呪いの思惑は成功し、イリスは激しいパニック状態に陥ってしまった。——私のせいで、またハーマイオニーが傷つけられてしまう。イリスは無我夢中でドラコの手を振り解き、炎の外に飛び出そうとしたが、彼は繋いだ手を離さないまま、静かな声でこう言った。「あいつにそんな力はない。ただの脅しだ。恐怖は愛に勝てない。信じてくれ」

愛する人の忠告は、過去のトラウマに苦しむイリスの心を宥め、落ち着かせてくれた。“恐怖は愛に勝てない”——イリスはドラコの言葉を何度も心の中で反芻し、何とかその場に押し留まった。一方のリドルは、何時まで経ってもイリスが出てこないのです、イライラとした様子で炎の周りを歩き回りながら、腹立たしげにこう叫んだ。

「こんなちっぽけな炎に、一体何ができる？それは君に何もできない！君の呪いを消すわけでもない。愛は、死の恐怖から逃避するために人々が創った幻想だ。ただの思い出や感情の塊に、愛と大層な名前を

付けただけさ。何の意味も成さない。悪戯に感情を掻き乱すだけの、煩わしいものだ！」

リドルの声はまるで駄々を捏ねる子供のようになり、幼く悲痛な響きを秘めていた。やがて彼は立ち止まり、小さくせせら笑った。

「まあいい。愚かな君はいずれ、この子に吸収されていくだろう」

「お願い、そこから出て来て。あの人に従おう？もうこんな辛い事は嫌だよ」

イリスは思わず耳を疑った。——自分の声だ。リドルの背後から、  
“もう一人の自分”が弱々しく泣きながら姿を現した。どうして自分が二人いるんだ？イリスは炎の外の様子をもっと良く見ようと歩き出した時、ふと自らの手に違和感を感じて視線を下げ、息を詰まらせた。

——驚くべき事に、体の輪郭が薄つすらと透けている。どうやらリドルの傍にいる“もう一人の自分”は、呪いに屈した自分の心の片割れのようなだった。

「頑張つて、呪いに抗つて、あの人に対抗して、一体何になるの？私、死にたくない。痛い思いをしたくない。あの人に従ったら、もう辛い思いはしなくて済むんだよ？どうしてそこにいるの？」

「もう半分の君はとつてもお利口だ」

リドルは満足気にそう言つて、少女の頭を優しく撫でた。しかし、本物のイリスはそれどころではなかった。もう一人の自分が泣き事を言う度に、自分の体はますます透明になっていく。『本当だ』——やがてイリスはそう思い始めた。どうして私はこんな炎の中にいるんだろう。リドルの言う通り、ここにいたつて呪いが消えるわけじゃない。私はヴォルデモートに歯向かえば死んでしまう。なのに、どうして絶望せずに呪いにも抗つて、ここにいるんだろう。

その時、ドラコがイリスの肩をそつと掴んだ。彼はローブの胸ポケットから、掌に載る程の小さな薪を大事そうに取り出した。それは轟々と燃え盛る周囲の薪達とは対照的に、燻ぶる様子すら見せていない。彼女は不思議そうに覗き込んで、小さく息を飲んだ。水晶のように輝く樹皮の中に、リドルの傍で泣きじゃくる“もう一人の自分”の

顔が映っている。——それは“自分自身への愛”が詰まった薪だった。

「その理由は、もう君には分かっている筈だ」ドラコは愛おしげに少女の頬を撫でた。

「そして僕を愛した君なら、君自身もきつと愛せる」

二人は言葉もなく、ただ静かに微笑み合った。やがてイリスはしっかりと頷いて、炎のドームをくぐって外に出た。——ドームの外は、不気味なほどに真っ白な世界だった。無数の手の群れが蠢く以外は、何も残されていない。リドルが我が意を得たりとばかりに微笑んでいる。イリスはほとんど透明になった手で、自分を責めるように泣きじやくるばかりの“もう一人の自分”の手を取った。

「私も分からないの。どうして諦めないのか」

イリスが静かにそう言うと、もう一人の自分が涙に濡れた目を見開いて、こちらをじっと伺い見た。

「何度もそう思った。もうこんな事は止めよう、逃げ出そうって。でも……どうしようもなく辛くて悲しい事が起きる度に、周りの人達や、皆との大切な思い出が、力強く支えてくれるんだ。そうしたら、私が背負ってた重い荷物が少しだけ軽くなるような気がするの。暗くて冷たい未来が、明るく暖かい光に満ちている気がするんだ」

——確かに自分の人生は他の人々と比べて、辛くて悲しい出来事が多い。けれどもどんなに心を痛めても、かけがえのない大切な人々が、時に命懸けで自分を絶望から救い出し、正しい場所へと導いてくれる。だからこそ、自分はここまで歩いてこれたんだ。もう一人の自分分は鼻を嚙りながら、怯えた声で囁いた。

「この先、悪い事ばかり起きるかもしれないよ。もう二度と明るい光が差さなかつたら？」

「きつと大丈夫だよ」

イリスは明るい声でそう言うと、少女の手を握り、気丈に微笑んだ。「皆が、私に希望を持つ事を教えてくれた。それを信じよう」

イリスは自分を守るようにして燃え盛り続ける、魔法の炎をじつと見つめた。——愛する事は希望を持つという事なんだ。愛する人々

がいるからこそ、明日が楽しみになる。たとえ今日という日が絶望に満ちていたとしても、彼らと一緒になら、暗い未来に一縷の希望を見出す事だってできる。その言葉を聞いたもう一人の自分は、悲しそうに眉根を下げて顔を俯かせ、蚊の鳴くように小さな声でこう尋ねた。

「あなたは、弱い私”が嫌い?”」

『君自身もきつと愛せる』——その時、イリスは先程のドラコの言葉をふっと思いつ出した。『もつと自分を受け入れて、褒めて、愛してあげなさい』——かつて自分に掛けてくれたミセス・ノリスの言葉が、それに重なった。イリスは自分が最も愛さなければならぬ相手に、やっと気づいた。少女はそつと自分自身を抱き締めた。ずつと傍にいて、決して逃げる事も出来ない存在なのに、“自分を愛する”というのは世界で一番難しくて勇気のいる行為だ。

「大好きだよ。だって私なんだもの。もう一度、私の事を信じてあげてくれないかな」

イリスが優しくそう言うと、もう一人の自分は泣きながらも、こくと頷いた。次の瞬間、二人の少女の体は眩いばかりの虹色の輝きに満たされ、やがてその煌めきは白い世界じゅうを埋め尽くした。ドラコの手の中で、小さな薪が狂おしい程に大きく燃え盛り始める。リドルが呻き声を上げ、もがき苦しみながら消滅していく——

☆

そして、イリスは目を覚ました。——今までの心の世界で戦っていた記憶の上から、“従者”として過ごしていた現実世界での記憶が覆い被さってきて、イリスはしばらくの間、ひどい混乱状態に追い込まれてしまった。頭がフラフラとし、とても気分が悪い。しかし、それに酔っている時間などない。イリスは何とか自分の心を落ち着けるのに成功すると、目の前に展開された“光の籠”に向かって歩き始めた。金色の網目を透かして、対峙するハリーとヴォルデモートの姿が見える。そこから早くハリーを助けなければ、彼が殺されてしまう。

しかし次の瞬間、イリスは両足を魔法の縄に縛り上げられて、コロンと草むらに転がってしまった。縄目を解こうともがきながらも、その出所を探し出したイリスは、やがて驚愕に打ちのめされた。



縄を出したのは自分自身——“魔法の右腕”だった。それは、自らの創造主であるヴォルデモートの意志に反する行動を拒絶しようとした。イリスの目の前で、右腕は杖先をこちらに向けると脅すようにパチパチと火花を散らせてみせる。——負けるもんか。イリスは奮起し、ありつただけの力を込めて右腕に命じた。たとえヴォルデモートが創り出したものでも、今は私の右腕だ。私のものなんだから、私の言う事を聞け！

「私の言う事を聞けええええっ！」

——イリスは声を限りに叫んだ。イリスのかつてない程の強い意志に従い、彼女の体を循環する魔法力は総力を決して、右腕を攻撃した。右腕が抵抗する度に、イリスの命令に従って異なる固有魔法を有する“二つの血”は、お互いの尾っぽを噛んで狂ったようにグルグル回り続け、無限に魔法力を増産し続ける。

やがて右腕が内包する呪いの力を、イリスが打ち砕いた。右肩から指先に掛けて細かな亀裂が入り、粉々に砕け散って、そして再構築されていく。イリスは杖を握み直し、異変に気付いて自分を捕えようとやってきた死喰い人に向けて“失神呪文”を唱えた。

しかしイリスが呪文を頭に思い浮かべた瞬間、杖先から赤い光線が迸り、死喰い人は吹っ飛んでいた。少女は驚きの余り大きく息を飲んで、まじまじと自分の右腕を見つめた。——今やイリスの頭と杖は、純粋な彼女自身の魔法力だけで構成された右腕を通して、完全に一体化していた。最早、彼女は魔法を使うのに呪文を発する必要すらなかった。イリスはスニジェットと人間との“交互変身”を瞬きする程の超スピードで行い、ほんの数秒で五人もの死喰い人を昏倒させてみせた。

だが、イリスの快進撃はそこまでだった。自分のすぐ傍を恐ろしい唸りを上げて赤い光線が掠め、彼女は慌てて振り向いた。——ルシウスが細い灰色の目を怒りに滾らせ、杖先を自分へと向けている。如何にパワーアップしたイリスと言えども、非常に優れた魔法戦士であるルシウスと対等に渡り合う事は難しかった。彼は周囲の死喰い人達を“光の籠を監視する役”と“イリスを捕獲する役”の二つに分断

させ、冷静かつ的確に彼女を追い詰めていった。

少女はどんどん金色のドームから追いやられ、墓場まで押し戻されてしまった。焦ったイリスがスニジェットに変身して、ルシウスの包囲網を掻い潜ろうとした瞬間、複数の死喰い人が放った“石化呪文”が羽根の一部を掠めた。彼女は金色の光をまき散らしながら人間の姿に戻り、地面に転がった。

「もう一度、おねんねの時間だ。お嬢ちゃん」

マクネアが華奢な造りの金色の鎖を振り回しながら、イリスに向かってニヤリと笑ってみせた。彼女はまだ痺れの残る体を懸命に動かして、マクネアが放った金色の鎖から何とか逃れる事に成功した。死喰い人達が下賤な笑い声を上げ、墓石の影に隠れるイリスに迫った。やがて二人の死喰い人が、彼女から少し離れた所に転がったあるものを見つけて、ゲラゲラと笑った。

「おい。あいつじゃないか？ハツフルパフの代表選手だ」

「あの自慢したがりのデイゴリーの息子だろ？…死んでやがる。フン、良い気味だ」

“ハツフルパフの代表選手”、“デイゴリーの息子”、“死んでいゝる”——余りに衝撃的な言葉の数々に、イリスは今自分を取り巻いている状況も忘れて、二人の死喰い人達の足下にあるものに目を凝らした。もしや、考えたくもないが——セドリツクが死んでいるのか？やがて少女の目の前で、一人の死喰い人がそれを乱暴に蹴り上げた。するとルシウスがねっとりとした声で、彼らの暴行を止めた。

「余り傷つけるな。あのお方がそれを使って、“面白い見世物”をお創りになられるかもしれぬ」

——イリスの感情が爆発した。イリスは渾身の力でスニジェットに変身してセドリツクの下へ向かい、自分達の周りに強力な“防護呪文”を展開させた。イリスは恐る恐るセドリツクの口元に手をやった。息をしていない。死んでいる。虚ろに開かれた灰色の瞳の奥がふと虹色に煌めいて、彼女に——彼が死に追いやられるまでの記憶を垣間見せた。

優しく誠実なセドリツクは、自分を助けてくれたハリーに恩義を感

じ、譲り合いの末、一緒にゴブレットを取るという事になった。そして彼はここへ連れて来られ、邪魔者としてピーターに殺されてしまった。——なんて惨い事を。セドリックは何もしていないのに。余りに凄惨な現実にながズタズタに引き裂かれ、息を吸う事すら苦しかった。イリスは大粒の涙を零れ落としながら、周囲を取り巻くルシウス達に向けて懇願した。

「あなた達の心は痛まないの？セドリックもハリーも、私だって……あなた達の敵じゃない。ただの子供です。何も悪い事なんてしていません。どうか、ホグワーツへ帰して！」

しかしルシウス達は、イリスの言葉に耳を貸すどころか、ますますゲラゲラと笑い転げるだけだった。——何が可笑しいんだ？イリスはまるで特大の氷を無理やり飲み下したかのように喉が詰まり、心臓がキンと冷たく凍り付いていくのを感じた。セドリックは殺され、ハリーだって何時ヴォルデモートに命を奪われるかも分からない。何も悪い事などしていない子供の命を案ずる事無く、どうして笑い飛ばす事ができるんだ？ルシウスは結界のすぐ傍まで近づくと、そつとしゃがみ込んで、半透明の膜越しにイリスをじっと見つめた。そして幼い子供に言い聞かせるように優しい口調でこう言った。

「イリス。我々にとつて“子供”とは“自分達の家族の子”を示すのだ。残念ながら、ハリーもセドリックも我々の家族の一員ではない。つまり、君と同じ守るべき対象ではないのだ。二人共、生きる価値のない存在なのだよ」

その余りにも残酷な言葉にイリスは咄嗟に呼吸を忘れて喘ぎ、杖を取り落とした。——こんな冷酷な世界の中で、私はさつきまで生きていたの？表面じゆうに細かな亀裂が入り、粉々に壊れ去っていく結界を見て、ルシウスは我が意を得たりとばかりに笑い、茫然と佇んで涙を流す少女を捕えようと手を伸ばした。

---

少年は不思議な夢を見ていた。——静まり返った濃紺色の世界で、

立派な牡鹿の角に腰掛けたり、熊と見まごうような黒犬の頭にちよんと乗っかったり、荒々しい咆哮を上げる人狼の片耳に縫り付いて、遠吠えの真似をする小さなネズミの夢。そして荒涼とした大地を歩き続ける、不毛で悲しい夢。

『戦って！ピーター、戦って！』——不意に少女の毅然とした声が、耳の中にこだました。“ピーター”、僕はピーターという名前なのか？少年はたゆたう意識の中で、自分の名前を思い出そうと眉を顰め、目を閉じた。

再び目を開けると、少年は——今度は白い砂浜に立っていた。眼前には見渡す限りの青い海が広がっている。とても安らかで、清らかな気分だった。ふとどこかから女の子のかすかな泣き声が聴こえて、少年の心はざわざわと騒いだ。——チョウの声か？彼女が泣いているなら、早く慰めなきや。奇しくもその声が切っ掛けで、彼は自分が何者であるかという事を思い出した。

——そうだ、僕は“セドリック・デイゴリー”だ。ピーターじゃない。そしてこの声は、僕のガールフレンドの声じゃない。

やがて水平線の向こうから、美しい細工の施された船がやってきた。——あれは僕を迎えに来たんだ。セドリックは穏やかな笑みを浮かべ、こちらへ静かに近づいてくる船を待っていた。その時、後方で小さな子供の声が出て、彼は思わず振り向いた。

砂浜から十メートルほど離れた場所に、優しい風にそよぐ草原が見えた。——その中に、チョウが立っている。セドリックは急いで駆け出し、チョウの名前を叫んだが、彼女はこちらに見向きもしなかった。ふと彼女の背後から、小さな少年がちよこんと顔を出した。その子供は不思議な事に、自分と同じ灰色の目をしている。少年はじつとセドリックを見つめて、につこりと微笑んだ。セドリックがその子に触れようと手を伸ばした時、彼の意識は急激に遠のいていった——

☆

——そして、セドリックは息を吹き返し、目を覚ました。

数時間振りに味わう空気は、今まで食べたどんな料理よりも美味しく感じられた。正に、生き返るような心地だった。酸素を体じゅうに

行き渡らせるかのようにゆっくりと呼吸しながら、そつと目を開けると、小さな少女が守りの結界を張って自分を守り、周りを取り囲む魔法使い達に懇願している様子が確認できた。——この少女の名前をセドリツクはすぐに思い出す事が出来た。ハリーのガールフレンドの“イリス・ゴント”だ。

やがてイリスは一人の魔法使いの心無い言葉にショックを受けて杖を取り落とし、結界を強制解除してしまった。茫然とうずくまる少女を捕えようと、狡猾な顔をした魔法使いが迫る。セドリツクは電光石火の速さで杖を引き抜き、“武装解除呪文”を放って彼を弾き飛ばした。油断し切っていたルシウスは不意打ちとも言えるセドリツクの攻撃に対処できず、成す術なく地面を転がっていった。

“油断大敵”だよ、イリス

「セドリツク！」

——セドリツクが生きている！信じられない程の奇跡を目の当たりにしたイリスは感極まり、セドリツクに渾身のタツクルを決めた。セドリツクは思わず目を白黒させながらも踏ん張った。彼はイリスの銀色の右腕を見て大きく眉を潜めたが、内側に煌めく“闇の印”も視界に入っている筈なのに、彼女への優しい態度は変わらなかった。

セドリツクはイリスを促して“守りの呪文”を唱え、再びバリケードを築き上げた後、訝しげに胸を摩った。——確かに、僕はあの恐ろしい緑色の光を受けた。ムーディ先生が教えてくれた“死の呪い”を。だけど僕は生き残った。一体何故？イリスも同じ事を思い至ったのか、二人は顔を見合わせて首を傾げた。やがて、セドリツクは“ある事”を思い出した。授業中にムーディはこのような事を言っていた——『“死の呪い”は優れた魔法使いが、心から相手の死を望む気持ちが必要ならば成功できない』と。

「もしかしたら、あいつの呪いが不完全だったのかもしれない」

セドリツクが呟いた言葉に、イリスは思わず息を飲んだ。——ピーターが“死の呪い”に失敗した？しかし、二人が会話を交わせたのはそこまでだった。ルシウスが隊列を組み直し、死喰い人達総動員で攻撃を仕掛けてきたのだ。二人はあつという間に追い詰められた。イ

リスは強力な防護結界を重ね張りし、中からセドリックが攻撃するものの、多勢に無勢で全く追いつかない。夥しい量の光線を受け、今にも壊れそうに震える結界を何とか保ちながら、イリスは親友の身を案じて、遠くの方に光る金色のドームを見つめた。——どうやったらあそこへ行つて、ハリーを助け出す事ができる？

「ハリーはどこだい？」セドリックが呪文の息継ぎの間に、素早く尋ねた。

「あの金色のドームの中にいるの。あの人も一緒にいる」

セドリックは金色のドームを見つめながら、しばらく考え込んだ。それから自分の傍に転がった“炎のゴブレット”をそっと指差して、静かにこう言った。

「イリス、このゴブレットは“移動キー”だ。これに触れば、僕らはホグワーツへ帰れる。なんとかして、あの金色のドームへ行つてハリーを助け出すんだ。……君、駆けつこは得意かい？」

☆

ハリーは金色のドームの中で、今にも爆発しそうに震える杖と戦いながら、ヴォルデモートと対峙していた。やがて、二つの杖を繋ぐ光の糸に変化が現れた。いくつもの大きな光の玉ができて、二本の杖の間を行ったり来たりし始めたのだ。一番近くの玉がハリーの杖先に近づくと、指の下で杖の柄が熱くなり、杖自体が激しく震えた。——その玉に触れたら、杖はそれ以上耐えられないに違いないと彼は思った。ハリーはその玉をヴォルデモートの方に押し返そうと、気力を最後の一滴まで振り絞った。するとゆっくりと玉の列はヴォルデモートの方へ進み、やがて最初の玉が彼の杖先に触れた。

たちまちヴォルデモートの杖が、辺りに響き渡る苦痛の叫びを上げ始めた。彼は驚いて、目を見開いた。濃い煙のような腕が杖先から飛び出し、消えた。——ヴォルデモートがイリスに与えた腕のゴーストだ。続いて、杖先から濃い灰色のゴーストのような老いた男性が窮屈そうに出て来た。彼はちよつと驚いたように、ハリーとヴォルデモート、金色の網、それから二本の結ばれた杖を眺めた。そしてヴォルデモートを憎々しげに睨み、ハリーを励ますと、金色の網の内側に沿つ

て歩き始めた。次は魔女のゴーストだ。ハリーはその女性の顔をどこかで見た事があった。——バーサ・ジョーキンスだ。彼女が行方不明になった新聞記事で写真が載っていた。

その時、ハリーは理解した。——彼らはヴォルデモートに殺された犠牲者の魂なのだ。杖先から次々とゴーストが噴き出て、ハリーには激励の言葉を送り、彼の所までは届かない低い声で、ヴォルデモートを罵った。

そしてまた別の頭が杖先から現れた。一目見て、ハリーはそれが誰なのかが分かった。髪の高い若い女性の煙のような影が、地上に落ち、すっと立ってハリーを見つめた。彼は熱に浮かされたような目で、自分の母親のゴーストを見つめ返した。

「お父さんが来ますよ」リリーが静かに言った。

「お父さんのためにも頑張るのよ。大丈夫、頑張つて」

そして父親がやって来た。背の高い、ハリーと同じクシャクシャな髪。ジェームズ・ポッターの煙のような姿が、ヴォルデモートの杖先から花開くように現れた。その姿は地上に落ち、妻と同じようにすくくと立った。ジェームズはハリーを見下ろし、静かに話しかけた。殺戮の犠牲者に周りを徘徊され、恐怖で鉛色の顔をしたヴォルデモートに聴こえないよう、低い声だった。

「繋がりが切れると、私達はほんの少しの間しか留まっていられない。それでもお前のために時間を稼いであげよう。」

ハリー、ドームの外を、ゴブレットが「移動キー」になっている。それを触ればホグワーツへ帰れる。君の友人達がそれに気づき、君を迎えに来てくれようとしている」

ハリーは杖を離さないために顔が歪むほど力を込めながら、ドームの外をちらりと見た。——バーサ・ジョーキンスのゴーストの肩越しに、セドリックとイリスが死喰い人達と激しい交戦を繰り広げながら、こちらへ向かって懸命に走ってくる様子が垣間見えた。『セドリックが生きていた。そしてイリスは呪いを克服したんだ』——ハリーの絶望に染まりかけていた感情が瞬く間に金色の希望の光に塗り潰され、熱い感情でグツグツと煮えたぎり、今にも爆発しそうに高

まった。ジェームズはわずかに微笑んで、ハリーの肩に手を置いた。「君はなんとかして、彼らに合流するんだ。これが”最後の課題”だ。達成できるね？」

まるで今までハリーが代表選手として課題を達成するのをずっと見ていたかのように——何気ない口調で、悪戯っぽく微笑みながらジェームズはそう言った。思わず戸惑ってハリーが見上げると、ジェームズは愛おしげに息子の肩に手を置いた。

「僕達は見えなくてもずっと君の傍にいる。君の課題を成し遂げる様は本当に立派だった」

「ずっと傍にいるわ」

リリーがそっと近づいてきて、息子の頭を優しく撫でた。——ハリーは手の中で滑り、今にも抜け落ちそうになる杖を必死で掴みながら、今にも両目から零れ落ちそうに湧き上がって来る涙を歯を食い縛って懸命に堪えた。

「走る準備をして。・・・さあ、今だ！」

ジェームズたちの号令で、ハリーは渾身の力で杖を上にはね上げた。すると金色の糸が切れた。光の籠が消え去り、不死鳥の歌がふつりと止んだ。しかしヴォルデモートの犠牲者の影は消えていなかった。ハリーの姿をヴォルデモートの目から隠すようにと、彼に迫っていた。少年は痛む足をかばいながら、必死に駆け出した。

次の瞬間、イリスとセドリック、そしてハリーの三人を丸ごと包み込むように、細長いトンネルの形をした——淡い輝きを放つ防護膜が展開された。セドリックとハリーのちょうど中間地点に立つイリスが、まるで祈りを捧げるように杖を両手で捧げ持ち、顔の前に掲げている。その杖先から”守りの呪文”がマシンガンのように次々と飛び出して、結界をますます分厚く塗り固めていく。

「ハリー！走れ！」

セドリックが結界を壊そうと呪文を放つ死喰い人達を懸命に迎え撃ちながら、怒鳴った。ハリーは足の痛みなど、どうでも良くなった。やらなければならない事に全身全霊を傾けて走った。

——イリスまであと三メートル。セドリックはすかさず”呼び寄



せ呪文”でゴブレットを呼び寄せ、イリスの右腕をしっかりと掴んだ。彼女は真剣な表情で防護膜をますます肥大させ、空中を飛んでこちらへ向かってくるゴブレットとセドリツクを繋いだ。——イリスまであと一メートル。ハリーは大きく大地を踏みしめ、彼女の腕を掴もうと手を伸ばした。少女は涙と安堵でぐしゃぐしゃになった顔で、ハリーに優しく微笑みかけた。

次の瞬間、赤い光線がトンネルを粉々に打ち砕いて、イリスの背中を直撃した。——ハリーの目には、全ての物事の動きがスローモーションのように見えた。気を失って、ゆっくりと地面に頽れていく少女の後方に、杖先をこちらに向けたヴォルデモートが立ち、酷薄な笑みを浮かべていた。

雪のように降り注ぐ結界の破片の中で、セドリツクは歯を食い縛り、イリスの体を何とかしてハリーに近づけようと押し遣った。ハリーは懸命に手を伸ばしたが、彼女が気絶した事で腕が下がってしまい、あと数センチ届かない。ヴォルデモートは冷たく甲高い笑い声を上げ、今度はハリーに杖を向けた。

その時、イリスのローブの胸ポケットから小さなネズミが飛び出して、少女の袖を駆け上がり、ミミズのような尻尾をハリーの指先にそつと絡ませた。そしてゴブレットがセドリツクの手を吸い寄せられ、三人の子供達は一齐に墓場から姿を消した。ハリーはネズミを掌の中にしっかりと握り込みながら、空いた手でイリスの腕を探し、夢中で掴んだ。風と色の渦の中で、ハリーとセドリツクはイリスを守るかのように固く身を寄せ合った。

☆

三人が消え去った後、死喰い人達はこわごわとヴォルデモートを伺い見た。——とんでもない失態だ。ハリー達をおめおめとホグワーツへ逃がし、おまけにイリスの呪いが一部、解けてしまった。しかし、ヴォルデモートは特に気分を害するという風でもなく、静かにこう言った。

「ルシウスよ。娘をホグワーツへ帰すな」

——それは、ゾツとするような執念と欲望に満ちた声だった。間近

でそれを聴いた死喰い人の何人かは、泡を吹いて気を失った。

「御意に。もう手筈は整えてあります」

ルシウスは余りの恐怖に震える歯の根を何とか合わせ、主の足下に  
跪き、そう応えた。

三人の子供達は、揃って地面に叩きつけられた。顔が芝生に押し付けられ、むせ返るような草の匂いが鼻腔を満たした。まるで切れかけた蛍光灯のように意識と視界が明滅し、身体の下で地面がグラグラと揺れているような感じがした。それでもハリーはイリスの体を手繰り寄せ、自分の腕の中になんとか閉じ込めた。——暖かく息づいている。彼は安堵したとたん、すかさず途切れそうになった意識を慌てて持ち直した。

突然、音の洪水が耳の中にどつと流れ込んで来た。四方八方から声がする。足音が、叫び音がする。やがて二つの手がハリーを乱暴に掴んで、仰向けにした。

「ハリー！」

おぼろげな視界の中で、ダンブルドアが屈んで自分を覗き込んでいる様子が確認できた。大勢の黒い影が三人の周りを取り囲み、段々近づいて来た。皆の足踏みで、頭の下での地面や草々が地震のように揺れている。

——ハリー達は迷路の入り口に戻って来ていた。人々は皆、突如として、ハリーやセドリックだけでなく、代表選手ではない“一般の生徒”であるイリスもゴブレットと一緒に出現し、その上、三人共傷だらけのボロボロである事に騒然としていた。ハリーはイリスをますます大事そうに抱え込みながら、ダンブルドアの腕を掴んだ。

「あの人が戻ってきました。戻ったんです。ヴォルデモートが」  
「何事かね？何が起こったのかね？」

杖明かりを点したファッジ大臣がハリーの前に現れた。魔法の光が、彼の驚愕に引き攣った蒼白な表情をくつきりと映し出している。次の瞬間、ファッジはイリスを訝しげに覗き込んで、絶句した。

「どうして君とセドリックだけでなく、イリスが・・・な、なんだこの腕は！“闇の印”だ！」

ファッジの言葉は、異常事態に興奮した観衆を恐慌状態に陥らせた。“闇の印”——同じ言葉が繰り返された。周りに集まって来た

人々の影が息を飲み、自分の周りに同じ言葉を伝えた。叫ぶように伝える者。金切声で伝える者。言葉が夜の闇に反響した。恐怖の感情はたちの悪い伝染病のようにわっと広まり、ヒステリーになった人々は、唯一の形に見える恐怖——「闇の印」の刻まれた不気味な右腕を持つ少女を過剰に恐れた。

「『闇の印』だ」「闇の魔女だ」「この二人をボロボロにしたのはこの娘だ」「捕えろ！」

たちまち魔法の縄が彼方此方から噴き出して、気を失ったイリスに巻き付き、ハリーの腕の中から引き摺り出した。——やめろ、彼女に手を出すな！ハリーは鉛のような体を懸命に動かして、イリスの傍へ這いずって行こうとした。けれど、もう指先一本動かす力すら残っていない。

その時、イリスの前によろめきながら立ち上がる青年がいた。セドリックだ。

「やめろー！」セドリックが叫んだ。

「この子は死喰い人から僕を助けてくれた。僕らを傷つけたのはヴォルデモートと死喰い人達だ！」

セドリックが発した“ヴォルデモート”という言葉を聞くや否や、人々はますます狂乱状態に陥った。ダンブルドアとファッジが懸命に観衆を諫め、駆けつけたシリウスがイリスを捕えようとする人々をまとめて相手にし、セドリックが両親に事の次第を話している時、誰かがハリーを助け起こした。

「大丈夫だ、ハリー。わしがついているぞ。医務室へ行くのだ」ムーデイの声だ。

「嫌です。イリスを置いておけません」ハリーは嫌がった。

「娘は大丈夫だ。シリウスが守っている」

ハリーは心配そうな眼差しで、シリウスが展開した淡い輝きを放つ防護膜に包まれて、横たわるイリスを見つめた。ムーデイはハリーを半ば引き摺るように、半ば抱えるようにして連れ出し、怯える群衆の中を進んだ。人垣を押し退けるようにして城へ向かう途中、周囲から息を飲む声、悲鳴、叫び声が、否が応でも彼の耳に入ってきた。芝生

を横切り、湖やダムストラングの船を通り過ぎる。ムーデイは城へ入ると、医務室ではなく自分の部屋へ向かった。そして古びた肘掛け椅子にハリーを座らせた。

「さあ、ここに。もう大丈夫だ、これを飲め」

ムーデイは部屋の鍵を掛け、小さなコップに何かの液体を注ぎ入れると、ハリーの手に押し付けた。

「飲むんだ。気分が良くなるから。さあ、ハリー。一体何が起こったのか、わしは正確に知っておきたい」

ムーデイはハリーが薬を飲み干すのを手伝った。喉が焼けるような胡椒味で、ハリーはたまらず咳込んだ。やがておぼろげだった意識が回復し、周囲の様子もはっきり見えてきた。ムーデイはファツジと同じくらい蒼白に見え、両眼が瞬きもせずにしっかりと自分を見据えている。

「ヴォルデモートが戻ったのか？ハリー、それは確かか？どうやって戻ったのだ？」

「あいつは蘇るために父親の墓からと、僕と・・・」

ハリーはそれ以上言葉を続ける事が出来なかった。イリスの悲痛な叫び声と、口にするのも憚られる程に残酷だったあの光景——。少年は耐え切れずにムーデイから目を逸らし、ギリと歯を食い縛った。

「イリスから、材料を取った」

その時、視界の隅でムーデイがニヤリと笑ったような気がして、ハリーは慌てて彼を見つめた。ムーデイは先程と変わらない、険しく蒼白な表情で自分を見下ろしている。——どうやら気のせいだったらしい。クイディッチ競技場からは、まだ悲鳴や怒号が聴こえて来る。ハリーは早く話を終わらせて競技場へ戻り、シリウスと一緒にイリスを守りたかった。

「それで死喰い人は？奴らは戻って来たのか？」

「はい。大勢、戻ってきました」ハリーは応えた。

「あの人は死喰い人をどんな風に扱ったかね？」ムーデイが静かに訊いた。

「許したか？」

そこで、ハリーはハッと気づいた。——ダンブルドアに話すべきだった。ヴォルデモートはルシウス達に『ホグワーツに“至誠のしもべ”を送り込み、“炎のゴブレット”に自分の名前を入れるようにと命じた』と言っていた。ハリーは居てもたっても居られなくて、ムーディを見上げた。ここに死喰い人がいる。そして現状で最も疑わしい存在は、あのカルカロフだ。

「ホグワーツに死喰い人がいるんです。そいつが僕の名前をゴブレットに入れて、僕に最後までやり遂げさせようとしたんだ」

ハリーは傷ついた足を叱咤して何とか起き上がろうとしたが、その様子を見たムーディが肩を挿んでぐっと押し戻した。

「誰が死喰い人か、わしは知っている」ムーディは落ち着き払った口調で言った。

「カルカロフですね？」

ハリーはごくりと唾を飲み込んだ。しかしムーディは不自然に高い声で笑い出した。魔法の目がグルグルと忙しく回り、部屋中を観察している。

「カルカロフだと？ 奴は今夜逃げ出したわ。腕についた“闇の印”が焼けるのを感じてな。闇の帝王の忠実なる支持者をあれだけ多く裏切った奴だ。連中の歓迎を受けたくはないだろう。」

しかし、そう遠くには逃げられまい。闇の帝王には敵を追跡するやり方がある」

「カルカロフがいなくなった？ 逃げた？」ハリーは唇を舐め、言い淀んだ。

「でも、それじゃ……僕の名前をゴブレットに入れたのは、カルカロフじゃないの？」

「違う」

ムーディはとびきりのご馳走を噛み締めるようにゆっくりと応え、ハリーをじっと見つめた。

「あいつではない。わしがやったのだ」

ハリーはその言葉を聞いたが、飲み込めなかった。——先生が、ゴブレットに僕の名前を入れた？ 一体、何の冗談を言ってるんだ？ ハ

リーは現実を否定するように首を横に振り、掠れた声で囁いた。

「違う。まさか。先生じゃない。先生がするはずない」

「わしがやった。確かだ」

ムーデイの魔法の目が最後にグルリと動き、窓とドアを確認した後、ハリーに戻った。外に誰もいない事を確かめているのだと彼には分かった。それからムーデイは杖を出して、ハリーに向けた。

「それではあのお方は奴らを許したのだな？自由の身になっていた死喰い人の連中を？アズカバンを免れた奴らを？」

「なんですって？」

ハリーは茫然としたまま、ムーデイが突きつけている杖の先を見つめる事しか出来なかった。——悪い冗談に違いない、きつとそうだ。

「聞いているのだ」ムーデイは静かに言った。

「あのお方をお探ししようともしなかったカス共を、あのお方はお許しになったかと訊いているのだ。クイディッチ・ワールドカップで仮面を被ってはしゃぐ勇氣はあっても、この俺が空に打ち上げた“闇の印”を見て逃げ出した・・・不実な、役に立たない蛆虫共を」

「先生が打ち上げた？一体、何を仰っているのですか？」

「ああ、ハリー。どうか言ってくれ。一番必要とされていたその時に、ご主人様に背を向けたあいつらに天罰が下った事を。ご主人様が、連中を痛い目に遭わせたと言ってくれ」

ムーデイは突然、狂気に満ちた笑みを浮かべながら、ハリーに迫った。少年は恐怖に息を飲んで、椅子から転がり落ちた。部屋の灯りを受けて、ムーデイの左手の薬指に嵌まった金色の指輪がキラリと輝きを放った。

「言ってくれ。あのお方が、俺だけが忠実であり続けたと仰ったと。あらゆる危険を冒して、俺はあのお方が何よりも欲しがっておいでだったものを、御前に届けようとした。お前とイリスをな」

「違う・・・あ、あなたのはずがない・・・」ハリーは喘いだ。

「いいや、俺なのだ。ハリー。別の学校の名前を使って、“炎のゴブレット”にお前の名前を入れたのは」

ムーデイは屈み込んで、恐怖に喘ぐハリーを見つめ、酷薄な笑みを

浮かべた。歪んだ口がますます大きくひん曲がった。

「簡単ではないと覚悟していた。怪しまれずに、お前が課題を成し遂げるように誘導するのはな。だが、我が妻の内助の功により、俺は随分と楽ができた。第一の課題ではお前が得意分野で戦えるようにスニジェットに変身し、第二の課題では卵の謎の解き方を手伝った」

——「我が妻」だって？ハリーは全く理解ができなかった。そもそもムーデイは独身だと聞いている。スニジェットに変身したのはイリスだ。イリスが先生の妻だなんて、一体何を言っているんだ？ムーデイの杖は依然として、自分を真っ直ぐに差している。

ふと彼の肩越しに、壁にかかった古ぼけた鏡の中で煙のような影がいくつか蠢いているのが見えた。——あれは“敵鏡”だ。ハリーはムーデイが授業で教えてくれた事をハツと思いついた。文字通り、自分に接近する敵を映し出す魔法の鏡。幸いな事に、彼はまだこの事態に気付いていない。

「今夜の迷路も、本来ならお前はもっと苦労するはずだった。楽だったのは俺が巡回していて、生け垣の外側から中を見透かし、お前の行く手の障害物を呪文で取り除く事ができたからだ」

ハリーは壁際まで這いずって後退し、ムーデイを成す術なく見上げた。——ダンブルドアの友人で、有名な“闇祓い”のこの人が、多くの死喰い人を捕えたというこの人が、こんな事を……全く訳が分からない。辻褄が合わない。鏡に映った煙のような影が次第にはつきりしてきて、姿が明瞭になってきた。三人の輪郭が段々近づいてくるのが見えた。しかし、ムーデイは見えていない。魔法の目はこちらをしっかりと見据えている。

「闇の帝王はお前を殺し損ねた。ポッター、あのお方はそれを強くお望みだった」

ムーデイが熱を帯びた声でそう囁いた。それから、左手の指輪にそっと口づけた。

「代わりに俺がやり遂げたら、あのお方がどんなに褒めて下さることか。俺は他のどの死喰い人よりも高い名誉を受ける事ができるだろう。きつと今夜にでも、娘と婚儀を挙げるのをお許し下さるのに違い



ない。俺は我が妻と共に、あのお方の最も愛しく、最も身近な支持者となるだろう。

ポッター。お前の可愛いスニジェットの花嫁姿を見せてやれなくて残念だ」

“スニジェット”、“我が妻”、“婚儀を許す”——ハリーの混乱する頭の中でそれらの言葉は、ある一つの答えを導き出した。ヴォルデモートはルシウス・マルフォイに『イリスの夫に相応しい者がいたが、近づき過ぎた』と言って、彼の息子——つまりドラコ・マルフォイをイリスの夫とするように命じていた。“夫に相応しい者”とは、きつとムーデイの事なんだ。だが、彼はもうヴォルデモートから夫の権利を剥奪された。ハリーはムーデイを睨み付け、叫んだ。

「お前なんかイリスは渡さないぞ！それに、ヴォルデモートは”イリスをお前にやらない”と言っていた。”近づき過ぎた”って！」  
「・・・なんだと？」

突如としてムーデイの顔から笑みが拭い去られ、まるで病気の発作でも起こしたかのようにブルブルと震え始めた。その隙を突いて、ハリーは部屋のドアに素早く視線を送った。——頑丈な門がかかっている。戦うしかない。ハリーは夢中で杖を引き抜いたが、すぐさまムーデイが放った光線に弾き飛ばされた。

「そんな、嘘だ！お前は嘘を吐いている！開心、レジリメンス・・・」  
ムーデイはひどく取り乱し、顔をより一層蒼白にして、口角泡を飛ばしながら喚き立てた。そしてハリーに掴み掛り、“開心術”を掛けようとしたとたん——

——目も眩むような赤い閃光が飛び、轟音を上げて部屋のドアが吹っ飛んだ。

ムーデイは仰け反るようにして吹き飛ばされ、床に投げ出された。鏡の中からハリーを見つめ返している姿があった。——ダンブルドア、スネイプ、マクゴナガルの姿だ。ハリーが急いで振り向くと、ダンブルドアが先頭で杖を構えていた。

気を失ったムーデイの姿を見下ろすダンブルドアの形相は、ハリーが想像したことがない程に凄まじかった。あの柔らかな微笑みは消え、

眼鏡の向こうの目には、踊るようなキラキラした光はない。年を経た顔の皺一本一本に、冷たい怒りが刻まれていた。体から焼けるような熱を発しているように、ダンブルドアの体から魔法力が放たれ、周囲の大気を歪ませていた。

ダンブルドアは部屋に入り、意識を失ったムーデイの体の下に足を入れ、蹴り上げて顔が良く見えるようにした。マクゴナガルが真っ直ぐハリーのところへやって来て、彼をそっと助け起こし、優しく囁いた。真一文字の薄い唇が、今にも泣き出しそうにひくひくと震えている。

「さあ、いらつしやい。ポッター。医務室へ・・・」

「先生、イリスは無事ですか？」ハリーは必死で尋ねた。

「無事です。医務室で治療を受けています。さあ、あなたも行きましょう」

「待て」ダンブルドアが鋭く言った。

「ミネルバ、その子はここに留まるのじゃ。ハリーに納得させる必要がある」

マクゴナガルの強い非難の眼差しをもとせず、ダンブルドアはきっぱりとした口調で言い放った。

「納得してこそ初めて受け入れられるのじゃ。受け入れてこそ初めて回復がある。」

この子は知らねばならん。今夜、自分達をこのような苦しい目に遭わせたのが一体何者で、何故なのかを」

「ムーデイが」

ダンブルドアの足元に横たわるムーデイを見下ろしながら、ハリーが茫然と呟いた。——この期に及んでも、まだ全く信じられないような気持ちだった。

「一体、どうしてムーデイが？」

「こやつはアラスター・ムーデイではない」

ダンブルドアが静かに応えた。しかしその言葉はハリーを納得させるどころか、ますます混乱の渦の最中へと押し遣っていくばかりだった。

「ハリー、きみはアラスター・ムーデイに会った事はない。本物のムーデイなら、今夜のような事が起こった後で、わしの目の届く所からきみを連れ去るはずがないのじゃ。こやつがきみを連れて行った瞬間、わしには分かった。そして跡を追ったのじゃ」

ダンブルドアはぐったりしたムーデイの上に屈み込み、そのローブの中に手を入れた。そして携帯用酒瓶と鍵束を取り出し、二人の先生方を振り返ると、スネイプには「一番強力な真実薬を持ってくる事」、そしてマクゴナガルには「厨房にいるウインキーという屋敷しもべ妖精を連れてくるように」と頼んだ。二人はすぐさま踵を返し、部屋から出て行った。

ダンブルドアは部屋の隅に置かれた大きなトランクのところまで歩いて行き、一本目の鍵を錠前に差し込んでトランクを開けた。——中には呪文の本がぎっしり詰まっている。ダンブルドアはトランクを閉め、二本目の鍵を二つ目の錠前に差し込み、再びトランクを開けた。——今度は壊れた「かくれん防止器」や羊皮紙、羽根ペン、銀色の透明マントらしきものが入っている。ダンブルドアが次々に鍵を合わせ、トランクを開いていくのを、ハリーは彼の肩越しに茫然と見つめていた。

やがてダンブルドアが六つ目の鍵を合わせて開けた時、ハリーは驚きの余り、大きく息を飲んだ。女性が着るような清楚で上品なデザイン の衣服や小物、アクセサリーの類がどっさりと積まれている。ダンブルドアは訝しげに眉を潜め、一番上にあつた銀色のドレスを手に取り、注意深く観察して、恐ろしく低い声で唸った。

——襟口の裏に、「イリス・クラウチ」と刺繍が施してある。ハリーはかつて、ウインキーが同じ名前の刻まれた食器を使って、イリスにご馳走を出していた事を思い出した。何故、同じ名前の服が、ムーデイのトランクにあるんだ？ダンブルドアはドレスを荒々しい手付きでトランクの中に投げ戻し、蓋を閉めた。

そして最後の鍵を合わせて開けた時、竪穴のような地下室が見下ろせた。三メートルほど下の床に横たわり、深々と眠っている瘦せ衰えた姿。——それが、本物のムーデイだった。木の義足はなく、魔法の

目が入っているはずの眼窩は、閉じた瞼の下で空っぽのようだった。  
“ムーディが二人いる”——ハリーはその衝撃的な事実には打ちのめされ、トランクの中で眠るムーディと、気を失って床に転がっているもう一人のムーディとをまじまじと見比べた。

一方のダンブルドアは驚きもせず、トランクの縁を跨いで中へ降りていき、眠っているムーディの傍らに軽々と着地した。そして彼の体の彼方此方に杖先を当て、つぶさに調べ始めた。

「失神術”じゃ。”服従の呪文”で従わされておるな。非常に弱つておる」ダンブルドアが言った。

「ハリー、そのペテン師のマントを投げてよこすのじゃ。ムーディは凍えておる。マダム・ポンフリーに看てもらわねば。しかし、急を要するほどではなさそうじゃ」

ハリーは偽物ムーディからマントを取り、トランクの中に投げ込んだ。ダンブルドアはムーディにマントを掛け、杖を振って応急処置を施した後、再びトランクを跨いで出て来た。それから机の上に立てておいた携帯用酒瓶を取り、蓋を開けてひっくり返した。床に粘々した濃厚な液体が零れ落ちていく。

「ポリジューズ薬じゃ、ハリー」ダンブルドアが静かに言った。

「単純で、しかも見事な手口じゃ。ムーディは決して自分の携帯用酒瓶からでないと思わなかった。その事は良く知られていた。このペテン師は——当然の事じゃが——ポリジューズ薬を創り続けるのに、本物のムーディを傍に置く必要があった。……ムーディの髪を」

ダンブルドアはハリーを促し、トランクの中のムーディを見下ろした。目を凝らすと、確かに白髪混じりの髪の一部がごっそりと無くなっている。

「ペテン師はこの一年間、ムーディの髪を切り続けた。髪が不揃いになっているところが見えるか？しかし、偽ムーディは、今夜は興奮の余り、これまでのように頻繁に飲むのを忘れていた可能性がある。今に分かるじやろう」

ダンブルドアは机の前に置かれた椅子を引き、腰かけて、偽物ムーディを静かに観察し始めた。ハリーも無意識の内に自分の杖を

ギユツと握り締めながら、ペテン師の身に何かが起こるのを待った。そのまま、何分間かの沈黙が流れた。

やがてハリーの目の前で、床の男の顔が変わり始めた。傷跡は消え、肌が滑らかになり、削がれた鼻はまともになり、小さくなり始めた。長い鬘のような白髪交じりの髪は頭皮の中に引き込まれていき、色が薄茶色に変わった。突然、木製の足が落ち、正常な足がその場所に生えて来た。次の瞬間、魔法の目が男の顔から飛び出し、その代わりに本物の目玉が現れた。魔法の目は床を転がっていき、クルクルとあらゆる方向に回り続けている。

目の前に横たわる、少しそばかすのある色白の薄茶色の髪をした男を、ハリーは食い入るよう見つめた。この男が誰だか知っている。校長室で凶らずも見ってしまった“憂いの篩”の記憶に登場した人物だ。——クラウチ氏に無実を訴えながらデイメンターに法廷から連れ出されていった、“クラウチ氏の息子”に違いない。しかし、今は目の周りに皺があり、ずっと老けて見えた。

廊下を急いでやって来る足音がした。マクゴナガルが、足下にウィンキーを従えて戻って来た。その後ろに小さな硝子瓶を握ったスネイクもいる。

「クラウチー」スネイクは戸口で立ち竦み、掠れた声で唸った。

「バーティ・クラウチー！」

「なんてことでしょう！」

マクゴナガルも息を飲んで、男をまじまじと見つめた。ウィンキーは、ハリーが以前に会った時よりもずっと元気そうに見える、手入れの行き届いた衣服を上品に着こなしていた。ブルーの帽子には虹色の花飾りを付けている。やがてウィンキーはマクゴナガルのローブの影からこわごわと部屋の中を覗き込み、男を見つけた途端に口をあんぐり開け、金切声を上げた。

「バーティさま！バーティさま！こんなところで何を？」

ウィンキーは我武者羅に飛び出して、若い男の胸に縋り、ダンブルドアとハリーを涙ながらに睨んだ。

「あなたたちはこの人を殺されました！この人を殺されました！ご主

人様のお坊ちやまを！」

「失神術」にかかつているだけじゃ、ウインキー」

ダンブルドアは冷静に言い返した。それから彼は立ち上がった。スネイプから硝子瓶を受け取ると、床の男の上に屈み込み、その上半身を起こして壁に寄りかからせた。ウインキーはその傍で跪いたまま、顔を手で覆って震えている。ダンブルドアは男の口をこじ開け、薬を三滴流し込んだ。そして「蘇生呪文」を唱えた。

クラウチの息子はゆっくりと目を開けた。——顔が緩み、焦点の合わない目をしている。ダンブルドアは彼と同じ目線になるようにと膝を突いた。

「聴こえるかね？」ダンブルドアが静かに訊いた。

「はい」男は瞼をパチパチしながら、呟いた。

「話してほしいのじゃ」ダンブルドアが優しく言った。

「どうやってここに来たのかを。どうやってアズカバンを逃れたのじゃ？」

クラウチは大きく身を震わせて、深々と息を吸い込み、一切の抑揚や感情のない声で話し始めた。——アズカバンに閉じ込められた自分を助けるようにと、母が父を説き伏せ、取り計らってくれた。二人が面会に来た時に、母と息子はお互いの髪が入ったポリジューズ薬を飲み、姿を入れ替えた。母はアズカバンに残り、息子は父と共にアズカバンを脱出した。幸運な事にデイメンターは目が見えず、命の気配を感じ取る事しか出来ない。母は病で体が弱り、クラウチも衰弱していた。母と息子を同じ「命が弱った者」と錯覚し、デイメンターは父と息子を通した。そして母はアズカバンでポリジューズ薬を飲み続け、息子の姿のまま埋葬された。

「ああ、バーティ坊ちやま！」ウインキーは顔を覆ったまま、激しく啜り泣いた。

「この人たちにお話ししてはならないでございます！あたしたちは困らせられます！」

しかし、クラウチの話は終わらなかった。——クラウチ氏は息子を家に連れ帰った後、ウインキーに世話をさせた。健康を取り戻した息

子は、自分の悪行を悔い改めるどころか、家を飛び出して闇の帝王を探し出そうとした。クラウチ氏は息子に“服従の呪文”を使い、透明マントで隠して、家に閉じ込めざるを得なかった。ある時、父の役所の魔女バーサ・ジョーキンズが仕事の関係でクラウチ家を訪れた。彼女は息子の存在に気づき、クラウチ氏を問い詰めた。クラウチ氏は“忘却術”を使い、彼女の記憶を忘却させた。

そしてクイディッチ・ワールドカップが近づいてくると、ウィンキーは息子のためにクラウチ氏を説得し始めた。ずっと家に閉じ込められたままの息子を哀れんだのだ。息子はクイディッチが好きだった。父はついに折れたものの、計画は非常に慎重に行われた。父は透明マントを息子に被せ、早い内からウィンキーと共に貴賓席へ連れて行つた。周囲には、ウィンキーがご主人様の席を取っているようにしか見えない。計画は父の手筈通りに進むはずだった。しかし、クラウチは口元に不敵な笑いを浮かべた。

「ウィンキーは俺が段々強くなっている事に気付かなかった。父の“服従の呪文”を、俺は破り始めていた。時々、ほとんど自分自身に戻る時があった。それがちょうど貴賓席にいる時に起こつた。深い眠りから覚めたような感じた。試合がまだ始まる前だった。俺は前列の貴賓席に刻まれた名前の一つに、目が吸い寄せられた」

不意にクラウチの頭がぐるりと回り、顔にゾツとするような狂気の笑みが広がった。

「イリス・ゴント」。俺がずっと恋い焦がれていた娘の名だ。あのお方に忠誠を誓った時から、俺の伴侶は彼女しかいないと心に決めていた。あの方が我が子のように愛し、探し求めていた存在。触れるほど近くにその娘がいる。俺は抱き締めようとしたが、ウィンキーに邪魔をされた。

しかし俺はウィンキーに連れ戻される寸前に、隣の男の子の杖を盗んだ。アズカバンに行く前から、ずっと杖は許されていなかった。ウィンキーは俺を連れ戻すのに必死で、それが分からなかった」

「可愛い奥方様・・・あたしの可愛い、小さな奥方様・・・」

ウィンキーは床にうずくまり、さめざめとすすり泣き始めた。ハ

リーは頭がジーンと痺れるような恐怖と嫌悪感に打ちのめされ、咄嗟に呼吸を忘れて喘いだ。“イリス・クラウチ”、“奥方様”——ウインキーはイリスをクラウチ夫人と間違えていたんじゃない。息子の妻だと思い、仕えていたんだ。あの食器や服は、イリスの為に作られたものだっただ。

「俺はウインキーに縛り付けられながらも、娘を見た。その時、ルシウス・マルフォイの息子が娘に話しかけようとした。……許せなかった。ルシウス・マルフォイはあのお方に背を向け、アズカバンに入る事も拒んだ裏切り者だ。その蛆虫の息子が、馴れ馴れしく俺の娘に話しかけようとしている。忌々しい盗っ人め。俺は怒り、罵った」

今やハリーだけでなく、ダンブルドアやマクゴナガル、スネイプまでもが、嫌悪感を剥き出しにした眼差しをクラウチに注いでいた。しかし彼はそれらを一切に気にする事無く、滔々と話し続けた。

「試合が終わり、俺達はテントに戻った。そして奴らの騒ぎを聞いた。死喰い人共の騒ぎを。……あのお方に背を向け、あのお方の為に苦しんだ事がない奴らだ。あいつらは俺のように繋がれておらず、自由にあのお方をお探してきたのに、そうしなかった。

奴らの声が、俺を呼び覚ました。ここ何年かもなかった程、俺の頭ははつきりしていた。俺はご主人様に忠義を尽さなかった奴らを襲いたかった。

父はマグルを助けに行った後で、テントにはいなかった。ウインキーは俺が怒っているのを見て心配し、自分なりの魔法を使って縛り付け、キャンプ場を出て森へ向かった。だが、俺はなんとかウインキーを振り切って、キャンプ場へ戻ろうと森の中を歩いた。そして再び、娘を見つけた」

ハリーは力なく杖を取り落した。イリスを襲い、“闇の印”を打ち上げた謎の男。それは、こいつだったんだ。クラウチの周囲からじわじわと滲み出て来る、常軌を逸した愛情と執着が少年を襲い、彼はたまたらず後ずさった。——狂っている。ハリーは止め処なく震えながら、強くそう思った。この男は、狂っている。

「娘は、同じ年頃の子供達と一緒にだった。彼らの話を盗み聞きする内



に、俺は気づいた。・・・娘は“ハリー・ポッター”と共にいる。あのお方を退けた“最大の敵”と肩を並べて、普通の子供と同じように不安に震えている。

俺は許せなかった。娘もあのお方を探す事無く背を向けた、裏切り者なのだ。父親と同じだ。俺は闇の帝王への忠義とは何かを、娘の心と体にしっかりと焼き付けなければならぬと思った。俺は娘を襲い、“闇の印”を打ち上げた」

「バーティ坊ちやま、悪い子ですー」

ウインキーが茶色い目から大粒の涙を零れ落しながら、クラウチに怒鳴った。マクゴナガルが引き攣った悲鳴を上げ、とてつもなく不潔な汚物を見るような目をクラウチに向けた。

「やがてウインキーが追いついて、俺をまた縛り付けようとした。それを振り切って娘を連れ去ろうとした時、魔法省の役人がやってきた。四方八方に“失神の呪文”が発射され、その内の一つが木々の間から俺達が立っている所に届いた。二人共、失神させられた。

ウインキーが見つかった時、父は必ず俺が傍にいと知っていた。父は透明マントを被ったままの俺を見つけ出すと、魔法省の役人が森からいなくなるまで待ち、俺に“服従の呪文”を掛けて家に連れ帰った。父はウインキーを解雇した。ウインキーは父の期待に沿えなかった。俺に杖を持たせし、もう少しで俺を逃がすところだった」  
ウインキーは絶望的な泣き声を上げ、床の上にクシャクシャになって突っ伏した。

「家にはもう、父と俺だけになった。そしてその時・・・ご主人様が俺を探しにおいでなった」

クラウチの口から、聞いた者の全身が思わず粟立つような——冷たい笑い声が上がった。ハリーはもうこれ以上、この話を聴きたくなかった。まるで地獄への入り口を覗いているように、暗闇と恐怖と狂気がいっぱい詰まり、明るい光など少しも見えない。けれど、この悍ましい話の登場人物にはイリスも含まれている。ハリーは聴かないではいられなかった。

「ある夜遅く、ご主人様は下僕のワームテールの腕に抱かれて、俺の家

にお着きになった。ご主人様はアルバニアでバーサ・ジヨーキンズを捕えて、父の“忘却術”を破る程に拷問し、忠実な下僕である俺の事を聞き出して救済に來られたのだ。ご主人様は真夜中近くにおいでになり、父が玄関に出た」

人生で一番楽しい時を思い出すかのようには、クラウチの顔にますます笑みが広がった。ウインキーの指の間から、恐怖で凍り付いた茶色の目が覗いている。驚きの余り、口も聞けない様子だ。

「あつという間だった。父はご主人様の“服従の呪文”に掛かった。今度は父が幽閉され、管理される立場になった。ご主人様は、父がいっものように仕事を続け、何事もなかったかのように振舞うように服従させた。俺は解放され、目覚めた」

「そしてヴォルデモート卿は君に何をさせたのかね？」ダンブルドアが冷静に尋ねた。

「あのお方はあらゆる危険を冒す覚悟があるかと、俺にお訊きになった。

勿論だ。あのお方にお仕えして、俺の力を認めて頂くのが俺の夢、俺の望みだった。あのお方はホグワーツに忠実な召し使いを送り込む必要があると仰った。三校対抗試合の間、それと気取られずにハリー・ポッターを誘導し、確実に彼が優勝杯に辿り着くようにし、優勝杯を“移動キー”に変えて、最初に触れたものをご主人様の下へ連れて行くようにする。しかし、その前に……」

「君にはアラスター・ムーディが必要だった」

ダンブルドアの声は落ち着いていたが、その澄んだブルーの目は激しい怒りでメラメラと燃えていた。

「ワームテールと俺がやった。ムーディの家に出掛け、あいつを襲った。俺はトランクの一室にあいつを押し込み、髪の毛を少し取ってなりました。騒ぎを聞きつけて、マグルの処理に駆け付けたアーサー・ウィーズリーとシリウス・ブラックを上手く誤魔化し、ホグワーツへ出発した。

ムーディは“服従の呪文”を掛けて生かしておいた。あいつに質問したい事があった。ダンブルドアでさえ騙す事のできるよう、あいつ

つの過去や癖を学ばなければならなかった。他の材料は簡単だった。毒ツルヘビの皮は地下牢から盗んだ。抜き打ち調査だと嘘をついて」「ムーディを襲った後、ワームテールはどうしたのかね?」「ダンブルドアが尋ねた。

「ワームテールは父の家で、ご主人様の世話と父の監視に戻った」  
「しかし、お父上は逃げ出した」

クラウチは歯噛みし、虚空を忌々しげに睨み付けた。

「そうだ。しばらくして、俺がやったのと同じように、父は“服従の呪文”に抵抗し始めた。あの方は父が仕事のために家を出るのは最早安全ではないとお考えになった。ご主人様は父に命じて、魔法省へ病気だという手紙を書かせた。

しかし、ワームテールは義務を怠った。あいつが十分に警戒していなかったために、父は逃げ出した。父はダンブルドアに全てを打ち明け、告白するつもりだったのだ」

クラウチは冷たくせせら笑い、蛇のように舌なめずりをした。

「だが、ご主人様は父の行動などお見通しだった。父に呪いの掛かった足輪を付けていたのだ。父が近づくと、俺にしか聴こえない鈴の音で知らせる魔法の足輪を。父はダンブルドアに会いに、ホグワーツへ来るのに決まっている。俺はただ静かに、父がやって来るのを待った。

ついにある晩、鈴の音がして、父がホグワーツ内に入って来たのが分かった。父は禁じられた森の近くで、校外から帰ってきたばかりのイリスに縋り付き、学校から逃げるようにと警告していた。

娘に怪我をさせたくない。俺は娘を失神させようとしたが、彼女は勇敢にも戦う意志を示した。あの忌まわしい裏切り者のスネイプが、抗う術を教えていた。俺は戦いの末に彼女を失神させ、父を殺した」  
「あああああつ!!バーティ坊ちやま、何を仰るのです?!」

ハリーは身動き一つ取れなかった。——イリスが狂った殺人鬼であるクラウチと戦い、失神させられただって? ウィンキーが嘆き悲しんで慟哭する声が、どこか遠くの方で聴こえた。

「君は父上を殺したのじゃな?」ダンブルドアは依然として静かな声

で言った。

「遺体はどうしたのじゃ？」

「骨に変え、ハグリッドの小屋の前の掘り返されたばかりの場所に埋めた」

「イリスは？」ダンブルドアが鋭く聴いた。

「ご主人様は、この任務を遂行できた暁には俺に娘を下さると仰った。予定よりも少し早い、俺は娘に“服従の呪文”を掛け、俺を愛するように命じた。そして第三の課題が始まった後、俺の部屋に行つて、俺が創つた“移動キー”に触れ、ポッターと同じ場所へ行くように仕向けた。娘は全て従順に動き、俺は彼女と愛し合った。

そしてご主人様は権力の座に戻られた。これほどに力を尽した俺の手から、あのお方が娘を取り上げる筈がない。ポッターは嘘を吐いている。ああ、早くイリスに会いたい。彼女は俺のものだ・・・」  
常軌を逸した狂気の実笑みが再び顔を輝かせ、クラウチは頭をだらりと肩にもたせかけた。その傍らで、ウィンキーが彼に縋り、さめざめと泣き続けていた。

☆

皆、しばらくの間、強烈な嫌悪感と吐き気に打ちのめされ、身動き一つ取る事が出来なかった。やがてダンブルドアが立ち上がり、杖を上げた。たちまち杖先から飛び出した縄が独りでにクラウチにグルグルと巻き付いて、しつかり縛り上げた。それからダンブルドアはマクゴナガルの方を見た。

「ミネルバ、ハリーを上に入れて行く間、ここで見張りを頼んでもいいかの？」

「勿論ですわ」

マクゴナガルが強く食い縛った歯の隙間から、そう応えた。杖を取り出してクラウチの方へ向けながら、彼女はわなわなと怒りに震える唇で吐き捨てた。

「なんと——なんと——汚らわしい男！」

「セブルス」

ダンブルドアはスネイプの方を向いた。ハリーは釣られるように

してスネイプの方を見て、恐怖で全身が総毛立った。——逆るような憎悪の感情が、その土気色の顔からマグマのように噴き出していた。不揃いな黄色い歯を抜き出しにして、スネイプはクラウチを威嚇していた。

「校庭に行き、コーネリウス・ファツジを探して、この部屋に連れて来てくれ。ファツジは間違いなく、自分でクラウチを尋問したい事じやろう」

スネイプはわずかに頷き、まだ怒りが収まらないとばかりにもう一度クラウチを一睨みした後、さつと部屋を出て行った。

ダンブルドアは優しくハリーを抱き起こした。ハリーはグラリと大きくよろめいた。クラウチの話を聴いている間は気づかなかった痛みが今、完全に戻って来た。——本当に吐きそうだった。僕の与り知らない場所で、イリスがああ男に戦いを挑んで破れ、穢された。なんて、なんて酷い事を。僕はまた何もできなかった——彼女が右腕を失った時と同じように。どうする事も出来ない無力感と罪悪感がハリーの頭をひどく殴りつけ、ボロボロと熱い涙が零れ落ちた。ダンブルドアは何も言わずに少年の腕を掴み、介助しながら暗い廊下に出た。二人は医務室へ向かい、ゆっくりと歩き出した。

イリスはゆっくりと目を開けた。——医務室のベッドだ。カーテンが閉められていて、ベッドの外の様子は分からない。彼女はぼんやりとした意識のまま、右腕を持ち上げた。すると宝石のように輝く銀色の義手が当然のように視界に入ってきて、イリスに墓場での恐ろしい記憶を思い出させようとした。写真のように鮮やかにくつきりと、頭の中を明滅し始めた記憶の数々から目を逸らすように、少女はゆっくりと起き上がって、ローブのポケットから軟膏を取り出して印に塗った。しかし、もう印は消えない。

不意にドアの開かれる音がして、カーテンの外で大勢の人々が激しく言い合っている声が聴こえて来た。その人達の声に、イリスは聴き

覚えがあった。——ハーマイオニーとロンだ。どうやらイリスはどこにいるのか、そして何が起こったのかを、マダム・ポンフリーに問い詰めているらしい。

「イリスー」

イリスがカーテンをそつと開けると、ちやうど正面にいた二人がマダム・ポンフリーの制止を振り切つて、涙を散らして駆け寄つて来た。ハーマイオニーはベッドの縁に腰掛けて、小さな親友を抱き締めようと手を伸ばした。

そしてイリスの銀色の右腕が視界に入るなり、ハーマイオニーはまるで“石化呪文”に掛かったかのように——ピタリと動きを止めた。彼女の瞳は、内側に輝く“闇の印”を食い入るようにつめていいる。「ごめんなさい。気持ち悪いよね」

——親友を怖がらせてしまった。そう思つたイリスは、慌ててシートで腕を覆い隠した。ハーマイオニーは何も言わなかつた。イリスはおどけて、精一杯強がつてみせた。

「劇に出た後で良かったよ。こんな腕じゃ、衣装なんて着れないもの」しかし、それでもハーマイオニーは黙りこくつたままだつた。やがてその様子を見兼ねて、ロンが不自然に明るい口調で話し始めた。

「なあ、僕ら、”ダービツシュ・アンド・バングズ”に行くべきだよ。ホグズミードのさ」

イリスは思わず呆気に取られ、ロンを見上げた。ロンはシートに隠された右腕を見ないようにしながら、滔々と喋り続けた。

「あそこの壁に”オーダーメイドで手袋やブーツが創れます”ってポスターが貼つてあつたの、知らない？」

ハリーとデイゴリーの賞金は山分けになつたんだぜ、イリス。五百万ガリオンもあれば、きつと良い手袋が創れるよ。奮発してドラゴン革にしたらどうだい？

僕、チャーリーに聴いたんだけど、すつごく綺麗なシルバーブルーの色をしたドラゴンがいるらしいんだ。手袋とか盾の材料に人気なんだつて。エーツト、何て言う種類だつたかな。ほら、ハーマイオニーー！」

ロンは引き攣った笑いを浮かべ、ハーマイオニーの肩を強く小突いた。しかしそれでも彼女は茫然としたまま、動かない。ロンは狂ったように赤毛をかき毟り、とんでもなく陰鬱で悲哀に満ちた空気を少しでも明るくものに換えようと、必死な形相でまた喋り出した。

「それか、僕の兄貴達に頼んでも良いかもな。きつと面白いのを創つてくれるぜ。指パツチンすると火花が出たりとか、憎い相手を指差すと“クラゲ足の呪い”を掛けたりとか……」

「ごめんなさい」

突然、今にも消え入りそうな程に小さな声が、ハーマイオニーの口から漏れた。彼女は紙のように真っ白な顔を恐怖の感情でこわばらせ、イリスによるめきながら近づき、靴のままベッドに上がり込むと、小さな親友をギュウツと抱き締めた。

「ごめんなさい、イリス。私、私……あああああああつ!!」

ひどいパニック状態を引き起こして泣き喚くハーマイオニーを、イリスはただ抱き締め返す事しか出来なかった。ハーマイオニーは親友を助けるチャンスがあつたのにそれを見逃した自分を責め、強い罪悪感に打ちひしがれていた。

「貴方がスタンドを離れた時、私、何としても引き留めれば良かった! ああ、こんな、ひどい……貴方は、女の子なのに……」

「大丈夫だよ、ハーミー」

イリスは何が大丈夫なのか自分でも分からなかったが、急いでそう捲し立てた。

「私、何も気にしてない。良いドラゴン革を買って、WWWに素敵な手袋を創ってくれるように頼むよ。そしたら全部、元通り……」

その時、ヴォルデモートの顔がパツと思ひ浮かんで、イリスは口籠った。右腕と共に、今までの自分も鍋の中に放り込まれて、永久に消え去ってしまったような気がした。時の流れで、少しずつこの恐ろしい出来事は心の中から薄れていくのだろうか。皆と笑い合いながら手袋を撫で、『昔、こんなに怖い事もあつたね』と思ひ出話をする時が来るのだろうか。

——いいや、そんな日は永遠に来ない。右腕に刻まれた“闇の印”

が、そう言つて笑つて見えるように見えた。“服従の呪文”を掛け、自分を愛しんだクラウチ——自分を追いつめて、下品に笑う死喰い人達——酷薄な笑みを浮かべるルシウス——そして、恐怖をそのまま形にしたような闇の帝王を慕い、縋り付いた自分の姿。もう二度と、今までの自分には戻れないような気がした。ヴォルデモート達がイリスに残した心の傷は、それほどに深かった。

深く考えちゃダメだ。イリスはハーマイオニーの肩に顔を埋めて、唇を噛み締めた。墓場で起こったあの出来事を思い返したら、奈落の底へ引き摺り込まれて、そして正気を失つて、もう二度とここへ戻つて来れない気がした。

☆

やがてドアを開けて、ハリーとシリウス、そしてダンブルドアが入つて来た。ハリーは真つ先にベッドに駆け寄つて、イリスの頭を労しげに撫でた。ダンブルドアはイリスを静かに見つめた。明るい澄んだブルーの目を、彼女は今だけは見たくないと思った。——ダンブルドアは私に質問する気だ。全てをもう一度、思い出させようとしている。

「イリス。墓場で何が起こったのか、聴かせてほしい」

「ダンブルドア、明日の朝まで待てませんか？」

シリウスがイリスを守るように前に立ちはだかり、振り返つて労しげな眼差しを銀色に輝く右腕へ送った。

「ハリーとセドリックの証言で大体は分かっている筈です。この子は聞くに堪えない程、恐ろしい目に遭つた。今は何よりも、しっかりと休ませてやる事が肝要では？」

「それで救えるのなら」ダンブルドアが優しく言った。

「きみを魔法の眠りに就かせ、今夜の出来事を考えるのを先延ばしにする事できみを救えるのなら、わしはそうするじやろう。しかし、そうではないのじゃ。一時的に痛みを麻痺させれば、後になって感じる痛みはもっとひどい。

イリス、きみはわしの期待を遥かに超える勇気を示した。もう一度、その勇気を示してほしい。何が起きたか、わしらに聞かせてくれ」



イリスは青ざめた表情で俯いて、黙り込んだ。——もう一度、思い出すのは本当に嫌だった。あの恐ろしい体験を口にしたら、ヴォルデモートや死喰い人達がここに現れて、皆を襲う気がした。また正気を失い、今度は“従者”として皆を傷つけてしまったら？イリスが強い不安に苛まれていると、ふとハリーが自分の名前を呼んだ。

「イリス、大丈夫だ。君は何も変わってないよ」ハリーは微笑んだ。「僕の大切な妹のままだ」

その言葉はイリスの恐怖で凍り付いてしまった心臓をみるみるうちに解かし、優しく暖めた。彼女の中にとびきり熱い感情が溢れ、そのエメラルド色の瞳から大粒の涙がいくつも零れ落ちていく。——呪いで正気を失い、“親友の死”を受け入れた自分を、彼は許してくれた。お互いの両親の敵である、ヴォルデモートに縋り付いた自分を。イリスは夢中でハリーに抱き着いて、咽び泣いた。

「ごめんなさい、ごめんなさい……！」

「君が謝る必要なんてない!!」

ハリーはきつぱりと言い切つて、血が滲む程に歯を食い縛り、込み上げて来る自分の涙を我慢した。そして世界の全てから守るように、イリスを強く抱き締めた。ロンとハーマイオニーもベッドに上がり、黙ってイリスの背に手を置いて優しく撫で摩った。

そうして、イリスは全てを話し始めた。その夜の光景一つ一つが、目の前に繰り広げられるように感じられた。自分で腕を切り落とした事や、ヴォルデモートに忠誠を誓った事について話そうとすると、ハリー達とシリウスが“無理をするな”と言わんばかりに肩を強く掴んだが、ダンブルドアは手を挙げてそれを制した。イリスはその方が嬉しかった。一度話してしまえば、続けて話してしまう方が楽だった。何か毒のようなものが体から抜き取られていくような気分でもあった。

時々言葉を詰まらせながら、イリスは話し続けた。——ナギニの毒牙からルシウスを守った事、アズカバンに捕えられた死喰い人達を助けるようにとヴォルデモートに懇願した事、そしてスネイプに教えてもらった“魔法の炎”とドラコへの愛が自分を守り、呪いを一部、打

ち破った事。右腕を打ち負かし、セドリックと共に死喰い人と戦い、ハリーを助けた事。しかし、もう少しで彼を助けられると思った時、背後から攻撃を受けて気を失ってしまった事。

そこでイリスは、はたと気づいた。——そう言えば、私達はどうしてここへ戻って来られたんだろう。イリスは言い淀んで、思わずハリーを見つめた。すると彼は気まずそうに頭を掻いて、こう言った。「ワームテールだ。あいつが……君のポケットから飛び出して、僕の手に触れて助けてくれた」

その時、イリスは自分のローブの胸ポケットがモゾモゾと動いたような気がして、ふと視線を下げた。——何時の間にか、ポケットの中に小さなネズミが収まっていた。ハリーを助けた後、競技場での騒ぎに乗じてワームテールは主人の下へ戻ったらしい。老いぼれネズミはポケットの上からちよこんと頭を覗かせて、周囲を見渡し、そしてシリウスを見つけたとたん、慌てて顔を引っ込めようとした。

「こいつめ！そんなところにいたのか！」

しかし、シリウスは見逃さなかった。彼は激しい憎悪の感情を剥き出しにし、素早く杖を振った。たちまちワームテールはポケットから引き摺り出され、シリウスの眼前で宙吊りにされた。

「シリウス。殺してはならぬ」ダンブルドアが鋭く言った。

「何故です！」シリウスはネズミから視線を外さなまま、唸った。

「そやつはハリーを助けた」

「自分のためだ！」シリウスは叫んだ。

「イリスに恩を売り、〃僕は友人を助けた健気なネズミです〃とアピールするためだ。こいつは助かるためなら何でもする。ハリーを傷つけ、かつて拷問したイリスにも平気で継り付く。何の反省もしていない！」

「ならば、何故セドリックは〃死の呪い〃から息を吹き返したのじや？」

シリウスの杖先が、戸惑うようにピクリと震えた。ダンブルドアが静かにやって来て、シリウスの隣に並び立ち、縮こまるワームテールをじつと観察した。

「少年の命を奪う事に、迷いが生じたからではないのかね？だから呪文は失敗した」

「たまたま調子が悪かったただけだ」シリウスは低い声で言った。

「イリスを傷つけようとした時、ピーターは泣き感った。そうじゃな、ハリー？」

ハリーは渋々といった調子で、こくんと頷いた。ダンブルドアはキラキラと光る明るいブルーの瞳で、今度はイリスを優しく見つめた。

「イリス。どうやらピーターは“罪の意識”に芽生えつつあるようじゃ。きみが勇気を出して行った命懸けの説得は、ピーターの心に、“死の呪い”を失敗させるほどの強い悔悟の気持ちを起こさせた。

きみの勇気と優しさがセドリツクを、そしてハリーを救ったのじゃ」

イリスとワームテールは言葉もなく、静かにお互いを見つめ合った。——ピーターが“罪の意識”に芽生えた？本当に彼は自分の心に眠る——あの恐ろしい化け物と戦い、打ち勝つ事ができたのだろうか。けれどその真偽を確かめる機会は、もう永久に失われてしまった。ダンブルドアは注意深い眼差しで、杖先をワームテールに向け、つぶさに調べながら言った。

「このネズミは、もう二度と人間の姿に戻る事はできぬ。非常に複雑で強力な呪いを掛けられておる。ただのネズミに証言させる事もできまい。一先ずはファッジに処遇を任せるとしよう」

「それは良い」シリウスが小気味良く笑い、杖をしまった。

「ファッジを焚きつけて、お前を猫に喰わせるように助言しよう。どの猫がいいか選ばせてやる！」

たちまちネズミは怯えたようにキーキーと泣き叫び、イリスの下へ戻ろうと、空中で必死でもがいた。イリスは慌ててダンブルドアに言い募った。

「お願いです、ピーターを殺さないで！」

シリウスはそらきたと言わんばかりに天を仰ぎ、盛大な溜息を零した。ダンブルドアは優しく微笑み、ワームテールを魔法の泡で包みながらイリスに言った。

「勿論じゃ。主人である君が言うのなら、そうしよう。さあ、ハリーと一緒にゆつくりお休み。わしはファツジに会い、すぐに戻つて来よう。皆も、今日はここにいて構わぬ」

そうしてダンブルドアとシリウス、ワームテールは医務室を出て行った。イリスはふと一番端のベッドに目を遭つて、心臓が口から飛び出しそうになった。——ムーデイが眠っている！サイドテールには木製の義足と魔法の目が置いてあった。イリスは掠れた悲鳴を上げて、杖を掴もうと震える手を伸ばした。

「イリス、大丈夫だ！」イリスの視線の先を見たハリーは、慌ててそう言った。

「あいつは本物のムーデイ先生だよ。偽物は——クラウチは——捕まった。もう、全部終わったんだ」

ハリーはイリスに全てを話して聴かせた。——クラウチが競技場での騒ぎに乗じて自分を攫つたが、寸でのところで先生方が助けに来てくれた事、そして金色のドームの内側で何が起きたかと言う事も。

「僕の父さんと母さんは、見えなくてもずっと傍にいと云つてた」ハリーは涙に滲む声で、イリスに囁いた。

「君のご両親もきつとそうだよ。どこかで見守つてる。君は一人じゃない。今の君を心配し、そして誇りに思つてるはずだ」

イリスはハリーの両親と同じように、姿は見えないけれど、ずっと傍にいたはずの自分の両親の姿を思った。しかし彼女はハリーと異なり、実際に両親のゴーストを見たわけではない。寂しさや不安を癒し切る事はできなかった。イリスはベッドに横になりながら、一つのわがままを言った。

「皆と一緒に寝たい」

それを聴くや否や、ハリー達はスニッチのように素早く行動した。マダム・ポンフリーに頼んでベッドを二つ繋げてもらい、ハリーとイリスの両脇にロンとハーマイオニーが寝そべった。ベッドの上は少し窮屈だったけれど、こんなにも安心して暖かい場所は他にない。イリスは強く思った。病室中のランプがカーテンを通して親し気にウインクしているような気がする。一言も口を利く間もなく、疲労がイ

リスを眠りへ惹き込んでいた。

「なあ」ロンが出し抜けに言った。

「僕とハリーで賞金を山分けするだろ？」

「貴方、まだそんな事言ってるの？」ハーマイオニーが眉を潜めて唸った。

「こんな大変な時に！」

「こんな時だからこそ、必要なんだろ！」ロンがムキになって言い返した。

「ハリーの賞金はイリスの手袋用に使うとして、僕の賞金で、夏休みに皆でパーツと旅行に行くってのはどうだい？」

「いいね」

ハリーは朗らかに微笑んだ。——夏に旅行。ロンらしい、実に素晴らしいアイデアだ。

「イリスはどこに行きたい？」

しかし、返事はない。ハリーがイリスをそっと覗き込むと、彼女はとても穏やかな顔をしてスヤスヤと眠っていた。三人は黙って顔を見合わせ、イリスを起こさないように注意しながら羽根布団を掛けると、それぞれ横になって目を閉じた。

☆

それから数時間後、クラウチはゆっくりと目を開けた。冷静な眼差しで、自分の現状を確認する。魔法のロープで拘束され、身動きが取れない。

その時、視界の端に杖先を認めて、クラウチは静かに顔を上げた。研ぎ澄ました刃のような冷たい目をした老年の魔女が、自分を見張っている。——マクゴナガル先生だ。その後ろではウィンキーが泣きじゃくり、心配そうに自分を見つめている。

「動くな」マクゴナガルが厳しい口調で言い放った。

「もうすぐお前はアズカバンへ連れ戻される」

それを聴いたクラウチは恐怖に震えるどころか、不敵に笑ってみせた。“俺をアズカバンに入れる”——そんな事は何の意味も成さない。あの少年は助けが来るまでの時間を稼ぐために、下らない嘘を吐

いたのだ。必ずあのお方が、俺を助けに来てくださる。クラウチはアズカバンに連れ戻されるまでの間、目の前の魔女をいたぶって楽しむ事にした。

「マクゴナガル先生。貴方の生徒の唇は柔らかく、吐息は甘く、体は暖かかった」クラウチは冷たくせせら笑った。

「頼むからトランクの中身は始末しないでくれ。あれは娘のために、特別に創らせたものだ。またアズカバンから出た時に必要になる」

クラウチが蛇のように舌なめずりをしながら、嘲笑うように言ううと、マクゴナガルの眼鏡の奥の目が激しく燃え上がり、怒りの余り、頬がまだらに真っ赤に染まり、突きつけた杖先がブルブルと大きく震えた。

「この、けだものめ！お前など、二度とアズカバンから出すものか！」

マクゴナガルは鋭い声でそう叫び、杖を振るった。すると杖先から縄が噴き出して、クラウチの口にきつく巻き付いた。彼は背を仰け反らせ、くぐもった声で狂ったように笑い続けた。

その時、ドアをノックする音がして、マクゴナガルは我に返り、振り向いた。——ファツジ大臣が青ざめた表情で戸口に立ち、笑い続けるクラウチをこわごわと見つめている。マクゴナガルはホツとしたような顔で、ファツジを迎え入れた。

「やあ、ミネルバ」ファツジは奇妙に引き攣った笑いを浮かべた。

「クラウチを尋問しに来た。こいつがそうだね？」

「ええ。ファツジ大臣、後はお願ひ致します」

「大臣、お待ちを！こやつを連れて入っては……！」

次の瞬間、戸口の奥の方からスネイプの追いつめる声が聴こえた。——一体、誰の事だ？マクゴナガルが訝しげにファツジを見た瞬間、彼の顔の前を不気味な“黒い影”がスーッと横切った。ボロボロのローブを纏った、恐ろしい影——“デイメンター”だ。

たちまち、ゾーツとするような冷気が、全員を襲った。デイメンターは食べ損ねたご馳走の事を思い出したのか、ファツジの支配を振り切ってクラウチに覆い被さった。クラウチは急に呼吸が出来なくなった。——ああ、我が君！“デイメンターの急襲”という予想だに

しなかつた展開に彼は慌てふためき、縄目を解こうと懸命にもがきながら、ご主人様に助けを乞い願った。こんな筈では。どうか、どうか、俺を助けて下さい！

しかしそんなクラウチを嘲笑うかのように、デイメンターはますます彼に押し掛かった。皮膚の下、深く潜り込んだ強烈な寒気が、指先一本動かす事さえ許してくれない。そうこうしている内に、冷気は彼の胸の中を満たし、そのもつと奥を冒していく――

――暗闇の中で、クラウチはイリスを抱き締め、情熱的に口付けた。しかし柔らかく暖かいはずの唇は凍るように冷たく、吐息は腐った嫌な匂いがして、クラウチの体は骨の髄まで凍り付くようだった。やがて闇の奥で、赤い目が二つ光った。彼が敬愛してやまない、ヴォルデモートの目だ。彼は冷たく甲高い声で、静かに言い放った。

「お前は娘に近づき過ぎた」

茫然とするクラウチの目の前で、愛しい少女と赤い目が闇の中に融け、幻のように消えて行った。

気が付くとクラウチは、魔法省の地下牢の床の上で、鎖付の椅子に縛り付けられていた。周囲の観衆が憎悪の籠もった言葉を好き勝手に投げつけ、正面に座る父親は凍るように冷たい眼差しを自分へ向けている。

とたんにクラウチは心臓がズタズタに引き裂かれ、呼吸が出来なくなった。――この記憶は彼が今まで生きてきた中で、一番最悪なものだった。嫌だ、思い出させないでくれ。これ以上、見たくない！しかしそんな彼の懇願も空しく、やがて自分の口が操られたように勝手に動き出して、悲痛な声で泣き叫んだ。

「お父さん！僕はやってない！僕はあなたの息子だ！あなたの息子なのに！」

「お前は私の息子ではない！」クラウチ氏が叫んだ。突然、目が飛び出した。

「私には息子はいない！」

暗く深い絶望の感情がクラウチを包み込んだ。甲高い女性の悲鳴が、どこか遠くの方で聴こえた。小さな頃から病気がちな母親に代

わって自分を案じ続けてくれた、懐かしい響きのする声。だが、もう何も分らない。何をやる気力もない。クラウチは大いなる絶望と後悔の重しを抱え込み、心の海の奥底へと沈んで行った――

「バーティ坊ちやま！坊ちやま！」

「エクスペクト・パトローナム、守護霊よ来たれ！」

ウインキーの指先から魔法の光線が迸り、クラウチに覆い被さったデイメンターの背中に命中すると、化け物は掠れた呻き声を上げて体を仰け反らせた。すかさずスネイプの放った守護霊が、デイメンターを部屋の奥へと退ける。ウインキーが形振り構わず、クラウチに継り付いた。しかし、もう全てが遅かった。彼は忠実な妖精の働きにより、魂を吸い取られる事こそ免れたが、深く目を閉じて、いつ起きるとも知れない昏睡状態に入ってしまった。いた。

☆

イリスが再び目覚めた時、余りに暖かく、まだとても眠かったので、もうひと眠りしようと思いを開けなかった。部屋にはぼんやりと灯りが灯っている。きつとまだ夜で、あまり長くは眠っていないからだ。ろう。その時、すぐ傍でヒソヒソと話す声がした。――ハリーとハーマイオニーだ。

「あの人達、静かにしてもらわないと、イリスが起きちゃうわ」

「一体、何を喚いているんだろう？」

イリスはそつと薄目を開けた。ハリーが上体を起こし、カーテンの向こうをじつと見つめて耳を澄ませている。

「ファッジの声だ」

「マクゴナガル先生もいらっしやるみたい。何を言い争ってるのかしら？」

やがて、誰かが言い争いながらこちらへ向かって走って来るような音が聴こえ始めた。ロンが寝ぼけ眼で起き上がり、カーテンをグイと開けた。マダム・ポンフリーがイリス達の朝食用のオートミールを作



る手を止め、戸惑った顔でドアを見つめている。

「残念だが、ミネルバ。仕方がない」ファツジの喚き声がする。

「絶対に、あれを城の中に入れてはならなかったのです！」マクゴナガルが叫んでいる。

「ダンブルドアが知ったら・・・」

医務室のドアが勢い良く開け放たれた。気色ばんだ様子のファツジが、荒々しい足取りで室内へ入って来た。すぐ後ろにマクゴナガルとスネイプもいる。

「ダンブルドアはどこかね？」

ファツジはマダム・ポンフリーに詰め寄った。大臣の余りの剣幕にマダム・ポンフリーは一瞬たじろいだだが、やがて怒ったように答えた。「ここにはいらつしやいませんわ。大臣、ここは病室です。少しお静かに」

しかしその時ドアが開き、ダンブルドアがさっと入って来た。セドリックと彼の両親も、その後が続いている。

「何事かね？」

ダンブルドアは鋭い目でファツジを、そしてマクゴナガルを見た。「病人達に迷惑じゃろう？ミネルバ、あなたらしくもない。クラウチを監視するようにお願いした筈じゃが」

「もう見張る必要はなくなりました。ダンブルドア！」

マクゴナガルが叫んだ。——イリスは思わず呆気に取られて、自分の寮監の先生をじっと見つめた。いつも冷静沈着な彼女が、こんなに取り乱した姿を初めて見た。怒りの余り頬は真っ赤に染まり、両手は拳を握り締め、わなわなと震えている。

「大臣がその必要がないようになさったのです！」

そして、マクゴナガルとスネイプは話し始めた。——スネイプがクラウチを捕えた事をファツジに伝えに行った時、ファツジは自分の身を守るために、城に入るのにデイメンターを一人自分に付き添わせると主張した。そうしてスネイプが止めるのも聴かず、ファツジはデイメンターをクラウチのいる部屋に連れて入った。デイメンターはまるで仕留め損ねた獲物を思い出したかのように、すぐさまクラウチに

覆い被さり、“死の接吻”を施した。ウインキーの魔法とスネイプの放った守護霊が、その直後にデイメンターを退けた為、完全な接吻とはならなかったものの、クラウチは深い昏睡状態に陥ってしまった。

イリスは余りの残酷な結末に、骨の髄まで震え上がりながら、ハイマイオニーに縋り付いた。——胃が芯まで凍っていくような気持ちだった。皆の非難に満ちた目線を一心に受け、ファッジは喚き出した。

「失礼だが！魔法省大臣として、護衛を連れて行くかどうかは私が決める事だ！それに、どの道クラウチがどうなるうと、何の損失にもなりはせん！どうせ奴は何人も殺しているんだ！」

「しかし、コーネリウス。最早証言ができません」

ダンブルドアが静かに言った。まるで初めてはつきりとファッジを見たかのように、ダンブルドアは聡明な輝きを放つブルーの目を大きく開いて、彼をまじまじと観察していた。

「何故何人も殺したか、クラウチはなんら証言できません」

「何故殺したか？ああ、そんなことは秘密でも何でもなからう！」ファッジが喚いた。

「あいつは支離滅裂だ。ミネルバやセブルスの話では、奴は全て“例のあの人”の命令でやったと思っ込んでいるらしい！」

「確かにヴォルデモート卿が命令していたのじゃ、コーネリウス」ダンブルドアが冷静に応えた。

「何人かが殺されたのは、ヴォルデモートが再び完全に勢力を回復する計画の布石に過ぎなかった。計画は成功した。ヴォルデモートは肉体を取り戻したのじゃ」

ファッジは杖を取り落とし、誰かに重たいものでしこたま頭を殴り付けられたかのような顔をした。茫然として目をパチパチと瞬きながら、ファッジはダンブルドアを見つめ返した。今聴いた事が、俄かには信じられないと言う様子だった。やがてファッジは乾いた笑い声を上げ、首を横に振った。

「“例のあの人”が復活した？おいおい、ダンブルドア……」

「わしらはクラウチの告白を聞いた。“真実薬”の効き目で、クラウ

チは色々と言ってくれた。クラウチはヴォルデモートが蘇るのに力を貸したのじや。ハリーとセドリック、イリスがヴォルデモートの復活を確認した。わしの部屋に来てくだされば、一部始終をお話しいたしますぞ」

ダンブルドアは一切の迷いのない声で、そう言い切った。しかしファッジは納得するどころか、今度は引き攣った顔に奇妙な笑いを浮かべ始めた。そうして彼は、ベッドに座り込むイリスとその“銀色の右腕”をチラリと見た。

「ダンブルドア、あなたはまだお分かりにならないのかな？」

やがてファッジはイリスを指差し、呆れたように笑い出した。

「これは全部、あの子の悪戯だ。あなたは彼女に関する事実を隠していた。ルシウスから“血の呪い”の事を聞いたよ。以前からこの子は、現実と妄想の区別がつかないところがあった。

見なさい、あの“闇の印”の浮かんだ右腕を。可哀想に、あの子は狂っている。呪いに精神が蝕まれ、あの人が生きていると思いついでいるのだ。だからあんな風に魔法で右腕にメッキを掛け、ハリーとセドリックを攫い、“あの人が生き返った”と幻覚を見せた。そして錯乱した二人を連れ出し、大勢の人々をパニックに陥らせたのだ」

——イリスは余りの事に心がズタズタに引き裂かれ、何も言う事が出来なかった。しかし、それは他の人々も同じだった。誰もがグラグラと煮えたぎる程の怒りの感情に支配されて、まともに口を利く事が出来なかった。やがてダンブルドアがファッジに一步、詰め寄った。クラウチに“失神術”を掛けた時に感じられた、あのなんとも形容しがたいエネルギーがまたしても彼の体から放たれていた。

「コーネリウス、聞くが良い。イリスは正常じや。ハリーもセドリックも幻覚など見ていない」

「ルシウス・マルフォイはあなたを騙そうとしているだけだ！僕はあいつがヴォルデモートに忠誠を誓っているのを見た。あいつは死喰い人だ！」我に返ったハリーが叫んだ。

「マルフォイの潔白は証明済みだ！」ファッジはあからさまに感情を害していた。

「戯けた事を！イリス、もうこんなふざけたお芝居は止めなさい！クリスマスの劇で皆に注目され、味を占めたのか？そのメッキも今すぐ剥がして、皆に謝るんだ！」

ファッジはイリスの両肩を掴み、力任せに揺さぶった。彼の目は飛び出し、明らかに正気の状態ではない。ハーマイオニーとロンが口々に何かを叫んで、イリスからファッジの腕を振り払った。イリスが怯えてものも言えずにいる時、誰かがファッジの胸倉を掴み上げた。――セドリックの父、エイモスだ。セドリックと彼女の母も急いで駆け寄って来て、イリスの前に守るように立ちはだかった。

「この子を傷つける事は許さんぞ！」エイモスは口角泡を飛ばしながら、ファッジにがなり立てた。

「この子はセドリックを“死の呪い”から救ってくれた。私の息子は嘘を吐いていない。狂っているのはあなたの方だ、ファッジ！」

「この右腕がメッキですって！あなたの目は節穴ですか！」マクゴナガルが叫んだ。

ファッジはエイモスの手を振り払うと、憎々しげな眼差しで皆を睨み付けた。

「どうやら諸君は、この十三年間、我々が営々として築いて来たものを・・・全て覆すような大混乱を引き起こすつもりだな！」

イリスは思わず自分の耳を疑った。――ファッジは事なかれ主義が過ぎる所もあるが、根は善人だと思っていた。しかし今、目の前に立っている小柄な怒れる魔法使いは、心地良い秩序だった自分の世界が崩壊するかもしれないという予測を、頭から拒否し、受け入れまいとしている。ヴォルデモートが復活したという事実を信じまいとしている。

「あなたは物事が見えなくなっている」

今や、ダンブルドアは言葉を荒げていた。手で触れられそうな程に強烈な魔法力を帯びたオーラが体から発散し、その目はメラメラと激しい怒りに燃え盛っていた。

「自分の役職に恋々としているからじゃ、コーネリウス！今、ここで、はつきり言おう。今からわしの言う措置を取るのじゃ。そうすれば、

大臣職に留まろうが、去ろうが、あなたは歴代の魔法大臣の中で、最も勇敢で偉大な大臣として名を残すじやろう。

だが、もし行動しなければ、歴史はあなたを、営々と再建してきた世界を、ヴォルデモートが破壊するのをただ傍観しただけの男として記録するじやろう！」

ダンブルドアだけでなく、皆が体中からほとぼしる程の熱い感情を纏って、イリスを守り、そしてファッジに正しい選択を迫った。ファッジはたじたじと窓際まで後退しながら、小声で言った。

「正気の沙汰ではない。皆、狂っている……」

その時、ファッジの背にある窓のカーテンが、眩いばかりの緑色の光に染め上げられた。爆発的な悲鳴が、彼方此方で上がり始めた。一体、何が起こったんだ？ファッジは急いで振り返り、大きな窓のカーテンをぎつと開けた――

——そこには夜空を覆い尽くすようにして、巨大な“闇の印”が打ち上がっていた。不気味な惑星のような大髑髏が笑い、その口から蛇が顔を出して楽しげにのたくっている。それはホグワーツを見下ろし、嘲笑っていた。もう隠す必要などないと、言わんばかりに。

イリスが怯えた悲鳴を上げ、小さなパニック状態を引き起こして、ハリー達に懸命に宥められている。その騒ぎを他人事のように聞き流しながら、ファッジは今までの自分の心地良い世界が、跡形もなく崩れ去って行くのを感じていた。——こんな巨大な呪われた印を、杖も持たない娘が、いや、他の魔法使いだって創れるはずもない。創れるのはただ一人、ヴォルデモート卿だけだ。ファッジはヴォルデモートが復活したと言う現実を、受け入れざるを得なかった。

「ダンブルドア」ファッジは掠れた声で言った。

「あなたの言う措置を取る。わ、私は……どうしたらいい？」

ダンブルドアは何も言わずにファッジの肩を優しく掴み、隣に並び立った。しかし“闇の印”を睨み付けるその目は、ひどく厳しいものだった。

☆

ダンブルドアとファッジ、そして大人達は今後の話をすると言っ

て、部屋を出て行つた。セドリツクと彼の両親は、恐縮するばかりのイリスを強く抱き締め、涙に濡れた声で何度も感謝の言葉を捧げた。――イリスは目の前のハンサムな青年を心配そうに見つめた。いくら無事だったとはいえ、彼が“死の呪い”を受けた事に変わりはない。後遺症は何もないのだろうか。

「セドリツク、体は大丈夫？何ともない？」

「僕は大丈夫だよ。イリス」セドリツクは爽やかに微笑んだ。

「後遺症もない。助けてくれて本当にありがとう。ダンブルドアから、全部聴いたんだ」

セドリツクは屈み込むと、イリスの頭を優しく撫でた。その様子を見兼ねたハリーは、ピクリと不満げに眉を顰めた。セドリツクは、尚もイリスに話しかける。

「良かったら、今度の夏休み、僕の家遊びにおいでよ。ハリー達も一緒に。両親も君にきちんとお礼がしたいって言ってるし、僕のガールフレンドもとびっきりのご馳走を作ってくれるってさ。チョウの料理は本当に美味しいんだ。君、中華料理は好きかい？」

――勿論、中華料理は大好きだ。イリスが嬉しそうに頷くと、セドリツクは安心したように笑い、皆に手を振って去って行つた。ハリーはむくれた顔をして、イリスをぬいぐるみのように抱き寄せ、腕の中に抱え込んだ。ハーマイオニーが呆れ果てたように言った。

「心配しなくても、セドリツクはあなたの妹を盗ったりしないわよ。お兄ちゃん！」

やがてマダム・ポンフリーがやって来て、強い睡眠薬を飲ませて安静に休ませると言い、ロンとハーマイオニーを医務室から追い出した。そしてベッドの周りのカーテンを閉め、ハリーとイリスに睡眠薬の入ったゴブレットを渡した。カーテンの隙間から漏れ出していた――不気味な緑色の光は消え、辺りはぼんやりしたランプの灯りだけになった。イリスはハリーの傍で、ゴブレットの中身をゆっくりと飲み干した。たちまち効き目が現れた。深い眠りが抵抗しがたい波のように、ぐぐつと押し寄せた。イリスは枕に倒れ込み、もう何も考えなかった。

☆

ハリーは、ふと目を覚ました。隣のベッドでは、イリスが健やかに眠っている。ハリーはそつとカーテンを開けて、外の窓の様子を覗き見た。——もう緑色の光はない。印は消えたみたいだ。これでイリスが怖がらずに済む。彼は心の底からホッとして、彼女の羽根布団を優しく掛け直した。

その時、医務室のドアが静かに開かれる音がして、ハリーは思わず耳を澄ませた。——マダム・ポンフリーだろうか？しかし、足音は彼女特有のせかせかとしたものではなく、ゆっくりと落ち着いていた。足音は真っ直ぐにこちらへ近づいてくる。ハリーは杖を握り締め、カーテンを少しだけ開けた。

部屋のおぼろげな灯りを受けて、一人の男子学生が立っている。ハリーは自分の見ているものが信じられなかった。——ドラコ・マルフォイだ。次の瞬間、墓場で見た彼の父親の酷薄な笑みが蘇り、ハリーは警戒心も露わに杖先を彼に突き付けた。しかしドラコは動じる事もなく、静かな声でこう言った。

「ポッター。僕は敵じゃない。記憶を取り戻したんだ」

ハリーは驚いて、大きく息を飲んだ。そしてクリスマスも近づいた夜、イリスがグリフィン・ドルの塔の上で、“ドラコを守るために記憶を消した”と言った事を、ふつと思いつ出した。マルフォイは“秘密の部屋”での記憶を、本当に取り戻したのか？ハリーは疑り深い目でドラコを観察した。——今の彼の顔はいつもの意地悪そうな顔つきとは、まるで違っていた。澄んだ湖のように静謐で、その目の奥には揺るがない決意が燃えている。

「マダム・ポンフリーに許可は取ってある。席を外してくれ。イリスと話がしたい」

ハリーは言葉を失い、傍らで眠るイリスを見た。——マルフォイが嘘を言っているようには思えない。だが、マルフォイが記憶と共に愛も取り戻したのなら、イリスは彼に盗られてしまう。かつてハリーを苦しめた“幼い愛”が、再び彼の心を切なく焦がした。

その時、イリスの枕元で何かがキラリと輝いたのを見て、ハリーは

思わず手を伸ばし、それを手に取った。——金色の懐中時計だ。イリスと初めて会った時、彼女がお揃いで買ってくれたものだ。何年も使いたまわされてくすんだ色になった輝きが、ハリーの心を優しく癒した。

——僕はイリスを愛している。ハリーは愛する少女の頭をそつと撫でた。だから僕は、彼女が幸せになる事を望む。やがてハリーは立ち上がり、寮に戻るために靴を履き、ドラコと擦れ違った。

ハリーの緑色の目とドラコの灰色の目が短い間、交錯する。二人は何も言葉を交わさなかった。どうあつても、二人が敵同士である事に変わりはない。しかしハリーが扉に手を掛けた時、ドラコがふと彼の名前を呼んだ。

「ポッター」 静かな声だった。

「今までイリスを守ってくれて、ありがとう」

「黙れよ、マルフォイ」 ハリーは歯を食い縛った。

「どうして、どうして、お前なんかを……」

ハリーはそれ以上言葉を続ける事ができなかった。彼は振り返らず、扉を開けて去って行った。寮へと向かう道すがら、イリスと今まで過ごした——甘酸っぱくも切ない思い出の数々が込み上げて来て、ハリーはもう我慢できなかった。胸を突き破って飛び出しそうな悲しい叫びを漏らすまいと、彼は顔をくしゃくしゃにして頑張り、グリフィンドール塔に向かって突き進んだ。

——自分は今、世界で最も惨めでださくて、情けない男だ。ハリーはそう思った。けれども、それはそんなに悪い事ではないとも思った。自分本位な“幼い愛”は失恋の痛みと共に成長し、自分よりも他者の幸せを思いやる“真実の愛”へと昇華した。“闇の印”が消え去った空から、優しい星と月の灯りが硝子の窓を通過して差し込み、少し大人になった少年を優しく包み込んでいた。

☆

イリスはとても幸せな夢を見ていた。ずっと憧れていた場所に、愛する人と一緒にいる。——ホグズミード村のマダム・パディフットのカフェだ。イリスはそのテーブルの一つに着き、向かい側に座るドラコと笑い合っている。——これは夢なんだ。イリスには分かって



いた。テーブルでメニュー表を広げている右腕も元のままだし、ドラコとここにいるなんてありえない。でも、今はこの幸福にどっぷりと浸っていたかった。

ふとドラコが熱を帯びた眼差しをイリスに注ぎながら、小さな顎をそつと持ち上げた。そしてモミの木に隠れるようにして、ドラコはイリスに深く口付けた。彼女は最初の方こそ、幸せで舞い上がるような心地だったが、やがてその接吻は息をする事も難しくなる程に激しいものになり、イリスはたまらずドラコの腕の中でもがいた。——苦しい、息が出来ない。

やがて、イリスは喘ぎながら目を覚ました。そして涙に滲む視界の中に映った人物を見て、目を丸くした。

「起きたかい、お姫様」

——ドラコだった。イリスの髪を優しく梳きながら、彼は悪戯っぽく微笑んだ。彼女はまだ夢を見ているのに違いないと思った。今日はとても良い夜だ。イリスは素直にドラコに甘えながら、小さな声で言った。

「うん。あなたの夢を見てたの。あなたとマダム・パディフットのカフェにいる夢」

それを聴いたドラコは一瞬、蒼白い顔を切なそうに歪めたが、何も言わずに優しく笑った。それからイリスの右肩から先を彩る“銀色の義手”に、静かな視線を注いだ。——今度は、これは現実のまままだ。ドラコが怖がってしまう。イリスは慌てて言った。

「ごめんね、気持ち悪いよね。すぐに隠……」

「綺麗だ」

しかし、ドラコは熱を帯びたような声でそう囁いただけだった。そして少女の右腕を持ち上げ、余す所なく丁寧にキスの雨を降らせ始めた。——イリスは絶句し、ドラコを茫然と見つめた。誰もが目を逸らし、気味の悪い呪われしものと畏怖したこの腕を、彼は綺麗だと褒め、愛しんでくれた。イリスは言葉に出来ない程の熱い感情が喉元に込み上げ、大粒の涙が両目から零れ落ちていくのを止める事が出来なかった。

——もうこれ以上、優しくしないで。きつとこの部屋を出たら冷たく辛い現実が待っている。本物のドラコはこの右腕をからかい、罵るに違いない。イリスは力なくすすり泣きながら、ドラコに縋り付いた。

「お願い、もう止めて。これ以上、優しくしないで」

「どうして？」ドラコがイリスの手首にキスしながら、静かに尋ねた。

「この夢から覚めたら、私……もう立ち直れなくなっちゃう」

——“この夢”？ドラコは思わず訝しんで、イリスをまじまじと見つめた。もしかして、彼女はこの期に及んでもまだ、夢を見ていると思っているのか？彼の疑問はそのまま言葉となって口から飛び出した。

「もしかして、君はまだ自分が夢の中にいると思ってるのか？」

イリスが首を傾げながらも頷くと、ドラコは天を振り仰いで盛大な溜息を零した。——あんなに情熱的なキスをして、起こしたと思ったのに。やがて彼はイリスの手を自分の頬に添えながら、ふてくされたような表情を湛えて、静かに尋ねた。

「君はどうやったら夢から覚めたと思ってくれるんだい？」

「ほっぺをつねって痛かったら」イリスがロマンの欠片もない答えを返した。

ドラコはすかさず空いた手を伸ばし、イリスの頬を強くつねった。

——とびつきり痛かった。イリスは慌てて飛び上がり、ドラコを睨んで涙ながらに叫んだ。

「痛いよ、ドラコ！何するの！」

そしてハッと気づいた。——これは夢じゃない。ドラコは優しい目で自分を見つめている。イリスは余りの事に混乱する頭の中で、必死に考えを巡らせた。一体どうして？クリスマス夜の夜、スネイプが自分に代わって彼の記憶を消したのではなかったのか？するとドラコはイリスの胸の内を読み取ったかのように、こう言った。

「スネイプ先生は、僕の記憶を消さなかったんだ。代わりに君の記憶を見せてくれた。……イリス、君は僕が死ぬ未来を見たんだね？そして僕を守るために記憶を消した」

「——あ、あなたを失いたくなかったの！」

その瞬間、今までずっと心の奥底に押し込めて来た——イリスの感情がマグマのようにせり上がり、胸を突き破って飛び出した。一度、秘めた思いを口にする、彼女はもう自分の気持ちを抑える事などできなかつた。ひどい痙攣を起こしたように泣きじゃくる少女を、ドラコは素早く引き寄せ、狂おしいほどに強く抱き締めた。

「あなたは私と一緒にいると死んでしまう！」イリスが激しくしゃくり上げた。

「でもアステリアと一緒にいれば、あなたは幸せになれる。しわしわのおじいちゃんになるまで、長生きできる」

「・・・幸せ？」

突如として、ドラコが忌々しいと言わんばかりにその言葉を吐き捨てた。それから彼はゆっくりと体を離し、戸惑うばかりのイリスを真っ直ぐに見つめた。冷たい灰色の瞳が、激しい怒りと情熱の感情に燃えている。

「僕は君のペットか？君の創った籠の中で寿命を迎えるまで安全に生きていれば、君は満足なんだろうが・・・生憎、そこに僕の意志はない！」

ドラコは強い口調で言い放った。余りの彼の剣幕に思わず体をこわばらせるイリスの脳裏に、ある魔法使いの言葉がふつと蘇った。——『相手の意見に耳も貸さず、安全な鳥籠に閉じ込めるのは、一方的な愛情の押し付けだ。本当に人を愛するというのは、相手と同じ高さに立って、意見を尊重し、受け入れることだ』。今、その言葉を体現するかのよう、ドラコは痛々しい程にひたむきな目で少女を見つめ、一切の迷いのない声でこう言った。

「僕はたとえ今死のうが、不幸せになろうが、地獄に堕ちようが、君と一緒にいる！それが“僕の幸せ”だからだ。僕の幸せを——僕の人を——君が勝手に決めるな」

イリスの目に、再び熱い涙が溢れた。——もう、何も言葉にする事など出来なかつた。愛する者が自分に寄り添い、共に生きようと言ってくれた。これ以上に幸福な事が、一体、世界中のどこにあるだろう。

今や、彼女だけでなくドラコも泣いていた。彼はイリスの頬を愛おしそうに撫で、涙に滲む声で言葉を続けた。

「約束する。僕は決して、君を置いて死なない。．．君の母君が遺した論文を読んだんだ。」 未来視” は多様な未来の可能性を示すものだ。君の母君が見た” 幸福な未来” を、僕らはきつと実現できる。だから彼女は、僕を甦らせてくれた。君にもう一度会うために。幸福な未来を一緒に歩むために」

二人は固く抱き締め合い、お互いを見つめ合った。——そうだ。僕は君に会うために、もう一度生まれた。ドラコは歓喜の涙を拭う事無く、愛する者の瞳を一心に見つめ、強くそう思った。僕らは魂の奥底で繋がっていたんだ。ドラコは自らの脈打つ心臓の上にそつと手を置いた。何とも形容しがたい——強く迸るような力が、心の底からマグマのように湧き上がってきて、自分を狂おしいほどに鼓舞するのを感じた。

「イリス、僕に記憶を戻してくれ。僕は君の全てを取り戻したい」

“ 憂いの篩” で見たものは、あくまでもイリスの記憶であって、自分のものではない。ドラコはイリスに杖を握らせ、懸命に乞い願った。一方のイリスは、まだ不安と恐れを拭い切れずにいた。——もし、” 最悪な未来” が実現してしまったら？ドラコが死んでしまったら？

『あんたにはあんたの人生、そいつにはそいつの人生がある。そして自分の人生は他人じゃなく、自分自身で選択するものなんだ』——その時、ある魔法使いの言葉が、イリスの心の中を一陣の風となつて吹き抜けていった。“ 自分の人生は、自分自身で選択するもの” ——イリスは言葉を失い、ドラコをじつと見つめた。

「僕を信じてくれ」

ドラコはただ、静かにそう言った。——その瞬間、イリスは理解した。人を愛すると言うのは相手を信じ、その選択を受け入れる事なのだ。そして彼女はありつただけの勇気を振り絞り、ロックハートから学んだ” 記憶を戻す術” をドラコに掛けた。イリスの杖先から銀色の光が一筋零れ出て、ドラコの頭の中へ吸い込まれていく——

——そうして、ドラコはあの日失った全ての記憶を取り戻した。父の書齋でイリスが助けを求め、助けられなかった“罪悪感”。リドルの亡霊に怯えながらも、本当に大切な者は何かという事を知った“かけがえのない瞬間”。そして命を賭してイリスを守った後に味わった“愛する者の温もり”……。

やがてドラコはそつと目を開け、愛する者にしか見せない——特別な微笑みを見せた。やっぱり、僕の居場所は“ここ”——イリスの傍にしかない。ドラコは愛する者の住む“夢の島”に、やっと帰り着いた。その大いなる感動に打ち震え、ドラコはイリスに強く口付けて、涙に滲む声でこう囁いた。

「ただいま、イリス」

イリスも涙でぐしやぐしやになった顔で精一杯微笑んで、優しく応えた。

「……おかえり、ドラコ」

## P e t a l l 1 9 . 新 た な 幕 開 け

やがて夜が明けるまでドラコはイリスと寄り添って眠り、ハリー達が朝の挨拶をするために戻って来るのを待った。ロンとハーマイオニーはカーテンを開けてマルフォイを見つけたとたん、びっくり仰天していたが、ハリーが前もって二人に事の次第を説明していたために、それ以上騒ぎが大きくなる事はなかった。気を遣ったマダム・ポーンフリーが人数分のオートミール皿を持って来てくれ、それを食べながら五人はこれからの事を話し合った。

「今後について、君達に話しておきたい」ドラコはオートミールをかき混ぜながら、口を開いた。

「君達！」ロンが皿の中にスプーンを取り落とし、絶句した。

「なんて親しみの籠もった呼び方なんだ……もしかして僕ら、ベストフレンドの関係に戻ったって訳かい？」

「僕らがベストフレンドになる事は永久にない。ペちやくちやウィーズル！」

ドラコは不機嫌な感情を剥き出しにしてバシツと言い切った後、ショックを受けた様子のイリスの頭を宥めるように優しく撫でてから、再び話し始めた。

「僕はマルフォイ家の人間だ。そして今、僕の父は死喰い人の中で非常に高い地位にある。恐らく僕は近い将来、父と同じ道に進むだろう。いずれは敵として、君達の前に立ちはだかる時もあるかもしれない。だから記憶を取り戻したからと言って、仲良くするような真似はよしてくれ。今まで通り……」

「でも、完璧に」今まで通り」じゃない。そうだろ？」ハリーは冷静に言った。

「僕らは共通の敵と目的を持つてる。『ヴォルデモート』と『イリスを守る事』だ。だから表面上は敵同士でも、本当はそうじゃない。僕らは同じ陣営だ」

「陣営？素直に友達って言ったらどう？」ハーマイオニーが呆れたように口を挟んだが、ハリーは無視した。

「理解が早くて助かる」ドラコは青白い顔をわずかに赤らめながら、オートミールに口を付けた。

やがてベッド周りのカーテンが明るいオレンジ色の光に照らされ始めた。——朝日が昇ったのだ。マダム・ポンフリーが窓を開けたのだろう、カーテンの間隙から鳥のさえずる声と共に爽やかな風も吹き込んで来て、子供達の頬を優しく撫でた。いまだに“今後のマルフォイへの接し方”が分からず、首を傾げているロンと、その様子に頭を抱えるハーマイオニーをどこか拍子抜けしたような顔で見つめながら、ドラコが口を開いた。

「ポッター、君が二人に話しておいてくれたんだろ？こんなに早く話がまとまると思わなかった。もっと手こずると思っていたから。……手間を掛けたな」

「いいんだ」ハリーは静かに言った。

「僕の妹”を宜しく頼むよ。君が義弟になるのは正直、反吐が出そうだけどね」

「……妹？どういう事だ？」ドラコが眉を潜めた。

イリスは、ハリーと兄妹の仲になった経緯をドラコに話して聴かせた。すると彼はとてつもなく底意地の悪い笑みを浮かべて、こう言った。

「へーえ、随分と上手い所に逃げたじゃないか？君はシーカーよりもスニッチの方が向いているんじゃないのかい？」

「スニッチ向きなのは君だろ、マルフォイ？」ハリーは実に爽やかな笑顔で応えた。

「記憶を失くしている間、イリスをこっぴどく傷つけた。君はその事実から華麗に逃げ続けているじゃないか。それとも記憶を取り戻した拍子に、都合の悪い事は全部忘れちゃったのかい？」

ドラコの青白い頬がさつと赤味を帯び、二人は互いに“これ以上の憎しみはない”と言わんばかりの目付きで激しく睨み合った。——やっぱり、どうあつても二人は敵同士だった。イリスはその様子をハラハラしながら見守り、やがて胃を摩りながら大きな溜息を一つ零すのだった。

☆

それから学期末の宴が始まるまでの一ヶ月、イリスは信じられないくらいにずっと幸せだった。毎日朝起きてから夜眠るまで、楽しくワクワクする事が目白押しで、とても忙しかった。“ダービッシュ・アンド・バングス魔法用具店”から取り寄せたパンフレットをテーブルに広げて、どんな素材やデザインの手袋にするか、ハリー達と話し合ったり、談話室の特等席でチェスや“爆発スナック”、“ゴブストーン・ゲーム”に興じたり、めでたくW・A・D・Aに就職が決まったアンヌ達のお祝いをしたり、無事に元気な三つ子を生んだミセス・ノリスとクルックシャンクス達のところへお見舞いに行き、素敵なお名前を付けたり・・・などなど。

ドラコは授業の合間の休み時間や食事の時間などを利用して、一日に数回、一度の逢瀬は数分程度という短いものではあったが、度々イリスに会いに来てくれた。二人は他愛のない話をしたり、見つめ合つてハグやキスをしたり、ドラコが取り寄せてくれたミニチュア版の“魔法使いのチェス”を一手ずつ進めたりした。

ドラコとの仲が戻ってから、イリスは見違える程に明るく元気になった。彼女はドラコと一緒にいる時だけワガママになり、屈託なく甘えるようになった。それは今まで、彼女の周りで際限なく起こり続けた——辛く悲しい出来事を一人で溜め込んで来た事への反動でもあったのだが、ドラコもそれをきちんと分かっている、躊躇う事無くイリスを受け止め続けてくれた。

——“第三の課題”の夜に何があったのかという事は、まだ学校じゅうの人々は誰も知らなかった。病み上がりのイリス達が質問攻めにされる事態を憂い、ダンブルドアが直々に朝食の席で、皆に“イリス達に話をせがんだり、質問したりしないように”と諭したのだ。

しかし、人の口に戸は立てられない。もしかしたら一部の生徒の家族の中に、魔法省で勤めている者や、“闇の陣営”に与する者がいたのかもしれない。誰かの口からこっそりと零れ落ちた“噂の種”は、ホグワーツの床で芽を出してじわじわと成長し、やがて学校じゅうを覆い尽くす森になった。



半数の生徒は、イリスと廊下で出会うと目を合わせないようにして避けて通るようになった。彼女が通り過ぎた後で、頑丈な布で覆われた右腕を見ながら、手で口を覆ってヒソヒソ話をする者もいた。けれども、イリスは何も気にならなかった。ハリー達やグリフィンドール生、ハッフルパフ生の皆は変わらず暖かく接してくれる。それに何より、今の自分にはドラコがいるのだ。

☆

それから数日後、イリスはドラコと一緒にスネイプ先生のいる地下牢へ向かった。——彼のお蔭で自分達は再び巡り合い、より固い絆で結ばれる事が出来たのだ。改めてきちんとお礼が言いたかった。スネイプは二人を見たとき、ほんのわずかに微笑むと、地下牢の中へ招き入れてくれた。二人は真剣な顔つきを見合わせると、しっかりとした口調で、恩師に心からの感謝の言葉を送り、頭を下げた。スネイプは険の取れた——とても穏やかな表情を浮かべて、満足気に頷いた。

「君達は”お互いにならないもの”を持っている」スネイプは二人を交互に見て、静かに囁いた。

「それぞれの欠点を補い、高め合う事ができれば、どんな厳しい試練も必ず乗り越えられるだろう」

スネイプは二人の性質を良く見抜いていた。——ドラコは狡賢くしたたかな世渡り上手だが、疑り深い性格が災いして真実を見落とす事がある。一方のイリスは動物のように純粋な感性を持っているために、一目で真実を見抜く事ができるが、人の悪意や姦計にめっぽう弱い。まるで陰と陽のように二人は正反対の性質を持ち、そしてぴったりと寄り添い合っていた。

恩師の言葉をしっかりと心の中に留め、二人は愛情の籠もった目でお互いを見つめ合う。やがてドラコがふとスネイプを仰ぎ見て、口を開いた。

「先生。もし可能であれば、ホグズミード村へ二人で観光に行く事を特別に許可して頂けないでしょうか?…イリスが”僕と一緒にデートをしたい”と駄々を捏ねるのです」

たちまちイリスは耳まで真っ赤になって、ドラコの影にさつと隠れた。それは彼と世間話をしている時に、時々自分が口にしていたワガママだった。——いくらドラコとの仲が戻っても、学校内でのお互いの立場は変わらない。二人の親密な関係は、他の生徒達には絶対に気付かれてはならない事だった。ドラコはまだルシウスから許嫁の話を書いていない。今の状況で白昼堂々ホグズミード・デートなんて、絶対に無理だ。しかし叶わぬ夢だからこそ、イリスは尚更憧れた。

でも、まさか、ドラコがそれを——よりによってスネイプ先生にお願いするなんて。厳格な彼は絶対に怒るに違いない。イリスはこわごととスネイプを仰ぎ見たが、なんとも驚くべき事に——彼は怒るところか、優しく微笑んで頷き、杖を振って二人分の許可証を創り出しながらこう言った。

「では特別に許可証を出そう。校長先生やマクゴナガル先生には、私から言っておく。二人のアリバイも何とかしよう。ただ念のためにいつもとは違う服を着て、髪や目の色も変えなさい」

——イリスはウサギのようにピョンと跳び上がって喜び、明るい歓声を上げてスネイプに抱き着いた。二人は改めてスネイプにお礼を言い、地下牢から地上を繋ぐ階段を元気良く駆け上がって行った。

一方のスネイプは険しい表情を湛えて、その後ろ姿を見送った。——あの二人がこれから進むのは、茨の道だ。いくらお互いの短所を補い合うと言っても、所詮は子供に過ぎない。敵はヴォルデモートだ。その時、二人の行く末を案じるスネイプの視界がふと揺らいだ。二人の後ろ姿が眩いばかりの陽光に包まれて、そして——黒い髪を長く伸ばしたスリザリン生の少年と、豊かな赤毛のグリフィンドール生の少女に代わった。二人は仲良く手を繋いで階段を昇り、光の中へ消えて行った。

それはただの願望が混じった、一時的な幻覚だったのかもしれない。しかしスネイプは止め処なく流れ落ちる涙を拭う事も、またその場から動く事も出来なかった。

スネイプとリリー、そしてドラコとイリスの関係性は、あらゆる面で非常に良く似ていた。お互いに“犬猿の仲”であるグリフィン

ドールとスリザリン生で、とても親密な関係だったのに、ある事件をきっかけに絶交した。けれども、スネイプとリリーが仲直りする機会は永久に失われたが、イリスとドラコは無事に仲を取り戻し、未来へ歩き出した。

——もし僕があの時、リリーと仲直りできていたら。あの二人のように仲良く手を繋いで、ずっと……。それは“あり得たかもしれない未来”だった。若き恋人達は自分達でも気が付かない内に、スネイプの過去の古傷を見舞い、溜まった膿を洗い流し、優しく癒していた。

☆

そしていよいよホグズミード・デートの日がやって来た。イリスはジニーに習って髪の色を赤く染め、フクロウ通信販売でハーマイオニーに見繕ってもらった——花柄のワンピースに身を包んで、待ち合わせ場所である“叫びの屋敷”の前で待っていた。イリスはそわそわと落ち着かない様子でポケットから懐中時計を取り出して時間を確認したり、友人達に手伝ってもらって薄く化粧をした自分の顔を何度もチェックしたりした。

「やあ。ごめん、遅くなった」

予定時刻を数秒ほど過ぎた頃、ふと後方から大好きな声がして、イリスはドキドキしながら振り向いた。——しっかりとまとめていた髪を下ろして黒く染め、質素な服装に身を包んだドラコはとてもハンサムで魅力的だった。ドラコもガールフレンドの晴れ姿を食い入るような眼差しで見つめ、やがて手を取って自分の傍に引き寄せると、熱を帯びた声で囁いた。

「すごく可愛い」

そこから先は、まさに夢のような時間だった。朝から夕方まで、大好きなドラコを一人占めできる。イリスは余りの幸せに有頂天になり、またも魔法力が暴発して、文字通り舞い上がったたり、自分の周囲に花卉を振り撒いたりした。ドラコは時々風船のように浮き上がるイリスの手を引いて、風に吹かれて飛んで行ってしまわないように、自分の傍へ引き寄せたり、付近の人々に不審がられる前に、舞い散る

花卉を杖を振って消さなければならなかった。

二人は“ハニーデュークス”で新作のお菓子を吟味し、“悪戯専門店ゾンコ”を冷やかし、他の細々とした店にも足を運んだ。今まで行き慣れた場所でも、二人一緒だとまるで初めて見るもののように新鮮で、キラキラと輝いて見えた。デートは順調に進み、やがて二人は“三本の箒”で冷たいバタービールを注文し、クタクタになった身体を休めた。

それから二人は“マダム・パディフットのカフェ”へ向かった。ピンク色を基調とした店内はフリルやリボンでびっしりと飾られ、天井からはハートの紙吹雪が雪のように降り注いでいる。その様子を見たドラコはすかさず意地の悪い笑みを浮かべて、イリスを見た。

「良かったな、イリス。ここならいくらでも花卉を振り撒いて大丈夫だ」

イリス達は店の奥に設置された、二人が並んで座れるソファアーム付のテーブルへ案内された。イリスはどきまぎしながら、ドラコと一緒にカップル専用のメニュー表を見た。そして注文を取りにやって来た女主人の勧めるままに、一番人気らしい“アフタヌーンティーセット”を頼んだ。

数分後、テーブルに運ばれたのは——三段重ねの盆に載った軽食と、ハート柄のティーカップとソーサーが二組だけだった。ティーカップは空っぽで、ポットもない。そのまま立ち去ろうとする女主人をイリスが戸惑うように見上げると、彼女は悪戯っぽく笑い、“お茶の注ぎ方はカップの底に書いてあります”とだけ言つて去つて行った。

——カップの底に書いてある、だって？イリスはそつとカップを持ち上げ、底を覗き込んだ。するとそこには金色の文字で、“さあ、キスをして！”と書いてある。——“キス”？イリスが思わず首を傾げていると、突然、ドラコに肩を強く抱き寄せられ、そして優しく唇が重ねられた。やがてキスが終わり、イリスがゆっくりと目を開けると、テーブルの上の二組のティーカップには熱い紅茶がたっぷり入っていた。

どうやら紅茶をお代わりするには、キスをしないとイケないらしい。不意に店内から冷やかすような音色の口笛が飛んできて、イリスは慌ててその方向を見た。窓際の席に着いた大人のカップルが、こちらを見つめて微笑んでいる。きつと先程のやり取りを見ていたのに違いない。イリスは恥じらう余りに、ドラコの腕の中で耳まで真っ赤になって俯いた。しかしドラコは涼しい顔で、今度は盆の上のクッキーを一枚食べると、自分のカップの中身を一息に飲み干した。そしてわざとらしく眉を顰めてこう言った。

「このクッキーは喉が渇くな。僕はもう一杯、紅茶が飲みたい」

「わ、私のカップがあるよ！」イリスは慌てて自分のカップを押し遣った。

「まだ口を付けてないから、大丈夫。ほら・・・」

しかしイリスの言葉は途中で遮られた。ドラコが自分の顎をグイと持ち上げて、強引に口付けたからだ。

——物足りない逢瀬をずっと我慢していたのは、イリスだけでなくドラコも同じだった。今度のキスは長く、そして深かった。イリスはもう何も考えられなかった。まるで自分の頭が、暖炉の上でドロドロに溶かしたヌガーになったみたいだった。ドラコのカップが満たされ、すでに一杯だったイリスのカップからお茶が溢れ出しても、周囲の人々から冷やかしの視線を向けられても——二人は夢中で抱き締め合い、キスを続けた。

☆

カフェを出た頃、空は夕焼けに染まっていた。ホグワーツへ帰る時間が近づいていた。イリスはさつきまであんなに楽しかった気分が、急に針で突いた風船のように萎んでいくのを感じながら、力なく俯いた。——帰りたくない。イリスが黙りこくったまま、ドラコに手を引かれて歩いていると、ふと彼が優しい声でこう言った。

「少し君に来てほしいところがあるんだ」

ドラコは戸惑うイリスの手を引いて、ホグズミード村と城の中間地点に群生する——小さな木立へ誘った。そこには樹齢何百年はあるに違いない、巨大なオークの木がそびえ立ち、その枝の随所にはヤド

リギがひっそりと寄生している。ドラコはその木の下で立ち止まると、真摯な顔で向き直り、イリスの両手を取った。

「イリス。僕と結婚して欲しい」

イリスは余りの事に絶句し、息をする事も忘れてしまった。——“結婚”だつて？ドラコの表情は真剣そのもので、嘘を言っているようには見えない。彼は口惜しそうに唇を噛み、言葉を続けた。

「僕と君は、父の計らいで直に婚約する。だけどその前に、僕は自分の意志で君を娶り、妻としたい。僕の人生のパートナーは君だけだ」ドラコは激しい熱を帯びた眼差しでイリスを見つめ、両手にキスをした。

「君を永久に大切にする。イリス、お願いだ。僕の愛に応えてくれ」

それは、本当に夢のような瞬間だった。“愛する人からプロポーズを受けた”——その幸せに有頂天になり、イリスはまたも風船のようにふわりと浮き上がりながら、ふと思った。——本当に私なんかで良いのだろうか。こんな幸せがあつていいのだろうか。

「でも……」

しかしイリスがそう言い掛けたとたん、ドラコは彼女にキスをした。

「君から“はい”の言葉以外は聴きたくない！」

ドラコは切なく掠れた声で唸った。そうして彼はイリスが戸惑って話しかけようと口を開く度に情熱的に唇を重ねて、邪魔をし続けた。そうする内に、彼女の心に巢食った迷いや葛藤は徐々に蕩けて、消えて行つた。——ドラコは私の全部を受け入れてくれるんだ。イリスは歡喜の余り、大粒の涙を零した。それでも、私を奥さんにしていいって言ってくれてるんだ。やがて彼女は覚悟を決め、愛する人を一心に見つめて、涙に滲む声で応えた。

「——はい」

その言葉を聞いた瞬間、ドラコは感極まる余りに低く呻いて大粒の涙をいくつも零れ落としながら、イリスを狂おしく抱き締めた。やがて彼は少女を名残惜しそうに離すと、ポケットから銀のリボンを取り出した。

「このリボンが、君と僕を再び結び合わせた」

ドラコはそう囁くと、杖を取り出してリボンに向けた。するとリボンは空中に浮き上がり、ぷつりと中程で切れて、やがて二つのシンブルな銀の指輪に変身した。——それは、二人の結婚の誓いの指輪だった。二人は拙い言葉で永久の愛を誓い合い、お互いの指に指輪を嵌めた。物も言わずに自分の指輪をじっと見つめるイリスを見て、ドラコは申し訳なきような顔で頭を掻いた。

「装飾も刻印もなくゴメン。でも、これは仮の指輪なんだ。正式に婚約が決まったら、僕の家が懇意にしている宝石商に依頼しよう。誰もが羨むような、立派で素敵指輪を創り直すんだ」

「ううん。これが良い」イリスは慌てて首を振り、またうっとりとした目で指輪を眺めた。

「ドラコが創ってくれたんだもん。これが良いの」

その時、イリスは暖かい腕に抱き寄せられ、愛おしげに頭を撫でられて、そつと顔を上げた。彼女の大好きな灰色の瞳がゆっくりと近づいてくる。——二人はオークとヤドリギの祝福の下で、誓いのキスを交わした。

☆

木立から離れて城へ向かう二人の背に、静かに杖先を向ける老年の魔法使いがいた。彼はまだ快復し切っていない体に鞭を打ち、よろめいて苦痛に喘ぎながらも、木の影から呪いを放とうと息を吸い込んだ。

「止めるのじゃ、アラスター」

次の瞬間、静かで揺るぎない声が背後から突き刺さった。ムーディは突然の来訪者に驚きもしなければ、振り向く素振りすら見せなかった。依然としてその杖先は、真っ直ぐにイリスを指している。

「止めてくれるな。アルバス。わしは娘を殺さねばならん。ヴォルデモートの手に堕ちる前に」

「イリスはあやつの味方にはならぬ」

やがて木々の間をすりりと通り抜けながら、ダンブルドアが姿を現した。彼は杖も持たずに飄々とした足取りでやって来ると、ムーディ

の隣に並び立ち、今は遠くの方へ見えるばかりの二人の様子を眺めた。ムーデイは渋々といった調子で杖を下ろしたが、その眼光はいまだに鋭く凍てついたまま、少女を貫いている。

「確かに今はそうではない」ムーデイは含みのある言い方をした。

「だがアルバス、目を覚ませ。たった一人の少女が杖も振らずに、どんな偉大な魔法使いですら、明るみにできずにいた——シリウス・ブラックの濡れ衣を晴らしたのだぞ。そして落ちぶれた詐欺師を改心させ、極悪人を『死の呪い』に躊躇させるまでに悔い改めさせた。今や、あの何を考えているか分からんセブルス・スネイプですら、あの子に首つたけだ。

奴らは皆、お前の言う『娘の優しさや思いやり』とやらに心を打たれたのかもしれない。だがわしに言わせれば、奴らは娘に魅了されたのだ。……なあ、誰かに似ていると思わんか？」

ダンブルドアはただ黙して、何も言わなかった。一見、煮え切らないようにも思えるその態度に業を煮やし、ムーデイは恐ろしい顔を怒りの感情に歪めて、旧友に向き直った。

「はつきり言おう。あの少女はヴォルデモートと同じだ。人々を魅了し、心を操る力を有している。

復活したヴォルデモートが、このまま娘を野放しにしておくと思うか？お前の目の前で——マーキングだと言わんばかりに——特大の印を打ち上げてみせたあいつが？

アルバス。ネーレウスの娘だからと情が入るのは理解できるが、あの子と父親は全く違う人間だ。近い将来、お前は娘を生かした事を後悔するぞ。彼女の優しさと弱さは凶器にしかならん。いずれ大きな災いを生むだろう」

「わしはイリスを信じておる」ダンブルドアは揺るぎない瞳で前を見つめ、ただ静かにそう言った。

「……良いだろう。お前はお前の考える通りにすると良い。わしはわしの思う通りに行動する」

やがてムーデイは淡々とした口調で、ポツリとそう言った。彼の声に威嚇の響きは微塵もなかったが、その目はまるで今にも杖を引き抜



いて迫り来るかのような凄味と殺気を帯びていた。赤く熟れた太陽が山の向こうに沈み切ると同時に、古く長きに渡った二人の友情は終わりを迎えた。やがてムーデイは歪んだ口元をひん曲げて笑い、義足を引き摺りながら、ゆっくりと歩き出した。

「さらばだ、アルバス。わしはもうホグワーツを出る。明日の宴でうっかり娘と出くわして——お前のように——無様に魅了されたくないのではな」

「息災での、アラスター」

穏やかに最期の挨拶を交わし、立ち去っていく旧友の後ろ姿を、ダブルドアは静かにじつと見つめていた。

☆

時間は飛ぶように過ぎ、学期末最後の日がやって来た。その日の午後は「闇の魔術に対する防衛術」の授業だったが、ムーデイ先生は“一身上の都合”のために宴を待つ事無く退職したらしく、急遽自由時間となった。——無理もないと、イリス達は思った。元々襲撃に備えて独自の警報魔法を創り出す程に、警戒心のあつた人だ。自分自身のトランクに十ヶ月も閉じ込められて、ますます恐怖心と警戒心が増したに違いない。きつと暫く休養したいのだろう。イリス達はせっかくのその時間を有効利用すべく、ハグリッドの小屋を尋ねた。明るい、良く晴れた日だった。

四人が小屋の近くまで来ると、ファングが吠えながら、尻尾を千切れんばかりに振って開け放したドアから飛び出してきた。ハグリッドも大股で外に出てきて、イリスとハリーを一人ずつ抱き締めて抱き締め（その時、二人は自分の背骨がボキツと音を立てたのを聞いた）、それから快く四人を迎え入れてくれた。中に入ると、暖炉前の木のテーブルに、バケツ程の大ききのティーカップとソーサーが二組置いてある。

「オリンペとお茶を飲んどったんじゃ」ハグリッドは食器棚から皆のカップを取り出しながら言った。

「誰と？」ロンが興味津々で訊いた。

「マダム・マクシームに決まっとうろうが！」

ハグリッドは当然だと言わんばかりの口調で応えた。イリス達はそれぞれ目を丸くした顔を突き合わせ、安心したように笑った。——  
「どうやら、あれから二人は無事に仲直りする事ができたようで、おまけに今はお茶を飲んで愛称で呼び合う程の親密な間柄にあるらしい。大皿一杯に盛り付けられた、生焼けのビスケットに齧りつきながら、イリスは明るい声で訊いた。

「じゃあ、二人は仲直りしたんだね」

「何のこった？」ハグリッドはすつとぼけた。

そうして五人はテーブルに着き、のどかなティータイムを楽しんだ。ハグリッドはふと椅子の背に寄りかかり、コガネムシのような真つ黒な目でハリーとイリスを交互に見つめた。

「大丈夫か？」そしてハグリッドはぶつきらぼうに訊いた。

「うん」二人は応えた。

「いや、大丈夫なはずがねえ」しかしハグリッドはそう突っぱねると、ビスケットのお代わりを取ろうと手を伸ばすイリスの方へ皿を押し遣った。

「そりゃ当然だ。だが、心の傷は直に良くなる。それにくよくよし たって仕方がねえ」

ハグリッドはそう言うと、いきなりゴミバケツの蓋程もある大きな両手で自らの両頬を思いつきり叩いて、気合いを入れた。まるで銅鑼を叩いたような爆音が部屋中に炸裂し、四人は思わず跳び上がった。突然の奇行に走った巨大な友人をまじまじと眺めた。しかしハグリッドはそんな友人達の警戒の眼差しを気にもせず、暖かい光の宿った黒い瞳で彼らを見つめるだけだった。

「やつが戻ってくるのは皆、分かっとなった。いずれこうなるはずだった。そんで今、こうなった。俺たちや、それを受け止めるしかねえ。来るもんは来る。来た時に受けて立ちやええんだ」

ハグリッドの言葉はいつもの通り、とてもシンプルでワイルド極まりなかったが、ヴォルデモートの復活に静かな不安を抱く四人の心を確かに揺さぶり、しっかりと勇気づけた。やがてハグリッドはマグカップの中身をグイと景気良くあおり、イリスとハリーにウインクを

飛ばした後、勢いづいた口調で言った。

「おれは戦うぞ。お前達が立派に戦ったみたいにな。オリンペと一緒に、巨人の・・・」

そこまで言って、ハグリッドはハツと我に返り、バチンと両手で口を押えた。その衝撃波で、ちょうど彼の両隣に座っていたロンとハーマイオニーの髪がフワツと揺れた。しかしハリーは聞き逃さなかった。ハリーとロンが鮮やかな連携プレーを駆使して口籠るハグリッドを翻弄している間、イリスはハーマイオニーに肩を突かれて、彼女が指差す方向を見た。

——部屋の片隅に大きなトランクや日用品の入った袋、愛用のピンク傘が積まれ、頑丈な紐で一括りに縛られている。どうやらハグリッドは間もなく旅に出かけるようだった。一体、ハグリッドはマダム・マクシームと一緒にどこへ行くんだらう。イリスは三枚目のビスケットを齧りながら、首を傾げた。

☆

“ハグリッドの謎”が解けたのは、次の日の朝だった。ハーマイオニーが定期購読している“日刊予言者新聞”に、いよいよ魔法省大臣ファッジがヴォルデモートの復活を公表したという事が盛大に書き立てられていたのだ。

ファッジは“闇の陣営”から市民を守るための対策の一環として、アズカバンからディメンターを追い出して魔法使いの看守体制へ切り替える事、そしてかつて“闇の陣営”に与した魔法種族——主に巨人族へ友好の手を差し伸べる事を発表した。

“巨人に友好の手”——ハグリッドがマダム・マクシームと旅に出るのは、きつとこれが原因なんだ。四人は一心不乱に記事を読み込んでいた顔を上げると、無言で頷き合った。哀れな事にファッジ大臣はダンブルドアの手を取ったせいでルシウスから完全に見放されたのか、リータ・スキーター女史のお気に入りサンドバッグに認定されたらしく、何ページにも渡ってありとあらゆる罵詈雑言を使い、罵られていた。

学期末の宴は、今までにも増して盛大に行われた。大広間は見た事

もないような珍しい魔法や装飾品で飾り付けられ、両側の壁にはそれぞれハツフルパフとグリフィンドールの垂れ幕が掛かっていた。

ファッジはとてつもないふてくされ顔で審査員席に座っていた。その余りの憎らしい表情に深いインスピレーションを受けたフレッド&ジョージは、「ファッジのふてくされクッキー（食べると物凄いふてくされ顔になる事ができる）」を発明し、後にそのスナックはWWWの売れ筋商品の一つとして名を連ねる事になるのであった。

カルカロフ校長の席は空っぽだった。マダム・マクシームはハグリッドの隣に座り、親密そうに手を重ね合いながら、真剣な様子で何事かを話している。やがて職員テーブルからダンブルドアがゆつくりと立ち上がり、「三校対抗試合」を見事に優勝した代表選手の二人——セドリックとハリーを心から讃えて、賛辞の言葉を送った。

ファッジは心ここにあらずと言った様子で、お祝いの言葉もそこに金貨入りの袋を二人に押し付けて、自分の席に座った。各寮だけでなくダームストラングやポーターバトンの生徒も皆、二人を祝福し、金の皿にご馳走が盛られ、宴が始まった。

大広間じゆうの人々は大いに飲み食いし、歌って踊り、喋った。しかし皆——ファッジと同じように——どこか上の空だった。

——“ヴォルデモートが復活した”。宴が始まる前、ダンブルドアとファッジはそれぞれの言葉で子供達を鼓舞したが、それでも皆の不安な気持ちは消えなかった。“最後の課題”の夜、打ち上げられた巨大な印を見た者も大勢いた。皆、ヴォルデモートと直接対決した事こそないものの、彼が創り上げた恐怖に満ちた時代を大人から聴いて育った。ネビルのようにヴォルデモートの残した戦争の傷跡に今なお、苦しむ者もいる。

今までの平凡な日常は崩れ去り、想像もした事のないような——暗く困難な時がやって来る。まだ見ぬ未来を恐れて、深く憂う気持ちから逃れるように、皆はいつも以上に騒いで、お腹がはち切れるまで飲み食いし、集まってはしやぎ合った。

☆

次の日の朝、イリスはトランクを詰め終わった。そしてハリー達と

一緒に、混み合った玄関ホールで馬車を待っている間、ボーバトンやダームストラングの生徒達とお別れの挨拶をしたりして過ごした。ハリーが妹を助けてからというもの、ボーバトン校の美少女・フラーのツンツンとした態度は鳴りを潜め、皆に優しく接してくれるようになった。

ダームストラングの名シーカー・クラムはいつも通りのぶつきらばうな態度ではあったが、イリス達に別れの挨拶をしに来てくれた。クラムは“カルカロフがいなくなっても、船の操作には支障をきたさない”と言つて、皮肉気に笑つた。——どうやらカルカロフは自分で舵を取らず、生徒達に労働をさせていたらしい。やがて彼は気まずそうに頭を搔いて、イリスをチラリと伺い見た。

「ごめん。僕は君の事を誤解していた。・・・悪い魔女だつて」クラムは歯切れの悪い声で謝つた。

「ハーマイオニーと仲が良かった時、“そうじゃない”つて知つたんだ。最初に会つた時、不快な気分になんてさせてすまなかつた」

クラムはますます背を丸めて小さくなりながら、イリスに頭を下げた。彼女は慌てて首を横に振り、青年の頭を上げさせた。——自分は何も気にしていないし、そもそも謝らなければならぬのはこちらの方だ。何せ、ロンを焚きつけて、クラムからハーマイオニーを奪うように仕向けたのは、他でもない自分なのだから。

イリスが意を決してその事を謝ろうとした瞬間、横から一人の少女がやってきて、彼の腕をそつと掴んだ。——エロイーズだ。クラムはとびきり安らかな微笑みを見せて、彼女を抱き寄せた。何だか、二人はとてもお似合いのカップルに思えた。イリスは結局何も言わずに、ハリー達と一緒に馬車を待つ事にしたのだった。

☆

キングズ・クロス駅に向かう戻り旅の今日の天気は、一年前の九月にホグワーツへ来た時と天と地ほどに違っていた。空には雲一つない。イリス達は何とか一つのコンパートメントを独占できた。ピツグウィジョンは興奮して《皆さん、僕のご主人様に沢山手紙を送ってくださいね!》とイリス達にさえざり続け、ヘドウィグとサクラは頭

を羽に埋めてウトウトとまどろんでいた。——クルツクシャンクスは不在だ。この夏休みは家族と共に、ゆったりと過ごさらしい。

列車が南に向かって速度を上げ出すと、コンパートメントの戸が開いて一人の魔法使いが入って来た。——シリウスだ。イリス達は思わず席から立ち上がり、明るい歓声を上げた。シリウスは気さくに笑いかけ、先程ワゴンで買ったのだろう、大きな“魔女鍋ケーキ”を一つとかぼちやジュースを人数分、カバンから取り出しながら、ハリーの隣に腰掛けた。

「シリウス！どうしたの？」ハリーが声を弾ませて尋ねた。

「ホグワーツ特急の警備を任された」シリウスは杖を振ってケーキを切り分けながら、ウインクした。

「それより、君達に是非とも伝えたい」ビッグニュース“がある”

——“ビッグニュース”？一体、何だろう。かぼちやジュースの栓を抜く事も忘れて、四人が興味津々でシリウスを覗き込むと、彼はまるで犬が吠えるように快活な笑い声を上げながらこう言った。

「来年の「闇の魔術に対する防衛術」の授業は、私が教鞭を取る事になったのさ」

「ワーオー！おったまげー！」ロンが叫んだ。

皆の大声で飛び起きたサクラとヘドウィグがホーホーと抗議の声を上げたが、四人は構わずに席を立ち上がり、シリウスに代わる代わるハグをした。——シリウスがホグワーツにずっといてくれるなんて、まさに“鬼に金棒”だ。来年のホグワーツは今までよりずっと過ごしやすくなるのに違いない。シリウスはしばらくの間、愛する子供達との触れ合いを楽しんでいたが、やがてケーキの最後の欠片を口に押し込んで、手早く立ち上がった。

「さあ、もう行かないと。実はこの特急は私とエイモス、後は有志の卒業生達だけで警備しているんだ」

その時、抜群のタイミングで、コンパートメントの硝子面の前をセドリックとアンヌ、パトリシアが通りすがった。三人はイリス達を見つけると、茶目つ気たつぷりにウインクしてみせた。その少し後を、ジョンが両手に持った車両の地図を睨み付けつつ、追いかけていく。

シリウスはコンパートメントの戸に手を掛けると、四人に向けて苦笑した。

「何せ、アズカバンの方に大勢の人手が割かれているから、こっちは忙しくて仕方がない。杖を振る手がいくらあっても足りないくらいだ。

ハリー。駅に着いたら、またいつものカフェで時間を潰していきなれ。少し遅くなりそうだな」

「オーケー、父さん」

ハリーは何気なくそう言ってしまつてから、我に返つてピタリと固まつた。しかしシリウスはそれを聞き咎めるといふ訳でなく、クシヤツと顔を大きく歪めて笑い、少年の頭を乱暴に撫でた。それから戸を開けて、さつきよりも颯爽とした足取りで出て行つた。

——何だか、くすぐつたいようでも優しい奇妙な沈黙が、コンパートメント内を包み込んだ。ハリーは急いでケーキの残りを口に押し込むとかぼちやジュースで流し込み、そして激しく咽込んだ。

暫くすると、恰幅の良い魔女がご馳走がたっぷり載つたワゴンを引いてやつて来た。イリス達がそれぞれ目当てのものを買い込んでコンパートメントへ戻ると、フレッドとジョージ、それからジニーがやつて来た。双子は何やら、重そうな革袋を大事そうに抱えている。空いた席に座ると、フレッドがポケットからカードの束を取り出した。

「爆発スナップ」して遊ぼうぜ」

かくして皆はお菓子を摘みみながら、スリル満点なスナップゲームに興じた。いつ何時カードが爆発するか分からない——その緊張感と混乱に乗じて、双子はさりげなくジニーをハリーの隣に座らせる事に成功した。どうやら二人は「スナップをする」という口実で、妹の片思いを手助けしようとしているようだった。ジニーは大好きなハリーの隣でどきまぎする余り、何度もカードを爆発させた。

その時、ふとハリーは思い出した。——時々フレッドとジョージは談話室で、夜遅い時間まで何事かを真剣に話し合っていた。一体、何の話をしていたんだろう。もしかしてWWWを本当に開業する計画でも立てていたのだろうか。

「ねえ、教えてくれないか？」ハリーが思い切って訊くと、二人は揃ってカードから顔を上げた。

「談話室で何を話していたの？本当にWWWを開業するのかい？」

すると二人は鏡合わせのようにぴったりした動きで顔を見合わせ、ブーツと吹き出した。それから二人は明るい口調で、このような事を話してくれた。

——実は二人はクイディッチ・ワールドカップの試合が始まる直前、自分達の全財産を賭けて、ルード・バグマンとギャンブルをしていた。“アイルランドが勝つがクラムがスニッチを捕る”という二人の奇想天外な予想は果たして現実となり、彼らはルードから大量の金貨を獲得した。

だがそれは本物の金貨ではなく、アイルランドのマスコット・レプラコーンが降らせた偽物の金貨だった。翌日には金貨は跡形もなく消え去り、二人はルードに抗議の手紙を送った。けれども梨の礫で、手紙は頑固に無視され続け、ホグワーツにルードが滞在していた時も、何度も話を付けようとしたが、はぐらかされ続けた。

しかし、“もう全てが終わった”と二人が諦めかけたその時、ルードから金貨が返されたというのだ。ご丁寧にもグリーンゴッツの証明印が捺された革袋に入って。フレッドは恍惚とした目で上質な革袋を見つめ、満足そうに言った。

「ルードは利子もたっぷり付けてくれたのさ。君の賞金額を超えたかもしれないぜ、ハリー」

「可愛いロニー坊やの決闘で稼いだ小金もあるしな」ジョージはロンに親しみを込めてウインクした。

「だからイリス、君の手袋は僕らに任せてくれよ。チャーリーにも話を付けて、スウェーデン・シヨートー・スナウト種のとびつきり上等なドラゴン革を頼んだんだ。WWWの総力を挙げて——たっぷりと素敵なギミックも満載して——君にプレゼントするさ」

二人はイリスに向け、とても魅惑的なスマイルをよこした。“変なギミックを搭載したら許さないんだから”と言わんばかりの厳しい眼差しで、ハーマイオニーとジニーは悪戯双子を睨んでいる。イリス



は暖かい気持ちで胸を一杯に膨らませながら、フレッド達にお礼の言葉を贈った。

イオはキングズ・クロス駅の構内に佇んで、愛する姪の帰りを待っていた。物憂げな表情が、“九と四分の三番線”への出入口となる柵をじっと見つめている。——あと数時間もすれば、あの子があ柵を通り抜けて、わたしの腕の中に帰ってくる。いつもと変わらない笑顔で。そう、きつとその筈だ。

イオは縫るような想いで、上着のポケットに仕舞い込んだ——イリスからの手紙の束をギュツと握り締めた。今年は、去年ほど頻繁なやり取りではなかったものの、それらに不穏な内容は一言も書かれていなかった。それにもイリスが自分を心配させまいと気を遣って、あえて変事を伏せたのだとしても、彼女の身に何か起きたのならダンブルドアが必ずフクロウ便を送って来る筈だ。きつと虹蛇様がイリスを守ってくれたのに違いない——イオは心の中で、神に感謝を捧げた。

しかしイオの儂い希望は、ある一人の魔法使いの言葉によって残酷に打ち砕かれた。

「やあ、イオ」冷たく気取った声だ。

「君に謝らなければならぬ事がある」

イオはゆっくりと後方を振り返った。——ルシウス・マルフォイだ。不思議な事に、彼の如何にも魔法使いらしいローブ姿を気に留めるマグルの人々は、誰一人としていない。だがイオは彼を警戒するよなりも、その言葉の内容の方に意識を吸い寄せられた。“謝らなければならぬ事”？イオの頭の中に、愛する姪のあどけない表情がパツと思ひ浮かんだ。強い不安の感情が、彼女の心臓を冷たく凍てつかせていく。

「あのお方が復活なされた」ルシウスは静かに言った。

「そして私の力が及ばず、イリスの右腕は失われた」

——まるで“時の神”<sup>クロノス</sup>がイオの時間を止めてしまったかのように、彼女はその場からピクリとも動く事が出来なかった。暫くして、ルシウスはイオが少し落ち着きを取り戻したのを確認すると、数か月前に墓場で起きた出来事の全てを話して聴かせた。

冷静になれば、気付けた筈だった。ルシウスが——自分に都合の悪い事は全て伏せて——墓場の話をした事も、ダンブルドア達がイリスの変事について送っていた手紙の数々を妨害していた事も。

何とも間の悪い事に、ダンブルドアもシリウスも、復活したヴォルデモートへの対策に掛かり切りになっていて、イオの返事がない事を分かっていながらフォローに回る事ができない状態にあった。——そう、今がルシウスにとつて最高のチャンスだったのだ。イオの心に揺さぶりを掛けて確実にイリスを奪い取るために、彼は心の中で舌なめずりをしながら、彼女の傍へ近寄っていく。

「もう分かっただろう、イオ。“本当の敵”が誰なのか。——ダンブルドアもシリウスも、あのお方がイリスを罰するままにし、そして家族である君にこの緊急事態を知らせる事すらしなかった」

その言葉は毒のようにイオの心を冒し、その奥底へと沈んでいった。最後にルシウスはローブのポケットから精緻な造りのアンクレットを取り出すと、茫然と佇むばかりのイオの手にそつと握らせる。彼女はもう何も考えられなかった。深い愛情は、時に人を狂わせる。“愛する姪の体の一部が永久に失われた”——その凄惨な事実  
に心が囚われ、今や真実を見極める目も完全に塞がれてしまっていた。

「もうイリスがこれ以上、残酷な目に遭わずに済むには、あのお方の傍で生きるしかないのだ」まるで自分にも言い聞かせるかのように確かな口調で、ルシウスは囁いた。

「あのお方は一度だけ、君にイリスを守る機会を下さった。——このアンクレットをイリスの足に付けなさい。それが私達への合図になる。君の家に“姿現し”し、イリスを連れて行く。

——忘れるな、イオ。闇の帝王はまるで木からフルーツをもぎ取るように気軽な感覚で、あの子の右腕を奪った。あのお方にとつて彼女

の命を奪う事など、息をするより容易い事だ。もし君が私達に逆らったなら・・・今度は右腕だけでは済まないかもしれないね」

やがてルシウスが去って行ってしまっても、イオはアンクレットを握り締めたまま、その場から動く事が出来なかった。彼女の脳裏に、今までイリスと過ごした素晴らしい思い出の数々が、走馬灯のように目まぐるしい速さで駆け巡っていく。「本当の敵」——ダンブルドアとヴォルデモート、あの子にとってどちらがそうなのだろう。自分にはもう何も分からない。けれども——

——たとえもう二度と会えなくとも、あの子には一日でも長く、健やかに生きて欲しかった。

イオは静かに決断した。彼女の流した涙が、冷たいアンクレットにポツンと滴り落ちた。

☆

残りの時間はとびきり楽しかった。あつという間にホグワーツ特急は九と四分の三番線に入線し、生徒が列車を降りる時のいつもの混雑と騒音が廊下に溢れた。皆とお別れの挨拶を終えたイリスは、九と四分の三番線のホームから魔法の柵を通り抜けた瞬間、誰かに息が止まるほど強く抱き締められた。

「おかえり、イリス」

「ただいま」

——勿論、イオおばさんだ。イリスはギュウツと抱き着いて、大好きなおばの首筋に顔を埋めた。彼女の腕の中は何時だつてもとても暖かくて、そして安心できる場所だ。そうして二人は日本へ帰国し、出雲神社へ帰り着いた。二人は結界を抜け、鳥居をくぐり、手水舎で手を清め、拝殿へ赴いて、イリスが無事に帰って来れた事を神様に感謝した。

家に帰り着くと、早速美味しそうな匂いが漂って来て、ダイニングルームに駆け込んだイリスは歓声を上げた。——テーブルにはイオが腕によりをかけた日本料理の数々が、所狭しと並んでいる。どれも自分の好きなものばかりだ。

イオは「荷物を整理するのは明日にしなさい」と言っ、イリスと

一緒にお風呂に入った。イリスの右肩から下を彩る“銀色の義手”を、イオはしばらくの間、物も言わずにじつと眺めていた。やがて二人は風呂場から上がり、パジャマに着替えた。それからテーブルに着き、手を合わせて遅いディナーを摂り始めた。

ホグワーツのご馳走も確かに美味しいけれど、やっぱりイオお婆さんの料理が世界で一番美味しい。イリスは夢中で食べ続け、全部の料理をお代わりした。デザートも食べ終わって人心地着くと、イリスはイオに訊いて欲しい事が、頭の中に沢山浮かんできた。

——今年は辛くて恐ろしい出来事が沢山あったが、幸せで楽しい出来事もそれ以上に沢山あったのだ。洗い物を終えた後、テレビの前に設置されたソファアームに座り、イリスはイオに今までの出来事を話し始めた。イオは全ての話を聴き終わった後、イリスをそつと抱き締め、労しげに小さな頭を撫でた。

「本当に辛い思いばかりさせて・・・すまない」

「お婆さんのせいじゃないよ！」

イリスは慌ててかぶりを振った。イオはイリスの肩を掴んで少身体を離すと、涙を一杯に湛えた瞳で、愛する姪を心配そうに見つめ、苦痛に喘いだ。まるで彼女の右腕をこんな風にしたのは自分だ、と思っ  
ているかのように。イリスはイオを元気づけるかのように、ギュツと抱き着いてみせた。それから自分の薬指に光る指輪をチラリと見た。  
——きつとどんなに辛い事があっても、私にはドラコがいる。絶対に大丈夫だ。

「お婆さん。私こそ、お婆さんを悲しませてばかりでごめんね」イリスは体を離すと、気丈に微笑んだ。

「でも、きつと大丈夫だよ。皆と一緒になら、どんな事だって乗り越えられる気がするんだ」

イリスの明るい希望に満ちた眼差しを、イオは眩しそうに目を細めて受け止めてくれた。やがてイオは涙を拭って優しく微笑み、二人は再び、固く抱き締め合った。

☆

もう夜は更けていた。実家にいる事で安心し、全てを話し終わった達成感も重なって、イリスは何だかとても眠くなってきた。ゆったりと伸びをしながら欠伸を零す彼女の足を自分の膝の上に乗せ、イオは靴下を脱がせてくれた。——まるで小さい時みたいだ。イリスはそう思いつつも、されるがままとなっていたが、ふと左足首に冷たい感触を感じて顔を上げた。

見ると、上品で華奢なデザインのアンクレットが付けられている。上質な小金で出来たそれは、足をわずかに動かすとシャリシャリと涼しげで美しい音色を奏でた。イリスは小さな歓声を上げ、まじまじとアンクレットを眺めた。もしかしてこれは、おばさんが新しく作ってくれたお守りの一種なのかもしれない。

「とつても綺麗。おばさん、これなあに？」

「お前を守ってくれるものだ」

「おばさんが創ってくれたの？」

イリスは確信を持ってそう尋ねたが、イオは何も応えず、ただ静かに微笑みだけだった。やがて彼女は愛する姪の傍から杖を取り上げ、テーブルに置いた。そしてイリスを見つめ、額に優しくキスをしてゆつくりと頭を撫でた。イリスは眠気と安心感と幸せで心が一杯に満たされ、イオに寄り添って目を閉じ、ウトウトと微睡んだ。

「お前を愛してる」

しかし次の瞬間、イオが絞り出したその声は、悲哀の感情に暮れ、涙に滲んでいた。——イオが泣いている。イリスの心に揺蕩っていた眠気は一瞬で吹き飛び、彼女は慌てて顔を上げようとした。しかし彼女は少女を腕の中に固く閉じ込め、出そうとしない。今や、イオは激しく咽び泣いていた。彼女は唇を噛み締めながら、囁くような声でこう言った。

「だから、わたしの選択を許してくれ」

突然、マントを翻す音が、そこら中にみなぎった。イリスがイオの拘束を無理矢理振り解いて顔を上げると、何時の間にか——ダイニングルームを埋め尽くすようにして、大勢の魔法使い達が“姿現し”していた。全員がフードを被り、銀色の仮面を付けている。

——死喰い人達だ。どうして彼らがここに？ここは安全なはずなのに。冷たい恐怖の感情が胃の中へ滑り落ち、イリスを心地良い世界から引き摺り出した。彼女は思わず杖を取ろうとテーブルに視線を送ったが、そこには何も無い。死喰い人の一人がイリスの杖を弄びながら、冷たい笑い声を上げている。やがて一人の死喰い人が仮面を外して、こちらへやって来た。——ルシウスだ。

「君を迎えに来たのだ、イリス」ルシウスはまるで父親のように優しい笑みを浮かべた。

「さあ、こちらへ来なさい」

イリスは恐怖の感情に呑まれ、頭がジーンと痺れて、指先一つ動かす事が出来ないでいた。するとイオが激しくすすり泣きながら、姪の背を押してルシウスの方へ突き出した。

しかしそれでも、イリスは何も考える事ができなかった。余りの出来事に茫然自失状態となり、頭と心が何時まで経っても現実を理解してくれない。暫くすると、輪の中から一人の死喰い人が進み出て、彼女の手を取り、恭しく口付けた。

「ああ、ご慈悲を感謝いたします。お嬢様」カルカロフの声だ。

「イリス。ルシウスに誘われて、私も仲間になったんだ」ルードの明るい声もする。

「これで借金地獄からおさらばできた。クイディッチの面白話が聴きたい時は、いつでも私を頼ってください！」

周囲の死喰い人達が、ゲラゲラと下品な笑い声を上げた。しかしルードの言葉は、奇しくもイリスを忘我状態から呼び覚ましてくれた。"クイディッチ"——そうだ、私はまだ杖がなくても戦える手段がある。スニジェットに変身するんだ。そう思い、イリスは魔法力を込めたが——

——途端に、全身の血を一気に引き抜かれたかのような凄まじい脱力感を感じ、その場に立っていられなくなって、くたっとルシウスに身を預けてしまった。最早切れかけた蛍光灯のように明滅し始めた視界の中で、舞い散る金色の光が、左足に嵌まったアンクレットの中に残らず吸い込まれていくのが見えた。

「それには“動物もどき”に変身できないように魔法が掛けてある」ルシウスは冷たく笑った。

「あのお方が君のためにお創りになられた逸品だ」

最早、万事休すだった。イリスは今までの明るい希望と愛情に満ちた世界が、跡形もなく崩れ去って行くのを感じていた。“イオおぼさんが死喰い人を呼び寄せた”——その余りに残酷な事実には、イリスは咄嗟に呼吸を忘れて喘ぎながら、継るような目で愛する家族を見つめた。イオはもう悲しみの余りに、今にも死んでしまうのではないかと思う程に泣きじやくり、もがき苦しんでいた。それでも彼女は姪の頬をそつと撫で、掠れた声で言い聞かせた。

「お前を守るためだ。あの人の傍にいれば、お前は安全に生きることができる。」

——わたしの事は忘れろ。これからはマルフォイ家の人達が、お前の新しい家族になるんだ。辛いなら、わたしの事を忘れるように魔法を掛けてもらいなさい」

「いや……いや……！」

イリスは狂ったように首を横に振り、鉛のような体を必死に動かして、イオの腕の中へ戻ろうと足掻いた。——もう一度、イオに抱き締めて欲しかった。もう二度と会えないなんて、絶対に嫌だった。しかしイオは愛する娘を守るために、青ざめているが決然とした表情で、ルシウスに向かって頷いて見せた。“もう娘を手放す覚悟はできた”と言わんばかりに。

「さあ、時間だ」ルシウスは静かに頷き、イリスへ向けて優しく囁いた。「私達の屋敷へ戻ろう。あのお方が、君の帰還を待ち焦がれていらっしやる」

それからルシウスは“姿くらまし”をしている間、万が一にもイリスが暴れたりしないようにと、強力な眠りの魔法を掛けた。たちまちイリスの意識は遠のいていった。

——おぼさん。私を一人にしないで。それでもイリスは必死で足掻き、イオの下へ戻ろうと頑張った。しかし眠りの魔法はとても強固で、懸命に逃げようとするイリスの意識を蜘蛛のように捕えて、強引

に夢の世界へと連行していった。かくして哀れな少女はルシウスの腕に抱かれ、風と色の渦の中を飛んで行く——ヴォルデモートが待つ、マルフォイ家の屋敷へと——